

平成16年度
(2004)

履 修 の 手 引

講 義 概 要
(専門科目シラバス)

徳島大学工学部

はじめに

この履修の手引きは、工学部に入学されたみなさんがこれから4年間で学習する各学科の勉学に関するほとんどすべての情報を記載したマニュアルです。

この中には、

1. 工学部での教育の理念・目標
2. 各学科の教育目的・内容（シラバス）と履修案内
3. 学生生活上必要となる諸手続や連絡事項
4. 人権・教育相談のための体制
5. 工学部規則・工学部学友会会則

などの事項について詳しい説明があります。必要となった時点で必要な項目を参照すると良いでしょう。

工学部では、すべての学科で新しい工学教育プログラムを実施しています。この教育プログラムは、これまでの工学教育を総合的に再検討し、課題探求能力や自律的応用力の育成など21世紀の社会に貢献できる人材育成のために実施しているものです。

特に、

1. 予習・復習を盛り込んだ単位制に基づく授業実施
2. 履修科目数の上限設定
3. GPA 評価法を導入した厳格な成績評価
4. クォータ制やオフィスアワーの実施

など、これまでに実施されていなかった教育方法が導入されています。大学は「心おきなく遊べる楽園」ではありません。みなさんはこの4年間で、豊かな人格と教養を身につけ、工学の基礎知識による分析力や専門の基礎知識による問題解決力・表現力を養い、さらに社会の変化に柔軟に対応できる自律的応用力と創造力の育成に努めなければなりません。

これからのグローバルな社会環境の中で、実践的な行動力をもって地域社会や国際社会に貢献できるみなさんを社会は期待しているのです。在学中に各自高い付加価値を付けて卒業し、21世紀社会を個性豊かに生きようではありませんか。

なお、詳細については、この“履修の手引”および徳島大学工学部導入教育用冊子“「学びの技」はじめの一步”を熟読してください。

目次

第1章	教育と学習案内	1
1)	工学部の教育理念	3
2)	昼間コース履修方法	4
3)	夜間主コース履修方法	9
4)	学科の教育内容と履修案内	14
	建設工学科	15
	機械工学科	71
	化学応用工学科	129
	電気電子工学科	173
	知能情報工学科	231
	生物工学科	275
	光応用工学科	331
5)	アウトカムズ評価について	369
6)	成績評価システムについて（点数評価およびGPA評価）	370
7)	教育職員免許状取得について	371
8)	学生の基礎学力向上のための特別講義時間割	373
第2章	学生への連絡及び諸手続き	375
1)	学生証	378
2)	各種証明書の発行	378
3)	休学，復学，退学等の手続き	379
4)	除籍	379
5)	試験における不正行為に対する措置要項	380
6)	授業料納付，免除制度及び奨学金制度	380
7)	学生教育研究災害傷害保険	381
8)	学生金庫	381
9)	住所変更届	381
10)	講義室の使用について	381
11)	健康管理	381
12)	交通事故の防止	381
13)	その他	382
第3章	学生の人権・教育相談等のための体制	383
1)	セクシュアル・ハラスメントの発生防止のために	385
2)	アカデミック・ハラスメントの発生防止のために	386
3)	工学部における相談体制	386
4)	学生相談室における相談体制	386
第4章	工学部構内における交通規制実施要項	387
第5章	工学部規則	393

第 6 章	工学部学友会会則および表彰要項	403
付 録		409
1)	工学部教員の一覧	411
1	建設工学科	411
2	機械工学科	411
3	化学応用工学科	412
4	電気電子工学科	412
5	知能情報工学科	413
6	生物工学科	414
7	光応用工学科	414
8	共通講座	414
9	大学院エコシステム工学専攻	415
2)	工学部講義室配置図	416

第1章

教育と学習案内

1) 工学部の教育理念

科学技術創造立国をめざす我が国が、社会の豊かさを維持し、21世紀の世界に貢献するためには、科学技術とその進歩が人類と社会に及ぼす影響について、強い責任をもてる自律的技術者を育成することが必要である。本学部の工学教育プログラムでは、この新しい技術者の育成に沿った教育理念のもとに、教育の実施計画を立案し、実施方法と教育効果に対する的確な検証と評価を行い、教育の質と方法を向上させる教育プログラムを実施している。

工学部の教育理念

科学技術とその進歩が人類と社会に及ぼす影響について、強い責任をもつ自律的技術者を育成することを各学科に共通する教育理念とする。この理念は、次の4項目から成る。

1. 豊かな人格と教養、及び自発的意欲の育成
様々な学問の価値観を学ぶことで、豊かな人格と教養を身につけるとともに、自らの体験から、学ぶことに対する興味と意欲が自発できる人材を育成する。
2. 工学の基礎知識による分析力と探究力の育成
自発的な学習意欲により工学の基礎知識を修得し、事象や課題を科学的に解析できる分析力と探究力をもつ人材を育成する。
3. 専門の基礎知識による問題解決力と表現力の育成
自発的な探求力により専門の基礎知識を効果的に身につけ、創成科目や卒業研究を通して問題を解決し、その方法・過程・結果を表現できる人材を育成する。
4. 社会の変化に柔軟に対応できる自律的応用力と創造力の育成
グローバルな社会環境を認知した上で新しい問題を発見し、専門知識による解決方法を創造でき、さらに実践的な行動力をもって地域社会や国際社会に貢献できる人材を育成する。

新工学教育プログラムの教育方針

工学・技術者としての教養と基礎知識を重視し、学習の各段階で目標を与え、それを着実に実現させる方針で教育する。また、結果の評価は、質の向上で測ることを基本とする。すなわち、次の3項目を教育の基本方針とする。

1. 目標を設定し、過程を実現させる教育
教育理念を着実に達成するために、学生に対して各学習の段階で適切な目標を設定し、この目標に対して学生が自発的に到達できる手法を提示する。さらに、達成感を体験することで、学問に対する興味と意欲がもてる環境を準備する。
2. 質の向上を評価するアウトカムズ・アセスメントの採用
本学の工学教育プログラムには、学部教育全般にわたっての質の向上の評価（アウトカムズ・アセスメント）を基本とした自己評価機能を組み込んである。アウトカムズ・アセスメントは、次の評価項目に対して、教員側だけでなく、学生側からも積極的な参加が必要である。
 - (a) 理念を実現する教育システム（計画・実施・評価システム）に対する評価
 - (b) 教育目標に対するカリキュラムの編成、運用と体制に対する評価
 - (c) 学生の学力やスキル、及びそれらの目標達成度に対する評価
 - (d) 学生による授業評価
3. 興味と意欲を持たせるカリキュラムの構成
各学科のカリキュラムの編成にあたっては、全学共通教育科目や専門科目（導入科目、工学基礎科目、専門基礎科目、専門応用科目、創成科目、工学教養科目、専門教養科目）が適切に配置されています。

2) 昼間コース履修方法

(a) 昼間コース履修方法

1. 各学科の教育課程表に示す授業科目は、4年間で開講される専門教育科目である。授業科目は全学に共通する授業科目である全学共通教育科目（教養科目、外国語科目、健康スポーツ科目及び基礎教育科目）と専門教育科目により編成されています。
2. 各学科、各年次に実施される授業科目、単位数及び週授業時数は教育課程表に示すものとする。担当教員の都合等により、実施時期について若干の変更が生じることもあるので、各学年の初めに発表される時間割に注意してください。
3. 授業時間数と単位の関係は、徳島大学学則第30条及び徳島大学工学部規則第5条の2の規定に基づき下表のように定められています。十分な予習及び復習をしたうえで授業を受けることが、授業の理解と単位の取得のために必要となります。

単位の定義		大学設置基準に準拠（学則第30条、工学部規則第5条）
科目	1単位の時間	内容
講義科目	45時間	（予習1時間 + 授業1時間 + 復習1時間）×15回
演習科目	45時間	（予習・復習1時間 + 授業2時間）×15回
実験・実習科目	45時間	（授業3時間）×15回
卒業研究・卒業論文		学修の成果を評価して定める

4. 学生は在学期間中に次のとおり履修する必要があります。

4.1 全学共通教育科目

- (a) 全学共通教育科目は、各学科ごとに定める所要の単位数（表2参照）以上を修得しなければなりません。講義概要及び履修方法の詳細については、別途発行の「全学共通教育履修の手引」を参照してください。
- (b) 全学共通教育科目のうち、教養科目は人文、社会、自然、情報科学の4分野のほかに、教育課程表の工学系教養科目に相当する総合分野、学部開放分野の授業科目が含まれます。教育課程表の選択必修欄に示される単位数以上を指定された分野から修得し、学科ごとに表2に示す教養科目の合計単位数以上を修得しなければなりません。
- (c) 教育課程表の開講単位数には同一時間に並列開講される科目が含まれており、開講時間数と対応しない場合があるので注意してください。
- (d) 全学共通教育科目のうち、教養科目は以下に示すとおりです。

i. 人文科学分野

哲学、倫理学、日本史、外国史、日本文学、日本語学、外国文学、考古学、芸術、文化人類学、人文科学ゼミナール

ii. 社会科学分野

法律学、政治学、社会学、経済学、経営学、地理学、心理学、教育学、社会科学ゼミナール

iii. 自然科学分野

数学、物理学、化学、生物学、地学、自然科学ゼミナール

iv. 情報科学分野

情報科学

v. 総合分野

総合科目（複数の授業科目にまたがる内容又は複数の学問分野にまたがる内容を持つ授業科目）

vi. 学部開放分野

各学部が全学に開放する授業科目（工学部の開放科目：建設工学総論、機械工学概論、化学応用工学概論、電気電子工学概論、知能情報工学セミナー、生物工学概論、光の基礎）

これらのうち総合分野、学部開放分野は教育課程表に示される工学系教養科目に相当します。教養科目は授業科目ごとに授業題目が設けられています。詳細については「全学共通教育履修の手引」を参照のこと。

(e) 外国語科目については表2に従って英語と、他の外国語を併せて8単位（電気電子工学科は10単位、光応用工学科は6単位）以上修得すること。所要単位数を超えて修得した単位数は教養科目の単位数に含めることができます。外国語科目の所要単位数は学科によって異なるので表2を参照すること。フランス語及び中国語は当分の間、受講者数に制限を設けるために、希望する時間に受講できないことがあります。

外国語の授業は1,2年次学生を中心に時間割が編成されており、3年次以降に修得する場合は、他の専門教育科目の受講ができないこともあるので注意してください。

(f) 健康スポーツ科目は、1年次に開講されており2単位修得すること（知能情報工学科・光応用工学科は2年次までに4単位）

(g) 基礎教育科目は、専門教育の基礎となる分野であり、工学部では主として1年次の学生を対象として開講されています。学科ごとの所要単位数は表2に示すとおりです。それぞれの学科で修得しなければならない授業題目は表1のとおりです。

4.2 専門教育科目

(a) 専門教育科目については、学科ごとに表2に定める単位数以上を、それぞれ必修科目、選択必修科目、選択科目に対して修得しなければなりません。選択必修科目の履修方法その他の詳細については、各学科の教育課程表の欄外の指定に従って修得しなければなりません。

5. 学生が本学部を卒業するためには、全学共通教育科目と専門教育科目を、学科ごとに表2に指定された単位数以上を修得し、合計130単位以上を修得する必要があります。

表1 基礎教育科目（昼間コース）

学 科	授業科目名	授 業 題 目	単位数	計
建設工学科	基礎数学	線形代数学 I	2	12
	"	" II	2	
	"	微分積分学 I	2	
	"	" II	2	
	基礎物理学 基礎化学	基礎物理学 f・力学概論 基礎化学概論	2 2	
機械工学科	基礎数学	線形代数学 I	2	10
	"	" II	2	
	"	微分積分学 I	2	
	"	" II	2	
基礎物理学	基礎物理学 f・力学概論	2		
化学応用工学科	基礎数学	線形代数学 I	2	14
	"	" II	2	
	"	微分積分学 I	2	
	"	" II	2	
	基礎物理学 基礎化学	基礎物理学 f・力学概論 基礎物理学 g・電磁気学概論 基礎化学実験	2 2 2	
電気電子工学科	基礎数学	線形代数学 I	2	10
	"	" II	2	
	"	微分積分学 I	2	
	"	" II	2	
基礎物理学	基礎物理学 f・力学概論	2		
知能情報工学科	基礎数学	線形代数学 I	2	10
	"	" II	2	
	"	微分積分学 I	2	
	"	" II	2	
基礎物理学	基礎物理学 f・力学概論	2		
生物工学科	基礎数学	線形代数学 I	2	16
	"	" II	2	
	"	微分積分学 I	2	
	"	" II	2	
	基礎物理学 基礎化学 基礎生物学	基礎物理学 f・力学概論 基礎物理学 g・電磁気学概論 基礎化学 i・化学結合論 基礎生物学 T	2 2 2 2	
	基礎物理学	基礎物理学 f・力学概論	2	
光応用工学科	基礎数学	線形代数学 I	2	12
	"	" II	2	
	"	微分積分学 I	2	
	"	" II	2	
	基礎物理学 基礎化学	基礎物理学 f・力学概論 基礎化学 i・化学結合論	2 2	

(b) 履修手続及び試験等について

専門教育科目の履修手続

1. 履修科目登録届を前・後期とも、それぞれ学年暦の授業開始日から1週間以内に学務係へ提出すること。
2. 履修科目登録届を提出していない場合は、単位を修得することはできません。
3. 履修科目登録届の記入内容に変更が生じた場合は次の期限（詳細は別途掲示）までに変更の申請をしてください。
 - ・通年科目，前期科目，第1クォータ科目 4月下旬
 - ・第2クォータ科目 6月上旬
 - ・後期科目，第3クォータ科目 10月中旬
 - ・第4クォータ科目 12月上旬

他学部等授業科目の履修

1. 他学部等授業科目を履修しようとする場合は、所属する学科の教務委員の承認を得て、所定の「他学部・他研究科授業科目履修願」、「工学部他学科・工学研究科他専攻授業科目履修願」を前・後期とも、それぞれ学年暦の授業開始日から1週間以内に工学部学務係へ提出すること。
(設備その他の理由で実験、実習及び製図等については、許可しません。)
2. 上記履修願を提出して修得した単位は、各学科が定める範囲において卒業に必要な選択単位数に含めることができます(教育課程表の注を参照すること)。

試験について

1. 試験期間は設定しないので、授業担当教員の指示に従ってください。
2. 試験の結果は、原則として前期については10月上旬、後期については翌年度4月上旬に学科を通して学生に配布します。
3. 欠席時数の多い学生には、担当教員から注意を与え、その授業科目の受験資格を与えないことがあります。
4. 再試験は学科によって行わないこともあります。行う場合でも、原則として当該学期内に行われますので、詳細は学科の方針に従ってください。
5. 試験における不正行為を行った者に対しては次の措置を講じます。
 - (a) 授業科目修了の認定に関する試験(追試験・再試験を含む)で不正行為(ほう助を含む)をした者に対しては、学則第52条の規定により懲戒処分を行います。
 - (b) 上記の試験において不正行為をした者に対しては、その学期中に履修した全授業科目の成績を取り消し、改めて所定の授業科目を履修させます。

成績評価の方式について

成績の評価は、定期試験や授業への取り組み状況、レポートなどの提出状況、小テストの点数等を考慮して総合評価を行います。

クォータ制度，オフィス・アワー制度について

- クォータ制度は，新工学教育プログラムの導入に伴い，平成 13 年度から，教育効果の向上を目指して本格的に実施しています．クォータ制度とは，前・後期をさらに 2 期ずつに分け，四半期当たりの履修科目を前・後期制に比べて半分に減らす代わりに，授業回数を倍に増したものです．このシステムによって，学生が短期間で集中的に学習できるようにし，理解を深める制度です．
- オフィス・アワー制度は，教員が特定の曜日の特定の時間を学生と接触できるようにし，授業中に生じた疑問などを解決する相談制度ですが，加えて生活上の困ったことなど気軽に相談する制度です．この制度を活用して学生生活をより充実したものにしてください．実施日程及び詳細は各学科の掲示板に掲示されますので，その指示に従ってください．

放送大学との単位互換について

- 全学共通教育科目
放送大学の授業科目を 8 単位を限度として卒業に必要な単位に含めることができます．
- 専門教育科目
放送大学の授業科目を 4 単位まで卒業に必要な選択科目の単位に含めることができます．
なお，学科によっては放送大学との単位互換は行わないので注意してください．

5 大学との単位互換について

山形大学，群馬大学，徳島大学，愛媛大学及び熊本大学の各工学部等間において学生の単位互換に関する覚書を締結しており，派遣や受講等の他大学の特徴ある科目の受講ができます．詳細は，学務係へ問い合わせてください．

中国・四国地区国立大学工学系の単位互換について

平成 14 年度より相互大学間の交流と協力を促進し，教育内容の充実を図ることを目的として徳島大学工学部，鳥取大学工学部，島根大学総合理工学部，岡山大学工学部，同環境理工学部，広島大学工学部，山口大学工学部，香川大学工学部，愛媛大学工学部が，他の大学で取得した単位も認める単位互換制度を導入しています．これにより学生は，自分が在籍している大学にはない講義を受講できるメリットがあります．前期・後期別に掲示しますので，各教務委員へ問い合わせてください．

履修科目数上限制・学年制について

- 履修科目数上限制が設けられています．履修科目の上限単位数は学科及び学年ごとに異なりますので，所属する学科の上限規定を見てください．
- 学年制が適用されます．各学科及び学年ごとに進級規定がありますので，所属する学科の進級規定を熟読してください．

上記において，履修手続及び試験等についてのごく一般的な事項を説明しました．なお，詳細については各学科の教育内容と履修案内を熟読するようにしてください．

表2 全学共通教育科目及び専門教育科目の所要単位数

授業科目 学 科	全 学 共 通 教 育 科 目										専 門 教 育 科 目				合計
	教 養 科 目					外国語科目		健康スポ ーツ科目	基礎教育 科目 *2	計	必	選・必	選	小計	
	人文	社会	自然	その他 *1	小 計	英語	その他								
建設工学科	4	4	4	8	20	6	2	2	12	42	60	0	28	88	130
機械工学科	4	4	4	8	20	6	2	2	10	40	45	0	45	90	130
化学応用工学科	4	4	4	4	16	8*3		2	14	40	31	0	59*4	90	130
電気電子工学科	4	4	4	12	24	6	4	2	10	46	30	34	20	84	130
知能情報工学科	4	4	4	8	20	8*3		4	10	42	22	0	66	88	130
生物工学科	6	6	—	6	18	6	2	2	16	44	22	0	64*5	86	130
光応用工学科	4	4	4	8	20	6		4	12	42	51	0	37*6	88	130

*1：人文・社会・自然を含む全教養科目の他に，所要単位数を超える外国語科目を含めることができる。

*2：履修すべき基礎教育科目は，各学科ごとに指定する（表1参照）

*3：外国語の全領域から併せて8単位以上履修する。

*4：選択科目Aを10単位以上含むこと。

*5：選択科目Aを44単位以上含むこと。

*6：選択科目Aを32単位以上含むこと。

3) 夜間主コース履修方法

(a) 夜間主コース履修方法

1. 各学科の教育課程表に示す授業科目は、4年間で開講される専門教育科目です。授業科目は全学に共通する授業科目である全学共通教育科目（教養科目、外国語科目、健康スポーツ科目及び基礎教育科目）と専門教育科目により編成されています。
2. 各学科、各年次に実施される授業科目、単位数及び週授業時数は教育課程表に示すとおりである。担当教員の都合等により、実施時期について若干の変更が生じることもあるので、各学年の初めに発表される時間割に注意してください。
3. 授業時間数と単位の関係は、徳島大学学則第30条及び徳島大学工学部規則第5条の2の規定に基づき下表のように定められています。十分な予習及び復習をしたうえで授業を受けることが、授業の理解と単位の取得のためにも必要となります。

単位の定義		大学設置基準に準拠（学則第30条、工学部規則第5条）
科目	1単位の時間	内容
講義科目	45時間	（予習1時間 + 授業1時間 + 復習1時間）×15回
演習科目	45時間	（予習・復習1時間 + 授業2時間）×15回
実験・実習科目	45時間	（授業3時間）×15回
卒業研究・卒業論文		学修の成果を評価して定める

4. 学生は在学期間中において次のとおり履修する必要があります。

4.1 全学共通教育科目

- (a) 全学共通教育科目は、各学科ごとに定める所要の単位数（表4参照）以上を修得しなければなりません。講義概要及び履修方法の詳細については、別途発行の「全学共通教育履修の手引」を参照してください。
- (b) 全学共通教育科目のうち、教養科目は人文、社会、自然、情報科学の4分野のほか、教育課程表の工学系教養科目に相当する総合分野、学部開放分野の授業科目が含まれます。教育課程表の選択必修欄に示される単位数以上を指定された分野から修得し、学科ごとに表4に示す教養科目の合計単位数以上を修得しなければなりません。
教養科目で所要の単位数を超えて修得した単位については、化学応用工学科・生物工学科では10単位まで、専門選択単位として卒業に要する単位数として換算することができます。
- (c) 教育課程表の開講単位数には同一時間に並列開講される科目が含まれており、開講時間数と正確に対応しない場合があるので注意してください。
- (d) 全学共通教育科目のうち、教養科目は以下に示すとおりです。開講時間数の制約のために、これらの科目は原則として4年間の修学期間内で一回以上聴講可能となるように開講する方針です。学期初めに公表される時間割に注意して、希望する授業科目を確実に履修すること。
 - i. 人文科学分野 アンダーラインが平成16年度開設授業科目
哲学、倫理学、日本史、外国史、日本文学、日本語学、外国文学、考古学、芸術、文化人類学（人文科学ゼミナール）
 - ii. 社会科学分野
法律学、政治学、社会学、経済学、経営学、地理学、心理学、教育学（社会科学ゼミナール）
 - iii. 自然科学分野
数学、物理学、化学、生物学、地学（自然科学ゼミナール）
 - iv. 情報科学分野
情報科学
 - v. 総合分野 平成16年度は開設しない。
総合科目（複数の授業科目にまたがる内容又は複数の学問分野にまたがる内容をもつ授業科目）
 - vi. 学部開放分野 各学部が全学に開放する授業科目（平成16年度開設授業題目）
「機械工学概論」「化学応用工学概論」「電気電子工学概論」

これらのうち総合分野，学部開放分野は教育課程表に示される工学系教養科目に相当します．教養科目は授業科目ごとに授業題目が設けられています．詳細については「全学共通教育履修の手引」を参照のこと．

- (e) 外国語科目については表 4 に従って，英語と他の外国語を併せて 6 単位以上修得すること．所要単位数を超えて修得した単位数は，教養科目の単位数に含めることができます．外国語科目の所要単位数は学科によって異なるので別表を参照すること．

夜間主コースにおける外国語は当分の間，英語とドイツ語のみが開講される予定です．

- (f) 健康スポーツ科目は，1 年次に開講されており 2 単位修得すること．
 (g) 基礎教育科目は，専門教育の基礎となる分野であり，夜間主コースでは主として 1 年次の学生を対象として開講されています．各学科の所要単位数は表 4 に示すとおりです．それぞれの所要の学科で修得しなければならない授業題目は表 3 のとおりです．

4.2 専門教育科目

- (a) 専門教育科目については，学科ごとに表 4 に定める単位数以上を，それぞれ必修科目，選択科目に対して修得しなければなりません．履修方法その他の詳細については，各学科の教育課程表の欄外の指定に従って修得しなければなりません．

- (b) 昼間コースに開講されている科目のうち，各学科が指定した授業科目（教育課程表中の 印の科目）については所定の手続きを行えば，30 単位を限度として各学科が定める範囲内で履修が認められ，卒業に要する単位数に加えることができます．

5. 学生が本学部夜間主コースを卒業するためには，全学共通教育科目と専門教育科目を学科ごとに表 4 に指定された単位数以上修得し，合計 124 単位以上を修得する必要があります．

表 3 基礎教育科目（夜間主コース）

学 科	授業科目名	授 業 題 目	単位数	計
建設工学科	基礎数学	線形代数学 I	2	10
	"	" II	2	
	"	微分積分学 I	2	
	"	" II	2	
	基礎物理学	基礎物理学 f・力学	2	
機械工学科	基礎数学	微分積分学 I	2	6
	"	" II	2	
	基礎物理学	基礎物理学 f・力学	2	
化学応用工学科	基礎数学	微分積分学 I	2	選択必修 4
	"	" II	2	
	基礎物理学	基礎物理学 f・力学	2	
電気電子工学科	基礎数学	線形代数学 I	2	10
	"	" II	2	
	"	微分積分学 I	2	
	"	" II	2	
	基礎物理学	基礎物理学 f・力学	2	
知能情報工学科	基礎数学	線形代数学 I	2	8
	"	" II	2	
	"	微分積分学 I	2	
	"	" II	2	
生物工学科	基礎数学	微分積分学 I	2	選択必修 4
	"	" II	2	
	基礎物理学	基礎物理学 f・力学	2	

(b) 履修手続及び試験等について

専門教育科目の履修手続

- 履修科目登録届を前・後期とも，それぞれ学年暦の授業開始日から 1 週間以内に学務係へ提出すること．
- 履修科目登録届を提出していない場合は，単位を修得することはできません．
- 履修科目登録届の記入内容に変更が生じた場合は次の期限（詳細は別途掲示）までに変更の申請をしてください．

- ・ 通年科目，前期科目，第 1 クォータ科目 4 月下旬
- ・ 第 2 クォータ科目 6 月上旬
- ・ 後期科目，第 3 クォータ科目 10 月中旬
- ・ 第 4 クォータ科目 12 月上旬

他学部等授業科目の履修

1. 他学部等授業科目を履修しようとする場合は、所属する学科の教務委員の承認を得て、所定の「他学部・他研究科授業科目履修願」、「工学部他学科・工学研究科他専攻授業科目履修願」を前・後期とも、それぞれ学年暦の授業開始日から1週間以内に工学部学務係へ提出すること。
(設備その他の理由で実験、実習及び製図等については、許可しません。)
2. 上記履修願を提出して修得した単位は、各学科が定める範囲において卒業に必要な選択単位数に含めることができます(教育課程表の注を参照すること)。

試験について

1. 試験期間は設定しないので、授業担当教員の指示に従ってください。
2. 試験の結果は、原則として前期については10月上旬、後期については翌年度4月上旬に学科を通して学生に配布します。
3. 欠席時数の多い学生には、担当教員から注意を与え、その授業科目の受験資格を与えないことがあります。
4. 再試験は学科によって行なわないこともあります。行なう場合でも、原則として当該学期内に行なわれますので、詳細は学科の方針に従ってください。
5. 試験における不正行為を行った者に対しては次の措置を講じます。
 - (a) 授業科目修了の認定に関する試験(追試験・再試験を含む)で不正行為(ほう助を含む)をした者に対しては、学則第52条の規定により懲戒処分を行います。
 - (b) 試験において不正行為をした者に対しては、その学期中に履修した全授業科目の成績を取り消し、改めて所定の授業科目を履修させます。

成績評価の方式について

成績の評価は、定期試験や授業への取り組み状況、レポートなどの提出状況、小テストの点数等を考慮して総合評価を行います。

長期履修制度について

職業を有している学生に、標準修業年限を超えて、一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修することを認め、その在学期間中の授業料の負担を軽減することができます。夜間主コースに入学後1年以内の者で、申請時において正規職員として6ヶ月以上勤務している者で、長期履修の申請を希望する者は、所属学科の担任教官に相談してください。申請の時期は、前期の教育課程修了後から2月末日までです。

クォータ制度、オフィス・アワー制度について

- クォータ制度は、新工学教育プログラムの導入に伴い、平成13年度から、教育効果の向上を目指して本格的に実施しています。クォータ制度とは、前・後期をさらに2期ずつに分け、四半期当たりの履修科目を前・後期制に比べて半分に減らす代わりに、授業回数を倍に増したものです。このシステムによって、学生が短期間で集中的に学習できるようにし、理解を深める制度です。
- オフィス・アワー制度は、教員が特定の曜日の特定の時間を学生と接触できるようにし、授業中に生じた疑問などを解決する相談制度ですが、加えて生活上の困ったことなど気軽に相談する制度です。この制度を活用して学生生活をより充実したものにしてください。実施日程及び詳細は各学科の掲示板に掲示されますので、その指示に従ってください。

放送大学との単位互換について

- 全学共通教育科目

放送大学の授業科目を 8 単位を限度として卒業に必要な単位に含めることができます。

- 専門教育科目

放送大学の授業科目を 4 単位まで卒業に必要な選択科目の単位に含めることができます。

なお、学科によっては放送大学との単位互換は行わないので注意してください。

5 大学との単位互換について

山形大学，群馬大学，徳島大学，愛媛大学及び熊本大学の各工学部等間において学生の単位互換に関する覚書を締結しており，派遣や受講等の他大学の特徴ある科目の受講ができます。詳細は，学務係へ問い合わせてください。

中国・四国地区国立大学工学系の単位互換について

平成 14 年度より相互大学間の交流と協力を促進し，教育内容の充実を図ることを目的として徳島大学工学部，鳥取大学工学部，島根大学総合理工学部，岡山大学工学部，同環境理工学部，広島大学工学部，山口大学工学部，香川大学工学部，愛媛大学工学部が，他の大学で取得した単位も認める単位互換制度を導入しています。これにより学生は，自分が在籍している大学にはない講義を受講できるメリットがあります。前期・後期別に掲示しますので，各教務委員へ問い合わせてください。

昼間コース授業科目の受講について

1. 夜間主コースの学生は，専門教育科目について 30 単位を限度として履修が認められていますので，昼間コース授業科目の受講を希望する学生は，受講許可願を前・後期とも，それぞれ学年暦の授業開始日から 1 週間以内に学務係へ提出すること。
2. 昼間コース授業科目受講許可願を提出していない場合は，単位を修得することはできません。

履修科目数上限制・学年制について

- 履修科目数上限制が設けられています。履修科目の上限単位数は学科及び学年ごとに異なりますので，所属する学科の上限規定を見てください。
- 学年制が適用されます。各学科及び学年ごとに進級規定がありますので，所属する学科の進級規定を熟読してください。

上記において，履修手続及び試験等についてのごく一般的な事項を説明しました。なお，詳細については各学科の教育内容と履修案内を熟読するようにしてください。

表 4 全学共通教育科目及び専門教育科目の所要単位数

授業科目 学 科	全 学 共 通 教 育 科 目										専 門 教 育 科 目			合計
	教 養 科 目					外国語科目		健康スポ ーツ科目	基礎教育 科目 *3	計	必修	選択	小計	
	人文	社会	自然	その他	小 計	英語	その他							
建設工学科	4	4	—	10*1	18	6		2	10	36	48	40	88	124
機械工学科	4	4	4	10*1	22	6		2	6	36	35	53	88	124
化学応用工学科	2	2	4	16*2	24*4 (+10)	6*5		2	4	36	18	70	88	124
電気電子工学科	4	4	4	12*1	24	4	2	2	10	42	16	66	82	124
知能情報工学科	4	4	4	8*1	20	6		2	8	36	20	68	88	124
生物工学科	2	2	4	16*1	24*4 (+10)	6*5		2	4	36	40	48	88	124

*1：人文・社会・自然を含む全教養科目の他に，所要単位数を超える外国語科目を含めることができる．

*2：人文・社会・自然を含む全教養科目の他に，所要単位数を超える外国語科目及び基礎教育科目を含めることができる．

*3：履修すべき基礎教育科目は，各学科ごとに指定する（表 3 参照）

*4：所要単位数を超えて修得した単位は 10 単位まで専門科目の選択単位に読み替えることができる．

*5：英語，ドイツ語から修得する．

4) 学科の教育内容と履修案内

建設工学科	15
昼間コース	19
夜間主コース	50
機械工学科	71
昼間コース	81
夜間主コース	108
化学応用工学科	129
昼間コース	133
夜間主コース	157
電気電子工学科	173
昼間コース	175
夜間主コース	211
知能情報工学科	231
昼間コース	233
夜間主コース	257
生物工学科	275
昼間コース	277
夜間主コース	312
光応用工学科	331

建設工学科

建設工学科の教育目的	17
建設工学科の教育目標	18
建設工学科（昼間コース）	19
建設工学科（昼間コース）カリキュラム編成表	21
建設工学科（昼間コース）カリキュラム表	22
建設工学科（昼間コース）教育課程表	23
建設工学科（昼間コース）講義概要	27
建設工学科（夜間主コース）	50
建設工学科（夜間主コース）カリキュラム表	52
建設工学科（夜間主コース）教育課程表	53
建設工学科（夜間主コース）講義概要	56

建設工学科の教育目的

建設工学の役割は、市民の暮らしと産業を支える社会基盤の整備と充実、ならびに豊かな自然環境の保全に寄与することにある。したがって、建設技術者は、工学基礎と専門分野に関する広範な知識に基づく問題解決能力、計画・企画力および実行力を身につけているとともに、社会に対する強い責任感や偏りのない倫理観さらには高度な説明能力をも具備しているべきである。本学科は、これらを望ましい建設技術者像の要点として、学部・大学院の一貫教育により、その基礎となる知識、技術および精神を涵養しようとしている。本学科では、以上のような観点より、教育の目的として、まず、生涯教育も念頭においた長期的視点からの「教育理念」を掲げ、ついで、学部年限内での教育により賦与すべき資質の水準を示す「教育目的」を設定している。

1. 教育理念

社会基盤や自然環境の適正な整備と保全に対して、責任感と倫理観をもって貢献できる自律的な建設技術者の育成を基本とするが、それは次の4項目から成る。

(1) 豊かな人格の形成、自発的な学習意欲の育成。

<解説> 多様な学術分野の学習を通して、自然界と人間社会における諸事象の実態と本質を客観的に把握できる教養を身につけているとともに、それらの保全と改善を使命としている建設技術者として、自己研鑽を継続するための素養と自覚を持つ人材を育成する。

(2) 工学基礎科学と建設専門の知識を基礎とした、分析力と洞察力の育成。

<解説> 目的意識をもって意欲的に習得した工学基礎科学と建設工学の知識・知見に基づいて、自然環境と人間社会の現状や将来に向けたニーズを系統的に分析し、そこに内在する課題を的確に抽出できる洞察力を持つ人材を育成する。

(3) 建設工学の専門知識による、問題解決力と表現力の育成。

<解説> 建設工学分野における位置付けと意義を理解した上で学習した専門知識を活用しつつ、建設技術者として当面する諸問題を合理的に解決する方策を見出したのち、社会に対してその方針、方法および予想される成果を簡潔かつ明解に説明できる人材を育成する。

(4) 自然や社会の環境変化に、自律的に対応する範と創造力の育成。

<解説> 自発的な学習の積み重ねの結果として、絶え間のない自然・社会環境の変化をリアルタイムで認知・理解するとともに、新たな場の条件のもとで生起する諸問題の解決方法を創造し、効果的に実行して、地域社会や国際社会の適正な発展に貢献できる人材を育成する。

2. 教育目的

将来も自発的な研鑽を積み重ねて望ましい技術者へと成長すべき卒業生が、卒業の時点において獲得あるいは具備しておくべき資質として、つぎの6項目を設定している。

(1) 社会における建設技術者としての使命と倫理を自覚し、責任をもって自律的に仕事を遂行してゆくために必要な人文社会科学ならびに工学倫理についての知識を有しているとともに、幅広い教養を身につけている。

(2) 建設技術の迅速な進歩や多様化・学際化に遅滞なく対処してゆくためには、自主的な学習を継続する必要があることを認識しているとともに、その際に持つべき視点と効果的な学習法の基本を身につけている。

(3) 多岐にわたる既存の建設技術の学術大系とこれを支える基礎科学について、その基礎を偏りなく習得しているとともに、いくつかの専門分野に関しては、実務レベルの課題・問題を処理・解決できるまでの知識と応用力を有している。

(4) 多様な制約条件と限定された時間のもとで、要求された仕事を計画的かつ効率的に推進するための方策を講じることができるとともに、実践の経験を有している。

(5) 当面する諸問題や社会のニーズに対する建設技術者としての認識ならびに、その解決に向けた施策の内容、方法および期待される成果について、口頭および文書で効果的に討議・説明できる表現力と語学力を有している。

(6) 自然環境の変動や社会情勢の変化に伴って変貌、発展してきた建設技術の歴史的経緯と現状に関する的確な認識に基づき、将来の課題を予見して適正な対応策を講じるために必要な整理・分析能力、洞察力および創造力を有している。

建設工学科の教育目標

教育目的のそれぞれに対して、以下のような数個ずつの到達目標を設定し、教育効果の点検・評価ならびに継続的な教育改善の指針としている。

1. 使命・責任感と倫理観を持っている。
 - (1) 建設技術者が人間社会の発展と自然環境の保全に果たすべき役割を理解している。
 - (2) 建設技術者が持つべき倫理（人命尊重、環境への配慮、正義感・清潔）を理解している。
 - (3) 使命・責任感および倫理の基礎となる人文社会科学分野（特に社会の成り立ちや動態に関わるもの）について、基礎的な学識を持つ。
 - (4) 実務の現場に触れることを通して、使命、責任、倫理の必要性や重要性を体験的に理解・認識している。
2. 自主的な学習意欲や学習能力がある。
 - (1) 思考力が涵養される学習方法の基本を身につけている。
 - (2) 与えられた課題について適切な学習計画を立て、これを遂行できる。
 - (3) 学習を支援する機関やツールの効用と活用法について、実践を通して理解している。
3. 既存の建設技術に関して適正な知識を有し、実務問題に正しく適用できる。
 - (1) 工学基礎科学として、微積分と代数学を中心とする数学、力学を主とする物理学および基本的な化学を習得している。
 - (2) 建設工学の専門基礎科目群（構力、水理、土質、計画、材料、RC、環境、測量）の全般にわたり、基本的な知識を習得している。
 - (3) 建設工学の専門基礎科目群の一部については、これらを基礎とした先端的な設計書あるいは調査報告書を理解できる程度の知識と応用力を有する。
 - (4) 専門応用科目については、分野を絞り込んで、実務問題の処理ができる程度に高度な知識と応用力を持つ。
 - (5) 情報の収集、管理、整理・分析に必要なスキルとリテラシーについて、実習を通して基本的な技能を習得している。
 - (6) 建設業務の計画と実施（マネージメント）に関わる専門外の分野（法規、経済、経営、管理など）について基本的な知識を習得している。
4. 建設事業に係わる諸問題の解決や新たな事業に対して、発案、計画、実施することができる。
 - (1) 問題を調査、分析、整理するための方法論に関する基礎的な知識を持つとともに実践の経験がある。
 - (2) 解決策を発案するために必要な洞察力を体験的に身につけているとともに、その具現化に向けたシナリオを作成することができる。
 - (3) プロジェクト・チームにおいて自らが果たすべき役割を十分に理解できるとともに、その目的に向かって最大限に貢献するための取り組み方について、体験・実践を通じた認識がある。
5. 建設事業に関わる社会的問題や技術的課題について、口頭ならびに文書で効果的に説明・討議できる。
 - (1) 効果的なプレゼンテーション手法に関する基本的な知識を有するとともに、実践の経験がある。
 - (2) 口頭ならびに文書による効果的なプレゼンテーションのために必要な日本語表現力を体験的に身につけている。
 - (3) 適正かつ簡潔な文章からなり、構成も適切な和文の論文・報告書・設計書などを作成することができる。
 - (4) 英語で記述された基礎的な専門記事あるいはレポートの文章を読解できる。
 - (5) 英語によって外国人と日常会話程度のコミュニケーションができる。
6. 建設技術の進歩と自然や社会の環境変化との関わりについて、その歴史的経緯と現状を的確に把握している。
 - (1) 建設技術の発展の歴史について十分な知識を習得している。
 - (2) 自然環境の本質と人為作用がそれに及ぼす影響に関する基本的な知識を習得している。
 - (3) 現状の建設技術が抱える諸問題について、実例の見聞を通して得た広範な認識を持つ。
 - (4) 建設技術の現状に関する個人的ならびに集団的論議を実践し、その成果を取りまとめた経験を有する。

建設工学科（昼間コース）

建設工学科（昼間コース）

(1) 卒業資格

昼間コースの卒業資格について、(ア) 単位修得条件、(イ) 全学共通教育科目の科目・分野別の単位修得条件の両項目について表を用いて説明します。

(ア) 単位修得条件

卒業に必要な単位数

	全学共通教育科目	専門教育科目	合計
必修単位	20	60	80
選択必修単位	14	-	14
選択単位	8	28	36
合計	42	88	130

(イ) 全学共通教育科目の科目・分野別の単位修得条件

卒業に必要な全学共通教育科目の単位数

科目・分野		必修	選択必修	選択
教養科目	人文科学分野		4	*
	社会科学分野		4	*
	自然科学分野		4	*
	総合分野、学部開放分野、情報科学分野 (工学系教養科目)			*
外国語科目		6	2	*
健康スポーツ科目		2		
基礎教育科目		12		
合計		20	14	*から8

注1) 教養科目の人文科学分野、社会科学分野、自然科学分野のそれぞれから4単位ずつ、外国語科目から英語以外を2単位、計14単位を必ず選択してください。これらの科目を選択必修科目と呼びます。

注2) 人文科学分野、社会科学分野、自然科学分野の3分野については、同一授業科目に属する授業は、3授業題目(6単位)までしか履修できません。

注3) 総合分野、学部開放分野については、各分野で6単位までしか履修できません。

注4) 外国語科目については、英語6単位が必修、注1)でも説明しましたが、英語以外の外国語科目の中からの2単位が選択必修単位です。この合計の8単位を越えて修得した外国語科目の単位は、教養科目に読み替えることができます。すなわち、その単位は選択単位に数えることができます。

注5) 基礎教育科目の単位数は、基礎数学a～dの4科目で8単位と基礎物理学fと基礎化学(建設工学科の指定分)の2科目で4単位の合計12単位です。

注6) 選択単位は、人文科学分野、社会科学分野、自然科学分野で選択必修科目として履修した以外の科目、総合分野と学部開放分野の科目、および外国語科目で必修と選択必修として履修した以外の科目から合計8単位を修得する必要があります。

(ウ) 早期卒業(昼間コースのみ)

(i) 申請資格 対象学生は、大学に2年半以上3年未満在学の者で、編入学生、留年生は含まない。

(ii) 予備審査(3年次前期終了後) 予備審査では次のすべての要件を満たしていること。

1. 3年前期までに開講されている必修科目の欠単位がないこと。
2. 取得している科目のGPAが、4.0以上であること。
3. 取得単位数が、卒業必要単位数の4/5以上であること。

建設工学科（昼間コース）

(iii) 本審査

1. 3年次末までのGPAが4.0以上であること。
2. 卒業要件を満たしていること。ただし、3年後期時点で卒論着手資格を有している場合には3年後期に卒業研究を行うことができる。また建設設計演習は専門選択科目2単位の取得で認定することができる。

(2) 進級規定

各年次ごとの進級に関して、次の表に示す規定があります。進級規定を満たさない場合、留年となりますので、十分に注意してください。

昼間コース進級規定

<u>1年次から2年次への進級要件</u>			
下記の13科目26単位の内、未修得科目が4科目以下であること。			
専門教育必修科目			
建設工学共通科目：	建設工学総論・測量学・測量学実習・情報処理	4科目	(7単位)
建設工学専門科目：	建設基礎解析及び演習・構造力学1・土質力学1	3科目	(7単位)
共通教育科目			
基礎教育科目：	数学・物理・化学	6科目	(12単位)
	合計	13科目	(26単位)

2年次から3年次への進級要件	1年次および2年次で開講される建設工学専門科目の必修科目(15科目)をすべて取得することを条件とする。 ただし、上記について欠科目2科目までは建設工学共通科目の必修科目から上記欠科目数の2倍の科目を取得していれば進級を認める。
3年次から4年次への進級要件	1 全学共通教育に対する卒業要件を満たすために、今後取得しなければならない単位数が2単位以下であること。 2 全学共通教育および専門教育の区別なく、卒業要件を満たすために今後取得しなければならない単位数が、卒業研究を除いて合計16単位以下であること。

建設工学専攻分野別カリキュラム編成(風間コース)

科目	学年			
	1	2	3	4
	前期	後期	前期	後期
科目	G1 全学共通科目			
	<ul style="list-style-type: none"> ●ベクトル解析 ●数値解析 ●景観デザイン ●鋼構造学 ●海岸工学 ●水文・水資源工学 ●基礎工法 ●都市・交通計画 ●計画情報システム ●コンクリート工学 ●交通施設工学 ●資源循環工学 ●環境保全工学 ●構造解析学及び演習 ●振動学 ○土木・建築史 			
	<ul style="list-style-type: none"> ●R1 工学基礎 ○微分方程式2 ●複素関数論 ●プログラミング技法及び演習 ●福祉工学概論 			
	<ul style="list-style-type: none"> ○情報処理 ●応用測量学 			
	<ul style="list-style-type: none"> ●R2 専門基礎 ○建設工学総論 ○測量学 ○建設基礎解析及び演習 			
	<ul style="list-style-type: none"> ○公共計画学 ○鉄筋コンクリート力学 ○基礎環境学 ○建設材料学 ○構造力学2及び演習 ○水理学1及び演習 			
	<ul style="list-style-type: none"> ○土質力学2及び演習 ○計画数理 ○建設力学2及び演習 ○水理学2及び演習 			
	<ul style="list-style-type: none"> ○土質力学1 ○土質力学1 			
	<ul style="list-style-type: none"> ○測量学実習 			
	<ul style="list-style-type: none"> ●建設基礎セミナー 			
B2 創成型科目				
<ul style="list-style-type: none"> ○建設工学セミナー ●建設工学外実習 				
B1 工学実験				
<ul style="list-style-type: none"> ○建設工学実験実習 ○工業物理学実験 ○建設工学実験実習 ○橋梁設計製図 ●プロジェクト演習 				
G2 工学教養・専門教養				
<ul style="list-style-type: none"> ●知的所有権概論 ●ニュービジネス概論 ●生産管理 ●労務管理 △エコシステム工学 △職業指導 				
B3 卒業研究				
<ul style="list-style-type: none"> ○建設設計演習 				
G1(開講時間数)	(20)	(20)	(6)	(6)
G2	0	0	1	0
R1	0	1	3	2
R2	3	2	5	7
R3	0	1	0	0
B1	1	0	13	11
B2	1	1	0	2
B3	0	0	0	1
合計(G2~B3)	5	5	9	9
<ul style="list-style-type: none"> ○印を付した科目は必修科目。 ●印を付した科目は選択科目。 △印を付した科目の単位は卒業資格単位数に含まれない。 かつこ内は開講時間数。 				

建設工学科（昼間コース）

建設工学科昼間コースカリキュラム表

科目群	1年		2年		3年		4年		
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
全学共通教育科目 人文科学 社会科学 自然科学 工学系教養 外国語 健康スポーツ 基礎教育	(4)	(6)	(4)	(4)	(4)	(4)			
	(4)	(4)	(1)	(1)					
	(1)	(1)							
	(6)	(6)							
	工学基礎			○微分方程式1 ○解析力学	○微分方程式2 ●複素関数論	●数値解析 ●ベクトル解析	○工業物理学 実験 ●電磁気学		
	建設工学共通	○建設工学総論 ○測量学 ○測量学実習 ●建設基礎セミナー	○情報処理 ●応用測量学	●福祉工学概論 ●プログラミング 技法及び演習		○建設工学実験 実習 ○建設工学セミナー ○土木・建築史 ●景観デザイン ●建設工学学外 実習	○橋梁設計製図 ●プロジェクト 演習 ●プログラミング 技法及び演習 ●耐震工学 ●専門外国語	○卒業研究 ○建設設計演習 ●知的所有権 概論 ●ニュービジ ネス概論 ●生産管理 ●労務管理 △職業指導 △エコシステム 工学	
建設工学専門科目	○建設基礎解析 及び演習	○構造力学1 ○土質力学1	○構造力学2 及び演習 ○水理学1及び 演習 ○土質力学2 及び演習 ○計画数理 ○建設材料学	○構造力学3 及び演習 ○水理学2及び 演習 ○地盤力学 ○地盤工学 ○公共計画学 ○鉄筋コンク リート力学 ○基礎環境学	●構造解析学 及び演習 ●鋼構造学 ●振動学 ●海岸工学 ●水文・水資源 工学 ●基礎工法 ●都市・交通 計画 ●計画情報 システム ●コンクリート 工学 ●交通施設工学 ●資源循環工学 ●環境保全工学	●河川工学 ●応用地質学 ●岩盤力学 ●計画プロジェ クト評価 ●コンクリート 構造学 ●建設行政法 ●建設マネジメント および工学倫理 ●生態系工学 ●環境計画学 ●総合建設演習			
修得単位数	32		6~10		4~8		0		
専門必修	14		34		6		6		
専門選択	4		2~6		22~38		0~5		
計	50		42~50		32~50		6~11		

全学共通科目欄：標準開講期間を表し、()内の数字は各学期における標準取得単位数を示す。

人文、社会、自然から各4単位以上取得する。

○印を付した科目は必修科目。

●印を付した科目は選択科目。

△印を付した科目の単位は卒業資格単位数に含まれない。

建設工学科(昼間コース)

建設工学科(昼間コース)教育課程表

全学共通教育科目

授業科目(分野)	単位数			開講時期及び授業時間数(1週当たり)								備考	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年			計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
人文科学分野		4	8	4	6	4	4	4	4			26	
社会科学分野		4											
自然科学分野		4											
総合分野・ 学部開放分野・ 情報科学分野													
外国語科目	(6)	(2)		(8)	(8)	(2)	(2)					(20)	
健康スポーツ科目	(2)			(2)	(2)							(4)	
基礎教育科目	12			6	6							12	
全学共通教育科目小計	12 (8) 20	12 (2) 14	8 8	10 (10) 20	12 (10) 22	4 (2) 6	4 (2) 6	4 4	4 4			38 (24) 62	講義 演習・実習 計

専門教育科目

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数(1週当たり)								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
微分方程式 1	2					2						2	香田	47	
微分方程式 2	2						2					2	香田	47	
解析力学	2					2						2	道廣・川崎	28	
工業物理学実験	(1)								(3)			(3)	道廣・岸本	36	
建設工学総論	2			2								2	水口・宇都宮・平尾・橋本 端野・岡部・山上・澤田 望月・山中・近藤・村上	34	
建設工学セミナー	(1)							(3)				(3)	橋本・非常勤講師	34	
土木・建築史	2							2				2	澤田(健)	46	
測量学	2			2								2	藤井	44	
測量学実習	(1)			(3)								(3)	鎌田・上野・三宅 渡邊(健)・猪木・新居	44	
情報処理	2					2						2	中野・竹林・蔭・田村	40	
建設基礎解析及び演習	2(1)			2(2)								2(2)	岡部・澤田・橋本・鈴木	32	
構造力学 1	2				2							2	宇都宮	37	
構造力学 2 及び演習	2(1)					2(2)						2(2)	長尾・野田	38	
構造力学 3 及び演習	2(1)						2(2)					2(2)	成行・野田	38	
水理学 1 及び演習	2(1)					2(2)						2(2)	岡部・中野・田村	42	
水理学 2 及び演習	2(1)						2(2)					2(2)	端野・竹林・田村	42	
土質力学 1	2				2							2	鈴木	46	
土質力学 2 及び演習	1(1)					1(2)						1(2)	望月	46	
地盤力学	2						2					2	山上	40	
地盤工学	2						2					2	上野	40	
計画数理	2						2					2	廣瀬	31	
公共計画学	2						2					2	近藤	36	
建設材料学	2						2					2	水口	35	
鉄筋コンクリート力学	2						2					2	橋本	45	
基礎環境学	2						2					2	村上・上月	30	
建設工学実験実習	(1)							(3)				(3)	成行・長尾・中野・鈴木 上月・上野・上田・野田 三神・蔭・竹林・堀井 渡邊(健)	33	
橋梁設計製図	(1)								(3)			(3)	澤田・長尾・野田・三神 脇川	30	
建設設計演習	(1)									(3)		(3)	岡部・鈴木・上野・上田 蔭	35	

建設工学科（昼間コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
卒業研究	(5)										(15)	(15)	建設工学科全教官		44
専門教育必修科目小計	43 (17) 60	— — —	— — —	6 (5) 11	4 4	13 (6) 19	18 (4) 22	2 (6) 8	 (6) 6	 (3) 3	 (15) 15	43 (45) 88	講義 演習・実習 計		
授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
ベクトル解析			2					2				2	澤下		49
複素関数論			2			2						2	澤下		48
数値解析			2					2				2	竹内（敏）		42
電磁気学			2						2			2	金城		45
建設基礎セミナー			(2)	(2)	(2)							(4)	水口・宇都宮・平尾・端野 山上・望月・山中・村上 近藤・長尾・中野・鎌田 成行・上月・廣瀬・上野 上田・滑川・野田・蔭 三神・竹林・渡邊（健） 三宅・渡辺（公）・田村		32
応用測量学			2		2							2	滝根・星		27
プロジェクト演習			(1)						(2)			(2)	建設工学科全教官		48
建設工学学外実習			(2)					(6)				(6)	岡部・3年生クラス担任		33
プログラミング技法及び演習			1(1)			1(2)						1(2)	滑川・野田・三神		48
景観デザイン			2						2			2	山中・澤田（俊）・三宅		32
耐震工学			2						2			2	澤田・三神		45
構造解析学及び演習			2(1)					2(2)				2(2)	平尾		37
鋼構造学			2					2				2	成行		37
振動学			2					2				2	宇都宮		41
水文・水資源工学			2					2				2	端野		41
海岸工学			2					2				2	中野		28
河川工学			2						2			2	岡部・竹林		29
基礎工法			2					2				2	山上		30
応用地質学			2						2			2	上野（将）		28
岩盤力学			2						2			2	打田		30
都市・交通計画			2					2				2	山中・近藤		46
計画情報システム			2					2				2	山中・渡辺（公）		31
計画プロジェクト評価			2						2			2	近藤・山中・廣瀬・滑川		31
コンクリート工学			2					2				2	橋本		39
コンクリート構造学			2						2			2	上田・則武		39
交通施設工学			2					2				2	望月・山上		38
建設行政法			2						2			2	林		33
建設マネジメント及び工学倫理			2						2			2	滑川・山崎		35
資源循環工学			2					2				2	上月・村上		39
環境保全工学			2						2			2	澤田・鎌田		29
生態系工学			2					2				2	鎌田・上月		43
環境計画学			2						2			2	上月・村上		29
専門外国語			2						2			2	成行・三神・マクドナルド		43
総合建設演習			(1)						(1)			(1)	平尾・成行・鈴木・長尾 中野・上月・上野 渡邊（健）・渡辺（公）		43
福祉工学概論			2		2							2	末田・藤澤		48
知的所有権概論			1							1		1	酒井		45
ニュービジネス概論			2							2		2	山崎・藤崎・林		47

建設工学科（昼間コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
労務管理			1							1		1	井原		49
生産管理			1							1		1	井原		42
エコシステム工学			2							2		2	三輪・近藤・村上・末田 松尾・上月・藤澤・廣瀬 魚崎・田村・村田・木戸口		27
職業指導			4							4		4	坂野		41
工業基礎英語Ⅰ			1	1								1	広田		36
工業基礎数学Ⅰ			1	1								1	吉川		36
工業基礎物理Ⅰ			1	1								1	佐近		36
専門教育選択科目小計	—	—	75	3	2	3	2	28	26	11		75	講義 演習・実習		
	—	—	(8)	(2)	(2)	(2)	(2)	(8)	(3)			(17)			
	—	—	83	5	4	5	2	36	29	11		92	計		
専門教育科目小計	43		75	9	6	16	20	30	26	11		118	講義 演習・実習		
	(17)		(8)	(7)	(2)	(8)	(4)	(14)	(9)	(3)	(15)	(62)			
	60		83	16	8	24	24	44	35	14	15	180	計		

卒業に必要な単位数

	卒業に必要な単位数	全学共通教育科目	専門教育科目
必修単位	80 単位	20 単位	60 単位
選択必修単位	14 単位	14 単位	0 単位
選択単位	36 単位以上	8 単位以上*	28 単位以上**
計	130 単位以上	42 単位以上	88 単位以上

* 全学共通教育科目で必修・選択必修として修得した科目（題目）以外から選択する。

** 専門教育科目の選択単位（計 73 単位）から選択する。

備考

- （ ）内は、演習・実習等の単位数または授業時間数を示す。
- 印の科目は卒業資格の単位数には含まれない。
- 全学共通教育の開講科目および単位数は「徳島大学全学共通教育履修の手引き」を参照のこと。
- 他学科あるいは他学部へ属する授業科目から、工学部規則第3条の4第3項の規定に基づいて修得した単位は、10 単位までの範囲において、選択科目の単位数に含めることができる（履修上の注意5. 項を参照のこと）
- 印を付した科目は、夜間主コースの学生も履修できる。

建設工学科（昼間コース）

履修上の注意

1．単位上限制

- 受講登録単位数の上限は年間50単位とする。

2．単位上限制の緩和

- 前年度までのGPAが3.0以上であれば、次年度の履修単位数の制限はなしとする。

3．上級科目の履修

- 留年学生の上級学年の履修については、1．に定める受講登録上限単位数の範囲内で、かつ当該学年の科目履修を優先した上で、担当教官の承認を得たものについてのみ認める。なお、留年学生に対しては「飛び学年」、早期卒業は認めない。

4．再試験制度

- 単位未取得科目については、再受講を基本とする。
- 出席が2/3以上で、受験を担当教官が承認した場合に限り、再試験を受けることができる。

5．自由科目

- 工学部規則第3条の4第3項の規定に基づく、他学科あるいは他学部に属する授業科目は自由科目とよび、10単位までの範囲において、専門選択科目の単位数に含めることができる。ただし、自由科目の履修に関しては、学年担任（1年～3年）あるいは指導教官（4年生）の許可を得て、受講前に教務委員に申し出ること。

6．建設工学科夜間主コース開設科目の履修

- 次の5科目に限り、専門選択科目として履修することができる。環境デザイン、建築概論、建築デザイン論、建築計画、計画設計システム、各2単位。

建設工学科(昼間コース)講義概要

目次

エコシステム工学	27
応用測量学	27
応用地質学	28
海岸工学	28
解析力学	28
河川工学	29
環境計画学	29
環境保全工学	29
岩盤力学	30
基礎環境学	30
基礎工法	30
橋梁設計製図	30
計画情報システム	31
計画数理	31
計画プロジェクト評価	31
景観デザイン	32
建設基礎解析及び演習	32
建設基礎セミナー	32
建設行政法	33
建設工学学外実習	33
建設工学実験実習	33
建設工学セミナー	34
建設工学総論	34
建設材料学	35
建設設計演習	35
建設マネジメント及び工学倫理	35
工業基礎英語 1	36
工業基礎数学 1	36
工業基礎物理 1	36
公共計画学	36
工業物理学実験	36
鋼構造学	37
構造解析学及び演習	37
構造力学 1	37
構造力学 2 及び演習	38
構造力学 3 及び演習	38
交通施設工学	38
コンクリート工学	39
コンクリート構造学	39
資源循環工学	39
地盤工学	40
地盤力学	40
情報処理	40
職業指導	41
振動学	41
水文・水資源工学	41
水理学 1 及び演習	42
水理学 2 及び演習	42
数値解析	42
生産管理	42
生態系工学	43
専門外国語	43
総合建設演習	43
測量学	44
測量学実習	44
卒業研究	44
耐震工学	45
知的所有権概論	45
鉄筋コンクリート力学	45
電磁気学	45

都市・交通計画	46
土質力学 1	46
土質力学 2 及び演習	46
土木・建築史	46
ニュービジネス概論	47
微分方程式 1	47
微分方程式 2	47
福祉工学概論	48
複素関数論	48
プログラミング技法及び演習	48
プロジェクト演習	48
ベクトル解析	49
労務管理	49

エコシステム工学

Ecosystem Engineering 教授・三輪 恵, 近藤 光男, 村上 仁士
 教授・末田 統, 助教授・松尾 繁樹, 上月 康則, 藤澤 正一郎
 助教授・廣瀬 義伸, 魚崎 泰弘, 教授・田村 勝弘, 村田 明広
 助教授・木戸口 善行 2 単位

【授業目的】自然環境と社会環境の共存の重要性、ならびに、それらを目指す工学者に必要な考え方や有効な技術について概説する。

【授業概要】地球温暖化など地球環境問題は、今や人類をはじめとする地球上全ての生命体の存在をも危うくする重大な問題となっている。これは人類の産業活動が拡大を続けた結果、大気成分の変化や廃棄物の総量の増大など、地球の「大きさ」の壁に突き当たり、あらゆることに地球の有限性があらわれてきている現象に他ならない。人類が地球環境を保全しつつ将来世代にまで渡って持続的発展を遂げるためには、この地球の有限性の認識を基本とした自然環境に低負荷な技術体系を発展させる必要がある。本講義では自然環境と社会環境の共存を目指す工学者に必要な考え方や有効な技術について多角的に論じる。

【到達目標】自然環境・社会環境を取り巻く諸問題について科学的・工学的に考察し、理解する。

【授業計画】1. ガイダンス 2. エコシステム工学とは・レポート 3. うるおいある地域づくりと交通システム・レポート 4. 自動車を取り巻くエネルギー環境・レポート 5. エネルギーの高効率利用と大気環境の保全・レポート 6. ひとにやさしいまちづくり・レポート 7. 生態系工学による自然環境修復の取組み・レポート 8. エコシステムな物理・レポート 9. 化学と生物学の環境問題へのかかわり・レポート 10. 環境に優しい超臨界流体の利用・レポート 11. 活断層と地震・レポート 12. 環境負荷計測のための空間情報の活用・レポート 13. 障害者の社会参加を支える工学技術・レポート 14. 予備日 15. 予備日

【成績評価】各テーマごとに出題されるレポート(100%)により評価を行い、その平均点が60%以上あれば合格とする。定期試験は行わない。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の1(1), 1(3)に20%, 1(2), 2(1), 3(1), 3(2)にそれぞれ10%, 1(4)に5%, 6(2)に15%対応する。

【教科書】教科書は特に指定せず、毎回講義用資料が配布される。

【参考書】E. P. オダム著/三島次郎訳「オダム基礎生態学」培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

応用測量学

Applied Surveying 非常勤講師・滝根 丈司, 星 仰 2 単位

【授業目的】建設工事の入り口としての測量の存在意義と土木構造物施工の原点を学ぶとともに、後半の講義では、上空からの地表面調査、環境計測法、主題図の作成法などに基づく測量関連技術を理解し身に付ける。

【授業概要】測量学の知識を基にして、実構造物の計画、設計、施工、管理に不可欠な測量に関する事項として、水準測量から路線計画の縦断測量、基準点から座標の算出、路線計画の中心線設置までの総合的關係、GPS、写真測量とリモートセンシング等について講義し、構造物の計画から施工の指標を修得する。なお、講義計画の9~16は、12月に集中講義で行う。

【受講要件】測量学を受講しておくこと。測量学の基礎知識を用い、測距、測角、水準測量から全体座標の日本平面座標系、日本水準網への関連を要求精度の範囲で求める平均計算を学び路線計画の導入とする。

【履修上の注意】この科目は、卒業後の「測量士補」や「測量士」の資格取得条件となる。実作業ができない教室での話から理解しにくい点もあるうから自主的に建設現場の訪問を心がける。座標平均計算は数学的基礎知識が要るのでこれも自主的学習が必要であろう。

【到達目標】

建設工学科 (昼間コース)

1. 既設基準点から新設点の座標を観測方程式の組み立て、補正値の吟味を学ぶ。
2. 道路の計画過程での測量の役割と、施工のための測量を学ぶ。
3. 上空の航空機や人工衛星を生み出した歴史を学ぶことで、われわれ工学(技術)者はこれからどう立ち向かえばよいだろうかを討議し、技術の使う方向性を考える。
4. 衛星利用による地球表面の測位の概念と取得データ用システムと器機の概要を学び、取得データの保管法や安全性(セキュリティ)を考える。
5. 上空の航空機や衛星から地球を観測するには、どのような波長や機材(センサー)を用いて観測するかを学ぶ。巨視的視点に立った時の観測データの利活用方法を学ぶ。
6. 目に見えないものを見る技術の素晴らしさを如何に人類が努力してきたかと言うことを、情報収集の観点から学び、収集データや技術が社会に如何に還元できるかを考え、討議する。

【授業計画】1. 精密水準測量の楕円補正からその他の補正 2. 既設三角点から多数のBM(基準点)を設置する平均計算(観測方程式) 3. 既設三角点(基準点)から新設基準点を設置する平均計算(観測方程式) 4. 新設基準点の日本平面座標系への組み込み 5. 路線計画、路線測量の概略方法とこれに関連する土木的知識 6. 路線計画や施工するための中心線測量 7. 最近の話題のトータルステーション、GPS利用の測量について 8. 中間試験 9. 写真測量 10. GPSの原理 11. 飛行体とセンサー 12. 地物の反射・放射特性 13. 応用リモートセンシング 14. 距離画像法 15. 予備 16. 最終試験

【成績評価】2/3以上出席し、到達目標の6項目が達成されているかをレポート(50%)と定期試験(50%)で評価し、6項目が各々60%以上を合格とする(出席点は加えない)。

【JABEE合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の1(1),1(2),2(1),2(2),3(1),3(3),3(4),4(1),4(2),6(1),6(2),6(3)がそれぞれ5%,3(2)30%,5(3)10%に対応する。

【教科書】測量学2 応用編 石原 藤次郎・森 忠次著 丸善出版、星 仰著 地形情報処理学 森北出版

【参考書】最小二乗法の理論とその応用 田島 稔著、測量の誤差計算 岡積 満著、測量士・補国家試験問題集と解説(平成9.1011年版) 測量協会、球面三角法とその解法 高橋 巖著、リモートセンシングの画像処理 星 仰著 森北出版

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】滝根丈司(Tel:0884-22-0065, E-mail:xfwgd130@ybb.na.jp)、星仰(Tel:0294-38-5133, E-mail:hoshi@cis.ibaraki.ac.jp)

応用地質学

Engineering Geology

非常勤講師・上野 将司 2単位

【授業目的】人間活動に関係する地質学の問題点を具体的に示すことにより、実際問題に必要なとされる基礎的知識の修得をはかる。成績評価方法:講義に対する理解力の評価は、定期的記述主体の筆記試験によるが、講義への出席状況も加味して総合的に行う。

【授業概要】地質の諸現象と基礎知識、工学的に見た地質分類、建設・環境・防災と地質のかかわり等について講義する。野外での地質の分布や構造、ダム・トンネル・橋梁等の建設と地質の関係、地すべり・崩壊・土石流の災害実態等の理解を深めるために、スライドやOHPを主体に視覚的な解説を加える。

【受講要件】なし。

【履修上の注意】地質学は野外科学であり、野外での観察力が必要とされる。これを補う目的で、講義の後に関係するスライド映写を行う。野外現象から何を読みとるか訓練の場であり、随時質問して理解度の確認をするので講義には集中して望むこと。

【到達目標】

1. 地震、火山活動、脆弱な地質など世界的にも特異な日本列島の置かれた環境について理解する。
2. 地質学の基本原理や学術用語などに関する基礎知識について理解する。
3. 簡単な地質図に示される地質構造について理解する。
4. 土砂災害、地盤沈下、液状化等の工学的問題と地質の関係についての理解を深める。

【授業計画】1. なぜ応用地質学を学ぶか 2. なぜ応用地質学を学ぶか 3. 地質の諸現象 4. 地質の諸現象 5. 地質調査結果の表現(地質学の図学) 6. 地質調査結果の表現(地質学の図学) 7. 軟弱地盤と岩盤分類 8. 軟弱地盤と岩盤分類 9. 空中写真判読(地形の立体視) 10. 空中写真判読(地形の立体視) 11. 斜面災害と対策 12. 斜面災害と対策 13. 地質調査法 14. 地質調査法 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】定期試験と平常点(講義への参加状況、演習・レポート)で評価する。到達目標各々60%以上を合格とする。

【JABEE合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標1.(1)10%;目標1.(4)20%;目標3.(3)15%;目標3.(4)10%;目標4.(1)10%;目標6.(1)10%;目標6.(2)15%;目標6.(3)10%、にそれぞれ対応している。

【教科書】羽田忍著「土地地質学入門」築地書館

【参考書】持田豊「青函トンネルから英仏海峡トンネルへ」中公新書、松田時彦著「活断層」岩波新書、小島圭二著「自然災害を読む」岩波書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】上野(Tel:048-667-9396, Email:ueno-shouji@oyonet.oyo.co.jp)

【備考】成績評価に対する平常点と定期試験との割合は1:9とする。

海岸工学

Coastal Engineering

助教授・中野 晋 2単位

【授業目的】沿岸部の災害や環境問題の現状を理解し、これらの問題に対応するために必要な流体物理現象の基礎事項について習得させる。

【授業概要】周囲を海で囲まれたわが国では常に津波や高潮などの沿岸災害の脅威にさらされている。一方、沿岸海域の開発や地球温暖化の進展は沿岸環境に重大な影響を与えている。このため、沿岸防災と環境保全の両立は21世紀の重要な課題とされている。この講義では沿岸部における諸問題を紹介した後、この問題に対応するために必要な流体物理現象について演習を交えて講義する。

【受講要件】水理学2及び演習を習得しておくことが望ましい。

【履修上の注意】毎講義の最後10分程度を用いて、150字程度で講義内容のポイントや講義に対する意見を記述させる。

【到達目標】

1. 沿岸災害の実態について理解する。
2. 沿岸環境問題の実態について理解する。
3. 微小振幅波理論に基づいて波の変形が算定できる。
4. 沿岸部での砂の移動と海浜変形の考え方を理解する。

【授業計画】1. 発生が予測される南海地震・津波について 2. わが国の高潮災害について 3. 沿岸の環境問題と行政との関わり 4. 地球の温暖化と沿岸環境問題、レポート課題 5. 海の波の基礎的性質-波長、波速、水粒子速度- 6. 海の波の基礎的性質-波による質量輸送、波のエネルギー- 7. 波浪の統計的性質とスペクトル 8. 風波の発生と波浪推算法 9. 波の変形-浅水変形、屈折変形- 10. 波の変形-回折変形、反射、砕波- 11. 中間テスト(波の変形計算について) 12. 海浜形状と海浜の底質 13. 海岸近くの流れ 14. 波と流れによる底質の移動、漂砂の方向 15. 構造物と海浜変形 16. 定期試験(漂砂について)

【成績評価】講義の2/3以上の出席を必要とする。目標1と2についてはレポート課題を課し、これにより評価する。目標3と4については各目標に対する講義終了時に試験を行い、これで評価する。レポート、各テストそれぞれに60%以上の評価を得た時に合格とし、レポートと2回のテストの評点を1:2として100点満点に換算する。

【JABEE合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科教育目標の1(1)を5%,1(2)を5%,3(3)を20%,3(4)を20%,3(5)を10%,3(6)を10%,6(1)を10%,6(2)を10%6(3)を10%に対応する。

【教科書】合田良実著『海岸・港湾』2訂版、彰国社

【参考書】特になし

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】中野(A棟310, 656-7330, nakano@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし

解析力学

Mechanics

助教授・道廣 嘉隆、助手・川崎 祐 2単位

【授業目的】解析力学は力学系専門科目の基礎となるものである。基礎物理学で履修したニュートン力学につなげて、解析力学の基礎を講義する。

【授業概要】講義計画に従い、解析力学の基本となるラグランジュの運動方程式やハミルトンの原理について講義し、これらがニュートンの運動方程式から導出されることを述べる。

【受講要件】基礎物理学の力学を履修しているものとする。微分積分の基礎知識を習得していることが望ましい。

【到達目標】

建設工学科(昼間コース)

1. ラグランジュの運動方程式を理解する。
2. ハミルトンの原理を理解する。
3. 簡単な系に応用する。

【授業計画】1. 一般化座標 2. ラグランジュの方程式(1) 3. ラグランジュの方程式(2) 4. ラグランジュの方程式(3) 5. まとめ(1) 6. ハミルトンの原理 7. 最小作用の原理 8. 一般化運動量と循環座標 9. ポアソンの括弧式 10. 正準変換 11. まとめ(2) 12. 微小振動(1) 13. 微小振動(2) 14. 微小振動(3) 15. まとめ(3) 16. 期末試験

【成績評価】定期試験 60%, 講義への取り組み状況(出席状況, レポート等)40%として評価し, 総合で60%以上を合格とする

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の2(1)に15%, 2(2)に5%, 3(1)に80%対応する。

【教科書】小出昭一郎著「解析力学」岩波書店

【参考書】原島 鮮著「力学」裳華房, 近藤 淳著「力学」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】川崎(A棟217, 656-9878, yu@pm.tokushima-u.ac.jp)

河川工学

River Engineering 教授・岡部 健士, 助教授・竹林 洋史 2 単位

【授業目的】安全で快適な川づくりに不可欠な要件として, まず, 河川水害と土砂災害の現状を整理したのち, 洪水流追跡, 流砂量計算, 河床変動の基礎理論とその応用方法を講義し, レポート出題, 小テストも適宜実施して, 河川計画の合理化に必要な基礎知識を習得させる。

【授業概要】まず, 河川に関わる水災害と土砂災害の実体を紹介したのち, それらを抑止, 軽減するための河川計画の概要を解説する。ついで, 河川洪水流については, 不定流の基礎式から出発して, 洪水波の伝播特性の解析理論と数値計算法を講述する。土砂については, 掃流砂, 浮遊砂の運動論を述べたあと, 河床変動の数値計算法の基礎と応用を解説するとともに, 土石流の概要にも触れる。

【受講要件】特には指定しない。

【履修上の注意】「水理学Ⅰ及演習」と「水理学Ⅱ及演習」を履修済みであることを前提に講義する。

【到達目標】

1. 河川事業の意義と目的を理解する。
2. 洪水流の基本的な性質とその解析方法を理解する。
3. 土砂輸送量の特性とそれに伴う河床変動の解析法を理解する。

【授業計画】1. わが国の河川と水害 2. わが国の河川と水害 3. 河川計画と河川構造物 4. 河川計画と河川構造物・レポート 5. 河川不定流とその解法 6. 河川不定流とその解法 7. 河川不定流とその解法・小テスト 8. 河川の土砂災害と対策 9. 河川の土砂災害と対策 10. 流砂の水理学入門 11. 河床砂礫の移動限界 12. 掃流砂の理論 13. 掃流砂の理論 14. 浮遊砂の理論・小テスト 15. 河床変動の解析法 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の各項目を講義への取組状況(30%)ならびに適宜に行う小テストおよび定期試験の成績(70%)で評価し, 各々60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の1(1)と1(2)にそれぞれ5%, 目標2(2), 2(3)および2(4)にそれぞれ10%, 30%および30%, 目標6(1)および6(2)にそれぞれ10%の重みで対応する。

【教科書】主に担当者が作成した講義資料を使用するが, 単元3および4では, 室田明編著「河川工学」(技報堂出版)を使用する。

【参考書】椿東一郎著「水理学Ⅱ」(森北出版), 芦田和男ほか著「河川の土砂災害と対策」(森北出版)

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】岡部(A棟309, 656-7329, okabetak@ce.tokushima-u.ac.jp), 教授

【備考】特になし。

環境計画学

Environmental Design

助教授・上月 康則, 教授・村上 仁士 2 単位

【授業目的】持続可能な社会の形成を目標とした環境計画の構造と手法について理解し, 各人がその立案に参加できる能力, さらに環境基本法の理念に沿った技術の活用方法を考える能力を習得する。

【授業概要】環境基本法, 環境計画の策定に至る歴史的経緯を講義する。参加, 共生, 循環, 国際的取り組みの4つのキーワードについて具体的な事例を挙げながら, その目的, 今後の課題を自ら見いだせるよう

に双方向性の講義を行う。最後に上位の概念である環境倫理について講義する。

【受講要件】基礎環境学の単位を修得していること。資源循環工学, 環境保全工学, 生態系工学の単位を修得していることが望ましい。

【履修上の注意】特になし

【到達目標】

1. 環境基本計画の4つのキーワードの成立の経緯, 目的, 狙い, それに対応する各種法体系を理解することができる
2. 個々が簡単な環境保全プログラムを作成し, 行動することができる

【授業計画】1. 環境問題と施策の変遷 2. 環境基本法と環境基本計画 3. 環境影響評価法(1)(吉野川第十堰可動堰化を巡る問題の概要) 4. 環境影響評価法(2)(ロールプレイング) 5. 環境影響評価法(3)(ロールプレイング) 6. 環境影響評価法(4)(本法の課題と世界の動向について) 7. 地球温暖化(1)(京都議定書を巡る各国の主張に関する発表) 8. 地球温暖化(2)(温暖化メカニズム) 9. 地球温暖化(3)(影響評価) 10. 地球温暖化(4)(途上国問題) 11. 廃棄物(1)(PCM手法による問題の構造化) 12. 廃棄物(2)(問題解決のためのプログラムづくり) 13. 廃棄物(3)(施策と今後の課題) 14. 環境倫理(1) 15. 環境倫理(2) 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の2項目が達成されているかを, 授業への参加度(10%) レポート(40%) テスト(50%)で評価し, 2項目それぞれが60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】「成績評価」と同一である

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の, 1(1)を20%, 1(2)を13%, 1(3)を10%, 2(1)を8%, 2(3)を5%, 3(2)を35%, 3(3)を10%, 3(4)を5%, 3(6)を21%, 5(1)を5%, 5(2)を6%, 5(3)を7%, 6(1)を5%, 6(2)を35%, 6(3)を15%に対応する

【教科書】住友恒・村上仁士・伊藤禎彦「環境工学」理工図書

【参考書】環境庁「環境白書」, 加藤尚武「環境倫理学のすすめ」丸善ライブラリ, 鬼頭秀一「自然保護を問ひなす」ちくま新書, 石弘之「地球環境報告」岩波新書

【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能

【連絡先】村上(総合研究実験棟504, 656-7334, murakami@eco.tokushima-u.ac.jp), 上月(総合研究実験棟702, 656-7335, kozuki@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし

環境保全工学

Environmental Control

教授・澤田 勉, 助教授・鎌田 磨人 2 単位

【授業目的】土木事業に関わる環境問題として, 騒音・振動, および生態系の劣化をとりあげ, その防止・修復技術を考える能力を養成する。

【授業概要】騒音・環境振動の防止, 劣化した生態系の修復を行ってゆくために必要な基本概念の修得と, 具体的な対策を考えるために必要となる基礎知識, 問題の特徴, 計測方法, 各種規制法との関係について講述する。生態系に関しては日本および開発途上国の森林問題や, 日本の様々な生態系における修復技術について説明する。騒音・振動問題については, 騒音・振動の尺度, 影響, 伝播, 環境基準, 規制法などを説明する。

【履修上の注意】原則として関連する講義の終了時に小テストを行うので, 講義中にその内容を理解するように努めること。講義中に私語をしないことと質問をすることを心がける。

【到達目標】

1. 環境振動および騒音に関する基礎知識を修得する。
2. 健全な生態系に修復するために必要な考え方や基礎的な技術を理解する。

【授業計画】1. 環境振動論の概要 2. 振動に関する物理的諸量 3. 振動に関する感覚的諸量 4. 環境振動の表し方 5. 小テスト 6. 騒音の物理的尺度と騒音の伝播・吸収 7. 騒音の尺度と環境基準 8. 中間試験 9. 日本の森林生態系の変化と問題点 10. 開発途上国における森林生態系の変化と問題点 11. ピオトープとは概念 12. ピオトープの現状と問題点 13. 森林生態系の復元 14. 河川生態系の復元 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業時間数の2/3以上出席し, 到達目標の2項目が達成されているかを講義への取組状況と小テスト(40%), 中間試験(30%)及び定期試験(30%)で評価し, 2項目の成績が各々60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の1(1)を10%, 1(2)を15%, 2(1)を8%, 2(3)を7%, 3(1)を10%, 3(2)を10%, 3(4)を10%, 4(1)を3%, 4(2)を2%, 6(1)を17%, 6(3)を8%に対応する。

【教科書】住友恒・村上仁士・伊藤禎彦「環境工学」理工図書

建設工学科 (昼間コース)

【参考書】榑田裕「環境振動工学入門」理工図書、環境庁「環境白書」大蔵省印刷局

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】澤田(A棟307, 656-9132, sawada@ce.tokushima-u.ac.jp)、鎌田(A棟306, 656-9134, kamada@ce.tokushima-u.ac.jp)、三神(A棟308, 656-9193, amikami@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する平常点と試験(中間・定期)の比率は4:6とする。平常点には講義への取組状況及び小テストの成績を含み、試験には中間テストおよび定期試験の成績を含む。

岩盤力学

Rock Mechanics

非常勤講師 2単位

【授業目的】地表あるいは地下の岩盤に構造物を建設する場合の岩盤の力学的取り扱いについて実際の事例を紹介しながら講義し、岩盤構造物の設計に必要な基礎知識を習得させる。

【授業概要】自然に存在する岩盤は不連続面を内在するため、他の工学分野の使用材料に比べて不均質性が高いことを理解させ、岩盤構造物の設計に必要な変形と破壊に関する基礎力の養成を図る。

【履修上の注意】「土質力学」、「構造力学」の履修を前提にして講義を行う。

【授業計画】1. 序論(岩盤力学の応用分野) 2. 地殻と地質に関する基礎知識 3. 岩盤内の初期応力と岩盤調査法 4. 岩盤力学の基礎理論と解析法 5. 岩石の力学特性とその試験法 6. 岩盤の特徴と岩盤不連続面の調査 7. 岩盤の力学試験法と工学的評価法 8. 不連続性岩盤の力学特性と解析法 9. 岩盤の水理学的特性と解析法 10. 岩盤構造物の設計論 11. トンネルの調査・設計・施工・維持管理 12. 地下空洞の調査・設計・施工 13. 大型構造物基礎の調査・設計・施工 14. 岩盤斜面の調査・設計・施工・維持管理 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は定期試験の成績を重視する。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の1(4)、2(1)、3(4)にそれぞれ10%、2(2)に20%、3(2)に25%、3(1)、3(6)、4(1)、4(2)、6(1)にそれぞれ5%対応する。

【教科書】日本材料学会編「ロックメカニクス」技報堂出版

【参考書】日本材料学会編「岩の力学-基礎から応用まで」丸善、西松裕一著「岩盤力学」東京大学出版会、R.E. グッドマン著、大西有三・谷本親伯訳「わかりやすい岩盤力学」鹿島出版会

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

基礎環境学

Fundamental Environmental Study

教授・村上 仁士

助教授・上月 康則 2単位

【授業目的】環境法と国土開発の変遷との関連を通じ、公害から地球環境問題の解決に至る経緯を理解させ、環境破壊を起こさせない技術者となる基礎知識を理解させる。

【授業概要】建設工学における「環境分野」の主体は、上水道、下水道を主体とした衛生工学から、公害(大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音、振動、地盤沈下、悪臭)問題さらに地球環境問題の解決に至った経緯を把握させる。とくに近年の環境保全に関する規範としての環境倫理を理解させ、公共事業の取組に対する環境問題の基本的考え方を身近な例を多用して講述する。

【履修上の注意】講義開始と同時に出席簿を回覧するが、不正があれば減点し、最悪の場合には受講を認めないことがある。

【到達目標】1. 戦後から現在に至る環境観の歴史的変遷、特に国土開発との関係を法の変遷、世界の潮流との関連でとらえ理解させる。

【授業計画】1. 基礎環境学の概要 2. 1950年代:自然災害の時代 3. 1960年代:公害と全国総合開発計画 4. 1970年代:新全総から三全総 5. 1980年代:社会変化と四全総 6. 1980年代:ウォーターフロント開発 7. 1990年代以降:地球環境問題 8. 中間試験 9. 環境倫理、ミティゲーション 10. 環境基本法、環境基本計画 11. 環境影響評価法 12. 21世紀のランドデザイン 13. 地球環境問題各論 14. 地球環境問題各 2 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の1項目が達成されているかを試験(60%)、講義への取組状況(40%)で評価し、目標項目が60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の1(1)を10%、1(2)を7%、1(3)を5%、3(1)を3%、3(2)を20%、3(3)を5%、3(6)を10%、5(2)を5%、6(1)を5%、6(2)を20%、6(3)を10%に対応する。

【教科書】住友恒、村上仁士、伊藤禎彦「環境工学」理工図書

【参考書】加藤尚武「環境倫理学のすすめ」丸善ライブラリ、石弘之「地球環境報告」岩波新書など適宜参考図書、参考文献を紹介

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】村上(総合研究実験棟504, 656-7334, murakami@eco.tokushima-u.ac.jp)

基礎工法

Foundation Engineering

教授・山上 拓男 2単位

【授業目的】今日、日常的に採用されている土木・建築構造物基礎の形式と、それらの施工法(造り方)の大略を知識として身に付けることがこの講義の目的・目標である。要は基礎工法の現況を知ることにある。

【授業概要】この講義は、何か物理(力学)現象や数理解析理論を理解することではなく、構造物基礎の形式とその造り方を知るところに重点が置かれている。それゆえ、パワーポイント、OHPを多用して視覚に訴える講義が中心となる。独学は大変困難であり、受講生にはよく話を聞いてもらいたく、取り分け出席を重視する。

【受講要件】「土質力学1」「土質力学2」「地盤力学」及び「地盤工学」の履修を前提とする。

【到達目標】

1. 基礎工法の分類表を記憶にとどめ、必要に応じいつでも再現できる。
2. 直接基礎、杭基礎およびケーソン基礎に属する各工法の名称と施工手順の大略を知識として身に付け、他者に説明できる。
3. 地盤改良工法の代表的な工法について名称、改良原理、および施工手順の大略を知識として身に付け、他者に説明できる。

【授業計画】1. 基礎工法概論 2. 直接基礎 3. 既製杭工法 4. 場所打コンクリート杭工法(その1) 5. 場所打コンクリート杭工法(その2) 6. 深礎工法 7. オープンケーソン工法 8. ニューマチックケーソン工法 9. 地盤改良工法概論 10. プレローディング工法 11. パーチカルドレン工法 12. サンドコンパクションパイル工法、パイプロフローテーション工法 13. 動圧密工法、深層混合処理工法 14. 土の補強 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】定期試験で評価する。到達目標各々60%以上を合格とする。ただし、出席状況を重視し、如何なる理由にせよ4回以上欠席すると受講資格を失う。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標3.(3)建設工学の専門基礎科目群の一部については、これらを基礎とした先端的な設計書あるいは調査報告書を理解できる程度の知識と応用力を有する25%;目標3.(4)専門応用科目については、分野を絞り込んで、実務問題の処理ができる程度に高度な知識と応用力を持つ15%;目標6.(1)建設技術の発展の歴史について十分な知識を習得している15%;目標6.(2)自然環境の本質と人為作用がそれに及ぼす影響に関する基本的な知識を習得している15%;目標6.(3)現状の建設技術が抱える諸問題について、実例の見聞を通して得た広範な認識を持つ30%、にそれぞれ対応する。

【教科書】吉田巖編著「目でみる基礎と地盤の工学」技報堂出版

【参考書】教科書が充実しているため格別他の書物を参考にする必要はないが、「土木施工法」「基礎工法」などのタイトルを掲げた書物は有用である。なお、補足説明用のプリントを配付し解説する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】山上(A401, Tel:656-7345, E-mail:takuo@ce.tokushima-u.ac.jp)

橋梁設計製図

Design of Bridge Structures

教授・澤田 勉、助教授・長尾 文明

助手・野田 稔、三神 厚、非常勤講師・脇川 弘 1単位

【授業目的】代表的な土木構造物である橋梁の設計、製図及び簡単な模型の製作を行うことにより、構造物の設計の流れを習得するとともに、実践的な土木技術者として必要不可欠な応用力を養成する。

【授業概要】道路橋鋼合桁を対象とした設計及び製図を行うとともに、主桁の簡単な模型を製作する。設計では、床版、主桁、現場継手、ずれ止め、横桁、対傾構、横構などの設計に関する講義を行い、毎回の講義で提出した課題をレポートにまとめて設計書を作成させる。次に、この設計書に基づいて製図及び材料表を作成するとともに、主桁模型を製作し、それらを提出する。

【履修上の注意】構造力学1、構造力学2及び演習、鉄筋コンクリート力学、鋼構造学の履修を前提にして講義を行う。講義計画(1)-(8)で

建設工学科 (昼間コース)

は、設計の内容についての講義を行い、それに基づいて課題を提出するので、毎回の講義には必ず出席すること。

【到達目標】

1. 構造力学の知識を駆使して応力度や変形量を求める方法に習熟する。
2. 与えられた条件下で橋梁を設計し、図面を作成する手順を修得する。
3. 作成した図面をもとに簡単な模型を製作することにより、構造設計の全体的な流れを理解する。

【授業計画】1. 設計条件の解説 2. 床版の設計・レポート 3. 主桁の設計 (その1)・レポート 4. 主桁の設計 (その2)・レポート 5. 主桁の設計 (その3)・レポート 6. 主桁の設計 (その4)・レポート 7. 横桁の設計・レポート 8. 対傾構および横構の設計・レポート 9. 設計書の提出と修正 10. 製図 (その1) 11. 製図 (その2) 12. 製図 (その3) 13. 模型の製作 (その1) 14. 模型の製作 (その2) 15. 模型の製作 (その3) 16. 設計書、製図および模型の提出

【成績評価】到達目標の3項目が達成されているかを、提出された設計計算書(50%)、製図(30%)及び模型(20%)によって評価し、3項目の各々が60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】「成績評価」と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の2(2)10%、3(2)10%、3(3)30%、3(4)30%、3(5)10%、4(1)10%に対応する。

【教科書】菊地洋一・近藤明雄著「橋梁設計例」オーム社

【参考書】高岡宣善著「静定構造力学」共立出版、菊地洋一・近藤明雄著「橋梁工学」オーム社

【連絡先】澤田(A棟307, 656-9132, sawada@ce.tokushima-u.ac.jp)、長尾(A515, 656-9443, fumi@ce.tokushima-u.ac.jp)、野田(A棟514, 656-7323, tarda@ce.tokushima-u.ac.jp)、三神(A棟308, 656-9193, amikami@ce.tokushima-u.ac.jp)、脇川()

計画情報システム

Information System for Infrastructure Planning 教授・山中 英生
助教授・廣瀬 義伸、助手・渡辺 次次郎 2 単位

【授業目的】国土・地域・都市における環境の管理や改善計画、設計においては空間の多様な情報を収集・加工分析・表示する情報システムの利用が不可欠である。もちろん、公共事業としての社会資本の整備における計画立案・設計・効果計測といった分野においてもこれらのシステムの活用は必須である。この科目では、これらの空間情報を有機的かつリアルタイムで分析処理が出来る情報システムが果たしている役割と機能、手法について概説することで、計画設計・計画立案およびそれらの評価に対する技術的素養を養うことを目的としている。

【授業概要】都市・地域計画で用いられている地理情報システム(GIS)、環境デザイン分野で多用されているコンピュータグラフィックス(CG)、リモートセンシングやGPSといった最新の空間情報処理システムについて、それらの技術開発の経緯と動向、機能、利用例について概説する。空間情報処理システムについては、適宜最新の情報についてプレゼンテーションシステムを用いた講義を行うことを中心とするが、CGシミュレーション分野については、具体的課題を与えグループ作業によるコースワークとその発表会を実施することによって内容の理解を深めることを予定している。

【受講要件】都市・交通計画または交通計画(夜間)、都市計画(夜間)を受講していることが望ましい。後期の景観デザイン、計画プロジェクト評価も関連科目として履修を推奨する。

【履修上の注意】授業における体験および年度当初には予測がつかないような最新の技術動向をふんだんに盛り込む予定であるので、出席は欠かせない。

【到達目標】

1. CG プレゼンテーションの基礎技術についての知識の取得。
2. プレゼンテーション技術の取得とチーム作業の実行力取得。
3. GIS 技術動向に関する知識の取得。

【授業計画】1. 空間情報処理システムとは 2. GIS とは何か 3. GIS の仕組みと機能 4. GIS で用いるデータ 5. リモートセンシングとGPS 6. 都市計画分野への応用 7. 演習 8. 景観シミュレーションの基礎 9. 景観シミュレーションの歴史と技術 10. CGシミュレーションの技法 1 11. CGシミュレーションの技法 2 12. CGシミュレーションの技法 3 13. コースワーク 1 14. コースワーク 2 15. コースワーク発表会 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の3項目が達成されているかを授業への参加度(20%)グループ作業と発表の評価(40%)レポート(40%)で評価し、3項目が各々60%以上を合格とする

【JABEE 合格】「成績評価」と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の3(4)を40%、4(3)を20%、5(1)、5(2)を各20%に対応する。

【教科書】榊原和彦編著・都市・公共土木のCGプレゼンテーション、学芸出版

【参考書】講義中において、適宜関連する書籍・文献を提示する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】山中(A棟410, 656-7350, yamanaka@ce.tokushima-u.ac.jp)、廣瀬(総合研究実験棟603, 656-7340, hirose@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価は平常点6、レポート4の比率とする。平常点には講義への取組状況、グループ活動、グループメンバーによる評価を含み、レポートにはグループ発表内容を含む。

計画数理

Planning and Mathematical Principle 助教授・廣瀬 義伸 2 単位

【授業目的】社会資本・土木施設の計画立案および評価に不可欠な、土木計画学の基礎となる理論および手法について、現象分析・予測・推計・といった数理問題との関連性について理解することにより、実際の問題に対する応用力を養成することを目的とする。

【授業概要】教科書に加えて、適宜参考図書や独自に作成したプリントを利用してわかりやすく講述する。必要に応じて小テストやレポートを課し、学生の理解度を確かめながら授業を進める。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】特になし

【到達目標】土木計画学の基礎として不可欠である確率統計学および多変量解析手法といった数学的理論および手法について理解するとともに、問題解決のための応用力を養成することを目標とする。

【授業計画】1. 概説、統計(社会経済分析における統計分析の必要性) 2. 統計(種々の統計量の求め方) 3. 確率(確率の概念、確率密度関数) 4. 確率(正規分布) 5. 確率(二項分布、ポアソン分布、指数分布) 6. 相関係数(相関分析の概念と必要性および相関係数の求め方) 7. 回帰分析(最小二乗法、正規方程式) 8. 回帰分析(単回帰分析) 9. 回帰分析(重回帰分析) 10. 多変量解析(多変量解析の必要性、種類、および分析目的別の使い分け) 11. 多変量解析(判別分析、クラスター分析、因子分析、主成分分析等) 12. 多変量解析(数量化理論I~IV類) 13. 多変量解析の結果の読み方と検定 14. 社会経済現象のモデリングへのアプローチ 15. 種々の多変量解析手法の現実への応用 16. 定期試験

【成績評価】定期試験によって評価する。

【JABEE 合格】「成績評価」と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の3(1),3(2),3(3)のそれぞれが20%、2(1),2(2),4(1),4(2)のそれぞれが10%に対応する。

【教科書】秋山孝正・上田孝行編著よくわかる計画数学 コロナ社

【参考書】吉川和広著土木計画学 森北出版

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】廣瀬(総合研究実験棟603, 656-7340, hirose@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】単に授業に出席していればよいというものではない。もっとも評価したいポイントは、いかに講義の要点を自分自身で咀嚼できているかということに重視したいと考えている。

計画プロジェクト評価

Project Evaluation Methods for Infrastructure Planning
教授・近藤 光男、山中 英生、助教授・廣瀬 義伸、講師・滑川 達
2 単位

【授業目的】土木施設の計画において、事前にその効果・影響を把握し、その望ましさを財政、経済、環境、厚生などの基準から評価する。地域、都市レベルでの具体的な施設整備計画を対象に、プロジェクトを評価する方法について学ぶとともに、具体的な評価について資料収集・分析、報告・発表を行うことで、土木計画における基礎的素養を身につけることを目的とする。

【授業概要】プロジェクト評価に関わる基礎的な手法、事例を学習した上で、地域および都市の2つのテーマについて、具体的なテーマを選んで、プロジェクト評価を自主的に遂行し、その成果を発表する。その中で、評価結果を分析する能力を養う。

【受講要件】都市・交通計画の履修が必要。エクセルを用いた実習を含むのでその基本を習得しておくことが望ましい。

【履修上の注意】計画数理、公共計画学、地域・交通計画の履修を前提とする。

【到達目標】

建設工学科 (昼間コース)

1. 交通計画の基礎的手法, 計画プロジェクトの費用便益分析手法を利用できる能力を身につける.
2. チームで協力して実習を実施する能力, その結果をレポートに整理できる.
3. 説明できるプレゼンテーション能力を身につける.

【授業計画】1. 計画プロジェクトの評価方法 2. 交通需要予測手法 パーソントリップ調査, 4段階推定法 3. 交通需要予測手法 発生集中分析, 分布分析 4. 交通需要予測手法 手段選択分析, 配分計算, 実習 5. 費用便益分析 費用と便益 6. 費用便益分析 便益の計測法 7. 費用便益分析 帰着費用便益 8. 総合課題 T 都市圏の交通プロジェクト策定 9. 総合課題 コースワーク 1 人口フレーム推定 10. 総合課題 コースワーク 2 交通発生集中予測 11. 総合課題 コースワーク 3 交通手段予測 12. 総合課題 コースワーク 4 需要予測結果のプレゼンテーション 13. 総合課題 コースワーク 6 便益計測 14. 総合課題 コースワーク 5 費用便益計算 15. 総合課題 コースワーク 7 プロジェクト評価プレゼンテーション 16. 総合課題 コースワーク 8 プロジェクト評価ワークショップ

【成績評価】到達目標の 3 項目が達成されているかを授業への参加度 (20%) チームのプレゼンテーション (30%) レポートの評価 (50%) で評価し, 3 項目が各々60%以上を合格とする

【JABEE 合格】「成績評価」と同一である.

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 1(1) を 5%, 1(3) を 5%, 2(1) を 10%, 2(2) を 10%, 2(3) を 10%, 3(2) を 10%, 3(3) を 20%, 3(4) を 20%, 3(5) を 20%, 4(1) を 20%, 4(2) を 10%, 4(3) を 10%, 5(1) を 15%, 5(2) を 15%, 5(3) を 20%, に対応する

【教科書】森杉壽芳, 宮城俊彦・都市交通プロジェクトの評価, コロナ社

【参考書】テーマに応じて指示する.

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】山中(A棟410, 656-7350, yamanaka@ce.tokushima-u.ac.jp), 近藤(総合研究実験棟602, 656-7339, kondo@eco.tokushima-u.ac.jp), 廣瀬(総合研究実験棟603, 656-7340, Hirose@eco.tokushima-u.ac.jp), 滑川(A棟412, 656-9877, namerikawa@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】前半の講義に基づいて提示されるグループごとの課題に基づいて, グループ単位での演習を行い, 最終的に演習成果のプレゼンテーションを行うとともに, これらの作業で獲得した知識についての理解度を棟試験を実施する. ただし, 平常の授業および課題への取り組みを評価面においてはもっとも重視する. 成績評価に対する平常点と試験の比率は 6:4 とする. 平常点には講義への出席状況, レポートの提出状況, グループ発表と内容を含み, 試験は最終試験の成績である.

景観デザイン

Landscape Engineering & Design 教授・山中 英生
非常勤講師・澤田 俊明, 助手・三宅 正弘 2 単位

【授業目的】美しく使いやすい土木施設や都市づくりを進めるための基礎的な考え方について概説し, 具体的なワークショップを通じて景観デザインにおける基礎的な考え方, 手法を学ぶことを目的とする.

【授業概要】最初に景観デザインの基礎的手法と事例について講述し, 参加型設計手法であるワークショップ手法について進め方を学んだ上で, 公園や街路のデザインを実習する. それぞれについてグループによる作業と発表を行う.

【履修上の注意】授業における体験が重要なので, 出席は欠かせないこと.

【到達目標】

1. 景観デザインの基礎的知識とデザイン技法を理解する.
2. デザインスキルを取得する.

【授業計画】1. 景観デザインの基礎 2. シビックデザインの考え方 3. 景観デザインの事例 橋梁・道路 4. 景観デザインの事例 河川・公園 5. ワorkshop手法について 6. ワorkshop 1 身近な景観整備 7. ワorkshop 1 身近な景観整備 8. ワorkshop 1 身近な景観整備 9. ワorkshop 1 発表会 10. ワorkshop 2 公園・街路デザイン 11. ワorkshop 2 公園・街路デザイン 12. ワorkshop 2 公園・街路デザイン 13. ワorkshop 2 発表会 14. ワorkshop 2 発表会 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の 2 項目が達成されているかを, 授業への参加度 (20%) レポート (40%) グループ作業と発表内容 (40%) で評価し, 2 項目がそれぞれ 60%以上を合格とする

【JABEE 合格】「成績評価」と同一である.

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 3(4) を 40%, 4(1) を 20%, 5(1) を 20%, 5(2) を 20%に対応する.

【参考書】テーマに応じて指示する.

【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能

【連絡先】三宅(A棟411, 656-7578, miyake@ce.tokushima-u.ac.jp)

建設基礎解析及び演習

Fundamental Analysis and Exercise on Civil Engineering

教授・岡部 健士, 澤田 勉, 橋本 親典, 助教・鈴木 壽 3 単位

【授業目的】建設工学専門科目の大半では, 数学と力学の基礎的知識に基づいて個々の専門分野の理論体系を講述するとともに, その応用力を養うことを目的としている. 本科目は, 大学教育への導入科目と位置づけられ, 高校までにおいて学習した数学と力学の基礎的事項に関する理解度を深めるとともに, 専門分野で取り扱う事項と関連付けた演習を行って, 1 年後期以降に開講される専門科目の履修を容易にする.

【授業概要】学期初頭の講義時間には, 高校で使用している教科書を参考に講義担当者が作成した数学および力学に関する問題集それぞれ No.1~5 および No.1~3 を配布し, 本講義の進め方や成績評価方法などについて説明する. 上記の各 No. は講義内容の単元に相当しており, 各単元は連続した 3 回の講義時間で消化するものとしている. ここで, 第 1, 第 2 回目の講義時間には, その前半に受講生が問題集より選択的に与えられた問題についてテスト形式の解答演習を行ない, 後半には, 担当者が解答演習の対象とした問題を中心に解法解説と解答記述法に関する講義を行う. ついで, 第 3 回目には, 当該単元の全問題を対象にした小テストを行う. さらに, 数学の 5 単元あるいは力学の 3 単元が終了した次の講義時間には, それぞれに関する問題の全体を出題対象にした全般試験を実施する. 以上のようにして合計 8 単元の講義が消化された段階で成績評価を行い, 合否判定と点数決定を行う. ここで不合格となった者については, さらに 2 回の講義時間をかけた補講を行なったのち再度, 数学ならびに力学の全般試験を課し, この成績を参考にした成績評価をやりなおす.

【受講要件】なし

【履修上の注意】本講義では, 最初に, 高校までの学習成果を確認するためのテスト形式の解答演習が課せられ, この結果も成績評価の対象となるので, 受講者は十分な予習を行って講義に臨む必要がある.

【到達目標】

1. 高校までで学習した数学と力学の理論について, その本質を正しく理解している.
2. 数学と力学の応用問題を解く正統な技法と要領を身につけている.
3. 数学と力学に関する論述を適切な文章で表現し, 簡潔に記述することができる.

【授業計画】1. ガイダンス 2. 数学 No.1:代数関数と座標移動・解答演習・小テスト 3. 数学 No.2:三角関数と座標回転・解答演習・小テスト 4. 数学 No.3:ベクトルと複素数・解答演習・小テスト 5. 数学 No.4:微分の基礎と応用・解答演習・小テスト 6. 数学 No.5:積分の基礎と応用・解答演習・小テスト 7. 数学全般試験 8. 力学 No.1:力学の基本量と基本法則・解答演習・小テスト 9. 力学 No.2:ベクトルと微分による運動表現・解答演習・小テスト 10. 力学 No.3:簡単な力学問題・解答演習・小テスト 11. 力学全般試験 12. 予備 13. 成績不振者への補講 (数学) 14. 成績不振者への補講 (力学) 15. 成績不振者対象の再試験 (数学・力学) 16. 予備

【成績評価】到達目標の 3 項目が達成されているかをテスト形式の解答演習, 小テストおよび全般試験で評価し, 数学および力学の双方で 60%以上の成績を収めた場合に合格とする. 成績評価における解答演習, 小テスト, 全般試験のウエイトは, それぞれ 25%, 25%および 50%とし, 出席点は加味しない. なお, 補講受講生については, 再試験で 60%以上の成績を収めた場合に合格とするが, 評点は一律に 60 点とする.

【JABEE 合格】「成績評価」と同一である.

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標には, 2(1) および (2) に 20%, 目標 3(1) に 70%, 目標 5 の (3) に 10%のように対応する.

【教科書】教科書はなく, 担当者が独自に作成した講義資料を使用する.

【参考書】高校で学習した数学と物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岡部(A棟309, 656-7329, okabetak@ce.tokushima-u.ac.jp), 澤田(A棟307, 656-9132, sawada@ce.tokushima-u.ac.jp), 橋本(B312, 656-7321, chika@ce.tokushima-u.ac.jp), 鈴木(A403, 656-7347, suzuki@ce.tokushima-u.ac.jp)

建設基礎セミナー

Fundamental Seminar on Civil Engineering

建設工学科教官 2 単位

【授業目的】教官 1 名と学生数名の少人数セミナー, 建設現場や職場の見学を通じて, 建設工学の社会的使命, 技術者の姿を学ぶ.

【授業概要】少人数セミナーでは建設工学の基礎的知識やトピックスを題材に, 担当教官の指導のもとに自主的な作業や討論, 発表を行う. ま

建設工学科(昼間コース)

た、公共工事の現場を見学する実地見学会や建設工学に關係する職場を訪問して実務に触れるための職場訪問などを実施する

【履修上の注意】特別講義や実地見学会等への出席、レポート作成を欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. 教官の示したテーマに対して、グループで調査や討議できるための基本的な能力を身につける。
2. 建設工学に關する職場や工事現場に触れ、自ら考えたり、質疑に参加できる能力を身につける。
3. 建設工学の実務や最新の話題について理解する。
4. グループ発表を通して、人にわかりやすいプレゼンテーションの方法について学ぶ。

【授業計画】1. 小人数セミナー:教官の示したテーマから一つを選び、数名によるセミナーを行う。1回2時間で前期?後期を通して15回程度(合計30時間)実施する。小人数セミナーで学んだことをグループでまとめて小人数セミナー発表会にてプレゼンテーションを行う。(半日、4時間)2. 実地見学会:公共工事現場等を見学して建設工学の最新工法などを学ぶ。前期に1日(8時間)程度で実施する。3. 職場訪問:グループに分かれて、市内の建設工学分野の職場を訪問し、工事?設計?企画などのトピックスをヒアリングし、建設工学技術の実際を学ぶ。職場訪問の前に訪問先の業務内容に関する資料収集およびヒアリング内容の検討を行う。職場訪問後にヒアリング内容をまとめたレポートを作成する。訪問準備3回(各2時間)、訪問1回(2時間)、合計8時間4. 特別講義:建設工学の実務に關わっている方から実務の実態や最新の話題について学ぶ。前期に3回(各2時間)合計6時間を予定。

【成績評価】授業時間の2/3以上出席したものを対象に評価する。到達目標1と4は小人数セミナー発表会での審査点により評価する。到達目標2および3については実地見学会、職場訪問、特別講義の際に課されたレポートにより評価する。各到達目標に対して60%以上のものを合格とする。また総合評価点は小人数セミナーおよび発表会、実地見学会、職場訪問、特別講義それぞれの評価点に対して、65:10:10:15の重みをつけて評価する。

【JABEE合格】【成績評価】と同一とする。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の1(1)、1(2)、1(3)、2(3)、3(5)、4(1)を各10%、1(4)、2(1)、3(6)、4(2)~5(3)、6(3)を各2.5%、6(4)を17.5%に対応する。

【参考書】小人数セミナーでは教官より参考書等が示されることがある。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】1年生クラス担任

建設行政法

Administration of Public Works

非常勤講師・林 岑生 2単位

【授業目的】土木技術が対象とする社会基盤施設の計画・設計・建設にあたって、社会規範として定められた関係法令を学ぶことによって、適正かつ適法な建設事業の執行ができるよう基礎的な現行建設行政法を講義する。特に現代社会は、大きく技術に依存しているため、法令遵守、技術力の向上等、技術者の倫理の重要性を意識させる。

【授業概要】[1. 総論]・[2. 行政組織]に続いて、[3. 法制]で建設事業に關する現行法令の概要を講義し、[4. 各論 1]~[4. 各論 5]について詳述する。なお、建設行政、建設事業に關する報道や社会的な問題があった場合は、その時は特に解説する。例えば河川行政への住民意見の反映、建設業法、独占禁止法違反、各地の大規模災害発生等々。

【履修上の注意】法律用語や使い慣れない語句が出てくるので、学生の理解を深めるための方途を考えている。現在のところ、最新の資料を掲載した約300ページのテキストを配布する方法をとっている。

【到達目標】

1. 建設事業の遂行に必要な各種法令及び相互の関連性についての基礎的知識の取得を目標とする。
2. 社会資本整備の第一線に立つ土木技術者の法遵守の重要性と自分の技術力を十分発揮する努力の必要性を自覚することを目標とする。

【授業計画】1. 1. 総論-1(1) 法律 2. 1. 総論-2(2) 行政法 3. 2. 行政組織-1 4. 2. 行政組織-2 5. 3. 法制-1(1) 河川法(2) 砂防法(3) 地すべり等防止法(4) 急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律(5) 海岸法(6) 水防法(7) 公有水面埋立法 6. 3. 法制-2(8) 道路行政(9) 道路交通法(10) 日本道路公団法(11) 道路運送法(12) 鉄道事業法(13) 港湾行政(14) 航空行政 7. 3. 法制-3(15) 都市行政(16) 土地地区画整理法(17) 建築基準法(18) 水道行政(19) 下水道法(20) 地域計画行政(21) 公共投資基本計画と五箇年計画 8. 4. 各論-1-1 道路行政(1) 道路と道路の範囲 9. 4. 各論-1-2 道路行政(2) 道路法 10. 4. 各論-2-1 河川行政(1) 河川と河川の範囲 11. 4. 各論-2-2 河川行政(2) 河川行政 12. 4. 各論-3-1 建設業法(1) 当該

法の制定・改正 13. 4. 各論-3-2 建設業法(2) 建設業法 14. 4. 各論-4 独占禁止法とその意義 15. 4. 各論-5 災害復旧 16. 定期試験

【成績評価】成績評価は、2/3以上の出席を条件とし、到達目標の2項目が達成されているかを、試験及び最終レポートによって、1.(50%)、2.(50%)で評価し、2項目が各々60%以上を合格とする(出席点は加えない)。

【JABEE合格】【成績評価】と同一である

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の1(1)を5%、1(2)を5%、1(3)を5%、2(1)を5%、2(2)を5%、3(2)を5%、3(3)を5%、3(4)を5%、3(4)を5%、3(5)を5%、3(6)を30%、4(1)を5%、4(2)を5%、6(1)を5%、6(2)を5%、6(3)を5%、に対応する

【教科書】下記のような書籍があるが、法律は毎年改正され、また最近では社会情勢が急激に変化しているため、教科書として利用できない。従って、これらの書籍や法律の解説書等を参考に、300ページのテキストを作って配布する。(1) 新建設行政実務講座全8巻 第一法規(2) 土木法規へのアプローチ 岡 尚平 著 技報堂出版(3) 建設法規の基礎 岸本 進・松山 孝彦 共著 工学出版(4) 土木行政 石井 一郎 著

【参考書】六法全書をはじめ、建設小六法、道路法令総覧、河川六法、港湾六法、道路法解説、建設業法解説等がある。他に、国土交通省監修の道路ポケットブック、河川ハンドブック、都市計画ハンドブック等がある。これらの参考書は、何れも発行が10月前後で、テキストに新しいデータを記載することが難しい。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】滑川(A棟412, 656-9877, namerikawa@ce.tokushima-u.ac.jp)

建設工学学外実習

Internship in Civil Engineering

教授・岡部 健士 2単位

【授業目的】学生が企業等の業務を実験することで、企業等の仕組みや仕事の流れ、仕事場における人間関係などの理解を深めることにより、これまでの学習の意義を確認するとともに、これから学ぶべき課題や方向を見出すことを目的とする。

【受講要件】なし

【履修上の注意】実習中は、指導者に対して敬意と感謝の念をもち、可能な限り多くのことを吸収するように務めること。

【到達目標】

1. 実習先への勤務を全うできる。
2. 実習内容について理解し、適正に対処できる。
3. 実習内容と経過に関する適切な報告書を作成できる。

【授業計画】1. 事前研修 2. 企業が用意した実習カリキュラムに従って85時間以上の実習を行う。3. 実習終了後、実習レポートを提出し事後報告を行うこと。

【成績評価】到達目標の各項目を受け入れ先からの報告書(70%)ならびに実習生からの報告書(30%)で評価し、各々60%以上を合格とする。

【JABEE合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の1(4)50%、5(3)25%、6(3)25%に対応する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岡部(A棟309, 656-7329, okabetak@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】申し込み方法:受講を希望する学生は、受講申込書及び誓約書を提出すること。実習先の決め方:企業と学生から申し込みに対し、GPA等の成績を基に実習先を決定する。学生は損害賠償責任保険に加入することなど徳島大学インターンシップ実施要領に基いて実習するものとする。

建設工学実験実習

Civil Engineering Laboratory

助教授・成行 義文、長尾 文明

助教授・中野 晋、鈴木 壽、上月 康則、講師・上野 勝利

助教授・上田 隆雄、助手・野田 稔、三神 厚、蒋 景彩

助教授・竹林 洋史、非常勤講師・堀井 克章、助手・渡邊 健

1単位

【授業目的】建設工学における代表的な物性試験法の習得と、構造・水理・土質・コンクリートの各分野における基礎的な物理現象の理解を深め、実際面への応用能力を養うことを目的とする。

【授業概要】1. 材料試験 1) 土質材料:液性限界・塑性限界試験、粒度・土粒子の密度試験、締めめ試験。2) コンクリート関係:骨材の試験、フレッシュコンクリートの試験、硬化コンクリートの試験 2. 現象把握実験 1) 構造実験:梁・門型ラーメンの曲げ挙動、トラス構造物の部材力、梁の振動。2) 水理実験:トリチェリの定理、粗面開水路、波の基本諸量、水質分析。3) 土質実験(土の力学的性質の実験):土の一軸圧

建設工学科 (昼間コース)

縮、土の一面せん断、土の圧密、4) コンクリート実験:鉄筋の諸特性、鉄筋コンクリート梁ならびにプレストレストコンクリート梁の作成と曲げ挙動

【履修上の注意】原則として、遅刻・欠席・レポート未提出は認められない。

【到達目標】

1. 実験を自主的に遂行し、結果を分析・考察してレポートにまとめる能力を身につける。
2. 建設工学における代表的な物性試験法を習得する。
3. 建設工学に関係する原理・法則や物理的現象を体験し、各講義で修得した知識の理解を深める。

【授業計画】1. ガイダンス・班分け 2. 材料実験 1 3. 材料実験 2 4. 材料実験 3 5. 材料実験 4 6. 材料実験 5 7. 材料実験 6 8. 材料実験総括 9. 現象把握実験 1 10. 現象把握実験 2 11. 現象把握実験 3 12. 現象把握実験 4 13. 現象把握実験 5 14. 現象把握実験 6 15. 現象把握実験総括 16. 予備

【成績評価】班および個人のレポートおよび実験への参加状況から、到達目標の各項目が達成されているかを総合的に評価し、総合評価 100 点満点で 60 点以上あれば合格とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 3(4)20%, 3(5)20%, 4(1)20%, 4(2)10%, 4(3)10%, 5(3)20%に対応する。

【教科書】構造部門および水理部門:実験要領等をまとめたプリントを事前に配布、土質部門:地盤工学会編『土質試験-基本と手引き-』、コンクリート部門:日本材料学会編『新建設材料実験』

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】上田(A棟502, 656-2153, ueda@ce.tokushima-u.ac.jp)、鈴木(A403, 656-7347, suzuki@ce.tokushima-u.ac.jp)、野田(A棟514, 656-7323, tarda@ce.tokushima-u.ac.jp)、竹林(A棟311, 656-7331, takeh@ce.tokushima-u.ac.jp)

建設工学セミナー

Seminar on Civil Engineering

教授・橋本 親典、非常勤講師 1 単位

【授業目的】土木・建設の各分野における最先端の業務について、実際に現場で仕事をしている方々を非常勤講師として招きセミナーを行い、これらの講義内容を話題のテーマとして、意見発表、質疑、討論を行いながら授業を進める。

【授業概要】建設工学分野から広く講師を招いており、各回毎にテーマが設定されるが、いずれも最先端で業務に携わる方々の講演で、建設工学の分野の現状や今後の動向、また過去の問題点等を先輩の視点でお話いただく。1.5 時間の講演を聴いた後、6~8 のグループに分け、各自が講演に対する自分の意見、疑問点、質問点などをメモにする。これらをグループ内でまとめグループの代表が発表し、講演者と討論を行い、これに他の学生も加わる。

【受講要件】1 年前・後期開講の選択科目 2 単位の「建設基礎セミナー」を受講しておくことが望ましい。

【履修上の注意】講師の先生方の多くは徳島大学工学部の卒業生である。できるだけ積極的に議論に参加し、各自の意見も発表するように努力が必要である。またレポートの作成にあたっては資料等の収集や分析を積極的に行うこと。以下の講義計画は、昨年度のものであり今年度はテーマが変更になる場合もあるので注意すること。() 内の教官名は非常勤講師の連絡担当であり実際に講義はしない。

【到達目標】公務員および公益法人に所属する建設技術者、民間建設会社に所属する建設技術者、および設計・計画コンサルタント会社に所属する建設技術者が関わる最先端の建設技術の現状と問題点について理解する。

【授業計画】1. 建設工学セミナーガイダンス (学科長担当) 2. 橋梁技術者の現状と将来展望 (宇都宮教授担当) 3. 土木構造物の設計について (平尾教授担当) 4. 土木と河川環境 (端野教授担当) 5. 最近の建設業界を取り巻く諸問題 (岡部教授担当) 6. 建設産業におけるコンサルタントの役割 (山上教授担当) 7. 海外事業とコンサルタント (望月教授担当) 8. IT 社会のプラットフォーム (近藤教授担当) 9. 環境デザインと土木技術者の役割 (山中教授担当) 10. 日本の港湾と空港 (水口教授担当) 11. 徳島県の高速度道路 (橋本教授担当) 12. 四国沿岸の津波危険度 (村上教授担当) 13. 吉野川とその架橋まで (澤田教授担当) 14. 予備日 15. 予備日 16. 予備日

【成績評価】授業時間数の 2/3 以上出席し、到達目標が達成されているかを、毎週の講義の内容や討論内容も含めてレポートを提出し、60%以上を合格とする (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一とする。

【学習教育目標との関連】建設工学科学習・教育目標達成度一覧表の目標の 1(1) を 20%, 1(2) を 20%, 1(3) を 20%, 1(4) を 20%, 6(1) を 10%および 6(2) を 10%に対応する。

【教科書】授業毎に資料やスライド、OHP で説明されるので、各自は講演中にノートを必ず取るようにする。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】橋本(B312, 656-7321, chika@ce.tokushima-u.ac.jp)

建設工学総論

Overview of Civil Engineering 教授・水口 裕之、宇都宮 英彦
教授・平尾 潔、橋本 親典、端野 道夫、岡部 健士、山上 拓男
教授・澤田 勉、望月 秋利、山中 英生、近藤 光男、村上 仁士
2 単位

【授業目的】建設工学とは何か?何を扱う工学なのか?これらの概要について、可能な限り具体的な事例を紹介しながら分かりやすく説明する。建設工学という学問体系の全体を把握し、その意義と課題を理解することによって建設技術が果たすべき役割や建設技術者の使命・倫理観を認識するとともに、建設工学への関心を高めることを目的とする。

【授業概要】建設工学の主要分野である構造工学、水工学、地盤工学、計画学、材料学及び環境工学並びに建設技術者の役割について、それぞれ 2 回づつ授業計画に示すテーマと内容で講義する。

【履修上の注意】授業には毎回出席することが必須であり、授業の内容を理解するには、予習・復習など自分で調べることが不可欠です。また、単位を修得できなかった場合は、次年度に再履修することが必要です。

【到達目標】

1. 建設工学とはどのような事柄を対象とする工学かを理解し、それを他の人に説明できる。
2. 建設工学が果たすべき役割とその意義を理解し、それを他の人に説明できる。
3. 建設技術者として必要な素養が何であるかを認識し、それを他の人に説明できる。

【授業計画】1. ガイダンス:建設工学総論の開講目的、授業形式、到達目標、評価方法等について説明する。2. 建設技術者の役割と建設工学 (1):建設事業の概要を紹介し、建設技術者として必要な素養について紹介する。3. 建設技術者の役割と建設工学 (2):建設技術者として必要な使命、倫理について紹介する。4. 建設と構造物 (1,2):古代から現代に至る構造工学の発展過程と歴史的背景等について概観する。また、橋を例とし、その力学の基礎、技術史・文化史、景観設計、事故例とそれから学んだ教訓などについて概説する。5. 水と人々の暮らし (1,2):水を治め、利用し、水環境を保全することは地域社会の成立の前提であることを事例を紹介しながら説明する。地球上の水循環、日本の豪雨と洪水の特徴、治水の歴史などについても述べる。6. 土のななし (1,2):建設材料としての土が社会基盤施設 (土木施設) のどのような箇所に、どのような形で活用されているかについて、その力学的・社会的・経済的特性を踏まえながら紹介する。7. 建設における計画と交通 (1,2):人類は何のためにどのような社会基盤施設を造ってきたかを考える。世界における土木計画の例を紹介し、環境に配慮した都市計画を進める際の課題点、特に交通の重要性を解説する。8. 材料と構造物 (1,2):材料が社会基盤施設を造るときに役割を、力学的、社会的、経済的な特性や環境との関連で説明する。また、材料面から社会基盤施設における生物との共生、環境負荷の低減、景観などの重要性を述べる。9. 環境と建設 (1,2):「環境創造」という視点から、自然との共生や社会基盤整備のあり方を考える。また、地震による環境破壊とその影響について紹介する。10. 予備日

【成績評価】各到達目標に応じた課題に対するレポートの内容及び授業への参加状況を評価し、各到達目標に対して 60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 1(1)25%, 1(2)15%, 1(3)5%, 2(1)10%, 2(3)10%, 3(2)10%, 3(5)5%, 5(2)10%, 6(2)10%

【教科書】教科書は使用せず、各週の授業はパワーポイントや OHP を用いるが、テーマによっては参考資料のプリントなどが配布される。また、参考書等は各分野ごとに紹介する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】水口のオフィスアワーは前月曜日 10時30分から 12時00分、研究室は工学部 A501 室、Tel.088-656-7349、E-mail:mizuguch@ce.tokushima-u.ac.jp です。その他の教員については、教員一覧表に示されています。

【備考】質問等は口頭はもちろんメールでも受けています。また、担当者によっては、メールによるレポートも受け付けています。

建設材料学

Materials for Construction

教授・水口 裕之 2 単位

【授業目的】 必要の性能をもった建設構造物を建造したり、維持管理するために必要なコンクリートを除く各種建設材料の種類とその特性を学習し、構造形式、施工法と関連させた適切な材料の選定法、使用方法を学習する。

【授業概要】 新設および維持管理における建設材料を適切に選択し、特性に応じた使用法を理解するために、建設材料に要求される性能を説明し、木材、土石、ブロック材料、アスファルト混合物、金属材料、高分子材料などについてその性能、使用上の注意点を講述し、建設材料に関する基礎知識とその応用力の養成を図る。また、循環型社会における建設材料としてあり方を紹介する。

【受講要件】 基礎物理学及び基礎化学を受講しておくこと。

【履修上の注意】 講義内容のまとめりにレポートあるいは小テストを行うので、レポート課題に関する調査や検討、毎回の授業に対する復習を行うこと。

【到達目標】

1. 建設材料に要求される性能を理解し、この要求性能と主な建設材料とを関連づけて説明できる。
2. 建設材料の物理的性質、化学的性質の種類とその内容を理解し、それらの性質の表し方を説明できる。
3. 木材、土石、ブロック材料、アスファルト混合物、金属材料、高分子材料の種類と主要な性質について理解し、建設工事に用いる場合にその特性に応じた選択理由と注意点を説明できる。
4. 循環型社会における建設材料としてあり方を説明できる。

【授業計画】 1. 建設材料の役割と分類、土、レポート (1) 2. 木材 (1) 3. 木材 (2) 4. 石材と骨材 (1)、小テスト (1) 5. 石材と骨材 (2) 6. ブロック材料、レポート (3) 7. アスファルト混合物 (1) 8. アスファルト混合物 (2)、レポート (4) 9. 金属材料 (1)、小テスト (3) 10. 金属材料 (2) 11. 高分子材料 (1) 12. 高分子材料 (2) 13. 循環型社会における建設材料のあり方 (1) 14. 循環型社会における建設材料のあり方 (2)、レポート (5) 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】 到達目標の 4 項目がそれぞれ達成されているかを試験 (小テストを含む)(70%) と、各課題に対するレポート内容及び授業への参加状況 (30%) とで評価し、それぞれの到達目標に対して 60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】 【成績評価】 と同一である。

【学習教育目標との関連】 本学科の教育目標の 3(2)20%,3(3)50%,1(1),1(2),2(2),5(2),6(1),6(2) が各 5%。

【教科書】 石井一郎、座親勝喜、古木守靖、石田哲朗、石井礼次、若海宗承著「土木材料」技術書院

【参考書】 岡田清、明石外世樹、小柳洽著「新編土木材料学」国民科学社、樋口芳朗、辻幸和、辻正哲著「建設材料学 (第 5 版)」技法堂出版、西林新蔵編「建設構造材料」朝倉書店

【対象学生】 他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】 水口、A501、Tel.088-656-7349、E-mail:mizuguch@ce.tokushima-u.ac.jp

【備考】 レポート内容の評価には、到達目標に対する達成度を用いるので、内容を十分吟味すること。

建設設計演習

Civil Engineering Design and Exercise

教授・岡部 健士

助教授・鈴木 壽、講師・上野 勝利、助教授・上田 隆雄
助手・蔭 景彩 1 単位

【授業目的】 実践的な土木技術者として必要不可欠な設計製図の知識・技能・応用力を各分野の専門的な内容も含めて習得する。

【授業概要】 水理部門:水理学の講義で学習した内容の実践として、河川不等流計算を試みる。この部門の課題の選択者に対して、個々に異なる流量と河川幾何条件を与えて、河川堤防高さを決定する際の基本となる計画高水水位を算定させる。土質部門:アースダム の定常浸透流下の流線網を描き、有効応力の立場から Bishop 法による堤体の安定解析を行い、臨界すべり面及び最小安全率を求める。コンクリート部門:単純支持の鉄筋コンクリート T 形ばりの設計を行う。

【受講要件】 (水理部門):水理学 1 及演習ならびに水理学 2 及演習の単位を取得済みであること。(土質部門):土質力学 1、土質力学 2、地盤力学及び地盤工学の修得を前提とする。(コンクリート部門):鉄筋コンクリート力学の修得を受講要件とする。

【履修上の注意】 第 1 週目のガイダンスに必ず出席する。出席できないものは、事前に連絡すること。

【到達目標】

1. (水理部門): 与えられた河道の水文ならびに幾何条件に応じて、非線形方程式である 1 次元不等流の基礎式を系統的に数値解析するプログラム (Fortran など) を作成して実行できる。また、形式、内容、文章の記述方法が実務レベルに達した設計書を作成することができる。
2. (土質部門): 地盤に係る実務レベルの問題解決能力を養う。
3. (コンクリート部門): 鉄筋コンクリート力学で学んだ知識をもとに、与えられた条件下で RC はりを設計製図する。

【授業計画】 1. 3 部門の設計演習分野から 2 分野を選択する。第 1 週に、ガイダンスおよび分野の選択を行うので、遅刻・欠席することなく必ず出席すること。詳細については、第 1 週開始前に掲示板にて指示する。

【成績評価】 選択した分野の到達目標が達成されているかをレポートによる評価を行い、到達目標の 60%以上あれば合格とする。

【JABEE 合格】 選択した分野の到達目標が達成されているかをレポートによる評価を行い、到達目標の 60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】 本学科の教育目標 2(自主的な学習意欲や学習能力がある)15%、3(既存の建設技術に関して適正な知識を有し、実務問題に正しく適用できる)50%、4(建設事業に関わる諸問題の解決策を講じたり、新たな事業を提案、計画、実施することができる)15%及び 5(建設事業に関わる社会的問題や技術的課題について、口頭並びに文書で効果的に説明・討議できる)20%、にそれぞれ対応する。

【教科書】 原則として、各課題ごとに資料が配付される。

【連絡先】 岡部(A棟309, 656-7329, okabetak@ce.tokushima-u.ac.jp), 鈴木(A403, 656-7347, suzuki@ce.tokushima-u.ac.jp), 上田(A棟502, 656-2153, ueda@ce.tokushima-u.ac.jp), 上野(A棟406, 656-7342, ueno@ce.tokushima-u.ac.jp), 蔭(A402, 656-7346, jiang@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】 選択した 2 部門ともに合格点 (60 点以上) を満たし、その平均点を総合点として評点とする。

建設マネジメント及び工学倫理

Construction Business Management and Engineering Ethics

講師・滑川 達、非常勤講師・山崎 元也 2 単位

【授業目的】 建設事業の企画から竣工後の維持管理に至る一連のライフサイクルの流れを理解するとともに、それらをマネージしていくためのソフト技術に関する基礎的能力を身につける。また、建設事業に携わる人々とその役割に関する概説を前提に、建設技術者としての倫理観を事例や討議を通して自覚・認識する。

【授業概要】 本講は、次の 4 つの柱によって構成される。(1) 建設マネジメント概論 (1~4 週) では、建設事業を推進させる一連のプロセスを概観するとともに、関連する各種の事業実施方式や契約制度について講述する。(2) 実際の道路事業マネジメント (5~7 週) では、日本の高速自動車道及び海外の高速道路の事例を通じて、道路事業のライフサイクルを概説し、今後の道路事業マネジメントと情報技術について講義する。(3) 工程計画・管理手法 (8~12 週) では、施工マネジメント業務の中核的業務として位置づけられる工程マネジメントに適用されている科学的手法について講述する。特に、PERT 系ネットワーク手法を中心に、工程ネットワークの作成方法やそれに続くスケジュール計算方法について解説する。(4) 工学倫理 (13~14 週) では、建設技術者として必要な倫理について討議・考察する。

【履修上の注意】 関連授業科目として、「建設行政法」、「生産管理」、「労務管理」、「職業指導」の受講を推奨する。

【到達目標】

1. 建設事業推進に際するプロセス、事業実施方式、契約制度の基礎的知識の取得を目標とする。
2. 高速道路事業の企画から維持管理のマネジメント及び関連する情報技術の基礎的知識の取得を目標とする
3. 工程マネジメントのための科学的手法の基礎的知識の取得を目標とする。
4. 建設技術者としての倫理観について、自ら考える経験取得を目標とする。

【授業計画】 1. ガイダンス (1): 建設マネジメントを学ぶ理由 2. 建設事業の進め方 (1): 建設事業のフェーズ 3. 建設事業の進め方 (2): 建設プロジェクトの実施方式 4. 建設事業の進め方 (3): 工事発注に関わる諸方式 5. 高速自動車道のプロジェクトマネジメント (1): 企画から竣工:明石海峡大橋開通道路 (西神自動車道を例として) 6. 高速自動車道のプロジェクトマネジメント (2): 維持管理:東北自動車道・海外事例 (ドイツアウトバーン等) 7. 高速自動車道のプロジェクトマネジメント (3): 今後の道路事業マネジメント (情報技術の利用) 8. 工程計画・管理手法概説 9. PERT 系ネットワーク手法 (1): ネットワークプランニング (プロ

建設工学科 (昼間コース)

ジェクトグラフとアローダイアグラム) 10. PERT 系ネットワーク手法 (1): ネットワークスケジューリング (PERT/TIME) 11. PERT 系ネットワーク手法 (1): ネットワークスケジューリング (3 点見積り PERT 確率 PERT) 12. PERT 系ネットワーク手法 (1): ネットワークスケジューリング (日程短縮) 13. 技術者に求められる倫理 (1): 事例の論議 14. 技術者に求められる倫理 (2): 討論 15. 予備日 16. 試験 (工程計画・管理手法)

【成績評価】到達目標の 4 項目が達成されているかを 1. (30%), 2. (20%), 3. (35%) 4. (15%) で評価し, 4 項目が各々 60% 以上を合格とする.

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である.

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 1(1) を 15%, 1(2) を 15%, 1(3) を 15%, 3(6) を 45%, 6(4)10%, に対応する.

【教科書】講義時にプリントを配布する

【参考書】秋山孝正・上田孝行編著:「すぐわかる計画数学」, コロナ社, 2500 円, 土木施工管理技術研究会編:「ネットワークプランニング基礎編」, 土木施工管理技術研究会, 1600 円, 池田将明著:「建設事業とプロジェクトマネジメント」, 森北出版株式会社, 3200 円, 日本道路協会:「道路構造令の解説と運用」, 丸善, 5400 円, 古田均等:「建設業界のためのデータモデル」, 工学社, 2500 円, 土木学会土木教育委員会倫理教育小委員会編:「土木技術者の倫理 事例分析を中心として」, 丸善, 1200 円

【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能

【連絡先】滑川(A棟412, 656-9877, namerikawa@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する平常点と最終レポート・試験の比率は講義概要に示した 4 つの柱に対応する到達目標それぞれについて 4:6 とする. 平常点は, 講義への取り組み状況として 2/3 以上の出席を条件とし中間の小テスト・レポートの内容から評価する. 最終レポート・試験は, 到達目標 4 項目のうち 1. 2. 4. はそれぞれの最終レポート内容のから, 3. は定期試験の成績から評価する.

工業基礎英語 I

Industrial Basic English (I) 非常勤講師・広田 知子 1 単位

【授業目的】現代社会の国際言語である英語を用いて, 科学技術分野での基礎的な語彙力, 読解力, リスニング力を養うことを目的とする.

【授業概要】科学技術分野で頻出の語彙や表現を増やす. イラスト, 写真などを参考にしながら, 内容理解のための練習問題を通して, 英文を理解する力や, 必要な情報を効率的に掘り出す力を養成する.

【授業計画】1. オリエンテーション 2. HEAT 3. SOUND 4. COMPUTERS 5. (教科書の各章にしたがって進めていくが, 途中で適宜リスニング教材やビデオ教材なども使用する.)

【成績評価】コース最終日に試験を行う.

【教科書】ENJOY SCIENCE: データバンク (1) 『やさしい科学』 David Crystal/John Foster Asahi Press

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】授業の前に予習しておくことが望ましい.

工業基礎数学 I

Industrial Basic Mathematics (I) 非常勤講師・吉川 隆吾 1 単位

【授業目的】工学を学ぶために必要不可欠となる微分・積分の基礎的な内容について理解を図り, さらに基本的な手法や計算技術を確実に習得することを目的とする.

【授業概要】1 変数関数および多変数関数の微分・積分について, 基礎的な内容から解説する. また, 本講義の内容について, より理解を深めるために適宜演習を行う.

【授業計画】1. 微分 1: 極限と連続 2. 微分 2: 微分 3. 微分 3: 導関数の応用 4. 積分 1: 不定積分 5. 積分 2: 定積分 6. 積分 3: 定積分の応用 7. 偏導関数 1: 多変数の関数 8. 偏導関数 2: 偏導関数 9. 偏導関数 3: 全微分 10. 偏導関数 4: Taylor の定理 11. 偏導関数 5: 偏導関数の応用 12. 重複積分 1: 重複積分 13. 重複積分 2: 多重積分の応用

【成績評価】出席状況, レポート, 期末考査等により総合的に評価する.

【教科書】特に指定しない. 適宜, 資料を配布する.

【参考書】矢野健太郎, 石原繁編「微分積分 (改訂版)」, 裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義内容を確実に理解するためにも, 毎回の復習は欠かさずに行い, 次回の講義に望んでもらいたい. 成績評価に対する [講義の出席状況, レポートの提出状況] と [小テストの成績] の割合は 4:6 とする.

工業基礎物理 I

Industrial Basic Physics (I) 非常勤講師・佐近 隆義 1 単位

【授業目的】

【授業概要】力学・波動・電磁気学について, ごく初歩的分野を解説する.

【授業計画】1. 運動と力: 質点及び剛体の力学, ニュートンの運動の法則, 運動量と力積・保存則 2. エネルギーと運動: 仕事, 力学的エネルギー・保存則 3. 波動: 等速円運動, 単振動, 波 4. 電気と磁気: クロウン力, 電場と電圧, オームの法則・キルヒホッフの法則, 磁場・ローレンツ力 5. 試験

【成績評価】講義への参加状況と試験の成績を総合して行う.

【参考書】高等学校で使用する物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義の最終日に試験を実施するので, 毎回の復習を欠かさず行うこと.

公共計画学

Infrastructure Planning 教授・近藤 光男 2 単位

【授業目的】社会基盤施設と社会資本の定義, 社会資本の特徴, 社会資本整備の変遷など, 公共計画の基礎知識を身につけるとともに, 計画の策定過程, 目的と目標, 計画における予測と評価の考え方や手法を理解し, 公共計画の立案に必要な素養や構成力を身につけることを目的とする.

【授業概要】教科書に加え, 関連資料や現実の公共計画の事例を用い, わかりやすく講述する. 必要に応じてレポートを課し, 学生の理解度を確かめながら授業を進める.

【受講要件】特になし.

【履修上の注意】特になし.

【到達目標】現実の社会において社会資本整備に関わる問題点を指摘し, 今後の課題を整理して記述することができるとともに, 課題解決のための計画の枠組みが示せ, 計画に含まれる社会的な予測手法や評価手法について説明することができる.

【授業計画】1. 公共計画学の概説 2. 社会基盤施設と社会資本の定義 3. 社会資本とその特徴 4. 社会資本整備の変遷 5. 計画の策定過程 6. 計画の目的と目標 7. 計画における予測 8. 需要予測手法 9. 社会基盤整備の効果 10. 計画の評価 11. 評価手法 12. 産業連関分析 13. 産費用便益分析 14. 環境アセスメント 15. これからの公共計画 16. 定期試験

【成績評価】授業時間数の 2/3 以上出席し, 到達目標が達成されているかをレポートの内容 (30%) と定期試験の成績 (70%) を総合して行う.

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である.

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 3(2), 4(1), 4(2) をそれぞれ 20%, 1(1), 1(2), 1(3), 3(3) をそれぞれ 10% に対応する.

【教科書】河上省吾:「土木計画学」, 鹿島出版会

【参考書】土木学会:「土木工学ハンドブック」, 技報堂, 青山吉隆:「図説都市地域計画」, 丸善

【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能

【連絡先】近藤光男, 総合研究実験棟, 656-7339, kondo@eco.tokushima-u.ac.jp

【備考】特になし.

工業物理学実験

Laboratory in General Physics 助教授・道廣 嘉隆 講師・岸本 豊 1 単位

【授業目的】物理学の基本概念的なさらなる理解, および実験を行なう際の基本事項の修得を目的として, 基礎的な物理学実験を行なう.

【授業概要】基本測定 (統計処理), 力学 (ボルダの振り子, 角運動量), 物性 (ヤング率, 単剛性率, 表面張力, 粘性係数, 抵抗の温度変化), 電磁気学 (等電位線, 磁気モーメント, 静電容量, 電磁誘導, ダイオード・トランジスタの特性, ホール効果), 熱 (比熱, 熱伝導率, 温度伝導率), 波動 (フレネルの複プリズム, 分光器と回折格子), 原子物理学 (スペクトル, 光電効果, フランク・ヘルツの実験) よりテーマを選択し, 3~4 名ずつの班ごとに実験を行ない, レポートを作成・提出する.

【受講要件】予習により, 実験内容が理解されていることを前提とする.

【履修上の注意】実験レポートを各実験の次の実験時に提出すること. チェック後再提出を指示する場合がある. その際は提出締め切りまでに提出すること. 実験時の安全について受講者は十分に注意すること.

【到達目標】

1. 実験を行なう際の基本事項を理解する.
2. 実験を通して物理現象を理解し, データの解析および考察を行なえるようになる.
3. レポート作成の技法を修得する.

【授業計画】1. オリエンテーション 2. 実験第1回 3. 実験第2回 4. 実験第3回 5. 実験第4回 6. 実験第5回 7. 実験第6回 8. 実験第7回 9. 実験第8回 10. 実験第9回 11. 実験第10回 12. 予備日 13. レポート提出 14. 予備日 15. レポート最終締め切り 16. 予備日
 【成績評価】規定回数以上出席し、レポートを期限内に提出した受講者に対し、レポート(提出状況、内容等)70%、平常点(出席状況等)30%として評価し、総合で60%以上を合格とする。
 【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。
 【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の3(5)、4(1)、4(2)、4(3)、5(3)にそれぞれ20%対応する。
 【教科書】当実験のための教科書「物理学実験」を使用する。
 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
 【連絡先】岸本(A棟215, 656-9851, yutaka@pm.tokushima-u.ac.jp)
 【備考】本講義の受講は、予習により実験内容が理解されている事を前提とする。なお、実験時の安全について受講者各人は十分に注意すること。

鋼構造学

Steel Structures 助教授・成行 義文 2 単位

【授業目的】鋼構造物の設計・製作・施工等に必要の基礎知識を習得させる。
 【授業概要】鋼構造物を構成する鋼材の諸特性ならびにそれらの接合方法について講述するとともに、代表的な鋼構造物である鋼橋の桁(鋼合成)の設計に関する基礎知識について解説する。
 【受講要件】「構造力学1」、「構造力学2及び演習」ならびに「構造力学3及び演習」を受講しておくこと。
 【履修上の注意】レポートの提出期限は厳守のこと。
 【到達目標】
 1. 鋼構造物の特徴ならびにライフサイクルを理解する。
 2. 構造用鋼材の力学的性質ならびに腐食対策に関する基礎知識を習得する。
 3. 構造用鋼材の溶接接合ならびに高力ボルト接合に関する基礎知識を習得する。
 4. 鋼桁および合成桁に関する基礎知識を習得する。
 【授業計画】1. ガイダンス・SI 単位系 2. 鋼構造の変遷と現状 3. 構造物の要件と鋼構造の特徴 4. 鋼構造物のライフサイクル 1/レポート 1-1 5. 鋼構造物のライフサイクル 2/レポート 1-2 6. 小テスト 1/構造用鋼材 7. 鋼材の力学的性質/レポート 2 8. 鋼材の腐食とその対策 9. 設計強度と鋼種の選定 10. 小テスト 2/溶接接合 1 11. 溶接接合 2/レポート 3 12. 高力ボルト接合 13. 小テスト 3/鋼桁の構成/レポート 4 14. 合成桁の原理 15. 小テスト 4
 【成績評価】到達目標 $i(i=1,2,3,4)$ の達成度を、レポート $i(30\%)$ と小テスト $i(70\%)$ で評価し、各到達目標に対してすべて60%以上の成績の場合に合格とする。最終成績はすべての到達目標に対する成績(各100点満点)の平均とする。
 【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。
 【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の1(1)を5%、1(2)を5%、2(1)を5%、2(2)を5%、2(3)を5%、3(2)を10%、3(3)を20%、3(4)を15%、3(5)を10%、4(1)を5%、4(2)を5%、6(1)を5%、6(3)を5%に対応する。
 【教科書】伊藤学著「鋼構造学」コロナ社
 【参考書】菊地洋一・近藤明雅著「橋梁工学」オーム社、菊地洋一・近藤明雅著「橋梁設計例」オーム社、土木学会関西支部編 渡邊英一他著「橋のなんでも小事典(丸木橋から明石大橋まで)」講談社
 【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能
 【連絡先】成行(A510, 656-7325, nariyuki@ce.tokushima-u.ac.jp)
 【備考】必要に応じて適宜関連するプリントを配付し、説明する。出席回数は成績に考慮されない。また、2/3未滿の出席回数場合は、成績評価の対象とはならない。

構造解析学及び演習

Structural Analysis and Exercise 教授・平尾 潔 3 単位

【授業目的】実在する構造物の多くは、力の釣り合い条件式のみでは解けない不静定な構造物である。この講義では、1,2年生で学んできた静定構造物の解析法を援用して、不静定なはり、ラーメン及びトラスを力を未知量として解く方法(応力法)、及び変位を未知量として解く方法(変位法)の解法原理を理解させる。そして、不静定次数の低いはり、ラーメン及びトラスについては、手計算で反力や断面力等が計算できる能力を身に付けさせる。

【授業概要】講義計画に沿って、前半には構造物の支点反力あるいは構成部材の断面力を未知量とした仮想仕事の原理による不静定なはり、ラーメン、トラスなどの解析法(応力法)について講述し、後半には構造物の変位を未知量としたはり、ラーメンのたわみ角法による解析法(変位法)について講述する。そして、これら両解析法に対する理解を深め応用力を養成するために、適宜例題の解説と演習・小テストを行い、レポート(宿題)も課す。

【受講要件】1年後期の「構造力学1」、2年前期の「構造力学2及び演習」および2年後期の「構造力学3及び演習」を受講しておくこと。

【履修上の注意】講義の単元が終わるごとにレポートを課すか、あるいは、小テストを実施するので毎回予習・復習を欠かさないこと。

【到達目標】

1. 力を未知量とした仮想仕事の原理による不静定構造物の解法原理を理解し、低次の不静定はり、ラーメン、トラス等が手計算により解析できる。
2. 変位を未知量としたたわみ角法による不静定構造物の解法原理を理解し、低次の不静定はり及びラーメンが手計算により解析できる。

【授業計画】1. 構造物の不静定次数と安定・不安定・レポート 2. 仮想仕事の原理による解析法 3. 仮想仕事の原理による解析法 4. 不静定はり・ラーメンの解析・レポート 5. 不静定はり・ラーメンの解析・小テスト 6. 不静定トラスの解析・レポート 7. 不静定トラスの解析・小テスト 8. 仮想仕事の原理による解析法の間接法 9. たわみ角法の基本公式(一般の場合) 10. たわみ角法の基本公式(特別の場合) 11. 節点方程式と層方程式・レポート 12. たわみ角法によるはりの解法・小テスト 13. たわみ角法によるラーメンの解法・小テスト 14. たわみ角法と一般的な変位法との関係 15. 予備日(質問の受付など) 16. たわみ角法による解法の期末テスト

【成績評価】授業時間数の2/3以上出席した者を対象として、到達目標の1が達成されているかどうかを中間テストとそれまでの平常点で評価し、到達目標2が達成されているかどうかを期末テストと昼間テストから期末テストまでの平常点で評価する。そして、到達目標1及び2とも60点以上のものを合格とする。その際の平常点は各期間に行う小テストとレポートの点数で評価し(出席点は含めない)、この平常点と中間テストあるいは期末テストの配点比率は25:25とする。また、達成目標1と2の配点比率は50:50とする。

【JABEE 合格】成績評価と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標2の(1)10%、2の(2)10%、3の(1)20%、3の(2)40%、3の(3)20%に対応する。

【教科書】高岡宣善著 白木 渡改訂「不静定構造力学第2版」共立出版
 【参考書】講義中に必要に応じ紹介する。また、補足説明用資料や演習問題等はプリントを配布し、解説する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】平尾(A521, Tel:656-7324, E-mail:cvsteng@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】受講に先立ち「構造力学1」、「構造力学2及び演習」および「構造力学3及び演習」の復習を十分しておくこと。

構造力学1

Structural Mechanics 教授・宇都宮 英彦 2 単位

【授業目的】安全な構造物を設計するための基礎として、力と変形の記述法および両者の関係について学ぶ。この講義は一連の構造力学の導入部であり、特に力の釣合、力の正確な表現(応力)、力と変形の関係を理解して簡単な構造物の変形や応力の解析を行える力をつける。

【授業概要】構造力学の基本事項、すなわち力と変形の定義および剛体に働く力の釣合、フックの法則による力と変形および変形適合条件、応力の正確な表現とモーメントの応力円などについて理解し、演習問題を課して応用力をつける。力の釣合、力の作用と変形、応力の表現の各テーマが終了する毎に合計3回の中間テストを行い、さらに全体について期末テストを行う。毎回の授業に対し、感想と質問を記入した用紙を提出させ、質問に対しては全員を対象にしたQ&Aを作成して次の授業で配布し、出来るだけ疑問を残さないようにしている。

【受講要件】高等学校における物理学、共通教育科目の基礎物理、建設基礎解析等の履修を前提にしている。特に高校物理未修者は夏期休暇中に物理学の自習をすることが望ましい。

【履修上の注意】なし

【到達目標】

1. 力学の基礎に力の釣合があることを理解し、力やモーメントの平衡式を誘導して簡単な構造物の支点反力、部材力、断面力の計算ができる。

建設工学科 (昼間コース)

2. 一軸問題に於けるフックの法則を理解し、ひずみと応力から変形を求めることが出来、また変形適合条件の意味を理解し利用することが出来る。
3. 応力の意味を理解し、モールの応力円が描ける。

【授業計画】1. 構造力学を学ぶ目的、単位系 2. 力の分類と静力学の基本原則 3. 力およびモーメントの釣合い 4. 剛体の釣合い 5. 中間テスト 6. 一軸応力、引張りおよび圧縮応力 7. ひずみ、応力とひずみの関係 8. 軸方向力による部材の変形 9. せん断応力度、許容応力度と安全率、事故の例 10. 中間テスト 11. 一軸応力、二軸応力の厳密な定義 12. 主応力と主軸、モールの応力円 13. モールの応力円とコーシーの公式 14. 中間テスト 15. 一般化されたフックの法則 16. 期末テスト

【成績評価】Q&A10%、3回の各中間テスト90%で評価し、それぞれが60%以上を合格とする。期末試験は基準に満たなかった項目について再度受験する機会とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の2(1),(2)の思考力の涵養と適切な学習計画に対し45%、目標3(1),(2)の基礎科学あるいは専門基礎として必要な知識の習得に対し50%、その他5%としている。

【教科書】高岡宣善、白木渡著「静定構造力学」共立出版

【参考書】クランダル、ダール著、奥村敦史、林郁彦訳「固体の力学入門」コロナ社、S.P.Timoshenko、D.H.Young「Theory of Structures」Kogakusha (International Student Edition)、星谷勝「力学の構造物への応用」鹿島出版会、彦坂照、崎山毅、大塚久哲「詳解構造力学演習」共立出版、その他多数あるので講義中に適宜紹介する。また大学図書館にも相当数用意されているので参考にすること。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】宇都宮(A513, 656-7322, utsuno@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】中間テストおよび授業への参加状況と最終定期試験との比率は6.4

構造力学 2 及び演習

Structural Mechanics and Exercise 2

助教授・長尾 文明
助手・野田 稔 3 単位

【授業目的】荷重に対し主に曲げによって抵抗する基本的な構造物(部材)である静定ばりとねじりを受ける棒部材の力学について理解し、実際にこれらの部材及び構造物の設計等を行うための基礎的能力すなわち部材断面に作用する応力度・変形等が計算できる能力を身に付ける

【授業概要】授業計画に沿って、はりの設計並びに解析(安全性照査)に必要な、はりの支点反力並びに断面力(曲げモーメント、せん断力)、影響線、はりに作用する応力度、弾性曲線(たわみ曲線)の微分方程式並びに弾性荷重法(モールの定理、共役ばり法)によるはりの変形、等を求めるための力学理論について順次講述する。最後に、ねじりを受ける丸棒及び円管(部材)の解析理論について講述する。毎回、授業の最初に前回の内容の理解度を確認するための30分間の小テストを実施する。その後、新たな内容の理論の説明(前半)と2クラスに分けて実施する演習(後半)により、理解度を高めるとともに応用力の養成を図る。

【受講要件】構造力学 1 を受講しておくこと

【履修上の注意】毎回小テストを実施するので、毎回の予習・復習は欠かせず行うこと。

【到達目標】

1. はりの構造を理解し、反力と断面力を計算できる
2. はりの曲げと棒のねじりの理論を理解し、断面に作用する応力度と変形を計算できる

【授業計画】1. ガイダンス、はりの種類と支点反力その1 2. 小テスト・支点反力その2 3. 小テスト・集中荷重を受けるはりの断面力 4. 小テスト・分布荷重・間接荷重を受けるはりの断面力 5. 小テスト・はりの反力の影響線 6. 小テスト・はりの断面力の影響線 7. 小テスト・断面諸量その1 8. 小テスト・断面諸量その2 9. 小テスト・はりの曲げ応力度 10. 小テスト・はりのせん断応力度、主応力度 11. 小テスト・はりの弾性曲線 12. 小テスト・弾性荷重によるはりの変形 13. 小テスト・不静定はりの解法 14. 小テスト・棒のねじり 15. 小テスト 16. 予備日

【成績評価】授業時間数の2/3以上出席し、到達目標の2項目が達成されているかを毎回行う小テスト(100%)で評価し、2項目が各々60%以上を合格とする(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の2(1)13.3%、2(2)10%、3(1)20%、3(2)40%、3(3)16.7%に対応する

【教科書】高岡宣善著(白木渡改定)「静定構造力学」共立出版(「構造力学 1」と同じ)。

【参考書】講義中に必要に応じて紹介する。また、補足説明用資料や演習問題等はプリントを配布し、解説する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】長尾(A515, 656-9443, fumi@ce.tokushima-u.ac.jp)、野田(A棟514, 656-7323, tarda@ce.tokushima-u.ac.jp)

構造力学 3 及び演習

Structural Mechanics and Exercise 3

助教授・成行 義文
助手・野田 稔 3 単位

【授業目的】土木・建築構造物の設計に必要な、柱・トラス構造物等の応力算定法ならびにエネルギー法に基づく静定構造物の弾性変形算定法等の理論を理解させ、演習により実際的な問題に対する応用力を養成する。

【授業概要】はりの力学を取り扱った「構造力学 2 及び演習」の続編として、柱(短柱・長柱)、静定トラスおよび静定ラーメン等の応力解析法、ならびにエネルギー法に基づく静定構造物の弾性変形の算定法について講述する。授業は、原則として下記の【授業計画】に従って進められ、各授業における冒頭の30分で前回の内容に関する小テストを行う。残り150分の前半(約75分)は理論の説明、また後半(約75分)は理解度を高めるとともに応用力を養成するための演習が行われる。

【受講要件】「構造力学 1」ならびに「構造力学 2 及び演習」を受講しておくこと。

【履修上の注意】初回は、ガイダンス終了後、「構造力学 2 及び演習」の理解度確認クイズ(はりの断面力・影響線・曲げ応力度)を実施するので、「構造力学 2 及び演習」の関連部分を予め復習しておくこと。また、毎回の授業に対して予習・復習を必ず行うこと。

【到達目標】

1. 柱(短・長柱)に関する基礎知識を習得し、応力ならびに座屈荷重等の算定ができる。
2. トラスに関する基礎知識を習得し、部材力の算定ができるとともにそれらの影響線を求めることができる。
3. 仮想仕事の原理・カスティリアノの定理・相反作用の定理を理解し、それらを用いて構造物の弾性変形ならびにその影響線等を求めることができる。

【授業計画】1. ガイダンス/確認クイズ(はりの断面力、影響線、曲げ応力度)/短柱の応力度 2. 小テスト1/短柱断面の核 3. 小テスト2/長柱の座屈応力度その1 4. 小テスト3/長柱の座屈応力度その2 5. 小テスト4/トラスの部材力その1 6. 小テスト5/トラスの部材力その2 7. 小テスト6/トラスの影響線その1 8. 小テスト7/トラスの影響線その2 9. 小テスト8/静定ラーメンの曲げモーメント 10. 小テスト9/仕事とひずみエネルギー 11. 小テスト10/仮想仕事の原理 12. 小テスト11/カスティリアノの定理 13. 小テスト12/相反作用の定理 14. 小テスト13/再試1(小テストNo.1~4) 15. 再試2(小テストNo.5~8)/再試3(小テストNo.9~13) 16. 予備日

【成績評価】到達目標1への到達度を小テストNo.1~4および再試No.1で、到達目標2への到達度を小テストNo.5~8および再試No.2で、到達目標3への到達度を小テストNo.9~13および再試No.3で評価し、各到達目標に対する成績がすべて60%以上の場合を合格とする。最終成績は、各到達目標に対する成績(各100点満点)の平均とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】10%は本学科の教育目標2(1)に、10%は同2(2)に、20%は同3(1)に、40%は同3(2)に、20%は同3(3)にそれぞれ対応する。

【教科書】高岡宣善著「静定構造力学」共立出版、高岡宣善著「不静定構造力学」共立出版

【参考書】授業中に必要に応じて紹介する。また、補足説明用資料や演習問題プリントを配布し、解説する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】成行(A510, 656-7325, nariyuki@ce.tokushima-u.ac.jp)、野田(A棟514, 656-7323, tarda@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】確認クイズ、小テストならびに演習時は、2教室に分かれる。出席回数成績は考慮されない。また、2/3未満の出席回数の場合は、最終成績の評価対象とはならない。

交通施設工学

Transport Infrastructure Engineering

教授・望月 秋利
教授・山上 拓男 2 単位

【授業目的】交通と市民生活、経済との係わり合いを考え、道路の機能を理解する。次いで道路の構造とその必要特性の基礎を学ぶ。

建設工学科(昼間コース)

【授業概要】まず道路と生活との関連について考える。次いで道路の構造の基礎、舗装材料とその試験法、舗装の設計の基礎について学ぶ。さらに道路構造物の一つであるトンネルを取り上げ、その概要と力学基礎、掘削工法等について学ぶ。

【履修上の注意】授業を重視しているため、必ず出席すること。また授業中の討論には積極的に参加すること。またレポートの提出を求める。

【到達目標】

1. 道路と市民生活のかかわりについて理解すること。
2. 道路の種類、道路の構造、舗装材料、材料試験等についての基礎知識を持つこと。
3. トンネルの構造、掘削方法についての基礎知識を持つこと。

【授業計画】1. 授業概要、交通と生活 2. 交通に関する基礎的統計 3. 道路の構造 (1):道路の種類 4. 道路の構造 (2):道路横断面の構成 5. 道路の構造 (3):道路の線形 6. 路床と路盤、アスファルト舗装とコンクリート舗装概論 7. 舗装材料と主な試験方法 8. 土の締固めとCBR試験 9. 舗装の設計 (1) 10. 舗装の設計 (2) 11. トンネル工学概論 12. トンネルの力学 13. トンネルの掘削工法概論 14. NATM工法 15. 期末試験 16. 予備日

【成績評価】評価は、演習レポート、期末試験の成績などを総合して行う。演習レポートと期末試験の比率は3:7を原則とする。

【JABEE合格】成績評価と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の1(1), 4(1), 6(4)にそれぞれ5%, 1(3), 2(1), 2(2), 3(5), 6(3)にそれぞれ10%, 3(2)に20%, 3(4)に15%, 対応する。

【教科書】福田正, 松野三朗「道路工学」, 朝倉書店

【参考書】トンネル工学やトンネルの力学をタイトルとした書物

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】成績評価に対する平常点と試験(中間・定期)の比率は3:7とする。平常点には講義への参加姿勢、レポートの成績を含む。

【参考書】岡田・六車編『コンクリート工学ハンドブック』朝倉書店, 日本コンクリート工学協会編『コンクリート便覧』技報堂

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【備考】レポートは提出期限を厳守すること。なお、日程によっては、中間試験に時期が変更する場合がある。

コンクリート構造学

Concrete Structures

助教授・上田 隆雄, 非常勤講師・則武 邦具 2単位

【授業目的】コンクリート構造の応用例として、プレストレストコンクリート構造物の設計・施工方法について講義し、レポートを実施することによりコンクリート構造の理解に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】コンクリートをを用いた種々の構造形式が開発・実用化されているが、その要求性能を満たす構造物をより合理的、経済的につくる場合、それぞれの構造形式あるいは構造物の特質を知っておく必要がある。そこで、鉄筋コンクリートの応用技術としてプレストレストコンクリートの構造形式の基本的な考え方について講義する。

【受講要件】鉄筋コンクリート力学の修得を受講要件とする。

【履修上の注意】講義計画に記載した1.2.は則武が担当し(集中講義), 3.~10.は上田が担当する。

【到達目標】

1. プレストレストコンクリート構造の原理と、設計・施工方法に関する基礎事項を理解する。
2. 鉄筋コンクリート構造の変形計算の基礎を理解する。
3. コンクリート構造物の維持管理の現状を理解するとともに、補修・補強工法の現状とその効果について理解を深める。

【授業計画】1. プレストレストコンクリート構造の力学(概説, 材料の特性, プレストレス力の変化, 曲げに対する挙動と理論, せん断に対する挙動と理論) 2. プレストレストコンクリート構造の設計と施工(概説, 許容応力度法, 限界状態設計法, 各種のプレストレス工法, 構造物の設計, 構造物の施工, 各種構造物) 3. 曲げと軸方向力の相互作用図について(その1) 4. 曲げと軸方向力の相互作用図について(その2) 5. プレストレストコンクリートの原理 6. 鉄筋コンクリート部材のたわみ(その1) 7. 鉄筋コンクリート部材のたわみ(その2) 8. 補修・補強技術の現状(その1) 9. 補修・補強技術の現状(その2) 10. 予備日

【成績評価】レポートおよび講義への参加状況から、到達目標の各項目が達成されているかを総合的に評価し、総合評価100点満点で60点以上あれば合格とする。

【JABEE合格】【成績評価】と同一とする。

【学習教育目標との関連】建設工学科学習・教育目標達成度一覧表の目標の1(1)を10%, (2)を10%, (4)を10%, 3(2)を20%, (3)を10%, (4)を10%, 5(3)を10%, 6(1)を5%, (2)を5%, (3)を10%に対応する。

【教科書】岡村・前田「鉄筋コンクリート工学」市ヶ谷出版

【参考書】横道英雄『コンクリート構造学』技報堂出版, 藤井・小林『プレストレストコンクリート構造学』国民科学社, 土木学会編『(新体系土木工学34)プレストレストコンクリートの力学』, 土木学会編『(新体系土木工学35)プレストレストコンクリート構造物の設計と施工』, 泉・近藤『橋梁工学』コロナ社

【連絡先】上田(A棟502, 656-2153, ueda@ce.tokushima-u.ac.jp)

資源循環工学

Resources Circulatory Engineering

助教授・上月 康則

教授・村上 仁士 2単位

【授業目的】都市-自然環境との間で質的变化を伴う量的循環の視点で、水資源を捉えるための基礎知識を学び、そこでの問題を防止・解決する技術や施策を自ら考える素養を習得させる。

【授業概要】健全な水循環を支える施策や技術を自ら見いだせることができるような双方向性の授業を行う。まず水環境に関する学生の知識を整理し、“曖昧さ”について気づかせる。必要な知識について学生は自ら調べ、発表させる。ビデオ教材などで実例を紹介しながら、個々の知識の関係を理解させ、体系化を図る。

【受講要件】基礎環境学の単位を修得していること。生態系工学を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】授業中の発言やレポートを評価上、重視する。環境問題を循環という視点で考える能力を養うための講義であることを理解して受講するように。

【到達目標】

コンクリート工学

Concrete Technology

教授・橋本 親典 2単位

【授業目的】近年、鉄鋼とともに社会基盤の建設材料として重要な構造材料であるコンクリート技術の進歩発展は目ざましいものがあり、品質向上と多様化が進み、新工法が開発されている。本講義では、良質なコンクリート構造物を造るために、重要なコンクリートの諸性質や施工の要点に関する基礎技術について講義し、レポートを実施して、コンクリート工学に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】総論では、コンクリート工学の歴史的経緯および関連学協会を紹介し、フレッシュコンクリートの性質と硬化コンクリートの性質では、最近の技術の動向を含めて、従来のコンクリート工学の内容について講義する。配合設計、製造、品質管理および施工に関しては、コンクリート標準示方書[施工編]に従い、説明していく。コンクリートの施工ならびに各種コンクリートの施工以降は、最近の技術の動向を紹介する。予備日では、コンクリート技士試験の問題を紹介する。

【受講要件】2年前期に開講される建設材料学を受講しておくことが望ましい。

【履修上の注意】5回以上欠席した場合は、最終試験を受験できない場合があるので注意されたし。

【到達目標】

1. コンクリートのフレッシュ性状および硬化性状を理解し、合理的な配合設計を行うことができる。
2. コンクリートの製造、品質管理および施工方法について理解する。

【授業計画】1. 総論 2. フレッシュコンクリートの性質 (1) 3. フレッシュコンクリートの性質 (2) 4. フレッシュコンクリートの性質 (3) 5. 硬化コンクリートの性質 (1) 6. 硬化コンクリートの性質 (2) 7. 硬化コンクリートの性質 (3) 8. 中間試験 9. コンクリートの配合設計 (1) 10. コンクリートの配合設計 (2) 11. コンクリートの配合設計 (3) 12. コンクリートの品質管理 13. コンクリートの施工 (1) 14. コンクリートの施工 (2) 15. 各種コンクリート 16. 期末試験

【成績評価】授業時間数の2/3以上出席し、到達目標の2項目が達成されているかをレポートの提出状況(100%), 中間試験(100%), および期末試験(100%)で評価し、3項目がおのおの60%以上を合格とする(出席点は加えない)。

【JABEE合格】【成績評価】同一とする。

【学習教育目標との関連】建設工学科学習・教育目標達成度一覧表の目標の1(1)を5%, 1(2)を5%, 1(4)を5%, 3(2)を25%, 3(3)を10%, 3(4)を10%, 3(5)を10%, 3(6)を10%, 5(3)を10%, 6(1)を5%および6(3)を5%に対応する。

【教科書】田澤栄一編者『エースコンクリート工学』朝倉書店

建設工学科 (昼間コース)

1. 水質汚濁の機構を水質指標を用いて記述することができる
 2. 水循環を支える人工施設の構成と機能を記述することができる
- 【授業計画】1. “浄化”とは何か?(キーワードの抽出) 2. “浄化”とは何か?(ワークショップ) 3. 水質指標 4. 水質指標指標間の相互関係 (1) 5. 水質指標指標間の相互関係 (2) 6. 有機汚濁 7. 富栄養化 8. 下水処理 (1) 9. 下水処理 (2) 10. 下水道整備の課題 11. 浄水処理 (1) 12. 浄水処理 (2) 13. 下水道整備の課題 14. 浄化と循環 (ワークショップ) 15. 浄化と循環 (グループ発表) 16. 定期試験
- 【成績評価】到達目標の2項目が達成されているかを、授業への参加度(10%) レポート(40%) テスト(50%)で評価し、2項目それぞれが60%以上を合格とする。
- 【JABEE 合格】「成績評価」と同一である
- 【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の、1(1)を20%、1(2)を10%、1(3)を6%、2(1)を8%、2(3)を6%、3(1)を8%、3(2)を40%、3(3)を15%、3(4)を10%、5(1)を6%、5(2)を8%、5(3)を7%、6(1)を6%、6(2)を35%、6(3)を15%に対応する。
- 【教科書】住友恒・村上仁士・伊藤禎彦「環境工学」理工図書
- 【参考書】環境庁「環境白書」
- 【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能
- 【連絡先】村上(総合研究実験棟504, 656-7334, murakami@eco.tokushima-u.ac.jp)、上月(総合研究実験棟702, 656-7335, kozuki@eco.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】特になし

地盤工学

Geotechnical Engineering 講師・上野 勝利 2単位

- 【授業目的】土質力学 1,2 を既に履修している学生を対象に、地中応力、地盤の支持力について学習する。授業内容の理解のために、適宜小テストを行いながら授業を進める。授業を通して地盤の工学的な知識と視点を学ぶ。
- 【授業概要】構造物を支える基礎構造物と、その荷重を受ける地盤の挙動について学ぶ。第1回は基礎構造物の設計のために必要な地盤調査について、第2~3回は基礎構造物に大きな被害をもたらす地盤の液状化と地盤の動的変形特性について学ぶ。第5-9回は地中の応力の求め方について、第10-16回は浅い基礎並びに杭基礎について支持力理論と支持力の求め方について学ぶ。
- 【受講要件】土質力学 1, 2 を履修すること。
- 【履修上の注意】講義には定規、コンパス、電卓を持参のこと。
- 【到達目標】
1. 地盤調査(標準貫入試験とN値、コーン貫入試験)について、理解していること。
 2. 土の動的変形性質と、液状化について、そのメカニズム、発生する被害、対策・抑止工法の概念について理解すること。
 3. 地中応力をブーシネスクの式に基づいた各種の方法により求めることができること。
 4. 浅い基礎の支持力の考え方を理解し、極限支持力と許容支持力を求めることができること。
 5. 杭基礎の代表的な工法と杭の挙動を理解し、杭の鉛直支持力を求めることができること。
- 【授業計画】1. 地盤を探る—地盤調査(標準貫入試験, N値, コーン貫入試験)と土質試験 2. 土の動的性質 (1)—液状化の被害とメカニズム, 抑止・対策工の考え方 3. 土の動的性質 (2)—土の繰り返しせん断挙動, 履歴曲線と骨格曲線, せん断弾性係数と減衰率 4. 小テスト 5. 地中の応力 (1)—自重による応力, ブーシネスクの式 6. 地中の応力 (2)—線荷重, 帯荷重 7. 地中の応力 (3)—三角形分布帯荷重, オスターバークの方法 レポート 8. 地中の応力 (4)—円形分布荷重, 影響円法 レポート 9. 小テスト 10. 浅い基礎の支持力 (1)—荷重-沈下曲線, 基礎の沈下 11. 浅い基礎の支持力 (2)—テルツァギの支持力理論 12. 浅い基礎の支持力 (3)—極限支持力と許容支持力の求め方 13. 杭基礎の支持力 (1)—杭基礎の各種工法, 杭基礎の性質 (NF, 群杭効果) 14. 杭基礎の支持力 (2)—杭基礎の鉛直支持力の求め方 15. 杭基礎の支持力 (3)—杭基礎の水平抵抗 16. 小テスト
- 【成績評価】目標に挙げた6項目が各々達成されているか、小テストによって評価し、平均点で60%以上であれば合格とする。
- 【JABEE 合格】目標に挙げた6項目が各々達成されているか、小テストによって評価し、各々60%以上であれば合格とする。
- 【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の目的1(1)に5%、同1(2)が5%、3(2)100%、3(3)40%、3(4)40%、6(1)10%、計200%に対応する。
- 【教科書】土質力学 1,2 に同じ。
- 【参考書】入門シリーズ 地盤工学数式入門(地盤工学会発行)など

- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】上野(A棟406, 656-7342, ueno@ce.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は4:6とする。平常点には講義への出席状況、レポートの成績を含む。

地盤力学

Geomechanics 教授・山上 拓男 2単位

- 【授業目的】前半の斜面安定解析の講義においては、斜面が崩壊するメカニズムを理解し、それに基づいて斜面の安定性を定量評価する手法を学ぶこと。後半の土圧論では壁状構造物に土が及ぼす力(土圧)の作用メカニズムを理解し、そうした構造物を適切に設計し得る基礎学力を身に付けること。
- 【授業概要】講義の中心課題は、斜面安定解析理論であれ土圧論であれ、その背後にある物理(力学)現象のメカニズムをしっかりと理解する事にある。そのため、教科書、パワーポイント、OHP、板書を適宜交えた講義を行うが、特に視覚を介しての理解を重視する立場から、パワーポイント、OHPを多用する。
- 【受講要件】「土質力学1」「土質力学2」の履修を前提とする。特に「土質力学2」で学習する“土のせん断”に関する基礎知識を十分身に付けておくこと。
- 【到達目標】
1. 極限平衡法における安全率の意味を理解するとともに、斜面安定問題が高次の不静定問題となることを理解する。
 2. すべり面形状と安全率算定式の分類と対応について理解を深める。
 3. 長大斜面の理論と簡便分割法における安全率算定式を誘導できる。また Bishop の厳密法と簡便法について理解を深める。
 4. 静止状態と静止土圧; 主動状態と主動土圧; 及び受働状態と受働土圧について理解する。
 5. 砂質土に限定してクーロンとランキンの土圧論を理解し、具体的な計算ができる。

- 【授業計画】1. 斜面安定概論 2. 安全率の定義 3. 分割法による安定解析(その1) 4. 分割法による安定解析(その2) 5. 簡便分割法 6. Bishop 法 7. 長大斜面の安定(その1) 8. 長大斜面の安定(その2) 9. 土圧概論 10. 静止土圧 11. 極限土圧(主動土圧, 受働土圧) 12. クーロン土圧 13. ランキン土圧(その1) 14. ランキン土圧(その2) 15. 予備日 16. 定期試験
- 【成績評価】定期試験で評価する。到達目標各々60%以上で合格とする。
- 【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。
- 【学習教育目標との関連】本学科の教育目標 2.(1) 思考力が涵養される学習方法の基本を身に付けている 20%; 目標 3.(1) 工学基礎科学として微積分と代数学を中心とする数学、力学を主とする物理学および基本的な化学を習得している 20%; 目標 3.(2) 建設工学の専門基礎科目群(構力、水理、土質、計画、材料、RC、環境、測量)の全般にわたり、基本的な知識を習得している 40%; 目標 3.(3) 建設工学の専門基礎科目群の一部については、これらを基礎とした先端的な設計書あるいは調査報告書を理解できる程度の知識と応用力を有する 20%。にそれぞれ対応する。
- 【教科書】「土質力学1」「土質力学2」と同じ教科書を用いる。
- 【参考書】補足説明資料としてプリントを配付し、解説する。また「土質力学」「土の力学」をタイトルとする書物であればどのようなものでも参考になるので図書館を利用するなどして多くの参考書に目を通すことを薦める。
- 【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
- 【連絡先】山上(A401, Tel:656-7345, E-mail:takuo@ce.tokushima-u.ac.jp)

情報処理

Data Processing

助教授・中野 晋, 竹林 洋史, 助手・蔣 景彩 2単位

- 【授業目的】パソコンによる科学技術計算への入門として、データの出力や簡単な数値計算プログラムの意味が理解できること、さらに例題を参考にしながら応用プログラムが作成できることを目指す。
- 【授業概要】建設工学のあらゆる分野においてパソコンは重要な役割を果たしている。またこれまで大型電子計算機のみで行われてきた大規模な科学技術計算の多くがパソコンで手軽に行えるようになってきた。パソコンによる科学技術計算への入門として、FORTRAN プログラミングについての演習を行う。
- 【受講要件】全学共通教育・情報科学を履修していること
- 【履修上の注意】本演習ではその日に学習するプログラミングの要点と例題が説明された後、数題の簡単な課題が出され、受講者1人1人が実際にプログラミング演習を行うことにより進められる。

【到達目標】

1. FORTRAN プログラムを読み、実行内容を理解する。
2. 例題を参考に応用プログラムが作成できる。

【授業計画】1. コンピュータと Fortran77 2. 数値読みこみ、式の計算、出力 3. 処理の流れの制御 4. 繰返し計算、書式の指定 5. 配列 6. 組み込み関数 7. 文字処理 (1) 8. プログラミング試験 (1) 9. 文関数と関数副プログラム 10. サブルーチン副プログラム 11. 論理演算と複素数演算 12. 文字処理 (2) 13. ファイル操作 14. プログラムの書き方、作り方 15. プログラミング試験 (2) 16. 最終試験

【成績評価】授業時間の 2/3 以上出席し、到達目標の 2 項目が達成されているかを毎回示されるレポート課題と 2 回実施されるプログラミングテストの成績で評価する。評価は前者を 70%、後者を 30%の割合で評価し、60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 2(1)を 10%、2(2)を 10%、2(3)を 20%、3(1)を 10%、3(5)を 50%に対応する。

【教科書】FORTRAN77 入門-改訂版-、浦 昭二編、培風館

【参考書】特になし

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】中野(A棟310, 656-7330, nakano@ce.tokushima-u.ac.jp)、竹林(A棟311, 656-7331, takeh@ce.tokushima-u.ac.jp)、蔣(A402, 656-7346, jiang@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし

職業指導

Vocational Guidance 非常勤講師・坂野 信義 4 単位

【授業目的】

【授業概要】生涯発達・Career Developing としての人間観・職業観を確立すべく、学際的見地から職業指導の課題と方法を論述し、併せて能力開発を実践指導する。

【授業計画】1. 職業指導の課題と方法 (1) 職業指導発展の略史 2. 職業指導の課題と方法 (2) 職業指導の課題 3. 職業指導の課題と方法 (3) 個性と職業:個人理解の方法・性格、興味など 4. 職業指導の課題と方法 (4) 個性と職業:適応と適性 5. 職業指導の課題と方法 (5) 個性と職業:Career Planning としてのライフワーク 6. 職業指導の課題と方法 (6) 個性と職業:マネジメントスキル:リーダーシップ論など 7. 職業指導の課題と方法 (7) 職業相談(キャリア・カウンセリング):職業相談の意義 8. 職業指導の課題と方法 (8) 職業相談(キャリア・カウンセリング):カウンセリング理論と技術 9. 職業指導の課題と方法 (9) 職業指導の評価 10. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (1) 人生 60 年計画表の作成 11. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (2) IC 法, NM 法を活用してソフト作成能力を育成 12. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (3) KJ 法を活用しての課題解決とプレゼンテーション 13. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (4) シュルツの自律神経訓練法の理解

【成績評価】論文、能力開発のプレゼンテーションにより成績評価。

【JABEE 合格】単合格と同一

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 3(6),4(1), 4(2), 4(3)にそれぞれ 10%、5(1), 5(2), 5(3)にそれぞれ 20%対応する。

【教科書】講師よりプリント資料配布。

【参考書】参考書、必読書については、講義中紹介。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】「面白くてためになり、そして思い出に残る」講義が目標。

振動学

Structural Dynamics 教授・宇都宮 英彦 2 単位

【授業目的】1 本のバネに吊るされた錘の運動を詳細に分析することによって振動現象の本質を理解し、2 自由度系に於けるモード解析法を学ぶことによって、高層ビルや長大つり橋のような複雑な構造物の振動問題の解析へと発展させることができることを学ぶ。

【授業概要】構造物の振動を単純な 1 自由度の物理モデルで表現して、動的な力の平衡条件から運動方程式を導き、自由振動、強制振動の本質的な事項、すなわち固有振動数、減衰、動的応答倍率、位相差、過渡応答などについて考察して理解を深めると共に、所要パラメータの計算能力を養う。次いで 2 自由度系の自由振動解析に於けるモードの存在とその特性について述べて振動解析法を導入する。この手法を適用して任意の多自由度系の強制振動解析を行いうることを理解し、2 自由度系の強制振動解析の課題を課して計算させる。毎回授業終了時にその授業に対する意見と質問票を提出させ、質問に対して

は集約して Q&A を作成し次回の授業で返却する、主要なテーマの学習が終了するたびに合計 5~6 回程度小テストを行う。

【受講要件】基礎物理学(特に力学)および微分方程式の基礎的な部分を習得していること。

【履修上の注意】動力学の入門段階から講義するが、演習の時間が少ないことから、理解を深めるための受講生の自主的な取り組みが要求される。授業内容に関して提出した質問票が評価の対象となるので授業への集中が必要である。

【到達目標】

1. 簡単な構造物の 1 自由度系モデルを作り、自由振動解析が出来る。
2. 1 自由度系の強制振動において、定常応答、過渡応答の解を求め、その工学的応用についての知識を持つ。
3. 2 自由度系を対象にして、振動形解析法による解析を行うことが出来る。

【授業計画】1. 振動現象の種類と記述 2. 1 自由度系の自由振動: 運動方程式と解 3. エネルギー法: 固有振動数の近似解法 4. 1 自由度系の減衰自由振動 5. 強制振動: 力強制と変位強制 6. 過渡振動と不規則振動解析 7. 2 自由度系の自由振動: 振動数方程式 8. 2 自由度系の強制振動: 動吸振器の原理 9. 一般座標と一般力, ラグランジュの運動方程式 10. 振動形解析法(モーダルアナリシス) 11. 多自由度系の強制振動 12. 1 次元分布質量系の自由振動 13. レーリー・リッツの方法, ガレルキン法 14. 1 次元分布質量系の強制振動 15. 長大橋の風による振動 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の 3 項目に対して行われる平均 2 回のテストの平均 60%、Q&A による評価 20%とし、各項目毎に合計 80%中 48%以上を取得したものにレポートを課し、20%中 12%以上の評価を得て合計 60%以上の評価を得たものを合格とする。

【JABEE 合格】成績評価と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 2(1),(2)の思考力の涵養と適切な学習計画に対し 35%、目標 3(1),(2),(3)の基礎科学あるいは専門基礎としての知識の習得および先端技術を理解する知識と応用力の習得 50%、1(1)の技術者の社会に果たすべき役割を含む その他 15%としている。

【教科書】小坪清眞著「入門建設振動学」森北出版

【参考書】D. ハルトック著、谷口修訳「機械振動論」コロナ社、S. チモシェンコ著、森下訳「工業振動学」コロナ社、中井博著「土木構造物の振動解析」森北出版、吉原進著「建設系のための振動工学」森北出版

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】宇都宮(A513, 656-7322, utsuno@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】平常点となる小テストおよび授業への参加状況と定期試験の比率は 4:6。

水文・水資源工学

Hydrology and Water Resources Engineering 教授・端野 道夫 2 単位

【授業目的】河川流域を対象として、降雨、流出、遮断蒸発、蒸散等の流域の水循環と水資源工学について講義し、小テスト、レポートと期末テストを実施することにより、基礎的知識と解析法を修得させる。

【授業概要】地球上の水の発生、循環、分布及びその物理的ならびに化学的特性、さらには生物的環境と水との相互関係を取り扱う科学を水文学(すいもん)というが、本講義では、主として、河川流域を中心とした水文現象を取り扱う。また、水は、自然環境の根幹となっており、多様な生態系を支え、人間社会の存立基盤を形成する重要かつ基本的な資源でもあるので、わが国の利水の現況、利水計画等についても講述する。

【受講要件】特には指定しない。

【履修上の注意】2 回のレポートと 3 回の小テストを予定している。小テストをする前の週には、その旨予告する。

【到達目標】

1. 水循環に関連する水文諸量の調査法について理解する。
2. 降水現象及びわが国の豪雨の特徴と構造について理解する。
3. 降雨流出モデルとその解法について理解する。
4. わが国における利水の展開、現況および原単位水需要予測法について理解する。

【授業計画】1. 水文・水資源工学の範囲、水循環と河川流域 2. 降水量、水位及び流量の調査、小テスト 3. 地球規模の水循環と日本の降水量、蒸発散量 4. 大気現象の規模と寿命、降水の種類と原因 5. 豪雨の特徴と構造、各時間帯雨量の極値 6. DDA 解析と流域平均雨量の算定法、小テスト 7. 降雨の流出過程と関連素過程 8. 流出過程のモデル化 9.

建設工学科 (昼間コース)

流出モデルとその解法 10. 流出モデルとその解法, 小テスト 11. 利水計画の枠組みと利水の展開 12. 水資源開発の水準と投資効率 13. 水利用の現況 14. 水需要の予測, 小テスト 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の各項目を講義への取組状況(10%), レポートあるいは小テスト(50%)及び定期試験(40%)で評価し, 各々60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】成績評価と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標 1 の (1),(2),(3) にそれぞれ 5%, 目標 3 の (4),(5) にそれぞれ 15%, 目標 4 の (1),(2) にそれぞれ 15%, 目標 6 の (1),(2),(3) にそれぞれ 5%, 15%, 5% の重みで対応する。

【教科書】室田 明編著「河川工学」技報堂出版

【参考書】山本 莊毅・高橋 裕著「図説水文学」共立出版, 高橋 裕編「河川水文学」共立出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】端野道夫, A517, 088-656-7332, michio@ce.tokushima-u.ac.jp

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は 6:4 とする。平常点には, 講義への取組み状況, レポート及び小テストの成績を含み, 試験は期末定期試験の成績を用いる。

水理学 1 及び演習

Hydraulics and Exercise (1)

教授・岡部 健士, 助教授・中野 晋 3 単位

【授業目的】静水力学と完全流体の流れに関する基本事項を習得させる。

【授業概要】河川, 海岸, 港湾, 上下水道の計画・設計の基礎となる水理学のうち, 静水力学と完全流体の流れに関する基本事項を講義する。演習では講義内容に沿った例題を与え, 実際の問題への応用力を養成する。

【履修上の注意】演習では毎回小テストを実施するので, 欠席しないこと

【到達目標】

1. SI 単位と重力単位の両方を理解し, 活用できる。静水圧に関する計算ができる。
2. ベルヌーイの定理の基本を理解し, 計算ができる。

【授業計画】1. 水の性質と単位 / 演習と小テスト 2. 相似則 / 演習と小テスト 3. 静水圧 / 演習と小テスト 4. 平面に作用する静水圧 / 演習と小テスト 5. 曲面に作用する静水圧 / 演習と小テスト 6. 相対的静止の水面 / 演習と小テスト 7. 中間試験 8. 流れの基礎 / 演習と小テスト 9. ベルヌーイの定理 / 演習と小テスト 10. ベルヌーイの定理の応用 / 演習と小テスト 11. 運動量方程式 / 演習と小テスト 12. 運動量方程式の応用 / 演習と小テスト 13. オリフィス / 演習と小テスト 14. 水門・堰 / 演習と小テスト 15. 総合演習 16. 最終試験

【成績評価】授業時間数の 2/3 以上出席し, 到達目標の 2 項目が達成されているかを毎週実施する小テストや中間試験, 最終試験で評価する。2 項目がそれぞれ 60%以上を合格とする。成績の評価は小テスト, 中間試験, 最終試験を 4:3:3 の割合で 100 点満点に換算する。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 2(1) を 20%, 2(2) を 16.7%, 3(1) を 20%, 3(2) を 33.3%, 3(3) を 10% に対応する。

【教科書】日下部重幸・壇和秀・湯城豊勝共著『水理学』コロナ社

【参考書】鈴木幸一著『水理学演習』森北出版

【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能

【連絡先】岡部(A棟309, 656-7329, okabetak@ce.tokushima-u.ac.jp), 中野(A棟310, 656-7330, nakano@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義は 1 教室で行い, 演習は 2 つのクラスに分けて実施する。

水理学 2 及び演習

Hydraulics and Exercise (2)

教授・端野 道夫, 助教授・竹林 洋史 3 単位

【授業目的】実在流体を対象とし, 主として管水路および開水路の水理について習得させる。

【授業概要】河川, 海岸, 港湾, 上下水道の計画・設計の基礎となる水理学のうち, 管水路および開水路の水理に関する基本事項を講義する。演習では講義内容に沿った例題を与え, 実際の問題への応用力を養成する。

【受講要件】水理学 1 及び演習を履修した者

【履修上の注意】演習では毎回小テストを実施するので欠席しないこと。

【到達目標】

1. 層流と乱流の流速分布と摩擦抵抗則を理解する。
2. 単線管路や並列管路の流れ計算ができる。
3. 開水路不等流において水面形の概形を描くことができる

【授業計画】1. 壁面の摩擦力 / 演習と小テスト 2. 層流の流速分布 / 演習と小テスト 3. 乱流の流速分布 / 演習と小テスト 4. 管水路の摩擦損失水頭 / 演習と小テスト 5. 管水路の平均流速公式, 形状損失係数 / 演習と小テスト 6. エネルギー線と動水勾配線 / 演習と小テスト 7. 単線管路の計算 / 演習と小テスト 8. 分流と合流管路, ポンプと水車 / 演習と小テスト 9. 中間試験 10. 開水路定常流の基礎式 / 演習と小テスト 11. 常流と射流 / 演習と小テスト 12. 開水路の等流 / 演習と小テスト 13. 開水路の不等流の基礎式 / 演習と小テスト 14. 一様断面水路の水面形 / 演習と小テスト 15. 不等流の水面形計算法 / 演習と小テスト 16. 最終試験

【成績評価】授業時間数の 2/3 以上出席し, 3 つの到達目標が達成されているかを毎回実施する小テストと中間試験, 最終試験で評価する。3 項目がいずれも 60%以上を合格とする。評価点は小テスト, 中間テスト, 最終テストを 4:3:3 の割合で 100 点満点に換算する。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 2(1) を 20%, 2(2) を 16.7%, 3(1) を 20%, 3(2) を 33.3%, 3(3) を 10% に対応する。

【教科書】日下部重幸・壇和秀・湯城豊勝著『水理学』コロナ社

【参考書】鈴木幸一著『水理学演習』森北出版

【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能

【連絡先】端野(A棟415, 656-7332, michio@ce.tokushima-u.ac.jp), 竹林(A棟311, 656-7331, takeh@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義は 1 教室で行い, 演習は 2 クラスに分けて実施する。

数値解析

Numerical Analysis

教授・竹内 敏己 2 単位

【授業目的】様々な数値計算手法を身につけるとともに, 数値解析の基本的な考え方を習得することを目的とする。

【授業概要】丸め誤差などの数値計算における基礎的知識, 補間・非線形方程式などの基本的数値計算法について述べる。

【受講要件】「線形代数学」「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには各自が普段から自主的な演習を行ない復習を重ねることが必要である。

【到達目標】

1. 数値誤差が理解できる。
2. 非線形方程式の数値解法が理解できる。

【授業計画】1. 丸め誤差, 桁落ち 2. 浮動小数の四則演算 3. 多項式の計算 4. 多項式補間 5. チェビシェフ補間 6. ニュートン補間 7. 数値積分の考え方 8. 補間型積分 9. 高精度近似積分 10. 非線形方程式の解法: 2 分法 11. 非線形方程式の解法: ニュートン法 12. 連立非線形方程式に対するニュートン法 13. 微分方程式の解法: オイラー法 14. 微分方程式の解法: ルンゲ・クッタ法 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】期末試験を 70%, 講義への取り組み状況を 30%として評価し, 全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 2(1) に 15%, 2(2) に 5%, 3(1) に 80% 対応する。

【教科書】杉浦洋『数値計算の基礎と応用』サイエンス社

【参考書】篠原能材『数値解析の基礎』日新出版, 森正武『数値解析』共立出版, 名取亮『数値解析とその応用』コロナ社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】竹内(A206室, TEL:656-7544, e-mail:takeuchi@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】授業で電卓を使用する場合があるので用意しておくこと。

生産管理

Production Control

非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為に生産現場で何をしているかを理解する。

【授業概要】企業経営は経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく, かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で生産技術のキーとなる事項について講義する。講義計画に従い生産管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

建設工学科 (昼間コース)

【授業計画】1. 生産管理 2. 生産計画 3. 原価管理 4. 経営システム (ISO) 5. IE(Industrial Engineering) 6. 品質管理と TQC 7. トヨタ生産方式 8. 中間及び最終レポート (生産管理のまとめ)

【成績評価】講義への取り組み状況, レポートの内容

【JABEE 合格】単位合格と同一

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 3(6) に 40%, 4(1), 4(2), 5(3) にそれぞれ 20%対応する。

【教科書】その都度提供する。

【参考書】市販の生産管理に関する書籍, 「生産管理便覧」丸善

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】出席率 80%(12 回), レポート (中間と最終) の内容 20%

【受講要件】基本的な日本語能力を有していること。

【履修上の注意】英和辞書を持参すること。

【到達目標】

1. 工業分野における基本的な Vocabulary を身につける。
2. 簡単な技術マニュアル等を読むことができる。
3. 工業技術に関する簡単な和文を英訳することができる。

【授業計画】1. ガイダンス/実力診断テスト (工業英検 3 級程度) 2. 単語クイズ 1/Shapes, Forms of transport/動詞と文型 3. 単語クイズ 2/Materials 1/現在分詞 4. 単語クイズ 3/Geometric shapes 1/過去分詞 5. 確認テスト 1 6. 単語クイズ 4/Geometric shapes 2/一般動詞と専門用語・品詞の転換 7. M 単語クイズ/Measuring instruments/接頭辞と語の関係と意味 8. 単語クイズ 6/Materials 2/いろいろな類似語の言い表し方, 工業英語の主語 9. 確認テスト 2 10. 単語クイズ 7/Joining methods 1, Materials 3/工業英語の基本的ルール 1 11. 単語クイズ 8/Structural Safety, Joining methods 2/工業英語の基本的ルール 2 12. 単語クイズ 9/Personal safety/工業英語の基本的ルール 3 13. 確認テスト 3 14. 英作文演習 15. 実力テスト (工業英検 3 級程度)

【成績評価】到達目標 1 が達成されているかを単語クイズの成績により, 到達目標 2 が達成されているかを確認テストならびに実力テストの和訳関連部分の成績により, また到達目標 3 が達成されているかを確認テストならびに実力テストの英訳関連部分の成績により評価し, 各々がすべて 60%以上で合格とする。なお合格時の成績は, 各到達目標に対する成績 (100 点満点) を, 到達目標 1:到達目標 2:到達目標 3=20:75:5 の比率で加重平均して算定する。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】80%は本学科の教育目標の 5(4) に, また 20%は同 5(5) に対応する。

【教科書】Jeremy Comfort, Steve Hick, Allan Savage 著: 「BASIC TECHNICAL ENGLISH」, Oxford University Press

【参考書】授業中に適宜紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】成行(A510, 656-7325, nariyuki@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】出席回数は成績には一切考慮されない。また, 出席が 2/3 未満の場合は成績評価の対象とはならない。

生態系工学

Ecosystem Management 助教授・鎌田 磨人, 上月 康則 2 単位

【授業目的】健全な社会基盤を整備するにあたって必要不可欠となっている生態系に関する概念を講義し, レポート等を実施して, 生態系の保全, 復元, 創造に必要な基礎知識を習得させる。

【授業概要】この講義では主に生物学的観点から環境をとらえ, 生態系と人間の社会との関係について考える。生態系の社会的な価値 (機能), 生態系の構造やそれが形成・維持される過程についての概要を説明した後, 生態系を保全, 復元, 創造するための技術や考え方についての現状や展望を紹介する。

【履修上の注意】いわゆる公害問題等については「環境保全工学」を, 上下水道や廃棄物等の問題については「資源循環工学」を, 環境問題の解決に関連する制度等については「環境計画学」を受講すること。なお, 環境問題全般について学ぶためには, これらすべての講義を受講することが望ましい。また, 計画論的な観点から環境管理の技術を学ぶためには「計画情報システム」を受講すると良い。

【到達目標】

1. 健全な生態系の保全や修復に必要な生態学の基礎を理解する。
2. 生態系の構造や機能について理解する。
3. 健全な生態系が持続可能な社会の創造に果たす役割を理解する。

【授業計画】1. 土木事業と生態系 2. 生態系の価値 3. 生態系の構造・レポート 4. 生物の多様性と連続性 5. 個体群の維持と絶滅・レポート 6. 生物多様性の減少とその要因 7. 生態系の分布と生態遷移・レポート 8. 極相林と二次林の生態系 9. 湿地と河川の生態系・レポート 10. 農耕地と都市の生態系 11. 生態系管理・レポート 12. 生態系の変化予測と評価 13. 生態系復元の技術・レポート 14. 生態系創造の技術 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の 3 項目が達成されているかを講義への取組状況とレポート (60%), 及び定期試験 (40%) で評価し, 3 項目の成績が各々 60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 1(1)20%, 1(2)20%, 1(3)5%, 2(1)15%, 6(2)30%, 6(3)10%に対応する。

【教科書】鷲谷いづみ「生物保全の生態学」共立出版

【参考書】鷲谷いづみ・矢原徹一「保全生態学入門」文一総合出版, プリマック, R.B.・小堀洋美「保全生物学のすすめ」文一総合出版, 井出久登・亀山章「ランドスケープ・エコロジー, 緑地生態学」朝倉書店, 武内和彦「環境創造の思想」東京大学出版会, 武内和彦「地域の生態学」朝倉書店

【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能

【連絡先】鎌田(A棟306, 656-9134, kamada@ce.tokushima-u.ac.jp), 上月(総合研究実験棟702, 656-7335, kozuki@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点には講義への参加状況, 及びレポートの提出状況と内容を含む。

専門外国語

Foreign Language for Engineers 非常勤講師, 助教授・成行 義文 助手・三神 厚 2 単位

【授業目的】技術者として最低限必要な英語の「読み」・「書き」能力の育成を図るとともに, 文部科学省認定の工業英検 3 級程度の英語力の涵養を目指す。

【授業概要】各授業は基本的に「外国人教師による Technical English の講義・演習」, 「工業英語の読み・書きに関する講義・演習」および「単語クイズ」の 3 つの部分から成立している。また, 初回に実力診断テスト (工業英検 3 級程度) を行い, その後授業が 3 回終了する毎に確認テスト (3 回) を実施する。そして最後に実力テスト (工業英検 3 級程度) を行う。

総合建設演習

Integrated Exercise of Civil Engineering 教授・平尾 潔 助教授・成行 義文, 鈴木 壽, 長尾 文明, 中野 晋, 上月 康則 講師・上野 勝利, 助手・渡邊 健, 渡辺 公次郎 1 単位

【授業目的】建設工学に関する知識を統合し, 総合的な応用能力を養成する。

【授業概要】建設工学専門教育で学んだ物理, 構造力学, 水理学, 土質力学などの基礎的科目の演習を通して問題解決能力のブラッシュアップを図った後, 総合的な応用能力が必要な課題を提示し, 問題解決を図らせる。

【受講要件】建設工学の専門基礎科目を履修していること。

【到達目標】

1. 建設工学の実際問題を解決する上で必要な工学基礎 (数学, 物理学) の基礎的な演習問題に迅速に対応できる。
2. 構造力学, 水理学, 土質力学など建設工学専門基礎科目の演習問題に迅速に対応できる。
3. 工学基礎と建設専門科目との複合的な総合問題を解決できる。

【授業計画】1. 工学基礎に関する演習と小テスト その 1 2. 工学基礎に関する演習と小テスト その 2 3. 工学基礎に関する演習と小テスト その 3 4. 工学基礎に関する演習と小テスト その 4 5. 構造力学に関する演習と小テスト その 1 6. 構造力学に関する演習と小テスト その 2 7. 構造力学に関する演習と小テスト その 3 8. 水理学に関する演習と小テスト その 1 9. 水理学に関する演習と小テスト その 2 10. 土質力学に対する演習と小テスト その 1 11. 土質力学に対する演習と小テスト その 2 12. 計画学に関する演習と小テスト 13. 環境工学に関する演習と小テスト 14. 建設材料学に関する演習と小テスト 15. 工学基礎および建設工学に関する総合的演習と小テスト その 1 16. 工学基礎および建設工学に関する総合的演習と小テスト その 2

【成績評価】授業時間数の 2/3 以上出席し, 到達目標の 3 項目が達成されているかを毎回行う小テスト (100%) で評価し, 3 項目がそれぞれ 60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 3(1)30%, 3(2)40%, 3(3)20%, 3(4)10%に対応する。

【教科書】特に指定しない

【参考書】「土木の頻出問題」及び「工学に関する基礎の頻出問題」実務教育出版、後藤憲一他編「基礎物理学演習」共立出版

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】平尾(A棟511, 656-7324, cvsteng@ce.tokushima-u.ac.jp)、成行(A510, 656-7325, nariyuki@ce.tokushima-u.ac.jp)、鈴木(A403, 656-7347, suzuki@ce.tokushima-u.ac.jp)、長尾(A515, 656-9443, fumi@ce.tokushima-u.ac.jp)、中野(A棟310, 656-7330, nakano@ce.tokushima-u.ac.jp)、上月(総合研究実験棟702, 656-7335, kozuki@eco.tokushima-u.ac.jp)、上野(A棟406, 656-7342, ueno@ce.tokushima-u.ac.jp)、渡邊(A棟506, 656-7320, watanabe@ce.tokushima-u.ac.jp)、渡辺(エコシステム棟702, 656-7612, kojiro@eco.tokushima-u.ac.jp)

測量学 Surveying

非常勤講師・藤井 清司 2単位

【授業目的】社会活動の基盤を支える多くの土木構造物の建設を計画し、設計し、施工するとき、その基礎資料となるのは、正確な測量から得られた地図である。その地図作製のための学問が測量学である。そこで、以下のような項目について、修得できるように講義する。1. 測量に用いる器械器具の構造・使用法・検査およびその調整法 2. 野外での測量作業の方法および野帳の記入法 3. 測定結果を計算し、その精度を調べ、また測量結果によって地図を作り、さらに面積・容積などを計算する方法

【授業概要】測量では、距離、方向角、高低差が測定の3要素であり、その測定器械、測定法について講義する。そして、地図を作製するために、上の測量方法を応用して、骨組測量、細部測量へと発展させ、測定値の調整計算・面積計算を行い、地図を作製する方法を述べる。

【受講要件】この教科目を履修するには、数学、幾何学、および、図学の知識が基礎となる。そこで、これまでの教育課程において履修した数学等の基礎知識を復習し、充分身に付けておくこと。

【履修上の注意】この教科目は建設工学の全ての基礎となるものであり、また、建設工学の専門科目の最初に学ぶものであるため、最初からしっかりと理解しながら修得を心がけて受講すること。本講義は、「測量学実習」と対をなすものであり、実習を行うことにより一層の理解が可能となる。そして、その内容は「応用測量学」へとつながっていく。また、この科目の取得は、卒業後の「測量士補」、「測量士」の資格条件となる。

【到達目標】

1. 測量法として、距離測量、平板測量、トランシット測量、水準測量、およびスタジア測量を理解する。
2. 計算法として、経緯距法と面積・容積計算法を理解修得する。

【授業計画】1. ガイダンス・測量学緒論 2. 距離測量 1 3. 距離測量 2 4. 平板測量 1 5. 平板測量 2 レポート 6. トランシット測量 1 7. トランシット測量 2 8. トランシット測量 3 9. トランシット測量 4 レポート・テスト 10. 経緯距法 1 11. 経緯距法 2 レポート 12. 水準測量 1 13. 水準測量 2 14. 水準測量 3 レポート・小テスト 15. スタジア測量 16. 定期試験

【成績評価】授業時間数の2/3以上出席し、到達目標の2項目が達成されているかを定期試験(100%)で評価し、2項目が各々60%以上を合格とする(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の1(1),1(2),2(1),2(2),3(1),3(3),4(1),6(1),6(2),6(3)がそれぞれ5%,3(2)50%に対応する

【教科書】森 忠次著「改訂版測量学1基礎編」丸善、小田部和司著「図解土木講座 測量学」第2版技報堂出版、上の教科書を使用するが、それのみでは十分理解できないと思われる部分については、プリントを配布し補助資料とする。

【参考書】参考書は授業中においてその都度紹介される。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】藤井清司(Tel:088-656-7331, Email:fujii@sea2.ce.tokushima-u.ac.jp)

測量学実習

Surveying Practice

助教授・鎌田 磨人、講師・上野 勝利

助手・三宅 正弘、渡邊 健、非常勤講師・猪木 幹雄、新居 直

1単位

【授業目的】以下の「測量学」における講義目的・目標について実習を通じて理解を深める。1. 測量に用いる器械・機具の使用法等、2. 野外での測量作業の方法および野帳の記入法、3. 内業として、測定結果を計算し、精度を調べ、製図を行う。

【授業概要】1. 平板測量 非常に簡単な測量器具である、アリダド、平板、巻尺等を使用し、骨組測量を行った後、それを基準にして細部測量を行う。そして、この簡単な測量法により、測量の基礎的な技術を会得しつつ、その一連の流れを理解する。2. トランシット・トラバース測量および経緯距計算 測量において最も重要な器械であるトランシットの使用法を修得し、トラバース測量を行う。その測定結果を調整計算し、精度を調べ、面積計算も行う。そして、トラバースの製図を行う。3. 水準測量およびスタジア測量 現場にそくするように交互水準を含んだ、路線水準 測量を行う。それら測点間の距離をスタジア測量により求め、上の水準測量の結果を調整する。

【受講要件】測量学を履修すること。

【履修上の注意】実習は班を編制して行うので、班員同士よく協力して、各自の責任を果たすこと。また野外で行われるので、各自種々の危険に対して十分に注意する事。具体的には、サンダル履きでの実習参加は認めない。また帽子等を着用し、日射病に注意する事。

【到達目標】

1. 平板とアリダドの操作方法ならびに平板測量の測量作業に習熟し、平面図の作製方法を修得すること。
2. トランシットの使用法とトランシット・トラバース測量の測量作業に習熟し、野帳への記録方法、誤差の評価方法、ならびに成果物の作成方法を修得すること。
3. レベルとスタッフの操作方法ならびに水準測量とスタジア測量の測量作業に習熟し、野帳への記録方法、誤差の評価方法、ならびに成果物の作成方法を修得すること。

【授業計画】1. ガイダンス・平板測量説明 2. 平板測量(骨組み) 3. 平板測量(骨組み)・レポート 4. トランシット・トラバース測量 5. トランシット・トラバース測量 6. トランシット・トラバース調整計算・製図 7. トランシット・トラバース調整計算・製図・レポート 8. 平板測量(細部) 9. 平板測量(細部)・レポート 10. 予備日 11. 水準測量・スタジア測量・外業 12. 水準測量・スタジア測量・レポート 13. 予備日 14. 予備日 15. 予備日

【成績評価】目標に挙げた4項目が各々達成されているか、レポートによって評価し、各々60%以上であれば合格とする。なお、実習への遅刻・欠席した者、ならびにレポートの未提出者は単位を認めない。

【JABEE 合格】目標に挙げた3項目が各々達成されているか、レポートあるいは実技試験(測角テスト)によって評価し、到達目標の各項目が達成されているかを総合的に評価し、総合評価100点満点で70点以上あれば合格とする。なお、実習への遅刻・欠席した者、ならびにレポートの未提出者は認めない。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の2(1)を5%,2(3)5%,3(2)25%,3(3)5%,3(4)5%,3(5)5%,4(1)5%,4(2)5%,4(3)25%,5(3)15%に対応する。

【教科書】図解 土木講座 測量学 小田部 和司 著、技報堂出版 ISBN4-7655-1385-8 C3051、測量学で指定された教科書

【参考書】測量学の授業中において紹介される。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】上野(A棟406, 656-7342, ueno@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】出席 20:レポート 60:測角テスト 20の重みとする。

卒業研究

Undergraduate Research Work

建設工学科教官 5単位

【授業目的】研究テーマを設定し、それを解明するための研究計画の立案、研究の実施、成果のとりまとめを指導教員のもとで遂行することによって、未知の問題解決能力を養う。また、その成果を口頭発表することで、プレゼンテーション能力の育成を図る。

【授業概要】各学生は、建設工学科のいずれかの研究室に所属し、教員の直接指導のもとで、各自のテーマで研究し、その成果を卒業論文にまとめることと、口頭で発表する。なお、研究テーマは、研究室に配属のち、教員との討議によって決定する。

【到達目標】1. 各自の設定した研究テーマに対して、適切な研究計画を立案し、それに従って研究を遂行し、その結果を論文としてまとめることができることと、その成果を口頭で発表できる。

【成績評価】到達目標に対して60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の2(1),2(2),3(5),4(1),4(2),5(1),5(2),5(4)が各10%,5(3)20%

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】卒業研究を目的として研究室に配属されるためには、4年時前期の開始時点において、建設工学科が別に定める単位取得条件を満足していなければならない。

耐震工学

Earthquake Engineering 教授・澤田 勉, 助手・三神 厚 2 単位

【授業目的】耐震設計の基本となる地震と地震動の性質, 構造物の応答解析法, 耐震設計法の基礎概念などについて講述し, 耐震設計の根拠に流れる基本的な考え方を修得させる。

【授業概要】耐震設計の基本的な考え方を理解させるために, 地震と地震動の関係, 地震動の性質, 地震による被害とその対策, 構造物の応答解析法の概要, 多自由度系のモード解析法, 耐震設計の基礎理論などについて講述し, 耐震設計がどのような体系で構成されているかを修得させる。

【受講要件】振動学を履修しておくこと。

【履修上の注意】振動学の履修を前提として講義を行う。講義中私語をしないことと質問をすることを心がける。

【到達目標】耐震設計の基本概念を理解する。

【授業計画】1. 地震発生の仕組み 2. 地震動の性質 3. 地震による被害 4. 非減衰 1 自由度系の自由振動 5. 減衰 1 自由度系の自由振動 (1) 6. 減衰 1 自由度系の自由振動 (2) 7. 減衰 1 自由度系の強制振動 8. 非減衰 2 自由度系の自由振動 (1) 9. 非減衰 2 自由度系の自由振動 (2) 10. 多自由度系のモード解析 (1) 11. 多自由度系のモード解析 (2) 12. 多自由度系のモード解析 (3) 13. 応答の数値解析 14. 耐震設計の概要 15. 定期試験 16. 予備日

【成績評価】授業時間数の 2/3 以上を出席した者を対象とし, 到達目標が達成されているかを講義への取組状況及び小テスト (40%), 定期試験 (60%) で評価し, 到達目標の達成度が 60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 1(1)10%, 3(1)20%, 3(2)20%, 3(3)20%, 3(4)20%, 6(3)10%に対応する。

【教科書】平井一雄・水田洋司「耐震設計入門」森北出版

【参考書】元田良孝・萩原良二「地震工学概論」森北出版

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】澤田(A棟307, 656-9132, sawada@ce.tokushima-u.ac.jp), 三神(A棟308, 656-9193, amikami@ce.tokushima-u.ac.jp)

知的所有権概論

Intellectual Property 非常勤講師・酒井 徹 1 単位

【授業目的】知的所有権制度を理解し, 知的所有権の保護と制度の活用的重要性を各種の事例を基に修得する。

【授業概要】科学技術創造立国を目指す我が国において, 知的所有権の保護と制度の活用が, 行政・産業界・大学・研究所にとって不可欠であるとの共通認識を持つ必要性を説くとともに, 知的所有権制度の概要と, その活用方法を, 企業の特許戦略, 特許侵害事件などの事例を紹介しつつ講義し, 学生が将来, 企業・大学・研究所などへ進んだ場合に知っておくべき知的所有権に関する基礎知識の修得をはかる。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】2 日間の集中講義であるために全時間の出席を要する。

【到達目標】

1. 知的所有権の概念についての理解を深める。
2. 特許法, 商標法, 意匠法, 著作権法について理解する。

【授業計画】1. 知的所有権とは 2. 知的所有権制度の概要 (特許・商標等) 3. 知的所有権制度の概要 (意匠・著作権制度等) 4. 特許発明と特許権侵害 (含む事例研究) 5. 知的所有権の管理とその活用 (企業・大学・研究所) 6. 今後の研究開発と知的所有権のあり方 7. 試験 (到達目標 1 および 2 の評価)

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを試験 70%, 講義への取り組み状況 30%で評価し, 平均で 60%あれば合格とする。

【JABEE 合格】到達目標が各々達成されているかを試験 100%で評価し, 各々60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 1(1), 1(2), 1(3), 1(4), 3(5)にそれぞれ 20%対応する。

【教科書】特製テキストを用いる。

【参考書】中山信弘著「知的所有権」日刊工業新聞社, 通産省特許庁編「これからは日本も知的創造時代」通産省調査会

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】酒井(Tel:03-5600-2631, Fax:03-5600-2649)

鉄筋コンクリート力学

Reinforced Concrete Mechanics 教授・橋本 親典 2 単位

【授業目的】現在の社会基盤整備を支えており, 鋼構造とともに建設構造物の主要な構成要素である鉄筋コンクリート構造物を, 合理的でかつ経済的に造ろうとする場合, 鉄筋コンクリート独特の力学に関する知識が要求される。本講義では, 鉄筋コンクリート力学に関する基礎技術について講義し, レポートを実施して, 鉄筋コンクリート構造物の設計に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】鉄筋コンクリートの特徴ならびにコンクリートと鉄筋の力学的性質について講義し, 実際に設計に必要な曲げ耐力, 曲げと軸方向力に対する耐力, せん断耐力について, 力学的観点から理解させる。また, 曲げ応力度, ひび割れ, ねじり耐力, 疲労設計や定着等の設計項目についても言及する。

【受講要件】1 年後期開講の構造力学 1 及び 2 年前期開講の構造力学 2 及び演習を受講していることが望ましい。

【履修上の注意】5 回以上欠席した場合は, 最終試験を受験できない場合があるので注意されたし。

【到達目標】

1. 限界状態設計の概念を理解するために, 鉄筋コンクリートの特徴および鉄筋とコンクリートの応力ひずみ関係を理解し, 等価応力ブロックの算定方法を習得する。
2. 鉄筋コンクリート部材の曲げ耐力, 曲げと軸力を受ける部材の耐力およびせん断耐力の算定方法を習得する。

【授業計画】1. 鉄筋コンクリートの特徴 2. コンクリートの力学的性質 3. 鉄筋の力学的性質 4. 限界状態設計法と部分安全係数 (その 1) 5. 限界状態設計法と部分安全係数 (その 2) 6. 断面の曲げ耐力 (その 1) 7. 断面の曲げ耐力 (その 2) 8. 曲げと軸方向力に対する断面の耐力 (その 1) 9. 曲げと軸方向力に対する断面の耐力 (その 2) 10. 中間試験 11. 曲げ応力度 12. 曲げひび割れ幅に対する検計 13. 棒部材のせん断耐力 (その 1) 14. 棒部材のせん断耐力 (その 2) 15. せん断耐力と曲げ耐力の関係・構造物の破壊形式 16. 期末試験

【成績評価】授業時間数の 2/3 以上出席し, 到達目標の 2 項目が達成されているかを小テストおよびレポート (100%), 中間試験 (100%) および期末試験 (100%) で評価し, 2 項目が各 60%以上を合格とする (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】建設工科学習・教育目標達成度一覧表の目標の 3(1)を 12.5%, 3(2)を 25%, 3(3)を 25%, 3(4)を 12.5%, 4(1)を 12.5%および 4(2)を 12.5%に対応する。

【教科書】岡村甫・前田詔一「鉄筋コンクリート工学」市ヶ谷出版

【参考書】吉川「鉄筋コンクリートの解析と設計」丸善, 土木学会編, 池田・小柳・角田著「(新体系土木工学 32) 鉄筋コンクリートの力学」義報堂出版, 田辺・檜貝・梅原・二羽「コンクリート構造」朝倉書店, 村田二郎編「入門鉄筋コンクリート工学」技報堂出版

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】橋本(B312, 656-7321, chika@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】レポートは提出期限を厳守すること。なお, 中間試験の日程は, 講義の進捗と日程によって変動するので, 注意すること。

電磁気学

Electricity and Magnetism 教授・金城 辰夫 2 単位

【授業目的】日常見られる物理現象の多くは電気および磁気に関する現象であり, 電磁気学の法則は身の回りのいろいろな機器で中心的な役割を演ずる。その基本法則を修得させる。

【授業概要】まず, 静電気に関するクーロンの法則から始め, 電場と電位, 静電容量について説明する。ついで, 電流, 電気抵抗, 直列回路に関する事柄を論じる。次に, 磁場の概念を理解し, その発生源となる電流との関係がビオ・サバルの法則で記述されることを説明する。ついで, 電磁誘導の関係を取り扱い, 最後にこれらの基本法則がマクスウェルの法則に要約されることを示す。

【履修上の注意】微分および積分の知識が必要。

【到達目標】

1. 静電気に関して, 電場と電位, 静電容量の概念を理解する。
2. 電流, 電気抵抗, 直列回路に関する事柄を理解する。
3. 電流と磁場の関係を理解する。

【授業計画】1. 電場, クーロンの法則 2. ガウスの法則 3. 電位 4. 静電容量および誘電体 5. コンデンサの接続 6. 電流と抵抗 7. 直列回路 8. 磁場の定義 9. ビオ・サバルの法則 10. ファラデーの電磁誘導の法則 11. インダクタンス 12. 交流 13. RLC 回路の共振 14. 電磁波, マクスウェルの法則 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】単位の取得:試験 70%(期末試験), 平常点 30%(出席状況, レポートの提出状況・内容等)として評価し, 全体で 60%以上で合格とする。

建設工学科 (昼間コース)

- 【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。
【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 2(1) に 15%, 2(2) に 5%, 3(1) に 80% 対応する。
【教科書】R.A.Serway (松村博之訳)「科学者と技術者のための物理学 III(電磁気学)」学術図書
【参考書】神田 貞之介 電磁気学 共立出版, 熊谷 寛夫他 電磁気学 朝倉出版
【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
【連絡先】金城(A303室, TEL:088-656-7548, E-mail:tatsuo@pm.tokushima-u.ac.jp)
【備考】微分および積分の基礎的知識が必要

都市・交通計画

Urban & Transport Planning

教授・山中 英生, 近藤 光男 2 単位

- 【授業目的】都市計画の歴史, 内容, 手法, 理論と, 特に建設工学分野に関わりの深い交通計画の技法, 理論, 制度についての講義によって必要な知識を身につける。
【授業概要】都市計画における土地利用計画, 市街地整備, 住環境整備, 施設整備, 地区計画に関する我が国の法制度, 事業制度を整理して講述する。また, 交通計画に関しては, 需要分析のための基礎的な手法の理解, 道路交通に関わる現象分析の手法, 公共交通, 結節点, 交通管理計画, 地区交通計画の手法と事例を学ぶ。
【受講要件】特になし
【到達目標】
1. 都市計画に関する基礎的な知識を修得する。
2. 交通計画に関する基礎的な知識を修得する。
【授業計画】1. 都市計画の歴史 2. 都市計画のためのマクロ分析 3. 土地利用計画 4. 市街地整備事業 5. 都市施設計画 6. 地区計画 7. 交通計画 8. 交通需要分析 9. 交通需要分析 10. 道路交通システム 11. 道路交通システム 12. 公共交通計画 13. 交通結節点計画 14. 交通管理計画・地区交通計画 15. 予備日 16. 定期試験
【成績評価】到達目標の 2 項目が達成されているかを授業への参加度, レポートと小テストの評価 (40%) 学期末テスト (60%) で評価し 2 項目それぞれが 60% 以上を合格とする。
【JABEE 合格】成績評価と同一である。
【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 1(1), 1(2), 2(1) を各 5%, 3(4) を 25%, 3(5), 4(1) を各 20%, 4(2) を 10% に対応する。
【教科書】加藤晃:都市計画概論第 4 版, 共立出版
【参考書】塚口博司, 塚本直幸, 日野泰雄:交通システム, 国民科学社
【連絡先】山中(A棟410, 656-7350, yamanaka@ce.tokushima-u.ac.jp), 近藤(総合研究実験棟602, 656-7339, kondo@eco.tokushima-u.ac.jp)
【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点には講義への状況, 小テスト, レポートの提出状況と内容を含み, 試験は最終試験の成績である。

土質力学 1

Soil Mechanics I

助教授・鈴木 壽 2 単位

- 【授業目的】地盤の力学的な問題解決に必要な土質力学の基本事項を実際の現場の現象を交えながら講義し, 演習, 小テストを実施して実際問題への応用力も養う。
【授業概要】まず, 土の力学を学習するために不可欠な土の分類および土の基本物理量に関する事項を演習も交えながら修得させ, 安全な土構造物を構築するために必要な土の締固め特性, また, 堤防・アースダムなどの漏水, 浸透破壊を予測するのに必要な透水現象について講述する。
【受講要件】土質力学の導入科目なので, 特に要件を必要としないが, できれば微分方程式の基礎理論を理解できていると良い。
【履修上の注意】基本的に, 小テストは授業に即した内容で, 最終試験は応用力も試す内容とする。小テストは合計 5 回実施するので, 日頃から予習・復習に心掛けること。
【到達目標】土質力学における基本物理量の習得と, 締固め, 透水現象の力学的現象の把握
【授業計画】1. 「土」とは? 土の成分, 土質力学の成立 2. 応力 ~ ひずみ関係のモデル化 3. 土質力学の現場への適用例・小テスト 4. 土粒子の形と大きさ・三角座標による分類 5. 粒度分析・土のコンシステンシー 6. 堆積粘性土の構造 7. 堆積砂粒土の構造・小テスト 8. 土の基本物理量 9. 土の基本物理量・小テスト 10. 土の締固め特性 11. 土の締固め

特性・小テスト 12. 透水ベルヌーイの定理, ダルシーの法則 13. 透水透水係数の求め方・透水解析の基礎方程式 14. 透水正方形フローネット・透水力 15. 透水 限界動水勾配・小テスト 16. 定期試験

- 【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への取組状況, 演習, 小テストおよび最終試験の成績を統合して行う。また, 到達目標の 3 項目が達成されているかを, 土の基本物理量 (40%), 締固め特性 (20%), 透水現象 (40%) で評価し, 3 項目が各々 60% 以上を合格とする。
【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。
【学習教育目標との関連】建設工学科学習・教育目標達成度一覧表の目標の 2(1) を 20%, 3(1) を 20%, 3(2) を 40%, 3(3) を 20% に対応する。
【教科書】石井義明ら著 最新土質力学 朝倉書店, 福岡正巳ら著 新編土質力学 株式会社国民科学社
【参考書】松岡 元著 土質力学 森北出版, 山口柏樹著 土質力学 技報堂出版
【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
【連絡先】鈴木(A403, 656-7347, suzuki@ce.tokushima-u.ac.jp)
【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点には講義への参加状況, 演習の回答および小テストを含み, 試験とは最終試験を意味する。

土質力学 2 及び演習

Soil Mechanics 2 and Exercise

教授・望月 秋利 2 単位

- 【授業目的】土質力学の内, その基本となる土の物理特性についてまず復習し, 次いで土中水の力学, 圧密現象, せん断の基礎について, 演習をあわせて行ない, 基礎力をつける。
【授業概要】土の物理特性の定義と意味についてまず復習し, 演習を行なって土質力学 2 を学ぶための導入を行なう。次いで土中水の力学の内, 透水係数, 流量, 流線網, 動水勾配等の基礎的な知識について講義すると共に, 演習をあわせて行なう。次いで間隙水圧, 有効応力等について学び, ボイリング現象について講義し, 演習をあわせて行なう。圧密については, まず概要を説明し, 圧密に関する諸定数の定義について講義し, 演習では圧密沈下量の計算を行なう。最後に土のせん断と安定問題, せん断強度についての概要を説明する。
【受講要件】土質力学 1 の単位を取得していること。
【履修上の注意】授業を重視しているので, 必ず出席すること。また演習を積極的に行ない, 授業内容の理解に務めること。授業には教科書の他にプリントを用いる。
【到達目標】1. 土質力学に関する基礎事項を理解し, 簡単な演習問題が解けるようになること。
【授業計画】1. 授業概要ガイダンス, 土の物理特性の定義と意味 2. 土の物理特性の定義式誘導とその演習 (その 1) 3. 土の物理特性の定義式誘導とその演習 (その 2) 4. 土中水の力学:ダルシー則の概要と浸透流量の計算 5. 土中水の力学:ダルシー則の意義と浸透流量の計算 6. 流線と等ポテンシャル線, 動水勾配 7. 流線網の演習と流量の計算 8. 浸透流と間隙水圧, 全応力と有効応力 9. 浸透流と間隙水圧, ボイリング現象とその対策, 演習 10. 圧密現象の概要, 圧密で用いる諸定数の概念 11. 間隙比 $-log(p)$ 関係と沈下, 正規圧密粘土と過圧密粘土, 圧密降伏応力 12. 圧密沈下に関する諸定数と沈下量の計算 (その 1) 13. 圧密沈下に関する諸定数と沈下量の計算 (その 2) 14. 土のせん断と安定問題の概要, せん断強度 15. 期末試験 16. 予備日
【成績評価】欠席は 3 回以上となると受験資格を失う。到達目標の達成のため, 講義受講ノート, 演習レポートを作成し, 提出する。評価は, 講義受講ノート, 演習レポートの評価 (30%), 期末試験の成績 (70%) を総合する。
【JABEE 合格】成績評価と同一である。
【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 1(4), 2(1), 3(4) にそれぞれ 10%, 2(2) に 20%, 3(2) に 25%, 3(1), 3(6), 4(1), 4(2), 6(1) にそれぞれ 5% 対応する。
【教科書】石井義明他「最新土質工学」朝倉書店, プリント
【参考書】地盤工学会編「土質工学用語辞典」地盤工学会, 河上房義「土質力学」森北出版, 福岡正巳他「新編土質工学」国民科学社
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は 3:7 とする。平常点には講義への参加姿勢, 演習の回答, レポートを含み, 試験とは中間試験および期末試験を意味する。

土木・建築史

History of Civil Engineering and Architecture

非常勤講師・澤田 健吉 2 単位

建設工学科 (昼間コース)

【授業目的】土木・建築の技術は、単に現在という時点からのみ評価すべきではなく、時代の流れの中に置いてみて、はじめてその働きが理解できるといふ観点から、従来の編年的な技術史ではなく、その底に流れる動機に気付くようにする。

【授業概要】各時間ごと設定したテーマ(計画の項参照)ごと数冊の本を取り挙げ、技術の発展の背景を説明・解説する。学生がそれぞれに興味を持てる本を見付け、技術史に関心を持つようにする。基本的に計画のスケジュールによるが、年度ごと若干の更新をする。

【履修上の注意】レポートの作成に夏休みの期間を当てることを期待しているため、十分な時間を当て、自分の考えをまとめてほしい。

【到達目標】社会的な問題を技術者の目で理解して、相手の意見を聞き、自分の意見を言えるようにする。

【授業計画】1. 講義の方法、理工系の人々の書く歴史 2. 技術史概論、計画者の立場 3. 技術史概論、施工者の立場 4. 科学技術を受入れた土壌、中国の場合 5. 科学技術を受入れた土壌、西欧の場合 6. 科学技術を受入れた土壌、日本の場合 7. 産業の勃興、博覧会の開催 8. 産業の勃興、岩倉使節団の米欧回覧 9. 大学による技術者教育の出発 10. お雇外国人教師の貢献 11. 環境問題、自然の意味 12. 技術史各論、農業土木 13. 技術史各論、鉄道 14. 技術史各論、地図 15. 技術史各論、建築 16. 予備日

【成績評価】レポートにより目標に達する達成度において、1. 本の選定の妥当性 2. 本の理解度 3. 自分の経験をベースにした感想 4. その文章の表現力の 4 つの観点で評価し、60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 1(1)20%,4(2)15%,6(1)35% 5,6(2)10%,1(2),1(3),2(1),5(2) が各 5%

【教科書】各授業日に、6000 字程度のプリントを配布する。事前の配付の要求があれば、個人的な対応はできる。

【参考書】講義の性格上多数必要になるが、各自自分で探すことも重要なので、特に指定はしない。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】澤田健吉、Tel./Fax.088-645-2140(自宅)、Tel./Fax.088-645-2140(自宅)

【備考】レポートのみによる。ただし、レポートの内容が不十分と評価されたものは再提出を求める。

【成績評価】到達目標の達成度で評価し、到達目標を達成しているものを合格とする。授業計画 4~11 は筆記試験(60%)で、12,13,15 はビジネスプランの提出分(40%)で評価する。

【JABEE 合格】【成績評価】と同じである。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 3(5),4(2),5(1),5(3)にそれぞれ 15%,4(1)に 20%,4(3),5(2)に 10%対応する。

【教科書】各授業でレジメを配布する。

【参考書】各授業で紹介する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】出口(2216, 656-7183, deguchi@ias.tokushima-u.ac.jp)

【備考】ビジネスプランはグループで作成する。

微分方程式 1

Differential Equations (I)

助教授・香田 温人 2 単位

【授業目的】微分方程式の解法を修得し、さらに工学の諸分野に現われる微分方程式の解法に応用できるようにする。

【授業概要】微分方程式の理論は数理工学的な現象の解析に有力な手段を与え、現代工学の基礎として重要な役割を果たしている。その広範な理論の入門段階として、この講義では微分方程式の具体的な解法を中心に講義する。

【受講要件】「微積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートを引きちんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 求積法による解法が理解できる。
2. 高階定数係数線形微分方程式が解ける。

【授業計画】1. 変数分離形 2. 同次形 3. 一階線形微分方程式 4. 完全微分形 5. クレーローの微分方程式 6. ラグランジュの微分方程式 7. 応用例 8. 高階常微分方程式 9. 2 階線形同次微分方程式 10. 非同次微分方程式 11. 記号解法、簡便法 12. 級数解法 13. ルジャンドル関数 14. ベッセル関数 15. 期末試験

【成績評価】授業への取組み状況、演習の回答、レポートの提出状況、小テスト等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 2(1)に 15%,2(2)に 5%,3(1)に 80%対応する。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】香田(A211)

微分方程式 2

Differential Equations (II)

助教授・香田 温人 2 単位

【授業目的】連立常微分方程式の安定性と簡単な偏微分方程式の解法を修得し、より実際の工学的な問題の解法に応用できるようにする。

【授業概要】「微分方程式 1」に続いて現代工学すべての基礎として重要な役割を果たしている連立常微分方程式系の基本的な解法を講義する。さらに、簡単な偏微分方程式の解法についても講義する。

【受講要件】「微分方程式 1」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートを引きちんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 簡単な定数係数連立線形常微分方程式が解ける。
2. ラプラス変換とその応用ができる。

【授業計画】1. 定数係数連立線形微分方程式 2. 高階微分方程式と連立微分方程式 3. 連立線形微分方程式 4. 自励系と強制系 5. 2 次元自励系の危点 6. 2 次元自励系の安定性 7. 保存系と安定性 8. ラプラス変換の性質 9. 逆ラプラス変換 10. ラプラス変換の応用例 11. 1 階偏微分方程式 12. ラグランジュの偏微分方程式 13. 2 階線形偏微分方程式 14. 定数係数 2 階線形偏微分方程式 15. 期末試験

【成績評価】授業への取組み状況、演習の回答、レポートの提出状況、小テスト等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 2(1)に 15%,2(2)に 5%,3(1)に 80%対応する。

ニュービジネス概論

Introduction to New Business

非常勤講師・出口 竜也

第一線の実務経験者 2 単位

【授業目的】ベンチャー企業は、新しいアイデアや専門的な知識、技術を事業化し、新しい創造的な事業を展開するバイオニア的企業である。この授業の目的は、アイデアや専門的知識・技術を事業化する、つまりベンチャー企業を起業するためのスピリットとノウハウを提供することにある。

【授業概要】政府は活力ある日本社会を創るために、大学発ベンチャー企業の育成や人材の育成を目指している。政府目標は、3 年間で 1,000 社の大学発ベンチャー企業の創出である。本講義は、それを実現できるように徳島県が支援して開設された「学生起業家創業支援講座」である。学生諸君がベンチャー企業の設立に挑戦し、事業を展開していく手助けとなるような授業内容となっている。第一線で活躍されている実務家やアドバイザーを講師として招き、実際に役立つ知識を講義していただく。授業は、大きく分けて 4 つの部分から構成されている。第一は、導入としてのベンチャーとは何かの説明である。第二は、設立の方法と資金の手当てについてである。第三は、経営のノウハウである。最後に、ベンチャーを起業するにあたって不可欠のビジネスプラン(事業計画)の作成実習を行う。

【受講要件】工学部以外の受講希望者も教室収容能力の許すかぎり受講可能である。単位修得については所属部局の規則に従うこと。

【履修上の注意】遅刻や授業中の私語は厳禁である。

【到達目標】

1. ベンチャービジネスを起業するために必要な知識を修得すること
2. ビジネスプランが作成できるようになること

【授業計画】1. ガイダンス 2. 基礎講演「ゼロからのスタート」 3. 独立型ベンチャー成功のための理論 4. 会社設立の方法(法律や会社設立手続き) 5. 資金調達と資本政策 6. 銀行の役割と利用方法(間接金融) 7. 株式発行による資金調達(直接金融) 8. 会社経営の基礎(計画・資金繰り・組織) 9. 企業会計の基礎知識 10. 経営戦略とマーケティング 11. 製品開発と知的所有権 12. ビジネスプラン作成のポイント 13. ビジネスプラン作成実習 14. 筆記試験(4~11 の内容に関する試験) 15. ビジネスプランの発表会 16. 予備日

建設工学科 (昼間コース)

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】香田(A211)

福祉工学概論

Introduction to Well-being Technology for All 教授・末田 統
助教・藤澤 正一郎 2 単位

【授業目的】我々の身近な生活を支える様々な機器や環境の中に含まれる工学技術のうち、いろいろなハンディキャップを伴う条件下でも使いやすく安全を確保する技術を、人に優しい技術として紹介し、その万人に対する延長線上に福祉工学技術の一端があることを理解させる。また、各障害者個人に合わせた機器を紹介し、福祉工学技術のもう一端には、特化された技術があることも理解させる。

【授業概要】本講義では、人間の生活全体を支える工学技術を、高齢化による機能の低下や障害によるハンディキャップを軽減させる様々な技術(ハイテクならびにローテク)やアプローチを例にとり、広い視点から概観する。

【到達目標】

1. 機能の低下や障害によらず、全ての人々が利用できる技術や機器、環境があることを理解させる。
2. 特別なサポートを必要とする人々のための技術や機器、環境があることを理解させる。
3. 人に優しい工学技術について考える機会を持たせる。

【授業計画】1. ガイダンス:講義の進め方、受講の心構え 2. 支援科学技術:個人への対応と万人への対応 (Universal Design) 3. 移動・移乗 4. 排泄 5. 身障者スポーツ 6. 高齢者の生活環境 7. 就労 8. 生活自立と支援技術(米国の場合) 9. 技術による支援、人による支援 10. 技術:障害への適合、環境への適合、人間への適合 11. 知的障害者と運動機能障害者の支援 12. 視覚障害者と聴覚障害者の支援 13. 最新の技術:???? 14. まとめ:心のバリアー、エンジニアとして 15. 予備日

【成績評価】講義への取り組み状況と、毎回提出させるレポートにより評価する。

【JABEE 合格】レポート内容を 100%で評価し、その平均点が 60%以上であれば合格とする。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 3(6)、4(3)に 10%、4(1)、4(2)、5(3)、6(3)にそれぞれ 20%対応する。

【参考書】「明日を創る」、E&C プロジェクト「バリアフリーの商品開発 2」、山田尚勇他「コンピュータと人間の共生」、後藤芳一編「バリアフリーのための福祉技術入門」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】末田(総合研究実験棟705, 656-2167, o.sueda@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】出席点とレポート評価との割合は 4:6 とするが、欠席者のレポートは成績評価しない。

複素関数論

Complex Analysis 助教授・澤下 教親 2 単位

【授業目的】複素関数論への入門講義として、複素変数関数の微積分学を修得させる。

【授業概要】微積分で扱う対象を複素数変数の関数にまで広げ、正則関数および有理型関数の理論を展開することにより、実数の世界では困難であったある種の積分計算が複素数の立場からみると簡潔に処理されることを述べる。

【受講要件】「微積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】時間数の制約から、複素関数の計算を修得するための必要最小限な議論を行なうので、講義内容のすべてを吸収することが理解への早道である。日頃から予習・復習の計画を立てて勉学に動んでもらいたい。

【到達目標】

1. 複素微分、正則関数の概要が理解できる。
2. 留数概念の理解とその応用ができる。

【授業計画】1. 複素数 2. 複素平面、オイラーの式 3. 複素数列、複素級数 4. 複素変数の関数 5. 複素微分、コーシーリーマンの関係式 6. 正則関数 7. 複素積分 8. コーシーの積分定理 9. コーシーの積分公式 10. テイラー展開 11. ローラン展開 12. 留数とその応用 13. 定積分の計算 1 14. 定積分の計算 2 15. 期末試験

【成績評価】授業への取り組み状況、レポートの提出状況、小テスト等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 2(1)に 15%、2(2)に 5%、3(1)に 80%対応する。

【教科書】阪井章『複素解析入門』新曜社

【参考書】辻政次・小松勇作「大学演習・関数論」裳華房、田村二郎「解析関数(新版)」裳華房、吉田洋一「関数論・第2版」岩波書店、神保道夫「複素解析入門」岩波書店、志賀啓成「複素解析学 I-II」培風館

【連絡先】澤下(A204室, TEL:656-7542, E-mail:sawasita@pm.tokushima-u.ac.jp)

プログラミング技法及び演習

Programming Methodology and Exercise 講師・滑川 達
助手・野田 稔, 三神 厚 2 単位

【授業目的】建設工学に関連する科学技術計算を実施する上で必要となるプログラミング及び計算手法に関する知識の習得を目的とし、プログラミングによる問題解決能力を身につけることを目標とする。

【授業概要】建設工学に関連する科学技術計算でよく用いられる基本的な計算手法(補間法, 統計計算, 数値積分, 行列演算, 常微分方程式, 偏微分方程式)について講述し、その手法を使った実用的な計算処理プログラムの作成及び実行に関する演習を行う。

【受講要件】情報処理を受講していること。

【履修上の注意】プログラムを作成し、問題を解決するためには、プログラムに使用する計算手法を覚えるのではなく、理解しなければならない。各回で扱う計算手法をよく理解し、自分の道具とできるように

【到達目標】

1. 建設工学分野でよく用いられる数値解析手法を理解し、FORTRAN を用いてプログラムを作成できること。建設工学分野でよく用いられる数値解析手法を理解し、FORTRAN を用いてプログラムを作成できること。
2. 工学分野の基本的な問題に数値解析手法を適用し、FORTRAN を用いてプログラムを作成できること。

【授業計画】1. 前半の概要・計算結果の表現方法 2. 補間法 3. 統計計算 4. 数値積分 1 5. 数値積分 2(流体問題への応用) 6. 常微分方程式 1 7. 常微分方程式 2(質点系の運動) 8. 常微分方程式 3(質点系の振動) 9. 後半の概要・レポート作成法 10. 行列演算 11. 連立一次方程式 12. マトリックス法 13. 逆行列と行列式 14. 偏微分方程式 1(差分解法) 15. 偏微分方程式 2(波動方程式への適用) 16. 予備日

【成績評価】授業への取り組みと、テーマ毎に課されるレポートによって、成績を評価する。

【JABEE 合格】到達目標の 2 項目が達成されているかを、授業への取り組み(20%)、各テーマ毎に課すレポート(80%)で評価し、到達目標の 2 項目が各々 60%以上を合格とする(出席点は加えない)。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 2(2)10%、2(3)30%、3(5)20%、4(1)30%、4(2)10%に対応する。

【教科書】数値解析 情報処理入門コース、戸川隼人、岩波書店

【参考書】FORTRAN77 入門-改訂版、浦昭二編、培風館、数値計算の常識、伊理正夫、藤野和健、共立出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】野田(A棟514, 656-7323, tarda@ce.tokushima-u.ac.jp)、三神(A棟308, 656-9193, amikami@ce.tokushima-u.ac.jp)

プロジェクト演習

Practice on Civil Engineering Projects 建設工学科教官 1 単位

【授業目的】建設工学に関わる研究・調査プロジェクトについて、実際に基礎的知識の修得、資料収集・分析、報告・発表を行うことで、技術者としての基礎的素養を身につけることを目的とする。

【授業概要】各自、建設系研究室が示したプロジェクト・テーマから 1 つを選んで、教官の指導を受けて演習を行う。この演習は 4 年生に実施する卒業研究の準備としても位置づけられており、教官の指導のもとに、まとまった研究・調査を自主的に遂行し、その成果を公表・発表する能力を養うことが本演習の概要である。12 グループからなる研究室が担当する。具体的テーマ、演習内容については学期はじめに発表される。

【受講要件】3 年次研究室配属学生を対象とする。

【到達目標】研究や調査を自主的に遂行し、その成果をまとめて発表する能力を身につける。

【授業計画】1. ガイダンス 研究グループ説明 2. 講義 研究テーマの発掘 1 3. セミナー テーマ発掘 調査計画 4. セミナー 調査結果の報告・討議

建設工学科（昼間コース）

5. セミナー 調査結果の報告・討議 6. セミナー 調査結果の報告・討議
7. セミナー 調査結果の報告・討議 8. セミナー 調査結果の報告・討議
9. セミナー 調査結果の報告・討議 10. セミナー 調査内容のとりまとめ
11. セミナー 調査内容のとりまとめ 12. セミナー 発表準備 13. セミナー 発表会
14. セミナー 発表会 15. 予備日 16. 予備日

【成績評価】出席、参加状況と貢献内容、発表内容のグループ評価、レポートの成績を総合して行う。

【JABEE 合格】到達目標の各項目が達成されているかを総合的に評価し、総合評価 100 点満点で 70 点以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】本学科のアウトカムズ評価表の目標の 1(1) を 10%、1(2) を 10%、1(3) を 10%、2(6) を 10%、3(1) を 10%、3(2) を 10%、3(3) を 10%、4(3) を 10%、6(3) を 10%、6(4) を 10%に対応する。

【参考書】教官より参考書等が示されることがある。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】成績評価は平常点のみ。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 3(6) に 40%、4(1)、4(2)、5(3) にそれぞれ 20%対応する。

【教科書】その都度、提供する。

【参考書】島田信義「新労働基準法」学習の友社、荻原勝「人事・労務実務全書」日本実業出版社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】出席率 80%(12 回)、レポート(中間と最終)の内容 20%

ベクトル解析

Vector Analysis

助教授・澤下 教親 2 単位

【授業目的】工学の解析で必要不可欠なベクトルの概念と基礎的な性質を学ぶとともに、ベクトル場の解析学を通して古典力学、流体力学や電磁気学に現れる基本的な物理法則の数学的な理解・運用を目標とする。

【授業概要】三次元空間のベクトルで表される物理量の局所的変化(微分)と大局的効果(積分)を記述する手法としてベクトル場の微分積分学を展開し、微分積分学の基本定理のベクトル場に対する一般化を確立する。

【受講要件】「線形代数学」「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、講義ノートをきちんととり、各自が普段から、自主的な演習を含む、予習復習をすることが必要です。

【到達目標】

1. ベクトル場の微分についての基礎的な性質が理解でき、勾配、発散、および回転の基本事項が理解できる。
2. ベクトル場の各種の積分が理解でき、それらに関する基礎的な定理が理解できる。

【授業計画】1. ベクトルの演算、ベクトルとスカラー 2. 内積と外積 3. ベクトル値関数の微分・積分 4. 空間曲線、フレネ・セレの公式 5. 力学への応用 6. スカラー場とベクトル場の微分 7. 勾配と方向微分係数 8. 発散、回転 9. 線積分、ベクトル場の接線線積分 10. 面積分、ベクトル場の法線面積分 11. 立体積分、ガウスの定理、ガウス積分 12. グリーンの定理、ストークスの定理 13. スカラー・ポテンシャルとベクトル・ポテンシャル 14. 直交曲線座標 15. 期末試験

【成績評価】授業への取り組み状況、レポートの提出状況、小テスト等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【学習教育目標との関連】本学科の教育目標の 2(1) に 15%、2(2) に 5%、3(1) に 80%対応する。

【教科書】小川 枝郎『ベクトル解析概論』培風館

【参考書】青木利夫・川口俊一「ベクトル解析要論」培風館、石原繁著「ベクトル解析」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】澤下(A204室、TEL:656-7542、E-mail:sawasita@pm.tokushima-u.ac.jp)

労務管理

Personnel Management

非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為にヒトをどのように動かしているかを理解する。

【授業概要】企業経営は、経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で人的資源をいかに活用しているかについて講義する。講義計画に従い労務管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 組織と職務分掌 2. 人事管理(異動、人事考課) 3. 労働基準法 4. 労使関係 5. 能力開発、教育訓練 6. 安全衛生 7. 中間及び最終レポート(労務管理のまとめ)

【成績評価】講義への取り組み状況、レポートの内容

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

建設工学科（夜間主コース）

建設工学科（夜間主コース）

(1) 卒業資格

夜間主コースの卒業資格について、(ア) 単位修得条件、(イ) 全学共通教育科目の科目・分野別の単位修得条件、(ウ) 専門科目のうち特に注意を要する選択科目の単位修得条件について、表を用いて説明します。

(ア) 単位修得条件

	全学共通教育科目	専門教育科目	合計
必修単位	18	48	66
選択必修単位	8	-	8
選択単位	10	40	50
合計	36	88	124

(イ) 全学共通教育科目の科目・分野別の単位修得条件

科目・分野		必修	選択必修	選択
教養科目	人文科学分野		4	*
	社会科学分野		4	*
	自然科学分野			*
	総合分野，学部開放分野(工学系教養科目)			*
外国語科目		6		*
健康スポーツ科目		2		
基礎教育科目		10		
合計		18	8	*から10

注1) 教養科目の人文科学分野，社会科学分野の2分野のそれぞれから4単位ずつ，計8単位を必ず選択してください。これらの科目を選択必修科目と呼びます。

注2) 人文科学分野，社会科学分野，自然科学分野の3分野については，同一授業科目に属する授業は，3授業題目(6単位)までしか履修できません。

注3) 総合分野，学部開放分野については，各分野で6単位までしか履修できません。

注4) 外国語科目については，英語6単位が必修です。この合計の6単位を越えて修得した外国語科目の単位は，教養科目の単位に読み替えることができます。すなわち，その単位は選択単位に数えることができます。

注5) 基礎教育科目の単位数は，基礎数学a～dの4科目で8単位と基礎物理学fの1科目で2単位の合計10単位です。

注6) 選択単位は，人文科学分野と社会科学分野で選択必修科目として履修した以外の科目，自然科学分野の科目，総合分野と学部開放分野の科目，および外国語科目で必修として履修した以外の科目の中から合計10単位を修得する必要があります。

(ウ) 専門科目の単位修得条件

専門必修科目は48単位，専門選択科目は40単位以上修得する。

注1) 夜間主コースの学生は，昼間コースの科目を履修することができます。詳細については，このシラバスの「建設工学科夜間主コース教育課程表」の備考欄を参照して下さい。

(2) 進級規定

夜間主コースの学生は，各学年の進級に関して，何ら規定はありません。したがって，入学すると4年次まで自動的に進級できます。しかし，次の項で述べます就職斡旋資格や建設工学特別研究着手資格が4年次の初頭に設定されています。各学年で，気を緩めると4年次になったときにこれらの資格が得られず，4年間で大学を卒業できないことになります。常時，勉学に励むことが重要です。

(3) 建設工学特別研究（夜間主コース）着手資格

夜間主コースの建設工学特別研究着手資格は建設工学科の教室会議において決定されます。ここでは，現在適用されている基準について説明します。この基準は，本年度入学学生のカリキュラムに対して設定されたものであるため，諸君が4年次になった時もそのまま適用される予定です。夜間主コースは，有職者がいること，開講科目や時間が昼間コースに比べて制約されていることなどの理由により，就職斡旋資格と建設工学特別研究着手資格を別々に，かつ年度初頭と後期初頭の2回に分けて設定しています。

建設工学科（夜間主コース）

(ア) 資格者の決定時期とレベル設定

夜間主コース就職斡旋と建設工学特別研究着手資格の決定方法
(平成7年9月13日教室会議決定)

年度初頭（4月始）			後期初頭（10月始）			
レベル	就職斡旋	特別研究	卒業可能	レベル	就職斡旋	卒業可能
A	○	○	問題なし	—	—	—
B	×	○	頑張れば 可能	B - 1	○	問題なし
				B - 2	×	困 難
C	×	×	不可 能	—	—	—

(イ) レベルとその条件

夜間主コース就職斡旋と建設工学特別研究着手資格
(平成7年9月13日教室会議決定)
(平成8年4月19日教室会議改訂)
(平成9年12月3日教室会議改訂)
(平成12年1月7日学科会議改訂)

レベル	条 件
A	1. 全学共通教育の必修単位に対する卒業要件を満たすために今後取得しなければならない単位数が2以下であること。 2. 専門教育の必修単位に対する卒業要件を満たすために今後取得しなければならない単位数が、建設工学特別研究を除いて5以下であること。 3. 全学共通教育および専門教育の区別なく、選択必修単位および選択単位に対する卒業要件を満たすために今後取得しなければならない単位数が合計して10以下であること。
B	1. 卒業要件を満たすために今後取得しなければならない単位数が、建設工学特別研究を除いて25以下であること。
B - 1	1. 全学共通教育の必修単位に対する卒業要件を満たすために今後取得しなければならない単位数が0であること。 2. 卒業要件を満たすために今後取得しなければならない単位数が、建設工学特別研究を除いて8以下であること。

建設工学科（夜間主コース）

建設工学科夜間主コースカリキュラム表

科目群	1年		2年		3年		4年	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
全学共通教育科目	人文科学	(2)	(4)	(4)	(4)	(4)	(4)	(2)
	社会科学							
	自然科学							
	工学系教養							
	外国語	(1)	(2)	(1)	(1)	(2)	(2)	
	健康スポーツ	(1)	(1)					
基礎教育	(6)	(4)						
専門教育科目	専門必修科目	建設工学総論 測量学1 測量学実習 応用力学	測量学2 構造力学1 解析力学	構造力学2 土質力学1 水理学1 計画理論1 建設材科学1 微分方程式1	土質力学2 水理学2 計画理論2 鉄筋コンクリート力学	建設設計製図	建設工学実験	建設工学特別研究
	専門選択科目		★情報処理	★構造解析学1 ☆建設材科学2 ☆公共計画学 ★環境科学 ★情報処理 微分方程式2	☆構造解析学2 ★鋼構造学 ★コンクリート 施工法 ★地域都市計画 ☆環境施設工学 ★建設行政法 ☆水文学 ★海岸工学 ☆基礎工法 ☆景観工学 ☆建築概論 ★建築計画 ★土木・建築史	☆構造解析学1 ☆建設材科学2 ★振動学 ★コンクリート 構造学 ☆公共計画学 ★環境科学 ★交通計画 ☆環境保全工学 ☆河川工学 ★港湾工学 ☆岩盤力学 ☆道路工学 及び施工法 ☆環境デザイン ☆建築デザイン論 ★計画設計 システム	☆構造解析学2 ★鋼構造学 ★コンクリート 施工法 ★地域都市計画 ☆環境施設工学 ★建設行政法 ☆水文学 ★海岸工学 ☆基礎工法 ☆景観工学 ☆建築概論 ★建築計画 ★土木・建築史	★振動学 ★コンクリート 構造学 ★交通計画 ☆環境保全工学 ☆河川工学 ★港湾工学 ☆岩盤力学 ☆道路工学 及び施工法 ☆環境デザイン ☆建築デザイン論 ★計画設計 システム
							△職業指導	

■は標準開講期間を表し、()内の数字は各学期間における取得可能単位数を示す。

☆印を付した科目は偶数年に開講される。

★印を付した科目は奇数年に開講される。

△印を付した科目の単位は卒業資格単位数に含まれない。

建設工学科（夜間主コース）

建設工学科（夜間主コース）教育課程表

全学共通教育科目

授業科目（分野）	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								備考	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年			計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
人文科学分野		4											
社会科学分野		4											
自然科学分野			10	2	4	4	4	4	4	4	2	28	
総合分野・ 学部開放分野													
外国語科目	(6)			(2)	(4)	(2)	(2)	(4)	(4)			(18)	
健康スポーツ科目	(2)			(2)	(2)							(4)	
基礎教育科目	10			6	4							10	
全学共通教育科目小計	10 (8) 18	8 8	10 10	8 (4) 12	8 (6) 14	4 (2) 6	4 (2) 6	4 (4) 8	4 (4) 8	4 4	2 2	38 (22) 60	講義 演習・実習 計

専門教育科目

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
微分方程式 1	2					2						2	長町・坂口		70
解析力学	2				2							2	道廣		56
建設工学総論	2			2								2	水口・宇都宮・平尾・橋本 端野・岡部・山上・澤田 望月・山中・近藤・村上		60
測量学 1	2			2								2	藤井		67
測量学 2	2				2							2	滝根		68
測量学実習	(1)			(2)								(2)	鎌田・滑川・三宅 渡邊（健）		68
応用力学	2			2								2	澤田		56
建設設計製図	(2)							(2)	(2)			(4)	澤田・岡部・鈴木・上田 上野・滑川・蔭・脇川		61
建設工学実験	(1)									(2)		(2)	成行・長尾・鈴木・上野 上月・上田・野田・三神 蔭・竹林・渡邊（健）		60
建設工学特別研究	12									4	8	12	建設工学科全教官		60
構造力学 1	2				2							2	長尾		64
構造力学 2	2					2						2	平尾		64
土質力学 1	2					2						2	鈴木		69
土質力学 2	2						2					2	望月		69
水理学 1	2					2						2	竹林		67
水理学 2	2						2					2	中野		67
計画理論 1	2					2						2	加藤		58
計画理論 2	2						2					2	滑川		59
建設材料学 1	2					2						2	水口		60
鉄筋コンクリート力学	2						2					2	橋本		69
専門教育必修科目小計	44 (4) 48	— — —	— — —	6 (2) 8	6 (6) 6	12 (12) 12	8 (8) 8	(2) (2) 2	(2) (2) 2	4 (4) 6	8 (8) 8	44 (32) 52	講義 演習・実習 計		

建設工学科（夜間主コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数(1週当たり)								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
微分方程式 2			2				2					2	今井・坂口		70
情報処理			2		2		2					2	非常勤講師		66
構造解析学 1			2				2		2			2	平尾		63
構造解析学 2			2					2		2		2	平尾		64
鋼構造学			2					2		2		2	成行		63
振動学			2						2		2	2	宇都宮		66
建設材料学 2			2				2		2			2	上田		61
コンクリート施工法			2					2		2		2	橋本		66
コンクリート構造学			2						2		2	2	水口		65
公共計画学			2				2		2			2	近藤		63
交通計画			2						2		2	2	山中・近藤		65
地域都市計画			2					2		2		2	山中・近藤		68
環境科学			2				2		2			2	村上・上月		57
環境施設工学			2					2		2		2	上月・村上		57
環境保全工学			2						2		2	2	村上・澤田・上月・鎌田 三神		57
建設行政法			2					2		2		2	非常勤講師		59
水文学			2					2		2		2	端野		67
河川工学			2						2		2	2	岡部・竹林		57
海岸工学			2					2		2		2	中野		56
港湾工学			2						2		2	2	中野		65
岩盤力学			2						2		2	2	非常勤講師		58
基礎工法			2					2		2		2	望月		58
道路工学及び施工法			2						2		2	2	望月		69
景観工学			2					2		2		2	山中・三宅		59
環境デザイン			2						2		2	2	山中・喜多・笠井・三宅		59
建築概論			2					2		2		2	渡邊(速)		61
建築デザイン論			2						2		2	2	福井		62
建築計画			2					2		2		2	佐藤		62
計画設計システム			2						2		2	2	中野(真)		58
土木・建築史			2					2		2		2	澤田(健)		70
職業指導			4								4	4	坂野		66
工業基礎英語 I			1	1								1	広田		62
工業基礎数学 I			1	1								1	吉川		62
工業基礎物理 I			1	1								1	佐近		63
専門教育選択科目小計	— — —	— — —	67 67 67	3 3 3	2 2 2		12 12 12	26 26 26	30 30 30	30 30 30	22 22 22	125 125 125	講義 演習・実習 計		
専門教育科目小計	44 (4) 48		67 67 67	9 (2) 11	8 (2) 8	12 12 12	20 (2) 20	26 (2) 28	30 (2) 32	34 (2) 36	30 (2) 30	169 (8) 177	講義 演習・実習 計		

科目名の頭に付された記号の意味は次の通り。

- ：卒業資格の単位数には含まれない科目。
- ：講義時間の中で一部演習・実習を実施する科目。
 - ：2, 3 年生, または 3, 4 年生の合同授業となる科目。
- ：奇数年 2005 年, 2007 年 (H17・H19) に開講される科目。
- ：偶数年 2004 年, 2006 年 (H16・H18) に開講される科目。

建設工学科（夜間主コース）

卒業に必要な単位数

	卒業に必要な単位数	全学共通教育科目	専門教育科目
必修単位	72 単位	18 単位*	48 単位
選択必修単位	8 単位	8 単位**	
選択単位	44 単位以上	10 単位以上***	40 単位以上
計	124 単位以上	36 単位以上	88 単位以上

* 英語 6 単位，健康スポーツ 2 単位，基礎数学 8 単位，基礎物理 2 単位

** 人文科学分野 4 単位，社会科学分野 4 単位

*** 全学共通教育科目で必修・選択必修として修得した科目（題目）以外から選択する。

備考

1. () 内は，演習・実習等の単位数または授業時間数を示す。
2. 印の科目は卒業資格の単位数には含まれない。
3. 全学共通教育の開講科目および単位数は「徳島大学全学共通教育履修の手引き」を参照のこと
4. 選択必修科目は，指定されている科目群の中から，所定単位数を修得する必要がある。
5. 昼間コースの授業科目の履修については工学部規則第 3 条の 2 第 2 項に従う。
 - a. 履修できる昼間のコース科目は，30 単位以内とする。
 - b. 昼間コースの教育課程表中 印を付した科目（昼間コースのみ開講されている科目，23 単位）は，原則として履修を認め，修得単位を選択科目の単位とする。
 - c. 昼間コースのその他の科目，他学科及び他学部の科目は，所定の手続き（担当教官の許可（場合によっては，他学科及び他学部長の許可））を経ることとする。
 - d. 学期始めに昼間コース履修届を提出し，学科会議の承認を得る。
 - e. 試験で合格点を獲得した場合には，担当教官が単位を工学部学務係に届けることで事務処理を終了する。
6. 夜間主コースでの他学科に属する授業科目から，工学部規則第 3 条の 4 第 3 項の規定に基づいて修得した単位は，4 単位までの範囲において選択科目の単位数に含めることができる。

建設工学科（夜間主コース）講義概要

目次

応用力学	56
海岸工学	56
解析力学	56
河川工学	57
環境科学	57
環境施設工学	57
環境保全工学	57
岩盤力学	58
基礎工法	58
計画設計システム	58
計画理論 1	58
計画理論 2	59
景観工学	59
環境デザイン	59
建設行政法	59
建設工学実験	60
建設工学総論	60
建設工学特別研究	60
建設材料学 1	60
建設材料学 2	61
建設設計製図	61
建築概論	61
建築計画	62
建築デザイン論	62
工業基礎英語 I	62
工業基礎数学 I	62
工業基礎物理 I	63
公共計画学	63
鋼構造学	63
鋼構造学	63
構造解析学 1	63
構造解析学 2	64
構造力学 1	64
構造力学 2	64
交通計画	65
港湾工学	65
コンクリート構造学	65
コンクリート施工法	66
情報処理	66
職業指導	66
振動学	66
水文学	67
水理学 1	67
水理学 2	67
測量学 1	67
測量学 2	68
測量学実習	68
地域都市計画	68
鉄筋コンクリート力学	69
道路工学及び施工法	69
土質力学 1	69
土質力学 2	69
土木・建築史	70
微分方程式 1	70
微分方程式 2	70

応用力学

Fundamentals of Structural Mechanics

教授・澤田 勉 2 単位

【授業目的】構造物の安全性や健全性を保証するためには、力学を駆使して、外力を受ける構造物に生じる内力（応力）や変形がどのようになるかを明らかにしなければならない。本科目では、構造物の力学に関するいくつかの基礎事項を修得させ、演習を通してそれに関する応用力を養成させる。

【授業概要】構造力学を履修するために必要となる基礎知識、すなわち、剛体の力学、部材の引張り・圧縮及びせん断、組み合わせ応力について講述するとともに、各章の終りに演習を実施して問題を解くことにより、講義内容の理解を深める。具体的には、剛体の力のつり合い、フックの法則と部材の変形、組合せ部材、直応力度とせん断応力度が混在するときの組合せ応力などの概念の修得と応用力の養成を目的とした講義を行う。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】講義中に私語をしないことと質問をすることを心がける。

【到達目標】構造力学の基礎知識を修得する。

【授業計画】1. ガイダンス 2. 力の分類と静力学の基本原理解 3. 力のモーメント及び偶力 4. 剛体のつり合い 5. 演習 6. 軸方向力による引張り及び圧縮 7. 応力度ひずみ度線図と部材の変形 8. せん断応力度と許容応力度 9. 組み合わせ部材と温度応力 10. 演習 11. 1 軸応力状態 12. 2 軸応力状態 13. 主応力と主応力面 14. 演習 15. 定期試験 16. 予備日

【成績評価】講義への取組状況及び小テスト（40%）、中間試験（30%）、定期試験（30%）の成績等を総合して評価する。

【教科書】高岡宣善著「静定構造力学」共立出版

【参考書】講義中に適宜配布する。

【連絡先】澤田(A棟307, 656-9132, sawada@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】とくになし。成績評価に対する平常点と試験（中間・定期）の比率は 4:6 とする。平常点には講義への取組状況及び小テストの成績を含み、試験には中間試験及び定期試験の成績を含む。

海岸工学

Coastal Engineering

助教授・中野 晋 2 単位

【授業目的】沿岸部の災害の現状を理解し、これらの問題に対応するために必要な流体物理現象の基礎事項について習得させる。

【授業概要】周囲を海で囲まれたわが国では常に津波や高潮などの沿岸災害の脅威にさらされている。この講義では沿岸部における諸問題を紹介した後、この問題に対応するために必要な流体物理現象について演習を交えて講義する。

【受講要件】水理学 2 を習得しておくことが望ましい。

【履修上の注意】毎講義の最後 10 分程度を用いて、150 字程度の感想・意見を記述したものを出席票として提出させる。

【到達目標】

1. 沿岸災害の実態について理解する。
2. 微小振幅波理論に基づいて波の変形が算定できる。
3. 沿岸部での砂の移動と海浜変形の考え方を理解する。

【授業計画】1. 発生が予測される南海地震・津波について 2. 高潮災害・侵食災害について 3. 海の波の基礎的性質-波長、波速、水粒子速度- 4. 海の波の基礎的性質-波による質量輸送、波のエネルギー- 5. 波浪の統計的性質 6. 風波の発生と波浪推算法 7. 波の変形-浅水変形、屈折変形- 8. 波の変形-回折変形、反射、砕波- 9. 中間テスト（波の変形計算について） 10. 潮汐 11. 高潮と津波 12. 海浜形状と海浜の底質 13. 海岸近くの流れ 14. 波と流れによる底質の移動、漂砂の方向 15. 構造物と海浜変形 16. 最終試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は出席票、レポート課題に対する内容、小テストおよび最終試験の成績を総合して行う。出席票による評価、レポート、小テスト、最終試験は 2:1:3:4 の比率で評価する。

【教科書】合田良實『海岸・港湾』二訂版、彰国社

【参考書】特になし

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】中野(A棟310, 656-7330, nakano@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし

解析力学

Mechanics

助教授・道廣 嘉隆 2 単位

【授業目的】解析力学は構造力学などの力学系専門科目の基礎となるものである。基礎物理学で履修した質点のニュートン力学につなげて、質点系および剛体の力学、ならびに解析力学の初歩を講義する。

【授業概要】運動法則より、質点系の時間変化を記述する法則、すなわち運動量の時間変化ならびに角運動量の時間変化の法則を導く。次に、

建設工学科（夜間主コース）

剛体の運動がこれらの法則で記述されることを述べる。ハミルトンの原理に従い、ラグランジュ関数とラグランジュの運動方程式を導き、これがニュートンの運動方程式と同様の意味をもつものであることを述べる。ラグランジュ関数およびラグランジュの運動方程式の習熟を目標とする。

【受講要件】基礎物理学の力学を履修しているものとする。

【履修上の注意】微分積分の基礎知識を習得していることが望ましい。

【到達目標】

1. 質点系の力学を理解する。
2. 剛体の力学を理解する。
3. 解析力学の基礎を理解する。
4. 解析力学を簡単な系に適用することができる。

【授業計画】1. 質点系の物理量 重心、運動量、角運動量 2. 質点系の力学 (1) 運動量の法則 3. 質点系の力学 (2) 角運動量の法則 4. 質点系の力学 (3) 重心からみた運動 5. 剛体 (1) 剛体のつりあい 6. 剛体 (2) 剛体の慣性モーメント 7. 剛体の運動 (1) 固定軸のまわりの運動 8. 剛体の運動 (2) 剛体の平面運動 9. 解析力学 (1) ハミルトンの原理 10. 解析力学 (2) ラグランジュ関数とラグランジュの運動方程式 11. 解析力学 (3) 一般化された座標とラグランジュの運動方程式 12. 例題 (1) 13. 例題 (2) 14. 例題 (3) 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】期末試験の成績と授業への取り組み状況を総合して行う。

【教科書】近藤 淳著 力学 裳華房

【参考書】原島 鮮著 力学 裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】道廣(A202)、道廣(A203)

【備考】目標 4 は発展的内容である。

【授業目的】戦後の環境行政の変遷を通じ、公害から地球環境問題に至った経緯を理解させ、環境破壊を起こさない土木技術者になる基礎的知識を理解させる。

【授業概要】建設工学における「環境分野」の主体は、上水道、下水道を主体とした衛生工学から、公害(大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音、振動、地盤沈下、悪臭)問題さらに地球環境問題の解決に至った経緯を把握させる。とくに近年の環境保全に関する規範としての環境倫理を理解させ、公共事業の取組に対する環境問題の基本的考え方を身近な例を多用して口述する。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】講義開始と同時に出席簿を回覧するが、不正があれば減点し、最悪の場合には受講を認めないことがある。

【到達目標】

1. 戦後から現在に至る環境観の変遷、とくに国土開発と環境問題の関係を理解している。
2. 環境倫理を理解できる。
3. 地球環境問題の基礎を理解している。

【授業計画】1. 基礎環境学の概要 2. 国土開発と環境問題(その1) 3. 国土開発と環境問題(その2) 4. 環境倫理 5. 環境基本法・環境基本計画の概要 6. 環境影響評価法の概要 7. 気圏・水圏の基礎環境科学 8. 中間試験 9. 資源としての水 10. 水害概論 11. 地球環境問題(その1) 12. 地球環境問題(その2) 13. 公共事業と環境問題(その1) 14. 公共事業と環境問題(その2) 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の3項目が各々達成されているかを試験60%、平常点(出席状況、質疑応答、レポート)40%で評価し、3項目平均で60%以上であれば合格とする。

【教科書】住友恒・村上仁士・伊藤禎彦「環境工学」理工図書

【参考書】加藤尚武「環境倫理学のすすめ」丸善ライブラリ、鬼頭秀一「自然保護を問いなおす」ちくま新書、石弘之「地球環境報告」岩波新書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】村上(総合研究実験棟504, 656-7334, murakami@eco.tokushima-u.ac.jp)

河川工学

River Engineering

教授・岡部 健士 2単位

【授業目的】安全で快適な川づくりに不可欠な要件として、まず、河川水害と土砂災害の現状を整理したのち、洪水流追跡、流砂量計算、河床変動追跡の基礎理論とその応用法を講義し、レポート出題、小テストも適宜実施して、河川計画の合理化に必要な基礎知識を習得させる。

【授業概要】まず、河川に関わる水災害と土砂災害の実体を紹介したのち、それらを抑止、軽減するための河川計画の概要を解説する。ついで、河川洪水流については、不定流の基礎式から出発して、洪水波の伝播特性の解析理論と数値計算法を講述する。土砂については、掃流砂、浮遊砂の運動論を述べたあと、河床変動の数値計算法の基礎と応用を解説するとともに、土石流の概要にも触れる。

【受講要件】特には指定しない。

【履修上の注意】「水理学Ⅰ」と「水理学Ⅱ」を履修済みであることを前提に講義する。

【到達目標】

1. 河川事業の意義と目的を理解する。
2. 洪水流の基本的な性質とその解析方法を理解する。
3. 河川計画法の概要と河川構造を理解する。
4. 土砂輸送量の特性とそれに伴う河床変動の解析法を理解する。

【授業計画】1. わが国の河川と水害 2. わが国の河川と水害 3. 河川計画と河川構造物 4. 河川計画と河川構造物・レポート 5. 河川不定流とその解法 6. 河川不定流とその解法 7. 河川不定流とその解法・小テスト 8. 河川の土砂災害と対策 9. 河川の土砂災害と対策 10. 流砂の水理学入門 11. 河床砂礫の移動限界 12. 掃流砂の理論 13. 掃流砂の理論 14. 浮遊砂の理論 15. 河床変動の解析法 16. 定期試験

【成績評価】講義への出席状況、レポートの提出状況と質、小テストならびに定期試験の成績を総合して行う。

【教科書】主に担当者が作成した講義資料を使用するが、単元3および4では、室田明編著「河川工学」(技報堂出版)を使用する。

【参考書】橋本一郎著「水理学Ⅱ」(森北出版)、芦田和男ほか著「河川の土砂災害と対策」(森北出版)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岡部(A棟309, 656-7329, okabetak@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は3:7とする。平常点には講義への出席状況、レポートの提出状況と内容を含み、試験には小テストおよび定期試験の成績を含む。

環境施設工学

Environmental Facilities

助教授・上月 康則、教授・村上 仁士 2単位

【授業目的】都市-自然環境との間で質的变化を伴う量的循環の視点で、水資源を捉えるための基礎知識を学び、そこでの問題を防止・解決する技術や施策を自ら考える素養を習得させる。

【授業概要】健全な水循環を支える施策や技術を自ら見い出せることができるような双方向性の授業を行う。まず水環境に関する学生の知識を整理し、「曖昧さ」について気づかせる。必要な知識について学生は自ら調べ、発表させる。ビデオ教材などで実例を紹介しながら、個々の知識の関係を理解させ、体系化を図る。

【受講要件】環境科学の単位を取得していること

【履修上の注意】授業中の主体的な発言やレポートを評価上、重視する。

【到達目標】1「浄化と水循環の関係」について論理的に記述することができる 2. 水質汚濁の機構を水質指標を用いて記述することができる 3. 水質汚濁の改善に必要な基本的な考え方について記述することができる 4. 水循環を支える人工施設の構成と機能を記述することができる

【授業計画】1. “浄化”とは何か?(1) 2. “浄化”とは何か?(2) 3. 水質指標 4. 水質指標指標間の相互関係 (1) 5. 水質指標指標間の相互関係 (2) 6. 有機汚濁 7. 富栄養化 8. 下水処理 (1) 9. 下水処理 (2) 10. 下水道整備の課題 11. 浄水処理 (1) 12. 浄水処理 (2) 13. 下水道整備の課題 14. 浄化と循環 (1) 15. 浄化と循環 (2) 16. 定期試験

【成績評価】講義時間内の質疑応答、レポート(40%)、定期試験(60%)の割合で評価する。

【教科書】住友恒・村上仁士・伊藤禎彦「環境工学」理工図書

【参考書】環境庁「環境白書」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】村上仁士(総合研究実験棟504)、上月康則(総合研究実験棟505)

環境科学

Fundamental Environmental Study

教授・村上 仁士
助教授・上月 康則 2単位

環境保全工学

Environmental Control

教授・村上 仁士、澤田 勉
助教授・上月 康則、鎌田 磨人、助手・三神 厚 2単位

建設工学科(夜間主コース)

【授業目的】環境の保全に必要な技術と施策に関する知識を習得し、自ら環境に配慮しつつ行動する能力を養う。

【授業概要】本講義は次の3つの内容から構成されている。(1)振動問題、(2)生態系の管理、復元と創造、(3)環境計画とその手法、施策。それぞれの内容については、建設業と関連づけ、具体例を示しながら講述する。

【履修上の注意】本講義を受講するにあたっては、環境科学、環境施設工学を修得しておくこと。本講義には3人の教官が担当する。振動問題、生態系、環境計画については、それぞれ主に澤田勉教授、鎌田助教、上月助教が講義にあたる。

【授業計画】1. 環境振動論の概要 2. 振動工学の基礎 3. 建物の振動性能と振動基準 4. 振動規制法と環境振動・小テスト 5. 土木事業と生態系 6. 生態系の価値と構造 7. 農耕地と都市の生態系とその管理 8. 生態系の変化予測と評価 9. 生態系の復元と創造技術・小テスト 10. 環境基本法と環境基本計画 11. 環境指標 12. 環境影響評価の手法と実例 13. 環境監査制度とライフサイクルアセスメント 14. 建設業の環境管理システム・小テスト 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義中の質疑応答、小テスト、定期試験の結果を総合して行う。小テストは各内容ごとに実施する。

【教科書】住友恒、村上仁士、伊藤禎彦「環境工学」理工図書

【参考書】環境庁「環境白書」、柳田裕「環境振動工学入門」理工図書、武内和彦「環境創造の思想」東京大学出版会、鷲谷いづみ「生物保全の生態学」共立出版、土木学会環境システム委員会編「環境システム」共立出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】村上(総合研究実験棟504, 656-7334, murakami@eco.tokushima-u.ac.jp)、澤田(A棟307, 656-9132, sawada@ce.tokushima-u.ac.jp)、上月(総合研究実験棟702, 656-7335, kozuki@eco.tokushima-u.ac.jp)、鎌田(A棟306, 656-9134, kamada@ce.tokushima-u.ac.jp)、三神(A棟308, 656-9193, amikami@ce.tokushima-u.ac.jp)

岩盤力学

Rock Mechanics

非常勤講師 2単位

【授業目的】土木の大規模構造物は、岩盤をその支持基盤とするか、または、その内部を掘削して建設される。これらダム、トンネル、石油地下備蓄基地、地下発電所等は、現在においては必ずしも岩盤の良好な場所のみに建設されるわけでない。そのため、その岩盤の安全性を正しく評価することは非常に重要なことである。構造物が大規模になればなるほど、岩盤力学の重要性は増してくる。そこで、岩盤にたいする正しい基礎知識を得るための講義を行う。

【授業概要】最初に岩盤力学の学問的意義を述べて、その土木工学における位置付けを理解させる。ここで学ぶこと、また、今日の研究の方向等について述べる。岩の持つ種々の力学的性質(弾性、粘性、塑性)、力学的模型について述べ、特に、その基礎となる弾性論については詳しく講義する。次に、岩盤の強度がいかなる破壊理論を満たすか、種々の破壊論を示し検討する。また、破壊という概念についても述べる。そして、岩石の強度と試験法、岩盤の強度と試験法とその評価法について述べる。この建設構造物の基礎となる現実の岩盤の強度は、その内部に存在する不連続面等の影響が非常に大きい。そこで、これら欠陥部を内在した原位置岩盤の強度を知ることが重要である。この試験法、および、岩石強度との関係などについて講義する。

【履修上の注意】この講義は「構造力学」、「材料学」、「土質力学」の基礎科目の理解がされているものとして講義される。また、途中、途中での理解度をみるため、レポートの提出を求める。毎回の予習、復習を行うこと。その他、基礎となる弾性論では式の展開が重要であるので、受講者は数学の基礎知識を得ておくこと。講義はOHPを多く用いて行う。

【授業計画】1. ガイダンス 2. 岩盤力学とは 3. 岩盤力学の歴史 4. 岩盤の力学的性質の特徴 5. 有限要素法の基礎 6. 弾性、塑性、粘性 7. 理想物体と力学的模型 8. 弾性論 1(応力状態) 9. 弾性論 2(応力とひずみ) 10. 強度と破壊、破壊とは 11. 種々の破壊理論 12. Griffith 理論 13. 岩石の強度とその試験法 14. 岩盤の力学的性質とその試験法 15. 自然現象からみた岩盤 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への出席状況、レポートの提出状況、内容および最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】山口梅太郎・西松裕一著「岩石力学入門」東京大学出版会

【参考書】多数あるので講義の中で紹介する。

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は3:7とする。平常点には講義への出席状況、レポートの提出状況と内容を含み、試験には最終試験の成績を含む。

基礎工法

Foundation Engineering

教授・望月 秋利 2単位

【授業目的】まず地盤とその調査法、鋭敏粘土の判定法を、最近問題となっている地盤の水浸沈下現象について知る。次いで地盤支持力、地中応力の算定に方法について学び、直接基礎の設計計算ができるようになる。

【授業概要】6回目までの講義で、主として地盤と調査法、土の物理量と鋭敏粘土の判定法について説明する。次いで、盛土地盤で問題となっている水浸沈下現象とそれによる被害について示す。7回目以降の講義では、主として浅い基礎の支持力と地中応力について説明する。

【受講要件】土質力学1,2を取得していること。

【履修上の注意】講義を重視しているので、欠席をしないこと。また講義にあわせて演習も行なう。教科書の他、講義ではプリントも用いる。講義中のノート、プリント、演習をまとめて1冊のノートを作り、ノートは提出する。

【到達目標】

1. 地盤の調査法の概要を知る。
2. 鋭敏粘土地盤の判定ができる。
3. 地盤の支持力、地中応力について計算ができること。

【授業計画】1. 授業概要 2. 地盤と調査概説(その1) 3. 地盤と調査概説(その2) 4. 相対含水比と地盤(その1):土の物理量 5. 相対含水比と地盤(その2):相対含水比と鋭敏粘土地盤 6. 地盤の水浸沈下と家屋被害 7. 基礎形式概説 8. Terzaghiの支持力(その1) 9. Terzaghiの支持力(その2) 10. 直接基礎の設計(その1):簡易法による地盤内応力 11. 直接基礎の設計(その2):簡易法による地盤内応力演習 12. 直接基礎の設計(その3):Osterbergの解とその演習 13. 直接基礎の設計(その4):Boussinesqの解とその演習 14. 直接基礎の設計(その5):傾斜荷重の設計 15. 期末試験 16. 予備日

【成績評価】講義への出席状況、演習レポート、期末試験の成績などを総合して行うが、平常点と試験の比率は4:6を原則とする。平常点は、講義への出席状況、レポートの成績で判定する。

【教科書】吉田 巖「基礎と地盤の工学」技報堂出版

【参考書】地盤工学関係の書物

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】望月(A棟405, 656-9721, motizuki@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する平常点と試験(中間・定期)の比率は3:7とする。平常点には講義への出席状況、レポートの成績を含む。

計画設計システム

Computer System for Planning and Design

非常勤講師・中野 真弘 2単位

【授業目的】土木施設の計画・設計支援に多用されている計算機支援設計システム(CAD)の機能、利用方法とそれを用いた構造物設計の方法を学ぶ。

【授業概要】計算機での2次元・3次元CADにふれながら講義や実例の提示などを用い、計算機支援設計に関する基本理論を説明し、身近な事例について、利用能力を養う実習等を含めて実施する。

【授業計画】1. 土木施設の計画・設計の手順 2. 企画、評価、概略設計、詳細設計 3. 計算機支援設計システムの種類 4. 2次元・3次元CAD 5. 計算機支援設計システムの機能 6. 計算機支援設計システムの利用方法 1 7. 計算機支援設計システムの利用方法 2 8. 形状の入力方法、作図法 9. 構造物設計 10. 修正、図面管理 11. 3次元設計視線システムの利用方法 12. 3次元設計視線システムの利用方法 13. パース作成 14. 発表会 15. 予備日 16. 予備日

【成績評価】出席状況、演習、レポートの提出と内容を総合して行う。

【教科書】建築知識社:JW-CAD 徹底解説 final for DOS

【備考】成績評価は平常点のみとする。平常点には講義への出席状況、演習の内容を含み、レポートの提出と内容である。

計画理論 1

Systems Analysis 1

助教授・廣瀬 義伸、非常勤講師・加藤 研二 2単位

【授業目的】社会資本・土木施設の計画立案および評価に不可欠な、土木計画学の基礎となる理論や手法について、予測・推計といった土木計画の数理問題との関連性について理解することにより、実際的な問題に対する応用力を養成することを目的とする。

【授業概要】確率・統計および回帰分析、多変量解析手法といった、土木計画学分野において用いられている基礎的な数学的分析手法につい

建設工学科 (夜間主コース)

て、教科書以外にも参考図書やプリントを利用してわかりやすく、かつ、学生の理解度を確認しながら講述する。また、適宜、演習、小テストを交えることにより、理解度を高める。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】特になし

【到達目標】土木計画分野において必要となる数学の基礎知識である、確率・統計学および多変量解析手法について理解している。

【授業計画】1. 概説、統計(統計分析の必要性) 2. 統計(種々の統計量の求め方) 3. 統計(統計分析の応用) 4. 確率(確率の概念、確率密度関数) 5. 確率(正規分布) 6. 確率(二項分布、ポアソン分布、指数分布) 7. 確率・統計の演習 8. 相関係数(相関分析の概念と必要性および相関係数の求め方) 9. 回帰分析(最小二乗法、正規方程式) 10. 回帰分析(単回帰分析) 11. 回帰分析(重回帰分析) 12. 多変量解析(多変量解析の必要性、種類) 13. 多変量解析(判別分析、クラスター分析、因子分析、主成分分析等) 14. 多変量解析(数量化理論 I~IV 類) 15. 多変量解析の結果の読み方と統計的仮説検定の考え方 16. 定期試験

【成績評価】出席状況、レポートの内容、定期試験の成績を総合して行う。

【教科書】秋山孝正・上田孝行編著 よくわかる計画数学 コロナ社

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】廣瀬(総合研究実験棟603, 656-7340, hirose@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点は、講義への出席状況、小テスト、レポートの内容から評価する。試験は、定期試験の成績から評価する。

計画理論 2

Systems Analysis 2 助教授・廣瀬 義伸、講師・滑川 達 2 単位

【授業目的】計画理論 1 に引き続き、計画の最適化に必要な数理計画手法および、土木施設の建設における工程管理のための基本的な手法について理解することにより、実際の問題に対する応用力を養成することを目的とする。

【授業概要】はじめに、線形・非線形計画問題といった、土木計画学分野において用いられている基礎的な数学的最適化手法について講述する。続いて、効率の良い施設建設計画の立案、および建設中におけるマネジメント手法である、PERT-CPM をはじめとする工程管理手法について講述する。また、適宜、演習、小テストを交えることにより、理解度を高める。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】特になし

【到達目標】

1. 土木計画分野における最適化問題の定式化の方法と、その解法についての基礎的知識を修得している。
2. 建設工事の工程計画策定のための PERT 系ネットワーク手法によるスケジュール計算方法を修得している。

【授業計画】1. 数理計画法とは(線形計画法と非線形計画法) 2. 線形計画法の基礎(目的関数と制約条件) 3. 線形計画法(図解法) 4. 線形計画法(一般的な定式化) 5. 線形計画法(規定定理とシンプレックス基準) 6. 線形計画法(シンプレックス法による最適化) 7. 線形計画法の応用 8. 非線形計画法とその解法 9. 工程管理(工程管理の基礎、PERT とは) 10. 工程管理(ネットワークの作図方法) 11. 工程管理(日程計算) 12. 工程管理(フロントとクリティカルパス) 13. 工程管理(三点見積もり法) 14. 工程管理(日程短縮手法) 15. 工程管理(山積・山崩法) 16. 定期試験

【成績評価】出席状況、演習、レポートの提出、小テストおよび定期試験の結果を総合して行う。

【教科書】秋山孝正・上田孝行編著 よくわかる計画数学 コロナ社

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】廣瀬(総合研究実験棟603, 656-7340, hirose@eco.tokushima-u.ac.jp)、滑川(A棟412, 656-9877, namerikawa@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点は、講義への出席状況、小テスト、レポートの内容から評価する。試験は、定期試験の成績から評価する。

景観工学

Landscape Engineering

教授・山中 英生、助手・三宅 正弘 2 単位

【授業目的】美しく使いやすい土木施設や都市づくりを進めるための基礎的な考え方について理解する。

【授業概要】教科書、スライドなどを用い、景観把握と分析の基礎的理論を説明し、各種施設の景観設計の手順や事例を示すとともに、身近な事例についてその景観を呈示し、それらの評価を通じて、基礎的な素養を養う演習、実習等を含めて実施する。

【到達目標】

1. 景観工学についての基礎知識を有している。
2. 景観デザインの手法を理解している。

【授業計画】1. 景観論 2. 景観工学の範囲 3. 街路 1 大通りの景観 4. 街路 2 歩車共存道路と住宅地 5. 公園 1 庭園から公園へ 6. 公園 2 大公園、小公園 7. 広場・街並み 8. 建築物誘導 1 9. 建築物誘導 2 10. 水辺・水際の景観 11. 景観計画の構成 1 12. 景観計画の構成 2 13. 環境と景観 14. 住民参加の方法 15. 予備日 16. 予備日

【成績評価】到達目標の 2 項目が達成されているかを、授業への参加度(20%) 演習(40%) レポート(40%) で評価し、2 項目それぞれが 60%以上を合格とする。

【参考書】篠原修著:土木景観計画、新土木工学体系、森北出版など 授業時に紹介する。

【連絡先】三宅(A棟411, 656-7578, miyake@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価は平常点およびレポートの総合評価とする。平常点には講義への出席状況、演習の内容を含む。

環境デザイン

Environmental & Civic Design

教授・山中 英生

助手・三宅 正弘、非常勤講師・喜多 順三、笠井 義文 2 単位

【授業目的】美しく使いやすい土木施設や都市環境づくりを進めるための基礎的な技法を体得から理解する。

【授業概要】スライドなどを用い、環境デザイン基礎理論、事例やプロセスを説明し、都市環境デザインの身近な事例についてグループごとに、ワークショップ形式で企画力やデザイン力を養う実習等を行う。

【受講要件】景観工学(前期)を履修しておくことが望ましい。

【履修上の注意】出席と授業中に実施するチームワークが評価の中心となる。

【到達目標】

1. 環境デザインの基礎知識、プロセスを理解できる。
2. 市民参加による環境デザインの技法として WS 手法を理解する。

【授業計画】1. ガイダンス(ワークの目的と WS 手法の理解) 2. 調査計画の策定 3. フィールドサーベイ 4. 課題の抽出 5. コンセプト・デザイン 6. 公共ゾーンのプランニング 7. 民間ゾーンのガイドライン 8. グループ発表 9. 地域環境デザインの基礎 10. ワーク地域デザインコンセプトプランニング 11. ワーク地域デザインコンセプトワークショップ 1 12. ワーク地域デザインワークショップ 2 13. 地域デザインディスカッション 14. 発表会 15. 予備日 16. 予備日

【成績評価】到達目標の 2 項目が達成されているかを、授業への参加度(20%) 演習(40%) レポート(40%) で評価し、2 項目それぞれが 60%以上を合格とする。

【参考書】篠原修著:土木景観計画、新土木工学体系、森北出版 鳴海・田端・榊原編:都市デザインの手法、学芸出版。その他については講義時に紹介する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】三宅(A棟411, 656-7578, miyake@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価は平常点のみとする。平常点には講義への出席状況、演習の内容を含み、レポートの提出と内容である。

建設行政法

Administration of Public Works

非常勤講師・祥瑞 明美 2 単位

【授業目的】建設事業の実施においては、関係する法律が非常に複雑、かつ多種にからまりあっていることについての理解を深める。

【授業概要】上記の講義目的を実現するために、建設事業の実施において関係してくる法律の概要を講述する。

【履修上の注意】講義回数に対して、6 割以上の出席を必要とする。

【到達目標】建設行政の関係各法令は相互に関連していることから、法令適用にあたっては偏倚することなく、公平な裁量ができる。

【授業計画】1. 1. 法規の構成と体系-1(1) 国法 1) 憲法 2. 1. 法規の構成と体系-2(1) 国法 2) 法律 3. 1. 法規の構成と体系-3(1) 国法 3) 政令 4. 1. 法規の構成と体系-4(2) 国の法令 1) 総理府令 5. 1. 法規の構成と体系-5(2) 国の法令 2) 省令 6. 1. 法規の構成と体系-6(3) 地方公共団体の自主法 1) 条例 7. 1. 法規の構成と体系-7(3) 地方公共団体の自主法 2) 規則 8. 1. 法規の構成と体系-8(4) 国家間の取り決め 1) 条約 9. 2. 法律

建設工学科(夜間主コース)

用語(1)施工法(2)施工令 10.3.法規活用上の注意(1)法規の技術基準(2)法文の解釈 11.4.建設行政法の各論-1(1)事業計画 12.4.建設行政法の各論-2(2)資金計画 13.4.建設行政法の各論-3(3)用地取得 14.4.建設行政法の各論-4(4)事業実施 15.4.建設行政法の各論-5(5)維持管理 16.5.レポート課題の提示と解説

【成績評価】最終にレポート課題を課す。試験は実施しない。レポートの評価は、建設事業と関係法規がいかにからみあっているのか、また、事業を進めるために、法的にクリアしなければならない点についての理解度をもって評価する。

【教科書】教科書は特に指定しない。必要と思われる資料については、講義中に「建設小六法」を参照したプリントを配布する。

【参考書】六法全書をはじめ、建設小六法、道路法令総覧、河川六法、港湾六法、その他道路法などの逐条解説書がある。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】滑川(A棟412, 656-9877, namerikawa@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし講義への出席状況を加味する。その比率は、平常点4:レポート6とする。

建設工学実験

Civil Engineering Laboratory 助教授・成行 義文, 長尾 文明
助教授・鈴木 壽, 上月 康則, 講師・上野 勝利, 助教授・上田 隆雄
助手・野田 稔, 三神 厚, 蔣 景彩, 助教授・竹林 洋史
助手・渡邊 健 1単位

【授業目的】建設工学における構造・水理・土質・コンクリートの各分野における基礎的な物理現象の理解を深め、実際面への応用能力を養うことを目的とする。

【授業概要】1) 構造実験:梁・門型ラーメンの曲げ挙動, トラス構造物の部材力, 梁の振動。2) 水理実験:トリチェリの定理, 粗面開水路, 水質分析。3) 土質実験:粒度・土粒子の密度試験, 締固め試験・土の一軸圧縮, 土の一面せん断, 土の圧密。4) コンクリート実験:鉄筋の諸特性, 鉄筋コンクリート梁ならびにプレストレストコンクリート梁の作成と曲げ挙動

【履修上の注意】原則として、遅刻・欠席・レポート未提出は認められない。

【到達目標】

1. 実験を自主的に遂行し、結果を分析・考察してレポートにまとめる能力を身につける。
2. 建設工学における代表的な物性試験法を習得する。
3. 建設工学に關係する原理・法則や物理的現象を体験し、各講義で修得した知識の理解を深める。

【授業計画】1. ガイダンス・班分け 2. 建設工学実験 1 3. ディスカッション 1 4. 建設工学実験 2 5. ディスカッション 2 6. 建設工学実験 3 7. ディスカッション 3 8. 建設工学実験 4 9. ディスカッション 4 10. 建設工学実験 5 11. ディスカッション 5 12. 建設工学実験 6 13. ディスカッション 6 14. 総括 15. 予備 16. 予備

【成績評価】実験およびディスカッションに積極的に参加し、班のレポートおよび個人レポートにより評価する。

【教科書】構造部門および水理部門:実験要領等をまとめたプリントを事前に配布。土質部門:地盤学会編『土質試験-基本と手引き-』, コンクリート部門:日本材料学会編『新建設材料実験』

【連絡先】上田(A棟502, 656-2153, ueda@ce.tokushima-u.ac.jp), 鈴木(A403, 656-7347, suzuki@ce.tokushima-u.ac.jp), 野田(A棟514, 656-7323, tarda@ce.tokushima-u.ac.jp), 竹林(A棟311, 656-7331, takeh@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】レポートにより評点が与えられる。

建設工学総論

Overview of Civil Engineering 教授・水口 裕之, 宇都宮 英彦
教授・平尾 潔, 橋本 親典, 端野 道夫, 岡部 健士, 山上 拓男
教授・澤田 勉, 望月 秋利, 山中 英生, 近藤 光男, 村上 仁士
2単位

【授業目的】建設工学とは何か?何を扱う工学なのか?これらの概要について、可能な限り具体的な事例を紹介しながら分かりやすく説明する。建設工学という学問体系の全体を把握し、その意義と課題を理解することによって建設技術が果たすべき役割や建設技術者の使命・倫理観を認識するとともに、建設工学への関心を高めることを目的とする。

【授業概要】建設工学の主要分野である構造工学, 水工学, 地盤工学, 計画学, 材料学及び環境工学並びに建設技術者の役割について、それぞれ2回ずつ授業計画に示すテーマと内容で講義する。

【履修上の注意】授業には毎回出席することが必須であり、授業の内容を理解するには、予習・復習など自分で調べ考えることが不可欠です。また、学期内に単位を取得できなかった者は、次年度に再受講しなければならない。

【到達目標】

1. 建設工学とはどのような事柄を対象とする工学かを理解し、それを他の人に説明できる。
2. 建設工学が果たすべき役割とその意義を理解し、それを他の人に説明できる。
3. 建設技術者として必要な素養が何であるかを認識し、それを他の人に説明できる。

【授業計画】1. ガイダンス:建設工学総論の開講目的, 授業形式, 到達目標, 評価方法等について説明する。2. 建設技術者の役割と建設工学(1):建設事業の概要を紹介し、建設技術者として必要な素養について紹介する。3. 建設技術者の役割と建設工学(2):建設技術者として必要な倫理について紹介する。4. 建設と構造物(1,2):古代から現代に至る構造物の発展過程と歴史的背景等について概観する。また、橋を例とし、その力学の基礎, 技術史・文化史, 景観設計, 事故例とそれから学んだ教訓などについて概説する。5. 水と人々の暮らし(1,2):水を治め、利用し、水環境を保全することは地域社会の成立の前提であることを実例を紹介しながら説明する。地球上の水循環, 日本の豪雨と洪水の特徴, 治水の歴史などについても述べる。6. 土のはなし(1,2):建設材料としての土が社会基盤施設(土木施設)のどのような箇所に、どのような形で活用されているかについて、その力学的・社会的・経済的特性を踏まえながら紹介する。7. 建設における計画と交通(1,2):人類は何のためにどのような社会基盤施設を造ってきたかを考える。世界における土木計画の例を紹介し、環境に配慮した都市計画を進める際の問題点, 特に交通の重要性を解説する。8. 材料と構造物(1,2):材料が社会基盤施設を造るときに役割を、力学的, 社会的, 経済的な特性や環境との関連で説明する。また、材料面から社会基盤施設における生物との共生, 環境負荷の低減, 景観などの重要性を述べる。9. 環境と建設(1,2):「環境創造」という視点から、自然との共生や社会基盤整備のあり方を考える。また、地震による環境破壊とその影響について紹介する。10. 予備日

【成績評価】授業への参加状況を考慮し、分野別のレポートの課題に対して総合的に評価して到達目標に達しているものを合格(60%)とする

【教科書】教科書は使用せず、各週の授業はパワーポイントやOHPを用いるが、テーマによっては参考資料のプリントなどが配布される。また、参考書等は各分野ごとに紹介する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】水口のオフィスアワーは前月曜日19時30分から21時00分、研究室は工学部A501室, Tel.088-656-7349, E-mail:mizuguch@ce.tokushima-u.ac.jpです。その他の教員については、教員一覧表に示されています。

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は1:0とする。

建設工学特別研究

Graduation Thesis 建設工学科全教官 12単位

【授業目的】個々の学生ごとに研究テーマを定め、担当教員の指導を受けながら研究し、その結果を論文にまとめるとともに研究成果を発表する。この研究活動を通して、未知の問題に対するアプローチの仕方、研究成果のまとめ方およびプレゼンテーションの方法を学ぶ。

【授業概要】個々の学生ごとに研究テーマを定め、担当教員の指導を受けながら研究し、1つの論文にまとめる。約半年間の研究活動を通して、未知の問題に対するアプローチの仕方と研究成果のまとめ方を身に付ける。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

建設材料学 1

Materials for Construction 教授・水口 裕之 2単位

【授業目的】所要の性能をもった建設構造物を建設するために必要な各種建設材料の種類とその特性を学習し、構造形式, 施工法と関連させた適切な材料の選定法, 使用法を学習する。

【授業概要】建設構造物を構成する材料を適切に選択し、特性に応じた使用法を理解するために、建設材料に要求される性能, その規格の意義を説明し、木材, 土石, 鉄鋼, セメント, 混和材料, アスファルト, 合成高分子などについてその性能, 使用上の注意点を講義し、建設材料に関する基礎知識とその応用力の養成を図る。

【受講要件】基礎物理学を受講しておくこと。

【履修上の注意】講義内容のまとめごとによりレポートあるいは小テストを行うので、レポート課題に関する調査や検討、毎回の授業に対する復習を行うこと。

【到達目標】

1. 建設材料に要求される性能を理解し、この要求性能と主な建設材料とを関連づけて説明できる。
2. 建設材料の物理的・化学的性質の種類とその内容を理解し、それらの性質の表し方を説明できる。
3. 建設材料の物理的・化学的性質の種類とその内容を理解し、それらの性質の表し方を説明できる。
4. 木材、土石、鉄鋼、歴青、アスファルト混合物の種類と主要な性質について理解し、建設工事に用いる場合の注意点を説明できる。

【授業計画】1. 建設材料の役割と分類・レポート (1) 2. 建設材料の性質 (1) 3. 建設材料の性質 (2) と規格等 4. 木材・小テスト (1) 5. 土石・レポート (2) 6. コンクリート用骨材 7. 鉄鋼 (1) 8. 鉄鋼 (2)・小テスト (2) 9. セメント (1) 10. セメント (2) 11. 混和材料・小テスト (3) 12. 歴青 13. アスファルト混合物・レポート (3) 14. 合成高分子及びレジンコンクリート 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】到達目標が達成されているかを試験（小テストを含む）70%、平常点（レポートと出席状況）30%で評価し、到達目標に達しているものを合格とする。

【教科書】樋口芳朗、辻幸和、辻正哲著「建設材料学（第5版）」技法堂出版

【参考書】岡田清、六車照編「新版コンクリート工学ハンドブック」朝倉書店、岡田清、明石外世樹、小柳治著「新編土木材料学」国民科学社、西林新蔵編「建設構造材料」朝倉書店

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】水口、B220、Tel.088-656-7349、E-mail:mizuguch@ce.tokushima-u.ac.jp

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は3:7とする。平常点には、講義への参加状況、レポートの提出状況とその内容を含み、試験の成績には、小テストと期末試験の成績を含む。

建設材料学 2

Materials for Construction 2 助教授・上田 隆雄 2 単位

【授業目的】安全で耐久性に富むコンクリート構造物を建設するために必要な基礎知識として、フレッシュ時および硬化後のコンクリートの基本的な性質に関して講義し、演習・レポートを実施して知識の修得を図る。

【授業概要】コンクリート構造物は適切に設計・施工された場合、強度や耐久性に優れた構造形式である。このような長所を有効に活用するために、本講義の前半部分ではフレッシュ時および硬化後のコンクリート材料に関する基礎的な性質に関して講述する。一方、後半は構造物としての耐久性に注目し、適切な維持管理方法に関して講述する。

【受講要件】建設材料学 1 の修得を受講要件とする。

【履修上の注意】5 回以上欠席したものは、定期試験の受験資格を与えない。

【到達目標】

1. フレッシュコンクリートおよび硬化コンクリートの基本的性質を理解する。
2. コンクリート構造物の劣化現象を理解するとともに、適切な維持管理、補修・補強に関する基礎事項を理解する。

【授業計画】1. コンクリート用材料概論 (1) 2. コンクリート用材料概論 (2) 3. フレッシュコンクリートの性質 (1) 4. フレッシュコンクリートの性質 (2) 5. フレッシュコンクリートの性質 (3) 6. 硬化コンクリートの性質 (1) 7. 硬化コンクリートの性質 (2) 8. 硬化コンクリートの性質 (3) 9. コンクリート構造物の耐久性 (1) 10. コンクリート構造物の耐久性 (2) 11. コンクリート構造物の耐久性 (3) 12. コンクリート構造物の維持管理 13. コンクリート構造物の補修・補強 (1) 14. コンクリート構造物の補修・補強 (2) 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、レポートの提出状況と内容、および最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】田澤 栄一 編著「エース コンクリート工学」朝倉書店

【参考書】岡田 清・明石外世樹・小柳 治 共著「新編土木材料学」国民科学社

【連絡先】上田(A棟502、656-2153、ueda@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は4:6とする。平常点には講義への参加状況、レポートの提出状況と内容を含む。

建設設計製図

Civil Engineering Design and Drawing 教授・澤田 勉
 教授・岡部 健士、助教授・鈴木 壽、上田 隆雄、講師・上野 勝利
 講師・滑川 達、助手・蔣 景彩、非常勤講師・脇川 弘 2 単位

【授業目的】実践的な土木技術者として必要不可欠な設計製図の知識・技能・応用力を各分野の専門的な内容も含めて習得する。各専門分野の計画・設計演習となっている。

【授業概要】構造部門:与えられた設計条件のもとに、道路橋合成桁の設計・製図を行う。水理部門:河川不等流計算により、河川堤防高さを決定する際の基本となる計画高水位を算定。土質部門:土の圧密試験データを整理し圧密定数及び圧密降伏応力を求めると共に、与えられた条件下で粘土地盤の圧密沈下量と圧密時間を計算。計画部門:建設工事施工計画策定における PERT によるスケジュール分析。コンクリート部門:単純支持の鉄筋コンクリート T 形ばりの設計を行う。

【受講要件】前期の橋梁設計製図では、構造力学 1 の修得を受講要件とする。水理部門:水理学 1 及び水理学の単位を取得済みであること。土質部門:土質力学 1 及び土質力学 2 の修得を前提とする。計画部門:計画理論 2 の単位を取得済みであること。コンクリート部門:鉄筋コンクリート力学の修得を受講要件とする。

【履修上の注意】前期・後期ともに第 1 週目のガイダンスに必ず出席すること。出席できないものは、事前に連絡すること。

【到達目標】

1. 前期の橋梁設計製図では、構造力学の知識を駆使して応力度や変形量を求める方法に習熟するとともに、与えられた条件下で橋梁を設計し、図面を作成する手順を修得する。また、これらの過程を通じて、構造設計の全体的な流れを理解する。
2. (水理部門):非線形方程式である 1 次元不等流の基礎式の数値解析を実行できるとともに、体裁、内容ともに実務レベルの設計書を作成することができる。
3. (土質部門):土の圧密試験データの整理方法を修得すると共に、与えられた条件下で粘土地盤の圧密沈下量と圧密時間の計算ができる。
4. (計画部門):例題工事を対象としたネットワーク工程表の作成及び、それに基づく作業スケジュール、資源配分計画を作成できる。
5. (コンクリート部門):鉄筋コンクリート力学で学んだ知識をもとに、与えられた条件下で RC はりを設計製図する。

【授業計画】1. 前期は、以下の手順で道路橋合成桁の設計および製図を行う。1. 設計条件と全般的な説明 2. 床版の設計に関する講義 3~7. 主桁の設計に関する講義 8~10. 設計書の作成 11~15. 図面および材料表の作成 16. 設計書、図面および材料表の提出。2. 後期は 4 部門の中から 1 つを選択する。後期における課題の選択にあたっては、後期第 1 週に、ガイダンスを行うので、遅刻・欠席することなく必ず出席すること。詳細については、第 1 週開始前に掲示板にて指示する。

【成績評価】前期の道路橋の設計製図は、設計書、製図及び材料表の内容により総合的に評価する。後期は、レポートの提出による。

【教科書】前期:菊地洋一・近藤明雄「橋梁設計例」オーム社、後期:原則として、各課題ごとに資料が配付される。

【参考書】前期:高岡宣善「静定構造力学」共立出版、菊地洋一・近藤明雄「橋梁工学」オーム社

【連絡先】澤田(A棟307、656-9132、sawada@ce.tokushima-u.ac.jp)、岡部(A棟309、656-7329、okabetak@ce.tokushima-u.ac.jp)、鈴木(A403、656-7347、suzuki@ce.tokushima-u.ac.jp)、上田(A棟502、656-2153、ueda@ce.tokushima-u.ac.jp)、上野(A棟406、656-7342、ueno@ce.tokushima-u.ac.jp)、滑川(A棟412、656-9877、namerikawa@ce.tokushima-u.ac.jp)、蔣(A402、656-7346、jiang@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】前期の橋梁設計、後期の選択部門の設計ともに合格点(60 点以上)を満たし、総合点として前期・後期の平均点を評点とする。

建築概論

Introduction of Architecture 非常勤講師・渡邊 速 2 単位

【授業目的】建築一般の知識を学ぶことにより、建築学への理解、並びに実践的な内容に対する理解を深める。また土木工学や建築学との差異を考えると同時に共通点を見だし、今後の町づくりや景観に対する理解を深め、社会に対しての役割を学習する。

【授業概要】以下の 4 つの分野について学習する。1. 建築一般:後世に残る名建築、有名建築家、並びに設計内容をビデオ等を用いて紹介するとともに建築士資格等について講述する。2. 建築の歴史:西洋および日本建築の建築様式の推移を述べる。3. 建築法規:建築基準法、その他関連法規の内容について講述する。4. 建築設備、構造、施工:建築物に付

建設工学科(夜間主コース)

随する設備の内容、建築物を構成する多様な構造様式ならびに実際の施工について述べる。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】特になし

【到達目標】

1. 西洋、日本の建築様式の変遷を学習することにより、各時代と建築様式の関連を理解する。
2. 建築物の計画に際して、各種関連法規等の関わりを理解する。
3. 建築物の計画に際して、計画に関わる各種留意点を理解し、説明できる。

【授業計画】1. 建築物の変遷 2. 日本の先史時代から古代の建築 3. 日本の中世の都市と住居 4. 日本の近世の都市と住居 5. 西欧における様式建築からモダニズムへの移行 6. 明治から昭和の住宅建築 7. 戦後の日本の住宅建築の試行とデザイン 8. 現代の住居建築の紹介と検証 9. 日本の現代住居の問題と今後・レポート 10. 住宅の設計 11. 計画実習1「住宅を計画する」状況の検討・レポート 12. 計画実習2「住宅を計画する」エスキース 13. 計画実習3「住宅を計画する」プランニング 14. 計画実習4「住宅を計画する」最終製作 15. 作品検証 16. 予備日

【成績評価】到達目標の3項目の理解度をレポート試験(70%)、授業への参加状況(30%)で評価し、到達しているものを合格とする。

【教科書】各時間毎にプリントを配布

【参考書】建築一般を広く概説するため、各分野毎に参考となる書籍は数多くあるのでその一部を紹介する。各自が興味のある書籍を入手すること。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】渡邊速:(有)渡辺企画設計, Tel.088-626-5785 Fax.088-626-3826 E-mail:cycymail@quartz.ocn.ne.jp

【備考】成績評価に対する平常点とレポートの比率は3:7程度とする。平常点は、授業への参加状況、態度を考慮するものとし、レポート試験については内容評価とする。

【備考】平常点とレポートの比率は5:5とし、平常点は、講義への参加状況とする。

建築デザイン論

Architectural Design Theory

非常勤講師・福井一博 2単位

【授業目的】戦後日本の住宅を取り上げ、造られた住宅、住宅づくりに関わった人の考え方、住宅が造られた歴史的・社会的背景を理解することにより建築計画・建築デザインを学ぶ。

【授業概要】戦後日本の住宅を取り上げ、造られた住宅、住宅づくりに関わった人の考え方、住宅が造られた歴史的・社会的背景を理解することにより建築計画・建築デザインを学ぶ。

【履修上の注意】履修には、建築や住宅に興味を持つことが基本となる。特に中間に課するレポートについては、興味を持って取り組んでもらいたい。

【到達目標】

1. 造られた、物としての住宅を理解する。
2. 造られた住宅を通して、造る者の考え方を理解する。
3. 住宅が造られた社会的状況から、物が造られる過程を理解する。
4. 以上のことから、物づくりに対する自らの考え方をまとめる。

【授業計画】1. 戦後日本住宅概観 2. 戦後復興と住宅 3. 戦後の住宅政策 4. 建築家の住宅づくり1: 清家清 5. 建築家による提案的住宅・1950年代 6. 集合住宅とニュータウン計画 7. 建築家の住宅づくり2: 林雅子 8. 建築家による提案的住宅・1960年代 9. 建築家の住宅づくり3: 宮脇壇 10. レポート発表会 11. 工業化住宅 12. 建築家による提案的住宅・1970年代 13. 多様な住宅づくり・建築家主導 14. 多様な住宅づくり・建築家非主導 15. 予備日(徳島県における住宅づくり) 16. 試験

【成績評価】授業への参加状況・レポート結果(発表内容も含む)・試験結果を総合的に評価する。

【教科書】各時間毎にプリントを配布する。

【参考書】主に住宅に関する書籍から適当なものを講義のなかで紹介するので、各自が興味のある書籍を入手

【WEB 頁】<http://www.hat.hi-ho.ne.jp/hero2000/>

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】福井一博:プランニングラボ(株)比呂, Tel.088-631-5252 Fax.088-631-5353 hero2000@hat.hi-ho.ne.jp

【備考】実例の住宅の図面や写真を多く取上げた授業とする。

工業基礎英語 I

Industrial Basic English (I)

非常勤講師・広田知子 1単位

【授業目的】現代社会の国際言語である英語を用いて、科学技術分野での基礎的な語彙力、読解力、リスニング力を養うことを目的とする。

【授業概要】科学技術分野で頻出の語彙や表現を増やす。イラスト、写真などを参考にしながら、内容理解のための練習問題を通して、英文を理解する力や、必要な情報を効率的に掘り出す力を養成する。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. HEAT 3. SOUND 4. COMPUTERS 5. (教科書の各章にしたがって進めていくが、途中で適宜リスニング教材やビデオ教材なども使用する。)

【成績評価】コース最終日に試験を行う。

【教科書】ENJOY SCIENCE:データバンク(1)『やさしい科学』David Crystal/John Foster Asahi Press

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】授業の前に予習しておくことが望ましい。

工業基礎数学 I

Industrial Basic Mathematics (I)

非常勤講師・吉川隆吾 1単位

【授業目的】工学を学ぶために必要不可欠となる微分・積分の基礎的な内容について理解を図り、さらに基本的な手法や計算技術を確実に習得することを目的とする。

【授業概要】1変数関数および多変数関数の微分・積分について、基礎的な内容から解説する。また、本講義の内容について、より理解を深めるために適宜演習を行う。

【授業計画】1. 微分 1:極限と連続 2. 微分 2:微分 3. 微分 3:導関数の応用 4. 積分 1:不定積分 5. 積分 2:定積分 6. 積分 3:定積分の応用 7. 偏導関数 1:多変数の関数 8. 偏導関数 2:偏導関数 9. 偏導関数 3:全微分 10. 偏導関数 4:Taylorの定理 11. 偏導関数 5:偏導関数の応用 12. 重複積分 1:重複積分 13. 重複積分 2:多重積分の応用

【成績評価】出席状況、レポート、期末考査等により総合的に評価する。

建築計画

Architectural Planning

非常勤講師・佐藤 幸好 2単位

【授業目的】建築物がつくられれば、それぞれ多くの人たちがそこで働き、寝起きし、遊び、あるいはそこに訪れるというように、その建築物に対して生活上のかかわりあいを持つ。この人たちの生活上の要求に対して、どのように応え建築空間としてまとめるかのプロセスデザインを学習する。

【授業概要】人々の生活と建築空間の対応を重視し、生活上の要求を正しく把握するとともに、これに適切にこたえうる建築空間をつくるための、理念と技術について学習する。後半では具体的な事例を想定し、計画のプロセスをワークショップ方式で体験する。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】後半はグループ作業を中心に行う。そのため、講義の出席は10回以上を原則とする。

【到達目標】

1. 建築物がつくられるまでの一般的なプロセスを理解し、それぞれの役割と関係を説明できる。
2. 人々の生活と建築空間との重要性を理解し、どのように生活上の要求に対応すべきかを説明できる。
3. 参加のデザインの重要性を理解し、どのように生活上の要求に対応すべきかを説明できる。
4. 模擬施設づくりワークショップを体験学習することで、その有効性について説明できる。

【授業計画】1. 講義内容ガイダンス 2. 講師の活動紹介 3. 建築計画と設計 4. 生活と空間の対応 5. 生活像の設定と建築空間の計画 6. 計画手法としての利用者層把握 7. 参加のデザイン(1) 8. 参加のデザイン(2) 9. 参加のデザイン(3) 10. ワークショップ手法の体験 11. ワークショップ手法の体験 12. ワークショップ手法の体験 13. 施設計画ワークショップ(1) 14. 施設計画ワークショップ(2) 15. ワークショップレポートの作成 16. 予備日

【成績評価】平常点50%、レポート50%で評価し、総合で到達目標に達しているものを合格とする。なお、平常点は出席数とグループ作業時の参加態度で評価する。またレポートは、最終講義内での到達目標の確認レポートにて評価する。

【教科書】各講義時間毎にプリントを配布する。

【参考書】鈴木成文・守屋秀夫・太田利彦編著「建築計画」実教出版

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】佐藤幸好:(有)佐藤建築企画設計, Tel.088-625-1759, Fax.088-625-9956

建設工学科（夜間主コース）

【教科書】特に指定しない。適宜、資料を配布する。

【参考書】矢野健太郎、石原繁 編「微積分(改訂版)」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義内容を確実に理解するためにも、毎回の復習は欠かさずに行い、次回の講義に望んでもらいたい。成績評価に対する「講義の出席状況、レポートの提出状況」と「小テストの成績」の割合は4:6とする。

工業基礎物理Ⅰ

Industrial Basic Physics (I)

非常勤講師・佐近 隆義 1 単位

【授業目的】

【授業概要】力学・波動・電磁気学について、ごく初歩的分野を解説する。

【授業計画】1. 運動と力: 質点及び剛体の力学, ニュートンの運動の法則, 運動量と力積・保存則 2. エネルギーと運動: 仕事, 力学的エネルギー・保存則 3. 波動: 等速円運動, 単振動, 波 4. 電気と磁気: クロウン力, 電場と電圧, オームの法則・キルヒホッフの法則, 磁場・ローレンツ力 5. 試験

【成績評価】講義への参加状況と試験の成績を総合して行う。

【参考書】高等学校で使用する物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義の最終日に試験を実施するので、毎回の復習を欠かさず行うこと。

公共計画学

Infrastructure Planning

教授・近藤 光男 2 単位

【授業目的】社会基盤施設と社会資本の定義, 社会資本の特徴, 社会資本整備の変遷など, 公共計画の基礎知識を身につけるとともに, 計画の策定過程, 目的と目標, 計画における予測と評価の考え方や手法を理解し, 公共計画の立案に必要な素養や構成力を身につけることを目的とする。

【授業概要】教科書に加え, 関連資料や現実の公共計画の事例を用い, わかりやすく講述する。必要に応じてレポートを課し, 学生の理解度を確かめながら授業を進める。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 現実の社会において社会資本整備に関わる問題点を指摘し, 今後の課題を整理して記述することができる。
2. 問題解決のための計画の枠組みが示せ, 計画に含まれる社会的な予測手法や評価手法について説明することができる。

【授業計画】1. 公共計画学の概説 2. 社会基盤施設と社会資本の定義 3. 社会資本とその特徴 4. 社会資本整備の変遷 5. 計画の策定過程 6. 計画の目的と目標 7. 計画における予測 8. 需要予測手法 9. 社会基盤整備の効果 10. 計画の評価 11. 評価手法 12. 産業連関分析 13. 産費用便益分析 14. 環境アセスメント 15. これからの公共計画 16. 定期試験

【成績評価】出席状況, レポートの内容, 定期試験の成績を総合して行う。

【教科書】河上省吾: 土木計画学, 鹿島出版会

【参考書】土木学会: 土木工学ハンドブック, 技報堂, 青山吉隆: 図説都市地域計画, 丸善

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】近藤光男, 総合研究実験棟602, 656-7339, kondo@eco.tokushima-u.ac.jp

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は, 3:7 とする。平常点には講義への出席状況, 小テストとレポートの成績を含み, 試験は定期試験の成績である。

鋼構造学

Steel Structures

助教授・成行 義文 2 単位

【授業目的】鋼構造物の設計・製作・施工等に必要の基礎知識を習得させる。

【授業概要】鋼構造物を構成する鋼材の諸特性ならびにそれらの接合方法について講述するとともに, 代表的な鋼構造物である鋼橋の桁(鋼, 合成)の設計に関する基礎知識について解説する。

【受講要件】1) 構造力学 1 ならびに構造力学 2 を受講しておくこと。

【履修上の注意】レポートの提出期限は厳守のこと。

【到達目標】

1. 鋼構造物の特徴ならびにライフサイクルを理解する。
2. 構造用鋼材の力学的性質ならびに腐食対策を理解する。
3. 構造用鋼材の溶接接合ならびに高力ボルト接合に関する知識を習得する。
4. 鋼桁および合成桁に関する知識を習得する。

【授業計画】1. ガイダンス・SI 単位系 2. 鋼構造の変遷と現状 3. 構造物の要件と鋼構造の特徴 4. 鋼構造物のライフサイクル 1. レポート 5. 鋼構造物のライフサイクル 2 6. 小テスト 1. 構造用鋼材 7. 鋼材の力学的性質・レポート 8. 鋼材の腐食とその対策 9. 設計強度と鋼種の選定 10. 小テスト 2. 溶接接合 1 11. 溶接接合 2. レポート 12. 高力ボルト接合 13. 小テスト 3. 鋼桁の構成 14. 合成桁の原理 15. 小テスト 4 16. 予備日

【成績評価】到達目標の各項目が各々達成されているかを, 平常点(出席, レポート)40%, 小テスト 60%で評価し, 全項目平均で 60%以上あれば合格とする。

【教科書】伊藤学著「鋼構造学」コロナ社

【参考書】菊地洋一・近藤明雅著「橋梁工学」オーム社, 菊地洋一・近藤明雅著「橋梁設計例」オーム社, 土木学会関西支部編 渡邊英一他著「橋のなんでも小事典(丸木橋から明石大橋まで)」講談社

【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能

【連絡先】成行(A510, 656-7325, nariyuki@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】必要に応じて適宜関連するプリントを配付し, 説明する。

鋼構造学

Steel Structures

助教授・成行 義文 2 単位

【授業目的】鋼構造物の設計・製作・施工等に必要の基礎知識を習得させる。

【授業概要】鋼構造物を構成する鋼材の諸特性ならびにそれらの接合方法について講述するとともに, 代表的な鋼構造物である鋼橋の桁(鋼, 合成)の設計に関する基礎知識について解説する。

【受講要件】「構造力学 1」, 「構造力学 2 及び演習」ならびに「構造力学 3 及び演習」を受講しておくこと。

【履修上の注意】レポートの提出期限は厳守のこと。

【到達目標】

1. 鋼構造物の特徴ならびにライフサイクルを理解する。
2. 構造用鋼材の力学的性質ならびに腐食対策に関する基礎知識を習得する。
3. 構造用鋼材の溶接接合ならびに高力ボルト接合に関する基礎知識を習得する。
4. 鋼桁および合成桁に関する基礎知識を習得する。

【授業計画】1. ガイダンス・SI 単位系 2. 鋼構造の変遷と現状 3. 構造物の要件と鋼構造の特徴 4. 鋼構造物のライフサイクル 1/レポート 1-1 5. 鋼構造物のライフサイクル 2/レポート 1-2 6. 小テスト 1/構造用鋼材 7. 鋼材の力学的性質/レポート 2 8. 鋼材の腐食とその対策 9. 設計強度と鋼種の選定 10. 小テスト 2/溶接接合 1 11. 溶接接合 2/レポート 3 12. 高力ボルト接合 13. 小テスト 3/鋼桁の構成/レポート 4 14. 合成桁の原理 15. 小テスト 4

【成績評価】到達目標 $i(i=1,2,3,4)$ の達成度を, レポート $i(30\%)$ と小テスト $i(70\%)$ で評価し, 各到達目標に対してすべて 60%以上の成績の場合に合格とする。最終成績はすべての到達目標に対する成績(各 100 点満点)の平均とする。

【教科書】伊藤学著「鋼構造学」コロナ社

【参考書】菊地洋一・近藤明雅著「橋梁工学」オーム社, 菊地洋一・近藤明雅著「橋梁設計例」オーム社, 土木学会関西支部編 渡邊英一他著「橋のなんでも小事典(丸木橋から明石大橋まで)」講談社

【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能

【連絡先】成行(A510, 656-7325, nariyuki@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】必要に応じて適宜関連するプリントを配付し, 説明する。出席回数は成績に考慮されない。また, 2/3 未満の出席回数の場合は, 成績評価の対象とはならない。

構造解析学Ⅰ

Structural Analysis

教授・平尾 潔 2 単位

【授業目的】「構造力学 1」, 「構造力学 2」の復習を兼ねて, 先ず, 実在する構造物の基本となる静定なはり, ラ-メン, トラスなどの骨組構造物の支点反力と断面力が計算できるようにする。そして仕事の原理, 特に汎用性のある仮想仕事の原理によるこれら静定構造物の変位の計算法を理解させ, 必要な変位が計算できるようにする。

建設工学科 (夜間主コース)

【授業概要】授業計画に沿って、静定なはり、ラ-メン、トラスなどの骨組構造物の支点反力と断面力の求め方を復習・説明し、仮想仕事の原理を中心とした、これら静定構造物の弾性変位を求めるための力学理論を順次講述する。また、適宜例題の解説と演習・小テストを行い、レポート(宿題)も課して、力学理論の理解を深めるとともに実際的な問題に対する応用力の養成を図る。

【受講要件】1年前・後期の「応用力学」・「構造力学1」及び2年前期の「構造力学2」を受講しておくこと。

【履修上の注意】講義の単元が終わるごとにレポートを課し、小テストを実施するので毎回予習・復習を欠かさないこと。

【到達目標】

1. 静定なはり、ラ-メン等の断面力(特に曲げモーメント)及びトラスの部材力が計算できる。
2. 仕事の原理、特に仮想仕事の原理による静定はり・ラ-メン及びトラスの変位の求め方を理解し、必要な変位が計算できる。

【授業計画】1. はりの支点反力と断面力の計算法 2. ラ-メンの支点反力と断面力の計算法・レポート 3. トラスの支点反力と断面力の計算法・小テスト 4. 仮想仕事(変位)の原理 5. 仮想仕事(変位)の原理 6. 仮想仕事の原理によるはりの変位の計算法・小テスト 7. 仮想仕事の原理によるトラスの変位の計算法・レポート 8. 仮想仕事の原理によるトラスの変位の計算法・小テスト 9. 中間テスト(範囲:はり、トラスの変位) 10. 仮想仕事の原理によるラ-メンの変位の計算法・レポート 11. 仮想仕事の原理によるラ-メンの変位の計算法・小テスト 12. 仮想仕事の原理によるラ-メンの変位の計算法・小テスト 13. 弾性変形による仕事とひずみエネルギー 14. カステリアノの定理と相反作用の定理・レポート 15. 予備日(質問の受付など) 16. 期末テスト(範囲:ラ-メンの変位)

【成績評価】到達目標の2項目各々が達成されているかどうかの成績評価は、出席・受講状況とレポート・小テストの成績からなる平常点と中間及び期末テストの成績を総合して行う。その際、平常点と中間及び期末テストの比率は4:6とし、平常点における出席・受講状況とレポート・小テストの成績の比率は2:2とする。また、中間テストと期末テストの比率は3:3とする。

【教科書】高岡宣善著 白木 渡改訂「不静定構造力学第2版」共立出版

【参考書】講義中に必要に応じ紹介する。また、補足説明用資料、演習問題等はプリントを配布し、解説する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】平尾(A521, Tel:656-7324, E-mail:cvsteng@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】受講に先立ち「応用力学」「構造力学1」および「構造力学2」を十分復習しておくこと。

構造解析学 2

Structural Analysis

教授・平尾 潔 2単位

【授業目的】実在する構造物の多くは、力の釣り合い条件式のみでは反力や断面力が求まらない不静定な構造物である。この講義では、1, 2年生で学んだ静定構造物の解析法を援用して、はり、ラ-メン、トラスなどの不静定構造物を力及び変位を未知量として解く場合の解法原理を理解させ、低次の不静定構造物については、手計算で反力及び断面力等が計算できる能力を身に付けさせる。

【授業概要】授業計画に沿って、前半は構造物に働く力を未知量とした仮想仕事の原理による不静定なはり、ラ-メン、トラスなどの解析法について講述し、後半には構造物の変位を未知量としたたわみ角法による解析法について講述する。また、適宜例題の解説と演習・小テストを行い、レポート(宿題)も課して、両解析法の理解を深めるとともに実際的な問題に対する応用力の養成を図る。

【受講要件】1年前・後期の「応用力学」と「構造力学1」、2年前期の「構造力学2」及び2年あるいは3年後期の「構造解析学1」を受講しておくこと。

【履修上の注意】講義の単元が終わるごとにレポートを課し、小テストを実施するので毎回予習・復習を欠かさないこと。

【到達目標】

1. 仮想仕事の原理による不静定構造物の解析理論を理解し、低次の不静定はり、ラ-メン及びトラスなどを手計算で解ける。
2. たわみ角法による不静定なはり及びラ-メンの解析理論を理解し、低次の不静定はり及びラ-メンを手計算で解ける。

【授業計画】1. 構造物の静定・不静定と安定・不安定 2. 仮想仕事の原理による不静定はりの解析法・レポート 3. 仮想仕事の原理による不静定はりの解析法・小テスト 4. 仮想仕事の原理による不静定ラ-メンの解析法・レポート 5. 仮想仕事の原理による不静定ラ-メンの解析法・小テスト 6. 仮想仕事の原理による不静定トラスの解析法・レポート 7. 仮想仕事の原理による不静定トラスの解析法・小テスト 8. 中間テスト(範

囲:仮想仕事の原理による不静定はり、ラ-メン、トラスの解析) 9. たわみ角法の基本公式 10. たわみ角法の基本公式 11. 節点方程式と層方程式 12. たわみ角法による不静定はりの解析法・小テスト 13. たわみ角法による不静定ラ-メンの解析法・レポート 14. たわみ角法による不静定ラ-メンの解析法・小テスト 15. 予備日(質問の受付など) 16. 期末テスト(範囲:たわみ角法による不静定はり、ラ-メンの解析)

【成績評価】到達目標の2項目各々が達成されているかどうかの成績評価は、出席・受講状況とレポート・小テストの成績からなる平常点と中間及び期末テストの成績を総合して行う。その際、平常点と中間及び期末テストの比率は4:6とし、平常点における出席・受講状況とレポート・小テストの成績の比率は2:2とする。また、中間テストと期末テストの比率は3:3とする。

【教科書】高岡宣善著 白木 渡改訂「不静定構造力学第2版」共立出版

【参考書】講義中に必要に応じ紹介する。また、補足説明用資料や演習問題等はプリントを配布し、解説する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】平尾(A521, Tel:656-7324, E-mail:cvsteng@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】受講に先立ち「応用力学」「構造力学1」「構造力学2」および「構造解析学1」を十分復習しておくこと。

構造力学 1

Structural Mechanics 1

助教授・長尾 文明 2単位

【授業目的】荷重に対し主に曲げによって抵抗する基本的な構造物(部材)である静定はりの力学について理解し、実際にこれらの部材及び構造物の設計等を行うための基礎的能力すなわち部材断面に作用する応力度・変形等が計算できる能力を身に付けさせる。

【授業概要】授業計画に沿って、はりの設計並びに解析(安全性照査)に必要な、はりの支点反力並びに断面力(曲げモーメント、せん断力)、影響線、はりに作用する応力度、弾性曲線(たわみ曲線)の微分方程式並びに弾性荷重法(モールの定理、共役はり法)によるはりの変形、等を求めるための力学理論について順次講述する。また、適宜例題の解説と演習を行い、さらに毎回レポートも課して、力学理論の理解を深め、毎回の授業の最初に前回の講義内容の理解度を確認するためのクイズを行う。これらを通じて実際的な問題に対する応用力の養成も図る。

【受講要件】応用力学を受講しておくこと

【履修上の注意】毎回レポートと小テストを実施するので、毎回の予習・復習は欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. はりの構造を理解し、反力と断面力を計算できる
2. 影響線を理解し、影響線により、はりの反力と断面力を計算できる
3. はりの曲げ理論を理解し、はりの断面に作用する応力度とはりの変形を計算できる

【授業計画】1. ガイダンス、はりの概要、支点反力その1 2. 小テスト・支点反力その2 3. 小テスト・集中荷重を受けるはりの断面力 4. 小テスト・分布荷重を受けるはりの断面力 5. 小テスト・間接荷重を受けるはりの断面力 6. 小テスト・反力の影響線 7. 小テスト・断面力の影響線 8. 小テスト・間接荷重を受けるはりの断面力の影響線 9. 小テスト・断面諸量その1 10. 小テスト・断面諸量その2 11. 小テスト・はりの曲げ応力度 12. 小テスト・はりのせん断応力度・主応力度 13. 小テスト・はりの弾性曲線 14. 小テスト・弾性荷重によるはりの変形解法 15. 小テスト・不静定はりの解法 16. 小テスト

【成績評価】到達目標の3項目が各々達成されているかを授業への参加状況+レポートの提出状況と内容(10%)、小テストの成績(90%)で評価する。

【教科書】高岡宣善著(白木 渡改定)「静定構造力学」共立出版(「応用力学」と同じ)

【参考書】講義中に紹介する。なお、演習問題等はプリントを配布し、解説する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】長尾(A515, 656-9443, fumi@ce.tokushima-u.ac.jp)

構造力学 2

Structural Mechanics

教授・平尾 潔 2単位

【授業目的】はりや並んで構造物の基本的な構成部材である柱、軸力のみを受ける部材で構成され橋梁等に多用されている静定トラス、及びねじりを受ける部材の解析理論を理解させ、設計等に必要これらの部材や構造物の断面力、応力度等が計算できる能力を身に付けさせる。

建設工学科（夜間主コース）

【授業概要】授業計画に沿って、柱及び静定トラスの設計等に必要短柱の応力度と断面の核、長柱の座屈荷重と応力度、静定トラスの部材力と影響線、棒のねじりについてそれらの解析理論を順次講述する。また、適宜例題の解説と演習・小テストを行い、レポート（宿題）も課して、解析理論の理解を深めるとともに実際の問題に対する応用力の養成を図る。

【受講要件】1年前・後期の「応用力学」および「構造力学Ⅰ」を受講しておくこと。

【履修上の注意】講義の単元が終わるごとにレポートを課し、小テストを実施するので毎回予習・復習を欠かさないこと。

【到達目標】

1. 短柱の応力、長柱の座屈荷重（応力）の解析理論を理解し、実際にそれらの値を計算できる。
2. トラスの部材力及びその影響線の解析理論を理解し、実際にそれらの値を計算できる。

【授業計画】1. 短柱の応力度 2. 短柱の中立軸・レポート 3. 断面の核・小テスト 4. 長柱の座屈荷重 5. 長柱の座屈荷重・レポート 6. 長柱の座屈応力度・小テスト 7. 中間テスト（範囲：短柱及び長柱） 8. トラスの部材力の計算法 9. トラスの部材力の計算法・レポート 10. トラスの部材力の計算法・小テスト 11. トラスの部材力の影響線 12. トラスの部材力の影響線・レポート 13. トラスの部材力の影響線・小テスト 14. 丸棒、円管等のねじり 15. 予備日（質問等の受付） 16. 期末テスト（範囲：トラスの部材力と影響線）

【成績評価】到達目標の2項目各々が達成されているかどうかの成績評価は、出席・受講状況とレポート・小テストの成績からなる平常点と中間及び期末テストの成績を総合して行う。その際、平常点と中間及び期末テストの比率は4:6とし、平常点における出席・受講状況とレポート・小テストの成績の比率は2:2とする。また、中間テストと期末テストの比率は3:3とする。

【教科書】高岡宣善著 白木 渡改訂「静定構造力学第2版」共立出版（「応用力学」「構造力学Ⅰ」と同じ）

【参考書】講義中に必要に応じて紹介する。また、補足説明用資料、演習問題等はプリントを配布し、解説する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】平尾(A521, Tel:656-7324, E-mail:cvsteng@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】受講に先立ち「応用力学」および「構造力学Ⅰ」を十分復習しておくこと。

交通計画

Transportation Planning 教授・山中 英生, 近藤 光男 2単位

【授業目的】交通の歴史および現状の問題点、実態調査データに基づく交通現象把握の手法、標準的な交通需要推計モデルを中心に交通計画の立案方法、さらに、道路交通工学、公共輸送計画、地区交通計画の基本的考え方を理解する。

【授業概要】教科書、スライドなどを用い、交通問題、調査、手法、理論、事例、法制度などについて、できるだけわかりやすく講述する。小テストを行って、理解度を確かめながら授業を進める。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】本講義は、「計画理論Ⅰ, Ⅱ」の履修を前提として講義する。

【到達目標】交通計画、特に都市交通計画に関する基礎的知識を修得する。

【授業計画】1. 交通システム概説 2. 交通問題とその対策 3. 交通実態とその調査 4. 交通需要の予測Ⅰ 5. 交通需要の予測Ⅱ 6. 交通需要の予測Ⅲ 7. 交通計画の評価 8. 道路交通システムの計画Ⅰ 9. 道路交通システムの計画Ⅱ 10. 公共輸送システムの計画 11. 交通結節点の計画 12. 都市の交通管理 13. 地区交通計画 14. これからの交通システム 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への参加状況、小テストの提出と内容、学期末の最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】塚口・塚本・日野著：交通システム、国民科学社

【参考書】授業時に指示する。

【連絡先】山中(A棟410, 656-7350, yamanaka@ce.tokushima-u.ac.jp), 近藤(総合研究実験棟602, 656-7339, kondo@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は6:4とする。平常点には講義への出席状況、小テストの内容を含み、試験は最終試験の成績である。

港湾工学

Harbor Engineering 助教授・中野 晋 2単位

【授業目的】港湾計画・設計の基礎となる海の外力、船舶、港湾機能などを習得させるとともに、沿岸防災や海域の環境保全について考える力をつける。

【授業概要】港湾計画・設計の基礎となる海岸に作用する外力、船舶、港湾機能などについて講義する。さらに沿岸防災や海域の環境保全の方法についても言及する。

【受講要件】本講義は、「海岸工学」の履修を前提として講義する。

【履修上の注意】講義ごとに150字程度の感想・意見・質問などを記述した出席票を提出させる。

【到達目標】

1. 港湾施設の種類と機能について理解する。
2. 防波堤の設計方法について理解する。
3. 海岸の保全施設の種類と機能について理解する。
4. 海域の環境保全手法について理解する。

【授業計画】1. 港湾概論 2. 港湾の施設（水域施設、外郭施設） 3. 港湾の施設（係留施設、その他施設）、レポート(1) 4. 防波堤および海岸堤防の設計(1) 5. 防波堤および海岸堤防の設計(2) 6. 防波堤および海岸堤防の設計(3)、レポート(2) 7. 海岸保全施設(1) 8. 海岸保全施設(2) 9. 海岸保全施設(3)、レポート(3) 10. 海域環境の保全(1) 11. 海域環境の保全(2) 12. 海域環境の保全(3) 13. これからの「みなど」づくりⅠ 14. これからの「みなど」づくりⅡ 15. 予備日 16. 最終試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は出席票の記述内容、レポート、最終試験の成績を総合して行う。平常点と試験の比率は5:5とする。平常点は出席票、レポートで評価する。

【教科書】合田良實著『海岸・港湾』二訂版、彰国社

【参考書】特になし

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】中野(A棟310, 656-7330, nakano@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】本講義は「海岸工学」の履修を前提として講義する。成績評価に対する平常点と試験の比率は5:5とする。平常点は小テストとレポート内容、出席状況で評価する。

コンクリート構造学

Concrete Structures 教授・水口 裕之 2単位

【授業目的】建設構造物の主要な構造材の一つであるプレストレストコンクリートの概念及び部材レベルの設計法の基礎を学習する。また、コンクリート橋の概要を理解する。

【授業概要】構造力学、鉄筋コンクリート力学などで学習した知識を基礎にプレストレストコンクリートの概念、適用例、部材レベルの設計法の基礎について講義する。また、コンクリート橋の種類とその特徴、建設計画及び施工法の概略を説明する。

【受講要件】構造力学、建設材料学、鉄筋コンクリート工学を受講しておくこと。また、鋼構造学を受講しておくことが望ましい。

【履修上の注意】単元ごとにレポートの提出あるいは小テストを行うので、レポートの提出期限を厳守し、毎回復習を行うこと。

【到達目標】

1. プレストレストコンクリートの原理と特徴を理解し、それと関連づけてプレストレストコンクリートの実用例との関連を説明できる。
2. プレストレストコンクリートは部材の設計法を理解し、はり部材の設計計算ができる。
3. コンクリート橋の種類と特徴について理解し、適切な橋梁形式を選択する基本的な考え方を説明できる。

【授業計画】1. プレストレストコンクリートの歴史・適用例 2. プレストレストコンクリートの原理とその種類 3. プレストレストコンクリート用材料とその性質(1) 4. プレストレストコンクリート用材料とその性質(2) 5. プレストレストの導入とその工法 6. プレストレスト力の変化・小テスト 7. プレストレストコンクリートの使用限界状態と曲げ部材の設計法(1) 8. プレストレストコンクリートの使用限界状態と曲げ部材の設計法(2)・レポート(1) 9. プレストレストコンクリートの終局限界状態での検討(1) 10. プレストレストコンクリートの終局限界状態での検討(2)・レポート(2) 11. コンクリート橋の用語と歴史 12. 橋梁計画とコンクリート橋用構造材料 13. コンクリート橋の構造形式とその特徴 14. コンクリート橋の施工法の概略と実橋の紹介・レポート(3) 15. 期末試験 16. 予備日

【成績評価】到達目標を達成しているかどうかを試験（小テストを含む）70%、平常点（レポート及び授業への参加状況）30%で評価し、到達目標を達成している場合合格とする。

【教科書】プリント等関係資料を配布する。

【参考書】岡村甫、前田詔一著「鉄筋コンクリート工学 改訂版」市ヶ谷出版社、小林和夫著「コンクリート構造学」森北出版、泉満明、近藤

建設工学科 (夜間主コース)

明雅著「改訂橋梁工学」コロナ社、F. レオンハルト著、横道英雄監訳、コンクリート橋、鹿島出版会

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】水口、A501、Tel.088-656-7349、E-mail:mizuguch@ce.tokushima-u.ac.jp

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は 3:7 とする。平常点には、授業への参加状況、レポートの提出状況とその内容を含み、試験の成績には、小テストと期末試験の成績を含む。

コンクリート施工法

Execution of Concrete Work

教授・橋本 親典 2 単位

【授業目的】安全で耐久性に富むコンクリート構造物を造るために、コンクリートの施工はきわめて重要である。近年、鉄鋼とともに社会基盤の建設材料として重要な構造材料であるコンクリート技術の進歩発展は目ざましいものがあり、品質向上と多様化が進み、新工法が開発されている。本講義では、良質なコンクリート構造物を造るために、重要なコンクリートの諸性質や施工の要点に関する基礎技術について講義し、レポートを実施して、コンクリート施工に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】前半部では、構造物に要求される品質のコンクリートの配合設計方法、プラントでのコンクリートの製造方法、建設現場で施工する場合の、計量、練り混ぜ、運搬、打込み、締固め、養生などの基本的事項について講義する。後半では、最近の技術の現状として、軽量、水中、流動化、その他各種のコンクリートに関する特性と施工上の要点について講義する。残り 3 講は、予備日としてコンクリート技士試験の問題を紹介する。

【受講要件】2 年前期開講の建設材料学 1 および偶数年の 2 年 3 年後期開講の建設材料学 2 を受講しておくことが望ましい。

【履修上の注意】5 回以上欠席した場合は、最終試験を受験できない場合があるので注意されたし。

【到達目標】

1. コンクリートの配合設計方法を修得する。
2. コンクリートの製造方法について理解する。
3. コンクリートの品質管理の考え方について理解する。
4. コンクリートおよび特殊コンクリートの施工方法について理解する。
5. コンクリート技士試験問題の出題傾向および講義との関連性について理解する。

【授業計画】1. コンクリートの配合設計方法 (1) 2. コンクリートの配合設計方法 (2) 3. コンクリートの製造 4. コンクリートの品質管理 5. コンクリートの検査 6. コンクリートの施工 (1) 7. コンクリートの施工 (2) 8. 各種コンクリート (1) プレストレストコンクリート他 9. 各種コンクリート (2) 吹付けコンクリート他 10. 各種コンクリート (3) 高流動コンクリート他 11. ダムと舗装・コンクリート製品 12. コンクリート構造物の維持管理と補修・コンクリートと環境 13. コンクリート技士試験問題 (1) 14. コンクリート技士試験問題 (2) 15. コンクリート技士試験問題 (3) 16. 定期試験

【成績評価】義に対する理解力の評価は、出席状況、レポートの提出状況と内容および最終試験を総合して、100 点満点中 60 点以上を合格とする。

【教科書】田澤栄一編著『エース コンクリート工学』朝倉書店

【参考書】近藤・坂編『コンクリート工学ハンドブック』朝倉書店、樋口・村田・小林『コンクリート工学 (I) 施工』彰国社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】橋本(B312, 656-7321, chika@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】出席、レポートおよび最終成績の比率は、4:3:3 である。なお、日程によっては、中間試験を実施する場合があるので、注意すること。

情報処理

Data Processing

非常勤講師・山本 耕司 2 単位

【授業目的】パソコンによる科学技術計算への入門として、データの出力や簡単な数値計算プログラムの意味が理解できること、さらに例題を参考にしながら応用プログラムが作成できることを目指す。

【授業概要】建設工学のあらゆる分野においてパソコンは重要な役割を果たしている。またこれまで大型電子計算機のみで行われてきた大規模な科学技術計算の多くがパソコンで手軽に行えるようになってきた。パソコンによる科学技術計算への入門として、BASIC プログラミングについての演習を行う。

【受講要件】情報処理 1 を履修していること

【履修上の注意】本演習ではその日に学習するプログラミングの要点と例題が説明された後、数題の簡単な課題が出され、受講者 1 人 1 人が実際にプログラミング演習を行うことにより進められる。

【到達目標】

1. Visual Basic プログラムを読み、実行内容を理解できる。
2. 例題を参考に応用プログラムが作成できる。

【授業計画】1. プログラミングの基礎 (1) 2. プログラミングの基礎 (2) 3. 簡単な入出力と変数 4. 代入文と関数 5. 条件と分岐命令 (1) 6. 条件と分岐命令 (2) 7. プログラミングテスト (1) 8. 配列と繰り返し命令 (1) 9. 配列と繰り返し命令 (2) 10. サブルーチン 11. ファイルの入出力 12. 応用プログラミング (1) 13. 応用プログラミング (2) 14. 応用プログラミング (3) 15. プログラミングテスト (2) 16. 最終試験

【成績評価】平常成績と最終試験で総合的に評価する。平常成績は毎回示される課題に対する評価と 2 回実施されるプログラミングテストで評価する。

【教科書】教科書は使用しない。授業の際はホームページ上の電子テキストを利用するほか、必要に応じてプリントを配布する。

【参考書】講義の中で紹介する

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】山本(665-1300, yamamoto@keiei.shikoku-u.ac.jp)

【備考】特になし平常点 80%, 定期試験 20%

職業指導

Vocational Guidance

非常勤講師・坂野 信義 4 単位

【授業目的】

【授業概要】生涯発達・Career Developing としての人間観・職業観を確立すべく、学際の見地から職業指導の課題と方法を論述し、併せて能力開発を実践指導する。

【授業計画】1. I. 職業指導の課題と方法 2. 職業指導発展の略史 3. 職業指導の課題 4. 個性と職業 5. 1) 個人理解の方法-性格、興味など 6. 2) 適応と適性 7. 3) Career Planning としてのライフワーク 8. 4) マネジメントスキル:リーダシップ論など 9. 職業相談(キャリア・カウンセリング) 10. 1) 職業相談の意義 11. 2) カウンセリング理論と技術 12. 職業指導の評価 13. II. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 14. 人生 60 年計画表の作成 15. IC 法, NM 法を活用してソフト作成能力を育成 16. KJ 法を活用しての課題解決とプレゼンテーション

【成績評価】論文、能力開発のプレゼンテーションにより成績評価。

【教科書】講師よりプリント資料配布。参考書、必読書については、講義中紹介。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】「面白くてためになり、そして思い出に残る」講義が目標。

振動学

Structural Dynamics

教授・宇都宮 英彦 2 単位

【授業目的】1 本のバネに吊るされた錘の運動を詳細に分析することによって、つり橋のような複雑な構造物の振動問題の解析へと発展させることができることを学ぶ。理解度を確認するために講義の終りに毎回質問票を提出させる。

【授業概要】構造物の振動現象を単純なモデルで表現して、動的な力の平衡条件から定式化して振動現象の本質を把握したのち、2 自由度系に対して振動形解析法を適用して、この方法により多自由度系の振動が 1 自由度振動の重ね合わせによって解析できることが示される。

【受講要件】基礎物理学 (特に力学) および微分方程式の基礎的な部分を習得していること。

【履修上の注意】動力学の入門段階から講義するが、演習の時間が少ないことから、理解を深めるための受講生の自主的な取り組みが要求される。授業内容に関して適宜小テストを行うので、授業への集中が必要である。

【到達目標】

1. 慣性力, ダランベールの原理と動的平衡の概念を修得する
2. 1 自由度系の自由振動方程式を通して振動の基本事項を知る。
3. 1 自由度系の強制振動, 不規則振動解析手法を会得する。
4. 2 自由度系における振動数方程式, 振動モードを求めることができる。
5. 2 自由度系における振動形解析法を実行でき, 多自由度系への拡張法を理解できる。

【授業計画】1. 振動現象の種類と記述 2. 1 自由度系の自由振動: 運動方程式と解 3. 1 自由度系の自由振動: 運動方程式と解・演習 4. エネル

建設工学科(夜間主コース)

ギー法; 固有振動数の近似解法 5.1 自由度系の減衰自由振動 6. 強制振動; 力強制と変位強制 7. 過渡振動と不規則振動解析 8. 2 自由度系の自由振動; 振動数方程式 9. 2 自由度系の自由振動; 振動数方程式・演習 10. 2 自由度系の強制振動; 動吸振器の原理 11. 一般座標と一般力, ラグランジュの運動方程式 12. 振動形解析法(モーダルアナリシス) 13. 振動形解析法(モーダルアナリシス)・演習 14. 多自由度系の強制振動 15. 1 次元分布質量系の振動 16. 期末試験

【成績評価】授業への参加状況すなわち授業中の双方向での質疑応答の状況, 質問票の内容と定期試験による。

【教科書】小坪清眞著「入門建設振動学」森北出版

【参考書】D. ハルトック著, 谷口修訳「機械振動論」コロナ社, S. チモシェンコ著, 谷下訳「工業振動学」コロナ社, 中井博著「土木構造物の振動解析」森北出版, 吉原進著「建設系のための振動工学」森北出版

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】宇都宮(A513, 656-7322, utsuno@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】平常点となる小テストおよび授業への参加状況と定期試験の比率は 4:6

【授業計画】1. 水理学とは何か 2. 次元と単位 3. 水の性質とふるまい, 小テスト 4. 静水圧 5. 平板や曲面に働く静水圧(1) 6. 平板や曲面に働く静水圧(2) 7. 浮力と浮体の安定 8. マノメータ 9. 相対的静止, 小テスト 10. 運動量の定理の基礎 11. 運動量の定理の応用 12. 運動量の定理の応用(2), 小テスト 13. ベルヌーイの定理 14. ベルヌーイの定理の応用(1) 15. ベルヌーイの定理の応用(2) 16. 最終試験

【成績評価】講義への出席状況, 小テスト及び期末定期試験の成績を総合して行う。平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点には講義への出席状況, 小テストの成績を含む。

【教科書】玉井信行・有田正光共編「水理学」

【参考書】オーム社林泰造著『基礎水理学』鹿島出版会, 鈴木幸一著『水理学演習』森北出版

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】竹林(A棟311, 656-7331, takeh@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は 5:5 とする。平常点には主にレポートの提出状況と内容, 小テストで評価する。

水文学

Hydrology

教授・端野 道夫 2 単位

【授業目的】河川流域を対象として, 降雨, 流出, 遮断蒸発, 蒸散等の流域の水循環とその素過程について講義し, 小テスト, レポートと期末テストを実施して, 基礎的知識と解析法を修得させる。

【授業概要】水文学(すいもんがく)とは, 地球の水を取り扱う科学であり, 地球上の水の発生, 循環, 分布, およびその物理的ならびに化学的特性, さらに物理的ならびに生物的環境と水との相互関係を取り扱う科学である。これには, 人間活動への応答も含まれる。このように, 水文学は極めて広範囲にわたっているが, 本講義では, そのうち, 河川とその流域を中心とした水文現象を扱うことにする。

【履修上の注意】小テストを 4 程度予定している。小テストをする前の週には, その旨予告する。

【到達目標】

1. 水循環に関連する水文諸量の調査法について理解する。
2. 降水現象およびわが国の豪雨の特徴と構造について理解する。
3. 森林域における遮断蒸発現象と蒸散現象について理解する。
4. 降雨流出モデルとその解法について理解する。

【授業計画】1. 水文学の範囲, 水循環と河川流域 2. 降水量, 流量, 地下水の調査 3. 降水, 河川, 地下水の水質調査・小テスト 4. 地球規模の水循環と日本の降水量・蒸発量 5. 大気現象の規模と寿命, 降水の種類と原因 6. 豪雨の特徴と構造・小テスト 7. 台風の構造と特徴 8. DDA 解析 9. 流域平均雨量の算定法・小テスト 10. 降雨の流出過程及び関連の素過程 11. 遮断蒸発と蒸散 12. 流出過程のモデル化 13. 流出モデルとその解法 14. 流出モデルとその解法・小テスト 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の各項目が達成されているかを試験 50%, 平常点(小テスト, レポートと出席状況)50%で評価し, 総合評価 100 点満点で 60 点以上あれば合格とする。

【教科書】室田 明編著「河川工学」技報堂出版

【参考書】山本荘毅・高橋 裕著「図説水文学」共立出版, 高橋 裕編「河川水文学」共立出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】端野道夫, A517, 088-656-7332, michio@ce.tokushima-u.ac.jp

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は 5:5 とする。平常点には, 講義への出席状況, 小テストの成績を含み, 試験は期末定期試験の成績を用いる。

水理学 1

HYdraulics (1)

助教授・竹林 洋史 2 単位

【授業目的】静水力学と完全流体の流れに関する基本事項を習得させる。

【授業概要】河川, 海岸, 港湾, 上下水道の計画・設計の基礎となる水理学のうち, 静水力学と完全流体の流れに関する基本事項を講義する。演習では講義内容に沿った例題を与え, 実際の問題への応用力を養成する。

【履修上の注意】平常点は 4 回的小テストと随時行うレポートの内容を主に評価するので, 毎回の予習・復習は欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. 流体の物理的性質を理解する。
2. 静水圧の計算問題ができる。
3. ベルヌーイの定理を理解し, これに関した計算ができる。
4. 運動量の定理を理解し, これに関した計算ができる。

水理学 2

Hydraulics (2)

助教授・中野 晋 2 単位

【授業目的】管水路と開水路の流れに関する基本事項を習得させる

【授業概要】河川, 海岸, 港湾, 上下水道の計画・設計の基礎となる水理学のうち, 管水路と開水路の流れに関する基本事項を講義する。演習では講義内容に沿った例題を与え, 実際の問題への応用力を養成する。

【受講要件】水理学 1 の履修を前提とする。

【履修上の注意】平常点は 4 回的小テストと随時行うレポートの内容を主に評価するので, 毎回の予習・復習は欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. 層流と乱流の流速分布と摩擦抵抗則を理解する。
2. 単線管路や並列管路の流れ計算ができる。
3. 開水路不等流において水面形の概形を描くことができる。

【授業計画】1. 壁面の摩擦力 2. 層流の流速分布 3. 乱流の流速分布 4. 管水路の摩擦損失水頭 5. 管水路の平均流速公式, 形状損失係数 6. エネルギー線と動水勾配線 7. 単線管路の計算 8. 分流と合流管路, ポンプと水車 9. 中間試験 10. 開水路定常流の基礎式 11. 常流と射流 12. 開水路の等流 13. 開水路の不等流の基礎式 14. 一様断面水路の水面形 15. 不等流の水面形計算法 16. 最終試験

【成績評価】平常点と 2 回の定期試験より総合的に評価する。平常点には講義への出席状況, レポート結果を考慮し, 試験は中間試験と最終試験で評価する。平常点と試験の比率は 2:8 とする。

【教科書】日下部重幸・壇和秀・湯城豊勝著『水理学』コロナ社

【参考書】鈴木幸一著『水理学演習』森北出版

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】中野(A棟310, 656-7330, nakano@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし

測量学 1

Surveying1

非常勤講師・藤井 清司 2 単位

【授業目的】社会活動の基盤を支える多くの土木構造物の建設を計画し, 設計し, 施工するとき, その基礎資料となるのは, 正確な測量から得られた地図である。その地図作製のための学問が測量学である。そこで, 以下のような項目について, 修得できるように講義する。1. 測量に用いる器械器具の構造・使用法・検査およびその調整法 2. 野外での測量作業の方法および野帳の記入法 3. 測定結果を計算し, その精度を調べ, また測量結果によって地図を作り, さらに面積・容積などを計算する方法

【授業概要】測量では, 距離, 方向角, 高低差が測定の 3 要素であり, その測定器械, 測定法について講義する。そして, 地図を作製するために, 上の測量方法を応用して, 骨組み測量, 細部測量へと発展させ, 測定値の調整計算・面積計算を行い, 地図を作製する方法を述べる。

【受講要件】この教科目を履修するには, 数学, 幾何学, および, 図学の知識が基礎となる。そこで, これまでの教育課程において履修した数学等の基礎知識を復習し, 充分身に付けておくこと。

【履修上の注意】この教科目は建設工学の全ての基礎となるものであり, また, 建設工学の専門科目の最初に学ぶものである。最初からしっかりと理解しながら修得を心がけて受講すること。本講義は「測量学実習」と対をなすものであり, 実習を行うことにより一層の理解が可能となる。そして, その内容は「応用測量学」へとつながっていく。また, この科目の取得は, 卒業後の「測量士補」「測量士」の資格条件となる。

【到達目標】

建設工学科(夜間主コース)

1. 「測量学とは何か」を、まず理解する。
2. 建設工学における、測量学のしめる位置、その重要性・必要性を認識する。
3. 測量に用いる器械器具の構造・使用法・検査およびその調整法を理解修得する。
4. 野外での測量作業の方法および野帳の記入方を理解する。
5. 測量法として、距離測量、平板測量、トランシット測量、水準測量、およびスタジア測量を理解する。
6. 測量結果を計算し、その精度を調べ、また測量結果によって地図を作製する方法を理解する。
7. 計算法として、経緯距法と面積・容積計算法を理解修得する。

【授業計画】1. ガイダンス・測量学緒論 2. 距離測量 1 3. 距離測量 2 4. 平板測量 1 5. 平板測量 2 レポート 6. トランシット測量 1 7. トランシット測量 2 8. トランシット測量 3 9. トランシット測量 4 レポート・小テスト 10. 経緯距法 1 11. 経緯距法 2 レポート 12. 水準測量 1 13. 水準測量 2 14. 水準測量 3 レポート・小テスト 15. スタジア測量 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力は、到達目標の7項目が各々達成されているかを授業への参加状況、レポートの提出状況と内容、小テストの成績、最終試験の成績で総合的に評価する。

【教科書】森 忠次著「改訂版測量学1基礎編」丸善、小田部和司著「図解土木講座 測量学」第2版技報堂出版、上の教科書を使用するが、それのみでは十分理解できないと思われる部分については、プリントを配布し補助資料とする。

【参考書】参考書は授業中においてその都度紹介される。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】藤井清司(Tel:0884-23-7188, Email:fujiki@anan-nct.ac.jp)

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は3:7とする。平常点には講義への出席状況、レポートの提出状況と内容を含み、試験には小テストと最終試験の成績を含む。

測量学 2

Applied Surveying 2 非常勤講師・滝根 文司 2 単位

【授業目的】建設工事の入り口としての測量の存在意義と土木構造物施工の原点を学ぶ。

【授業概要】水準測量から路線計画の縦断測量、基準点から座標の算出、路線計画の中心線設置までの総合的關係、構造物の計画から施工の指標を修得する。

【受講要件】測量学1を受講しておくこと。

【履修上の注意】実外業ができない教室での話から理解しにくい点もあるから自主的に建設現場の訪問を心がける。座標平均計算は数学的基礎知識が要るのでこれも自主的学習が必要であろう。

【到達目標】

1. 精密水準点の定誤差の補正、偶然誤差の補正を最小自乗法をどのように適用するかを学ぶ。
2. 既設基準点から新設点の座標を観測方程式の組み立て、補正値の吟味を学ぶ。
3. 道路の計画過程での測量の役割と、施工のための測量を学ぶ。

【授業計画】1. 水準点の建設現場での役割 2. BMの移動の平均計算 3. トラバース測量と日本平面座標系との関係 4. 既設三角点から新基準点を造る測量 5. 観測方程式の組立 6. 座標平均計算 7. 道路計画の手順と測量の役割 8. 中心線測量と道路構造 9. 縦断図・平面図・横断図の作成から理解 10. 平面線形と縦断線形 11. 曲線設置法 12. 最近の話題のトータルステーション、GPS利用の測量について 13. 予備 14. 予備 15. 予備 16. 最終テスト

【成績評価】毎回講義のあと当日の概要を書いて提出(A4 1枚)記事により講義への取り組みを評価する。その上最終試験の成績を加味する。

【教科書】測量学2応用編 石原 藤次郎・森 忠次著 丸善出版

【参考書】最小二乗法の理論とその応用 田島 稔著、測量の誤差計算 岡積 満著、測量士・補国家試験問題集と解説(平成9.10.11年版) 測量協会、球面三角法とその解法 高橋 巖著

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】滝根文司(Tel:0884-22-0065, E-mail:xfwgd130@ybb.na.jp)

【備考】毎回の講義概要と最終試験の比は4:6

測量学実習

Surveying Practice 助教授・鎌田 磨人、講師・滑川 達 助手・三宅 正弘、渡邊 健 1 単位

【授業目的】以下に示す「測量学」における講義目的・目標について実習を通じて理解を深める。1. 測量に用いる器械・器具の使用法等、2. 野外での測量作業の方法および野帳の記入法、3. 内業として、測定結果を計算し、精度を調べ、製図を行う。

【授業概要】1. トランシット・トラバース測量および経緯距計算 測量において最も重要な器械であるトランシットの使用法を修得し、トラバース測量を行う。その測定結果を調整計算し、精度を調べ、面積計算も行う。そして、トラバースの製図を行う。2. 平板測量 非常に簡単な測量器具である、アリゲード、平板、巻尺等を使用し、トランシットによって作成したトラバースを基準にして細部測量を行う。そして、この簡単な測量法により、測量の基礎的な技術を会得しつつ、その一連の流れを理解する。3. 水準測量およびスタジア測量 現場にそくするように交互水準を含んだ、路線水準測量を行う。それら測点間の距離をスタジア測量により求め、水準測量の結果を調整する。

【受講要件】測量学を受講すること

【履修上の注意】測量実習は日中でなければ実施できないため、夏期休業期間中に行われる。実習は班を編制して行うので、班員同士よく協力して、各自の責任を果たすこと。また野外で行われるので、各自種々の危険に対して十分に注意する事。具体的には、サンダル履きでの実習参加は認めない。また帽子等を着用し、日射病に注意する事。

【到達目標】

1. トランシットの操作方法と測角方法に習熟すること。
2. トランシット・トラバース測量の測量作業に習熟し、野帳への記録方法、誤差の評価方法、ならびに成果物の作成方法を修得すること。
3. 平板とアリゲードの操作方法ならびに平板測量の測量作業に習熟し、平面図の作製方法を修得すること。
4. レベルとスタッフの操作方法ならびに水準測量とスタジア測量の測量作業に習熟し、野帳への記録方法、誤差の評価方法、ならびに成果物の作成方法を修得すること。

【授業計画】1. ガイダンス・平板測量説明 2. 平板測量(骨組み) 3. 平板測量(骨組み)・レポート 4. 平板測量(細部) 5. 平板測量(細部)・レポート 6. トランシット・トラバース測量 7. トランシット・トラバース測量 8. トランシット・トラバース測量 9. トランシット・トラバース調整計算・製図 10. トランシット・トラバース調整計算・製図・レポート 11. 測角テスト 12. 水準測量・スタジア測量 13. 水準測量・スタジア測量・レポート 14. 予備日 15. 予備日 16. 予備日

【成績評価】目標に挙げた4項目が各々達成されているか、レポートあるいは実技試験(測角テスト)によって評価し、各々60%以上であれば合格とする。なお、実習への遅刻・欠席した者、ならびにレポートの未提出者は単位を認めない。

【教科書】測量学で指定された教科書、図解 土木講座 測量学 小田部 和司 著、技報堂出版 ISBN4-7655-1385-8 C3051

【参考書】測量学の授業中において紹介される。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】滑川(A棟412, 656-9877, namerikawa@ce.tokushima-u.ac.jp)、鎌田(A棟306, 656-9134, kamada@ce.tokushima-u.ac.jp)、三宅(A棟411, 656-7578, miyake@ce.tokushima-u.ac.jp)、渡邊(A棟506, 656-7320, watanabe@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】出席 20:レポート 80。

地域都市計画

Regional and Urban Planning

教授・山中 英生、近藤 光男 2 単位

【授業目的】都市あるいは地域という広い空間を、長い年月をかけて計画的に創造していくための制度、事業手法、財源、などを諸外国と比較しながら理解させる。

【授業概要】教科書を用いて国土計画、地域計画および都市計画の歴史、内容、手法、理論、法制度などについて講述する。小テストを行って、理解度を確かめながら授業を進める。

【受講要件】特になし

【到達目標】都市計画・地域計画に関する基礎的知識を修得することを目標とする。

【授業計画】1. 国土計画 2. 地域計画 3. 都市と地域 4. 地域・都市計画の歴史 5. 地域・都市計画の歴史 6. 都市計画のためのマクロ分析 7. 土地利用計画 8. 住環境計画 9. 都市交通計画 10. 都市施設計画 11. 景観計画 12. 都市環境と公害 13. 都市整備の事業手法 14. 計画立案プロセス 15. 予備 16. 定期試験

【成績評価】授業への参加状況、小テストの提出と内容、学期末の最終試験の成績を総合して行う。

建設工学科（夜間主コース）

【教科書】加藤晃：都市計画概論第4版，共立出版

【参考書】天野光三編：図説都市計画，丸善

【連絡先】山中(A棟410, 656-7350, yamanaka@ce.tokushima-u.ac.jp)，
近藤(総合研究実験棟602, 656-7339, kondo@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は6:4とする。平常点には講義への出席状況，小テストの内容を含み，試験は最終試験の成績である。

鉄筋コンクリート力学

Reinforced Concrete Mechanics

教授・橋本 親典 2単位

【授業目的】現在の社会基盤整備を支えており，鋼構造とともに建設構造物の主要な構成要素である鉄筋コンクリート構造物を，合理的でかつ経済的に造ろうとする場合，鉄筋コンクリート独特の力学に関する知識が要求される。本講義では，鉄筋コンクリート力学に関する基礎技術について講義し，レポートを実施して，鉄筋コンクリート構造物の設計に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】鉄筋コンクリートの特徴ならびにコンクリートと鉄筋の力学的性質について講義し，実際に設計に必要な曲げ耐力，曲げと軸方向力に対する耐力，せん断耐力について，力学的観点から理解させる。また，曲げ応力度，ひび割れ，ねじり耐力，疲労設計や定着等の設計項目についても言及する。

【受講要件】1年後期開講の構造力学1及び2年前期開講の構造力学2を受講していることが望ましい。

【履修上の注意】5回以上欠席した場合は，最終試験を受験できない場合があるので注意されたし。

【到達目標】

1. 鉄筋コンクリートの特徴を理解する。
2. 設計に用いる鉄筋とコンクリートの力学的性質について理解する。
3. 鉄筋コンクリートの限界状態設計法概念について理解する。
4. 鉄筋コンクリート部材の曲げ耐力および曲げと軸力を受ける部材の相互作用図の算定方法を修得する。
5. 曲げ応力度および曲げひび割れ幅の算定方法を修得する。
6. 鉄筋コンクリート部材のせん断耐力の算定方法およびせん断耐力と曲げ耐力の関係と破壊形式の関係を理解する。

【授業計画】1. 鉄筋コンクリートの特徴 2. コンクリートの力学的性質 3. 鉄筋の力学的性質 4. 限界状態設計法と部分安全係数(その1) 5. 限界状態設計法と部分安全係数(その2) 6. 断面の曲げ耐力(その1) 7. 断面の曲げ耐力(その2) 8. 曲げと軸方向力に対する断面の耐力(その1) 9. 曲げと軸方向力に対する断面の耐力(その2) 10. 中間試験 11. 曲げ応力度 12. 曲げひび割れ幅に対する検討 13. 棒部材のせん断耐力(その1) 14. 棒部材のせん断耐力(その2) 15. せん断耐力と曲げ耐力の関係・構造物の破壊形式 16. 期末試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は，講義への参加状況，レポートの提出状況と内容および最終試験の成績を総合して，100点満点中60点以上が合格とする。

【教科書】岡村甫・前田詔一「鉄筋コンクリート工学」市ヶ谷出版

【参考書】吉川「鉄筋コンクリートの解析と設計」丸善，土木学会編，池田・小柳・角田著「(新体系土木工学32)鉄筋コンクリートの力学」義報堂出版，田辺・檜貝・梅原・二羽「コンクリート構造」朝倉書店，村田二郎編「入門鉄筋コンクリート工学」技報堂出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】橋本(B312, 656-7321, chika@ce.tokushima-u.ac.jp)

【備考】出席，レポートおよび最終成績の比率は，4:3:3である。なお，日程によっては，中間試験の実施日が変更する場合がありますので注意すること。

道路工学及び施工法

Road Engineering and Construction Engineering

教授・望月 秋利 2単位

【授業目的】道路の構造を主体として，舗装材料，アスファルト，舗装の設計について学ぶ。また施工法の基礎として，地盤の調査及び土の締め固めについて学ぶ。

【授業概要】前半の10回までは主として道路工学，道路構造，舗装及び道路の施工に関して，また後半では主として地盤調査法について講述する。

【履修上の注意】まず講義に出席すること，演習や課題のレポートは自分で考えて解くこと。

【授業計画】1. 交通と生活 2. 交通の基礎的統計 3. 道路の構造 (1) 4. 道路の構造 (2) 5. 路床と路盤 6. 舗装材料 7. アスファルトの性質 8. 土

の締め固め 9. 舗装の設計 (1) 10. 舗装の設計 (2) 11. 地盤調査概説 12. サウンディングによる調査法 13. 物理探査法 14. 予備日 15. 試験

【成績評価】講義への出席状況，レポート，期末試験の成績などを総合して行う。

【教科書】福田正，松野三郎「道路工学」，朝倉書店

【参考書】日本道路協会「道路土工」，日本道路協会「道路舗装要項」

【備考】成績評価に対する平常点と試験(中間・定期)の比率は3:7とする。平常点には講義への出席状況，レポートの成績を含む。

土質力学 1

Soil Mechanics 1

助教授・鈴木 壽 2単位

【授業目的】地盤の力学的な問題解決に必要な土質力学の基本事項を実際の現場の現象を交えながら講義し，演習，小テストを実施して実際問題解決への応用力も養う。

【授業概要】まず，土の力学を学習するために不可欠な土の分類および土の基本物理量に関する事項を演習も交えながら修得させ，安全な土構造物を構築するために必要な土の締め固め特性，また，堤防・アースダムなどの漏水，浸透破壊を予測するのに必要な透水現象について講述する。

【履修上の注意】基本的に，小テストは授業に即した内容で，最終試験は応用も試す内容とする。小テストは合計5回実施するので，日頃から予習・復習に心掛けること。

【到達目標】土質力学における土の基本物理量の習得と締め固め，透水の力学的現象の把握

【授業計画】1. 「土」とは? 土の成分，土質力学の成立 2. 応力～ひずみ関係のモデル化 3. 土質力学の現場への適用例・小テスト 4. 土粒子の形と大きさ・三角座標による分類 5. 粒度分析・土のコンシステンシー 6. 堆積粘性土の構造 7. 堆積砂粒土の構造・小テスト 8. 土の基本物理量 9. 土の基本物理量・小テスト 10. 土の締め固め特性 11. 土の締め固め特性・小テスト 12. 透水ベルヌーイの定理，ダルシーの法則 13. 透水透水係数の求め方・透水解析の基礎方程式 14. 透水正方形フローネット・透水力 15. 透水 境界動水勾配・小テスト 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への出席状況，演習，小テストおよび最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】石井義明ら著 最新土質力学 朝倉書店

【参考書】松岡 元著 土質力学 森北出版

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は4:6とする。平常点には講義への参加状況，演習の回答および小テストを含み，試験とは最終試験を意味する。

土質力学 2

Soil Mechanics 2

教授・望月 秋利 2単位

【授業目的】土質力学の内，その基本となる土の物理特性についてまず復習し，次いで土中水の力学，圧密現象，せん断の基礎について，演習をあわせて行ない，基礎力をつける。

【授業概要】土の物理特性の定義と意味についてまず復習し，演習を行なって土質力学2を学ぶための導入を行なう。次いで土中水の力学の内，透水係数，流量，流線網，動水勾配等の基礎的な知識について講義すると共に，演習をあわせて行なう。次いで間隙水圧，有効応力等について学び，ボーリング現象について講義し，演習をあわせて行なう。圧密については，まず概要を説明し，圧密に関する諸定数の定義について講義し，演習では圧密沈下量の計算を行なう。最後に土のせん断と安定問題，せん断強度についての概要を説明する。

【受講要件】土質力学1の単位を取得していること。

【履修上の注意】授業を重視しているので，必ず出席すること。また演習を積極的に行ない，授業内容の理解に務めること。授業には教科書の他にプリントを用いる。

【到達目標】

1. 土質力学に関する基礎事項を理解し，簡単な演習問題が解けるようになること。
2. 土中水の特性を理解し，流量計算，流線網，水の流れによる力等を理解し，簡単な演習問題が解けるようになること。
3. 圧密現象の基礎について理解し，圧密による沈下量計算ができるようになること。

【授業計画】1. 授業概要，土の物理特性の定義と意味 2. 土の物理特性の定義式誘導とその演習(その1) 3. 土の物理特性の定義式誘導とその演習(その2) 4. 土中水の力学:ダルシー則の概要と浸透流量の計算 5. 土中水の力学:ダルシー則の意義と浸透流量の計算 6. 流線と等ポテンシャル線，動水勾配 7. 流線網の演習と流量の計算 8. 浸透流と間隙水

建設工学科(夜間主コース)

圧、全応力と有効応力 9. 浸透流と間隙水圧、ポイリング現象とその対策、演習 10. 圧密現象の概要、圧密で用いる諸定数の概念 11. 間隙比-log(p) 関係と沈下、正規圧密粘土と過圧密粘土、圧密降伏応力 12. 圧密沈下に関する諸定数と沈下量の計算(その1) 13. 圧密沈下に関する諸定数と沈下量の計算(その2) 14. 土のせん断と安定問題の概要、せん断強度 15. 期末試験 16. 予備日

【成績評価】欠席は3回以内とし、到達目標の3項目達成のため、講義受講ノート、演習レポートを作成し、提出する。評価は出席回数(20%)、講義受講ノート、演習レポートの評価(20%)、期末試験の成績(60%)を総合する。

【教科書】石井義明他「最新土質工学」朝倉書店、プリント

【参考書】地盤工学会編「土質工学用語辞典」地盤工学会、河上房義「土質力学」森北出版、福岡正巳他「新編土質工学」国民科学社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は4:6とする。平常点には講義への参加状況、演習の回答を含み、試験とは中間試験および期末試験を意味する。

土木・建築史

History of Civil Engineering and Architecture

非常勤講師・澤田 健吉 2単位

【授業目的】土木・建築の技術は、単に現在という時点からのみ評価すべきではなく、時代の流れの中に置いてみて、はじめてその働きが理解できるという観点から、従来の編年的な技術史ではなく、その底に流れる動機に気付くようにする。

【授業概要】各時間ごと設定したテーマ(計画の項参照)ごと教冊の本を取り挙げ、技術の発展の背景を説明・解説する。学生がそれぞれに興味を持てる本を見付け、技術史に関心を持つようにする。基本的に計画のスケジュールによるが、年度ごと若干の更新をする。

【履修上の注意】レポートの作成に夏休みの期間を当ててことを期待している上で、十分な時間を当て、自分の考えをまとめてほしい。

【到達目標】社会的な問題を技術者の目で理解して、相手の意見を聞き、自分の意見を言えるようにする。

【授業計画】1. 講義の方法、理工系の人の書く歴史 2. 技術史概論、計画者の立場 3. 技術史概論、施工者の立場 4. 科学技術を受入れた土壌、中国の場合 5. 科学技術を受入れた土壌、西欧の場合 6. 科学技術を受入れた土壌、日本の場合 7. 産業の勃興、博覧会の開催 8. 産業の勃興、岩倉使節団の米欧回覧 9. 大学による技術者教育の発展 10. 他国外国人教師の貢献 11. 環境問題、自然の意味 12. 技術史各論、農業土木 13. 技術史各論、鉄道 14. 技術史各論、地図 15. 技術史各論、建築 16. 予備日

【成績評価】レポートにより目標に達する達成度において、1. 本の選定の妥当性 2. 本の理解度 3. 自分の経験をベースにした感想 4. その文章の表現力の4項目で評価し、60%以上を合格とする。

【教科書】各授業日に、6000字程度のプリントを配布する。事前の配付の要求があれば、個人的な対応はできる。

【参考書】講義の性格上多数必要になるが、各自自分で探すことも重要なので、特に指定はしない。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】澤田健吉、Tel./Fax.088-645-2140(自宅)

【備考】レポートのみによる。ただし、レポートの内容が不十分と評価されたものは再提出を求める。

微分方程式 1

Differential Equations (I)

教授・長町 重昭、助手・坂口 秀雄 2単位

【授業目的】微分方程式の解法を修得し、さらに工学の諸分野に現われる微分方程式の解法に応用できるようにする。

【授業概要】微分方程式の理論は数理的工学的な現象の解析に有力な手段を与え、現代工学の基礎として重要な役割を果たしている。その広範な理論の入門段階として、この講義では微分方程式の具体的な解法を中心に講義する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをきちんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 簡単な求積法が理解できる。
2. 2階の定数係数線形常微分方程式が解ける。

【授業計画】1. 変数分離形 2. 同次形 3. 一階線形微分方程式 4. 完全微分形 5. クレーローの微分方程式とラグランジュの微分方程式 6. 高階常微分方程式 7. 2階線形同次微分方程式(i) 8. 2階線形同次微分方程式(ii) 9. 非同次微分方程式 10. 記号解法 11. 簡便法 12. 級数解法 13. 通常点における級数解法 14. 確定特異点まわりの級数解法 15. 期末試験

【成績評価】講義への取り組み状況、レポートの提出状況・内容等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】杉山昌平著「工科系のための微分方程式」、実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】坂口(建設棟2階221)

微分方程式 2

Differential Equations (II)

教授・今井 仁司、助手・坂口 秀雄 2単位

【授業目的】連立常微分方程式の安定性と簡単な偏微分方程式の解法を修得し、より実際の工学的な問題の解法に応用できるようにする。

【授業概要】「微分方程式 1」に続いて現代工学すべての基礎として重要な役割を果たしている連立常微分方程式系の基本的な解法を講義する。さらに、簡単な偏微分方程式の解法についても講義する。

【受講要件】「微分方程式 1」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをきちんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 簡単な定数係数連立線形常微分方程式が解ける。
2. ラプラス変換とその応用ができる。

【授業計画】1. 定数係数連立線形微分方程式 2. 高階微分方程式と連立微分方程式 3. 連立線形微分方程式 4. 自励系と強制系 5. 2次元自励系の危点 6. 2次元自励系の安定性 7. ラプラス変換の性質 8. 逆ラプラス変換 9. ラプラス変換の応用例 10. 1階偏微分方程式 11. ラグランジュの偏微分方程式 12. 2階線形偏微分方程式 13. 定数係数2階線形偏微分方程式(i) 14. 定数係数2階線形偏微分方程式(ii) 15. 期末試験

【成績評価】講義への取り組み状況、レポートの提出状況・内容等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】坂口(建設棟2階221)

機械工学科

機械工学科の教育理念・目的および学習・教育目標	73
JABEE 認定について	77
機械工学科（昼間コース）進級規定・履修登録・受講に関する規定	81
機械工学科（昼間コース）教育分野別カリキュラム表	82
機械工学科（昼間コース）カリキュラム編成表	83
機械工学科（昼間コース）教育課程表	84
機械工学科（昼間コース）講義概要	87
機械工学科（夜間主コース）夜間主進級規定・履修登録・受講に関する規定	108
機械工学科（夜間主コース）教育分野別カリキュラム表	109
機械工学科（夜間主コース）カリキュラム編成表	110
機械工学科（夜間主コース）講義概要	113

機械工学科の教育理念・目的および学習・教育目標

1. 教育の基本理念

科学技術立国日本を支え、また世界をリードする工業技術力を堅持するために、創造力豊かな技術者・研究者を育てることはわが国の教育機関の重大な責務です。人材育成は教育の崇高な目的であり、最終学府としての大学の教育は高度技術社会への接点機関として重要な役割を背負っています。ともすれば、20世紀の教育が知識の修得に重点をおいてきたと言われますが、21世紀にはばたく技術者は変化する社会情勢を柔軟にとり入れ、創造的な思考のできる能力を持たなければなりません。

そこで、徳島大学工学部では、科学技術が人類に及ぼす影響について強い責任をもつ自律的技術者を育成することを掲げ、工学技術者を養成する立場から次の4項目を教育の基本理念として掲げています。

- (1) 豊かな人格と教養、および自発的意欲の育成
- (2) 工学の基礎知識による分析力と探求力の育成
- (3) 専門の基礎知識による問題解決力と表現力の育成
- (4) 社会の変化に柔軟に対応できる自律的応用力と創造力の育成

工学は自然界の原理に基づいて社会に有用なものづくりをする学問であり、工学部ではそのような能力を持つ人材の育成に努めています。その中でも、機械工学の活躍分野は非常に多岐にわたっており、社会活動の基盤技術を担っています。ここで言う機械工学とは、機械システムを考案・設計・製作し、それを作動させ、また管理・評価するために必要な学問であると定義され、また、機械システムとは、社会の中で人間が発揮する能力・行為を、人間に代わって、あるいは人間と共に実現するツール・ソフトウェア・装置およびそれらの組み合わせの総称を指します。

世界の技術は日々急速な発展を遂げています。そのような中でグローバルな活躍をするためにはコミュニケーションが大切になります。また、個々の技術だけでなく社会全体を見とおす能力がなければ健全な社会を創出することができません。したがって、わが国の工業技術力を維持し発展させ、そして世界をリードする機械技術者としては、社会人としての健全な使命感、国内外で通用するコミュニケーション能力、急激な技術革新に対応できる生涯学習能力、広範囲にわたる科学的・専門的知識と技術の修得、その応用による問題解決能力、さらには、独創性豊かな研究・開発能力などが要求されています。

このような広範囲の教育分野を効率的に学習できるように、本学科では学部4年間と大学院2年間を一貫した教育課程と位置付け、学部4年間では工学および機械工学の基礎となる知識や技術を習熟させることに重点を置いています。そのために、機械工学科の教育プログラムとしては、上記の4項目を指針として「機械工学を通じて人類の幸福に貢献できる人材を養成すること」を教育理念とし、以下の5項目の教育目的を掲げます。

2. 機械工学科の教育目的

- I. 数学、自然科学、情報技術および機械工学に関する基礎となる知識と技術を習得させること（工学に関する基礎知識および基礎技術）
- II. 機械工学に関する知識と技術および情報技術を応用して、機械システムを設計・開発・分析し、新しい「もの」を創造する能力を育成すること（機械工学に関する基礎知識、応用力および創造能力）
- III. 日本語による論理的な記述、発表、討論などのコミュニケーション能力を有し、国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を育成すること（コミュニケーション能力）
- IV. 社会や技術の変化に対応して、自律的・継続的に学習できる生涯自己学習能力を育成すること（自律的・継続的学習能力）
- V. 豊かな人格と教養に基づき、機械工学に関わる技術が社会や環境に及ぼす影響を理解し、技術者倫理や自然環境の保全などを考慮して行動する能力を育成すること（技術者としての社会的責任）

3. 機械工学科の学習・教育目標

上記の教育目的を実現するために、本学科では次の9項目の教育目標を定めて教育を行ないます。

機械工学科

- (A) 数学，自然科学および情報技術の知識を習得させ，機械システムの分析・統合に応用できる能力を育成すること
 - (1) 線形代数学，微分・積分学，確率・統計学を中心とする数学の知識を習得すること
 - (2) 物理学，特に力学を中心とする自然科学の基礎知識を習得すること
 - (3) インターネットを活用して情報の収集と整理が行なえること
- (B) 機械工学の主要分野および関連分野の知識と技術を習得すること
 - (1) 材料の知識および材料の力学を理解習得すること
 - (2) 機構学および機械力学に関する知識を理解習得すること
 - (3) 状態量と状態変化を理解し，エネルギーと流れの法則を理解習得すること
 - (4) 情報処理技術を習得し，それを機械工学に関わる計測・制御に応用できること
 - (5) 製図法，機械要素，設計法，加工法を習得し，機械システムの設計・開発に応用できること
- (C) 機械工学の分野において実験を計画・遂行し，その結果を科学的に分析・考察する能力を育成すること
 - (1) 与えられた制約の下で計画的に仕事を進め，まとめる能力をつけること
 - (2) 実験，実習，演習などを通して問題点を把握し，それを解決する能力をつけること
- (D) 機械システムを創造・製作する能力を育成すること
 - (1) 機械工学の基礎知識を統合し，種々の科学技術・情報を利用して社会で要求される「もの」を創造する能力をつけること
- (E) 機械工学の専門的内容を日本語で論理的に記述，発表，討論する能力を育成すること
 - (1) 自ら考えたことばで論理的な文章を記述できること
 - (2) 自らの考えを構築し，それを効果的に口頭発表できる能力を持つこと
 - (3) 他人の発表を理解し，討論する能力を持つこと
- (F) 国際的に通用するコミュニケーション基礎能力を育成すること
 - (1) 機械工学に関連する英語の記述を読解する能力を持つこと
 - (2) 英語による基礎的な記述能力および口頭発表能力を持つこと
 - (3) グローバル化の社会の中で情報収集や情報交換ができる能力をつけること
- (G) 自律的学習能力および継続的学習能力を育成すること
 - (1) 講義，実験，実習，演習を通して，自主的，継続的に学習する習慣をつけること
 - (2) 卒業研究を通して，自ら問題を考え，実験を計画・実行して，その結果をまとめ考察する能力を育成すること
 - (3) 社会の技術の変化に対応して，新たな知識や情報を収集・獲得し，それを応用する能力をつけること
- (H) 機械システムの設計に関連して，倫理的，社会的，経済的および安全上の考察を行うための能力を育成すること
 - (1) 機械技術の開発が社会および自然に及ぼす影響や効果を理解し，高い倫理観を持って機械システムを設計する能力をつけること
 - (2) 社会に有用な「もの」および「考え方」を経済的観点および安全性の観点から設計・製作する能力をつけること
- (I) 自然，人間，社会のしくみを理解し，環境保全などについて地球的視点から多面的に物事を考え，また，それを機械工学と有機的に結びつける能力を育成すること
 - (1) 豊かな教養を身につけ，機械技術のみでなく，他領域の問題も併せて総合的に考える能力をつけること
 - (2) 文化や価値観を多面的に考える能力を持つこと

4. カリキュラムの編成

上述のように，機械工学科では母体である徳島大学工学部の教育理念・教育目標を受けて，その教育理念を「機械工学を通じて人類の幸福に貢献できる人材を育成することにある」と定めています。またそれを達成するために，機械工学科の教育プログラムにおいては，(I) 工学に関する基礎知識および基礎技術，(II) 機械工学に対する応用力と創造能力，(III) コミュニケーション能力，(IV) 継続的・自律的学習能力，(V) 技術者としての社会的責任の5項目を教育目的に掲げ，これらに対して，前段の学習・教育目標 [(A)~(I)] を設定しています。これらの目標を達成させるために本プログラムが準備した教育の内容をその特長とともに以下に説明します。

(O) 導入教育

5つの教育目標に入る前の段階として、入学後いち早く工学への関心を持たせるために、1年前期で機械工作実習、エンジンおよびモーターの分解・組立、材料強度試験などを体験させ、機械工学に対する動機付けを与えて、以後の学習への意欲付けを涵養します。また、自らの意思と発想により問題解決の方法や実現手段を学ぶことを目的として、小人数グループでの小型構造物の設計・製作を行ない、報告書の書き方、公開競技、報告会などによるプレゼンテーション能力の基礎を育成します。

(I) 工学に関する基礎知識および基礎技術

工学基礎：工学に対して数学と物理は基礎になる学問です。したがって、1年前期に、機械工学の専門科目を履修する上で最低限必要とする基本的な数学および物理の概念を、習熟度別に小人数のグループに分けてゼミ形式の教育を行ないます。また1年後期にも、引き続き物理現象を工学的な視点から解析できる能力を養うため、実学としての数学・物理の基礎を演習により体験します。

情報教育（コンピュータ教育）：全学共通教育の情報リテラシー教育に続いて、C言語を基本としたコンピュータソフトを演習形式で習熟させるとともに、CADによる図面製作能力、情報の収集および発信能力を育成し、コンピュータを利用して工学問題を解析するために必要な数値解析手法を習得します。

(II) 機械工学に対する基礎知識、応用力および創造能力

機械工学専門分野：材料と材料力学、機構学と機械力学、エネルギーと流れなどの機械工学の主要分野の科目では、講義に加えて演習を付随させ、知識の理解を高めさせるとともにそれを応用できる能力の育成に努めます。また、機械製図の基礎知識に基づいて機械要素や加工法を講義科目で習得し、設計製図の実習につなげて機械システムの設計・開発に応用できる能力を養います。

科学的分析能力：実験や実習を通じて問題点の把握に努めたりその解決能力をつけることが大切です。事実を観察して物事の本質を見ぬく力とそれを科学的に分析する能力を育成することに努めます。

創造能力：幅広い知識を統合し、また、科学技術や情報を利用して、社会の要求する有用な「もの」や「考え方」を創造する能力の育成が大学教育の主要な目的の一つです。これには教育プログラムを通して一貫した思想に基づいた教育の方法を考え出すことが必要です。「創造」には、獲得された知識が活かされた知識になること、また、新しい問題を考えるときにその知識が自在に結び合わさることが大切であり、そのような能力を育成することが最大の目標です。

(III) コミュニケーション能力

プレゼンテーション能力：創成科目を中心に初年時からプレゼンテーションの機会を設け、卒業研究では中間報告を含めてプレゼンテーションの実施と評価を行ない、継続的な実践により表現能力を高めます。また、これらの実施でプレゼンテーションの内容と技術の評価を行ない、学生自らが評価者として参加する方法で、自分自身の表現能力を高揚させていくことをねらっています。

英語一貫教育：1年および2年で開講される一般教養科目の英語および初修外国語の履修に続いて、3年次前期・後期に専門分野の立場から工業英語の修得を目的とし、機械技術に必要な英語による表現力を高めるため、工業英語の読み方および技術レポートの書き方を養成します。また、課題探求を行なって報告会を開き、英語によるプレゼンテーション能力の涵養にも努めます。また、3年後期にはグローバルなテクニカルコミュニケーションの技術の修得のため、外国人講師による授業を行なってリスニングとスピーキングの技術の修得に努めます。また、3年後期には5～6名の少人数で機械技術論文の講読を行うほか、4年次の卒業研究では海外の研究論文の講読による専門的研究課題についての理解力を養います。

(IV) 自律的・継続的学習能力

主要な講義科目に演習を付随させて自主的な学習能力をつけ、実験・実習を通して自らが主体的に学習に取り組む姿勢を養うほか、卒業研究を通じて自ら研究を企画し実施することにより、定められた計画にしたがって継続的に行動する能力を育成します。

(V) 技術者としての社会的責任

技術者が社会に果たすべき役割を自分で考えたり、技術者としての社会への役割および機械技術が社会に果たすべき責任を認識させるため、技術者を取り巻く今日の社会環境を入学直後の1年前期に学び、機械技術者を目指す

機械工学科

者が自律的な学生生活を構築するための素養と能力を養います。さらに、社会に巣立つ前の4年前期には、技術者としての倫理観と行動規範を持って多様化した社会の中で自分の技術を活かす能力を、理論と実習の形式で育成します。

5. 創成科目

創造性豊かな技術者を育成する手法として、機械工学科では下表の創成科目群を用意しています。創成科目とは一つの解しかない問題に対して解答させるという教育ではありません。一人ひとりが問題を発見し、知恵と情報を総動員し、新しい自分自身の解を見出す訓練を通して「自らを創成する」ことを目的としています。したがって、教員から学生への一方的な授業形態ではなく、学生自らが頭脳と手足を動かして自主的に考えや行動を起こす過程を経験することが基本になります。自律的に学習し、問題を開発しまた解決する創造的な能力を育成することが創成科目の目的なので、そのためには広く深い知識が必要です。したがって、一般の講義や演習の科目と有機的に連携させることが重要で、それなくして創造性は育成されません。また、下表に示すように、創造力のみでなく、情報収集・活用力、課題解決能力、グループ活動能力、プレゼンテーション能力なども創成科目が目指す重要な能力と位置付けています。

創成科目にも段階があります。1年次は導入教育としての創成科目であり、学問への意欲を高揚させます。2年および3年次は創成の訓練を行なって活きた知識を獲得します。そして、4年次には総合創成としての卒業研究があり、知恵と技術を使って自己の創成を実践します。これらの創成科目を学ぶことによって、自らアクティブに考え行動する訓練を十分に身に付けることを要望します。

表 創成科目およびその目指す能力

学年・学期	科目名	創成科目が目指す能力				
		(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
		情報収集・活 用力	創造力	課題解決能力	グループ活動 能力	プレゼンテー ション能力
1年前期	機械基礎実習	△	○	○	○	
1年後期	創造基礎演習	△	◎	△		○
1年後期	基礎機械製図		△	○	○	
2年前期	CAD演習	△	◎	○	◎	△
2年前後期	解析力学演習			◎	△	○
3年後期	メカトロニクス実習	○		○		
3年前期	機械設計製図	○	○	◎		
3年後期	創造実習	△	◎	◎	◎	△
4年前後期	卒業研究	○	◎	◎	○	◎

注 ◎：とくに重点を置く能力，○：基本的に育つと考えられる能力，△：とくに重点は置かないが、この科目を学ぶ過程で身に付く能力

JABEE 認定について

1. ワシントンアコードと JABEE 認定

今日、工業技術は情報技術の革新ともなって急速に国際化しています。このような状況の下に、これからの技術者は日本国内にのみでなく世界に飛び出し、国際間で協力し合って新しい社会づくりに務めることが求められています。大学教育プログラムを修了して社会に働く技術者は、国際間で協力しあって仕事をする機会がこれまでに増えることは必然の成り行きです。このような場合に、技術者の質的な保証が必要になります。その基盤になる技術者教育の質的な同等性を国境を越えて相互に認定し合う協定として、ワシントンアコードが 1989 年に締結されています。この協定には、最初アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドおよびアイルランドの 6ヶ国を代表する技術者教育認定団体によって調印されました。その後、香港と南アフリカが加入し、現在ではこれら 8ヶ国のワシントンアコード加盟団体により認定された大学の教育プログラムが公開されています。

日本では、1999 年に設立された日本技術者教育認定機構 (Japan Accreditation Board for Engineering Education; JABEE) が、国際的に通用するエンジニア教育の確立を目指してその基盤を検討し、すでに 2000 年から認定の試行および一部の本審査を行ってきました。また、JABEE は 2001 年にワシントンアコードの暫定加盟国となり、一日も早い正式加盟が望まれています。2003 年度からは JABEE の本格的な本審査が開始され、この実績がワシントンアコードへの加盟の重要な条件になります。

JABEE 認定には学生も含めた学科全体としての推進が必要です。とりわけ、JABEE では、技術者として学習すべき内容と量の基準を定めています。そのため、機械工学科では学科の教育プログラムを 2003 年度からそれらを満たすものに改訂しました。技術者としての社会的責任やコミュニケーション力、また自律的・継続的学習能力の育成が重要視されているので、新しい教育方針の中にはこの方面の科目も取り入れています。学生諸君は用意されたプログラムを学習し、世界にはばたく技術者としての基礎と応用力を確実に養う必要があります。

2. 日本技術者教育認定制度とは

日本技術者教育認定制度は、大学など高等教育期間で実施されている技術者教育プログラムが、社会の要求水準を満たしているかどうかを外部評価機関が公平に評価し、その水準を満たしている教育プログラムを認定する専門認定 (Professional Accreditation) 制度です。

このために、日本技術者教育認定機構 (Japan Accreditation Board for Engineering Education) は、技術系学協会と密接に連携しながら技術者教育プログラムの審査・認定を行う非政府団体です。

3. 技術者認定制度が目指すもの

JABEE が認定の対象とする技術者教育とは、高等教育の学士レベルに対応する技術者育成のための基礎教育を指します。ここで言う技術者 (Engineer) とは、技術を業とするもののうち、知識 (工学) をその能力の中核におくものを指し、スキルを能力の中核とする技能者 (Technician) とは別に扱っています。数理科学、自然科学および人工科学の知識を駆使し、社会や環境に対する影響を予見しながら資源と自然を経済的に活用し、人類の利益と安全に貢献するハード、ソフトの人工物やシステムの研究・開発・運用・維持する専門職業に携わる専門職業人を指します。

ここで、JABEE の目指す技術者教育の目的は以下の 2 つにまとめられます。

- (1) 統一的基盤に基づいた理工農学系大学における技術者教育プログラムの認定を行い、教官の質を高めることを通して、わが国の技術者教育の国際的な同等性を確保する
- (2) 技術者の標準的な基礎教育として位置づけ、国際的に通用する技術者育成の基礎を担うことを通じて社会と産業の発展に寄与する

4. JABEE が定める学習・教育目標と分野別要件

このような目的のため、JABEE ではその教育プログラムが分野を問わず適用される学習・教育目標 (基準 1) と専門分野ごとに設定される分野別要件を定めています。これにより、技術の倫理性についての十分な理解に基づき、自らの領域がすべての科学技術の中でどのように位置づけられているかを考えられる教育プログラムを用意します。

基準 1 学習・教育目標

- (a) 地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養
- (b) 技術が社会や自然に及ぼす影響や効果，および技術者が社会に対して負っている責任に関する理解（技術者倫理）
- (c) 数学，自然科学および情報技術に関する知識とそれらを応用できる能力
- (d) 該当する分野の専門技術に関する知識とそれらを問題解決に応用できる能力
- (e) 種々の科学，技術および情報を利用して社会の要求を解決するためのデザイン能力
- (f) 日本語による論理的な記述力，口頭発表力，討議等のコミュニケーション能力および国際的に通用するコミュニケーション基礎能力
- (g) 自主的，継続的に学習できる能力
- (h) 与えられた制約の下で計画的に仕事を進め，まとめる能力

分野別要件 - 機械および機械関連分野 -

上記の共通的な基準に併せて，機械および機械関連分野のプログラムの修了生は次の知識と能力を身につける必要があります。

- (d-1) 数学については線形代数，微分積分学などの応用能力と確率・統計の基礎，および自然科学については物理学の基礎に関する知識
- (d-2) 機械工学の主要分野（材料と構造，運動と振動，エネルギーと流れ，情報と計測・制御，設計と生産，機械とシステム）のうち各プログラムが重要と考える分野に関する知識と，それらを問題解決に応用できる能力。なお，各分野の内容要件については別に定める
- (d-3) 実験等を計画・遂行し，結果を解析し，それを工学的に考察する能力

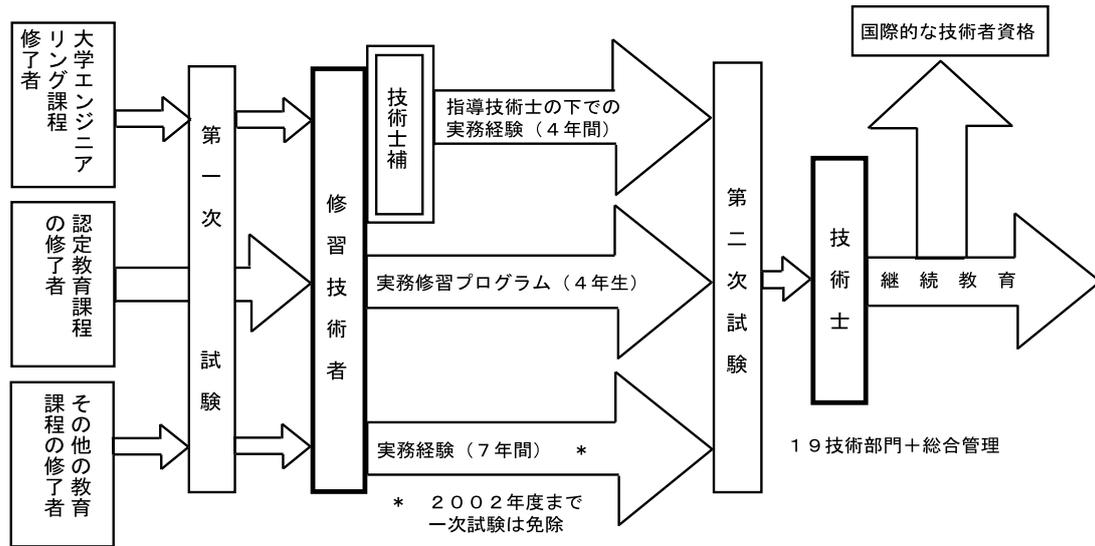
5 . JABEE 認定された教育プログラムの修了生は

基礎高等教育を修了した技術者が実務経験と継続的専門教育を通じて能力開発を続け，より高度な技術者へと成長するようなシステム作りが重要です。また，多くの技術者が国が定める技術者資格（技術士）を取得して地位を確立し，その後も仕事を続けながら実務経験と継続的な専門教育を通じて能力を向上させることが，個人にとっても社会にとっても，ともに望ましい形と言えます。

このような目的のために，技術士審議会において新しい技術者資格制度が審議されました。この内容は，外国の技術者資格制度と整合性があり，またその基準が世界基準に適合するものであり，わが国の資格と他国の資格の同等性を主張し，また容易に相互承認に導くことができるものです。

その中で，文部科学大臣が指定する認定教育課程（＝ JABEE 認定の技術者教育プログラム）の修了生は，技術者に必要な基礎教育を完了したものと見なされ，技術士第一次試験を免除されて，直接「修了技術者」として実務修習に入ることができることと規定されています。新しい技術者資格制度の概要を下図に示します。

機械工学科



注) 修士課程年数については、内容に応じて、実務経験として算入

参考付表 1 : 機械工学科の学習・教育目標 (A) ~ (I) と JABEE で要求される知識能力 (a) ~ (b) の対応表

機械工学科の 学習・教育目標	JABEEの 要求項目									
	(a)	(b)	(c)	(d)			(e)	(f)	(g)	(h)
				(1)	(2)	(3)				
(A)			◎	◎						
(B)					◎					
(C)						◎				◎
(D)							◎			
(E)								◎		
(F)								◎		
(G)						◎	○		◎	◎
(H)	○	◎								
(I)	◎	○								

機械工学科

参考付表 2 : 機械工学科講義科目と JABEE 教育目標の対応表

教育目標		必修	選択
(A) 数学, 自然科学, 情報技術	A-1	微分方程式 1, ベクトル解析 基礎教育科目 (数学), 確率統計学	微分方程式 2 複素関数論, 微分方程式特論 機械数理演習 1, 機械数理演習 2
	A-2	解析力学, 基礎教育科目 (物理)	基礎波動論, 解析力学演習
	A-3	(卒業研究)	工業英語 1, 知識ベースシステム (コンピュータ・リテラシー)
(B) 機械工学 4 分野	B-1	材料力学 1, 材料力学 2 機械材料学	材料力学演習, 材料科学 材料強度学, 計算力学 機械科学特別講義
	B-2	機械力学	機構学, 機械力学演習 ロボット工学
	B-3	流体力学 1, 工業熱力学	工業熱力学演習, 流体力学 2 流体機械, 内燃機関 伝熱工学, 蒸気プラント工学 自動車工学, 機械システム特別講義
	B-4	自動制御理論 1	C言語演習, 電子回路 メカトロニクス工学 自動制御理論 2, 画像処理 制御工学, 知能機械学特別講義
	B-5	機械設計, 生産加工システム 基礎機械製図, 機械設計製図 CAD演習	精密加工学, 機械計測 科学計測, 設計工学 塑性加工学, 生産システム特別講義
(C) 実験の計画・遂行	C-1	(卒業研究)	機械数値解析
	C-2	工業物理学実験, 機械基礎実習 メカトロニクス実習, 機械工学実験	
(D) 機械システムの創造・製作	D-1	創造基礎実習	創造実習
(E) 日本語による論理的な記述・発表・討論	E-1	(卒業研究)	
	E-2	(卒業研究)	
	E-3	(卒業研究)	
(F) 英語によるコミュニケーション基礎能力	F-1	機械工学輪講	
	F-2	外国語科目 (英語)	工業英語 2
	F-3	外国語科目 (その他)	
(G) 自律的・継続的学習能力	G-1	(卒業研究)	
	G-2	(卒業研究)	
	G-3	(卒業研究)	ニュービジネス概論
(H) 社会的責任	H-1	技術者の倫理	
	H-2	(卒業研究)	福祉工学概論, 特許法 生産管理, 労務管理
(I) 地球的視野の育成	I-1	技術者と社会, 社会科学分野 自然科学分野	工業経済, エコシステム工学
	I-2	人文科学分野	知的所有権概論

機械工学科（昼間コース）進級規定・履修登録・受講に関する規定

I. 進級規定

上級学年に進級するには、次の科目・単位数を修得していることが必要である。

- 1) 2年次への進級には、全学共通教育・専門教育をあわせて、35単位以上
- 2) 3年次への進級には、全学共通教育・専門教育をあわせて、70単位以上であり、全学共通教育において、卒業要件40単位のうち36単位の修得
- 3) 4年次への進級には、全学共通教育・専門教育をあわせて、下記の科目（単位）を含む100単位以上
 - a) 全学共通教育における卒業要件40単位すべて
 - b) 専門教育における次の演習・実習科目（9科目、9単位）すべて
工業物理学実験・機械基礎実習・創造基礎実習・CAD演習・基礎機械製図・機械設計製図・機械工学実験・メカトロニクス実習・機械工学輪講
- 4) 補足
 - a) 留年した学生が進級規定を満足した場合、飛び学年を認める。
 - b) 卒業の要件（単位数）は次の130単位以上である。
全学共通教育 40単位以上、専門教育 90単位以上（必修40単位、選択50単位以上）。
なお、4年次には学部教育の総まとめとして、卒業研究（必修5単位）が設けられており、1年間の研究成果を卒業論文にまとめ、その発表審査によって合否が判定される。

II. 履修上限単位数規定

学期始めの履修登録には、次の年間上限単位数（前期と後期の合計）以下であること。

- 1) 1年次は50単位、2年次から4年次までは各学年とも45単位。
- 2) 前年度までのGPAの値が3.0以上の者は、制限なし。
なお、この履修制限の範囲内において、上級学年の履修を認める。

III. 早期卒業規定

3年次末までの学業が優秀であり、早期の卒業を望む者に課す要件を次に示す。

- 1) 成績が優秀であること（3年次末までのGPAの値が4.0以上）。
- 2) 卒業要件を満たしていること。ただし、卒業研究の単位は、専門教育科目15単位の取得を持って認定することができる。

IV. 付則

- 1) 専門教育科目における未完成単位（いわゆる部分単位）は計算に入れない。
- 2) 各規定を満たすかどうかの判定は、学科会議で行う。
- 3) 病気その他による特別な認定は、学科会議で決定する。
- 4) 本規定は、平成13年度の入学生に適用する。

V. 付録 [定期試験・追試験・再試験]

- 1) 定期試験は受講申請の学期に実施され、その他の評価項目と合わせて評価の対象とされる。
- 2) 追試験は、定期試験に代わるものとして、可能であれば受講申請の学期内で実施する。
担当教官の指導により、再試験と同時期に実施されることがある。
- 3) 再試験は、出席日数が多い者で担当教官が承認した場合に限り次期に実施されることがある。

機械工学科 (昼間コース)

機械工学科 (昼間コース) 教育分野別カリキュラム表

科目群	1年		2年		3年		4年		
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
全学共通教育科目	教養科目	人文科学分野・社会科学分野・自然科学分野・ 情報科学分野・総合分野・学部開放分野							
	外国語科目	英語(1)・ドイツ語(1)・ フランス語(1)・中国語(1)		英語(2)・ドイツ語(2)					
	健康スポーツ科目	健康スポーツ実習・ 健康スポーツ演習							
	基礎教育科目	*基礎数学a *基礎数学c *基礎物理学f	*基礎数学b *基礎数学d						
専門教育科目	工業数学			*微分方程式1 *ベクトル解析 *確率統計学	微分方程式2 複素関数論	微分方程式特論			
	工業物理学			*解析力学	*解析力学	基礎波動論			
	機械工学基礎	機械工学概論 (学部開放分野) コンピュータ入門 (情報科学)	*材料力学1 機構学	*材料力学2 *工業熱力学 *機械設計 *生産加工システム	*材料力学2 *工業熱力学 *流体力学1 *機械力学	*機械材料学 *機械力学 *自動制御理論1			
	材料・材料力学分野					材料科学 材料強度学 計算力学			
	エネルギー分野					流体力学2 内燃機関	流体機械 伝熱工学	蒸気プラント工学	
	設計・制御分野			電子回路	マイクロ工学		ロボット工学 自動制御理論2	画像処理 設計工学 制御工学	
	計測・加工分野						精密加工学 機械計測 科学計測	塑性加工学 知識ベースシステム	
	演習・実験・実習	機械数理解習1 *機械基礎実習 *創造基礎実習	機械数理解習2 C言語演習 *基礎機械製図	*CAD演習 *工業物理学実験 *解析力学演習 材料力学演習 工業熱力学演習	機械数値解析 *解析力学演習 材料力学演習 工業熱力学演習 機械力学演習	*マイクロ実習 *機械工学実験 *機械設計製図 機械工学実地演習 機械力学演習	*機械工学輪講 創造実習	*卒業研究	
	工学教養・機械工学応用	*技術者と社会		福祉工学概論		工業英語1 コミュニケーション	工業英語2	自動車工学 *技術者の倫理 機械科学特別講義 知能機械学特別講義 エコシステム工学 知的所有権概論 ニュービジネス概論	知的財産権 機械システム特別講義 生産システム特別講義 生産管理 労務管理

*は専門必修科目を示す

機械工学科（昼間コース）

機械工学科（昼間コース）教育課程表

全学共通教育科目

授業科目（分野）		単位数		
		必修	選択必修	選択
教養科目	人文科学分野		4	8
	社会科学分野		4	
	自然科学分野		4	
	情報科学分野			
	総合分野 学部開放分野			
外国語科目		6	2	
健康スポーツ科目		2		
基礎教育科目		10		
全学共通教育科目小計		18	14	8

履修にあたっての注意事項

*左の単位数は、卒業に必要な40単位を示しています。

- 1) 教養科目の選択必修として、人文科学、社会科学、自然科学の各分野からそれぞれ4単位、計12単位。教養科目の選択8単位は、選択必修として修得した12単位を超える教養科目の超過単位。なお、8単位を超える外国語科目の超過単位も教養科目の選択単位になる。
- 2) 外国語科目は、英語6単位が必修、それ以外にドイツ語、フランス語または中国語から2単位、計8単位。留学生の外国語科目は英語を日本語に読み替えて日本語6単位が必修、日本語以外から2単位、計8単位。
- 3) 健康スポーツ科目は、1年次に開講される2単位。
- 4) 基礎教育科目は、1年次に開講される基礎数学が4科目（線形代数学 I,II、微積分学 I,II）、および基礎物理学 f の5科目、計10単位。
- 5) 上級学年へ進級するには、「進級規定」を満たす必要がある。
- 6) 開講時期、授業時間数、担当者等の詳細は、全学共通教育履修の手引き及び全学共通教育時間割を参照のこと。

専門教育科目

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
微分方程式 1	2					2						2	澤下		103
微分方程式 2			2				2					2	澤下		104
ベクトル解析	2					2						2	岡本		105
* 複素関数論			2				2					2	長町		104
* 微分方程式特論			1						1			1	深貝		104
* 確率統計学	2					2						2	金		88
解析力学	2					1	1					2	金城		87
解析力学演習	(1)					(1)	(1)					(2)	金城・機械工学科教官		88
* 基礎波動論			2						2			2	浦西		93
工業物理学実験	(1)					(3)						(3)	岸本・川崎		96
材料力学 1	2				2							2	吉田・高木		96
材料力学 2	2					1	1					2	吉田・西野		97
材料力学演習			(1)			(1)	(1)					(2)	吉田・西野		97
機械材料学	2								3			3	高木・岡田(達)		90
材料科学			2							2		2	岡田(達)		96
* 材料強度学			2							2		2	村上		96
* 計算力学			2							2		2	山田		94
流体力学 1	2						3					3	福富・一宮		106
* 流体力学 2			2						2			2	福富		106
流体機械			2							2		2	石原		106
工業熱力学	2					1	1					2	森岡・清田		95
工業熱力学演習			(1)			(1)	(1)					(2)	森岡・清田		95
* 伝熱工学			2							2		2	逢坂		103
蒸気プラント工学			2								2	2	逢坂		99
内燃機関			2						2			2	三輪		103
機構学			2		2							2	芳村・木戸口		92
機械設計	2						3					3	岡田(健)・長町		91
設計工学			2								2	2	長町		100
機械力学	2						1	1				2	芳村・日野		92
機械力学演習			(1)				(1)	(1)				(2)	芳村・日野		92
生産加工システム	2						3					3	海江田・多田		99
* 精密加工学			2							2		2	升田		100
* 塑性加工学			2								2	2	海江田		101

機械工学科（昼間コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1 週当たり）								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1 年		2 年		3 年		4 年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
機械計測			2						2			2	英		89
* 科学計測			2						2			2	松尾		88
自動制御理論 1	2								3			3	今枝・橋本		98
* 自動制御理論 2			2						2			2	今枝		98
制御工学			2							2		2	橋本		99
画像処理			2							2		2	山田		88
電子回路			2			2						2	大石		102
メカトロニクス工学			2				2					2	岩田		105
ロボット工学			2						2			2	小西		106
知識ベースシステム			2							2		2	伊藤（照）		101
機械科学特別講義			1								1	1	非常勤講師		88
機械システム特別講義			1								1	1	非常勤講師		90
知能機械学特別講義			1							1		1	非常勤講師		102
生産システム特別講義			1								1	1	非常勤講師		100
技術者と社会	2			2								2	森岡・多田・井原・前川		93
機械数理解習 1			(1)	(2)								(2)	機械工学科全教官		91
機械数理解習 2			(1)	(2)								(2)	森岡・多田		91
機械工学輪講	(1)								(2)			(2)	機械工学科教官		90
C 言語演習			(1)	(3)								(3)	浮田・草野		97
CAD 演習	(1)					(3)						(3)	伊藤（照）・浮田・米倉		94
機械数値解析			(1)			(2)						(2)	山田・草野		90
メカトロニクス実習	(1)								(3)			(3)	今枝・日野・岩田・浮田		105
機械工学実験	(1)								(3)			(3)	機械工学科教官		89
機械基礎実習	(1)			(3)								(3)	英・三輪・小西・升田 西野		89
基礎機械製図	(1)			(3)								(3)	英・多田・日下・大山 米倉		93
機械設計製図	(1)								(3)			(3)	逢坂・升田・岡田（健） 清田・小倉		91
創造基礎実習	(1)			(3)								(3)	逢坂・伊藤・松尾・大山		100
創造実習			(1)						(3)			(3)	高木・日下・長町・米倉		101
自動車工学			2							2		2	島田		98
生産管理			1								1	1	井原		99
労務管理			1								1	1	井原		106
技術者の倫理	2									2		2	村上・英		93
工業英語 1			2						2			2	村上・伊藤（照） 一宮・米倉		94
* 工業英語 2			2						2			2	ウィリアム		94
* 知的財産権			1								1	1	川原		102
* 福祉工学概論			2			2						2	末田・藤澤		104
エコシステム工学			2							2		2	エコシステム工学専攻教官		87
* 知的所有権概論			1							1		1	酒井（徹）		102
* ニュービジネス概論			2							2		2	山崎・伊藤		103
コミュニケーション			2						2			2	井原・村澤		107
職業指導			4							4		4	坂野		99
機械工学実地演習			(1)						(3)			(3)			90
卒業研究	(5)									(6)	(9)	(15)	機械工学科全教官		101
工業基礎英語 I			1	1								1	広田		95
工業基礎数学 I			1	1								1	吉川		95
工業基礎物理 I			1	1								1	佐近		95
専門教育科目小計	30 (15) 45		78 (9) 87	5 (8) 13	4 (8) 12	16 (9) 25	16 (6) 22	18 (13) 31	22 (5) 27	27 (6) 33	5 (9) 14	113 (64) 177	講義 演習・実習 計		

機械工学科（昼間コース）

備考

1. 他学科の授業科目のうち，6単位まで卒業に必要な選択単位数に含めることができる．
2. 放送大学の履修科目は，専門科目のうち「産業と技術」および「自然の理解」の分野で開講される科目について，4単位まで卒業に必要な選択科目の単位に含めることができる．
3. 印を付けた授業科目は，卒業に必要な選択科目には含まれない．
4. *印を付けた授業科目は，夜間主コースの学生も履修できる．

卒業に必要な単位数

	必修科目	選択必修科目	選択単位	計
全学共通教育科目	18単位	14単位以上	8単位以上	40単位以上
専門教育科目	45単位	0単位	45単位以上	90単位以上
卒業に必要な単位数	63単位	14単位以上	53単位以上	130単位以上

機械工学科(昼間コース)講義概要

目次

エコシステム工学.....87

解析力学.....87

解析力学演習.....88

科学計測.....88

確率統計学.....88

画像処理.....88

機械科学特別講義.....88

機械基礎実習.....89

機械計測.....89

機械工学実験.....89

機械工学実地演習.....90

機械工学輪講.....90

機械材料学.....90

機械システム特別講義.....90

機械数値解析.....90

機械数値演習 1.....91

機械数値演習 2.....91

機械設計.....91

機械設計製図.....91

機械力学.....92

機械力学演習.....92

機構学.....92

技術者と社会.....93

技術者の倫理.....93

基礎機械製図.....93

基礎波動論.....93

CAD 演習.....94

計算力学.....94

工業英語 1.....94

工業英語 2.....94

工業基礎英語 I.....95

工業基礎数学 I.....95

工業基礎物理 I.....95

工業熱力学.....95

工業熱力学演習.....95

工業物理学実験.....96

材料科学.....96

材料強度学.....96

材料力学 1.....96

材料力学 2.....97

材料力学演習.....97

C 言語演習.....97

自動車工学.....98

自動制御理論 1.....98

自動制御理論 2.....98

蒸気プラント工学.....99

職業指導.....99

制御工学.....99

生産加工システム.....99

生産管理.....99

生産システム特別講義.....100

精密加工学.....100

設計工学.....100

創造基礎実習.....100

創造実習.....101

塑性加工学.....101

卒業研究.....101

知識ベースシステム.....101

知的財産権.....102

知的所有権概論.....102

知能機械学特別講義.....102

電子回路.....102

伝熱工学.....103

内燃機関.....103

ニュービジネス概論.....103

微分方程式 1.....103

微分方程式 2.....104

微分方程式特論.....104

福祉工学概論.....104

複素関数論.....104

ベクトル解析.....105

メカトロニクス工学.....105

メカトロニクス実習.....105

流体機械.....106

流体力学 1.....106

流体力学 2.....106

労務管理.....106

ロボット工学.....106

コミュニケーション.....107

エコシステム工学

Ecosystem Engineering 教授・三輪 恵, 近藤 光男, 村上 仁士
 教授・末田 統, 助教授・松尾 繁樹, 上月 康則, 藤澤 正一郎
 助教授・廣瀬 義伸, 魚崎 泰弘, 教授・田村 勝弘, 村田 明広
 助教授・木戸口 善行 2 単位

【授業目的】自然環境と社会環境の共存の重要性、ならびに、それらを目指す工学者に必要な考え方や有効な技術について概説する。

【授業概要】地球温暖化など地球環境問題は、今や人類をはじめとする地球上全ての生命体の存在をも危うくする重大な問題となっている。これは人類の産業活動が拡大を続けた結果、大気成分の変化や廃棄物の総量の増大など、地球の「大きさ」の壁に突き当たり、あらゆることに地球の有限性があらわれてきている現象に他ならない。人類が地球環境を保全しつつ将来世代にまで渡って持続的発展を遂げるためには、この地球の有限性の認識を基本とした自然環境に低負荷な技術体系を発展させる必要がある。本講義では自然環境と社会環境の共存を目指す工学者に必要な考え方や有効な技術について多角的に論じる。

【到達目標】自然環境・社会環境を取り巻く諸問題について科学的・工学的に考察し、理解する。

【授業計画】1. ガイダンス 2. エコシステム工学とは・レポート 3. うるおいある地域づくりと交通システム・レポート 4. 自動車を取り巻くエネルギー環境・レポート 5. エネルギーの効率利用と大気環境の保全・レポート 6. ひとにやさしいまちづくり・レポート 7. 生態系工学による自然環境修復の取組み・レポート 8. エコシステムな物理・レポート 9. 化学と生物学の環境問題へのかかわり・レポート 10. 環境に優しい超臨界流体の利用・レポート 11. 活断層と地震・レポート 12. 環境負荷計測のための空間情報の活用・レポート 13. 障害者の社会参加を支える工学技術・レポート 14. 予備日 15. 予備日

【成績評価】各テーマごとに出題されるレポート(100%)により評価を行い、その平均点が60%以上あれば合格とする。定期試験は行わない。

【学習教育目標との関連】(I)に対応する

【教科書】教科書は特に指定せず、毎回講義用資料が配布される。

【参考書】E. P. オダム著/三島次郎訳「オダム基礎生態学」培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

解析力学

Mechanics 教授・金城 辰夫 2 単位

【授業目的】基礎物理学で学んだ質点のニュートン力学につなげて、質点系および剛体の力学、解析力学の初歩を修得させる。

【授業概要】まず、質点の力学の基本的な事柄を整理し、質点系での運動量や角運動量の概念を解説する。ついで、それを発展させ、剛体のつりあいと運動の力学を説明する。次に、これらの力学的体系を一般化して取扱う手法として、解析力学の初歩を解説する。その過程の中で、機械力学をはじめ、材料力学、流体力学などの力学系科目の基礎原理が共通していることを習得する。

【履修上の注意】基礎物理学の力学を履修しているものとする。微分積分の基礎知識を習得していることが望ましい。

【到達目標】

機械工学科 (昼間コース)

1. 質点系および剛体のつりあいと運動を理解する。
 2. 仮想仕事, ハミルトンの原理等, 解析力学の初歩の概念を修得する。
- 【授業計画】1. 質点系の運動量, 角運動量 2. 剛体のつりあい 3. 剛体の慣性モーメント 4. 固定軸をもつ剛体の回転運動 5. 剛体の平面運動 6. 慣性楕円体 7. 中間試験 8. 仮想変位の原理 9. つりあいの安定と不安定 10. 変分法 11. ダランベールの原理 12. ハミルトンの原理 13. ラグランジュの運動方程式 (1) 14. ラグランジュの運動方程式 (2) 15. 予備日 16. 定期試験
- 【成績評価】単位の取得: 試験 70%(中間, 期末試験), 平常点 30%(授業への取り組み)として評価し, 全体で 60%以上で合格とする。
- 【学習教育目標との関連】(A) 50%, (B) 50%に対応する。
- 【教科書】原島鮮「力学」(三訂版) 裳華房
- 【参考書】ペアー・ジョンストン (長谷川節訳)「工学のための力学 (上, 下)」ブレイン図書
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】金城(A202室, TEL:088-656-7548, E-mail:tatsuo@pm.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】微分および積分の初歩の知識が必要

解析力学演習

Exercise in Mechanics 教授・金城 辰夫 1 単位

- 【授業目的】解析力学で習得した基礎原理を, 問題に適用して解く訓練を行い, 力学学系の考え方, 応用の方法を学ぶ。
- 【授業概要】まず, 基礎物理学における質点の力学の復習に関する演習を行い, ついで, 解析力学の講義内容に沿った演習を行なう。
- 【到達目標】
1. 質点系, 剛体の運動に関する問題を解けるようにする。
 2. 解析力学の概念で取扱える初歩的な問題を解く訓練をする。
- 【授業計画】1. ベクトル, 速度, 加速度 2. 簡単な運動 3. 力学的エネルギー保存の法則 4. 単振り子の運動 5. 質点系の運動量と角運動量 6. 剛体のつりあい 7. 剛体の運動と慣性モーメント 8. 仮想変位の原理 9. つりあいの安定と不安定 10. 変分法 11. ダランベールの原理 12. ハミルトンの原理 13. ラグランジュの運動方程式 (1) 14. ラグランジュの運動方程式 (2) 15. 予備日 16. 予備日
- 【成績評価】試験は行わない。演習への取り組み, 発表等により各担当教官が総合評価する。
- 【学習教育目標との関連】(A) 25%, (B) 25%, (E) 50%に対応する。
- 【教科書】担当教官編「解析力学演習」
- 【参考書】ペアー・ジョンストン (長谷川節訳)「工学のための力学 (上, 下)」ブレイン図書
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】金城(A303室, TEL:088-656-7548, E-mail:tatsuo@pm.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】微分および積分の初歩の知識が必要。20 名程度からなる小人数のグループに分かれて行う。

科学計測

Scientific Measurements 助教授・松尾 繁樹 2 単位

- 【授業目的】機械システムの高性能化・知能化に最近広く用いられている光センシングやオプトメカトロニクス基礎となる応用光学について講義し, レポート, 中間試験, 定期試験を実施することによって, これら光技術を用いた新しい機械システム技術に必要な基礎を修得させる。
- 【授業概要】光学の基礎を理解させるために光の電磁理論, 幾何光学, 波動光学, フォトニックセンサ, オプティカルシステムなどを講述するとともに, 様々な光科学計測について解説し, 応用光学の基礎力の養成を図る。
- 【到達目標】光の性質および光を使った計測の基礎を理解する。
- 【授業計画】1. 序論・科学計測の概要 2. 光の電磁理論 3. 光の電磁理論 4. 偏光 5. 干渉 6. 光の電磁理論 7. 幾何光学 8. 幾何光学 9. 中間試験 10. 光源と受光素子 11. 光源と受光素子 12. 光応用計測 13. 光応用計測 14. 光応用計測 15. 予備日 16. 定期試験
- 【成績評価】平常点 (受講姿勢, 小レポート), 中間試験, 期末定期試験を総合して評価する。平常点と試験 (中間, 期末) の比率は 4:6 とする。再試は実施しない。
- 【学習教育目標との関連】(A) 70%, (D) 30%に対応する。
- 【教科書】谷田貝豊彦著「応用光学 光計測入門」丸善。
- 【参考書】大津元一著「現代光科学 I」, 「現代光科学 II」朝倉書店。

- 【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
- 【連絡先】松尾(総合研究実験棟404, 656-7538, matsuos@eco.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】ほぼ毎回の授業で小レポートを課す。平常点には, 受講姿勢に加え小レポートの提出状況と内容も含まれる。

確率統計学

Probability and Statistics 教授・金 成海 2 単位

- 【授業目的】確率的な現象の捉え方, 考え方を学ぶとともにデータを処理する際に使われる統計手法を習得することを目標とする。
- 【授業概要】初めて数理統計を学ぶ初学者のために, 統計資料の特徴の解析および確率論の基礎と小数標本論の初歩を解説する。
- 【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。
- 【履修上の注意】講義内容が多岐にわたるため, テーマ別に数多くの演習問題をこなすことが望ましい。
- 【到達目標】
1. 基本的な確率の計算ができる。
 2. 基本的な分布関数が理解できる。
- 【授業計画】1. 事象と確率 2. 確率変数 3. 2 項分布, ポアソン分布 4. 確率変数の独立性 5. 平均と分散 6. 連続的確率変数 7. 正規分布 8. 様々な連続的確率分布 9. 統計学の考え方 10. 中心極限定理 11. 仮説検定法の手順 12. 正規母集団の母平均の検定 13. 出現率の検定 14. 相関係数 15. 期末試験
- 【成績評価】期末試験を 70%, 講義への取り組み状況を 30%として評価し, 全体で 60%以上で合格とする。
- 【学習教育目標との関連】(A) に対応する。
- 【教科書】坂光一他『例題中心 確率・統計入門』学術図書出版社
- 【参考書】青木利夫, 吉原健一『統計学要論』培風館
- 【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
- 【連絡先】金成海(総合科学部1号館3109室, TEL:656-7543, e-mail:kin@pm.tokushima-u.ac.jp)

画像処理

Image Processing 教授・山田 勝稔 2 単位

- 【授業目的】コンピュータによる画像処理の基本原則と少数の代表的な処理アルゴリズムおよびそれを組立てた処理システムまでを学習することにより, 画像処理の基礎及び問題点を概観し, 将来自らの力でより進んだシステムを構築できるようにする。
- 【授業概要】講義計画で示した 6 個の原理及び処理アルゴリズムはそれぞれ 2 週で構成され, 1 週目は講義を 2 週目でコンピュータを用いた講義内容の演習を行う。残り 3 週でひずみ計測システムの制作を行う。
- 【受講要件】「C 言語演習」を履修し, コンピュータの基本的な操作手法を習得していることを前提にして講義を行う。
- 【履修上の注意】毎回の予習, 復習を行い, 与えられた課題は次週までに解決すること。4 回以上の欠席には単位を与えない。
- 【到達目標】
1. コンピュータでの画像データの取り扱い方を理解する。
 2. 基本的な画像処理の手法を理解する。
 3. 各手法を組み合わせることで目的の処理を達成する技術を習得する。
- 【授業計画】1. 画像処理概要 2. 画像処理概要実習 3. 2 値化 4. 2 値化実習 5. 輪郭抽出 6. 輪郭抽出実習 7. 雑音除去 8. 雑音除去実習 9. 画質改善 10. 画質改善実習 11. 特徴抽出 12. 特徴抽出実習 13. 画像処理によるひずみ計測システムの制作 (1) 14. 画像処理によるひずみ計測システムの制作 (2) 15. 画像処理によるひずみ計測システムの制作 (3)
- 【成績評価】授業への取り組み, 演習時に行う問題の提出状況及び回答内容, 講義最終に行う課題制作の内容を総合して成績を評価する。
- 【学習教育目標との関連】(B) に対応する。
- 【教科書】八木伸行 他著「C 言語で学ぶ実践画像処理」オーム社
- 【参考書】田村秀行著「コンピュータ画像処理入門」総研出版, 長谷川純一 他著「画像処理の基本技法」技術評論社
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】山田(M621, 656-7364, yamada@me.tokushima-u.ac.jp)

機械科学特別講義

Topics on Mechanical Science 非常勤講師 1 単位

機械工学科 (昼間コース)

【授業目的】機械科学に関連した最新の技術動向について、学会や企業の第一線で活躍されている方を講師にお招きして、集中講義を行う。他大学における研究の動向や、企業における技術開発の手法に関する知識を得ることが、主な授業目的である。

【授業概要】講義を学外からの講師に依頼しているため、毎年固定した内容にすることはできないが、基本的には、材料の開発や評価法に関する内容を講義していただけるよう、講師の人選を行っている。

【受講要件】特にないが、新聞、雑誌等の技術関連情報に常に接し、新しい技術の動向に興味を持っていることが大切である。

【履修上の注意】不定期な講義であるが、全ての講義に出席することが単位認定上の絶対条件になる。また、外部からお招きしている講師に失礼にならないように、絶対に遅刻しないこと。

【到達目標】新しい技術や研究開発の動向に触れて、他の講義科目の学習意欲を推進すること。

【授業計画】1. 複数名の講師による集中講義である。講義予定は掲示により伝達するので注意すること。

【成績評価】受講姿勢およびレポートにより評価を行う。

【学習教育目標との関連】(B)、(I)に対応する。

【教科書】講師によって作成された資料に基づいて講義を行う

【参考書】講義中に紹介する

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】世話人教官の氏名は、掲示板により連絡する。

【備考】この講義は専門科目に基づいた発展的内容について紹介するものなので、積極的な履修を期待する。

機械基礎実習

Introduction to Mechanical Engineering Laboratory

教授・英 崇夫、小西 克信、三輪 恵、助教・升田 雅博 1 単位

【授業目的】実際の各種機械に慣れ親しみ、その構成要素、機構、精度、性能などを調べることによって、機械工学や技術と機械との有機的つながりを考える。さらに、荷重測定用の八角リングの製作を通して部品類の具現化の方法、図面の読み方などを体験学習する。これらを通じて機械工学の果たす役割を認識させるとともに機械エンジニアとしての自覚を促す。

【授業概要】安全についての考え方をまず述べ、工作機械類を使用した荷重測定用八角リングの製作とディーゼルエンジン、サーボモータの分解・組立・運転を実習するとともに、性能試験や材料試験を行い、これから学ぶ機械工学・技術の具現法の一部を体験する。

【受講要件】心身ともに健康である。

【履修上の注意】積極的に参加すべきであるが、体調が悪いときは必ず申し出る。作業しやすい服装のこと。

【到達目標】

1. 社会生活の中で機械工学が果たしている役割の一端を理解する。
2. 「ものづくり」の基本を理解する。
3. プレゼンテーションの方法を修得する。

【授業計画】1. 安全教育 2. NC プログラミング 3. MC による八角リングの製作 4. 八角リングを用いた負荷荷重の測定 5. レポート作成 6. 溶接 7. ディーゼルエンジンの分解 8. ディーゼルエンジンの組立・運転 9. レポート作成 10. 汎用旋盤による引張試験片の製作 11. 材料試験 12. レポート作成 13. サーボモータの分解・組立 14. サーボモータの性能評価 15. レポート作成 16. 予備日

【成績評価】実習に対する理解力の評価は、定期試験は行わず、実習への取組み態度、レポートの提出状況と内容を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(C)80%、(E)20%に対応する

【教科書】「機械基礎実習指導書」を配布する。

【参考書】賀勢晋著「機械工作例題演習」コロナ社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】指導員の指示に従って盲目的に実習するのではなく、研究的態度で臨むことが重要である。ただし、機械類を扱うので指導員の注意を十分に守ることを忘れてはいけない。平常点とレポートとの比率は、30:70 とする。平常点は出席状況、実習に取り組む態度を含む。

機械計測

Mechanical Measurement

教授・英 崇夫 2 単位

【授業目的】自然の仕組みと社会のニーズを橋渡するのが工学である。自然の仕組みを理解し、それを用いて新しいものの開発をするために、測定がいかに大切であるかということ学ぶ。正確で精密な測定によ

て、事実をきちんと事実として見つめられるような技術者になることを目指す。

【授業概要】機械工学における計測の重要性を認識するとともに、機械部品を加工・生産することにおいて重要な関わりのある計測の原理と方法について理解を深める。計測の基礎である誤差についての正しい理解をし、高精度測定、測定の自動化、オンラインデータ処理法などの近代化された生産体系の中に、測定手法がいかに組み込まれているかを学ぶ。

【受講要件】測定系には機械要素、材料、電気、光学、流体などの様々な分野が総合的に駆使されて成り立っているため、これらに関する初歩的な知識を要する。

【履修上の注意】受講の前には必ず該当部分の予習が必要です。また、講義中にはメモを取り、それに基づいて自分のノートを作成することが大切です。理解できた部分と理解できなかった部分をはっきりさせ、後者について時をおかず自ら知らざる努力をしよう。

【到達目標】

1. 機械工学における計測の重要性を理解する。
2. 偶然誤差と系統誤差の概念とそれらの処理法を理解する。
3. 系統誤差の要因を理解する。
4. 各種寸法測定法の原理を理解する。
5. A-D 変換とその具体的方法を理解する。

【授業計画】1. 計測の基礎 (自然科学と工学技術) 2. 計測の基礎 (機械工学と計測) 3. 長さ測定の基準 (メートル基準、ブロックゲージ) 4. 偶然誤差と系統誤差 5. 寸法精度の測定 (絶対測長と比較測長) 6. 測定誤差 (温度による測定後差) 7. 測定誤差 (弾性変形による測定後差) 8. 測定器の原理と構造 (機械的測定) 9. 測定器の原理と構造 (光学的測定) 10. 測定器の原理と構造 (流体的測定) 11. 測定器の原理と構造 (電気的測定) 12. 測定の自動化 (自動測定器、自動組合せ機器) 13. デジタル計測 (A-D 変換の原理) 14. 角度の測定 15. 表面粗さの測定 16. 定期試験

【成績評価】3 回のレポートと定期試験の総合点を骨子として評価する。平常点と定期試験の比率は 50:50 とする。4 回以上の欠席には単位を与えない。また、再試験は当該学期に 1 回行う。

【学習教育目標との関連】(B)70%、(E)15%、(G)15%に対応する。

【教科書】築添正著「精密計測学」

【参考書】大西義英著「計測工学」理工新書、青木繁著「精密測定 1, 2」コロナ社、谷口修、堀米泰雄共著「計測工学」森北出版、沢辺監修「知りたい測定の自動化」ジャパンマシニスト社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】M317, Tel:656-7377, hanabusa@me.tokushima-u.ac.jp

【備考】測定系には機械要素、材料、電気、光学、流体などさまざまな分野が総合的に駆使されて成り立っているため、これらに関する初歩的な知識を要する。また、講義終了後には講義中のメモに基づいて自分のノートを整理し、内容のまとめと補完をすることが大切である。

機械工学実験

Mechanical Engineering Laboratory

機械工学科教官 1 単位

【授業目的】機械工学各分野に関連したテーマについて基礎的な実験を行うことにより、現象を理解するとともに、現象に対する法則性を見出す科学的、分析的な感性を養う。

【授業概要】10 程度の班に分かれて、下記授業計画に記載されているテーマに応じた実験を行う。実験終了時は、結果をレポートにまとめ、発表・提出する。

【受講要件】これまでに学習した機械工学科目を十分に復習しておくこと。

【履修上の注意】開始日に、実験題目と日程についての説明および安全教育を行うので必ず出席すること。実験時は機械類を扱うので指導員の注意を十分に守ること。

【到達目標】

1. 様々な実験を通して、機械工学に関係する原理・法則や物理的現象を体験し、各講義で修得した知識の理解を深める。
2. 実験結果を分析し、考察する能力を身につける。
3. 機械工学に関係する機器や計測装置の使用方法を修得する。
4. レポート作成能力やプレゼンテーション能力を修得する。

【授業計画】1. 電子顕微鏡実験 2. 電子回路実験 3. 多関節ロボット操作実験 4. ダイアルゲージの誤差解析 5. 材料試験 6. 応力測定 7. PID 制御実験 8. ポリユートポンプの性能試験 9. ディーゼル機関の性能試験 10. 切削加工のモニタリング

【成績評価】テーマ毎に実験を行い、各指導教官に実験報告書を提出して試問を受ける。受講姿勢および実習の態度 (60%) と報告書 (40%) から評価する。全テーマ受講が必須。

【学習教育目標との関連】(C) に対応する。

機械工学科 (昼間コース)

- 【教科書】最初の時間に「機械工学実験指導書」を配布する。
【参考書】特になし
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】当該年度の機械工学実験世話係、それぞれの実験の担当教官

機械工学実地演習

Factory Experience

1 単位

- 【授業目的】生産活動の場を広く実地に体験させることで、将来のエンジニアとしての目標をより具体的に描かせる。
【授業概要】開発、設計、生産技術等の個々のテーマに基づいてそれぞれの企業にて実地研修を行う。
【受講要件】特になし
【履修上の注意】学外実習なので、きちんとした服装でのぞむこと。時間を守ること。
【到達目標】
1. 企業での実地訓練を通じて、学習意欲の喚起および職業意識の育成を図る。
2. 生産活動の場での実地体験を通じて、エンジニアとしての将来の目標を確立する。
【授業計画】1. 3年次の夏季休業中に2, 3週間、企業の工場等において実習を行う。その内容については、派遣先の企業に依存するが、その内容を大まかに分類すると以下のようである。2. 開発部門での製品開発の一端を実習体験 3. 設計部門での製品設計・CAD/CAMの実習 4. 生産部門での生産技術・生産工程改善についての実習 5. 生産ラインでの実生産の実習
【成績評価】実習終了後、夏期実習証明書および夏期工場実習報告書を提出する。
【学習教育目標との関連】(C)に対応する
【教科書】特になし
【参考書】特になし
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】当該年度の担当教官
【備考】けがおよび事故のないよう細心の注意を払うとともに、派遣先の担当者の指示に従うこと。またインターンシップ・介護等体験活動・ボランティア活動賠償保険に加入すること。

機械工学輪講

Mechanical Engineering Seminar

機械工学科教官 1 単位

- 【授業目的】機械工学に関係する外国語文献の読解能力をつける。
【授業概要】少人数のグループに分かれて外国語の文献を講読し、内容を理解すると共に他のメンバーに対してその内容を説明し理解させる。授業は前半と後半に分け、それぞれ別のテーマで合計2テーマについて学習する。
【到達目標】
1. 外国語の専門用語を理解する
2. 専門外国語の文献を読むための能力をつける
3. 書かれた内容を要約して説明する能力をつける
【授業計画】1. 各担当教官による。
【成績評価】試験は実施しない。受講姿勢、発表態度、内容の把握の程度を合否の判定基準とする。前半および後半についてそれぞれの担当教官が判定し、双方ともに合格の場合のみ単位が取得できる。
【学習教育目標との関連】(B), (F)に対応する
【教科書】各教官により異なる。機械工学に関連する分野の参考書、論文、雑誌などから選ばれる。
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】当該年度の輪講世話役

機械材料学

Engineering Materials

助教授・高木 均, 岡田 達也 2 単位

- 【授業目的】機械部品を構成する材料の基本的性質を、金属材料に重点を置いて講義する。術語の丸暗記ではなく、合金の平衡状態図や TTT 線図, CCT 線図の読み取りを通して、熱処理に伴う合金の微細組織変化について理解させる。
【授業概要】金属材料の組織に関する基本的な術語について解説した後、合金の平衡状態図の読み取りを、具体例を多く用いて理解させる。材

料各論では TTT 線図, CCT 線図の読み取りを通して、熱処理を利用した鉄鋼材料の微細組織制御とその応用に重点を置いて解説する。

【受講要件】材料力学等の講義を通して、材料の変形や強度に関する基本的な概念を理解していること。

【履修上の注意】ほぼ毎回簡単な演習問題を行う。読み取り問題や計算問題に備えて、目盛りのついた三角定規と関数電卓は忘れずに持参すること。

【到達目標】

1. 二元合金平衡状態図の読み取りができること。特に各相の成分・割合が求められること。
2. TTT 線図, CCT 線図の読み取りを通して、鉄鋼材料の内部微細組織の変化が予想できること。
3. 各種材料の JIS 記号について説明できること。

【授業計画】1. 機械材料学とは何か/相と状態図 2. 状態図読み取りの基礎 3. 共晶状態図 4. 鉄-炭素合金状態図 5. 鋼の焼き入れ・焼き戻し 6. TTT 線図の基礎 7. 中間試験 8. CCT 線図の基礎 9. 各種合金鋼の TTT 線図, CCT 線図 10. 金属材料の機械的性質の試験法 11. 各種鉄鋼材料 12. 各種鉄鋼材料 2 13. アルミニウム合金 14. その他の非鉄金属材料 15. 期末試験

【成績評価】受講姿勢を平常点として 10%, 中間試験および期末試験の成績をそれぞれ 30%, 60% で評価する。講義中に質問に答えた場合は適宜平常点として追加する。

【学習教育目標との関連】(B)に対応する。

【教科書】キャリスター著 (入戸野監訳)「材料の科学と工学 [1] 材料の微細構造」(培風館), 門間著「大学基礎・機械材料」(実教出版)

【参考書】技能ブックス 20「金属材料のマニュアル」(大河出版)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】高木(M620, 656-7359, takagi@me.tokushima-u.ac.jp), 岡田(M616, 656-7362, t-okada@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】教科書のうち「材料の科学と工学 [1]」は後期開講の「材料科学」においても使用する。

機械システム特別講義

Topics on Mechanical Systems

非常勤講師 1 単位

【授業目的】機械システムに関連した最近の内容について、学会ならびに業界の第一線で活躍されている方を講師にお招きしての集中講義である。

【授業概要】講義を学外講師に依頼しているため、固定した内容にすることができないが、基本的な内容としては、他大学からの講師はエネルギーとその利用に関連した最近のトピックスについての講義であり、産業界からの講師はエンジンなどの研究開発などについての授業が行なわれる。最近の講義例を挙げると次のようである。「流体機械の騒音」「LDV による流速測定」「熱工学に関する最近の話題」「企業における研究開発(先進的船用ディーゼル機関の開発)」

【受講要件】流体力学 1 や工業熱力学および関連科目を履修していること。

【履修上の注意】講義への出席と課題レポートの提出。

【到達目標】流体力学と熱工学の分野に関して、技術者に要求される基礎的知識と応用技術の理解を深めること。

【授業計画】1. 複数名の講師による集中講義である。講義の予定は掲示によって連絡される

【成績評価】受講姿勢、レポート提出または試験による。

【学習教育目標との関連】(B)に対応する。

【教科書】未定

【参考書】未定

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義は不定期であるが出席は絶対的な要件であり、遅刻しないことも要求される。講義の予定は掲示によって連絡される。成績評価に対する未定(講義中に連絡する)

機械数値解析

Numerical Analysis

教授・山田 勝稔, 助手・草野 剛嗣 1 単位

【授業目的】機械工学の分野において必要とされる数値解析手法について演習を行い、身近に生じる問題の定式化、プログラム作成能力を修得し、問題の解決手法をより実践的に理解をすることを目的とする。

【授業概要】各演習時間では、講義計画に示される内容について説明を行った後、関連する機械工学の問題について解析を行う。また、実際にパーソナルコンピュータを用いてプログラム作成を行い、問題の定式

機械工学科 (昼間コース)

化・解決法について実践的に演習を行う。毎回、講義の内容に沿った問題を提示するとともに、学期の期末時には演習のまとめとしてレポート課題を実施し、総合的な問題解決能力の養成を図る。

【受講要件】 全学共通教育の情報科学分野「コンピュータ入門」及び機械工学科専門科目「C言語演習」を履修し、コンピュータの操作方法とプログラミング能力を修得していることを前提にして演習を行う。

【履修上の注意】 講義および演習形式で授業を行うため、無断欠席を3回以上行なった者は、失格とする。

【到達目標】

1. 機械工学の分野で生じる種々の問題の定式化について理解する。
2. さまざまなコンピュータアルゴリズムについて理解する。
3. プログラムを個別の問題に適用可能なように設計・作成ができるようにする。
4. より実践的なプログラム作成能力を修得する。

【授業計画】 1. 数値シミュレーションとアルゴリズム概要 2. 数値シミュレーションと誤差 3. 非線型方程式の数値解法 4. プログラミング実習 1 5. 連立一次方程式 6. 固有値と固有ベクトル 7. プログラミング実習 2 8. 補間と近似 9. フーリエ級数とフーリエ変換 10. 数値微分と数値積分 11. プログラミング実習 3 12. 常微分方程式の解法 13. 偏微分方程式の解法 14. 機械工学における数値解析 15. プログラミング実習 4 16. レポート課題

【成績評価】 講義・演習の受講姿勢、毎回行う問題の提出状況及び解答内容を平常点とし、最終レポート課題を試験に相当する成績とする。この平常点と最終課題の比率を 7:3 として総合的な成績評価を行う。

【学習教育目標との関連】 (A) 30%, (B) 20%, (C) 30%, (D) 20%に対応する。

【教科書】 峯村吉泰著「CとJavaで学ぶ数値シミュレーション入門」森北出版

【参考書】 教科書・授業毎に関連した資料を配布・紹介する。

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 山田(M621, 656-7364, yamada@me.tokushima-u.ac.jp), 草野(M528, 656-2151, kusano@me.tokushima-u.ac.jp)

機械数理演習 1

Mathematical Fundamentals of Mechanical Engineering 1

機械工学科全教官 1 単位

【授業目的】 機械工学の専門科目を受講する前に、最低限修得しておかなければならない基本的な数学および物理の概念を精選し、5人程度の少人数グループに分けてゼミ形式で教育する。

【授業概要】 授業計画で挙げた項目について演習を行うが、上記の時間配分や内容は固定的なものではない。例えば高校において物理を履修していない学生のグループでは、物理に重点を置いた内容を学習させることもあり得る。計算テクニックの修得だけでなく、基礎的な概念を把握するように努めさせる。

【受講要件】 特になし

【履修上の注意】 演習科目であるので他の実習・実験科目と同様に全回出席者が成績評価の対象となる。欠席しないこと。

【到達目標】

1. 高校で修得した数学および物理学の基礎的な知識を完全に身につける。
2. 演習問題に対して、解法の記憶に頼ることなく解答を導き出すことができる。
3. 問題の解き方を他人に説明することができる。

【授業計画】 1. 習熟度チェックテスト 2. (グループ分け作業) 3. 微分法の基礎 1 4. 微分法の基礎 2 5. 積分法の基礎 1 6. 積分法の基礎 2 7. テイラー展開の考え方 8. 統計学の基礎 9. ベクトルの基礎 10. 行列の基礎 11. 方程式の物理的意味 12. 単位と次元 13. 有効数字 14. 電気回路の基礎 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】 受講姿勢と毎回の演習での発表状況、期末試験成績を総合的に評価する。

【学習教育目標との関連】 (A) に対応する。

【教科書】 各グループ担当の教官が作成するプリント教材により演習を進める。

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 当該年度の担当教官

【備考】 演習科目であるので他の実習・実験科目と同様に全回出席者が成績評価の対象となる。欠席しないこと。平常点と期末試験の比率は 5:5 とする。

機械数理演習 2

Mathematical Fundamentals of Mechanical Engineering 2

教授・森岡 斎, 助教授・多田 吉宏 1 単位

【授業目的】 機械工学の専門科目では、物理現象を工学的視点から解析し、その結果を応用して有用な結果を導く方法を講じることが多い。そこで、これら機械工学の専門科目を受講する前に最低限修得しておかなければならない数学および物理の基礎を体得させることを目的としている。

【授業概要】 機械工学の専門科目につながる数学および物理の基礎について、2部構成で講義と演習を行う。前半では図心・圧力・対数・グラフによる表現などを通じて実学としての数学を体得させる。後半では測定値と誤差、有効数字、データの処理などの基本を扱う。それぞれの基本と要点が理解出来るように、簡単な例題やレポート課題などを通じて演習を行う。

【受講要件】 「機械数理演習 1」を履修していることが望ましい。

【到達目標】

1. 図心・圧力・対数・グラフによる表現などを通じて実学としての数学を体得する。
2. 測定値と精度、誤差、有効数字、データの処理などの基本を身につける。

【授業計画】 1. 実学としての数学 1 2. 実学としての数学 2 3. 平面図形の図心 4. 図表(表とグラフ) 5. 対数と対数グラフ 1 6. 対数と対数グラフ 2 7. 圧力・気圧 8. 前半部の試験 9. 測定値と誤差 1 10. 測定値と誤差 2 11. 演算における誤差の波及 1 12. 演算における誤差の波及 2 13. 有効数字・近似計算 14. 測定データの統計的取扱いの基礎 15. 最小2乗法 16. 後半部の試験

【成績評価】 授業への取組み・レポートなどの平常点と試験の結果とを 6:4 の比率で総合して評価する。評価に対する前半部・後半部それぞれのウエイトは 1:1 である。

【学習教育目標との関連】 (A) に対応する。

【教科書】 教科書は使用しない。プリント資料を配布する。

【参考書】 講義中に随時紹介する。

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 森岡(M521, 656-7373, morioka@me.tokushima-u.ac.jp), 多田(M319, 656-7381, tada@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】 定規・物差し、関数電卓、A4 レポート用紙を持参すること。

機械設計

Machine Design

助教授・岡田 健一, 講師・長町 拓夫 2 単位

【授業目的】 機械を設計する上で必要となる一般的な機械要素の働きとその設計法を講義と演習を通して修得する。

【授業概要】 機械要素設計の基礎知識および締結要素・軸系要素の性能・構造ならびに設計方法について解説する。

【受講要件】 材料力学 1 を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】 授業中に演習問題を解くため関数電卓を忘れずに持参すること。

【到達目標】 機械要素の働きとその設計法を理解する。

【授業計画】 1. 基本設計 2. 機械材料 3. 許容応力 4. 安全率 5. ねじ 6. ねじ部品 7. ねじ継ぎ手 8. 中間試験 9. 溶接継ぎ手 10. 軸 11. キーおよびスプライン 12. 軸継ぎ手 13. 滑り軸受け 14. 転がり軸受け 15. シール 16. 定期試験

【成績評価】 講義への取り組み状況、演習レポートの提出状況および内容、中間および定期試験の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】 (B)80%, (D)20%に対応する。

【教科書】 和田稲苗著「機械要素設計」実教出版

【参考書】 大西清著「JIS にもとづく機械設計製図便覧」理工学社

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 岡田(M123, 656-7395, okada@me.tokushima-u.ac.jp), 長町(M526, 656-9187, ngmch@me.tokushima-u.ac.jp)

機械設計製図

Design of Machine Elements and Drawing

教授・逢坂 昭治

助教授・升田 雅博, 岡田 健一, 清田 正徳, 小倉 長夫 1 単位

【授業目的】 例題として小型手巻きウインチの設計を取り上げ、各人に与えられた仕様に基づき実際に設計計算および製図を行なう事により、機械設計に関する技術を習得する。

機械工学科 (昼間コース)

【授業概要】各人に与えられた設計条件に基づき設計計算を行なう。設計は条件を与えればすぐに適切な解答が与えられるのでなく計算の試行錯誤で寸法が決まってくる事を学ぶ。設計計算書は指導教官のチェックをうける。最終的に決まった寸法をもとにして製図を行ない設計図面を完成させる。

【受講要件】基礎機械製図、材料力学を修得していることが望ましい。
【履修上の注意】レポート用紙、電卓、製図用具、製図教科書を持参すること。

【到達目標】

1. 仕様を与えられた時、それを実現するための設計の手順を理解し体得する。
2. 設計で得た結果を図面として表し、全体としての機能を確認することを学ぶ。
3. 製図上の約束事を学び、他の図面を理解する能力を養う。

【授業計画】1. 講義計画の説明 1 週間 2. ワイヤロープ、胴巻き 1 週間 3. 歯車装置の設計 1 週間 4. 胴巻き軸、胴巻き歯車の設計 2 週間 5. 制動装置の設計 1 週間 6. 中間軸の設計、クランクハンドル軸の設計 2 週間 7. 軸受、フレームの設計、設計書チェック 2 週間 8. 製図 5 週間

【成績評価】成績の評価は授業への取り組み、設計計算書、提出された設計図面等を総合して行なう。

【学習教育目標との関連】(C) 80%、(B) 20%に対応する

【教科書】技術教育研究会編「手巻ウインチの設計」パワー社

【参考書】ウインチの設計に関しては各種の本が出ている。また機械学会編「機械工学便覧」、その他機械材料等各種の便覧、および使用した教科書等を参照のこと。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】逢坂(M523, 656-7375, ousaka@me.tokushima-u.ac.jp)、岡田(M123, 656-7395, okada@me.tokushima-u.ac.jp)、升田(M320, 656-7380, masuda@me.tokushima-u.ac.jp)、清田(M522, 656-7374, kiyota@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】普通の講義と違って学生それぞれが最終図面の完成まで進めてゆくものであるから、それぞれの進行状況が異なってくるので、提出期限に合わせるよう自覚して必要な事柄を積み上げて行かなければならない。なお機械要素、機械材料、材料力学、機構学、加工法、基礎機械製図など総合的な知識が必要である。成績はレポート、設計計算書および設計図面を総合して評価する。

機械力学

Applied Dynamics of Machine

教授・芳村 敏夫

助教授・日野 順市 2 単位

【授業目的】2 年後期で、質点および剛体の力学、機構の運動解析等の機械力学に関する基礎知識を修得させる。3 年前期で、機械振動の解析と振動制御およびコンピュータを用いた解析方法についての基礎知識を修得させる。

【授業概要】機械工学に関する運動学および力学について基本的なところから述べ、後半では特に機械振動に着目して基礎理論から応用まで説明する。演習は講義に基づいて行なう。

【受講要件】「解析力学」、「解析力学演習」、「機構学」、「微分方程式 1」を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】機械工学の基礎専門科目として重要であるから、予習・復習は必ず行うこと。

【到達目標】静力学、動力学および振動工学の基礎知識の理解と応用力の育成

【授業計画】1. 1 点に働く力の合成、分解、つりあい 2. 剛体に働く力のモーメント、偶力 3. 機構の運動 平面運動、機構の速度 4. 摩擦 長さび、ベルト伝動、ねじ 5. 質点系の力学 慣性力、仕事、運動量 6. 剛体の力学 回転運動、慣性モーメント 7. 剛体の力学 ジャイロモーメント 8. 定期試験 9. 機械振動の基礎 調和分析、フーリエ級数 10. 1 自由度系の振動 自由・強制振動、振動の絶縁 11. 2 自由度系の振動 自由・強制振動、粘性動吸振器 12. 振動の計測 サイズモス、データ処理 13. 振動の制御 受動制御、能動制御 14. 多自由度系の振動 影響係数、ラグランジュの方程式 15. 連続体の振動およびコンピュータ解析 16. 定期試験

【成績評価】2 年後期と 3 年前期の通年で、中間試験、学期末試験の点数および受講姿勢、レポートの平常点によって評価する。試験の点数と平常点の比率は 8:2 とする。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する。

【教科書】2 年後期 芳村敏夫・小西克信著「機械力学の基礎」日新出版、3 年前期 芳村敏夫・横山隆・日野順市著「基礎振動工学」共立出版

【参考書】参考書については講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】芳村(M421, 656-7382, yosimura@me.tokushima-u.ac.jp)、日野(M422, 656-7384, hino@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「機械力学」と「機械力学演習」は理解を深める意味で合わせて受講する必要がある。「解析力学」、「解析力学演習」、「微分方程式 1」の履修を前提として授業を行う。

機械力学演習

Exercise of Applied Dynamics of Machine

教授・芳村 敏夫

助教授・日野 順市 1 単位

【授業目的】講義の進行にしたがい演習問題を解かせることにより理解を深める。

【授業概要】「機械力学」の講義の進度に応じて行なう。講義の理解を深めさせるために、演習問題の演習を実施しレポートを課す。演習問題については、模範解答を配布するなどして解説する。

【受講要件】「解析力学」、「解析力学演習」、「機構学」、「微分方程式 1」を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】演習問題は必ず事前に解答しておくこと。レポート等でわからないところがあれば、教官室に質問にいくこと。

【到達目標】静力学、動力学および振動工学も基礎知識の理解。

【授業計画】1. 「機械力学」の講義に準じる。

【成績評価】2 年後期と 3 年前期の通年で、「機械力学」の試験の点数および受講姿勢、演習、レポートの平常点により評価する。成績評価の比率は「機械力学」に準じる。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する。

【教科書】2 年後期 芳村敏夫・小西克信「機械力学の基礎」日新出版、3 年前期 芳村敏夫・横山隆・日野順市「基礎振動工学」共立出版

【参考書】「機械力学」講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】芳村(M421, 656-7382, yosimura@me.tokushima-u.ac.jp)、日野(M422, 656-7384, hino@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「機械力学」と「機械力学演習」は基礎知識の理解を深める意味で合わせて受講する必要がある。

機構学

Mechanism

教授・芳村 敏夫、助教授・木戸口 善行 2 単位

【授業目的】機械工学の基礎である機構の運動解析に関する基礎知識を習得させる。講義、演習、レポート、小テストを通して機械設計に必要な基礎知識、機構解析方法を学ぶ。

【授業概要】機構学に関する基本的な事項から講義を行い、機械工学の基礎的要素であるリンク機構、巻掛け伝動機構、ころがり伝動機構、歯車機構などの各種機構を解説し、動力伝達機構を理解させる。講義は演習を中心に行い、機構学に対する基礎力の養成を図る。

【受講要件】全学共通教育科目のうち、基礎数学および基礎物理学を履修しておくことが望ましい。

【履修上の注意】演習による基礎知識の習得を目的にしているため、授業への取り組みと演習や小テストの回答状況を重視する。

【到達目標】基本的な機構の運動解析の習得

【授業計画】1. 総論 機構と機構、運動伝達 2. 総論 連鎖と機構、瞬間中心 3. 速度と加速度 4. リンク機構・リンク機構の種類 5. リンク機構・四節回転連鎖 6. リンク機構・スライダクランク連鎖 7. リンク機構・両スライダクランク連鎖 8. リンク機構・その他の連鎖 9. 巻掛け伝動機構・ベルト伝動 10. 巻掛け伝動機構・伝達動力 11. ころがり接触による伝動機構 12. 歯車機構・歯車の種類と歯車各部の名称 13. 歯車機構・歯形の条件 14. 歯車機構・インボリュート歯車 15. 歯車列 16. 定期試験

【成績評価】演習により解析力および基礎知識の習得を行う。また、適宜、演習の問題を中心に小テストを行う。このため、点数評価は、授業への取り組み状況と演習の回答状況、小テストおよび定期試験の成績を総合して行なう。再試は行わない。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する。

【教科書】太田博著「機構学」共立出版

【参考書】参考書については、講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】芳村(M421, 656-7382, yosimura@me.tokushima-u.ac.jp)、木戸口(総合研究実験棟502, 656-9633, kidog@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】演習による解析力および基礎知識の習得を目的にしているため、予習、復習は怠らないこと。

機械工学科 (昼間コース)

技術者と社会

Introduction to Mechanical Engineering 教授・森岡 斎
助教授・多田 吉宏, 非常勤講師・井原 康雄, 前川 治 2 単位

【授業目的】技術者を取巻く今日の社会環境について講義し, 機械技術者を目指す新入生諸君が自立的で有意義な学生生活を構築する上で必要な素養と能力を養う。情報収集の技術や報告書の書き方などにも触れる。

【授業概要】教科書のほか, 毎回, 新聞・雑誌・参考図書などから機械と機械技術者をめぐる具体的なトピックスを取り上げて技術者を取巻く今日の社会環境や話題などを講義すると共に, レポートを通じて日常的な情報収集・分析・判断・表現能力などを養うことを目指す。

【受講要件】継続して新聞に目を通すこと。

【到達目標】

1. 機械工学を学び技術者を目指すことの意味や意義を理解する。
2. 技術者を取巻く社会環境や必要な素養を理解する。
3. 情報を集め, 分析・判断し, 表現する方法を修得する。

【授業計画】1. 序説 2. 大学で学ぶということ 1 3. 大学で学ぶということ 2 4. 社会環境の変遷 1 5. 社会環境の変遷 2 6. 技術開発 1 7. 技術開発 2 8. 技術の保護, 特許 9. 技術者の倫理 10. 企業と技術者 1 11. 企業と技術者 2 12. 技術者の資質 13. 技術者と資格 14. 技術者のライフプラン 15. まとめ 16. 定期試験

【成績評価】授業への取組み・レポートなどの平常点と, 期末試験の結果とを総合して評価する。評価には平常点を重視し, 平常点と期末試験との比率を 8:2 とする。

【学習教育目標との関連】(I) に対応する。

【教科書】飯野弘之著「新技術者になるということ」Ver.4, 雄松堂出版, ISBN4-8419-0271-6。他に複数の課題図書と, 新聞・雑誌・参考図書などの資料からトピックスを拾って講義する。

【参考書】中島利勝, 塚本真也共著「知的な科学・技術文章の書き方」, コロナ社, ISBN4-339-07640-6。梅村忠夫著「知的生産の技術」, 岩波新書, ISBN4-00-415071-6。『就職活動の強い味方 新聞の読み方がわかる本』, 新星出版社, ISBN4-405-00467-6。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】森岡(M521, 656-7373, morioka@me.tokushima-u.ac.jp), 多田(M319, 656-7381, tada@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】技術者として必要な情報を収集整理し, またそれを判断・表現する能力を高めるには, 例えば報道や身の回りの製品等に対して関心を持ち設計製造といった技術側からの視点で眺めるなど, 日常生活の中での習慣づけが望まれる。学習・教育目標の(G) 自律的・継続的学習能力にも関連する。

技術者の倫理

Engineering Ethics for Engineers 教授・村上 理一, 英 崇夫 2 単位

【授業目的】技術者は個人のレベルにおいて技術に関する知識, 能力の向上がもめられる。これは産業の高度化や社会の成熟化に伴い, 社会が求める技術の高度化と密接に関係する。また, 社会そのものは多様化・個性化しており, それに対応できる技術者は技術を使う判断基準としての倫理観に裏打ちされた行動規範を持たねばならない。

【授業概要】工学倫理を必要とする社会の変遷を説明し, 自立した技術者となるために必要な自己の確立を促しながら, 人権を尊重するために必要な人権問題を講述する。工学的失敗の背景と特徴, それを回避するためのリスクマネジメントなどを具体的な事例を挙げながら説明し, クラス討論や事例研究を通じて技術者の倫理の必要性を考えさせる。また, リスク回避のための社会的規制である PL 法を説明し, 事件事例をケーススタディする。

【受講要件】技術者として自立する自覚を持つこと。

【履修上の注意】必要に応じてコンピュータ検索を使って事例研究を行う。

【到達目標】

1. 社会の求める工学倫理観の理解
2. リスクマネジメントの理解
3. グループ討論の手法の理解

【授業計画】1. 近代社会の特徴 2. 自己の確立と人権問題 3. 工学倫理を考える事例紹介 4. 工学倫理を考える事例研究 5. 工学倫理を考えるグループ討論・レポート 6. 工学倫理の概念について 7. 安全とリスクについて 8. 技術と失敗 9. 失敗の特徴・レポート 10. 製造物責任法-PL 法 11. ビジネス倫理について 12. 専門職としての技術者像・グループ討論・レポート 13. 専門職としての技術者と倫理 14. 環境と技術者 15. 専門職としての技術者の確立・グループ討論・レポート 16. 期末試験

【成績評価】到達目標の 3 項目が達成されているかをグループ討論の内容・方法, レポートおよび期末試験を総合して判定する。3 項目平均して 60%以上であれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(E)20%, (H)70%, (I)10%に対応する。

【教科書】必要に応じてプリントを配布する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】村上(M318, 656-7392, murakami@me.tokushima-u.ac.jp), 英(M317, 656-7377, hanabusa@me.tokushima-u.ac.jp)

基礎機械製図

Fundamental Mechine Drawing 教授・英 崇夫, 海江田 義也
助教授・多田 吉宏, 助手・日下一也, 大山 啓 1 単位

【授業目的】機械系の学生にとって機械製図の基本は在学中に必ず身につけなければならない事柄である。JIS に基づく機械製図法を十分理解し, 図面を正しく判読する力を養うとともに, 正確に迅速かつ美しく図面を書く技術を身につける。

【授業概要】機械製図法に関する規格を理解し, 実際に役立つ図面を書く技術を習得するために機械要素部品や歯車ポンプなどのスケッチ製図を行う。

【受講要件】とくになし

【履修上の注意】製図用具, 教科書を必ず持参すること。

【到達目標】

1. JIS に基づく機械製図法を十分理解できる。
2. 図面を正しく判読する力を養うとともに, 正確かつ迅速かつ美しく図面を書く技術を身につける。
3. 実際の機械部品を正確に図面化できる能力を身に付ける。

【授業計画】1. 製図法の解説 2. 線の練習 3. 投影法, 図形の表し方, 断面図 4. 寸法, 寸法公差とはめあい, 表面粗さ 5. 機械要素部品のスケッチ 6. 機械要素部品のスケッチ 7. 機械要素部品の製図 8. 機械要素部品の製図 9. 歯車ポンプ(機械加工部品)のスケッチ 10. 歯車ポンプ(機械加工部品)の製図 11. 歯車ポンプ(機械加工部品)の製図 12. 歯車ポンプ(鋳造品)のスケッチ 13. 歯車ポンプ(鋳造品)の製図 14. 歯車ポンプ(鋳造品)の製図 15. 歯車ポンプ(組立図)の製図 16. 歯車ポンプ(組立図)の製図

【成績評価】実習に対する取組み(40%)と製図の内容(60%)を総合して評価する。課題図面すべてを期限内に提出しなければ合格にはならない。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する。

【教科書】山本外次著「新機械製図」, 綜文館, ISBN4-88213-152-8

【参考書】大西清著「JIS にもとづく機械設計製図便覧」理工学社, 熊谷信男・阿波屋義昭・小川徹・坂本勇著「JIS 機械製図の基礎と演習」共立出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】英(M317, 656-7377, hanabusa@me.tokushima-u.ac.jp), 海江田(M321, 656-7379, kaieda@me.tokushima-u.ac.jp), 多田(M319, 656-7381, tada@me.tokushima-u.ac.jp), 日下(M322, 656-9442, kusaka@me.tokushima-u.ac.jp), 大山(M325, 656-9741, oyama@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】受け身ではなく, 積極的に取り組むこと。成績評価に対する原則として試験は行わない。

基礎波動論

Fundamentals of Wave Motion 非常勤講師・浦西 佐々也 2 単位

【授業目的】波は身近な現象である。ある時刻のある点での状況が別の時刻の別の点に伝わる時, 波の形をとることが多い。波の現象の基礎的内容を講義する。

【授業概要】まず, 単振動, 減衰振動, 強制振動等の振動体が 1 つの場合の振動現象を説明し, 次に振動体が複数ある場合として連成振動を扱い基準座標を導く。さらに連続体の振動を扱う。これらの振動現象の知識に基づいて, 波を表す方程式を考え, 弾性波を調べる。また, 波のエネルギー伝達, 反射, 透過を考える。

【到達目標】

1. 振動現象の基礎を理解する。
2. 波の基本的なしくみ, 性質を理解する。
3. 波の干渉, 回折現象などを理解する。

【授業計画】1. 単振動, 単振動の運動方程式 2. 減衰振動 3. 強制振動 4. 振動のエネルギーと強制力の仕事 5. 連成振動, 基準座標, 基準座標 6. 連続体の振動, 弦の振動 7. 連続体の振動, 棒の振動 8. 連続体の振

機械工学科 (昼間コース)

動, 膜の振動 9. 波, 波動方程式 10. 一次元, 三次元の波: 平面波, 球面波 11. 弾性波 12. 波のエネルギーとインピーダンス, 波の反射と透過 13. うなりと群速度 14. 波の干渉と回折 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】試験 70% (期末試験), 平常点 30% (授業への取り組み状況) として評価し, 全体で 60% 以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(A)50%, (B)50%に対応する。

【教科書】振動・波動 有山正孝著, 葦葉房

【参考書】パークレー物理学コース 3 波動 (上, 下) 丸善

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【備考】微分積分の基礎知識を要する。成績評価に対する [平常点] と [期末試験の成績] の割合は 3:7 とする。

CAD 演習

Computer Graphics and Computer-Aided Drawing Exercise

助教授・伊藤 照明, 講師・浮田 浩行, 助手・米倉 大介 1 単位

【授業目的】機械製造の基礎知識を前提として 3 次元形状モデリング法を習得するとともに, グループワークによる協調性を養いながら 3 次元形状モデリングによる課題作成を行う。

【授業概要】3 次元 CAD ソフトを用いて 3 次元形状モデリングの基礎演習を行う。さらに, 複数の部品を組み合わせて構成される実際の機械部品を題材として, 実態を表現するために必要なモデリング技術の基礎を習得する。また, 総合課題として行うグループワークを通じて創造性・独創性を養う。

【受講要件】「コンピュータリテラシー」および「C 言語演習」の受講を前提とする。

【履修上の注意】遅刻や欠席等によりグループワークの妨げとなることのないように注意すること。

【到達目標】

1. 3 次元形状モデリング法の習得。
2. グループワークによる協調性の育成。
3. 3 次元形状モデリングによる課題作成。

【授業計画】1. CAD 演習概要 2. CAD システム使用方法の説明および計画書の作成 3. CAD システム使用方法の説明および計画書の作成 4. グループ演習および計画説明会 5. グループ演習および計画説明会 2 6. グループ演習および計画説明会 3 7. グループ演習および計画説明会 4 8. グループ演習および計画説明会 5 9. 中間発表会 10. グループ演習および進捗報告会 1 11. グループ演習および進捗報告会 2 12. グループ演習および進捗報告会 3 13. グループ演習および進捗報告会 4 14. グループ演習および進捗報告会 5 15. 最終発表会 16. 予備日

【成績評価】受講姿勢 (平常点) を 50%, 課題作品・レポートおよびプレゼンテーションを 50% として評価する。

【学習教育目標との関連】(B) 70%, (D) 10%, (E) 20% に対応する。

【教科書】授業内容に応じた資料を配布する。

【参考書】授業中に随時紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】伊藤(M316, 656-2150, ito@me.tokushima-u.ac.jp), 浮田(M424, 656-9448, ukida@me.tokushima-u.ac.jp), 米倉(M326, 656-9186, yonekura@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】演習レポートおよび演習課題に積極的に取り組むこと。

計算力学

Computational Mechanics

教授・山田 勝稔 2 単位

【授業目的】今や設計はルールによる設計から解析による設計が普通となっている。この解析による設計が可能となったのは有限要素法を中核とする計算力学の発展によるところが大きい。本講義では, この有限要素法を主に変形する物体の力学への応用を中心とし, 将来, 学生が未知な分野にも容易に応用できることを念頭において, その概念や支配原理を詳述する。

【授業概要】最初に構造体を例にとり, 有限要素法 の概念と定式化について述べる。次に, 弾性力学の基礎を述べた後, 連続体の有限要素法による定式化について述べる。最後に有限要素プログラムとパソコンを用いた演習を行う。

【受講要件】コンピュータの基本操作, プログラミング, 材料力学の基礎を良く理解しておくこと。

【履修上の注意】必ず予習, 復習をすること。

【到達目標】

1. 1. 有限要素法 の概念と定式化を理解する。
2. 2. 弾性力学の基礎を理解する。
3. 3. 有限要素解析プログラムの基礎と利用方法を習得する。

【授業計画】1. 有限要素法 の基本概念 2. 剛性方程式の解法 3. 剛性マトリックスの座標変換 4. ばね系及びトラス構造の演習 (1) 5. ばね系及びトラス構造の演習 (2) 6. 弾性体の支配方程式 7. エネルギー原理と重み付き残差法 8. 弾性体の有限要素法一変位法 9. 弾性体の 1 次元問題 10. 弾性体の 2 次元問題 11. ポアソン方程式への応用 12. 高次要素 13. コンピュータを用いた実習 (1) 14. コンピュータを用いた実習 (2) 15. コンピュータを用いた実習 (3)

【成績評価】講義に対する理解力の評価は授業への取り組み (レポートの提出状況と内容), 中間試験, 期末試験および演習の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(A)20%, (B)80%に対応する。

【教科書】三好俊郎著「有限要素法入門」培風館

【参考書】1. 矢川元基・吉村忍共著「有限要素法」培風館, 2. 阿部武治編「弾性力学」朝倉書店

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】山田(M621, 656-7364, yamada@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】数学と力学のおりなす楽しさを理解してくれたらと思う。数学と力学を良く勉強しておいて下さい。毎講義の 5 分間テスト (出席状況を含む) と期末試験の結果を 4:6 の比率で評価する。

工業英語 1

Engineering English 1

教授・村上 理一, 助教授・伊藤 照明

講師・一宮 昌司, 助手・米倉 大介 2 単位

【授業目的】技術者としての英語による表現力と課題研究を通じたプレゼンテーション能力を養うために演習・レポート, 小テストを行い, 機械技術者に求められるコミュニケーション能力を修得させる。

【授業概要】機械技術者に必要な英語による表現力を高めるために身近な英文のカタログや技術論文を例にあげ工業英語の読み方や技術レポートの書き方を養成する。また, インターネットを活用しながら海外情報の取得の仕方を体験しながら課題探求を行い, その成果を英語による報告書としてまとめ最後に英語によるプレゼンテーションを実施し技術者に必要なコミュニケーション能力を体得させる。

【受講要件】工業英語のスキルを向上させたい意欲のあるもの

【履修上の注意】課題探求レポートの未提出およびプレゼンテーションに欠席すると不合格になる。

【到達目標】

1. 工業英語の表現力の養成
2. 機械技術を英語によって理解する。
3. 英語によるプレゼンテーション力の養成。

【授業計画】1. 工業英語の基礎 2. 工業英語の基礎・小テスト 3. 工業英語の表現力 4. 工業英語の表現力 5. 工業英語の表現力・小テスト 6. 技術レポートの書き方 7. 技術レポートの書き方 8. 技術レポートの書き方・レポート 9. インターネットによる課題探求 10. インターネットによる課題探求 11. インターネットによる課題探求 12. インターネットによる課題探求 13. インターネットによる課題探求・レポート 14. 英語によるプレゼンテーション 15. 英語によるプレゼンテーション 16. 予備日

【成績評価】到達目標 3 項目がそれぞれ達成されているかを小テスト, レポートおよびプレゼンテーションの提出状況および内容を考慮しながら, 受講姿勢と総合的に判定する。特に授業に出席し, 演習に回答することが最も必要とされ, プレゼンテーションは最終試験に変わるものであるからこれに欠席すると合格できない。

【学習教育目標との関連】(A)30%, (F)70%に対応する。

【教科書】鈴木英次著「科学英語のセンスを磨く」化学同人

【参考書】木下是雄著「理科系の作文技術」中公新書, マーク・ピーターセン著「日本人の英語」岩波新書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】村上(M318, 656-7392, murakami@me.tokushima-u.ac.jp), 伊藤(M316, 656-2150, ito@me.tokushima-u.ac.jp), 一宮(M520, 656-7368, ichimiya@me.tokushima-u.ac.jp), 米倉(M326, 656-9186, yonekura@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】この講義は英語によるコミュニケーション能力の向上を目指して各単元ごとに小テストやレポートを課すので, 毎回の課題を確実に実行し, 表現力を向上させるよう努力すること。成績評価に対する平常点と試験の比率は 5:5 とする。平常点には授業への取り組み, レポートの提出状況を含み, 試験には小テスト及び最終試験の成績を含む。

工業英語 2

Technical communication in English (2)

非常勤講師 2 単位

【授業目的】The aim of this course is to provide practice in English conversation with an emphasis on listening, grammar, and reading. This course will focus on preparation for the TOEIC test, and will cover relevant test-taking skills.

【授業概要】Class activities will involve listening, dictation, and the completion of written exercises.

【受講要件】None

【履修上の注意】None

【到達目標】The goal of this course is to prepare the student for the TOEIC test.

【授業計画】1. Course Introduction and diagnostic test 2. Grammar ReviewI 3. Picture PracticeI 4. Picture PracticeII 5. Question - ResponseI 6. Question - ResponseII 7. Short ConversationsI 8. Short ConversationsII 9. Short TalksI 10. Short TalksII 11. Examination#1 12. Grammar ReviewII 13. ReadingI 14. ReadingII 15. Course Review 16. Examination#2

【成績評価】Scores will be determined by two examinations. Examination#1 will be worth 50 points, and Examination#2 will also be worth 50 points. The students' final score will be determined by adding the points earned on Examination#1 and Examination#2.

【学習教育目標との関連】(F) に対応する。

【教科書】Longman Preparation Series for the TOEIC Test-Introductory Course (講義第1回目に教室にて販売)

【参考書】None

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】(有)アルフィランゲージテ770-0042徳島県徳島市蔵本町2丁目20-1宮城ビル205号TEL:088-633-6158E-mail:alfielanguage@hotmail.com

【備考】An English-Japanese dictionary is also recommended.

工業基礎英語 I

Industrial Basic English (I) 非常勤講師・広田 知子 1 単位

【授業目的】現代社会の国際言語である英語を用いて、科学技術分野での基礎的な語彙力、読解力、リスニング力を養うことを目的とする。

【授業概要】科学技術分野で頻出の語彙や表現を増やす。イラスト、写真などを参考にしながら、内容理解のための練習問題を通して、英文を理解する力や、必要な情報を効率的に掴む力を養成する。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. HEAT 3. SOUND 4. COMPUTERS 5. (教科書の各章にしたがって進めていくが、途中で適宜リスニング教材やビデオ教材なども使用する。)

【成績評価】コース最終日に試験を行う。

【教科書】ENJOY SCIENCE:データバンク (1) 『やさしい科学』 David Crystal/John Foster Asahi Press

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】授業の前に予習しておくことが望ましい。

工業基礎数学 I

Industrial Basic Mathematics (I) 非常勤講師・吉川 隆吾 1 単位

【授業目的】工学を学ぶために必要不可欠となる微分・積分の基礎的な内容について理解を図り、さらに基本的な手法や計算技術を確実に習得することを目的とする。

【授業概要】1 変数関数および多変数関数の微分・積分について、基礎的な内容から解説する。また、本講義の内容について、より理解を深めるために適宜演習を行う。

【授業計画】1. 微分 1:極限と連続 2. 微分 2:微分 3. 微分 3:導関数の応用 4. 積分 1:不定積分 5. 積分 2:定積分 6. 積分 3:定積分の応用 7. 偏導関数 1:多変数の関数 8. 偏導関数 2:偏導関数 9. 偏導関数 3:全微分 10. 偏導関数 4:Taylor の定理 11. 偏導関数 5:偏導関数の応用 12. 重複積分 1:重複積分 13. 重複積分 2:多重積分の応用

【成績評価】出席状況、レポート、期末考査等により総合的に評価する。

【教科書】特に指定しない。適宜、資料を配布する。

【参考書】矢野健太郎, 石原繁 編 「微分積分 (改訂版)」 裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義内容を確実に理解するためにも、毎回の復習は欠かさずに行い、次回の講義に望んでもらいたい。成績評価に対する [講義の出席状況、レポートの提出状況] と [小テストの成績] の割合は 4:6 とする。

工業基礎物理 I

Industrial Basic Physics (I) 非常勤講師・佐近 隆義 1 単位

【授業目的】

【授業概要】力学・波動・電磁気学について、ごく初歩的分野を解説する。

【授業計画】1. 運動と力:質点及び剛体の力学, ニュートンの運動の法則, 運動量と力積・保存則 2. エネルギーと運動:仕事, 力学的エネルギー・保存則 3. 波動:等速円運動, 単振動, 波 4. 電気と磁気:クローン力, 電場と電圧, オームの法則・キルヒホッフの法則, 磁場・ローレンツ力 5. 試験

【成績評価】講義への参加状況と試験の成績を総合して行う。

【参考書】高等学校で使用する物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義の最終日に試験を実施するので、毎回の復習を欠かさず行うこと。

工業熱力学

Engineering Thermodynamics 教授・森岡 斎 助教・清田 正徳 2 単位

【授業目的】熱エネルギーの基本法則と熱エネルギーの基本的な利用法について理解させる。さらに機械技術者として、工業製品や産業界の生産活動への熱エネルギーの有効な利用法についても十分な理解と適切な判断ができることを目的とする。

【授業概要】エネルギーに関して最も基本的な学問の一つに熱力学がある。その基礎概念、熱エネルギーの性質、経験法則、各種のサイクルについて講述する。

【受講要件】特になく、2 年次生の全員に開講する。

【履修上の注意】「工業熱力学演習」と連続した時間に講義する。

【到達目標】

1. 物質の熱的状態量とその変化を理解する。
2. エネルギー保存則とそれらの適用例などを理解する。
3. 自然現象の不可逆性を理解し、各種の熱機関サイクルを理解する。

【授業計画】1. 熱力学の基礎概念 2. 閉じた系の熱力学の第 1 法則 3. 開いた系の熱力学の第 1 法則 4. 前期中間試験 5. 理想気体の状態方程式, 状態変化 6. 理想気体の混合物 7. 熱力学の第 2 法則 8. 前期定期試験 9. 実在流体の性質 10. 湿り空気 11. 流動過程 12. 後期中間試験 13. ガス動力サイクル 14. 蒸気動力サイクル 15. 冷凍サイクル 16. 定期試験

【成績評価】中間試験と期末試験、および平常の授業の取り組みとレポート課題の内容を総合的に評価する。評価には試験 (中間・期末) と平常点との比率を 8:2 とする。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する

【教科書】伊藤猛宏・山下宏幸著, 「工業熱力学 (1)」, コロナ社, ISBN4-339-04051-7

【参考書】特に指定しない。講義中に説明する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】森岡(M521, 656-7373, morioka@me.tokushima-u.ac.jp), 清田(M522, 656-7374, kiyota@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「工業熱力学演習」と組み合わせると講義時間が設定され、評価点も同じである。

工業熱力学演習

Exercise of Engineering Thermodynamics 教授・森岡 斎 助教・清田 正徳 1 単位

【授業目的】技術的な問題に対しては、状況の理解だけでなく数値的に正確な解答が必要とされる。演習問題を通して具体的な問題に対する解法と演算結果の処理などについての向上を目的とする。

【授業概要】講義科目「工業熱力学」に準じて、例題演習の解説を行う。

【受講要件】特になく。

【履修上の注意】「工業熱力学演習」と連続した時間に講義する。毎回、電卓が必要である。

【到達目標】

1. 演習により、物質の熱的状態量とその変化を理解する。
2. 演習により、エネルギー保存則とそれらの適用例などを理解する。
3. 演習により、自然現象の不可逆性を理解し、各種の熱機関サイクルを理解する。

機械工学科 (昼間コース)

- 【授業計画】1. 講義科目「工業熱力学」と同じ。
- 【成績評価】中間試験と期末試験、および平常の授業の取り組み状況とレポート課題の内容を総合的に評価する。評価には試験(中間・期末)と平常点との比率を 8:2 とする。
- 【学習教育目標との関連】(B) に対応する
- 【教科書】使用しない。講義中にプリント「工業熱力学 演習問題」を配布する。
- 【参考書】講義科目「工業熱力学」の教科書。
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】森岡(M521, 656-7373, morioka@me.tokushima-u.ac.jp)、清田(M522, 656-7374, kiyota@me.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】講義科目「工業熱力学」と組み合わせで講義時間が設定され、評価点も同じである。

工業物理学実験

Laboratory in General Physics

講師・岸本 豊, 助手・川崎 祐 1 単位

- 【授業目的】物理学の基本概念のさらなる理解、および実験を行なう際の基本事項の修得を目的として、基礎的な物理学実験を行なう。
- 【授業概要】基本測定(統計処理)、力学(ボルダの振り子、角運動量)、物性(ヤング率、単剛性率、表面張力、粘性係数、抵抗の温度変化)、電磁気学(等電位線、磁気モーメント、静電容量、電磁誘導、ダイオード・トランジスタの特性、ホール効果)、熱(比熱、熱伝導率、温度伝導率)、波動(フレネルの複プリズム、分光器と回折格子)、原子物理学(スペクトル、光電効果、フランク・ヘルツの実験)よりテーマを選択し、3~4名ずつの班ごとに実験を行ない、レポートを作成・提出する。
- 【受講要件】予習により、実験内容が理解されていることを前提とする。
- 【履修上の注意】実験レポートを各実験の次回の実験時に提出すること。チェック後再提出を指示する場合がある。その際は提出締め切りまでに提出すること。実験時の安全について受講者は十分に注意すること。
- 【到達目標】
1. 実験を行なう際の基本事項を理解する。
 2. 実験を通して物理現象を理解し、データの解析および考察を行なえるようになる。
 3. レポート作成の技法を修得する。
- 【授業計画】1. オリエンテーション 2. 実験第 1 回 3. 実験第 2 回 4. 実験第 3 回 5. 実験第 4 回 6. 実験第 5 回 7. 実験第 6 回 8. 実験第 7 回 9. 実験第 8 回 10. 実験第 9 回 11. 実験第 10 回 12. 予備日 13. レポート提出 14. 予備日 15. レポート最終締め切り 16. 予備日
- 【成績評価】規定回数以上出席し、レポートを期限内に提出した受講者に対し、レポート(提出状況、内容等)70%、平常点(受講姿勢等)30%として評価し、総合で 60% 以上を合格とする。
- 【学習教育目標との関連】(C) に対応する。
- 【教科書】当実験のための教科書「物理学実験」を使用する。
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】岸本(A棟215, 656-9851, yutaka@pm.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】本講義の受講は、予習により実験内容が理解されている事を前提とする。なお、実験時の安全について受講者各人は十分に注意すること。

材料科学

Materials Science

助教授・岡田 達也 2 単位

- 【授業目的】結晶性材料の機械的性質を基礎的な立場から理解させるために、各種の結晶欠陥の挙動について解説する。
- 【授業概要】結晶構造や結晶学的指数について解説した後、結晶性材料の機械的性質に深く関わっている転位とその運動について講義する。また、高温において特に重要な拡散についても解説する。
- 【受講要件】「機械材料学」を履修していること。
- 【履修上の注意】毎回簡単な演習問題を行うので、関数電卓を忘れずに持参すること。
- 【到達目標】
1. 結晶構造について理解し、理論密度等の計算ができること。
 2. 結晶学的な方位・面の指数表示ができること。
 3. 転位論に基づいて、結晶性材料の塑性変形の幾何学的モデルを理解すること。
 4. 拡散に関係した基本的な計算ができること。

- 【授業計画】1. 材料科学とは何か? 2. 結晶構造 3. 結晶学的な方位の表示法 4. 結晶学的な面の表示法 5. 六方晶における 4 指数表示 6. 結晶性材料における面欠陥、線欠陥、点欠陥 7. 転位の幾何学モデル 8. 中間試験 9. 転位の運動と塑性変形 10. 結晶性材料のすべり変形 11. 材料の強化機構 12. 定常状態拡散 13. 非定常状態拡散 (1) 14. 非定常状態拡散 (2) 15. 期末試験
- 【成績評価】受講姿勢を平常点として 10%、中間試験・期末試験の成績をそれぞれ 30%、60%として評価する。講義中に質問に答えた場合は、適宜平常点に加える。
- 【学習教育目標との関連】(A)50%、(B)50%に対応する。
- 【教科書】キャリスター著(入野野監訳)「材料の科学と工学 [1] 材料の微細構造」(培風館)
- 【参考書】キャリスター著(入野野監訳)「材料の科学と工学 [2] 金属材料の力学的性質」(培風館)
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】岡田(M616, 656-7362, t-okada@me.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】中間試験の再試験は行わない。期末試験の再試験は同一年度内に 1 回のみ行う。

材料強度学

Strength and Fracture Behavior of Materials

教授・村上 理一 2 単位

- 【授業目的】機械の安全性や健全性を保証するため応力と材料の塑性変形挙動や破壊挙動との関わりについて講義し、演習・レポート、小テストを実施して機械の破壊防止に必要な基礎知識を修得させる。
- 【授業概要】機械を構成する材料の塑性変形と破壊に至る過程を巨視的・微視的な観点から理解させるために材料の塑性変形の機構と転位、塑性変形と破壊の関わり、破壊制御の基本概念を講義して機械・構造物の安全性や設計に必要な材料の変形と破壊に関する基礎力の養成を図る。
- 【受講要件】「機械材料学」、「材料力学」の履修を前提に講義を行う。
- 【履修上の注意】講義の単元が終わるごとにレポートを課し、理解度をチェックするので、毎回の予習・復習は欠かさず行うこと。
- 【到達目標】
1. 材料の塑性変形と転位の関わりを理解する。
 2. 材料の強化方法を理解する。
 3. 材料の破壊の仕組みを理解する。
 4. 破壊力学の基礎を理解する。
 5. 金属疲労の基礎を理解する。
- 【授業計画】1. 材料の弾性変形と塑性変形 2. 材料の構造と転位論の基礎 3. 材料の構造と転位論の基礎・レポート 4. 材料の強化と新材料 5. 材料の強化と新材料・レポート 6. 材料の強化と新材料 7. 中間試験 8. 材料の破壊 9. 材料の破壊・レポート 10. 破壊力学の基礎 11. 破壊力学の基礎・レポート 12. 疲労強度 13. 疲労強度・レポート 14. 疲労強度 15. 表面現象、腐食と摩耗・レポート 16. 定期試験
- 【成績評価】到達目標の 5 項目がそれぞれ達成されているかを試験 70%、受講姿勢およびレポート 30%とし、5 項目平均で 60%以上であれば合格とする。
- 【学習教育目標との関連】(B) に対応する。
- 【教科書】村上理一・荻山博之・高尾健一著「材料強度学入門」西日本法規出版
- 【参考書】C.R. バレット, W.D. ニックス, A.S. テテルマン著岡村弘之・井形直弘・堂山昌男訳「材料科学 2-材料の強度特性」、ジョン・ウルフ著永宮健夫訳「材料科学入門 III 機械的性質」
- 【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
- 【連絡先】村上理一(M318, 656-7392, murakami@me.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】「機械材料学」、「材料力学」の履修を前提にして講義を行う。講義の単元が終わるごとにレポートを課し、2 単元が終了するごとに“まとめ”のテストを実施するので、毎回の予習・復習は欠かさず行うこと。

材料力学 1

Strength of Materials 1

教授・吉田 憲一, 助教授・高木 均 2 単位

- 【授業目的】機械や構造物の部材に、様々な形態の外力が作用したとき、各部に生じる応力と変形の解析法を講義し、毎回行う小テストおよび章ごとに与えるレポートを通して、設計に有効な安全な寸法を決定する手法を修得させる。
- 【授業概要】応力とひずみの概念およびフックの法則を理解させ、常に材料の許容応力と許容変位を念頭において設計に役立てることを主眼

機械工学科(昼間コース)

に、引張圧縮変形、ねじり変形および曲げ変形中に生じる応力と変位を求める方法を講義し、材料の弾性変形に関する基礎知識を養成する。

【受講要件】基礎物理学，機械数理演習1を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】授業中に簡単な演習問題を解くため関数電卓を忘れずに持参すること。期末試験の再試験は行わない。

【到達目標】

1. 応力、ひずみの概念およびフックの法則を理解する。
2. 引張・圧縮、ねじりおよび曲げ変形において生じる応力、ひずみを導出する。

【授業計画】1. 材料に生じる応力とその定義 2. 材料に生じるひずみとその定義 3. フックの法則と弾性係数・レポート 4. 引張圧縮変形における静定問題 5. 引張圧縮変形における不静定問題 6. 熱応力と残留応力・レポート 7. ねじりによる変形と応力 8. 伝動軸の設計・レポート 9. 真直はりのせん断力と曲げモーメント 10. せん断力線図と曲げモーメント線図 11. せん断力線図と曲げモーメント線図・レポート 12. 真直はりに生じる応力 13. 断面二次モーメントの計算 14. 種々の真直はりの設計・レポート 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】平常点と最終試験の得点を3:7の割合で成績評価する。平常点は、毎回行う小テストの結果およびレポートの提出状況を考慮して採点する。

【学習教育目標との関連】(B)に対応する。

【教科書】黒木剛司郎著「材料力学」森北出版

【参考書】材料力学教育研究会編「材料力学の学び方・解き方」共立出版、柴田・大谷・駒井・井上共著「材料力学の基礎」倍風館、鶴戸口・川田・倉西共著「材料力学」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】吉田(M619, 656-7358, yoshida@me.tokushima-u.ac.jp)、高木(M620, 656-7359, takagi@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義の単位を取得するためには、必ず復習と予習をしなければならないことが前提になっているので、レポートの提出期限を厳守する。解けないときには、オフィスアワーを利用して質問することを勧める。平常点と最終試験の得点を3:7の割合で考慮して成績評価とする。平常点は、講義への出席状況、毎回行う小テストの結果およびレポートの提出状況と内容を含んでいる。

材料力学2

Strength of Materials2

教授・吉田 憲一、助教授・西野 秀郎 2 単位

【授業目的】機械や構造物の部材に、様々な形態の外力が作用したとき、各部に生じる応力と変形の解析法を講義し、毎回行う小テストおよび章ごとに与えるレポートを通して、設計に有効な安全な寸法を決定する手法を修得させる。

【授業概要】曲げ変形の復習を含めて理解を深めるとともに、複雑な応力とひずみ状態の解析法、ひずみエネルギーの有効な利用法および低い応力で変形してしまう柱の座屈の概念を講義し、常に材料の許容応力と許容変位を念頭において設計に役立てることを主眼に、材料の弾性変形に関する基礎知識を深める。

【受講要件】材料力学1，基礎物理学，機械数理演習1，機械数理演習2を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】授業中に簡単な演習問題を解くため関数電卓を忘れずに持参すること。2年前期?2年後期の通年で成績を評価する。期末試験の再試験は行わない。

【到達目標】

1. 二次元の組合せ応力より主応力、最大せん断応力を導出する。
2. 弾性ひずみエネルギーの概念とその応用を習得する。
3. はりのたわみと柱の座屈を理解する。

【授業計画】1. 真直はりのせん断力と曲げモーメント・復習 2. せん断力線図と曲げモーメント線図・復習 3. 真直はりに生じる応力・復習 4. 真直はりに生じるたわみ 5. 真直はりに生じるたわみ・レポート 6. 組合せ応力 7. モールの応力円とひずみ円 8. 平面ひずみと平面応力・レポート 9. 各種応力によるひずみエネルギー 10. 衝撃応力 11. カステリアーノの定理・レポート 12. 長柱の座屈 13. オイラーの式と座屈の限界荷重・レポート 14. 弾性力学的取扱 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】平常点と最終試験の得点を3:7の割合で成績評価する。平常点は、毎回行う小テストの結果およびレポートの提出状況を考慮して採点する。

【学習教育目標との関連】(B)に対応する。

【教科書】黒木剛司郎著「材料力学」森北出版

【参考書】材料力学教育研究会編「材料力学の学び方・解き方」共立出版、柴田・大谷・駒井・井上共著「材料力学の基礎」倍風館、鶴戸口・川田・倉西共著「材料力学」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】吉田(M619, 656-7358, yoshida@me.tokushima-u.ac.jp)、西野(M618, 656-7357, nishino@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義の単位を取得するためには、必ず復習と予習をしなければならないことが前提になっているので、レポートの提出期限を厳守する。解けないときには、オフィスアワーを利用して質問することを勧める。平常点と最終試験の得点を3:7の割合で考慮して成績評価とする。平常点は、講義への出席状況、毎回行う小テストの結果およびレポートの提出状況と内容を含んでいる。

材料力学演習

Exercises in Strength of Materials

教授・吉田 憲一

助教授・西野 秀郎 1 単位

【授業目的】機械や構造物の部材に、様々な形態の外力が作用したとき、各部に生じる応力と変形の解析法を講義し、毎回行う小テストおよび章ごとに与えるレポートを通して、設計に有効な安全な寸法を決定する手法を修得させる。

【授業概要】材料力学1-2の講義に準じてその都度演習を行い、次ぎの講義までにその進捗をチェックする。各章の終了に伴い、いくつかの問題をレポートとして提出してもらう。

【受講要件】基礎物理学，機械数理演習1，機械数理演習2を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】授業中に簡単な演習問題を解くため関数電卓を忘れずに持参すること。

【到達目標】具体的な問題を解くことにより、材料力学1および2の目標を達成する。

【授業計画】1. 材料に生じる応力とひずみ 2. フックの法則と弾性定数・レポート 3. 引張圧縮変形における静定問題 4. 引張圧縮変形における不静定問題 5. 熱応力と残留応力・レポート 6. ねじりによる変形と応力 7. 伝動軸の設計・レポート 8. 真直はりのせん断力と曲げモーメント・レポート 9. 真直はりに生じる応力・レポート 10. 真直はりに生じるたわみ・レポート 11. 組合せ応力・レポート 12. 各種応力によるひずみエネルギー・レポート 13. 長柱の座屈・レポート 14. 弾性力学的取扱 15. 予備日

【成績評価】平常点をそのまま成績評価とする。平常点は、毎回行う小テストの結果およびレポートの提出状況と内容を考慮して決められる。

【学習教育目標との関連】(B)に対応する。

【教科書】黒木剛司郎著「材料力学」森北出版

【参考書】材料力学教育研究会編「材料力学の学び方・解き方」共立出版、柴田・大谷・駒井・井上共著「材料力学の基礎」倍風館、鶴戸口・川田・倉西共著「材料力学」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】吉田(M619, 656-7358, yoshida@me.tokushima-u.ac.jp)、西野(M618, 656-7357, nishino@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義の単位を取得するためには、必ず復習と予習をしなければならないことが前提になっているので、レポートの提出期限を厳守する。解けないときには、オフィスアワーを利用して質問することを勧める。

C 言語演習

C Language Programming Exercise

講師・浮田 浩行

助手・草野 剛嗣 1 単位

【授業目的】C言語による基本的なプログラミング手法について演習を行い、小・中規模なプログラムの作成能力を修得するとともに、電子計算機の原理やアルゴリズムの設計方法についての理解を深めることを目的とする。

【授業概要】各演習時間では、講義計画に示されている内容について説明を行なった後、実際にパーソナルコンピュータを用いてプログラム作成の演習を行う。また、課題プログラミングおよび応用プログラミングの回は、1人または2~3人のグループで、与えられたテーマに沿ったプログラムの作成を行い、プログラミング能力の養成を図る。

【受講要件】全学共通教育の情報科学分野「コンピュータ入門」を履修し、コンピュータの基本的な操作方法を修得していることを前提にして演習を行う。

【履修上の注意】本演習では、無断欠席を3回以上行なった者は、失格とする。

【到達目標】

機械工学科 (昼間コース)

1. C 言語の命令と標準的な関数について理解する。
2. プログラム作成のための操作方法を修得する。
3. 計算を行うためのアルゴリズムを理解し、その設計が行えるようにする。
4. 小・中規模なプログラムを作成できるようにする。

【授業計画】1. 演習概要、システム使用方法の説明 2. データ型、変数、入出力の基本 3. 制御構造 1(条件分岐) 4. 制御構造 2(反復処理) 5. 課題プログラミング 1(仕様、フローチャートの作成) 6. 課題プログラミング 1(実装、レポート提出) 7. 配列、文字列、ポインタ 8. 関数、引数、ファイル入出力 9. 構造体、マクロ 10. 課題プログラミング 2(仕様、フローチャートの作成) 11. 課題プログラミング 2(実装、レポート提出) 12. 応用プログラミング (仕様設計) 13. 応用プログラミング (実装 1) 14. 応用プログラミング (実装 2) 15. 応用プログラミング (発表) 16. 予備日

【成績評価】演習の受講姿勢および演習時に行う小レポートの提出状況とその解答内容を平常点とし、また課題・応用プログラミング時に提出するレポートを試験に相当する成績とする。この平常点と試験の比率を 5:5 として総合的な成績評価を行う。

【学習教育目標との関連】(B) 50%、(C) 25%、(D) 25% に対応する。

【教科書】野本 著「基礎 C」インプレス

【参考書】B.W. カーニハン, D.M. リッチー著、石田晴久訳「プログラミング言語 C 第 2 版」共立出版、柴田望洋著「明解 C 言語入門編」ソフトバンク、ハーバート・シルト著「独習 C 改訂版」翔泳社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】浮田(M424, 656-9448, ukida@me.tokushima-u.ac.jp)、草野(M528, 656-2151, kusano@me.tokushima-u.ac.jp)

自動車工学

Automotive Engineering

非常勤講師・島田 清 2 単位

【授業目的】生活になくはならなくなった自動車 (主に乗用車) を、工学的立場から理解し、自動車に使われている技術の基礎を習得するとともに、自動車の性能・社会的立場付けにつき理解を深める。

【授業概要】自動車の構造概要および動的性能に重要な役割をするエンジン、サスペンション、タイヤ、ブレーキなどの構造の詳細を講義し、自動車の動的性能である「走る」「曲がる」「止まる」の三要素を理解させる。あわせて、各国の法規動向、公害・安全対策の現状と今後の動向を概説し、自動車の社会的立場付けも理解させる。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】講義時に配布するプリントは要点のみ記載しているので、各自事前に参考書などに目を通して講義の外洋をあらかじめ把握しておくこと。レポート課題はインターネットを利用しないと調べにくいものがあるためあらかじめ留意しておくこと。

【到達目標】自動車の構造概要を理解する。自動車が「走る」「曲がる」「止まる」時の力学を理解する。現代の自動車の構造を理解するだけでなく、過去の経緯を踏まえ将来像をも把握できる知識・考え方を身につける。

【授業計画】1. 総論 2. 自動車の構造概要 3. 自動車の走行性能 1 4. 自動車の走行性能 2 レポート 5. エンジン性能 1 6. エンジン性能 2 7. 動力伝達装置 8. ブレーキ性能 ABS および TCS レポート 9. サスペンション性能 10. タイヤ性能 11. 操縦安定性能 1 12. 操縦安定性能 2 レポート 13. 車体構造 14. 安全・公害対策 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】レポート (3 回) 提出による平常点及び期末試験点数で評価する。評価割合はレポート点 (30 点)、試験点数 (70 点) の合計 100 点満点とする。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する。

【教科書】無し (講義時にプリント配布)

【参考書】竹花有也著「自動車工学概論」理工学社、機械力学関連書籍、内燃機関関連書籍

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】島田shimada@tokuco.ac.jp

【備考】講義の中で 3 回レポートを課すので、期日に遅れずに提出のこと。平常点の低い (0 点) 学生は定期試験で 86 点以上取らないと不可の評価となるので注意すること。

自動制御理論 1

Automatic Control theory 1

教授・今枝 正夫、助教・橋本 強二 2 単位

【授業目的】なぜ自動制御が機械工学で必要か、自動制御系設計にはどのような知識が必要なのかについて理解させる。本講義では、線形制御理論に焦点を絞り、時間とともに変動する現象を理解する感覚を養い、自動制御の目的と構成、自動制御系の解析・設計のための基礎理論を講義し、毎時間演習を実施し自動制御に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】自動制御技術は、一般産業機械をはじめロボット、NC 工作機械の基礎技術として応用されており、自動制御なくしては機械の満足な動作は期待できない。そのため線形制御理論に基づき数学的解析法と設計法を解説する。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】「微分方程式 1, 2」「ベクトル解析」「複素関数論」「機械力学」「電子回路」等の履修を前提にして講義を行う。

【到達目標】

1. 1. 自動制御の目的と構成を理解する。
2. 2. 自動制御系の解析・設計の基礎理論を修得する。

【授業計画】1. 自動制御の基礎概念 (自動制御の目的、構成) 2. ラプラス変換と微分方程式・演習 3. ラプラス変換と微分方程式・演習 4. 伝達関数とブロック線図・演習 5. 伝達関数とブロック線図・演習 6. 周波数応答・演習 7. 周波数応答・演習 8. 中間試験 9. 制御系の安定・演習 10. 制御系の安定・演習 11. 制御系の安定・演習 12. 制御系の良さ・演習 13. 制御系の良さ・演習 14. 制御系設計の基礎・演習 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】中間試験、学期末試験、授業への取り組み状況、レポートなどをもとに総合的に評価する。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する。

【教科書】添田喬・中溝高好共著「自動制御の講義と演習」日新出版

【参考書】講義中に説明する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】今枝(M419, imaeda@me.tokushima-u.ac.jp)、橋本(M420, hasimoto@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】2 時間の講義の後、毎回 1 時間の演習を行う。予習復習は欠かさず行うこと。

自動制御理論 2

Automatic Control theory 2

教授・今枝 正夫 2 単位

【授業目的】制御理論の中でも比較的新しい現代制御理論と呼ばれる分野の基礎を、体系的にわかりやすく講義する。数値例題を用いて機械システムの制御系設計の基本的概念や考え方を修得させる。

【授業概要】人類を月に運んだ技術の一つに自動制御技術があげられ、その中心は現代制御理論である。最近では機械システムの機能を最大限発揮させるためには設計段階から制御理論の導入が必要で、その制御理論の基礎概念ならびにアルゴリズムについて解説する。

【受講要件】「微分方程式 1 および 2」「ベクトル解析」「複素関数論」「自動制御理論 1」等を履修していること。

【履修上の注意】全回出席することを原則とする。

【到達目標】ディジタル制御の仕組みを理解する。さらに現代制御理論の目指す方向と解析手法の基礎を修得する。

【授業計画】1. ディジタル制御系の基本構成 2. Z 変換、パルス伝達関数・レポート 3. 現代制御理論の概念 4. 状態方程式 5. 状態方程式・レポート 6. 可制御性と可観測性 7. 可制御性と可観測性・レポート 8. 中間試験 9. 伝達関数行列と状態方程式表現 10. 伝達関数行列と状態方程式表現・レポート 11. 安定性 12. 安定性・レポート 13. 極配置・レポート 14. オブザーバー 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義期間中 6 回各章の終了時に演習を課します。そのレポートの内容ならびに中間試験と期末試験の結果、そして授業への取り組み状況などをもとに総合的に評価する。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する。

【教科書】吉川恒夫・井上順一著「現代制御論」昭晃堂

【参考書】高橋安人著「システムと制御」岩波書店、伊藤正美著「自動制御理論上・下」昭晃堂

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】今枝正夫(M419, imaeda@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】知能機械学講座で卒業研究を希望する者は是非履修しておきたい。現代制御では理論が先行し実プラントへの応用は遅れていたが、高性能マイクロコンピュータを用いることにより急速に実用化され始めている。現代制御理論は、プラント製造あるいは装置開発に関係した企業に興味を持つ者には是非学んでおいてもらいたい分野である。

蒸気プラント工学

Steam Power Plant Engineering 教授・逢坂 昭治 2 単位

【授業目的】蒸気プラントを構成するボイラ、蒸気タービン、蒸気機関および復水装置などの機器に関して、高性能化、高効率化、高温高圧化などの実際技術を解説し、演習や小テストによって理解を深め、応用できることを目的とする。

【授業概要】蒸気動力の変遷を説明した後、ボイラ、蒸気タービン、蒸気機関および復水装置などの機器に関して、高性能化、高効率化、高温高圧化などの実際技術がどのような理論に基づいているのかについて講義する。

【受講要件】工業熱力学および伝熱工学を履修していることが望ましい。

【到達目標】1. 蒸気プラントの熱力学的性質および動力サイクルを理解する、2. 蒸気発生器における熱伝達を理解する、3. タービンにおけるエネルギー変換を理解する。

【授業計画】1. 蒸気プラント工学の概要 2. 蒸気プラントの熱力学 3. ランキンサイクル 4. 再熱・再生サイクル・演習 5. 蒸気発生器の構成と性能 6. 蒸気発生器における伝熱・演習 7. 蒸気管内の流れ 8. 火力蒸気プラントの補助機器 9. ボイラの燃料と燃焼装置 10. 燃焼の基礎理論・小テスト 11. 蒸気タービンの概要 12. タービンによるエネルギー変換 13. 蒸気タービンの性能・演習 14. コンデンサと熱交換 15. 原子力蒸気機関および新エネルギーをめざすランキンサイクル機関 16. 蒸気プラント工学の最終試験

【成績評価】授業への取組 (25%)、小テストの回答内容 (25%)、中間・最終試験の成績 (50%) を総合して評価する。

【学習教育目標との関連】(B)90%、(H)10%に対応する。

【教科書】一色尚次、北山直方著「新蒸気動力工学」森北出版

【参考書】各論ごとに講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】逢坂(M523, 656-7375, ousaka@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「工業熱力学」「伝熱工学」の履修を前提にして講義を行う。

職業指導

Vocational Guidance 非常勤講師・坂野 信義 4 単位

【授業目的】

【授業概要】生涯発達・Career Developing としての人間観・職業観を確立すべく、学際的見地から職業指導の課題と方法を論述し、併せて能力開発を実践指導する。

【授業計画】1. 職業指導の課題と方法 (1) 職業指導発展の略史 2. 職業指導の課題と方法 (2) 職業指導の課題 3. 職業指導の課題と方法 (3) 個性と職業:個人理解の方法・性格、興味など 4. 職業指導の課題と方法 (4) 個性と職業:適応と適性 5. 職業指導の課題と方法 (5) 個性と職業:Career Planning としてのライフワーク 6. 職業指導の課題と方法 (6) 個性と職業:マネジメントスキル:リーダーシップ論など 7. 職業指導の課題と方法 (7) 職業相談(キャリア・カウンセリング):職業相談の意義 8. 職業指導の課題と方法 (8) 職業相談(キャリア・カウンセリング):カウンセリング理論と技術 9. 職業指導の課題と方法 (9) 職業指導の評価 10. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (1) 人生 60 年計画表の作成 11. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (2)IC 法, NM 法を活用してソフト作成能力を育成 12. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (3)KJ 法を活用しての課題解決とプレゼンテーション 13. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (4) シュルツの自律神経訓練法の理解

【成績評価】論文、能力開発のプレゼンテーションにより成績評価。

【学習教育目標との関連】(H)に対応する。

【教科書】講師よりプリント資料配布。

【参考書】参考書、必読書については、講義中紹介。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】「面白くてためになり、そして思い出に残る」講義が目標。

制御工学

Control Engineering 助教授・橋本 強二 2 単位

【授業目的】機械を智能化するためには、その位置や速度および力などの制御が必要である。本講義では、これらの制御を取り扱うサーボ機構の基本構成要素であるアクチュエータの駆動原理および制御技術について論じ、また、レポートを課し、中間試験を実施することにより、機械を智能化する上で必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】位置・速度・力などの制御を取り扱うサーボ機構の構成要素である電気・油圧・空気圧アクチュエータや制御弁などの構造・機

能およびサーボ系の各種制御法について講義し、その応用事例について論じる。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】「流体機械」「電子回路」「機械力学」「自動制御理論 1.2」「メカトロニクス工学」の履修を前提にして講義を行う。

【到達目標】1. アクチュエータや制御弁の駆動原理と制御技術を理解する。2. サーボ機構の構成と制御法を理解する。

【授業計画】1. サーボシステムの基本構成 2. システムの動特性 3. コントローラとセンサ・レポート 4. アクチュエータ概論 5. アクチュエータによる制御・レポート 6. 微小駆動用電動アクチュエータ 7. 電動アクチュエータ 8. 中間試験 9. 電気サーボシステム・レポート 10. 油圧アクチュエータ 11. 油圧制御弁 12. 油圧サーボシステム・レポート 13. 空気圧アクチュエータと制御弁 14. 空気圧サーボシステム・レポート 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】中間試験、学期末試験、授業への取り組み状況、レポートなどをもとに総合的に評価する。

【学習教育目標との関連】(B)に対応する。

【教科書】武藤高義著「アクチュエータの駆動と制御」コロナ社

【参考書】岡田養二・長坂長彦著:「サーボアクチュエータとその制御」コロナ社、山口惇・田中裕久著:「油空圧工学」コロナ社、宮入庄太監修:「アクチュエータ実用事典」フジテクノシステム

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】橋本(M420, 656-7387, hasimoto@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】単元が終わるごとにレポートを課し、また中間試験を行うので、予習復習は欠かさず行うこと。

生産加工システム

Machining and Introduction to Manufacturing System

教授・海江田 義也, 助教授・多田 吉宏 2 単位

【授業目的】切削加工を中心に、溶融加工(鋳造, 溶接)を含め、加工法と生産システムの概念を学ぶ。

【授業概要】最近の情報化が進み、コンピュータ万能の時代のように考えられている。事実工作機械も NC 化が進み、生産システムも著しい進歩を遂げている。しかし加工の本質が変わった訳ではない。新しい加工技術を開発するにもその基礎技術の習得が必要である。

【受講要件】工作機械の理解を深めるため、「機械基礎実習」を履修しておくこと。

【到達目標】

1. 溶融加工と切削加工それぞれの概念と基礎技術を理解修得する。
2. 講義と演習を通じて、応用力の涵養を図る。

【授業計画】1. 生産加工序論・鋳造 2. 鋳造・演習 3. 鋳造・演習 4. 溶接・演習 5. 切削加工の基礎・演習 6. 切削抵抗・演習 7. 工具寿命と切削加工の経済性・演習 8. 旋削加工・演習 9. NC 工作機械・演習 10. フライス加工・演習 11. フライス加工・演習 12. 穴あけ加工・演習 13. 中ぐり加工, 歯切り加工ほか・演習 14. 生産システム 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】各講義で演習を行い、レポートを提出する。授業への取り組み・レポートによる平常点と期末に行う試験とで総合評価し、その比率は 4:6 とする。

【学習教育目標との関連】(B)に対応する。

【教科書】新編 機械加工学(橋本文雄, 山田卓郎 著), 共立出版, ISBN4-320-08055-6

【参考書】機械加工学(中島利勝, 鳴滝則彦 著), コロナ社, ISBN4-339-04059-2

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】海江田(M321, 656-7379, kaieda@me.tokushima-u.ac.jp), 多田(M319, 656-7381, tada@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】演習を行うので、A4 レポート用紙, 関数電卓, 定規・物差しなどを持参すること。

生産管理

Production Control

非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為に生産現場で何をしているかを理解する。

【授業概要】企業経営は経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で生産技術のキーとな

機械工学科 (昼間コース)

る事項について講義する。講義計画に従い生産管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 生産管理 2. 生産計画 3. 原価管理 4. 経営システム (ISO) 5. IE (Industrial Engineering) 6. 品質管理と TQC 7. トヨタ生産方式 8. 中間及び最終レポート (生産管理のまとめ)

【成績評価】講義への取り組み状況、レポートの内容

【学習教育目標との関連】(H) に対応する

【教科書】その都度提供する。

【参考書】市販の生産管理に関する書籍、「生産管理便覧」丸善

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義への取り組み状況 80% (12 回)、レポート (中間と最終) の内容 20%

生産システム特別講義

Topics on Production Systems 非常勤講師 1 単位

【授業目的】生産システムに関連する最先端の研究と技術について、学会ならびに企業の第一線の方による集中講義である。

【授業概要】講義内容は講師の方が毎年変わる可能性が強いので一概に記せないが、工業生産に関する内容、精密加工、精密計測、材料の表面改質、生産の自動化、などは幅広い分野について講義される。この講義により、これら分野の研究・開発の手法や生産活動の現状と将来についての総合的な知識が得られるようになる。

【受講要件】特にないが、新しい技術の動向に興味を持つことが大事である。

【履修上の注意】講義は不定期であるが出席は絶対的な要件である。遅刻しないことも要求される。

【到達目標】最先端の研究や技術を学ぶことによって、学習への意欲を涵養すること

【授業計画】1. 複数名の講師による集中講義である。講義の予定は掲示によって連絡される。

【成績評価】受講姿勢、レポート提出または試験による。

【学習教育目標との関連】(B)、(I) に対応する。

【教科書】使わない。講師によって作成された資料による。

【参考書】講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】この講義は専門基礎を踏まえた先端的な応用例を概説するものであるから、ぜひとも出席することを期待する。

精密加工学

Precision Machining 助教授・升田 雅博 2 単位

【授業目的】生産活動における切削加工、研削加工の基礎理論を学ぶことによって、機械加工技術の基本的考え方等を習得する。演習等においては実際の現象に関する問題を多く取り上げ、機械加工に関する常識を養うことを目標とする。

【授業概要】精密加工の意義・効果から始まり、材料の塑性変形挙動、びり振動、熱伝導などと切削現象との関わり、力学的取り扱い、工具材料の特性と損傷機構、各種材料の物理的特性・機械的性質と被削性、研削現象の理論的取り扱い、機械加工時の精度と品位などについて述べる。

【受講要件】生産加工システムを履修していることが望ましい。

【履修上の注意】材料、振動、熱伝導など他の分野の理論が導入されているので、しっかり聴講することが基本である。

【到達目標】

1. 切削・研削加工時の材料の変形挙動を理解する。
2. 加工目標 (精度、能率、コスト、環境) に影響する切削現象を理解する。

【授業計画】1. 精密加工の意義・効果 2. 切削の力学・レポート 3. 切削の力学・レポート 4. 切削温度・演習 5. びり振動 6. 工具材料と損傷 7. 摩耗機構・レポート 8. 被削性 9. 砥石の構成 10. 研削の幾何学・レポート 11. 研削抵抗、研削温度・演習 12. 加工の精度 13. 加工の品位・演習 14. ジグ 15. 歯車の加工 16. 定期試験

【成績評価】講義に関する理解力の評価は、期末試験、演習、レポートおよび授業への取り組み状況で評価する。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する

【教科書】田中・津和・井川著「精密工作法」共立出版、賀勢晋著「機械工作例題演習」コロナ社

【参考書】白井著 現代切削理論 共立出版

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】升田 (M320, 656-7380, masuda@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】精密加工学はいろんな考え方が入った学問であるから、積極的な受講姿勢を期待する。また、演習はできる限り各自問題とし、正解が出るまで再提出を課す。成績評価に対する平常点と試験の比率は、30:70 とする。平常点には講義への参加状況、演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含む。

設計工学

Design Engineering 講師・長町 拓夫 2 単位

【授業目的】機械を設計する上で必要となる一般的な機械要素の働きとその設計法を講義と演習を通して修得するとともに、機械設計をシステムの的にとらえる方法論について学ぶ。

【授業概要】伝達要素、ばね要素および油圧要素の性能・構造ならびに設計方法について解説する。また機械設計をシステム設計の観点から概念設計、詳細設計および設計評価について解説する。

【受講要件】材料力学、機械設計を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】授業中に演習問題を解くため関数電卓を忘れずに持参すること。

【到達目標】機械要素の働きとその設計法を理解する。

【授業計画】1. 伝達要素の設計 2. 歯車 (平) 3. 歯車 (はすば、かさ、ウォーム) 4. クラッチ、ブレーキ 5. ベルト伝動 6. チェーン伝動 7. ばね要素の設計 8. コイルばね 9. 重ね板ばね 10. 中間試験 11. 油圧機器 12. 油圧回路 13. システムとしての設計 14. 需要分析・技術予測・企画 15. 概念設計 16. 詳細設計

【成績評価】講義への取り組み状況、演習レポートの提出状況および内容、中間および定期試験の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する。

【教科書】和田稲苗著「機械要素設計」実教出版

【参考書】瀬口靖幸・尾田十八・室津義定著「機械設計工学 2」倍風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】長町 (M526, 656-9187, ngmch@me.tokushima-u.ac.jp)

創造基礎実習

Practice of Elementary Machine Creation 教授・逢坂 昭治
助教授・伊藤 照明, 松尾 繁樹, 助手・大山 啓 1 単位

【授業目的】自らの意思と発想により、与えられた課題について着意と創造力を駆使して問題解決の筋道を模索し、実現するための方法、手段を学ぶ。

【授業概要】単純な機能を有する小型構造物を少人数のグループで設計・製作し、公開競技会・技術報告会などを通して機構学、解析力学、材料力学等を実践的に習得するとともに工学的な創造性・独創性を養う。具体的には、全員に同一の課題 (毎年変更) を与えて、小型構造物 (はり、ロボット、ウインチ等) の設計製作を行う。作業中に生じたトラブルとそれをどのように解決したかという作業報告書を提出する。最後に公開競技会および報告会を行う。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】実習の成果があがるよう、製作には真摯に取り組み、レポートは丁寧に記述すること。

【到達目標】

1. 機構学、解析力学、材料力学等を実践的に習得する。
2. 工学的な創造性・独創性を養う。
3. グループ内の討論を通して、自己や他人の意見をまとめる能力を養う。
4. レポート作成能力やプレゼンテーション能力を修得する。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. テーマ 1 概念設計 3. テーマ 1 詳細設計 4. テーマ 1 試作実験 5. テーマ 1 競技大会 6. テーマ 1 技術報告会 7. テーマ 2 概念設計 8. テーマ 2 詳細設計 9. テーマ 2 試作実験 10. テーマ 2 競技大会 11. テーマ 2 技術報告会 12. テーマ 3 概念設計 13. テーマ 3 詳細設計 14. テーマ 3 試作実験 15. テーマ 3 競技大会 16. テーマ 3 技術報告会

【成績評価】授業への取組み (30 点)、作品および報告書 (50 点)、プレゼンテーション (20 点)

【学習教育目標との関連】(D) 80%、(E) 20% に対応する。

【教科書】授業毎に関連した資料を配布する。

【参考書】伊藤進著「創造力をみがくヒント」講談社、今坂一郎著「モノから学ぶ-化学的発想の遊び-」裳華房、高橋昌義著「常識破りの成功発想」共立出版、H. F. ジャドソン 著/江沢洋 訳「科学と創造 = 科学

機械工学科(昼間コース)

者はどう考えるか」培風館、種田重男 著「機構学」朝倉書房、「モノづくり解体新書」日刊工業新聞社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】逢坂(M523, 656-7375, ohsaka@me.tokushima-u.ac.jp), 伊藤(M316, 656-2150, ito@me.tokushima-u.ac.jp), 松尾(総合研究実験棟404, 656-7538, matsuos@eco.tokushima-u.ac.jp), 大山(M325, 656-9741, oyama@me.tokushima-u.ac.jp)

創造実習

Machine Creation Laboratory 助教授・高木 均, 講師・長町 拓夫
助手・米倉 大介, 日下一也 1 単位

【授業目的】マイクロコンピュータを搭載した自立移動型ロボットを少人数のグループで設計製作し、公開競技会・技術報告会などを通してセンサー工学、制御工学、メカトロニクス工学等を実践的に習得するとともに工学的な創造性・独創性を養うことを目指す。

【授業概要】Lego Mindstorms を用いて与えられた課題(毎年変更)を実行する自立移動型ロボットの設計製作を行う。まず、各自のアイデアをグループ内で比較検討して最適な機能設計を行う。次に、その設計図を基にして、実際にロボットを組立てる。最後に試作したロボットが予め与えられた性能を有するかどうかを調査し改良を施す。

【受講要件】「C 言語演習」「電子回路」「メカトロニクス工学」「メカトロニクス実習」を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】授業計画は課題内容により若干変更することがある。

【到達目標】これまでの知識を駆使して、ものづくりができるようになる。問題発見・解決能力を身につける。グループ活動能力を身につける。プレゼンテーション技術を向上させる。プレゼンテーション評価能力を身につける。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. ギアとリンクの講義と演習 3. センサーの講義と演習 4. プログラミング実習 5. プログラミング実習 6. 概念設計 7. 詳細設計 8. ロボット製作 9. ロボット製作 10. ロボット製作 11. 公開コンテスト 12. 技術報告会?反省会 13. ロボットの改良 14. ロボットの改良 15. 公開コンテスト

【成績評価】グループの強調性、最終報告会の成績、最終報告書およびプレゼンテーションなどを総合的に評価する。

【学習教育目標との関連】(D) に対応する。

【教科書】授業毎に関連した資料を配布する。

【参考書】横山直隆 著「やさしいマイコン制御ロボットの製作」シータスク、西田和明 著「たのしくできるやさしい電子ロボット工作」東京電機大学出版局、「ロボコンマガジン」オーム社、「ロボット開発キットで遊ぼう LEGO MINDSTORMS パーフェクトガイド」翔泳社、「LEGO Mindstorms ロボット開発講座」翔泳社、「LEGO MINDSTORMS BOOK レゴブロックでロボット作り」日経 BP 社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】高木(M620, 656-7359, takagi@me.tokushima-u.ac.jp), 長町(M526, 656-9187, ngmch@me.tokushima-u.ac.jp), 米倉(M326, 656-9186, yonekura@me.tokushima-u.ac.jp), 日下(M322, 656-9442, kusaka@me.tokushima-u.ac.jp)

塑性加工学

Metal Forming and Theory of Plasticity

教授・海江田 義也 2 単位

【授業目的】塑性加工には非常に広い分野がある。これらの加工法の概念を理解すると共に塑性力学の基礎を学ぶ。

【授業概要】材料の塑性を利用して所定の形状に加工する加工法を塑性加工という。製品のコストの面から塑性加工は今後ますますその重要性を増すものと思われる。前半では各塑性加工法の基礎的な原理を学ぶ。引き続き後半では塑性力学の基礎を学ぶ。

【受講要件】「材料力学」「材料科学」を履修していることが望ましい。

【到達目標】

1. 塑性加工法の概略を理解する。
2. 塑性力学の基礎を理解する。

【授業計画】1. 塑性加工の概要 2. 素材の製造・圧延・レポート 3. 圧延加工・レポート 4. 押し出し加工・レポート 5. 引き抜き加工・レポート 6. 鍛造加工・レポート 7. 鍛造加工・レポート 8. 板加工・レポート 9. 板加工・レポート 10. 金属材料の変形・レポート 11. 塑性力学の基礎・レポート 12. 塑性力学の基礎・レポート 13. 塑性力学の基礎・レポート 14. 塑性力学の基礎・レポート 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】各講義で簡単なレポートを提出する。適当な時期に中間試験を行う。レポートと中間および期末に行う試験とで評価する。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する。

【教科書】新編 塑性加工学(大矢根 守哉 監修) 養賢堂

【参考書】塑性加工の基礎(村川正夫 外 著) 産業図書, 基礎塑性加工学(川並 高雄 外 著) 森北出版

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】海江田(M321, 656-7379, kaieda@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】各講義時にレポートを課すので、そこで十分理解を深める。

卒業研究

Graduation Thesis

機械工学科全教官 5 単位

【授業目的】卒業研究は学部 4 年間の学習の集大成である。これまでに勉強して培ってきた知識と知恵を駆使し、それぞれの分野で与えられたテーマについてその研究の計画、実験の実施、そして、得られる結果の意味を考察して一つの論文にまとめ上げる作業である。与えられたテーマの中で何が問題であるかを見極め、それを解決する方法を考え、その方法にしたがって実験し、結果をまとめて分析し、さらに、それらを正しく第三者に理解させるために発表表現する技術や能力を養う。卒業研究を実行する過程では、研究室で教官や大学院生を含めて同僚と共同作業をしながら研究の方法を学び取ることが大切である。研究室の中で互いに議論して切磋琢磨しあいながら活動するグループ力を養う。また、受動的な態度ではなく、常に能動的な気構えを持って自らの力でものごとを考えられる能力を養成することを目的とする。

【授業概要】各研究室から提示される研究課題を研究室の活動を通じて遂行する。研究目的の理解に始まり、研究計画、研究の実施、結果の評価、研究内容のまとめ、研究成果の発表などが一連の活動内容になる。

【受講要件】別に定める 4 年次への「進級規定」を 3 年次末までに満たしていること

【履修上の注意】卒業研究着手資格を得た者は一応一年間の研究に耐えうる能力を最低限有していると考えている。ただ、これまでの 3 年間の学習の中で、自分から考えるという力はまだ十分に養われていないと思われるので、これまでの勉学方針を一度ふりかえり、自らの意志で積極的に動き出すという姿勢に変革して 1 年間の研究生活を行うことを心がけなければならない。1 年間を通じて着実に成果を積み上げられるように、しっかりした研究方針を自ら企画して実行しなければ、アウトカムズは生まれてこない。

【到達目標】卒業研究では、テーマを通じて新しい考え方や新しい物を作り上げていく作業を行なう。「創造」あるいは「創成」であり、その作業過程を経ることによって、学生が社会に有用な「もの」や「考え方」を作り上げる能力を持つ技術者に成長することを目標としている。また、研究室で計画されるさまざまな企画を通して、共同体の中で自分を磨き、同僚を助けはぐくみ、特異な分野で同僚を指導していく力などを涵養することも卒業研究の大きな目標である。

【授業計画】1. 卒業研究テーマの説明:3 年次後期試験終了後に卒業研究テーマを開催する。その後、研究室訪問の期間が設定されるので積極的に利用して内容の把握につとめること。2. 卒業研究着手資格者の認定:4 月初旬の教室会議で卒業研究着手資格者を認定し、各研究室の受け入れ人数を告示する。3. 研究室配属:原則として希望する研究室を自由に選択できるが、受け入れ人数枠にしたがって学生間で調整を行う。調整がつかない場合は学科長が決定する。最終調整された案を教室会議が承認して配属先が決定される。4. 卒業研究:各研究室において、教官および大学院生の指導のもとに研究を行う。5. 卒業論文と卒業論文審査会:研究結果をまとめた論文を作成し、教室会議が設定する日までに提出する。2 月末に開催する卒業論文審査会において成果の発表を行う。

【成績評価】卒業研究を実行する中で各研究室において計画される研究討論、中間報告、論文講読など、さらに、年度末に行われる卒業論文審査会における研究成果の発表とそれに対する質疑応答を総合判断して成績が評価される。

【学習教育目標との関連】(A), (C), (E), (F), (G), (H) に対応する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】機械工学科の学科長あるいは教務委員

知識ベースシステム

Knowledgebase Systems

助教授・伊藤 照明 2 単位

【授業目的】機械工学分野におけるコンピュータの知的利用のための基礎知識を習得させる。

【授業概要】授業前半では工学分野における知識ベースシステムの位置づけを大局的な観点から捉えるとともに、人工知能の基本的手法および知識処理による問題解決を行うエキスパートシステムの概要につい

機械工学科 (昼間コース)

て講義する。前半で学習した基礎知識を用いて、授業後半では演習形式による知識ベースシステム作成を行う。ここでは少人数のチームを編成し、チームごとに設定するテーマで対象とする知識ベースシステムの作成を行う。演習を通じて知識ベースシステムに関する理解を深めるとともに、チームワークによる問題解決能力の向上を目指す。

【受講要件】「コンピュータリテラシー」「C言語演習」「CAD演習」の履修を前提とする。また、演習で使用するワープロおよび表計算ソフトの基礎知識を有することが好ましい。

【履修上の注意】連絡、レポート提出等はEmailで行うため、受講者はインターネット利用が可能であること。

【到達目標】

1. 知識ベースシステムに関する基礎知識を習得する。
2. 機械工学における知識ベースシステムの役割について理解する。
3. 演習を通じて知識ベースシステム構築方法の基礎を習得する。

【授業計画】1. 講義概要、計算機の歴史 2. 人工知能の歴史 3. 知識ベースシステムの歴史 4. 状態空間表現による問題解決法 5. 探索法の基礎と応用 6. 知識表現法 7. 推論処理の基礎 8. 知識ベース推論の概要 9. 中間試験 10. プレーンストミング法によるテーマ検討 11. 提案テーマ評価 12. 知識ベースシステム作成 13. 中間発表会・反省会 14. 知識ベースシステム修正 15. 演習の反省と資料作成 16. 最終発表会

【成績評価】受講姿勢・レポート(平常点)を50%、定期試験・プレゼンテーションを50%として評価する。

【学習教育目標との関連】(A)に対応する。

【教科書】荒屋真二著「人工知能概論」、共立出版

【参考書】渡辺貞一・南川忠利著「知識システム」、コロナ社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】伊藤照明(M316, 656-2150, ito@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】中間試験および最終発表会に欠席した場合は不合格となる。

介しつつ講義し、学生が将来、企業・大学・研究所などへ進んだ場合
に知っておくべき知的所有権に関する基礎知識の修得をはかる。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】2日間の集中講義であるために全時間の出席を要する。

【到達目標】

1. 知的所有権の概念についての理解を深める。
2. 特許法、商標法、意匠法、著作権法について理解する。

【授業計画】1. 知的所有権とは 2. 知的所有権制度の概要(特許・商標等)
3. 知的所有権制度の概要(意匠・著作権制度等) 4. 特許発明と特許権侵害(含む事例研究) 5. 知的所有権の管理とその活用(企業・大学・研究所) 6. 今後の研究開発と知的所有権のあり方 7. 試験(到達目標1および2の評価)

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを試験70%、講義への取り組み状況30%で評価し、平均で60%あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(H),(I)に対応する

【教科書】特製テキストを用いる。

【参考書】中山信弘著「知的所有権」日刊工業新聞社、通産省特許庁編「これからは日本も知的創造時代」通商産業調査会

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】酒井(Tel:03-5600-2631, Fax:03-5600-2649)

知能機械学特別講義

Topics on Intelligent Machines

非常勤講師 1単位

【授業目的】制御工学、システム工学、メカトロニクス、光計測、マイクロマシン、ロボット、振動制御等に関する最先端の研究および技術を、学会ならびに企業の第一線の方によって集中的に講義していただき、この分野の現状を認識する。

【授業概要】講義内容は講師の方が毎年変わる可能性が強いので一概に記せないが、最近の講義例を次に挙げる。1. 知的制御を含む現代制御理論の現状と応用例 2. フレキシブル生産システムの概要および生産・行程計画の最適化問題 3. 光計測の概説とその応用例 4. ロボットビジョンのシステム構成と画像認識 5. マイクロマシンの概説と今後の発展 6. 振動制御の理論と応用例 7. 構造物の耐震設計と制振技術 8. GPS計測の概要

【受講要件】特にないが、新しい技術の動向に興味を持つことが大事である。

【到達目標】最先端の研究や技術を学ぶことによって、学習への意欲を涵養すること。

【授業計画】1. 複数名の講師による集中講義である。講義の予定は掲示によって連絡される

【成績評価】受講姿勢、レポート提出または試験による。

【学習教育目標との関連】(B),(I)に対応する。

【教科書】使わない。講師によって作成された資料による。

【参考書】講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義は不定期であるが出席は絶対的な要件であり、遅刻しないことも要求される。この講義は専門基礎を踏まえた先端的な応用例を概説するものであるから、ぜひとも出席することを期待する。

電子回路

Electronic Circuits

講師・大石 篤哉 2単位

【授業目的】急速に発展する「マイクロエレクトロニクス」との融合により「機械」の新たな機能を創造する「メカトロニクス」のための電子回路の基礎知識を習得させる。

【授業概要】最初に受動素子の働きとその回路について説明した後、マイクロエレクトロニクスの中心となる半導体電子部品について述べる。後半はデジタル回路に関して各種機能の実現方法を詳述する。

【受講要件】「C言語演習」を履修していること。

【到達目標】

1. 基本的な電子デバイスの機能を定性的かつ定量的に理解する。
2. 基本的なアナログ電子回路の計算方法を習得する。
3. 基本的なデジタル論理回路の設計・解析手法を習得する。

【授業計画】1. オームの法則 2. 直流と交流 3. 受動電子部品(CとL) 4. 回路シミュレーション 5. PN接合とダイオード 6. トランジスタ増幅回路 7. オペアンプ 8. デジタル基本論理回路 9. デジタル回路と真理値表 10. ブール代数と論理式 11. 二進法と加算回路 12. フリップフロップ 13. カウンタとシフトレジスタ 14. AD変換とDA変換 15. 予備日 16. 定期試験

知的財産権

Intellectual Property

非常勤講師・川原 英昭 1単位

【授業目的】企業は技術開発に多額の投資をして鎬をけずっている。開発成果である発明は財産であり、これを特許にすると他社を排除して独占的に実施でき、一方他社に特許をとられると実施できなくなる。企業の盛衰を左右する特許を規定した特許法等の考え方・制度・手続を理解させる。

【授業概要】1. 発明とは何か、2. 特許とは何か、3. どんな発明が特許の対象となるか、4. どうすれば特許がとれるか、5. 他人の特許を侵害するとどうなるかなどについて、実例を用いてやさしく講義する。併せて、特許法と実用新案法の違い、物品の美的外観を保護する意匠法、商品やサービスに使用する商標を保護する商標法、著作物を保護する著作権法等、人間の知的活動の成果物である知的財産を保護する法律全般についてもその概要を講義する。

【受講要件】勉強する意思があること

【履修上の注意】遅刻、早退又は欠席をすると試験を受けることができない場合がある。

【到達目標】知的財産を保護する法律全般の体系を理解し、事案に遭遇したとき問題意識をもって専門家に相談できるようになる。

【授業計画】1. 特許制度 2. 特許を受けることができる発明と特許を受けることができる人 3. 出願から特許公報の発行まで 4. 補正、特殊な出願および特殊な手続 5. 特許権および特許権侵害 6. 審判および判定 7. 審決取消訴訟 8. 特許情報 9. 実用新案法、意匠法、商標法 10. 知的財産を保護するその他の法律(著作権法、不正競争防止法等)

【成績評価】講義中に行う試験で評価する。

【学習教育目標との関連】(H)に対応する。

【教科書】川原英昭著「知的財産権の実務」

【参考書】講義中に紹介する。

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

知的所有権概論

Intellectual Property

非常勤講師・酒井 徹 1単位

【授業目的】知的所有権制度を理解し、知的所有権の保護と制度の活用の重要性を各種の事例を基に修得する。

【授業概要】科学技術創国立国を目指す我が国において、知的所有権の保護と制度の活用が、行政・産業界・大学・研究所にとって不可欠であるとの共通認識を持つ必要性を説くとともに、知的所有権制度の概要と、その活用法を、企業の特許戦略、特許侵害事件などの事例を紹介

機械工学科(昼間コース)

【成績評価】講義に対する理解力の評価は定期試験(80%)および授業への取り組み状況(20%)をもとに総合的に評価する。

【学習教育目標との関連】(B)に対応する。

【教科書】西堀賢司著「メカトロニクスのための電子回路基礎」コロナ社

【参考書】D.L.Schilling and C.Belove"Electronic Circuits"(McGraw-Hill), 加藤肇・見城尚志・高橋久著「図解 わかる電子回路」講談社, 高橋晴雄・阪部俊也著「機械系の電子回路」コロナ社, 藤原修著「インターフェースの電子回路入門」オーム社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大石(M622, 656-7365, oishi@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「メカトロニクス実習」, 「創造実習」の授業は, 本講義の受講を前提として進められる。

伝熱工学

Heat Transfer Engineering

教授・逢坂 昭治 2 単位

【授業目的】伝熱現象の物理的な説明とともに定式化を示し, 伝熱学の基礎を習得したうえで実際問題に対して解決・応用できることを目的とする。

【授業概要】熱が移動する基本的な3形態の概要説明をした後, それぞれの形態における熱移動の現象と種々の熱・流体力学的条件下で生じる熱移動の因子・法則について講義する。さらに, これらの知識・理解が生産・加工・輸送などの工業および地球環境などの広い分野におけるエネルギー有効利用に最も必要とされていることを説明する。

【受講要件】工業熱力学を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】計算問題, 英語の問題もある, が多いので, 計算機と辞書の準備が必要。

【到達目標】1. 熱伝導の基礎理論と熱通過を理解する。2. 対流熱伝達の理論と強制・自然対流熱伝達を理解する。3. 熱放射の基本法則と放射熱伝達を理解する。

【授業計画】1. 伝熱工学の概要と基礎事項 2. 一次元定常熱伝導の基礎理論と小テスト 3. 平板および円管の熱通過と小テスト 4. フィンの伝熱と小テスト 5. 対流熱伝達の理論(連続の式, 運動方程式)と小テスト 6. 対流熱伝達の理論(エネルギーの式, 次元解析)と小テスト 7. 熱通過および対流熱伝達の演習 8. 中間テスト 9. 相変化を伴う熱伝達(沸騰熱伝達の概要) 10. 相変化を伴う熱伝達(凝縮熱伝達の概要と理論), 小テスト 11. 熱放射の基本法則 12. 黒体面間の放射伝熱と小テスト 13. 灰色面間の放射伝熱と小テスト 14. 熱交換器の概要 15. 熱交換器における伝熱計算 16. 伝熱工学最終試験

【成績評価】授業への取組(25%), 小テストの回答内容(25%), 中間・最終試験の成績(50%)を総合して評価する。

【学習教育目標との関連】(B)に対応する。

【教科書】吉田駿著「伝熱学の基礎」理工学社

【参考書】洋書を含めた参考書については, 各論ごとに講義中に紹介する。

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】逢坂(M523, 656-7375, ousaka@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】計算問題, 英語の問題もある, が多いので, 計算機と辞書の準備が必要。

内燃機関

Internal Combustion Engine

教授・三輪 恵 2 単位

【授業目的】自動車, 船舶, 航空機や産業, 建設, 農業用などの動力源として広く利用されている内燃機関について, 機械工学の立場からその動作原理, 構造を理解し, 燃料のエネルギー変換過程と大気汚染物質の低減法の基礎知識を修得する。

【授業概要】燃料の燃焼によるエネルギーを有効に利用し, また大気汚染物質の排出を抑制できる動力源を得るために, 内燃機関の熱力学を基本にして, 仕事とサイクルと熱効率の関係, また, ガソリンエンジン, ディーゼルエンジンおよびガスタービンなど各種内燃機関の燃料特性と燃焼方式, およびその特徴を講述する。

【受講要件】工業熱力学を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】演習を行うので電卓を持参のこと。

【到達目標】熱力学, 燃料, 燃焼と動力変換との関係を理解して, エネルギー資源の有効利用と大気環境問題を習得する。

【授業計画】1. (1) 内燃機関の概要と歴史的考察 計画= 2. (4) 熱力学の小テストとレポート 3. 燃料と燃焼 4. (5) 炭化水素燃料の種類と性状 5. (6) 燃焼の基礎理論 6. (7) 火花点火機関の燃焼 7. (8) 圧縮着火機関の燃焼 8. (9) 燃料と燃焼の小テストとレポート 9. シリンダ内ガス交換 10. (10)4 サイクル機関のガス交換過程 11. (11)2 サイクル機関のガス

交換過程 12. 火花点火機関と圧縮着火機関 13. (12) 燃料供給装置・点火装置と予混合燃焼方式 14. (13) 燃料噴射装置と拡散燃焼方式 15. 大気汚染物質とその制御 16. (14) 排気ガス成分とその低減技術

【成績評価】講義に対する理解力は, 中間試験, 学期末試験の成績を主体に評価するとともに, 授業中の質疑応答およびレポートならびに講義ノートを含めて総合的に評価する。

【学習教育目標との関連】(B)80%, (H)20%に対応する。

【教科書】廣安広之・實諸幸男著「内燃機関」コロナ社

【参考書】河野・角田・藤本・氏家著「最新内燃機関」朝倉書店, 一色・北山著「わかりやすい熱力学」北森出版, 専門書として, 長尾不二夫著「内燃機関講義」, 養賢堂洋書として, W. W. Pulkrabek"INTERNAL COMBUSTION ENGINE" PRENTICE HALL.

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】エコシステム棟5階503室

【備考】「工業熱力学」の履修を前提として講義を行う。学期の前半に熱力学の完全ガスの範囲の小テストを実施する。期末試験, レポートなどの成績を70%の比率とし, 授業への取り組み状況, 質疑 応答, 講義ノートなどの平常点の比率を30%とする。

ニュービジネス概論

Introduction to New Business

非常勤講師・出口 竜也

第一線の実務経験者 2 単位

【授業目的】ベンチャー企業は, 新しいアイデアや専門的な知識・技術を事業化し, 新しい創造的な事業を展開するバイオニアの企業である。この授業の目的は, アイデアや専門的知識・技術を事業化する, つまりベンチャー企業を起業するためのスピリットとノウハウを提供することにある。

【授業概要】政府は活力ある日本社会を創るために, 大学発ベンチャー企業の育成や人材の育成を目指している。政府目標は, 3年間で1,000社の大学発ベンチャー企業の創出である。本講義は, それを実現できるように徳島県が支援して開設された「学生起業家創業支援講座」である。学生諸君がベンチャー企業の設立に挑戦し, 事業を展開していく手助けとなるような授業内容となっている。第一線で活躍されている実務家やアドバイザーを講師として招き, 実際に役立つ知識を講義していただく。授業は, 大きく分けて4つの部分から構成されている。第一は, 導入としてのベンチャーとは何かの説明である。第二は, 設立の方法と資金の手当てについてである。第三は, 経営のノウハウである。最後に, ベンチャーを起業するにあたって不可欠のビジネスプラン(事業計画)の作成実習を行う。

【受講要件】工学部以外の受講希望者も教室収容能力の許すかぎり受講可能である。単位修得については所属部局の規則に従うこと。

【履修上の注意】遅刻や授業中の私語は厳禁である。

【到達目標】

1. ベンチャービジネスを起業するために必要な知識を修得すること
2. ビジネスプランが作成できるようになること

【授業計画】1. ガイダンス 2. 基調講演「ゼロからのスタート」 3. 独立型ベンチャー成功のための理論 4. 会社設立の方法(法律や会社設立手続き) 5. 資金調達と資本政策 6. 銀行の役割と利用方法(間接金融) 7. 株式発行による資金調達(直接金融) 8. 会社経営の基礎(計画・資金繰り・組織) 9. 企業会計の基礎知識 10. 経営戦略とマーケティング 11. 製品開発と知的所有権 12. ビジネスプラン作成のポイント 13. ビジネスプラン作成実習 14. 筆記試験(4~11の内容に関する試験) 15. ビジネスプランの発表会 16. 予備日

【成績評価】到達目標の達成度で評価し, 到達目標を達成しているものを合格とする。授業計画4~11は筆記試験(60%)で, 12,13,15はビジネスプランの提出分(40%)で評価する。

【学習教育目標との関連】(I)20%, (H)50%, (G)30%に対応する

【教科書】各授業でレジメを配布する。

【参考書】各授業で紹介する。

【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能

【連絡先】出口(2216, 656-7183, deguchi@ias.tokushima-u.ac.jp)

【備考】ビジネスプランはグループで作成する。

微分方程式 I

Differential Equations (I)

助教授・澤下 教親 2 単位

【授業目的】微分方程式の解法を修得し, さらに工学の諸分野に現われる微分方程式の解法に応用できるようにする。

【授業概要】微分方程式の理論は数理工学的な現象の解析に有力な手段を与え, 現代工学の基礎として重要な役割を果たしている。その広範

機械工学科 (昼間コース)

な理論の入門段階として、この講義では微分方程式の具体的な解法を中心に講義する。

【授業計画】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、講義ノートをきちんととり、各自が 普段から、自主的な演習を含む、予習復習をすることが必要です。

【到達目標】

1. 求積法による解法が理解できる。
2. 高階の定数係数線形常微分方程式が解ける。

【授業計画】1. 変数分離形 2. 同次形 3. 一階線形微分方程式 4. 完全微分形 5. クレーローの微分方程式 6. ラグランジュの微分方程式 7. 応用例 8. 高階常微分方程式 9. 2 階線形同次微分方程式 10. 非同次微分方程式 11. 記号解法, 簡便法 12. 級数解法 13. ルジャンドル関数 14. ベッセル関数 15. 期末試験

【成績評価】授業への取り組み状況, 演習の回答, レポートの提出状況, 小テスト等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(A) に対応する。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】木村俊『常微分方程式の解法』培風館, 古屋茂『微分方程式入門』サイエンス社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】澤下(A204室, TEL:656-7542, E-mail:sawasita@pm.tokushima-u.ac.jp)

微分方程式 2

Differential Equations (II)

助教授・澤下 教親 2 単位

【授業目的】連立常微分方程式の安定性と簡単な偏微分方程式の解法を修得し、より実際の工学的な問題の解法に応用できるようにする。

【授業概要】「微分方程式 1」に続いて現代工学すべての基礎として重要な役割を果たしている連立常微分方程式系の基本的な解法を講義する。さらに、簡単な偏微分方程式の解法についても講義する。

【受講要件】「微分方程式 1」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、講義ノートをきちんととり、各自が 普段から、自主的な演習を含む、予習復習をすることが必要です。

【到達目標】

1. 簡単な定数係数連立線形常微分方程式が解ける。
2. ラプラス変換とその応用ができる。

【授業計画】1. 定数係数連立線形微分方程式 2. 高階微分方程式と連立微分方程式 3. 連立線形微分方程式 4. 自励系と強制系 5. 2 次元自励系の危点 6. 2 次元自励系の安定性 7. 保存系と安定性 8. ラプラス変換の性質 9. 逆ラプラス変換 10. ラプラス変換の応用例 11. 1 階偏微分方程式 12. ラグランジュの偏微分方程式 13. 2 階線形偏微分方程式 14. 定数係数 2 階線形偏微分方程式 15. 期末試験

【成績評価】授業への取り組み状況, 演習の回答, レポートの提出状況, 小テスト等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(A) に対応する。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】木村俊『常微分方程式の解法』培風館, 古屋茂『微分方程式入門』サイエンス社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】澤下(A204室, TEL:656-7542, E-mail:sawasita@pm.tokushima-u.ac.jp)

微分方程式特論

Differential Equations(III)

助教授・深貝 暢良 1 単位

【授業目的】数理解析学の強力な道具立てとして、フーリエの方法を修得させる。

【授業概要】フーリエが導入した三角級数展開およびフーリエ式積分変換の理論を講義し、物理・工学に現れる偏微分方程式を初等的に扱うための基礎的な知識を提供する。

【受講要件】「微分方程式 1」、「微分方程式 2」の履修を前提とする。

【履修上の注意】高度な内容につながる盛り沢山の講義である。使い方を理解するには、実用的な道具と割り切って、多数の計算練習を行なうとよい。

【到達目標】

1. フーリエ解析の初歩を理解する。
2. フーリエ級数の計算ができる。

【授業計画】1. フーリエ係数, フーリエ級数 2. 三角級数の和, ディリクレ核 3. リーマン・ルベグの定理, ベッセルの不等式 4. 展開定理 5. パーセバルの等式, 簡単な応用例 6. フーリエ積分 7. ディリクレ積分公式, フーリエ積分公式 8. フーリエ反転公式 9. フーリエ変換, 合成積 10. 変換の計算例 11. 偏微分方程式への応用 12. 波動方程式 13. 熱伝導方程式 14. ラプラス方程式 15. 期末試験

【成績評価】期末試験に基づいて行う。

【学習教育目標との関連】(A) に対応する。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】入江昭二・垣田高夫『フーリエの方法』内田老鶴圃, 洲之内 源一郎『フーリエ解析とその応用』サイエンス社, 竹之内脩『フーリエ展開』秀潤社, T.W.ケルナー『フーリエ解析大全上・下』朝倉書店

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】工学部数学教室

福祉工学概論

Introduction to Well-being Technology for All

教授・末田 統

助教授・藤澤 正一郎 2 単位

【授業目的】我々の身近な生活を支える様々な機器や環境の中に含まれる工学技術のうち、いろいろなハンディキャップを伴う条件下でも使いやすく安全を確保する技術を、人に優しい技術として紹介し、その万人に対する延長線上に福祉工学技術の一端があることを理解させる。また、各障害者個人に合わせた機器を紹介し、福祉工学技術のもう一端には、特化された技術があることも理解させる。

【授業概要】本講義では、人間の生活全体を支える工学技術を、高齢化による機能の低下や障害によるハンディキャップを軽減させる様々な技術(ハイテクならびにローテク)やアプローチを例にとり、広い視点から概観する。

【到達目標】

1. 機能の低下や障害によらず、全ての人が利用できる技術や機器、環境があることを理解させる。
2. 特別なサポートを必要とする人々のための技術や機器、環境があることを理解させる。
3. 人に優しい工学技術について考える機会を持たせる。

【授業計画】1. ガイダンス:講義の進め方, 受講の心構え 2. 支援科学技術:個人への対応と万人への対応(Universal Design) 3. 移動・移乗 4. 排泄 5. 身障者スポーツ 6. 高齢者の生活環境 7. 就労 8. 生活自立と支援技術(米国の場合) 9. 技術による支援, 人による支援 10. 技術:障害への適合, 環境への適合, 人間への適合 11. 知的障害者と運動機能障害者の支援 12. 視覚障害者と聴覚障害者の支援 13. 最新の技術:???? 14. まとめ:心のバリアー, エンジニアとして 15. 予備日

【成績評価】講義への取り組み状況と、毎回提出させるレポートにより評価する。

【学習教育目標との関連】(B)30%,(D)20%,(H)20%,(I)30%に対応する

【参考書】「明日を創る」, E&C プロジェクト「バリアフリーの商品開発 2」, 山田尚勇他「コンピュータと人間の共生」, 後藤芳一編「バリアフリーのための福祉技術入門」

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】末田(総合研究実験棟705, 656-2167, o.sueda@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義への取り組み状況とレポート評価との割合は 4:6 とするが、欠席者のレポートは成績評価しない。

複素関数論

Complex Analysis

教授・長町 重昭 2 単位

【授業目的】複素関数論への入門講義として、複素変数関数の微分積分学を修得させる。

【授業概要】微積分で扱う対象を複素変数関数の関数にまで広げ、正則関数および有理型関数の理論を展開することにより、実数の世界では困難であったある種の積分計算が複素数の立場からみると簡潔に処理されることを述べる。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】時間数の制約から、複素関数の計算を修得するための必要最小限な議論を行なうので、講義内容のすべてを吸収することが理解への早道である。日頃から予習・復習の計画を立てて勉学に動んでもらいたい。

【到達目標】

1. 複素微分, 正則関数の概要が理解できる。
2. 留数概念の理解とその応用ができる。

機械工学科 (昼間コース)

【授業計画】1. 複素平面 2. 複素微分 3. 正則関数 4. 基本的な正則関数 1 5. 基本的な正則関数 2 6. 複素積分 7. コーシーの積分定理 8. コーシーの積分公式 9. 留数定理 10. 定積分の計算 1 11. 定積分の計算 2 12. テイラー展開 13. ローラン展開 14. 正則関数の応用 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への取組み状況, 演習の回答, レポートの提出状況, 小テスト等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(A) に対応する。

【教科書】柴雅和「複素関数論」サイエンス社

【参考書】辻正次・小松勇作『大学演習・函数論』裳華房, 田村二郎『解析関数(新版)』裳華房, 吉田洋一『函数論』岩波書店, 神保道夫『複素関数入門』岩波書店, 志賀啓成『複素解析学 I-II』培風館

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】A205室, TEL:656-7554, e-mail:shigeaki@pm.tokushima-u.ac.jp

【授業計画】1. OP アンプ回路の基礎 2. 負帰還増幅器の基礎 3. 熱電対 4. 白金測温抵抗体 5. フォトセンサ 6. ホールセンサ 7. 磁気抵抗素子 8. 圧力センサ 9. AC 電流センサ 10. 超音波センサ 11. モータの種類と動作原理 12. DC モータと AC モータ 13. ステッピングモータ 14. PLL 回路 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】レポートの提出状況とその内容, 及び中間試験と最終試験の成績を総合して判定する。中間試験は平常点に含め, 平常点と最終試験の比率は 4:6 とする。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する。

【教科書】松井邦彦著「センサ応用回路の設計製作」CQ 出版社, 「モータ制御&メカトロ技術入門」トランジスタ技術 SPECIAL NO.61 CQ 出版社

【参考書】「センサ応用回路の活用ノウハウ」トランジスタ技術 SPECIAL NO.66 CQ 出版社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岩田(M427, 656-9743, iwata@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】メカトロニクスとは, メカニクス, エレクトロニクス, オプティクスの技術融合により新機能・高性能装置を創出する工学であり, 制御工学の知識を導入してコンピュータにより機械の知能化をはかる技術分野である。したがって装置製作, 計測といった観点から, 全ての科目を総合的に勉強する必要がある。

ベクトル解析

Vector Analysis

講師・岡本 邦也 2 単位

【授業目的】工学の解析で必要不可欠なベクトルの概念と基礎的な性質を学ぶとともに, ベクトル場の解析学を通して古典力学, 流体力学や電磁気学に現れる基本的な物理法則の数学的な理解・運用を目標とする。

【授業概要】三次元空間のベクトルで表される物理量の局所的変化(微分)と大局的効果(積分)を記述する手法としてベクトル場の微分積分学を展開し, 微分積分学の基本定理のベクトル場に対する一般化を確立する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには, 予習を行い, 講義ノートをかきとるとり, 講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に, 各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. ベクトル場の微分についての基礎的な性質が理解でき, 勾配, 発散, および回転の基本事項が理解できる。
2. ベクトル場の各種の積分が理解でき, それらに関する基礎的な定理が理解できる。

【授業計画】1. ベクトルの演算 2. ベクトルの内積・外積 3. ベクトル値関数の微分・積分 4. 曲線のベクトル値関数表示 5. フレネ・セレの公式 6. 力学への応用 7. 曲面・接平面のベクトル値関数表示 8. スカラー場とベクトル場 9. スカラー場の勾配ベクトル 10. ベクトル場の発散・回転 11. 演算子間の関係 12. 線積分・面積分 13. ガウスの発散定理 14. ストークスの定理 15. 期末試験(到達目標 1 及び 2 の評価)

【成績評価】講義への取組み状況, 演習の回答, レポート等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(A) に対応する。

【教科書】寺田文行・木村宣昭 共著「ベクトル解析の基礎」サイエンス社

【参考書】加藤祐輔 著「多変数関数の微積分とベクトル解析」講談社, 渡辺正 著「ベクトル解析の基礎と応用」新数理ライブラリ M5 サイエンス社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岡本(A2-4室, TEL/FAX:656-9441, E-mail:okamoto@pm.tokushima-u.ac.jp)

メカトロニクス実習

Mechatronics Laboratory

教授・今枝 正夫, 助教授・日野 順市
教授・岩田 哲郎, 講師・浮田 浩行 1 単位

【授業目的】メカトロニクスの基本的事項を, 基礎的な実習を通して習得させる。IC トレーニングキット, ワンボードマイクロコンピュータ, 各種センサと制御用モータが実装された専用の実習用キット, パーソナルコンピュータ (Visual C 搭載), といった教材を順番に使用して実習を進めていく。データシートが読解でき, 与えられた設計課題に対応できる能力を育成する。

【授業概要】以下の 3 部構成とする。(1) 電子回路の基礎 (特にデジタル回路),(2) ワンボードマイクロコンピュータ, (3) パーソナルコンピュータ (C 言語) による装置の制御。(1) では, TTL IC とそのデータシートを与え, その動作確認を行う。またオシロスコープの使い方をマスターする。最後に簡単なパルス発生器を設計製作しその動作確認を行う。(2) では, Z80 のアセンブラを習得し, 同時にマイクロコンピュータとその周辺のハードウェアを理解する。ここでの最大の目標は, 割込の重要性を認識させることである。(3) ではより複雑な装置制御のプログラムを C 言語で作成する。

【受講要件】電子回路, メカトロニクス工学を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】全回出席を原則とする。

【到達目標】

1. 簡単なデジタル IC を使用できるようになること。
2. オシロスコープで波形を観測できるようになること
3. ワンボードマイクロコンピュータとアセンブラ言語を理解すること
4. 割込み処理の重要性を認識し, 簡単な動作確認ができるようになること
5. C 言語で装置制御ができるようになること

【授業計画】1. ゲート IC の動作確認 2. オシロスコープの使用 3. フリップフロップとカウンタ IC の使用 4. パルス発生器の設計製作 5. Z80 の機械語命令 6. ワンボードマイコンの動作 7. ワンボードマイコンによる装置の制御 8. ワンボードマイコンによる割込制御 9. C 言語による装置の制御 (1) 10. C 言語による装置の制御 (2) 11. C 言語による装置の制御 (3) 12. C 言語による装置の制御 (4)

【成績評価】全回出席を原則とする。各回毎に, 課題達成状況を個別に口頭試問し, さらにレポートを課す。受講姿勢と平常点の比率は 6:4 とする。

【学習教育目標との関連】(C) に対応する。

【教科書】専用のテキストを使用する。

【参考書】「メカトロニクス工学」を参照

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】今枝(M419, 656-7386, imaeda@me.tokushima-u.ac.jp), 日野(M422, 656-7384, hino@me.tokushima-u.ac.jp), 岩田(M427, 656-9743, iwata@me.tokushima-u.ac.jp), 浮田(M424, 656-9448, ukida@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】2 名の班ごとに実習を行なう。

メカトロニクス工学

Mechatronics Engineering

教授・岩田 哲郎 2 単位

【授業目的】メカトロニクスの構成要素として必要不可欠な, 各種のセンサとモータの動作原理, および制御回路の基礎知識を習得させる。

【授業概要】最初に, 以後の講義を理解するために必要な, OP アンプ回路と負帰還増幅器の簡単な説明を行なう。その後, 2 部構成として, 前半で各種のセンサの動作原理と応用回路について講述する。後半では各種のモータの動作原理と駆動回路について講述する。

【受講要件】電子回路の受講を前提とする。

【履修上の注意】毎回の復習を特に重視する。

【到達目標】

1. 基本的なセンサの動作原理と駆動回路を理解すること
2. 各種モータの動作原理と駆動回路を理解すること
3. データシートから必要な情報を読み取れるようにすること

流体機械

Fluid Machinery

教授・石原 国彦 2 単位

【授業目的】流体エネルギー変換機は我々人類にとって古くからなじみのある機械である。この流体機械の作動原理と利用方法の基礎知識を身に付けさせる事を目的とする。

【授業概要】流体エネルギーと機械的エネルギーの変換機器としての流体機械について、その作動原理、性能特性、利用方法と流体機械特有の現象について講義する。

【受講要件】「流体力学 1」「流体力学 2」の履修を前提として講義する。

【履修上の注意】講義中に演習を行う場合があるので、電卓を持参すること。

【到達目標】

1. 工学部卒業生として、企業における設計技師を養成する。
2. 流体機械の構造、作動原理を理解する。
3. 流体機械特有の現象を理解する。
4. 流体機械の利用方法を理解する。

【授業計画】1. 流体のエネルギー (1,2) 2. 流体機械の利用 3. 羽根車の理論 (1,2,3) 4. 翼列と軸流羽根車 (1,2,3) 5. ターボ機械の構成要素 6. ターボ機械の構造と特徴 7. 流体継手とトルクコンバータ 8. キャピテーション 9. 圧縮機内における気体の状態変化 10. 音と送風機の騒音 11. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、受講姿勢、レポート、最終試験の成績を総合して行う。成績評価において受講姿勢およびレポートを 30%、最終試験の成績を 70%と評価する。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する。

【教科書】妹尾泰利著「内部流れ学と流体機械」養賢堂

【参考書】大橋秀雄著「流体機械」森北出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】石原(M518, 656-7366, ishihara@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「流体力学 1」の履修を前提として講義する。

流体力学 1

Fluid Dynamics 1

教授・福富 純一郎, 講師・一宮 昌司 2 単位

【授業目的】水や空気に代表される流体の性質を説明し、その力学的挙動を比較的簡単な理論によって説明し、流体による力、圧力、応力などを求める方法について講義する。

【授業概要】流体の性質・流れの基礎、静止した流体中にはたらく圧力・浮力、運動する流体の連続の式・エネルギーの釣合、運動量法則と角運動量法則により流体中に置かれた物体に働く力の求め方、圧力・流速・流向・流量の計測法を説明する。

【受講要件】「材料力学」の履修を前提にして講義を行う。

【履修上の注意】演習を行うので、講義を注意して受講すること。

【到達目標】流体の性質、その力学的挙動を理解し、流体による力、圧力、応力などを求めることができるようになること、また圧力・流速・流向・流量の計測法を理解することを目標とする。

【授業計画】1. 液体の流れと気体の流れ、粘性と流れ、粘度 2. 非ニュートン流体、圧力とせん断応力、圧縮性・問題演習 3. 体積弾性係数、密度、定常流、層流と乱流・問題演習 4. 流脈、流跡及び流線、比熱と比熱比、表面張力 5. 圧力の性質、圧力分布・問題演習 6. 液柱圧力計、浮力・問題演習 7. 水中の面に働く力、相対的静止・問題演習 8. 中間試験 9. 一次元流、連続の式、エネルギーの保存・問題演習 10. 損失、 $W=0$, $EI=0$ の場合・問題演習 11. $W=0$, $EI \neq 0$ の場合・問題演習 12. $W \neq 0$, $EI \neq 0$ の場合・問題演習 13. 運動量法則、運動量法則の応用例・問題演習 14. 角運動量法則、角運動量法則の応用例・問題演習 15. 圧力測定、流速測定、流向測定、流量測定 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、ほとんど毎回行う問題演習の提出状況および解答内容、中間試験、期末試験の成績を総合して行う。成績評価に対する平常点と試験の比率は 1:9 とする。平常点としては問題演習の提出状況および解答内容により評価する。試験には中間試験及び期末試験の成績を含む。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する。

【教科書】大橋秀雄著「流体力学 (1)」コロナ社

【参考書】古屋善正・村上光清・山田豊著「流体工学」朝倉書店、深野徹著「わかりたい人の流体工学 (I)」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】福富(M519, 656-7367, fukutomi@me.tokushima-u.ac.jp), 一宮(M520, 656-7368, ichimiya@me.tokushima-u.ac.jp)

流体力学 2

Fluid Dynamics 2

教授・福富 純一郎 2 単位

【授業目的】水と大気に囲まれて生活する我々にとって、流体の利用は欠かせない。流体の運動を力学的に理解して人間の生活に役立てていくための基礎知識を身につけさせる。

【授業概要】流体の運動を支配する連続の式及びオイラーの運動方程式を誘導したのち、主として非圧縮性ポテンシャル流れについて詳しく述べ、流体運動の理論的取扱いについて理解させる。

【受講要件】「流体力学 1」の履修を前提として講義を行う。

【履修上の注意】演習を行うので、講義を注意して受講すること。

【到達目標】

1. 流体の運動を記述する方程式を理解する。
2. 二次元ポテンシャル流れを理解する。
3. 翼に働く揚力の発生と算出法を理解する。
4. 渦の基本的性質を理解する。

【授業計画】1. 流体運動の記述・連続の式 2. 流体の加速度・オイラーの運動方程式と境界条件、演習 3. 理想流体の流れ・渦なし流れ、演習 4. 速度ポテンシャル・二次元ポテンシャル流れ、演習 5. 循環・複素関数、演習 6. 代表的流れと複素ポテンシャル、演習 7. 二重吹出し・円筒の周りの流れ・鏡像、演習 8. 中間試験 9. ブラジウスの公式とクッタ・ジュコフスキーの定理、演習 10. 二次元ポテンシャル流れの解法、演習 11. 翼に働く揚力、演習 12. 特異点解法・差分法、演習 13. 三次元ポテンシャル流れ・渦運動、演習 14. 渦糸を持つ流れ、演習 15. 不連続面と渦層 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、講義中に行う演習問題の提出状況とその解答、中間試験及び最終試験の成績を総合して行う。成績評価に対する平常点と試験の比率は 2:8 とする。平常点としては、演習問題の提出状況及び解答内容により評価する。試験には中間試験及び期末試験の成績を含む。

【学習教育目標との関連】(B) に対応する。

【教科書】大橋秀雄著「流体力学 (1)」コロナ社

【参考書】谷 一郎「流れ学」岩波全書、今井功「流体力学 (前編)」裳華房

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】福富(M519, 656-7367, fukutomi@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「流体力学 1」の履修を前提として講義する。また「ベクトル解析」「複素関数論」の基礎知識を仮定して進めるのでこれらを履修しているか又は履修中であることが望ましい。

労務管理

Personnel Management

非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為にヒトをどのように動かしているかを理解する。

【授業概要】企業経営は、経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で人的資源をいかに活用しているかについて講義する。講義計画に従い労務管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 組織と職務分掌 2. 人事管理(異動, 人事考課) 3. 労働基準法 4. 労使関係 5. 能力開発, 教育訓練 6. 安全衛生 7. 中間及び最終レポート(労務管理のまとめ)

【成績評価】講義への取り組み状況、レポートの内容

【学習教育目標との関連】(H) に対応する

【教科書】その都度、提供する。

【参考書】島田信義「新労働基準法」学習の友社、荻原勝「人事・労務実務全書」日本実業出版社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義への取り組み状況 80%(12 回)、レポート(中間と最終)の内容 20%

ロボット工学

Robotics

教授・小西 克信 2 単位

【授業目的】ロボットは産業界だけでなく、生活の中に広く浸透しようとしているが、このようなロボットを作り動かすための基礎知識の習得を目的とする。このため、ロボットの構成部品、機構、運動、制御、応用例等に関する講義を行う。

【授業概要】実用化されているロボットは、本体が土台の上に固定され、関節で接続されたリンクによりハンドが空間中を自由に動く機構が多

機械工学科（昼間コース）

い。この産業用ロボットを中心に、関節を動かすアクチュエータの原理、人間の五感に相当するセンサの種類と用途、ロボットの機構と簡単な設計例、位置と姿勢の計算法や運動方程式の導出、ロボットに特有の制御法、そして最後にロボットの応用技術について講義する。

【履修上の注意】「材料力学1」、「機械力学」、「機械設計」、「自動制御理論1」、「電子回路」を履修していることが望ましい。

【到達目標】

1. リンク座標の設定と運動方程式導出法の理解
2. アクチュエータとセンサの動作原理の理解
3. 代表的な機構と制御法の理解

【授業計画】1. ロボットの運動学 2. ロボットの運動学 3. ロボットの力学 4. ロボットの力学 5. 中間試験 6. ロボット用アクチュエータ 7. ロボット用アクチュエータ 8. ロボット用センサ 9. ロボット用センサ 10. 中間試験 11. ロボットの機構と設計 12. ロボットの機構と設計 13. ロボットの制御 14. ロボットの制御 15. ロボット応用技術 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解度の評価は、3回の試験と授業への取組み状況などを総合して行う。

【学習教育目標との関連】(B)に対応する。

【教科書】則次ほか共著「ロボット工学」(朝倉書店)と適宜配布するプリントを併用する。

【参考書】中野栄二著「ロボット工学入門」オーム社、J.J. クライグ著三浦宏文・下山勲訳「ロボティクス・機構・力学・制御」共立出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】小西(M423, 656-7383, konishi@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】宿題として毎週演習問題数問をレポートによって解答させる。知識の整理の意味で4週の講義に対して試験1回を行う。

コミュニケーション

Communication 非常勤講師・井原 康雄, 村澤 普恵 2単位

【授業目的】社会人としてあらゆる場面で通用する高度で幅広いコミュニケーション能力を会得すること。

【授業概要】この講義では、社会における様々な場面(事例)を想定し、それぞれについて準備(資料の収集,まとめ)-原稿の作成-評価-発表(プレゼンテーション)-評価のプロセスを各自が実践することにより、多様なコミュニケーションの形態を学び、実社会で通用する高度で幅広いcommunication skillを身に付ける。また、講義全体を通じて、一方的に講義を受けるだけでなく、学生が相互に評価することにより、他人の成果を評価・分析する能力を身に付け、それによって、さらにcommunication skillを向上させる。

【受講要件】与えられたテーマについて多岐にわたる資料(情報)を収集しておくこと。

【履修上の注意】演習に重点をおいているので、受身でなく、積極的に授業に参加すること。

【到達目標】

1. 自分の考えを簡潔で、分かりやすい文書で表現できる。
2. 平易で的確な言葉を使って、公の場で発表できる。

【授業計画】1. コミュニケーション/communication論 2. ビジネス文書 3. 自己紹介(資料の準備) 4. 自己紹介(発表と評価),取材の準備について説明 5. 記事の要約(資料の準備と評価) 6. 記事の要約(発表と評価) 7. 会社紹介(資料の準備) 8. 会社紹介(発表と評価) 9. ディベート(グループ分け,テーマの選定,資料の収集) 10. ディベート(資料の整理,ストーリー・作戦の構築) 11. ディベート(実施と評価) 12. ディベート(実施と評価) 13. 取材(まとめ,発表の準備) 14. 取材(発表,評価) 15. 全体のまとめと総合評価

【成績評価】授業への取組状況や作成文書および発表の内容などをもとに総合的に評価する

【学習教育目標との関連】(E)に対応する。

【教科書】教材はその都度提供する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】井原康雄TEL&FAX:0884-22-0502E-mail:yihara@our-think.or.jp
村澤普恵TEL:088-686-3099FAX:088-686-9623E-mail:fumie55@mb.nfoeddy.ne.jp

機械工学科（夜間主コース）夜間主進級規定・履修登録・受講に関する規定

I. 進級規定

上級学年へ進級するには、次の科目・単位数を修得していることが必要である。

- 1) 2年次への進級には、全学共通教育・専門教育をあわせて、30単位以上
- 2) 3年次への進級には、全学共通教育・専門教育をあわせて、60単位以上
- 3) 4年次への進級には、全学共通教育・専門教育をあわせて次の90単位以上
 - a) 全学共通教育においては、卒業要件36単位のうち34単位以上
 - b) 専門教育においては、次の演習・実習科目（7科目）すべてを含む56単位以上
基礎機械製図・創造演習・C言語演習・生産シミュレーション・機械設計製図・機械工学実験・メカトロニクス実習
- 4) 補足
 - a) 留年した学生が進級規定を満足した場合、飛び学年を認める。
 - b) 卒業の要件（単位数）は次の124単位以上である。
全学共通教育 36単位以上、専門教育 88単位以上（必修35単位、選択53単位以上）

II. 履修上限単位数規定

学期始めの履修登録には、次の年間上限単位数（前期と後期の合計）以下であること。

- 1) 1年次は45単位、2年次から4年次までは各学年とも40単位。
- 2) 前年度までのGPAの値が3.0以上の者は、制限なし。
なお、この履修制限の範囲内において上級学年の履修を認める。

III. 早期卒業規定

3年次末までの学業が優秀であり、早期の卒業を望む者に課す要件を次に示す。

- 1) 成績が優秀であること（3年次末までのGPAの値が4.0以上）。
- 2) 卒業要件を満たしていること。

IV. 付則

- 1) 専門教育科目における未完成単位（いわゆる部分単位）は計算に入れない。
- 2) 各規定を満たすかどうかの判定は、学科会議で行う。
- 3) 病気その他による特別な認定は、学科会議で決定する。
- 4) 本規定は、平成13年度の入学生に適用する。

V. 付録 [定期試験・追試験・再試験]

- 1) 定期試験は受講申請の学期に実施され、その他の評価項目と合わせて評価の対象とされる。
- 2) 追試験は、定期試験に代わるものとして、可能であれば受講申請の学期内で実施する。
担当教官の指導により、再試験と同時期に実施されることもある。
- 3) 再試験は、出席日数が多い者で担当教官が承認した場合に限り次学期に実施されることがある。

機械工学科（夜間主コース）

機械工学科（夜間主コース）教育分野別カリキュラム表

科目群	1年		2年		3年		4年		
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
全学共通教育科目	教養科目	人文科学分野・社会科学分野・自然科学分野・情報科学分野・総合分野・学部開放分野							
	外国語科目	英語(1)	英語(1)	英語(1)	英語(1)	英語(2)	英語(2)		
	健康スポーツ科目	健康スポーツ実習・健康スポーツ演習							
	基礎教育科目	*基礎数学c *基礎数学f	*基礎数学d						
専門教育科目	工業数学			*微分方程式1 ベクトル解析	微分方程式2				
	工業物理学				*解析力学				
	機械工学基礎	*材料力学1	*機械材料学 *生産加工	*流体力学 *電子回路	*生産シミュレーション	*工業熱力学 *機械力学	*自動制御理論 *機械設計		
	材料・材料力学分野	材料科学	材料力学2				弾性力学 機能性材料 破壊制御論	高エネルギービーム工学	
	エネルギー分野					流体機械	内燃機関	伝熱工学 蒸気プラント工学	
	設計・制御分野			メカトロニクス工学	機構設計	計算機構		制御工学 設計工学 画像処理	ロボット工学
	計測・加工分野					生産システム	精密計測学		超精密加工 知識ベースシステム
	演習・実験・実習	*基礎機械製図	*C言語演習 機械数理演習1 *創造演習	CAD演習 機械数理演習2	*メカトロニクス実習	*機械工学実験	*機械設計製図	課題研究	
工学教養・機械工学応用	情報リテラシー (全学共通・情報科学)						技術者の倫理 工業英語	自動車工学 機械工学特別講義1 機械工学特別講義2 生産管理 労務管理 確率統計工学 機械工学セミナー	

*は専門必修科目を示す

機械工学科(夜間主コース)

機械工学科(夜間主コース)カリキュラム編成表

		学 年															
		1年		2年				3年				4年					
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
科 目	目	[G1 全学共通]										[G2工学教養・専門教養]					
		人文科学分野	人文科学分野	人文科学分野	人文科学分野	人文科学分野	人文科学分野	人文科学分野	人文科学分野	人文科学分野	人文科学分野	技術者の倫理	生産管理				
		社会科学分野	社会科学分野	社会科学分野	社会科学分野	社会科学分野	社会科学分野	社会科学分野	社会科学分野	社会科学分野	社会科学分野	工業英語	労務管理				
		自然科学分野	自然科学分野	自然科学分野	自然科学分野	自然科学分野	自然科学分野	自然科学分野	自然科学分野	自然科学分野	自然科学分野	職業指導					
		情報科学分野	情報科学分野	情報科学分野	情報科学分野	情報科学分野	情報科学分野	情報科学分野	情報科学分野	情報科学分野	情報科学分野						
		総合分野	総合分野	総合分野	総合分野	総合分野	総合分野	総合分野	総合分野	総合分野	総合分野						
		学部開放分野	学部開放分野	学部開放分野	学部開放分野	学部開放分野	学部開放分野	学部開放分野	学部開放分野	学部開放分野	学部開放分野						
		英語(1)	英語(1)	英語(1)	英語(1)	英語(1)	英語(1)	英語(2)	英語(2)	英語(2)	英語(2)						
		健康スポーツ実習・演習		[R1 工学基礎]										[R3専門応用]			
		情報リテラシー (情報科学)				微分方程式1	微分方程式2	工業熱力学	機械設計					自動車工学			
				ベクトル解析	解析力学	機械力学	自動制御理論					機能性材料	機械工学特別講義1				
				流体力学	生産シミュレーション	流体機械	弾性力学					破壊制御論	機械工学特別講義2				
基礎数学c		基礎数学d		電子回路	機構設計			内燃機関			設計工学		高エネルギービーム工学				
基礎物理学f		材料力学2		マイクロ工学			精密計測学					制御工学	蒸気プラント工学				
		生産加工		機械数理演習2							伝熱工学		ロボット工学				
材料力学1		機械材料学										画像処理	超精密加工				
材料科学		機械数理演習1						計算機構			[R2 専門基礎]		知識ベースシステム				
[B1 工学実験・演習]										[B3 卒業研究]							
C言語演習										課題研究							
機械工学実験										課題研究 機械工学セミナー							
[B2 創成科目]																	
基礎機械製図		創造演習		CAD演習		マイクロ実習		機械設計製図									
G1	11											G1	0				
G1	3	G1	2	G1	1	G1	1	G1	1	G1	1	G1	0	G1	0		
G2	0	G2	0	G2	0	G2	0	G2	0	G2	0	G2	3	G2	2		
R1	4	R1	5	R1	6	R1	4	R1	3	R1	2	R1	0	R1	0		
R2	0	R2	0	R2	0	R2	0	R2	2	R2	3	R2	6	R2	0		
R3	0	R3	0	R3	0	R3	0	R3	0	R3	0	R3	0	R3	8		
B1	0	B1	1	B1	0	B1	0	B1	1	B1	0	B1	0	B1	0		
B2	1	B2	1	B2	1	B2	1	B2	0	B2	1	B2	0	B2	0		
B3	0	B3	0	B3	0	B3	0	B3	0	B3	0	B3	1	B3	2		

科目数

機械工学科（夜間主コース）

全学共通教育科目

授業科目（分野）		単位数		
		必修	選択必修	選択
教養科目	人文科学分野		4	10
	社会科学分野		4	
	自然科学分野		4	
	情報科学分野			
	総合分野			
学部開放分野				
外国語科目		6		
健康スポーツ科目		2		
基礎教育科目		6		
全学共通教育科目小計		14	12	10

履修にあたっての注意事項

*左の単位数は、卒業に必要な36単位を示しています。

- 1) 教養科目の選択必修として、人文科学、社会科学、自然科学の各分野からそれぞれ4単位、計12単位の取得が必要です。
- 2) 外国語科目は、英語6単位が必修です。
- 3) 健康スポーツ科目は、1年次に開講される2単位が必修です。
- 4) 基礎教育科目は、1年次に開講される基礎数学2科目（微分積分学I,II）、および基礎物理学fの3科目、計6単位が必修です。
- 5) 教養科目の選択10単位は、選択必修として修得した12単位を超える教養科目の超過単位のことです。なお、6単位を超える外国語科目の超過単位も教養科目の選択単位になります。
- 6) 上級学年へ進級するには、「進級規定」を満たす必要があります。
- 7) 開講時期、授業時間数、担当者等の詳細は、全学共通教育履修の手引きおよび全学共通教育時間割を参照すること。

専門教育科目

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数(1週当たり)								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
微分方程式1	2					2						2	長町・坂口		125
微分方程式2			2				2					2	今井・坂口		125
ベクトル解析			2			2						2	深貝		125
解析力学	2						2					2	道廣		113
材料科学			2	2								2	西野		119
機械材料学	2					2						2	岡田(達)		115
機能性材料			2								2	2	吉田		117
高エネルギービーム工学			2								2	2	村上		118
材料力学1	2			2								2	高木		119
材料力学2			2		2							2	吉田		120
弾性力学			2							2		2	山田		123
破壊制御論			2								2	2	村上		124
流体力学	2					2						2	石原		126
流体機械			2					2				2	福富		126
工業熱力学	2							2				2	森岡		119
蒸気プラント工学			2								2	2	清田		121
伝熱工学			2							2		2	逢坂		124
内燃機関			2						2			2	三輪		124
機構設計			2				2					2	芳村		116
機械力学	2							2				2	日野		116
自動制御理論	2								2			2	今枝		120
制御工学			2								2	2	橋本		121
電子回路	2					2						2	大石		124
メカトロニクス工学			2			2						2	岩田		125
メカトロニクス実習	(2)						(4)					(4)	小西・大石		125
ロボット工学			2								2	2	小西		126
生産加工	2				2							2	海江田		121
生産システム			2					2				2	海江田		122
超精密加工			2								2	2	多田		123
生産シミュレーション	2(1)						4					4	升田・大山		122
精密計測学			2						2			2	英		122
機械設計	2								2			2	岡田(健)		116
設計工学			2							2		2	岡田(健)		122

機械工学科（夜間主コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								担当者	備考	頁		
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計	
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
基礎機械製図	(2)			(4)								(4)	長町		117	
創造演習	(1)				(2)							(2)	草野・日下		123	
機械設計製図	(2)								(4)			(4)	石原		116	
C言語演習	(1)				(2)							(2)	一宮		120	
CAD演習			(1)			(2)						(2)	米倉		117	
計算機構			2					2				2	浮田		118	
画像処理			2(1)								4	4	山田・浮田		114	
知識ベースシステム			2								2	2	伊藤		123	
機械工学実験	(2)							(4)				(4)	機械工学科教官		114	
課題研究			(3)								(4)	(5)	(9)	機械工学科教官		114
確率統計工学			2								2	2	藤村		113	
生産管理			1								1	1	井原		121	
労務管理			1								1	1	井原		126	
工業英語			2								2	2	ウィリアム		118	
自動車工学			2								2	2	島田		120	
機械工学セミナー			2								2	2	西野		114	
機械工学特別講義1			2								2	2	三木田		115	
機械工学特別講義2			2								2	2	井原・村澤		115	
機械数理演習1			(1)		(2)							(2)	機械工学科教官		115	
機械数理演習2			(1)			(2)						(2)	木戸口		116	
技術者の倫理			2								2	2	村上		117	
工業基礎数学I			(1)	(2)								(2)	吉川		118	
工業基礎英語I			(1)	(2)								(2)	広田		118	
工業基礎物理I			(1)	(2)								(2)	佐近		119	
職業指導			4								4	4	坂野		121	
専門教育科目小計	24 (11) 35		66 (10) 76	4 (10) 14	6 (6) 12	10 (4) 14	10 (4) 14	10 (4) 14	10 (4) 14	20 (4) 24	24 (5) 29	94 (41) 135	講義 演習・実習 計			

備考

1. 機械工学科昼間コース教育課程表において、専門教育科目のうち * 印を付けた授業科目は最大14単位まで、卒業に必要な選択単位数に含めることができる。
2. 他学科の授業科目うち、6単位まで卒業に必要な選択単位数に含めることができる。
3. 放送大学の履修科目は、専門科目のうち「産業と技術」および「自然の理解」の分野で開講される科目について、4単位まで卒業に必要な選択科目の単位に含めることができる。
4. * 印を付けた授業科目は、卒業に必要な選択科目には含まれない。

卒業に必要な単位数

	必修科目	選択必修科目	選択単位	計
全学共通教育科目	14単位	12単位以上	10単位以上	36単位以上
専門教育科目	35単位	0単位	53単位以上	88単位以上
卒業に必要な単位数	49単位	12単位以上	63単位以上	124単位以上

機械工学科（夜間主コース）講義概要

目次

解析力学	113
確率統計工学	113
画像処理	114
課題研究	114
機械工学実験	114
機械工学セミナー	114
機械工学特別講義 1	115
機械工学特別講義 2	115
機械材料学	115
機械数理演習 1	115
機械数理演習 2	116
機械設計	116
機械設計製図	116
機械力学	116
機構設計	116
技術者の倫理	117
基礎機械製図	117
機能性材料	117
CAD 演習	117
計算機構	118
高エネルギービーム工学	118
工業英語	118
工業基礎英語 I	118
工業基礎数学 I	118
工業基礎物理 I	119
工業熱力学	119
材料科学	119
材料力学 1	119
材料力学 2	120
C 言語演習	120
自動車工学	120
自動制御理論	120
蒸気プラント工学	121
職業指導	121
制御工学	121
生産加工	121
生産管理	121
生産システム	122
生産シミュレーション	122
精密計測学	122
設計工学	122
創造演習	123
弾性力学	123
知識ベースシステム	123
超精密加工	123
電子回路	124
伝熱工学	124
内燃機関	124
破壊制御論	124
微分方程式 1	125
微分方程式 2	125
ベクトル解析	125
メカトロニクス工学	125
メカトロニクス実習	125
流体機械	126
流体力学	126
労務管理	126
ロボット工学	126

解析力学

Mechanics 助教授・道廣 嘉隆 2 単位

【授業目的】解析力学は構造力学などの力学系専門科目の基礎となるものである。基礎物理学で履修した質点のニュートン力学につなげて、質点系および剛体の力学，ならびに解析力学の初歩を講義する。

【授業概要】運動法則より，質点系の時間変化を記述する法則，すなわち運動量の時間変化ならびに角運動量の時間変化の法則を導く。次に，剛体の運動がこれらの法則で記述されることを述べる。ハミルトンの原理に従い，ラグランジュ関数とラグランジュの運動方程式を導き，これがニュートンの運動方程式と同様の意味をもつものであることを述べる。ラグランジュ関数およびラグランジュの運動方程式の習熟を目標とする。

【受講要件】基礎物理学の力学を履修しているものとする。

【履修上の注意】微分積分の基礎知識を習得していることが望ましい。

【到達目標】

1. 質点系の力学を理解する。
2. 剛体の力学を理解する。
3. 解析力学の基礎を理解する。
4. 解析力学を簡単な系に適用することができる。

【授業計画】1. 質点系の物理量 重心，運動量，角運動量 2. 質点系の力学 (1) 運動量の法則 3. 質点系の力学 (2) 角運動量の法則 4. 質点系の力学 (3) 重心からみた運動 5. 剛体 (1) 剛体のつりあい 6. 剛体 (2) 剛体の慣性モーメント 7. 剛体の運動 (1) 固定軸のまわりの運動 8. 剛体の運動 (2) 剛体の平面運動 9. 解析力学 (1) ハミルトンの原理 10. 解析力学 (2) ラグランジュ関数とラグランジュの運動方程式 11. 解析力学 (3) 一般化された座標とラグランジュの運動方程式 12. 例題 (1) 13. 例題 (2) 14. 例題 (3) 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】期末試験の成績と授業への取り組み状況を総合して行う。

【教科書】近藤 淳著 力学 裳華房

【参考書】原島 鮮著 力学 裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】道廣(A203)

【備考】目標 4 は発展的内容である。

確率統計工学

Statistics for Engineering 非常勤講師・藤村 哲也 2 単位

【授業目的】実験結果やその信頼性がどのように表現されているか，またどのように評価できるかを具体例で講義し，演習・レポートを実施して，データ解析に必要な確率統計工学の基礎知識を習得させる。

【授業概要】実験で求める「真の値」とは何か，平均値・標準偏差など統計的に計算される諸量と具体的な測定結果の関係，実験精度の評価の仕方，精度を上げるための誤差の減らし方など，実験データを解析する際，日常的に必要な基本的内容を具体例で講義する。

【受講要件】「機械工学実験」の履修を前提とし，「精密計測学」および「C 言語演習」も履修しておくことが望ましい。

【履修上の注意】実践的な講義内容にしたいので，実用を目指した受講態度が必要である。

【到達目標】

1. 測定の目的や必要性を交え，測定値，誤差および背後にある現象について理解する。
2. 測定値を観察し，記述統計の基礎を理解する。
3. 事例を中心に，推測統計の基礎を理解する。

【授業計画】1. 簡単な実験例とその整理・レポート 2. データ解析の実状 3. 測定と誤差 4. 母集団と確率分布・レポート 5. 真の値の最良推定・レポート 6. 精度の最良推定・レポート 7. 真の値と精度 8. 平均値の精度 (標準誤差)・レポート 9. 標準偏差の精度・レポート 10. 測定値の組合せ・レポート 11. 最小二乗法の前提と原理 12. 線形モデルでの最適パラメータの決定・レポート 13. 相関・レポート 14. 誤差の基礎理論 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】演習やレポートが多い実践的な授業を行うので，試験 50%，平常点 50%とし，目標の 3 項目それぞれについて 60%以上を合格とする。なお，平常点は，受講姿勢，演習の回答，レポートなどを総合的に評価する。

【教科書】酒井英行訳・N.C.BARFORD 著「実験精度と誤差測定の確からしさとは何か」丸善株式会社

【参考書】(社)日本機械学会編「計測の不確かさ」(社)日本機械学会

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

機械工学科(夜間主コース)

【連絡先】徳島文理大学工学部(Tel:087-894-5111, E-mail:fujimura@is.bunri-u.ac.jp)

【備考】講義では、多量のデータを扱うため電卓が必要である。また言語の種類は問わないが、コンピュータのプログラムを作成できることが望ましい。

画像処理

Image Processing

教授・山田 勝稔, 講師・浮田 浩行 3 単位

【授業目的】機械工学の分野においても研究開発から生産工程に至るまで広く普及してきた画像処理について、基本的な処理アルゴリズムを理解するとともに、実際にパーソナルコンピュータを用いて画像処理の演習を行い、目的に応じた処理方法を構成できるようにすることを目的とする。

【授業概要】毎回の講義時間において、前半は画像処理の手法についての講義を行い、後半はパーソナルコンピュータを用いて、その回の講義内容に応じた演習を行い、理解を深める。また、学期の中間および期末時には、それまでの講義のまとめとしてレポート課題を実施する。

【受講要件】「情報リテラシー」/「C言語演習」を履修し、コンピュータの基本的な操作方法を修得していることを前提にして講義を行う。

【履修上の注意】各回、講義と演習の両方を行う。

【到達目標】

1. コンピュータでの画像データの取扱い方を理解する。
2. 基本的な画像処理の手法を理解する。
3. 各種手法を組み合わせることで目的の処理を達成する技術を修得する。

【授業計画】1. 画像処理概要 2. 標準化・量子化 3. 2 値化 4. 輪郭抽出 5. 雑音除去 6. 画質改善 7. 特徴抽出 8. 第 1 回レポート課題 9. カラー画像処理 10. 幾何学的変換 11. 周波数処理 12. データ圧縮 13. 画像処理システム 14. 画像処理応用例の紹介 15. 第 2 回レポート課題 16. 予備日

【成績評価】授業への取り組み状況、演習時に行う問題の提出状況および解答内容を平常点とし、また 2 回行うレポート課題を試験に相当する成績とする。この平常点と試験の比率を 5:5 として総合的な成績評価を行う。

【教科書】八木伸行他著「C 言語で学ぶ実践画像処理」オーム社

【参考書】田村秀行著「コンピュータ画像処理入門」、長谷川純一他著「画像処理の基本技法」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】山田(M621, 656-7364, yamada@me.tokushima-u.ac.jp), 浮田(M424, 656-9448, ukida@me.tokushima-u.ac.jp)

課題研究

Independent Study

機械工学科教官 3 単位

【授業目的】与えられた課題テーマの研究を通して、何が問題であるかを見極め、それを解決する方法を考え、その方法に従って実験し、その結果を分析し、それらを小論文にまとめ上げて発表する能力を習得させ、よって自ら考え実行する能力を養う。

【授業概要】自分の興味ある研究テーマを選ぶと、その指導教官の研究室に配属され、昼間の時間帯で半年間、教官の指導のもとで研究を行う。指導教官及び配属先の研究室の卒業生や大学院生と共同して、与えられた研究テーマの理解、必要な基礎知識の整理、論文購読、実験計画の立案・実行、得られた結果の検討等を行い、最後にそれを小論文にまとめる。

【受講要件】別に定める「機械工学科夜間主コース卒業見込み証明書発行資格規定」に掲げる単位数以上の単位を修得していること。

【履修上の注意】昼間に時間の取れること。

【到達目標】

1. 論理的思考能力
2. 課題探求能力
3. 課題解決能力
4. 計画力
5. プレゼンテーション能力
6. コアリレーション能力
7. 文章作成技法の力
8. 英語力
9. 雑誌会等研究室での企画と統率力
10. 研究室における研究分野の基礎と応用

【授業計画】1. 指導教官と相談して、自ら研究計画を立て、それに従って研究を行うことを基本とする。

【成績評価】課題研究を実行する研究室において、指導教官との研究討論、中間報告、論文購読など、さらに後期末に行われる課題研究発表会におけるプレゼンテーションとそれに対する質疑応答を総合判断して評価する。

【教科書】研究内容に応じて自分で探す。

【参考書】研究内容に応じて、自分で探すかあるいは指導教官の指示が得られる。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】教務委員

【備考】課題研究のテーマについては、4 年前期の開示時に提示する。教官 1 名が担当する課題研究者は 1 名であるので、複数の学生が同一テーマを希望した場合は、学生間で相談すること。機械工学科の教官の研究テーマとその内容はシラバスの別冊にある教官紹介の項に掲載してあるので参考にすること。

機械工学実験

Mechanical Engineering Laboratory

機械工学科教官 2 単位

【授業目的】機械工学各分野に関連したテーマについて基礎的な実験を行うことにより、現象を理解するとともに、現象に対する法則性を見出す科学的、分析的な態度を養う。

【授業概要】数人の班に分かれて、下記授業計画に記載されているテーマに応じた実験を行う。実験終了後は、結果をレポートにまとめ、発表・提出する。

【受講要件】これまでに学習した機械工学科目を十分に復習しておくこと。

【履修上の注意】開始日に、実験題目と日程についての説明および安全教育を行うので必ず出席すること。実験時は機械類を扱うので指導員の注意を十分に守ること。

【到達目標】

1. 様々な実験を通して、機械工学に関係する原理・法則や物理的現象を体験し、各講義で修得した知識の理解を深める。
2. 実験結果を分析し、考察する能力を修得する。
3. 機械工学に関係する機器や計測装置の使用方法を修得する。
4. レポートの作成能力やプレゼンテーション能力を修得する。

【授業計画】1. 燃料の発熱量の測定 2. ダイヤルゲージの誤差解析 3. 原子間力顕微鏡による表面観察 4. ポリユートポンプの性能試験 5. 冷凍機の性能試験 6. PID 制御実験 7. シャルビー衝撃試験

【成績評価】テーマ毎に実験を行い、各指導教官に実験報告書を提出して試問を受ける。受講姿勢および実習の態度(60%)と報告書(40%)から評価する。全テーマ受講が必須。

【教科書】最初の時間に「機械工学実験指導書」を配布する。

【参考書】特になし

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】当該年度の機械工学実験世話係、それぞれの実験の担当教官

機械工学セミナー

Seminar on Mechanical Engineering

助教授・西野 秀郎 2 単位

【授業目的】各種機械技術に関する開発の歴史について正しく認識することを通して、今後の新しい物作りのあるべき姿について理解を深めることを目的とする。併せてプレゼンテーション能力、資料作成能力のレベルアップを目指す。

【授業概要】いろいろな機械技術の歴史を学生が自ら調査して報告しその成果をまとめる。自分の設定した技術について、図書館の書籍またはインターネットなどで調べ、その技術が、いつ、誰によって、どのような目的で、どのような経過で開発されたか、すなわち、その技術のルーツを探り、またそれが改良・発展してきた過程を調査する。この調査を通してものづくりの考え方や創造の方法を学ぶ。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】講義時間以外の空いた時間も利用して調査を行う。

【到達目標】

1. 機械技術の歴史を正しく理解する。
2. 報告書の書き方、報告の仕方をマスターする。

【授業計画】1. 授業の概要説明 2. 調査方法の説明とインターネットによる実習 3. 報告書の作成方法の説明 4. プレゼンテーション手法の説明 5. 調査課題の選択 6. 調査 7. 調査 8. 調査 9. 中間調査報告会 10. 調査 11. 調査 12. 調査 13. 最終調査報告会

【成績評価】受講姿勢 50%, 報告書 25%, プレゼンテーション 25%の割合で評価する。

【教科書】第 1 回目の授業で指示する。

機械工学科（夜間主コース）

【参考書】適宜配布する。
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】西野(M618, 656-7357, nishino@me.tokushima-u.ac.jp)
【備考】自分の興味がある機械技術テーマに関するルーツを自主的に調査する課題です。調査報告書とプレゼンテーションの両方を評価します。

機械工学特別講義 1

Topics on Mechanical Science 1

非常勤講師・三木田 嘉男 2 単位

【授業目的】これまでの基礎工学的な講義を総括するような側面を持った講義により、技術者として活躍できることを念頭に置いた講義である。
【授業概要】鉄鋼材料は私たちの身の回りに多く使用され、有用で、生活に不可欠の素材である。講師はこの方面の専門家であり、金属材料の試験法や鋼の熱処理技術、地球環境と材料との関わりなどについて分かり易く説明する。
【受講要件】材料科学、機械材料学、生産加工などを修得しておくこと。
【履修上の注意】予習、復習をしておくこと。工業材料に関する新聞や雑誌の記事に目を通しておくこと。
【到達目標】

1. 材料試験を中心に、金属材料の評価法が分かる
2. 金属材料の種類とその用途が分かる
3. 鉄鋼材料の種類と用途、熱処理の方法が分かる

【授業計画】1. (材料試験) 引張試験、圧縮、曲げ試験 2. (材料試験) 衝撃、破壊靱性試験、硬さ試験 3. (材料試験) 疲労試験、クリ-ブ試験、摩耗試験 4. (材料試験) 非破壊検査 5. (鋼の基礎) 鉄と人間の係わり、鉄と鋼について 6. (鋼の熱処理) 熱処理技術の基礎 7. (鋼の熱処理) 一般熱処理 8. (鋼の熱処理) 材料別の熱処理 9. (鋼の熱処理) 熱処理のトラブルと対策 10. (金属材料の化学組成と強さ) 炭素鋼および低合金鋼 11. (金属材料の化学組成と強さ) ステンレス鋼および耐熱鋼、超合金 12. (金属材料の化学組成と強さ) 軸受鋼および工具鋼、バネ鋼 13. (金属材料の化学組成と強さ) 鋳鋼および鋳鉄品 14. (金属材料の化学組成と強さ) 銅合金およびアルミニウム合金 15. (金属材料の化学組成と強さ) 金属系新素材 16. 最終テスト

【成績評価】中間テストと最終テストの平均点等で評価する。

【教科書】三木田嘉男, 金属材料工学, 自費印刷

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】三木田嘉男, Tel.088-626-9331, Fax.088-626-9332E-mail:mikita@nmt.ne.jp

機械工学特別講義 2

Topics on Mechanical Science 2

非常勤講師・井原 康雄
非常勤講師・村澤 普恵 2 単位

【授業目的】社会人としてあらゆる場面で通用する高度で幅広いコミュニケーション能力を会得すること。

【授業概要】この講義では、社会における様々な場面(事例)を想定し、それぞれについて準備(資料の収集、まとめ)-原稿の作成-評価-発表(プレゼンテーション)-評価のプロセスを各自が実践することにより、多様なコミュニケーションの形態を学び、実社会で通用する高度で幅広い communication skill を身に付ける。また、講義全体を通じて、一方的に講義を受けるだけでなく、学生が相互に評価することにより、他人の成果を評価・分析する能力を身に付け、それによって、さらに communication skill を向上させる。

【受講要件】与えられたテーマについて多岐にわたる資料(情報)を収集しておくこと。

【履修上の注意】演習に重点をおいているので、受身でなく、積極的に授業に参加すること。

【到達目標】

1. 自分の考えを簡潔で、分かりやすい文書で表現できる。
2. 平易で的確な言葉を使って、公の場で発表できる。

【授業計画】1. コミュニケーション/communication 論 2. ビジネス文書 3. 自己紹介(資料の準備) 4. 自己紹介(発表と評価)、取材の準備について説明 5. 記事の要約(資料の準備と評価) 6. 記事の要約(発表と評価) 7. 会社紹介(資料の準備) 8. 会社紹介(発表と評価) 9. ディベート(グループ分け、テーマの選定、資料の収集) 10. ディベート(資料の整理、ストーリー・作戦の構築) 11. ディベート(実施と評価) 12. ディベート(実施と評価) 13. 取材(まとめ、発表の準備) 14. 取材(発表、評価) 15. 全体のまとめと総合評価

【成績評価】授業への取組状況や作成文書および発表の内容などを総合的に評価する

【教科書】教材はその都度提供する。

【参考書】講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】井原康雄TEL&FAX:0884-22-0502E-mail:yihara@our-think.or.jp
村澤普恵TEL:088-686-3099FAX:088-686-9623E-mail:fumie55@mb.infoeddy.ne.jp

機械材料学

Engineering Materials

助教授・岡田 達也 2 単位

【授業目的】機械部品を構成する材料の基本的性質を、金属材料に重点を置いて講義する。術語の丸暗記ではなく、合金の平衡状態図の読み取りや、熱処理に伴う合金の微細組織の変化について理解させることを重視する。

【授業概要】相や固溶体などの基本的な概念について解説した後、合金の平衡状態図の読み取りについて具体例を多く用いて理解させる。材料各論では熱処理を利用した鉄鋼材料の微細組織制御とその応用に重点を置いて解説する。

【受講要件】前期に開講される材料科学や材料力学の講義を通して、材料の結晶構造や強度に関する基本的な概念を理解していること。

【履修上の注意】1 週間に一回の割合で簡単な演習問題を行う。読みとり問題や計算問題に備えて、目盛りのついた三角定規と関数電卓を忘れずに持参すること。

【到達目標】

1. 二元合金平衡状態図の読み取りができること。特に相の成分・割合が求められること。
2. 鉄鋼材料の焼き入れ・焼き戻しに関する基本的な知識を修得すること。
3. 各種金属材料の JIS 記号について説明できること。

【授業計画】1. 機械材料学とは何か 2. 熱分析による状態図作成 3. 状態図の読み取り 4. 凝固の基礎 5. 共晶合金の状態図 6. 炭素鋼の状態図 7. 鋼の焼き入れ・焼き戻し 8. 中間試験 9. 材料の強度と単位の換算 10. 鉄鋼材料の分類 11. 鉄鋼材料の JIS 記号 12. アルミニウム合金 13. 各種非鉄金属材料 14. 金属材料の機械的性質とその評価法 15. 期末試験

【成績評価】受講姿勢を平常点として 10%、中間試験および期末試験の成績をそれぞれ 30%、60%として評価する。授業中に質問に答えた場合は、適宜平常点として追加する。

【教科書】キャリスター著(入戸野監訳)「材料の科学と工学 [1] 材料の微細組織」(培風館)

【参考書】技能ブックス 20「金属材料のマニュアル」(大河出版)、門間著「大学基礎・機械材料」(実教出版)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岡田(M616, 656-7362, t-okada@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】中間試験の再試験は行わない。期末試験の再試験は同一年度内に 1 回のみ行う。

機械数理演習 1

Mathematical Fundamentals of Mechanical Engineering 1

機械工学科教官 1 単位

【授業目的】機械工学の専門科目を受講する前に、最低限修得しておくなければならない基本的な数学および物理の概念を精選し、5 人程度の少人数グループに分けてゼミ形式で教育する。

【授業概要】で挙げた項目について演習を行うが、上記の時間配分や内容は固定的なものではない。例えば高校において物理を履修していない学生のグループでは、物理に重点を置いた内容を学習させることもあり得る。計算テクニックの修得だけでなく、基礎的な概念を把握するように努めさせる。

【授業計画】1. 習熟度チェックテスト 2. (グループ分け作業) 3. 微分法の基礎 1 4. 微分法の基礎 2 5. 積分法の基礎 1 6. 積分法の基礎 2 7. テイラー展開の考え方 8. 統計学の基礎 9. ベクトルの基礎 10. 行列の基礎 11. 方程式の物理的意味 12. 単位と次元 13. 有効数字 14. 電気回路の基礎 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】受講姿勢と毎回の演習での発表状況、期末試験成績を総合的に評価する。

【教科書】各グループ担当の教官が作成するプリント教材により演習を進める。

【備考】演習科目であるので他の実習・実験科目と同様に全回出席者が成績評価の対象となる。欠席しないこと。平常点と期末試験の比率は 5:5 とする。

機械数理演習 2

Mathematical Fundamentals of Mechanical Engineering 2

助教授・木戸口 善行 1 単位

【授業目的】機械工学科に設けられた専門科目の多くは物理現象の理解に基づいており、それらを数学的な解析によって有用な結果を導いている。この講義では、各種の数学的な手法によって実学としての数学を体得させる。また数学的解析によって、物理現象を身近なものとして捉えること、物理現象の類似性について理解を深めること、などを目的としている。

【授業概要】簡単な例題によって各種の数学および物理の本質が理解できるように演習を行う。各課題ごとにレポートの提出、数回の試験がある。

【受講要件】「機械数理演習 1」を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】数回行う小テストの受験は怠らないこと。

【到達目標】機械工学科の専門科目を履修するのに必要な数学、物理の理解を深める。

【授業計画】1. 微分法の応用 1. 関数 2. 微分法の応用 2. 図形解析 3. 積分法の応用 1. 関数 4. 積分法の応用 2. 図形解析 5. 微分方程式 1. 常微分方程式 6. 微分方程式 2. 物理現象への適用 7. データ解析の基礎 1. データの整理法 8. データ解析の基礎 2. 回帰分析 9. 質点の力学 10. 運動の法則 11. 中心力 12. 慣性 13. 電磁気 14. 予備日 15. 定期試験

【成績評価】授業への取組み状況やレポートの内容および提出状況などの平常点、それらの応用として数回行う試験を総合して評価する。

【教科書】教科書は使用しない。プリント資料を配付する。

【参考書】講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】木戸口(総合研究実験棟502, 656-9633, kidog@eco.tokushima-u.ac.jp)

機械設計

Machine Design

助教授・岡田 健一 2 単位

【授業目的】機械設計の思考過程から始め機械要素の個々の機能に関する講義を行ない機械を設計する際に必要となる事から基礎知識を修得させる。

【授業概要】機械は機械要素を有機的に組合わせて所期の目的に合うように作ったものであるという考えから、個々の要素の選択とそれを組合わせる思考過程の重要性を考えて設計におけるプロセスおよび要素の機能に関する講義を行なう。また機械材料の強度設計を基本にした機械材料の強度、剛性に関する項目もとり入れる。

【到達目標】

1. 1. 機械設計のプロセスを理解する
2. 2. 強さ設計の考え方を理解する
3. 3. 機械要素の知識を身につける
4. 4. 機械材料および加工法の基礎知識をもつ

【授業計画】1. 機械設計とは 2. 設計のプロセスの内容 3. 機械における基本機能 4. 機構の構造化 5. 機能と形状 6. 形状と制約条件 7. 機械材料の強度 8. 機械材料の剛性 9. 寸法の知識 10. はめあい、表面粗さ 11. 設計と加工 12. 加工法 13. 機械要素 1 14. 機械要素 2 15. 機械要素 3 16. 定期試験

【成績評価】講義への取組み状況、レポートおよび最終試験の成績を総合して行なう。

【教科書】畑村洋太郎編「続・実際の設計」日刊工業新聞社

【参考書】日本機械学会編「機械工学便覧」(日本機械学会)、機械設計シリーズ(オーム社)、JIS ハンドブック(日本規格協会)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岡田健一(M123, 656-7395, okada@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】機械の授業が解析を主としているのに対し機械設計の授業は総合をはかろうとする。そこで、材料、材料力学、振動、機械加工等の基礎知識が求められる。平常点と試験の比率はほぼ 5:5 とする。

機械設計製図

Design of Machine Elements and Drawing

教授・石原 国彦 2 単位

【授業目的】機械設計製図では、対象とする機械装置が効率良く、長時間にわたって高い信頼性を維持しながら所定の機能を発揮出来るような機械を設計する。その設計内容を製作図面として完結させる。

【授業概要】題材として小型風力発電装置の設計を行う。まず講義で、風車の概要、プロペラの設計方法等を教え、各自に出力の違った風車を設計計算させ、風車の組立図を完成させる。

【受講要件】流体力学の基礎を理解していること。

【履修上の注意】設計計算をするので、電卓を持参のこと。

【到達目標】

1. 与えられた設計条件に対応する設計計算ができる。
2. 具体的な設計図が作成できる。
3. 製作図が作成できる。

【授業計画】1. 風車の概要 2. 風車の出力 3. プロペラ 4. 高速回転防止装置 5. 歯車 6. 部品図 7. 部分組立図

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、受講姿勢、計算書、組立図の成績を総合して行う。

【教科書】プリント

【参考書】牛山泉・三野正博共著「小型風車ハンドブック」パワー社、大橋秀雄著「流体力学(1)」コロナ社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】石原(M518, 656-7366, isihara@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】流体力学、流体機械の基礎知識を前提として講義する。

機械力学

Applied Dynamics of Machine

助教授・日野 順市 2 単位

【授業目的】機械振動の基礎である 1 自由度系から 2 自由度系の振動の解析を中心に理解をし、現実に利用されているコンピュータを用いた振動解析法についての基礎知識を修得させる。

【授業概要】振動系の自由振動および強制振動に関する運動方程式の導出方法および解法の基礎について述べる。

【受講要件】解析力学、微分方程式 1、機構設計を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】演習を重視するので、予習・復習を行うこと。

【到達目標】振動工学の基礎知識の理解

【授業計画】1. 機械振動の基礎 振動の周期 2. 機械振動の基礎 調和解析、フーリエ級数 3. 1 自由度系の振動 自由振動 4. 1 自由度系の振動 固有振動数 減衰比 5. 1 自由度系の振動 強制振動 6. 1 自由度系の振動 振動の絶縁 7. 1 自由度系の振動 演習 8. 2 自由度系の振動 自由振動 9. 2 自由度系の振動 強制振動 10. 2 自由度系の振動 粘性動吸振器 11. 2 自由度系の振動 演習 12. 振動の計測 サイズモ系 13. 振動の制御 受動制御 能動制御 14. その他の話題、多自由度系、影響係数、ラグランジュの方程式 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】評価は、定期試験と平常点(演習問題およびレポート)の割合を 6:4 として行う。欠席が規定回数を超えるものは試験を受けることができない。

【教科書】芳村敏夫・横山隆・日野順市著「基礎振動工学」共立出版

【参考書】機械力学の基礎では、芳村敏夫・小西克信著「機械力学の基礎」日新出版、より詳しくは、原文雄著「機械系基礎工学」「機械力学」朝倉書店、振動工学の古典として、チモシェンコ著(谷下市松訳)「工業振動学」東京図書、などその他にも図書館に多数ある。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】日野(M422, 656-7384, hino@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「解析力学」、「微分方程式 1」の履修を前提にして講義を行う。

機構設計

Mechanism

教授・芳村 敏夫 2 単位

【授業目的】機械工学の基礎である機構の運動解析に関する基礎知識を修得させる。また、演習を行うことにより、解析力および基礎知識を修得させる。

【授業概要】機構学に関する基本的な定義および用語から述べ、機械工学の基本的要素であるリンク機構、巻き掛け伝動、ころがり接触伝動、歯車に着目して基礎理論から応用まで説明する。演習は講義に基づいて行う。

【受講要件】全学共通教育科目のうち、基礎数学および基礎物理学を修得しておくことが望ましい

【履修上の注意】演習を重視しているので予習・復習を必ずすること

【到達目標】基本的な機構の運動解析の修得

【授業計画】1. 総論 機構と機構、運動伝達 2. 同対偶、連鎖と機構、演習 3. 同瞬間中心速度と加速度 4. 速度と加速度 速度解法、加速度、演習 5. リンク機構 リンク機構の種類 6. 同四節回転連鎖、演習 7. 同ス

機械工学科（夜間主コース）

ライダクランク連鎖、演習 8. 同 両スライダクランク連鎖 9. 同 その他の機構、演習 10. 巻き掛け伝動 ベルト伝動装置 11. 同 ベルト伝動力、V ベルト車、演習 12. ころがり接触による伝動伝動するための条件 13. 同 ころがり接触する具体例、演習 14. 歯車 歯車の種類、歯形の必要条件演習 15. 同 歯形の用語、標準歯車および基準ラック、インボリュート歯車、サイクロイド歯車、演習 16. 定期試験

【成績評価】演習の結果、授業に対する意欲および本試験により成績を評価する。再試験は行わない。

【教科書】太田博著「機構学」共立出版。

【参考書】参考書については講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】421室, yosimura@me.tokushima-u.ac.jp

【備考】演習による解析力および基礎知識の修得を目的としているので、出席状況と演習の回答状況を重視する。成績評価に対する平常点と試験の比率は 3:7 とする。平常点には講義への出席状況、演習の回答状況を含み、試験には定期試験の成績を含む。

技術者の倫理

Engineering Ethics for Engineers

教授・村上 理一 2 単位

【授業目的】技術者は個人のレベルにおいて技術に関する知識、能力の向上がもめられる。これは産業の高度化や社会の成熟化に伴い、社会が求める技術の高度化と密接に関係する。また、社会そのものは多様化・個性化しており、それに対応できる技術者は技術を使う判断基準としての倫理観に裏打ちされた行動規範を持たねばならない。

【授業概要】工学倫理を必要とする社会の変遷を説明し、自立した技術者となるために必要な自己の確立を促しながら、人権を尊重するために必要な人権問題を講述する。工学的失敗の背景と特徴、それを回避するためのリスクマネジメントなどを具体的な事例を挙げながら説明し、クラス討論や事例研究を通じて技術者の倫理の必要性を考えさせる。また、リスク回避のための社会的規制である PL 法を説明し、事象事例をケーススタディする。

【受講要件】技術者として自立する自覚を持つこと。

【履修上の注意】必要に応じてコンピュータの検索を使って事例研究を行うので、コンピュータの扱いに習熟していること。

【到達目標】

1. 社会の求める工学倫理観の理解。
2. リスクマネジメントの理解。
3. グループ討論の方法の習得

【授業計画】1. 近代社会の特徴 2. 自己の確立と人権問題 3. 工学倫理を考える事例紹介 4. 工学倫理考える事例研究 5. 工学倫理考えるグループ討論・レポート 6. 工学の倫理概念について 7. 安全とリスクについて 8. 技術と失敗 9. 失敗の特徴・レポート 10. 製造物責任法-PL 法について 11. ビジネス倫理について 12. 専門職としての技術者像・グループ討論 13. 専門職としての技術者と倫理 14. 環境と技術者 15. 専門職としての技術者の確立・グループ討論 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の 3 項目が達成されているかをグループ討論の内容・方法、レポートおよび試験を総合して判定する。3 項目平均して 60%以上であれば合格とする。

【教科書】必要に応じてプリントを配布する。

【参考書】講義中に紹介する。

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】村上(M318, 656-7392, murakami@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義への取り組み姿勢は重要な要件であり、遅刻しないことも要求される。

基礎機械製図

Fundamental Machine Drawing

講師・長町 拓夫 2 単位

【授業目的】機械系の学生にとって機械製図の基本は在学中に必ず身につけなければならない事柄である。JIS に基づく機械製図法を十分理解させ、図面を正しく判読する力を養わせるとともに、正確に迅速かつ美しく図面を書く技術を身につけさせる。

【授業概要】機械製図法に関する規格を理解し、実際に役立つ図面を書く技術を習得するために機械要素部品や歯車ポンプなどのスケッチ製図を行う。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】製図用具、関数電卓を持参すること。

【到達目標】

1. JIS に基づく機械製図法を十分理解できる。
2. 図面を正しく判読する力を養うとともに、正確かつ迅速かつ美しく図面を書く技術を身につける。
3. 実際の機械部品を正確に図面化できる能力を身につける。

【授業計画】1. 製図法の解説 2. 線の練習 3. 投影法、図形の表し方、断面図 4. 寸法、寸法公差とはめあい、表面粗さ 5. 機械要素部品のスケッチ 6. 機械要素部品のスケッチ 7. 機械要素部品の製図 8. 機械要素部品の製図 9. 歯車ポンプ(機械加工部品)のスケッチ 10. 歯車ポンプ(機械加工部品)の製図 11. 歯車ポンプ(機械加工部品)の製図 12. 歯車ポンプ(鋳造品)のスケッチ 13. 歯車ポンプ(鋳造品)の製図 14. 歯車ポンプ(鋳造品)の製図 15. 歯車ポンプ(組立図)の製図 16. 歯車ポンプ(組立図)の製図

【成績評価】実習に対する取り組みと製図の内容を総合して評価する。課題図面すべてを期限内に提出しなければ合格にはならない。

【教科書】山本外次著「新機械製図」綜文館

【参考書】大西清著「JIS にもとづく機械設計製図便覧」理工学社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】長町(M526, 656-9187, ngmch@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】受け身ではなく能動的に取り組むこと。原則として試験は行わない。

機能性材料

Functional Materials

教授・吉田 憲一 2 単位

【授業目的】すべての工業材料は設計に使える可能性を持っているものと考え、地球上の資源は有限であることを認識した設計コンセプトを理解させる。「より強く」「より軽く」「より安く」と時代の要請に応じて次々と開発されてきた材料を機能性という観点から事例を挙げてわかりやすく講義し、材料に関する基礎的な認識を向上させる。

【授業概要】工業材料を 4 つに分類し、その利用の変遷、機械的特性および密度の重要性を示し、複合材料の時代に至った経緯を説明し、経済性を加味した新しい設計コンセプトを紹介する。次に、最近注目されている機能性材料について、その機能性に重点を置いて基礎的な観点から言及する。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】毎回材料に関する英語の評論または小テストを行う。

【到達目標】

1. 材料を 4 つに分類し、その性質の違いを理解する。
2. 有限な資源を有効に利用する設計コンセプトをいくつかの例から習得する。
3. 複合材料をはじめとする種々の機能性材料を理解する。

【授業計画】1. 工業材料とその性質 2. 材料設計の基礎 3. 機能性材料の分類 4. 代替材料とリサイクル 5. 材料の価格と入手しやすさ 6. 社会のニーズと新しい設計コンセプト 7. いくつかの設計例 8. 複合材料の基礎 9. 機械的機能性材料 10. 熱的機能性材料 11. 電子・電気的機能性材料 12. 光学的機能性材料 13. 化学的機能性材料 14. 最近の先進材料 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】平常点と最終試験の得点を 4:6 の割合で成績評価する。平常点は、毎回行う小テストの結果およびレポートの提出状況と内容を考慮して決められる。

【教科書】使用しない。

【参考書】堀内良・金子純一・大塚正久共訳「材料工学入門」内田老鶴圃、MOL 編集部編「新素材テクノロジー&アプリケーション」オーム社、北田正弘著「機能材料辞典」共立出版

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】吉田(M619, 656-7358, yoshida@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義の単位を取得するためには、必ず復習と予習をしなければならないことが前提になっているので、レポートの提出期限を厳守する。解けないときには、オフィスアワーを利用して質問することを勧める。平常点と最終試験の得点を 4:6 の割合で考慮して成績評価とする。平常点は、講義への出席状況、毎回行う小テストの結果およびレポートの提出状況と内容を含んでいる。

CAD 演習

computer Graphics and Computer Aided Drawing Exercise

助手・米倉 大介 1 単位

【授業目的】CAD ソフト、JW-CAD の基本的な使用法を理解することによって、独自で 3 面図などの製図を描画できるようになる。

【授業概要】マイクロコンピュータによる 2 次元図形のアルゴリズムと基本的な作図法を概説し、対話型 CAD システムを用いて機械要素部品の製図法を修得する。

機械工学科(夜間主コース)

【受講要件】基礎機械製図の科目を既習していることが望ましい。
【履修上の注意】3面図を理解しておくこと。
【到達目標】JW-CADソフトを用いて機械要素部品の製図法を習得する。
【授業計画】1. CADによる図形の作成 2. 図形要素の作成, 作図精度と能率, 図形編集, シンボル・ライブラリ, 識別ファイルの設計と部品集計 3. 課題製図 4. 簡単な機械要素部品の製図
【成績評価】講義と並行して行う演習問題と課題製図とで成績を評価する。
【教科書】Obra Club 著「絶対使える JW-CAD」建築知識
【参考書】福永・ほか3名著「パソコンによる作図の基礎」培風館
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】米倉(M326, 656-9186, yonekura@me.tokushima-u.ac.jp)
【備考】プログラミング言語および演習の修得を前提とする。

計算機構

Computer Circuit 講師・浮田 浩行 2単位

【授業目的】機械システムの高性能化・知能化に必要なマイコン制御技術に関する基本について講義し, レポート, 小試験, 定期試験を実施することによって, 機械語による機械システム制御に必要な基礎を修得させる。
【授業概要】マイコンによる機械システムの制御を理解させるために論理演算, デジタル回路, 機械語によるプログラム作成, に関する基礎を講述し, 機械システムの知能化の基礎力の養成を図る。
【受講要件】「電子回路」, 「メカトロニクス工学」, 「メカトロニクス実習」を履修していることを前提にして講義を行う。
【到達目標】
1. マイコンにおける演算機構の概要を理解する。
2. 演算を行うための電子回路の基本要素を理解する。
3. 8ビットマイコンの機械語について基本的な内容を理解する。
4. 機械語を用いて簡単なメカトロ制御プログラムを作成する能力を修得する。
【授業計画】1. マイコンの概要 2. マイコンシステム 3. マイコンによる演算機構 4. マイコンによる演算機構・レポート 5. デジタル回路 6. デジタル回路・小テスト 7. マイコンのプログラム言語 8. 機械語による演算の基礎 9. 機械語による演算の基礎・レポート 10. 機械語によるプログラム作成 11. 機械語によるプログラム作成 12. 機械語によるプログラム作成 13. マイコンによる機器制御 14. マイコンによる機器制御 15. 定期試験
【成績評価】授業への取り組み状況およびレポート提出状況とその内容を平常点とし, また, 小テストおよび定期試験を試験の成績とする。平常点と試験の成績の比を4:6として評価する。
【教科書】雨宮好文監修, 末松良一著「制御用マイコン入門(改訂2版)」オーム社
【参考書】大久保陽一著「制御用マイコン」日刊工業新聞社。
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】浮田(M424, 656-9448, ukida@me.tokushima-u.ac.jp)

高エネルギービーム工学

High Energy Beam Engineering 教授・村上 理一, 非常勤講師 2単位

【授業目的】機械の機能を向上させるために高エネルギービームを材料の表面改質に適用することについて説明し, 材料の表面改質に必要な加工技術の基礎知識を修得させる。
【授業概要】材料の表面改質に使われる高エネルギービームの基礎を説明して, 電子ビーム, イオンビーム, レーザービームおよびプラズマが材料表面の機能を向上させる加工技術としての役割を実例を挙げながら, 講述し, 材料表面を原子, 分子レベルから加工する微細加工に果たす高エネルギービームの有用性を理解させるとともに材料の表面改質と微細加工の評価についても講述する。
【受講要件】「機械材料学」, 「材料科学」, 「破壊制御論」を受講していることが望ましい。
【到達目標】
1. 表面改質の加工技術の理解
2. 高エネルギービームの性質の理解
3. 材料表面の機能評価の理解
【授業計画】1. 高エネルギービームの基 2. 高エネルギービームの基礎 3. 高エネルギービームの基礎・レポート 4. 電子ビームの応用 5. 電子ビームの応用 6. 電子ビームの応用 7. イオンビームの応用 8. イオンビームの応用 9. イオンビームの応用 10. イオンビームの応用 11. イ

オンビームの応用 12. レーザービームの応用 13. プラズマの応用 14. プラズマの応用 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】到達目標の3項目について, 授業への取り組み状況, 演習への回答, レポートの提出状況と内容および期末試験の成績を総合して行う。このとき, 期末試験60%, 平常点(受講姿勢, レポート・演習の提出状況と内容)40%として, 到達目標3項目について平均60%以上を合格とする。
【教科書】小冊子「講義ノート・高エネルギービーム工学」を使用する。
【参考書】必要に応じて講義中に指示を与える。必要に応じてプリントを配布する。
【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
【連絡先】村上(M318, 656-7392, murakami@me.tokushima-u.ac.jp), 勝村()
【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は3:7とする。平常点には講義への取り組み状況, 演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含む。

工業英語

Technical communication in English 非常勤講師 2単位

【授業目的】The aim of this course is to provide practice in English conversation with an emphasis on listening, grammar, and reading. This course will focus on preparation for the TOEIC test, and will cover relevant test-taking skills.
【授業概要】Class activities will involve listening, dictation, and the completion of written exercises.
【受講要件】None
【履修上の注意】None
【到達目標】The goal of this course is to prepare the student for the TOEIC test.
【授業計画】1. Course introduction diagnostic test 2. Grammar ReviewI 3. Picture PracticeI 4. Picture PracticeII 5. Question - ResponseI 6. Question - ResponseII 7. Short ConversationsI 8. Short ConversationsII 9. Short TalksI 10. Short TalksII 11. Examination#1 12. Grammar ReviewII 13. ReadingI 14. ReadingII 15. Course Review 16. Examination#2
【成績評価】Scores will be determined by two examinations. Examination#1 will be worth 50 points, and Examination#2 will also be worth 50 points. The students' final score will be determined by adding the points earned on Examination#1 and Examination#2.
【教科書】Longman Preparation Series for the TOEIC Test-Introductory Course (講義第1回目に教室にて販売)
【参考書】None
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】(有)アルフィランゲージテ770-0042徳島県徳島市蔵本町2丁目20-1宮城ビル205号TEL:088-633-6158E-mail:alfielanguage@hotmail.com
【備考】An English-Japanese dictionary is also recommended.

工業基礎英語 I

Industrial Basic English (I) 非常勤講師・広田 知子 1単位

【授業目的】現代社会の国際言語である英語を用いて, 科学技術分野での基礎的な語彙力, 読解力, リスニング力を養うことを目的とする。
【授業概要】科学技術分野で頻出の語彙や表現を増やす。イラスト, 写真などを参考にしながら, 内容理解のための練習問題を通して, 英文を理解する力や, 必要な情報を効率的に掘り出す力を養成する。
【授業計画】1. オリエンテーション 2. HEAT 3. SOUND 4. COMPUTERS 5. (教科書の各章にしたがって進めていくが, 途中で適宜リスニング教材やビデオ教材なども使用する。)
【成績評価】コース最終日に試験を行う。
【教科書】ENJOY SCIENCE:データバンク(1)『やさしい科学』David Crystal/John Foster Asahi Press
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【備考】授業の前に予習しておくことが望ましい。

工業基礎数学 I

Industrial Basic Mathematics (I) 非常勤講師・吉川 隆吾 1単位

機械工学科(夜間主コース)

【授業目的】工学を学ぶために必要不可欠となる微分・積分の基礎的な内容について理解を図り、さらに基本的な手法や計算技術を確実に習得することを目的とする。

【授業概要】1 変数関数および多変数関数の微分・積分について、基礎的な内容から解説する。また、本講義の内容について、より理解を深めるために適宜演習を行う。

【授業計画】1. 微分 1:極限と連続 2. 微分 2:微分 3. 微分 3:導関数の応用 4. 積分 1:不定積分 5. 積分 2:定積分 6. 積分 3:定積分の応用 7. 偏導関数 1:多変数の関数 8. 偏導関数 2:偏導関数 9. 偏導関数 3:全微分 10. 偏導関数 4:Taylor の定理 11. 偏導関数 5:偏導関数の応用 12. 重複積分 1:重複積分 13. 重複積分 2:多重積分の応用

【成績評価】出席状況、レポート、期末考査等により総合的に評価する。

【教科書】特に指定しない。適宜、資料を配布する。

【参考書】矢野健太郎、石原繁 編「微分積分(改訂版)」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義内容を確実に理解するためにも、毎回の復習は欠かさずに行い、次の講義に望んでもらいたい。成績評価に対する「講義の出席状況、レポートの提出状況」と「小テストの成績」の割合は4:6とする。

工業基礎物理 I

Industrial Basic Physics (I) 非常勤講師・佐近 隆義 1 単位

【授業目的】

【授業概要】力学・波動・電磁気学について、ごく初歩的分野を解説する。

【授業計画】1. 運動と力:質点及び剛体の力学、ニュートンの運動の法則、運動量と力積・保存則 2. エネルギーと運動:仕事、力学的エネルギー・保存則 3. 波動:等速円運動、単振動、波 4. 電気と磁気:クローン力、電場と電圧、オームの法則・キルヒホッフの法則、磁場・ローレンツ力 5. 試験

【成績評価】講義への参加状況と試験の成績を総合して行う。

【参考書】高等学校で使用する物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義の最終日に試験を実施するので、毎回の復習を欠かさず行うこと。

工業熱力学

Engineering Thermodynamics 教授・森岡 斎 2 単位

【授業目的】熱エネルギーの基本法則と熱エネルギーの基本的な利用法について理解させる。さらに機械技術者として、工業製品や産業界の生産活動への熱エネルギーの有効な利用法についても十分な理解と適切な判断ができることを目的とする。

【授業概要】エネルギーに関して最も基本的な学問の一つに熱力学がある。その基礎概念、熱エネルギーの性質、経験法則、各種のサイクルについて講述する。講義では熱力学だけでなく周辺分野についても関連事項の解説を行い、演習の解説は詳しくする。

【受講要件】「流体力学」を履修していること。

【履修上の注意】毎時間、関数電卓を持参すること。

【到達目標】

1. 物質の熱的状態量と状態変化を理解する。
2. 自然現象の不可逆性を理解し、各種の熱機関を理解する。
3. エネルギー保存則と適用例を理解する。

【授業計画】1. 熱とエネルギー 2. エネルギーの法則 (1) 3. エネルギーの法則 (2) 4. 理想気体の状態方程式 5. 理想気体の状態変化 (1) 6. 理想気体の状態変化 (2) 7. 熱力学の第二法則 8. 中間試験 9. カルノーサイクルと熱機関 10. 気体サイクル (1) 11. 気体サイクル (2) 12. 蒸気の性質 13. 蒸気原動所のサイクル 14. 冷凍機のサイクル 15. 湿り空気 16. 期末試験

【成績評価】授業への取り組みやレポートの提出状況と内容、および中間試験と期末試験の結果を総合的に評価する。平常点と試験(中間と期末)との比率は、3:7 とする。

【教科書】斎藤 孟、「工業熱力学の基礎」、サイエンス社、ISBN4-7819-0974-4

【参考書】特に指定しない。講義中に演習問題などの補助資料を配布する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】森岡(M521, 656-7373, morioka@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】比率を 3:7 とする。平常点には講義時間内の演習への取り組み姿勢も含まれる。

材料科学

Materials Science 助教授・西野 秀郎 2 単位

【授業目的】結晶性材料の機械的性質を基礎的な立場から理解させるために、各種の結晶欠陥の挙動について解説する。

【授業概要】結晶構造や結晶学的指数について解説した後、結晶性材料の機械的性質に深く関わっている転位とその運動について講義する。また、高温において特に重要な拡散についても解説する。

【受講要件】関数電卓の取り扱いに慣れておくこと。

【履修上の注意】毎回簡単な演習問題を行ってもらおうので、関数電卓を忘れずに持参すること。

【到達目標】

1. 簡単な結晶構造について理解し、理論密度の計算等ができること。
2. 結晶学的な方位・面の指数表示ができること。
3. 転位の幾何学的モデルと結晶性材料の塑性変形との結びつきを理解すること。
4. 拡散に関係した基本的な計算ができること。

【授業計画】1. 材料科学とは何か? 2. 簡単な結晶構造 3. 結晶学的な方位の表示法 4. 結晶学的な面の表示法 5. 六方晶における 4 指数表示 6. 結晶性材料における面欠陥、線欠陥、点欠陥 7. 転位の幾何学モデル 8. 中間試験 9. 転位の運動と塑性変形 10. 結晶性材料のすべり変形 11. 材料の強化機構 12. 定常状態拡散 13. 非定常状態拡散 (1) 14. 非定常状態拡散 (2) 15. 期末試験

【成績評価】受講姿勢を平常点として 10%、中間試験・期末試験の成績をそれぞれ 30%、60%として評価する。授業中に質問に答えた場合は適宜平常点に加える。

【教科書】キャリスター著(入野野監訳)「材料の科学と工学 [1] 材料の微細構造」(培風館)

【参考書】キャリスター著(入野野監訳)「材料の科学と工学 [2] 金属材料の力学的性質」(培風館)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】西野(M618, 656-7357, nishino@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】中間試験の再試験は行わない。期末試験の再試験は同一年度内に 1 回のみ行う。

材料力学 I

Strength of Materials I 助教授・高木 均 2 単位

【授業目的】機械や構造物の部材に、様々な形態の外力が作用したとき、各部に生じる応力と変形の解析法を講義し、毎回行う小テストおよび章ごとに与えるレポートを通して、設計に有効な安全な寸法を決定する手法を修得させる。

【授業概要】応力とひずみの概念およびフックの法則を理解させ、常に材料の許容応力と許容変位を念頭において設計に役立てることを主眼に、引張圧縮変形、ねじり変形および曲げ変形中に生じる応力と変位を求める方法を講義し、材料の弾性変形に関する基礎知識を養成する。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】授業中に簡単な演習問題を解くため関数電卓を忘れずに持参すること。

【到達目標】

1. 応力、ひずみの概念およびフックの法則を理解する。
2. 引張、圧縮、ねじりおよび曲げ変形において生じる応力、ひずみを導出する。

【授業計画】1. 材料に生じる応力とその定義 2. 材料に生じるひずみとその定義 3. フックの法則と弾性係数・レポート 4. 引張圧縮変形における静定問題 5. 引張圧縮変形における不静定問題 6. 熱応力と残留応力・レポート 7. ねじりによる変形と応力 8. 伝動軸の設計・レポート 9. 真直はりのせん断力と曲げモーメント 10. せん断力線図と曲げモーメント線図 11. せん断力線図と曲げモーメント線図・レポート 12. 真直はり生じる応力 13. 断面二次モーメントの計算 14. 種々の真直はりの設計・レポート 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】受講姿勢、授業中に演習問題の小テストの結果、レポートの内容および最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】黒木剛司郎著「材料力学」森北出版

【参考書】材料力学教育研究会編「材料力学の学び方・解き方」共立出版、柴田・大谷・駒井・井上共著「材料力学の基礎」倍風館、鶴戸口・川田・倉西共著「材料力学」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】高木(M620, 656-7359, takagi@me.tokushima-u.ac.jp)

機械工学科 (夜間主コース)

【備考】講義の単位を取得するためには、必ず復習と予習をしなければならないことが前提になっているので、レポートの提出期限を厳守する。解けないときには、オフィスアワーを利用して質問することを勧める。

材料力学 2

Strength of Materials2

教授・吉田 憲一 2 単位

【授業目的】機械や構造物の部材に、様々な形態の外力が作用したとき、各部に生じる応力と変形の解析法を講義し、毎回行う小テストおよび章ごとに与えるレポートを通して、設計に有効な安全な寸法を決定する手法を修得させる。

【授業概要】曲げ変形の復習を含めて理解を深めるとともに、複雑な応力とひずみ状態の解析法、ひずみエネルギーの有効な利用法および低い応力で変形してしまう柱の座屈の概念を講義し、常に材料の許容応力と許容変位を念頭において設計に役立てることを主眼に、材料の弾性変形に関する基礎知識を深める。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】材料力学 1 を習得していること。

【到達目標】

1. 二次元の組合せ応力から主応力、最大せん断応力を導出する。
2. 弾性ひずみエネルギーの概念とその応用を習得する。
3. はりのたわみと柱の座屈を理解する。

【授業計画】1. 真直はりのせん断力と曲げモーメント・復習 2. せん断力線図と曲げモーメント線図・復習 3. 真直はりに生じる応力・復習 4. 真直はりに生じるたわみ 5. 真直はりに生じるたわみ・レポート 6. 組合せ応力 7. モールの応力円とひずみ円 8. 平面ひずみと平面応力・レポート 9. 各種応力によるひずみエネルギー 10. 衝撃応力 11. カステリアーノの定理・レポート 12. 長柱の座屈 13. オイラーの式と座屈の限界荷重・レポート 14. 弾性力学的取扱い 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】平常点と最終試験の得点を 3:7 の割合で成績評価する。平常点は、毎回行う小テストの結果およびレポートの提出状況と内容を考慮して決められる。

【教科書】黒木剛司郎著「材料力学」森北出版

【参考書】材料力学教育研究会編「材料力学の学び方・解き方」共立出版、柴田・大谷・駒井・井上共著「材料力学の基礎」倍風館、鶴戸口・川田・倉西共著「材料力学」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】吉田(M619, 656-7358, yoshida@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義の単位を取得するためには、必ず復習と予習をしなければならないことが前提になっているので、レポートの提出期限を厳守する。解けないときには、オフィスアワーを利用して質問することを勧める。

C 言語演習

C Language Programming Exercise

講師・一宮 昌司 1 単位

【授業目的】C 言語による基本的なプログラミング手法について演習を行い、小・中規模なプログラムの作成能力を修得するとともに、電子計算機の原理やアルゴリズムの設計方法についての理解を深めることを目的とする。

【授業概要】各演習時間では、講義計画に示される内容について説明を行った後、実際にパーソナルコンピュータを用いてプログラム作成の演習を行う。毎回、講義の内容に沿った問題を提示し、プログラミング能力の養成を図る。

【受講要件】全学共通教育科目の教養科目「情報科学分野」を履修し、コンピュータの基本的な操作方法を修得していることを前提にして授業を行う。

【履修上の注意】欠席回数が規定回数を超えると不合格となる。

【到達目標】教科書程度の基本的なプログラムは、自由自在に作成できるようになることを目標とする。

【授業計画】1. C 言語プログラミング概要 2. C 言語のプログラム構造、変数 3. 出力、型、演算子 4. if 文 5. switch 文 6. for 文, while 文 7. 配列 8. ポインタ 9. 文字列 10. 関数の作成 11. ポインタを関数に渡す、プロトタイプ宣言 12. ファイルの分割、変数の種類 13. 構造体 14. ファイルの入出力、#define 15. エラー処理 16. 定期試験

【成績評価】受講姿勢、演習への取り組み状況、毎回行う問題の提出状況および解答内容、および定期試験の成績を総合して成績を評価する。平常点と試験の比率は 5:5 とする。なお、平常点としては受講姿勢と毎回行う問題の回答状況により評価する。

【教科書】倉薫著「プログラミング学習シリーズ C 言語 1」翔泳社

【参考書】柴田望洋著「定本 明解 C 言語 第 1 巻入門編」ソフトバンクパブリッシング、柴田望洋著「明解 C 言語 第 1 巻入門編 例解演習」ソフトバンクパブリッシング、林晴比古著「改訂 新 C 言語入門 ビギナー編」ソフトバンクパブリッシング

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】一宮(M520, 656-7368, ichimiya@me.tokushima-u.ac.jp)

自動車工学

Automotive Engineering

非常勤講師・島田 清 2 単位

【授業目的】生活になくはならなくなった自動車(主に乗用車)を、工学的立場から理解し、自動車に使われている技術の基礎を習得するとともに、自動車の性能・社会的位置付けにつき理解を深める。

【授業概要】自動車の構造概要および動的性能に重要な役割をするエンジン、サスペンション、タイヤ、ブレーキなどの構造の詳細を講義し、自動車の動的性能である「走る」「曲がる」「止まる」の三要素を理解させる。あわせて、各国の法規動向、公害・安全対策の現状と今後の動向を概説し、自動車の社会的位置付けも理解させる。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】講義時に配布するプリントは要点のみ記載しているので、各自事前に参考書などに目を通して講義の外洋をあらかじめ把握しておくこと。レポート課題はインターネットを利用しないと調べにくいものがあるためあらかじめ留意しておくこと。

【到達目標】自動車の構造概要を理解する。自動車が「走る」「曲がる」「止まる」時の力学を理解する。現代の自動車の構造を理解するだけでなく、過去の経緯を踏まえ将来像をも把握できる知識・考え方を身につける。

【授業計画】1. 総論 2. 自動車の構造概要 3. 自動車の走行性能 1 4. 自動車の走行性能 2 レポート 5. エンジン性能 1 6. エンジン性能 2 7. 動力伝達装置 8. ブレーキ性能 ABS および TCS レポート 9. サスペンション性能 10. タイヤ性能 11. 操縦安定性能 1 12. 操縦安定性能 2 レポート 13. 車体構造 14. 安全・公害対策 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】レポート(3 回)提出による平常点及び期末試験点数で評価する。評価割合はレポート点(30 点)、試験点数(70 点)の合計 100 点満点とする。

【教科書】なし(講義時にプリント配布)

【参考書】竹花有也著「自動車工学概論」理工学社、機械力学関連書籍、内燃機関関連書籍

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】島田shimada@tokuco.ac.jp

【備考】講義の中で 3 回のレポートを課すので、期日に遅れずに提出のこと。平常点の低い(0 点)学生は定期試験で 86 点以上取らないと不可の評価となるので注意すること。

自動制御理論

Automatic Control theory

教授・今枝 正夫 2 単位

【授業目的】なぜ自動制御が機械工学で必要か、自動制御系設計にはどのような知識が必要なのかについて理解させる。本講義では、線形制御理論に焦点を絞り、時間とともに変動する現象を理解する感覚を養い、自動制御の目的と構成、自動制御系の解析・設計のための基礎理論を講義し、演習を取り入れ自動制御に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】自動制御技術は、一般産業機械をはじめロボット、NC 工作機械の基礎技術として応用されており、自動制御なくしては機械の満足な動作は期待できない。そのため線形制御理論に基づき数学的解析法と設計法を解説する。

【受講要件】「微分方程式 1」、「ベクトル解析」、「電子回路」、および「メカトロニクス工学」は履修していること。

【履修上の注意】全回出席することを原則とする。

【到達目標】自動制御の目的及び構成を理解し、自動制御系を解析・設計する基礎知識を習得する。

【授業計画】1. 自動制御の基礎概念(自動制御の目的、構成) 2. ラプラス変換と微分方程式 3. ラプラス変換と微分方程式・レポート 4. 伝達関数とブロック線図 5. 伝達関数とブロック線図・レポート 6. 周波数応答 7. 周波数応答・レポート 8. 中間試験 9. 制御系の安定 10. 制御系の安定 11. 制御系の安定・レポート 12. 制御系の良さ 13. 制御系の良さ・レポート 14. 制御系設計の基礎 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】各章終了ごとに演習を課します。そのレポートの内容ならびに中間試験と期末試験の結果、そして授業への取り組み状況などをともに総合的に評価する。

機械工学科(夜間主コース)

【教科書】添田喬・中溝高好共著「自動制御の講義と演習」日新出版
【参考書】講義中に説明する。
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】今枝(M419, imaeda@me.tokushima-u.ac.jp)
【備考】自動制御は、応用学問である。学習するには広い分野の知識を必要とする。製造関係の企業への職業を選択する場合身につけておかなばならぬ学問の一つである。

蒸気プラント工学

Power plant engineering 助教授・清田 正徳 2 単位

【授業目的】火力発電プラントの構成とその役割を理解する。実際に計算を行うことにより、現象の理想化の仕方についての理解を深める。
【授業概要】発電プラントの作動原理を知り、各構成要素の役割とどのような問題があるかを認識する。そのために、作動流体である水の状態変化の計算法と基本となるランキンサイクル、発電プラントの概要、ボイラにおける燃焼過程、排ガス対策、ガスふく射、強制対流伝熱について、水側の循環流、沸騰伝熱様式について、タービンの種類とタービンの羽根部における速度三角形、衝動タービンと反動タービンの相異、について述べる。PWR、BWR の特長と相違点についても述べたい。
【受講要件】「工業熱力学」「伝熱工学」を履修していることが望ましい。
【履修上の注意】講義には電卓を必ず持参すること。
【到達目標】
1. 水蒸気の熱的性質を理解しサイクルに応用すること。
2. 発電プラントの水の流れ、蒸気の流れ、燃焼ガスの流れと関連する機器について理解すること。
3. 蒸気タービンの仕事発生過程、タービンの種類と特徴について理解する。
【授業計画】1. 蒸気の性質 2. 蒸気の性質 3. 蒸気プラントの概要 4. 演習 5. ボイラの概要 6. ボイラの燃焼装置 7. ボイラの熱伝達 8. ボイラの通風と排ガス処理 9. 演習 10. 蒸気タービン 11. 蒸気タービン 12. 蒸気プラント補機 13. 蒸気プラント補機 14. 原子力発電プラント 15. 予備日 16. 定期試験
【成績評価】講義への取り組み状況、演習の回答および最終試験の成績を総合して判定する。成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 程度とする。平常点には出席状況、演習に対する回答を含む。
【教科書】沼野正博著:蒸気工学(朝倉書店)
【参考書】西川、田川、川口著「わかる蒸気工学」日新出版、一色、北山著「新蒸気動力工学」森北出版、伊藤、山下著「工業熱力学」コロナ社
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】清田(M522, 656-7374, kiyota@me.tokushima-u.ac.jp)

職業指導

Vocational Guidance 非常勤講師・坂野 信義 4 単位

【授業目的】
【授業概要】生涯発達・Career Developing としての人間観・職業観を確立すべく、学際的見地から職業指導の課題と方法を論述し、併せて能力開発を実践指導する。
【授業計画】1. I. 職業指導の課題と方法 2. 職業指導発展の略史 3. 職業指導の課題 4. 個性と職業 5. 1) 個人理解の方法-性格、興味など 6. 2) 適応と適性 7. 3) Career Planning としてのライフワーク 8. 4) マネジメントスキル:リーダーシップ論など 9. 職業相談(キャリア・カウンセリング) 10. 1) 職業相談の意義 11. 2) カウンセリング理論と技術 12. 職業指導の評価 13. II. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 14. 人生 60 年計画表の作成 15. IC 法, NM 法を活用してソフト作成能力を育成 16. KJ 法を活用しての課題解決とプレゼンテーション
【成績評価】論文、能力開発のプレゼンテーションにより成績評価。
【教科書】講師よりプリント資料配布。参考書、必読書については、講義中紹介。
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【備考】「面白くてためになり、そして思い出に残る」講義が目標。

制御工学

Control Engineering 助教授・橋本 強二 2 単位

【授業目的】機械を知能化するためには、その位置や速度および力などの制御が必要である。本講義では、これらの制御を取り扱うサーボ機構の基本構成要素であるアクチュエータの駆動原理および制御技術について論じ、また、レポートを課し、中間試験を実施することにより、機械を知能化する上で必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】位置・速度・力などの制御を取り扱うサーボ機構の構成要素である電気・油圧・空気圧アクチュエータや制御弁などの構造・機能およびサーボ系の各種制御法について講義し、その応用事例について論じる。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】「流体機械」「電子回路」「機械力学」「自動制御理論」「メカトロニクス工学」の履修を前提にして講義を行う。

【到達目標】

1. 1. アクチュエータや制御弁の駆動原理と制御技術を理解する。
2. 2. サーボ機構の構成と制御法を理解する。

【授業計画】1. サーボシステムの基本構成 2. システムの動特性 3. コントローラとセンサ・レポート 4. アクチュエータ概論 5. アクチュエータによる制御・レポート 6. 微小駆動用電動アクチュエータ 7. 電動アクチュエータ 8. 中間試験 9. 電気サーボシステム・レポート 10. 油圧アクチュエータ 11. 油圧制御弁 12. 油圧サーボシステム・レポート 13. 空気圧アクチュエータと制御弁 14. 空気圧サーボシステム・レポート 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】中間試験、学期末試験、授業への取り組み状況、レポートなどをもとに総合的に評価する。

【教科書】武藤高義著「アクチュエータの駆動と制御」コロナ社

【参考書】岡田養二・長坂長彦著:「サーボアクチュエータとその制御」コロナ社、山口惇・田中裕久著:「油圧工学」コロナ社、宮入庄太監修:「アクチュエータ実用事典」フジテクノシステム

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】橋本(M420, 656-7387, hasimoto@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】単元が終わるごとにレポートを課し、また中間試験を行うので、予習復習は欠かさず行うこと。

生産加工

Machining 教授・海江田 義也 2 単位

【授業目的】除去加工(切りくずを出す加工)を中心に、溶融加工(鋳造、溶接)を含め、加工法の概念を学ぶ。

【授業概要】最近では情報化が進み、コンピュータ万能の時代のように考えられており、事実工作機械も NC 化が進んでいる。しかし加工の本質は変わっていない。新しい加工技術を開発するにもその基礎技術の習得が必要である。

【受講要件】理解を深めるため、「材料力学 1」「基礎機械製図」を履修しておくことが望ましい。

【到達目標】

1. 溶融加工、切削加工の概念と基礎技術を理解する。
2. 応用力を養う。

【授業計画】1. 生産加工序論、鋳造 2. 鋳造・レポート 3. 鋳造・レポート 4. 溶接・レポート 5. 切削加工の基礎・レポート 6. 切削抵抗・レポート 7. 工具寿命と切削加工の経済性・レポート 8. 旋削加工・レポート 9. NC 工作機械・レポート 10. フライス加工・レポート 11. フライス加工・レポート 12. 穴あけ加工・レポート 13. 中ぐり加工、歯切り加工ほか・レポート 14. 生産システムなど・レポート 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】各講義で簡単なレポートを提出する。レポートと期末に行う試験とで評価する。

【教科書】新編 機械加工学(橋本文雄, 山田卓郎 著), 共立出版

【参考書】機械加工学(中島利勝, 鳴滝則彦 著), コロナ社

【連絡先】海江田(M321, 656-7379, kaieda@me.tokushima-u.ac.jp)

生産管理

Production Control 非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為の人をどのように動かしているかを理解する。

【授業概要】講義計画に従い労務管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 企業経営は経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で生産技術のキー

機械工学科(夜間主コース)

となる事項について講義する。2.生産管理の目的(CS,品質,納期,原価) 3.生産計画 4.購買(調達) 5.生産システム 6.レポート 7.在庫管理 8.進捗管理 9.改善活動 10.その他トピックス 11.レポート

【成績評価】出席率,レポートの内容

【教科書】その都度提供する。

【参考書】市販の生産管理に関する書籍

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】井原(,0884-22-0502)

生産システム

Manufacturing Systems Engineering 教授・海江田 義也 2 単位

【授業目的】人々のニーズにあった製品の生産を合理的,経済的に行う生産手段や生産手順をただ数式を用いず考える。

【授業概要】人々のニーズにあった製品の生産を,合理的かつ経済的に行えるように,生産手段や生産手続きを計画し,その計画を実現するため工程管理,生産管理を学ぶ。

【受講要件】「生産加工」「生産シミュレーション」を履修していること。

【到達目標】

1. 生産手段および生産手続きの計画法の概略を理解する。
2. 工程管理,生産管理の概略を理解する。

【授業計画】1.品質保証の概念,品質保証活動 2.生産の役割,生産工程 3.生産工程,生産の基本形態 4.生産設計 5.生産設計 6.工程設計 7.工程設計 8.作業設計 9.作業設計 10.作業設計 11.生産管理 12.生産管理 13.生産管理 14.生産設備と配置計画 15.予備日 16.定期試験は行わず

【成績評価】受講姿勢,適当な時期にレポートの提出.受講姿勢とレポートにより評価する。

【教科書】生産工学(岩田一明,中沢 弘),コロナ社

【参考書】入門編 生産システム工学(人見 勝人 著)共立出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】海江田(M321,656-7379,kaieda@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】関連する著書を読むよう努力する。

生産シミュレーション

NC Machine Tools 助教授・升田 雅博,助手・大山 啓 3 単位

【授業目的】自らの発想により製作品を考え,マシニングセンター,NC旋盤などを使って機械加工を行う際の精度,経済性などに関する問題点を考えるとともに,NC工作機械による機械加工の基本的考え方を習得する。

【授業概要】マシニングセンター,NC旋盤,溶接などの実習,および工具寿命から見た切削条件の選択法を実験を通して演習するとともに,NC工作機械の構成要素,サーボ機構の概念などの機械構造とNCプログラミングにおける加工技術について講義する。

【受講要件】心身ともに健康である。

【履修上の注意】指導員の指示に従って盲目的に作業するのではなく,研究的態度で臨むことが大切である。工作機械類を取り扱うので,指導員の注意を厳守すること。

【到達目標】

1. 機械加工による「ものづくり」を理解する。
2. 機械加工の中心であるNC工作機械の構成を理解する。
3. 工具や加工条件の選択など機械加工技術の基本を理解する。

【授業計画】1.安全教育と実習概要 2.マシニングセンター用プログラミング 3.マシニングセンターによる加工 4.NC旋盤用プログラミング 5.NC旋盤による加工 6.溶接 7.溶接部品の性能試験 8.工具摩耗試験 9.工具寿命線図の作成 10.切削条件の選択方法・演習 11.NC工作機械 12.NCサーボ機構・演習 13.NCサーボの要素 14.工作物材料と工具 15.予備日 16.定期試験

【成績評価】本科目の評価は,実習における取組み状況,レポートの内容,演習の回答および最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】配布資料および橋本文雄・山田卓郎著,機械加工工学,共立出版

【参考書】金子 著「数値制御」オーム社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】升田(M320,656-7380,masuda@me.tokushima-u.ac.jp),大山(M325,656-9741,oyama@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】機械を扱うので,安全マニュアルをよく読んでおくこと。

精密計測学

Precision Measurement 教授・英 崇夫 2 単位

【授業目的】自然の仕組みと社会のニーズを橋渡しするのが工学である。自然の仕組みを理解し,それを用いて新しいものの開発をするために,測定がいかに大切であるかということ学ぶ。正確で精密な測定によって,事実をきちんと事実として見つめられるような技術者になることを目指す。

【授業概要】機械工学における計測の重要性を認識するとともに,機械部品を加工・生産することにおいて重要な関わりのある計測の原理と方法について理解を深める。計測の基礎である誤差についての正しい理解をし,高精度測定,測定の自動化,オンラインデータ処理法などの近代化された生産体系の中に,測定手法がいかに組み込まれているかを学ぶ。

【受講要件】測定系には機械要素,材料,電気,光学,流体など様々な分野が総合的に駆使されて成り立っているため,これらに関する初歩的な知識を要する。

【履修上の注意】受講の前には必ず該当部分の予習が必要です。また,講義中にはメモを取り,それに基づいて自分のノートを作成することが大切です。理解できた部分と理解できなかった部分をはっきりさせ,後者について時を置かず自ら調べる努力をしよう。

【到達目標】

1. 機械工学における計測の重要性を理解する。
2. 偶然誤差および系統誤差の概念とそれらの処理法を理解する。
3. 系統誤差の要因を理解する。
4. 各種寸法測定の原理を理解する。
5. A-D変換とその具体的方法を理解する。

【授業計画】1.計測の基礎(自然科学と工学技術) 2.計測の基礎(機械工学と計測) 3.長さ測定の基準(メートル基準,ブロックゲージ) 4.偶然誤差と系統誤差 5.寸法精度の測定(絶対測長と比較測長) 6.測定誤差(温度による測定誤差) 7.測定誤差(弾性変形による測定誤差) 8.測定器の原理と構造(機械的測定) 9.測定器の原理と構造(光学的測定) 10.測定器の原理と構造(流体的測定) 11.測定器の原理と構造(電氣的測定) 12.測定の自動化(自動測定機器,自動組合わせ機器) 13.デジタル計測(A-D変換の原理) 14.角度の測定 15.表面粗さの測定 16.定期試験

【成績評価】宿題に対する回答,ノートの記載,そして定期試験の総合点で評価する。日常の学習態度を重視するため,平常点と定期試験の成績比率は50:50とする。4回以上の欠席は単位を与えない。再試験は当該学期に1回行う。

【教科書】築添正著「精密計測学」養賢堂

【参考書】大西義英著「計測工学」理工新社,青木繁著「精密測定1,2」コロナ社,谷口修,堀米泰雄共著「計測工学」森北出版,沢辺監修「知りたい測定の自動化」ジャパンマシニスト社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】M317, Tel:656-7377, hanabusa@me.tokushima-u.ac.jp

【備考】測定系には機械要素,材料,電気,光学,流体などさまざまな分野が総合的に駆使されて成り立っているため,これらに関する初歩的な知識を要する。また,講義後には講義中のメモに基づいて自分のノートを整理し,内容とまとめの補完をすることが大切である。

設計工学

Design Engineering 助教授・岡田 健一 2 単位

【授業目的】目的に合った良い設計を効率良く行なう工学的な方法を見出すために必要な事項について講義を行ない,このことに対する基礎知識の習得を図る。

【授業概要】油空圧機器や電気機器といった要素に関する知識も加え制御を意識した設計を学び,設計を総合的に人間工学的な視点から考える。また良い製品,良い設計を考え出すための発想法から始まり生産設計まで考えた講義を行なう。安全設計思想,安全性に考慮した設計法についても学ぶ。

【到達目標】

1. 設計工学の重要性の理解する
2. 機械と人間との関連を理解する
3. 安全性を考えた設計の理解
4. 発想法の基礎を知る

【授業計画】1.設計工学とは 2.良い設計とは 3.機械と人間 4.機械の安全性 5.機械の安全性 6.機械と規格・標準 7.機械と電気機器 8.油空圧機器 9.油空圧機器 10.生産設計 11.生産設計 12.設計の評価 13.発想法 14.発想法 15.これからの設計 16.定期試験

機械工学科（夜間主コース）

【成績評価】講義への取組み状況，レポートおよび最終試験の成績を総合して行なう。

【教科書】畑村洋太郎編「続・実際の設計」日刊工業新聞社

【参考書】設計工学シリーズ（丸善），瀬口ら「機械設計工学2」（培風館），赤木「設計工学上」（コロナ社）

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】(M123, 656-7395, okada@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「機械設計」に引続き行なう。「機械設計」の知識に加え，電気，制御，油空圧機器などの基礎的な知識をもとに行なう。さらにレポート等も適宜行なう。平常点と試験の比率はほぼ5:5とする。

創造演習

Practice of Machine Creation

助手・草野 剛嗣，日下 一也 1 単位

【授業目的】自らの意思と発想により，与えられた課題について着想力と創造力を駆使して問題解決の筋道を模索し，実現するための方法，手段を学ぶ。

【授業概要】単純な機能を有する小型構造物を少人数のグループで設計製作し，公開競技会・技術報告会などを通して機構学，解析力学，材料力学等を実践的に習得するとともに工学的な創造性・独創性を修得する。具体的には，全員に同一の課題（毎年変更）を与えて，小型構造物（はり，ロボット，ウインチ等）の設計製作を行う。作業中に生じたトラブルとそれをどのように解決したかという作業報告書を毎週提出する。最後に公開競技会および発想プレゼンテーションを行う。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】1回でも欠席した場合，欠席日数に応じた長さの英文のレポートを課す。

【到達目標】

1. 専門科目を学習するための意欲を向上させる。
2. 創造力の基礎を身につける。
3. 問題発見・解決能力を身につける。
4. プレゼンテーション技術を向上させる。
5. プレゼンテーション評価能力を身につける。

【授業計画】1. オリエンテーション，課題(1)設計・製作・公開コンテスト 2. 課題(1)技術報告会・反省会 3. 課題(2)テーマ説明，設計 4. 課題(2)製作 5. 課題(2)公開コンテスト 6. 課題(2)技術報告会・反省会 7. 課題(3)テーマ説明，設計 8. 課題(3)製作 9. 課題(3)製作 10. 課題(3)公開コンテスト 11. 課題(3)技術報告会・反省会 12. 課題(4)テーマ説明，設計 13. 課題(4)製作 14. 課題(4)公開コンテスト 15. 課題(4)技術報告会・反省会 16. 予備日

【成績評価】実習中の取組み状況（30点），作業報告書および最終報告書（20点），競技会の成績（25点），発想プレゼンテーション（25点）

【教科書】授業毎に関連した資料を配布する。

【参考書】伊藤進著「創造力をみがくヒント」講談社，今坂一郎著「モノから学ぶ-化学的発想の遊び-」裳華房，高橋昌義著「常識破りの成功発想」共立出版，H.F. ジャドソン著「科学と創造-科学者はどう考えるか」培風館，種田重男著「機構学」朝倉書房，「モノづくり解体新書」日刊工業新聞社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】草野(M528, 656-2151, kusano@me.tokushima-u.ac.jp)，日下(M322, 656-9442, kusaka@me.tokushima-u.ac.jp)

弾性力学

Elasticity

教授・山田 勝稔 2 単位

【授業目的】有限要素法の発達によって設計業務がルールによる設計から解析による設計が常識になっている現在，得られた解析結果を解釈する能力が重要であり，きちんと理論構成された弾性学の必要性が増している。さらに，有限要素法，塑性力学及び破壊力学等の他の固体力学分野の基礎学問としての側面も持つ。本講義では，このような弾性力学の基礎を厳選した内容をもとに理解させことを目標とする。

【授業概要】応力，ひずみの定義とテンソルとしての性質を説明した後，弾性体の支配方程式とそれと等価なエネルギー原理を述べる。次いで，2次元問題，ねじり問題の定式化を説明した後，基本的で重要な幾つかの問題に適用し，得られた解の性質，物理的意味を理解させる。

【受講要件】材料力学を良く理解しておくこと。

【履修上の注意】講義時間の2倍の時間を予習，復習に当てること。

【到達目標】

1. 1. 応力とひずみの定義とそのテンソルとしての性質を理解させる。
2. 2. 変形する物体の支配原理と定式化を理解させる。
3. 3. 基本的で重要な若干の問題に適用し，問題のモデル化，解法，得られた解の性質を理解させる。

【授業計画】1. 応力と応力の釣合い方程式 2. 応力成分の座標変換 3. ひずみとひずみの適合条件式 4. ひずみ成分の座標変換 5. フックの法則 6. 弾性の支配方程式 7. 平面応力と平面ひずみ 8. 応力関数 9. はりの厳密解 10. 極座標による平面問題 11. 内外圧を受ける厚肉円筒 12. 円孔を有する無限板の引張り 13. き裂先端の応力 14. ねじり 15. 長方形断面棒のねじり

【成績評価】講義に対する理解力の評価は，授業への取組みと中間試験と期末試験の成績を総合評価する。

【教科書】阿部武治 編「弾性力学」朝倉書店

【参考書】S.P.Timoshenko and J.N.Goodier 著「Theory of Elasticity」3rd ed McGraw-Hill

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】山田(M621, 656-7364, yamada@me.tokushima-u.ac.jp)

知識ベースシステム

Knowledgebase Systems

助教授・伊藤 照明 2 単位

【授業目的】機械工学分野におけるコンピュータの知的利用のための基礎知識を習得させる。

【授業概要】工学分野における知識ベースシステムの位置づけを大体的な観点から捉えるとともに，人工知能の基本的手法について講義する。また，後半ではその応用により開発されたシステムについて講義する。

【受講要件】「C言語演習」，「CAD演習」の履修を前提とする。

【履修上の注意】IT関連技術に関する問題意識を持って授業に望むこと。

【到達目標】最近の知識ベースシステムの進歩と機械工学の役割について理解する。

【授業計画】1. 計算機の歴史 2. 人工知能の歴史 3. 問題解決法 4. 探索法 5. プロダクションシステム 6. 意味ネットワーク・フレーム 7. 一階述語論理・オブジェクト指向 8. 中間試験 9. エキスパートシステム 10. 機械翻訳 11. 画像理解 12. ニューラルネットワーク-GA 13. 知識型CAD 14. 知識型CAI 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】受講姿勢・レポート（平常点）を50%，定期試験を50%として評価する。

【教科書】荒屋真二著「人工知能概論」，共立出版

【参考書】渡辺貞一・南川忠利著「知識システム」，コロナ社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】伊藤照明(M316, 656-2150, ito@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】再試は実施しないので，中間試験および定期試験を受験しない場合は不合格となる。

超精密加工

Ultraprecision Machining

助教授・多田 吉宏 2 単位

【授業目的】機械部品や光学部品を高精度に加工する際に考慮しなければならない超精密除去加工の機構，超精密加工機の構成要素・環境・工具・計測などの技術的基礎を詳しく講義する。

【授業概要】超精密切削・超精密研削および超精密研磨の各加工法を理解しこれを実践的に応用できるよう，まず超精密除去加工全般に共通する基礎事項を解説し，次いでそれぞれの加工法に関して具体的な加工例を交えて講義する。

【受講要件】「生産加工」，「精密計測学」を履修している（または並行して履修する）ことが望ましい。

【到達目標】

1. 超精密加工技術全般に共通する必須な基本事項を理解する。
2. 個々の超精密加工法の原理・特徴・応用についての基本を理解する。

【授業計画】1. 超精密加工とその背景 2. 超精密加工の基礎 3. 超精密切削加工機の構成と要素 4. 超精密研削加工機の構成と要素 5. 超精密切削のメカニズム 6. 超精密研削加工工具 7. 仕上げ面の品位，工具損傷 8. 超精密研削加工 9. ELID研削 10. ラッピング 11. ポリシング 12. メカノケミカル作用 13. 界面反応を利用した超精密加工 1 14. 界面反応を利用した超精密加工 2 15. まとめ 16. 定期試験

【成績評価】授業への取組み・レポートによる平常点と定期試験の結果とを1:1の比率で総合して成績を評価する。

【教科書】丸井悦男著「超精密加工学」，コロナ社，ISBN4-339-04399-0

【参考書】田中義信・津和秀夫・井川直哉共著「精密工作法」，共立出版，ISBN4-320-07909-4

機械工学科 (夜間主コース)

- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】多田(M319, 656-7381, tada@me.tokushima-u.ac.jp)
【備考】将来、設計や生産加工分野を目指す学生は受講しておくことが望ましい。

電子回路

Electronic Circuits 講師・大石 篤哉 2 単位

- 【授業目的】急速に発展する「マイクロエレクトロニクス」との融合により「機械」の新たな機能を創造する「メカトロニクス」のための電子回路の基礎知識を習得させる。
- 【授業概要】最初に受動素子の働きとその回路について説明した後、マイクロエレクトロニクスの中心となる半導体電子部品について述べる。後半はデジタル回路に関して各種機能の実現方法を詳述する。
- 【受講要件】「C 言語演習」を履修していること。
- 【到達目標】
1. 基本的な電子デバイスの機能を定性的かつ定量的に理解する。
 2. 基本的なアナログ電子回路の計算方法を習得する。
 3. 基本的なデジタル論理回路の設計・解析手法を習得する。
- 【授業計画】1. オームの法則 2. 直流と交流 3. 受動電子部品 (C と L) 4. 回路シミュレーション 5. PN 接合とダイオード 6. トランジスタ増幅回路 7. 中間試験 8. デジタル基本論理回路 9. デジタル回路と真理値表 10. ブール代数と論理式 11. 二進法と加算回路 12. フリップフロップ 13. カウンタとシフトレジスタ 14. AD 変換と DA 変換 15. 予備日 16. 定期試験
- 【成績評価】講義に対する理解力の評価は定期試験 (80%) および授業への取り組み (20%) をもとに総合的に評価する。
- 【教科書】西堀賢司著「メカトロニクスのための電子回路基礎」コロナ社
- 【参考書】D.L.Schilling and C.Belove "Electronic Circuits" (McGraw-Hill), 高橋晴雄・阪部俊也著「機械系の電子回路」コロナ社, 加藤肇・見城尚志・高橋久著「図解・わかる電子回路」講談社, 藤原修著「インターフェースの電子回路入門」オーム社
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】大石(M622, 656-7365, oishi@me.tokushima-u.ac.jp)
【備考】「メカトロニクス実習」の授業は、本講義の受講を前提として進められる。

伝熱工学

Heat Transfer Engineering 教授・逢坂 昭治 2 単位

- 【授業目的】伝熱現象の物理的な説明とともに定式化を示し、伝熱学の基礎を習得したうえで実際問題に対して解決・応用できることを目的とする。
- 【授業概要】熱が移動する基本的な 3 形態の概要説明をした後、それぞれの形態における熱移動の現象と種々の熱・流体力学的条件下で生じる熱移動の因子・法則について講義する。さらに、これらの知識・理解が生産・加工・輸送などの工業および地球環境などの広い分野におけるエネルギー有効利用に最も必要とされていることを説明する。
- 【受講要件】工業熱力学を履修していることが望ましい。
- 【履修上の注意】計算問題、英語の問題もある、が多いので、計算機と辞書の準備が必要。
- 【到達目標】1. 熱伝導の基礎理論と熱通過を理解する。2. 対流熱伝達の理論と強制・自然対流熱伝達を理解する。3. 熱放射の基本法則と放射熱伝達を理解する。
- 【授業計画】1. 伝熱工学の概要と基礎事項 2. 一次元定常熱伝導の基礎理論と小テスト 3. 平板および円管の熱通過と小テスト 4. フィンの伝熱と小テスト 5. 対流熱伝達の理論 (連続の式, 運動方程式) と小テスト 6. 対流熱伝達の理論 (エネルギーの式, 次元解析) と小テスト 7. 熱通過および対流熱伝達の演習 8. 中間テスト 9. 相変化を伴う熱伝達 (沸騰熱伝達の概要) 10. 相変化を伴う熱伝達 (凝縮熱伝達の概要と理論), 小テスト 11. 熱放射の基本法則 12. 黒体面間の放射伝熱と小テスト 13. 灰色面間の放射伝熱と小テスト 14. 熱交換器の概要 15. 熱交換器における伝熱計算 16. 伝熱工学の最終試験
- 【成績評価】授業への取り組み (25%), 小テストの回答内容 (25%), 中間・最終試験の成績 (50%) を総合して評価する。
- 【教科書】吉田駿著「伝熱学の基礎」理工学社
- 【参考書】洋書を含めた参考書については、各論ごとに講義中に紹介する。
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】逢坂(M523, 656-7375, ousaka@me.tokushima-u.ac.jp)
【備考】計算問題、英語の問題もある、が多いので、計算機と辞書の準備が必要。

内燃機関

Internal Combustion Engine 教授・三輪 恵 2 単位

- 【授業目的】自動車、船舶、航空機や産業、建設、農業用などの動力源として広く利用されている内燃機関について、機械工学の立場からその動作原理、構造を理解し、燃料のエネルギー変換過程と大気汚染物質の低減法の基礎知識を修得する。
- 【授業概要】燃料の燃焼によるエネルギーを有効に利用し、また大気汚染物質の排出を抑制できる動力源を得るために、内燃機関の熱力学を基本にして、仕事とサイクルと熱効率の関係、また、ガソリンエンジン、ディーゼルエンジンおよびガスタービンなど各種内燃機関の燃料特性と燃焼方式、およびその特徴を講述する。
- 【受講要件】工業熱力学を履修していることが望ましい。
- 【履修上の注意】演習を行うので電卓を持参のこと。
- 【到達目標】熱力学、燃料、燃焼と動力変換との関係を理解して、エネルギー資源の有効利用と大気環境問題を習得する。
- 【授業計画】1. (1) 内燃機関の概要と歴史的考察 2. 内燃機関の熱力学 3. (2) 各種ガスサイクルと熱効率 4. (3) 出力及びトルク 5. (4) 熱力学の小テストとレポート 6. 燃料と燃焼 7. (5) 炭化水素燃料の種類と性状 8. (6) 燃焼の基礎理論 9. (7) 火花点火機関の燃焼 10. (8) 圧縮着火機関の燃焼 11. (9) 燃料と燃焼の小テストとレポート 12. シリンダ内ガス交換 13. (10) サイクル機関のガス交換過程 14. (11) サイクル機関のガス交換過程 15. 火花点火機関と圧縮着火機関 16. (12) 燃料供給装置・点火装置と予混合燃焼方式
- 【成績評価】講義に対する理解力は、学期末試験の成績を主体に評価するとともに、受講姿勢、授業中の質疑応答およびレポートならびに講義ノートを含めて総合的に評価する。
- 【教科書】廣安広之・實幸卓男著「内燃機関」コロナ社
- 【参考書】河野・角田・藤本・氏家著「最新内燃機関」朝倉書店、一色・北山著「わかりやすい熱力学」北森出版、専門書として、長尾不二夫著「内燃機関講義」、養賢堂洋書として、W. W. Pulkrabek "INTERNAL COMBUSTION ENGINE" PRENTICE HALL.
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】エコシステム棟5階503室
【備考】「工業熱力学」の履修を前提として講義を行う。学期の前半に熱力学の完全ガスの範囲の小テストを実施する。期末試験、レポートなどの成績を 70% の比率とし、授業への取組み状況、質疑 応答、講義ノートなどの平常点の比率を 30% とする。

破壊制御論

Fracture Control Theory 教授・村上 理一 2 単位

- 【授業目的】機械の安全性や健全性を保証するために応力と材料の塑性変形挙動や破壊挙動との関わりについて講義し、演習・レポート、小テストを実施し機械の破壊防止に必要な基礎知識を修得させる。
- 【授業概要】機械を構成する材料の塑性変形と破壊に至る過程を巨視的・微視的な観点から理解させるために材料の塑性変形の機構と転位、塑性変形と破壊の関わり、破壊制御の基本概念を講述して機械・構造物の安全性や設計に必要な材料の変形と破壊に関する基礎力の養成を図る。
- 【受講要件】「機械材料学」「材料力学」の履修を前提にして講義を行う。
- 【履修上の注意】講義の単元が終わるごとにレポートを課し、目標の理解度をチェックするので、毎回の予習、復習は欠かさず行うこと。
- 【到達目標】
1. 材料の塑性変形と転位の関係を理解する。
 2. 材料の強化機構を理解する。
 3. 材料の破壊機構を理解する。
 4. 金属疲労を理解する。
 5. 破壊力学の基礎を理解する。
- 【授業計画】1. 材料の弾性変形と塑性変形 2. 材料の構造と転位の基礎 3. 材料の構造と転位の基礎・レポート 4. 材料の強化と新材料 5. 材料の強化と新材料・レポート 6. 中間試験 7. 材料の破壊 8. 材料の破壊・レポート 9. 破壊力学の基礎 10. 破壊力学の基礎・レポート 11. 破壊力学の基礎と疲労強度 12. 疲労強度 13. 疲労強度 14. 疲労強度・レポート 15. 表面現象、腐食と摩耗 16. 定期試験
- 【成績評価】到達目標の 5 項目がそれぞれ達成されているかを試験 60%、平常点 (授業への取組み状況、レポート) 40% とし、5 項目平均で 60% 以上であれば合格とする。
- 【教科書】村上理一・荻山博之・高尾健一著「材料強度学入門」西日本法規出版

機械工学科 (夜間主コース)

【参考書】C.R. バレット, W.D. ニックス, A.S. テルマン著岡村弘之・井形直弘・堂山昌男訳「材料科学 2-材料の強度特性」, ジョン・ウルフ著永宮健夫訳「材料科学入門 III 機械的性質」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】村上理一(M318, 656-7392, murakami@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「機械材料学」, 「材料力学」の履修を前提にして講義を行う。講義の単元が終わるごとにレポートを課し, 2単元が終了するごとに”まとめ”のテストを実施するので, 毎回の予習・復習は欠かさず行うこと。成績評価に対する平常点と試験の比率は4:6とする。平常点には講義への参加状況, 演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み, 試験には小テスト及び最終試験の成績を含む。

微分方程式 1

Differential Equations (I)

教授・長町 重昭, 助手・坂口 秀雄 2単位

【授業目的】微分方程式の解法を修得し, さらに工学の諸分野に現われる微分方程式の解法に活用できるようにする。

【授業概要】微分方程式の理論は数理的工学的な現象の解析に有力な手段を与え, 現代工学の基礎として重要な役割を果たしている。その広範な理論の入門段階として, この講義では微分方程式の具体的な解法を中心に講義する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには, 予習を行い, 講義ノートを中心に, 講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に, 各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 簡単な求積法が理解できる。
2. 2階の定数係数線形常微分方程式が解ける。

【授業計画】1. 変数分離形 2. 同次形 3. 一階線形微分方程式 4. 完全微分形 5. クレーローの微分方程式とラグランジュの微分方程式 6. 高階常微分方程式 7. 2階線形同次微分方程式 (i) 8. 2階線形同次微分方程式 (ii) 9. 非同次微分方程式 10. 記号解法 11. 簡便法 12. 級数解法 13. 通常点における級数解法 14. 確定特異点まわりの級数解法 15. 期末試験

【成績評価】講義への取り組み状況, レポートの提出状況・内容等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】坂口(建設棟2階221)

微分方程式 2

Differential Equations (II)

教授・今井 仁司, 助手・坂口 秀雄 2単位

【授業目的】連立常微分方程式の安定性と簡単な偏微分方程式の解法を修得し, より実際の工学的な問題の解法に活用できるようにする。

【授業概要】「微分方程式 1」に続いて現代工学すべての基礎として重要な役割を果たしている連立常微分方程式系の基本的な解法を講義する。さらに, 簡単な偏微分方程式の解法についても講義する。

【受講要件】「微分方程式 1」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには, 予習を行い, 講義ノートを中心に, 講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に, 各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 簡単な定数係数連立線形常微分方程式が解ける。
2. ラプラス変換とその応用ができる。

【授業計画】1. 定数係数連立線形微分方程式 2. 高階微分方程式と連立微分方程式 3. 連立線形微分方程式 4. 自動系と強制系 5. 2次元自動系の危点 6. 2次元自動系の安定性 7. ラプラス変換の性質 8. 逆ラプラス変換 9. ラプラス変換の応用例 10. 1階偏微分方程式 11. ラグランジュの偏微分方程式 12. 2階線形偏微分方程式 13. 定数係数2階線形偏微分方程式 (i) 14. 定数係数2階線形偏微分方程式 (ii) 15. 期末試験

【成績評価】講義への取り組み状況, レポートの提出状況・内容等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】坂口(建設棟2階221)

ベクトル解析

Vector Analysis

助教授・深貝 暢良 2単位

【授業目的】工学の解析で必要不可欠なベクトルの概念と基礎的な性質を学ぶとともに, ベクトル場の解析学を通して古典力学, 流体力学や電磁気学に現れる基本的な物理法則の数学的な理解・運用を目標とする。

【授業概要】三次元空間のベクトルで表される物理量の局所的変化(微分)と大域的効果(積分)を記述する手法としてベクトル場の微分積分学を展開し, 微分積分学の基本定理のベクトル場に対する一般化を確立する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】予習と復習が必要です。平日頃より問題演習に取り組みましょう。

【到達目標】

1. ベクトル場の微分が理解できる。
2. ベクトル場の積分が理解できる。

【授業計画】1. はじめに 2. ベクトル 3. 内積, 外積 4. ベクトル関数, 曲線 5. 曲面 6. スカラー場, ベクトル場, 勾配 7. 回転, 発散 8. 線積分 9. 重積分 10. 面積分 11. ストークスの定理 12. グリーンの定理 13. ガウスの発散定理 14. 積分定理の応用 15. 期末試験

【成績評価】講義への取り組み状況, 期末試験の結果等を総合して行う。

【教科書】鶴丸孝司・久野昇司・渡辺敏・志賀野洋『ベクトル解析』内田老鶴園

【参考書】安達忠次『ベクトル解析』培風館, H.P. スウ『ベクトル解析』森北出版, 鶴丸孝司・久野昇司・渡辺敏・志賀野洋『ベクトル解析演習』内田老鶴園, 寺田文行・福田隆『演習と応用ベクトル解析』サイエンス社, 青木利夫・川口俊一・高野清治『演習・ベクトル解析』培風館, 山内正敏『詳説演習ベクトル解析』培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】工学部数学教室

メカトロニクス工学

Mechatronics Engineering

教授・岩田 哲郎 2単位

【授業目的】メカトロニクスの構成要素として必要不可欠な, 各種のセンサとモータの動作原理, および制御回路の基礎知識を習得させる。

【授業概要】最初に, 以後の講義を理解するために必要な, OP アンプ回路と負帰還増幅器の簡単な説明を行なう。その後, 2部構成として, 前半で各種のセンサの動作原理と応用回路について講述する。後半では各種のモータの動作原理と駆動回路について講述する。

【受講要件】電子回路の受講を前提とする。

【履修上の注意】毎回の復習を特に重視する。

【到達目標】

1. 基本的なセンサの動作原理と駆動回路を理解すること
2. 各種モータの動作原理と駆動回路を理解すること
3. データシートから必要な情報を読み取れるようになること

【授業計画】1. OP アンプ回路の基礎 2. 負帰還増幅器の基礎 3. 熱電対 4. 白金測温抵抗体 5. フォトセンサ 6. ホールセンサ 7. 磁気抵抗素子 8. 圧力センサ 9. AC 電流センサ 10. 超音波センサ 11. モータの種類と動作原理 12. DC モータと AC モータ 13. ステッピングモータ 14. PLL 回路 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】レポートの提出状況とその内容, 及び中間試験と最終試験の成績を総合して判定する。中間試験は平常点に含め, 中間試験と最終試験の比率は4:6とする。

【教科書】松井邦彦著「センサ応用回路の設計製作」CQ 出版社, 「モータ制御&メカトロ技術入門」トランジスタ技術 SPECIAL NO.61 CQ 出版社

【参考書】「センサ応用回路の活用ノウハウ」トランジスタ技術 SPECIAL NO.66 CQ 出版社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岩田(M427, 656-9743, iwata@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】メカトロニクスとは, メカニクス, エレクトロニクス, オプティクスの技術融合により新機能・高性能装置を創出する工学であり, 制御工学の知識を導入してコンピュータにより機械の知能化をはかる技術分野である。したがって, 装製作, 計測といった観点から, 全ての科目を総合的に勉強する必要がある。

メカトロニクス実習

Mechatronics Laboratory

教授・小西 克信, 講師・大石 篤哉 2単位

機械工学科 (夜間主コース)

【授業目的】メカトロニクスの基本的事項を、基礎的な実習を通して習得させる。IC トレーニングキット、ワンボードマイクロコンピュータ、各種センサと制御用モータが実装された専用の実習用キット、パーソナルコンピュータ (Visual C 搭載)、といった教材を順番に使用して実習を進めていく。データシートが読解でき、与えられた設計課題に対応できる能力を育成する。

【授業概要】以下の3部構成とする。(1) 電子回路の基礎 (特にデジタル回路)、(2) ワンボードマイクロコンピュータ、(3) パーソナルコンピュータ (C 言語) による装置の制御。(1) では、TTL IC とそのデータシートを与え、その動作確認を行う。またオシロスコープの使い方をマスターする。最後に簡単なパルス発生器を設計製作しその動作確認を行う。(2) では、Z80 のアセンブラを習得し、同時にマイクロコンピュータとその周辺のハードウェアを理解する。ここでの最大の目標は、割込の重要性を認識させることである。(3) ではより複雑な装置制御のプログラムを C 言語で作成する。

【受講要件】電子回路、メカトロニクス工学を履修していることが望ましい

【履修上の注意】全回出席を原則とする

【到達目標】

1. 簡単なデジタル IC を使用できるようになること
2. オシロスコープで波形を観測できるようになること
3. ワンボードマイクロコンピュータとアセンブラ言語を理解すること
4. 割込み処理の重要性を認識し、簡単な動作確認ができるようになること
5. C 言語で装置制御ができるようになること

【授業計画】1. ゲート IC の動作確認 2. オシロスコープの使用 3. フリップフロップとカウンタ IC の使用 4. パルス発生器の設計製作 5. Z80 の機械語命令 6. ワンボードマイコンの動作 7. ワンボードマイコンによる装置の制御 8. ワンボードマイコンによる割込制御 9. C 言語による装置の制御 (1) 10. C 言語による装置の制御 (2) 11. C 言語による装置の制御 (3) 12. C 言語による装置の制御 (4)

【成績評価】各回の実習毎に与えた課題を達成したかどうかをチェックする。さらに第 4 回目、第 8 回目、第 12 回目で各パートの理解度を総合的にチェックする。

【教科書】専用のテキストを使用する。

【参考書】「メカトロニクス工学」を参照

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】メカトロニクス工学、電子回路の講義を受講しているのが望ましい。特に出席状況を重視する。

流体機械

Fluid Machinery

教授・福富 純一郎 2 単位

【授業目的】水と大気に囲まれて生活する我々にとって、流体の利用はかせない。流体を圧送したり、流体のエネルギーを有効利用する流体機械を人間生活に役立てていくために必要な基礎知識を身につけさせる。

【授業概要】流体エネルギーと機械的エネルギーの変換機器としての流体機械について概説し、その作動原理、性能特性及び用途について理解させる。

【受講要件】「流体力学」の履修を前提として講義する。

【履修上の注意】演習を行うので、講義を注意して受講すること。

【到達目標】

1. 流体機械の作動原理を理解する。
2. 流体機械の特性と諸現象を理解する。
3. 流体機械の種類と用途を理解する。

【授業計画】1. 流体のエネルギーと流体機械の定義 2. 流体機械の仕事と効率、演習 3. 流体機械の分類・容積式流体機械の作動原理 4. ターボ機械の作動原理・翼の作用とオイラーの比仕事 5. 軸流ターボ機械、演習 6. 遠心ターボ機械 7. せん断応力を媒介とする作動方式 8. 流体機械の特性と諸現象・相似則と比速度 9. 特性曲線、演習 10. キャピテーション 11. 騒音 12. 流体機械の種類と用途・ポンプ、演習 13. 送風機・圧縮機 14. 水車・タービン 15. 流体伝動装置、演習 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、講義中に行う演習問題の提出状況とその解答、中間試験及び最終試験の成績を総合して行う。成績評価に対する平常点と試験の比率は 2:8 とする。平常点としては、演習問題の提出状況及び回答内容により評価する。試験には中間試験及び期末試験の成績を含む。

【教科書】井上雅弘、鎌田好久著「流体機械の基礎」コロナ社

【参考書】妹尾泰利著「内部流体力学と流体機械」養賢堂

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】福富(M519, 656-7367, fukutomi@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「流体力学」の履修を前提として講義する。

流体力学

Fluid Dynamics

教授・石原 国彦 2 単位

【授業目的】水や空気に代表される様々な流体の力学的挙動を、簡単な理論によって説明し、流体力学の基礎知識を身につけさせることを目的とする。

【授業概要】流れを表す量、流体の物性値について述べ、静止流体の力学、運動する流体の連続の式、エネルギー保存の式を説明し、さらに運動量および角運動量の法則により、流体中に置かれた物体に作用する力の求め方や圧力、流速の計測法を説明する。

【受講要件】「材料力学」の履修を前提として講義を行う。

【履修上の注意】講義中に演習を行う場合があるので、電卓を持参すること。

【到達目標】

1. 流れの種類、流れを表す諸量、物性値、単位が理解できる。
2. 静止流体での物体に作用する力(浮力など)を求めることができる。
3. 運動する物体について、連続の式、運動量の式を理解し、記述できる。
4. 運動量および角運動量の法則を理解し、それを適用して物体に作用する力を求めることができる。

【授業計画】1. 流れの基礎 2. 静止流体の力学 3. 流管に沿う流れ 4. 運動量法則と角運動量 5. 流体計測

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、受講姿勢、演習の解答、最終試験の成績を総合して行う。成績評価では受講姿勢およびレポートを 30%、最終試験の成績を 70% と評価する。

【教科書】大橋秀雄著「流体力学 (1)」コロナ社

【参考書】笠原英司監修「図解流体力学の学び方」オーム社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】石原(M518, 656-7366, ishihara@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】材料力学・積分の基礎知識を前提として講義する。

労務管理

Personal Management

非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為にヒトをどのように動かしているかを理解する。

【授業概要】講義計画に従い労務管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 企業経営は、経営資源 (ヒト・モノ・カネ・情報) を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果 (利益と持続性) を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で人的資源をいかに活用しているかについて講義する。2. 組織と職務分掌 3. 配置と移動 4. 人事考課 5. レポート 6. 賃金 7. 能力開発 8. 安全衛生 9. 労使関係 10. その他 11. レポート

【成績評価】出席率、レポートの内容

【教科書】その都度、提供する。

【参考書】市販の労務管理に関する書籍

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

ロボット工学

Robotics

教授・小西 克信 2 単位

【授業目的】ロボットは産業界だけでなく、生活の中に広く浸透しようとしているが、このようなロボットを作り動かすための基礎知識の習得を目的とする。このため、ロボットの構成部品、機構、運動、制御、応用例等に関する講義を行う。

【授業概要】実用化されているロボットは、本体が土台の上に固定され、関節で接続されたリンクによりハンドが空間中を自由に動く機構が多い。この産業用ロボットを中心に、関節を動かすアクチュエータの原理、人間の五感に相当するセンサの種類と用途、ロボットの機構と簡単な設計例、位置と姿勢の計算法や運動方程式の導出、ロボットに特有の制御法、そして最後にロボットの応用技術について講義する。

【受講要件】必須の要件はないが、下記「注意」の科目を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】「材料力学 1」、「機械力学」、「機械設計」、「自動制御理論」、「電子回路」を履修していることが望ましい。

【到達目標】

機械工学科（夜間主コース）

1. リンク座標の設定と運動方程式導出法の理解
2. アクチュエータとセンサの動作原理の理解
3. 代表的な機構と制御法の理解

【授業計画】1. ロボットの運動学 2. ロボットの運動学 3. ロボットの力学 4. ロボットの力学 5. 中間試験 6. ロボット用アクチュエータ 7. ロボット用アクチュエータ 8. ロボット用センサ 9. ロボット用センサ 10. 中間試験 11. ロボットの機構と設計 12. ロボットの機構と設計 13. ロボットの制御 14. ロボットの制御 15. ロボット応用技術 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解度の評価は、3回の試験と授業への取り組み状況などを総合して行う。

【教科書】則次ほか共著「ロボット工学」(朝倉書店)と適宜配布するプリントを併用する。

【参考書】中野栄二著「ロボット工学入門」オーム社、J.J. クライグ著三浦宏文・下山勲訳「ロボティクス-機構・力学・制御-」共立出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】小西(M423, 656-7383, konishi@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】宿題として毎週演習問題数問をレポートによって解答させる。知識の整理の意味で4週の講義に対して試験1回を行う。

化学応用工学科

化学応用工学科の教育目的・目標	131
化学応用工学科の教育内容の特徴	131
化学応用工学科（昼間コース）履修方法	133
化学応用工学科（昼間コース）履修登録，進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定	133
化学応用工学科（昼間コース）カリキュラム表	135
化学応用工学科（昼間コース）教育課程表	136
化学応用工学科（昼間コース）講義概要	139
化学応用工学科（夜間主コース）履修方法	157
化学応用工学科（夜間主コース）履修登録，進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定	157
化学応用工学科（夜間主コース）カリキュラム表	158
化学応用工学科（夜間主コース）教育課程表	159
化学応用工学科（夜間主コース）講義概要	161

化学応用工学科の教育目的・目標

理念（教育目的）

化学は物質科学の中心として新しい物質を生み出して、豊かな生活の実現・人類の福祉に貢献してきた。化学応用工学科では、“化学はよりよい明日の生活を創造し、人間の健康と地球環境生態系保全との調和をはかる科学（専門分野）である”と考え、将来学生が化学の役割と化学者・化学技術者であることに誇りを持ち、育つことを目指している。このような考えの基に、物質の分子・反応設計から製造プロセスにわたる広範囲の教育・研究を行い、人間と自然が共存する新しい豊かな社会に向かって行動・貢献する人材を育成する。

教育目標

1. 豊かな人格・幅広い教養および自発的学習意欲の育成

進学率の向上に伴い学生の学力、意識が多様化しており、世間では理科離れや科学技術離れが言われているように、将来ははっきりと化学技術者になることを志望して入学する学生が、少なくなっているように感じられる。種々の自然科学・人文科学・社会科学・基礎科学科目、化学序論および実験・実習を学習して好奇心や学問への興味を喚起し、自ら能動的に知識を探し求め、生きた形で幅広く吸収して新しいものを作り出す原動力を育成する。自発的に涵養された学習意欲によって社会的使命観、倫理観、歴史観（科学技術史）を備えた化学者・化学技術者としての素地を養成して、将来技術者となる目的意識を明確にさせる。

2. 工学の基礎知識による分析力と探求力の育成

化学応用工学科の専門分野（物質合成化学・物質機能化学・化学プロセス工学）に共通する専門基礎科目（数学・物理学・化学・化学工学基礎）は、学生の自発的学習意欲や興味を高め、必修科目または選択科目(A)として履修できるようにしてある。専門科目は、学生がトピックスや化学技術の動向に関心を持ちながら学習できるように選択科目(B)として主に3年次が開講されている。専門基礎科目の自発的学習、演習・実験によって養われる数学的・自然科学的知識を通して論理的な解析力・思考力・探求力を育成する。

3. 専門基礎知識による問題解決力、もの作りへの応用力、表現力の育成

卒業研究・雑誌講読については、与えられた研究テーマの実験を4年次1年間を通して行なうことによって、専門分野にかかわる研究手法や方法論を学び、問題を発見し、研究の動向を把握・理解して自分でまとめ上げ、口頭発表を最終試験として履修するようにしている。低学年次で養われた生きた知識と知恵を卒業研究・雑誌講読を通して、高度なレベルに到達させる。具体的には、論理的解析力・応用力、適正な判断力によって“もの作り”ができる能力を育てると同時に、各自の研究や調査結果についてプレゼンテーションやコミュニケーションができるよう訓練する。こうして、広い視野から社会に貢献できる素養を備えた化学者・化学技術者を育成する。

化学応用工学科の教育内容の特徴

現代の化学技術の飛躍的発展は、化学の基礎理論とその応用技術に負うところが大きい。化学応用工学科では、各種の高機能性物質材料の分子設計と合成手法の開発に関する物質合成化学講座、物質の構造と機能の実用的応用の基礎となる集合状態の特性を微視的立場から解明する物質機能化学講座、ならびに化学工業における製造プロセスの開発と装置およびプラントの設計、保全に関する化学プロセス工学講座が、それぞれ相互に協力して物質の分子設計から製造工程にわたる広範囲の教育・研究を行い、産業界の要請に応えうる人材養成をめざしている。新しい化合物の合成や材料開発、さらにシステム開発に対応するためには、基礎学力と柔軟な応用力が必要であるため、以下に述べる科目の分類とカリキュラム表および教育課程表を参照して、各自が自主的・計画的に学習することが望まれる。カリキュラムの編成にあたっては、基礎から応用までの専門知識を系統的に体得するとともに、豊かな人格、幅広い教養および倫理観を身につけ、自発的に問題を解決する能力や、創造性、表現力、コミュニケーション能力を備えた化学者・化学技術者を養成することを目標としている。

1年次では自然科学・人文科学・社会科学などの教養科目と、外国語科目、健康スポーツ科目、基礎教育科目からなる全学共通教育科目の他、専門課程への導入教育として、昼間コースでは化学序論1および2が開講される。夜間主コースの導入的科目としては、有機化学1および無機化学1の必修科目が1年次前期に開講される。数学と物理学の基礎および物理化学・有機化学・無機化学・分析化学・化学工学基礎の諸科目は、どの分野に進む場合でも専門基礎として必要であるため、1年次から2年次にかけて必修または選択科目(A)として組み込まれている。昼間コース2年次に開講される化学英語1および2では、最新の化学論文やインターネットでの情報収集に必要な英文読解力と、実験等で得られた結果を口頭および文章として英語で伝えるためのコミュニケーション能力を高めることを目標とする。

化学応用工学科

物質合成化学・物質機能化学・化学プロセス工学の3つの分野にわたる専門選択科目(B)は、主として3年次から4年次に開講される。また、各分野における最新の学問の進歩に対応するため、学外の専門家による特別講義が集中講義として開講される。夜間主コースでは時間割の制約で選択科目が限定されるが、昼間コース選択科目の多くを履修できることが認められている。昼間および夜間主コースにおいて、実験科目はすべて必修であり、基本的な実験手法を身につけるとともに、講義・演習で学習した内容を実験を通じて体得することを目標としている。

専門科目で学ぶ化学技術は産業と密接に関連している。産業界において化学技術者は、産業災害を防ぎ、人間の健康と地球環境との調和を図ることが重要な役目であることを認識する必要がある。そのため、安全工学、防災化学、環境化学、環境調和技术論、工学倫理など多くの科目の中で、有害物質・危険物の取り扱いや、災害防止、地球環境問題、工業倫理などについて様々な観点からの講義が行われる。また、産業の現場で実習を行うインターンシップ(学外学習)についても選択科目としての単位が認められるほか、4年次の工学通論科目として開講される労務・生産管理やニュービジネス概論などの一連の科目により、産業界への視野を広め、経営や起業について学ぶことができる。

卒業研究は、昼間コースでは必修科目、夜間主コースでは選択科目である。卒業研究着手を認められた者は各研究室に配属され、各自の研究テーマについて研究実験または理論研究を行い、その成果を自力で卒業論文にまとめるよう指導を受ける。そのため、各研究室では、海外の学術文献の読解力を身につけるため雑誌講読や原著輪講に力を入れている。卒業論文発表会は、学部課程の最終試験を兼ねており、専門学会での学術発表が行えるレベルを目標とする。

化学応用工学科（昼間コース）履修方法

授業科目は全学共通教育科目と専門教育科目に大別される。卒業するためには、全学共通教育科目を40単位以上、専門教育科目を90単位以上、合計130単位以上を修得することが必要である。全学共通教育科目は、1・2年次の早い段階で修得を完了することが望ましい。

カリキュラム表に示す専門科目において、化学基礎科目と実験は、すべての分野における基礎科目であるため、全員の履修を前提としている。物質合成化学・物質機能化学・化学プロセス工学の3つの講座が担当する選択科目は2年次から順次開講される。物質合成化学は、主に有機化学を基礎として分子設計と合成手法、さらに各種の物質材料の高度機能の開発と設計を学ぶ。物質機能化学は、主に物理化学や分析化学を基礎として、原子・分子やその集合状態の特性を分析・解析する手法、物質の構造と機能の実用的応用を学ぶ。化学プロセス工学は、主に無機化学や化学工学を基礎として、化学工業における製造プロセスの開発と装置およびプラントの設計、保全を学ぶ。

履修登録にあたっては、各講座の専門分野の特徴を理解した上で1つの講座の開講科目を重点的に選択履修することにより、その分野の中心となる科目群を系統的に学習し、さらに他の2つの講座の開講科目からも複数の科目を履修することにより視野を広げることが望まれる。科目の内容や科目間の関連は、講義概要（シラバス）に詳しく記載されている。

高等学校教員免許状（工業）を取得するには、どの講座の科目を主として選択しても可能であるが、卒業要件とは別に履修科目と単位数に関する規定がある。卒業要件を満たしても教員免許状取得のための単位数が不足する場合も考えられるので注意すること。詳細は「教育職員免許状取得について」に記載されている。

放送大学との単位互換については、放送大学の授業科目の単位を取得した場合、8単位を限度として全学共通教育科目の単位として卒業に必要な単位に含めることができる。詳細は「全学共通教育履修の手引」に記載されている。なお、化学応用工学科の専門教育科目については、放送大学との単位互換を行わないので注意すること。

昼間コースの学生の進級および卒業研究着手のためには、次の規定に定められた手続きに従って履修登録を行い、所定の単位を修得する必要がある。この規定において、進級規定の単位数は最低の基準を示しているものであり、目標にする数ではない。進級規定の単位数を目標にすると、4年次に進級しても卒業研究に着手できないことがあり、その場合は4年次で留年することになる。また、卒業研究着手規定の単位数も進級規定と同様に最低の基準を示しており、規定単位だけを修得して卒業研究に着手すると、4年次で多くの科目を履修する必要が生じ、卒業研究等に支障をきたすことがある。

学期および年間に履修登録できる単位数には制限が設けられており、無理のない履修計画を立てることができるように配慮がなされている。履修登録上限の範囲内でなるべく多くの科目を履修し、着実に学習を進めれば、卒業に必要な単位の大部分を3年次末までに修得することが充分可能である。卒業に必要な単位のうち、卒業研究と雑誌講読以外のすべてを3年次末までに修得しておくことが望ましい。

なお、4年次当初に卒業研究着手できなかった場合で、4年次前期末に着手規定の条件を満足すれば、希望に応じて後期から卒業研究に着手することもできる。ただし、卒業研究には1年間を要するので、翌年3月に卒業することはできない。この後期着手を希望する場合は、学科長またはクラス担任に申し出ること。

化学応用工学科（昼間コース）履修登録、進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定

この規定は、工学部規則第3章、第4条（履修手続）、第6条（進級要件）、第7条（卒業研究）に基づいて定めるものである。

1. 履修登録

履修登録できる単位数は、1年次においては全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて半期27単位、年間50単位を上限とし、2年次以降においては全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて半期22単位、年間40単位を上限とする。ただし、各年度末において上限単位数を修得しGPAの値が3.5以上の者については、次年度に履修登録できる単位数の上限を全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて半期27単位、年間50単位とする。再受講科目（同一科目を再び履修する場合および不合格科目を放棄して新たに別の科目を履修する場合を含む）の単位数は履修登録上限単位数に含まれる。なお、外国語(2)を履修する場合は、その単位数は履修登録上限単位数に含めない。特別講義等別に定める科目については履修登録上限およびGPA評価の対象外とする。留年した学生の履修登録については、全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて半期22単位、年間40単位を上限とし、登録科目は当該学年および下級学年の科目を優先する。ただし、全学共通教育および専門教育2年次開講の実験科目（基礎化学実験および工業物理学実験）に限り、留年して1年次にとどまった場合でも入学後2年目に履修することを原則とする。それ以外の上級学年科目の履修については、履

化学応用工学科（昼間コース）

修登録上限単位数の範囲内で、かつ当該学年の科目履修を優先した上で、登録時以前に予め科目の担当教官の承諾を得たものについてのみ認める。

留年以外の理由による上級学年の科目の履修は、原則として認めない。ただし、各学年の履修登録上限単位数の範囲内で、かつ当該学年の科目履修を優先した上で、登録時以前に予め科目の担当教官の承諾を得たものについてのみ例外的に認めることがある。

履修登録した科目は、登録受付期間終了後は原則として変更できない。

2. 進級要件

2 年次への進級規定

2 年次に進級するためには、全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて 32 単位以上を修得していなければならない。

3 年次への進級規定

3 年次に進級するためには、次に指定する条件をすべて満たしていなければならない。

- (1) 全学共通教育科目において、36 単位以上を修得していなければならない。
- (2) 「基礎化学実験」が未修得であってはならない。
- (3) 専門教育科目において、必修科目を 11 単位以上修得していなければならない。
- (4) 「工業物理学実験」が未修得であってはならない。

4 年次への進級規定

4 年次に進級するためには、3 年次への進級規定で指定した条件に加えて「化学応用工学実験 1,2,3,4」の単位をすべて修得していなければならない。

各年次への進級判定は、年度末の学科会議で行う。

3. 卒業研究着手要件

化学応用工学科の昼間コースにおいて、次に指定する諸条件をすべて満たした者は卒業論文のための研究に着手することができる。ただし、学則第 35 条の 2 の規定による卒業（早期卒業）のための卒業研究着手要件については別に定める。

- (1) 全学共通教育科目において卒業に必要な単位の未修得があってはならない。
- (2) 3 年次までの専門必修科目について未修得単位があってはならない。
- (3) 専門選択科目 (A) について 10 単位以上を修得していなければならない。
- (4) 専門教育科目について 70 単位以上を修得していなければならない。
- (5) 修得単位についての条件を満たした者は、卒業研究着手について化学応用工学科の承認を得なければならない。

早期卒業のための卒業研究着手要件

3 年次前期末において以下の条件をすべて満たし、早期卒業を希望する者については、学科会議で審議の上、例外的に 3 年次後期に卒業研究着手を認めることがある。

- (1) 全学共通教育科目について卒業に必要な単位を修得していること。
- (2) 3 年次前期末までの専門必修科目の単位をすべて修得していること。
- (3) 専門選択科目 (A) について卒業に必要な単位を修得していること。
- (4) 全学共通教育科目及び専門科目について合計 124 単位以上を修得していること。
- (5) GPA の値が 4.0 以上であること。

附則 この規定は、平成 12 年 4 月 1 日から施行し、平成 12 年度入学者（平成 12 年度及び平成 13 年度に編入学する者並びに平成 12 年度に補欠入学する者及び平成 13 年度に第 3 年次に補欠入学する者を除く。）から適用する。

化学応用工学科（昼間コース）

化学応用工学科（昼間コース）カリキュラム表

科目群	1年		2年		3年		4年		
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
全学共通教育科目	人文科学・社会科学・自然科学・情報科学・工学系教養(総合分野・学部開放分野)								
外国語科目	英語(1)・ドイツ語(1) フランス語(1)・中国語(1)		英語(2)・ドイツ語(2)						
健康スポーツ科目	健康スポーツ演習	健康スポーツ演習							
基礎教育科目	基礎数学a 基礎数学c 基礎物理学f	基礎数学b 基礎数学d 基礎物理学g		基礎化学実験					
専門教育科目	工業数学		#微分方程式1 ベクトル解析	微分方程式2 複素関数論	微分方程式特論		確率統計学		
	工業物理学		#量子力学	統計力学					
	化学基礎	*化学序論1 *化学序論2 *基礎分析化学	*基礎物理化学 *基礎無機化学 *基礎有機化学	#物理化学 #無機化学 #有機化学 #反応工学基礎 化学英語1 防災化学	#化学工学基礎 化学英語2				
	物質合成化学			高分子化学 物質合成化学1 及び演習	反応有機化学 機能性高分子 設計 物質合成化学2 及び演習	有機合成化学 分子設計化学 有機工業化学 生化学			
	物質機能化学			分析化学及び 演習	環境化学 機器分析化学 応用電気化学	量子化学 物質機能化学1 及び演習	生物物理化学 流体物性 物質機能化学2 及び演習		
	化学プロセス工学			化学装置工学	材料科学 化学反応工学	材料物性 無機工業化学 分離工学 微粒子工学 反応工程設計 触媒工学 安全工学	生物化学工学 自動制御 プロセス工学1 及び演習 プロセス工学2 及び演習		
	実験・実習			*工業物理学実験		*化学応用工学 実験1 *化学応用工学 実験2	*化学応用工学 実験3 *化学応用工学 実験4	*雑誌講読 *卒業研究	*雑誌講読 *卒業研究
	工学通論			環境調和技術 論	電子計算機概 論及び演習	学外学習 工学倫理		労務管理 生産管理 エコシステム工学 福祉工学概論 職業指導 ニュービジネス概論 知的所有権概論	

全学共通科目の詳細については、「全学共通教育履修の手引」及び「時間割表」を参照のこと

*は専門必修科目、#は専門選択科目(A)

化学応用工学科（昼間コース）

化学応用工学科（昼間コース）教育課程表

全学共通教育科目

授業科目（分野）	単位数		
	必修	選択必修	選択
人文科学分野		4	4
社会科学分野		4	
自然科学分野		4	
総合分野・学部開放分野			
外国語科目	(8)		
健康スポーツ科目	(2)		
基礎教育科目	13+(1)		
全学共通教育科目小計	40		

履修にあたっての注意事項

*全学共通教育科目において卒業に必要な単位数。
 教養科目は、人文科学・社会科学・自然科学のそれぞれの分野から4単位以上、総合科目及び学部開放科目を含む全教養科目から4単位以上を修得すること（別表参照）。外国語・健康スポーツ・基礎教育科目の括弧つきの数字は、演習または実験の単位を示す。
 二年次開講の外国語科目は英語2を履修するのが望ましい。
 開講時期・授業時間数・担当者等の詳細については各年度に於ける全学共通教育運営委員会発行の「全学共通教育履修の手引き」及び「全学共通教育時間割表」を参照のこと。

専門教育科目

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）										担当者	備考	頁
	必修	選択A	選択B	1年		2年		3年		4年		計				
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
安全工学			1					1				1	坂		139	
エコシステム工学			2							2		2	エコシステム工学専攻教官		139	
応用電気化学			2				2					2	松井		140	
化学英語1			2			2						2	南川・妹尾		140	
化学英語2			2			2						2	杉山・ロック		140	
化学応用工学実験1	(2)							(6)				(6)	金崎・藪谷・林・市原・守時		140	
化学応用工学実験2	(2)							(6)				(6)	南川・妹尾・平野・西内 森・先川・市原		141	
化学応用工学実験3	(2)								(6)			(6)	松井・魚崎・安澤・鈴木 林・市原		141	
化学応用工学実験4	(2)								(6)			(6)	川城・杉山・森賀・加藤 外輪・村井・林		141	
化学応用工学特別講義1			1						1			1	非常勤講師		141	
化学応用工学特別講義2			1					1				1	非常勤講師		142	
化学応用工学特別講義3			1						1			1	非常勤講師		142	
化学工学基礎		2					2					2	富田		142	
化学序論1	2			2								2	林・富田・田村		142	
化学序論2	2			2								2	佐藤・津嘉山		142	
化学装置工学			2			2						2	中林・村井・三木田		143	
化学反応工学			2				2					2	林		143	
学外学習			(1)					(3)				(3)			143	
確率統計学			2							2		2	長町		143	
環境化学			1				1					1	本仲		143	
環境調和技術論			1			1						1	宣川		144	
機器分析化学			2				2					2	岩田		144	
基礎物理化学	2				2							2	田村・魚崎		144	
基礎分析化学	2			2								2	本仲		144	
基礎無機化学	2				2							2	安澤・森賀		145	
基礎有機化学	2				2							2	佐藤・津嘉山		145	
機能性高分子設計			2					2				2	妹尾		145	
工学倫理			2					2				2	井村・三崎		145	
工業物理学実験	(1)				(3)							(3)	金城・中村		146	
高分子化学			2			2						2	佐藤		146	
材料科学			2			2						2	中林		146	
材料物性			2					2				2	森賀		146	

化学応用工学科（昼間コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）										担当者	備考	頁
	必修	選択 A	選択 B	1年		2年		3年		4年		計				
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
雑誌講読	(1)									(1)	(1)	(2)	化学応用工学科全教官		147	
自動制御			2						2			2	外輪		147	
職業指導			4							4		4	坂野		147	
触媒工学			2					2				2	杉山		147	
生化学			2						2			2	南川・森		148	
生産管理			1							1		1	井原		148	
生物化学工学			2					2				2	川城		148	
生物物理化学			2						2			2	田村		148	
卒業研究	(9)									(13)	(14)	(27)	化学応用工学科全教官		148	
知的所有権概論			1							1		1	酒井		149	
電子計算機概論及び演習			1(1)				1(2)					1(2)	白石		149	
統計力学			2			2						2	大野		149	
ニュービジネス概論			2							2		2	山崎・伊藤		149	
反応工学基礎		2				2						2	川城		150	
反応工程設計			2						2			2	林		150	
反応有機化学			2						2			2	河村		150	
微分方程式 1		2				2						2	深貝		150	
微分方程式 2			2				2					2	深貝		150	
微分方程式特論			1						1			1	深貝		151	
微粒子工学			2						2			2	土屋		151	
福祉工学概論			2							2		2	末田・藤澤		151	
複素関数論			2			2						2	澤下		151	
物質機能化学 1 及び演習			2						2			2	田村・鈴木		152	
物質機能化学 2 及び演習			2							2		2	安澤		152	
物質合成化学 1 及び演習			2				2					2	河村・西内		152	
物質合成化学 2 及び演習			2						2			2	平野・森		152	
物理化学		2				2						2	金崎		153	
プロセス工学 1 及び演習			2							2		2	杉山		153	
プロセス工学 2 及び演習			2							2		2	加藤		153	
分子設計化学			2							2		2	平野		153	
分析化学及び演習			2			2						2	本仲・藪谷		154	
分離工学			2						2			2	冨田		154	
ベクトル解析			2			2						2	澤下		154	
防災化学			1			1						1	坂		154	
無機化学		2				2						2	松井		155	
無機工業化学			2						2			2	村田		155	
有機化学		2				2						2	津嘉山・河村		155	
有機工業化学			2							2		2	河村・南川		155	
有機合成化学			2							2		2	津嘉山		155	
流体物性			2							2		2	魚崎		156	
量子化学			2						2			2	金崎		156	
量子力学		2				2						2	金城		156	
労務管理			1							1		1	井原		156	
工業基礎英語 I			1	1								1	広田		145	
工業基礎数学 I			1	1								1	吉川		146	
工業基礎物理 I			1	1								1	佐近		146	
専門教育科目小計	12 (19) 31	14 14	101 (2) 103	9 9	6 6	22 (3) 25	24 (2) 26	29 (15) 44	22 (12) 34	15 (14) 29	15 (15) 15	127 (61) 188	講義 演習・実習 計			

化学応用工学科（昼間コース）

備考

1. を付した科目の単位は，卒業に必要な単位数に含めない．
2. 印を付した科目は，夜間主コ - スの学生も履修できる．
3. 印を付した科目は，履修登録上限および GPA 評価の対象外とする．

卒業に必要な単位数

全学共通教育科目	40 単位以上
専門必修科目	31 単位
専門選択科目 A	10 単位以上
専門選択科目 B	49 単位以上
計	130 単位以上

化学応用工学科 (昼間コース) 講義概要

目次

安全工学 139
 エコシステム工学 139
 応用電気化学 140
 化学英語 1 140
 化学英語 2 140
 化学応用工学実験 1 140
 化学応用工学実験 2 141
 化学応用工学実験 3 141
 化学応用工学実験 4 141
 化学応用工学特別講義 1 141
 化学応用工学特別講義 2 142
 化学応用工学特別講義 3 142
 化学工学基礎 142
 化学序論 1 142
 化学序論 2 142
 化学装置工学 143
 化学反応工学 143
 学外学習 143
 確率統計学 143
 環境化学 143
 環境調和技术論 144
 機器分析化学 144
 基礎物理化学 144
 基礎分析化学 144
 基礎無機化学 145
 基礎有機化学 145
 機能性高分子設計 145
 工学倫理 145
 工業基礎英語 I 145
 工業基礎数学 I 146
 工業基礎物理 I 146
 工業物理学実験 146
 高分子化学 146
 材料科学 146
 材料物性 146
 雑誌講読 147
 自動制御 147
 職業指導 147
 触媒工学 147
 生化学 148
 生産管理 148
 生物化学工学 148
 生物物理化学 148
 卒業研究 148
 知的所有権概論 149
 電子計算機概論及び演習 149
 統計力学 149
 ニュービジネス概論 149
 反応工学基礎 150
 反応工程設計 150
 反応有機化学 150
 微分方程式 1 150
 微分方程式 2 150
 微分方程式特論 151
 微粒子工学 151
 福祉工学概論 151
 複素関数論 151
 物質機能化学 1 及び演習 152
 物質機能化学 2 及び演習 152
 物質合成化学 1 及び演習 152

物質合成化学 2 及び演習 152
 物理化学 153
 プロセス工学 1 及び演習 153
 プロセス工学 2 及び演習 153
 分子設計化学 153
 分析化学及び演習 154
 分離工学 154
 ベクトル解析 154
 防災化学 154
 無機化学 155
 無機工業化学 155
 有機化学 155
 有機工業化学 155
 有機合成化学 155
 流体物性 156
 量子化学 156
 量子力学 156
 労務管理 156

安全工学

Safety Engineering

非常勤講師・坂 清次 1 単位

【授業目的】化学物質は人間の生活に欠かせないものであるが、取り扱いを誤ると人体や環境を脅かす有害な物質として作用する。安全・健康問題に対して、化学物質の安全からプロセスや機器の安全、化学企業や業界が行う対策まで具体的な事例を通じて理解させる。

【授業概要】化学物質の安全管理の基本を理解し、世界および日本の化学工業で起きた事故のケーススタディーを中心に安全の原理、原則の理解を進める。また地球環境問題と世界標準について学び、グローバルな視点から安全の背景を概観する。

【受講要件】特になし。

【到達目標】

1. 化学物質の安全管理の基本を理解する。
2. 化学工業で起きた事故を通して安全の原理・原則を理解する。
3. 地球環境と世界基準について理解を深める。

【授業計画】1. 化学物質の安全管理：化学物質の爆発・火災危険性、危険物とその種類、化学物質の爆発・火災危険性の事前評価 2. 化学業界のレスポンス・ケア活動：PRTR, MSDS など 3. 地球環境問題 4. 世界標準：国際標準規格 ISO9000, 14000 を中心に 5. 重大事故に学ぶ：世界と日本の重大事故 6. レポート作成 (最終試験)

【成績評価】講義への参加状況 (質疑応答:3 割) およびレポート (最終試験:7 割) の内容を総合して行う。

【教科書】特に使用しない。各種の資料、教材を適宜配布し講義に使用する。特に使用しない。

【参考書】化学工場の安全管理総覧 (中央労働災害防止協会)、化学安全ガイド (丸善)、第 4 版、石油化学工業の現状 (石油化学工業協会) など

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】加藤(M304, 656-7429, katoh@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】一方的な講義ではなく、質問を歓迎し、講師から学生への問いかけ応答を評価する。

エコシステム工学

Ecosystem Engineering

教授・三輪 恵, 近藤 光男, 村上 仁士

教授・末田 統, 助教授・松尾 繁樹, 上月 康則, 藤澤 正一郎

助教授・廣瀬 義伸, 魚崎 泰弘, 教授・田村 勝弘, 村田 明広

助教授・木戸口 善行 2 単位

【授業目的】自然環境と社会環境の共存の重要性、ならびに、それらを目指す工学者に必要な考え方や有効な技術について概説する。

【授業概要】地球温暖化など地球環境問題は、今や人類をはじめとする地球上全ての生命体の存在をも危うくする重大な問題となっている。これは人類の産業活動が拡大を続けた結果、大気成分の変化や廃棄物の総量の増大など、地球の「大きさ」の壁に突き当たり、あらゆることに地球の有限性があらわれてきている現象に他ならない。人類が地球環境を保全しつつ将来世代にまで渡って持続的発展を遂げるためには、この地球の有限性の認識を基本とした自然環境に低負荷な技術体系を発展させる必要がある。本講義では自然環境と社会環境の共存を目指す工学者に必要な考え方や有効な技術について多角的に論じる。

化学応用工学科 (昼間コース)

【到達目標】自然環境・社会環境を取り巻く諸問題について科学的・工学的に考察し、理解する。

【授業計画】1. ガイダンス 2. エコシステム工学とは・レポート 3. うるおいある地域づくりと交通システム・レポート 4. 自動車を取り巻くエネルギー環境・レポート 5. エネルギーの高効率利用と大気環境の保全・レポート 6. ひとにやさしいまちづくり・レポート 7. 生態系工学による自然環境修復の取組み・レポート 8. エコシステムな物理・レポート 9. 化学と生物学の環境問題へのかかわり・レポート 10. 環境に優しい超臨界流体の利用・レポート 11. 活断層と地震・レポート 12. 環境負荷計測のための空間情報の活用・レポート 13. 障害者の社会参加を支える工学技術・レポート 14. 予備日 15. 予備日

【成績評価】各テーマごとに課題されるレポート(100%)により評価を行い、その平均点が60%以上あれば合格とする。定期試験は行わない。

【教科書】教科書は特に指定せず、毎回講義用資料が配布される。

【参考書】E. P. オダム著/三島次郎訳「オダム基礎生態学」培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

応用電気化学

Applied Electrochemistry 助教授・松井 弘 2 単位

【授業目的】電気化学の基礎である、溶液論、平衡論、速度論の基礎を修得させ、典型的応用例を理解させる。

【授業概要】溶液の電導度、平衡電位、電気化学反応速度について講義し、pH測定法、ポーラログラフイー、実用電池、半導体電極など応用面を理解させる。

【履修上の注意】基礎物理化学の履修が望ましい。

【到達目標】

1. イオン電導の概要把握と応用能力の修得
2. 電極反応速度論の基礎を修得
3. 実用蓄電池の基礎を修得

【授業計画】1. 電気分解とガルバニ電池、ファラデーの法則 2. 電解質溶液の電導度 3. 解離度の測定と電導度滴定 4. 活量と輸率 5. 電池の表示法、平衡電位、電位差滴定 6. 平衡定数と熱力学量の決定法 7. pHの測定、イオン選択性電極 8. レポートと小テスト 9. 電極界面での電子移動速度 10. 過電圧と物質移動速度 11. ポーラログラフイーとボルタメトリー 12. 乾電池、鉛蓄電池 13. リチウム電池、燃料電池 14. 半導体の電気化学 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】レポート、小テスト、定期試験の結果を総合判定する。

【教科書】田村英雄、松田好晴著「現代電気化学」

【参考書】藤嶋昭他著「電気化学測定法」技報堂出版、外島忍著「基礎電気化学」朝倉書店、喜多英明、魚崎浩平著「電気化学の基礎」技報堂出版、藤嶋昭他著「電気化学測定法」

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】松井弘(化507, 656-7420, matsui@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし

化学英語 1

English in Chemical Science and Technology 1 助教授・妹尾 真紀子, 南川 慶二 2 単位

【授業目的】化学分野でも英語は世界語である。本講義では、主として学術誌などの文献を読解するための基礎的能力を高めることを目的とする。

【授業概要】一般化学や工業化学に関連する英文教材を読み、その内容を正確に理解し、的確な日本語の文章にまとめることを目標として、演習を取り入れながら講義する。

【受講要件】全学共通教育において英語を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】A, B の 2 クラスに分けて少人数での授業を行う。

【到達目標】

1. 一般化学や工業化学の専門用語を知る。
2. 化学英文が正しく読め、理解できる。
3. 読解した内容を日本語として正確に表現できる。

【授業計画】1. 化学英語の基礎(専門用語) 2. 読解(一般化学) 3. 読解(一般化学) 4. 読解(一般化学) 5. 読解(工業化学) 6. 読解(工業化学) 7. 読解(工業化学) 8. 英文和訳(英文と和文の構造の対比) 9. 英文和訳(正確な文、読みやすい文、悪文) 10. 英文和訳(日本語として自然な文章) 11. 英文和訳(論理的な文章の構成) 12. 英文和訳演習 13. 英文和訳演習 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】平常点と期末試験の成績を考慮し、成績評価を行なう。平常点は授業への取り組み状況、演習の解答、レポート提出状況及びそ

の内容、小テストの成績とする。これら平常点と期末試験の評価割合は4:6とする。

【教科書】授業中に指示する。

【参考書】平田光男著「科学英語の基礎」(化学同人)、中村喜一郎・青柳忠克著「やさしい化学英語」(オーム社)、橋爪斌・原正編「化学・英和用語集」(化学同人)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】妹尾(化408, 656-7404, seno@chem.tokushima-u.ac.jp)、南川(化612, 656-9153, minagawa@chem.tokushima-u.ac.jp)

化学英語 2

English in Chemical Science and Technology 2 助教授・杉山 茂
非常勤講師・ロックジャクリーン サンドラ 2 単位

【授業目的】化学に関する最新の情報に接するには学術誌やインターネット上の英文を素早く「読解」する必要がある一方、化学に関する研究で自分の結果を国内外にアピールするには、いわゆる「聞く」「話す」および「書く」というコミュニケーション法が必要になる。本講義では後者の基礎的能力を高めることを目的とする。

【授業概要】通常重きが置かれがちな化学英語の「読解」をあえて避け、化学実験等で得られた結果をどのようにして英語を母国語とする研究者に伝えるかというコミュニケーションに重点を置いた講義を行う。

【受講要件】全学共通教育において英語を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】2 クラスに分け、クォーターごとに教官が交代して講義を行う。

【到達目標】

1. コミュニケーションに必要な技術に対する理解を深める。
2. 科学技術英文に独特な表現を習得する。
3. 英語らしい表現とは何かと言う点の理解を深める。

【授業計画】1. 科学技術英文の基礎表現(1)比較、増加・減少、理由・原因 2. 科学技術英文の基礎表現(2)目的、因果関係、手段・方法 3. 科学技術英文の理解(1)イントネーションと音読 4. 科学技術英文の理解(2)大意把握、キーワードの抽出 5. 科学技術英語の口頭表現(1)基礎表現の活用、発音と抑揚 6. 科学技術英語の口頭表現(2)専門用語の語彙拡大 7. 英語によるコミュニケーション全般(1)会話表現の活用 8. 英語によるコミュニケーション全般(2)対応のリズムと柔軟性 9. 科学技術論文の表現法(1)簡単な表現法、数値・数式の表記法 10. 科学技術論文の表現法(2)日本人が使用しがちな誤った表現 11. 化学論文記述(1)文法、専門用語 12. 化学論文記述(2)化学で用いられる略号・ラテン語 13. 化学論文記述(3)専門学術雑誌 14. 予備日 15. 予備日

【成績評価】授業中の小テスト、レポート、発表状況などを総合して成績を評価する。

【教科書】授業中に指示する。

【参考書】授業中に指示する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】杉山(化309, 656-7432, sugiyama@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし。期末試験、再試験は行わない。

化学応用工学実験 1

Experiments of Chemical Science and Technology 1
助手・藪谷 智規, 助教授・金崎 英二, 教務員・林 由佳子
非常勤講師・市原 百合子, 守時 佳子, 文部科学技官・藤永 悦子
文部科学技官・大澤 六合豊, 河内 哲史 2 単位

【授業目的】講義内容の理解を深め、分析化学実験の基本的な操作を習得し、研究実験に対する姿勢を修得させる。

【授業概要】分析実験の基本操作、重量分析、容量分析、放射化学実験を行う。また実験内容、結果および考察をプレゼンテーションする。

【受講要件】必修科目であるので必ず受講すること。基礎分析化学、分析化学及び演習の履修が望ましい。

【到達目標】

1. 化学実験時の安全に関して確認するとともに、器具、機器の使用に習熟する。
2. 定量分析に関する理解を深める。
3. 本実験に関連したプレゼンテーションと討論を通じて、実験内容における疑問点の整理、および結果に対する考察をさらに深める。

【授業計画】1. 実験を安全に行うために 2. 実験説明、器具の配分 3. 坩堝の恒量 4. 硫酸銅中の硫酸イオンの定量、レポート 5. 中和滴定法 6. 中和滴定、未知試料、レポート 7. 酸化還元滴定、未知試料 8. ヨウ素滴定、未知試料、レポート 9. 沈殿滴定 10. 沈殿滴定、未知試料、レ

化学応用工学科 (昼間コース)

ポート 11. キレート滴定, 未知試料, レポート 12. 放射化学実験, レポート 13. 未知試料を用いる総合実験 14. 未知試料を用いる総合実験, 器具の返却, 掃除 15. 予備日 16. プレゼンテーション

【成績評価】実験に対する理解力は, 実験への出席状況, 未知試料の実験結果, レポートの提出状況と内容を総合して評価する。また, 最終週に全員参加による実験内容のプレゼンテーションを行う。やむを得ない場合を除いて, 1 回でも欠席した場合は再受講となる。

【教科書】梅澤喜夫, 本水昌二, 渡会 仁, 寺前紀夫著「分析化学実験」, 東京化学同人

【参考書】阿藤眞著「分析化学」培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】藪谷(化605, 656-7413, yabutani@chem.tokushima-u.ac.jp), 金崎(化516, 656-9444, kanazaki@chem.tokushima-u.ac.jp), 林(化216, 656-7435, yuka@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】すべての実験に関して出席し, レポート提出およびプレゼンテーションに参加することが必要条件である。いずれが欠けても単位は認められないので注意すること。

化学応用工学実験 2

Experiments of Chemical Science and Technology 2

助教授・南川 慶二, 妹尾 真紀子, 講師・平野 朋広
助手・西内 優騎, 森 健, 非常勤講師・先川 登美, 市原 百合子
文部科学技官・藤永 悦子, 大澤 六合豊, 河内 哲史 2 単位

【授業目的】講義内容の理解を深め, 基本的な実験操作を習得し, 研究実験に対する姿勢を身につける。

【授業概要】実験科目では自ら手を動かすことが基本である。そのためできるだけ小人数での取り組みが望ましい。本科目では, 当該学生を少人数のグループに分け, 有機化学および高分子化学分野の実験を行う。

【受講要件】基礎有機化学の履修を前提とする。有機化学, 高分子化学の履修が望ましい。

【履修上の注意】化学応用工学実験 2,3,4 の開講時期は年度によって異なるので, 時間割表と掲示板で必ず確認すること。

【到達目標】

1. 物質合成化学に関する各実験テーマの内容を把握し, 使用する器具, 器械の取扱いをはじめ, 種々の基礎技術を習得する。
2. 実験結果の解析方法を習得する。考察を深めるための討論の重要性を認識する。
3. 実験を通じて得た知見に関するプレゼンテーション能力を養う。併せて本実験を次にどのように展開するか考える。

【授業計画】1. ニトロ化反応 2. アルキル化反応 3. アセチル化反応 4. エステル化反応 5. 脱水反応 6. 酢酸ビニルの精製と重合 7. 粘度法による高分子の分子量測定

【成績評価】実験態度を重視し, 各実験終了後 1 週間以内にレポートを提出させ評価する。なお, 口頭試問やプレゼンテーションなどを行うこともある。実験への姿勢及び口頭試問やプレゼンテーション等を含む平常点とレポートの内容の成績評価における比率は 1:1 とする。

【教科書】当学科ホームページより, 各自で実験テキスト (PDF ファイル) をダウンロードして使用する。

【参考書】実験化学講座 (日本化学会編・丸善), 化学大辞典 (東京化学同人), 化学便覧 (日本化学会編・丸善), 有機化学実験のてびき (化学同人), 機器分析のてびき (化学同人), 高分子科学実験法 (高分子学会編・東京化学同人)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】西内(化409, 656-7400, nishiuch@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】化学応用工学実験 2,3,4 の開講時期は年度によって異なるので, 時間割表と掲示板で必ず確認すること。

化学応用工学実験 3

Experiments of Chemical Science and Technology 3

助教授・松井 弘, 魚崎 泰弘, 安澤 幹人, 助手・鈴木 良尚
教員・林 由佳子, 非常勤講師・市原 百合子
文部科学技官・平嶋 茂利, 藤永 悦子, 大澤 六合豊, 河内 哲史
2 単位

【授業目的】物質機能化学に関する実験を行い, 実験技術を習得させると共に, 関連講義の理解を深める。

【授業概要】物理化学, 電気化学, 無機化学に関する基礎的な実験を行う。

【受講要件】基礎物理化学, 基礎無機化学の履修を前提とする。応用電気化学, 物理化学, 無機化学の履修が望ましい。

【履修上の注意】化学応用工学実験 3,4 の開講時期は年度によって異なるので, 時間割と掲示板を確認すること

【到達目標】

1. 各実験テーマの内容をしっかりと把握し, 実験技術を習得する。
2. 各実験テーマの実験結果の解析方法を習得し, 実験内容のプレゼンテーションを適切に行う能力を養う。

【授業計画】1. 実験データ解析実習 2. プレゼンテーション準備実習 3. 部分モル体積 4. 溶解度と溶解熱 5. 液体の相互溶解度 6. 液体の粘性率 7. 溶液の電導度 8. pH の測定 9. 無機合成 10. 輸率と熱力学諸量の測定 11. 水酸化ナトリウムおよび硫酸の電解合成 12. 蓄電池の充放電特性

【成績評価】各実験テーマ毎に, 担当教官に実験レポートを提出し, 受理されたレポートの内容で評価する。その際, 口頭試問を行う。実験内容のプレゼンテーションを最終週に行う (全員必須)。やむを得ない場合を除いて, 1 回でも欠席した場合は再受講となる。

【教科書】当学科ホームページより, 各自で実験テキスト (PDF ファイル) をダウンロードして使用する。また「実験を安全に行うために (正, 続)」(化学同人) を読み, 実験を安全に行えるよう心掛けること。

【参考書】化学便覧 (日本化学会編・丸善), ムーア「物理化学」(東京化学同人)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】鈴木(化514, 656-7415, suzuki@chem.tokushima-u.ac.jp)

化学応用工学実験 4

Experiments of Chemical Science and Technology 4

教授・川城 克博, 助教授・杉山 茂, 森賀 俊広, 講師・加藤 雅裕
助手・村井 啓一郎, 講師・外輪 健一郎, 教員・林 由佳子
2 単位

【授業目的】多岐にわたる化学プロセス工学大講座の基本となる下記テーマの実験を取り上げ, 実験法・解析法を習得するとともに, 特に化学プロセス工学特有の概念に具体的に接することを目的とする。講義では受け身になりがちであるが, 本実験では, 実際に各人が実験を行うことにより自発的に各教官に質問等ができるようになり, 実験に対して自分の意見を明確に述べられるようになることを期待する。

【授業概要】化学プロセス工学大講座の講義に即したテーマについて各人が実験を行い, 講義内容の理解を深めるとともに実験技術を習得する。

【受講要件】必修科目であるので必ず受講すること。

【到達目標】

1. 化学プロセス工学講座の基礎となる実験を行い, 実験, 解析, 考察などの一連のプロセスを理解する。
2. 本実験に関連したプレゼンテーションと討論を通じて, 実験内容における疑問点の整理, および結果に対する考察を更に深める。

【授業計画】1. 酸化アルミニウムを添加した酸化亜鉛焼成体の合成 2. 酸化亜鉛焼成体の結晶構造と電気特性 3. プロセスプログラミング 4. BET 法による固体触媒の表面積測定 5. ガスクロマトグラフィー 6. 均一触媒反応 7. プレゼンテーション

【成績評価】実験態度および, 各テーマ終了毎に担当教官に提出する実験報告書により成績を評価する。やむを得ない場合を除いて, 1 回でも欠席した場合は再受講となる。

【教科書】「化学応用工学実験」(化学応用工学科編) 及び「実験を安全に行うために (正, 続)」(化学同人)

【参考書】特になし。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】村井(化315, 656-7424, murai@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】すべての実験に出席し, レポート提出およびプレゼンテーションに参加することが必要条件である。いずれが欠けても単位は認められないので注意すること。

化学応用工学特別講義 1

Special Lecture on Chemical Science and Technology 1

非常勤講師 1 単位

【授業目的】様々な分野の専門家の講義により, 基礎から最先端までの特徴ある内容を学ぶ。

【授業概要】物質合成化学に関連する分野について学外より専門家を招聘し, 最新の発展しつつある領域の講義を受講させる。

【受講要件】特になし。

【到達目標】各分野の専門家による講義を通して, その分野を深く理解する。

化学応用工学科 (昼間コース)

【授業計画】1. (実施例) 機能性高分子材料の分子設計 (大阪大工) 竹本喜一教授 2. (実施例) 機能性有機材料の構造と機能発現機構 (大阪大工) 城田靖彦教授 3. (実施例) 芳香族化合物の化学 (関西学院大理) 鈴木仁美教授
【成績評価】講義への取り組みおよび講義内容に関連する小テストやレポートなどを総合して評価する。
【教科書】講義資料を配布する。
【参考書】適宜紹介する。
【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
【連絡先】加藤(M304, 656-7429, kato@chem.tokushima-u.ac.jp)
【備考】集中講義で行う。講義の予定は掲示等で通知する。

化学応用工学特別講義 2

Special Lecture on Chemical Science and Technology 2

非常勤講師 1 単位

【授業目的】様々な分野の専門家の講義により、基礎から最先端までの特徴ある内容を学ぶ。
【授業概要】物質機能化学に関連する分野について学外より専門家を招聘し、最新の発展しつつある領域の講義を受講させる。
【受講要件】特になし。
【到達目標】各分野の専門家による講義を通して、その分野を深く理解する。
【授業計画】1. (実施例) 電池及び水素吸蔵合金利用技術 (三洋電機) 古川修弘部長 2. (実施例) 溶液の構造と性質 (京都大理) 中原勝教授 3. (実施例) 元素の組成から見た地球と生物 (名古屋大工) 原口紘子教授
【成績評価】講義への取り組みおよび講義内容に関連する小テストやレポートなどを総合して評価する。
【教科書】講義資料を配布する。
【参考書】適宜紹介する。
【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
【連絡先】加藤(M304, 656-7429, kato@chem.tokushima-u.ac.jp)
【備考】集中講義で行う。講義の予定は掲示等で通知する。

化学応用工学特別講義 3

Special Lecture on Chemical Science and Technology 3

非常勤講師 1 単位

【授業目的】様々な分野の専門家の講義により、基礎から最先端までの特徴ある内容を学ぶ。
【授業概要】化学プロセス工学に関連する分野について学外より専門家を招聘し、最新の発展しつつある領域の講義を受講させる。
【受講要件】特になし。
【到達目標】各分野の専門家による講義を通して、その分野を深く理解する。
【授業計画】1. (実施例) 高分子-溶液系の拡散現象とその応用 (山口大工) 佐野雄二教授 2. (実施例) 向流型接触装置の開発 (岡山大工) 高橋照男教授 3. (実施例) 分子状酸素による芳香族化合物の酸化反応 (広島大工) 井藤荘太郎教授
【成績評価】講義への取り組みおよび講義内容に関するレポートや小テストなどを総合して評価を行う。
【教科書】講義資料を配布する。
【参考書】適宜紹介する。
【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
【連絡先】加藤(M304, 656-7429, kato@chem.tokushima-u.ac.jp)
【備考】集中講義で行う。講義の予定は掲示等で通知する。

化学工学基礎

Chemical Engineering Principles

教授・富田 太平 2 単位

【授業目的】化学工学の学問領域は従来の化学プロセス設計や化学工業の製品生産のみならず環境やバイオテクノロジーの分野にも拡大している。本講義では、広範な化学工学を理解するために必要な化学工学の基礎学力と実際的な問題を解く応用力を養う。
【授業概要】化学工学とは何か、方法論としての化学工学の役割・領域等を概説し、化学工学の基礎として、物質の状態、物質やエネルギーの出入、流動、伝熱、物質移動などの事項について講述する。
【履修上の注意】3 年次において分離工学および微粒子工学を受講する者は本講義を履修しておくこと。
【到達目標】

1. 物質の状態について、相平衡を理解し、気体の状態方程式による計算ができる。
2. 化学量論を含む物質収支及び熱収支を理解する。
3. 流動、伝熱、蒸留に関して基礎法則を理解し、問題解決に応用できる。

【授業計画】1. 化学工学概説 2. 気体法則と相平衡 3. 物質収支 4. エネルギー収支 5. レポート・小テスト 6. 流動の基礎事項 7. 管内の流動 8. レポート・小テスト 9. 伝熱の基礎事項 10. 対流伝熱と境界伝熱係数 11. 輻射伝熱、熱交換器 12. レポート・小テスト 13. 気液平衡と蒸留 14. 蒸留・精留 15. 精留塔の設計、演習 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の4項目がそれぞれ達成されているかを試験60%、平常点(演習レポートと講義への取り組み状況)40%で総合評価し、60%以上を合格とする。

【教科書】「基礎化学工学」化学工学会編、倍風館

【参考書】「化学工学概論」水科篤郎、桐栄良三編、産業図書 その他

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】富田(化312, 656-7425, tomida@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】3 年次において分離工学および微粒子工学を受講する者は本講義を履修しておくこと。講義への取り組み状況、演習やレポート、小テストによる平常点と最終試験の割合は 5:5 とする。

化学序論 1

Introduction to Chemistry 1

教授・林 弘、富田 太平、田村 勝弘 2 単位

【授業目的】化学および科学技術に関する入門講義によって化学応用工学科の専門分野を展望し、以降の専門科目履修のための基礎学力を修得させる。

【授業概要】高校で化学を十分学習していない学生にも理解できるよう、原子の構造や化学結合、気体の状態方程式などの初歩から物理化学・熱力学の基礎および化学プロセス、製造プロセスまでを講述し、化学者・化学技術者としての知識や考え方を修得させる。図解、例題と演習問題によって理解を助け、応用力を養う。

【到達目標】

1. 化学プロセスの構成要素の概要を把握させる
2. 化学工学の基礎を理解する
3. 熱力学を学習するため基礎力をつける

【授業計画】1. はじめに 2. 化学プロセスの構成要素 3. 化学式を言葉で読む 4. 製造プロセスをフローシートで表現する 5. 化学式とフローシートから読みとれる内容を比較する 6. 化学工学概論 7. 原子の構造、化学結合と分子の形 8. 物質の状態 9. 化学工業量論 (単位と物質収支) 10. 化学工業量論 (エネルギー収支) 11. 小テスト 12. 国際単位系 (SI 単位) 13. 熱力学的性質 14. 気体の状態方程式 15. 臨界現象 16. まとめ
【成績評価】講義へ取り組み状況、演習・レポートの内容、小テストと試験の成績を総合して行う。

【教科書】特に指定しない、プリントなど適宜配布する。

【参考書】大学教養 化学 富田功 著 (裳華房)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】林(化307, 656-7430, hayashi@chem.tokushima-u.ac.jp)、富田(化312, 656-7425, tomida@chem.tokushima-u.ac.jp)、田村(化509, 656-7416, tamura@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】クォーター制をとり、3 人の教官で担当する。平常点と期末試験の比率を 5:5 とする。

化学序論 2

Introduction to Chemistry 2

教授・佐藤 恒之、津嘉山 正夫 2 単位

【授業目的】高校で修得する化学と専門科目としての化学との間には大きな溝がある。本講義はその溝を埋めるためのものであり、化学を科学的に理解するための基礎力の養成を図る。

【授業概要】化学は広範囲であるため、化学序論 2 では特に有機化学に重点をおき、有機化合物の基本的な構造・性質について講義する。

【到達目標】

1. 有機分子の構造と混成軌道の関係について理解する。
2. 有機酸と有機塩基について理解を深める。

【授業計画】1. 原子の構造と電子配置 2. 炭化水素の分子構造と混成軌道 3. 有機化合物の構造と混成軌道 4. 極性共有結合と電気陰性度 5. 共鳴効果 6. 酸と塩基の強さ 7. 有機酸と有機塩基 8. 創成型プログラム

化学応用工学科 (昼間コース)

【成績評価】講義への参加、予習・復習の内容、小テスト及び最終試験の結果を総合して評価する。創成型プログラムに関するプレゼンテーションを評価に入れる。

【教科書】マクマリー有機化学(上)伊東他訳(東京化学同人)

【参考書】有機化学の考え方—有機電子論 右田俊彦他著(裳華房)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】佐藤(化406, 656-7402, sato@chem.tokushima-u.ac.jp), 津嘉山(化407, 656-7405, tukayama@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】(担当) 佐藤-1A, 津嘉山-1B

化学装置工学

Chemical Plant Design

教授・中林 一郎

非常勤講師・三木田 嘉男, 助手・村井 啓一郎 2 単位

【授業目的】化学装置設計の基礎となる材料力学および構造力学について講述し、基本的な化学装置の設計法を修得させる。また材料の選定および検査方法についても修得させる。

【授業概要】「材料力学の基礎」については、モーメントなど物理的な取り扱いが必要となるが、その基礎からの理解を深めるため、毎回講義終了後に演習課題を課し、次回までに提出することを義務づけている。「金属材料工学」では、工業材料に使用されている素材について、諸君が社会に出て実際に装置を製作する際にどのような材料をどのように用いればよいか、検査をどのように行ったらよいかを基礎から修得させる。

【受講要件】初歩の物理学を修得している事が望ましい。

【到達目標】

1. 力学の基礎を習得する
2. 種々の金属材料、合金材料について理解を深める

【授業計画】1. 材料力学の基礎 2. 単純応力 3. 平面応力 4. はりの曲げ 5. モーメント線図 6. はりのたわみ 7. 断面 2 次モーメント 8. ねじれ・座屈 9. 金属材料工学 10. 材料試験 (1) 11. 材料試験 (2) 12. 鋼の基礎知識 13. 鋼の熱処理技術 14. 金属材料の化学組成と強さ (1) 15. 金属材料の化学組成と強さ (2) 16. 予備日

【成績評価】「材料力学の基礎」は演習課題の解答を提出させる (30%)、中間テストのウェイトは 20%。「金属材料工学」は講義途中に中間テスト 20%、講義終了後のテスト (30%) で評価する。

【教科書】「材料力学の基礎」「金属材料工学」とも、その講義が始まる第 1 日目に小冊子を購入してもらう。

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】中林(M603, 656-7422, ichiro@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「材料力学の基礎」は中林教授が、「金属材料工学」は三木田非常勤講師が行う。

化学反応工学

Chemical Reaction Engineering

教授・林 弘 2 単位

【授業目的】どのようにして化学プロセスは工業化されてきたかを学びながら、反応工学の基礎理論を理解させる。

【授業概要】工業触媒の開発と反応装置の操作設計について、反応工学ならびにプロセス工学の基礎を解説し、装置型式の選定への応用事例を述べる。

【受講要件】「反応工学基礎」を修得していることが望ましい。

【到達目標】化学工業の基幹プロセスについて、主要反応、触媒および装置形式を理解し、製造工程の設計・開発における工学的諸問題に関心を持たせる。

【授業計画】1. 序論 2. 化学反応の式を読む 3. 反応操作、反応器、連続運転 4. 化学プロセスの事例と工業触媒 5. 分散系の化学プロセス 6. 触媒調製化学 7. 触媒性能とその評価 8. まとめ、小テスト 9. 吸着、表面積、多孔質の空隙組織 10. 固体触媒の反応工学 11. 製造工程の設計例題 12. 流系操作の混合特性 13. まとめ、演習、レポート 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】プロセスの英文講読と設計演習を行い、技術報告書を提出させる。試験 (60%) のほか、講義への取り組み状況、受講姿勢 (40%) を考慮して総合評価する。

【教科書】小冊子「講義ノート・化学反応工学および反応工程設計」

【参考書】必読書について、講義中、章別に紹介し、歴史的意義を解説する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】林(化307, 656-7430, hayashi@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特に無し。

学外学習

Internship

助教授・杉山 茂, 講師・加藤 雅裕 1 単位

【授業目的】就業体験を行うことにより、企業等の仕組みや仕事に関する理解を深め、学習意欲を喚起するとともに、高い就業意識の育成を図ることを目的とする。

【授業概要】3 年次の夏季休業等に 2~3 週間、企業の工場等において実習を行う。

【受講要件】学部または学科で開催される学外学習の説明会に参加し、事前研修を受講した学生の受講を認める。

【履修上の注意】開講年度前に、学外学習についてインターンシップまたは教務担当教官から説明がある。

【到達目標】

1. 組織の仕組みや業務の流れ、組織目標を達成するための戦略と実践を理解する。
2. 実社会、職場における人間関係やマナーなどに対する理解を深める。

【授業計画】1. 事前研修 2. 実習先の企業等が用意したカリキュラムに従って実習を行う。 3. 実習終了後、実習レポートを提出し事後報告を行う。

【成績評価】企業からの実習レポート等の評価と共に学科内で学外学習で得られた結果をプレゼンテーションし、それらの結果をもとに評価する。

【教科書】特になし。

【参考書】徳島大学工学部導入教育用冊子など。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】杉山(化309, 656-7432, sugiyama@chem.tokushima-u.ac.jp), 加藤(M304, 656-7429, katoh@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】受講申込み及び実習の準備等について、徳島大学インターンシップ実施要領に基づいて手続きを行うこと。定期試験は行わない。

確率統計学

Probability and Statistics

教授・長町 重昭 2 単位

【授業目的】確率的な現象の捉え方、考え方を学ぶとともにデータを処理する際に使われる統計手法を習得することを目標とする。

【授業概要】初めて数理統計を学ぶ初学者のために、確率論と統計学の基礎的な部分を解説し、統計学は具体的な例を中心に解説する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】時間数の制約から、数理統計学を履修するための必要最小限の講義を行うので、講義内容のすべてを吸収することが理解への早道である。日頃から予習・復習の計画を立てて勉学に努めてほしい。

【到達目標】

1. 基本的な確率分布に従う確率変数の性質の理解
2. 各種の検定や推定の方法の理解

【授業計画】1. 事象と確率 2. 確率変数 3. 確率分布と密度関数 4. 平均と分散 5. 基本的な確率分布 6. 確率変数の性質 7. 中心極限定理 8. データの整理と記述 9. 統計学の考え方 10. 正規母集団の母平均の検定 (I) 11. 正規母集団の母平均の検定 (II) 12. 正規母集団の母分散の検定 13. 出現率の検定 14. 区間推定 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】試験 80% 平常点 20% (レポート、授業への取り組み状況等) として評価し、全体で 60% 以上で合格とする。

【教科書】坂光一, 水原昂廣『確率・統計入門』学術図書出版社

【参考書】小森尚志, 山下護, 水野正一『統計学の基礎と演習』東海大学出版

【連絡先】A205室, TEL:656-7554, e-mail:shigeaki@pm.tokushima-u.ac.jp

環境化学

Environmental Chemistry

教授・本仲 純子 1 単位

【授業目的】現在、人類活動によって、地球が有している物質循環作用と自然浄化作用をはるかに越える化学物質が排出されている。環境問題と化学との関わりの深さを考える時、環境問題に対する意識を高めることは、化学の教育責任の 1 つである。人類が、直面している地球環境問題を解説し、環境アセスメント、環境マネジメントシステム規格についても修得させる。

【授業概要】水、大気、土壌に関わる環境問題を化学の立場を中心に講述する。地球規模での環境問題と廃棄物、また、日常生活で人間の健

化学応用工学科(昼間コース)

康に直接かかわる身の回りの有害物質、発がん物質などについて解説し、さらに、環境アセスメント、環境マネジメントシステム規格についても講義を行う。

【到達目標】

1. 地球をとりまく環境問題についての理解を深める。
2. 土壌汚染と廃棄物についての理解を深める。
3. 有害物質、発がん物質についての理解を深める

【授業計画】1. 総論 2. 水資源 3. 水と健康 4. 水質汚濁 5. 大気汚染 6. 大気汚染 7. 地球環境問題 8. 土壌汚染と廃棄物 9. 環境汚染性有機物及び金属 10. 環境発がん物質、食品中発がん物質 11. 食品添加物、自然毒 12. 環境アセスメント 13. ISO14001 環境マネジメントシステム規格 14. まとめ 15. 試験

【成績評価】到達目標の4項目が各々達成されているかを試験60%、平常点(レポートと授業への取り組み状況)40%で評価し、4項目平均で60%以上あれば合格とする。

【教科書】保田茂次郎著「生活環境概説」三共出版

【参考書】崎川範行/鈴木敬輔著「環境科学」三共出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】本仲(化611, 656-7409, motonaka@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義に出席すること。講義への取り組み状況、小テスト、レポートと最終試験の割合は4:6とする。

環境調和技術論

Eco-harmonized Technology & Management

非常勤講師・宜川 克 1単位

【授業目的】環境調和の立場から産業技術の現状を分析し、日本産業の膨大な裾野を構成する工業、製造業の正しい方向性を探る。

【授業概要】21世紀の日本の根源課題として「環境」「人口」および「エネルギー」を上げ、これに沿って、正しい方向軸(蘇生型工業)に向けての、工業倫理の再構築による人材育成、事業育成、産業育成の重要性について論じる。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】中国・四国国立大学工学系学部間単位互換対象科目であるため、他大学からの受講もある。

【到達目標】環境調和の立場から、工業倫理再構築による工業、製造業の正しい方向性への展開を理解する。

【授業計画】1. 製造者責任の新展開 2. 製造者責任のガイドライン構築 3. 資源生産性重視の社会 4. 循環経済サイクルの新展開 5. 工業倫理-環境技術論 6. 工業倫理-技術人材論(1) 7. 工業倫理-技術人材論(2) 8. レポート作成(最終試験)

【成績評価】講義への参加状況(質疑応答:4割)およびレポート(最終試験:6割)の内容を総合して行う。

【教科書】自作のテキストプリント

【参考書】宜川克著「エコロジー経営」日刊工業新聞社

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】加藤(M304, 656-7429, katoh@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する講義への参加状況およびレポート(最終試験)の成績の割合は4:6とする。

機器分析化学

Analytical Instrumentation Chemistry

教授・岩田 哲郎 2単位

【授業目的】基本的な機器分析手法の原理・装置・応用について習得させる。

【授業概要】分析機器は、環境計測などに代表される分析化学の分野において、非常に重要な役割を果たしている。本講義では、それらのうち最も基本的なものについて、特に装置面を強調しながら原理と応用について述べる。時間の制約から、質量分析、X線分析、電子分光、NMR、電気分析、熱分析については割愛する。これらは必要に応じて簡単に紹介する。

【到達目標】

1. 主な分光分析機器の測定原理と装置を理解する。
2. 分離分析機器の測定原理と装置を理解する。
3. 何がどのような機器で分析できるかを判断できるようにする。

【授業計画】1. 機器分析総論(1) 2. 機器分析総論(2) 3. 吸光度分析(1) 4. 吸光度分析(2) 5. 蛍光分析(1) 6. 蛍光分析(2) 7. 紫外吸収スペクトル法 8. 旋光分散法・円偏光二色性法 9. 赤外吸収スペクトル法 10. ラマン散乱スペクトル法 11. 原子吸光・フレイム分析 12. 発光分光分析

13. ガスクロマトグラフィー 14. 高速液体クロマトグラフィー 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】中間および期末の試験と平常点を考慮する。平常点は、複数回課すレポートの提出状況とその内容、および中間試験によって決定する。試験と平常点の比率は6:4とする。

【教科書】田中誠之、飯田芳男著「機器分析」裳華房

【参考書】各種の機器分析手法ごとに、数多くの解説本が出版されているので、必要に応じてそれらを参照すること。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岩田(M427, 656-9743, iwata@me.tokushima-u.ac.jp)

【備考】平常点と試験の比率は、3:7とする。

基礎物理化学

Basic Physical Chemistry

教授・田村 勝弘、助教授・魚崎 泰弘 2単位

【授業目的】物質の状態と性質について、エネルギー論をもとに講述し、化学熱力学の基礎を理解させる。

【授業概要】物質に対して、物理化学的に具象化するためには、多くの方法論が要求されるが、大切なことは、ものの見方の基本的な態度であることを講述し、物理化学的に物質をとらえるうえで、基礎となる考え方、方法についての講義を行う。

【到達目標】化学熱力学の基礎を理解する

【授業計画】1. 物質の状態:国際単位系(SI単位) 2. 熱力学的性質、状態方程式、臨界現象、対応状態の原理 3. 熱力学第一法則:熱と仕事、状態関数、熱容量 4. Joule-Thomson効果、理想気体への適用 5. 熱化学:反応熱、Hessの法則、標準状態 6. 反応熱の温度変化、結合エンタルピー 7. 中間試験 8. 熱力学第二法則:カルノーサイクル 9. 熱力学温度目盛、エントロピー、GibbsエネルギーとHelmholtzエネルギー 10. Maxwellの関係式、熱力学的関係式 11. 化学ポテンシャル、熱力学第三法則 12. 状態の変化:相 13. 相律、相図、Clapeyron-Clausius式 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義への参加状況と中間試験および期末試験の結果を参考にする。

【教科書】ムーア物理化学(上)

【参考書】化学便覧など

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】田村(化509, 088-656-7416, tamura@chem.tokushima-u.ac.jp)、魚崎(化510, 088-656-7417, uosaki@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】2クラスに分け、並立授業を行う。1年A:田村教授、1年B:魚崎助教授

基礎分析化学

Basic Analytical Chemistry

教授・本仲 純子 2単位

【授業目的】分析化学的なもの見方、基礎的な考え方について、また分析化学的研究方式の基礎理論について修得させる。

【授業概要】物質に対して、分析化学的に具象化するためには、多くの方法論が要求されるが、大切なことは、ものの見方の基本的な態度であることを講述し、分析化学的に物質をとらえるうえで、基礎となる考え方、方法についての講義を行う。

【到達目標】

1. 分析化学の基礎について理解をふかめる。
2. 分析化学で用いられる化学平衡について理解をふかめる。
3. 容量分析、重量分析について理解を深める。

【授業計画】1. 序論 2. 分析化学の基礎 3. 分析化学の基礎 4. レポート・小テスト 5. 分析化学に用いられる化学平衡(酸塩基平衡) 6. 分析化学に用いられる化学平衡(沈殿平衡) 7. レポート・小テスト 8. 分析化学に用いられる化学平衡(酸化還元平衡) 9. 分析化学に用いられる化学平衡(錯形成平衡) 10. レポート・小テスト 11. 定量分析法 12. 定量分析法 13. 定量分析法 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の3項目が各々達成されているかを試験60%、平常点(レポートと授業への取り組み状況)40%で評価し、3項目平均で60%以上あれば合格とする。

【教科書】赤岩英夫、柘植新、角田欣一、原口紘子「分析化学」丸善

【参考書】長島弘三・富田功「分析化学」裳華房、長島弘三「分析化学演習」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】本仲(化611, 656-7409, motonaka@chem.tokushima-u.ac.jp)

化学応用工学科 (昼間コース)

【備考】講義 2 単元ごとにレポート提出があり、小テストも実施するので、予習・復習を行うこと。講義への出席状況、レポートの提出状況とその内容ならびに小テストと最終試験の割合は 4:6 とする。

基礎無機化学

Basic Inorganic Chemistry

助教授・安澤 幹人, 森賀 俊広 2 単位

【授業目的】化学の基礎学力をつけさせるために、無機化学の基礎を十分に理解させる。

【授業概要】無機物質の構造及び性質を理解させるために、原子及び分子の構造、化学結合性、反応性を中心に易しく講義する。時間が許せば、予備日にこの講義で履修した内容に関連したトピックスについてのプレゼンテーション演習を行う。

【到達目標】

1. 元素の性質の周期性について理解する。
2. 酸素・二酸化炭素やメタンなど簡単な化合物の分子構造・電子構造を理解する。
3. 共有結合・イオン結合・金属結合の成り立ち・相違点について理解する。

【授業計画】1. 序論、ボーアの原子模型 2. 量子数と軌道、遮蔽と貫入 3. パウリの原理とフントの規則、周期表の成り立ち 4. イオン化エネルギー、電子親和力、電気陰性度 5. 酸化数と原子価、原子半径とイオン半径、結合エネルギー 6. 中間試験、共鳴の概念、混成軌道 7. 原子価結合法による共有結合の解釈 8. 原子価殻電子対反発則 9. 分子軌道法の基本的な考え方 10. 等核二原子分子の分子軌道 11. 異核二原子分子の分子軌道 12. 金属結合と電気伝導性 13. イオン結合とイオン結晶、半径比、配位数 14. 格子エネルギーとボルン・ハーバーサイクル、マーデルング定数 15. 予備日 16. 最終試験

【成績評価】基本的には中間試験と最終試験の成績により評価し、授業への取り組み状況・レポートの提出状況・プレゼンテーション等を加味する。

【教科書】三吉克彦著「はじめて学ぶ大学の無機化学」化学同人

【参考書】コットン・ウィルキンソン・ガウス著、中原訳「基礎無機化学」培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】安澤(化512, 656-7421, mik@chem.tokushima-u.ac.jp), 森賀(M305, 656-7423, moriga@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】2 クラスに分け、並立授業を行う。1 年 A: 安澤助教授, 1 年 B: 森賀助教授成績評価に対する中間試験と最終試験の割合は 5:5 とし、レポートの提出状況や授業への取り組み状況(平常点)と上記試験の割合は 2:8 とする。

基礎有機化学

Basic Organic Chemistry

教授・津嘉山 正夫, 佐藤 恒之 2 単位

【授業目的】有機化学の基礎を学ぶために有機化学の基本原則と基礎概念を習得させる。

【授業概要】基本的な有機化合物、特に脂肪族化合物の構造、性質、求電子付加反応、求核置換反応、立体化学について有機化学の基礎を講述する。

【受講要件】化学序論 1, 2 を受講していること。

【到達目標】1. 電子の動きを学習し、有機化合物の構造、性質及び基礎的反応機構を理解して有機化学の論理的な考えを養成する。2. 求電子付加反応、脱離反応、アルカンの立体化学の基礎を理解する。

【授業計画】1. アルカン 2. アルカンの命名法 3. シクロアルカン 4. アルカンの立体化学 5. 有機反応の概観 (1) 6. 有機反応の概観 (2) 7. アルケンの構造・性質 8. アルケンの命名法 9. アルケンの合成・反応 10. アルキンの構造・性質・命名法 11. アルキンの合成 12. アルキンの反応 13. 中間試験 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への姿勢・レポート及び中間試験・定期試験 (4:6) の結果により総合して評価する。

【教科書】マクマリ-有機化学 (上中下) 伊東・他訳 (東京化学同人)

【参考書】ポルハルト・ショア-現代有機化学 (化学同人)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】佐藤(化406, 656-7402, sato@chem.tokushima-u.ac.jp), 津嘉山(化407, 656-7405, tukayama@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】(担当) 佐藤 - B, 津嘉山 - A 分子模型を購入すること (講義時間に説明する)。

機能性高分子設計

Functional Polymer Design

助教授・妹尾 真紀子 2 単位

【授業目的】機能性材料を構成する分子、中でも特に高分子の分子設計法について講述するとともに、機能発現と分子構造の関係について理解させる。

【授業概要】高分子設計の立場から、重合機構を中心に重合反応論を解説する。また、高分子の特異性に基づいた機能性の発現、発現機構、さらにその分子設計について説明する。

【受講要件】「高分子化学」の履修を前提にして講義を行う。

【到達目標】

1. 高分子の分子設計法を理解する。
2. 機能発現と分子構造の関係について理解する。

【授業計画】1. 機能性高分子とは 2. 機能材料の分類 3. ラジカル重合法による機能性高分子材料の分子設計 4. リビングラジカル重合 5. イオン重合の特異性 6. イオン重合法による機能性高分子材料の分子設計 7. リビングイオン重合 8. チーグラ重合 9. 縮重合と機能性高分子 10. 重付加反応と機能性高分子 11. 閉環重合と機能性高分子 12. 分解反応と機能性高分子 13. 高分子反応と機能性高分子 14. 予備日 15. 予備日 16. 最終試験

【成績評価】講義への取組状況、レポートの内容および最終試験の成績を総合して行う。また、受講者は、毎回の講義終了時に、その講義に関する質問、意見を A4 用紙に記載の上、提出のこと。

【教科書】佐藤恒之他著「高分子化学」朝倉書店

【参考書】竹本喜一著「機能性高分子」朝倉書店

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】妹尾(化408, 656-7404, seno@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特に無し。

工学倫理

Engineering Ethics

非常勤講師・井村 隆信, 三崎 幸二 2 単位

【授業目的】技術者としての意識と誇りを身につけ、工学倫理を守るために必要な知識と知恵を学ぶ。

【授業概要】技術者に要求される倫理とは何か?比較研究と事例研究を中心に学ぶ。その上で、安全、環境、法規、知的財産権などに関連して、具体的にどのようなことが問題になるのか?実践的にどのように対処すればよいか?講師たちの技術者としての実体験をもとに、出来るだけ双方向的な授業をこころみる。工学倫理というむずかしそうなテーマにやさしく迫る。

【履修上の注意】各クラス 2 人の講師が、それぞれ 2 日ずつ計 15 時間の授業を行う。全時間の出席を要する。

【到達目標】

1. 工学倫理についての理解
2. 技術者としての誇りと責任感
3. 関連問題についての理解
4. 実践的対応力

【授業計画】1. はじめに 2. 比較論のこころみ 3. 事例研究 1(グループ討議と発表) 4. 事例研究 2(レポートと小テスト) 5. 技術者倫理と技術倫理 6. 安全と工学倫理 7. 環境・資源問題と工学倫理 8. リスク評価と技術者 9. 事例研究 3(レポートと発表・討議) 10. 技術者と法規 11. 製造物責任 12. 知的財産権と工学倫理 13. 事例研究 4(レポートと発表・討議) 14. 国際工学倫理 15. 実践的技術者倫理

【成績評価】プレゼンテーション評価 50%, レポート・小テスト 50%

【教科書】中村収三著「実践的工学倫理 みじかく、やさしく、役にたつ」, 2003 年, 化学同人., 全員が教科書をもっていることを前提に授業(レポート, 宿題, 小テストを含む)を行う。

【参考書】適宜紹介する。

【連絡先】英(M317, 656-7377, hanabusa@me.tokushima-u.ac.jp)

工業基礎英語 I

Industrial Basic English (I)

非常勤講師・広田 知子 1 単位

【授業目的】現代社会の国際言語である英語を用いて、科学技術分野での基礎的な語彙力、読解力、リスニング力を養うことを目的とする。

【授業概要】科学技術分野で頻出の語彙や表現を増やす。イラスト、写真などを参考にしながら、内容理解のための練習問題を通して、英文を理解する力や、必要な情報を効率的に掴む力を養成する。

化学応用工学科 (昼間コース)

【授業計画】1. オリエンテーション 2. HEAT 3. SOUND 4. COMPUTERS 5. (教科書の各章にしたがって進めていくが、途中で適宜リスニング教材やビデオ教材なども使用する。)

【成績評価】コース最終日に試験を行う。

【教科書】ENJOY SCIENCE:データバンク (1) 『やさしい科学』 David Crystal/John Foster Asahi Press

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】授業の前に予習しておくことが望ましい。

工業基礎数学 I

Industrial Basic Mathematics (I) 非常勤講師・吉川 隆吾 1 単位

【授業目的】工学を学ぶために必要不可欠となる微分・積分の基礎的な内容について理解を図り、さらに基本的な手法や計算技術を確実に習得することを目的とする。

【授業概要】1 変数関数および多変数関数の微分・積分について、基礎的な内容から解説する。また、本講義の内容について、より理解を深めるために適宜演習を行う。

【授業計画】1. 微分 1:極限と連続 2. 微分 2:微分 3. 微分 3:導関数の応用 4. 積分 1:不定積分 5. 積分 2:定積分 6. 積分 3:定積分の応用 7. 偏導関数 1:多変数の関数 8. 偏導関数 2:偏導関数 9. 偏導関数 3:全微分 10. 偏導関数 4:Taylor の定理 11. 偏導関数 5:偏導関数の応用 12. 重複積分 1:重複積分 13. 重複積分 2:多重積分の応用

【成績評価】出席状況、レポート、期末考査等により総合的に評価する。

【教科書】特に指定しない。適宜、資料を配布する。

【参考書】矢野健太郎、石原繁 編「微分積分 (改訂版)」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義内容を確実に理解するためにも、毎回の復習は欠かさずに行い、次回の講義に望んでもらいたい。成績評価に対する [講義の出席状況、レポートの提出状況] と [小テストの成績] の割合は 4:6 とする。

工業基礎物理 I

Industrial Basic Physics (I) 非常勤講師・佐近 隆義 1 単位

【授業目的】

【授業概要】力学・波動・電磁気学について、ごく初歩的分野を解説する。

【授業計画】1. 運動と力:質点及び剛体の力学、ニュートンの運動の法則、運動量と力積・保存則 2. エネルギーと運動:仕事、力学的エネルギー・保存則 3. 波動:等速円運動、単振動、波 4. 電気と磁気:クローン力、電場と電圧、オームの法則・キルヒホッフの法則、磁場・ローレンツ力 5. 試験

【成績評価】講義への参加状況と試験の成績を総合して行う。

【参考書】高等学校で使用する物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義の最終日に試験を実施するので、毎回の復習を欠かさず行うこと。

工業物理学実験

Laboratory in General Physics 教授・金城 辰夫 講師・中村 浩一 1 単位

【授業目的】物理学の基本概念をよりよく理解すること、および実験を行なう際の基本事項を習得することを目的として基礎的な物理学実験を行なう。

【授業概要】統計処理 (最小自乗法)、力学 (ボルダの振り子、角運動量)、物性 (ヤング率、単剛性率、粘性係数、抵抗の温度変化)、電磁気学 (等電位線、磁気モーメント、コンデンサ、電磁誘導、トランジスタ特性、ホール効果)、熱 (比熱、温度伝導率)、波動 (フレネルの複プリズム、分光器と回折格子)、原子物理学 (スペクトル、光電効果、フランク・ヘルツの実験) の 20 テーマから適宜選択した実験を毎回 3~4 名ずつの班ごとに行ない、毎回レポートを提出する。

【受講要件】本講義の受講は、予習により実験内容が理解されている事を前提とする。

【履修上の注意】毎実験の 1 週間後にレポートを提出すること。レポートチェック後再提出を求められることがある。その際には提出締切までに提出。なお、実験時の安全について受講者各人は十分に注意すること。

【到達目標】

1. 実験を行う際の基本事項や注意事項を理解する。
2. 実験で明らかになる物理現象を理解し、得られた実験データを整理・解析出来るようになる。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. 実験 1 3. 実験 2 4. 実験 3 5. 実験 4 6. 実験 5 7. 実験 6 8. 実験 7 9. 実験 8 10. 実験 9 11. 実験 10 12. レポート提出 (実験 10) 13. 予備 14. レポート提出 (再提出分) 15. レポート提出 (再提出分) 16. 最終レポート提出 (再提出分)

【成績評価】レポート提出 70%(毎回)、平常点 30%(出席状況等) として評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【教科書】当実験の為の教科書「物理学実験」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】中村(A509室、TEL:656-7577、E-mail:koichi@pm.tokushima-u.ac.jp)

高分子化学

Polymer Chemistry 教授・佐藤 恒之 2 単位

【授業目的】高分子の基本概念を理解させ、高分子の構造、性質および合成法について基礎知識を習得させる。

【授業概要】高分子化合物の基本的な構造、性質および合成法、さらにラジカル重合を中心に重合反応の特徴を解説し、高分子化学の基礎を理解させる。

【到達目標】

1. 高分子の概念、高分子化合物と環境について理解を深める。
2. 高分子合成法の基礎知識を身につける。
3. ラジカル重合の特徴と重合機構を理解する。

【授業計画】1. 高分子とは (特徴、分類) 2. 高分子の化学構造 3. 逐次重合 4. ラジカル重合の特徴 5. ラジカル重合の素反応 6. ラジカル重合の速度論 7. 活性化エネルギー 8. モノマーの構造と反応性 9. モノマーの構造と反応性 10. 重合開始剤 11. 連鎖移動剤と重合禁止剤 12. ラジカル共重合 13. ラジカル共重合 14. イオン重合 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への取り組み状況、レポートの提出状況と内容および最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】佐藤恒之他著「高分子化学」朝倉書店

【参考書】大津隆行著「改定 高分子合成の化学」化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】佐藤(化406、656-7402、sato@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する平常点 (講義への参加状況、レポートの提出状況と内容) および最終試験の割合は 3:7 とする。

材料科学

Material Science 教授・中林 一朗 2 単位

【授業目的】本講義は金属、セラミックスの性質を理解させ、これらの材料の特性を比較し、工学、科学において特定の材料をさらに研究し、使用するための基礎を理解させる。

【授業概要】本講義では材料の知識を現在の工業に結びつけることを主眼とし、数学的な取り扱いはできるだけ排する。ただし、結晶の対称性や結晶構造を取り扱う以上、その空間的なイメージを養えるようその日に講義したことを復習し、演習課題は確実に消化・吸収してほしい。また、材料科学は応用学問であるので、無機化学、有機化学、物理化学の基礎を修得していることが望ましい。

【受講要件】無機化学、有機化学、物理化学の基礎を習得していることが望ましい。

【到達目標】

1. X 線回折の原理と応用を理解する。
2. 成分系の相図が描けるようにする。

【授業計画】1. 結晶の対称性・ステレオ投影 2. 対称の要素・晶族・点群 (1) 3. 対称の要素・晶族・点群 (2) 4. 空間格子・空間群 5. X 線の発生・性質 6. 結晶による X 線の回折 (1) 7. 結晶による X 線の回折 (2) 8. 簡単な結晶構造 9. 格子欠陥・転位 10. 金属および合金の結晶構造 11. イオン結晶 12. 相図 (1) 13. 相図 (2) 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義中に演習を行い、解答を提出させる (30%)。中間テスト 30%、講義終了後のテスト 40%で評価する。

【教科書】材料科学概説 (朝倉書店)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】中林(M603、656-7422、ichiro@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】成績評価に対する講義への参加状況、演習の回答 (以上平常点) と最終試験の割合は 3:7 とする。

材料物性

Physical Properties of Materials 助教授・森賀 俊広 2 単位

化学応用工学科 (昼間コース)

【授業目的】無機材料が示す様々な性質についてその基本を講義し、新素材設計のための基礎を修得させる。

【授業概要】同じ性質を持つ材料でもなぜ優劣が出てくるのか。化合物の構造とその基本的な物性をどのように結びつけて考えればよいのかを学ぶ。週当たり2回行うクォーター制の授業形態をとり、その2回の授業のうち、1回は講義を中心に、もう1回は演習を中心に行い理解を深める。

【受講要件】基礎無機化学及び材料科学を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】特になし

【到達目標】

1. 半導体・金属などの電気伝導機構について理解する。
2. 誘電性・磁性の発現機構およびその応用方法について理解する。
3. 固体の、特に半導体の光吸収について理解する。

【授業計画】1. 電気伝導性の基礎、絶縁体・半導体・金属の区別 2. p型・n型半導体のバンド構造、p/n接合 3. 半導体のバンド構造に関する演習問題 4. 固体の格子欠陥、イオン導電性、遷移金属酸化物の導電性 5. 固体の格子欠陥、遷移金属酸化物の導電性に関する演習問題 6. 固体の誘電性・圧電性・焦電性、強誘電体における自発分極機構 7. 強誘電体における自発分極機構に関する演習問題 8. 遷移金属の電子配置、高スピン状態と低スピン状態 9. 遷移金属の電子配置、高スピン状態と低スピン状態に関する演習問題 10. 固体の磁性、スピネル型フェライトの磁性 11. スピネル型フェライトの磁性に関する演習問題 12. 固体の光吸収、発光現象 13. 固体の光吸収、発光現象に関する演習問題 14. 予備日 15. 予備日 16. 最終試験

【成績評価】基本的には、講義終了後の最終本試験により成績を評価(60%)、授業への取り組み状況・演習問題の提出状況を加味する(40%)。

【教科書】荒川ら共著「無機材料科学」(三共出版)

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】森賀(M305, 656-7423, moriga@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義の性質上、「材料科学」の履修を前提として講義する。三角関数、指数・対数の計算できる機能の付いた関数電卓を持参のこと。成績評価に対する講義への取り組み姿勢、演習の回答と内容(以上平常点)と最終試験の割合は4:6とする。

雑誌講読

Seminar on Chemical Science and Technology

化学応用工学科教官 1単位

【授業目的】卒業研究に関連する外国語の文献を読むことにより、専門分野の知識を深め専門外国語の能力を高める。また、発表や討論によりプレゼンテーション能力・コミュニケーション能力を養う。

【授業概要】卒業生が配属された各研究室において、卒業研究と関連する専門分野の文献を講読し、その内容を紹介し、討論を行う。

【受講要件】卒業生とした学生の受講が可能。

【履修上の注意】配属した研究室の指示に従うこと。

【到達目標】

1. 卒業研究に関連する学術論文等を熟読し専門知識を増やす。
2. 発表・討論を通し、プレゼンテーション能力を高める。
3. 英文学術雑誌の講読を通じて、化学英語読解力を身につける。

【授業計画】1. 卒業研究に着手した学生が、各研究室において指導教官や大学院生と共に少人数のゼミ形式で専門分野の文献を講読する。

【成績評価】各配属先研究室の担当教官が、発表、討論などを通じて評価する。

【教科書】配属研究室の指示に従うこと。

【参考書】配属研究室の指示に従うこと。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】田村(化509, 656-7416, tamura@chem.tokushima-u.ac.jp)

自動制御

Automatic Control

講師・外輪 健一郎 2単位

【授業目的】なぜ自動制御が機械工学で必要か、自動制御系設計にはどのような知識が必要なのかについて理解させる。本講義では、線形制御理論に焦点を絞り、時間とともに変動する現象を理解する感覚を養い、自動制御の目的と構成、自動制御系の解析・設計のための基礎理論を講義し、演習を取り入れ自動制御に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】自動制御技術は、一般産業機械をはじめ化学プラントの基礎技術として応用されており、自動制御なくしてはこれらプラントの満足な運転は期待できない。そのため線形制御理論に基づき数学的解析法と設計法を解説する。

【受講要件】「微分方程式1」、「微分方程式2」、「ベクトル解析」を履修していること。

【到達目標】自動制御の目的、仕組みを理解し、自動制御系を解析・設計する基礎知識を取得する

【授業計画】1. 自動制御の基礎概念(自動制御の目的、構成) 2. ラプラス変換と微分方程式 3. ラプラス変換と微分方程式・レポート 4. 伝達関数とブロック線図 5. 伝達関数とブロック線図・レポート 6. 周波数応答 7. 周波数応答・レポート 8. 中間試験 9. 制御系の安定 10. 制御系の安定 11. 制御系の安定・レポート 12. 制御系の良さ 13. 制御系の良さ・レポート 14. 制御系設計の基礎 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への取組状況を重視する。授業姿勢とともに、レポート、中間試験、期末試験の結果を総合して評価する。

【教科書】添田喬・中溝高好共著「自動制御の講義と演習」日新出版

【参考書】講義中に説明する。

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】外輪(化310, 656-9204, sotowa@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】自動制御は応用学問であり、できるだけ広い知識を身につけておく必要がある。そのため「化学工学基礎」、「化学装置工学」、「プロセス工学Ⅰ及び演習」は履修しておくことが望ましい。

職業指導

Vocational Guidance

非常勤講師・坂野 信義 4単位

【授業目的】

【授業概要】生涯発達・Career Developing としての人間観・職業観を確立すべく、学際的見地から職業指導の課題と方法を論述し、併せて能力開発を実践指導する。

【授業計画】1. 職業指導の課題と方法 (1) 職業指導発展の略史 2. 職業指導の課題と方法 (2) 職業指導の課題 3. 職業指導の課題と方法 (3) 個性と職業:個人理解の方法-性格、興味など 4. 職業指導の課題と方法 (4) 個性と職業:適応と適性 5. 職業指導の課題と方法 (5) 個性と職業:Career Planning としてのライフワーク 6. 職業指導の課題と方法 (6) 個性と職業:マネジメントスキル:リーダシップ論など 7. 職業指導の課題と方法 (7) 職業相談(キャリア・カウンセリング):職業相談の意義 8. 職業指導の課題と方法 (8) 職業相談(キャリア・カウンセリング):カウンセリング理論と技術 9. 職業指導の課題と方法 (9) 職業指導の評価 10. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (1) 人生60年計画表の作成 11. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (2) IC法, NM法を活用してソフト作成能力を育成 12. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (3) KJ法を活用しての課題解決とプレゼンテーション 13. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (4) シュルツの自律神経訓練法の理解

【成績評価】論文、能力開発のプレゼンテーションにより成績評価。

【教科書】講師よりプリント資料配布。

【参考書】参考書、必読書については、講義中紹介。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】「面白くてためになり、そして思い出に残る」講義が目標。

触媒工学

Catalytic Science and Technology

助教授・杉山 茂 2単位

【授業目的】この時点までに、多くの基礎および専門科目で習得した、それぞれ独立の概念が、触媒を通じた場合、どのように体系的に利用できるかという点を理解することを目的とする。

【授業概要】実際に触媒を合成し反応に供するための、触媒担体選定、合成法、物性評価、活性試験、最適装置の選定などについて講述する。さらに最近の触媒工学の分野におけるトピックスを概説する。

【受講要件】「反応工学基礎」、「化学反応工学」を履修し、「反応工程設計」も受講していることが望ましい。

【履修上の注意】この講義の後に行われる「プロセス工学Ⅰ及び演習」と関連する。

【到達目標】

1. 反応装置の概要とその装置に相応しい触媒の物性を述べるができる。
2. 代表的な触媒と触媒調製法を挙げるができる。
3. 触媒の性質と触媒反応機構を相関して述べるができる。

【授業計画】1. 触媒工学の歴史の概略 2. 反応方式 液相均一、液相懸濁、固定床触媒反応器、流動床触媒反応器 3. 触媒各論 (1) 酸・塩基に基づく触媒各論 4. 触媒各論 (2) 触媒の複合化:複合酸化物 5. 触媒各論 (3) 分子次元触媒設計 6. 担体各論 担体の役割、担体・触媒の相互作用および担体各論 7. 触媒調製法 担持触媒、水熱合成法、気相合成法、固

化学応用工学科 (昼間コース)

相成法等 8. キャラクタリゼーション (1) 表面積, 分散度, 酸性度, 塩基性度の測定法 9. キャラクタリゼーション (2) 赤外吸収スペクトル, 電子顕微鏡, X線回折法, ケイ光 X線 10. キャラクタリゼーション (3) X線光電子分光法, X線吸収領域連続微細構造, 固体 NMR 11. 速度論 12. 最近のトピックス: 生産型触媒 13. 最近のトピックス: 公害抑制型触媒 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】学期末に試験を行う。再試験は、原則として行わない。受講姿勢および授業中の質問に対する回答を平常点とし、定期試験と平常点を 6:4 の割合で評価する。

【教科書】授業中に配布するプリントを用いて進める。

【参考書】触媒学会編「触媒講座」(講談社)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】杉山(化309, 656-7432, sugiyama@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】触媒工学は、化学の多くの分野が融合していることによって成り立っていることに重きを置いて講義を行う。

生化学

Biochemistry

助教授・南川 慶二, 助手・森 健 2 単位

【授業目的】生命の構成要素である生体分子・生体高分子の構造と機能に注目し、生命の仕組みを理解する。

【授業概要】生命はさまざまな有機分子の集合体であり、それらが複雑に相互作用しながら維持・調節されている。本科目では生命現象を担う有機分子についてその構造と機能を、主に化学(有機化学・高分子化学など)の立場から理解することを目的とする。

【受講要件】「有機化学」および「高分子化学」の履修を前提として講義を行う。

【履修上の注意】特になし

【到達目標】

1. 生体分子の構造と機能について理解する
2. 遺伝情報の伝達について理解する
3. 生体成分や生命現象を工学的に応用するための考え方を理解する

【授業計画】1. 序論 2. アミノ酸 3. たんぱく質の構造 (1) 4. たんぱく質の構造 (2) 5. たんぱく質の機能 6. たんぱく質工学 7. スクレオチドの構造 8. スクレオチドの機能 9. 複製と転写 10. 翻訳 11. 遺伝子工学 12. 糖・脂質 13. 糖・脂質・アミノ酸の代謝 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への取り組み状況、小テスト、定期試験の成績を総合して評価する。

【教科書】「概説 生化学」 島原健三 著 三共出版

【参考書】特になし

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】南川(化612, 656-9153, minagawa@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし

生産管理

Production Control

非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為に生産現場で何をしているかを理解する。

【授業概要】企業経営は経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で生産技術のキーとなる事項について講義する。講義計画に従い生産管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 生産管理 2. 生産計画 3. 原価管理 4. 経営システム (ISO) 5. IE(Industrial Engineering) 6. 品質管理と TQC 7. トヨタ生産方式 8. 中間及び最終レポート(生産管理のまとめ)

【成績評価】講義への取り組み状況、レポートの内容

【教科書】その都度提供する。

【参考書】市販の生産管理に関する書籍、「生産管理便覧」丸善

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】出席率 80%(12 回)、レポート(中間と最終)の内容 20%

生物化学工学

Biochemical Engineering

教授・川城 克博 2 単位

【授業目的】酵素反応速度論、リアクター内の物理現象、酵素の固定化法及び固定化酵素の性能変化等を理解させ、バイオリアクターの設計に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】均相系及び固定化酵素の反応速度論を解説し、酵素反応用バイオリアクター設計の基礎について講述する。

【受講要件】「生化学」、「反応工学基礎」および「化学反応工学」の履修を前提として講義を行う。

【到達目標】

1. 生体触媒(酵素)の特性を理解する。
2. 酵素反応速度論を修得する。
3. 酵素の固定化法と固定化酵素の性質を理解する。

【授業計画】1. 酵素反応プロセスと生物化学工学 2. 酵素反応の特異性 3. Michaelis-Menten 式と動力学定数の算出法 4. 阻害剤が存在する場合の速度式 5. 多基質反応のメカニズムと速度式 6. 阻害剤が存在する場合の酵素反応の経時変化 7. 中間試験 8. バイオリアクター内の物理現象 9. バイオリアクターの分類と特徴 10. 酵素の固定化法 11. 固定化酵素の性能に及ぼす諸因子 12. 活性・反応特異性に及ぼす因子 13. リアクターの性能に及ぼす因子 14. バイオリアクターの設計 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】授業への取り組み・レポートの提出状況と内容(平常点)、中間および期末試験を総合して評価する。平常点と試験の評価の割合は 4:6 とする。

【教科書】海野 肇・中西一弘・白神直弘著「生物化学工学」講談社サイエンティフィック

【参考書】堀越弘毅・虎谷哲夫・北爪智哉・青野力三著「酵素 科学と工学」講談社サイエンティフィック、山根恒男著「生物反応工学」産業図書

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】川城(化308, 656-7431, kawasiro@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】適宜レポートを課すとともに中間試験を実施する。レポートは次の講義日の前日までに提出すること。

生物物理化学

Biophysical Chemistry

教授・田村 勝弘 2 単位

【授業目的】生体内でおこる諸現象を物理化学的な観点で説明するのに必要な基礎知識の習得を目指す。

【授業概要】コロイド科学の基礎、生体コロイド、生体高分子や微生物の熱測定を中心に講述する。また、最近の興味ある生物物理化学分野のトピックスも折に触れて講義に織り込み、基礎・応用の両面にわたった内容について講義を行う。

【到達目標】

1. 会合コロイドの性質について理解を深める
2. 生体モデル系としてのミセル、二分子膜の利用を理解する
3. 熱量計の利用について理解を深める

【授業計画】1. コロイド科学の基礎: 光散乱, ブラウン運動, 拡散, 2. 界面張力, 表面自由エネルギー, 吸着, 凝集と分散 3. 会合コロイドの性質: ミセルと逆ミセルの性質, 4. ミセル形成の熱力学, 可溶性 5. ミセル系(触媒)反応: 反応原理と一般的な性質, 有機反応, 6. 酵素反応, 圧力効果 7. 中間試験 8. 生体膜の構造と機能: 成分, 相変化, 9. 生体膜系の化学反応, 圧力効果 10. 熱測定の基礎: 熱分析の定義, 熱量計の分類, 高圧熱分析 11. 生化学におけるカロリメトリー: 生体高分子の熱変性, 細胞組織のカロリメトリー 12. 微生物活性測定: 微生物の増殖サーモグラム, 薬剤の抗微生物作用解析, 13. 環境汚染計測への応用 14. 予備日 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】講義への参加状況、3 年後期末の本試験、講義の進展に応じて提出させるレポートの成績を総合的に評価する。

【教科書】特に指定しない、プリント等を適宜配布する。

【参考書】中垣正幸・寺田弘・宮嶋孝一郎著「生物物理化学」南江堂、近藤保・大島広行・村松延弘・牧野公子著「生物物理化学」三共出版

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】田村(化509, 088-656-7416, tamura@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】生化学の履修が望ましい。

卒業研究

Undergraduate Work

化学応用工学科教官 9 単位

【授業目的】研究を実施する際には、学生自ら考える力を育成することを重視する。また、論文執筆や口頭発表を通して文章表現力や口頭のプレゼンテーション能力を高めることも目標とする。

化学応用工学科 (昼間コース)

【授業概要】卒論生は各研究室に配属され、各自の研究テーマにより研究を行う。

【受講要件】化学応用工学科卒業研究着手要件を満たした学生の受講が可能。

【到達目標】与えられた研究テーマを自らの力で実行し、その結果を論文執筆および卒業発表で報告する。

【授業計画】1. 卒業研究着手条件を満たした学生は、各研究室に配属され、各自の研究テーマにより研究を行う。1年間の研究成果を卒業論文としてまとめ、発表会で発表を行う。各研究室の具体的な研究テーマは、卒業研究着手者決定の時期に掲示等で通知される。

【成績評価】提出された卒業論文と、卒業研究発表会での口頭発表審査によって評価する。

【教科書】配属研究室の指示に従うこと。

【参考書】配属研究室の指示に従うこと。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】田村(化509, 656-7416, tamura@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】卒業研究発表会の準備・進行は3年生が参加して行う。積極的に参加して配属講座や研究テーマ決定の参考にすることが望ましい。

知的所有権概論

Intellectual Property 非常勤講師・酒井 徹 1単位

【授業目的】知的所有権制度を理解し、知的所有権の保護と制度の活用的重要性を各種の事例を基に修得する。

【授業概要】科学技術創造立国を目指す我が国において、知的所有権の保護と制度の活用が、行政・産業界・大学・研究所にとって不可欠であるとの共通認識を持つ必要性を説くとともに、知的所有権制度の概要と、その活用法を、企業の特許戦略、特許侵害事件などの事例を紹介しつつ講義し、学生が将来、企業・大学・研究所などへ進んだ場合を知っておくべき知的所有権に関する基礎知識の修得をはかる。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】2日間の集中講義であるために全時間の出席を要する。

【到達目標】

1. 知的所有権の概念についての理解を深める。
2. 特許法、商標法、意匠法、著作権法について理解する。

【授業計画】1. 知的所有権とは 2. 知的所有権制度の概要 (特許・商標等) 3. 知的所有権制度の概要 (意匠・著作権制度等) 4. 特許発明と特許権侵害 (含む事例研究) 5. 知的所有権の管理とその活用 (企業・大学・研究所) 6. 今後の研究開発と知的所有権のあり方 7. 試験 (到達目標 1 および 2 の評価)

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを試験 70%、講義への取り組み状況 30%で評価し、平均で 60%あれば合格とする。

【教科書】特製テキストを用いる。

【参考書】中山信弘著「知的所有権」日刊工業新聞社、通産省特許庁編「これからは日本も知的創造時代」通商産業調査会

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】酒井(Tel:03-5600-2631, Fax:03-5600-2649)

電子計算機概論及び演習

Introduction to Digital Computers and Programming Practice 非常勤講師・白石 善明 2単位

【授業目的】コンピュータの利用およびC言語によるプログラミングの基礎を講義と実習を通じて理解する。

【授業概要】各時間を前半と後半に分け、前半に内容の説明を行い、後半にコンピュータで確認し、さらに応用問題を行って理解を深める。

【履修上の注意】C言語の実習においては、前週までに習得した内容を使うことになるので、その週のうちに消化しておくこと。

【到達目標】

1. 計算機システムの概要を理解する。
2. 計算機の基本操作を理解する。
3. C言語を習得する。

【授業計画】1. 計算機システム概論 (1) 計算機の基本操作、ネットワークの利用法 2. 計算機システム概論 (2) 計算機発達の歴史、基本構成、基本機能、動作原理 3. 計算機のソフトウェア (1) オペレーティングシステム、エディタの基本操作 4. 計算機のソフトウェア (2) プログラミング言語、コンパイラ 5. C言語 (メイン関数、変数) 6. C言語 (標準入出力) 7. C言語 (演算) 8. C言語 (制御構造 I) 9. C言語 (制御構造 II) 10. C言語 (配列、ポインタ) 11. C言語 (関数) 12. C言語 (ファイ

ル入出力) 13. C言語 (構造体、共用体) 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義への参加状況やレポートの内容および提出状況などの平常点と期末試験を総合して評価する。

【教科書】特に指定しない。

【参考書】柴田望洋著「明解C言語入門編」ソフトバンク、S. Oualline 著、岩谷宏訳「現実的なCプログラミング」ソフトバンク

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】加藤(M304, 656-7429, katoh@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】平常点と期末試験との割合は4:6とする。

統計力学

Statistical Mechanics 教授・大野 隆 2単位

【授業目的】現代の化学は、原子、分子、電子の微視的立場から現象を理解し、新しい法則を見出して、応用を考えることである。その基礎である統計力学を成り立ちを含め講義する。

【授業概要】下記講義計画に従い、統計力学と量子力学の関係、現実の物質と簡単なモデル、カノニカル分布、フェルミ統計、ボーズ統計、ボルツマン分布を講義する。

【到達目標】

1. 微視的な観点と量子力学の理解
2. 統計力学の概念の理解
3. 統計力学の応用の理解

【授業計画】1. 統計力学の基礎的な考え 2. 温度と圧力と体積 3. 統計力学と量子力学 4. 調和振動子 5. 理想気体 6. エントロピー 7. ミクロカノニカル分布とカノニカル分布 8. 熱力学の基本法則 9. フェルミ統計 10. ボーズ統計 11. ボルツマン統計 12. 固体の比熱 (1) 13. 固体の比熱 (2) 14. 黒体放射 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義への出席状況、演習の回答、レポート評価、試験の成績を総合して評価する。

【教科書】久保 亮五著、統計力学、共立出版

【参考書】適時紹介する。

【連絡先】大野(A棟201, 656-7549, ohno@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】意欲的に勉強すること。

ニュービジネス概論

Introduction to New Business 非常勤講師・出口 竜也 第一線の実務経験者 2単位

【授業目的】ベンチャー企業は、新しいアイデアや専門的な知識・技術を事業化し、新しい創造的な事業を展開するバイオニア的企業である。この授業の目的は、アイデアや専門的知識・技術を事業化する、つまりベンチャー企業を起業するためのスピリットとノウハウを提供することにある。

【授業概要】政府は活力ある日本社会を創るために、大学発ベンチャー企業の育成や人材の育成を目指している。政府目標は、3年間で1,000社の大学発ベンチャー企業の創出である。本講義は、それを実現できるように徳島県が支援して開設された「学生起業家創業支援講座」である。学生諸君がベンチャー企業の設立に挑戦し、事業を展開していく手助けとなるような授業内容となっている。第一線で活躍されている実務家やアドバイザーを講師として招き、実際に役立つ知識を講義していただく。授業は、大きく分けて4つの部分から構成されている。第一は、導入としてのベンチャーとは何かの説明である。第二は、設立の方法と資金の手当てについてである。第三は、経営のノウハウである。最後に、ベンチャーを起業するにあたって不可欠のビジネスプラン (事業計画) の作成実習を行う。

【受講要件】工学部以外の受講希望者も教室収容能力の許すかぎり受講可能である。単位修得については所属部局の規則に従うこと。

【履修上の注意】遅刻や授業中の私語は厳禁である。

【到達目標】

1. ベンチャービジネスを起業するために必要な知識を修得すること
2. ビジネスプランが作成できるようになること

【授業計画】1. ガイダンス 2. 基調講演「ゼロからのスタート」 3. 独立型ベンチャー成功のための理論 4. 会社設立の方法 (法律や会社設立手続き) 5. 資金調達と資本政策 6. 銀行の役割と利用方法 (間接金融) 7. 株式発行による資金調達 (直接金融) 8. 会社経営の基礎 (計画・資金繰り・組織) 9. 企業会計の基礎知識 10. 経営戦略とマーケティング 11. 製品開発と知的所有権 12. ビジネスプラン作成のポイント 13. ビジネスプラン作成実習 14. 筆記試験 (4~11の内容に関する試験) 15. ビジネスプランの発表会 16. 予備日

【成績評価】到達目標の達成度で評価し、到達目標を達成しているものを合格とする。授業計画 4~11 は筆記試験 (60%) で、12,13,15 はビジネスプランの提出分 (40%) で評価する。

【教科書】各授業でレジメを配布する。

【参考書】各授業で紹介する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】出口(2216, 656-7183, deguchi@ias.tokushima-u.ac.jp)

【備考】ビジネスプランはグループで作成する。

反応工学基礎

Introduction to Chemical Reaction Engineering

教授・川城 克博 2 単位

【授業目的】化学反応速度論、反応器の型式、流通式反応器内における流体の流れ等について理解させ、工業用反応器の設計に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】工業用反応器設計のための反応速度論 (定容系及び定圧系) を解説し、回分式、連続槽型および管型反応器の設計法の基礎について講述する。

【受講要件】「微分方程式 I」の履修を前提として講義を行う。

【到達目標】

1. 定容系の反応速度論を修得する。
2. 定圧系の反応速度論を修得する。
3. 回分式、連続槽型および管型反応器の設計法の基礎を修得する。

【授業計画】1. 化学反応の分類 2. 工業用反応器の型式 3. 反応速度式 (定義、反応次数と速度定数) 4. 反応速度の温度依存性 5. 定容系回分反応 (0, 1 及び 2 次反応) 6. 定容系回分反応 2 (逐次反応, 可逆反応) 7. 定容系の速度解析 (積分法, 微分法, 半減期法) 8. 中間試験 9. 定常状態近似法 10. 定圧系の速度解析 (0, 1 及び 2 次反応) 11. 回分式反応器 12. 連続槽型反応器 1 (単一反応槽, 多段槽列) 13. 連続槽型反応器 2 (図解法, 過渡挙動) 14. 管型反応器 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への取り組み・レポートの提出状況と内容 (平常点)、中間および期末試験を総合して評価する。平常点と試験の評価の割合は 4:6 とする。

【教科書】岡崎達也編「化学工学入門 解説と演習」三共出版

【参考書】森田徳義著「反応工学要論」積書店、橋本健治著「反応工学」培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】川城(化308, 656-7431, kawasiro@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】適宜レポートを課すとともに中間試験を実施する。レポートは次の講義の前日までに提出すること。

反応工程設計

Chemical Process Design

教授・林 弘 2 単位

【授業目的】どのようにして化学プロセスは工業化されてきたかを学びながら、反応工学の基礎理論を理解させる。

【授業概要】化学プロセスの構成要素と工業装置の構造を概観したのち、固定床触媒反応装置における圧損失、伝熱と拡散問題、流動床と気-液・液々分散系の設計について学修し、循環プロセスの収支に関する計算演習を行う。

【受講要件】2 年後期の「化学反応工学」を修得していることが望ましい。

【到達目標】

1. 固定床および流動床における圧損失、温度分布および流動化開始速度の設計計算できること。
2. 循環系の収支計算からプロセスの操業方式を提言できる能力を身につけさせる。

【授業計画】1. 序論 2. 化学プロセスの構成要素 3. 製造工程とフローシート 4. 反応装置の構造型式 5. 固定床の化学工学: 輸送現象論 6. 流動と圧損失 7. 伝熱と触媒層の温度分布 8. 拡散と混合 9. まとめ、演習、小テスト 10. 流動層の反応工学 11. 分散系の工程設計 12. 循環系のプロセス工学 13. まとめ、演習、レポート 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】日) プロセスの英文講読と設計演習を行い、技術報告書を提出させる。試験 (60%) のほか、講義への取り組み状況、受講姿勢 (40%) を考慮して総合評価する。

【教科書】小冊子「講義ノート・化学反応工学および反応工程設計」

【参考書】必読書について、講義中、章別に紹介、歴史的意義を解説する。

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】林(化307, 656-7430, hayashi@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特に無し。

反応有機化学

Fundamentals of Organic Reaction Mechanisms

教授・河村 保彦 2 単位

【授業目的】有機化学は、暗記的な学問分野ととらえがちだが、これまでの知識の上にさらに反応を主体として有機化学を見直すことにより体系だった学問であることを理解し、生きた知識、考え方として役立てられるようにする。

【授業概要】有機化合物の反応に関する知識を新たな課題に応用できるよう、反応論における諸概念を平易に解説する。

【受講要件】「基礎有機化学」、「有機化学」の履修を前提に講義を行う。

【到達目標】

1. 有機化学に関した主な反応が記憶のみに頼らず、合理的に説明できる。
2. 新たな反応の機構が推定できる。
3. より洗練された反応とするための手段の一つとして、本講義で学修した事柄が役立てられる。

【授業計画】1. 有機化学における理論的方法 (有機化合物がどのような機構で反応し、機能を発現するのか?) 及び化学結合と構造 2. I 効果と共鳴効果 (共鳴, 芳香族性, 超共役) 3. 酸と塩基 (共鳴効果と pKa, HSAB 則) 4. 角度ひずみと立体効果 (自由エネルギー変化と平衡, 小員環, 立体電子効果) 5. 速度論-有機反応の解析 (速度則, 溶媒効果, 酸・塩基触媒作用) 6. 速度論-有機反応の解析 (同位体効果, 置換基効果) 7. 中間体の化学 (カルボカチオン, カルボアニオン, ラジカル) 8. 中間体の化学 (カルベン, ニトレン, ベンザインなど) 9. 有機反応の様式と機構 (求核置換反応, 求電子置換反応) 10. 有機反応の様式と機構 (付加反応, 脱離反応) 11. 有機反応の様式と機構 (転位反応, 溶媒効果) 12. 分子軌道と有機反応 (光化学反応, 光誘起電子移動反応) 13. 分子軌道と有機反応 (軌道対称性の保存) 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】末試験の成績と平常点を総合して、成績評価を行なう。平常点は授業への取り組み状況、演習の解答、レポート提出状況及びその内容、小テストの成績とする。これら平常点と期末試験の評価割合は 4:6 とする。

【教科書】沢木泰彦著「物理有機化学」(丸善)

【参考書】伊東, 児玉訳「マクマリー有機化学」(東京化学同人), 斎藤勝裕著「構造有機化学」(三共出版)

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】河村(化410, 656-7401, kawamura@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】なし

微分方程式 I

Differential Equations (I)

助教授・深貝 暢良 2 単位

【授業目的】常微分方程式の初等的な解法を修得し、さらに工学の諸分野に現われる微分方程式の解法に応用できるようにする。

【授業概要】微分方程式の理論は数理工学的な現象の解析に有力な手段を与え、現代工学の基礎として重要な役割を果している。その広範な理論の入門段階として、この講義では微分方程式の具体的な解法を中心に講義する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをきちんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 2 階の定数係数線形常微分方程式が解ける。
2. 簡単な求積法が理解できる。

【授業計画】1. はじめに 2. 変数分離形 3. 同次形 4. 1 階線形微分方程式 5. 完全微分形 6. 高階微分方程式 7. 解についての基本定理 8. マクローリン級数, オイラーの関係式 9. 2 階線形同次微分方程式 10. 非同次微分方程式 11. 微分演算子 12. 定数係数の微分方程式 (I) 13. 定数係数の微分方程式 (2) 14. 級数解法 15. 期末試験

【成績評価】期末試験に基づいて行う。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】工学部数学教室

微分方程式 2

Differential Equations (II)

助教授・深貝 暢良 2 単位

化学応用工学科(昼間コース)

【授業目的】連立常微分方程式の解法, ラプラス変換の初歩, そして簡単な偏微分方程式の解法を修得し, より実際の工学的な問題に応用できるようにする.

【授業概要】「微分方程式1」に続いて現代工学すべての基礎として重要な役割を果たしている連立常微分方程式系の基本的な解法を講義する. さらに, 簡単な偏微分方程式の解法についても講義する.

【受講要件】「微分方程式1」の履修を前提とする.

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには, 予習を行い, 講義ノートをかきととり, 講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと. それ以上に, 各自が普段から自主的に演習に取り組むこと.

【到達目標】

1. 簡単な定数係数連立線形常微分方程式が解ける.
2. ラプラス変換とその応用ができる.

【授業計画】1. 連立線形常微分方程式 2. 線形代数の復習 3. 同次連立微分方程式 4. 非同次連立微分方程式 5. 基本行列の構成 6. 計算例(1) 7. 計算例(2) 8. ラプラス変換の定義 9. ラプラス変換の基本的な性質 10. ラプラス逆変換の計算(1) 11. ラプラス逆変換の計算(2) 12. 常微分方程式への応用 13. 1階偏微分方程式 14. 定数係数の2階線形偏微分方程式 15. 期末試験

【成績評価】期末試験に基づいて行う.

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】工学部数学教室

1. 粉粒体の物性・測定法・分散特性について理解し, 基礎計算ができる.
2. 気相・液相系の粉粒体操作について理解し, 要点を説明できる.
3. 粒子充填・流動化システムについて理解し, 特徴を記述できる.

【授業計画】1. 粒子個々の物性(粒子径) 課題レポートの説明 2. 粒子集合体の物性(粒度分布, 平均粒子径) 課題レポート情報 3. 粒子集合体の物性(充填特性) 小テスト 4. 粉体特性の測定法(粒度分布, 比表面積) 5. 分散粒子の性質(等速運動—流体抵抗) 小テスト 6. 分散粒子の性質(加速運動—外力場) 課題レポートの中間調査 7. 中間試験, 課題レポートのテーマ決定 8. 分散粒子の操作(気相系—分散・分級, 集塵) 小テスト 9. 分散粒子の操作(液相系—特徴・生成) 課題レポート対策 10. 分散粒子の操作(液相系—ろ過) 小テスト 11. 粒子充填システム(圧力損失, 流体混合) 12. 粒子集合体の流動(流動化) 小テスト 13. 粒子集合体の流動(三相流動化, 気泡の運動) 課題レポート提出 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】平常点(授業への参加状況, 小テストの解答, 課題レポートの提出内容など)と試験(中間・定期試験)の成績を総合して評価する. なお, 平常点と試験成績との割合は4:6とする.

【教科書】奥山ら著「新体系化学工学 微粒子工学」オーム社

【参考書】講義中に紹介する.

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】加藤(M304, 656-7429, katoh@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】自分の計算機は自由に使えるようにしておくこと.

微分方程式特論

Differential Equations(III)

助教授・深貝 暢良 2単位

【授業目的】数理解析学の強力な道具立てとして, フーリエの方法を修得させる.

【授業概要】フーリエが導入した三角級数展開およびフーリエ積分変換の理論を講義し, 物理・工学に現れる偏微分方程式を初等的に扱うための基礎的な知識を提供する.

【受講要件】「微分方程式1」「微分方程式2」の履修を前提とする.

【履修上の注意】高度な内容につながる盛り沢山の講義である. 使い方を理解するには, 実用的な道具と割り切って, 多数の計算練習を行なうとよい.

【到達目標】

1. フーリエ解析の初歩を理解する.
2. フーリエ級数の計算ができる.

【授業計画】1. フーリエ係数, フーリエ級数 2. 三角級数の和, ディリクレ核 3. リーマン・ルベグの定理, ベッセルの不等式 4. 展開定理 5. パーセバルの等式, 簡単な応用例 6. フーリエ積分 7. ディリクレ積分公式, フーリエ積分公式 8. フーリエ反転公式 9. フーリエ変換, 合成積 10. 変換の計算例 11. 偏微分方程式への応用 12. 波動方程式 13. 熱伝導方程式 14. ラプラス方程式 15. 期末試験

【成績評価】期末試験に基づいて行う.

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】入江昭二・垣田高夫『フーリエの方法』内田老鶴園, 洲之内源一郎『フーリエ解析とその応用』サイエンス社, 竹之内脩『フーリエ展開』秀潤社, T.W. ケルナー『フーリエ解析大全上・下』朝倉書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】工学部数学教室

微粒子工学

Powder Engineering

非常勤講師・土屋 活美 2単位

【授業目的】化学プロセス工学で扱う様々なシステム/操作のうち粉粒体(粒子集合体)の関与する系について粒子挙動の見地から学修し, 粉粒体のキャラクターゼーションおよびハンドリングの基礎を理解する. また, 環境・エネルギー問題への対応やコミュニケーション能力向上にも目を向ける.

【授業概要】「微粒子工学」では, 2年後期に「化学工学基礎」で学んだ流動・伝熱・物質移動の基本原則を, より複雑な(主に固体粒子を分散相とする)不均一系の流れを伴うシステムに適用する. 自然・社会環境のみならず, 今日の化学プロセスの中間・最終製品として重要な役割を果たす粉体を, 物性・測定・操作面からとらえ, その全体像を把握する.

【受講要件】「化学工学基礎」の履修を前提とする.

【履修上の注意】計算機を用意しておくこと.

【到達目標】

福祉工学概論

Introduction to Well-being Technology for All

教授・末田 統

助教授・藤澤 正一郎 2単位

【授業目的】我々の身近な生活を支える様々な機器や環境の中にも含まれる工学技術のうち, いろいろなハンディキャップを伴う条件下でも使いやすく安全を確保する技術を, 人に優しい技術として紹介し, その万人に対する延長線上に福祉工学技術の一端があることを理解させる. また, 各障害者個人に合わせた機器を紹介し, 福祉工学技術のもう一端には, 特化された技術があることも理解させる.

【授業概要】本講義では, 人間の生活全体を支える工学技術を, 高齢化による機能の低下や障害によるハンディキャップを軽減させる様々な技術(ハイテクならびにローテク)やアプローチを例にとり, 広い視点から概観する.

【到達目標】

1. 機能の低下や障害によらず, 全ての人々が利用できる技術や機器, 環境があることを理解させる.
2. 特別なサポートを必要とする人々のための技術や機器, 環境があることを理解させる.
3. 人に優しい工学技術について考える機会を持たせる.

【授業計画】1. ガイダンス:講義の進め方, 受講の心構え 2. 支援科学技術:個人への対応と万人への対応(Universal Design) 3. 移動・移乗 4. 排泄 5. 身障者スポーツ 6. 高齢者の生活環境 7. 就労 8. 生活自立と支援技術(米国の場合) 9. 技術による支援, 人による支援 10. 技術:障害への適合, 環境への適合, 人間への適合 11. 知的障害者と運動機能障害者の支援 12. 視覚障害者と聴覚障害者の支援 13. 最新の技術:???? 14. まとめ:心のバリアー, エンジニアとして 15. 予備日

【成績評価】講義への取り組み状況と, 毎回提出させるレポートにより評価する.

【参考書】「明日を創る」, E&C プロジェクト「バリアフリーの商品開発2」, 山田尚勇他「コンピュータと人間の共生」, 後藤芳一編「バリアフリーのための福祉技術入門」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】末田(総合研究実験棟705, 656-2167, o.sueda@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】出席点とレポート評価との割合は4:6とするが, 欠席者のレポートは成績評価しない.

複素関数論

Complex Analysis

助教授・澤下 教親 2単位

【授業目的】複素関数論への入門講義として, 複素変数関数の微積分学を修得させる.

【授業概要】微積分で扱う対象を複素数変数の関数にまで広げ, 正則関数および有理型関数の理論を展開することにより, 実数の世界では困難であったある種の積分計算が複素数の立場からみると簡潔に処理されることを述べる.

化学応用工学科 (昼間コース)

- 【受講要件】「微積分学」の履修を前提とする。
- 【履修上の注意】時間数の制約から、複素関数の計算を修得するための必要最小限な講義を行なうので、講義内容のすべてを吸収することが理解への早道である。日頃から予習・復習の計画を立てて勉学に動んでもらいたい。
- 【到達目標】
1. 複素微分, 正則関数の概要が理解できる。
 2. 留数概念の理解とその応用ができる。
- 【授業計画】1. 複素数 2. 複素平面, オイラーの式 3. 複素数列, 複素級数 4. 複素変数の関数 5. 複素微分, コーシーリーマンの関係式 6. 正則関数 7. 複素積分 8. コーシーの積分定理 9. コーシーの積分公式 10. テイラー展開 11. ローラン展開 12. 留数とその応用 13. 定積分の計算 1 14. 定積分の計算 2 15. 期末試験
- 【成績評価】授業への取組み状況, レポートの提出状況, 小テスト等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。
- 【教科書】阪井章『複素解析入門』新曜社
- 【参考書】辻政次・小松勇作「大学演習・関数論」裳華房, 田村二郎「解析関数(新版)」裳華房, 吉田洋一「関数論・第2版」岩波書店, 神保道夫「複素解析入門」岩波書店, 志賀啓成「複素解析学 I・II」培風館
- 【連絡先】澤下(A204室, TEL:656-7542, E-mail:sawasita@pm.tokushima-u.ac.jp)

物質機能化学 1 及び演習

Physico-chemical Exercise 1

教授・田村 勝弘, 助手・鈴木 良尚 2 単位

- 【授業目的】化学平衡と化学反応速度についての基礎事項の修得と, 演習による応用力の修得を行う。
- 【授業概要】平衡状態の熱力学を通じての化学平衡の概念と, それを基にした, 非平衡状態の反応速度論について解説し, 毎回小テストを行う。さらなる理解のために中間テストも行う。質問などは, 授業中に限らず, 常に受け付ける。
- 【受講要件】基礎物理化学の履修を前提とする。また, 微分方程式 I, 物理化学の履修が望ましい。
- 【履修上の注意】毎回の小テスト, 中間テスト, 定期試験とも全て成績評価対象になるので注意すること。
- 【到達目標】
1. 平衡熱力学, 化学平衡について理解する。
 2. 化学反応速度論の基礎を理解する。
- 【授業計画】1. 熱力学の復習 (Entropy いろいろ) 2. 熱力学の復習 (Legendre 変換と Maxwell の関係式) 3. 部分モル量, 活量と活量係数 4. Raoult の法則, Henry の法則, 溶液中への固体の溶解 5. 化学親和力, 化学平衡の条件, 反応強度 6. 理想気体反応の自由エンタルピーと平衡, 平衡定数いろいろ 7. Le Chatelier の原理, 平衡定数の圧力, 温度変化 8. 中間テスト 9. 化学変化の速度, 反応次数, 一次, 二次反応速度式 10. 反応次数の決定, 逆反応, 速度定数と平衡定数 11. 化学緩和, 流動系中の反応, 反応速度の温度依存性 12. 活性複合体理論, 単分子反応 13. さまざまな反応速度 I 14. さまざまな反応速度 II 15. 予備日 16. 定期試験
- 【成績評価】到達目標の 2 項目が達成されているかを, 試験 100% で評価し, 合計で 60% 以上あれば合格とする。
- 【教科書】ムーア「物理化学」(上) 東京化学同人
- 【参考書】田崎晴明著「熱力学 現代的な視点から」培風館
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】鈴木(化514, 656-7415, suzuki@chem.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】講義ノート・小テストの解答は, <http://www.chem.tokushima-u.ac.jp/B2/Tamura%20Lab/suzuki.html> から download して利用して下さい。

物質機能化学 2 及び演習

Physico-chemical Exercise 2

助教授・安澤 幹人 2 単位

- 【授業目的】基礎無機化学および物理化学で学んだ基礎知識を確立させ, さらに複雑な問題への応用力を修得する。
- 【授業概要】無機化学および物理化学(電気化学)に関する基礎的な例題を解説し, 応用問題の演習を行う。また機能性材料に関するトピックスのグループ発表を行い, 最近の新しい展開を含めた応用について学習する。
- 【受講要件】基礎無機化学および基礎物理化学の履修を前提として講義する。また, 応用電気化学および物理化学の履修が望ましい。
- 【到達目標】

1. 酸-塩基の概念を理解する。
2. 電気化学の基礎概念を修得する。

【授業計画】1. 酸と塩基 (Bronsted-Lowry の概念, 酸と塩基の相対的な強さ) 2. 酸と塩基 (ルイス酸とルイス塩基) 3. 非水溶媒における反応 (融解状態における高温反応) 4. 電解質溶液 (電気伝導率) 5. 電解質溶液 (イオンの移動度と輸率) 6. 電解質溶液 (イオンの活量, 溶媒和) 7. 中間試験 8. 酸化と還元 (標準電極電位, ネルンストの式) 9. 酸化と還元 (平衡定数, 酸化状態の不均化および安定化) 10. 実用電池 (一次電池, 二次電池, 燃料電池) 11. 電池製造工場見学 12. トピックスプレゼンテーション 13. トピックスプレゼンテーション 14. トピックスプレゼンテーション 15. 予備日 16. 最終試験

【成績評価】中間試験および最終試験, 講義中の演習, レポートおよびプレゼンテーションを総合して行う。レポートの提出状況や授業への参加状況(平常点)と上記試験の割合は 3:7 とする。

【教科書】特に指定しない。講義時にプリント等を配布する。

【参考書】コットン・ウィルキンソン・ガウス著, 中原訳「基礎無機化学」培風館, 大塚利行・加納健司・桑畑 進著「ベーシック電気化学」化学同人, 田村英雄・松田好晴著「現代電気化学」培風館, 松田好晴・岩倉千秋著「電気化学概論」丸善, 魚崎浩平・喜多英明著「電気化学の基礎」技報社, 玉虫伶太著「電気化学」東京化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】安澤(化512, 656-7421, mik@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】計算機を用意しておくこと。

物質合成化学 1 及び演習

Lecture and Exercise in Organic and Polymer Chemistry 1

教授・河村 保彦, 助手・西内 優騎 2 単位

- 【授業目的】学んだ知識の理解は, 実際に演習問題を解くことで高められる。当該時期までに学んだ有機化学の知識・考え方を本講義, 演習により, 補完修得する。
- 【授業概要】有機化学は, 官能基の化学変換から有機電子論, 反応機構論に基づいた考え方で幅広い。しかし基礎を理解する上で, また主要な役割としての化合物合成が重要なことは変わりがない。既修得の有機化学各章について, 合成を主眼とした正確な基礎の理解を達成したい。そのため, 数多くの演習問題を考えると共に, 有機化学がいくつかの基本概念で統一されていること, またその面白さが体得できるよう平易に解説する。
- 【受講要件】「基礎有機化学」, 「有機化学」の履修を前提に講義, 演習を行う。
- 【到達目標】
1. 基礎的な有機化学反応機構が説明できる。
 2. 新たな反応に対し, 合理的な説明ができる。
- 【授業計画】1. 構造と結合, 化学結合と分子の性質 2. 有機化合物の性質: アルカンとシクロアルカンとそれらの立体化学 3. アルケン: 構造と反応性 4. アルキン 5. 立体化学 6. ハロゲン化アルキルとその反応: 求核置換 7. ハロゲン化アルキルとその反応: 脱離反応 8. 構造決定: 質量分析法と赤外分光法 9. 構造決定: 核磁気共鳴分光法 10. ベンゼンと芳香族性 11. ベンゼンの化学: 芳香族求電子置換 12. アルコール及びエーテル類 13. カルボニル化合物の化学: アルデヒドとケトンの求核付加反応 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験
- 【成績評価】期末試験の成績と平常点を総合して, 成績評価を行なう。平常点は講義への参加状況, 演習の解答, レポート提出状況及びその内容, 小テストの成績とする。これら平常点と期末試験の評価割合は 4:6 とする。
- 【教科書】伊東, 児玉訳「マクマリー有機化学(上)及び(中)」(東京化学同人)
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】河村(化410, 656-7401, kawamura@chem.tokushima-u.ac.jp), 西内(化409, 656-7400, nishiuch@chem.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】なし

物質合成化学 2 及び演習

Lecture and Exercise in Organic and Polymer Chemistry 2

講師・平野 朋広, 助手・森 健 2 単位

- 【授業目的】高分子化合物の合成および高分子の基礎的な物性を中心として講義するとともに, 例題を解説し, 問題を解くことによって基礎を理解させる。
- 【授業概要】有機合成の応用的分野である高分子合成について学び, また, 高分子特有の反応や, 高分子の基礎的な物性について述べる。演習

化学応用工学科 (昼間コース)

では高分子材料合成に用いられる各種重合の反応機構と特徴、構造と物性、機能などについて問題を解きながら理解を深める。演習課題についてレポートを課すほか、口頭発表と質疑応答を行い、論理的思考力およびプレゼンテーション力の向上を目指す。

【受講要件】「高分子化学」および「機能性高分子設計」の履修を前提とする。

【履修上の注意】演習問題を毎回宿題として課し、授業は発表と質疑応答を中心に行う。十分な予習・復習が必要である。

【到達目標】

1. 各種重合法の反応機構について理解する。
2. 高分子の評価法 (NMR, 分子量測定) について理解する。
3. 高分子の溶液物性について理解する。

【授業計画】1. 総論 2. ラジカル重合 3. カチオン重合 4. アニオン重合 5. 共重合 6. タクチシチー 7. NMR 8. 高分子反応 9. 分子量 10. 高分子鎖のひろがり 11. 高分子の希薄溶液 12. 粘性 13. 力学的性質 14. 予備日 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】講義への参加状況、レポート提出状況及びその内容、口頭発表、期末試験の成績等を総合的に考慮して成績評価を行なう。

【教科書】教科書は使用せず、プリント等を配布する。

【参考書】佐藤恒之他著「高分子化学」(朝倉書店)、大津隆行著「高分子合成の化学」(化学同人)、高分子学会編「高分子科学の基礎」(東京化学同人)、伊勢典夫他著「新高分子化学序論」(化学同人)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】平野(化405, 656-7403, hirano@chem.tokushima-u.ac.jp)、森(化615, 656-9704, mori@chem.tokushima-u.ac.jp)

物理化学

Physical Chemistry

助教授・金崎 英二 2 単位

【授業目的】基礎物理化学で学習した化学熱力学に引き続き、系の平衡状態を記述する方法論の一つである化学統計熱力学の基礎について述べ、3年後期に開講される量子化学への橋渡しを行う。系の巨視的な記述方法である熱力学関数が、微視的な存在である分子の性質をどのように反映しているかを、分配関数の計算を通じて理解し、物質系のマクロスコピックな性質が、物質系を構成するミクロスコピックな分子の性質と密接に結び付いている事を知る事が本講義の目的である。基礎物理化学、物理化学及び量子化学の3科目で「物理化学」という巨大な学問体系の骨格の記述を完結させる。時間があれば、具体例の一つとして、統計的な協同現象である分子の電気的及び磁気的性質等についても触れたい。

【授業概要】化学統計熱力学の基礎について述べる。

【受講要件】基礎物理化学を受講しておくこと。

【到達目標】

1. 化学統計熱力学の基礎的概念を理解できる
2. 化学統計熱力学の基礎的概念を用いて簡単な系の記述ができる
3. 熱力学的諸関数を分配関数を用いて算出できる

【授業計画】1. 化学統計熱力学の基礎 2. 化学統計熱力学の基礎 3. 化学統計熱力学の基礎 4. 化学統計熱力学の基礎 5. 化学統計熱力学 6. 化学統計熱力学 7. 化学統計熱力学 8. 化学統計熱力学 9. 化学統計熱力学 10. 化学統計熱力学 11. 化学統計熱力学の応用 12. 化学統計熱力学の応用 13. 化学統計熱力学の応用 14. 化学統計熱力学の応用 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】定期試験と授業の取り組み等をもとに総合的に評価する。必要に応じて中間テストを実施し、又、レポートの提出等を求める場合がある。

【教科書】P.W. Atkins, et al., Physical Chemistry, 7th ed., Oxford University Press, 2002.

【参考書】講義の中で適宜紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】金崎(化511, 656-9444, kanezaki@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】基礎物理化学の受講を前提とする

プロセス工学 1 及び演習

Process Engineering I and Exercise

助教授・杉山 茂 2 単位

【授業目的】化学プロセス工学以外の分野で履修する速度論は、化学反応に対する様々な情報を得ること、また解釈することを目的としているが、本講義では、速度論的解析法を様々な様式のプラントの設計に応用することを理解することに重点を置く。多くの例題や演習を、講義中に筋道をたて、こちらから回答を誘導する形式で学生に質問を与え、回答へ導く形式で講義を進める。

【授業概要】反応器設計への速度論の応用に関する解説を行い、解説に基づく計算演習および英文読解を行う。

【受講要件】「反応工学基礎」、「化学反応工学」を履修し、さらに「反応器設計」も受講していることが望ましい。

【履修上の注意】講義の前半と後半を担当教官が交代して講義を行う。

【到達目標】

1. 回分式反応器を通して速度論的解析を習得する。
2. 管型及び完全混合型反応器設計を行う基礎知識を演習を通じて理解を深める。
3. 反応器設計に関する応用問題を習得する。

【授業計画】1. 定圧および定容回分式反応器-基礎式、O-n 次反応 2. 可逆反応、逐次反応、併発反応等 3. 定圧回分式反応器に関する例題、演習 4. 定圧回分式反応器に関する例題、演習 5. 定容回分式反応器に関する例題、演習 6. 定容回分式反応器に関する例題、演習 7. 管型および完全混合型反応器 設計基礎式-空間時間、接触時間等 8. 管型反応器に関する例題、演習 9. 管型反応器に関する例題、演習 10. 完全混合型反応器に関する例題、演習 11. 完全混合型反応器に関する例題、演習 12. リサイクル反応器、直列反応器、数値解析法、図解法等 13. リサイクル反応器、直列反応器、数値解析法、図解法等に関する例題、演習 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】中間試験(1回)、本試験。授業中に小テストを行う。再試験は原則として行わない。出来るだけ多くの演習問題に接するため、受講姿勢を重視する。授業への取り組み、発表回数、授業態度を平常点として評価に入れ、中間試験、定期試験と同等に評価する。

【教科書】授業中に配布するプリントを用いて進める。

【参考書】授業中に指示する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】杉山(化309, 656-7432, sugiyama@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】積極的は質問、発表を期待する。

プロセス工学 2 及び演習

Process Engineering 2 and Exercise

講師・加藤 雅裕 2 単位

【授業目的】化学プロセス工学のうち主に拡散単位操作を移動現象論の見地から講述し、演習を通じてプロセス設計の基本手法を修得させる。

【授業概要】「プロセス工学 2 及び演習」では「化学工学基礎」、「分離工学」で学んだ流動・伝熱・物質移動の基本原則に基づいて、講義と演習とを組み合わせることにより、種々の拡散単位操作に関する基礎学力および実プロセスを念頭においた応用力の両面を充実させる。

【受講要件】「化学工学基礎」、「分離工学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】計算機を用意しておくこと。

【到達目標】

1. 下記の各拡散単位操作に関連する基本原理を説明できる。
2. 各拡散単位操作に関する基礎計算ができる。
3. 実プロセスへの応用能力を養う。

【授業計画】1. 流動(層流と乱流、管内流速分布、圧損と摩擦係数) レポート 2. 流動(機械的エネルギー収支) 3. 伝熱(定常熱伝導、対流伝熱、管型熱交換器) レポート 4. ガス吸収(拡散、吸収機構) レポート 5. ガス吸収(物質移動係数、吸収塔の設計) 6. 蒸発(蒸発計算、多重効用蒸発缶) 7. 蒸留(気液平衡計算・線図、単蒸留、フラッシュ蒸留) レポート 8. 蒸留(精留の原理、精留塔の設計) 9. 抽出(液液平衡、理論計算) レポート 10. 抽出(抽出操作、抽出計算) 11. 吸着(理論計算、吸着操作) レポート 12. 吸着(吸着計算) 13. プロセス・フローシートに基づく収支計算 14. 予備日 15. 予備日

【成績評価】授業への取り組み状況および授業中の演習レポートの成績により評価し、その割合を3:7とする。なお、定期試験は行わない。

【教科書】講義時にプリントを配布し、教科書は指定しない。

【参考書】化学工学学会編「基礎化学工学」倍風館、水科・桐案編「化学工学概論」産業図書、化学工学学会編「化学工学 解説と演習」積書店

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】加藤(M304, 656-7429, katoh@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「化学工学基礎」、「分離工学」で学修したことを十分に復習しておくこと。

分子設計化学

Molecular Design in Chemistry

講師・平野 朋広 2 単位

【授業目的】分子設計の観点から、有機化学の理論、法則、またそれらに基づいた反応機構について解説し、分子設計における有機化合物、特にカルボニル化合物の構造と反応性の関係について理解させる。

化学応用工学科 (昼間コース)

【授業概要】カルボニル化合物の反応や有機酸の性質を中心に、有機反応の機構や法則について、分子設計の立場から講述する。

【受講要件】「基礎有機化学」「有機化学」の履修を前提とする。

【到達目標】

1. 有機反応における置換基効果についての理解を深める。
2. カルボン酸およびその誘導体について構造と反応性を理解する。
3. カルボニル化合物の α -置換反応の機構と合成反応への応用について理解を深める。

【授業計画】1. カルボン酸の構造と酸の強さ 2. ハメット則と置換基効果 3. ハメット則の応用 4. カルボン酸の製法 5. カルボン酸の反応 6. 求核アシル置換反応 7. 酸ハロゲン化物および酸無水物の化学 8. アミドおよびニトリルの化学 9. ケト-エノール互変異性と反応 10. カルボニル α -水素の酸性度 11. エノレートイオンの反応性 12. アルドール反応 13. クライゼン縮合反応 14. 予備日 15. 予備日 16. 最終試験

【成績評価】定期試験と授業への取り組み姿勢から総合的に判断する。また、必要に応じてレポートの提出を求める。

【教科書】J.McMurry 著「マクマリー有機化学(中)(下)」東京化学同人

【参考書】J. McMurry 著「マクマリー有機化学(上)」東京化学同人、井本稔著「理論有機化学解説」東京化学同人

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】平野(化405, 656-7403, hirano@chem.tokushima-u.ac.jp)

分析化学及び演習

Lecture and Exercise in Analytical Chemistry 教授・本仲 純子
助手・藪谷 智規 2 単位

【授業目的】試料中の目的物質および化学種を識別し、その相対量あるいは絶対量を求めるのが分析化学であり、その方法論を探究するのが分析化学である。その分析化学の基礎の修得および現代社会に付随する諸問題を分析化学の見地から捉えることを目的とする。

【授業概要】分析化学の基礎原理および方法論について講述し、さらに演習・小テストによる講義内容の再確認を行う。また、分析化学に関連する最新のトピックスについて解説を行う。

【受講要件】基礎分析化学を履修しておくこと

【履修上の注意】電卓を必ず持参すること。

【到達目標】

1. 基礎分析化学で履修した化学平衡に関して復習し、確実に理解すること。
2. 古典定量分析法に関して理解を深める。
3. 分析法の大きな目的のひとつである「分離・濃縮」と環境化学、地球科学で重要視される「試料採取・調製」に関して修得する。

【授業計画】1. 総論 2. 分析値の取り扱いと化学平衡に関する演習(酸塩基平衡) 3. 化学平衡に関する演習(酸塩基平衡) 4. 沈殿平衡に関する演習と小テスト 5. 酸化還元平衡に関する演習 6. 酸化還元平衡に関する演習と小テスト 7. 錯平衡に関する演習と小テスト 8. 重量分析について 9. 分離濃縮法 10. 分離濃縮法 11. 分離濃縮法 12. 試料採取及び調製 13. 試料採取及び調製 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験(到達目標 1,2,3 の総合的評価)

【成績評価】定期試験 60%、平常点 40%(各講義後の小テスト、レポートおよび授業態度)で評価し、合計 60%以上あれば合格とする。

【教科書】「分析化学」赤岩英夫、柘植新、角田欣一、原口紘吉著、丸善、演習問題に関しては適宜、問題用紙を配布する

【参考書】長島弘三、富田功「分析化学」裳華房、長島弘三「分析化学演習」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】藪谷(化605, 656-7413, yabutan@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「基礎分析化学」の履修を前提として講義および演習を行う。

分離工学

Separation Science and Technology 教授・富田 太平 2 単位

【授業目的】化学工業をはじめ殆ど全ての生産工程に含まれる単位操作の内の拡散分離操作に重点を置き講義し、演習を通じてこれを習得させ、基礎学力と実際的な問題を解く応用力を養う。

【授業概要】代表的な拡散分離操作について、分離理論、分離装置・操作、解析法について講述する。

【受講要件】2 年次における「化学工学基礎」の履修を前提とし講義する。

【履修上の注意】A-B の 2 班に分けて少人数で講義する。

【到達目標】

1. 物質移動現象論の基礎およびガス吸収機構を理解し、ガス吸収装置設計の基礎計算ができる。

2. 授業計画にある各種分離操作の基本原則を理解し、応用できる。

【授業計画】1. 蒸発 2. 乾燥 3. 演習(蒸発・乾燥) 4. 晶析理論 5. 晶析操作と装置 6. 演習(晶析) 7. 小テスト(晶析・蒸発・乾燥) 8. 拡散と物質移動 9. ガス吸収・ガス吸収機構 10. ガス吸収塔の設計と演習 11. 抽出:溶解平衡 12. 抽出操作 13. 演習(抽出) 14. 吸着:吸着平衡, 吸着操作 15. 演習(吸着) 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の 4 項目がそれぞれ達成されているかを試験 60%、平常点(演習レポートと取り組み状況)40%で評価し、総合評価して 60%以上を合格とする。

【教科書】「基礎化学工学」化学工学会編、倍風館

【参考書】「化学工学概論」水科篤郎、桐栄良三編、産業図書、「分離工学」加藤滋雄ら、オーム社、「分離工学」化学工学会編、積書店

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】富田(化312, 656-7425, tomida@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】2 年次における「化学工学基礎」の履修を前提とし講義する。A-B 班に分けて少人数で講義する。講義への出席状況、演習やレポート、小テストによる平常点と最終試験の割合は 5:5 とする。

ベクトル解析

Vector Analysis 助教授・澤下 教親 2 単位

【授業目的】工学の解析で必要不可欠なベクトルの概念と基礎的な性質を学ぶとともに、ベクトル場の解析学を通して古典力学、流体力学や電磁気学に現れる基本的な物理法則の数学的な理解・運用を目標とする。

【授業概要】三次元空間のベクトルで表される物理量の局所的変化(微分)と大局的効果(積分)を記述する手法としてベクトル場の微分積分学を展開し、微分積分学の基本定理のベクトル場に対する一般化を確立する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをきちんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. ベクトル場の微分についての基礎的な性質が理解でき、勾配、発散、および回転の基本事項が理解できる。
2. ベクトル場の各種の積分が理解でき、それらに関する基礎的な定理が理解できる。

【授業計画】1. ベクトルの演算 2. ベクトルの内積・外積 3. ベクトル値関数の微分・積分 4. 曲線のベクトル値関数表示 5. フレネ・セレの公式 6. 力学への応用 7. 曲面・接平面のベクトル値関数表示 8. スカラー場とベクトル場 9. スカラー場の勾配ベクトル 10. ベクトル場の発散・回転 11. 演算子間の関係 12. 線積分・面積分 13. ガウスの発散定理 14. ストークスの定理 15. 期末試験(到達目標 1 及び 2 の評価)

【成績評価】授業への取組み状況、演習の回答、レポートの提出状況、小テスト等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】寺田文行・木村宣昭 共著「ベクトル解析の基礎」、サイエンス社

【参考書】加藤祐輔『多変数関数の微積分とベクトル解析』講談社、渡辺正『ベクトル解析の基礎と応用』新数理ライブラリ M5 サイエンス社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】澤下(A204室, TEL:656-7542, E-mail:sawasita@pm.tokushima-u.ac.jp)

防災化学

Disaster-Prevention Chemistry 非常勤講師・坂 清次 1 単位

【授業目的】化学物質は人間の生活に欠かせないものであるが、取り扱いを誤ると人体や環境を脅かす有害な物質として作用する。安全・健康問題に対して、化学物質の安全からプロセスや機器の安全、化学企業や業界が行う対策まで具体的な事例を通じて理解させる。

【授業概要】身の回りの安全からはじめて石油化学工業、エチレン製造プロセス、プラスチックを中心とした地球環境問題及び国際規格と幅広く学び、化学企業や業界が行うレスポンスブル・ケア活動と世界の重大事故のケーススタディーを通じて化学、石油化学の防災工学について学習する。

【受講要件】特になし。

【到達目標】

化学応用工学科 (昼間コース)

1. ケーススタディーを通じて化学、石油化学の防災工学について学習する。
 2. 化学企業や業界が行うレスポンシブル・ケア活動の理解を深める。
- 【授業計画】1. 身の回りの安全：交通事故から労働災害まで 2. 石油化学工業の現状：世界とアジア、日本の現状、エチレン製造プロセス 3. 環境問題：プラスチックのリサイクルを中心に 4. 化学業界のレスポンシブル・ケア活動 5. 国際規格：国際標準規格 ISO9000(品質), 14000(環境)を主に 6. 世界の重大災害に学ぶ：フリックスボロー事故、セベソ事故、ボパール事故 7. レポート作成 (最終試験)
- 【成績評価】講義への参加状況 (質疑応答:3 割) およびレポート (最終試験:7 割) の内容を総合して行う。
- 【教科書】特に使用しない。各種の資料、教材を適宜配布し講義に使用する。
- 【参考書】石油化学工業の現状 (石油化学工業協会)、世界の石油化学工業 (化学工業日報)、プラスチックリサイクルの基礎知識 (プラスチック処理促進協会) など
- 【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
- 【連絡先】加藤(M304, 656-7429, kato@chem.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】一方的な講義ではなく、質問を歓迎し、講師から学生への問いかけ応答を評価する。

無機化学

Inorganic Chemistry 助教授・松井 弘 2 単位

- 【授業目的】1 年次の基礎無機化学に引き続き、無機化学の基本概念を理解させ、典型的無機化合物の各論で、これらの応用を修得させる。
- 【授業概要】無機化学の基本概念である酸と塩基、酸化還元を演習を交えて修得させ、水素エネルギーなど環境問題にも配慮して、典型的無機物の各論を講述する。
- 【履修上の注意】基礎無機化学の履修が望ましい。
- 【到達目標】
1. 酸と塩基の概念を理解させ、応用計算能力を修得させる。
 2. 酸化還元概念を理解させ、応用計算能力を修得させる。
 3. アルミニウムや炭素材料などの各論を修得させる。
- 【授業計画】1. 酸と塩基の概念 2. 酸と塩基の強さと pH 3. 演習と小テスト 4. 酸化と還元概念 5. 熱力学データに基づく計算 6. 演習と小テスト 7. 水素エネルギーと水素の化学 8. アルカリ金属とアルカリ土類の化学 9. アルミニウムの製法とその応用 10. 炭素と珪素の化学、半導体 11. 窒素とリンの化学 12. 硫黄とハロゲンの化学 13. 遷移金属の化学 14. 有機金属の化学 15. 予備日 16. 定期試験
- 【成績評価】レポート、小テスト、定期試験を総合判定する。
- 【教科書】コットン 他「基礎無機化学」倍封緘
- 【参考書】ダグラス 他「無機化学上、下」東京化学同人、ヘスロップ 他「無機化学上、下」東京化学同人
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】松井弘(化507, 656-7420, matsui@chem.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】期末試験とその他の割合は、7:3 とする。

無機工業化学

Industrial Inorganic Chemistry 非常勤講師・村田 練平 2 単位

- 【授業目的】化学工業は基礎研究、応用研究の蓄積、新技術の開発によって発展してきたものであり、その間の経過を学びとる。
- 【授業概要】化学工業の基礎部門として欠くことのできない、無機酸、ソーダ、製塩、肥料を中心に基礎理論を通じての定量的な理解を骨子として講述する。
- 【受講要件】基礎無機化学、無機化学を受講していることが望ましい。
- 【到達目標】
1. 無機酸の製造原理を習得する。
 2. ソーダから発生する代表的な製造法を理解する。
 3. 肥料製造法を理解する。
- 【授業計画】1. 総論 (化学工業の特徴、コンビナート、化学工業の資源とエネルギー) 2. 硫酸 (原料、接触式硫酸製造) 3. 硫酸 (硫酸製造と環境汚染) 4. 硝酸 (アンモニア酸化による硝酸製造、製造法、装置材料) 5. 塩酸 (塩酸合成の原理、製造法、装置材料) 6. リン酸 (湿式リン酸製造法、乾式リン酸製造法、縮合リン酸) 7. ソーダ (電解ソーダ法、アンモニアソーダ法) 8. ソーダ (塩安ソーダ法、製品の用途) 9. 塩 (海外・国内の製塩法) 10. 塩 (にがり工業、海水の淡水化法) 11. アンモニア (用途、製造工程、合成理論) 12. アンモニア (製造条件、触媒、装置材料)

13. 肥料 (窒素肥料、リン酸肥料) 14. 肥料 (カリ肥料、複合肥料) 15. 予備日 16. 定期試験
- 【成績評価】試験は講義の最終日あるいは期末に行う。成績に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。
- 【教科書】塩川 二郎編「無機工業化学」化学同人
- 【参考書】講義中に指示する。
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】加藤(M304, 656-7429, kato@chem.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】成績に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。

有機化学

Organic Chemistry 教授・津嘉山 正夫、河村 保彦 2 単位

- 【授業目的】基礎有機化学で学んだ有機化学の基本原則に基づいて有機立体化学、求核置換反応、脱離反応、ベンゼンと芳香族性、芳香族求電子置換反応、芳香族化合物の合成を学習する。
- 【授業概要】立体化学、求核置換反応、脱離反応、求核置換反応の立体化学、芳香族化合物の構造と性質、芳香族求電子置換反応、芳香族化合物の合成について講義する。
- 【受講要件】基礎有機化学を履修していること。
- 【到達目標】1. 化学反応における電子の動きをよく理解し、立体化学の基礎、求核置換反応、脱離反応を理解する。2. 芳香族性・共鳴を学習し、芳香族求電子置換反応、及び芳香族化合物の合成を理解する。
- 【授業計画】1. 鏡像異性体・光学活性 2. 立体配置表示・ジアステレオマー 3. Fischer 投影式 4. 反応の立体化学 5. ハロゲン化アルキルの反応 6. 求核置換反応 7. 求核置換反応の速度論・特性 8. 脱離反応 9. 求核置換反応の立体化学 10. ベンゼンの構造・芳香族性 11. 芳香族求電子置換反応 (1) 12. 芳香族求電子置換反応 (2) と芳香族化合物の合成 13. 中間試験 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験
- 【成績評価】授業への姿勢・レポート及び中間試験・定期試験 (4:6) の結果より総合して評価する。
- 【教科書】マクマリ-有機化学 (上中下) 伊東・他訳 (東京化学同人)
- 【参考書】ボルハルト・ショア-現代有機化学 9 化学同人
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】津嘉山(化407, 656-7405, tukayama@chem.tokushima-u.ac.jp), 河村(化410, 656-7401, kawamura@chem.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】(担当者) 津嘉山-B, 河村-A

有機工業化学

Industrial Organic Chemistry 教授・河村 保彦 助教授・南川 慶二 2 単位

- 【授業目的】有機化学工業の基礎となる化学技術を講述し、各種有機材料の基礎と応用を理解させる。
- 【授業概要】有機化学工業を有機化学及び高分子化学などの基礎化学技術の観点から講義し、身の回りで実際に役立っている有機材料の基礎と応用について詳述する。
- 【受講要件】受講までに開講されている有機化学及び高分子化学系の科目は修得していることが望ましい。
- 【到達目標】
1. 有機工業製品の製造に関連する科学技術について理解を深める。
 2. 工業化学に利用される有機反応を理解する。
 3. 高分子材料の特徴と物性評価法を理解する。
- 【授業計画】1. 総論 (有機化学工業の特徴、原料およびエネルギー資源、化学工業と環境) 2. 石油精製 3. 石油化学 4. 石炭 5. 高分子 6. 油脂 7. 界面活性剤 8. 塗料 9. 染料 10. 香料 11. 化粧品 12. 医薬 13. 農薬 14. バイオテクノロジー 15. 予備日 16. 定期試験
- 【成績評価】到達目標が達成されているかを試験 60%、平常点 (授業への取り組み状況、レポート、小テスト)40% で評価し、60% 以上あれば合格とする。
- 【教科書】園田昇・亀岡弘編「有機工業化学」化学同人
- 【参考書】今井淑夫・岩田薫著「高分子構造材料の化学」(朝倉書店)、伊勢典夫他著「新高分子化学序論」(化学同人)
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】河村(化410, 656-7401, kawamura@chem.tokushima-u.ac.jp), 南川(化612, 656-9153, minagawa@chem.tokushima-u.ac.jp)

有機合成化学

Synthetic Organic Chemistry 教授・津嘉山 正夫 2 単位

化学応用工学科 (昼間コース)

【授業目的】基礎有機化学、有機化学で学習した知識にアルコール、エーテル、カルボニル化合物及びアミンの化学を学び、基礎的有機合成化学に使える知識を学習させる。

【授業概要】アルコール、エーテル、カルボニル化合物の求核付加反応・脱離反応、リンイリド及びアミンの性質、合成、反応について講義する。

【受講要件】基礎有機化学、有機化学を履修していること。

【到達目標】電子の動きの理解を深め、保護基の利用方法、カルボニル化合物の求核付加反応を理解する。2. アミンの塩基性、合成、反応を理解する。

【授業計画】1. 有機反応の復習 2. アルコールの反応 3. アルコールの合成 4. エーテルの合成・反応 5. カルボニル化合物の性質と合成、小テスト 6. アルデヒドの求核付加反応 7. ケトンの求核付加反応 (1) 8. ケトンの求核付加反応 (2) 9. イリドの合成と反応 10. アミンの塩基性 11. アミンの反応 12. アミンの合成 13. 中間試験 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への姿勢・レポート及び中間試験・定期試験 (4:6) の結果により総合して評価する。

【教科書】マクマリ-有機化学 (上中下) 伊東・他訳 (東京化学同人)

【参考書】ボルハルト・シヨア-現代有機化学 (化学同人)

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】津嘉山(化407, 656-7405, tukayama@chem.tokushima-u.ac.jp)

流体物性

Physico-chemical Properties of Fluids

助教授・魚崎 泰弘 2 単位

【授業目的】流体 (気体、液体、超臨界流体) の物性について講義し、それらの工学的応用の基礎を理解させる。

【授業概要】物質の流体状態の物性を理解することは物質を取り扱う上で極めて重要である。基本的な物性値の測定法、推算法などについて講述する。種々の物性を推算して、推算法の適用範囲を理解する。また、物質の相平衡状態を理解するための熱力学的基礎、相平衡の測定法、相挙動、及び超臨界流体の溶媒特性とその利用技術などについて講述する。

【受講要件】「基礎物理化学」の履修を前提とする。

【到達目標】

1. 流体物性の推算法と測定法を習得する。
2. 流体物性が工学的応用において重要であることを理解する。

【授業計画】1. 圧力-体積-温度関係、体積の性質 2. 臨界定数の測定法と推算 3. 状態方程式 4. 熱力学関数 5. 部分モル量、フガシティー 6. 輸送性質の測定法と推算 7. 中間試験 8. 相平衡の熱力学 9. 状態図、相平衡計算 10. 二成分系気液平衡 11. 多成分系気液平衡 12. 超臨界流体の性質 13. 超臨界流体の応用 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】レポートの提出状況と内容、及び中間・期末試験の割合は 3:7 とする。

【教科書】講義時に配付するプリントを使用する。

【参考書】講義時に適宜紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】魚崎(化510, Tel:656-7417, E-mail:uosaki@chem.tokushima-u.ac.jp)

量子化学

Quantum Chemistry

助教授・金崎 英二 2 単位

【授業目的】系を微視的に記述する方法について述べる。特に、原子や分子の電子構造を記述する為の基礎的な方法について述べる。シュレディンガー波動方程式以降の量子論の基礎概念を、系を拡張しながら順次、段階的に述べる。但し、水素原子の取扱いは、既に量子力学で学習済みであるから、簡単に触れるだけに留め、分子についての記述を主に予定である。基礎物理化学、物理化学両科目に引き続き、物理化学の学問体系の中で、もっとも新しく確立され、又、今日盛んに拡張しつつある分野を理解する為の基礎的事項を述べる。時間の余裕があれば、分子の対称性の議論についても触れたい。

【授業概要】量子化学の基礎について述べる。

【受講要件】物理化学、量子力学を受講しておくこと。

【履修上の注意】英文の教科書を使用するので、予習をすること。

【到達目標】

1. 量子化学の基礎的な概念を理解できる
2. 量子化学の基礎的な概念を用いて簡単な系を記述できる
3. 実在の系について量子化学的推論ができる

【授業計画】1. 量子化学とは何か 2. 原子構造と原子スペクトル 3. 原子構造と原子スペクトル 4. 原子構造と原子スペクトル 5. 分子構造と分子の電子状態 6. 分子構造と分子の電子状態 7. 分子構造と分子の電子状態 8. 分子構造と分子の電子状態 9. 分子構造と分子の電子状態 10. 分子構造と分子の電子状態 11. 分子構造と分子の電子状態 12. 分子構造と分子の電子状態 13. 分子構造と分子の電子状態 14. 分子構造と分子の電子状態 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】定期試験と平常点とで成績を評価する。又、必要に応じて、中間テストを実施し、又、レポートの提出等も求める事がある。

【教科書】P.W. Atkins, Physical Chemistry, 6th ed., Oxford University Press, 1998.

【参考書】講義の中で適宜紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】金崎(化516, 656-9444, kanezaki@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】1.

量子力学

Quantum Mechanics

教授・金城 辰夫 2 単位

【授業目的】原子分子のミクロな世界の基本法則である量子力学の基礎を修得させる。

【授業概要】講義計画に示した項目に従い、前期量子論より始めて、シュレディンガーの波動方程式を導く。簡単な例として箱の中の自由粒子、調和振動子を取り上げ、波動関数とエネルギー固有値の意味を解説する。さらに、水素原子の場合について説明し、原子構造、周期律との関連に触れる。

【到達目標】

1. 電子や光がもつ粒子性と波動性を理解する。
2. シュレディンガー方程式と波動関数の意味を理解する。
3. 簡単な系のシュレディンガー方程式を解き、波動関数とエネルギー固有値を求めることができる。
4. 水素原子の場合の波動関数とエネルギー固有値の意味を理解する。

【授業計画】1. 量子論のはじまり 2. 光電効果とコンプトン効果 3. 物質波、ボーアの量子論 4. 不確定性原理 5. シュレディンガー方程式 6. 定常状態の波動関数とエネルギー固有値 7. 物理量と演算子、期待値 8. 箱の中の自由粒子 9. 調和振動子 10. 中心力場内の粒子 11. 角運動量、球関数 12. 水素原子 (1) 13. 水素原子 (2) 14. 原子構造と元素の周期律 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】単位の取得:試験 70%(期末試験)、平常点 30%(授業への取り組み)として評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【教科書】小出昭一郎「量子論」裳華房

【参考書】中嶋貞雄「量子力学 I」(物理入門コース) 岩波書店、中嶋貞雄「量子力学 II」(物理入門コース) 岩波書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】金城(A202室, TEL:088-656-7548, E-mail:tatsuo@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】微分および積分の基礎的な知識を前提とする。

労務管理

Personnel Management

非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為にヒトをどのように動かしているかを理解する。

【授業概要】企業経営は、経営資源 (ヒト・モノ・カネ・情報) を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果 (利益と持続性) を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で人的資源をいかに活用しているかについて講義する。講義計画に従い労務管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 組織と職務分掌 2. 人事管理 (異動, 人事考課) 3. 労働基準法 4. 労使関係 5. 能力開発, 教育訓練 6. 安全衛生 7. 中間及び最終レポート (労務管理のまとめ)

【成績評価】講義への取り組み状況、レポートの内容

【教科書】その都度、提供する。

【参考書】島田信義「新 労働基準法」学習の友社、荻原勝「人事・労務実務全書」日本実業出版社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】出席率 80%(12 回)、レポート (中間と最終) の内容 20%

化学応用工学科（夜間主コース）履修方法

授業科目は全学共通教育科目と専門教育科目に大別される。卒業するためには、全学共通教育科目を36単位以上、専門教育科目を88単位以上、合計124単位以上を修得することが必要である。夜間主コースは時間割の制約が大きく、専門選択科目のほとんどすべてを修得する必要があるため、各年度に配布される時間割表に従って履修することが望ましい。

カリキュラム表に示す専門科目において、化学基礎科目はすべて必修である。物質合成化学・物質機能化学・化学プロセス工学の3つの講座が担当する選択科目は1年次後期から順次開講される。物質合成化学は、主に有機化学を基礎として分子設計と合成手法、さらに各種の物質材料の高度機能の開発と設計を学ぶ。物質機能化学は、主に物理化学や分析化学を基礎として、原子・分子やその集合状態の特性を分析・解析する手法、物質の構造と機能の実用的応用を学ぶ。化学プロセス工学は、主に無機化学や化学工学を基礎として化学工業における製造プロセスの開発と装置およびプラントの設計、保全を学ぶ。3年次の必修科目である化学応用工学実験1および2は、各講座の専門分野の基礎となる実験である。履修登録にあたっては、各講座の専門分野の特徴を理解し、科目群を系統的に学習することが望まれる。科目の内容や科目間の関連は、講義概要（シラバス）に詳しく記載されている。

高等学校教員免許状（工業）を取得するには、どの講座の科目を主として選択しても可能であるが、卒業要件とは別に履修科目と単位数に関する規定がある。卒業要件を満たしても教員免許状取得のための単位数が不足する場合も考えられるので注意すること。詳細は「教育職員免許状取得について」に記載されている。

昼間コース科目の履修については、所定の手続きを行うことにより、「昼間コース教育課程表」の中で印を付した科目のうち、30単位以内で認められる。

放送大学との単位互換については、放送大学の授業科目の単位を取得した場合、8単位を限度として全学共通教育科目の単位として卒業に必要な単位に含めることができる。詳細は「全学共通教育履修の手引」に記載されている。なお、化学応用工学科の専門教育科目については、放送大学との単位互換を行わないので注意すること。

夜間主コースの学生の進級および卒業研究着手のためには、次の規定に定められた手続きに従って履修登録を行い、所定の単位を修得する必要がある。なお、この規定において、進級規定の単位数は最低の基準を示しているものであり、目標にする数ではない。特に、2年次・3年次への進級規定の単位数を目標にしていると、4年次への進級が困難になるので注意すること。

化学応用工学科（夜間主コース）履修登録、進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定

この規定は、工学部規則第3章、第4条（履修手続）、第6条（進級要件）、第7条（卒業研究）に基づいて定めるものである。

1. 履修登録

履修登録できる単位数に上限は設けない。

履修登録した科目は、登録受付期間終了後は原則として変更できない。

上級学年の科目の履修については、当該学年の科目履修を優先した上で、登録時以前に予め科目の担当教官の承諾を得たものについてのみ認める。

2. 進級要件

2年次への進級

2年次に進級するためには、全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて20単位以上を修得していなければならない。

3年次への進級

3年次に進級するためには、全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて50単位以上を修得していなければならない。

4年次への進級

4年次に進級するためには、全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて86単位以上を修得していなければならない。

各年次への進級判定は、年度末の学科会議で行う。

化学応用工学科（夜間主コース）

3. 卒業研究着要件

化学応用工学科の夜間主コースにおいて、次に指定する諸条件をすべて満たした者は卒業論文のための研究に着手することができる。ただし、卒業研究は4年前期・後期における他授業との併行授業である。

- (1) 全学共通教育科目の内、教養科目を18単位以上、外国語科目を6単位以上、健康スポーツ科目を2単位、基礎教育科目を4単位以上、それぞれ修得していなければならない。
- (2) 専門必修科目について未修得単位があってはならない。
- (3) 専門選択科目について38単位以上を修得していなければならない。
- (4) 修得単位についての条件を満たした者は卒業研究着手について化学応用工学科の承認を得なければならない。

附則 この規定は、平成12年4月1日から施行し、平成12年度入学者から適用する。

化学応用工学科（夜間主コース）カリキュラム表

科目群	1年		2年		3年		4年		
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
全学共通教育科目	教養科目	人文科学・社会科学・自然科学・工学系教養(総合分野・学部開放分野)							
	外国語科目	英語(1)・ドイツ語(1)		英語(1)・英語(2)・ドイツ語(1)・ドイツ語(2)					
	健康スポーツ科目	健康スポーツ演習	健康スポーツ演習						
	基礎教育科目	基礎数学c 基礎物理学f	基礎数学d						
専門教育科目	工業数学			ベクトル解析	微分方程式1				
	工業物理学			量子力学	統計力学				
	化学基礎	*無機化学1 *有機化学1	*分析化学	*物理化学1 *化学工学1					
	物質合成化学		有機化学2	有機化学3	合成高分子 生化学1	生化学2 生体高分子	高分子物性	微生物応用工学	有機工業化学 構造解析化学 光化学 有機材料科学
	物質機能化学		無機化学2	無機化学3	物理化学2	物理化学3	機器分析化学 量子化学	錯体化学 応用電気化学 高圧化学	環境化学 放射化学及び 放射線化学
	化学プロセス工学				化学工学2	化学工学3	化学反応工学	触媒化学 無機工業化学 無機材料科学	単位操作
	実験・実習					*化学応用工学実験1	*化学応用工学実験2	雑誌講読 卒業研究	雑誌講読 卒業研究
	工学通論		計算機化学					電子計算機 職業指導	プログラミング 演習

全学共通教育科目の詳細については、「全学共通教育履修の手引」及び「時間割表」を参照のこと

*は専門必修科目

化学応用工学科（夜間主コース）

化学応用工学科（夜間主コース）教育課程表

全学共通教育科目

履修にあたっての注意事項

授業科目（分野）	単位数		
	必修	選択必修	選択
人文科学分野		2	16
社会科学分野		2	
自然科学分野		4	
総合分野・学部開放分野			
外国語科目	(6)		
健康スポーツ科目	(2)		
基礎教育科目	4		
全学共通教育科目小計	36		

*全学共通教育科目において卒業に必要な単位数。
 教養科目は、人文科学・社会科学・自然科学のそれぞれの分野から指定の単位数以上、総合科目と学部開放科目を含む全教養科目から16単位以上を修得すること（別表参照）。教養科目は開講時間数の制約のため、年度毎に開講されない科目があるので注意すること。
 外国語・健康スポーツ科目の括弧つきの数字は演習単位を示す。
 開講時期・授業時間数・担当者等の詳細については「全学共通教育履修の手引き」及び各年度の「全学共通教育時間割表」を参照のこと。

専門教育科目

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）										担当者	備考	頁
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年		計				
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
応用電気化学			2							2		2	松井		161	
化学応用工学実験 1	(4)							(8)				(8)	金崎・藪谷・南川・妹尾 平野・西内・森		161	
化学応用工学実験 2	(4)								(8)			(8)	松井・魚崎・安澤・鈴木 川城・杉山・森賀・加藤 外輪・村井・林		162	
化学工学 1	2				2							2	冨田		162	
化学工学 2			2			2						2	高麗		162	
化学工学 3			2					2				2	林		162	
化学反応工学			2						2			2	川城		163	
環境化学			2								2	2	本仲・藪谷		163	
機器分析化学			2						2			2	南川・森		163	
計算機化学			2	2								2	加藤		163	
高圧化学			2							2		2	魚崎		163	
合成高分子			2			2						2	妹尾		164	
構造解析化学			2								2	2	南川		164	
高分子物性			2						2			2	松本		164	
錯体化学			2							2		2	平野		165	
雑誌講読			(1)							(1)	(1)	(2)	化学応用工学科全教官		165	
職業指導			4								4	4	坂野		165	
触媒化学			2							2		2	杉山		165	
生化学 1			2			2						2	松田		165	
生化学 2			2					2				2	辻		166	
生体高分子			2					2				2	津下・辻		166	
卒業研究			(4)							(4)	(4)	(8)	化学応用工学科全教官		166	
単位操作			2								2	2	加藤		166	
電子計算機			2							2		2	篠原		167	
統計力学			2			2						2	岸本		167	
光化学			2								2	2	河村		167	
微生物応用工学			2							2		2	岩田		167	
微分方程式 1			2			2						2	長町・坂口		168	
物理化学 1	2				2							2	田村		168	
物理化学 2			2			2						2	郡		168	
物理化学 3			2					2				2	松木		168	

化学応用工学科（夜間主コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
プログラミング演習			(1)								(2)	(2)	田村・鈴木		168
分析化学	2				2							2	佐竹		169
ベクトル解析			2			2						2	深貝		169
放射化学及び放射線化学			2								2	2	森賀・村井		169
無機化学 1	2			2								2	森賀		169
無機化学 2			2		2							2	本仲		170
無機化学 3			2			2						2	安澤		170
無機工業化学			2							2		2	外輪		170
無機材料科学			2							2		2	中林		170
有機化学 1	2			2								2	津嘉山		170
有機化学 2			2		2							2	永澤		171
有機化学 3			2			2						2	大島		171
有機工業化学			2								2	2	河村・西内		171
有機材料科学			2								2	2	堀		171
量子化学			2						2			2	金崎		172
量子力学			2			2						2	金城		172
工業基礎英語 I			1	1								1	広田		164
工業基礎数学 I			1	1								1	吉川		164
工業基礎物理 I			1	1								1	佐近		164
専門教育科目小計	10 (8) 18		79 (6) 85	7 7	8 8	12 12	12 12	8 (8)	8 (8)	20 (5)	14 (7)	89 (28) 117	講義 演習・実習 計		

備考

1. 印を付した科目の単位は卒業に必要な単位数に含めない。
2. 「雑誌講読」及び「卒業研究」は他科目との併行授業である。
3. この課程表に含まれる科目以外に、化学応用工学科昼間コース教育課程表中 印を付した科目を履修することができる。詳細は「夜間主コース履修方法」を参照のこと。

卒業に必要な単位数

全学共通教育科目	36 単位以上
専門必修科目	18 単位
専門選択科目	70 単位以上
計	124 単位以上

化学応用工学科(夜間主コース)講義概要

目次

応用電気化学	161
化学応用工学実験 1	161
化学応用工学実験 2	162
化学工学 1	162
化学工学 2	162
化学工学 3	162
化学反応工学	163
環境化学	163
機器分析化学	163
計算機化学	163
高圧化学	163
工業基礎英語 1	164
工業基礎数学 1	164
工業基礎物理 1	164
合成高分子	164
構造解析化学	164
高分子物性	164
錯体化学	165
雑誌講読	165
職業指導	165
触媒化学	165
生化学 1	165
生化学 2	166
生体高分子	166
卒業研究	166
単位操作	166
電子計算機	167
統計力学	167
光化学	167
微生物応用工学	167
微分方程式 1	168
物理化学 1	168
物理化学 2	168
物理化学 3	168
プログラミング演習	168
分析化学	169
ベクトル解析	169
放射化学及び放射線化学	169
無機化学 1	169
無機化学 2	170
無機化学 3	170
無機工業化学	170
無機材料科学	170
有機化学 1	170
有機化学 2	171
有機化学 3	171
有機工業化学	171
有機材料科学	171
量子化学	172
量子力学	172

応用電気化学

Applied Electrochemistry

助教授・松井 弘 2 単位

【授業目的】電気化学の基礎である、溶液論、平衡論、速度論の基礎を修得させ、典型的な応用例を理解させる。

【授業概要】溶液の電導度、平衡電位、電気化学反応速度について講義し、pH 測定法、ポーログラフィー、実用電池、半導体電極など応用面を理解させる。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】物理化学の修得が望ましい。

【到達目標】

1. イオン電導の概要把握と応用力の修得
2. 電極反応速度論の基礎を修得
3. 実用蓄電池の基礎を修得

【授業計画】1. 電気分解とガルバニ電池、ファラデーの法則 2. 電解質溶液の電導度 3. 解離度の測定と電導度滴定 4. 活量と輸率 5. 電池の表示法、平衡電位、電位差滴定 6. 平衡定数と熱力学量の決定法 7. pH の測定、イオン選択性電極 8. レポートと小テスト 9. 電極界面での電子移動速度 10. 過電圧と物質移動速度 11. ポーログラフィーとボルタメトリー 12. 乾電池、鉛蓄電池 13. リチウム電池、燃料電池 14. 半導体の電気化学 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】レポート、小テスト、定期試験の結果を総合判定する。

【教科書】田村英雄、松田好晴 著「現代電気化学」

【参考書】藤嶋昭 他著「電気化学測定法」技報堂出版

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】松井弘(化507, 656-7420, matsui@chem.tokushima.ac.jp)

【備考】期末試験とその他の割合は、7:3 とする。

化学応用工学実験 1

Experiments of Chemical Science and Technology 1

助教授・金崎 英二, 助手・薮谷 智規, 非常勤講師・先川 登美

助教授・南川 慶二, 妹尾 真紀子, 講師・平野 朋広

助手・西内 優騎, 森 健 4 単位

【授業目的】分析化学実験および多岐にわたる物質合成化学、物質機能化学、化学プロセス工学の基本となる実験を取り上げ、講義内容の理解を深め、実験法・解析法および研究実験に対する姿勢を修得させることを目的とする。

【授業概要】化学応用工学実験 1 は、前半に分析化学実験、後半に物質合成化学、物質機能化学、化学プロセス工学の 3 大講座のいずれか 1 つ(年度によって異なる)に関連する分野の基礎実験を行い、合わせて 4 単位とする。(分析化学実験): 分析実験の基本操作、容量分析を行う。(物質合成化学実験): 実験科目では、自ら手を動かすことが基本である。そのためできるだけ少人数での取り組みが望ましい。本科目では、当該学生を少人数のグループに分け、有機化学および高分子化学分野の実験を行う。(物質機能化学実験および化学プロセス工学実験については、化学応用工学実験 2 を参照)

【受講要件】必修科目であるので必ず受講すること。

【履修上の注意】「物質合成化学実験」「物質機能化学実験」「化学プロセス工学実験」は、開講時期が年度によって異なる。一部を再受講する場合は、実験の内容と開講時期を確認すること。

【到達目標】

1. 化学実験時の安全に関して確認するとともに、器具、機器の使用に習熟する。
2. 定量分析に関する理解を深める。
3. 物質合成における実験操作に習熟するとともに、有機化学、高分子化学に対する知識を深める。

【授業計画】1. 分析化学実験 (1) 実験説明、器具の配分 2. 分析化学実験 (2) 中和滴定 3. 分析化学実験 (3) 中和滴定、未知試料、レポート 4. 分析化学実験 (4) 沈殿滴定 5. 分析化学実験 (5) 沈殿滴定、未知試料、レポート 6. 物質合成化学実験 (1) ニトロ化反応 7. 物質合成化学実験 (2) アルキル化反応 8. 物質合成化学実験 (3) アセチル化反応 9. 物質合成化学実験 (4) エステル化反応 10. 物質合成化学実験 (5) 脱水反応 11. 物質合成化学実験 (6) 酢酸ビニルの精製と重合 12. 物質合成化学実験 (7) 粘度法による高分子の分子量測定

【成績評価】(分析化学実験): 実験に対する理解力は、実験への出席状況、未知試料の実験結果、レポートの提出状況とその内容を総合して評価する。(物質合成化学実験): 実験への理解度と態度を重視し、各実験終了後 1 週間以内にレポートを提出させ評価する。なお、口頭試問やプレゼンテーションなどを行うこともある。実験への姿勢及び口頭試問やプレゼンテーション等を含む平常点とレポートの内容の成績評価における比率は 1:1 とする。

【教科書】当学科 HP より実験テキストファイル(pdf)をダウンロードして用いる。

【参考書】(分析化学実験): 阿藤賢著「分析化学」培風館、(物質合成化学実験): 実験化学講座(日本化学会編・丸善)、化学大辞典(東京化学同人)、化学便覧(日本化学会編・丸善)、有機化学実験のてびき(化学同人)、機器分析のてびき(化学同人)、高分子科学実験法(高分子学会編・東京化学同人)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】鈴木(化514, 656-7415, suzuki@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】担当教官: (分析化学実験) 金崎英二, 薮谷智規, 先川 登美; (物質合成化学実験) 河村 保彦, 南川 慶二, 妹尾 真紀子, 西内 優騎, 平野 朋広, 森 健, 先川 登美

化学応用工学実験 2

Experiments of Chemical Science and Technology 2

助教授・松井 弘, 魚崎 泰弘, 安澤 幹人, 助手・鈴木 良尚
教授・川城 克博, 助教授・杉山 茂, 森賀 俊広, 講師・加藤 雅裕
助手・村井 啓一郎, 講師・外輪 健一郎, 教務員・林 由佳子
文部科学技官・平嶋 茂利 4 単位

【授業目的】多岐にわたる物質合成化学, 物質機能化学, 化学プロセス工学の基本となる実験を取り上げ, 講義内容の理解を深め, 実験法・解析法および研究実験に対する姿勢を修得させることを目的とする。

【授業概要】化学応用工学実験 2 は, 物質合成化学・物質機能化学・化学プロセス工学の 3 大講座のうち, 2 つの分野 (年度によって異なる) に関連する基礎的実験を前半と後半に分けて行い, 合わせて 4 単位とする。(物質機能化学実験): 講義内容の理解を深め, 基本的実験操作を習得させ, 研究実験に対する姿勢を身につけさせる。(化学プロセス工学実験): 化学プロセス工学大講座の講義に即したテーマについて各人が実験を行い, 講義内容の理解を深めるとともに実験技術を習得する。(物質合成化学実験については, 化学応用工学実験 1 を参照)

【受講要件】必修科目であるので必ず受講すること。

【到達目標】

1. 物質機能化学講座の基礎となる実験を行い, 実験, 解析, 考察などの一連のプロセスを理解する。
2. 化学プロセス工学講座の基礎となる実験を行い, 実験, 解析, 考察などの一連のプロセスを理解する。

【授業計画】1. 物質機能化学実験 (1) 物理化学実験 (部分モル体積, 溶解度と溶解熱, 液体の相互溶解度, 液体の粘性率の測定) 2. 物質機能化学実験 (2) 電気化学実験 (溶液の電導度, pH, 輸率および熱力学諸量の測定) 3. 物質機能化学実験 (3) 無機合成実験 (鉄ミョウバン, 水酸化ナトリウムと硫酸の合成) 4. 化学プロセス工学実験 (1) 酸化アルミニウムを添加した酸化亜鉛焼成体の合成 5. 化学プロセス工学実験 (2) 酸化亜鉛焼成体の結晶構造と電気特性 6. 化学プロセス工学実験 (3) BET 法による表面積の測定 7. 化学プロセス工学実験 (4) 高分子材料の粘弾性測定・原子吸光分析 8. 化学プロセス工学実験 (5) ガスクロマトグラフィー 9. 化学プロセス工学実験 (6) プロセスプログラミング 10. 化学プロセス工学実験 (7) 均一触媒反応

【成績評価】(物質機能化学実験): 各実験テーマ毎に, 担当教官に実験レポートを提出し, 受理されたレポートの内容で評価する。(化学プロセス工学実験): 実験態度および, 各テーマ終了毎に担当教官に提出する実験報告書により成績を評価する。やむを得ない場合を除いて, 1 回でも欠席した場合は再受講となる。

【教科書】当学科ホームページより, 各自で実験テキスト (PDF ファイル) をダウンロードして使用する。また「実験を安全に行うために (正, 続)」(化学同人) を読み, 実験を安全に行えるよう心掛けること。

【参考書】特になし。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】村井(化315, 656-7424, murai@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】出席することとレポートを提出することが必要条件である。いづれが欠けても単位は認められないので注意すること。

化学工学 1

Chemical Engineering Principles 1

教授・富田 太平 2 単位

【授業目的】化学工学の学問領域は従来の化学プロセス設計や化学工業の製品生産のみならず環境やバイオテクノロジーの分野にも拡大している。本講義では, 広範な化学工学を理解するために必要な化学工学の基礎学力と実際的な問題を解く応用力を養う。

【授業概要】化学工学とは何か, 方法論としての化学工学の役割。領域等を概説し, 化学工学の基礎として, 物質の状態, 物質やエネルギーの出入, 流動, 伝熱, 拡散, 物質移動などの事項について講述する。

【履修上の注意】4 年次において単位操作を受講する者は本講義を履修しておくこと。

【到達目標】

1. 物質の状態について, 相平衡を理解し, 気体の状態方程式による計算ができる。
2. 化学量論を含む物質収支および熱収支を理解する。
3. 流動および伝熱に関して基礎法則を理解し, 問題解決に応用できる。
4. 気液平衡と蒸留および精留について理解する。

【授業計画】1. 化学工学概説 2. 気体法則と相平衡 3. 物質収支 4. エネルギー収支 5. レポート・小テスト 6. 流動の基礎事項 7. 管内の流動 8. レポート・小テスト 9. 伝熱の基礎事項 10. 対流伝熱と伝熱係数 11.

輻射伝熱, 熱交換器 12. レポート・小テスト 13. 拡散と物質移動 14. ガス吸収・ガス吸収機構 15. 吸収塔の設計, 演習 16. 最終試験

【成績評価】到達目標の 4 項目がそれぞれ達成されているかを試験 60%, 平常点 (演習レポートと講義への取り組み状況) 40% の割合で総合評価し, 60% 以上を合格とする。

【教科書】「基礎化学工学」化学工学会編, 倍風館

【参考書】「化学工学概論」水科篤郎, 桐原良三編, 産業図書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】富田(化312, 656-7425, tomida@chem.tokushima-ua.c.jp)

【備考】4 年次において単位操作を受講する者は本講義を履修しておくこと。講義への取り組み状況, 演習やレポート, 小テストによる平常点と最終試験の割合は 5:5 とする。

化学工学 2

Chemical Engineering 2

教授・高麗 寛紀 2 単位

【授業目的】従来の化学反応では行うことのできないエネルギー消費少ない高機能のバイオリクターによるプロセス設計の基礎知識を修得させることを目的として, 発酵プロセス, 酵素生産プロセス, 酵素反応プロセス, 微生物反応プロセス等々に基礎的知識を修得させる。

【授業概要】酵素反応プロセス, 微生物反応プロセス, 微生物培養プロセス設計, バイオリクター設計, 固定化酵素プロセス, 固定化微生物プロセス等を講述し, バイオリクター設計に必要な基礎学力の養成を図る。

【受講要件】「生物有機化学 1」の履修を前提にして講義を行う。

【履修上の注意】講義の 2 単元が終わる毎に演習, レポートおよび小テストを実施するので, 毎回の予習・復習は欠かさずに行うこと。

【到達目標】

1. 発酵プロセスを理解する。
2. 酵素生産プロセスを理解する。
3. 酵素反応プロセスを理解する。
4. 微生物反応プロセスを理解する。

【授業計画】1. 酵素反応プロセス 2. 微生物反応プロセス 3. 演習・レポート・小テスト 4. 微生物培養プロセス設計 5. 均一系酵素によるバイオリクター設計 6. 演習・レポート・小テスト 7. 固定化微生物概論・反応速度論 8. 演習・レポート・小テスト 9. 固定化微生物によるバイオリクター設計 10. バイオリクターに関するトピックス 11. 演習・レポート・小テスト 12. 化学反応プロセス設計 13. 単位操作 14. 演習・レポート・小テスト 15. 期末試験

【成績評価】授業に対する態度の評価は講義への出席状況と口頭試問で行う。講義に対する理解力の評価は提出されたレポートの内容および小テストの内容で行う。さらに習熟度の評価は定期試験で行う。これらの成績を総合して評価を行う。

【教科書】中原俊輔他著「有機・生物化学工業」三共出版

【参考書】山根恒男著「生物反応工学」産業図書, 福井三郎監修・編「バイオリクター」講談社サイエンティフィク

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】高麗(M棟813, 656-7408, kourai@bio.tokushima-u.ac.jp)

【備考】原則として再試験は実施しない

化学工学 3

Chemical Engineering 3

教授・林 弘 2 単位

【授業目的】化学反応速度論, 反応器の型式, 流通式反応器内における流体の流れ等について理解させ, 工業用反応器の設計に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】工業用反応器設計のための反応速度論 (定容系及び定圧系) を解説し, 回分式, 連続槽型および管型反応器の設計法の基礎について講述する。

【受講要件】「微分方程式 1」の履修を前提とする。

【到達目標】

1. 定容系の反応速度論を修得する。
2. 定圧系の反応速度論を修得する。
3. 回分式, 連続槽型および管型反応器の設計法の基礎を修得する。

【授業計画】1. 化学反応の分類 2. 工業用反応器の型式 3. 反応速度式 (定義, 反応次数と速度定数) 4. 反応速度の温度依存性 5. 定容系回分反応 1(0, 1 及び 2 次反応) 6. 定容系回分反応 2(逐次反応, 可逆反応) 7. 定容系の速度解析 (積分法, 微分法, 半減期法) 8. 中間試験 9. 定常状態近似法 10. 定圧系の速度解析 (0, 1 及び 2 次反応) 11. 回分式反応器

化学応用工学科(夜間主コース)

12. 連続槽型反応器 1(単一反応槽, 多段槽列) 13. 連続槽型反応器 2(図解法, 過渡挙動) 14. 管型反応器 15. 予備日 16. 期末試験
【成績評価】講義への取り組み状況, レポートの提出状況と内容, 中間および期末試験を総合して評価する。平常点と試験の評価の割合は 4:6 とする。
【教科書】岡崎達也編「化学工学入門 解説と演習」三共出版
【参考書】森田徳義著「反応工学要論」槇書店, 橋本健治著「反応工学」培風館
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】林(化307, 656-7430, hayashi@chem.tokushima-u.ac.jp)
【備考】適宜レポートを課すと共に中間試験を実施する。レポートは次回講義日の前日までに提出すること。

化学反応工学

Chemical Reaction Engineering 教授・川城 克博 2 単位

【授業目的】どのようにして化学プロセスは工業化されてきたかを学びながら, 反応工学の基礎理論を理解させる。
【授業概要】工業触媒の開発と反応装置の操作設計について, 反応工学ならびにプロセス工学の基礎を解説し, 装置型式の選定への応用事例を述べる。
【受講要件】特に指定はしない。
【到達目標】化学工業の基幹プロセスについて, 主要反応, 触媒および装置形式を理解し, 製造工程の設計・開発における工学的諸問題に関心を持たせる。
【授業計画】1. 序論 2. 化学プロセスの構成要素 3. 化学プロセスの事例と工業触媒 4. 分散系の化学プロセス 5. 反応装置の構造型式 6. 触媒の調製化学と性能評価 7. まとめ, 小テスト 8. 吸着, 表面積, 多孔質の空隙組織 9. 固体触媒の反応工学 10. 分散系の工程設計 11. 流系操作の混合特性 12. 循環系のプロセス工学 13. まとめ, 演習, レポート 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験
【成績評価】プロセスの英文講読と設計演習を行い, 技術報告書を提出させる。講義中に複数の学生を指名し, 当面の課題について論拠を述べて討論させ, 成績評価に加える。出席回数だけで成績評価に加えることはしないが, 討論状況や報告書は重く評価するので, 出席は不可欠と心得ること。
【教科書】小冊子「講義ノート・化学反応工学および反応工程設計」
【参考書】必読書について, 講義中, 章別に紹介, 歴史的意義を解説する。
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】川城(化308, 656-7431, kawasiro@chem.tokushima-u.ac.jp)
【備考】特に無し。

環境化学

Environmental Chemistry 教授・本仲 純子, 助手・藪谷 智規 2 単位

【授業目的】われわれの存在する地球で生じる諸事象を正確に把握するために, 化学の知識と経験をもとに取り組み学問が環境化学である。本講義では, 環境内の事象への理解を深めるための方法論を論じる。また, 地球環境は時々刻々変化している。そこで, 現在の「地球」を知りうるために, 最新の環境化学に関するトピックスについて確認する。
【授業概要】地球環境を正確に把握するための方法(データ採取および解析)について講義する。また, 最新の環境化学に関するトピックスについて講演する。
【受講要件】分析化学および有機化学の受講を前提とする
【到達目標】
1. 地球環境に対する理解を深める。
2. 環境を把握するためのデータの採取, 解析法について理解する。
3. 最新の地球環境に関して把握する

【授業計画】1. 総論 2. 測定データの処理法 3. 分析化学の復習 4. 環境内の物質移動 5. 環境内の物質移動 6. 大気圏, 水圏, 生物圏 7. 大気圏, 水圏, 生物圏 8. 化学物質による汚染 9. 化学物質による汚染 10. 化学物質による汚染 11. 最新のトピックス 12. 最新のトピックス 13. 予備日 14. 予備日 15. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況, レポートの提出状況と内容, 小テストの成績を総合評価する。成績評価に対する「講義への参加状況」と「レポートの提出状況と内容及びテストの成績」の割合は 5:5 とする。

【教科書】西村雅吉, 環境化学(改訂版), 裳華房

【参考書】適宜, プリントを配布する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】藪谷(化605, 656-7413, yabutani@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし。

機器分析化学

Analytical Instrumentation Chemistry 助教授・南川 慶二
助手・森 健 2 単位

【授業目的】最近の種々の機器分析法について, それらの基本的原理の習得を目的とする。

【授業概要】代表的な機器分析法を電磁波分析法, 電気分析法および分離分析法に分類し, 説明する。小テストを行って理解を深める。

【到達目標】

1. 電磁波分析法について理解する。
2. 電気分析法について理解する。
3. 分離分析法について理解する。

【授業計画】1. 序論 2. 原子吸光分析 3. 発光分析 4. 分光光度分析 5. 蛍光分析 6. 赤外吸収分析 7. X線分析 8. 電気化学分析(1) 9. 電気化学分析(2) 10. ガスクロマトグラフィー 11. 液体クロマトグラフィー 12. 質量分析 13. 熱分析 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への取り組み状況, 小テスト, 定期試験の成績を総合して評価する。

【教科書】「分析化学」赤岩 英夫ら 著 丸善

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】森(化615, 656-9704, mori@chem.tokushima-u.ac.jp)

計算機化学

Computer in Chemistry 講師・加藤 雅裕 2 単位

【授業目的】化学の分野での計算機利用の現状を講述すると共に, Basic 言語(True Basic)を用いたプログラム演習を通じて, 化学実験で得られるデータの基本的な解析手法を修得させる。

【授業概要】「計算機化学」では, 前半, 現在使用されている計算機および化学における利用状況を講述することにより, 計算機利用の必要性を十分に理解させる。後半は, プログラム演習を中心に各自が計算機と接し, 化学実験で得られるデータの解析手段としての計算機の利用をテーマに, 初心者でも比較的修得しやすいプログラム言語である Basic 言語(True Basic)を用いて, データ解析に必要な最小自乗法等のプログラムを作成し, さらに, 条件文等のプログラム言語の理解を進める。最終的に, 各自が計算機をデータ解析に使える能力をつけさせる。

【到達目標】

1. 簡単な True Basic のプログラミングが行えるようになる。
2. 簡単な True Basic のプログラムが読める。

【授業計画】1. 計算機の歴史 2. 計算機の仕組み(大型計算機, パーソナルコンピュータ, 周辺装置) 3. 計算機と化学 1(理論計算, シミュレーション) 4. 計算機と化学 2(実験データと計算機, プレゼンテーション) 5. データの処理 1(平均値, 標準偏差, 誤差) 6. データの処理 2(最小自乗法) 7. Basic 言語 1(プログラミングの基礎) 8. Basic 言語 2(関数, 入出力文) 9. Basic 言語 3(条件文) 10. Basic 言語 4(繰り返し文) 11. Basic 言語 5(グラフィック文) 12. Basic 言語 6(サブルーティン) 13. 課題レポート 14. 予備日 15. 予備日

【成績評価】プレゼンテーションの評価および講義中の演習レポートにより評価する。

【教科書】講義時にプリントを配布し, 教科書は指定しない

【参考書】章ごとに適当なものを紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】加藤(M304, 656-7429, katoh@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】プログラム言語の理解を目的として, プログラム演習を毎時実施するので, 予習・復習を欠かさず行うこと。講義中の演習および課題レポートの成績により評価し, その比率を 6:4 とする。なお, 定期試験は行わない。

高圧化学

High Pressure Chemistry 助教授・魚崎 泰弘 2 単位

【授業目的】流体(気体, 液体, 超臨界流体)の物性について講義し, それらの工学的応用の基礎を理解させる。

【授業概要】物質の流体状態の物性を理解することは物質を取り扱う上で極めて重要である。基本的な物性値の測定法, 推算法などについて

化学応用工学科(夜間主コース)

講述する。種々の物性を推算して、推算法の適用範囲を理解する。また、物質の相平衡状態を理解するための熱力学的基礎、相平衡の測定法、相挙動、及び超臨界流体の溶媒特性とその利用技術などについて講述する。

【受講要件】「物理化学Ⅰ」の履修を前提とする。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 流体物性の推算法と測定法を習得する。
2. 流体物性が工学的応用において重要であることを理解する。

【授業計画】1. 圧力-体積-温度関係、体積的性質 2. 臨界定数の測定法と推算 3. 状態方程式 4. 熱力学関数 5. 部分モル量、フガシティー 6. 輸送性質の測定法と推算 7. 中間試験 8. 相平衡の熱力学 9. 状態図、相平衡計算 10. 二成分系気液平衡 11. 多成分系気液平衡 12. 超臨界流体の性質 13. 超臨界流体の応用 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】レポートの提出状況と内容、及び中間・期末試験の割合は3:7とする。

【教科書】講義時に配付するプリントを使用する。

【参考書】講義時に適宜紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】魚崎(化510, Tel:656-7417, E-mail:uosaki@chem.tokushima-u.ac.jp)

工業基礎英語Ⅰ

Industrial Basic English (I)

非常勤講師・広田 知子 1 単位

【授業目的】現代社会の国際言語である英語を用いて、科学技術分野での基礎的な語彙力、読解力、リスニング力を養うことを目的とする。

【授業概要】科学技術分野で頻出の語彙や表現を増やす。イラスト、写真などを参考にしながら、内容理解のための練習問題を通して、英文を理解する力や、必要な情報を効率的に掴む力を養成する。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. HEAT 3. SOUND 4. COMPUTERS 5. (教科書の各章にしたがって進めていくが、途中で適宜リスニング教材やビデオ教材なども使用する。)

【成績評価】コース最終日に試験を行う。

【教科書】ENJOY SCIENCE:データバンク (1) 『やさしい科学』 David Crystal/John Foster Asahi Press

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】授業の前に予習しておくことが望ましい。

工業基礎数学Ⅰ

Industrial Basic Mathematics (I)

非常勤講師・吉川 隆吾 1 単位

【授業目的】工学を学ぶために必要不可欠となる微分・積分の基礎的な内容について理解を図り、さらに基本的な手法や計算技術を確実に習得することを目的とする。

【授業概要】1 変数関数および多変数関数の微分・積分について、基礎的な内容から解説する。また、本講義の内容について、より理解を深めるために適宜演習を行う。

【授業計画】1. 微分 1:極限と連続 2. 微分 2:微分 3. 微分 3:導関数の応用 4. 積分 1:不定積分 5. 積分 2:定積分 6. 積分 3:定積分の応用 7. 偏導関数 1:多変数の関数 8. 偏導関数 2:偏導関数 9. 偏導関数 3:全微分 10. 偏導関数 4:Taylorの定理 11. 偏導関数 5:偏導関数の応用 12. 重複積分 1:重複積分 13. 重複積分 2:多重積分の応用

【成績評価】出席状況、レポート、期末考査等により総合的に評価する。

【教科書】特に指定しない。適宜、資料を配布する。

【参考書】矢野健太郎、石原繁 編「微分積分(改訂版)」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義内容を確実に理解するためにも、毎回の復習は欠かさずに行い、次回の講義に望んでもらいたい。成績評価に対する「講義の出席状況、レポートの提出状況」と「小テストの成績」の割合は4:6とする。

工業基礎物理Ⅰ

Industrial Basic Physics (I)

非常勤講師・佐近 隆義 1 単位

【授業目的】

【授業概要】力学・波動・電磁気学について、ごく初歩の分野を解説する。

【授業計画】1. 運動と力:質点及び剛体の力学、ニュートンの運動の法則、運動量と力積・保存則 2. エネルギーと運動:仕事、力学的エネルギー・保存則 3. 波動:等速円運動、単振動、波 4. 電気と磁気:クローン力、

電場と電圧、オームの法則・キルヒホッフの法則、磁場・ローレンツ力 5. 試験

【成績評価】講義への参加状況と試験の成績を総合して行う。

【参考書】高等学校で使用する物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義の最終日に試験を実施するので、毎回の復習を欠かさず行うこと。

合成高分子

Synthetic Polymer

助教授・妹尾 真紀子 2 単位

【授業目的】身の回りには高分子化合物で作られた製品が満ちあふれている。高分子化合物の基本的な合成法および性質について修得させる。

【授業概要】高分子の合成反応および反応機構について講義する。さらに高分子化合物の構造や機能性についても若干触れる。

【到達目標】

1. 高分子の特性について理解する。
2. 基本的な高分子合成反応について理解する。

【授業計画】1. 高分子の定義 2. 高分子の特性 3. 重縮合の特徴 4. 重縮合における分子量 5. 重縮合の速度論 6. 重付加 7. 付加縮合 8. ラジカル重合の特徴 9. ラジカル重合の素反応 10. ラジカル重合の速度式 11. ラジカル共重合 12. アニオン重合 13. カチオン重合 14. 遷移金属触媒重合 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義への取組状況(40%)および最終試験の結果(60%)を総合して評価する。平均で60%以上あれば合格とする。

【教科書】適宜、プリントを配布する。

【参考書】高分子化学 佐藤恒之他著(朝倉書店)、新・基礎高分子化学 垣内弘編著(昭晃堂)、高分子化学Ⅰ合成 中條善樹著(丸善)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】妹尾(化408, 656-7404, seno@chem.tokushima-u.ac.jp)

構造解析化学

Organic Structure Determination

助教授・南川 慶二 2 単位

【授業目的】有機化合物を対象に頻りに利用されている分析機器の原理や測定法およびデータ解析の方法を講義・演習し、有機化合物の構造決定法を修得させる。

【授業概要】各種分析機器の基本的な原理と特徴について機器別に説明を行う。そして、各機器別スペクトルデータの解析方法について講義する。その後、上記分析より得られる各種スペクトルデータの組合せにより、未知化合物の構造決定を演習形式で行う。この講義では、核磁気共鳴(¹H NMR)スペクトルの解説と未知化合物の構造決定演習を重点を置き行う。

【受講要件】有機化学の受講を前提とする。

【到達目標】

1. 各種分析法の基本的な原理と特徴を理解する。
2. NMR スペクトルデータの解析法を理解する。
3. 各種データに基づいて未知化合物の構造を決定することができる。

【授業計画】1. 汎用分析機器の概要 2. プロトン核磁気共鳴スペクトルの基本原理 3. ケミカルシフト 4. シグナルの分裂 5. 演習 6. 演習 7. 小テスト 8. 炭素-13 核磁気共鳴スペクトル 9. 赤外線吸収スペクトル 10. 質量分析 11. 演習 12. 演習 13. 小テスト 14. 演習(口頭発表, レポート) 15. 演習(口頭発表, レポート) 16. 予備日

【成績評価】小テスト、レポートの提出状況と内容、演習の回答(口頭発表)等の成績を総合して評価する。

【教科書】唐津孝他著「構造解析学」(基本化学シリーズ2)(朝倉書店)

【参考書】Silversteinら著(東京化学同人)「有機化合物のスペクトルによる同定法」、E. プレシュラ著(講談社)「有機化合物スペクトルデータ集」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】南川(化612, 656-9153, minagawa@chem.tokushima-u.ac.jp)

高分子物性

Properties and Structure of Polymer

非常勤講師・松本 光弘 2 単位

【授業目的】高分子の特徴、特に高分子鎖の広がりや高分子の物理的性質との関連について理解させ、これにより高分子に関する具体的問題に対応できる素養を身につけさせる。

化学応用工学科(夜間主コース)

【授業概要】高分子鎖の広がり、統計的取り扱い、及びそれをもとにした高分子溶液や固体の諸性質を説明する。また、高分子の応用における具体的問題と関連した性質についても講義する。

【受講要件】基礎的な物理化学及び統計力学の履修を前提に講義する。

【到達目標】

1. 高分子鎖の広がり、統計的取り扱いを習得する。
2. 高分子溶液や固体の諸性質を理解する。
3. 高分子材料の理解を深める。

【授業計画】1. コロイドと高分子 2. 高分子鎖の統計 (I) 3. 高分子鎖の統計 (II) 4. 理想溶液と希薄溶液の性質 5. 理想溶液からのずれと Θ 温度 6. 高分子の溶解性パラメータ 7. 高分子溶液の粘性 8. 高分子の粘弾性 9. 高分子の動的粘弾性 10. 高分子の熱的性質 11. 高分子の表面と界面の性質 12. 高分子の光学的性質 13. 高分子の電気的性質 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義への取り組み状況(3割)と期末試験(7割)により成績を評価する。

【教科書】高分子学会編集「入門高分子物性」(共立出版)。

【参考書】参考書は講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】松本(1230, 656-7249, mitsu@ias.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし。

錯体化学

Coordination Chemistry

講師・平野 朋広 2 単位

【授業目的】遷移金属を含む金属錯体の化学を、主に高分子合成の立場から述べる。特に、配位子の分子設計と高分子構造との関係を理解することを目的とする。

【授業概要】金属錯体が反応場となる配位重合やメタセシス重合の他に、金属錯体が反応制御に用いられるアニオン重合やラジカル重合についても紹介する。

【受講要件】特に指定はしない

【到達目標】高分子合成に用いられる錯体の役割を理解すること。

【授業計画】1. 錯体化学とは何か 2. チーグラー・ナッタ触媒によるオレフィンの重合 3. チーグラー・ナッタ触媒によるオレフィンの重合 4. カミンスキー触媒によるオレフィンの重合 5. カミンスキー触媒によるオレフィンの重合 6. メタセシス重合 7. メタセシス重合 8. アニオン重合 9. アニオン重合 10. ラジカル重合 11. 開環重合 12. その他の重合 13. 予備日 14. 予備日 15. 定期試験

【成績評価】定期試験と授業への取り組み姿勢から総合的に判断する。また、必要に応じてレポートの提出を求める。

【教科書】特になし

【参考書】高分子化学 佐藤恒之他著(朝倉書店)、高分子科学の基礎 高分子学会編(東京化学同人)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】平野(化405, 656-7403, hirano@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし

雑誌講読

Seminar on Chemical Science and Technology

化学応用工学科全教官 1 単位

【授業目的】卒業研究に関連する外国語の文献を読むことにより、専門分野の知識を深め専門外国語の能力を高める。また、発表や討論によりプレゼンテーション能力・コミュニケーション能力を養う。

【授業概要】卒業生が配属された各研究室において、卒業研究と関連する専門分野の文献を講読し、その内容を紹介し、討論を行う。

【受講要件】卒業生が配属された各研究室において、卒業研究と関連する専門分野の文献を講読し、その内容を紹介し、討論を行う。

【履修上の注意】配属した研究室の指示に従うこと。

【到達目標】

1. 卒業研究に関連する学術論文等を熟読し専門知識を増やす。
2. 発表・討論を通じ、プレゼンテーション能力を高める。
3. 英文学術雑誌の講読を通じて、化学英語読解力を身につける。

【授業計画】1. 卒業研究に着手した学生が、各研究室において指導教官や大学院生と共に少人数のゼミ形式で専門分野の文献を講読する。

【成績評価】各配属先研究室の担当教官が、発表、討論などを通じて評価する。

【教科書】配属研究室の指示に従うこと。

【参考書】配属研究室の指示に従うこと。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】田村(化509, 656-7416, tamura@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】4 年次前後期における他授業との併行授業である。

職業指導

Vocational Guidance

非常勤講師・坂野 信義 4 単位

【授業目的】

【授業概要】生涯発達・Career Developing としての人間観・職業観を確立すべく、学際的見地から職業指導の課題と方法を論述し、併せて能力開発を実践指導する。

【授業計画】1. I. 職業指導の課題と方法 2. 職業指導発展の略史 3. 職業指導の課題 4. 個性と職業 5. 1) 個人理解の方法・性格、興味など 6. 2) 適応と適性 7. 3) Career Planning としてのライフワーク 8. 4) マネジメントスキル: リーダシップ論など 9. 職業相談(キャリア・カウンセリング) 10. 1) 職業相談の意義 11. 2) カウンセリング理論と技術 12. 職業指導の評価 13. II. 職業指導に役立つ能力開発: 理論と実践 14. 人生 60 年計画表の作成 15. IC 法, NM 法を活用してソフト作成能力を育成 16. KJ 法を活用しての課題解決とプレゼンテーション

【成績評価】論文、能力開発のプレゼンテーションにより成績評価。

【教科書】講師よりプリント資料配布。参考書、必読書については、講義中紹介。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】「面白くてためになり、そして思い出に残る」講義が目標。

触媒化学

Catalyst and Catalysis

助教授・杉山 茂 2 単位

【授業目的】この時点までに、多くの基礎および専門科目で習得した、それぞれ独立した概念が、触媒を通じた場合、どのように体系的に利用できるかという点を理解することを目的とする。さらに、卒業間近な 4 年生を対象としているので、実社会での触媒の利用を学ぶことを目的とする。

【授業概要】実際に触媒を合成し反応に供するための、触媒担体選定、合成法、物性評価、活性試験、最適装置の選定などについて講述する。さらに、実社会での触媒の利用についての現況を詳細に講述する。

【受講要件】「化学工学 3」、「化学反応工学」を履修した上での受講が望ましい。

【到達目標】

1. 固体触媒を用いた反応方式と活性発現機構を理解する。
2. 触媒の先端分析技術によるキャラクタリゼーションを理解する。
3. 企業における触媒の位置付けを理解する。

【授業計画】1. 触媒工学の歴史的概略 2. 反応方式 液相均一、液相懸濁、固定床触媒反応器、流動床触媒反応器 3. 触媒各論 (1) 酸・塩基に基づく触媒各論 (2) 触媒の複合化: 複合酸化物 5. 触媒各論 (3) 分子次元触媒設計 6. 担体各論 担体の役割、担体 触媒の相互作用および担体各論 7. 触媒調製法 担持触媒、水熱合成法、気相合成法、固相合成法等 8. キャラクタリゼーション (1) 表面積、分散度、酸性度、塩基性度の測定法 9. キャラクタリゼーション (2) 電子顕微鏡、赤外吸収スペクトル、X 線回折法、ケイ光 X 線 10. キャラクタリゼーション (3) X 線光電子分光法、X 線吸収領域連続微細構造、固体 NMR 11. 最近のトピックス 12. 実用固体触媒 (1) 触媒の用途と出荷状況 13. 実用固体触媒 (2) 製造過程 14. 予備日 15. 予備日

【成績評価】定期試験、再試験は行わない。平常点およびレポートによって評価する。出席および授業中の質問に対する回答を平常点とし、レポートと平常点を 1:1 の割合で評価する。

【教科書】授業中に配布するプリントを用いて進める。

【参考書】触媒学会編「触媒講座」(講談社)。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】杉山(化309, 656-7432, sugiyama@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】触媒を通じて、無機化学、有機化学、化学工学を融合させて利用することに重きを置いて講義を進める。

生化学 1

Biochemistry 1

教授・松田 佳子 2 単位

【授業目的】バイオテクノロジーの根幹は生命現象の研究である。生化学は生命を構成する物質の化学であり、高度に制御された生物情報システムの理解に必要な生物を構成する生体分子とくにタンパク質、アミノ酸についての総合的理解を目的とする。

化学応用工学科 (夜間主コース)

【授業概要】生命現象の理解のために必要な生化学の基礎について講述した後に、生体を構成する成分であるアミノ酸、タンパク質について講述する。

【到達目標】

1. アミノ酸・タンパク質の構造と性質を理解する。
2. アミノ酸・タンパク質の機能を理解する。
3. 糖質の性質と役割を理解する。

【授業計画】1. 生化学とは 2. アミノ酸の構造と種類 3. アミノ酸の性質 4. タンパク質とアミノ酸の代謝 5. タンパク質の構造 6. タンパク質の機能 (1) 7. タンパク質の機能 (2) 8. 単糖の構造 (1) 9. 単糖の構造 (2) 10. 単糖の性質 11. 二糖類, 多糖類 (1) 12. 二糖類, 多糖類 (2) 13. 糖タンパク質 14. プロテオグリカン 15. 期末試験

【成績評価】到達目標の3項目が達成されているかどうかを試験70%、平常点(小テスト, 口答試験, レポート)30%ととして評価し, 3項目平均で60%以上あれば合格とする。

【教科書】「マッキー生化学」化学同人

【参考書】特に指定しない。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】松田(化生棟710, Tel:656-7523, E-mail:matsuda@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:火曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない

生化学 2

Biochemistry 2

教授・辻 明彦 2単位

【授業目的】エネルギー代謝に関する基礎事項と代謝調節機構の基本原則について講義し, 三大栄養素, ビタミンの役割について理解させる。

【授業概要】食物中に含まれる糖質, 脂質成分とそれらの構造について解説し, 次に糖質, 脂質からのエネルギー産生機構と制御について説明し, さらに受講者全員で栄養学的見地から食生活の問題点について討論する。

【受講要件】生化学1を受講すること。

【履修上の注意】食生活に関するレポートを課すので, 平素から自分が飲食している食品の種類, 成分について関心を払うこと。資料を配付するので, 英語の基本的専門用語の習得に努力すること。

【到達目標】

1. 糖質, 脂質, アミノ酸の栄養学について理解する。
2. エネルギー代謝と代謝調節の基本原則について理解する。
3. 健康的な生活をおくるための栄養学知識について理解を深める。

【授業計画】1. 糖質, 脂質, アミノ酸の構造, 機能, 代謝概説 2. 食品に含まれる糖質, 蛋白質 3. 食品に含まれる脂質 4. 糖質, 脂質の栄養学, 基礎代謝 5. アミノ酸の栄養学, 窒素バランス 6. 糖質, 脂質, 蛋白質の消化と吸収 7. 中間試験 (到達目標1の評価) 8. 嫌気的解糖によるエネルギー産生 9. 好気的解糖によるエネルギー産生 10. 脂肪酸の酸化とエネルギー産生 11. 糖質, 脂質, アミノ酸代謝の関連 12. 代謝調節の基本原則 13. エネルギー代謝の制御機構 14. 食生活の栄養学的問題点について討論, 発表, レポート (到達目標3の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標2の評価と到達目標3の一部評価)

【成績評価】到達目標の3項目が各々達成されているかを試験60%(中間30%, 期末30%), 平常点40%(出席状況20%, レポート20%)で評価し, 3項目とも60%以上あれば合格とする。

【教科書】「マッキー生化学」化学同人

【参考書】ヴオート生化学(上, 下巻) 東京化学同人

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】辻(化生棟712, Tel:656-7526, E-mail:tsuji@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない

生体高分子

Biological Macromolecule

非常勤講師・津下 英明

教授・辻 明彦 2単位

【授業目的】生体高分子, 特に機能性生体高分子の構造, 機能, 特性を生物物理化学的に理解する。

【授業概要】前半は生体高分子の基本的特性を講述し, 後半はX線結晶構造解析によるタンパク質の立体構造の研究方法について, その概略を講義する。

【履修上の注意】講義に出席し, 講義内容を演習やレポートを通して理解すること。

【到達目標】

1. 生体高分子(タンパク質, 核酸, 多糖類)の基本的特性を理解する。
2. タンパク質構造解析法の基礎を理解する。

【授業計画】1. 生体高分子概論 2. タンパク質の構造 3. タンパク質の光学的性質 4. タンパク質の相互作用 5. 遺伝子, 核酸の構造と性質 6. 多糖類の構造と性質 7. 多糖類とタンパク質の相互作用 8. タンパク質の結晶化 9. X線回折の原理 10. 回折X線の位相決定 11. 回折強度データの収集 12. 蛋白質の分子モデルの精密化 13. データ解析の実際 (1) 14. データ解析の実際 (2) 15. 期末試験

【成績評価】毎回の講義に基づいた演習またはレポート提出の状況と定期試験または最終レポートとの総合評価方式を取る。

【教科書】佐藤衛著「タンパク質のX線解析」共立出版, その他資料を配付する。

【参考書】生物物理, 生物化学関連の教科書一般

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】辻(化生棟712, Tel:656-7526, E-mail:tsuji@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

卒業研究

Undergraduate Work

化学応用工学科全教官 4単位

【授業目的】研究を実施する際には, 学生自ら考える力を育成することを重視する。また, 論文執筆や口頭発表を通して文章表現力や口頭のプレゼンテーション能力を高めることも目標とする。

【授業概要】卒業生は各研究室に配属され, 各自の研究テーマにより研究を行う。

【受講要件】化学応用工学科(夜間主コース)卒業研究着手要件を満たした学生の受講が可能。

【到達目標】与えられた研究テーマを自らの力で実行し, その結果を論文執筆および卒業発表で報告する。

【授業計画】1. 卒業研究着手を認められた学生は, 各研究室に配属され, 各自の研究テーマにより研究を行う。1年間の研究成果を卒業論文としてまとめ, 発表会で発表を行う。各研究室の具体的な研究テーマは, 卒業研究着手者決定の時期に掲示等で通知される。

【成績評価】提出された卒業論文と, 卒業研究発表会での口頭発表審査によって評価する。

【教科書】配属研究室の指示に従うこと。

【参考書】配属研究室の指示に従うこと。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】田村(化509, 656-7416, tamura@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】4年次前後期における他授業との併行授業である。

単位操作

Unit Operations

講師・加藤 雅裕 2単位

【授業目的】化学工学の拡散単位操作を移動現象論の見地から学修し, 例題・演習を通じて装置設計の基本手法を修得する。特に, 運動量・熱・物質移動の類似性を強調することにより, 学期終了の頃には, 移動現象原理の総括的な理解と応用ができ, さらにプロセスの最適化に対応できることを期待している。

【授業概要】「単位操作」では, 2年前期に「化学工学1」で学んだ化学プロセスの基本的事項(流体の流れ, 物質やエネルギーの出入, 物質の状態変化など)を踏まえて, 種々の拡散単位操作に関する基礎学力および実プロセスを念頭においた応用力の両面を充実させる。

【受講要件】「化学工学1」の履修を前提とする。

【履修上の注意】計算機を用意しておくこと。

【到達目標】

1. 移動現象論について理解を深め, 類似性・支配法則を活用できる。
2. 下記の各拡散単位操作に関連する基本原理を説明できる。
3. 各拡散単位操作に関する基礎計算ができる。

【授業計画】1. 移動現象論(類似性, 支配法則) 2. ガス吸収(拡散方程式, 吸収機構, 気液平衡) 3. ガス吸収(物質移動係数, 吸収塔の設計) 4. ガス吸収-小テスト 5. 蒸留(原理, 気液平衡) 6. 単蒸留, フラッシュ蒸留, 水蒸気蒸留 7. 精留の原理, 精留塔の設計 8. 蒸留-小テスト 9. 抽出(原理, 液-液平衡) 10. 各抽出操作 11. 抽出演習 12. 吸着(吸着平衡, 吸着速度) 13. 吸着操作 14. 抽出・吸着-小テスト 15. 膜分離概説 16. 定期試験

【成績評価】平常点(授業への取り組み状況, 演習・小テストの解答, レポートの内容など)と定期試験の成績を総合して評価する。なお, 平常点と試験成績との割合は5:5とする。

【教科書】化学工学会編「基礎化学工学」倍風館
 【参考書】竹内ら「解説化学工学」倍風館
 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
 【連絡先】加藤(M304, 656-7429, kato@chem.tokushima-u.ac.jp)
 【備考】「化学工学1」で学修したことを十分に復習しておくこと。

電子計算機

Digital Computers 非常勤講師・篠原 靖典 2 単位

【授業目的】現代社会は、コンピュータ抜きでは語れない状況となっている。このような情報化社会において、コンピュータリテラシーを身に付けることは不可欠なものとなってきた。このような背景のもと本講義では、コンピュータについての基礎知識と活用能力を涵養する。

【授業概要】コンピュータの基礎知識について講義する。さらに表計算ソフトを用い、情報の加工、蓄積の方法を学習する。

【受講要件】全学共通教育科目である情報科学を受講している方が望ましい。

【到達目標】

1. コンピューターの基礎知識を理解する。
2. 基礎的なコンピュータの活用能力を習得する。

【授業計画】1. コンピューターの基本的な機能 2. コンピューターの起動と CPU の動作原理 3. プログラミング言語の種類 4. アルゴリズムとフローチャート 5. アプリケーションソフトの利用 6. パソコンによるデータ処理と分析 7. 表計算ソフト Excel の基礎 8. データ入力の基礎 9. 数式の使い方 10. 書式設定の方法 11. グラフの作成 12. データベースとしての使い方 (1)(データの抽出) 13. データベースとしての使い方 (2)(データの集計) 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への取り組み状況 (3 割)、及び最終試験の成績 (7 割) を総合して行なう。

【教科書】自作テキストを使用する。

【参考書】参考書、必読書については、講義中、章別に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】加藤(M304, 656-7429, kato@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし。成績評価は平常点 (講義への参加) と定期試験の割合を 3:7 として評価する。

統計力学

Statistical Mechanics 講師・岸本 豊 2 単位

【授業目的】統計力学は原子・分子等の微視的性質を用いて、物質の巨視的性質を説明する際に必要な、いわば微視的世界と巨視的世界を結ぶ橋である。本講義では、熱平衡状態における物理量の熱平均値を求める際に用いられる統計力学の基本事項について平易に解説したい。

【授業概要】統計力学で用いられる基本的な集団-ミクロカノニカル集団、カノニカル集団およびグランドカノニカル集団の概念を述べ、熱平衡について講義し、巨視的物理量が原子・分子の性質から導かれる事について解説する。また、古典統計と量子統計の相違点についても講義する。

【受講要件】量子力学を履修しているのが望ましい。微分・積分の基礎知識を持っているのが望ましい。

【到達目標】

1. 熱平衡および統計集団について理解する。
2. 温度、エントロピー、自由エネルギー等を理解する。
3. 量子統計の特徴を理解する。
4. 基本的な系に適用する。

【授業計画】1. はじめに-統計力学の考え方- 2. ミクロカノニカル集団と熱平衡 3. 温度とエントロピー 4. 熱力学の法則 5. まとめ 1 6. カノニカル集団とボルツマン分布 7. ヘルムホルツの自由エネルギー 8. マクスウェル-ボルツマンの速度分布関数 9. グランドカノニカル集団 10. まとめ 2 11. 量子統計 (1) フェルミ統計 12. 量子統計 (2) ボーズ統計 13. 統計力学の応用 (1) 14. 統計力学の応用 (2) 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】定期試験 70%、平常点 (出席状況等) 30% として評価し、総合で 60% 以上を合格とする。

【教科書】使用しない (ノート講義)

【参考書】久保亮五著「統計力学」共立出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岸本(A301, 656-7550, yutaka@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】意欲的に勉強すること。

光化学

Photochemistry 教授・河村 保彦 2 単位

【授業目的】これまでに修得した有機化学の知識の上に、現代の先端的光技術の基礎と応用を明らかにし、その考え方を学ぶ。この学修を通じて、光化学が様々な技術分野で新たな発想の基礎として生かせることをめざす。

【授業概要】21 世紀は光の時代といわれるほどに光への関心が高い。我々の毎日の生活は光があつてこそ成り立っている。光と有機分子の相互作用の基本にある事象 (光子の吸収による分子の励起状態の生成) について、基礎と応用の両面についてその現象や考え方をわかりやすく述べる。

【受講要件】「有機化学 1, 2 及び 3」の履修を前提に講義を行う。

【到達目標】

1. 励起状態および基底状態の分子の化学が対比して考えられる。
2. 新たな光化学反応が、合理的に説明できる。
3. 身の回りの光利用技術が説明できる。

【授業計画】1. 光化学とは (光合成、光と情報、物質の色) 2. 光化学とは (光化学の基本法則、光励起分子の特徴) 3. 光増感反応 4. 光による分子の結合の開裂 (光ハロゲン化、光によるナイロン原料の製造) 5. 光による分子の結合の開裂 (CVD、感光材、感光性樹脂) 6. 光励起状態の観測 (電子スペクトル、ケイ光、リン光) 7. 光励起状態の観測 (励起状態の寿命測定) 8. 光励起状態の観測 (過渡吸収、レーザー、光ディスク) 9. 光励起分子の化学反応 (分子の異性化、フォトクロミズム) 10. 光励起分子の化学反応 (光化学ホールバーニング、光誘起電子移動およびそれらの応用) 11. 光励起分子の化学反応 (不均一系の光誘起電子移動とその利用) 12. 光を用いる合成反応 (一重項酸素、光付加および転位反応、結晶の光反応) 13. 光を発する化学現象 (化学発光、生物発光、蛍光体など) 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】期末試験の成績と平常点を総合して、成績評価を行なう。平常点は授業への取り組み状況、演習の解答、レポート提出状況及びその内容、小テストの成績とする。これら平常点と期末試験の評価割合は 4:6 とする。

【教科書】徳丸克己著「光化学の世界」(大日本図書)

【参考書】徳丸克己著「有機光化学反応論」(東京化学同人 / 現在絶版だが、附属図書館で閲覧できる。)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】河村(化410, 656-7401, kawamura@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】なし

微生物応用工学

Applied Microbiology 非常勤講師・岩田 深也 2 単位

【授業目的】微生物工業の歴史、現状および将来について応用微生物学見地から解説するとともに、微生物の生理代謝が工業的発酵生産技術としてどのように利用されているかについて理解することを目的とする。

【授業概要】微生物工業の歴史、現状および将来について応用微生物学見地から解説するとともに、微生物の生理代謝が工業的発酵生産技術としてどのように利用されているかについて生化学的に講述する。

【履修上の注意】予習、復習を行い、積極的に学習すること。

【到達目標】

1. 微生物工業関連の技術史についての理解を深める。
2. 人類と微生物及び自然環境についての理解を深める。
3. 化学合成法と微生物による合成法の差違について理解を深める。

【授業計画】1. 工業用微生物の歴史 2. 工業用微生物の種類とその培養技術 スクリーニング、原料、培養のスケールアップ、バイオリクター 3. 工業用微生物の育種 突然変異及び人工変異、交配・交雑、細胞融合、遺伝子組換え 4. 発酵食品工業 種々の発酵食品における微生物利用 5. 微生物工業 (1) 有機酸発酵、抗生物質製造工業、アミノ酸及び核酸関連物質発酵 6. 微生物工業 (2) 生理活性物質及び酵素の生産、微生物・酵素の利用 7. 微生物工業 (3) 微生物活性の有機合成化学への応用、有用生理活性物質の生産 8. 糖鎖工学研究における微生物の役割 9. 微生物と環境 環境浄化と廃液処理、有機化学合成高分子物質の微生物分解 10. 予備日 11. 期末試験

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを試験 60%、平常点 (レポート及び出席状況、受講態度等) 40% で評価し、平均で 60% 以上有れば合格とする。

【教科書】特に指定しない

【参考書】参考書、必読書は講義中、章別に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない

微分方程式 1

Differential Equations (I)

教授・長町 重昭, 助手・坂口 秀雄 2 単位

【授業目的】微分方程式の解法を修得し、さらに工学の諸分野に現われる微分方程式の解法に応用できるようにする。

【授業概要】微分方程式の理論は数理工学的な現象の解析に有力な手段を与え、現代工学の基礎として重要な役割を果たしている。その広範な理論の入門段階として、この講義では微分方程式の具体的な解法を中心に講義する。

【受講要件】「微積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをかきとるとり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 基本的な一階常微分方程式が求積法により解ける。
2. 二階線形常微分方程式が解け、且つ記号解法が適用できる。

【授業計画】1. 変数分離形 2. 同次形 3. 一階線形常微分方程式 4. 完全微分形 5. 非正規形一階常微分方程式 6. 階数降下法 7. 二階線形同次常微分方程式 8. 二階線形非同次常微分方程式 9. 二階線形定数係数常微分方程式 10. 記号解法 1 11. 記号解法 2 12. 通常点における級数解法 13. 確定特異点のまわりの級数解法 14. ルジャンドル関数・ベッセル関数 15. 期末試験 (到達目標 1 及び 2 の評価)

【成績評価】講義への取り組み状況、レポートの提出状況・内容等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】杉山昌平 著「工科系のための微分方程式」、実教出版

【参考書】竹之内脩 著「常微分方程式」、秀潤社、秀潤社マイベルク/ファヘンアウア 著「工科系の数学 5 常微分方程式」、サイエンス社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】坂口 (建設棟2階221)

物理化学 1

Physical Chemistry 1

教授・田村 勝弘 2 単位

【授業目的】物質の状態の性質について講述し、化学熱力学の基礎を理解させる

【授業概要】物質に対して、物理化学的に具象化するためには多くの方法論が要求される。大切なことはもの見方の基本的な態度であることを講述し、物理化学的に物質をとらえるうえで基礎となる考え方や方法についての講義する。

【履修上の注意】物理化学の実力向上には、演習問題を解くことが大切である。講義の進行に応じて適宜演習を課す。

【到達目標】化学熱力学の基礎を理解する

【授業計画】1. 物質の状態:国際単位系 (SI 単位), 2. 熱力学的性質, 状態方程式, 臨界現象, 対応状態の原理 3. 熱力学第一法則:熱と仕事, 状態関数, 熱容量, 4. Joule-Thomson 効果, 理想気体への適用 5. 熱化学: 反応熱, Hess の法則, 標準状態, 6. 反応熱の温度変化, 結合エンタルピー 7. 中間試験 8. 熱力学第二法則:カルノーサイクル, 9. 熱力学温度目盛, エントロピー, Gibbs エネルギーと Helmholtz エネルギー 10. Maxwell の関係式, 熱力学的関係式 11. 化学ポテンシャル, 熱力学第三法則 12. 状態の変化:相, 13. 相律, 相図, Clapeyron-Clausius 式 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義への参加状況と中間試験および期末試験の結果を参考にする。

【教科書】ムーア物理化学 (上)

【参考書】化学便覧など

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】田村 (化509, 088-656-7416, tamura@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】遅刻は認めない。講義開始までに入室すること。平常点と試験の比率は 3:7 とする。

物理化学 2

Physical Chemistry 2

非常勤講師・郡 寿也 2 単位

【授業目的】分子軌道や化学結合を理解するために、古典力学の破綻から量子力学 (化学) の導入について講義し、Schrodinger の波動方程式を解いてその意味を理解させ、量子化学の基礎知識を修得させる。

【授業概要】波動運動と Bohr の原子模型を用いた水素の発光・吸収スペクトルについて説明する。一般波動運動に粒子性 (量子) を持ちこみ、

逆に粒子運動に波動性を持ちこむことによって Schrodinger の波動方程式を導く。Schrodinger の波動方程式を解くことによって波動関数の空間分布に関する理解を図る。

【受講要件】三角関数、指数関数の微分 (偏微分) の理解を前提に講義を行う。

【到達目標】

1. 波動性と量子性の概念を理解し、Bohr モデルの計算ができる。
2. Schrodinger の波動方程式から、各原子起動の形を理解する。
3. 簡単な分子の形 (結合様式) を理解する。

【授業計画】1. 波動運動 2. 黒体放射・光電効果 3. 水素のスペクトルと Bohr の原子モデル 4. 干渉と回折 5. 粒子と波動 6. Schrodinger の波動方程式の導入 7. Schrodinger の波動方程式の解 8. 水素原子の波動方程式の動径分布 9. 水素原子 10. 多原子分子の結合様式 11. 期末試験

【成績評価】到達目標の 3 項目が各々達成されているかを試験 60%, 平常点 (演習レポート, 出席点)40% で評価し, 3 項目平均で 60%以上であれば合格とする。

【教科書】W.J. Moore 著「物理化学 (下)13-15 章」東京化学同人

【参考書】特になし。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室 (M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

物理化学 3

Physical Chemistry 3

助教授・松木 均 2 単位

【授業目的】溶液、化学親和力及び電解質溶液の 3 つの物理化学的事項について化学熱力学を用いて講義を行い、それらの基本的な概念について理解させる。

【授業概要】本講義では、まず多成分混合物の定義やその取り扱い方を論じ、具体例として二成分混合溶液を取り上げる。二成分溶液の相平衡を熱力学的観点から説明する。次に化学平衡の条件、平衡定数の意味や平衡定数への熱力学変数の効果を解説する。さらに、電解質溶液の示す特性やその熱力学的な取り扱い方について講述する。

【受講要件】物理化学 1, 2 の履修を前提として講義する。

【履修上の注意】講義中に中間試験を行うので、予習および復習をしっかり行うこと。

【到達目標】

1. 溶液を中心とした二成分系の相平衡についての熱力学式が導出できる。
2. 化学平衡の条件と平衡定数の意味について熱力学的に理解する。
3. 電解質溶液の基本的な概念とその取り扱い方を理解する。

【授業計画】1. 溶液 (1) 組成, 部分モル量, Gibbs-Duhem の式 2. 溶液 (2) 理想溶液の熱力学, Raoult の法則, Henry の法則 3. 溶液 (3) 二成分系の溶液-蒸気平衡, 相図 4. 溶液 (4) 二成分系の溶液-固体平衡, 凝固点降下 5. 溶液 (5) 浸透圧, 理想溶液からのずれ 6. 溶液 (6) 液-液平衡, 非理想溶液の熱力学 7. 中間試験 8. 化学親和力 (1) 化学平衡の条件, 理想気体反応の平衡 9. 化学親和力 (2) 濃度単位と平衡定数, Le Chatelier-Braun の原理 10. 化学親和力 (3) 平衡定数の圧変化及び温度変化, 平衡定数の計算 11. 化学親和力 (4) 非理想系の平衡 (フガシチーと規約) 12. 電解質溶液 (1) モル電導率, Arrhenius の電離説 13. 電解質溶液 (2) イオンの輸率と移動度, イオン活量 14. 電解質溶液 (3) イオン強度 Debye-Huckel の理論と極限法則 15. 期末試験

【成績評価】講義内容の理解力に対する評価は、講義への出席状況 40%, レポートと中間試験 30%および期末試験の成績 30%を総合して行う。到達目標への到達度 60%以上並びに出席率 80%以上を合格とする。

【教科書】W. J. ムーア著 (藤代亮一訳)「物理化学 (上)7, 8, 10 章」東京化学同人

【参考書】R. A. アルバーティ著 (妹尾 学・黒田晴雄訳)「物理化学 (上)」東京化学同人, D. エベレット著 (玉虫伶太・佐藤 弦訳)「入門化学熱力学 第 2 版」東京化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】松木 (化生棟609, Tel:656-7520, E-mail:matsuki@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:金曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

プログラミング演習

Programming Practice

教授・田村 勝弘, 助手・鈴木 良尚 1 単位

化学応用工学科(夜間主コース)

【授業目的】本講義において、プログラミングを学習していくための基本的な考え方や知識を修得する。さらに、コンピュータの持つ理論的な思考やアルゴリズムならびに情報処理技術を理解する。

【授業概要】Windows上で動作するイベント駆動型のアプリケーションソフトをVisual Basic.NETを使って作成する。

【受講要件】「電子計算機」の履修を前提として講義する。

【到達目標】

1. プログラミングのための基本的な考え方や知識を習得する。
2. コンピューターの持つ思考とアルゴリズムを理解する。
3. 情報処理技術の理解を深める。

【授業計画】1. プログラミング言語の分類 2. Visual Basic.NETのプログラミング環境 3. コントロールの使用 4. メニューエディタの使用 5. ダイアログボックスの使用 6. 変数の利用 7. 演算子の使用 8. 分岐判断の構文 9. ループ処理(1)(For~Next文) 10. ループ処理(2)(Do~Loop文) 11. 演習問題(1)(基礎問題) 12. 演習問題(2)(中級問題) 13. 演習問題(3)(応用問題) 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、毎回与える課題への理解度(5割)、及び最終試験の成績(5割)を総合して行なう。

【教科書】特に定めぬ。必要に応じてプリントの配布などを行う。

【参考書】参考書、必読書については、講義中、章別に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】鈴木(化514, 656-7415, suzuki@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし。

【受講要件】「微積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】予習と復習が必要です。平日頃より問題演習に取り組みましょう。

【到達目標】

1. ベクトルの場の微分が理解できる。
2. ベクトルの場の積分が理解できる。

【授業計画】1. はじめに 2. ベクトル 3. 内積, 外積 4. ベクトル関数, 曲線 5. 曲面 6. スカラー場, ベクトル場, 勾配 7. 回転, 発散 8. 線積分 9. 重積分 10. 面積分 11. ストークスの定理 12. グリーンの定理 13. ガウスの発散定理 14. 積分定理の応用 15. 期末試験

【成績評価】講義への参加状況, 期末試験の結果等を総合して行う。

【教科書】鶴丸孝司・久野昇司・渡辺敏・志賀野洋『ベクトル解析』内田老鶴園

【参考書】安達忠次『ベクトル解析』培風館, H.P. スウ『ベクトル解析』森北出版, 鶴丸孝司・久野昇司・渡辺敏・志賀野洋『ベクトル解析演習』内田老鶴園, 寺田文行・福田隆『演習と応用ベクトル解析』サイエンス社, 青木利夫・川口俊一・高野清治『演習・ベクトル解析』培風館, 山内正敏『詳説演習ベクトル解析』培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】工学部数学教室

放射化学及び放射線化学

Radiochemistry and Radiation Chemistry

助教授・森賀 俊広

助手・村井 啓一郎 2単位

【授業目的】放射線及び放射能について正確な知識が理解され、それらが関わる現象や利用について科学的に判断する能力を養う。

【授業概要】壊変放射性核種(放射性同位元素)や様々な原子核現象の化学, 放射線の種類と性質, 放射線と物質との相互作用などについて、その基礎を述べる。

【到達目標】

1. 放射線の種類と基本的な物理的性質が理解できる
2. 放射線と物質との相互作用が説明できる
3. 放射線や放射性同位元素の安全な取り扱いが説明できる

【授業計画】1. 放射線の利用と原理 2. 原子核と放射能 3. 原子核と化学状態(1) 4. 原子核と化学状態(2) 5. 放射線と物質との相互作用(1) 6. 放射線と物質との相互作用(2) 7. 放射線と物質との相互作用(3) 8. 中間テスト 9. 放射線の検出と測定法(1) 10. 放射線の検出と測定法(2) 11. 原子核反応と放射性同位体 12. 放射能現象の応用(1) 13. 放射能現象の応用(2) 14. 予備日 15. 予備日 16. 期末テスト

【成績評価】授業への取り組み(20%), 中間テスト(40%), 期末テスト(40%)

【教科書】前田米蔵・大崎進著「放射化学・放射線化学」南山堂

【参考書】富永健・佐野博敏著「放射化学概論 第二版」東京大学出版会

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】村井(化315, 656-7424, murai@chem.tokushima-u.ac.jp)

無機化学 I

Inorganic Chemistry I

助教授・森賀 俊広 2単位

【授業目的】無機化学の基礎知識を修得させる。

【授業概要】原子の電子配置, 化学結合, 無機化合物の構造, 典型元素の各論をわかりやすく解説する。

【受講要件】必修科目であるので全員受講すること。

【到達目標】

1. 周期表に基づき原子構造を理解する。
2. 様々な結合様式を理解する。
3. 各族元素の化学的性質を理解する。

【授業計画】1. 近代化学への歩み 2. 水素の原子スペクトルとボーアの原子モデル 3. 原子軌道・パウリの排他原理とフントの規則 4. イオン化エネルギー・電子親和力・電気陰性度 5. 原子の電子配置と周期表 6. 第1回中間試験 7. イオン結合と共有結合 8. 原子軌道と分子軌道 9. 混成軌道 10. 金属結合とファンデルワールス結合 11. 空間格子 12. イオン結晶 13. 共有結晶・金属結晶 14. 予備日 15. 最終試験

【成績評価】授業への取り組み姿勢(20%), レポート(20%), 中間試験(30%), 最終試験(30%)を総合して評価する。100点満点に換算し、60点以上を合格とする。

【教科書】塩川二郎著「化学教科書シリーズ「基礎無機化学」丸善

【参考書】合原眞ら著「無機化学演習」三共出版

分析化学

Analytical Chemistry

非常勤講師・佐竹 弘 2単位

【授業目的】化学分析の基礎及び原理を簡単な平衡系を例にして溶液内イオン平衡を講義し、無機定性分析の原理及び定量分析特に滴定分析の原理を理解させる。

【授業概要】化学分析の最も基礎的反応である酸塩基反応, 沈殿反応, 酸化還元反応及び錯反応について、これら反応系における溶液内平衡を図解及び理論計算から明らかにし、化学反応の考え方や滴定におけるイオン濃度の変化などを理解させて化学分析に必要な基礎知識の向上を図る。

【履修上の注意】授業中に小レポートやテストを行い、成績を評価するので授業には必ず出席しなければならない

【到達目標】

1. 分析実験に必要な濃度計算ができること。
2. 分析化学における溶液内反応の考え方が理解できること。
3. 溶液内平衡イオン種が簡単な図解により求めることができること。
4. 滴定における被滴定液中のイオン種濃度及び理論滴定曲線の計算できること。

【授業計画】1. 化学分析の概要(その1) 2. 化学分析の概要(その2)と演習レポート 3. 定性分析(その1) 4. 定性分析(その2)と演習レポート 5. 定量分析の概要と演習レポート 6. 中和滴定(概要, 酸塩基平衡の理論計算) 7. 図解法による酸塩基平衡(小テスト実施と演習レポート) 8. 酸化還元滴定(概要, 酸化還元平衡の理論計算) 9. 図解法による酸化還元平衡(小テスト実施) 10. 沈殿滴定(概要, 沈殿平衡の理論計算と演習レポート) 11. 図解法による沈殿平衡(小テスト実施) 12. キレート滴定(概要, 錯平衡の理論計算) 13. 予備日 14. 期末試験

【成績評価】達成目標の4項目が理解し、利用できるかを試験(定期試験と小テストを含む)60%, 平常点(演習レポートと出席状況)40%で評価する。両者の点数が60点以上あれば合格とする。

【教科書】分析化学演習:分析化学(佐竹)

【参考書】定性分析:高木誠二, 定量分析など。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない

ベクトル解析

Vector Analysis

助教授・深貝 暢良 2単位

【授業目的】工学の解析で必要不可欠なベクトルの概念と基礎的な性質を学ぶとともに、ベクトル場の解析学を通して古典力学, 流体力学や電磁気学に現れる基本的な物理法則の数学的な理解・運用を目標とする。

【授業概要】三次元空間のベクトルで表される物理量の局所的変化(微分)と大局的效果(積分)を記述する手法としてベクトル場の微積分学を展開し、微積分学の基本定理のベクトル場に対する一般化を確立する。

化学応用工学科(夜間主コース)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】森賀(M305, 656-7423, moriga@chem.tokushima-u.ac.jp)
【備考】ほとんどすべての専門科目の基本となる講義なので、予習・復習を行い習得に努めること。原則として再試験は実施しない。

無機化学 2

Inorganic Chemistry 2 教授・本仲 純子 2単位

【授業目的】重要な基礎科目である無機化学の基礎原理を修得させる。
【授業概要】無機物質の構造、結合生成および性質を理解させるのに、原子および分子の構造、周期性、反応性およびその他の原理を講述する。
【受講要件】無機化学 1 の履修を前提とする。
【到達目標】
1. 無機化合物の構造を習得する。
2. 酸化還元反応を理解する。
3. 酸塩基を理解する。
【授業計画】1. 結論 2. 周期表と電子配置 3. 多原子分子と混成 4. 無機分子、イオンの形、電子不足分子 5. 単体構造(単体の構造、結晶状態における結合、構造による単体の分類) 6. 無機化合物の構造(イオン構造の存在を決める要素、不定比化合物、侵入型化合物、ケイ酸塩化合物) 7. 水素(水素同位体の性質と反応性、水素化物) 8. 水溶液における酸化・還元反応 1(電極電位の意義) 9. 水溶液における酸化・還元反応 2(平衡定数の計算) 10. 水溶液における酸化・還元反応 3(酸化状態の不均化と安定化) 11. 水溶液における酸と塩基 1(酸・塩基の概念、酸・塩基の相対的強さ) 12. 水溶液における酸と塩基 2(水素化物の酸・塩基の性質) 13. 非水溶液における反応 1(金属-液体アンモニア溶液、溶媒和電子) 14. 非水溶液における反応 2(フッ化水素、融解電解) 15. 予備日 16. 定期試験
【成績評価】授業への取り組み状況と最終試験等を総合的に評価する。
【教科書】ベル、ロット著「無機化学」奥野久輝ほか訳、東京化学同人
【参考書】講義中に紹介する。
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】本仲(化611, 656-7409, motonaka@chem.tokushima-u.ac.jp)
【備考】少なくとも毎週復習を行う事。積極的講義参加と定期試験の割合は 2:8 とする。

無機化学 3

Inorganic Chemistry 3 助教授・安澤 幹人 2単位

【授業目的】「無機化学 1 および 2」で学んだ無機化学の基礎知識を確立させ、さらに複雑な問題への応用力を修得する。
【授業概要】無機化学に関する基礎的な例題を解説し、応用問題の演習を行う。また無機化学に関するトピックスを発表 30 分、質疑応答 15 分で行い、最近の新しい展開を含めた応用について事例に即して学習する。
【受講要件】「無機化学 1 および 2」の履修を前提として講義する。計算機を用意しておくこと。
【到達目標】
1. 無機化学の基礎概念を修得する。
2. 実用化されている高機能性材料の理論的バックグラウンドを理解する。
【授業計画】1. 原子間距離と原子半径 2. 化学的な力の型 3. 水素結合 4. 酸-塩基の概念 5. 中間試験 6. 標準電極電位・ネルンストの式 7. 酸化還元反応における平衡 8. 実用電池(一次電池、二次電池、燃料電池) 9. 中間試験 10. 有機金属化合物(非遷移金属) 11. 有機金属化合物(遷移金属) 12. 生物無機化学 13. 無機化学トピックスプレゼンテーションテーマ:太陽電池、燃料電池、リチウムイオン電池、核燃料発電、核融合、ファイナセラミックス、超伝導物質、形状記憶合金、人工ダイヤモンド、光ファイバー 14. 無機化学トピックスプレゼンテーション 15. 無機化学トピックスプレゼンテーション 16. 最終試験
【成績評価】中間試験および 2 年前期末の本試験、講義中の演習およびプレゼンテーション発表・質疑応答を総合して行う。
【教科書】特に指定しない。講義時にプリント等を配布する。
【参考書】コットン、ウィルキンソン、ガウス著「基礎無機化学」中原 訳、培風館
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】安澤(化512, 656-7421, mik@chem.tokushima-u.ac.jp)

無機工業化学

Industrial Inorganic Chemistry 講師・外輪 健一郎 2単位

【授業目的】セラミックスを中心とした無機工業材料のプロセッシング、ならびに機械的、電磁的性質と評価方法を述べ、新素材の現況、および今後の開発方向を理解させる。

【授業概要】鉄、プラスチックと共に第 3 の材料としてセラミックスの利用範囲が広がっている。ともすれば新素材は、長所のみ強調されて捉えられることが多い。しかし、適切な材料設計として、長短所を含めた物理・化学的性質を学ぶことが重要である。セラミックスなど新素材の実社会への応用例を示しながら、基本的な性質、作動原理について解説を行う。

【受講要件】「無機化学 1-2-3」を受講していることが望ましい。

【到達目標】

1. セラミックスの長所短所の理解を深める。
2. 新素材の応用例の理解を深める。
3. 無機材料の評価法を習得する。

【授業計画】1. セラミックスの技術史とその特質 2. セラミックスの製造技術 3. 微構造と機械的性質 4. 接合と複合化 5. セラミックスの作製(実習) 6. 誘電性と導電性 7. 圧電体 8. 焦電体 9. 磁性体 10. センサー 11. 生体材料 12. 建築材料 13. リサイクル 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】理解度を把握するためのレポート、小テスト(以上 4 割)と最終試験(6 割)を総合して行う

【教科書】セラミックスの基礎科学(内田老鶴圃)

【参考書】講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】外輪(化310, 656-9204, sotowa@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】復習は必ず行うことレポート、小テストと最終試験の比率は 4:6 とする。

無機材料科学

Inorganic Materials Science 教授・中林 一朗 2単位

【授業目的】無機材料の性質を理解するために、結晶構造を主とする原子配列や結晶中の欠陥、形状等について講義し、実技を実施して結晶構造の基礎知識を習得させる。

【授業概要】無機材料の結晶構造を説明する。結晶構造を理解するために X 線回折の原理と応用について説明を行い、更に実技を通して理解を深める。また、材料の挙動を理解するために相平衡について説明し、一成分系及び二成分系の状態図の理解を図る。

【受講要件】「無機化学 1-2-3」を受講していることが望ましい。

【到達目標】

1. X 線構造解析を理解する。
2. 相律を習得する。

【授業計画】1. 固体の構造 2. 結晶構造と対称性 3. 無機材料の基本構造 4. X 線 5. X 線回折装置 6. X 線回折の実技 7. X 線回折の実技 8. 結晶の不完全性 9. 相律 10. 一成分型状態図 11. 二成分型状態図 12. 二成分型状態図 13. 非平衡 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、講義の受講状況(2 割)と試験の成績(8 割)を総合して行う。

【教科書】W. J. MOORE 著「物理化学(下)」東京化学同人

【参考書】特に無し。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】中林(M603, 656-7422, ichiro@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】徳島県立工業技術センターにおいて「無機材料の X 線回折測定と定性分析」の実技を行う。「受講状況」と「試験」の割合は 2:8 とする。

有機化学 1

Organic Chemistry 1 教授・津嘉山 正夫 2単位

【授業目的】有機化学の基礎を学ぶために有機化学の基本原則と基礎概念を習得させる。

【授業概要】基本的な有機化合物、特に脂肪族化合物の構造、性質、求電子付加反応、求核置換反応、簡単な立体化学について有機化学の基礎を講述する。

【到達目標】化学結合と電子の動きを理解し、脂肪族化合物の合成・反応を理解する。

【授業計画】1. 構造と結合 2. 極性結合と重要性 3. アルカンとシクロアルカン 4. アルカンとシクロアルカンの立体化学 5. 有機反応の概観 6. アルケンの構造と反応性 7. アルケンの反応と合成 8. アルキンの有機

化学応用工学科 (夜間主コース)

合成 9. 基礎立体化学 10. ハロゲン化アルキル 11. ハロゲン化アルキルの反応 12. 求核置換反応 13. 脱離反応 14. 予備日 15. 定期試験
【成績評価】授業への姿勢・小テスト及び定期試験(4:6)の結果により総合して評価する。
【教科書】マクマリー有機化学(上中) 伊東・他訳(東京化学同人)
【参考書】ボルハルト・ショアー現代有機化学(化学同人)
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】津嘉山(化407, 656-7405, tukayama@chem.tokushima-u.ac.jp)
【備考】理解状況を知るため、授業の進行によって小テストをする。

有機化学 2

Organic Chemistry 2

助教授・永澤 秀子 2 単位

【授業目的】全ての生命現象は有機化学反応の組み合わせによるものである。生物機能を理解するためには、まず化学反応の原理と化合物を見るセンスの修得が必須である。本講義は生物有機化学 1 に引き続き、有機化学の基礎学力をつけることを目的とする。
【授業概要】カルボニルの化学を中心として、基礎的な化学反応の原理について講述する。
【受講要件】生物有機化学 1 または有機化学 1 を履修していること。
【到達目標】
1. 反応を電子の動きとして理解し、基礎的な有機反応の答えを自ら導けるようにする。
2. カルボニルの性質と反応性を理解する。
【授業計画】1. アルコールとフェノール 2. エーテルとエポキシド:チオールとスルフィド 3. アルデヒドとケトン(1) 4. アルデヒドとケトン(2) 5. カルボン酸 6. 復習テスト 7. 求核アシル置換反応(1) 8. 求核アシル置換反応(2) 9. カルボニルの α 置換反応(1) 10. カルボニルの α 置換反応(2) 11. カルボニル縮合反応 12. アミン(1) 13. アミン(2) 14. 予備日 15. 期末試験
【成績評価】講義参加状況、問題演習と復習テストの成績等により平常点をつける。さらに期末テストを実施し総合評価とする。
【教科書】J. McMurry 著「マクマリー有機化学(中)」東京化学同人、教材:分子模型「HGS Biochemistry Molecular Model, Student Kit」丸善
【参考書】特に指定しない。
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】永澤(機械棟820, Tel:656-7522, E-mail:nagasawa@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:木曜日16:20~17:50)
【備考】原則として再試験は実施しない

有機化学 3

Organic Chemistry 3

非常勤講師・大島 松美 2 単位

【授業目的】生物有機化学 1, 2 を基礎とし、さらに生物および化学のインターフェイスとしての反応、合成、構造、活性に重点をおいた有機化学の根幹を理解する。生命体は基本的に有機化合物から成り立っていることより、本講義は生命科学を理解するための基礎的学問である。
【授業概要】生物有機化学 1, 2 を基礎とし、芳香族化合物、複素環式化合物および天然有機化合物の構造、性質、反応、合成を中心にして、有機化学の基礎を講述し、演習問題を加える。
【受講要件】生物有機化学 1 および 2 を必ず履修していること。
【履修上の注意】小テストを実施するので毎回の復習は欠かさず行うこと。
【到達目標】
1. 芳香族化合物の命名法と性質、反応性、構造などについての基礎的特徴の理解を図る。
2. 天然有機化合物の性質、反応性、機能について基本的特徴の理解を図る。
3. 有機化合物のスペクトル解析の原理、手法、特徴、利用法の基本について理解を図る。
【授業計画】1. ベンゼンとその同族体(命名法、芳香族性、共鳴構造) 2. ベンゼン環の置換反応(求核置換、置換基の配向性) 3. 芳香族(アミン、ハロゲン、ニトロ、スルホン、フェノール、キノン)の性質と反応 4. 芳香族(カルボン酸、アルデヒド、ケトン)の性質と反応 5. 芳香族多環化合物(ビフェニル、トリフェニルメタン)の性質と反応 6. 縮合環化合物(ナフタレン、アントラセン、フェナントレン)の性質と反応 7. 複素環式化合物(フラン、ピリジン、キノリン、インドール、フラボン) 8. 天然有機化合物(アミノ酸、核酸、タンパク質、イソプレノイド、ステロイド、ホルモン、ビタミン) 9. 有機化合物の可視・紫外スペクトル解析 10. 有機化合物の NMR スペクトル解析 11. 有機化合物の

IR スペクトル解析 12. 有機化合物の ESR スペクトル解析 13. 有機化合物の MS スペクトル解析 14. 予備日 15. 定期試験
【成績評価】平常点の評価は、講義への出席状況、演習の回答、レポート、小テスト等を重視する。
【教科書】「ソロモンの新有機化学(上・下) 最新版」廣川書店
【参考書】Voet & Voet「Biochemistry」Wiley, B. Alberts et al.「Molecular Biology of the Cell」Garland
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】生物事務室(M棟703)
【備考】原則として再試験は実施しない

有機工業化学

Industrial Organic Chemistry

教授・河村 保彦, 助手・西内 優騎 2 単位

【授業目的】化学技術の進歩に伴う有機工業化学の変遷と最近の技術開発について学び、環境と資源の両面から有機化学工業の社会性を理解する。
【授業概要】有機化学を基盤とする多様な化学工業について、その成り立ち、展開、相互関係、最新技術などに関して講述する。
【受講要件】「有機化学 1-2-3」を受講していることが望ましい。
【到達目標】
1. 有機化合物工業製品の生産について理解を深める。
2. 有機化学を基盤とする各種化学工業を理解する。
3. 環境・資源の両面から有機工業化学の社会性を理解する。
【授業計画】1. 化学工業 2. 石油工業 3. 石灰工業 4. 芳香族系化学工業 5. 脂肪族系化学工業 6. 天然高分子を原料とする工業 7. 医・農薬の生産 1 8. 医・農薬の生産 2 9. 医・農薬の生産 3 10. 繊維工業 11. プラスチック工業 12. 有機機能性材料 13. 有機機能性材料 14. 予備日 15. ティック 16. 最終試験
【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容、小テスト及び定期試験の成績を総合して行う。
【教科書】宮本武明, 本宮達也著「新繊維材料入門」日刊工業新聞社
【参考書】宮本武明, 本宮達也著「新繊維材料入門」日刊工業新聞社
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】河村(化410, 656-7401, kawamura@chem.tokushima-u.ac.jp), 西内(化409, 656-7400, nishiuch@chem.tokushima-u.ac.jp)
【備考】特になし。

有機材料科学

Organic Materials Science

教授・堀 均 2 単位

【授業目的】生物機能設計学をメディシナルケミストリーと捉え、「生物機能を有機化学的手法で探索し創製する」を目的とし、生理活性・生物活性機能発現設計された薬物分子の分子構造と活性を分子レベルで考え、メディシナルケミストリーの基礎を学ぶ。
【授業概要】生物機能設計学としてのメディシナルケミストリーの基礎的問題を、分子標的薬法や定量的構造活性相関(QSAR)法を修得し、ゲノム創薬化学を考える。
【受講要件】有機化学および演習、生物有機化学、生化学、分子生物学を受講していること。
【履修上の注意】有機化学および演習、生物有機化学、生化学、分子生物学を履修。有機化学、生物有機化学、生化学の教科書を参考書として用いる。また分子模型の用意。
【到達目標】
1. 生物機能を有機化学原理で探索できる(ドラッグディスカバリー/医薬品開発)。
2. 生物機能を有機化学原理で創製できる(ドラッグデザイン/薬剤分子設計)。
3. 生物機能分子の構造と活性を分子レベルで考えられる(メディシナルケミストリーの思考)。
4. 生物機能設計としてのメディシナルケミストリーを理解する。
5. 臨床試験、遺伝子治療の倫理的問題を理解する。
【授業計画】1. 生物機能設計学としてのメディシナルケミストリー 2. ドラッグディスカバリー(1):病気、ターゲット、バイオアッセイ、リード 3. ドラッグディスカバリー(2):天然リガンド、コンビナトリアルケミストリー, SAR, レポート 1(到達目標 1 の一部評価) 4. ドラッグディスカバリー(3):ターゲット指向性、薬物代謝、毒性、臨床試験 5. ドラッグデザイン(1):分子修飾法、イソステリズム(等価性) 6. ドラッグ

化学応用工学科(夜間主コース)

グデザイン(2):X線解析,分子標的法,ケーススタディ演習およびレポート2(到達目標2~4の一部評価)7.中間試験(到達目標1,4の一部評価)8.ドラッグデザイン(3):QSAR(1):logP, σ , Es, Hansch-Fujita式9.ドラッグデザイン(4):QSAR(2):Craigプロット, Toplissスキーム, パイオインステラ, QSAR研究計画, ケーススタディ演習およびレポート3(到達目標2~4の一部), 10. コンピナトリアル・ケミストリー:原理・方法・活性成分の単離・同定11.ドラッグデザインとレセプター(1):アゴニストとアンタゴニストのデザイン, 薬剤耐性12.ドラッグデザインとレセプター(2):Gタンパク質共役レセプター13.ドラッグデザインとドラッグディスカバリー-のまとめ:ケーススタディ14.ドラッグデザイン,ドラッグディスカバリー,生命倫理:臨床試験,遺伝子治療,レポート4(到達目標5)15.期末試験(到達目標1-5)

【成績評価】到達目標の4項目が達成されているかどうかを期末試験60%,平常点(出席状況,クイズ,宿題,中間試験)40%として評価し,4項目平均で60%以上あれば合格とする。

【教科書】Graham L. Patrick「An Introduction to Medicinal Chemistry」Oxford Univ. Pressの訳本『メディカルケミストリー』(北川柴,柴崎正勝,富岡清監訳,丸善株式会社)。

【参考書】David A. Williams & Thomas L. Lemke「Foye's Principles of Medicinal Chemistry」Lippincott Williams & Wilkins., Lippincott Williams & Wilkins.,「The Practice of Medicinal Chemistry」(Edited by Wermuth, C.G.) Academic Pr., Richard B. Silverman「The Organic Chemistry of Drug Design and Drug Action」Elsevier

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】堀(M棟821, Tel:656-7514, E-mail:horii@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日18:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない。

【授業概要】講義計画に示した項目に従い,まず電子や光の粒子性と波動性を述べ,前期量子論の起こりを説明する。ついで,シュレディンガーの波動方程式を導き,これがミクロの世界の基礎の方程式であることを説明する。簡単な例として箱の中の自由粒子,調和振動子を取り上げ,波動関数とエネルギー固有値の意味を解説する。

【到達目標】

1. 電子や光がもつ粒子性と波動性を理解する。
2. シュレディンガー方程式と波動関数の意味を理解する。
3. 簡単な系のシュレディンガー方程式を解き,波動関数とエネルギー固有値を求めることができる。

【授業計画】1. 電子の電荷と質量 2. X線の性質 3. ブランクの量子説 4. 光電効果 5. コンプトン効果 6. 物質波 7. ボーアの量子論 8. 不確定性原理 9. シュレディンガー方程式 10. 定常状態の波動関数とエネルギー固有値 11. 物理量と演算子 12. 箱の中の自由粒子 13. 調和振動子(1) 14. 調和振動子(2) 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】単位の取得:試験70%(期末試験),平常点30%(出席状況,レポートの提出状況・内容等)として評価し,全体で60%以上で合格とする。

【教科書】小出昭一郎「量子論」(基礎物理学選書2)裳華房

【参考書】中嶋貞雄「量子力学I」(物理入門コース)岩波書店,中嶋貞雄「量子力学II」(物理入門コース)岩波書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】中村(A216, 656-7577, koichi@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】微分および積分の基礎的知識を前提とする。

量子化学

Quantum Chemistry

助教授・金崎 英二 2単位

【授業目的】系を微視的に記述する方法について述べる。特に,原子や分子の電子構造を記述するための基礎的な方法について述べる。シュレディンガー-波動方程式以降の量子論の基礎概念を,一電子原子,多電子原子,二原子分子及び多原子分子と物質系の大きさを順次拡張しながら,それぞれの系における取り扱いを順次段階的に述べる。基礎物理学,物理化学の後を引き継いで「物理化学」という巨大な学問体系の中で,最も新しく,且つ,今日活発に進歩し続ける量子化学を理解する為の基礎的な事項について述べる。但し電子スピンについては省略する。時間の余裕があれば,電子と電磁波との相互作用或いは分子の対称性についても触れたい。教科書には,この分野で世界的に定評のあるアトキンスの著書を用いる。専門知識を英語で理解する力を涵養することも本講義の目的の一つである。

【授業概要】量子化学の基礎について述べる。

【受講要件】量子力学を学習しておくことが望ましい。

【到達目標】

1. 量子化学の基礎概念を理解できる
2. 簡単な系で量子化学的な記述ができる
3. 実在の系での量子化学的推論ができる

【授業計画】1. 量子論の復習(水素類似原子以降) 2. 量子論の復習(水素類似原子以降) 3. 原子構造と原子スペクトル 4. 原子構造と原子スペクトル 5. 原子構造と原子スペクトル 6. 原子構造と原子スペクトル 7. 原子構造と原子スペクトル 8. 原子構造と原子スペクトル 9. 原子構造と原子スペクトル 10. 原子構造と原子スペクトル 11. 分子構造 12. 分子構造 13. 分子構造 14. 分子構造 15. 分子構造 16. 定期試験

【成績評価】定期試験及び授業への取り組み状況等をもとに総合的に評価する。必要に応じて中間試験を実施したりレポートの提出等を求める場合がある。

【教科書】P.W Atkins et al., Atkins Physical Chemistry, 7th ed., Oxford University Press 2002.

【参考書】講義の中で適宜紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】金崎(化516, 656-9444, kanezaki@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】予習及び復習を欠かさず行なうこと。英和辞典を持参すること。

量子力学

Quantum Mechanics

講師・中村 浩一 2単位

【授業目的】原子分子のミクロな世界の基本法則である量子力学の基礎を修得させる。

電気電子工学科

電気電子工学科（昼間コース）における教育理念と学習・教育目標	175
電気電子工学科（昼間コース）の教育内容と履修案内	176
電気電子工学科（昼間コース）履修登録，進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定	177
電気電子工学科（昼間コース）における大学院進学について	178
電気電子工学科（昼間コース）において取得できる資格	179
電気電子工学科（昼間コース）の学習・教育目標	181
電気電子工学科（昼間コース）教育課程表	182
電気電子工学科（昼間コース）授業科目年次配列表	185
電気電子工学科（昼間コース）講義概要	186
電気電子工学科（夜間主コース）における教育理念	211
電気電子工学科（夜間主コース）の教育内容と履修案内	211
電気電子工学科（夜間主コース）履修登録，進級要件及び卒業見込み証明書発行資格に関する規定	212
電気電子工学科（夜間主コース）における大学院進学について	212
電気電子工学科（夜間主コース）において取得できる資格	213
電気電子工学科（夜間主コース）教育課程表	214
電気電子工学科（夜間主コース）授業科目年次配列表	216
電気電子工学科（夜間主コース）講義概要	217

電気電子工学科（昼間コース）における教育理念と学習・教育目標

最近の新聞やテレビでは、WTO（世界貿易機関）、ISO（国際標準化機構）、ITU（国際電気通信連合）などに関連したニュースが話題に上っている。また、グローバル化（国際化）という言葉もよく耳にするようになってきた。このように、世界は、政治・経済・貿易・産業の各分野で「国際化」が急速に進展している。その結果、当然のことながら技術者の活躍の場も大幅に国際化してきている。特に、電気電子工学に関連した分野では、技術移転や電気電子製品の製造・輸出・輸入において早くから国際標準化が進められてきた。

こうした国際化の流れの中で、技術者教育の質的な同等性を国境を越えて相互に認定し合う協定としてワシントンアコードが1989年に締結調印され、現在その加盟国団体によって認定された大学の教育プログラムが公開されている。皆さんは、JABEEという言葉を目にされ、関心を持たれていることと思う。これは、わが国の技術者教育の国際的な同等性を確保させると共に、国際的に通用する技術者育成の基盤を担うことを通じて社会と産業の発展に寄与することを目的として、1999年に設立された学協会を主体とした技術者教育認定審査機構（Japan Accreditation Board for Engineering Education；略してJABEE）である。わが国が今後とも技術貿易立国として発展を続け、特に電気電子工学の分野で積極的な役割を果たすためには、「国際社会に通用する人材の養成」をしなければならない。

そこで本学では、科学技術創造立国をめざす我が国が社会の豊かさを維持し21世紀の世界に貢献するためには、科学技術とその進歩が人類と社会に及ぼす影響について強い責任を持てる自律的技術者を育成することが必要であるとの認識により、「科学技術とその進歩が人類と社会に及ぼす影響について、強い責任をもつ自律的技術者を育成すること」を工学部の各学科共通の教育理念としている。

電気電子工学科でも、この共通の観点に立ち、豊かな教養を持ち、高い倫理観と強い責任感を有し、地域社会・国際社会で活躍できる中堅技術者（課題解決型技術者）の育成を学部教育の柱とすると共に、これらの工学技術者としての基礎教育を受けた学生が、専門分野の応用技術を大学院一貫教育を通じて修得することにより研究開発型技術者（課題探求型技術者）の育成につなげられることを学科全体の基本教育方針として取り組んでいる。具体的には、次の4点を基本教育目標として掲げている。

- I 人間としての重要な枠組形成のための教育目標
- II 社会を基盤とした人的情報交換のための教育目標
- III 工学領域における広さと深さを与える基礎知識と応用に関する教育目標
- IV 工学領域での知識を生かす開発創造能力に関する教育目標

さらに本学科では、教育理念をもとにした上記4項目の教育基本方針をベースに、先に述べたような国際社会の動向を考えて、日本技術者教育認定基準にも合致した学習・教育目標(A)~(G)を立て、2001年のJABEE 試行審査より、この目標を満たす技術者の育成を目指した教育に専念している。

- (A) 豊かな教養を持ち高い倫理観と強い責任感を有する技術者の育成
- (B) 地域社会・国際社会で活躍できる技術者の育成
- (C) 工学基礎（数学、自然科学、情報技術）に関する知識と応用力を有する技術者の育成
- (D) 専門基礎（数理法則、物理法則）に関する知識と応用力を有する技術者の育成
- (E) 専門4分野（物性デバイス、電気エネルギー、電気電子システム、知能電子回路）の基礎知識と応用力を有する技術者の育成
- (F) 専門的課題についての創成能力および自律能力を有する技術者の育成
- (G) プロジェクト型研究遂行能力を有する技術者の育成

別表（p.181）に本学科の具体的な学習・教育目標について詳細に記述しているので、皆さんは、教育目標の各内容を熟知すると共に、各教育科目がこれら学習・教育目標のどのような位置づけで配置されているかを教育課程表（p.182）で確かめてほしい。なお、本学科では、卒業時点で皆さんが全員これら学習・教育目標が確実に達成できるようにするため、教育分野別に新たに「選択必修科目」を数多く組み入れているので、よく留意して履修してほしい。

電気電子工学科（昼間コース）

この学習・教育目標の内容を、上述の4つの基本教育目標に大別して具体的に説明を加えておく。

(1) 豊かな教養を持ち、倫理観と強い責任感を有する技術者の育成

科学技術によってどんな夢もかなうと信じられた時代から、高度に発達した科学技術が必ずしも人間社会に幸福をもたらさない時代へと変貌しつつある21世紀にあって、「人文・社会・生命科学等に関連した豊かな教養を視点の1つに据えることができる能力」、また、使命感と倫理観を両立させることによって「社会と環境に対する責任を強く自覚することができる能力」を持った技術者を育成することを目標としている。これは、全学共通教育の講義の単位を取れば自動的に目標が達成されるわけではなく、十分な目的意識を持って教養を積み重ね、他方面の学問にも積極的に関心を持つなどの柔軟な考えが求められる。

(2) 地域社会・国際社会で活躍できる技術者の育成

グローバル化や情報化が急速に進む新しい時代において、「自ら主体的に情報を収集・処理・活用できる能力を持つ技術者」を育成する。また、地域社会や国際舞台での活躍の必須条件としての「基礎的・実践的コミュニケーション力（読み・書き・話す力）の強化」を目指す。特に国際社会で豊かな教養を土台にして技術的リーダーシップを発揮するには相当の語学力が必要であるため、この点から外国語教育のより一層の充実を図っている。外国語学習の動機が弱いと時間と労力の浪費となるので、学習の動機を強く持つことができるように導入教育を通して指導する。

(3) 課題解決型技術者の育成

電気電子工学に関する広範な基礎学力と高度な専門知識を応用して、「与えられた課題を解決し、その結果を明確に表現する能力を有する技術者」を養成する。このために、学習に目的意識をもたせ、基礎科目については受講者の多様な能力や学習意欲に柔軟に応えるために教育方法を工夫し、応用科目では高度な専門知識を修得させることによって、自分自身で基礎学力・応用力を積み重ねていく力を持たせることを目標としている。講義は決して易しくはないが、重要なことは疑問を持つことであり、疑問をもってそれを粘り強く解明したときの喜びを感じられるように指導する。

(4) 研究開発型技術者（課題探求技術者）の素地の養成

大学4年間の教育とその後に続く大学院教育により、「自ら課題を探求し、創造性・独創性豊かな研究開発を行う能力を持つ技術者」の養成を目指す。このために、大学4年間ではその素地の養成を目指し、さらに、大学院教育にスムーズに接続させるための応用教育（大学院一貫教育）も行う。また、「卒業研究」では問題点や研究課題をはっきり認識・理解し、高度な知識を基礎にして専門的・技術的にそれらを展開する力を培う。創造性や独創性を発揮するには、人とは違った視点を持たなければならないので、卒業研究などを通して“Think different”を教育する。

電気電子工学科（昼間コース）の教育内容と履修案内

1. 電気電子工学科（昼間コース）の教育内容

電気は、携帯電話、コンピュータ、家電、自動車、オフィス、製造業などの広範囲の分野で使われており、使われ方も動作を制御する神経のような役割や、電波のように情報を伝える伝送路、あるいはエネルギー源など、非常に幅広い。このように電気電子工学は今日の科学技術革新の中心的役割を果たし、急速に発展を続けている分野であり、このような広い分野で活躍できる技術者を育成できるようにカリキュラムが組まれている。

●電気電子工学の分野とカリキュラム：気体・液体・固体中の電子の物理現象や半導体を用いた電子デバイスの設計・製法に関連する物性デバイス分野の科目、これらを用いた電子回路の解析・設計及びコンピュータ等の知能をもつハードウェアとソフトウェア等に関連する知能電子回路分野の科目、コンピュータを用いた設計・制御にかかわるシステムや各種の情報処理と情報通信に関連する電気電子システム分野の科目、そして電気エネルギーの発生・輸送と、動力へのエネルギー変換・利用法に関連する電気エネルギー分野の科目、計4つの専門分野の授業科目が用意されている。さらに教員免許状、電気主任技術者や無線従事者等の国家資格を取得するための科目もあり、これらの授業科目の関連を示したのが、授業科目年次配列表（p.185）である。

特に平成12年度に一部を再編、平成14年度に授業科目を追加し、以下のようにカリキュラム内容を強化した。

●創成科目：学習意欲を向上させ考える力を育てるために創成科目（電気電子入門実験、電気電子創成実験、プロジェクト演習、電気電子特別講義1,2、卒業研究）が組まれている。

●英語・プレゼンテーション：英語コミュニケーション能力を養うための継続した授業として、1年次に英語1、2年次に英語2、3年次に英語コミュニケーション、4年次に電気電子工学論講が組まれている。

電気電子工学科（昼間コース）

- 工学倫理：技術者としての倫理の基礎を講義するため、科目を新設した。

2. 履修方法

予習と復習の時間を取るために、履修科目に上限（次節の履修登録に関する規定）を設けている。この制限内で受講する基本方針等をオリエンテーションを含めた導入教育で説明する。

- 1年生では、電気電子工学の基礎科目である電気磁気学と電気回路を修得すること。これらを理解するための道具として数学と物理の知識や思考方法を修得すること。またコンピュータはツールとして実験・実習・演習・卒業研究等で使用するので、コンピュータ関連の科目も修得しておくこと。これらの科目を30単位以上（目標は登録科目の85%以上とすること）修得すれば、2年生に進級できる（進級要件に関する規定）。

- 2年生では、4つの分野の基礎科目は修得しておくこと。履修制限のため受講できなかった科目は上級学年で受講することができる。授業を受けた結果はGPAに反映され、これが2.5以上の学生には余力ありと見なされ、履修制限が免除される。このように自分のペースを守りながら履修し、70単位以上修得すれば進級できる。

- 3年生では、4つの分野をより深く学習するように組まれている。少なくとも2つ以上の分野を修得しないと卒業単位に届かなくなるので、履修要件の下で3～4の分野を修得すれば、就職後に活躍できる分野がより広がるであろう。受講できなかった科目は4年生で履修が可能である。また、企業の第一線で活躍している卒業生の話が聞ける特別講義1、インターンシップや工場見学等も自分の適性を見出す良い機会である。卒業研究着手条件を満たせば進級できる。さらに、優秀な成績で単位を取得した学生には、3年生での早期卒業が可能である（早期卒業要件）。

- 4年生では、より考える力を養うための卒業研究や輪講が組まれており、また時間の関係で履修できなかった科目や国家資格取得に関係した科目を修得することができる。すべての必修科目、分野毎の選択必修科目を含めて、合計で130単位以上修得すれば卒業となる（卒業要件に関する規定）。

電気電子工学科（昼間コース）履修登録、進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定

1. 履修登録に関する規定

履修登録できる単位数の上限を、各学年毎に50単位とする。前期と後期でほぼ同じ単位数となるように登録することが望ましい。ただし、1年間のGPAが2.5以上の学生については、履修科目上限を超えて履修科目登録することができる。また、夏季休業期間等における集中講義は履修制限に含まれない。

留年学生が上級学年の科目を履修する場合は、各学年の履修登録上限単位数の範囲内で、当該学年の科目履修を優先した上で、担当教官の承諾を得たものについてのみ認める。

2. 進級要件に関する規定

以下の進級要件に関する単位数には、卒業資格に認められない単位は含まれないので注意すること。また、留年した学生が2学年上の進級規定を満たせば、飛び学年を認める。

• 1年次から2年次への進級規定

全学共通科目と専門教育科目を合わせて、30単位以上修得することを必要とする。

• 2年次から3年次への進級規定

全学共通科目と専門教育科目を合わせて、70単位以上修得することを必要とする。

• 3年次から4年次への進級規定

次項の卒業研究着手条件を満たすこと。

• 卒業研究着手条件

全学共通科目では必修科目18単位、選択必修科目16単位を含めて、計46単位を取得すること、かつ専門教育科目では必修科目18単位以上を含めて、計64単位以上を取得すること、すなわちこれらを合計した110単位以上を取得すること。

編入生の場合、全学共通及び専門教育科目の必修・選択にかかわらず、これらの合計が100単位以上を取得すること。

なお、卒業研究着手資格の認定は教室会議で行う。

3. 卒業要件に関する規定

全学共通科目では必修科目18単位、選択必修科目16単位を含めて、計46単位を取得すること、かつ専門教育科目では必修科目30単位、選択必修科目34単位以上を含めて、計84単位以上を取得すること、すなわちこれらを合計した130単位以上を取得すること。

電気電子工学科（昼間コース）

●早期卒業要件（学則第35条の2の規定による卒業）

3年前期終了時点で卒業研究着手条件を満たし、かつGPAが4.0以上であれば3年後期から輪講と卒業研究を行うことができ、3年終了時点で卒業要件を満たしかつGPAが4.0以上ならば卒業ができる。

電気電子工学科（昼間コース）における大学院進学について

1. 大学院

大学院においては、学部よりもさらに自主的で自由な研究活動が保証され、基礎から応用にわたる種々の研究分野の中で、本人の希望する研究分野を専攻することができる。そして、教官との接触もいっそう密になり、各自の学力、研究能力を多面的に磨いていくことができる。

大学院進学には、本学大学院へ進学する場合と他大学大学院へ進学する場合がある。本学の大学院は博士課程であり、前期課程と後期課程に分かれる。博士前期課程は修業年限が2年であり、修了すると修士（工学）の学位が与えられる。修了後、さらに研究を深めたい者には修業年限3年で博士（工学）の学位を取得できる博士後期課程への進学の道が開かれている。国際的に見ると日本は博士取得者が非常に少なく、大学や公的研究機関のみならず、企業においても研究に携わる者にとって博士の学位の必要性がますます高まることは間違いない。

本学大学院博士前期課程の入学試験は、6月末の推薦入学特別選抜試験と、例年9月上旬の一般選抜試験とがある。合格者が定員に満たないときは、翌年2月上旬に2次募集が行われる。試験科目は、数学・英語・専門科目（電気磁気学、回路理論）である。

本学大学院博士後期課程への進学を希望する一般学生に対する一般選抜試験は、9月上旬に1次募集として英語の筆記試験と専門の口述試験により行われる。合格者が定員に満たないときは、翌年2月上旬に2次募集が行われる。

2. 大学院推薦入学制度

本学大学院博士前期課程の電気電子工学専攻では、学部成績が優秀な学生を対象とし、早期に大学院への受け入れを決定し、卒業研究などのより専門性の高い勉学に専心させるために、推薦入学特別選抜の制度を設けている。

推薦入学特別選抜では、筆記試験は一切行わず、主として調査書と面接（口頭試問を含む）のみで選抜を行う。定員は15名程度であり、合否は7月上旬に発表される。

3. とび級制度（昼間コース）

昼間コースの学生が1年次から3年次までの所定の授業科目を優れた成績をもって修得したと認められた場合、大学院博士前期課程の「学部3年次学生を対象とする特別選抜」に出願することができる。これに合格すると、学部3年次から（4年次を経ずに）大学院博士前期課程にいわゆる「とび級」ができる。

ただし、これで大学院博士前期課程に入学した者は、学部を退学したことになる。したがって、後に述べる各種国家試験等の受験資格で大学の学部卒業が要件になっているものについては、受験資格がないことになるので、注意すること。

この「とび級」の選抜は次のような手順で行われる。

1. 事前審査（12月） 3年次前期末までの成績、学部長（学科長）の推薦書による。
2. 第1次選考（1月） 学科試験および口頭試問による。
3. 第2次選考（3月） 3年次終了時の確定した成績および在籍証明書による。

成績の基準は、4年次開講の必修科目を除く卒業に必要な単位数以上の単位を修得し、かつ専門教育科目の総合平均点が85点以上であることとなっている。また、3年次に編入学した者には出願資格はない。

出願希望者は、11月下旬に交付される成績通知表を参考にしてクラス担任の先生に相談すること。

電気電子工学科（昼間コース）において取得できる資格

1. 教員免許状

本章 7)「教育職員免許状取得について」を参照のこと。

2. 電気主任技術者

電気主任技術者の資格は権威があり、電力会社をはじめ一般の会社で電気設備の施工・運転・保守などに従事するとき非常に有用で、卒業後しばしば必要になる。電気主任技術者は第1種、第2種および第3種の3種類があり、それぞれ取り扱うことのできる電圧の範囲が異なっている。これらの資格を得るには、電気主任技術者国家試験（電験）を受ける方法と実務経験による方法がある。電験を受ける場合、受験資格は何ら必要でなく、第1種は大学卒、第2種は短大、高専卒、第3種は高校卒程度の内容である。

実務経験によって資格を得るためには、まず大学（学部在学中）で、ある基準以上の単位を修得していなければならない。そして卒業後に、定められた内容の実務で定められた年数以上の経験を積み、申請により資格を得ることができる。従って、将来この資格を希望する諸君は十分注意して履修すること。

電気主任技術者の認定に要する科目の一覧（昼間コース）

(1) 電気電子工学の基礎に関するもの（49 単位の内、19 単位以上）

電気磁気学 1・演習（3）	電気磁気学 2・演習（3）	電気磁気学 3（2）
計測 1（2）	計測 2（2）	アナログ電子回路（2）
デジタル回路（2）	アナログ演算工学（2）	電子物理学（2）
回路網解析（2）	マイクロ波工学（2）	半導体工学（2）
集積回路 1（2）	電子デバイス（2）	システム解析（2）
量子力学（2）	基礎固体物性論（2）	電子物性工学（2）
光デバイス工学（2）	プラズマ工学（2）	

(2) 発電電、送配電、電気材料、電気法規に関するもの（13 単位の内、10 単位以上）

* 発電電工学（2）	* 電力系統工学 1（2）	* 電力系統工学 2（2）
# 電気施設管理及び法規（1）	* 電気・電子材料工学（2）	* 高電圧工学（2）
* エネルギー工学基礎論（2）		

(3) 電気電子機器、制御、電気エネルギー利用、情報伝送・処理に関するもの（22 単位の内、12 単位以上）

* 電気機器 1（2）	* 電気機器 2（2）	* パワーエレクトロニクス（2）
* 制御理論 1（2）	制御理論 2（2）	* 機器応用工学（2）
* 照明電熱工学（2）	集積回路 2（2）	コンピュータ回路（2）
プログラミング演習 1（1）	プログラミング演習 2（1）	アルゴリズムとデータ構造（2）

(4) 電気電子工学実験、実習に関するもの（6 単位の内、6 単位以上）

電気電子工学入門実験（1）	電気電子工学基礎実験（1）	電気電子工学創成実験（1）
電気電子工学実験 1（1）	電気電子工学実験 2（1）	電気電子工学実験 3（1）

(5) 電気電子機器設計および製図に関するもの（2 単位の内、2 単位）

設計製図（1）	電子回路設計演習（1）
---------	-------------

ただし（ ）の中は単位数を示し、#印は必ず取得すべき科目、*印は取得することが望ましい科目を示す。また、実験は全て修得しておくことが望ましい。

3. 無線従事者国家資格

1) 卒業資格以外に次の無線通信に関する科目の単位を取得し、免許の申請をすれば、一陸特及び二海特、三海特の免許がもらえる。

第一級陸上特殊無線技士（一陸特）... 多重無線設備を使用した固定局等の無線設備を操作するための資格。これを取得すると以下の二つの操作もできる。

- 第二級陸上特殊無線技士（二陸特）... タクシーなどに設置されている陸上を移動する形態の無線局、VSAT（ハブ局）の無線設備
- 第三級陸上特殊無線技士（三陸特）... タクシー無線やトラック無線の基地局等の無線設備

電気電子工学科（昼間コース）

卒業資格以外に必要な科目

通信方式（２） 電気磁気学３（２）または マイクロ波工学（２）

計測２（２） 通信応用工学（２） 無線設備管理及び法規（１）

ただし、印の科目は昼間コースにのみ開講されるので、夜間主コースの学生は申請のうえ受講すること。

第二級海上特殊無線技士（二海特）... 漁船や沿海を航行する内航船に設けられた小無線局やVHFによる小規模海岸局等の無線設備を操作する資格。これを取得すると下記の第三級海上特殊無線技士とレーダー級海上特殊無線技士（レーダー海特）... ハーバーレーダー、船舶レーダー等海岸局、船舶局および船舶のための各種レーダーを操作できる。卒業資格以外に必要な科目は第一級陸上特殊無線技士と同じ。

第三級海上特殊無線技士（三海特）... 沿岸漁船用の無線電話、レジューポート、ヨット等に開設する無線局の設備及び5キロワット以下のレーダーが操作できる資格。

卒業資格以外に必要な科目

通信方式（２） 電気磁気学３（２）または マイクロ波工学（２）

無線設備管理及び法規（１）

- 2) 第一級陸上無線技術士（一陸技）の国家試験の科目「無線工学の基礎」が免除される（昼間コースのみ）。

陸上で使われる無線設備の操作および監督に係わる最上級の資格である。この資格試験は「無線工学の基礎」、「無線工学A」、「無線工学B」、「法規」に分かれている。このうち「無線工学の基礎」は、本学科では必修科目のほか、以下の単位を取得していれば免除される。ただし、免除の有効期限は卒業後3年以内である。さらに、この国家試験は在学中でも（5月受付 - 7月試験、11月受付 - 1月試験）受験することができる。したがって、NHKや民放など放送局関係、電気通信事業会社関係へ就職希望者は、受験し資格を取っておくと後々有利である。

卒業資格以外に必要な科目

複素関数論（２）または ベクトル解析（２） 量子力学（２）

基礎固体物性論（２） 電子物理学（２） 半導体工学（２）

アナログ電子回路（２） デジタル回路（２） 計測１（２）

計測２（２） 電気電子工学実験３（１）

資格取得のために受講が望ましい科目

電気磁気学３（２） 通信方式（２） 無線設備管理及び法規（１）

- 3) 資格申請用紙の請求及び試験の問い合わせ先 ... 財団法人 電気通信振興会

〒790-0814 松山市味酒町1丁目10-2 ゴールドビル味酒（財）電気通信振興会四国支部（電話089-941-0957）

4. その他

技術士 技術コンサルタントのための権威ある資格で、電気部門もある。本学科を卒業すれば共通科目の試験が免除される。

電気工事士 一般家庭の電気工事（第二種電気工事士）や、高圧受電する最大電力500kW未満の自家用電気工作物の電気工事（第一種電気工事士）に必要な資格で、筆記試験と技能試験がある。所定の科目〔電気理論、電気計測、電気機器、電気材料、送配電、製図〕を修得して卒業すれば、第二種電気工事士の筆記試験は免除される。

これら以外にも、

電気通信主任技術者 電気通信ネットワーク全体の監督者

工事担任者 電気通信端末設備の工事に係わる資格であり、アナログ第1種・2種・3種、およびデジタル第1種・2種

がある。

なお、これらの各種資格の申請方法、試験問題例などの詳細は、「国家試験資格試験全書」（自由国民社）、雑誌「オーム」、雑誌「電波受験界」などを参照すること。

電気電子工学科（昼間コース）の学習・教育目標

I	人間としての重要な枠組形成のための教育目標	(A)	豊かな教養を持ち高い倫理観と強い責任感を有する技術者の育成
			<ol style="list-style-type: none"> 1. 地球的視点から多面的に物事を考える能力とその素養を持たせるため、人文・社会・生命科学等に関連した豊かな教養を視点の1つに据えることができる能力 2. 技術が社会および自然に及ぼす影響・効果に関する理解や責任など、使命感と倫理観を両立させ社会と環境に対する技術者としての責任を自覚することができる能力 など、技術者としてあらゆる思考の根幹に備わるように常時教育育成する。
II	社会を基盤とした人的情報交換のための教育目標	(B)	地域社会・国際社会で活躍できる技術者の育成
			<ol style="list-style-type: none"> 1. 文化や価値観を、自国からだけでなく他国の立場からも考えることができる能力 2. 情報機器を駆使し、グローバル化社会で情報交換や情報収集ができる能力 3. 論理的な記述力、口頭発表力、討議などのコミュニケーションの基本能力および国際的に通用できるコミュニケーション基礎能力 により、技術面、文化面から情報交換と相互理解、交流ができる技術者を育成する。
III	工学領域における広さと深さを与える基礎知識と応用に関する教育目標	(C)	工学基礎（数学，自然科学，情報技術）に関する知識と応用力を有する技術者の育成
			<ol style="list-style-type: none"> 1. 代数学と積分学を中心とする数学 2. 力学を主とする自然科学 3. 情報機器を活用する情報技術に関する知識 と、それらを応用できる能力を養うことにより、工学者が真理を探求する上での論理的思考力と解析能力および応用能力を身につけ、専門基礎の理解を容易にし、物理現象を根幹から捕らえ工学へと発展できる技術者を育成する。
		(D)	専門基礎（数理法則，物理法則）に関する知識と応用力を有する技術者の育成
			<ol style="list-style-type: none"> 1. 基本的な数学分野（微積分，微分方程式，線形代数，離散数学，ベクトル解析，複素関数論，フーリエ・ラプラス変換等の主要項目） 2. 物理分野での基礎知識（力学，流体・熱力学，波動・光学の主要項目） 3. 電気電子系分野での基本知識（電磁気学，電気回路，電子回路，論理回路等） などの数理法則や物理原理の理解に必要な専門基礎学力を有する技術者を育成する。
			専門4分野（物性デバイス，電気エネルギー，電気電子システム，知能電子回路）の基礎知識と応用力を有する技術者の育成
(E)	<ol style="list-style-type: none"> 1. デバイスや集積システムの要素技術に関する基本的知識（電子物性，電気電子材料，集積回路等） 2. 電力エネルギーやこれを制御するための基本的な知識（電気機器，パワーエレクトロニクス，電力系統，発電等） 3. 信号処理・制御に関するシステムに関連した基本的な知識（計測，制御理論，通信理論，信号処理等） 4. 電子回路の設計・解析や知能的な回路網に関連した基本的知識（デジタル回路，コンピュータ回路，プログラミング，アルゴリズム等） に関する基礎知識の修得と実験演習を通して応用力を身につけた技術者を育成する。		
IV	工学領域での知識を生かす開発創造能力に関する教育目標	(F)	専門的課題についての創成能力および自律能力を有する技術者の育成
			<ol style="list-style-type: none"> 1. 種々の科学・技術・情報を利用して社会の要求を解決するためのデザイン能力（構想力，種々の学問・技術を統合する能力，正解のない問題への取り組み方の学習） 2. 自主的，継続的に学習できる能力 3. 生涯にわたって自分で新たな知識や適切な情報を獲得する能力や批判的思考力 4. 講義，卒業研究，実験，実習，演習等を通して，学習方法および自発的な学習習慣を身につけた技術者を育成する。
		(G)	プロジェクト型研究遂行能力を有する技術者の育成
<ol style="list-style-type: none"> 1. 与えられた制約の下で計画的に仕事を進め，まとめる能力 2. 自立して仕事を計画的に進め，期限内に終わることができる能力 3. 他分野の人達との協力を含むチームワーク力，リーダーシップ力 を身につけるため，PBL（Project-Base Learning）と呼ばれているような，チームでプロジェクトを実施させる教育を行う。さらに，インターンシップの充実や企業との共同教育研究が行える環境を整える。			

電気電子工学科（昼間コース）

電気電子工学科（昼間コース）教育課程表

全学共通教育科目

授業科目（分野）	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								学習教育主目標	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年			計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
教養科目 人文科学分野 社会科学分野 自然科学分野 情報科学分野・総合分野・学部開放分野		4	12									24	A
		4											A
		4		8	6	4	2	2	2				C
													AB
外国語科目	(6)	(4)		(8)	(8)	(2)	(2)					(20)	B
健康スポーツ科目	(2)			(2)	(2)							(4)	A
基礎教育科目	10			6	4							10	C
全学共通教育科目小計	10	12	12	14	10	4	2	2	2	2		34	講義 演習・実習 計
	(8)	(4)		(10)	(10)	(2)	(2)					(24)	
	18	16	12	24	20	6	4	2	2			58	

専門教育科目

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								担当者	学習教育主目標	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
工学基礎科目															
微分方程式 1	2					2						2	長町	C	206
微分方程式 2	2						2					2	長町	C	206
微分方程式特論		2(A)						2				2	香田	C	206
複素関数論		2(A)				2						2	香田	C	207
ベクトル解析		2(A)					2					2	香田	C	208
数値解析		2(A)						2				2	今井	C	194
確率統計学		2(A)							2			2	竹内（敏）	C	189
解析力学		2(A)			2							2	大野（隆）	C	188
量子力学		2(A)				2						2	道廣	C	209
熱・統計力学		2(A)					2					2	中村	C	205
基礎固体物性論		2(A)			2							2	中村	C	190
専門基礎科目															
電気数学演習	(1)			(2)								(2)	木内・島本	C	199
電気回路 1・演習	2(1)				2(2)							2(2)	来山・島本	D	197
電気回路 2・演習	2(1)					2(2)						2(2)	島本・西尾	D	197
過渡現象	2						2					2	小中・西尾	D	189
電気磁気学 1・演習	2(1)			2	(2)							2(2)	大宅・川上（烈）	D	198
電気磁気学 2・演習	2(1)					2(2)						2(2)	直井・西野	D	198
電気磁気学 3		2(B)					2					2	富永	D	199
コンピュータ入門		(1)(B)			(2)							(2)	大家	C	192
プログラミング演習 1		(1)(B)				(2)						(2)	大家	CD	207
半導体工学		2(B)				2						2	大野（泰）	D	205
エネルギー工学基礎論		2(B)					2					2	川田	D	188
システム基礎		2(B)				2						2	久保	D	192
アナログ電子回路		2(B)					2					2	為貞・橋爪	D	186
実験科目															
電気電子工学入門実験	(1)			(3)								(3)	大西・橋爪・西野・北條 芥川・宋	BDF	202
電気電子工学基礎実験	(1)					(3)						(3)	来山・大野（泰）・富永・敖 西野・服部・川上（烈）・宋	DEF	199
電気電子工学創成実験	(1)							(3)				(3)	入谷・橋爪・直井・大家 西野・四柳・芥川	EF	201
電気電子工学実験 1	(1)								(3)			(3)	森田・鎌野・下村・川田 安野・北條	DE	200
電気電子工学実験 2			(1)							(3)		(3)	伊坂・安野・服部・北條	EF	200
電気電子工学実験 3			(1)								(3)	(3)	四柳・川上（烈）・芥川・敖	EF	201

電気電子工学科（昼間コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								担当者	学習 教育 主目標	頁	
	必修	選択 必修	選 択	1年		2年		3年		4年					計
				前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期				
特別教育科目															
卒業研究	(5)									(3)	(12)	(15)	電気電子工学科全教官	ABDEFG	195
電気電子工学輪講	(2)									(2)	(2)	(4)	電気電子工学科全教官	BD	202
工学倫理		2◎								2		2	大輪	AB	190
英語コミュニケーション		(1)◎						(1)	(1)			(2)	クラス担任・西尾 非常勤講師	B	187
電気電子工学特別講義 1		1◎							1			1	非常勤講師	ABF	201
電気電子工学特別講義 2		2◎								1	1	2	非常勤講師	ABE	202
プロジェクト演習		(1)◎						(3)				(3)	安野	FG	208
インターンシップ		(1)◎						(3)				(3)	クラス担任	ABG	187
物性デバイス関連科目															
量子工学基礎		2◎				2						2	西野	E	209
電子物性工学		2◎						2				2	直井	E	203
電子デバイス		2◎						2				2	西野	E	203
集積回路 1		2◎						2				2	大野（泰）	DE	193
電子物理学			2		2							2	大宅	E	204
光デバイス工学			2					2				2	富永	E	206
電気・電子材料工学			2					2				2	富永	E	202
プラズマ工学			2							2		2	大宅	E	207
電気エネルギー関連科目															
電気機器 1		2◎				2						2	大西	E	198
電気機器 2		2◎				2						2	鎌野・北條	E	198
パワーエレクトロニクス		2◎						2				2	大西	E	205
電力系統工学 1		2◎						2				2	伊坂	E	204
電力系統工学 2			2					2				2	伊坂	E	204
発変電工学			2					2				2	井上	E	205
照明電熱工学			2					2				2	井上・下村	E	193
高電圧工学			2							2		2	下村	E	191
機器制御工学			2					2				2	森田	E	189
機器応用工学			2							2		2	鎌野	E	189
電気電子システム関連科目															
計測 1		2◎				2						2	芥川	E	190
制御理論 1		2◎				2						2	鎌野	DE	194
制御理論 2		2◎						2				2	久保	E	194
通信理論		2◎						2				2	木内	E	196
通信方式			2					2				2	木内	E	196
通信応用工学			2							2		2	入谷	E	196
計測 2			2					2				2	入谷	E	190
デジタル信号処理			2					2				2	森田	E	197
システム解析			2							2		2	久保	DE	192
コンピュータネットワーク			2							2		2	大家	E	192
マイクロ波工学			2					2				2	田島	DE	209
知能電子回路関連科目															
プログラミング演習 2		(1)◎				(2)						(2)	四柳	E	208
アナログ演算工学		2◎						2				2	安野	E	186
デジタル回路		2◎						2				2	橋爪	D	196
コンピュータ回路		2◎						2				2	為貞	E	191
アルゴリズムとデータ構造			2					2				2	來山	E	187
回路網解析			2					2				2	牛田	E	188
集積回路 2			2					2				2	小中	E	193
電子回路設計演習			(1)							(2)		(2)	橋爪	EF	203

電気電子工学科（昼間コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）									担当者	学習 教育 主目標	頁
	必修	選択 必修	選 択	1年		2年		3年		4年		計			
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
資格関連科目，工学教養科目															
設計製図			(1)						(2)			(2)	大西・森田	EF	195
無線設備管理及び法規			1								1	1	来山	ABD	209
電気施設管理及び法規			1								1	1	小長井	ABD	199
職業指導			4								4	4	坂野		194
福祉工学概論			2			2						2	末田・藤澤	BD	207
エコシステム工学			2								2	2	エコシステム工学教官	A	187
知的所有権概論			1								1	1	酒井（徹）	AB	195
ニュービジネス概論			2								2	2	出口	BG	204
労務管理			1								1	1	井原	AB	209
生産管理			1								1	1	井原	AB	194
工業基礎数学 I			(1)	(2)								(2)	吉川		191
工業基礎英語 I			(1)	(2)								(2)	広田		191
工業基礎物理 I			(1)	(2)								(2)	佐近		191
専門教育科目小計	14 (16) 30	63 (6) 69	55 (7) 62	2 (11) 13	6 (6) 12	18 (6) 24	24 (5) 29	26 (10) 36	27 (6) 33	24 (13) 37	5 (14) 19	132 (71) 203	講義 演習・実習 計		

備考

1. 選択必修の科目は，各科目毎に単位数の右横に分野 ①～⑥ を記載している。これらの科目は，以下の表に示すように，各分野の中で指定された科目数を選択して履修しなければならない。

分野	選択必修
①	9科目中，5科目以上選択して履修すること
②	7科目中，4科目以上選択して履修すること
③	6科目中，3科目以上選択して履修すること
④, ⑤, ⑥, ⑥	各分野毎に，4科目中，2科目以上選択して履修すること

2. 印の科目単位は卒業資格の単位には含まれない。
3. 印の科目単位は合計4単位まで卒業資格の単位に含めることができる。
4. 全学共通教育科目には上表の開講時間枠以外にも受講可能な科目が開講されており，特別な支障がない限り受講することができる。
5. 他の学科に属する授業科目から，工学部規則第3条の4第3項の規定に基づいて修得した単位（10単位以内）は，専門教育科目選択科目の卒業資格単位に含めることができる。
6. 放送大学との単位互換に関する取り決め
放送大学の科目を学科長の承認を得て履修することができ，修得した単位は，下記の1)で8単位，2)で10単位を限度として卒業に必要な単位に含めることができる。ただし，1)と2)との合計単位は12単位までとする。
1) 全学共通教育科目の選択の中に，放送大学の全科目の科目を含めることができる。
2) 他学科の専門科目として，放送大学の専門科目「産業と技術」，「自然の理解」の科目を含めることができる。
7. 印を付した授業科目は夜間主コースの学生も許可を得たうえで履修することができる。

	卒業に必要な単位数	全学共通教育科目	専門教育科目
必修単位	48単位	18単位	30単位
選択必修単位	50単位以上	16単位	34単位以上
選択単位	32単位以上	12単位	20単位以上
計	130単位以上	46単位	84単位以上

電気電子工学科 (昼間コース) 講義概要

目次

アナログ演算工学 186
 アナログ電子回路 186
 アルゴリズムとデータ構造 187
 インターンシップ 187
 英語コミュニケーション 187
 エコシステム工学 187
 エネルギー工学基礎論 188
 解析力学 188
 回路網解析 188
 確率統計学 189
 過渡現象 189
 機器応用工学 189
 機器制御工学 189
 基礎固体物性論 190
 計測 1 190
 計測 2 190
 工学倫理 190
 工業基礎英語 I 191
 工業基礎数学 I 191
 工業基礎物理 I 191
 高電圧工学 191
 コンピュータ回路 191
 コンピュータ入門 192
 コンピュータネットワーク 192
 システム解析 192
 システム基礎 192
 集積回路 1 193
 集積回路 2 193
 照明電熱工学 193
 職業指導 194
 数値解析 194
 制御理論 1 194
 制御理論 2 194
 生産管理 194
 設計製図 195
 卒業研究 195
 知的所有権概論 195
 通信応用工学 196
 通信方式 196
 通信理論 196
 デジタル回路 196
 デジタル信号処理 197
 電気回路 1 演習 197
 電気回路 2 演習 197
 電気機器 1 198
 電気機器 2 198
 電気磁気学 1 演習 198
 電気磁気学 2 演習 198
 電気磁気学 3 199
 電気施設管理及び法規 199
 電気数学演習 199
 電気電子工学基礎実験 199
 電気電子工学実験 1 200
 電気電子工学実験 2 200
 電気電子工学実験 3 201
 電気電子工学創成実験 201
 電気電子工学特別講義 1 201
 電気電子工学特別講義 2 202
 電気電子工学入門実験 202
 電気電子工学輪講 202

電気・電子材料工学 202
 電子回路設計演習 203
 電子デバイス 203
 電子物性学 203
 電子物理学 204
 電力系統工学 1 204
 電力系統工学 2 204
 ニュービジネス概論 204
 熱・統計力学 205
 発電工学 205
 パワーエレクトロニクス 205
 半導体工学 205
 光デバイス工学 206
 微分方程式 1 206
 微分方程式 2 206
 微分方程式特論 206
 福祉工学概論 207
 複素関数論 207
 プラズマ工学 207
 プログラミング演習 1 207
 プログラミング演習 2 208
 プロジェクト演習 208
 ベクトル解析 208
 マイクロ波工学 209
 無線設備管理及び法規 209
 量子工学基礎 209
 量子力学 209
 労務管理 209

アナログ演算工学

Analog Processing Technique 助教授・安野 卓 2 単位

- 【授業目的】アナログ演算の基本回路および設計法を修得させる。
 【授業概要】フィルタ、コントローラ等を構成する上で必要なアナログ演算回路について述べる。
 【受講要件】「アナログ電子回路」等を修得していることが望ましい。
 【履修上の注意】予習・復習を十分に行うことを希望する。
 【到達目標】
 1. 線形演算回路の解析・設計について修得する。
 2. 非線形演算回路の解析・設計について修得する。
 【授業計画】1. 演算増幅器 (1 回) 2. 演算増幅器の周辺回路部品 (1 回) 3. 線形演算回路 1(加算器, 減算器, 積分器, 微分器等)(4 回) 4. 中間試験 (到達目標 1 の評価) 5. 線形演算回路 2(フィルタ, コントローラ, 伝達関数表現等)(2 回) 6. 非線形演算回路 1(非線形関数発生器)(4 回) 7. 非線形演算回路 2(コンパレータ等)(1 回) 8. 期末試験 (到達目標 1 の一部と 2 の評価)
 【成績評価】試験 80%, 平常点 20%(レポート等) として評価し, 全体で 60%以上で合格とする。
 【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 20%, (E) 専門分野 (知能電子回路)80%
 【教科書】使用しない。必要に応じてプリントを配布する。
 【参考書】アナログ演算回路のテキストは多数あるので参照して下さい。
 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
 【連絡先】安野(E棟2階北B-5, 656-7458, yasuno@ee.tokushima-u.ac.jp)

アナログ電子回路

Analog Electronic Circuits 教授・為真 建臣, 助教授・橋爪 正樹 2 単位

- 【授業目的】電子機器に不可欠なアナログ信号を増幅・発振させる電子回路についての基礎知識を習得する。
 【授業概要】アナログ電子回路素子として使用する場合のダイオード, トランジスタの電気的特性, 各種増幅回路の構成法と解析法, 発振回路の構成法と解析法について講義する。
 【履修上の注意】「電気磁気学 1, 2」, 「電気回路 1, 2」を理解していることを前提に講義する。丸暗記は不可。理解すること。講義後の復習が不可欠。
 【到達目標】

電気電子工学科 (昼間コース)

1. ダイオード, トランジスタの基本的な特性を理解する.
2. 基本増幅回路の構成法とその解析法を理解する.
3. 帰還増幅回路等の各種増幅回路とその増幅原理を理解する.
4. 発振回路の構成法とその発振原理を理解する.

【授業計画】1. ダイオードとトランジスタの特性 2. 増幅回路の増幅の原理 3. 増幅回路の解析法 4. バイアス回路 5. 増幅回路の性能 6. RC 結合増幅回路 7. 中間試験 (到達目標 1, 2) 8. 同調増幅回路 9. 電力増幅回路 10. 直流増幅回路 11. 帰還増幅の原理 12. 帰還増幅回路と帰還増幅の効果 13. 発振回路の原理 14. 発振回路の解析法 15. 期末試験 (到達目標 3, 4)

【成績評価】試験 80%(中間試験 40%, 期末試験 40%), 平常点 20%(レポート)として評価し, 60%以上で合格とする.

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 70%, (E) 専門分野 (知能電子回路)30%

【教科書】吉田典司「電子回路 I」朝倉書店

【参考書】齊籙正男「線形電子回路」昭晃堂

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】橋爪(E棟3階南D-2, 656-7473, tume@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】本科目は知能電子回路関連科目 (デジタル回路, アナログ演算工学, コンピュータ回路, 集積回路 2, 電子回路設計演習など) の基礎となる重要科目であるので, 必ず受講し単位を取得すること.

アルゴリズムとデータ構造

Computer Algorithm and Data Structure

教授・来山 征士 2 単位

【授業目的】与えられた問題をコンピュータで解くには, そのためのプログラムが必要である. アルゴリズムとは, そのプログラムの元となる計算手続きを言い, 理解しやすく実行効率の高いプログラムを作成する上で不可欠なものである. 本科目ではその基礎知識を理解修得させる.

【授業概要】講義計画に記述したように, 数論あるいは組み合わせ論における代表的なアルゴリズムについて解説をするとともに, それらを効率よく実現するためのデータ構造について説明をする.

【受講要件】「コンピュータ入門」「プログラミング演習 1, 2」を履修していること.

【履修上の注意】授業の進行に合わせてプログラムの演習課題が与えられる. レポート提出内容は平常点として加点するので, 毎回の予習・復習に加えてレポート提出は欠かさず行うこと.

【到達目標】

1. 基本的データ構造が理解できる.
2. 木の表現, 性質および走査, および再帰呼出しが理解できる.
3. アルゴリズムの計算量が理解できる.
4. 各種ソートの基本動作および基本特性が理解できる.

【授業計画】1. アルゴリズムとは 2. 基本的データ構造 (配列, リスト) 3. 基本的データ構造 (スタック, キュー) 4. 基本的データ構造 (木) 5. 木の性質 6. 木の走査 7. 再帰呼出し 8. 中間試験 (到達目標 1, 2 の評価) 9. アルゴリズムの解析 10. 初等的整列法 (選択整列, 挿入整列) 11. 初等的整列法 (バブル整列, シェルソート) 12. クイックソート 13. 基数整列法 14. 順位キュー 15. 期末試験 (到達目標 3, 4 の評価)

【成績評価】試験 80%(中間試験 40%, 期末試験 40%), 平常点 20%(レポート等)として評価し, 全体で 60%以上で合格とする.

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 35%, (E) 専門分野 (知能電子回路)65%

【教科書】セジウィック著「アルゴリズム C」近代科学社

【参考書】茨木俊秀著「C によるアルゴリズムとデータ構造」昭晃堂

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】来山(E棟3階南D-6, 656-7482, kitayama@ee.tokushima-u.ac.jp)

インターンシップ

Internship

電気電子工学科教官 1 単位

【授業目的】企業などの業務の実体験を通じて, 仕事の仕組みや流れ及び仕事場における人間関係などの理解を深めることで, これまで学んだ知識を確認すると共にこれから学ぶべき課題や就職に対する心構えを見出すことを目的とする.

【授業概要】企業で気持ちよく仕事をするために必要なマナーを学習すること. 企画された自習テーマを十分理解するために指導者の方と十分に意思疎通をはかること. これまで習得した知識がどのように生か

されているか及び生かせるかを考えること. そして実習した内容をレポートにまとめ, これを発表する.

【受講要件】学生は損害賠償責任保険に加入することなど徳島大学インターンシップ実施要領にしたがって実習するものとする. 実習先は受け入れ申し出の企業に対し, 実習希望学生の GPA 等を基に決定する.

【履修上の注意】礼を失することなく, 職場の方と気持ちよく仕事ができるように努めること.

【到達目標】

1. 企業におけるマナーなどを理解し, コミュニケーションやプレゼンテーション能力を養う.
2. これまで学んだ専門知識等を生かすことで, 実習テーマの内容を理解すると共に, 問題の解決に努め, これらの内容をレポートにまとめる能力を養う.
3. 与えられた課題に前向きに取り組むこと.

【授業計画】1. 事前研修を受ける (3 時間). 2. 受け入れ企業に出向き, 企業から提供される実習カリキュラムにしたがって 40 時間以上の実習を行なう. 3. 実習終了後, 実習レポートを提出し事後報告を行なう (2 時間).

【成績評価】企業からの個人評価報告書と本人からの実施報告書等を基に評価する.

【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 20%, (B) 社会情報 30%, (G) プロジェクト型研究 50%

【教科書】インターンシップ手引書

【参考書】企業のパンフレット, カタログ他

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

英語コミュニケーション

Communication in English

電気電子工学科教官

非常勤講師・ロジャーズ E. ジェームズ, カーンズ H. リアン

1 単位

【授業目的】国際化, グローバル化した現代では, 専門分野の事項についても, 英語による情報を取得したり, 英語で表現したりする必要性がますます高まってきた. この授業では, 電気電子工学における英語の能力を「聞く」「話す」「読む」「書く」, の各領域にわたってバランスよく向上させることを図る.

【授業概要】クラスの半数の学生には, 前期に「聞く」「話す」の領域の授業を行い, 後期に「読む」「書く」の領域の授業を行う. 残りの半数の学生には, 前期と後期の内容を入れ替えた授業を行う「聞く」「話す」の領域の授業は更にクラス分けし, 英語のネイティブ・スピーカーの非常勤講師と電気電子工学科教官が共同してあたり, 電気電子工学の基礎的事項についての会話, 長文聞きとり, スピーチなどを行うための基本的能力を向上させる. 「読む」「書く」の領域の授業は, 電気電子工学科教官が担当し, 専門分野の基礎的事項 (電気磁気学, 電気回路) の英文テキストを輪読するとともに, それらの英作文の授業も行う.

【到達目標】

1. 電気電子工学の基礎的事項に関して英語によって会話, 聞きとり, スピーチなどを行うための基本的能力を修得する.
2. 電気電子工学の基礎的事項に関する英文読解, 英作文のための基本的能力を修得する.

【授業計画】1. 1~15 「聞く」「話す」の領域の授業 (適宜, 到達目標 1 の評価のための小テストを行う), 16~29 「読む」「書く」の領域の授業, 30 「読む」「書く」の領域の期末試験 (到達目標 2 の評価), または 1~14 「読む」「書く」の領域の授業, 15 「読む」「書く」の領域の期末試験 (到達目標 2 の評価), 16~30 「聞く」「話す」の領域の授業 (適宜, 到達目標 1 の評価のための小テストを行う)

【成績評価】試験 80%, 平常点 20%で評価し, 全体で 60%以上あれば合格とする.

【学習教育目標との関連】(B) 社会情報 100%

【教科書】特製テキストを用いる.

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】西尾(E棟3階南D-7, 656-7470, nishio@ee.tokushima-u.ac.jp)

エコシステム工学

Ecosystem Engineering

教授・三輪 恵, 近藤 光男, 村上 仁士

教授・末田 統, 助教授・松尾 繁樹, 上月 康則, 藤澤 正一郎

助教授・廣瀬 義伸, 魚崎 泰弘, 教授・田村 勝弘, 村田 明広

助教授・木戸口 善行 2 単位

電気電子工学科 (昼間コース)

- 【授業目的】自然環境と社会環境の共存の重要性、ならびに、それらを目指す工学者に必要な考え方や有効な技術について概説する。
- 【授業概要】地球温暖化など地球環境問題は、今や人類をはじめとする地球全土での生命体の存在をも危うくする重大な問題となっている。これは人類の産業活動が拡大を続けた結果、大気成分の変化や廃棄物の総量の増大など、地球の「大きさ」の壁に突き当たり、あらゆることに地球の有限性があらわれてきている現象に他ならない。人類が地球環境を保全しつつ将来世代にまで渡って持続的発展を遂げるためには、この地球の有限性の認識を基本とした自然環境に低負荷な技術体系を進展させる必要がある。本講義では自然環境と社会環境の共存を目指す工学者に必要な考え方や有効な技術について多角的に論じる。
- 【到達目標】自然環境・社会環境を取り巻く諸問題について科学的・工学的に考察し、理解する。
- 【授業計画】1. ガイダンス 2. エコシステム工学とは・レポート 3. うるおいある地域づくりと交通システム・レポート 4. 自動車を取り巻くエネルギー環境・レポート 5. エネルギーの高効率利用と大気環境の保全・レポート 6. ひとにやさしいまちづくり・レポート 7. 生態系工学による自然環境修復の取組み・レポート 8. エコシステムな物理・レポート 9. 化学と生物学の環境問題へのかかわり・レポート 10. 環境に優しい超臨界流体の利用・レポート 11. 活断層と地震・レポート 12. 環境負荷計測のための空間情報の活用・レポート 13. 障害者の社会参加を支える工学技術・レポート 14. 予備日 15. 予備日
- 【成績評価】各テーマごとに課題されるレポート (100%) により評価を行い、その平均点が 60% 以上であれば合格とする。定期試験は行わない。
- 【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 80%, (F) 創成・自律 20%
- 【教科書】教科書は特に指定せず、毎回講義用資料が配布される。
- 【参考書】E. P. オダム著/三島次郎訳「オダム基礎生態学」培風館
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

エネルギー工学基礎論

Fundamentals of Energy Engineering 助教授・川田 昌武 2 単位

- 【授業目的】人類とエネルギー、エネルギーと環境、電気エネルギーの発生・伝送・貯蔵・利用に関する基礎事項および電気エネルギー利用に伴う電氣的環境問題などを修得する。
- 【授業概要】世界のエネルギー消費量は着実に増え続けており、一次エネルギー供給に占める電気エネルギーの比率を示す電力化率も上昇している。本授業では、世界・日本のエネルギー消費状況、各種エネルギー資源、電気エネルギーの特徴、電気エネルギーの発生・伝送・利用・貯蔵・制御に関する基礎、電氣的環境問題を取り上げ、受講者全員でエネルギーと環境問題を討論する。なお、最新資料、新聞報道等も授業において解説する。
- 【受講要件】「電気回路 1, 2」「電気磁気学 1, 2」を受講しておくこと。
- 【履修上の注意】エネルギーと環境に関連する最近のトピックスについてのレポートを課す。このために新聞購読を勧める。
- 【到達目標】
1. 世界、日本のエネルギー消費状況について理解する。
 2. 各種エネルギー資源、電気エネルギーの特徴について理解する。
 3. 電気エネルギーの発生、伝送、利用、貯蔵、制御に関する基礎ならびに電氣的環境問題について理解する。
- 【授業計画】1. 電気エネルギー基礎の学び方 2. 限りあるエネルギー資源 3. エネルギー変換のしくみ 4. 力学的エネルギーと他のエネルギーとの関係 5. 熱エネルギーから電気エネルギーへ 6. 中間まとめ (到達目標 1, 及び 2 の評価) 7. 熱発電のしくみ 8. 化学エネルギーから電気エネルギーへ 9. いろいろな燃料電池 10. 光と電気エネルギーの相互変換 11. 核エネルギーの利用 12. 電気エネルギーの伝送 13. 電気エネルギーの貯蔵 14. 電磁環境 15. 定期試験 (到達目標 3 の評価) 16. 予備日
- 【成績評価】到達目標の 3 項目が各々達成されているかを試験 80%、平常点 (演習レポート) 20% で評価し、全体で 60% 以上で合格とする。
- 【学習教育目標との関連】(A) 教育・倫理 20%, (D) 専門基礎 50%, (E) 専門科目 (電気エネルギー) 30%
- 【教科書】榊原建樹著「電気エネルギー基礎」オーム社
- 【参考書】桂井誠著「基礎エネルギー工学」数理工学社
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】川田 (E棟 2階北 B-10, 656-7460, kawada@ee.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】レポートの提出状況や出席が少ない場合は試験を受けることができない。

解析力学

Mechanics

教授・大野 隆 2 単位

- 【授業目的】解析力学は理工系専門科目の基礎となるものである。基礎物理学で履修した質点のニュートン力学につなげて、質点系および剛体の力学、解析力学の初歩を講義する。
- 【授業概要】下記講義計画に示した項目に従い、質点系の運動について述べ、運動量や角運動量について講義する。次に、剛体の運動がこれらの法則で記述されることを述べる。さらに解析力学の基本となる、ハミルトンの原理やラグランジュの運動方程式について講義し、これらがニュートンの運動方程式と同等の意味を持つものあることを理解する。
- 【受講要件】基礎物理学の力学を履修しているものとする。微分積分の基礎知識を習得していることが望ましい。
- 【到達目標】
1. ニュートン力学の概念の再認識
 2. 変分原理の理解とともに解析力学を理解する
- 【授業計画】1. 質点系の物理量、重心、運動量、角運動量 2. 剛体のつりあい 3. 剛体の慣性モーメント 4. 剛体の運動のまとめ 5. 解析力学について 6. 仮想変位の原理 7. ダランベールの原理 8. 変分法 9. 変分法の例題 10. ハミルトンの原理とラグランジュの運動方程式 11. 一般化された座標とラグランジュの運動方程式 12. 簡単な運動の例 13. 簡単な運動の例 2 14. 解析力学のまとめ 15. 予備日 16. 定期テスト
- 【成績評価】講義への取り組み状況、演習の回答、定期試験の成績を総合して評価する。
- 【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 80%, (D) 専門基礎 20%
- 【教科書】力学 (学術図書、後藤憲一著)
- 【参考書】原島 鮮著 力学 裳華房、近藤 淳著 力学 裳華房
- 【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
- 【連絡先】大野 (A棟 201, 656-7549, ohno@pm.tokushima-u.ac.jp)

回路網解析

Network Analysis 非常勤講師・牛田 明夫 2 単位

- 【授業目的】電気回路 1, 2 と過渡現象の上位科目として、コンピュータによる電子回路の解析手法である直流解析、交流解析、過渡解析アルゴリズムなどを修得させる。
- 【授業概要】集積回路素子のダイオード、バイポーラ・トランジスタ、MOSFET などのモデリング手法について述べ、修正節点法による回路方程式の誘導方法とガウスの消去法や LU 分解法による解析手法を学ぶ。次に、動作点解析である直流解析についてニュートン・ラフソン法を理解させ、回路解析における適用方法について述べる。過渡解析では各種の数値積分法について解説し、回路解析への適用方法を学ぶ。これらの実行するツールとして SPICE (Simulation Program with Integrated Circuit Emphasis) があるが、これを用いてシミュレーションを行う。
- 【受講要件】「電気回路 1, 2」「過渡現象」「アナログ電子回路」などの基礎科目を修得していることが望ましい。
- 【履修上の注意】各種の解析手法について述べるが、その内容と回路解析への適用方法を理解しておけばよい。従って、試験はノート・教科書持ち込み可とする。
- 【到達目標】
1. モデリングに関してはダイオード、バイポーラ・トランジスタ、MOSFET などの大信号モデルと小信号モデルについて理解し、アナログ電子回路との関連性を修得する。
 2. 交流解析では小信号モデルが用いられている。修正節点法による回路方程式の導き方を理解する。次に、コンピュータによる回路方程式の求解法であるガウスの消去法、LU 分解法を修得する。
 3. 直流動作点は回路に含まれている LC を取り除いた回路を解析することによって求められるが、この解析にはニュートン・ラフソン法が適用される。このアルゴリズムの理解と回路解析への適用方法を修得する。また、直流動作点での小信号モデルの誘導方法を理解・修得する。
 4. 数値積分公式にはルンゲ・クッタ法を初めとして各種の方法があるが、回路の過渡解析には陰的積分公式である後退差分公式が用いられている。そこで、後退差分公式と回路解析での適用方法について修得する。
- 【授業計画】1. 非線形と線形素子との関係、大信号モデルや小信号モデルなどモデリングの統一的手法 (1 回分) 2. ダイオード、バイポーラ・トランジスタ、MOSFET の大信号モデル、小信号モデルと SPICE による素子特性のシミュレーション (2 回分) 3. 後退差分公式の回路解析への適用と SPICE による過渡解析シミュレーション (2 回分) 4. 各種積分公式の打ち切り誤差、安定性 (2 回分) 5. 直流回路方程式の誘導、直流回路方程式の解析に用いられるニュートン・ラフソン法と回路解析への適用と SPICE による直流解析シミュレーション (3 回分) 6. 回路方程式の求解法であるガウスの消去法、LU 分解法、SPICE による

電気電子工学科 (昼間コース)

交流解析シミュレーション (2 回分) 7. 修正節点法を理解し、スタンプを用いた回路方程式の統一的な誘導方法 (2 回分) 8. 期末試験 (到達目標 1, 2, 3, 4 の評価)

【成績評価】試験 80%, 平常点 20% で評価し、全体で 60% 以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 20%, (E) 専門分野 (知能電子回路)80%

【教科書】牛田, 田中 共著「電子回路のシミュレーション」コロナ社

【参考書】牛田, 森 共著「非線形回路の数値解析法」森北出版

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】西尾(E棟3階南D-7, 656-7470, nishio@ee.tokushima-u.ac.jp)

確率統計学

Probability and Statistics

教授・竹内 敏己 2 単位

【授業目的】確率的な現象の捉え方、考え方を学ぶとともにデータを処理する際に使われる統計手法を習得することを目標とする。

【授業概要】初めて数理統計を学ぶ初学者のために、統計資料の特徴の解析および確率論の基礎と小標本論の初歩を解説する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容が多岐にわたるため、テーマ別に数多くの演習問題をこなすことが望ましい。

【到達目標】

1. 基本的な確率の計算ができる。
2. 基本的な分布関数が理解できる。

【授業計画】1. 事象と確率 2. 確率変数 3. 2 項分布, ポアソン分布 4. 確率変数の独立性 5. 平均と分散 6. 連続的確率変数 7. 正規分布 8. 様々な連続的確率分布 9. 統計学の考え方 10. 中心極限定理 11. 仮説検定法の手順 12. 正規母集団の母平均の検定 13. 出現率の検定 14. 相関関係 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】期末試験を 70%, 講義への取り組み状況を 30% として評価し、全体で 60% 以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 60%, (D) 専門基礎 40%

【教科書】坂光一他『例題中心 確率・統計入門』学術図書出版社

【参考書】青木利夫, 吉原健一『統計学要論』培風館

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】竹内(A206, 656-7544, takeuchi@pm.tokushima-u.ac.jp)

過渡現象

Transient Analysis

教授・小中 信典, 助教授・西尾 芳文 2 単位

【授業目的】過渡状態に関連した諸概念、特に線形回路の動的性質について理解させる。

【授業概要】線形回路の状態は、スイッチの開閉後過渡的に変化する状態と十分時間が経過した後の定常状態の和で表現できる。ここでは前者を解析し、回路の諸特性を明らかにする。まず素子の性質と回路の接続状況から回路の状態方程式を導き出す方法について述べる。つぎにその状態方程式を解く方法として、直接的な方法とラプラス変換を用いた方法を紹介する。また保存則や状態の拘束を含む場合の回路の解析方法についても講述する。

【受講要件】「電気回路 1, 2」の履修を前提として講義を行う。

【履修上の注意】授業時間中に随時小テストを行うので、前回までの講義内容を十分復習した上で出席すること。

【到達目標】

1. 素子の性質と回路の接続状況から回路の状態方程式を導き出すことができる。保存則や状態の拘束を含む場合も取り扱うことができる。
2. 直接的な方法とラプラス変換を用いた方法により、状態方程式を解くことができる。保存則が成立する場合や強制退化が起こる場合も取り扱うことができる。

【授業計画】1. 基本回路素子の性質 (R, L, C, 電源) 2. 回路素子の接続 (キルヒホフの法則) 3. RL 回路, RC 回路の回路方程式 4. RLC 回路の回路方程式 5. 保存則と状態の拘束 6. 前半試験 (到達目標 1 の評価) 7. 線形非同次常微分方程式の解法 8. RL 回路の解析 9. RC 回路の解析 10. RLC 回路の解析 (直流電圧源を印加する場合) 11. RLC 回路の解析 (交流電圧源を印加する場合) 12. 保存則を持つ回路の解析 13. 強制退化の起こる回路の解析 14. ラプラス変換を用いた回路解析 15. 後半試験 (到達目標 2 の評価)

【成績評価】試験 80%(前半試験 30%, 後半試験 50%), 平常点 (演習・レポート等)20% で評価し、全体で 60% 以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 30%, (D) 専門基礎 70%

【教科書】小林邦博・川上博 共著「電気回路の過渡現象」産業図書

【参考書】川上博 著「回路 3 講義補充ノート～状態でみる回路のふるまい」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】小中(E棟3階南D-8, 656-7469, konaka@ee.tokushima-u.ac.jp), 西尾(E棟3階南D-7, 656-7470, nishio@ee.tokushima-u.ac.jp)

機器応用工学

Applications of Electrical Machines

教授・鎌野 琢也 2 単位

【授業目的】本講義は電動アクチュエータを用いたモーションコントロールシステムの基本構成、応答特性および応用例について習得させる。

【授業概要】本講では、まず、産業分野で広く用いられている電動アクチュエータを用いたモーションコントロールシステムの構成要素、動特性等について講述する。次に、より進んだモーションコントロールシステムの設計法およびロボットシステムを中心とした応用例について解説する。

【受講要件】「制御理論 1」、「電気機器 1, 2」を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】授業の進行に合わせて内容確認のための演習問題が適宜与えられる。レポート内容は平常点として加点されるので、毎回の予習・復習に加えてレポート提出は欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. モーションコントロールシステムの構成要素について把握し、その動特性が理解できる。
2. より進んだモーションコントロールシステムや、それらの応用法について理解できる。

【授業計画】1. モーションコントロールの構成要素 1～ 外界・内界センサ 2. モーションコントロールの構成要素 2～ 電動アクチュエータ 3. 直流サーボモータの動特性 1～ 伝達関数 4. 直流サーボモータの動特性 2～ 時定数・応答特性 5. 直流サーボモータのドライブ回路 6. 基本制御システム構成～マイナーループの効果 7. 交流サーボモータ 8. 中間試験 9. より進んだモーションコントロールシステム 1～ 外乱オブザーバ 10. より進んだモーションコントロールシステム 2～ 二自由度システム 11. より進んだモーションコントロールシステム 3～ 適応システム 12. モーションコントロールシステムの応用例 1 13. モーションコントロールシステムの応用例 2 14. モーションコントロールシステムの応用例 3 15. モーションコントロールシステムの応用例 4 16. 期末試験

【成績評価】前半部および後半部ともに試験 80%, 平常点 20%(レポート等)として評価し、全体で 60% 以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 30%, (E) 専門分野 (電気エネルギー)70%

【教科書】プリントを配布する。

【参考書】モーションコントロールシステム関連の図書は多数出版されている。例えば、堀・大西著「応用制御工学」(丸善)がシステムについて詳細に記述されている。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】鎌野(E棟2階北B-4, 656-7455, kamano@ee.tokushima-u.ac.jp)

機器制御工学

Electrical Machine Dynamics and Controls

助教授・森田 郁朗 2 単位

【授業目的】モータ制御の基礎である各種モータの動特性式とその応用である新しい制御法を理解する。

【授業概要】電磁気学的な展開から出発し、まず、モータの動特性解析によく使用される座標変換とこの結果として得られるモータの基礎式について説明する。次に、この座標変換に基礎をおくモータの新しい制御法とそのセンサレス化等を出来るだけ統一的な視点から講義する。これにより、モータのより高度な制御法を理解することができる。

【受講要件】「電気磁気学 2」、「過渡現象」、「電気機器 1, 2」、「パワーエレクトロニクス」および「システム基礎」を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】自分自身でも式を展開し、その物理的意味を考え、考え方を理解することが重要。

【到達目標】

電気電子工学科 (昼間コース)

1. 磁気回路と電磁エネルギー/機械エネルギー変換の基礎を理解する。
 2. 起磁力分布から巻線のインダクタンスの求め方を理解する。
 3. 電圧方程式と発生トルク式の導出過程を理解する。
 4. 座標変換の物理的意味と座標変換後の各モータの基礎式を理解する。
 5. モータ制御用センサとベクトル制御の考え方を理解する。
- 【授業計画】1. モータ制御の発展と新しいモータ (集中巻モータ, リラクタンスモータなど) 2. 電磁エネルギー変換の基礎, トルクと運動方程式 3. 起磁力分布と巻線のインダクタンス 4. 電圧方程式と発生トルク式 5. 三相二相変換, 回転座標変換, d-q 座標変換, 対称座標変換 6. レポート・小テスト 7. 直流モータの基礎式 8. 誘導モータの基礎式 9. 同期モータの基礎式 10. その他のモータ (ステッピングモータ, 超電導機など) 11. レポート・小テスト 12. モータ制御用センサ:位置センサ, 電流センサ 13. 誘導モータのベクトル制御 14. 同期モータのベクトル制御 15. 最終試験
- 【成績評価】レポートの提出状況と内容, 小テストおよび最終試験の成績を総合し, 60%以上を合格とする。
- 【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 40%, (E) 専門分野 (電気エネルギー)60%
- 【教科書】プリントを配布する。
- 【参考書】難波江・他著「基礎電気機器学」電気学会 (オーム社), 難波江・他著「電気機器学」電気学会 (オーム社), 山村・他著「電気機器工学」電気学会 (オーム社)
- 【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
- 【連絡先】森田(E棟2階北B-3, 656-7451, morita@ee.tokushima-u.ac.jp)

基礎固体物性論

Solid State Physics (I)

講師・中村 浩一 2 単位

- 【授業目的】電子機器中の半導体素子をはじめ, あらゆる分野で用いられる機能材料は日新月异で開発されている。こうした材料に対する微視的な見方を身につけることを目的として, 固体の物性について初歩的解説を行う。
- 【授業概要】固体における原子の幾何学的配列としての結晶格子を説明し, あわせて結晶格子の不完全性が固体の性質に及ぼす変化とその重要性を解説する。結晶を構成する原子間にどのような力が作用し, どのような性質の結晶ができるのかを学び, また, その原子の振動すなわち格子振動が結晶の熱的性質にどのように関わるのかについて説明する。自由電子論の基礎を概観し, 磁性, 超伝導, 誘電体などの固体物性の基礎を講義する。
- 【受講要件】微分, 積分の基礎的な事柄を履修しておくこと。
- 【履修上の注意】講義内容の理解の手助けとなる演習問題が出題されるので, 復習しながら, 着実に解いてみる必要がある。
- 【到達目標】
1. 単位格子, ミラー指数, ブラッグ反射など結晶構造を理解する上での基本的な事柄を理解する。
 2. 自由電子論に基づく電気伝導, 比熱理論の基礎を理解する。
 3. 磁性, 誘電体, 超伝導などの物性の基礎を理解する。
- 【授業計画】1. 結晶の基礎 2. X 線の回折と結晶 3. 代表的な物質の結晶構造 4. 固体の結合 5. 格子振動 6. 演習 7. 自由電子論 8. 電気伝導 9. 比熱理論 10. 磁性 11. 誘電体 12. 超伝導 13. 演習 14. 予備日 15. 期末試験 (到達目標 1, 2 および 3 の評価)
- 【成績評価】試験 70%(期末試験), 平常点 30%(授業への取り組み, 演習等) として評価し, 全体で 60%以上で合格とする。
- 【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 80%, (D) 専門基礎 20%
- 【教科書】岡崎誠「固体物理学」裳華房
- 【参考書】宇野良清他共訳「固体物理学入門(上, 下)」丸善
- 【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
- 【連絡先】中村(A216, 656-7577, koichi@pm.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】本講義は物性デバイス関連科目の「電子物性工学」に引き継がれる。

計測 1

Electrical Measurement and Instrumentation (I)

講師・芥川 正武 2 単位

- 【授業目的】電気電子工学のあらゆる分野において, 電気諸量の測定, 計測システムの構築は極めて重要である。その基本概念を理解させ, いろいろな電気磁気現象の測定法の基本的考え方を習得させる。
- 【授業概要】電気および磁気現象を利用して, 各種物理量を測定するために必要な基本的考え方, 方法を述べる。また, これをもとに直流

および低周波領域における電気・磁気諸量の具体的な測定方法を修得する。

【履修上の注意】「電気磁気学 1」, 「電気回路 1」の内容を踏まえて講義を行うので, これらを十分理解しておくことが望ましい。

【到達目標】

1. 計測・測定の基本を理解するとともに, 電気諸量の測定標準, 電圧・電流の測定方法の基礎を修得する。
2. 電圧・電流のデジタル測定, その他の電気・磁気諸量の測定方法の基礎を修得する。

【授業計画】1. 計測と測定, 測定方法の分類 2. 測定値の統計的処理 3. 測定誤差の伝搬 4. 測定値の関係 5. 単位, 測定標準 6. 電圧・電流の測定の基礎 7. 電圧・電流のアナログ測定, 倍率器, 分流器 8. 中間試験 9. 電圧・電流のデジタル測定 10. 抵抗, インピーダンスの測定 11. 電力の測定 12. 力率・電力量の測定 13. 磁気量の測定 14. 波形の観測と記録, 周波数・位相・周波数成分の測定 15. 期末試験

【成績評価】試験 80 点 (中間試験 40 点, 期末試験 40 点), 平常点 20 点 (毎回の授業時間に行う演習のレポート, 授業への参加状況等を総合) として評価し, 全体で 60 点以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 35%, (E) 専門分野 (電気電子システム)65%

【教科書】金井・齋藤・日高著「電気磁気測定の基礎 [第 3 版]」昭晃堂, を使用する。

【参考書】菅野允著「電磁気計測演習」(コロナ社) など

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】芥川(E棟3階北C-5, 656-7477, makutaga@ee.tokushima-u.ac.jp)

計測 2

Electrical Measurement and Instrumentation (II)

教授・入谷 忠光 2 単位

【授業目的】エレクトロニクス技術を駆使した計測法, 特に高周波の計測法を修得させる。

【授業概要】増幅器やコンピュータによる信号処理技術を駆使した計測法を解説する。特に無線で用いられる高周波では回路素子を分布定数回路として扱うので, この基礎と S パラメータを用いた測定法を解説し, 更に高周波信号源, 電圧・電力, 周波数, 波形, スペクトル雑音の測定法を解説する。

【到達目標】

1. 電子計測技術とセンサーの概要が把握できる。
2. 伝送線路理論と特性およびそれらを活用する上での基本事項を修得する。
3. 信号源の動作原理と基本特性が理解できる。
4. 高周波電圧・電力および回路定数の測定原理が理解できること。
5. 波形, 周波数, およびスペクトルおよび雑音の測定原理が理解できる

【授業計画】1. 電子計測の概要 2. センサー 3. 高周波測定の基礎 4. 伝送線路理論 5. S パラメータ・スミスチャート 6. 伝送線路と回路素子 (実演) 7. 測定用信号源 8. 中間試験 (到達目標 1, 2, 3 の評価) 9. 高周波電圧 電力の測定 10. 回路定数の測定 11. 波形の測定 (実演) 12. 周波数の測定 13. スペクトルの測定 (実演) 14. 雑音の測定 15. 予備日 16. 期末試験 (到達目標 4.5 の評価)

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況, 演習の回答, レポートの提出状況と内容, 小テスト及び最終試験の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 40%, (E) 専門分野 (電気電子システム)60%

【教科書】大森俊一・横島一郎・中根央著「高周波・マイクロ波測定」コロナ社

【参考書】都築泰雄著「電子計測」コロナ社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】入谷(E棟3階北C-2, 656-7478, iritani@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「計測 1」, 「マイクロ波工学」の履修を前提にして講義を行う。高周波測定の基礎の講義が終了すれば中間テストを行う。その後はレポートと最終試験を行うので毎回の予習・復習は欠かせないこと。成績評価に対する平常点と試験の比率は 3:7 とする。平常点には講義への参加状況, 演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み, 試験には中間試験及び最終試験の成績を含む。

工学倫理

Engineering Ethics

非常勤講師・大輪 武司 2 単位

電気電子工学科 (昼間コース)

【授業目的】技術者に強く要求される倫理的行動についての理解を深める。

【授業概要】科学と違って技術は世の中に新しいものを作り出す。多くの人は大学を卒業して企業の中で技術者として活動し、新しいものを作り出していく。その時に常に頭に置いておかななくてはならないのが技術者倫理である。この講義では技術とはなにか、から始めて技術者とは何か。社会の中で技術者はどうあるべきかを一緒に考える。技術的な活動の中で「これは危ない」と気が付く感覚が身につくように多くの事例を説明するとともに、自信の行動に責任が持てるように、行動決定の考え方を説明する。

【到達目標】

1. 科学や工学との比較の中で技術とは何なのかを理解する。
2. なぜ技術者に倫理的な行動が強く要求されるのかを理解する。
3. 技術者が個人として自律した存在であるべきだということを理解する。
4. 義務論的理論、目的論的理論などの具体的な行動決定法を理解し、利用できる。
5. なぜ技術者が事例にあるような変な行動を取ってしまうのかを理解し、それを防ぐ方法を修得する。

【授業計画】1. 「ガイダンス」なぜ技術者倫理なのかを理解し、事例で考える。2. 「技術とは」技術とは何か、技術者とは何をやる人かを考える。3. 「グループ討議1」実際の技術者の行動を考えて討議し、発表。レポート1 4. 「企業の技術者」企業の中で技術者は何をしているのかの紹介。5. 「会社とは何か」会社とはどういう存在か、会社の倫理とは。6. 「技術者資格と教育」国際的資格、技術者教育の認定。レポート2 7. 「技術者の自律」専門家とは、企業の中の専門家、専門職 8. 「自律する技術者」自律の考え方、学会、継続学習 9. 「行動決定1」倫理問題の考え方、答えが一つに決まらない問題 レポート3 10. 「行動決定2」義務的理論と目的論的理論、相反問題の解き方。11. 「グループ討議2」具体的事例を理解し行動法を考える。12. 「グループ討議の発表」各グループの発表。レポート4 13. 「事例説明」グループ討議で使った事例の考え方の解説。14. 「まとめ」全体のまとめと組織の中での行動法の復習。15. 「テスト」

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを、レポートやグループ討議、最終テストで評価し、60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 80%, (B) 社会情報 20%

【連絡先】大輪(044-549-2225, t.owa@toshiba.co.jp)

工業基礎英語 I

Industrial Basic English (I) 非常勤講師・広田 知子 1 単位

【授業目的】現代社会の国際言語である英語を用いて、科学技術分野での基礎的な語彙力、読解力、リスニング力を養うことを目的とする。

【授業概要】科学技術分野で頻出の語彙や表現を増やす。イラスト、写真などを参考にしながら、内容理解のための練習問題を通して、英文を理解する力や、必要な情報を効率的に掴む力を養成する。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. HEAT 3. SOUND 4. COMPUTERS 5. (教科書の各章にしたがって進めていくが、途中で適宜リスニング教材やビデオ教材なども使用する。)

【成績評価】コース最終日に試験を行う。

【教科書】ENJOY SCIENCE:データバンク (I) 『やさしい科学』David Crystal/John Foster Asahi Press

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】授業の前に予習しておくことが望ましい。

工業基礎数学 I

Industrial Basic Mathematics (I) 非常勤講師・吉川 隆吾 1 単位

【授業目的】工学を学ぶために必要不可欠となる微分・積分の基礎的な内容について理解を図り、さらに基本的な手法や計算技術を確実に習得することを目的とする。

【授業概要】1 変数関数および多変数関数の微分・積分について、基礎的な内容から解説する。また、本講義の内容について、より理解を深めるために適宜演習を行う。

【授業計画】1. 微分 1:極限と連続 2. 微分 2:微分 3. 微分 3:導関数の応用 4. 積分 1:不定積分 5. 積分 2:定積分 6. 積分 3:定積分の応用 7. 偏導関数 1:多変数の関数 8. 偏導関数 2:偏導関数 9. 偏導関数 3:全微分 10. 偏導関数 4:Taylor の定理 11. 偏導関数 5:偏導関数の応用 12. 重複積分 1:重複積分 13. 重複積分 2:多重積分の応用

【成績評価】出席状況、レポート、期末考査等により総合的に評価する。

【教科書】特に指定しない。適宜、資料を配布する。

【参考書】矢野健太郎、石原繁 編「微分積分(改訂版)」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義内容を確実に理解するためにも、毎回の復習は欠かさずに行い、次回の講義に望んでもらいたい。成績評価に対する[講義の出席状況、レポートの提出状況]と[小テストの成績]の割合は4:6とする。

工業基礎物理 I

Industrial Basic Physics (I) 非常勤講師・佐近 隆義 1 単位

【授業目的】

【授業概要】力学・波動・電磁気学について、ごく初歩的分野を解説する。

【授業計画】1. 運動と力:質点及び剛体の力学、ニュートンの運動の法則、運動量と力積・保存則 2. エネルギーと運動:仕事、力学的エネルギー・保存則 3. 波動:等速円運動、単振動、波 4. 電気と磁気:クローン力、電場と電圧、オームの法則・キルヒホッフの法則、磁場・ローレンツ力 5. 試験

【成績評価】講義への参加状況と試験の成績を総合して行う。

【参考書】高等学校で使用する物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義の最終日に試験を実施するので、毎回の復習を欠かさず行うこと。

高電圧工学

High Voltage Engineering 助教授・下村 直行 2 単位

【授業目的】電力分野にとどまらず、幅広い分野で不可欠な高電圧工学の基礎的知識を修得する。高電圧技術の利用・応用を学ぶ。

【授業概要】高電圧や大電流の現象は、低電圧・小電流の現象からは類推できないような場合が多く、電圧や電流の増加によって非線形に変化する現象を取り扱うところに、この科目の意義がある。電力需要の増加だけでなくさまざまな応用分野で高電圧工学に対する要求が高まっており、高電圧大電流の発生、計測を述べる。応用についてはパルスパワー技術を中心に最近の高電圧・大電流応用等も紹介したい。

【受講要件】特に定めないが、電気回路、電気磁気学を始めとするさまざまな科目の知識を必要とする。

【履修上の注意】講義時には毎回演習を行い、成績評価の対象とするので予習・復習は欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. 高電圧・大電流現象の基礎現象を理解する。
2. 高電圧・大電流の発生方法を理解する。
3. 高電圧・大電流の計測方法、試験法を理解する。
4. 高電圧パルスパワー、その他高電圧・大電流の利用応用を理解する。

【授業計画】1. 高電圧工学の意義と学び方 2. 高電圧・大電流に関連する物理現象 3. 放電現象と絶縁物の特性 4. 高電圧の発生方法 5. 大電流の発生方法 6. 高電圧の測定 7. 大電流の測定 8. 中間試験 9. 静電界とその計算 10. 高電圧機器 11. 高電圧応用(パルスパワーの基礎) 12. 高電圧応用(パルスパワーの発生・計測) 13. 高電圧応用(パルスパワー) 14. 高電圧応用(その他) 15. 高電圧応用(その他) 16. 期末試験

【成績評価】到達目標が達成されているかを試験 80%(中間試験 40%、期末試験 40%)、平常点(ミニテスト、レポート等)20%で評価し、全体で60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 30%, (E) 専門分野(電気エネルギー)70%

【教科書】秋山秀典編著「高電圧パルスパワー工学」オーム社

【参考書】宅間薫・柳父悟著「電気学会大学講座 高電圧大電流工学」電気学会、原雅則・秋山秀典著「高電圧パルスパワー工学」森北出版

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】下村(E棟2階北B-8, 656-7463, simomura@ee.tokushima-u.ac.jp)

コンピュータ回路

Computer Circuits 教授・為貞 建臣 2 単位

【授業目的】電子計算機のハードウェアについて学ぶ

【授業概要】コンピュータ内部での情報の表現法、記憶法、処理法ならびにそれを実現する回路(論理回路と呼ばれている)について講義する。

【受講要件】「アナログ電子回路」、「デジタル回路」の講義内容と関係が深いので、それら2つの科目を受講しておくこと。

【到達目標】

電気電子工学科 (昼間コース)

1. コンピュータの内部構成要素とその機能を理解する
2. コンピュータにおける情報の表現法を理解する
3. コンピュータでの計算法を理解する
4. コンピュータ回路の設計法を理解する

【授業計画】1. コンピュータ開発の歴史 2. コンピュータの内部構造 3. コンピュータ内での情報の表現法 4. 基数変換 5. 補数表現 6. 2進数の加減算 7. 2進数の乗除算 8. 論理関数 9. 論理関数の簡単化 10. 加算器回路 11. 減算回路 12. 四則演算回路 13. 記憶装置 14. 入出力装置 15. 制御装置とプログラム 16. 定期試験

【成績評価】試験 80%, 平常点 20%(レポート等)として評価し、全体で60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 10%, (E) 専門分野 (知能電子回路)90%

【教科書】為貞他, 電子計算機, 朝倉書店 I

【参考書】藤原秀雄「コンピュータの設計とテスト」(工学図書)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】為貞(E棟3階南D-1, 656-7472, tamesada@ee.tokushima-u.ac.jp)

コンピュータ入門

Computer Exercise

講師・大家 隆弘 1 単位

【授業目的】電気電子工学科に在籍する4年間で最も活用してほしい情報処理実習室の利用に関する講義と実習を行い、コンピュータに親しみキーボードの扱いに慣れることはもちろんのこと、これからのインターネット社会に備えた教育を行う。

【授業概要】まず、コンピュータ社会における倫理(モラルやマナー)について概説する。そして、UNIX オペレーティングシステムの操作、その上で利用可能な各種ソフトウェアの利用方法を講義・実習する。特に、インターネットを利用した電子メール・ネットニュース・WWWに関する実習を十分にを行う。

【履修上の注意】本授業は、上級科目のプログラミング関係の授業の基礎になることはもちろんのこと、学生生活上の掲示版としても活用されているインターネット教育も行う。したがって、十分習熟しなければ今後の学生生活に支障をきたすと思われるので、休まずに受講して欲しい。また、授業時間外でも申し出さえあれば実習室を開放するので、課外時間も十分に活用してほしい。

【到達目標】

1. コンピュータ社会における倫理(法律・モラル・マナー)を十分理解している。
2. UNIX オペレーティングシステムの操作(基本的なコマンド操作・ファイル操作・ディレクトリ操作)を理解している。
3. インターネットを利用した電子メールやネットニュースの操作方法を理解し、情報の送受信が自由にできる。

【授業計画】1. コンピュータ社会における倫理; 法律, モラル, マナー 2. 実習システムの使い方 3. UNIX 入門; 基本コマンド 4. ファイル操作, ディレクトリ操作 5. エディタの使い方; テキストの入力と修正 6. 日本語入力; ローマ字入力, 日本語変換 7. 中間試験(筆記試験; 到達目標 1, 2 の評価) 8. インターネット入門; インターネットとマナー 9. ネットニュース; 送受信の一連の操作 10. 電子メール; メールアドレス, 送受信の一連の操作 11. WWW; ホームページの検索と閲覧 12. 自分のホームページを作ってみよう 13. レポート作成; 文書整形ツール 14. グラフ作成ツール 15. 期末試験(実技試験; 到達目標 3 の評価)

【成績評価】到達目標の3項目が各々達成されているかを試験 80%, 平常点(実習状況等)20%で評価し、3項目平均で60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 20%, (B) 社会情報 20%, (C) 工学基礎 40%, (D) 専門基礎 20%

【教科書】講義の最初に配布するプリントを使用する

【参考書】阿曾弘具ほか共著「UNIX と C」近代科学社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大家(E棟3階北C-1, 656-7479, alex@ee.tokushima-u.ac.jp), 西尾(E棟3階南D-7, 656-7470, nishio@ee.tokushima-u.ac.jp), 島本(E棟3階南D-5, 656-7483, simamoto@ee.tokushima-u.ac.jp)

コンピュータネットワーク

Computer Networks

講師・大家 隆弘 2 単位

【授業目的】近年、インターネットを用いたコンピュータ間の通信が爆発的に拡大し、通信の分野において重要な位置を占めるに到っている。インターネットでは文字、音声、静止画、動画などの異なる属性の情

報を統一的に扱うことができる。本講義では、このような特徴を持つ計算機ネットワークの要素技術であるデータ伝送技術、交換技術、計算機ネットワークの基本概念、TCP/IP(インターネットの主要プロトコル)での実装などの理解を目的とする。

【授業概要】ネットワークの基礎知識を講述する。その後、OSI 参照モデルに基づく現在の計算機ネットワークの基本概念を説明し、計算機ネットワークの実装例として TCP/IP をあげ、現在のネットワーク通信の実現技術と将来の展望について講述する。

【受講要件】「通信理論」「通信方式」の履修を前提とする。

【到達目標】

1. コンピュータネットワークの基本概念を理解する。
2. TCP/IP の各プロトコルの実装について理解する。
3. TCP/IP の階層間の関係について理解する。

【授業計画】1. ネットワーク基礎知識 2. OSI 参照モデル 3. TCP/IP 基礎知識 4. データリンク層 5. IP の伝送制御 6. ネットワーク層 (IP) 7. 経路制御 8. 中間試験(到達目標 1, 2 の評価) 9. トランスポート層 (TCP と UDP) 10. TCP の伝送制御 11. 経路制御プロトコル 12. アプリケーション層 (DNS, WWW) 13. アプリケーション層 (EMAIL, TELNET) 14. 物理層 15. 期末試験(到達目標 2, 3 の評価)

【成績評価】到達目標の3項目が各々達成されているかを試験 70%, 平常点(レポートなど)30%とし、平均で60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 35%, (E) 専門分野(電気電子システム)65%

【教科書】竹下, 他著「マスタリング TCP/IP 入門編」オーム社

【参考書】タネンバウム著「Computer Networks」Prentice Hall

【WEB 頁】<http://www-cc.ee.tokushima-u.ac.jp/alex/lecture/ee/computer-networks/>

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大家(E棟3階北C-1, 656-7479, alex@ee.tokushima-u.ac.jp)

システム解析

System Analysis

助教授・久保 智裕 2 単位

【授業目的】コンピュータを活用して制御系のデザインを行う方法について解説する。また1人1台ずつコンピュータを割り当てて、実際に制御系デザインを体験してもらう。

【授業概要】制御系デザインとは、フィードバック制御されたシステムが与えられた仕様を満足するように補償器の特性を定めることである。近年ではコンピュータを用いてこれを行うことが多くなってきた。本講前半ではソフトウェア MATLAB の使用方法について説明する。後半ではマイコン実習室で実際にこれを用い、各自制御系デザイン作業を体験してもらう。一人一人が工夫をこらしながらデザインをしていく過程を通じて、与えられた仕様を満足するデザインの方法は画一的ではないということに気付いて欲しい。

【受講要件】「システム基礎」「制御理論1, 2」の履修を前提として授業を行う。

【履修上の注意】原則としてすべて板書によって授業を進めるので、ノートをしっかりとること。もし欠席してしまったら、次の授業までに他の学生にノートを写させてもらっておくこと。

【到達目標】

1. 基本的な行列演算をプログラミングできるようになる。
2. コンピュータを利用した制御系の解析および設計の基本を身につける。

【授業計画】1. 行列の入力と要素の操作 2. ステートメントと変数, 特別な数値 3. さまざまな行列演算 4. コロン記号の使い方とその応用 5. グラフィックス 6. コントロール・フロー 7. M ファイルの利用 8. 前半試験(到達目標 1 の評価) 9. 線形システムの表現 10. 時間応答シミュレーション 11. 周波数応答シミュレーション 12. 制御系の仕様 13. 制御系デザイン実習 14. 総まとめ 15. 後半試験(到達目標 2 の評価)

【成績評価】試験 90%(前半試験 45%, 後半試験 45%) 平常点 10%(小テスト等)で評価し、全体で60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 50%, (E) 専門分野(電気電子システム)50%

【教科書】使用しない。

【参考書】MATLAB ユーザーズガイド(オンライン)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】久保(E棟3階北C-6, 656-7466, kubo@ee.tokushima-u.ac.jp)

システム基礎

Basic Theory of Systems

助教授・久保 智裕 2 単位

電気電子工学科 (昼間コース)

【授業目的】制御理論を学ぶための基礎としてダイナミカル・システムのふるまいを解析する方法を修得させる。

【授業概要】各種のダイナミカル・システムを状態方程式によって統一的に記述する方法を示し、線形システムの解の性質について述べる。つぎにラプラス変換を導入して伝達関数を定義し、ブロック線図を用いてシステムの構造を記述する方法を解説する。また伝達関数を用いて単位ステップや単位インパルスといった基準入力に対する過渡応答の求め方について述べ、特性方程式の係数にもとづく安定判別法を紹介する。

【受講要件】「電気数学演習」、「線形代数学Ⅰ」の履修を前提として講義を行う。

【履修上の注意】原則としてすべて板書によって講義を進めるので、ノートをしっかりとること。もし欠席してしまったら、次の講義までに他の学生のノートを写させてもらっておくこと。

【到達目標】

1. さまざまなダイナミカル・システムを状態方程式によって表すことができ、線形システムの解の性質を理解している。ラプラス変換の使用法を習得し、伝達関数を求めることができる。
2. ブロック線図によりシステムの構造を記述する方法を理解している。状態方程式または伝達関数で表現されるシステムの過渡応答を計算することができる。特性方程式の係数から安定性を判別する方法を習得している。

【授業計画】1. ダイナミカル・システムとはどのようなものか 2. さまざまなシステムに対する状態方程式の導出 3. 状態方程式の解を求める 4. 単位ステップ応答と単位インパルス応答 5. ラプラス変換とその性質 6. ラプラス変換を用いた微分方程式の解法 7. 伝達関数を用いた線形システムの表現 8. 前半のまとめ 9. 前半試験 (到達目標 1 の評価) 10. ブロック線図によるシステム構造の記述 11. 行列指数関数の計算 12. 伝達関数を用いた過渡応答の計算法 13. 特性方程式に基づく安定判別法 14. 総まとめ 15. 後半試験 (到達目標 2 の評価)

【成績評価】試験 80%(前半試験 40%, 後半試験 40%) 平常点 20%(小テスト等)で評価し、全体で 60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 60%, (E) 専門分野 (電気電子システム)40%

【教科書】使用しない。

【参考書】制御工学のテキストは数多い。伝達関数と状態方程式を両方扱っているものならば、いずれでもよい。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】久保(E棟3階北C-6, 656-7466, kubo@ee.tokushima-u.ac.jp)

集積回路 1

Integrated Circuit (I) 教授・大野 泰夫 2 単位

【授業目的】集積回路技術が産業として大きく発展した技術的背景の理解と共に、プロセス設計、デバイス設計に必要な基礎知識の習得を目標とする。

【授業概要】MOS 集積回路作製の基本的プロセス、酸化・拡散などの要素プロセス技術、MOS トランジスタ特性を理解する上で重要な MOS ダイオード特性、しきい値電圧、グラジュアルチャネル近似、配線や微細化の限界などについて講義と演習を行う。

【履修上の注意】演習、試験では関数電卓持参のこと。

【授業計画】1. IC ビジネス 2. プレーナテクノロジー 3. 要素プロセス 4. MOS ダイオード特性 5. しきい値 6. 演習 7. 半導体での電流輸送 8. MOS トランジスタ 9. グラジュアルチャネル近似 10. 回路形式とトランジスタ特性 11. 演習 12. CMOS 13. スケーリング則 14. LSI における配線の問題 15. 微細化極限 16. 最終試験

【成績評価】講義に対する理解の評価は、平常点 (レポートの提出状況・内容) および試験により評価する。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 50%, (E) 専門分野 (物性デバイス)50%

【教科書】なし

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大野(E棟2階南A-7, 656-7438, ohno@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】本科目は同学期に開講される「集積回路 2」と連携して講義・演習を行う。「半導体工学」、「電子デバイス」を受講していることが望ましい。平常点と試験の比率は 2:8 とする。

集積回路 2

Integrated Circuits (II) 教授・小中 信典 2 単位

【授業目的】現在、身の周りにおける論理回路の大部分は CMOS 回路技術を用いて集積化 (IC 化) されている。本講義では IC 化された論理回路をレイアウトレベルで理解する能力ならびに論理 IC 設計法を習得する。

【授業概要】CMOS 論理回路を IC 内に実現するための回路設計法ならびに設計回路の電気的特性について講義する。本授業科目では講義以外に実習を行い、実際に計算機上で各種 CMOS 論理ゲート回路を設計し、集積回路に対する理解を深めると共に、その基本的な設計法の習得を目指す。

【受講要件】「アナログ電子回路」、「デジタル回路」、「コンピュータ回路」、「集積回路 1」を受講していること。

【履修上の注意】コンピュータ実習室で設計演習を行うため、受講制限を行う場合がある。

【到達目標】

1. 1. 所望する特性をもつ MOS トランジスタのレイアウト設計が行える
2. 2. CMOS インバータ回路のレイアウトとその特性の関係を理解する
3. 3. CMOS 論理回路の基本ゲートのレイアウト設計が行える
4. 4. 順序論理回路のレイアウト設計が行える

【授業計画】1. MOS トランジスタ 2. MOS トランジスタのレイアウト設計 3. レイアウト設計ツールの使用法 4. レイアウト設計ツールを用いた MOS トランジスタの設計 5. CMOS インバータゲート回路のレイアウト設計 6. CMOS インバータゲート回路の DC 特性 7. CMOS インバータゲート回路の AC 特性 8. 中間試験 9. CMOS NAND ゲート回路のレイアウト設計 10. CMOS NOR ゲート回路のレイアウト設計 11. 伝送ゲート回路のレイアウト設計 12. フリップフロップ回路のレイアウト設計 13. 順序論理回路設計 14. ASIC 設計法 (スタンダードセル方式) 15. IC の製造工程 16. 定期試験

【成績評価】到達目標が達成されているかを試験 80%, 平常点 (ミニテスト, レポート等)20%で評価し、全体で 60%以上を合格とする

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 40%, (E) 専門分野 (知能電子回路)60%

【教科書】国枝博昭「集積回路設計入門」コロナ社

【参考書】第一回目の講義で紹介。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】小中(E棟3階南D-8, 656-7469, konaka@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】今後、電子回路はますます集積回路 (IC) 内に作られることが多い。本講義はその設計法に関するものである。電気電子工学科の卒業生として将来、IC を作製する仕事に就く可能性が高いので、受講をお薦めする。

照明電熱工学

Illuminating and Electric Heating Engineering 教授・井上 廉
助教授・下村 直行 2 単位

【授業目的】我々の日常生活に密着し、電気エネルギー利用の最も古い歴史を持つ照明と電熱工学について学修する。前者は視覚情報に深く関係しており、また、後者は効果的・効率的な熱エネルギー利用を目指す。これらの事項についての必要な基礎知識を修得する。

【授業概要】各種光源の発光機構、照明基礎量、照明計算及び電熱工学における電気エネルギーの基礎と応用に言及する。

【受講要件】「電気磁気学 1」と「電気回路 1」を受講しておくこと

【到達目標】

1. 各種光源の特性が理解でき、屋内外における簡単な照明設計が可能となる。
2. 各種電熱機器の特徴を理解し、電熱計算が出来る。

【授業計画】1. 光変換における測光量と単位 2. 光の見え方・演習 3. 照明諸量の定義と実際 4. 各種光源の特徴と利用方法 5. 照明計算の基礎 6. 照明理論計算・演習 7. 照明実例計算・演習 8. 中間試験 9. 電気加熱の特徴 10. 各種電気加熱方式 11. 熱伝達の基礎 12. 熱回路理論 13. 熱回路の特徴 14. 電気加熱の実際 15. その他電気応用 16. 期末試験

【成績評価】到達目標が達成されているかを試験 80%(中間試験 40%, 期末試験 40%), 平常点 (ミニテスト, レポート等)20%で評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 30%, (E) 専門分野 (電気エネルギー)70%

【教科書】大松松次郎原著「新しい照明ノート」オーム社

【参考書】電気学会編「照明工学」オーム社、電気学会編「電熱工学」オーム社、高野・千葉著「電力応用 1(照明・電熱)」朝倉書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

電気電子工学科 (昼間コース)

【連絡先】 下村(E棟2階北B-8, 656-7463, simomura@ee.tokushima-u.ac.jp)
【備考】 我々の日常生活に密着した内容を含んでおり、学修した内容を実際に確かめる習慣と創意工夫が本講義の理解度を高める。

職業指導

Vocational Guidance 非常勤講師・坂野 信義 4 単位

【授業目的】
【授業概要】 生涯発達・Career Developing としての人間観・職業観を確立すべく、学際的見地から職業指導の課題と方法を論述し、併せて能力開発を実践指導する。
【授業計画】 1. 職業指導の課題と方法 (1) 職業指導発展の略史 2. 職業指導の課題と方法 (2) 職業指導の課題 3. 職業指導の課題と方法 (3) 個性と職業・個人理解の方法・性格、興味など 4. 職業指導の課題と方法 (4) 個性と職業・適応と適性 5. 職業指導の課題と方法 (5) 個性と職業・Career Planning としてのライフワーク 6. 職業指導の課題と方法 (6) 個性と職業・マネジメントスキル: リーダシップ論など 7. 職業指導の課題と方法 (7) 職業相談 (キャリア・カウンセリング): 職業相談の意義 8. 職業指導の課題と方法 (8) 職業相談 (キャリア・カウンセリング): カウンセリング理論と技術 9. 職業指導の課題と方法 (9) 職業指導の評価 10. 職業指導に役立つ能力開発: 理論と実践 (1) 人生 60 年計画表の作成 11. 職業指導に役立つ能力開発: 理論と実践 (2) IC 法, NM 法を活用してソフト作成能力を育成 12. 職業指導に役立つ能力開発: 理論と実践 (3) KJ 法を活用しての課題解決とプレゼンテーション 13. 職業指導に役立つ能力開発: 理論と実践 (4) シュルツの自律神経訓練法の理解
【成績評価】 論文, 能力開発のプレゼンテーションにより成績評価。
【教科書】 講師よりプリント資料配布。
【参考書】 参考書, 必読書については, 講義中紹介。
【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能
【備考】 「面白くてためになり, そして思い出に残る」講義が目標。

数値解析

Numerical Analysis 教授・今井 仁司 2 単位

【授業目的】 様々な数値計算手法を身につけるとともに, 数値解析の基本的な考え方を習得することを目的とする。
【授業概要】 新しい解析手法である数値シミュレーションに関連して, 丸め誤差などの数値計算における基礎的知識, 連立一次方程式・固有値問題などの基本的数値計算法について述べる。
【受講要件】 「線形代数学」「微分積分学」の履修を前提とする。
【履修上の注意】 講義内容を確実に理解するには, 予習を行い, 講義ノートをきちんととり, 講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に, 各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。
【到達目標】
1. 数値誤差が理解できる
2. 方程式の数値解法がプログラムでできる程度に具体的に理解できる
【授業計画】 1. 丸め誤差, 桁落ち 2. 浮動小数の四則演算 3. 連立一次方程式の解法: 直接法 4. 連立一次方程式の解法: 反復法 5. 連立一次方程式の解法: 勾配法 6. 非線形方程式の解法: 二分法 7. 非線形方程式の解法: ニュートン法 8. 固有値の解法: ハウスホルダー法 9. 固有ベクトルの解法: QR 法, ベキ乗法 10. 数値積分: 台形公式 (二重指数型積分公式) 11. 数値積分: ガウスの積分公式 12. 微分方程式の解法: オイラー法 13. 微分方程式の解法: ルンゲ・クッタ法 14. 微分方程式の解法: 差分法 15. 予備日 16. 定期試験
【成績評価】 期末試験の点数 (100 点を超えたときは 100 点にしたもの) が 60 点以上であれば, その点数を成績として合格とする。期末試験の点数が 60 点に満たない場合には, 100 点満点に換算した試験の点数を 80% にしたものと平常点 (講義と演習の取り組み具合を評価したもので 20 点満点) を合計し, その点数が 60 点以上であれば 60 点を成績として合格とする。
【学習教育目標との関連】 (C) 工学基礎 60%, (D) 専門基礎 40%
【教科書】 特に指定しない
【参考書】 篠原能材『数値解析の基礎』日新出版, 名取亮『線形計算』朝倉書店, 森正武『数値解析』共立出版, 名取亮『数値解析とその応用』コロナ社
【対象学生】 開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
【連絡先】 今井(A棟220, 656-7541, imai@pm.tokushima-u.ac.jp)

制御理論 1

Control Theory (I) 教授・鎌野 琢也 2 単位

【授業目的】 伝達関数法に基づき, 周波数応答法による表示法と安定判別法および制御系の設計法の基礎を理解修得させる。
【授業概要】 本講では, 周波数応答法を基礎とする安定判別法および設計法について述べる。
【受講要件】 「システム基礎」をはじめとして「電気回路 1, 2」「過渡現象」等, 基礎科目を修得することが望ましい。
【履修上の注意】 予習, 復習を十分行うこと。
【到達目標】
1. 周波数応答特性の表示法およびそれらを用いた安定判別法を習得する。
2. 制御系の設計仕様および設計法を習得する。
【授業計画】 1. ナイキスト線図 (1 回) 2. ボード線図 (2 回) 3. ニコルス線図 (1 回) 4. ナイキスト安定判別法 (2 回) 5. 中間試験 6. 制御系の構成 (1 回) 7. 制御系の設計仕様 (3 回) 8. 制御系の設計法 (2 回) 9. 設計法の演習 (1 回) 10. 期末試験
【成績評価】 試験 80%, 平常点 20% (レポート等) として評価し, 全体で 60% 以上で合格とする。
【学習教育目標との関連】 (D) 専門基礎 50%, (E) 専門分野 (電気電子システム) 50%
【教科書】 西村編「制御工学」森北出版株式会社
【参考書】 制御理論のテキストは多数出版されており, いずれを参考にしても良い。
【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】 鎌野(E棟2階北B-4, 656-7455, kamano@ee.tokushima-u.ac.jp)
【備考】 教科書の章末問題を各自解いておくこと。

制御理論 2

Control Theory (II) 助教・久保 智裕 2 単位

【授業目的】 デジタル制御系の解析法および設計法を修得させる。
【授業概要】 デジタル・コンピュータを用いて制御を行うための基礎的な理論を扱う。まずデジタル制御系の構成を示し, 離散時間状態方程式の誘導について述べる。つぎに Z 変換を導入してパルス伝達関数を定義し, 過渡応答の求め方や安定判別法, デジタル PID 制御系について解説する。また可制御性, 可観測性といった概念を導入し, 状態フィードバック制御の考え方を紹介する。
【受講要件】 「システム基礎」「制御理論 1」の履修を前提として講義を行う。
【履修上の注意】 原則としてすべて板書によって授業を進めるので, ノートをしっかりとること。もし欠席してしまったら, 次の授業までに他の学生にノートを写させてもらっておくこと。
【到達目標】
1. デジタル制御系の構成を理解し, 離散時間状態方程式およびパルス伝達関数によって表現するとともに, その過渡応答を計算することができる。
2. デジタル制御系の安定性, 可制御性, 可観測性といった性質を調べることができる。またデジタル PID 制御, 状態フィードバック制御の概念を理解している。
【授業計画】 1. デジタル制御系の構成 2. サンプリングと A/D, D/A 変換 3. 離散時間状態方程式の誘導 4. Z 変換とその性質 5. パルス伝達関数によるシステムの表現 6. パルス伝達関数を用いた過渡応答の計算法 7. (連続時間) 伝達関数とパルス伝達関数の関係 8. 前半のまとめ 9. 前半試験 (到達目標 1 の評価) 10. 安定性と安定判別法 11. デジタル PID 制御 12. 可制御性の定義と必要十分条件 13. 可観測性の定義と必要十分条件 14. 状態フィードバック制御 15. 後半試験 (到達目標 2 の評価)
【成績評価】 試験 80% (前半試験 40%, 後半試験 40%) 平常点 20% (小テスト等) で評価し, 全体で 60% 以上あれば合格とする。
【学習教育目標との関連】 (E) 専門分野 (電気電子システム) 100%
【教科書】 使用しない。
【参考書】 制御工学のテキストは数多い。離散時間システムを扱っているものならば, いずれでもよい。
【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】 久保(E棟3階北C-6, 656-7466, kubo@ee.tokushima-u.ac.jp)

生産管理

Production Control 非常勤講師・井原 康雄 1 単位

電気電子工学科 (昼間コース)

【授業目的】世界の市場で生き残る為に生産現場で何をしているかを理解する。

【授業概要】企業経営は経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で生産技術のキーとなる事項について講義する。講義計画に従い生産管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 生産管理 2. 生産計画 3. 原価管理 4. 経営システム(ISO) 5. IE(Industrial Engineering) 6. 品質管理とTQC 7. トヨタ生産方式 8. 中間及び最終レポート(生産管理のまとめ)

【成績評価】講義への取り組み状況、レポートの内容

【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 60%, (B) 社会情報 40%

【教科書】その都度提供する。

【参考書】市販の生産管理に関する書籍、「生産管理便覧」丸善

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】出席率 80%(12回)、レポート(中間と最終)の内容 20%

設計製図

Design and Drawing

教授・大西 徳生、助教授・森田 郁朗 1 単位

【授業目的】前半では、電気機器の設計の基本的な考え方を説明し、変圧器を例とした設計法を演習を通じて修得する。後半では、製図規格の考え方を説明し、具体的な機械製図、電気製図および電子製図をCADによる演習等を通じて製図の基本を修得する。

【授業概要】前半で、電気機器設計の概論と変圧器を例題とした設計演習を行い、後半で製図に関する各種製図規格と製図演習を行う。それぞれにレポート課題が出される。

【受講要件】「電気回路1」、「電気磁気学2」、「電気機器1,2」を履修していること。

【履修上の注意】授業の進行にあわせてレポート課題が課せられ、レポート提出内容は平常点として加点されるので、毎回の予習・復習に加えてレポート提出は欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. 機器設計の基礎(材料、構成法等)を理解すること。[前半]
2. 変圧器の基本的な設計ができること。[前半]
3. 機械製図の基礎を理解すること。[後半]
4. 電気用図記号の基礎を理解すること。[後半]

【授業計画】1. 導電、鉄心材料の種類と特性 2. 電気機器の装荷分配 3. 電気機器の寸法と容量 4. 変圧器基本設計例(鉄心寸法既知) 5. 変圧器の設計手順(一般仕様) 6. 設計変圧器の特性計算 7. 設計演習 8. 中間試験(到達目標1,2の評価) 9. 製図規格:規格化・標準化およびモジュール化 10. 機械製図1:図面様式、図面に用いる線、図記号 11. 機械製図2:寸法記入法、寸法公差記入法 12. 電気用図記号1:導体および接続部品、基礎受動部品、半導体、電気エネルギーの発生および変換 13. 電気用図記号2:開閉装置、計器、2値論理、アナログ素子 14. 製図演習 15. 期末試験(到達目標3,4の評価)

【成績評価】試験40%(中間試験20%、期末試験20%)平常点60%(レポート等)として評価し、前半と後半共に50%以上で合計が60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 20%, (E) 専門分野(電気エネルギー)50%, (F) 創生・自律 30%

【教科書】プリント、津村・大西著「JISにもとづく標準製図法」理工学社

【参考書】竹内・磯部著「電機設計大学講義」オーム社、「JIS 電気用図記号」日本規格協会

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】大西(E棟2階北B-1, 656-7456, ohnishi@ee.tokushima-u.ac.jp), 森田(E棟2階北B-3, 656-7451, morita@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】本授業科目に関するホームページ(<http://vanilla.ee.tokushima-u.ac.jp/jabee/DGN/>)

卒業研究

Undergraduate Work

電気電子工学科全教官 5 単位

【授業目的】従来のような講義を学習するというような受身の学習から1歩進め、考える力を育成するためのもの科目で一連の創成科目の仕上げとなるものである。また、大学院との共同研究等を通じてプロジェクト形式の研究能力も養われる。これらの研究過程の中で、教官と学生が意見交わすことによって科学技術に携わる技術者としての倫理的思考能力を養うことなど、幅広い教育を行うことを目的とする。

【授業概要】配属された研究室において、指導教官の下で電気電子工学に関する研究課題について研究し、学生自身が新しい工夫とかアイデアを自ら発想し、論文に書き上げることまでを指導する科目である。人数は教官当たり3~4名と小人数できめ細かな指導が行われる。研究テーマについては3年後期の終わり頃、電気電子工学科の4専門分野の物性デバイス、電気エネルギー、電気電子システム、知能電子回路の各講座に属する研究室および共通講座の物理から発表される。

【受講要件】卒業研究着手条件を満足すること

【履修上の注意】研究室配属は年度開始前に行われるので、配属研究室希望調査などの掲示に注意すること。研究室配属は配属時点での成績に従って配属される枠と成績によらないで配属される枠がある。研究室での受け入れ枠があるので、成績が上位のものでも、必ずしも第一希望の研究室に配属されるとは限らない。従って、重点的に学習したい分野の教科をおさえた上で、ある程度幅広い科目を履修しておくことを勧める。講義のない時間帯を計画的に用いて研究活動が行われ、日々の研究活動過程が重要視される。

【到達目標】

1. 研究活動を通して、技術者として社会への貢献と責任、倫理観について考える。
2. 研究に必要な文献等(外国語文献を含む)を調査・読解する能力を養う。
3. 自主的・継続的な学習能力を養う。
4. 研究を計画的に遂行し、的確に結果を解析し、考察する能力を養う。
5. 研究成果をまとめ、論文として記述する能力を養う。
6. 論文内容の適切なプレゼンテーションを行う能力を養う。

【授業計画】1. 卒業研究着手条件を満足した学生は、4月に各研究室に配属され、前後期を通じて研究を行う。2. 研究室で指導教員との定期的な研究打ち合わせや発表会を行う。3. 卒業論文を提出し、電気電子工学科の研究発表会で研究成果の発表を行う。

【成績評価】以下の条件により、可否を判定する。1. 指導教員により、400時間以上の研究を実施していると認められること。2. 各研究室で定められた形式でゼミなどにおける報告を行っていること。3. 定められた様式に従って卒業論文をまとめ、定められた期日までに提出すること。4. 卒業論文の内容を電気電子工学科の研究発表会で発表し、論文・発表に関する審査の結果が合格であること。

【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 10%, (B) 社会情報 20%, (C) 工学基礎 5%, (D) 専門基礎 10%, (E) 専門分野 35%, (F) 創成・自律 10%, (G) プロジェクト型研究 10%

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】3年生のときに卒業研究発表会を聞いておくこと。

知的所有権概論

Intellectual Property

非常勤講師・酒井 徹 1 単位

【授業目的】知的所有権制度を理解し、知的所有権の保護と制度の活用の重要性を各種の事例を基に修得する。

【授業概要】科学技術創造立国を目指す我が国において、知的所有権の保護と制度の活用が、行政・産業界・大学・研究所にとって不可欠であるとの共通認識を持つ必要性を説くとともに、知的所有権制度の概要と、その活用法を、企業の特許戦略、特許侵害事件などの事例を紹介しつつ講義し、学生が将来、企業・大学・研究所などへ進んだ場合に知っておくべき知的所有権に関する基礎知識の修得をはかる。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】2日間の集中講義であるために全時間の出席を要する。

【到達目標】

1. 知的所有権の概念についての理解を深める。
2. 特許法、商標法、意匠法、著作権法について理解する。

【授業計画】1. 知的所有権とは 2. 知的所有権制度の概要(特許・商標等) 3. 知的所有権制度の概要(意匠・著作権制度等) 4. 特許発明と特許権侵害(含む事例研究) 5. 知的所有権の管理とその活用(企業・大学・研究所) 6. 今後の研究開発と知的所有権のあり方 7. 試験(到達目標1および2の評価)

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを試験70%、講義への取り組み状況30%で評価し、平均で60%あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 50%, (B) 社会情報 50%

【教科書】特製テキストを用いる。

【参考書】中山信弘著「知的所有権」日刊工業新聞社、通産省特許庁編「これからは日本も知的創造時代」通商産業調査会

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】酒井(Tel:03-5600-2631, Fax:03-5600-2649)

通信応用工学

Applied Communication Engineering 教授・入谷 忠光 2 単位

【授業目的】実用化された通信システムの代表的な例をあげ、その目的と通信システムの解説を行う。

【授業概要】通信で用いられる電磁波と伝送路、主に無線通信システムの解説を行う。各種通信方式の復習とこれらを応用した例として、衛星通信、放送、携帯電話等の移動体通信等の各種システムの解説を行う。そして距離を測る例としてレーダシステムを解説する。

【到達目標】

1. 実際のアナログとデジタル通信システムの概要が理解できること
2. 電波を用いた数々のリモートセンシング方式が理解できること

【授業計画】1. 通信応用工学について 2. 電磁波について 3. 伝送路 4. アンテナ・レポート 5. アナログ通信方式について 6. デジタル通信方式について 7. 中間試験 8. 衛星通信システム 9. 放送システム 10. 移動体通信システム・レポート 11. レーダシステム 12. 測位・航法システム 13. 周波数の有効利用 14. 光通信システム 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、レポートの提出状況と内容、中間試験及び最終試験の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 20%, (E) 専門分野 (電気電子システム)80%

【教科書】藤本京平著「入門 電波応用」共立出版

【参考書】田崎三郎他著「通信工学」朝倉書店、アンテナに関して例えば、後藤尚久著 図説・アンテナ 電子情報通信学会

【対象学生】開講コースと同学科の夜間コース学生も履修可能

【連絡先】入谷(E棟3階北C-2, 656-7478, iritani@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「通信理論」「通信方式」の履修を前提にして講義を行う。通信方式の講義が終了すれば中間テストを行う。その後はレポートと最終試験を行うので毎回の予習・復習は欠かさず行うこと。成績評価に対する平常点と試験の比率は 3:7 とする。平常点には講義への参加状況、演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み、試験には中間試験及び最終試験の成績を含む。

通信方式

Communication Systems 教授・木内 陽介 2 単位

【授業目的】通信工学において音声、画像、データなどの信号を遠方にもどのようにして伝送するかということ学ぶ。それに用いられる具体的な通信方式、通信回路、通信機器について講義する。

【授業概要】3 年前期で学んだ「通信理論」を用いて、実際に通信を行うための具体的な方式を講義する。通信工学を通信方式により分類し、前半では放送等に用いられているアナログ通信方式を、後半ではデータ伝送等に用いられているデジタル通信方式を解説する。この講義で通信工学の具体的な体系を把握できることを目指している。

【受講要件】「通信理論」を受講しておいてほしい。

【履修上の注意】週 2 回講義を行う。教科書の分かりにくいところをプリントで補足する。

【到達目標】

1. アナログ通信方式を理解する。
2. デジタル通信方式を理解する。

【授業計画】1. アナログ通信の概要とその技術史 2. AM 通信方式 3. FM 通信方式 4. 変復調回路・レポート 5. アナログパルス通信方式 6. アナログ通信方式の雑音特性 7. 多重通信方式 8. 中間試験 9. デジタル通信の概要とその技術史 10. 帯域圧縮と伝送符号 11. パルス伝送と等化・レポート 12. デジタル変調方式 13. デジタル通信の雑音特性 14. 通信機器 15. 全体のまとめ 16. 定期試験

【成績評価】提出されたレポート、中間試験、定期試験の結果を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 20%, (E) 専門分野 80%

【教科書】田崎、美咲編「通信工学」朝倉書店、自作プリント

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】木内(E棟3階北C-4, 656-7475, kinouchi@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義では「通信理論」で学んだ結果を多く引用するので、忘れていた場合は必ず復習をして確認してほしい。また教科書の内容を補足し、例題、演習を載せたプリントを副教材として配布するので、自分で解き、質問はオフィスアワーを利用してほしい。レポート等による平常点と中間試験、定期試験による評価の比は 2:8 とする。

通信理論

Basic Theory of Electronic Communication

教授・木内 陽介 2 単位

【授業目的】情報化社会の中核技術の 1 つが通信技術であり、電気電子分野で広く活用される技術となっている。ここでは通信技術を正確に理解するための基礎となる理論を解説する。

【授業概要】信号を時間領域および周波数領域で解析するための理論、および信号伝送・処理のための手法について講義する。また信号を用いて情報伝送する観点からの基礎理論を講義する。

【受講要件】簡単な微分、積分、複素数および確率の基礎が理解できていることを前提とし、「電気回路 1, 2」「過渡現象」の内容を復習しておくことが望ましい。

【履修上の注意】週 2 回講義を行う。配布するプリントには理解を助ける例題が多く掲載されているので、自分で解いて力をつけてほしい。2 週間に 1 回程度、演習問題を宿題とする。

【到達目標】

1. 信号の時間領域、周波数領域での解析ができる。
2. 信号および情報伝送の基礎理論を修得する。

【授業計画】1. 複素フーリエ級数と信号解析 2. フーリエ変換による信号解析 3. フーリエ変換の性質と通信応用 4. インパルスを用いた信号解析 5. フーリエ変換の演習 6. パルスの不確定性原理と通信 7. 標準化定理と信号伝送・処理 8. 中間試験 (到達目標 1. の評価) 9. 通信路の伝送特性 10. 通信路の歪みとフィルター 11. パワースペクトル密度とその有用性 12. 確率と情報 13. エントロピーと情報伝送 14. 情報源符号化 15. 期末試験 (到達目標 2. の評価)

【成績評価】試験 80% (中間試験 40%, 期末試験 40%), 平常点 20% (レポート等) として評価し、全体で 60% 以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 35%, (E) 専門分野 (電気電子システム)65%

【教科書】自作プリント、島田・木内・大松著「わかる情報理論」日新出版

【参考書】田崎・美咲編「通信工学」朝倉書店

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】木内(E棟3階北C-4, 656-7475, kinouchi@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】さほど予備知識は必要としないが、新しい考え方、概念が出てくるので講義には必ず出席してほしい。図を描きながら分かりやすく説明する。またプリントには例題、演習問題が多く載せてあるので、自分で解き、実力をつけてほしい。

デジタル回路

Digital Circuits 助教授・橋爪 正樹 2 単位

【授業目的】コンピュータなどのデジタル電子機器に不可欠なパルス・デジタル信号を出入力する電子回路について基礎知識を習得する。

【授業概要】デジタル電子回路素子としてダイオード・トランジスタの特性・各種パルス発生・変換器と論理回路について述べる。

【受講要件】「アナログ電子回路」を受講していること。

【履修上の注意】「電気磁気学 1, 2」「電気回路 1, 2」「過渡現象」を理解していることを前提に講義する。丸暗記は不可。理解すること。

【到達目標】

1. 能動素子をデジタル電子回路素子として利用する方法を理解する。
2. パルス信号の発生原理を理解する。
3. 基本論理ゲート回路、記憶回路の動作原理を理解する。
4. 論理関数の合成法を理解する。

【授業計画】1. ダイオードのスイッチング特性 2. トランジスタのスイッチング特性 3. 波形変換回路 4. マルチバイブレータ 5. ブロッキング発振器 6. シュミット回路 7. 直線波発生回路 8. 中間試験 9. 論理数学と論理関数の標準展開 10. 論理関数の合成 11. 論理関数の単純化 12. 基本論理ゲート回路 13. 論理回路の性能 14. 期末試験 (到達目標 3, 4) 15. 基本記憶論理回路

【成績評価】試験 80% (中間試験 40%, 期末試験 40%), 平常点 20% (レポート等) として評価し、全体で 60% 以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 70%, (E) 専門分野 (知能電子回路)30%

【教科書】吉田典可「電子回路 II」朝倉書店

【参考書】小柴典居「パルスとデジタル回路」オーム社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

電気電子工学科 (昼間コース)

【連絡先】 為貞(E棟3階南D-1, 656-7472, tamesada@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】 本科目は知能電子回路関連科目のデジタル回路関係科目(コンピュータ回路, 集積回路2, 電子回路設計演習)の基礎となる重要な科目であるので, 必ず受講すること。

デジタル信号処理

Digital signal processing

助教授・森田 郁朗 2 単位

【授業目的】 近年, 発展の著しいデジタル信号処理の基礎とその応用の一部を, 講義とパソコンを使った簡単な実習(デモを含む)により修得する。

【授業概要】 デジタル信号処理の基礎から, スペクトル解析, デジタルフィルタとその設計法およびデジタル信号処理の応用までを, 講義と実習により理解し, デジタル信号処理技術の基礎を修得する。

【受講要件】 「システム基礎」「制御理論1, 2」および「通信理論」の講義を履修しておくことが望ましい。

【履修上の注意】 系統だった学習による理解が必要なので, 欠席せずに予習と復習を十分に行うこと。

【到達目標】

1. 離散時間信号の考え方とその変換を理解する。
2. スペクトル解析の基礎を修得する。
3. デジタル信号処理の手法とその応用例を理解する。

【授業計画】 1. デジタル信号処理の概要, A/D 変換, D/A 変換, DSP 2. 連続時間信号と離散時間信号, ラプラス変換と z 変換, エリアス効果 3. フーリエ変換と複素フーリエ級数 4. 離散フーリエ変換と有限離散フーリエ変換 5. 離散時間システム, 差分方程式, 伝達関数, 周波数特性 6. 第1回試験 7. 窓関数, スペクトル解析, 相関関数 8. 高速フーリエ変換(FFT) 9. 線形予測モデルと最大エントロピー法 10. 第2回試験 11. FIR デジタルフィルタの設計 12. IIR デジタルフィルタの設計 13. デジタル信号処理の応用 14. 適応フィルタ 15. 最終試験

【成績評価】 到達目標の3項目が各々達成されているかを試験80%, 平常点(レポート等)20%で評価し, 3項目の平均が60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】 (D) 専門基礎 40%, (E) 専門分野(電気電子システム)60%

【教科書】 岩田編著「デジタル信号処理」コロナ社

【参考書】 辻井監修「デジタル信号処理の基礎」電子情報通信学会(コロナ社), 伊達訳「デジタル信号処理(上),(下)」コロナ社など。

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 森田(E棟2階北B-3, 656-7451, morita@ee.tokushima-u.ac.jp)

電気回路1: 演習

Electrical Circuit Theory (I) and Exercise

教授・来山 征士

助教授・島本 隆 3 単位

【授業目的】 電気電子工学の重要な基礎科目として, 直流回路および交流回路の解析に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】 直流回路においてはオームの法則と2つのキルヒホッフの法則, 電圧源および電流源, 回路解析について学ぶ。交流回路においては正弦波交流電源や, 抵抗, インダクタおよびキャパシタの線形素子からなる回路の定常状態における解析をするため, 記号法と呼ばれる手法を学ぶ。さらに, 回路解析でよく利用される諸法則について学ぶ。

【受講要件】 「電気数学演習」の内容, 特に行列演算, ベクトル, 三角関数等が重要であり, これらの内容を復習しておくことが望ましい。

【履修上の注意】 週2回の講義時間があり, 1回は主として講義に, もう1回は主として演習に用いる。

【到達目標】

1. 直流電源, 抵抗素子とその直並列接続, オームの法則, キルヒホッフの法則, 回路解析手法, 重ね合わせの理を理解し, それらを用いて直流回路解析ができる。
2. 交流電源(正弦波電源), キャパシタとインダクタの素子特性, 記号法を用いた解析手順を理解し, それらを用いて交流回路解析ができる。また電力の求め方を理解している。
3. 等価回路, ブリッジ回路, 周波数特性, 整合等の回路解析に有用な諸定理を理解し, それらを回路解析に利用できる。

【授業計画】 1. 抵抗の素子特性, オームの法則, 直流電源, 抵抗の直並列接続と合成抵抗, 電力 2. キルヒホッフの電流則と電圧則 3. 節点解析・網目解析・混合解析の手順, 重ね合わせの理 4. 中間試験(到達目標1の評価) 5. 正弦波, 振幅, 角周波数, 位相, 瞬時値, 実効値, 交流電源 6. キャパシタの素子特性, インダクタの素子特性 7. 複素指数関

数, オイラーの公式, 複素数の実部と虚部, 複素抵抗 8. 記号法の解析手順, 複素インピーダンス, 記号法を用いた回路解析 9. 合成インピーダンス, キルヒホッフの法則・回路解析手法の交流回路への適用 10. 瞬時電力, 複素電力, 有効電力, 無効電力, 皮相電力, 力率 11. 中間試験(到達目標2の評価) 12. 線形性等の回路の性質, 交流回路の重ね合わせの理, 電力の重ね合わせ 13. テブナンの定理と等価回路, ノートンの定理と等価回路, Δ -Y 変換 14. ブリッジ回路と平衡条件, 定抵抗回路, 共振回路, 整合 15. 期末試験(到達目標3の評価)

【成績評価】 到達目標の3項目が各々達成されているかを試験80%, 平常点(演習レポート等)20%で評価し, 3項目平均で60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】 (C) 工学基礎 30%, (D) 専門基礎 70%

【教科書】 川上, 島本, 西尾共著「例題と課題で学ぶ電気回路-線形回路の定常解析-」コロナ社から出版予定(それまでは自作冊子を使用)

【参考書】 山口勝也 他著「詳解電気回路例題演習(1),(2)」コロナ社

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 来山(E棟3階南D-6, 656-7482, kitayama@ee.tokushima-u.ac.jp), 島本(E棟3階南D-5, 656-7483, simamoto@ee.tokushima-u.ac.jp)

電気回路2: 演習

Electrical Circuit Theory (II) and Exercise

助教授・島本 隆

助教授・西尾 芳文 3 単位

【授業目的】 電気電子工学の重要な基礎科目として「電気回路1: 演習」に引き続き, 相互結合素子, 2端子対回路, 3相交流回路, 分布定数回路の解析に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】 まず, 新たな回路素子として, 相互インダクタやジャイレータ等, 1次側と2次側の電圧・電流が相互に影響しあう回路素子の特性を学ぶ。そして, 1次側と2次側の電圧・電流の関係式を記述する2端子対回路の考え方を学ぶ。さらに, 3つの交流電圧源が印加された3相交流回路の解析方法, 素子定数の空間的な広がりや考慮した分布定数回路の解析方法について学ぶ。

【受講要件】 「電気回路1」の授業内容が基礎になった講義であるため, その内容を十分に復習しておくことが必須である。

【履修上の注意】 週2回の講義時間があり, 1回は主として講義に, もう1回は主として演習に用いる。

【到達目標】

1. 相互インダクタ・制御電源等の相互結合素子の特性を理解し, それらを含む回路を解析できる。2端子対回路の考え方を理解し, 1次側と2次側の電圧・電流の関係式を記述できる。
2. 対称3相交流電源の性質を理解し, その電源に対称あるいは非対称な3相負荷が接続された回路を解析できる。また3相交流回路の電力の求め方を理解している。
3. 素子定数の空間的な広がりを考慮した分布定数回路(特に伝送線路)を解析できる。また, 無損失等の様々な条件下での特性を理解し, それらを伝送線路解析に利用できる。

【授業計画】 1. 相互インダクタの素子特性と等価回路, 極性の扱い 2. 制御電圧源・制御電流源の扱い, 理想変成器の素子特性 3. ジャイレータの素子特性, 相互結合素子のまとめ 4. 2端子対回路の考え方, インピーダンス行列・アドミタンス行列の定義と求め方 5. 4端子行列(F行列)の定義と求め方, 基本回路のF行列と縦続接続 6. 相互インダクタ・理想変成器・ジャイレータのF行列と縦続接続, 直列接続, 並列接続 7. 中間試験(到達目標1の評価) 8. 対称3相電源の性質と Δ 型・Y型の接続, 対称3相負荷の接続と解析方法 9. 非対称3相負荷の接続と解析方法 10. 3相交流回路の複素電力と有効電力, 2電力計法の概念と求解法 11. 中間試験(到達目標2の評価) 12. 分布定数回路(伝送線路)の微小区間モデルと回路方程式, 伝搬定数と特性インピーダンス 13. 無損失線路・無ひずみ線路・無限長線路の条件, 伝送線路の電圧・電流・インピーダンス 14. 出力端短絡・開放・整合などの条件下での伝送線路の電圧・電流・インピーダンス 15. 期末試験(到達目標3の評価)

【成績評価】 到達目標の3項目が各々達成されているかを試験80%, 平常点(演習レポート等)20%で評価し, 3項目平均で60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】 (C) 工学基礎 10%, (D) 専門基礎 70%, (E) 専門分野(知能電子回路)20%

【教科書】 「電気回路1」で使用した教科書を引き続き使用する

【参考書】 山口勝也 他著「詳解電気回路例題演習(2),(3)」コロナ社

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 島本(E棟3階南D-5, 656-7483, simamoto@ee.tokushima-u.ac.jp), 西尾(E棟3階南D-7, 656-7470, nishio@ee.tokushima-u.ac.jp)

電気機器 1

Electrical Machines (I) 教授・大西 徳生 2 単位

【授業目的】電気機器の種類と基本原理および相互関係を体系的に把握させ、変圧器と誘導機について基本構造、基本原理を理解させ、電氣的等価回路から基本的な特性が導出させ現実の機器の基本を修得させる。

【授業概要】電気機器は電気・機械、電気・電気エネルギー間のエネルギー変換機器として産業分野で広く用いられている。この講義では、先ず各種電気機器の分類を行い、互いの関係等について説明する。その後、電気・電気エネルギー変換装置として交流電圧が高い効率で変換可能な変圧器について講述する。次に電気・機械エネルギー変換機器として安価で丈夫な動力源として広く用いられている誘導機について、主に商用電源を対象に話しを進めるが、インバータ制御法の基本についても簡単に述べる。

【受講要件】「電気回路 1, 2」, 「電気磁気学 2」を履修していること。

【履修上の注意】講義の中で、演習課題を出し、質問の正答者には平常点を加点するので毎回の予習・復習は欠かさず行うこと

【到達目標】

1. 変圧器の基本原理と基本動作および活用法が理解できること。
2. 変圧器の諸特性が計算できること。
3. 誘導機の基本動作および活用法が理解できること。
4. 誘導機の諸特性が計算できること。

【授業計画】1. 電気機械エネルギー変換と機器の歴史 2. 変圧器の原理と基本構造 3. 変圧器の基本式 4. 変圧器の等価回路とベクトル図 5. 変圧器の回路定数と電圧変動率 6. 変圧器の損失と効率 7. 変圧器と結線法各種変圧器 8. 中間試験 (到達目標 1, 2 の評価) 9. 誘導機の原理と基本構造 10. 回転磁界と誘導機の基本式 11. 誘導機の等価回路とベクトル図 12. 誘導電動機の基本特性 13. 誘導機の始動法 14. 誘導機速度制御法 15. 期末試験 (到達目標 3, 4 の評価)

【成績評価】到達目標が達成されているかを試験 80%(中間試験 40%, 期末試験 40%), 平常点 (ミニテスト, レポート等)20%で評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 10%, (D) 専門基礎 20%, (E) 専門分野 (電気エネルギー)70%

【教科書】中田・沖津編著「電気機器」朝倉書店

【参考書】難波江・金・高橋・仲村著「基礎電気機器学」, 「電気機器学」電気学会 (オーム社), 松井著「電気機器」森北出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大西(E棟2階北B-1, 656-7456, ohnishi@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】本授業科目に関するホームページ (<http://vanilla.ee.tokushima-u.ac.jp/jabec/MCH/>)

電気機器 2

Electrical Machines (II) 教授・鎌野 琢也, 助手・北條 昌秀 2 単位

【授業目的】回転電気機器のうち直流機と同期機について、構造・原理・基本特性について理解させ修得させる。

【授業概要】回転電気機器は、機械エネルギーと電気エネルギーとの間のエネルギー変換機器として産業分野で広く用いられている。本講義の前半部は直流機のうち主として電動機を、また、後半部では同期機のうち主に発電機について、構造・原理・基本特性を中心に講述する。

【受講要件】「電気回路 1, 2」を履修していること。また、並列して開講されている「電気機器 1」を受講していることが望ましい。

【履修上の注意】授業の進行に合わせて内容確認のための演習問題が適宜与えられる。レポート内容は平常点として加点するので、毎回の予習・復習に加えてレポート提出は欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. 直流機の原理・構造等の基本事項に加えて、基本特性が理解できること。
2. 同期機の原理・構造等の基本事項に加えて、基本特性が理解できること。

【授業計画】1. 直流機の定義・原理・構造 2. 直流機の誘導起電力と発生トルク 3. 励磁方式と直流機の種類 4. 電機子反作用と整流作用 5. 直流他励および分巻電動機の種類 6. 直流直巻電動機の種類 7. 直流電動機速度制御法 8. 中間試験 (到達目標 1 の評価) 9. 同期機の定義・原理・構造 10. 同期機の種類と特徴 11. 電機子巻線, 界磁巻線と集中巻線の誘導起電力 12. 巻線係数と巻線接続 13. 電機子反作用とベクトル図 14. 同期発電機の種類 15. 電圧変動率算定法 16. 期末試験 (到達目標 2 の評価)

【成績評価】前半部および後半部ともに試験 80%, 平常点 20%(レポート等)として評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 35%, (E) 専門分野 (電気エネルギー)65%

【教科書】中田・沖津編著「電気機器 I・II」朝倉書店

【参考書】野中著「電気機器 (I), (II)」森北出版他多数

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】鎌野(E棟2階北B-4, 656-7455, kmano@ee.tokushima-u.ac.jp), 北條(E棟2階北B-2, 656-7452, hojo@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】教科書章末問題を各自解しておくこと。

電気磁気学 1. 演習

Electromagnetic Theory (I) and Exercise 教授・大宅 薫
助手・川上 烈生 3 単位

【授業目的】真空中および誘電体中の静電気現象を取り扱う方法を理解し、それを応用できる力を修得する。

【授業概要】まず電気磁気学に必要なベクトル解析の基礎的事項について説明したのち、電界や電位の考え方から出発し、主に静電気現象の理解に重点をおいた講義を行う。必要な数学 (ベクトル解析, 関数, 微分・積分, 座標, 微分方程式) に関する知識はその都度与えることとし、その際、演習も含めてそれらを使えるように指導する。また、並行して電気磁気学 1 の内容に関する演習を行い、内容の理解を深めるとともに、応用力を養成する。

【受講要件】数学, 特に、ベクトル解析, 関数, 微分・積分, 座標の理解と応用力が必要となるので、これらに関して高校で習った内容を復習しておくことが望ましい。

【履修上の注意】1~2 回の講義の後、次週それに関する演習を行いレポートを課す。

【到達目標】

1. 電界と電位の考え方を理解し、真空中の電荷による電界と電位が計算できる。
2. ガウスの定理を用いて電界が計算でき、導体の性質と静電容量の考え方を理解する。
3. 誘電体の性質を理解し、様々なコンデンサの静電容量, 静電エネルギーと応力の計算ができる。
4. ポアソン方程式とラプラス方程式, 電気映像法による静電界の解析方法を理解する。電流界の考え方を理解し, 抵抗の計算ができる。

【授業計画】1. ベクトル解析の基礎 (3 週) 2. クーロンの法則, 電界と電気力線 (2 週) 3. 電位と等電位面 (2 週) 4. 第 1 回試験 (目標 1 の評価) 5. ガウスの定理 (3 週) 6. 導体と静電容量 (2 週) 7. 第 2 回試験 (目標 2 の評価) 8. 電気双極子と誘電体 (2 週) 9. 誘電体の境界条件と静電容量 (2 週) 10. 静電エネルギー (2 週) 11. 仮想変位の方法による応力の計算 (2 週) 12. 第 3 回試験 (目標 3 の評価) 13. ラプラス方程式とポアソン方程式 (2 週) 14. 電気映像法 (2 週) 15. 電流と抵抗 (2 週) 16. 第 4 回試験 (目標 4 の評価)

【成績評価】目標 4 項目が各々達成されているかを試験 80%, 平常点 (演習レポート)20%で評価し、4 項目平均で 60%あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 30%, (D) 専門基礎 70%

【教科書】小塚洋司著「電気磁気学 その物理像と詳論」森北出版

【参考書】ファインマン・レイトン・サイズ著 宮島龍興訳「ファインマン物理学 電気磁気学」岩波書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大宅(E棟2階南A-9, 656-7444, ohya@ee.tokushima-u.ac.jp), 川上(E棟2階南A-10, 656-7441, retsuo@ee.tokushima-u.ac.jp)

電気磁気学 2. 演習

Electromagnetic Theory (II) and Exercise 助教授・直井 美貴
講師・西野 克志 3 単位

【授業目的】電流により生じる磁気現象, 磁性体, 電磁波の基礎概念について理解する。

【授業概要】最初に電流によって真空中に生じる磁界に関する 2 法則の物理像を説明し, 様々な形状の回路を流れる電流が作る磁界の計算方法を修得する。また, 磁界が関係する応用上重要な, 磁性体, インダクタンスおよび電磁誘導現象についてその基礎概念を説明し, それぞれについて例解を行い, また演習問題を課すことにより諸量の計算方法にも習熟する。次に, 変位電流の概念からマクスウェル方程式を導出し, その解の一つとして電磁波があることを示し, その性質および伝搬について講義および演習を行う。

【受講要件】「電気磁気学 1」を理解していることを前提とする。

電気電子工学科 (昼間コース)

【履修上の注意】適宜,小テスト,レポート課題を課し平常点として評価する。

【到達目標】

1. 与えられた電流に対してこれより生じる磁界をアンペアの周回積分の法則またはビオ・サバールの法則を用いて計算できる。
2. 物質中の磁束密度,磁性体と磁界の関係を理解できる。
3. インダクタンスと電磁誘導の基礎概念が理解できる。
4. マクスウェル方程式の導出と電磁波の伝搬の様子が理解できる。

【授業計画】1. 磁束密度とビオ・サバールの法則 2. アンペアの周回積分の法則 3. 電流によりつくられる各種磁界 4. 電流に作用する力 5. 荷電粒子に作用する力 6. 磁性体 7. 磁界と磁性体 8. 磁気双極子 9. 磁性体に作用する力 10. 磁気回路 11. 電磁誘導 12. 相互誘導・自己誘導 13. 変位電流とマクスウェル方程式・ポインティングベクトル 14. 電磁波 15. 媒質中での電磁波 16. 試験

【成績評価】到達目標が達成されているかを試験 75%,平常点 25%(レポート,小テストなど)として評価し,全体で60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(C)工学基礎 30%,(D)専門基礎 70%

【教科書】山村泰道・北川盈雄著「電磁気学演習〔新訂版〕」サイエンス社,小塚洋司著「電磁気学」森北出版

【参考書】後藤憲一・山崎修一郎著「詳解電磁気学演習」共立出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】直井(E棟2階南A-4, 656-7447, naoi@ee.tokushima-u.ac.jp), 西野(E棟2階南A-5, 656-7464, nishino@ee.tokushima-u.ac.jp)

電気磁気学 3

Electromagnetic Theory (III) 助教授・富永 喜久雄 2 単位

【授業目的】電磁現象を記述する基礎方程式である Maxwell 方程式を解説し,これより電気と磁気に関する現象を統一的に説明するとともに,電磁波・光波の諸性質を理解する。

【授業概要】マクスウェル方程式から導かれる電磁現象の基礎法則を説明し,マクスウェル方程式の理解をすすめる。また,電磁波のエネルギー保存則を導き,電磁波により伝送されるエネルギーについて説明する。誘電率の異なる誘電体の境界面での電磁波の振る舞いを説明し,電磁波の反射率および屈折率を計算する方法について述べる。導波管内での電磁波のモードについて説明し,導波管内での電磁波の伝播特性について述べる。アンテナからの電磁波放射原理を説明し,その放射特性について述べる。その後,種々の分野における電磁現象について述べる。

【受講要件】「電気磁気学 1, 2」を履修していること。

【履修上の注意】短期間での集中した授業であるため,各回の授業内容を理解して次に進むようにする。そのためにオフィスアワーを積極的に利用すること。

【到達目標】

1. Maxwell 方程式の物理的意味を理解し,静的・動的電磁現象を統一的に理解する。
2. 電磁波の伝播に関する基礎事項を理解する。

【授業計画】1. div, rot の定義と物理的意味,電気磁気学での役割 2. 変位電流の発見とその意味 3. マクスウェルの方程式(微分形と積分形)の意味するところ 4. ポインティングベクトル(1) 5. ポインティングベクトル(2) 6. 中間テスト(到達目標 1 の評価) 7. 波動方程式と電磁波 8. 平面波の反射と屈折(s 偏光と p 偏光,スネルの式,反射率の式) 9. 導体内の電磁界 10. 再度,ベクトル解析,曲線座標系でのマクスウェル方程式 11. 静的な場とマクスウェル方程式 12. 波動の伝搬,反射 13. 分布定数線路と整合 14. 電磁界のポテンシャル表示 15. 波源からの電磁波の放射と回折現象 16. 期末試験(到達目標 2 の評価)

【成績評価】試験 60%(中間試験 30%,期末試験 30%),平常点 40%(レポート等)として評価し,全体で60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(C)工学基礎 30%,(D)専門基礎 70%

【教科書】藤田広一著「続:電磁気学ノート」コロナ社

【参考書】小塚洋司「電気磁気学:第 13 章」(電気磁気学 1, 2 の教科書),森北出版;藤田広一「電磁気学ノート」コロナ社;ファインマン,レイトン,サンズ著,宮島龍興訳「ファインマン物理学,電磁気学」および戸田盛和訳「ファインマン物理学,電磁波と物性」いずれも岩波書店およびその英語版 R.P.Feynmann, R.B.Leighton and M. Sands, Lectures on Physics, Vol.2, Addison-Wesley publishing company.

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】富永(E棟2階南A-6, 656-7439, tominaga@ee.tokushima-u.ac.jp)

電気施設管理及び法規

Management and Laws Associated with Electrical Equipments

非常勤講師・小長井 山治 1 単位

【授業目的】電気施設管理を行うにあたり必要となる電気事業法を理解させるとともに関連の法律,政省令についても内容を解説する。また,電力自由化等,最近の制度改正の動きについても解説する。

【授業概要】電気事業法の目的,定義並びに電気施設管理に係る規程を解説し,電気施設の工事・維持・運用に必要な法律の知識の知識力を養成するとともに,エネルギーの管理方法についても解説を行い,知識の養成を図る。

【授業計画】1. 電気事業法概要 1 (法制定の経緯及び歴史) 2. 電気事業法概要 2 (電力自由化等最近の法改正内容) 3. その他電力関係法律の概要(電気工事士法,電気工事業法,省エネ法等) 4. 電気施設管理と電気事業法 5. 省エネ及び新エネルギー 6. レポート,内容解説

【成績評価】講義への参加状況,レポートの内容を総合判断して評価する。

【学習教育目標との関連】(A)教養・倫理 30%,(B)社会情報 30%,(D)専門基礎 40%

【教科書】特に指定しない。適宜に資料を配布する。

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】伊坂(E棟2階北B-9, 656-7459, isaka@ee.tokushima-u.ac.jp)

電気数学演習

Mathematics for Electrical and Electronic Engineering

教授・木内 陽介,助教授・島本 隆 1 単位

【授業目的】電気電子工学の大部分は数式を用いて記述されている。したがって,電気電子工学を学ぶためには数学を理解し,その基礎知識を持っておくことが必須である。この講義では特に,1年後期より始まる必修科目の電気回路 1・演習を学習するために必要な数学の基礎を解説する。

【授業概要】高校で学習した数学のうち,特に電気電子工学で必要となる事柄(2次関数,三角関数,微分,積分)を復習し,さらに,電気回路を学習する上で基礎となる行列,ベクトル,複素数,指数関数,三角関数,正弦波などを講義する。

【受講要件】高校で学習した数学の内容を復習しておくことが望ましい。

【履修上の注意】講義の第 1 週に高校数学の復習テストを行い,その成績をもとに本来のクラスとは異なる 2 つの能力別クラスに分けて講義と演習を行う。講義中はいつでも復習できるように,高校数学の教科書を手元に置くことを勧める。

【到達目標】

1. 高校で学習した数学のうち,特に,2次関数・三角関数・微分・積分を十分理解し,それらを用いた種々の問題を解くことができる。
2. 電気回路の基礎となる数学,特に,行列・ベクトル・複素数・正弦波等を理解し,それらに関する問題を解くことができる。

【授業計画】1. 高校数学の復習テスト(能力別の 2 クラスを編成) 2. 高校数学の復習(2次関数;数 I) 3. 高校数学の復習(三角関数;数 II) 4. 高校数学の復習(微分法;数 II) 5. 高校数学の復習(微分法的应用;数 II, III) 6. 高校数学の復習(積分法;数 II, III) 7. 中間試験(到達目標 1 の評価) 8. 1次関数と行列 9. 行列式と連立方程式 10. ベクトルと行列 11. 複素数と複素平面 12. 複素指数関数と三角関数 13. 正弦波,位相,実効値,合成 14. 複素正弦波 15. 期末試験(到達目標 2 の評価)

【成績評価】到達目標の 2 項目がそれぞれ達成されているかを試験 80%,平常点(演習レポート等)20%で評価し,2 項目平均で 60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(C)工学基礎 70%,(D)専門基礎 30%

【教科書】自作冊子「川上著:電気数学・演習講義ノート」を授業始めに配布

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】木内(E棟3階北C-4, 656-7475, kinouchi@ee.tokushima-u.ac.jp), 島本(E棟3階南D-5, 656-7483, simamoto@ee.tokushima-u.ac.jp)

電気電子工学基礎実験

Electrical and Electronic Engineering Elementary Laboratory

教授・来山 征士,大野 泰夫,助教授・富永 喜久雄

講師・西野 克志,助手・服部 敦美,川上 烈生,敖 金平,宋 天

1 単位

電気電子工学科 (昼間コース)

【授業目的】実験を通して、電気磁気および回路の現象を、電気磁気学や電気回路の知識を用いて解釈・理解できるようにすると共に、測定記録機器の取扱方法を修得し、実験結果を的確な技術報告書としてまとめる能力を身につける。

【授業概要】1. 実験の目的・意義、実験における安全と環境対策、データの取扱い、レポートやプレゼンテーションの作成、に関する講義。2. 各実験題目の解説。3. 下記4 題目 a~d の中から、指定された3 題目を行う。なお、指定題目は、細かくは各人ごとに異なるので注意のこと。(a) ソレノイドのつくる磁界と磁性体による影響をさぐりコイル法により測定する。(b) 交流ブリッジを用いて R, L, C を測定する。(c) 共振回路を設計し、直列共振回路および相互誘導により結合した回路における共振現象を測定する。(d) R, L, C を含む直列回路を設計し、電圧印加時の過渡現象を観測する。4. 実験データの整理、報告書の作成、結果の報告の仕方について学ぶ。

【受講要件】「電気磁気学 1, 2」「電気回路 1, 2」「過渡現象」を履修していること。

【履修上の注意】実験は班に分かれて、準備された題目の中から実施予定表で割り当てられた3 題目を行う。実験用ノート、グラフ用紙、電卓を用意し、予習しておくこと。割り当てられた題目について、実験を行うに、データを整理し、レポートを作成・提出し、かつ口頭試問を受けなければならない。口頭試問にはプレゼンテーションを含む場合がある。

【到達目標】

1. 目的、原理および方法を理解すること。
2. 器具・装置を正しく操作でき、必要なデータを取れること。
3. データを表や図に整理して、結果を吟味し、考察を加え、独自のレポートにまとめられること。
4. レポートの内容についてプレゼンテーションできること。

【授業計画】1. 実験の目的・意義などに関する講義(1 週) 2. 全実験題目の解説(1 週) 3. 電流による磁界(3 週) 4. 交流ブリッジによる R, L, C の測定(3 週) 5. 共振特性(3 週) 6. 過渡現象波形(3 週) 7. 試験(2 週) 8. ただし、各題目3 週の内訳は、実験に1 週、データの整理・レポートの作成に1 週、口頭試問に1 週とする。試験は上記の1. 講義、2. 解説に関して計2 回行う。

【成績評価】各題目について、すべての到達目標が達成されている度合いを、レポート40%、口頭試問40%、試験20%として評価し、すべての項目において60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 50%、(E) 専門分野 30%、(F) 創成・自律 20%

【教科書】電気電子工学科教官による指導書「電気電子工学基礎実験」

【参考書】各実験題目に関する参考書は上記教科書に記載されている。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】山本(E棟3階南D-6, 656-7482, kitayama@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】レポートは内容が不十分の場合、再提出となることがある。また、やむを得ず欠席した場合は、追実験を行う必要がある。

電気電子工学実験 1

Electrical and Electronic Engineering Laboratory (I)

教授・鎌野 琢也、助教授・森田 郁朗、下村 直行、安野 卓
助教授・川田 昌武、助手・北條 昌秀 1 単位

【授業目的】各テーマに関する実験および口頭試問により、各実験の基礎的な事項や物理的な意味を理解し、実際の物としての理解を深め、その考え方を修得する。また、実験方法と結果の整理方法についても学修する。

【授業概要】電気機器関係および電力関係の基礎的な実験として、下記の6 テーマについて、実験内容・実験方法・実験結果を検討・考察し、各テーマの講義内容と合わせて理解をより一層深める。なお、実験実施日の前の週に、各テーマごとの予習事項について、自ら考え理解しているかに関して、指導教官から口頭試問を受ける。また、実験実施日の次の週に、各テーマごとの実験結果およびその考察に関して、指導教官からの口頭試問を受ける。

【受講要件】「電気磁気学 2」「電気回路 1, 2」「過渡現象」「電気機器 1, 2」を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】実験前に必ずレポートの[実験内容、原理および実験方法]の項を記述しておくこと。また、実験実施日の前後の週にある口頭試問に対して、十分に予習復習をしておくこと。

【到達目標】

1. 各実験テーマについて、次の4 つの評価目標が達成されることを目標とする。

2. 各テーマに対する予習・復習を通して、自ら調べ、自ら考え理解する力をつけること。
3. 実験対象の特性および原理を理解すること。
4. 計画的かつ安全に実験を実行し、実験対象の特性の検証に必要なデータの収集ができること。
5. 図・表による実験方法および実験結果の表現法を修得し、実験内容に基づいた理論的なレポートとしてまとめられること。

【授業計画】1. 直流他励電動機に関する実験: 直流他励電動機の無負荷飽和特性試験および実負荷特性試験を行う。これより、直流他励電動機の基礎特性を理解し、さらに電圧制御時および界磁制御時の速度-トルク特性の違いも把握する。2. 変圧器および誘導電動機に関する実験: 変圧器の無負荷試験・短絡試験・負荷試験および誘導電動機の無負荷試験・拘束試験を行い、両者の試験結果の相違点の物理的意味を考える。さらに、試験結果から両者の等価回路の回路定数を導出し、これより特性計算を行いその基礎特性を把握する。3. サイリスタ整流回路に関する実験: サイリスタ単相全波整流回路について、位相制御特性を実測し理論値と比較検討する。これより、位相制御特性および瞬時値と平均値・実効値の考えを理解する。また、動作波形の観測から整流回路動作の理解を深める。4. 伝達関数の測定に関する実験: パソコンを使用して、RC 回路および直流他励電動機の伝達関数を、周波数応答法および過渡応答法により求める。これより、伝達関数の基礎的な事項を理解するとともに、非線形摩擦や電機子インダクタンスの影響を考える。また、パソコンを計測に使用する場合の注意点や方法なども理解する。5. 模擬送電線に関する実験: 短距離送電線の電圧降下と、電力円線図に関する実験を行う。交流理論の基礎を再確認するとともに、電力円線図の作成を通して送電線による電力輸送に関して理解を深める。6. 模擬配電線に関する実験: 単相三線式配電方式についての理解を深める。

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを各レポートと口頭試問の成績を合わせて100%で評価し、全体平均60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 35%、(E) 専門分野(電気エネルギー)65%

【教科書】実験のテキスト(プリント)

【参考書】各テーマの内容に関係する講義の教科書および電気工学ハンドブック(オーム社)など。

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】森田(E棟2階北B-3, 656-7451, morita@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】レポートの内容によっては再提出を求められることがある。なお、電気主任技術者の資格申請に必要な科目であり、将来、本資格の取得を考えている者は受講し単位を修得しておく必要がある。

電気電子工学実験 2

Electrical and Electronic Engineering Laboratory (II)

教授・伊坂 勝生、助教授・安野 卓、助手・服部 敦美、北條 昌秀
1 単位

【授業目的】実験を通して、電気電子応用技術に関する理解を深めると共に、技術者として安全管理に配慮した実験機器及び測定機器の取扱い方法を修得し、実験結果を的確な技術報告書としてまとめる能力を身につける。

【授業概要】電気機器、パワーエレクトロニクス、高電圧、照明電熱、計測、制御といった専門的な内容について、基礎知識を実験的に検証するとともに、その応用技術に関する理解を深める。受講者はグループ毎に上記分野に関する実験を行い、各自レポートを作成提出する。

【到達目標】

1. 計画的かつ安全に実験を遂行し、実験対象の特性の検証に適切なデータ収集ができること。
2. 実験対象の特性及び原理を理解すること。
3. 理解した事項を実験結果に基づいた理論的なレポートとしてまとめられること。

【授業計画】1. 直流機ドライブに関する実験: IGBT チョッパ回路による直流電動機速度制御システムに対し、チョッパ回路動作の確認および直流電動機速度制御特性を測定する。2. 交流機ドライブに関する実験: インバータ回路による誘導電動機速度制御システムに対し、PAM インバータ回路動作の確認および誘導電動機速度制御特性を測定する。3. 白熱電球と蛍光灯の配光曲線: 白熱電球および蛍光灯の配光曲線を測定し、配光曲線の意味および測定原理、また各器具の構造・性質を理解する。またエネルギーの有効利用や視環境について検討する。4. 各種ギャップの直流放電特性: 球対球ギャップを用いた直流高電圧の測定を行う。針対平板電極間によりコロナ放電特性、絶縁耐力ならびにフラッシュオーバー特性を測定する。これらを通し、直流高電圧に対する理解を深める。5. 液位のPID 制御: タンク系に対して、オンオフ制

電気電子工学科 (昼間コース)

御により生ずるリミットサイクルを調べ、周波数応答法および過渡応答法に基づいて、PID 制御を行う。6. 電磁流量計; 流体の流速・流量の測定に広く使われている電磁流量計に対して、その出力信号が、管内水流の平均流速と励磁電流にどのように依存して変わるかについて実験する。励磁は低周波矩形波と正弦波交流の二通りにより行う。

【成績評価】必要条件として、すべての実験に出席し、すべての実験課題についてのレポートを提出し、それらすべてが受理されることが必要である。その上で、実験課題毎に到達目標の3項目についてレポート100%で総合的に評価し、すべての実験課題について60%以上であれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(E) 専門分野 (電気エネルギー、電気電子システム)70%、(F) 創成・自律 30%

【教科書】本科目担当教官の作成するテキスト

【参考書】各実験内容の対応する専門科目の教科書がこれにあたる。

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】北條(E棟2階北B-2, 656-7452, hojo@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】レポートの内容によっては再提出を求められることがある。なお、電気主任技術者の資格申請に必要な科目であり、将来、本資格の取得を考えている者は受講し単位を修得しておく必要がある。

電気電子工学実験 3

Electrical and Electronic Engineering Laboratory (III)

講師・芥川 正武、四柳 浩之、助手・川上 烈生、敖 金平 1 単位

【授業目的】実験方法や理論の基礎に関する理解を深める。各種電子計測機器の取り扱い方法を取得する。技術ドキュメントの作成に慣れる。

【授業概要】より専門的な実験課題を取り扱う。その範囲はアナログ電子回路、デジタル電子回路、マイクロ波・光を使った計測回路・通信回路に関するものである。これら科目の現象を実験を通して確認するとともに、その理解を深める。受講者はグループに別れ、課題になった実験を行い、各自実験のレポートを作成提出する。

【到達目標】

1. 各実験テーマについてそれぞれ下記を目標とする。1) 正弦波発振回路を設計・製作できる能力の養成および動作原理の理解 2) 能動フィルタを設計・製作できる能力の養成および動作原理の理解 3) 変復調回路の動作原理の理解 4) A/D 変換回路、D/A 変換回路の動作原理の理解 5) マイクロ波計測の基礎原理の理解およびマイクロ波デバイスの設計技術の獲得 6) C-V(容量-電圧)法を用いた半導体の不純物分布測定に関する測定原理の理解および測定技術の獲得
2. 実験課題の現象とその物理的意味を理解する
3. 実験機器を正しく操作できる
4. 作図、作表を含め、技術ドキュメントを作成できる

【授業計画】1. 正弦波発振回路: 正弦波を発生する正弦波発振回路の設計・製作を行い、その回路の動作原理を理解する。2. フィルタ回路: 能動フィルタ回路の設計・製作を行い、その回路の動作原理を理解する。3. 変復調回路: 「変復調回路」の各種特性を測定し、変復調回路の動作原理とその特性について理解する。4. A/D/D/A 変換回路: アナログ信号をデジタル信号に変換する「A/D 変換回路」、デジタル信号をアナログ信号に変換する「D/A 変換回路」の各種特性を測定し、それらの動作原理について理解する。5. マイクロ波に関する実験: クライストロンを用い、その発振特性を測定することにより、マイクロ波の周波数および電力の測定法を理解する実験、あるいは、半導体マイクロ波デバイスの設計技術を取得するための計算機実験を行う。6. C-V 法による半導体不純物分布の測定: C-V(容量-電圧)法を用いた半導体の不純物分布測定に関する実験を行い、IC チップの扱い方、測定装置の使い方、測定原理を勉強する。

【成績評価】実験課題ごとに到達目標の4項目が達成されているかをレポート100%で総合的に評価し、すべての実験課題について60%以上であれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(E) 専門分野 (電気電子システム、知能電子回路、物性デバイス)30%、(F) 創成・自律 70%

【教科書】本科目担当教官の作成するテキスト

【参考書】各実験内容の対応する専門科目の教科書がこれにあたる

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】四柳(E棟3階南D-3, 656-9183, yanagi4@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】レポートの内容によっては再提出を求められることがある。なお、電気主任技術者の資格申請に必要な科目であり、将来、本資格の取得を考えている者は受講し単位を修得しておく必要がある。

電気電子工学創成実験

Electrical and Electronic Engineering Design Laboratory

教授・入谷 忠光、助教・橋爪 正樹、直井 美貴、講師・大家 隆弘

講師・西野 克志、四柳 浩之、芥川 正武 1 単位

【授業目的】半導体デバイスの作製、半導体デバイスの応用領域となるアナログ電子回路とデジタル回路の設計と製作を行い、半導体デバイスからその応用回路までの電子工学に関する専門分野間の関係をつかむと共に、半導体デバイス、アナログ電子回路、デジタル回路に関する理解を深める。

【授業概要】半導体 pn 接合発光ダイオードの試作、そのデバイスの入出力特性の測定と回路モデルの作成、モデルを用いたアナログ電子回路設計、設計したアナログ電子回路の試作、試作したアナログ電子回路の作製と検査を行う。また、アナログ電子回路の基本機能ブロックであるオペアンプ回路とその IC を用いた応用回路の特性を測定する。さらに、半導体デバイスのデジタル回路への応用を理解するためにデジタル回路に対する設計・製作を行う。

【受講要件】「アナログ電子回路」、「デジタル回路」、「アナログ演算工学」、「半導体工学」を受講していることが望ましい。

【履修上の注意】実際の実験実施日以前に、担当教官から実験内容の説明を受ける。実験実施前日までに実験方法や原理等に関するレポートを提出すると共に、実験実施日までに実験回路や被検試料等を準備する。実験実施後、6日以内に実験結果を整理し、考察を加えた実験報告書を担当教官まで提出する。実験実施日の次の週に口頭試問を受ける。本実験では、実験テーマが同一であっても、毎週得られる結果は異なるので、実験結果に関しては十分な考察を加えること。

【到達目標】

1. 半導体デバイスの試作とその試作したデバイスの特性評価を通じて、半導体プロセスの基本的原理の理解し、プロセス上の問題点の改善策の提起能力を養う。またデバイスの基本動作原理を理解する。
2. 半導体デバイスの入出力特性から得られる回路モデルを用いたアナログ電子回路設計法を理解し、設計した回路の作製とその特性測定を通して、アナログ電子回路のものの作りを体験する。
3. デジタル IC の動作特性を理解し、FPGA プログラミングによる論理回路合成を通してデジタル回路設計手法を習得する。

【授業計画】1. 半導体を用いた発光・受光素子の試作とその特性評価 (4週) 2. 光通信アナログ電子回路の設計・製造・検査 (4週) 3. デジタル IC の静特性、動特性の測定実験および FPGA プログラミング (4週)

【成績評価】定期試験は行わず、提出レポートと口頭試問で評価する。すべての実験に出席し、すべての実験テーマについてレポートを提出し、各実験テーマそれぞれについて、レポートと口頭試問の総合評価点が60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(E) 専門分野 40%(物性デバイス 15%、電気電子システム 10%、知能電子回路 15%)、(F) 創成・自律 60%

【教科書】各テーマ実施時にプリント等を配布する。

【参考書】アナログ電子回路、デジタル回路、アナログ演算工学、半導体工学で使用した教科書と参考書。その他、適宜、実験内容説明中に紹介する。

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】直井(E棟2階南A-4, 656-7447, naoi@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】定期試験は行わず、レポートならびに口頭試問の成績で評価する。

電気電子工学特別講義 1

Special Lectures on Electrical and Electronic Engineering (I)

電気電子工学科教官、非常勤講師 1 単位

【授業目的】企業の第一線で活躍している卒業生が、経験談等を直に学生に講義することによって、学生の勉学意欲を喚起する。

【授業概要】卒業生の取り組んでいる仕事分野に関しての技術動向の紹介や、取り組み姿勢、考え方を述べると共に、企業の技術者に求められること、企業活動及び企業倫理に関する内容 (省エネルギー、環境・エネルギー・リサイクル、製造物責任法:PL 法) 等を講義する。

【履修上の注意】時間割通りではなく、企業から来られる講演者の都合により、不定期に行われるので、掲示に十分注意しておくこと。なお、各講演時間の終わりに、講演内容に関しての内容や意見を求めるレポートの提出が求められる。

【到達目標】

1. 電気電子工学の先進的な技術動向の一端を知る。
2. 卒業生の成功談、失敗談等の経験談の中から現在の活躍状況に到達できた過程を考える。
3. 社会において、技術者として何が重要であるかを知る。
4. 大学において、学んでおくべき重要な点は何であるかを知る。
5. 社会における電気電子工学の役割や技術者の責任・倫理についての考え方を知る。

電気電子工学科 (昼間コース)

【授業計画】1. 毎年、企業の第一線で活躍している卒業生を講師として招き、活躍している分野の先端技術等について、幅広い講義や講演会が企画される。履修上の注意にも述べたが、企業から来られる講演者の都合により、不定期に行われるので、開催通知の掲示に十分注意しておくこと。

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを、授業への参加状況 50%、レポート内容 50%で評価し、全体で 60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 20%、(B) 社会情報 50%、(E) 専門分野 10%、(F) 創成・自律 20%

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

電気電子工学特別講義 2

Special Lectures on Electrical and Electronic Engineering (II)

電気電子工学科教官、非常勤講師 2 単位

【授業目的】その分野の学内外の第一人者によるホットな研究情報や成果・技術動向の講義を、直接受けることによって通常の講義とは異なった刺激を受け、より視野を広げることが目的とする。

【授業概要】学外から電気電子工学分野の複数の専門家を招き、最先端の技術トピックを講義する。この講義を通して、先進的な技術の一端を理解するとともに、これまでに習得してきた専門科目の活用の実践を学習する。また、電気電子技術者としての必要な考え方、心構えについても触れる。

【履修上の注意】時間割通りではなく、企業から来られる講演者の都合により、不定期に行われるので、掲示に十分注意しておくこと。なお、各講演時間の終わりに、講演内容に関しての内容や意見を求めるレポートの提出が求められる。

【到達目標】

1. 電気電子工学の先進的な技術動向の一端を知る。
2. 先端的技術を支える周辺の専門知識技術等の重要性を知る。
3. 第一人者による専門家の技術開発に取り組む考え方をを知る。
4. 社会における電気電子工学の役割や技術者の責任・倫理を自覚する。

【授業計画】1. 毎年、講師によって内容が異なるが、基本的には電気電子工学科の 4 つの講座の研究室から申請された講師によって講演が行われるので、電気電子工学全般にわたる幅広い分野における最先端の技術トピックの講義講演会が企画される。履修上の注意にも述べたが、企業から来られる講演者の都合により、不定期に行われるので、開催通知の掲示に十分注意しておくこと。

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを、授業への参加状況 50%、レポート内容 50%で評価し、全体で 60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 20%、(B) 社会情報 50%、(E) 専門分野 20%、(F) 創成・自律 10%

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

電気電子工学入門実験

Electrical and Electronic Engineering Laboratory (Intr.)

教授・大西 徳生、助教授・橋爪 正樹、講師・西野 克志、芥川 正武
助手・宋 天、北條 昌秀 1 単位

【授業目的】(1) 電気電子工学科での学習の入り口として、教官および学生相互のコミュニケーションをはかるとともに、目的意識を持たせ、大学生としての学習生活に慣らせる。(2) 電気電子工学学科における研究室紹介と研究室訪問を通じて 学科での研究活動の概要を紹介する。(3) 電気電子工学の初学者に特別な専門知識を必要とせず基礎的なことから先端技術まで幅広く体験学習させ、電気電子工学に興味を抱かせる。(4) 入学後の早い段階で、知的活動への動機づけを高め、科学的な思考法と適切な表現能力を育てる。

【授業概要】(1) クラス担任を中心に、教務委員、学生委員を交えて討論による双方向的学習によって、入学時に直面する学習方法の問題点を解決する。(2) 電気電子工学に興味を抱かせることを念頭に、電気電子工学科を構成する物性デバイス、電気エネルギー、電気電子システムおよび知能電子回路の 4 大講座分野の研究活動の概要を紹介した後、各講座に関する基礎から先端技術まで幅広く取り混ぜて体験学習形式で実施する。

【履修上の注意】大学生としての生活および学習活動全般にわたるガイダンスと電気電子工学科でどのような研究が行われているか、また基礎的な実験で電気電子工学に興味を抱かせるなどの多くのプログラムが組まれているので 毎回の出席は欠かせない。

【到達目標】

1. 大学における学びのしくみとルールや履修方法 学生生活等の基本を理解させる。
2. 工学倫理の概念とエンジニア教育に対する必要性を認識させる。

3. 知的体験学習を通じて電気電子工学に興味を抱かせる。

4. 知的活動への動機づけを高め、科学的な思考法と適切な表現能力を育てる。

【授業計画】1. 電気電子工学科とは 2. 電気電子技術者になるには: 専門教育科目の履修方法 3. 電気電子技術者の倫理と語学力の意義 4. 電気電子工学科の研究室紹介 5. 研究室訪問 6. 水溶液から結晶をつくる: 結晶成長の基礎と光物性について考える (2 週) 7. 電動機の組立: 電動機を組み立て、回転原理を考える (直流電動機) 8. 電動機の組立: 電動機を組み立て、回転原理を考える (交流電動機) 9. パソコン組立: パーツから組み立て、ソフトをインストールして動かせる (2 週) 10. 電子回路工作: 電子回路部品を使って電子回路を試作し、動作を確かめる (2 週) 11. 体験実習内容に関する演習課題と実施方法、レポートの作成 (2 週)

【成績評価】興味を抱いた分野の演習課題 2 題のレポートについてそれぞれ配点 50%、全体を 100%で評価し、60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 10%、(B) 社会情報 20%、(D) 専門基礎 50%、(F) 創成・自律 20%

【教科書】徳島大学工学部導入教育テキスト「学びの技」、プリント等

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】1年クラス担任

電気電子工学輪講

Electrical and Electronic Engineering Seminar

電気電子工学科教官 2 単位

【授業目的】学部における授業は多人数を対象とする講義形式が大半であるが、本科目は、卒業研究で配属された研究室において、比較的小人数を対象としたゼミ形式で行われる授業である。内容は配属された研究室により異なるが、研究内容に関連した専門分野の英文テキストを、教官や大学院生と共に輪読する形式で進められることが主である。この輪読を通じて、指導書に書かれている内容や表現法・専門用語を学び、専門英語の読解力を養うとともに、読解した内容のプレゼンテーションについても訓練させることを目的とする。

【授業概要】配属された研究室において、指導教官から与えられた電気電子工学 (主としてその研究室の専門分野) に関する英文テキストを、研究室で定めた時間帯において輪読する。本科目はゼミ形式で行われ、学生の発表内容について、指導教官から必要に応じて質問や助言がある。

【受講要件】卒業研究着手資格を満足して研究室に配属された学生を対象として開講する。

【履修上の注意】発表の際に指導教官から英語の和訳はもちろんのこと、それらに関連した図表の説明や式の導出法などを問われても回答できるように、前もって十分に調べ、理解しておくことが大切である。

【到達目標】

1. 英語の専門用語を学ぶ。
2. 自主的・継続的な英語学習能力を養う。
3. 読解した英文テキストの内容についてプレゼンテーションができる。
4. 指導教官や学生間で発表内容説明に関してコミュニケーションができる。

【授業計画】1. 4 月に各研究室に配属された学生は、前後期を通じて輪講を行う。2. 研究室で定められた時間に、英文テキストを輪読する。3. 担当する範囲について、プレゼンテーションを行う。

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを、以下の条件により可否を判定する。1. 担当する範囲において、専門用語が獲得できていることが認められること (到達目標 1)。2. 毎回の輪読の内容が理解できているかどうか、指導教官の質問に答えられること (到達目標 2)。3. 文面内容、図面および式の導出などが的確に発表できていることが認められること (到達目標 3)。4. 輪講での内容に関する討論に加わり、意見交換ができること (到達目標 4)

【学習教育目標との関連】(B) 社会情報 80%、(D) 専門基礎 20%

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

電気・電子材料工学

Electrical and Electronic Material Science

助教授・富永 喜久雄 2 単位

【授業目的】電気・電子関係のいろいろな素子や部品および装置に使用されている主要な材料について専門知識を修得させる。ただし、半導体材料、オプトエレクトロニクス材料については別途半導体工学、光デバイス工学の講義でその知識を修得する。

【授業概要】電気・電子工学関連の分野で、使用される素子・部品・装置には様々な材料が使われている。従って、各種材料の諸性質に關

電気電子工学科 (昼間コース)

る基礎知識がないと、使用するに当たって部品や装置を壊すだけでなく、大事故を招き、人命を失うことにもなりかねない。また、卒業後に素子や部品および装置の設計・製作に携わる者も少なくない。このような視点から、上記「講義計画」に示すような主要な材料について、組成・製法・諸性質(電氣的・機械的・化学的)用途などについて解説する。

【受講要件】「電気磁気学1,2」、「基礎固体物性論」、「電子物性工学」、「電子物理学」を履修していること。また、高等学校卒業程度の「化学」の知識を必要とする。

【履修上の注意】講義では教科書に述べられていないような先端材料や開発中の材料についても解説するので出席を重視し、これらの結果を平常点とする。

【到達目標】

1. 導電体と抵抗体の物性と特性を理解した上で、これらの主な材料の特徴や用途を把握する。
2. 誘電体・絶縁体の物性と特性を理解した上で、これらの主な材料の特徴や用途を把握する。
3. 磁性体の物性と特性を理解した上で、これらの主な材料の特徴や用途を把握する。

【授業計画】1. 誘電体の電気物性と絶縁破壊 2. 気体および液体材料 3. 有機質高分子固体材料 4. 無機質固体材料 5. 中間試験(到達目標1.の評価) 6. 導電材料と抵抗材料 7. 超伝導材料および特殊導電材料 8. 磁気物性と磁性体の種類 9. 高透磁率材料 10. 高保磁力材料 11. 半硬質磁性記録材料 12. 中間試験(到達目標2.の評価) 13. オプトエレクトロニクス材料 14. センサの定義とその機能 15. センサ・トランスデュサ材料 16. 期末試験(到達目標3.の評価)

【成績評価】単位の取得については、到達目標の3項目が各々達成されているかを試験70%、平常点(ミニテスト等)30%で評価し、3項目平均で60%であれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 30%, (E) 専門分野(物性デバイス)60%, (F) 創成・自律 10%

【教科書】平井平八郎 他共編「現代電気・電子材料」オム社

【参考書】平井平八郎 他共編「大学課程電気電子材料」オム社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】富永(E棟2階南A-6, 656-7439, tominaga@ee.tokushima-u.ac.jp)

電子回路設計演習

Electronic Circuit Design 助教授・橋爪 正樹 1 単位

【授業目的】知的な動作をする高機能知能電子回路はマイクロプロセッサを用いて作られている。本演習ではそのような電子回路の設計技法の習得を目指す。

【授業概要】マイクロコンピュータ回路とそれを動作させるためのプログラミング言語(アセンブリ言語)について講義した後、マイクロコンピュータ回路に関する設計演習を行う。

【受講要件】「アナログ電子回路」、「デジタル回路」、「コンピュータ回路」、「プログラミング言語1」を受講していること。

【履修上の注意】マイコン実習室等で設計演習を行う。

【到達目標】

1. マイクロコンピュータ回路の動作原理を理解する
2. マイクロコンピュータ回路を設計できる
3. マイクロコンピュータ回路を動作させることができる

【授業計画】1. マイクロコンピュータ回路の内部構成 2. マイクロコンピュータ回路の内部動作 3. PICのアーキテクチャ 4. PIC16F84のデータ転送命令 5. PIC16F84へのデータの入出力命令 6. PIC16F84の演算命令 7. PIC16F84の条件分岐命令 8. 繰り返し処理プログラミング 9. サブルーチンとそれを用いたプログラミング 10. 割り込みプログラミング 11. アセンブリ言語開発ツールとその使い方 12. マイクロコンピュータ回路の設計 13. マイクロコンピュータ回路の製作 14. マイクロコンピュータ回路の動作プログラミング 15. 自由課題の製作1 16. 自由課題の製作2

【成績評価】自由課題レポート80%、平常点(演習レポート)20%で評価し、全体で60%以上で合格とする

【学習教育目標との関連】(E) 専門分野(知能電子回路)30%, (F) 創成・自律 70%

【教科書】現時点で本演習に適した教科書がないため、配布するプリントで行う予定。

【参考書】第一回目の講義で紹介

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】橋爪(E棟3階南D-2, 656-7473, tume@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】本授業科目に関するホームページ (<http://tameone.ee.tokushima-u.ac.jp/%7etume/misc/MYCroom/>)

電子デバイス

Semiconductor Device Physics 講師・西野 克志 2 単位

【授業目的】半導体電子デバイスの動作およびその原理を理解することを目的とする。

【授業概要】まず電子デバイスの基本となる半導体の基礎的性質および各種接合・界面について解説する。その後、種々の電子デバイスの構造、動作原理、諸特性について述べる。

【受講要件】「半導体工学」を履修しておくこと。

【到達目標】

1. バイポーラトランジスタの動作原理が理解できる
2. 電界効果トランジスタの動作原理が理解できる

【授業計画】1. 半導体の基礎 2. 半導体の電気伝導 3. pn接合の直流特性 4. pn接合の空乏層の解析および交流特性 5. 金属-半導体界面 6. 絶縁体-半導体界面 7. バイポーラトランジスタの基本動作 8. バイポーラトランジスタの諸特性 9. ヘテロバイポーラトランジスタ 10. MOS型電界効果トランジスタ 11. 接合型電界効果トランジスタ 12. 集積回路 13. メモリ, CCD 14. パワーデバイス 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】到達目標が達成されているかを試験75%、レポート25%で評価し、あわせて60%以上であれば合格とする

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 30%, (E) 専門分野(物性デバイス)70%

【教科書】松波, 吉本著「半導体デバイス」共立出版

【参考書】"Physics of Semiconductor Devices", by S.M.Sze (John Wiley & Sons, 1981)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】西野(E棟2階南A-5, 656-7464, nishino@ee.tokushima-u.ac.jp)

電子物性工学

Solid State Physics 助教授・直井 美貴 2 単位

【授業目的】物質の電氣的・誘電的・磁氣的性質が、物質を構成している原子・分子・電子の振る舞いを基礎として微視的立場から説明できることを理解することを目的とする。

【授業概要】トランジスタや集積回路(IC)をはじめとする電子デバイスの動作原理を理解するためには、そのデバイスを構成する物質内の電子等の微視的振る舞いを理解することが不可欠である。この理解があって新デバイスの設計がはじめて可能となる。本講義では、実際のデバイス動作を常に考えながら、物質の誘電的・電氣的・磁氣的性質についての講義および演習を行う。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】講義と共に、その内容に関する課題が授業内での小テストあるいはレポートとして与えられる。小テストおよびレポート提出内容は平常点算出の際の資料となる。

【到達目標】

1. 物質の性質を微視的立場から理解できる。
2. 物質の性質を、巨視的・微視的観点両方から相互に関連づけて理解できる。
3. 物質量の単位・次元を把握できる
4. 物質の示す誘電的・電氣的・磁氣的・光学的性質などの基礎物理現象が理解できる。

【授業計画】1. Introduction(物性工学とは)、基本的物理量とその単位・次元 2. 固体の周期構造 (1) 3. 固体の周期構造 (2) 4. 結晶の結合力 5. 格子の熱的振動 6. 固体の熱的振動 7. 固体の電気伝導 (1) 8. 固体の電気伝導 (2) 9. 固体の誘電的性質 (1) 10. 固体の誘電的性質 (2) 11. 固体の磁氣的性質 (1) 12. 固体の磁氣的性質 (2) 13. 固体の光学的性質 (1) 14. 固体の光学的性質 (2) 15. 超伝導 16. 試験

【成績評価】到達目標が達成されているかを試験80%、平常点20%(レポート、小テスト等)として評価し、全体で60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 20%, (E) 専門分野(物性デバイス)80%

【教科書】松澤・高橋・斉藤著「電子物性」森北出版

【参考書】青木昌治著「電子物性工学」コロナ社、佐藤・越田著「応用電子物性工学」コロナ社、浜口智尋著「電子物性入門」丸善

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】直井(E棟2階南A-4, 656-7447, naoi@ee.tokushima-u.ac.jp)

電子物理学

Electronic Physics

教授・大宅 薫 2単位

【授業目的】電界中および磁界中の電子の運動を解析でき、代表的なマイクロ波電子管の構造・原理およびプラズマの基礎的性質を理解する。

【授業概要】様々な電界・磁界中の電子の運動方程式を解析し、電子の運動に関わる特徴的な物理現象を示すとともに、静電偏向・磁界偏向、電子レンズについてその原理と特性を理解させる。また、代表的なマイクロ波電子管(クライストロン、進行波管、マグネトロン)の構造と原理について講義する。さらに、最近、様々な工学分野で利用されているプラズマの基礎的性質について述べる。これに続くプラズマの理論的な取り扱いについては大学院にて講義することになる。

【受講要件】「基礎物理学・力学」、「電気磁気学1,2」の内容を理解しているものとして授業を行う。

【履修上の注意】演習を行いながら授業を進めるので、毎週講義ノート提出させる。

【到達目標】

1. 運動方程式を用いて、電界および磁界中の電子の運動を解析でき、関係する物理現象を理解する。
2. 代表的なマイクロ波電子管の構造と原理が説明でき、プラズマの基礎的性質を理解する。

【授業計画】1. 電界中の電子の運動解析 2. 磁界中の電子の運動解析 3. 電磁界中の電子の運動解析 4. 静電偏向と磁界偏向 5. 電子光学と電子レンズ 6. 空間電荷効果 7. 電子走行時間と誘導電流 8. 中間試験(目標1の評価) 9. マイクロ波電子管1(クライストロン) 10. マイクロ波電子管2(進行波管) 11. マイクロ波電子管3(クロスフィールドデバイス、マグネトロン) 12. プラズマとは 13. マックスウェル分布と温度の概念 14. デバイシャヘいとプラズマ振動 15. プラズマ応用 16. 期末試験(目標2の評価)

【成績評価】目標の2項目が各々達成されているかを試験80%、平常点(提出ノート)20%で評価し、2項目の平均で60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 10%、(D) 専門基礎 20%、(E) 専門分野(物性デバイス)70%

【参考書】桜庭一郎「電子管工学」森北出版、F. F. Chen 著、内田岱二郎訳「プラズマ物理入門」丸善

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】大宅(E棟2階南A-9, 656-7444, ohya@ee.tokushima-u.ac.jp)

電力系統工学 1

Electric Power System Engineering (I)

教授・伊坂 勝生 2単位

【授業目的】身近にある送配電線の機能を理解させると共に高度情報化社会の基盤となっている電力系統に関心を持たせる。さらに、電気の安全な取扱いの基本を理解させる。

【授業概要】遠隔地で発生される電気エネルギーを需要家に輸送するには長距離送電線と輸送技術を必要としている。本講義では電力系統の発達史を振り返ると共に、近年の高度情報化社会を支えている大容量電力系統の電気的特性を講義し、電気回路の講義内容が具体化されている例を示す。同時に、安全な電気の使用方法について具体例を使って解説する。

【受講要件】「電気回路1,2」および「エネルギー工学基礎論」を受講しておくこと。

【履修上の注意】発電所から家庭内の負荷までの電気エネルギーの旅に関するレポートを課す。身近にある送電線・鉄塔・配電線・電柱や家庭内の保安機器にも平素から関心を払うようにすること。

【到達目標】

1. 日常生活で使われる電気エネルギーの輸送に使われる交流・直流方式の基礎およびその安全な使用方法が理解できる。
2. 送電線の電気的特性の解析ができる。
3. 送電線上の電力潮流を定量的に把握できる。

【授業計画】1. 電気エネルギーの発生および輸送に関連した技術史 2. 電気エネルギー使用時の安全性の確保について 3. 単相交流回路の電気的特性 4. 単相三線式回路・三相交流回路の電気的特性(1) 5. 三相交流回路の電気的特性(2) 6. 線路定数(抵抗, インダクタンス) 7. 線路定数(キャパシタンス) 8. 短距離送電線の電圧降下特性 9. 中距離送電線の電気的特性 10. 長距離送電線の電気的特性 11. 電力方程式の導出および送電容量の計算 12. 電力円線図の導出 13. 調相容量の計算 14. 定電圧送電方式について 15. 試験(到達目標1,2および3の評価)

【成績評価】単位習得:到達目標の3項目が各々達成されているかを試験80%、平常点20%(ミニテスト, レポート等)で評価し、全体で60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 10%、(D) 専門基礎 30%、(E) 専門分野(電気エネルギー)60%

【教科書】松浦編著「電気エネルギー伝送工学」オーム社

【参考書】大野木編著「電力工学II」朝倉書店

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】伊坂(E棟2階北B-9, 656-7459, isaka@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】ミニテスト, レポートの出来具合や出席率が悪い場合は本試験を受験できない。プレゼンテーションを行う場合は早目に申し出ること。発表前日までに発表内容を点検する。

電力系統工学 2

Electric Power System Engineering (II)

教授・伊坂 勝生 2単位

【授業目的】電力輸送システムの基礎的事項(電力系統工学1)をベースにして電力系統の実際の運転に関連した諸問題について修得させる。

【授業概要】(1)電力システムの故障を引き起こす要因および故障時の電気現象、(2)電力システムの容量、安定度および絶縁信頼度、(3)電気エネルギー輸送に伴う電磁環境問題、に大別できる。

【受講要件】「エネルギー工学基礎論」、「電力系統工学1」を受講しておくこと。

【履修上の注意】レポートの提出期限を厳守すること。

【到達目標】

1. 電力システムの故障を引き起こす自然環境要因および故障時の電気現象を理解する。
2. 電力システムの容量・安定度・保護装置・絶縁信頼度を理解する。
3. 電気エネルギー輸送に伴う電磁環境問題を理解する。

【授業計画】1. 高度情報化社会における停電の影響 2. 電力システムの故障を引き起こす自然環境要因 3. 高電圧交流送配電システムの中性点の接地方式および故障検出法 4. 故障計算の基礎(インピーダンス法の導入) 5. 故障計算(平衡故障, 不平衡故障) 6. 送電容量, 安定度および保護装置 7. 有効電力と周波数の関係 8. 無効電力と系統電圧との関係 9. 電力システムの供給信頼度 10. 電力システムの絶縁信頼度 11. 電力系統電磁環境適合性 12. 送電線の静電誘導および電磁誘導 13. 送電線からのコロナによる電波障害および可聴騒音 14. 送配電線からの電磁界の人体影響についての最近の話 15. 定期試験

【成績評価】到達目標が達成されているかを試験80%、平常点で20%で評価し、全体で60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 40%、(E) 専門分野(電気エネルギー)60%

【教科書】松浦編著「電気エネルギー伝送工学」オーム社

【参考書】大野木編著「電力工学II」朝倉書店

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】伊坂(E棟2階北B-9, 656-7459, isaka@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】ミニテスト, レポートの提出状況や出席が少ない場合は試験を受けることができない。本講義内容について疑問, 調査結果をプレゼンテーションする希望があれば、早目に申し出ること。

ニュービジネス概論

Introduction to New Business

非常勤講師・出口 竜也

第一線の実務経験者 2単位

【授業目的】ベンチャー企業は、新しいアイデアや専門的な知識・技術を事業化し、新しい創造的な事業を展開するパイオニア的企業である。この授業の目的は、アイデアや専門的な知識・技術を事業化する、つまりベンチャー企業を起業するためのスピリットとノウハウを提供することにある。

【授業概要】政府は活力ある日本社会を創るために、大学発ベンチャー企業の育成や人材の育成を目指している。政府目標は、3年間で1,000社の大学発ベンチャー企業の創出である。本講義は、それを実現できるように徳島県が支援して開設された「学生起業家創業支援講座」である。学生諸君がベンチャー企業の設立に挑戦し、事業を展開していく手助けとなるような授業内容となっている。第一線で活躍されている実務家やアドバイザーを講師として招き、実際に役立つ知識を講義していただく。授業は、大きく分けて4つの部分から構成されている。第一は、導入としてのベンチャーとは何かの説明である。第二は、設立の方法と資金の手当てについてである。第三は、経営のノウハウである。最後に、ベンチャーを起業するにあたって不可欠のビジネスプラン(事業計画)の作成実習を行う。

【受講要件】工学部以外の受講希望者も教室収容能力の許すかぎり受講可能である。単位修得については所属部局の規則に従うこと。

【履修上の注意】遅刻や授業中の私語は厳禁である。

【到達目標】

電気電子工学科 (昼間コース)

- 1.ベンチャービジネスを起業するために必要な知識を修得すること
2.ビジネスプランが作成できるようになること
- 【授業計画】1.ガイダンス 2.基調講演「ゼロからのスタート」 3.独立型ベンチャー成功のための理論 4.会社設立の方法(法律や会社設立手続き) 5.資金調達と資本政策 6.銀行の役割と利用方法(間接金融) 7.株式発行による資金調達(直接金融) 8.会社経営の基礎(計画・資金繰り・組織) 9.企業会計の基礎知識 10.経営戦略とマーケティング 11.製品開発と知的所有権 12.ビジネスプラン作成のポイント 13.ビジネスプラン作成実習 14.筆記試験(4~11の内容に関する試験) 15.ビジネスプランの発表会 16.予備日
- 【成績評価】到達目標の達成度で評価し、到達目標を達成しているものを合格とする。授業計画 4~11 は筆記試験(60%)で、12,13,15 はビジネスプランの提出分(40%)で評価する。
- 【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 20%, (B) 社会情報 50%, (G) プロジェクト型研究 30%
- 【教科書】各授業でレジメを配布する。
- 【参考書】各授業で紹介する。
- 【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能
- 【連絡先】出口(2216, 656-7183, deguchi@ias.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】ビジネスプランはグループで作成する。

- 【授業計画】1.電力需要と環境 2.発変電技術の歴史と概要・レポート 3.水力発電の基礎 4.水力発電方式・演習 5.火力発電の基礎 6.火力発電方式・小テスト 7.火力発電の実際 8.原子力発電の基礎 9.原子力発電方式・演習・レポート 10.新発電方式の基礎 11.電力貯蔵方式 12.変電所の設備 13.変電所の運用・レポート 14.発変電設備の診断技術の現状 15.予備日 16.定期試験
- 【成績評価】到達目標の3項目が各々達成されているかを試験 80%(中間試験 40%, 期末試験 40%), 平常点(レポート)20%で評価し、全体で60%以上で合格とする。
- 【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 30%, (E) 専門分野(電気エネルギー)70%
- 【教科書】電気学会編「発電・変電」改訂版, オーム社
- 【参考書】榊原建樹 編著「電気エネルギー基礎」, オーム社, 福田務, 相原良典 著「絵とき電力技術」, オーム社
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】井上()
- 【備考】エネルギー問題は、国内外の経済動向、環境問題、紛争等に密接に関係しているため、日頃より新聞、雑誌、メディア等の関連する項目には注意すること。

熱・統計力学

Thermodynamics and Statistical Mechanics

講師・中村 浩一 2 単位

- 【授業目的】巨視的物質量についてエネルギーの観点から考察を行う熱力学の初歩と、原子・分子等の微視的性質から物質の巨視的性質を説明する統計力学の初歩を講義し、両者の関係を解説する。
- 【授業概要】下記講義計画に示した項目に従い、熱力学で用いられる基本概念を解説する。その後、統計力学で用いられる基本的な集団-ミクロカノニカル集団、カノニカル集団およびグランドカノニカル集団の概念を用いて、熱平衡状態について講義し、巨視的物質量の性質が原子・分子の性質から導かれることについて解説する。また古典統計と量子統計の相違点についても解説する。
- 【受講要件】量子力学の基礎、基本関数の微分および積分は修得していることが望ましい。
- 【到達目標】
1. 巨視的な観点から熱力学の概念を理解する。
 2. 微視的な量子力学の観点から統計力学を理解する。
- 【授業計画】1. 熱平衡と温度 2. 熱力学過程 3. 熱力学第一法則 4. カルノーサイクル 5. 熱力学第二法則 6. エントロピー 7. 分子運動論 8. 古典統計力学 9. 正準集団と大正準集団 10. 古典統計力学の応用 11. 量子統計(1) フェルミ統計 12. 量子統計(2) ボーズ統計 13. 理想フェルミ気体と理想ボース気体 14. 予備日 15. 期末試験
- 【成績評価】試験 70%(期末試験)、平常点 30%(授業への取り組み、演習問題など)として評価し、全体で 60%以上で合格とする。
- 【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 70%, (D) 専門基礎 30%
- 【教科書】阿部龍蔵「熱統計力学」葦原房
- 【参考書】碓井恒丸「熱学・統計力学」丸善、原島鮮「熱力学・統計力学」培風館
- 【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
- 【連絡先】中村(A216, 656-7577, koichi@pm.tokushima-u.ac.jp)

発電工学

Power Generation and Transformation Engineering

教授・井上 廉 2 単位

- 【授業目的】電気エネルギーは、人類の生活スタイル、社会経済動向、環境問題に密接に関係しており、現状と将来展望の正確な把握は大変重要である。本授業では電気エネルギーの各種発生方式について説明し、演習、レポート提出等を通じて理解を深めることを目的とする。
- 【授業概要】電気エネルギーの各種発生方式の現状と将来展望について、発電設備概要、運用方法、経済性を説明する。また、変電設備概要、運用方法についても説明する。
- 【受講要件】「電気回路 1, 2」、「電気磁気学 1, 2」を受講しておくこと。
- 【到達目標】
1. 電力需要と環境との関係を理解する。
 2. 各種発電方式を理解する。
 3. 変電所設備を理解する。

パワーエレクトロニクス

Power Electronics

教授・大西 徳生 2 単位

- 【授業目的】電力用半導体スイッチング素子を用いた電力変換制御回路の種類と動作原理および基本特性について講義し、電力変換回路の基本動作を理解修得させる。
- 【授業概要】電力用半導体素子を用いた電力の変換と制御に関する授業科目で、今日の電気機器の制御性能を高める上で欠くことのできない技術分野であり、各種電力変換制御装置の動作原理と基本特性解析を講述すると共に、講義の進行に併せてシミュレーションソフトを活用した変換回路の基本動作確認の演習を行う。
- 【受講要件】「電気回路 1, 2」、「過渡現象」、「電気機器 1, 2」を履修していること。
- 【履修上の注意】授業の進行に合わせて各種回路動作をシミュレーションソフトにより確認させる演習課題が与えられる。レポート提出内容は平常点として加算するので、毎回の予習・復習に加えてレポート提出は欠かさず行うこと。
- 【到達目標】
1. パワーエレクトロニクス技術の概要が把握できる。
 2. 半導体素子の種類と特性およびそれらを活用する上での基本事項を修得する。
 3. 半導体スイッチによる各種電力変換回路の基本動作と基本特性が理解できる。
 4. 半導体電力変換回路を用いた応用に関する基本動作が理解できる。
- 【授業計画】1. パワーエレクトロニクスの概要 2. 半導体素子の種類と構造 3. 半導体素子の基本特性とドライブ回路 4. 交流スイッチ回路と交流位相制御回路 5. 電源転流単相順逆変換回路 6. 電源転流三相順逆変換回路 7. 歪み波有効無効電力と力率、高調波 8. 中間試験(到達目標 1, 2, 3 の一部の評価) 9. 直流電圧制御回路 1(チョッパ回路) 10. インバータ回路 1 11. インバータ回路 2 12. 直流電圧制御回路 2(チョッパ回路) 13. 電力変換回路の系統連系への応用 14. 電力変換回路の直流・交流電動機制御への応用 15. 期末試験(到達目標 3, 4 の評価)
- 【成績評価】到達目標が達成されているかを試験 80%(中間試験 40%, 期末試験 40%), 平常点(ミニテスト, レポート等)20%で評価し、全体で 60%以上で合格とする。
- 【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 35%, (E) 専門分野(電気エネルギー)65%
- 【教科書】中田・沖津編著「電気機器」朝倉書店
- 【参考書】池田・北村・正田著「パワーエレクトロニクスの基礎」電気学会(オーム社)他
- 【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
- 【連絡先】大西(E棟2階北B-1, 656-7456, ohnishi@ee.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】本授業科目に関するホームページ (<http://vanilla.ee.tokushima-u.ac.jp/jabec/PE/>)

半導体工学

Semiconductor Physical Electronics

教授・大野 泰夫 2 単位

- 【授業目的】半導体の諸特性とそれを応用した電子デバイスの基礎を理解させる。

電気電子工学科 (昼間コース)

【授業概要】「基礎固体物性論」で学んだ内容を基に、電子の波動関数、固体のバンド構造、半導体中におけるキャリア統計、pn 接合、バイポーラトランジスタについての講義を行う。次に続く科目「電子デバイス」、「光デバイス工学」、「集積回路 1, 2」の基礎とする。

【受講要件】「基礎固体物性論」の履修を前提として講義を行う。

【履修上の注意】本科目を履修後は「電子デバイス」、「集積回路 1, 2」、「光デバイス工学」を順次履修することを想定している。レポートを随時提出させる。レポートも採点の対象となる。

【到達目標】

1. 与えられたポテンシャル場中に置かれた電子の波動関数を求める方法を理解している。半導体中のキャリアの分布を、半導体のバンド構造と関連づけて理解している。
2. pn 接合ダイオード、バイポーラトランジスタの動作とその原理を理解している。

【授業計画】1. 電子の波動関数 2. ポテンシャル井戸の中の電子の振る舞い 3. 原子結合とバンド構造 4. 半導体中の電子と正孔 1 5. 半導体中の電子と正孔 2 6. キャリアの拡散 7. 半導体中のキャリア統計 8. ドリフト・拡散・再結合 9. pn 接合 1 10. pn 接合 2 11. バイポーラトランジスタ 1 12. バイポーラトランジスタ 2 13. 半導体プロセス技術入門 14. まとめ 15. 試験 (到達目標 1, 2 の評価)

【成績評価】到達目標の 2 項目が各々達成されているかを試験 70%, レポート 30% で評価し, 2 項目平均で 60% 以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 60%, (E) 専門分野 (物性デバイス) 40%

【教科書】半導体デバイスの基礎, 桜庭著 (森北出版) 及びプリント。

【参考書】"Physics of Semiconductor Devices", by S.M.Sze (John Wiley & Sons, 1981)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大野(E棟2階南A-7, 656-7438, ohno@ee.tokushima-u.ac.jp)

光デバイス工学

Photonic Devices

助教授・富永 喜久雄 2 単位

【授業目的】半導体の応用分野の一つである光半導体デバイスとそれを利用するシステムにわたって基本的知識を修得することを目的とする。

【授業概要】光エレクトロニクスに用いられるデバイスの中で、情報通信、エネルギー、画像に関係するデバイスについて講義する。具体的には、発光ダイオード、レーザ、光導電素子、フォトダイオード、光電管、太陽電池、撮像デバイス、表示デバイスなどである。最初は、それらのデバイスの基礎となる材料についての講義からはじめる。

【受講要件】「電気磁気学 1, 2, 3」およびデバイス関連科目を履修しておくことが望ましいが、通信、回路関連に興味のある人も受講しておいてほしい。

【到達目標】

1. 光半導体デバイスの物理の基礎知識を習得する。
2. 種々の発光, 受光, 撮像デバイスについて理解する。

【授業計画】1. 物質の光学的性質 1 2. 物質の光学的性質 2 3. 光エレクトロニクスデバイスのための材料設計 1 4. 光エレクトロニクスデバイスのための材料設計 2 5. 発光デバイス 1(EL セル, 発光ダイオード) 6. 発光デバイス 2(レーザ) 7. 中間試験 8. 光検出デバイス 1(光導電素子) 9. 光検出デバイス 2(ホトダイオード, アバランシェホトダイオード APD) 10. 太陽電池 1(基礎理論) 11. 太陽電池 2(構造と製作) 12. 撮像デバイス 1(撮像管) 13. 撮像デバイス 2(電荷結合素子 CCD) 14. 表示デバイス 1(ブラウン管 CRT, 薄膜トランジスタ TFT) 15. 表示デバイス 2(液晶ディスプレイ LCD, プラズマディスプレイ PDP) 16. 期末試験

【成績評価】試験 60%(中間試験 30%, 期末試験 30%), 平常点 40%(レポート, ミニテストなど) として評価し, 全体で 60% 以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 40%, (E) 専門分野 (物性デバイス) 60%

【教科書】針生 尚著: 光エレクトロニクスデバイス, 培風館

【参考書】S. M. Sze: Physics of Semiconductor devices, John Wiley & Sons, 1981 and J. Singh: Semiconductor Optoelectronics (Physics and Technology), McGraw-Hill, 1995.

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】富永(E棟2階南A-6, 656-7439, tominaga@ee.tokushima-u.ac.jp)

微分方程式 1

Differential Equations (I)

教授・長町 重昭 2 単位

【授業目的】微分方程式の解法を修得し、さらに工学の諸分野に現われる微分方程式の解法に応用できるようにする。

【授業概要】微分方程式の理論は、現代工学の基礎として重要な役割を果たしている。その広範な理論の入門段階として、定数係数線形微分方程式の理論と解法を講義する。

【受講要件】「微分積分学」と「線形代数」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをきちんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 2 階の定数係数線形微分方程式が解ける。
2. 2 元連立定数係数線形微分方程式が解ける。

【授業計画】1. 定数係数 2 階線形同次方程式 2. 定数係数高階線形同次方程式 3. 部分分数分解 4. ミクシンスキーの演算子 5. 定数係数 2 階線形非同次方程式 6. 定数係数高階線形非同次方程式 7. ラプラス変換 8. 応用例 9. 定数係数連立線形同次方程式 10. 一般固有ベクトルとジョルダン標準形 11. ジョルダン標準形の求め方 12. 解の分類 13. 定数係数連立線形非同次方程式 14. 応用例 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への取組み状況, 演習の回答, レポートの提出状況, 小テスト等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 80%, (D) 専門基礎 20%

【教科書】未定

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】長町(A棟205, 656-7554, shigeaki@pm.tokushima-u.ac.jp)

微分方程式 2

Differential Equations (II)

教授・長町 重昭 2 単位

【授業目的】簡単な変数係数の線形微分方程式と、非線形微分方程式の解法を習得し、解の安定性に関する判定ができるようにする。

【受講要件】「微分方程式 1」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをきちんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 簡単な変数係数線形微分方程式が解ける。
2. 簡単な非線形微分方程式が解ける。

【授業計画】1. 変数係数 1 階線形方程式 2. 変数係数連立線形方程式 3. ロンスキアン 4. 行列値関数 5. 周期関数を係数とする線形方程式 6. いろいろな解法 7. 境界値問題 8. グリーン関数 9. 非線形方程式 10. 解の存在と一意性 11. 解の安定性 12. 2 次元の自律系 13. いろいろな解法 14. 応用例 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への取組み状況, 演習の回答, レポートの提出状況, 小テスト等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 70%, (D) 専門基礎 30%

【教科書】なし

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】長町(A棟205, 656-7554, shigeaki@pm.tokushima-u.ac.jp)

微分方程式特論

Differential Equations(III)

助教授・香田 温人 2 単位

【授業目的】数理解析学の強力な道具立てとして、フーリエの方法を修得させる。

【授業概要】フーリエが導入した三角級数展開およびフーリエ積分変換の理論を講義し、物理・工学に現れる偏微分方程式を初等的に扱うための基礎的な知識を提供する。

【受講要件】「微分方程式 1, 2」の履修を前提とする。

【履修上の注意】高度な内容につながる盛り沢山の講義である。使い方を理解するには、実用的な道具と割り切って、多数の計算練習を行なうとよい。

【到達目標】

1. フーリエ解析の初歩を理解する。
2. フーリエ級数の計算ができる。

電気電子工学科 (昼間コース)

【授業計画】1. フーリエ係数, フーリエ級数 2. 三角級数の和, ディリクレ核 3. リーマン・ルベグの定理, ベッセルの不等式 4. 展開定理 5. パーセバルの等式, 簡単な応用例 6. フーリエ積分 7. ディリクレ積分公式, フーリエ積分公式 8. フーリエ反転公式 9. フーリエ変換, 合成積 10. 変換の計算例 11. 偏微分方程式への応用 12. 波動方程式 13. 熱伝導方程式 14. ラプラス方程式 15. 期末試験

【成績評価】授業への取り組み状況, 演習の回答, 小テスト等の平常点と期末試験を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 70%, (D) 専門基礎 30%

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】入江昭二・垣田高夫『フーリエの方法』内田老鶴圃, 洲之内源一郎『フーリエ解析とその応用』サイエンス社, 竹之内脩『フーリエ展開』秀潤社, T.W. ケルナー『フーリエ解析大全上・下』朝倉書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】香田(A棟211, 656-7546, kohda@pm.tokushima-u.ac.jp)

1. 複素微分, 正則関数の概要が理解できる。
2. 留数概念の理解とその応用ができる。

【授業計画】1. 複素数 2. 複素平面, オイラーの式 3. 複素数列, 複素級数 4. 複素変数の関数 5. 複素微分, コーシー・リーマンの関係式 6. 正則関数 7. 複素積分 8. コーシーの積分定理 9. コーシーの積分公式 10. テイラー展開 11. ローラン展開 12. 留数とその応用 13. 定積分の計算 14. 定積分の計算 2 15. 期末試験

【成績評価】授業への取り組み状況, 演習の回答, レポートの提出状況, 小テスト等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 70%, (D) 専門基礎 30%

【教科書】阪井章『複素解析入門』新曜社

【参考書】辻正次・小松勇作『大学演習・函数論』裳華房, 田村二郎『解析関数(新版)』裳華房, 吉田洋一『函数論』岩波書店, 神保道夫『複素関数入門』岩波書店, 志賀啓成『複素解析学 I-II』培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】香田(A棟211, 656-7546, kohda@pm.tokushima-u.ac.jp)

福祉工学概論

Introduction to Well-being Technology for All 教授・末田 統
助教授・藤澤 正一郎 2 単位

【授業目的】我々の身近な生活を支える様々な機器や環境の中に含まれる工学技術のうち, いろいろなハンディキャップを伴う条件下でも使いやすく安全を確保する技術を, 人に優しい技術として紹介し, その万人に対する延長線上に福祉工学技術の一端があることを理解させる。また, 各障害者個人に合わせた機器を紹介し, 福祉工学技術のもう一端には, 特化された技術があることも理解させる。

【授業概要】本講義では, 人間の生活全体を支える工学技術を, 高齢化による機能の低下や障害によるハンディキャップを軽減させる様々な技術(ハイテクならびにローテク)やアプローチを例にとり, 広い視点から概観する。

【到達目標】

1. 機能の低下や障害によらず, 全ての人が利用できる技術や機器, 環境があることを理解させる。
2. 特別なサポートを必要とする人々のための技術や機器, 環境があることを理解させる。
3. 人に優しい工学技術について考える機会を持たせる。

【授業計画】1. ガイダンス: 講義の進め方, 受講の心構え 2. 支援科学技術: 個人への対応と万人への対応 (Universal Design) 3. 移動・移乗 4. 排泄 5. 身障者スポーツ 6. 高齢者の生活環境 7. 就労 8. 生活自立と支援技術 (米国の場合) 9. 技術による支援, 人による支援 10. 技術: 障害への適合, 環境への適合, 人間への適合 11. 知的障害者と運動機能障害者の支援 12. 視覚障害者と聴覚障害者の支援 13. 最新の技術:???? 14. まとめ:心のバリアー, エンジニアとして 15. 予備日

【成績評価】講義への取り組み状況と, 毎回提出させるレポートにより評価する。

【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 20%, (B) 社会情報 30%, (D) 専門基礎 30%, (F) 創成・自律 20%

【参考書】「明日を創る」, E&C プロジェクト「バリアフリーの商品開発 2」, 山田尚勇他「コンピュータと人間の共生」, 後藤芳一編「バリアフリーのための福祉技術入門」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】末田(総合研究実験棟705, 656-2167, o.sueda@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】出席点とレポート評価との割合は 4:6 とするが, 欠席者のレポートは成績評価しない。

複素関数論

Complex Analysis 助教授・香田 温人 2 単位

【授業目的】複素関数論への入門講義として, 複素変数関数の微積分学を修得させる。

【授業概要】微積分で扱う対象を複素変数関数の関数にまで広げ, 正則関数および有理型関数の理論を展開することにより, 実数の世界では困難であったある種の積分計算が複素数の立場からみると簡潔に処理されることを述べる。

【受講要件】「微積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】時間数の制約から, 複素関数の計算を修得するための必要最小限な議論を行なうので, 講義内容のすべてを吸収することが理解への早道である。日頃から予習・復習の計画を立てて勉学に動んでもらいたい。

【到達目標】

プラズマ工学

Plasma Engineering 教授・大宅 薫 2 単位

【授業目的】最近のプラズマ応用技術に必要なプラズマの考え方を修得し, その利用技術の基礎を学ぶ。

【授業概要】最近のプラズマプロセス技術に対するニーズの高まりを背景に, 時代に即応した新しい目でプラズマを見直し, 技術者がプラズマを使うときに必要なミクロな視点(前半)とマクロな視点(後半)からプラズマを講義する。また, プラズマから引き出せるイオンビームの性質とデバイスプロセス等における最近の応用についても述べる。

【受講要件】「電気磁気学 1, 2」を習得しておくこと。

【履修上の注意】「電子物理学」の内容を理解しているものとして講義を行う。

【到達目標】

1. プラズマのミクロな取り扱い方を理解する。
2. プラズマやイオンビームの生成と応用の原理を理解する

【授業計画】1. プラズマエレクトロニクスとは 2. 弾性衝突と非弾性衝突 3. 衝突断面積と平均自由行程 4. プラズマ中の原子・分子の衝突過程 5. プラズマの分布と拡散 6. プラズマシース 7. スパッタリング 8. 中間試験(目標 1 の評価) 9. 気体プラズマ放電の基礎 10. プラズマ生成(直流放電) 11. プラズマ生成(高周波放電, マイクロ波放電) 12. プラズマ計測 13. プラズマプロセス技術 14. プラズマディスプレイとプラズマ利用環境技術 15. イオンビームの生成と利用技術 16. 期末試験(目標 2 の評価)

【成績評価】目標の 2 項目が各々達成されているかを試験 80%, 平常点(提出ノートあるいはレポート)20%で評価し, 2 項目の平均で 60%あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 10%, (D) 専門基礎 40%, (E) 専門分野(物性デバイス)50%

【教科書】菅井秀郎「プラズマエレクトロニクス」オーム社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大宅(E棟2階南A-9, 656-7444, ohya@ee.tokushima-u.ac.jp)

プログラミング演習 1

Programming Exercise (I) 講師・大宅 隆弘 1 単位

【授業目的】プログラミング言語 C(以下, C 言語)を用いたコンピュータプログラミングについて講義し, 演習を行うことで, コンピュータにおけるプログラミングの考え方を理解させるとともに C 言語プログラムの読解力および基本的なプログラム作成技法を習得させる。

【授業概要】多様な目的を果たすためにコンピュータを用いるには, プログラミングの知識は技術者にとって欠くことのできない要素である。本演習では, 代表的な手続き型プログラミング言語の一つである C 言語について, プログラム開発ツールの使い方を習得させた後, (1) 基本的なデータ入出力, (2) 条件分岐処理, (3) 繰り返し処理, (4) 配列を利用するプログラムについて講述し実習を行なう。

【受講要件】「コンピュータ入門」を履修していること。

【履修上の注意】毎週の演習では, 前半を講義, 後半を実習形式で行う。実習で作成したプログラムは以降の演習に利用するため, 実習で科されたプログラムは必ず次の演習時間までに完成させておくこと。

【到達目標】

1. C 言語の文法を理解する。
2. C 言語プログラムの読解力を習得する。
3. C 言語プログラミング手法を習得する。

【授業計画】1. UNIX の基本コマンド 2. プログラム開発環境の操作方法 3. C 言語のプログラム書式 4. データの型 5. 演算子 6. 入出力関数 (scanf, printf 関数) 7. 文字列の構造と入出力 8. 条件分岐処理 (if 文) 9. 多方向分岐処理 (switch 文) 10. 繰り返し処理 (for 文) 11. 繰り返し処理 (while 文) 12. 繰り返し処理 (continue, break 文) 13. 配列 (1 次元) 14. 配列 (2 次元) 15. 期末試験 (到達目標 1,2,3 の評価)

【成績評価】到達目標の 3 項目が各々達成されているかを試験 70%, 平常点 (実習レポートなど)30%とし, 3 項目平均で 60%以上あれば合格とする。ただし, C 言語プログラミング経験者に関しては試験の比率を 100%として評価を行なうことがある。

【学習教育目標との関連】(B) 社会情報 20%, (C) 工学基礎 40%, (D) 専門基礎 40%

【教科書】講義の最初に配布するプリントを使用する。

【参考書】阿曾弘具ほか 共著「UNIX と C」(近代科学社)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大家(E棟3階北C-1, 656-7479, alex@ee.tokushima-u.ac.jp), 西尾(E棟3階南D-7, 656-7470, nishio@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】卒業研究, 大学院での研究ではコンピュータプログラミングができることが前提となっていることが多い上に, 電気電子工学科卒業生としてコンピュータプログラミングが行える能力を身につけているのが当たり前となっている。必ず受講してプログラミング能力を身につけること。

プログラミング演習 2

Programming Exercise (II)

講師・四柳 浩之 1 単位

【授業目的】数百 ~ 数千行程度の大きなプログラムを作成する上で必要となるプログラミング言語 C(以下, C 言語)の実用技術について講義し, 演習を行なうことで, 大規模なコンピュータプログラムを作成する上で必要となる手法を習得させる。

【授業概要】大規模なコンピュータプログラムを作成する上で, プログラムのブロック化, 目的に合わせたデータ構造の定義, ファイルとの入出力の知識は欠くことのできない要素である。本演習では C 言語のポインタの利用方法を習得させた後, 関数, 構造体を用いたプログラミング技法, データ処理に際して不可欠なファイル入出力プログラミングについて講述し実習を行なう。

【受講要件】「コンピュータ入門」, 「プログラミング演習 1」を履修していること。

【履修上の注意】毎週の演習では, 前半を講義, 後半を実習形式で行う。実習で作成したプログラムは以降の演習に利用するため, 実習で科されたプログラムは必ず次の演習時間までに完成させておくこと。

【到達目標】

1. C 言語のポインタ, 構造体の利用技法を理解する。
2. 関数を用いた C 言語プログラム作成手法を習得する。
3. ファイル入出力を用いた C 言語プログラム作成手法を習得する。

【授業計画】1. ポインタを用いたプログラミング 2. ポインタと配列の関係 3. メモリの動的割当を用いたプログラミング 4. 関数を用いたプログラミング 5. 関数の引数の受渡し (call by value) 6. 関数の引数の受渡し (call by reference) 7. 変数のスコープルール 8. 関数の再帰呼び出し 9. 構造体を用いたプログラミング 10. 構造体を用いたプログラミング 2 11. C 言語特有の演算子 12. プリプロセッサを用いたプログラミング 13. ファイル入出力プログラミング 1 14. ファイル入出力プログラミング 2 15. 期末試験 (到達目標 1,2,3 の評価)

【成績評価】到達目標の 3 項目が各々達成されているかを試験 70%, 平常点 (実習レポートなど)30%とし, 3 項目平均で 60%以上あれば合格とする。ただし, C 言語プログラミング経験者に関しては試験の比率を 100%として評価を行なうことがある。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 20%, (D) 専門基礎 30%, (E) 専門分野 (知能電子回路)50%

【教科書】阿曾弘具ほか 共著「UNIX と C」(近代科学社)と講義の最初に配布するプリントを併用する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】四柳(E棟3階南D-3, 656-9183, yanagi4@ee.tokushima-u.ac.jp), 大家(E棟3階北C-1, 656-7479, alex@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】卒業研究, 大学院での研究ではコンピュータプログラミングができることが前提となっていることが多いので, 必ず受講しておくこと。特に情報処理関係だけでなく計測・制御分野の職業につく場合には, 規模の大きなプログラムを書く能力を身につけておく必要があるため, ぜひ受講しておくこと。

プロジェクト演習

Project Exercise

助教授・安野 卓 1 単位

【授業目的】グループワークを通して, 総合的能力 (問題分析・解決, チームワーク, リーダーシップ) および専門的能力 (システム設計, プログラミング, 機構設計) を短期間のうちに習得することを目的とする。

【授業概要】少人数で 1 チームを構成し, 与えられた課題に対して自由な発想と獨創性で, LEGO 社製 Mindstorms を用いてロボットの行動プログラムを設計・開発することにより, システム設計やプログラミングなどの技術を実践的に習得する。そして, その成果をコンテストや開発コンセプトのプレゼンテーションを通じて評価する。

【受講要件】「コンピュータ入門」, 「プログラミング演習 1, 2」を習得していることが望ましい。また, 可能であればノートパソコンの持参を希望する。

【履修上の注意】無断欠席や遅刻など, メンバーの迷惑になるような行為は認めない。

【到達目標】

1. グループワークにおけるリーダーシップ力とチームワーク力の重要性が認識できる。
2. ロボットの製作を通じて, メカニズムを創造する楽しさ, トータルシステムを機能させるために必要な要素技術の重要性などを認識できる。
3. 与えられた制約のもとで計画的に作業を進め, 期限内に一定の成果を上げる能力を養成できる。
4. プレゼンテーション能力を養成できる。

【授業計画】1. オリエンテーション (ロボットコンテスト入門) 2. Mindstorms の構成とプログラミング環境 3. 競技テーマの説明 4. 作業計画と開発コンセプトの決定 (到達目標 3 の評価) 5. 知的ロボットの製作・性能評価実験 (到達目標 1, 2 の評価)(9 回) 6. 製作した知的ロボットの開発コンセプトをプレゼンテーション (到達目標 4 の評価) 7. コンテスト (到達目標 2, 3 の評価) 8. レポート作成 (到達目標の総合評価)

【成績評価】プレゼンテーション 30%, 平常点 40%(授業態度, レポート等), コンテスト成績 30%として評価し, 総合 60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】(F) 創成・自律 30%, (G) プロジェクト型研究 70%

【教科書】使用しない (Mindstorms マニュアルを参照する)

【参考書】LEGO Mindstorms に関する書籍は多数あるので参照して下さい。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】安野(E棟2階北B-5, 656-7458, yasuno@ee.tokushima-u.ac.jp)

ベクトル解析

Vector Analysis

助教授・香田 温人 2 単位

【授業目的】工学の解析で必要不可欠なベクトルの概念と基礎的な性質を学ぶとともに, ベクトル場の解析学を通して古典力学, 流体力学や電磁気学に現れる基本的な物理法則の数学的な理解・運用を目標とする。

【授業概要】三次元空間のベクトルで表される物理量の局所的変化 (微分) と大局的効果 (積分) を記述する手法としてベクトル場の微分積分学を展開し, 微分積分学の基本定理のベクトル場に対する一般化を確立する。

【受講要件】「線形代数学」, 「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには, 講義ノートをきちんととり, 各自が普段から, 自主的な演習を含む, 予習復習をすることが必要です。

【到達目標】

1. ベクトル場の微分についての基礎的な性質が理解でき, 勾配, 発散, および回転の基本事項が理解できる。
2. ベクトル場の各種の積分が理解でき, それらに関する基礎的な定理が理解できる。

【授業計画】1. ベクトルの演算, ベクトルとスカラー 2. 内積と外積 3. ベクトル値関数の微分・積分 4. 空間曲線, フレネ・セレの公式 5. 力学への応用 6. スカラー場とベクトル場の微分 7. 勾配と方向微分係数 8. 発散, 回転 9. 線積分, ベクトル場の接線線積分 10. 面積分, ベクトル場の法線面積分 11. 立体積分, ガウスの定理, ガウス積分 12. グリーンの定理, ストークスの定理 13. スカラー・ポテンシャルとベクトル・ポテンシャル 14. 直交曲線座標 15. 期末試験

【成績評価】授業への取り組み状況, レポートの提出状況, 小テスト等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 70%, (D) 専門基礎 30%

電気電子工学科 (昼間コース)

【教科書】小川 枝郎『ベクトル解析概論』培風館
【参考書】青木利夫・川口俊一「ベクトル解析要論」培風館、石原繁 著「ベクトル解析」裳華房
【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
【連絡先】香田(A棟211, 656-7546, kohda@pm.tokushima-u.ac.jp)

マイクロ波工学

Microwave Engineering 教授・田島 一人 2 単位

【授業目的】近年、衛星通信、移動体通信など無線通信の領域は拡大の一途をたどっており、伝送特性の活用、周波数資源の拡大のためマイクロ波帯の利用がめざましい勢いで伸びている。また、電子回路においても高周波・マイクロ波を用いる領域が著しく増大している。この講義では、高周波・マイクロ波のための伝送線路、部品、回路設計などを学習する。

【授業概要】まず、マイクロ波回路は分布定数回路としての取扱いが必要である。その基礎を復習し、伝送路の整合方法を講述する。次にマイクロ波伝送に用いられる伝送路とその電磁波伝送特性、回路素子について述べる。更に、アンテナからの電磁波の放射、電磁波伝搬について講述する。演習で理解を深める。

【履修上の注意】「電気磁気学 1, 2, 3」「電気回路 1, 2」で学ぶ内容が基礎となるので、これらを十分理解しておくことが望ましい。

【到達目標】

1. マイクロ波回路の基本的性質を理解すること。
2. 伝送線路のインピーダンスを理解し、基本的な計算ができること。
3. インピーダンス整合を理解し、基本的な計算ができること。

【授業計画】1. 分布定数回路の基礎 2. 反射と定在波 3. 入力インピーダンス 4. 4 分の 1 波長線路 5. 平面波とその他の電磁波、同軸線路 6. マイクロストリップ線路、導波管 7. 表面波伝送路 8. 整合回路 9. 可逆回路と非可逆回路 10. 電気ダイポールからの放射と開口面からの放射 11. アンテナの基本特性 12. アンテナ素子とアンテナアレイ 13. 地上波の伝搬 14. 大気中の伝搬 15. 定期試験

【成績評価】中間試験、定期試験の成績、講義への参加状況、レポートの提出状況を総合して評価する。

【学習教育目標との関連】(D) 専門基礎 50%, (E) 専門分野 (電気電子システム)50%

【教科書】内藤著「マイクロ波・ミリ波工学」コロナ社
【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
【連絡先】田島(E棟2階南A-2, 656-9716, tajima@ee.tokushima-u.ac.jp)
【備考】平常点には講義への参加状況、レポートの提出状況を含む。試験は中間試験、定期試験を含む。平常点は 20 点で評価し、試験は 80 点で評価する。合計 60 点以上を合格とする。

無線設備管理及び法規

Electrical Communication Laws 教授・来山 征士 1 単位

【授業目的】無線局を開設、運用するにあたり、その基本となる電波法を理解し、無線局の設備管理がどのように行われているのかを習得させると共に、関連の政令、省令についても内容を解説し、具体的な無線局の運用方法について習得させる。

【授業概要】電波法の目的、定義及び無線局の免許、設備に係わる規定等を解説し、無線局を開設、運用するための知識力を養成すると共に、無線設備の管理方法についても解説を行い、知識の養成を図る。

【授業計画】1. 無線局と無線設備 2. 電波法概要 3. 無線設備管理と電波法 4. 小テスト・レポート 内容解説 5. 最近の無線技術動向 6. 電波法概要 7. 最終テスト・レポート 内容解説

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、講義への参加状況、レポートの提出状況と内容、小テスト及び最終試験の成績を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 30%, (B) 社会情報 30%, (D) 専門基礎 40%

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
【連絡先】来山(E棟3階南D-6, 656-7482, kitayama@ee.tokushima-u.ac.jp)
【備考】3 単元及び 6 単元が終了すると、レポート提出及びテストを実施するので、毎回の予習、復習は、欠かさず行うこと。[講義への参加状況、レポートの提出状況と内容]と[小テスト及び最終試験の成績]の割合は、4:6 とする。

量子工学基礎

Quantum Mechanics for Semiconductor Physics 講師・西野 克志 2 単位

【授業目的】半導体材料の性質や半導体デバイスの動作原理を理解するために必要となる半導体内の電子に関する基礎物理概念を修得する。

【授業概要】半導体材料の性質や半導体デバイスの動作原理を理解するためには、量子力学の基礎に基づいて半導体内の電子の状態を知ることが不可欠となる。授業では、最初に原子の電子状態、半導体結晶の構造および必要とされる概念、定理について修得し、次に結晶内での電子状態について解析方法とその結果得られるエネルギーバンド構造、およびブリルアン帯、有効質量等の重要な概念を修得する。また修得した基礎概念をもとにして半導体内の電子状態とその特性について理解を深める。

【受講要件】「量子力学」を履修していることが望ましい。

【到達目標】

1. 半導体の基礎物性を解析するために必要となる諸概念、定理を理解している。
2. 半導体内電子のエネルギーバンドの考え方、これに関係する諸概念を理解し、強束縛の方法によりエネルギーバンド構造の解析ができる。

【授業計画】1. 原子の電子状態、電子の波動関数 2. 多電子原子 3. 周期的ポテンシャル中の電子、バンドの形成 4. 結晶構造、結晶の周期性 5. ダイヤモンド構造、立方硫化亜鉛構造、六方硫化亜鉛構造 6. 逆格子ベクトル、第一ブリルアン領域 7. フロッコの定理 8. 前期試験 (到達目標 1. の評価) 9. エネルギーバンド 10. 状態密度とフェルミ-ディラックの分布 11. 直接ギャップ半導体と間接ギャップ半導体 12. 電子、正孔の有効質量 13. 強束縛 (LCAO) の方法、分子軌道と重なりパラメータ 14. 強束縛の方法によるエネルギーバンド構造の解析 15. 後期試験 (到達目標 2. の評価)

【成績評価】到達目標が達成されているかを試験 75%, レポート 25% で評価し、あわせて 60%以上あれば合格とする。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 30%, (E) 専門分野 (物性デバイス)70%

【教科書】配布するプリントを教科書として使用。

【参考書】C.Kittel「固体物理学入門上」丸善、A. ハリソン「固体の電子構造と物性上巻」現代工学社、P.Y. コー「半導体の基礎」シュプリンガー・フェアラーク東京

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
【連絡先】西野(E棟2階南A-5, 656-7464, nishino@ee.tokushima-u.ac.jp)

量子力学

Quantum Mechanics 助教授・道廣 嘉隆 2 単位

【授業目的】ミクロな世界の基礎法則である、量子力学を修得させる。

【授業概要】量子力学は原子分子などのミクロな世界の基本法則であり、われわれの身の回りのマクロな世界とは異なる法則に基づいている。量子力学の法則ならびにいくつかの例を講義し、量子力学の基礎的内容を提供する。

【受講要件】基礎物理学を履修しているものとする。微分積分の基礎的知識を要求する。

【到達目標】

1. シュレディンガー方程式と波動関数の意味を理解する。
2. 波動関数や期待値等を計算することができる。
3. 簡単な系に応用することができる。

【授業計画】1. はじめに (1) 2. はじめに (2) 3. 量子力学の基礎 (1) 物理量と演算子 4. 量子力学の基礎 (2) 状態と波動関数 5. 量子力学の基礎 (3) 期待値 6. 量子力学の基礎 (4) シュレディンガー方程式 7. まとめ 8. 例題 (1) 自由粒子 9. 例題 (2) 調和振動子 10. 3 次元のシュレディンガー方程式 11. 角運動量 12. 例題 (3) 水素原子 (1) 13. 例題 (3) 水素原子 (2) 14. まとめ 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】期末試験の成績と授業への取り組み状況を総合して行う。

【学習教育目標との関連】(C) 工学基礎 70%, (D) 専門基礎 30%

【教科書】小出 昭一郎著「量子力学 I」裳華房
【参考書】バイザー著「現代物理学の基礎」好学社
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】道廣(A203, 656-7550, yositaka@pm.tokushima-u.ac.jp)
【備考】目標 3 は発展的内容である。

労務管理

Personnel Management 非常勤講師・井原 康雄 1 単位

電気電子工学科（昼間コース）

- 【授業目的】世界の市場で生き残る為にヒトをどのように動かしているかを理解する。
- 【授業概要】企業経営は、経営資源（ヒト・モノ・カネ・情報）を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果（利益と持続性）を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で人的資源をいかに活用しているかについて講義する。講義計画に従い労務管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。
- 【授業計画】1. 組織と職務分掌 2. 人事管理（異動，人事考課） 3. 労働基準法 4. 労使関係 5. 能力開発，教育訓練 6. 安全衛生 7. 中間及び最終レポート（労務管理のまとめ）
- 【成績評価】講義への取り組み状況，レポートの内容
- 【学習教育目標との関連】(A) 教養・倫理 60%，(B) 社会情報 40%
- 【教科書】その都度，提供する。
- 【参考書】島田信義「新 労働基準法」学習の友社，荻原勝「人事・労務実務全書」日本実業出版社
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【備考】出席率 80%(12 回)，レポート（中間と最終）の内容 20%

電気電子工学科（夜間主コース）における教育理念

皆さんはグローバル化（国際化）という言葉をよく耳にしているであろう。今、世界は、政治・経済・貿易・産業の各分野で国際化・情報化が急速に進展し、それに伴って技術者の活躍の場も大幅に国際化している。このような国際情報化社会の動向も踏まえて、電気電子工学科では皆さんを次のように養成することを目標としている。

(1) 豊かな教養を持ち、強い責任感を有する技術者の育成

人文・社会・生命科学等に関連した豊かな教養を視点の1つに据えることができる能力、および社会と環境に対する責任を強く自覚することができる能力を持った技術者を育成する。

(2) 情報社会で活躍できる技術者の育成

高度情報化社会において自ら主体的に情報を収集・処理・活用できる能力を持つ技術者を育成する。

(3) 高度システム技術者の育成

社会人教育に対応しつつ、電気電子工学基礎科目と共にシステム工学関連の応用科目を教授することによって、応用能力を持った高度システム技術者を育成する。

電気電子工学科（夜間主コース）の教育内容と履修案内

1. 電気電子工学科（夜間主コース）の教育内容

電気は、携帯電話、コンピュータ、家電、自動車、オフィス、製造業などの広範囲で使われており、使われ方も動作を制御する神経のような役割や、電波のように情報を伝える伝送路、あるいはエネルギー源でもある。このように電気電子工学は今日の科学技術革新の中心的役割を果たし、急速に発展を続けている分野である。このような広い分野で活躍できる技術者を育成できるようにカリキュラムが組まれている。

●電気電子工学の分野とカリキュラム：電子回路の解析・設計及びコンピュータ等の知能をもつハードウェアとソフトウェア等に関連する知能電子回路分野の科目があり、コンピュータを用いた設計・制御にかかわるシステムや各種の情報処理と情報通信に関連する電気電子システム分野の科目がある。夜間主コースでは講義時間に制限があるため、電気エネルギーの発生・輸送と、動力へのエネルギー変換・利用法に関連する電気エネルギー分野の科目と、気体・液体・固体中の電子の物理現象や半導体を用いた電子デバイスの設計・製法に関連する物性デバイス分野の科目は、基礎的なものだけに限定されている。これらと授業科目との関連を示したのが、授業科目年次配列表（p.216）である。なお、教員免許状、電気主任技術者や無線従事者等の国家資格を取得するには、夜間主コースの科目以外に 印のついた昼間コースの科目（p.182）を修得する必要がある。

2. 履修方法

予習と復習をすることは必要だが、授業時間が1日に2科目程度と制限されているので、履修科目に上限は設けていない（次節の履修登録に関する規定）。

●1年生では、電気電子工学の基礎科目である電気磁気学と電気回路を修得すること。これらを理解するための道具として数学と物理の知識や思考方法を修得すること。またコンピュータはツールとして実験・実習・演習等で使用するので、コンピュータ関連の科目も修得しておくこと。これらの科目を19単位以上取得すれば進級はできるが、卒業単位を取得するためには、開講科目全てを修得すことを目指すこと（進級要件に関する規定）。

●2年生では、4つの分野の基礎科目は修得しておくこと。55単位以上修得すれば進級できる。

●3年生では、上述の2つの分野をより深く学習するように組まれている。また夜間主コースで開講されていない国家資格取得に関係する科目を、昼間コースで履修することが可能である。さらに工場見学があり、自己の適性を見出す機会となるであろう。卒業見込み証明書発行資格を満たすこと、すなわち89単位以上修得すれば進級できる。

●4年生では、より考える力を養うために、セミナーが組まれている。これは昼間コースの卒業研究と同じ扱いである。夜間主コースで開講されていない国家資格取得に関係する科目等を昼間コースで履修した場合、30単位まで卒業単位に含められ、必修科目を含めて124単位以上修得すれば卒業となる（卒業要件に関する規定）。

電気電子工学科（夜間主コース）履修登録，進級要件及び卒業見込み証明書発行資格に関する規定

1．履修登録に関する規定

履修登録できる単位数の上限を設けない。

留年学生について上級学年の科目の履修は，当該学年の科目履修を優先した上で，担当教官の承諾を得たものについてのみ認める。

2．進級要件に関する規定

以下の進級要件に関する単位数には，卒業資格に認められない単位は含まれないので注意すること。また，留年した学生が2学年上の進級規定を満たせば，飛び学年を認める。

● 1年次から2年次への進級規定

全学共通科目と専門教育科目を合わせて，19単位以上修得することを必要とする。

● 2年次から3年次への進級規定

全学共通科目と専門教育科目を合わせて，55単位以上修得することを必要とする。

● 3年次から4年次への進級規定

卒業見込み証明書発行資格を満たすこと。

● 卒業見込み証明書発行資格

全学共通科目と専門教育科目を合わせて，89単位以上修得することを必要とする。

なお，卒業見込み証明書発行資格の認定は教室会議で行う。

3．卒業要件に関する規定

全学共通科目では必修科目16単位，選択必修科目14単位を含めて，計42単位を取得すること，かつ専門教育科目では必修科目16単位を含めて，計82単位以上を取得すること，すなわちこれらを合計した124単位以上を取得すること。

電気電子工学科（夜間主コース）における大学院進学について

1．大学院

大学院においては，学部よりもさらに自主的で自由な研究活動が保証され，基礎から応用にわたる種々の研究分野の中で，本人の希望する研究分野を専攻することができる。そして，教官との接触もいっそう密になり，各自の学力，研究能力を多面的に磨いていくことができる。

大学院進学には，本学大学院へ進学する場合と他大学大学院へ進学する場合がある。本学の大学院は博士課程であり，前期課程と後期課程に分かれる。博士前期課程は修業年限が2年であり，修了すると修士（工学）の学位が与えられる。修了後，さらに研究を深めたい者には修業年限3年で博士（工学）の学位を取得できる博士後期課程への進学の道が開かれている。国際的に見ると日本は博士取得者が非常に少なく，大学や公的研究機関のみならず，企業においても研究に携わる者にとって博士の学位の必要性がますます高まることは間違いない。

本学大学院博士前期課程の入学試験は，6月末の推薦入学特別選抜試験と，例年9月上旬の一般選抜試験とがある。合格者が定員に満たないときは，翌年2月上旬に2次募集が行われる。試験科目は，数学・英語・専門科目（電気磁気学，回路理論）である。

本学大学院博士後期課程への進学を希望する一般学生に対する一般選抜試験は，9月上旬に1次募集として英語の筆記試験と専門の口述試験により行われる。合格者が定員に満たないときは，翌年2月上旬に2次募集が行われる。

2．大学院推薦入学制度

本学大学院博士前期課程の電気電子工学専攻では，学部成績が優秀な学生を対象とし，早期に大学院への受け入れを決定し，卒業研究などのより専門性の高い勉学に専心させるために，推薦入学特別選抜の制度を設けている。

推薦入学特別選抜では，筆記試験は一切行わず，主として調査書と面接（口頭試問を含む）のみで選抜を行う。合否は7月上旬に発表される。

電気電子工学科（夜間主コース）において取得できる資格

1. 教員免許状

本章 7)「教育職員免許状取得について」を参照のこと。

2. 電気主任技術者

電気主任技術者の資格は権威があり、電力会社をはじめ一般の会社で電気設備の施工・運転・保守などに従事するとき非常に有用で、卒業後しばしば必要になる。電気主任技術者は第1種、第2種および第3種の3種類があり、それぞれ取り扱うことのできる電圧の範囲が異なっている。これらの資格を得るには、電気主任技術者国家試験（電験）を受ける方法と実務経験による方法がある。電験を受ける場合、受験資格は何ら必要でなく、第1種は大学卒、第2種は短大、高専卒、第3種は高校卒程度の内容である。

実務経験によって資格を得るためには、まず大学（学部在学中）で、ある基準以上の単位を修得していなければならない。そして卒業後に、定められた内容の実務で定められた年数以上の経験を積み、申請により資格を得ることができる。従って、将来この資格を希望する諸君は十分注意して履修すること。

電気主任技術者の認定に要する科目の一覧（夜間主コース）

(1) 電気電子工学の基礎に関するもの（31単位の内、19単位以上）

量子力学（2）	電気磁気学1（2）	電気磁気学2（2）
電気回路1（2）	電気回路2（2）	過渡現象（2）
電気回路演習（1）	物性工学（2）	半導体工学（2）
電子デバイス工学（2）	計測1（2）	計測2（2）
量子エレクトロニクス（2）	システム解析（2）	アナログ電子回路（2）
パルス・デジタル回路（2）		

(2) 発電電、送配電、電気材料、電気法規に関するもの（11単位の内、10単位以上）

エネルギー工学基礎論（2）	電力系統工学1（2）	電力系統工学2（2）
発電電工学（2）	高電圧工学（2）	# 電気施設管理及び法規（1）

(3) 電気電子機器、制御、電気エネルギー利用、情報伝送・処理に関するもの（34単位の内、12単位以上）

センサ工学（2）	電気機器1（2）	電気機器2（2）
制御理論1（2）	制御理論2（2）	機器応用工学（2）
通信理論（2）	通信方式（2）	コンピュータネットワーク（2）
マイクロコンピュータ回路（2）	マイクロコンピュータ言語1（2）	信号処理（2）
アナログ演算工学（2）	プログラミング言語1（2）	プログラミング言語2（2）
アルゴリズムとデータ構造（2）	パワーエレクトロニクス（2）	

(4) 電気電子工学実験、実習に関するもの（7単位の内、6単位以上）

電気電子工学入門実験（1）	電気電子工学実験（2）	電気電子工学創成実験（1）
電気電子工学実験1（1）	電気電子工学実験2（1）	電気電子工学実験3（1）

(5) 電気電子機器設計および製図に関するもの（2単位の内、2単位）

設計製図（1）	電子回路設計演習（1）
---------	-------------

ただし（ ）の中は単位数を示し、#印は必ず取得すべき科目、印は昼間コースで履修可能な科目を示す。

その他の資格については「p.179 電気電子工学科（昼間コース）において取得できる資格」を参照のこと。

電気電子工学科（夜間主コース）

電気電子工学科（夜間主コース）教育課程表

全学共通教育科目

授業科目（分野）	単位数			開講時期及び授業時間数（1週あたり）								備考	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年			計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
人文科学分野		4	12	4	4	4	4	4	4	2		26	
社会科学分野		4											
自然科学分野		4											
情報科学分野・総合分野・学部開放分野													
外国語科目	(4)	(2)		(4)	(4)	(2)	(2)	(2)	(2)			(16)	
健康スポーツ科目	(2)			(2)	(2)							(4)	
基礎教育科目	10			6	4							10	
全学共通教育科目小計	10 (6) 16	12 (2) 14	12 12	10 (6) 16	8 (6) 14	4 (2) 6	4 (2) 6	4 (2) 6	4 (2) 6	2 2		36 (20) 56	講義 演習・実習 計

専門教育科目

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週あたり）								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
微分方程式 1	2					2						2	長町・坂口	226	
微分方程式 2	2						2					2	今井・坂口	226	
微分方程式特論			2					2				2	竹内	226	
複素関数論			2			2						2	香田	226	
量子力学			2			2						2	中村	229	
電気数学	2			2								2	入谷	224	
電気回路 1	2				2							2	來山	222	
電気回路 2			2			2						2	西尾	222	
過渡現象			2				2					2	小中	218	
電気回路演習			(1)		(2)							(2)	服部	223	
電気磁気学 1	2				2							2	大宅	223	
電気磁気学 2			2			2						2	大宅	224	
専門外国語			(1)							(2)		(2)	電気電子工学科教官	221	
電気電子工学実験	(2)								(4)			(4)	下村・北條・服部 川上(烈)・芥川・敖	224	
電気電子工学特別講義			2								2	2	電気電子工学科教官	225	
電気電子工学セミナー	(4)									(4)	(4)	(8)	電気電子工学科教官	224	
物性工学			2			2						2	直井	227	
半導体工学			2					2				2	富永	226	
電子デバイス工学			2					2				2	大野(泰)	225	
量子エレクトロニクス			2							2		2	西野	229	
センサ工学			2								2	2	田島	221	
電気機器 1			2			2						2	大西	223	
電気機器 2			2					2				2	安野・北條	223	
機器応用工学			2								2	2	鎌野	218	
エネルギー工学基礎論			2						2			2	川田	218	
発変電工学			2							2		2	井上	225	
電磁環境工学			2								2	2	伊坂	225	
計測 1			2			2						2	芥川	218	
計測 2			2							2		2	入谷	219	
制御理論 1			2					2				2	鎌野	220	
制御理論 2			2						2			2	久保	221	
システム解析			2							2		2	久保	220	
通信理論			2						2			2	木内	222	
通信方式			2							2		2	木内	221	
コンピュータネットワーク			2								2	2	大家	220	

電気電子工学科（夜間主コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数(1週当たり)								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
離散数学			2			2						2	四柳		228
アナログ電子回路			2				2					2	為貞・四柳		217
パルス・デジタル回路			2					2				2	四柳		225
マイクロコンピュータ回路			2					2				2	入谷		228
マイクロコンピュータ言語1			2					2				2	橋爪		228
マイクロコンピュータ言語2			2						2			2	橋爪		228
マイクロコンピュータ応用			2							2		2	森田		227
アナログ演算工学			2								2	2	安野		217
信号処理			2									2	2	大家	220
コンピュータ入門			(1)	(2)								(2)	西尾		219
プログラミング言語1			2			2						2	四柳・宋		227
プログラミング言語2			2				2					2	四柳・宋		227
アルゴリズムとデータ構造			2								2	2	島本		217
工業基礎数学I			(1)	(2)								(2)	吉川		219
工業基礎英語I			(1)	(2)								(2)	広田		219
工業基礎物理I			(1)	(2)								(2)	佐近		219
職業指導			4								4	4	坂野		220
専門教育科目小計	10 (6) 16		80 (6) 86	2 (8) 10	4 (2) 6	14 14	14 14	14 14	10 (4) 14	16 (6) 22	16 (4) 20	90 (24) 114	講義 演習・実習 計		

備考

1. 印の科目単位は卒業資格の単位には含まれない。
2. 全学共通教育科目には上表の開講時間枠以外にも受講可能な科目が開講されており、特別な支障がない限り受講することができる。
3. 本学科昼間コースの専門教育科目のうち、その教育課程表(p.182)に 印を付した授業科目は許可を得た上で履修することができる。これにより修得した単位は、30単位を超えない範囲で専門教育科目選択単位の卒業資格単位に含めることができる。
4. 工学部規則第3条の4第3項の規定に基づき修得した他の学科に属する授業科目については、別に定める範囲内において、専門教育科目選択科目の卒業資格単位に含めることができる。

5. 放送大学との単位互換に関する取り決め

放送大学の科目を学科長の承認を得て履修することができ、修得した単位は、下記の1)で8単位、2)で10単位を限度として卒業に必要な単位に含めることができる。ただし、1)と2)との合計単位は12単位までとする。

- 1) 全学共通教育科目の選択の中に、放送大学の全科目の科目を含めることができる。
- 2) 他学科の専門科目として、放送大学の専門科目「産業と技術」、「自然の理解」の科目を含めることができる。

	卒業に必要な単位数	全学共通教育科目	専門教育科目
必修単位	32単位	16単位	16単位
選択必修単位	14単位	14単位	
選択単位	78単位以上	12単位	66単位以上
計	124単位以上	42単位	82単位以上

電気電子工学科 (夜間主コース) 講義概要

目次

アナログ演算工学	217
アナログ電子回路	217
アルゴリズムとデータ構造	217
エネルギー工学基礎論	218
過渡現象	218
機器応用工学	218
計測 1	218
計測 2	219
工業基礎英語 I	219
工業基礎数学 I	219
工業基礎物理 I	219
コンピュータ入門	219
コンピュータネットワーク	220
システム解析	220
職業指導	220
信号処理	220
制御理論 1	220
制御理論 2	221
センサ工学	221
専門外国語	221
通信方式	221
通信理論	222
電気回路 1	222
電気回路 2	222
電気回路演習	223
電気機器 1	223
電気機器 2	223
電気磁気学 1	223
電気磁気学 2	224
電気数学	224
電気電子工学実験	224
電気電子工学セミナー	224
電気電子工学特別講義	225
電磁環境工学	225
電子デバイス工学	225
発変電工学	225
パルス・デジタル回路	225
半導体工学	226
微分方程式 1	226
微分方程式 2	226
微分方程式特論	226
複素関数論	226
物性工学	227
プログラミング言語 1	227
プログラミング言語 2	227
マイクロコンピュータ応用	227
マイクロコンピュータ回路	228
マイクロコンピュータ言語 1	228
マイクロコンピュータ言語 2	228
離散数学	228
量子エレクトロニクス	229
量子力学	229

アナログ演算工学

Analog Processing Technique 助教授・安野 卓 2 単位

【授業目的】電気・電子エンジニアとして計測工学, 制御工学, データ処理に必要な不可欠なアナログ演算の基本回路を習得させる。

【授業概要】本講義では, 各種電子回路の物理量を検出し, 信号処理を含め, デジタル演算回路への信号を発生させたり, 各種制御回路を構成する上で必要なアナログ演算の基本回路について講述する。

【到達目標】

1. 線形演算回路の解析・設計について修得する。
2. 非線形演算回路の解析・設計について修得する。

【授業計画】1. 演算増幅器 (1 回) 2. 演算増幅器の周辺回路部品 (1 回) 3. 線形演算回路 1(加算器, 減算器, 積分器, 微分器等)(3 回) 4. 中間試験 5. 線形演算回路 2(フィルタ, コントローラ, 伝達関数表現等)(3 回) 6. 非線形演算回路 1(ダイオードおよびトランジスタを用いた非線形関数発生器)(3 回) 7. 非線形演算回路 2(コンパレータ, D/A および A/D 変換器等)(1 回) 8. 予備日 9. 復習 10. 期末試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は中間試験と期末試験を 80% および平常点 (レポート等) を 20% として, 総合 60% 以上で合格とする。

【教科書】特に教科書は用いない。必要に応じてプリントを配布する。

【参考書】アナログ増幅器 (OP アンプ) に関する参考書は多数あるので参照して下さい。

【連絡先】安野(E棟2階北B-5, 656-7458, yasuno@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「アナログ電子回路」を受講していること。アナログ演算回路は計測工学, 制御工学, データ処理の分野では不可欠なものである。電気電子のエンジニアとして是非身につけて欲しい。

アナログ電子回路

Analog Electronic Circuits

教授・為貞 建臣, 講師・四柳 浩之 2 単位

【授業目的】電子機器に不可欠なアナログ信号を増幅・発振する電子回路について基礎知識を習得させる。

【授業概要】アナログ電子回路素子としてダイオード・トランジスタの特性, 各種増幅器の構成と解析法, 発振器の構成と解析法について述べる。

【授業計画】1. ダイオードとトランジスタの特性 2. 増幅回路の原理 3. 増幅器の解析法 4. バイアス回路 5. 増幅器の性能 6. RC 結合増幅回路 7. 同調増幅回路 8. 直流増幅器 9. 電力増幅回路 10. 帰還増幅の原理 11. 帰還増幅回路 12. 帰還増幅の効果 13. 発振回路の原理 14. 発振回路の解析法 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】不定期のレポート・小テストと定期試験により評価する。

【教科書】吉田典可著「電子回路 I」朝倉書店

【参考書】齊藤正男著「線形電子回路」昭晃堂

【連絡先】四柳(E棟3階南D-3, 656-9183, yanagi4@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「電気磁気学」「電気回路」を理解していることを前提に講義する。丸暗記は不可, 理解すること。成績評価に対する平常点 (出席・レポート・小テスト) と定期試験の比率は 3:7 とする。

アルゴリズムとデータ構造

Computer Algorithm and Data Structure

助教授・島本 隆 2 単位

【授業目的】与えられた問題をコンピュータで解くには, そのためのプログラムが必要である。アルゴリズムとは, そのプログラムの元となる計算手続きを言い, 理解しやすく実行効率の高いプログラムを作成する上で不可欠なものである。本科目ではその基礎知識を理解修得させる。

【授業概要】講義計画に記述したように, 数論あるいは組み合わせ論における代表的なアルゴリズムについて解説をするとともに, それらを効率よく実現するためのデータ構造について説明をする。

【受講要件】コンピュータ入門, プログラミング言語 1, プログラミング言語 2 を履修していること。

【履修上の注意】授業の進行に合わせてプログラムの演習課題が与えられる。レポート提出内容は平常点として加点するので, 毎回の予習・復習に加えてレポート提出は欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. 基本的データ構造が理解できる。
2. 木の表現, 性質および走査, および再帰呼出しが理解できる。
3. アルゴリズムの計算量が理解できる。
4. 各種ソートの基本動作および基本特性が理解できる。

【授業計画】1. アルゴリズムとは 2. 基本的データ構造 (配列, リスト) 3. 基本的データ構造 (スタック, キュー) 4. 基本的データ構造 (木) 5. 木の性質 6. 木の走査 7. 再帰呼出し 8. 中間試験 (到達目標 1, 2 の評価) 9. アルゴリズムの解析 10. 初等的整列法 (選択整列, 挿入整列) 11. 初等的整列法 (バブル整列, シェルソート) 12. クイックソート 13. 基数整列法 14. 順位キュー 15. 期末試験 (到達目標 3, 4 の評価)

【成績評価】試験 80%(中間試験 40%, 期末試験 40%), 平常点 20%(レポート, 出席状況等) として評価し, 全体で 60% 以上で合格とする。

電気電子工学科 (夜間主コース)

【教科書】セジウィック著「アルゴリズム C」近代科学社
【参考書】茨木俊秀著「C によるアルゴリズムとデータ構造」昭晃堂
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】島本(E棟3階南D-5, 656-7483, simamoto@ee.tokushima-u.ac.jp)

エネルギー工学基礎論

Fundamentals of Energy Engineering 助教授・川田 昌武 2 単位

【授業目的】人類とエネルギー, エネルギーと環境, 電気エネルギーの発生・伝送・貯蔵・利用に関する基礎事項および電気エネルギー利用に伴う電氣的環境問題などを修得する。

【授業概要】世界のエネルギー消費量は着実に増え続けており, 一次エネルギー供給に占める電気エネルギーの比率を示す電力化率も上昇している。本授業では, 世界・日本のエネルギー消費状況, 各種エネルギー資源, 電気エネルギーの特徴, 電気エネルギーの発生・伝送・利用・貯蔵・制御に関する基礎, 電氣的環境問題を取り上げ, 受講者全員でエネルギーと環境問題を討論する。なお, 最新資料, 新聞報道等も授業において解説する。

【受講要件】電気回路 1,2, 演習, 電気磁気学 1,2 を受講しておくこと。

【履修上の注意】エネルギーと環境に関連する最近のトピックについてのレポートを課す。このために新聞購読を勧める。

【到達目標】

1. 世界, 日本のエネルギー消費状況について理解する。
2. 各種エネルギー資源, 電気エネルギーの特徴について理解する。
3. 電気エネルギーの発生, 伝送, 利用, 貯蔵, 制御に関する基礎ならびに電氣的環境問題について理解する。

【授業計画】1. 電気エネルギー基礎の学び方 2. 限りあるエネルギー資源 3. エネルギー変換のしくみ 4. 力学的エネルギーと他のエネルギーとの関係 5. 熱エネルギーから電気エネルギーへ 6. 中間まとめ (到達目標 1, 及び 2 の評価) 7. 熱電発電のしくみ 8. 化学エネルギーから電気エネルギーへ 9. いろいろな燃料電池 10. 光と電気エネルギーの相互変換 11. 核エネルギーの利用 12. 電気エネルギーの伝送 13. 電気エネルギーの貯蔵 14. 電磁環境 15. 定期試験 (到達目標 3 の評価) 16. 予備日

【成績評価】到達目標の 3 項目が各々達成されているかを試験 80%, 平常点 (演習レポート)20% で評価し, 全体で 60% 以上で合格とする。

【教科書】榊原建樹著「電気エネルギー基礎」オーム社

【参考書】桂井誠著「基礎エネルギー工学」数理工学社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】川田(E棟2階北B-10, 656-7460, kawada@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】レポートの提出状況や出席が少ない場合は試験を受けることができない。

過渡現象

Transient Analysis 教授・小中 信典 2 単位

【授業目的】過渡状態に関連した諸概念, 特に線形回路の動的性質について理解させる。

【授業概要】線形回路の状態は, スイッチの開閉後過渡的に変化する状態と十分時間が経過した後の定常状態の和で表現できる。ここでは前者を解析し, 回路の諸特性を明らかにする。まず素子の性質と回路の接続状況から回路方程式をたてる方法について述べる。つぎにその回路方程式を解く方法として, 直接的な方法とラプラス変換を用いた方法を紹介する。また保存則や状態の拘束を含む場合の回路の解析方法についても講述する。

【受講要件】電気回路 1, 電気回路 2 の履修を前提として講義を行う。

【履修上の注意】授業時間中に随時小テストを行うので, 前回までの講義内容を十分復習した上で出席すること。

【到達目標】

1. 素子の性質と回路の接続状況から回路方程式をたてることができる。保存則や状態の拘束を含む場合も取り扱うことができる。
2. 直接的な方法とラプラス変換を用いた方法により, 回路方程式を解くことができる。保存則が成立する場合や強制退化が起こる場合も取り扱うことができる。

【授業計画】1. 基本回路素子の性質 (R, L, C, 電源) 2. 回路素子の接続 (キルヒホフの法則) 3. RL 回路, RC 回路の回路方程式 4. RLC 回路の回路方程式 5. 保存則と状態の拘束 6. 前半試験 (到達目標 1 の評価) 7. 線形非同次常微分方程式の解法 8. RL 回路の解析 9. RC 回路の解析 10. RLC 回路の解析 (直流電圧源を印加する場合) 11. RLC 回路

の解析 (交流電圧源を印加する場合) 12. 保存則を持つ回路の解析 13. 強制退化の起こる回路の解析 14. ラプラス変換を用いた回路解析 15. 後半試験 (到達目標 2 の評価)

【成績評価】試験 70% (前半試験 20%, 後半試験 50%) 平常点 30% (小テスト, 出席状況等) で評価し, 全体で 60% 以上あれば合格とする。

【教科書】小林邦博・川上博 共著「電気回路の過渡現象」産業図書

【参考書】川上博 著「回路 3 講義補充ノート 状態でみる回路のふるまい」

【連絡先】小中(E棟3階南D-8, 656-7469, konaka@ee.tokushima-u.ac.jp), 西尾(E棟3階南D-7, 656-7470, nishio@ee.tokushima-u.ac.jp)

機器応用工学

Applications of Electrical Machines 教授・鎌野 琢也 2 単位

【授業目的】本講義は電動アクチュエータを用いたモーションコントロールシステムの基本構成, 応答特性および応用例について習得させる。

【授業概要】本講では, まず, 産業分野で広く用いられている電動アクチュエータを用いたモーションコントロールシステムの構成要素, 動特性等について講述する。次に, より進んだモーションコントロールシステムの設計法およびロボットシステムを中心とした応用例について解説する。

【受講要件】制御理論 1, 電気機器 1, 電気機器 2 を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】授業の進行に合わせて内容確認のための演習問題が適宜与えられる。レポート内容は平常点として加点されるので, 毎回の予習・復習に加えてレポート提出は欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. モーションコントロールシステムの構成要素について把握し, その動特性が理解できる。
2. より進んだモーションコントロールシステムや, それらの応用法について理解できる。

【授業計画】1. モーションコントロールの構成要素 1~ 外界・内界センサ 2. モーションコントロールの構成要素 2~ 電動アクチュエータ 3. 直流サーボモータの動特性 1~ 伝達関数 4. 直流サーボモータの動特性 2~ 時定数・応答特性 5. 直流サーボモータのドライブ回路 6. 基本制御システム構成 ~ マイナーループの効果 7. 交流サーボモータ 8. 中間試験 9. より進んだモーションコントロールシステム 1~ 外乱オブザーバ 10. より進んだモーションコントロールシステム 2~ 二自由度システム 11. より進んだモーションコントロールシステム 3~ 適応システム 12. モーションコントロールシステムの応用例 1 13. モーションコントロールシステムの応用例 2 14. モーションコントロールシステムの応用例 3 15. モーションコントロールシステムの応用例 4 16. 期末試験

【成績評価】前半部および後半部ともに試験 80%, 平常点 20% (レポート, 出席状況等) として評価し, 全体で 60% 以上で合格とする。

【教科書】プリントを配布する。

【参考書】モーションコントロールシステム関連の図書は多数出版されている。例えば, 堀・大西著「応用制御工学」(丸善) がシステムについて詳細に記述されている。

【連絡先】鎌野(E棟2階北B-4, 656-7455, kamano@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「制御理論 1」, 「電気機器 1」, 「電気機器 2」の内容を理解していることが望ましい。試験結果と平常点の割合は 8:2 とする。

計測 1

Electrical Measurement and Instrumentation (I) 講師・芥川 正武 2 単位

【授業目的】電気電子工学のあらゆる分野において, 電気諸量の測定, 計測システムの構築は極めて重要である。その基本概念を理解させ, いろいろな電気磁気現象の測定法の基本的考え方を習得させる。

【授業概要】電気および磁氣的現象を利用して, 各種物理量を測定するために必要な基本的考え方, 方法を述べる。また, これをもとに直流および低周波領域における電気・磁気諸量の具体的な測定方法を修得する。

【履修上の注意】「電気磁気学 1」, 「電気回路 1」の内容を踏まえて講義を行うので, これらを十分理解しておくことが望ましい。

【到達目標】

1. 計測・測定の基本を理解するとともに, 電気諸量の測定標準, 電圧・電流の測定方法の基礎を修得する。
2. 電圧・電流のデジタル測定, その他の電気・磁気諸量の測定方法の基礎を修得する。

【授業計画】1. 計測と測定, 測定方法の分類 2. 測定値の統計的処理 3. 測定誤差の伝搬 4. 測定値の関係 5. 単位, 測定標準 6. 電圧・電流の測定の基礎 7. 電圧・電流のアナログ測定, 倍率器, 分流量器 8. 中間試験 9. 電圧・電流のデジタル測定 10. 抵抗, インピーダンスの測定 11. 電力の測定 12. 力率・電力量の測定 13. 磁気量の測定 14. 波形の観測と記録, 周波数・位相・周波数成分の測定 15. 期末試験

【成績評価】試験 80 点 (中間試験 40 点, 期末試験 40 点), 平常点 20 点 (毎回の授業時間に行う演習のレポート, 授業への参加状況等を総合) として評価し, 全体で 60 点以上で合格とする。

【教科書】金井・齋藤・日高著「電気磁気測定の基礎 [第 3 版]」昭晃堂, を使用する。

【参考書】菅野允著「電磁気計測演習」(コロナ社) など

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】芥川(E棟3階北C-5, 656-7477, makutaga@ee.tokushima-u.ac.jp)

計測 2

Electrical Measurement and Instrumentation (II)

教授・入谷 忠光 2 単位

【授業目的】エレクトロニクス技術を駆使した計測法, 特に高周波の計測法を修得させる。

【授業概要】増幅器やコンピュータによる信号処理技術を駆使した計測法を解説する。特に無線で用いられる高周波では回路素子を分布定数回路として扱うので, この基礎と S パラメータを用いた測定法を解説し, 更に高周波信号源, 電圧・電力, 周波数, 波形, スペクトル雑音の測定法を解説する。

【到達目標】

1. 電子計測技術とセンサーの概要が把握できる。
2. 伝送線路理論と特性およびそれらを活用する上での基本事項を修得する。
3. 信号源の動作原理と基本特性が理解できる。
4. 高周波電圧・電力および回路定数の測定原理が理解できること。
5. 波形, 周波数, スペクトルおよび雑音の測定原理が理解できること。

【授業計画】1. 電子計測の概要 2. センサー 3. 高周波測定の基礎 4. 伝送線路理論 5. S パラメータ・スミスチャート 6. 伝送線路と回路素子 (実演) 7. 測定用信号源 8. 中間試験 (到達目標 1,2,3 の評価) 9. 高周波電圧・電力の測定 10. 波形の測定 (実演) 11. 回路定数の測定 12. 周波数の測定 13. スペクトルの測定 14. 雑音の測定 15. 予備日 16. 期末試験 (到達目標 4,5 の評価)

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況, レポートの提出状況と内容, 中間試験及び最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】大森俊一・横島一郎・中根央著「高周波・マイクロ波測定」コロナ社

【参考書】都築泰雄著「電子計測」コロナ社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】入谷(E棟3階北C-2, 656-7478, iritani@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「計測」, 「マイクロ波工学」の履修を前提にして講義を行う。高周波測定の基礎の講義が終了すれば中間テストを行う。その後はレポートと最終試験を行うので毎回の予習・復習は欠かさず行うこと。成績評価に対する平常点と試験の比率は 3:7 とする。平常点には講義への参加状況, 演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み, 試験には中間試験及び最終試験の成績を含む。

工業基礎英語 I

Industrial Basic English (I)

非常勤講師・広田 知子 1 単位

【授業目的】現代社会の国際言語である英語を用いて, 科学技術分野での基礎的な語彙力, 読解力, リスニング力を養うことを目的とする。

【授業概要】科学技術分野で頻出の語彙や表現を増やす。イラスト, 写真などを参考にしながら, 内容理解のための練習問題を通して, 英文を理解する力や, 必要な情報を効率的に掴む力を養成する。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. HEAT 3. SOUND 4. COMPUTERS 5. (教科書の各章にしたがって進めていくが, 途中で適宜リスニング教材やビデオ教材なども使用する。)

【成績評価】コース最終日に試験を行う。

【教科書】ENJOY SCIENCE: データバンク (I) 『やさしい科学』 David Crystal/John Foster Asahi Press

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】授業の前に予習しておくことが望ましい。

工業基礎数学 I

Industrial Basic Mathematics (I)

非常勤講師・吉川 隆吾 1 単位

【授業目的】工学を学ぶために必要不可欠となる微分・積分の基礎的な内容について理解を図り, さらに基本的な手法や計算技術を確実に習得することを目的とする。

【授業概要】1 変数関数および多変数関数の微分・積分について, 基礎的な内容から解説する。また, 本講義の内容について, より理解を深めるために適宜演習を行う。

【授業計画】1. 微分 1: 極限と連続 2. 微分 2: 微分 3. 微分 3: 導関数の応用 4. 積分 1: 不定積分 5. 積分 2: 定積分 6. 積分 3: 定積分の応用 7. 偏導関数 1: 多変数の関数 8. 偏導関数 2: 偏導関数 9. 偏導関数 3: 全微分 10. 偏導関数 4: Taylor の定理 11. 偏導関数 5: 偏導関数の応用 12. 重複積分 1: 重複積分 13. 重複積分 2: 多重積分の応用

【成績評価】出席状況, レポート, 期末考査等により総合的に評価する。

【教科書】特に指定しない。適宜, 資料を配布する。

【参考書】矢野健太郎, 石原繁編「微分積分 (改訂版)」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義内容を確実に理解するためにも, 毎回の復習は欠かさずに行い, 次回の講義に望んでもらいたい。成績評価に対する [講義の出席状況, レポートの提出状況] と [小テストの成績] の割合は 4:6 とする。

工業基礎物理 I

Industrial Basic Physics (I)

非常勤講師・佐近 隆義 1 単位

【授業目的】

【授業概要】力学・波動・電磁気学について, ごく初歩的分野を解説する。

【授業計画】1. 運動と力: 質点及び剛体の力学, ニュートンの運動の法則, 運動量と力積・保存則 2. エネルギーと運動: 仕事, 力学的エネルギー・保存則 3. 波動: 等速円運動, 単振動, 波 4. 電気と磁気: クロウレン力, 電場と電圧, オームの法則・キルヒホッフの法則, 磁場・ローレンツ力 5. 試験

【成績評価】講義への参加状況と試験の成績を総合して行う。

【参考書】高等学校で使用される物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義の最終日に試験を実施するので, 毎回の復習を欠かさず行うこと。

コンピュータ入門

Computer Exercise

助教授・西尾 芳文 1 単位

【授業目的】電気電子工学科に在籍する 4 年間で最も活用してほしい情報処理実習室の利用に関する講義と実習を行い, コンピュータに親しみキーボードの扱いに慣れることはもちろんのこと, これからのインターネット社会に備えた教育を行う。

【授業概要】まず, コンピュータ社会における倫理 (モラルやマナー) について概説する。そして, UNIX オペレーティングシステムの操作, その上で利用可能な各種ソフトウェアの利用方法を講義・実習する。特に, インターネットを利用した電子メール・ネットニュース・WWW に関する実習を十分に行う。

【履修上の注意】本授業は, 上級科目のプログラミング関係の授業の基礎になることはもちろんのこと, 学生生活上の掲示版としても活用されているインターネット教育も行う。したがって, 十分習熟しなければ今後の学生生活に支障をきたすと思われるので, 休まずに受講して欲しい。また, 授業時間外でも申し出さえあれば実習室を開放するので, 課外時間も十分に活用してほしい。

【到達目標】

1. コンピュータ社会における倫理 (法律・モラル・マナー) を十分理解している。
2. UNIX オペレーティングシステムの操作 (基本的なコマンド操作・ファイル操作・ディレクトリ操作) を理解している。
3. インターネットを利用した電子メールやネットニュースの操作方法を理解し, 情報の送受信が自由に行える。

【授業計画】1. コンピュータ社会における倫理; 法律, モラル, マナー 2. 実習システムの使い方 3. UNIX 入門; 基本コマンド 4. ファイル操作, ディレクトリ操作 5. エディタの使い方; テキストの入力と修正 6. 日本語入力; ローマ字入力, 日本語変換 7. 中間試験 (筆記試験; 到達目標 1, 2 の評価) 8. インターネット入門; インターネットとマナー 9. ネットニュース; 送受信の一連の操作 10. 電子メール; メールアドレス, 送受信の一連の操作 11. WWW; ホームページの検索と閲覧 12. 自分の

電気電子工学科 (夜間主コース)

ホームページを作ってみよう 13. レポート作成: 文書整形ツール 14. グラフ作成ツール 15. 期末試験 (実技試験: 到達目標 3 の評価)
【成績評価】到達目標の 3 項目が各々達成されているかを試験 80%, 平常点 (実習状況や出席状況)20%で評価し, 3 項目平均で 60%以上あれば合格とする.
【教科書】講義の最初に配布するプリントを使用する.
【参考書】阿曾弘具ほか共著「UNIX と C」近代科学社
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】西尾(E棟3階南D-7, 656-7470, nishio@ee.tokushima-u.ac.jp), 大家(E棟3階北C-1, 656-7479, alex@ee.tokushima-u.ac.jp)

【授業計画】1. 行列の入力と要素の操作 2. ステートメントと変数, 特別な数値 3. さまざまな行列演算 4. コロン記号の使い方とその応用 5. グラフィックス 6. コントロール・フロー 7. M ファイルの利用 8. 中間試験 9. 線形システムの表現 10. 時間応答シミュレーション 11. 周波数応答シミュレーション 12. 制御系の仕様 13. ゲインの増減による制御系デザイン実習 14. 位相進み要素を用いた制御系デザイン実習 15. 位相遅れ要素を用いた制御系デザイン実習 16. 最終試験
【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況, 中間試験および最終試験の成績を総合して行う.
【教科書】西村正太郎編「制御工学」森北出版 (例題のみ使用)
【参考書】MATLAB ユーザーズガイド (オンライン)
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】久保(E棟3階北C-6, 656-7466, kubo@ee.tokushima-u.ac.jp)

コンピュータネットワーク

Computer Networks 講師・大家 隆弘 2 単位

【授業目的】近年, インターネットを用いたコンピュータ間の通信が爆発的に拡大し, 通信の分野において重要な位置を占めるに到っている. インターネットでは文字, 音声, 静止画, 動画などの異なる属性の情報を統一的に扱うことができる. 本講義では, このような特徴を持つコンピュータネットワークの要素技術であるデータ伝送技術, 交換技術, 計算機ネットワークの基本概念, TCP/IP(インターネットの主要プロトコル)での実装などの理解を目的とする.
【授業概要】ネットワークの基礎知識を講述する. その後, OSI 参照モデルに基づく現在の計算機ネットワークの基本概念を説明し, 計算機ネットワークの実装例として TCP/IP をあげ, 現在のネットワーク通信の実現技術と将来の展望について講述する.
【受講要件】「通信理論」「通信方式」の履修を前提とする.
【到達目標】
1. コンピュータネットワークの基本概念を理解する.
2. TCP/IP の各プロトコルの実装について理解する.
3. TCP/IP の階層間の関係について理解する.
【授業計画】1. ネットワーク基礎知識 2. OSI 参照モデル 3. TCP/IP 基礎知識 4. データリンク層 5. IP の伝送技術 6. ネットワーク層 (IP) 7. 経路制御 8. 中間試験 (到達目標 1,2 の評価) 9. トランスポート層 (TCP と UDP) 10. TCP の伝送制御 11. 経路制御プロトコル 12. アプリケーション層 (DNS, WWW) 13. アプリケーション層 (EMAIL, TELNET) 14. 物理層 15. 期末試験 (到達目標 2,3 の評価)
【成績評価】到達目標の 3 項目が各々達成されているかを試験 70%, 平常点 (出席状況, レポート)30%とし, 3 項目平均で 60%以上あれば合格とする.
【教科書】竹下, 他著「マスタリング TCP/IP 入門編」オーム社
【参考書】タネンバウム著「Computer Networks」Prentice Hall
【WEB 頁】<http://www-cc.ee.tokushima-u.ac.jp/alex/lecture/ee/computer-networks/>
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】大家(E棟3階北C-1, 656-7479, alex@ee.tokushima-u.ac.jp)

職業指導

Vocational Guidance 非常勤講師・坂野 信義 4 単位

【授業目的】
【授業概要】生涯発達 (Career Developing) としての人間観・職業観を確立すべく, 学際的見地から職業指導の課題と方法を論述し, 併せて能力開発を実践指導する.
【授業計画】1. I. 職業指導の課題と方法 2. 職業指導発展の略史 3. 職業指導の課題 4. 個性と職業 5. 1) 個人理解の方法-性格, 興味など 6. 2) 適応と適性 7. 3) Career Planning としてのライフワーク 8. 4) マネジメントスキル: リーダシップ論など 9. 職業相談 (キャリア・カウンセリング) 10. 1) 職業相談の意義 11. 2) カウンセリング理論と技術 12. 職業指導の評価 13. II. 職業指導に役立つ能力開発: 理論と実践 14. 人生 60 年計画表の作成 15. IC 法, NM 法を活用してソフト作成能力を育成 16. KJ 法を活用しての課題解決とプレゼンテーション
【成績評価】論文, 能力開発のプレゼンテーションにより成績評価.
【教科書】講師よりプリント資料配布. 参考書, 必読書については, 講義中紹介.
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【備考】「面白くてためになり, そして思い出に残る」講義が目標.

信号処理

Digital Signal Processing 講師・大家 隆弘 2 単位

【授業目的】近年, 身の回りでも発展の著しいデジタル信号処理の基礎とその応用の一部を, 講義とパソコンを使った簡単な実習 (デモを含む) により修得する.
【授業概要】デジタル信号処理の基礎から, スペクトル解析, デジタルフィルタおよびデジタル信号処理の応用までを, 講義と実習により理解し, デジタル信号処理技術の基礎を修得する.
【受講要件】「システム解析」および「通信理論」の講義を履修しておくことが望ましい.
【履修上の注意】パソコンの取り扱いに習熟しておくのが望ましい.
【到達目標】
1. 離散時間信号の考え方を理解する.
2. 離散時間信号の処理手法を修得する.
3. デジタル信号処理の応用手法を修得する.
【授業計画】1. 連続時間信号と離散時間信号, 標準化, z 変換 2. フーリエ変換, フーリエ級数, 離散フーリエ変換 3. 離散時間システム, 差分方程式, 伝達関数, 周波数特性 4. 時間ウィンドウとスペクトル推定 5. FFT の原理とアルゴリズム 6. 不規則信号と確率過程 7. 相関関数, 共分散関数 8. AR モデルと最大エントロピー法 9. FIR フィルタの特性近似 10. IIR フィルタの特性近似 11. 語長制限による特性劣化と最適化 12. デジタル信号処理の応用 13. DSP と適応信号処理 14. 画像処理
【成績評価】出席状況, 講義の終わりに行う小テスト, および最終試験の成績を総合して行う.
【教科書】森下著「わかりやすいデジタル信号処理」昭晃堂
【参考書】辻井監修「デジタル信号処理の基礎」電子情報通信学会 (コロナ社), 伊達訳「デジタル信号処理 (上),(下)」コロナ社など.
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【連絡先】大家(E棟3階北C-1, 656-7479, alex@ee.tokushima-u.ac.jp)

システム解析

System Analysis 助教授・久保 智裕 2 単位

【授業目的】コンピュータを活用して制御系のデザインを行う方法について解説する. また 1 人 1 台ずつコンピュータを割り当てて, 実際に制御系デザインを体験してもらう.
【授業概要】制御系デザインとは, フィードバック制御されたシステムが与えられた仕様を満足するように補償器の特性を定めることである. 近年ではコンピュータを用いてこれを行うことが多くなってきた. 本講前半ではソフトウェア MATLAB の使用方法について説明する. 後半ではマイコン実習室で実際にこれを用い, 各自制御系デザイン作業を体験してもらう. 一人一人で工夫をこらしながらデザインをしていく過程を通じて, 与えられた仕様を満足するデザインの手法は画一的ではないということに気付いて欲しい.
【受講要件】制御理論 1, 制御理論 2 の履修を前提として授業を行う.
【履修上の注意】原則としてすべて板書によって授業を進めるので, ノートをしっかりとりとる. もし欠席してしまったら, 次の授業までに他の学生にノートを写させてもらっておくこと.
【到達目標】
1. 基本的な行列演算をプログラミングできるようになる.
2. コンピュータを利用した制御系の解析および設計の基本を身につける.

制御理論 1

Control Theory (I) 教授・鎌野 琢也 2 単位

電気電子工学科 (夜間主コース)

【授業目的】制御の定義・種類・構成などを明らかにし、伝達関数法に基づく制御システムの解析法、表示法、安定判別法などを習得させる。

【授業概要】本講では、制御の概念を明らかにし、フィードバック制御システムを学ぶための基礎理論について述べる。

【受講要件】微分方程式をはじめ電気回路や過渡現象などの基礎科目を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】授業の進行に合わせて内容確認のための演習問題が適宜与えられる。レポート内容は平常点として加点されるので、毎回の予習・復習に加えてレポート提出は欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. フィードバック制御システムの構成要素を伝達関数で表現でき、それを用いて過渡応答特性を求められること。
2. フィードバック制御システムの安定性について理解し、安定判別法および周波数応答特性より安定判別できること。

【授業計画】1. 制御の定義・種類・構成 2. 制御システムの記述～微分方程式とラプラス変換 3. 伝達関数 1～定義と比例要素・積分要素・微分要素 4. 伝達関数 2～一次遅れ要素と二次遅れ要素、むだ時間要素 5. ブロック線図による表示と解析 6. 過渡応答特性 1～インパルス応答 7. 過渡応答特性 2～インディシャル応答 8. 中間試験 9. 安定性の概念 10. 安定判別法 1～極と安定性の関係、ラウスの判別法とフルビッツの判別法 11. 周波数応答 12. 周波数応答特性 1～ベクトル軌跡 13. 周波数応答特性 2～ボード線図とニコルス線図 14. 安定判別法 2～ナイキストの安定判別法 15. 安定判別法 3～ボード線図、安定余り 16. 期末試験

【成績評価】前半部および後半部ともに試験 80%、平常点 20%(レポート、出席状況等)として評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【教科書】北村・武川・松永著「制御工学」森北出版を使用する。

【参考書】制御理論に関する参考書は多数出版されており、いずれを参照しても良い。

【連絡先】鎌野(E棟2階北B-4, 656-7455, kamano@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】教科書の章末問題を各自解いておくこと。試験結果と平常点の割合は 8:2 とする。

制御理論 2

Control Theory (II)

助教授・久保 智裕 2 単位

【授業目的】前半では伝達関数法に基づく連続時間制御系の設計法、後半ではデジタル制御系の解析および設計法について修得させる。

【授業概要】本講は「制御理論 1」に引き続き、制御理論を学んでいくものである。前半では伝達関数を用いて制御システムのさまざまな特性を仕様という形で記述し、与えられた仕様を満足するようなフィードバック制御システムをどのように構成したらよいかという設計問題について講述する。一方近年では、制御系を構成する要素としてデジタルコンピュータが広く用いられている。本講の後半では、連続時間系を制御するためにデジタルコンピュータを接続したデジタル制御系の解析法および設計法について講述する。

【受講要件】制御理論 1 の履修を前提として授業を行う。

【履修上の注意】ノートをしっかりとること。

【到達目標】

1. 伝達関数法による制御系設計法のうち、とくに位相遅れ進み補償、PID 補償の考え方を理解する。
2. デジタル制御系の構造を理解し、解析法の基礎を身につける。

【授業計画】1. フィードバック制御の意義 2. 制御系の設計仕様 1(定常偏差) 3. 制御系の設計仕様 2(過渡応答波形など) 4. 制御系の設計仕様 3(安定余裕など) 5. サーボ系の設計法 1(位相遅れ補償) 6. サーボ系の設計法 2(位相進み補償) 7. プロセス系の設計法 (PID 制御) 8. 中間試験 9. デジタル制御系の考え方 10. サンプリングと A/D, D/A 変換 11. Z 変換とパルス伝達関数 12. 過渡応答 13. 安定性の解析 14. デジタル制御系の設計仕様 15. デジタル制御系の設計法 16. 最終試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、中間試験および最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】西村正太郎編「制御工学」森北出版

【参考書】講義時間中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】久保(E棟3階北C-6, 656-7466, kubo@ee.tokushima-u.ac.jp)

センサ工学

Fundamentals and Applications of Sensor Devices

助教授・富永 喜久雄 2 単位

【授業目的】ともすれば軽視されがちなセンサ工学の必要性・重要性を認識させ、具体的な各種センサの原理・構造などを理解させる。

【授業概要】被測定物のもつ情報(物理量や化学量)を電気量やその他の量に変換するセンサは、計測技術や制御技術の発展に加え、コンピュータの発達により、ますます重要性を増しつつある。本講義では、センサとは何か、と言う定義から出発し、その必要性・重要性に触れた後、具体的なセンサについてその原理や構造を解説する。

【受講要件】本学科の夜間主コースで開講されている、電気回路 1、電気磁気学 1、電気磁気学 2、物性工学、半導体工学、電気機器 1、計測 1、制御理論 2 を履修していること。

【履修上の注意】講義の後で毎回ミニテストを行い、講義への集中度をチェックするとともに、講義には OHP を使用する ため出席を重視し、これらの結果を平常点として成績評価に反映する。

【到達目標】

1. センサとはどういうものであるかを理解し、その機能や役割および必要性を認識する。
2. 様々なセンサについて、その原理や構造および用途など、できるだけ多くの具体例を把握する。
3. センサが組み込まれたシステムの具体例、センサに対するニーズおよびセンサの開発状況等を知る ことにより、センサの重要性を認識する。

【授業計画】1. センサの定義と工学におけるセンサの役割 2. 工学的センサと生体の機能 3. センサに用いられる各種効果 4. 計測対象とセンサの種類 5. 中間試験(目標 1. の評価) 6. 温度センサ・圧力センサ 7. 長さ・厚さ・レベル・角度・変位センサ 8. 力・トルク・速度・加速度センサ 9. 湿度センサ・成分分析・ガスセンサ 10. カラー・画像センサおよびその他特殊センサ 11. 中間試験(目標 2. の評価) 12. センサのシステムへの適用例 13. センサに対するニーズ 14. センサの開発状況と今後のセンサ 15. 今後の科学技術とセンサ工学 16. 期末試験(目標 3. の評価)

【成績評価】単位の取得については、目標の各々が達成されているかを試験 70%、平常点(ミニテストの結果と出席状況)30%で評価し、3 項目平均で 60%以上であれば合格とする。

【教科書】当該科目のために特別に用意したプリントを用いて講義を行う。また、講義では毎回 OHP を使用する。

【参考書】特に指定はしないが、出版されているセンサ関連の書物を参考にすると理解に役立つことは言うまでもない。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】富永(E棟2階南A-6, 656-7439, tominaga@ee.tokushima-u.ac.jp)

専門外国語

Foreign Language for Electrical and Electronic Engineering

電気電子工学科教員 1 単位

【授業目的】国際化、グローバル化した現代では、専門分野の事項についても、英語による情報を取得したり、英語で表現したりする必要性がますます高まってきた。この授業では、電気電子工学における英語の能力を向上させることを図る。

【授業概要】専門分野の基礎的事項(電気磁気学、電気回路)の英文テキストを輪読するとともに、それらの英作文の授業も行う。

【到達目標】電気電子工学の基礎的事項に関する英文読解、英作文のための基本的能力を修得する。

【成績評価】授業への参加状況と定期試験により評価する。この 2 つを総合して成績を出す。

【教科書】特製テキストを用いる。

通信方式

Communication Systems

教授・木内 陽介 2 単位

【授業目的】通信工学において音声、画像、データなどの信号を遠方どのようにして伝送するかということを学ぶ。それに用いられる具体的な通信方式、通信回路、通信機器について講義する。

【授業概要】3 年前期で学んだ「通信理論」を用いて、実際に通信を行うための具体的な方式を講義する。通信工学を通信方式により分類し、前半では放送等に用いられているアナログ通信方式を、後半ではデータ伝送等に用いられているデジタル通信方式を解説する。この講義で通信工学の具体的な体系を把握できることを目指している。

【受講要件】「通信理論」を受講しておいてほしい。

【履修上の注意】週 2 回講義を行う。教科書の分りにくいところをプリントで補足してある。

【到達目標】

電気電子工学科(夜間主コース)

1. アナログ通信方式を理解する。
2. デジタル通信方式を理解する。

【授業計画】1. アナログ通信の概要とその技術史 2. AM 通信方式 3. FM 通信方式 4. 変復調回路・レポート 5. アナログパルス通信方式 6. アナログ通信方式の雑音特性 7. 多重通信方式 8. 中間試験 9. デジタル通信の概要とその技術史 10. 帯域圧縮と伝送符号 11. パルス伝送と等化・レポート 12. デジタル変調方式 13. デジタル通信の雑音特性 14. 通信機器 15. 全体のまとめ 16. 定期試験

【成績評価】講義の出席状況、提出されたレポート、中間試験、定期試験の結果を総合して行う。

【教科書】田崎、美咲編「通信工学」朝倉書店、自作プリント

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】木内(E棟3階北C-4, 656-7475, kinouchi@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義では「通信理論」で学んだ結果を多く引用するので、忘れていた場合は必ず復習をして確認してほしい。また教科書の内容を補足し、例題、演習を載せたプリントを副教材として配布するので、自分で解き、質問はオフィスアワーを利用してほしい。出席状況、レポートによる平常点と中間試験、定期試験による評価の比は 2:8 とする。

通信理論

Basic Theory of Electronic Communication

教授・木内 陽介 2 単位

【授業目的】情報化社会の中核技術の 1 つが通信技術であり、電気電子分野で広く活用される技術となっている。ここでは通信技術を正確に理解するための基礎となる理論を解説する。

【授業概要】信号を時間領域および周波数領域で解析するための理論、および信号伝送・処理のための手法について講義する。また信号を用いて情報伝送する観点からの基礎理論を講義する。

【受講要件】簡単な微分、積分、複素数および確率の基礎が理解できていることを前提とし、電気回路 1・演習、電気回路 2・演習、過渡現象の内容を復習しておくことが望ましい。

【履修上の注意】週 2 回講義を行う。配布するプリントには理解を助ける例題が多く掲載されているので、自分で解いて力をつけてほしい。2 週間に 1 回程度、演習問題を宿題とする。

【到達目標】

1. 信号の時間領域、周波数領域での解析ができる。
2. 信号および情報伝送の基礎理論を修得する。

【授業計画】1. 複素フーリエ級数と信号解析 2. フーリエ変換による信号解析 3. フーリエ変換の性質と通信応用 4. インパルスを用いた信号解析 5. フーリエ変換の演習 6. パルスの不確定性原理と通信 7. 標準化定理と信号伝送・処理 8. 中間試験(到達目標 1. の評価) 9. 通信路の伝送特性 10. 通信路の歪みとフィルタ 11. パワースペクトル密度とその有用性 12. 確率と情報 13. エントロピーと情報伝送 14. 情報源符号化 15. 期末試験(到達目標 2. の評価)

【成績評価】試験 80%(中間試験 40%, 期末試験 40%), 平常点 20%(レポート、出席状況等)として評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【教科書】自作プリント、島田・木内・大松著「わかる情報理論」日新出版

【参考書】田崎・美咲編「通信工学」朝倉書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】木内(E棟3階北C-4, 656-7475, kinouchi@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】さほど予備知識は必要としないが、新しい考え方、概念が出てくるので講義には必ず出席してほしい。図を描きながら分かりやすく説明する。またプリントには例題、演習問題が多く載せてあるので、自分で解き、実力をつけてほしい。

電気回路 1

Electrical Circuit Theory (I)

教授・来山 征士 2 単位

【授業目的】電気電子工学の重要な基礎科目として、直流回路および交流回路の解析に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】直流回路においてはオームの法則と 2 つのキルヒホッフの法則、電圧源および電流源、回路解析について学ぶ。交流回路においては正弦波交流電源や、抵抗、インダクタおよびキャパシタの線形素子からなる回路の定常状態における解析をするため、記号法と呼ばれる手法を学ぶ。さらに、回路解析でよく利用される諸法則について学ぶ。

【受講要件】電気数学の内容、特に行列演算、ベクトル、三角関数等が重要であり、これらの内容を復習しておくことが望ましい。

【履修上の注意】電気回路演習と連携しているので、電気回路演習も受講すること。

【到達目標】

1. 直流電源、抵抗素子とその直並列接続、オームの法則、キルヒホッフの法則、回路解析手法、重ね合わせの理を理解し、それらを用いて直流回路解析ができる。
2. 交流電源(正弦波電源)、キャパシタとインダクタの素子特性、記号法を用いた解析手順を理解し、それらを用いて交流回路解析ができる。また電力の求め方を理解している。
3. 等価回路、ブリッジ回路、周波数特性、整合等の回路解析に有用な諸定理を理解し、それらを回路解析に利用できる。

【授業計画】1. 抵抗の素子特性、オームの法則、直流電源、抵抗の直並列接続と合成抵抗、電力 2. キルヒホッフの電流則と電圧則 3. 節点解析・網目解析・混合解析の手順、重ね合わせの理 4. 中間試験(到達目標 1 の評価) 5. 正弦波、振幅、角周波数、位相、瞬時値、実効値、交流電源 6. キャパシタの素子特性、インダクタの素子特性 7. 複素指数関数、オイラーの公式、複素数の実部と虚部、複素抵抗 8. 記号法の解析手順、複素インピーダンス、記号法を用いた回路解析 9. 合成インピーダンス、キルヒホッフの法則・回路解析手法の交流回路への適用 10. 瞬時電力、複素電力、有効電力、無効電力、皮相電力、力率 11. 中間試験(到達目標 2 の評価) 12. 線形性等の回路の性質、交流回路の重ね合わせの理、電力の重ね合わせ 13. テブナンの定理と等価回路、ノートンの定理と等価回路、 Δ -Y 変換 14. ブリッジ回路と平衡条件、定抵抗回路、共振回路、整合 15. 期末試験(到達目標 3 の評価)

【成績評価】到達目標の 3 項目が各々達成されているかを試験 80%、平常点(演習レポートや出席状況)20%で評価し、3 項目平均で 60%以上あれば合格とする。

【教科書】川上、島本共著「例題と課題で学ぶ電気回路-線形回路の定常解析-」コロナ社から出版予定(それまでは自作冊子を使用)

【参考書】山口勝也 他著「詳解電気回路例題演習(1),(2)」コロナ社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】来山(E棟3階南D-6, 656-7482, kitayama@ee.tokushima-u.ac.jp)

電気回路 2

Electrical Circuit Theory (II)

助教授・西尾 芳文 2 単位

【授業目的】電気電子工学の重要な基礎科目として、電気回路 1 に引き続き、相互結合素子、2 端子対回路、3 相交流回路、分布定数回路の解析に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】まず、新たな回路素子として、相互インダクタやジャイレータ等、1 次側と 2 次側の電圧・電流が相互に影響しあう回路素子の特性を学ぶ。そして、1 次側と 2 次側の電圧・電流の関係を記述する 2 端子対回路の考え方を学ぶ。さらに、3 つの交流電圧源が印加された 3 相交流回路の解析方法、素子定数の空間的な広がりを考慮した分布定数回路の解析方法について学ぶ。

【受講要件】先に開講されている電気回路 1 の授業内容が基礎になった講義であるため、電気回路 1 の内容を十分に復習しておくことが必須である。

【到達目標】

1. 相互インダクタ・制御電源等の相互結合素子の特性を理解し、それらを含む回路を解析できる。2 端子対回路の考え方を理解し、1 次側と 2 次側の電圧・電流の関係を記述できる。
2. 対称 3 相交流電源の性質を理解し、その電源に対称あるいは非対称な 3 相負荷が接続された回路を解析できる。また 3 相交流回路の電力の求め方を理解している。
3. 素子定数の空間的な広がりを考慮した分布定数回路(特に伝送線路)を解析できる。また、無損失等の様々な条件下での特性を理解し、それらを伝送線路解析に利用できる。

【授業計画】1. 相互インダクタの素子特性と等価回路、極性の扱い 2. 制御電圧源・制御電流源の扱い、理想変成器の素子特性 3. ジャイレータの素子特性、相互結合素子のまとめ 4. 2 端子対回路の考え方、インピーダンス行列・アドミタンス行列の定義と求め方 5. 4 端子行列(F 行列)の定義と求め方、基本回路の F 行列と縦続接続 6. 相互インダクタ・理想変成器・ジャイレータの F 行列と縦続接続、直列接続、並列接続 7. 中間試験(到達目標 1 の評価) 8. 対称 3 相電源の性質と Δ 型・Y 型の接続、対称 3 相負荷の接続と解析方法 9. 非対称 3 相負荷の接続と解析方法 10. 3 相交流回路の複素電力と有効電力、2 電力計法の概念と求解法 11. 中間試験(到達目標 2 の評価) 12. 分布定数回路(伝送線路)の微小区間モデルと回路方程式、伝搬定数と特性インピーダンス 13. 無損失線路・無ひずみ線路・無限長線路の条件、伝送線路の電圧・電流・インピーダンス 14. 出力端短絡・開放・整合などの条件

電気電子工学科(夜間主コース)

下での伝送線路の電圧・電流・インピーダンス 15. 期末試験(到達目標3の評価)

【成績評価】到達目標の3項目が各々達成されているかを試験80%、平常点(演習レポートや出席状況)20%で評価し、3項目平均で60%以上あれば合格とする。

【教科書】電気回路1で使用した教科書を引き続き使用

【参考書】山口勝也 他著「詳解電気回路例題演習(2),(3)」コロナ社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】西尾(E棟3階南D-7, 656-7470, nishio@ee.tokushima-u.ac.jp)

電気回路演習

Exercise of Electrical Circuit Theory 助手・服部 敦美 1単位

【授業目的】講義「電気回路1」に関連する演習問題を解くことにより、回路解析に必要な計算力を身につけ、応用力を養う。

【授業概要】一般に回路解析を行うには、オームの法則やキルヒホッフの法則、あるいはそれらから導かれる種々の法則や定理を用いて回路方程式を導き、それを解くことによって所望の電圧や電流あるいは電力などを計算する。この過程の前半は「電気回路1」の講義から得られる電気回路に関する知識をもとにしたものであり、後半は基礎数学の知識を用いて方程式を解くことである。ここでは回路解析の考え方や解法をいろいろの演習問題に適用して問題を解く。

【受講要件】電気数学、電気回路1を履修していること。

【履修上の注意】数値計算をすることがあるので関数電卓を各自で用意すること。

【到達目標】

1. 直流回路を解釈でき、回路方程式を立てることができる。
2. 直流回路の方程式を解釈でき、実際に解くことができる。
3. 交流回路を解釈でき、回路方程式を立てることができる。
4. 交流回路の方程式を解釈でき、実際に解くことができる。

【授業計画】1. 連立1次方程式の解法(1) 2. 連立1次方程式の解法(2) 3. 直流回路の解法(1) 4. 直流回路の解法(2) 5. 直流回路の解法(3) 6. 中間試験(1) 7. 複素数・記号法と交流回路(1) 8. 複素数・記号法と交流回路(2) 9. 複素数・記号法と交流回路(3) 10. 中間試験(2) 11. 交流回路の解法(1) 12. 交流回路の解法(2) 13. 交流回路の解法(3) 14. 中間試験(3) 15. 総合演習 16. 定期試験

【成績評価】中間試験と定期試験を総合して点数で評価する。

【教科書】「電気回路1」で使用する教科書を用いるほか、補助テキストを講義中に配付して使用する。

【参考書】榊・大野・尾崎著「大学課程 電気回路(1)」(オーム社)

【連絡先】服部(E棟3階北C-8, 656-7467, hattori@ee.tokushima-u.ac.jp)

電気機器1

Electrical Machines (I) 教授・大西 徳生 2単位

【授業目的】電気機器の種類と基本原理および相互関係を体系的に説明した後、変圧器と誘導機について基本構造、基本原理を理解させ、電気的等価回路から基本的な特性が導き出される現実の機器の基本を修得させる。

【授業概要】電気機器は電気・機械、電気-電気エネルギー間のエネルギー変換機器として産業分野で広く用いられている。この講義では、先ず各種電気機器の分類を行い、互いの関係等について説明する。その後、電気-電気エネルギー変換装置として交流電圧が高い効率で変換可能な変圧器について講述する。次に電気・機械エネルギー変換機器としての誘導機は非同期機器に属し、安価で丈夫な動力源として広く用いられている。ここでは、主に商用電源を対象に話を進めるが、可変周波数電源が発生できるインバータとの組み合わせによる制御法や応用例の基本についても簡単に述べる。

【到達目標】

1. 変圧器の基本原理と基本動作および活用法が理解できること。
2. 変圧器の諸特性が計算できること。
3. 誘導機の基本原理と基本動作および活用法が理解できること。
4. 誘導機の諸特性が計算できること。

【授業計画】1. 電気機械エネルギー変換と機器の歴史 2. 変圧器の原理と基本構造 3. 変圧器の基本式 4. 変圧器の等価回路とベクトル図 5. 変圧器の回路定数と電圧変動率 6. 変圧器の損失と効率 7. 変圧器と結線法各種変圧器 8. 中間試験 9. 誘導機の原理と基本構造 10. 回転磁界と誘導機の基本式 11. 誘導機の等価回路とベクトル図 12. 誘導電動機の基本特性 13. 誘導機の始動法 14. 誘導機の種類と電圧変動率算定法 15. 復習と演習 16. 定期試験

【成績評価】前半の変圧器は中間試験結果、後半の誘導機については期末試験結果をもとに受講状況、レポートの提出状況と内容等の平常点も加味して、それぞれ50%以上、合計60%以上の成績で合格とする。

【教科書】中田・沖津編著「電気機器」朝倉書店

【参考書】難波江・金・高橋・仲村著「基礎電気機器学」、「電気機器学」電気学会(オーム社)、松井著「電気機器」森北出版

【連絡先】大西(E棟2階北B-1, 656-7456, ohnishi@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】電気機器の中で「変圧器」、「誘導機」の2項目の履修を前提にして講義を行う。他の電気機器科目は別途開講。講義の中で、演習課題を出し、質問の正答者には平常点を加算するので毎回の予習・復習は欠かさず行うこと。成績評価に対する平常点と中間期末の試験の比率は2:8とする。

電気機器2

Electrical Machines (II)

助教授・安野 卓, 助手・北條 昌秀 2単位

【授業目的】直流機および同期機について、構造、原理および制御法等について講述し、両機の基本特性について習得させる。

【授業概要】本講義の内容は、直流機と同期機であり、直流機は主として電動機として用いられるので、直流電動機を主体に講述する。同期機は主に発電機として用いられるので、同期発電機を取り上げて講述する。

【履修上の注意】予習・復習を十分行うことを希望する。

【到達目標】

1. 同期発電機の構造、原理、基本特性等について修得する。
2. 直流電動機の構造、原理、基本特性等について修得する。

【授業計画】1. 直流機の定義・原理・構造 2. 直流機の誘導起電力と発生トルク 3. 励磁方式と直流機の種類 4. 電機子反作用と整流 5. 直流電動機の基本特性 6. 直流電動機の種類と特徴 7. 復習と演習 8. 直流機試験 9. 同期機の定義・原理・構造 10. 同期発電機の種類と特徴 11. 電機子巻線、界磁巻線と集中巻の誘導起電力 12. 巻線係数と巻線接続 13. 電機子反作用とベクトル図 14. 同期発電機の特性と電圧変動率算定法 15. 復習と演習 16. 同期機試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、レポートの提出状況と内容、直流機および同期機の試験結果を総合して行う。

【教科書】中田・沖津編「電気機器I, II」朝倉書店

【参考書】直流機と同期機に関するテキストは多数あるので参照して下さい。

【連絡先】安野(E棟2階北B-5, 656-7458, yasuno@ee.tokushima-u.ac.jp), 北條(E棟2階北B-2, 656-7452, hojo@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】教科書章末問題を各自解いておくこと。試験と平常点の割合は8:2とする。

電気磁気学1

Electromagnetic Theory (I) 教授・大宅 薫 2単位

【授業目的】真空中および誘電体中の静電気現象を理解させ、電界や電位の定義と計算方法を修得させる。

【授業概要】まず電気磁気学に必要なベクトル場について説明したのち、電界や電位の考え方から出発し、主に静電気現象の理解に重点をおいた講義を行う。必要な数学(ベクトル解析、関数、微分・積分、座標、微分方程式)に関する知識はその都度与えることとし、その際、演習も含めてそれらを使えるように指導する。また、並行して電気磁気学1の内容に関する演習を行い、内容の理解を深めるとともに、問題を解く力をつける。

【到達目標】

1. 電界と電位の考え方を理解し、真空中の電荷による電界と電位が計算できる。
2. ガウスの定理を用いて電界の計算ができ、導体の性質と静電容量の考え方を理解する。
3. 誘電体の性質を理解し、様々なコンデンサの静電容量と静電エネルギーが計算できる。

【授業計画】1. ベクトル解析の基礎 2. 演習・レポート 3. 電界、電気力線、電位、等電位面 4. 演習・レポート 5. ガウスの定理 6. 演習・レポート 7. ラプラス・ポアソン方程式 8. 中間試験 9. 導体と静電容量 10. 演習・レポート 11. 誘電体、境界条件 12. 演習・レポート 13. 静電エネルギー 14. 導体および誘電体に働く力 15. 演習・レポート 16. 期末試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容、及び中間試験と期末試験の成績を総合して行う。

電気電子工学科 (夜間主コース)

【教科書】小塚洋司著「電気磁気学 その物理像と詳論」森北出版
【参考書】ファインマン・レイトン・サイズ著宮島龍興訳「ファインマン物理学 電気磁気学」岩波書店
【連絡先】大宅(E棟2階南A-9, 656-7444, ohya@ee.tokushima-u.ac.jp)
【備考】1~2回の講義が終わるごとに演習を行いレポートを課す。毎回の予習・復習は欠かさず行うこと。成績評価に対する平常点と試験の比率は3:7とする。平常点には講義への参加状況、演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含む。

電気磁気学 2

Electromagnetic Theory (II)

教授・大宅 薫 2単位

【授業目的】様々な電流によって生じる磁界について、その基本法則および計算方法を修得する。また応用上重要な、電流によって生じる磁界が引き起こす様々な現象について理解を深める。

【授業概要】最初に電流によって真空中に生じる磁界に関する2法則の物理像を説明し、様々な形状の回路を流れる電流が作る磁界の計算方法を修得する。次に磁界が関係する応用上重要な、磁性体、インダクタンスおよび電磁誘導現象についてその基礎概念を説明し、それぞれについて例解を行い、また演習問題を課すことにより諸量の計算方法にも習熟する。

【受講要件】「電気磁気学 1」を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】3~4回の講義の後、3回の小テストを行い、最後に試験を行う。

【到達目標】

1. 与えられた電流に対してこれより生じる磁界をアンペアの周回積分の法則またはビオ・サバールの法則を用いて計算できる。
2. 磁界、磁束密度、透磁率の関係および磁性体の性質を理解し、ベクトルポテンシャル、磁気回路の考え方をを用いて磁性体を含む系の磁界等が計算できる。
3. 磁束鎖交数の考え方を理解し、インダクタンスが計算できる。
4. 電磁誘導の考え方を理解し、さまざまな回路に生じる誘導起電力が計算できる。

【授業計画】1. アンペアの周回積分の法則 2. ビオ・サバールの法則 3. 磁界中の電流と運動電子に働く力 4. 小テスト(到達目標1.の評価) 磁化、磁束密度、透磁率 5. 減磁力、磁力線、磁化線、磁束線 6. ベクトル・ポテンシャル 7. 強磁性体、ヒステリシス損、磁気回路 8. 小テスト(到達目標2.の評価) 磁束鎖交数 9. インダクタンス 10. 電流の有する磁気的エネルギー 11. 小テスト(到達目標3.の評価) 電磁誘導法則、誘導起電力 12. 自己誘導作用、相互誘導作用 13. 電流の流れている回路に働く力 14. 導体における表皮効果、うず電流 15. 定期試験(到達目標1~4の評価)

【成績評価】到達目標の4項目が各々達成されているかを小テスト、定期試験90%、平常点(出席状況)10%で評価し、4項目平均で60%以上あれば合格とする。

【教科書】小塚洋司「電気磁気学」森北出版

【参考書】V.D. パーガー・M.G. オルソン「電磁気学 I」培風館、卯本重郎「電磁気学」昭晃堂

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大宅(E棟2階南A-9, 656-7444, ohya@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「電気磁気学 1」を履修していることが望ましい。平常点と試験の比率は4:6とする。平常点は講義への出席状況と、小レポートの内容で評価する。

電気数学

Mathematics for Electrical and Electronic Engineering

助教授・富永 喜久雄 2単位

【授業目的】電気電子工学の大部分は数式を用いて記述されている。したがって、電気電子工学を学ぶためには数学を理解し、その基礎知識を持っておくことが必要である。この講義では特に、1年後期より始まる必修科目の電気回路を勉強するために必要な数学の基礎を解説する。

【授業概要】高校で習った数学のうち、特に電気電子工学で必要となる事柄を復習し、さらに、電気回路を学習する上で重要な行列、ベクトル、複素数、指数関数、三角関数、正弦波などを講義する。

【授業計画】1. 高校数学のおさらい(第1~3週) 2次方程式、関数、グラフ、微分、積分、集合 2. 1次関数と行列・ベクトル(第4~6週) 1次関数、連立一次方程式、行列、ベクトル 3. 中間試験(第7週) 4. 複素数(第8~10週) 正弦波、位相、合成、複素正弦波、微分方程式 5. 正弦波と複素正弦波(第11~13週) 6. まとめ(第14,15週) 7. 期末試験(試験期間)

【成績評価】平常点(講義への参加状況、演習、レポート、小テスト):中間試験:期末試験を概ね3:3:4で評価し、総合的な判断も加えた上で成績を評価する。

【教科書】講義の最初にこちらで用意している冊子を配布する。

【連絡先】富永(E棟2階南A-6, 656-7439, tominaga@ee.tokushima-u.ac.jp)

電気電子工学実験

Electrical and Electronic Engineering Laboratory

助教授・下村 直行, 講師・芥川 正武, 助手・服部 敦美, 北條 昌秀
助手・教 金平, 川上 烈生 2単位

【授業目的】電気電子工学に関する実験を通じて、必要な実験操作方法や理論の基礎に関する理解を深める。各種機器の取扱い方法を習得する。また技術ドキュメントの作製に慣れる。さらに様々な実験を通して、安全意識(安全教育)、科学者・技術者としての倫理観の芽生えを促す。

【授業概要】各実験の概要については実験計画を参照のこと。

【受講要件】特に定めないが、各実験課題の対応する講義を習得していることが望ましい。

【履修上の注意】すべての実験について実験報告書の提出が求められる。すべての実験を行い、すべての報告書が合格した人のみ単位が与えられる。

【到達目標】

1. 実験対象の原理および特性を理解すること。
2. 計画的かつ安全に実験を実行し、実験対象の特性の検証に必要なデータの収集ができること。
3. 実験内容に基づいた理論的な技術ドキュメントの作成ができること。

【授業計画】1. インピーダンスの測定(1週) 電気抵抗、コイルのインダクタンス、コンデンサのキャパシタンスを実測する。2. 共振特性(1週) 直列共振回路および相互誘導による結合回路の電圧電流を測定して共振現象を調べる。3. 交流磁化特性(1週) 環状鉄心資料の交流磁化特性をオシロスコープによって実測し、磁気現象について調べる。4. オシロスコープ(1週) ブラウン管オシロスコープの性能、構成および取扱方法を知り、種々の信号を測定する。5. トランジスタの特性(1週) 接合トランジスタの基本回路の静特性と電界効果型トランジスタの特性を測定し、動作原理を理解する。6. 薄膜の作製とその評価(I)(II)(2週) 半導体デバイスプロセスを実際に体験し、作製の各段階における評価方法を通じて、物理計測について学ぶ。7. 単相三線式線路の試験(1週) 模擬単相三線式配電線路を用いて単相三線式配電方式の電気的特性を実験的に求め、理論と特性を理解する。8. 直流分巻電動機(1週) 直流分巻電動機の始動方法および速度制御方法について習得し、実負荷試験を行いその性質を調べる。9. デジタルICの特性(1週) 代表的なデジタル集積回路(IC, Integrated-Circuit)であるTTL-NAND回路及びCMOS-NAND回路の特性を調べる。10. 液位のPID制御(1週) タンク系の場合のプロセス(制御対象)の特性を推定し、これに基づいてPID制御を行う実験をする。

【成績評価】実験報告書(レポート)で成績を評価する。

【教科書】自製テキスト「電気電子工学実験」と必要に応じて配布されるプリント。

【参考書】実験内容説明時に必要があれば紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】川上(E棟2階南A-10, 656-7441, retsuo@ee.tokushima-u.ac.jp)

電気電子工学セミナー

Electrical and Electronic Engineering Seminar

電気電子工学科教官 4単位

【授業目的】従来のような講義を学習するというような受身の学習から1歩進め、指導教官の下で学生自身が新しい工夫とかアイデアを自ら発想することを指導する科目である。人数は教官当たり1~2名と小人数で木目細かな指導を行い、プレゼンテーションの能力も養う。

【授業概要】研究テーマについては毎年2月に物性デバイス、電気エネルギー、電気電子システム、知能電子回路の各講座に属する研究室および共通講座の物理から発表される。

【受講要件】卒業見込み証明書発行条件を満足すること。

【履修上の注意】研究室配属は4月に行われるので配属研究室希望調査などの掲示に注意すること。

【到達目標】

電気電子工学科(夜間主コース)

1. 研究活動を通して、技術者として社会への貢献と責任、倫理観について考える。
2. 研究に必要な文献等(外国語文献を含む)を調査・読解する能力を養う。
3. 自主的・継続的な学習能力を養う。
4. 研究を計画的に遂行し、的確に結果を解析し、考察する能力を養う。
5. 研究成果の適切なプレゼンテーションを行う能力を養う。

【授業計画】1. 卒業見込み証明書発行条件を満足した学生は、4月に各研究室に配属され、前後期を通じて研究を行い、11~12月の中間発表を経て、2月に研究発表会で研究成果の発表を行う。

【成績評価】2月に行われる卒業研究発表会で発表し、審査の結果、合否が決められる。

【備考】3年生のときに卒業研究発表会を聞いておくこと。

電気電子工学特別講義

Special Lectures on Electrical and Electronic Engineering

電気電子工学科教官、非常勤講師 2単位

【授業目的】その分野の学内外の第一人者によるホットな研究情報や成果・技術動向の講義を、直接受けることによって通常の講義とは異なった刺激を受け、より視野を広げることを目的とする。

【授業概要】基礎科目で触れなかった物性デバイス、電気エネルギー、電気電子システム、知能電子回路の各講座にまたがる電気電子工学の1つの分野における先端技術を中心に、研究開発の過程について講義する。

【到達目標】

1. 電気電子工学の先進的な技術動向の一端を知る。
2. 先端の技術を支える周辺の専門知識技術等の重要性を知る。
3. 第一人者による専門家の技術開発に取り組む考え方を知る。
4. 社会における電気電子工学の役割や技術者の責任・倫理を自覚する。

【授業計画】1. 研究室の研究分野に関連した講義を行う。

【成績評価】出席及びレポートをもとに合否を決める。

【教科書】資料が配布されることが多い。

電磁環境工学

Electromagnetic Compatibility

教授・伊坂 勝生 2単位

【授業目的】EMC(電磁的適合性)の概念、および干渉をイミュニティ(耐性)の関係について修得させる。

【授業概要】電界と磁界について復習し、その実際の応用について講述する。

【履修上の注意】電磁気学を復習すること。

【到達目標】

1. 電界と磁界の計算法について理解する。
2. EMCの概念を理解する。
3. 電界と磁界と生体とのカップリング現象を理解する。

【授業計画】1. EMCとは何か。 2. EMCの実例1。 3. EMCの実例2。 4. EMCの実例3。 5. 電界とは・小テスト 6. 電界の作用・小テスト 7. 磁界とは・小テスト 8. 磁界の作用・小テスト 9. 電磁干渉 10. イミュニティ 11. 送電線からの電界磁界強度特性・レポート 12. ELF電界と人体のインタラクション 13. ELF磁界と人体のインタラクション 14. ミティゲイション 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の各項目が各々達成されているかを平常点(出席、レポートについて)30%、テスト60%で評価し、全項目平均で60%以上あれば合格とする。

【教科書】特に指定しない。

【参考書】大野木編著「電力工学II」朝倉書店、松浦編著「電気エネルギー伝送工学」オーム社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】伊坂(E棟2階北B-9, 656-7459, isaka@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】出席率60%以下では本試験を受験できない。プレゼンテーションを行う場合は早目に申し出ること。発表前日までに発表内容を点検する。平常点と本試験の点数の比率は4:6とする。平常点には出席状況、小テストの成績、レポートの成果を含む。なお、出席状況は講義ノートを参照して判断する場合がある。

電子デバイス工学

Semiconductor Device Physics

教授・大野 泰夫 2単位

【授業目的】半導体電子デバイスの概要を紹介して理解させること。

【授業概要】半導体の基礎から最新の半導体デバイスまで、分かりやすく解説します。バイポーラトランジスタ、電界効果トランジスタ、MOSダイオード、MOSトランジスタなどのデバイスの構造と動作原理を講義します。

【履修上の注意】演習、試験には関数電卓持参のこと。

【授業計画】1. バンドダイアグラム 2. 半導体中の電子輸送 3. バイポーラトランジスタ(1) 4. バイポーラトランジスタ(2) 5. MOSダイオード 6. しきい値 7. 電界効果トランジスタ 8. MOSトランジスタ(1) 9. MOSトランジスタ(2) 10. 集積回路の原理 11. 集積回路の製法 12. 集積回路の動作

【成績評価】中間試験・学期末試験の結果の合計、及び授業中に出席するレポート問題の結果を総合して成績を評価します。授業中にクイズを出題します。

【教科書】松波弘之、吉本昌広著、共立出版「半導体デバイス」

【参考書】"Physics of Semiconductor Devices", by S.M.Sze (John Wiley & Sons, 1981)を勧めます。

【連絡先】大野(E棟2階南A-7, 656-7438, ohno@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「半導体物理」を履修していることが望ましい平常点と試験の比率は3:7とする。

発電工学

Power Generation and Transformation Engineering

教授・井上 廉 2単位

【授業目的】電気エネルギーは、人類の生活スタイル、社会経済動向、環境問題に密接に関係しており、現状と将来展望の正確な把握は大変重要である。本授業では電気エネルギーの各種発生方式について説明し、演習、レポート提出等を通じて理解を深めることを目的とする。

【授業概要】電気エネルギーの各種発生方式の現状と将来展望について、発電設備概要、運用方法、経済性を説明する。また、変電設備概要、運用方法についても説明する。

【受講要件】電気回路、電気磁気学を修得しておくこと。

【到達目標】

1. 電力需要と環境との関係を理解する。
2. 各種発電方式を理解する。
3. 変電所設備を理解する。

【授業計画】1. 電力需要と環境 2. 発電技術の歴史と概要・レポート 3. 水力発電の基礎 4. 水力発電方式・演習 5. 火力発電の基礎 6. 火力発電方式・小テスト 7. 火力発電の実際 8. 原子力発電の基礎 9. 原子力発電方式・演習・レポート 10. 新発電方式の基礎 11. 電力貯蔵方式 12. 変電所の設備 13. 変電所の運用・レポート 14. 発電設備の診断技術の現状 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】到達目標の3項目が各々達成されているかを試験80%(中間試験40%、期末試験40%)、平常点(レポート)20%で評価し、全体で60%以上で合格とする。

【教科書】電気学会編「発電・変電」改訂版、オーム社

【参考書】榊原建樹編著「電気エネルギー基礎」、オーム社、福田務、相原良典著「絵とき電力技術」、オーム社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】井上()

【備考】エネルギー問題は、国内外の経済動向、環境問題、紛争等に密接に関係しているため、日頃より新聞、雑誌、メディア等の関連する項目には注意すること。

パルス・デジタル回路

Pulse and Digital Circuits

講師・四柳 浩之 2単位

【授業目的】電子計算機などのデジタル電子機器に不可欠なパルス・デジタル信号を入力する電子回路について基礎知識を習得させる。

【授業概要】デジタル電子回路素子としてダイオード・トランジスタの特性・各種パルス発生・変換器と論理回路について述べる。

【授業計画】1. ダイオードのスイッチング特性 2. トランジスタのスイッチング特性 3. 波形変換回路 4. マルチバイブレータ 5. シュミット回路 6. ブロッキング発振器 7. 直線波発生回路 8. 論理数学 9. 論理関数の標準展開 10. 論理関数の簡単化 12. 基本論理回路 13. 論理回路の性能 14. 基本記憶論理回路 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】不定期のレポート・小テストと定期試験により評価する。

【教科書】吉田典可著「電子回路II」朝倉書店

【参考書】小柴典居著「パルスとデジタル回路」オーム社

【連絡先】 為貞(E棟3階南D-1, 656-7472, tamesada@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】 「電気磁気学」, 「電気回路」を理解していることを前提に講義する。丸暗記は不可, 理解すること。成績評価に対する平常点(出席・レポート・小テスト)と定期試験の比率は3:7とする。

半導体工学

Semiconductor Device

助教授・富永 喜久雄 2単位

【授業目的】 半導体材料やデバイスの理解を主たる目的とする。半導体中の電子・正孔のふるまいを理解するための基礎から始め, それに基づいて半導体デバイスの基礎について講述する。とくに pn 接合と金属-半導体接合の理解をはかる。

【授業概要】 まず半導体を理解するために必要となる固体物理の基礎から始める。1. 半導体の電子構造: E-k 図, 還元ゾーン方式, 有効質量, 正孔の概念, 通常の半導体 Ge, Si, GaAs のエネルギーバンド図。2. 半導体における電気伝導: p 形, n 形, フェルミエネルギー, キャリア移動度, 再結合, 拡散距離, 電気伝導度, ホール効果 3. pn 接合ダイオード: PN 接合理論と実際のダイオード特性について講述する。4. 半導体異種材料界面: ショットキー障壁, オーミック接触, ホモ接合とヘテロ接合

【受講要件】 物性工学を履修しておくこと。

【履修上の注意】 クォータ制授業であるため, 各回の授業内容をその都度理解してつぎに進むことが重要。オフィスアワーを積極的に利用する。

【授業計画】 1. 第1, 2回 E-k 図, 還元ゾーン方式, 有効質量, 正孔の概念, 通常の半導体 Ge, Si, GaAs のエネルギーバンド図。第3, 4, 5, 6回 電気的, 磁電的, 光学的, 光電的性質について述べる。第7, 8, 9回 PN 接合理論 第10回 中間試験 第11, 12, 13回 金属-半導体の界面の物理 14, 15回 ヘテロエピタキシャル接合に対する物理 16回 まとめと期末試験対策

【成績評価】 試験 60%(中間試験 30%, 期末試験 30%), 平常点 40%(レポート, 小テスト, 出席状況など)として評価し, 全体で 60%以上を合格とする。

【教科書】 松波弘之, 吉本昌広共著: 半導体デバイス, 共立出版

【参考書】 古川静二郎, 松村正清共著: 電子デバイス [I] および [II], 昭晃堂。S. M. ジー, 半導体デバイス, 産業図書。

【対象学生】 他学科学生も履修可能

【連絡先】 富永(E棟2階南A-6, 656-7439, tominaga@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】 一般的ではあるが, 講義内容を週内で消化するようにすること。平常点と試験の比率は4:6とする。平常点には講義への出席状況, 小テスト, レポートの提出状況と内容を含む。

微分方程式 1

Differential Equations (I)

教授・長町 重昭, 助手・坂口 秀雄 2単位

【授業目的】 微分方程式の解法を修得し, さらに工学の諸分野に現われる微分方程式の解法に応用できるようにする。

【授業概要】 微分方程式の理論は数理的工学的な現象の解析に有力な手段を与え, 現代工学の基礎として重要な役割を果たしている。その広範な理論の入門段階として, この講義では微分方程式の具体的な解法を中心に講義する。

【受講要件】 「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】 講義内容を確実に理解するには, 予習を行い, 講義ノートをきちんととり, 講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に, 各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 簡単な求積法が理解できる。
2. 2階の定数係数線形常微分方程式が解ける。

【授業計画】 1. 変数分離形 2. 同次形 3. 一階線形微分方程式 4. 完全微分形 5. クレーローの微分方程式とラグランジュの微分方程式 6. 高階常微分方程式 7. 2階線形同次微分方程式 (i) 8. 2階線形同次微分方程式 (ii) 9. 非同次微分方程式 10. 記号解法 11. 簡便法 12. 級数解法 13. 通常点における級数解法 14. 確定特異点まわりの級数解法 15. 期末試験

【成績評価】 講義への取組み状況, レポートの提出状況・内容等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】 杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】 特に指定しない

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 坂口(A棟221, 656-7547, saka@pm.tokushima-u.ac.jp)

微分方程式 2

Differential Equations (II)

教授・今井 仁司, 助手・坂口 秀雄 2単位

【授業目的】 連立常微分方程式の安定性と簡単な偏微分方程式の解法を修得し, より実際の工学的な問題の解法に応用できるようにする。

【授業概要】 「微分方程式 1」に続いて現代工学すべての基礎として重要な役割を果たしている連立常微分方程式系の基本的な解法を講義する。さらに, 簡単な偏微分方程式の解法についても講義する。

【受講要件】 「微分方程式 1」の履修を前提とする。

【履修上の注意】 講義内容を確実に理解するには, 予習を行い, 講義ノートをきちんととり, 講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に, 各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 簡単な定数係数連立線形常微分方程式が解ける。
2. ラプラス変換とその応用ができる。

【授業計画】 1. 定数係数連立線形常微分方程式 2. 高階微分方程式と連立微分方程式 3. 連立線形常微分方程式 4. 自励系と強制系 5. 2次元自励系の危点 6. 2次元自励系の安定性 7. ラプラス変換の性質 8. 逆ラプラス変換 9. ラプラス変換の応用例 10. 1階偏微分方程式 11. ラグランジュの偏微分方程式 12. 2階線形偏微分方程式 13. 定数係数2階線形偏微分方程式 (i) 14. 定数係数2階線形偏微分方程式 (ii) 15. 期末試験

【成績評価】 講義への取組み状況, レポートの提出状況・内容等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】 杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】 特に指定しない

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 坂口(A棟221, 656-7547, saka@pm.tokushima-u.ac.jp)

微分方程式特論

Differential Equations (III)

非常勤講師・竹内 博 2単位

【授業目的】 数理解析学の強力な道具立てとして, フーリエの方法を修得させる。

【授業概要】 フーリエが導入した三角級数展開およびフーリエ積分変換の理論を講義し, 物理・工学に現れる偏微分方程式を初等的に扱うための基礎的な知識を提供する。

【受講要件】 「微分方程式 1」, 「微分方程式 2」の履修を前提とする。

【履修上の注意】 高度な内容につながる盛り沢山の講義である。使い方を理解するには, 実用的な道具と割り切って, 多数の計算練習を行なうとよい。

【到達目標】

1. フーリエ解析の初歩を理解する。
2. フーリエ級数の計算ができる。

【授業計画】 1. フーリエ係数, フーリエ級数 2. 三角級数の和, ディリクレ核 3. リーマン・ルベグの定理, ベッセルの不等式 4. 展開定理 5. パーセバルの等式, 簡単な応用例 6. フーリエ積分 7. ディリクレ積分公式, フーリエ積分公式 8. フーリエ変換, 合成積 9. フーリエ反転公式 10. 変換の計算例 11. 偏微分方程式への応用 12. 波動方程式 13. 熱伝導方程式 14. ラプラス方程式 15. 期末試験

【成績評価】 試験 90% (期末試験) 平常点 10% (出席状況等)として評価し, 全体で 60%以上で合格とする。

【教科書】 杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】 入江昭二・垣田高夫『フーリエの方法』内田老鶴園, 洲之内源一郎『フーリエ解析とその応用』サイエンス社, 竹之内脩『フーリエ展開』秀潤社, T.W. ケルナー『フーリエ解析大全上・下』朝倉書店

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 竹内(四国大学, Tel:088-665-1300(内線2678), E-mail:takeuchi@keiei.shikoku-u.ac.jp)

複素関数論

Complex Analysis

助教授・香田 温人 2単位

【授業目的】 複素関数論への入門講義として, 複素変数関数の微分積分学を修得させる。

【授業概要】 微積分で扱う対象を複素変数関数の関数にまで広げ, 正則関数および有理型関数の理論を展開することにより, 実数の世界では困難であったある種の積分計算が複素数の立場からみると簡潔に処理されることを述べる。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。
 【履修上の注意】時間数の制約から、複素関数の計算を修得するための必要最小限な議論を行なうので、講義内容のすべてを吸収することが理解への早道である。日頃から予習・復習の計画を立てて勉学に動んでもらいたい。
 【到達目標】
 1. 複素微分、正則関数の概要が理解できる。
 2. 留数概念の理解とその応用ができる。
 【授業計画】1. 複素数 2. 複素平面、オイラーの式 3. 複素数列、複素級数 4. 複素変数の関数 5. 複素微分、コーシー・リーマンの関係式 6. 正則関数 7. 複素積分 8. コーシーの積分定理 9. コーシーの積分公式 10. テイラー展開 11. ローラン展開 12. 留数とその応用 13. 定積分の計算 1 14. 定積分の計算 2 15. 期末試験
 【成績評価】試験 80% (期末試験) 平常点 20% (出席状況、演習の回答等) とし、全体で 60% 以上で合格とする。
 【教科書】阪井章『複素解析入門』新曜社
 【参考書】辻正次・小松勇作『大学演習・函数論』裳華房、田村二郎『解析関数 (新版)』裳華房、吉田洋一『函数論』岩波書店、神保道夫『複素関数入門』岩波書店、志賀啓成『複素解析学 I-II』培風館
 【連絡先】香田(A棟211, 656-7546, kohda@pm.tokushima-u.ac.jp)

物性工学

Solid State Physics

助教授・直井 美貴 2 単位

【授業目的】物質の性質を微視的観点から理解することを目的とする。
 【授業概要】物性工学とは、物質の性質を物質を構成している原子や分子の並び方や物質中の電子の振る舞いを基礎として理解しようとするものである。本講義では、まず原子内での電子の振る舞いについて述べる。次いでそれを基に物質中での電子の振る舞いを考え、各物質の電気伝導および、誘電、磁気、光学特性について解説する。
 【到達目標】
 1. 物質中の電子の振る舞いが理解できる
 2. 物質の基本的性質を微視的観点から理解できる
 【授業計画】1. 物性工学とは、基本的物理量とその単位・次元 2. 量子力学の基礎 3. 水素原子模型 4. 結晶構造 5. 結晶の結合のしかた 6. 格子振動・固体の熱的性質 7. 固体中のエネルギーバンド 8. 有効質量 9. 固体の電気伝導 10. 半導体とは 11. 物質の誘電特性 12. 強誘電体 13. 物質の磁気特性 14. 物質の光学的特性 (発光・受光) 15. 試験
 【成績評価】試験 80%、平常点 20%(レポート、小テスト等) として評価し、全体で 60% 以上で合格とする。
 【教科書】松澤・高橋・斉藤著「電子物性」森北出版
 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
 【連絡先】直井(E棟2階南A-4, 656-7447, naoi@ee.tokushima-u.ac.jp)

プログラミング言語 1

Programming Language (I)

講師・四柳 浩之, 助手・宋 天 2 単位

【授業目的】プログラミング言語 C を用いた計算機プログラミングについて講義し、演習を行うことで、UNIX 上でプログラミング言語を用いて基本的な計算機のプログラムの作成ができるようになることを目的とする。
 【授業概要】本講義ではプログラム開発ツールの使い方を学んだ後、(1) コンソールを用いたデータ入出力プログラミング、(2) 条件分岐処理プログラミング、(3) 繰り返し処理プログラミング、(4) 配列を利用したプログラミングの習得を目指す。
 【受講要件】「コンピュータ入門」を履修していること
 【到達目標】
 1. C 言語の文法を理解する
 2. C 言語プログラムの読解力を習得する
 3. C 言語プログラミング手法を習得する
 【授業計画】1. UNIX の基本コマンド (第 1 週) 2. プログラム開発環境の操作方法 (第 2 週) 3. C 言語のプログラム書式 (第 3 週) 4. データの型 (第 4 週) 5. 演算子 (第 5 週) 6. 入出力関数 (第 6 週) 7. 文字列の構造と入出力 (第 7 週) 8. 条件分岐処理 (第 8 週) 9. 多方向分岐処理 (第 9 週) 10. 繰り返し処理 (第 10~12 週) 11. 配列 (第 13~15 週) 12. 期末試験 (試験期間)
 【成績評価】平常点 (講義への参加状況、実習中の熱意、実習レポート) と期末試験を概ね 3:7 で評価し、総合的な判断も加えた上で成績を評価する。

【教科書】阿曾弘具ほか共著「UNIX と C」近代科学社と、講義の最初に配布するプリントを併用する。
 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
 【連絡先】四柳(E棟3階南D-3, 656-9183, yanagi4@ee.tokushima-u.ac.jp)
 【備考】毎週 2 時間のうち、前半 1 時間を講義、後半 1 時間を実習という形式で行う。・プログラミングの基礎的な知識は「コンピュータ入門」で習得していることを前提に講義と演習を行うので、必ず受講しておくこと。・卒業研究、大学院での研究では計算機プログラミングができることが前提となっていることが多い上に、電気電子工学科卒業生として計算機プログラミングが行える能力を身につけているのが当たり前となっている。必ず受講してプログラミング能力を身につけること。

プログラミング言語 2

Programming Language (II)

講師・四柳 浩之, 助手・宋 天 2 単位

【授業目的】「プログラミング言語 1」では数十行程度の小さいプログラムを書くプログラミング基礎技術の習得を目指した。本講義では数百~数千行程度の大きなプログラムを書く上で必要となるプログラミング言語 C の実用技術について講義し、その技術の習得を目指す。
 【授業概要】本講義ではポインタの利用方法を学んだ後、関数、構造体、共用体を用いたプログラミング技法について説明する。また、データ処理に際して不可欠となるファイルとのデータ入出力プログラミングについて習得する。
 【受講要件】「コンピュータ入門」、「プログラミング言語 1」を履修していること
 【到達目標】
 1. C 言語のポインタ、構造体の利用技法を理解する。
 2. 関数を用いた C 言語プログラム作成手法を習得する。
 3. ファイル入出力を用いた C 言語プログラム作成手法を習得する。
 【授業計画】1. ポインタを用いたプログラミング (第 1,2 週) 2. メモリの動的割当を用いたプログラミング (第 3 週) 3. 関数を用いたプログラミング (第 4 週) 4. 変数の受渡し (第 5 週) 5. 変数のスコープルール (第 6 週) 6. 関数の再帰呼び出し (第 7 週) 7. 構造体を用いたプログラミング (第 8,9 週) 8. 共用体を用いたプログラミング (第 10 週) 9. プリプロセッサを用いたプログラミング (第 11 週) 10. ファイルとのデータの入出力プログラミング (第 12~15 週) 11. 期末試験 (試験期間)
 【成績評価】平常点 (講義への参加状況、実習中の熱意、実習レポート) と期末試験を概ね 3:7 で評価し、総合的な判断も加えた上で成績を評価する。
 【教科書】阿曾弘具ほか共著「UNIX と C」近代科学社
 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
 【連絡先】四柳(E棟3階南D-3, 656-9183, yanagi4@ee.tokushima-u.ac.jp)
 【備考】毎週 2 時間のうち、前半 1 時間を講義、後半 1 時間を実習という形式で行う。・プログラミングの基礎的な知識は「コンピュータ入門」および「プログラミング言語 1」で習得していることを前提に講義と演習を行うので、必ず受講しておくこと。・卒業研究、大学院での研究では計算機プログラミングができることが前提となっていることが多いので、必ず受講しておくこと。特に情報処理関係だけでなく計測・制御分野の職業につく場合には、規模の大きなプログラムを書く能力を身につけておく必要があるため、ぜひ受講しておくこと。

マイクロコンピュータ応用

Microcomputer Application Technique

助教授・森田 郁朗 2 単位

【授業目的】各種装置に組み込まれて使用されている制御用マイクロコンピュータシステムの構成法・設計法を、主として Z80 系 CPU を使用した講義と実習により理解する。
 【授業概要】マイクロコンピュータを用いた計測・制御システムのハードウェアおよびソフトウェアの構成法・設計法を、講義と実習を通して修得する。実習を並行して行うことで、講義内容をより確実なものとするを意図している。
 【受講要件】「マイクロコンピュータ回路」、「マイクロコンピュータ言語 1」、「マイクロコンピュータ言語 2」を受講していること。
 【履修上の注意】欠席すると直ちにわからなくなるので欠席しないこと。少しでもわからないところがあれば、気軽に質問すること。こまごました事が多く、難しい理論や理屈ではないことが多いので。
 【到達目標】

電気電子工学科 (夜間主コース)

1. マイクロコンピュータの基礎 (構成および動作) と用語を理解する。
2. 周辺 LSI の動作とそのプログラミング技法 (ポーリングと割り込み) を理解する。
3. ステッピングモータ制御等の実習を通して、組み込み型マイクロコンピュータの応用技法を習得する。

【授業計画】1. マイクロコンピュータの設計開発技法の概説 2. アセンブリ言語, C 言語, リンカ, デバッグ等 3. マイクロプロセッサ開発システム, ICE, ROM 化 4. バスサイクルと入出力インターフェース回路 5. 汎用周辺 LSI (パラレル I/O, タイマ/カウンタ, シリアル I/O) 6. モジュールプログラミングの開発技法 7. レポート・小テスト 8. プログラム I/O (ポーリング) の実習 9. 割り込み制御 (割り込み I/O) の実習 10. A/D, D/A 変換器の数学モデル, 数値コード 11. z 変換とその性質, デジタル PID 制御 12. ステッピングモータの特性とその制御の実習 13. DC モータの制御の実習 14. レポート・小テスト 15. 最終試験

【成績評価】出席状況と実習状況 (30%), レポートと小テスト (30%) および最終試験 (40%) を総合評価し, 60%以上で合格とする。

【教科書】図解 Z80 マイコン応用システム入門-ハード編

【参考書】マイクロコンピュータ関係の用語集 (用語辞典) を用意することが望ましい。参考書は教科書的でない実務的な参考書が望ましい。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】森田(棟3階北B-3, 656-7451, morita@ee.tokushima-u.ac.jp)

マイクロコンピュータ回路

Microcomputer Circuits 教授・入谷 忠光 2 単位

【授業目的】マイクロコンピュータ内で使用される論理回路とその応用であるマイクロコンピュータの内部動作の理解が目標である。

【授業概要】論理回路と論理設計を解説する。次にマイクロコンピュータで使用されるデジタル IC の動作を説明する。そしてマイクロコンピュータの内部構造, 周辺回路及び各種汎用入出力 IC の動作を説明する。

【到達目標】

1. マイクロコンピュータと外部機器等を接続するインターフェースのデジタル回路が理解できること
2. マイクロコンピュータの基本動作が理解できること

【授業計画】1. 論理回路と論理関数 2. 論理関数の設計 3. 論理式の簡単・レポート 4. 基本論理ゲートとその動作 (真理値表) 5. フリップフロップとその動作 (タイミングチャート) 6. デジタル IC とその電気特性 7. デジタル IC の応用回路 8. 中間試験 9. メモリ回路 10. マイクロプロセッサ 11. 入出力ポート 12. 汎用入出力ポート IC: レポート 13. 直列データ転送 IC 14. 割り込み制御回路及び DMA 回路 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況, レポートの提出状況と内容, 中間試験及び最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】青木由直・恩田邦夫著「マイクロコンピュータ講義」昭晃堂。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】入谷(棟3階北C-2, 656-7478, iritani@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「離散数学」「アナログ電子回路」の履修を前提にして講義を行う。並列開講の「パルス・デジタル回路」はマイクロコンピュータの理解や設計・製作する際に必要となるので必ず受講しておくこと。成績評価に対する平常点と試験の比率は 3:7 とする。平常点には講義への参加状況, 演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み, 試験には中間試験及び最終試験の成績を含む。

マイクロコンピュータ言語 1

Microcomputer Language (I) 助教授・橋爪 正樹 2 単位

【授業目的】本講義ではマイクロコンピュータ回路を動かすプログラムのプログラミング技術の習得を目指す。

【授業概要】マイクロコンピュータを動作させるプログラムを作成する際に使用されるアセンブリ言語とそれをを用いたプログラム作成法について講義する。講義以外に実習を行い, そのプログラミング技術の習得を目指す。

【授業計画】1. マイクロコンピュータの内部構造 2. プログラムの実行過程 3. 機械語とアセンブリ言語 4. レジスタ間データ転送命令 5. メモリとのデータ転送命令 6. 算術演算命令 7. 算術演算命令 8. 論理演算命令 9. I/O デバイスとのデータ転送命令 10. 条件分岐処理プログラミング技法 11. 繰り返し処理プログラミング技法 12. サブルーチンを用いたプログラミング技法 13. 入出力インターフェイスプログラミング技法 14. マイクロコンピュータ・システムの開発技法 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】ほぼ毎回出る演習問題と定期試験の成績で評価する。

【教科書】青木・恩田共著「マイクロコンピュータ講義」昭晃堂, それ以外にプリントを配布。

【参考書】第一回目の講義時に紹介

【連絡先】橋爪(棟3階南D-2, 656-7473, tume@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「マイクロコンピュータ回路」「マイクロコンピュータ言語 1」は今後のマイクロコンピュータ工学関係の科目 (マイクロコンピュータ言語 2, マイクロコンピュータ応用) を受講するために必要となるので, 必ず受講しておくこと。「プログラミング言語 1」で使用されるプログラミング技術の本講義で使用するもので, 必ず受講しておくこと。欠席をするとそれ以降の内容が理解不能となる可能性が高いので, 欠席しないこと。

マイクロコンピュータ言語 2

Microcomputer Language (II) 助教授・橋爪 正樹 2 単位

【授業目的】現在, マイクロコンピュータによりさまざまな機器が制御されている。本講義ではそのような機器を開発するのに必要なアセンブリ言語を用いた各種入出力制御プログラミング技術の習得を目指す。

【授業概要】マイクロコンピュータに接続される各種外部機器を制御するためのプログラミング技法について講義および実習を行う。

【授業計画】1. I/O ポート 2. ポーリング方式によるデータ転送法 3. ハンドシェイク方式によるデータ転送法 4. 割り込みによるデータ転送法 5. メモリとのデータ転送法 6. シリアルデータ転送法 7. GPIB によるパラレルデータ転送法 8. パルスモータ駆動プログラミング 9. 7セグメント LED への点灯プログラミング 10. A/D, D/A 変換プログラミング 11. 各種センサーからのデータ入力プログラミング 12. DC モータ回転制御プログラミング 13. シーケンス制御の基本動作 14. シーケンス制御プログラミング 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】ほぼ毎回出る演習問題と定期試験の成績で評価。

【教科書】未定

【参考書】第一回目の講義の時に紹介

【連絡先】橋爪(棟3階南D-2, 656-7473, tume@ee.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「マイクロコンピュータ回路」と「マイクロコンピュータ言語 1」を必ず受講していること。

離散数学

Discrete Mathematics 講師・四柳 浩之 2 単位

【授業目的】デジタルコンピュータにおける信号処理は, 1 か 0 か, H か L か, 有か無かの世界である。本科目ではこの信号処理システムの記述や解析の基礎となる数理を教育し, 計算機・電子回路関連科目の基礎知識の修得を目指す。

【授業概要】講義計画に記述したように, 計算機・電子回路分野の基礎知識として必要な集合論, ブール代数, 論理関数, グラフ理論の基本事項について講義する。

【履修上の注意】電子計算機, デジタル電子機器は離散数学論の上に成り立っている。マイクロコンピュータ関連科目の基礎になっているので, 受講し習熟することが望ましい。

【到達目標】

1. 集合の定義・関係・演算と, ブール代数の性質を理解している。
2. 論理関数の基礎知識, グラフ理論の用語や性質を理解している。

【授業計画】1. 集合と代数の基礎 (第 1~3 週) 数学的にははっきりした条件を満たすものの集まりを集合という。この集合に関する定義, 関係, 演算などについて説明する。2. ブール代数 (第 4~6 週) ブール代数の結合律, 可換律, 分配律などの基本的性質, また, それらを組み合わせることにより導かれる幾つかの等式について説明する。3. 中間試験 (第 7 週: 到達目標 1 の評価) 4. 論理関数 (第 8~10 週) AND 関数, OR 関数などの 2 変数論理関数について, また論理関数の展開 (和標準形, 積標準形) などについて説明する。5. グラフ理論 (第 11~15 週) グラフ理論は, ネットワーク構造をもつようなシステムを記述したり, そのふるまいを解析する際の一つの有用な数学的手段である。ここでは, グラフの基本的な用語や諸性質について説明する。6. 期末試験 (試験期間: 到達目標 2 の評価)

【成績評価】平常点 (レポート等) 20% と, 中間試験 40%, 期末試験 40% で評価し, 合計で 60%以上あれば合格とする。

【教科書】翁長健治 編「情報システムの基礎」朝倉書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】四柳(棟3階南D-3, 656-9183, yanagi4@ee.tokushima-u.ac.jp)

量子エレクトロニクス

Quantum Electronics 講師・西野 克志 2 単位

【授業目的】量子エレクトロニクス現象の一部を講義し、その応用として、光通信に使われるデバイスとシステムの原理を理解させる

【授業概要】「半導体工学」、「電子デバイス工学」などの科目を基として、反転分布と光増幅、半導体レーザー、光導波、光ファイバー、光検出器、光集積回路などについて講義を行い、それらを組み合わせた光通信システムの原理を解説する。

【履修上の注意】レポートを随時提出させる。レポートも採点の対象となる。

【到達目標】

1. 半導体レーザー・光検出器の構造と原理を理解している。
2. 3 層光導波路の導波特性を、 v - b カーブを用いて解析できる。
3. 光ファイバーの基本特性を理解している。

【授業計画】1. 誘電体界面における透過と反射 1(波動の数式化と Maxwell の式) 2. 誘電体界面における透過と反射 2(スネルの公式とフレネルの式) 3. 誘電体界面における透過と反射 3(全反射とグースヘンシェンシフト) 4. 3 層光導波路と v - b カーブ 1 5. 3 層光導波路と v - b カーブ 2(演習) 6. リッジ導波路 7. 光ファイバーの原理 8. 光ファイバーの製法・減衰特性とモード 9. 光ファイバーの伝送帯域 10. 反転分布と光増幅、半導体におけるキャリア注入と光吸収 11. 半導体における光増幅と半導体レーザー 12. 半導体レーザーの構造と特性 13. 光検出器の原理と構造、その特性 14. 光通信システムと光集積回路 15. 試験 (到達目標の評価)

【成績評価】到達目標の 3 項目が各々達成されているかを試験 60%、レポート 40%で評価し、2 項目平均で 60%以上あれば合格とする。

【教科書】「光ファイバ通信入門」、末松、伊賀著、(オーム社)ISBN4-274-03266-3 c3055 P3710E 及びプリント。

【参考書】Topics in Applied Physics Vol. 7, "Integrated Optics", Edit. by T. Tamir (Springer-Verlag, Berlin, 1979) ISBN: 3-540-09673-6, 0-387-09673-6.

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】西野(E棟2階南A-5, 656-7464, nishino@ee.tokushima-u.ac.jp)

量子力学

Quantum Mechanics 講師・中村 浩一 2 単位

【授業目的】原子分子のミクロな世界の基本法則である量子力学の基礎を修得させる。

【授業概要】講義計画に示した項目に従い、まず電子や光の粒子性と波動性を述べ、前期量子論の起こりを説明する。ついで、シュレディンガーの波動方程式を導き、これがミクロの世界の基礎の方程式であることを説明する。簡単な例として箱の中の自由粒子、調和振動子を取り上げ、波動関数とエネルギー固有値の意味を解説する。

【到達目標】

1. 電子や光がもつ粒子性と波動性を理解する。
2. シュレディンガー方程式と波動関数の意味を理解する。
3. 簡単な系のシュレディンガー方程式を解き、波動関数とエネルギー固有値を求めることができる。

【授業計画】1. 電子の電荷と質量 2. X 線の性質 3. プランクの量子説 4. 光電効果 5. コンプトン効果 6. 物質波 7. ボアの量子論 8. 不確定性原理 9. シュレディンガー方程式 10. 定常状態の波動関数とエネルギー固有値 11. 物理量と演算子 12. 箱の中の自由粒子 13. 調和振動子 (1) 14. 調和振動子 (2) 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】単位の取得:試験 70%(期末試験)、平常点 30%(出席状況、レポートの提出状況・内容等)として評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【教科書】小出昭一郎「量子論」(基礎物理学選書 2) 裳華房

【参考書】中嶋貞雄「量子力学 I」(物理入門コース) 岩波書店、中嶋貞雄「量子力学 II」(物理入門コース) 岩波書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】中村(A216, 656-7577, koichi@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】微分および積分の基礎的知識を前提とする。

知能情報工学科

知能情報工学科（昼間コース）における教育理念およびそれを実現するカリキュラム編成	233
知能情報工学科（昼間コース）履修登録，進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定	235
知能情報工学科（昼間コース）カリキュラム表	237
知能情報工学科（昼間コース）教育課程表	238
知能情報工学科（昼間コース）講義概要	241
知能情報工学科（夜間主コース）における教育理念およびそれを実現するカリキュラム編成	257
知能情報工学科（夜間主コース）履修登録，進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定	258
知能情報工学科（夜間主コース）カリキュラム表	259
知能情報工学科（夜間主コース）教育課程表	260
知能情報工学科（夜間主コース）講義概要	262

知能情報工学科（昼間コース）における教育理念およびそれを実現するカリキュラム編成

情報通信および知能工学における技術者として求められている標準的水準の能力を維持すると共に、その社会的責任と倫理観を幅広い視野から絶えず意識しながら自律的に行動する能力を持ち、国内外の社会に貢献できる人材を育成することを目的とする。

【教育目的】

知能情報工学科の卒業生が具備すべき能力として、次の5つの能力を備えた人材を育成する。

1. 専門的能力：工学における幅広い教養と知能情報工学における専門的な知識およびスキルを備え、それらを実社会で応用する能力。
2. 総合的能力：問題を発見し、設定し、分析し、解決する総合的能力。
3. コミュニケーション能力：問題とその解決方法および解決結果を明確かつ論理的に表現する能力。
4. 自己学習能力：未知の分野に対する興味を持ち、不足している知識があれば、これを自発的に修得する能力。
5. グループワーク能力：コミュニケーションおよび役割分担を確立して、グループによる共同プロジェクトを管理運営する能力。

【教育目標】

本学科の教育目的を実現するため、つぎの10項目の教育目標を定める。

1. 環境問題や高齢化社会に代表される福祉の問題などの観点からも知能情報工学を考える能力を育成する。
2. 情報処理技術に関し、知的所有権を認知し、プライバシー保護を遵守して、公共の福祉に配慮できるような倫理観を養う。また、コンピュータに関わる業務・管理情報について注意義務を負うことを自覚し、専門家としての能力の維持、向上に務め、情報処理技術が社会に与えるリスクや影響を深く考慮できる人材の輩出を目指す。
3. 自分の意見・考えを明確かつ論理的に記述でき、プレゼンテーションによる伝達、双方向コミュニケーションを行える能力を育成する。また、専門外国語を修得し、英語によるコミュニケーションの基礎能力を育成する。
4. ソフトウェアとハードウェアのバランスのよい学習や、対象の数理的なモデル化、抽象化などの訓練によって、システマティックな解析・設計を行い、現実世界を鑑みた統合・評価ができる能力を育成する。
5. 単なるノウハウとしての技術ではなく、理論的・社会的背景と、それらからの論理的な結果としての技術を教えることによって、将来の技術的・社会的変化に対応できるようにする。そのために、将来にわたって有効な基礎学力を中心とした体系的な学問と、それらを応用する力を身につけた人材を育てる。
6. 現状の情報処理システムにおけるハードウェア及びソフトウェアの実態・問題点を分析し、問題解決法の立案、実行ができる能力を育成する。
7. 様々な制限がある環境下において、自分の成すべきことを考え、それを達成する手段を見出せる能動的な人材を育成する。具体的に目標が与えられたとき、企画、スケジューリング、設計、製作、評価、保守などの各プロセスを自律的に管理し、期限内で遂行する能力を修得させる。
8. 構造化や抽象化などの種々のプログラミング言語に共通の概念や機能を修得させ、いかなる言語においてもソフトウェアの開発を行う能力を育成する。ソフトウェア機能、ハードウェア機構の各原理を修得し、情報処理システムの設計、構築、運用を行える人材を育成する。
9. 早期より常に目的意識を持って自主的に学習できるような環境を整えることによって、自律的な人材を育成する。
10. 情報処理技術関連分野のみならず、システム管理設計の能力を活かせる各分野で幅広く活躍できる人材を育成する。

【カリキュラムの編成】

知能情報工学科昼間コースのカリキュラムは、教育分野別カリキュラム編成図に示すような編成となっている。以下では、昼間コースのカリキュラムの特色を説明しておく。

知能情報工学科（昼間コース）

- 導入教育科目の開講：新入生に対する導入教育科目として、専門教育科目「知能情報工学セミナー」を開講している。この科目は、新入生を10名程度のグループに分け、小人数制で実施している。この科目では、知能情報工学を学ぶにあたり、知能情報工学科の教育・研究内容を周知徹底させると共に、各研究室の研究内容等を紹介し、また、早急に計算機に親しむように簡単な実習等を行って、知能情報工学科の学生としての自覚をもたせている。さらに大学生生活の送り方、講義の受講および研究のための心構え、社会人としての常識等のガイダンスを行っている。
- 専門基礎科目と専門応用科目のバランス：本カリキュラムは、専門色の強い専門応用科目の割合をあえて低く押さえ、専門基礎科目を中心に編成している。さらに、専門教育科目の多くを演習付きの科目として実施することによって、専門基礎教育の充実をはかっている。
- 必修科目と選択科目のバランス：本カリキュラムでは、学生が自分自身の能力や興味に応じて、履修計画をたてるのが前提となっている。このカリキュラムでは、少数の科目（導入教育科目、専門基礎科目の一部、創成型科目および卒業研究）を除き、ほとんどの専門教育科目を選択科目としている。
- 創造性早期育成科目の開講：本カリキュラムにおいては、2年生および3年生を対象として、創造性の早期育成を目指したチームによる本格的なプロジェクト達成型の創成型科目（「ソフトウェア設計及び実験1, 2」ならびに「システム設計及び実験1, 2」）を開講している。これらの科目は、単に創造性のみならず、チームによるプロジェクト達成にとって不可欠となるコミュニケーションならびに自己学習などの能力を育成することも目指した本格的な創成型科目である。
- 工学倫理教育科目の開講：本学科と関連の深い情報通信や知能工学の分野の研究開発に携わる人材にはさまざま倫理教育を行っていく必要がある。これらについては、一部の専門教育科目の中で時間を割いて倫理教育を行っている。また、これらの講義ではカバーすることが難しい倫理教育に関しては、工学倫理に関連する専門教育科目「先端企業基盤通論」を開講している。
- インターンシップへの対応：本学では、インターンシップ制度が導入されており、学生は夏季休業期間等を利用して、企業等において短期間の研修を受けることができる。本カリキュラムでは、このような研修を通して単位を修得できるようにするための専門教育科目「情報工学実地演習」を開講している。

知能情報工学科（昼間コース）履修登録，進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定

1. 履修登録履修科目数の上限は，次の表の通りとする．ただし，2年次以上の学生は，前年度の GPA が 3.0 以上となっている場合にかぎり，この上限を超えて単位を修得することができる．

学 年	履修科目数の上限
1 年次	6 0 単位
2 年次	5 0 単位
3 年次	4 0 単位
4 年次	4 0 単位

なお，留学生および3年次編入生の履修科目数の上限については，学科会議において別途審議する．

2. 進級要件

- (a) 1年次から2年次への進級規定
1年次から2年次に進級するためには，1年次で全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて32単位以上を修得していなければならない．
- (b) 2年次から3年次への進級規定
全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて66単位以上を取得していなければならない．
- (c) 3年次から4年次への進級規定
卒業研究着手要件を満足していなければならない．

3. 卒業研究着手要件

卒業研究に着手するためには，次に指定する単位をすべて修得していなければならない．

- (a) 1年次入学生（転学科生を含む）
- i. 全学共通教育科目
- A. 教養科目：人文科学，社会科学，自然科学の各分野の2科目4単位必修選択，計12単位
- B. 外国語科目：外国語の全領域から合わせて8単位以上
- C. 健康スポーツ科目：健康スポーツ演習2単位必修，健康スポーツ実習2単位必修
- D. 基礎教育科目：微分積分学Ⅰ，微分積分学Ⅱ，線形代数学Ⅰ，線形代数学Ⅱ，力学概論の各2単位必修
- E. 工学系教養科目：教養科目（情報科学分野を除く）と外国語科目から選択科目として合わせて8単位以上
- ii. 専門教育科目
- A. 知能情報工学セミナー
- B. コンピュータ入門1
- C. ソフトウェア設計及び実験
- D. システム設計及び実験
- E. A.～D.を除く必修科目：2単位以上
- F. 必修科目と選択科目（職業指導，福祉工学概論を除く）を合わせて64単位以上
- (b) 3年次編入学生への特例（平成18年度編入学生から適用）
- i. 全学共通教育科目：42単位以上
- ii. 専門教育科目
- A. 必修科目：10単位以上
- B. 必修科目と選択科目（職業指導，福祉工学概論を除く）を合わせて63単位以上
- (c) 留学生への特例
留学生の卒業研究着手資格については，学科会議において別途審議する．

4. 早期卒業要件

下記の条件（１）および（２）を満足している学生は，３年次後期に卒業研究に着手することができ，３年次終了時において卒業要件を満足していれば，３年次終了と同時に卒業することができる．

（１）３年次前期終了の時点において，卒業研究着手要件のうち，(a) ii の D. を除くすべての要件を満たしており，GPA が 4.0 以上となっている．

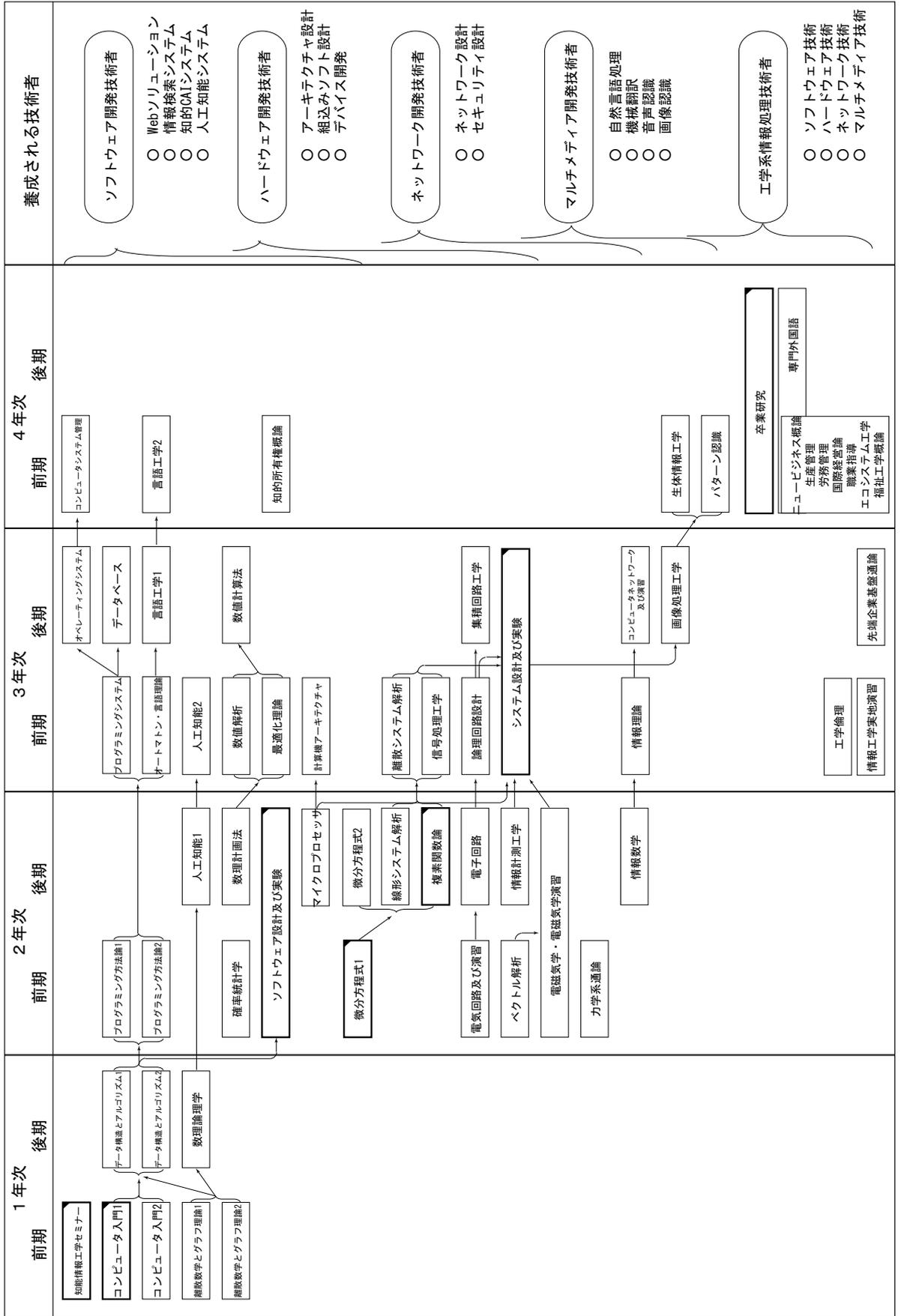
（２）早期卒業を希望している．

附則 この規定は，平成 16 年 4 月 1 日から施行し，平成 16 年度入学者から適用する．

知能情報工学科（昼間コース）カリキュラム表

知能情報工学科 授業科目系統図（昼間コース）

必修 科目
選択 科目



知能情報工学科（昼間コース）

知能情報工学科（昼間コース）教育課程表

全学共通教育科目

授業科目（分野）	単位数		
	必修	選択必修	選択
人文科学分野		4	8
社会科学分野		4	
自然科学分野		4	
総合分野・ 学部開放分野			
外国語科目		(8)	
健康スポーツ科目	(4)		
基礎教育科目	10		
全学共通教育科目小計	10 (4)	12 (8)	8

履修にあたっての注意事項

*左の単位数は、全学共通科目において卒業に必要な単位数を示す。

1. 教養科目は、人文科学・社会科学・自然科学のそれぞれの分野から4単位以上、総合科目及び学部開放科目を含む全教養科目から8単位以上を修得すること（別表参照）。外国語・健康スポーツ・基礎教育科目の括弧つきの数字は、演習または実験の単位を示す。
2. 所要単位数を超える外国語科目を修得した場合の超過単位は、教養科目の単位に含めることができる。
3. 開講時期・授業時間数・担当者等の詳細については各年度に於ける全学共通教育運営委員会発行の「全学共通教育履修の手引き」及び「全学共通教育時間割表」を参照のこと。

専門教育科目

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）										担当者	備考	頁
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年		計				
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
微分方程式 1	2					2						2	今井		252	
微分方程式 2			2				2					2	今井		253	
複素関数論	2						2					2	深貝		253	
電磁気学			2			1	1					2	岸本		251	
力学系通論			2			2						2	道廣		255	
確率統計学			2			2						2	竹内		242	
ベクトル解析			2			2						2	深貝		254	
電磁気学演習			(1)			(1)	(1)					(2)	岸本		252	
数値解析			2					2				2	竹内		247	
知能情報工学セミナー	(1)			(2)								(2)	任・北・赤松・小野・森井 大恵・下村・青江・矢野		250	
コンピュータ入門 1	2			2								2	上田・毛利		244	
コンピュータ入門 2			2	2								2	上田・毛利		244	
離散数学とグラフ理論 1			2	2								2	矢野・緒方		255	
離散数学とグラフ理論 2			2	2								2	矢野・緒方		255	
データ構造とアルゴリズム 1			2		2							2	青江		250	
データ構造とアルゴリズム 2			2		2							2	青江		250	
数理論理学			2		2							2	北		248	
プログラミング方法論 1			2			2						2	下村		254	
プログラミング方法論 2			2			2						2	下村		254	
ソフトウェア設計及び実験	4(2)					2(3)	2(3)					4(6)	獅々堀・緒方・泓田 柘植・毛利・森田・光原		249	
電気回路及び演習			2(1)			2(2)						2(2)	黒岩		251	
人工知能 1			2			2						2	小野（典）		247	
数理計画法			2			2						2	池田		248	
マイクロプロセッサ			2			2						2	福見		254	
電子回路			2			2						2	赤松		251	
線形システム解析			2			2						2	池田		248	
情報計測工学			2			2						2	大恵		245	
情報数学			2			2						2	森井		246	
プログラミングシステム			2					2				2	泓田		253	
オートマトン・言語理論			2					2				2	北		241	

知能情報工学科（昼間コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数(1週当たり)								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
人工知能2			2					2				2	小野(典)		247
計算機アーキテクチャ			2					2				2	佐野		242
論理回路設計			2					2				2	任		256
離散システム解析			2					2				2	福見		255
信号処理工学			2					2				2	寺田		246
システム設計及び実験	4(2)							2(3)	2(3)			4(6)	黒岩・福見・小野・寺田 池田・上田・最上・佐野 石田・石井・久米川 辻・富士・板東		245
情報理論			2					2				2	得重		246
工学倫理			2					2				2	岡村・伊藤		243
情報工学実地演習			(1)					(3)				(3)			246
最適化理論			2					2				2	最上		245
オペレーティングシステム			2						2			2	小野(功)		242
データベース			2						2			2	獅々堀		251
言語工学1			2						2			2	任		242
数値計算法			2						2			2	上田		247
集積回路工学			2						2			2	赤松		245
コンピュータネットワーク及び演習			2(1)						2(2)			2(2)	森井		244
画像処理工学			2						2			2	大恵		242
先端企業基盤通論			2							2		2	星加・大田・船橋・山本 高橋・中井・秋田・後藤 松本・葛谷・新見・尾川		249
言語工学2			2							2		2	任		243
コンピュータシステム管理			2							2		2	下村		244
生体情報工学			2							2		2	赤松		248
パターン認識			2							2		2	寺田		252
卒業研究	(3)									(3)	(6)	(9)	知能情報工学科全教官		249
知的所有権概論			1							1		1	酒井		250
ニュービジネス概論			2							2		2	山崎・伊藤		252
生産管理			1							1		1	井原		256
労務管理			1							1		1	井原		248
国際経営論			2							2		2	片山		244
職業指導			4							4		4	坂野		246
福祉工学概論			2							2		2	末田・藤澤		253
エコシステム工学			2							2		2	三輪・近藤・村上・末田 松尾・上月・藤澤・廣瀬 魚崎・田村・村田・木戸口		241
専門外国語			(2)							(2)	(2)	(4)	ニムチャック		249
工業基礎英語 I			1	1								1	広田		243
工業基礎数学 I			1	1								1	吉川		243
工業基礎物理 I			1	1								1	佐近		243
専門教育科目小計	14 (8) 22		106 (6) 112	11 (2) 13	6 6	17 (6) 23	21 (4) 25	24 (6) 30	18 (5) 23	23 (5) 28	(8) (8) 8	120 (36) 156	講義 演習・実習 計		

知能情報工学科（昼間コース）

	卒業に必要な単位数	全学共通教育科目	専門教育科目
必修単位	36 単位	14 単位	22 単位
選択必修単位	20 単位	20 単位	開講科目なし
選択単位	74 単位以上	8 単位以上	66 単位以上
計	130 単位以上	42 単位以上	88 単位以上

- 備考 1 . () 内は，演習・実習等の単位数および授業時間を示す．
 2 . 印を付した授業科目は，卒業資格の単位に含まれない．
 3 . 専門外国語は，通年で 2 単位取得とする．
 4 . 情報工学実地演習は，履修科目数の上限及び GPA の計算には含めない．

知能情報工学科 (昼間コース) 講義概要

目次

エコシステム工学 241

オートマトン・言語理論 241

オペレーティングシステム 242

確率統計学 242

画像処理工学 242

計算機アーキテクチャ 242

言語工学 1 242

言語工学 2 243

工学倫理 243

工業基礎英語 I 243

工業基礎数学 I 243

工業基礎物理 I 243

国際経営論 244

コンピュータシステム管理 244

コンピュータ入門 1 244

コンピュータ入門 2 244

コンピュータネットワークおよび演習 244

最適化理論 245

システム設計及び実験 245

集積回路工学 245

情報計測工学 245

情報工学実地演習 246

情報数学 246

情報理論 246

職業指導 246

信号処理工学 246

人工知能 1 247

人工知能 2 247

数値解析 247

数値計算法 247

数理計画法 248

数理論理学 248

生産管理 248

生体情報工学 248

線形システム解析 248

先端企業基盤通論 249

専門外国語 249

卒業研究 249

ソフトウェア設計及び実験 249

知的所有権概論 250

知能情報工学セミナー 250

データ構造とアルゴリズム 1 250

データ構造とアルゴリズム 2 250

データベース 251

電気回路及び演習 251

電子回路 251

電磁気学 251

電磁気学演習 252

ニュービジネス概論 252

パターン認識 252

微分方程式 1 252

微分方程式 2 253

福祉工学概論 253

複素関数論 253

プログラミングシステム 253

プログラミング方法論 1 254

プログラミング方法論 2 254

ベクトル解析 254

マイクロプロセッサ 254

力学系通論 255

離散システム解析 255

離散数学とグラフ理論 1 255

離散数学とグラフ理論 2 255

労務管理 256

論理回路設計 256

エコシステム工学

Ecosystem Engineering 教授・三輪 恵, 近藤 光男, 村上 仁士
 教授・末田 統, 助教授・松尾 繁樹, 上月 康則, 藤澤 正一郎
 助教授・廣瀬 義伸, 魚崎 泰弘, 教授・田村 勝弘, 村田 明広
 助教授・木戸口 善行 2 単位

【授業目的】自然環境と社会環境の共存の重要性、ならびに、それらを目指す工学者に必要な考え方や有効な技術について概説する。

【授業概要】地球温暖化など地球環境問題は、今や人類をはじめとする地球上全ての生命体の存在をも危うくする重大な問題となっている。これは人類の産業活動が拡大を続けた結果、大気成分の変化や廃棄物の総量の増大など、地球の「大きさ」の壁に突き当たり、あらゆることに地球の有限性があらわれてきている現象に他ならない。人類が地球環境を保全しつつ将来世代にまで渡って持続的発展を遂げるためには、この地球の有限性の認識を基本とした自然環境に低負荷な技術体系を発展させる必要がある。本講義では自然環境と社会環境の共存を目指す工学者に必要な考え方や有効な技術について多角的に論じる。

【到達目標】自然環境・社会環境を取り巻く諸問題について科学的・工学的に考察し、理解する。

【授業計画】1. ガイダンス 2. エコシステム工学とは・レポート 3. うるおいある地域づくりと交通システム・レポート 4. 自動車を取り巻くエネルギー環境・レポート 5. エネルギーの効率利用と大気環境の保全・レポート 6. ひとにやさしいまちづくり・レポート 7. 生態系工学による自然環境修復の取り組み・レポート 8. エコシステムな物理・レポート 9. 化学と生物学の環境問題へのかかわり・レポート 10. 環境に優しい超臨界流体の利用・レポート 11. 活断層と地震・レポート 12. 環境負荷計測のための空間情報の活用・レポート 13. 障害者の社会参加を支える工学技術・レポート 14. 予備日 15. 予備日

【成績評価】各テーマごとに出題されるレポート (100%) により評価を行い、その平均点が 60% 以上あれば合格とする。定期試験は行わない。

【教科書】教科書は特に指定せず、毎回講義用資料が配布される。

【参考書】E. P. オダム著/三島次郎訳「オダム基礎生態学」培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

オートマトン・言語理論

Automata and Formal Languages 教授・北 研二 2 単位

【授業目的】情報工学、計算機科学一般において最も中心的な概念であるオートマトンと言語理論について講義し、レポート、小テストを実施して、理論と考え方を習得させる。

【授業概要】言語の限定的記述の概念から始め、言語の基本的な記述機構としてオートマトン及び形式文法を導入する。また、文法とオートマトンの関係についても説明する。講義では、特に基本的で重要な有限オートマトンと正則文法および文脈自由文法について詳しく述べる。

【受講要件】集合に関する基本的な知識 (たとえば「離散数学とグラフ理論 1」) を前提とする。

【到達目標】

1. 形式言語理論の考え方、特に有限オートマトンや正則表現を用いた言語の記述について理解する。
2. 有限オートマトンの等価性、非決定性オートマトンから決定性オートマトンへの変換、オートマトンと正則表現の間の変換などの計算ができる。

【授業計画】1. 基礎的な数学的準備、言語とその表現 2. 順序機械 3. 有限オートマトンと正則言語 4. 有限オートマトンの等価性 5. 有限オートマトンの最簡形 6. 非決定性有限オートマトン 7. 部分集合構成法 8. ϵ 動作を持つ有限オートマトン 9. 言語演算 10. 正則表現 1 11. 正則表現 2 12. 言語族の閉包性 13. 形式文法 1 14. 形式文法 2 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】受講姿勢、レポートの提出状況と内容、小テスト及び最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】富田悦次・横森 貴著「オートマトン・言語理論」森北出版

【参考書】ホップクロフト・ウルマン著「オートマトン・言語理論・計算論 I」サイエンス社

【連絡先】北(D203, 656-7496, kita@is.tokushima-u.ac.jp)

知能情報工学科 (昼間コース)

【備考】毎回の予習・復習を欠かさず行うこと。随時、レポート及び小テストを実施する。成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点には受講姿勢、レポートの提出状況と内容を含み、試験には小テスト及び最終試験の成績を含む。

オペレーティングシステム

Operating System

助教授・小野 功 2 単位

【授業目的】 計算機を利用する上で必要不可欠な存在であるオペレーティングシステムの仕組みを理解するとともに、オペレーティングシステムが提供する機能を完全に使いこなすために必要なシステムコールについて習得させることを目指す。

【授業概要】 本講義では、代表的なオペレーティングシステムである UNIX を対象に、バッファキャッシュ、ファイルシステム、プロセスの構造および制御、メモリ管理、I/O サブシステム、プロセス間通信などの仕組みについて講義するとともに、それらを利用するためのプログラミングインターフェースであるシステムコールについても、Linux を具体例にあげながら説明を行う。さらに、組込機器を制御するために必要不可欠なリアルタイム・オペレーティングシステムについても触れる。

【受講要件】 計算機の仕組み、C 言語を理解していることが望ましい

【到達目標】

1. オペレーティングシステムの仕組みを理解する。
2. システムコールを理解する

【授業計画】 1. オペレーティングシステム概論 2. カーネルの基礎 3. バッファキャッシュ 4. ファイルの内部表現 5. ファイルシステム用システムコール (1) 6. ファイルシステム用システムコール (2) 7. プロセスの構造 8. プロセスの制御 9. プロセススケジューリングと時計 10. メモリ管理 11. I/O サブシステム 12. プロセス間通信 13. リアルタイム・オペレーティングシステム (1) 14. リアルタイム・オペレーティングシステム (2) 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】 レポート、小テストなどの平常点、および期末試験の成績を総合して行う。平常点と期末試験の比率は 4:6 とする。

【教科書】 講義に必要な資料は講義中に配布する。

【参考書】 Maurice J. Bach 著「UNIX カーネルの設計」共立出版、Gary Nutt 著「実習 Linux カーネル」ピアソン・エデュケーション、塚越一雄著「Linux システムコール」技術評論社、坂村健監修「T-Kernel 標準ハンドブック」パーソナルメディア

【連絡先】 小野(D棟107, 656-9139, isao@is.tokushima-u.ac.jp)

確率統計学

Probability and Statistics

教授・竹内 敏己 2 単位

【授業目的】 確率的な現象の捉え方、考え方を学ぶとともにデータを処理する際に使われる統計手法を習得することを目指す。

【授業概要】 初めて数理統計を学ぶ初学者のために、統計資料の特徴の解析および確率論の基礎と小数標本論の初歩を解説する。

【受講要件】 「微積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】 講義内容が多岐にわたるため、テーマ別に数多くの演習問題をこなすことが望ましい。

【到達目標】

1. 基本的な確率の計算ができる。
2. 基本的な分布関数が理解できる。

【授業計画】 1. 事象と確率 2. 確率変数 3. 2 項分布、ポアソン分布 4. 確率変数の独立性 5. 平均と分散 6. 連続的確率変数 7. 正規分布 8. 様々な連続的確率分布 9. 統計学の考え方 10. 中心極限定理 11. 仮説検定法の手順 12. 正規母集団の母平均の検定 13. 出現率の検定 14. 相関関係 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】 期末試験を 70%、講義への取り組み状況を 30%として評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【教科書】 坂光一他『例題中心 確率・統計入門』学術図書出版社

【参考書】 青木利夫、吉原健一『統計学要論』培風館

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 竹内(A206室, TEL:656-7544, e-mail:takeuchi@pm.tokushima-u.ac.jp)

画像処理工学

Image Processing

教授・大恵 俊一郎 2 単位

【授業目的】 視覚認識技術に不可欠な画像処理の基本的な手法を理解させる。

【授業概要】 画像処理工学は、医療画像処理、工業用画像処理、視覚パターン処理等の基礎になるデジタル画像処理手法の基本的事項を修得するための講義であり、画像処理の基本概念、2 値画像処理、画像の変換と強調、画像の復元、画像の特徴抽出、パターンマッチング、パターン分類、画像処理システム、および工業用画像処理への応用について講述する。なお、工業用画像処理については、その分野の専門家に集中講義を依頼することにより、広い最新情報を修得できるようにしている。

【受講要件】 線形システム解析、信号処理工学及び演習、マイクロプロセッサを履修しておくことが望ましい。

【到達目標】 視覚情報処理技術に不可欠な画像処理技術の基本的な手法を理解し、応用力をつける。

【授業計画】 1. デジタル画像処理の特徴、画像のデータ構造 2. 画像処理アルゴリズムの形態、ヒストグラム 3. 画像の 2 値化、2 値画像の連結性と距離 4. 連結成分の変形操作、図形の形状特徴 5. 画像の変換と強調 6. 平滑化と雑音除去 7. 画像の復元、画像の再構成、幾何学的変換 8. エッジ検出、線の検出 9. 領域分割、テキスト解析 10. 3 次元画像処理、動画像解析 11. パターンマッチング、分類機構 12. 画像処理システム 13. 工業用画像処理の要点、位置、形状の認識 14. 欠陥の認識、表面情報の認識 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】 毎回講義終了前に、その時間帯に習った内容から 10 分間の小試験を行い、さらに定期試験も行って、総合的に評価する。

【教科書】 田村秀行 監修「コンピュータ画像処理入門」総研出版

【参考書】 高木幹雄・下田陽久 監修「画像解析ハンドブック」東京大学出版会

【連絡先】 大恵俊一郎、知能情報工学科204号室、088-656-7500, oe@is.tokushima-u.ac.jp

【備考】 確率統計学、信号処理工学、線形システム解析および計算機アーキテクチャを履修しておくこと。また、工業用画像処理については、専門家の非常勤講師が集中講義を行うので、必ず出席のこと。欠席の場合は単位を認めない。

計算機アーキテクチャ

Computer Architecture

講師・佐野 雅彦 2 単位

【授業目的】 1940 年代にフォン・ノイマンにより開発された現在のコンピュータは急速な進歩を遂げている。この講義ではコンピュータアーキテクチャの基本を理解し、高性能化に不可欠なアーキテクチャを修得する。

【授業概要】 ノイマン型のコンピュータの基本概念と、各種の方式の歴史を踏まえた上で、計算機本体を構成する基本アーキテクチャを講義する。また、高性能化のための各種方式について講義し、計算機の将来について議論する。

【到達目標】 情報処理システムにおける既存のハードウェア及びソフトウェア技術の特徴と問題点を理解し、今後必要とされる情報処理システム設計・構築のための基本的概念と応用できる能力を修得する。

【授業計画】 1. 計算機の歴史および性能評価法 2. 数値表現形式と演算 3. 演算回路の構成方式 4. 命令実行方式・小テスト 5. メモリ構成 6. 入出力制御 7. 仮想記憶 8. キャッシュメモリ・レポート 9. バイブライン 10. 高速化 11. 投機実行・レポート 12. 並列処理・処理モデル 13. 並列処理・通信方式 14. 将来の計算機・レポート 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】 講義への参加状況、小テストの実施またはレポートの提出を求めると共に期末試験を実施する。成績はこれらの結果を総合して評価する。

【教科書】 各講義時に資料等を配付

【参考書】 高橋義造「計算機方式」コロナ社 (1985)、中澤喜三郎「計算機アーキテクチャと構成方式」朝倉書店 (1995)、柴山潔「コンピュータアーキテクチャの基礎」近代科学社 (1993)、John P.Hayes「Computer Architecture and Organization」2nd ed. McGraw-Hill (1988)

【連絡先】 佐野(総合情報処理センター403, 656-7559, sano@ipc2.tokushima-u.ac.jp)

【備考】 各種の雑誌や書籍に掲載される計算機アーキテクチャを調べることが望ましい。成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点は講義への参加状況、演習の回答およびレポートの提出状況と内容を含み、試験には小テスト及び最終試験の結果を含む。

言語工学 1

Language Engineering 1

教授・任 福継 2 単位

知能情報工学科 (昼間コース)

【授業目的】言語工学で必要な形式文法と基礎数学、そして、自然言語のコンピュータによる処理における形態素解析と構文解析技術を修得させる。

【授業概要】自然言語の基本性質とモデルから始め、言語工学における形態素解析や構文解析の基礎を、実例を与えながら技術的な観点から講義する。

【到達目標】

1. 自然言語のコンピュータによる処理で必要な形式文法、そして、言語工学における基礎的な形態素解析と構文解析技術を修得させる。
2. 授業で取上げる内容は、自然言語処理だけではなく、プログラミング言語処理にも有用な考え方や技法であるが、言語工学における重要なアルゴリズムを勉強し、知能情報工学を考える能力を育成する。

【授業計画】1. 言語工学概観 2. 基礎数学 3. 形態素解析 1 4. 形態素解析 2 5. 形態素解析 3 6. 形式文法 1 7. 形式文法 2 8. 形式文法 3 9. 構文解析 1 10. 構文解析 2 11. 構文解析 3 12. 電子辞書 13. 意味理解の初歩 14. 言語理解とコミュニケーション 15. 総合復習 16. 試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容 (35%) 及び最終試験成績 (65%) を総合して行う。

【教科書】長尾真 編「自然言語処理」岩波書店。

【参考書】岡田直之 著「自然言語処理入門」共立出版、東条敏 著「自然言語処理入門」近代科学社、石崎俊 著「自然言語処理」昭晃堂

【連絡先】任(C棟204室, 656-9684, ren@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】オートマトンと言語理論を受講しておくことが望ましい。

1. 工学倫理についての理解
2. 技術者としての誇りと責任感
3. 関連問題についての理解
4. 実践的対応力

【授業計画】1. はじめに 2. 比較論のこころみ 3. 実例研究 1(グループ討議と発表) 4. 実例研究 2(レポートと小テスト) 5. 技術者倫理と技術倫理 6. 安全と工学倫理 7. 環境・資源問題と工学倫理 8. リスク評価と技術者 9. 実例研究 3(レポートと発表・討議) 10. 技術者と法規 11. 製造物責任 12. 知的財産権と工学倫理 13. 事例研究 4(レポートと発表・討議) 14. 国際工学倫理 15. 実践的技術者倫理

【成績評価】プレゼンテーション評価 50%, レポート・小テスト 50%

【教科書】中村収三著「実践的工学倫理 みじかく、やさしく、役にたつ」、2003年、化学同人、., 全員が教科書を持っていることを前提に授業(レポート、宿題、小テストを含む)を行う。

【参考書】適宜紹介する。

【連絡先】英(M317, 656-7377, hanabusa@me.tokushima-u.ac.jp)

工業基礎英語 I

Industrial Basic English (I) 非常勤講師・広田 知子 1 単位

【授業目的】現代社会の国際言語である英語を用いて、科学技術分野での基礎的な語彙力、読解力、リスニング力を養うことを目的とする。

【授業概要】科学技術分野で頻出の語彙や表現を増やす。イラスト、写真などを参考にしながら、内容理解のための練習問題を通して、英文を理解する力や、必要な情報を効率的に掴む力を養成する。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. HEAT 3. SOUND 4. COMPUTERS 5. (教科書の各章にしたがって進めていくが、途中で適宜リスニング教材やビデオ教材なども使用する。)

【成績評価】コース最終日に試験を行う。

【教科書】ENJOY SCIENCE:データバンク (1) 『やさしい科学』 David Crystal/John Foster Asahi Press

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】授業の前に予習しておくことが望ましい。

工業基礎数学 I

Industrial Basic Mathematics (I) 非常勤講師・吉川 隆吾 1 単位

【授業目的】工学を学ぶために必要不可欠となる微分・積分の基礎的な内容について理解を図り、さらに基本的な手法や計算技術を確実に習得することを目的とする。

【授業概要】1 変数関数および多変数関数の微分・積分について、基礎的な内容から解説する。また、本講義の内容について、より理解を深めるために適宜演習を行う。

【授業計画】1. 微分 1:極限と連続 2. 微分 2:微分 3. 微分 3:導関数の応用 4. 積分 1:不定積分 5. 積分 2:定積分 6. 積分 3:定積分の応用 7. 偏導関数 1:多変数の関数 8. 偏導関数 2:偏導関数 9. 偏導関数 3:全微分 10. 偏導関数 4:Taylor の定理 11. 偏導関数 5:偏導関数の応用 12. 重複積分 1:重複積分 13. 重複積分 2:多重積分の応用

【成績評価】出席状況、レポート、期末考査等により総合的に評価する。

【教科書】特に指定しない。適宜、資料を配布する。

【参考書】矢野健太郎、石原繁 編「微分積分(改訂版)」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義内容を確実に理解するためにも、毎回の復習は欠かさずに行い、次回の講義に望んでもらいたい。成績評価に対する [講義の出席状況、レポートの提出状況] と [小テストの成績] の割合は 4:6 とする。

工業基礎物理 I

Industrial Basic Physics (I) 非常勤講師・佐近 隆義 1 単位

【授業目的】

【授業概要】力学・波動・電磁気学について、ごく初歩的分野を解説する。
【授業計画】1. 運動と力:質点及び剛体の力学、ニュートンの運動の法則、運動量と力積・保存則 2. エネルギーと運動:仕事、力学的エネルギー・保存則 3. 波動:等速円運動、単振動、波 4. 電気と磁気:クローン力、電場と電圧、オームの法則・キルヒホッフの法則、磁場・ローレンツ力 5. 試験

【成績評価】講義への参加状況と試験の成績を総合して行う。

【参考書】高等学校で使用する物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義の最終日に試験を実施するので、毎回の復習を欠かさず行うこと。

言語工学 2

Language Engineering II 教授・任 福継 2 単位

【授業目的】コンピュータによる自然言語理解における意味解析、文脈解析技術および、これらを総合した応用として近年注目を集めている機械翻訳、情報抽出、テキストマイニングなどの構築技術を修得させる。

【授業概要】格文法、意味素、シソーラスなど基礎概念を始め、文の生成や機械翻訳の方法論と構築技術、そしてテキストマイニング手法を、プロジェクトもしながら講義する。

【受講要件】言語工学 I

【到達目標】

1. コンピュータによる自然言語理解における意味解析、文脈解析、そしてこれらを総合した応用である情報抽出と自然言語処理システムの構築技術を修得させる。
2. 機械翻訳やテキストマイニング技術を、プロジェクトもしながら講義することによって、システムティックな解析・設計を行い、現実世界を鑑みた統合・評価ができる能力を育成する。

【授業計画】1. 意味表現と解析 2. 意味素による意味解析 3. 用例とシソーラスによる意味解析 4. 連想関係に基づく意味的曖昧性解消 5. 文脈解析 1 6. 文脈解析 2 7. テキストマイニング 8. 情報抽出 9. 機械翻訳 1 10. 機械翻訳 2 11. スーパー関数に基づく機械翻訳 12. プロジェクト 1 13. プロジェクト 2 14. プロジェクト 3 15. プロジェクト 4 16. 試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容 (40%) 及び最終試験成績 (60%) を総合して行う。

【教科書】特に指定しない。随時講義メモ、資料を配布する。

【参考書】長尾真 編「自然言語処理」岩波書店、岡田直之 著「自然言語処理入門」共立出版、東条敏 著「自然言語処理入門」近代科学社、石崎俊 著「自然言語処理」昭晃堂

【連絡先】任(C棟204室, 656-9684, ren@is.tokushima-u.ac.jp)

工学倫理

Engineering Ethics 非常勤講師・岡村 昭、伊藤 良一 2 単位

【授業目的】技術者としての意識と誇りを身につけ、工学倫理を守るために必要な知識と知恵を学ぶ。

【授業概要】技術者に要求される倫理とは何か?比較研究と事例研究を中心に学ぶ。その上で、安全、環境、法規、知的財産権などに関連して、具体的にどのようなことが問題になるのか?実践的にどのように対処すればよいか?講師たちの技術者としての実体験をもとに、出来るだけ双方向的な授業をこころみる。工学倫理というむずかしそうなテーマにやさしく迫る。

【履修上の注意】各クラス 2 人の講師が、それぞれ 2 日ずつ計 15 時間の授業を行う。全時間の出席を要する。

【到達目標】

国際経営論

Global Business

非常勤講師・片山 善行 2 単位

【授業目的】グローバル化・情報化の大波の中で、グローバル経営を展開する企業が直面する諸問題・課題を最新の事例を基に検討し、その指針・解決策を探る。

【授業概要】近年特に、M&A(企業の合併・買収)は経営戦略における有効な選択肢の一つとして、日本でも確実に定着してきている。そこで本講では、M&Aの戦略的意義・スキーム(構造)・税務的側面・ビジネスインフラ(関連諸法制)の改善等を中心テーマとして、株式価値の創造という視点から検討する。

【授業計画】1. 変貌する M&A と新たな展開 2. 経営戦略としての M&A(I) 3. 経営戦略としての M&A(II) 4. M&A ブームの背景にあるもの・株式価値の創造 5. M&A の戦略構造と株式交換(移転)制度 6. M&A 関連法制の改善点 7. M&A の手順と進め方 8. M&A と税務戦略 9. M&A と税務戦略のシミュレーション 10. ポスト M&A のリストラと税戦略 11. 移転価格と税戦略 12. 敵対的 M&A と防衛策 13. M&A と株主価値の創造 14. 外国人のものの考え方、外国人とのつき合い方 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】受講姿勢・期末試験の結果を総合的に評価する。

【教科書】プリントと資料を配付する。

【参考書】片山善行「海外事業展開における税務戦略」中央経済社、服部陽達「M&A 成長の戦略」東洋経済新報社他

【備考】出席を重視するので、必ず出席のこと。

コンピュータシステム管理

System Administration

教授・下村 隆夫 2 単位

【授業目的】ネットワークに接続された複数のコンピュータシステムを管理運用するシステム管理者に必要な知識、技術を修得させることを目的とする。

【授業概要】Linux システムをインストールし、ネットワークに接続して運用するために必要な知識、技術について体系的に解説するとともに、例題、課題を与えて演習を行い、実際の操作方法を修得させる。

【受講要件】「プログラミング方法論 1, 2」、「オペレーティングシステム」を履修していることが望ましい。

【到達目標】オペレーティングシステム、プログラミング・ツール、サーバソフトウェアのインストール、運用ができる能力を養成する。

【授業計画】1. Linux インストール 2. NIS, DNS, DHCP の運用 3. 周辺装置の設定 4. システム管理・運用 5. プログラミング・ツールのインストール 6. Web サーバの運用 7. サブネットコンテナの運用 8. データベースの運用 9. SSH とポート転送 10. Mail システムの運用 11. ファイアウォールの構築 12. 無線 LAN の運用 13. マルチブート 14. パーチャルマシンの利用 15. 定期試験

【成績評価】授業への参加姿勢、毎回課すレポート、および、定期試験の成績を総合して行う。平常点と定期試験の比率は 3:7 とする。

【教科書】開講前に、掲示により教科書を指定する。

【参考書】中島、濱野著「LPIC レベル 1」翔泳社

【連絡先】下村(C402, 656-7503, simomura@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】Web ブラウザで必要な情報を参照しながら、システム管理・運用を行い、レポートとしてまとめ、電子メールで提出してもらう。

コンピュータ入門 1

Introduction to Computer I

助教授・上田 哲史, 講師・毛利 公美 助手・柘植 覚 2 単位

【授業目的】UNIX を中心とした基礎的なコンピュータリテラシーを、十分な実習時間をかけて修得させる。

【授業概要】UNIX はマルチユーザ・マルチタスクのオペレーティングシステム(OS)であり、C 言語とのインターフェイスが良く、各種コンパイラ、テキスト処理ツールも豊富に用意されている。また、インターネットへの親和性にも優れ、電子メール、ネットニュースなど、多くのネットワークサービスのサーバおよびクライアントが動作している。UNIX の伝統や哲学を理解し、各自が各ツールを使いこなして、各種情報処理やプログラミングを効率よく行えるようになることを目指す。実習を中心とした講義展開を行なう。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】「コンピュータ入門 2」と連動、一貫した授業展開を行う

【到達目標】

1. 基本的なコンピュータによる読み書き算法の修得
2. プログラムの作成と実行まで、コンピュータシステム内での振る舞いを意識しながらの理解

【授業計画】1. コンピュータ、インターネットの利用と情報倫理 2. UNIX の概説、コンピュータの取り扱い基礎 3. エディタと電子メール基礎 4. エディタと電子メール応用 5. ファイルとディレクトリの操作 6. 標準入出力と各種 UNIX コマンド 7. LaTeX によるレポート作成技術 8. データ処理技術 9. C 言語の概要とプログラミング環境 10. データ型と演算 11. 制御構造(1) 12. 制御構造(2) 13. 総括と補足 14. オンライン模擬試験 15. オンライン単位認定試験 16. 予備日

【成績評価】課題を毎回出題する。試験と課題の達成状況を総合的に判断して評価する。平常点と試験の比率は 7:3 とする。

【教科書】利用の手引き(無償配布)、柴田望洋, 定本明解 C 言語入門編, ソフトバンク出版

【参考書】坂本文「たのしい UNIX」アスキー出版

【連絡先】上田(Ait502, 656-7501, tetsushi@ait.tokushima-u.ac.jp)

【備考】1 年生後期の「コンピュータ入門 2」と連続して講義および演習を進める。

コンピュータ入門 2

Introduction to Computer II

助教授・上田 哲史, 講師・毛利 公美 助手・柘植 覚 2 単位

【授業目的】UNIX オペレーティングシステムを念頭においた C 言語の基礎を理解し、プログラムを「書く」習慣を身につける。

【授業概要】UNIX 自身もその内部はほとんど C 言語で記述されていることはよく知られている。C 言語の初歩的な事柄について、実習による裏付けを取りながら理解を深めてゆく。「コンピュータ入門 1」で培った技術を活用できるのは勿論、プログラミング環境を効率良く行なえる各種ツールについても講述する。

【受講要件】「コンピュータ入門 1」を受講していることが望ましい

【到達目標】

1. 基本的な C プログラムの作成ができるようになる
2. 既存プログラムの「模倣」ではなく、アルゴリズムを自立的に思考する能力を身につける

【授業計画】1. 反復構造(1) 2. 反復構造(2) 3. 配列 4. 関数 5. 入出力と文字 6. 文字列の扱い 7. 関数や変数のスコープ 8. ポインタ(1) 9. ポインタ(2)と文字列の処理 10. ポインタ応用 11. 構造体 12. 構造体へのポインタと動的メモリ取得 13. 総括と補足 14. 模擬試験(筆記) 15. 単位認定試験(筆記) 16. 予備日

【成績評価】課題を毎回出題する。試験と課題の提出状況、受講姿勢を総合して評価する。平常点と試験の比率は 4:6 とする。

【教科書】柴田望洋, 定本明解 C 言語入門, ソフトバンク出版

【参考書】B.W. カーニハン・D.M. リッチー著・石田晴久訳「プログラミング言語 C 第 2 版」共立出版。

【連絡先】上田(Ait502, 656-7501, tetsushi@ait.tokushima-u.ac.jp)

【備考】1 年生前期の「コンピュータ入門 1」と連続して講義および演習を進める。

コンピュータネットワークおよび演習

Lecture and Exercise in Computer Networks

教授・森井 昌克 3 単位

【授業目的】本講義ではコンピュータネットワークにおける基礎技術やその評価手法を修得することを目的としている。

【授業概要】コンピュータネットワークに必要な要素技術として、LAN、広帯域網、ネットワーク相互接続技術、ネットワーク管理技術、ネットワーク評価手法について解説する。

【履修上の注意】教科書は変更することがある。

【授業計画】1. コンピュータ網とインターネット 2. アプリケーション層(HTTP, FTP, SMTP, DNS) 3. アプリケーション層(TCP/UDP Socket Programming) 4. トランスポート層(UDP, TCP) 5. トランスポート層(輻輳制御) 6. ネットワーク層(インターネットプロトコル) 7. ネットワーク層(ルーティング) 8. データリンク層(LAN) 9. データリンク層(WAN) 10. マルチメディアネットワーク(アプリケーション) 11. マルチメディアネットワーク(統合サービス) 12. コンピュータ網におけるセキュリティ 13. ネットワーク管理(MIB, SNMP) 14. ネットワークシミュレーション 15. ネットワーク解析 16. 期末試験

【成績評価】平常点は小テスト、レポート、受講姿勢の総合評価とする。演習として課す小テストは講義内容の理解を確認する程度の簡単な問題とする。レポートは、深い考察が必要な課題を出し、思考力を試す。

知能情報工学科 (昼間コース)

【教科書】James F. Kurose and Keith W. Ross, "Computer Networking - A Top-Down Approach Featuring the Internet," Pearson Education

【参考書】Behrouz Forouzan, "Introduction to Data Communications and Networking," McGraw-Hill

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】平常点を4割, 期末試験を6割として評価する。

最適化理論

Optimization Theory 講師・最上 義夫 2単位

【授業目的】最適化の概念, 数値処理による最適化, 学習に基づく最適化について講義し, さらに演習と随時行う試験によって, 最適化の基礎知識を修得させる。

【授業概要】最適化は工学諸分野における一般的かつ基礎的な概念であるが, 本講義では非線形計画法 (数値処理による最適化) と学習ユニットによる最適化 (学習に基づく最適化) とを中心とした講義を行う。非線形計画法においては最急降下法, ニュートン法, 準ニュートン法, 直接探索法について講義し, 学習ユニットによる最適化においては学習オートマトンや強化学習ユニットによる最適化について講述する。あわせて演習を行わせることによって, 数値処理による最適化と学習に基づく最適化についての基礎知識を修得させる。

【受講要件】「コンピュータ入門1, 2」の履修を前提として講義を行う。さらに「数値計画法」, 「数値解析」を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】適宜演習を課すので, すべての演習を必ず行うこと。

【到達目標】数値モデルに基づく数値処理による最適化手法と数値モデル化が困難な場合に有効である学習に基づく最適化手法とを修得させることによって, 工学諸分野において広く存在する最適化問題をシステムティックに解決する能力を育成する。

【授業計画】1. 工学における最適性と最適化の概念および最適化問題の定式化 2. 制約なし最適化問題と降下法 3. 直線探索 4. 最急降下法 5. ニュートン法 6. 準ニュートン法 7. 直接探索法 8. 学習オートマトンによる最適化 (移動ロボットの迷路探索) 9. 学習オートマトンの基本モデル 10. 種々の学習アルゴリズム 11. 学習アルゴリズムの特性 12. 強化学習ユニットと最適化 13. 2値出力強化学習ユニット 14. 実数値出力強化学習ユニット 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義への参加状況, 演習のレポートの提出状況と内容, 試験の成績を総合して行う。

【教科書】特に指定しない。適宜資料を配布する。

【参考書】馬場則夫・坂和正敏「数値計画法入門」共立出版, 今野 浩・山下 浩「非線形計画法入門」日科技連, K.S.Narendra and M.A.L.Thathachar "Learning Automata - An Introduction" Prentice Hall

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】最上(C404, 656-7505, moga@is.tokushima-u.ac.jp)

システム設計及び実験

System design and experiment 助教授・黒岩 真吾, 福見 稔

助教授・小野 功, 寺田 賢治, 池田 建司, 上田 哲史

講師・最上 義夫, 佐野 雅彦, 文部科学技官・石田 富士雄

文部科学技官・石井 純也, 久米川 富夫, 辻 明典, 富士 正人

文部科学技官・板東 亘 6単位

【授業目的】ハードウェアに関する個々の要素技術を理解しているだけではシステムを作り上げることはできない。本実験では, ハードウェアに関する個々の要素技術をシステムとして統合する能力を養うことを目的としている。

【授業概要】ハードウェアやそれを駆動するソフトウェアに関する基礎知識を習得するための個別実験に取り組む。各実験テーマ終了後にレポート提出が課される。

【到達目標】

1. 完全自律型ロボットに必要な各要素技術を, 自主的に身に付ける。
2. 単なる机上の理論だけでなく, ハードウェアの原理, ソフトウェアの構造を深く理解する。
3. 与えられた仕様を満たすような完全自律型ロボットを設計する。
4. 与えられた実験環境の下で, 制限時間内で, 計画的に完全自律型ロボットを完成させる。
5. 自分の考えを明確かつ論理的に人に伝達する能力や, 双方向のコミュニケーションがとれる能力を身に付ける。
6. グループで協調しながら仕事を行なう。

【授業計画】1. ガイダンス, アナログ実験の説明 2. アナログ実験 1 3. アナログ実験 2 4. デジタル実験 1 5. デジタル実験 2 6. 基板実装技術 1 7. 基板実装技術 2 8. センサ製作 1, 全体説明 9. センサ製作 2

10. センサ製作 3 (センサ等に関する試験) 11. センサ製作 4 12. センサ製作 5 13. センサ製作 6 14. センサコンテスト, マイコン・マザーボード説明 15. マイコン・マザーボード製作 16. マイコン・マザーボードの利用 17. プログラミング 1 18. プログラミング 2 19. プログラミング 3 20. 制御技術レクチャー・構想打合わせ・ロボット製作 1 21. ロボット製作 2 22. ロボット製作 3 23. ロボット製作 4 24. 規定コンテスト 25. ロボット製作 5 26. ロボット製作 6 27. ロボット製作 7 28. 予備コンテスト 29. ロボット改良 1 30. ロボット改良 2 31. 最終コンテスト 32. 最終プレゼンテーション

【成績評価】実験態度, レポートを総合して評価する。

【教科書】知能情報工学科編「システム設計及び実験」

【参考書】実験テーマごとに指定される。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】池田(C403, 656-7504, ikeda@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】無断欠席および遅刻, 期限後の報告書提出は一切認められていない。ドライバー, 半田こてなどの工具を各自で用意すること。

集積回路工学

Integrated Circuits 教授・赤松 則男 2単位

【授業目的】集積回路に関する基本的知識とその設計法を習得する。レポート, 小試験を実施して集積回路の設計に必要な基礎知識を習得する。

【授業概要】パルスとその基本動作, パルス増幅回路の特性を説明し, MOS-FET を用いた論理回路を解説する。コンピュータのメモリとしてバイポーラトランジスタおよび MOS-FET の S-RAM, D-RAM, ROM の回路と使用方法を解説する。ASIC に代表される集積回路の設計は重要であるので詳細に説明し, 学生自身で集積回路を設計する。

【受講要件】電子回路, 電気回路および演習, 物理学 (物性, 電気磁気学, 力学, 熱力学, 光学, 量子力学), 数学 (微分方程式, 関数論, ベクトル, マトリックス, 統計学, 論理学) などの基礎学力を十分に備えていることが受講に際しての必要条件です。

【到達目標】エレクトロニクスおよびコンピュータのハードウェアとソフトウェアのバランスの良い思考ができるための基礎的な知識を習得し, これを数理的に展開し, 構造的なシステムの設計ができ, これを表現することができる能力の獲得を到達目標とする。

【授業計画】1. MOS 型の電界効果トランジスタ I (構造, 動作原理, 種類) 2. MOS 型の電界効果トランジスタ II (電圧・電流特性) レポート 3. MOS-FET を用いるインバータ回路 I (種類, N-MOS) 4. MOS-FET を用いるインバータ回路 II (C-MOS) レポート 5. NAND 論理回路 6. NOR 論理回路 レポート 7. 状態論理回路 8. 中間試験 9. 半導体メモリ I (MOS-FET を用いるメモリ, RAM) 10. 半導体メモリ II (P-RAM, バイポーラメモリ) 11. 集積回路の設計法: レポート 12. プログラマブルロジックアレイ (PLA) 13. PLA を用いる設計例・小試験 14. 集積回路システムの開発法 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義中に行う中間試験および小試験と試験期間中に行う定期試験とレポートの結果を考慮し, 受講姿勢にも配慮して成績を総合的に評価する。再試験は行う。

【教科書】赤松則男「エレクトロニクス回路」

【参考書】安藤和昭「パルス・デジタル回路」, 斉藤忠夫「電子回路入門」

【備考】大学院でさらに高度な集積回路設計技術を学ぶための基礎的科目であるので, 特に進学希望者は必ず習得する必要がある。成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点には講義への参加状況, 演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み, 試験には小試験及び最終試験の成績を含む。

情報計測工学

Instrumentation System 教授・大患 俊一郎 2単位

【授業目的】人間の五感の働きを, 機械に人間同様もしくはそれ以上の能力にて代行させようとする技術が情報計測である。これまでに物理量を検出する多くのセンサと計測技術が開発され, 実用化されている。本講義では, 物理システムの制御に不可欠な情報計測技術の基礎事項を理解させる。

【授業概要】情報計測の一般的な流れは, センサを用いて対象の状態を表す物理量を電気信号に変換して計算機に取り込み, 人間や機械が計測対象の状態を容易に把握できるデータに変換するものである。本講義では, この一連の処理に用いられる技術, すなわち目的に応じて物理現象や化学現象を利用して作られた各種センサの原理, センサ出力を計測するためのアナログ回路と計算機に取り込むための入力インター

知能情報工学科 (昼間コース)

フェイス、さらにデジタルデータを人間や機械が計測対象の情報を容易に把握できるように変換する技術などに関して、具体例を示しながら平易に解説する。

【受講要件】電気回路及び演習、電子回路、マイクロプロセッサを履修しておくことが望ましい。

【履修上の注意】センサの部分は専門の非常勤講師が講義を行うので、必ず出席のこと。

【到達目標】情報計測技術の基本的な事項と3年次に開講される「システム設計及び実験」で必要とされる知識を習得することを目標とする。

【授業計画】1. 計測の基礎 2. 光センサと磁気センサ 3. 圧力センサと温度センサ 4. 位置センサと超音波センサ 5. 湿度センサとガスセンサ 6. オペアンプとアナログ演算回路 7. AD変換器 8. DA変換器 9. アナログフィルタ 10. 入出力インターフェイス 11. デジタル計測制御システム 12. 信号の変換 13. 電子計測器(指示計器、波形表示装置) 14. 電子計測器(波形解析装置、記録装置) 15. 期末試験

【成績評価】受講姿勢、講義終了前の小試験と定期試験及び非常勤講師のレポートから総合的に評価する。

【教科書】田所嘉昭著「電子計測と制御」森北出版

【参考書】山崎弘郎著「センサ工学の基礎」昭晃堂、藤原修著「インターフェイスの電子回路入門」オーム社

【連絡先】大恵(C204, 656-7500, oe@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義終了前に行う小テストは、その時間中に講義した内容から出題する。

【授業目的】高度情報化社会の基盤技術であるマルチメディア、およびそれを支える通信技術、デジタル符号化技術を理解するための基礎理論、技術を習得する。また秒進歩に進んでいる最先端技術の概要に触れる。この講義により、現在そして将来の通信技術およびコンピュータでのデータ処理を理解し、新しい理論および技術を築く上での礎となることを期待する。

【授業概要】情報理論は情報の数量的な取扱いに関する基礎理論であり、現在のマルチメディアおよび高速データ通信技術の礎となっている。特に情報を如何に数量的に扱い、表現するか、さらにその情報の伝達、蓄積を如何に効率よく、そして信頼性を高く行うかを議論する。本講義では、情報理論の基礎を習得するとともに、そのマルチメディアおよび高度情報ネットワークへの応用技術について学ぶ。

【授業計画】1. 情報理論概説、情報通信工学との関係 2. 情報源のモデル化 3. 情報源符号化の基礎概念 4. 情報源符号化定理 5. ハフマン符号 6. 最新のデータ圧縮アルゴリズム 7. 画像データ圧縮と離散コサイン変換 8. 標本化定理 9. 情報量、エントロピー、相互情報量 10. 通信路容量 11. 通信路符号化定理 12. 通信路符号化基礎 13. 符号理論の予備知識 14. 符号理論の基礎 15. 暗号と情報セキュリティ 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容、小テスト及び最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】特に指定しない。

【参考書】宮川 洋 著「情報理論入門」好学社、今井秀樹 著「情報理論」昭晃堂

【備考】原則として、毎回のレポート提出を義務づけ、不定期に小テストを行う。成績評価に対する平常点と試験の比率は5:5とする。平常点には講義への参加状況、演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み、試験には小テスト及び最終試験の成績を含む。

情報工学実地演習

Internship

1 単位

【授業目的】企業等における研究開発活動の場を広く実地に体験させることで、将来の技術者としての目標をより具体的に描かせる。

【授業概要】派遣先の企業等において、予め目標を設定し、その達成に向けて実習を行う。

【受講要件】事前研修を受講し、社会人としての心構えができていないもの。

【到達目標】情報処理技術の社会に及ぼす影響・効果に関する理解力や責任など、技術者倫理を養うことを目標とする。

【授業計画】1. 3年次の夏季休業期間を利用して、2~3週間にわたり、企業等において実習を行う。

【成績評価】実習終了後、所定の書式にしたがい、報告書を提出する。

情報数学

Mathematics in Computer Science

教授・森井 昌克 2 単位

【授業目的】コンピュータサイエンスおよび情報処理、特に人工知能技術を理解するうえで必要な数学を理解する。

【授業概要】現在のコンピュータや言語処理システムで必要かつ不可欠な集合と関係、論理と推論、ブール代数、及び言語と構文解析を、実例を与えながら理論と技術両面から講義を行う。

【到達目標】

1. 数学、自然科学および情報技術に関する基礎知識をマスターする。
2. 数学、自然科学および情報技術を応用できる能力を育成する。

【授業計画】1. 集合と関係 2. 関係データベース 3. 命題と論理 4. 論理演算 5. 推論 6. 述語論理 7. ブール代数 8. ブール表現と論理回路 9. 確率論(1) 10. 確率論(2) 11. 情報理論の基礎(1) 12. 情報理論の基礎(2) 13. 言語処理 14. 文脈自由文法 15. 情報数学の最新話題 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容、小テスト及び最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】特に指定しない。

【参考書】徳田雄洋著「言語と構文解析」共立出版株式会社

【連絡先】森井(C302, 656-9446, morii@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】原則として、毎回のレポート提出を義務づけ、不定期に小テストを行う。成績評価に対する平常点と試験の比率は5:5とする。平常点には講義への参加状況、演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み、試験には小テスト及び最終試験の成績を含む。

情報理論

Information Theory

講師・得重 仁 2 単位

職業指導

Vocational Guidance

非常勤講師・坂野 義義 4 単位

【授業目的】

【授業概要】生涯発達・Career Developing としての人間観・職業観を確立すべく、学際的見地から職業指導の課題と方法を論述し、併せて能力開発を実践指導する。

【授業計画】1. 職業指導の課題と方法(1) 職業指導発展の略史 2. 職業指導の課題と方法(2) 職業指導の課題 3. 職業指導の課題と方法(3) 個性と職業:個人理解の方法-性格、興味など 4. 職業指導の課題と方法(4) 個性と職業:適応と適性 5. 職業指導の課題と方法(5) 個性と職業:Career Planning としてのライフワーク 6. 職業指導の課題と方法(6) 個性と職業:マネジメントスキル:リーダーシップ論など 7. 職業指導の課題と方法(7) 職業相談(キャリア・カウンセリング):職業相談の意義 8. 職業指導の課題と方法(8) 職業相談(キャリア・カウンセリング):カウンセリング理論と技術 9. 職業指導の課題と方法(9) 職業指導の評価 10. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践(1) 人生60年計画表の作成 11. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践(2) IC法, NM法を活用してソフト作成能力を育成 12. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践(3) KJ法を活用しての課題解決とプレゼンテーション 13. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践(4) シュルツの自律神経訓練法の理解

【成績評価】論文、能力開発のプレゼンテーションにより成績評価。

【教科書】講師よりプリント資料配布。

【参考書】参考書、必読書については、講義中紹介。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】「面白くてためになり、そして思い出に残る」講義が目標。

信号処理工学

Signal Processing

助教授・寺田 賢治 2 単位

【授業目的】知能情報工学の分野をはじめ、電気・電子工学及び他の工学諸分野において極めて重要な技術であるアナログおよびデジタル信号処理について講義し、演習・小テストを実施して、工学部出身者として最低限身につけてはおかなければならない信号処理の基礎知識を修得させる。

【授業概要】信号と信号処理全般、アナログ信号及びデジタル信号の解析、さらにサンプリング、フィルタリング、信号の変換など信号処理に関する基礎力を身に付けさせる。

【到達目標】

1. 信号処理の基礎知識を、講義と実習を通じて身に付ける。
2. 基礎的な学力と、それを各問題に応用できる能力を身に付ける。

知能情報工学科 (昼間コース)

【授業計画】1. 信号と信号処理 2. 信号の分類と変換 3. 信号とシステム 4. フーリエ級数 5. フーリエ変換 6. ラプラス変換 7. 連続時間システムのインパルス応答, 周波数特性 8. 離散時間フーリエ変換 9. 離散フーリエ変換 10. 高速フーリエ変換 11. Z 変換 12. 離散時間システムのインパルス応答, 周波数特性 13. ナイキスト周波数とサンプリング定理 14. フィルタリング 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義への参加状況, 演習・小テストの回答, 及び最終試験の成績を総合して行なう。

【教科書】浜田望 著「よくわかる信号処理」オーム社

【参考書】貴家仁志 著「デジタル信号処理」昭晃堂, 森下 巖 著「わかりやすいデジタル信号処理」昭晃堂 ほか

【連絡先】寺田(C203, 656-7499, terada@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】再試は一切やらない。平常点と試験の比率は 3:7 とする。前者には, 講義への参加状況, 演習・小テストの内容, 後者には最終試験の成績が含まれる。

人工知能 1

Artificial Intelligence 1 教授・小野 典彦 2 単位

【授業目的】知能システムを構築するために不可欠となる人工知能の基礎技術を中心に解説すると共に, 課題を通して, それらの応用方法を実践的に理解させることを目指す。

【授業概要】人工知能研究の流れをその起源から現在までにわたって概説すると共に, 知能システムの構築のための要素技術を修得させる。本講義の内容は初等的ではあるが, 毎回, 人工知能の先端技術との関係についても触れる。

【受講要件】離散数学とグラフ理論 1 および 2 を受講していることが望ましい。

【到達目標】

1. 探索に基づく問題解決の原理, 応用方法および限界を理解する。
2. 知識に基づく問題解決の原理, 応用方法および限界を理解する。

【授業計画】1. 人工知能概論 2. 問題とその解決過程の定式化 3. 探索による問題解決 I 4. 探索による問題解決 II 5. 探索による問題解決 III 6. 知識の表現と利用 7. 論理に基づく知識表現:述語論理 8. 論理に基づく問題解決:導出原理 9. 論理に基づく問題解決:導出原理の応用 10. プロダクションシステムによる知識表現 11. 意味ネットとフレームによる知識表現 12. 知識の獲得と学習 I 13. 知識の獲得と学習 II 14. 人工知能の最新の話題から 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】講義への受講姿勢, 課題に対する取り組み状況, 小テストの成績等の平常点と期末試験の成績を総合して行なう。

【教科書】太原育夫 著「人工知能の基礎知識」近代科学社

【参考書】S. Russell, P. Norvig 著・古川康一監訳「エージェントアプローチ・人工知能」共立出版

【連絡先】小野(D棟106, 656-7509, ono@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】本科目は人工知能の基礎に焦点を合わせたものである。人工知能研究の最新の話題については「人工知能 2」および「知識知能システム」の中で重点的に解説する。なお, 講義で使用するスライドの原稿は Web 上で公開するので, 受講者は予めスライド原稿を印刷しておくこと。平常点と期末試験の成績の割合は 4:6 とする。

人工知能 2

Artificial Intelligence 2 教授・小野 典彦 2 単位

【授業目的】知能システムの実現は容易ではなく, 人間を凌駕するような知能を実現できた人工知能の応用領域はかぎられている。本講義では, 知能を計算機上に実現することがいかに困難な作業であるのかを種々の視点から浮き彫りにすると共に, それを克服することを目指して展開されている最近の人工知能技術を理解させることを目指す。

【授業概要】現実的な知能システムを構築する上で有望な枠組みと考えられる種々の要素技術に焦点を合わせ, それらの基礎, 応用および限界について解説する。

【受講要件】人工知能 1 を受講していることが望ましい。

【到達目標】

1. 知能システムのトップダウン的な構築の限界を理解する。
2. 知能システムのボトムアップ的な構築のための種々の要素技術について, その原理, 応用方法および限界を理解する。

【授業計画】1. 知能システムの実現はなぜ難しいか? 2. 知能システムの創発的設計 3. ニューラルネットの基礎 I 4. ニューラルネットの基礎 II 5. ニューラルネットの応用とその課題 6. 強化学習の基礎 I 7. 強化学習の基礎 II 8. 強化学習の応用とその課題 9. 進化的学習の基礎 I 10. 進化的学習の基礎 II 11. 進化的学習の応用とその課題 12. 自律エー

ジェントの創発的設計 13. マルチエージェントシステムの創発的設計 14. 時系列予測システムの創発的設計 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】受講姿勢, 課題に対する取り組み状況, 小テストの成績等の平常点と期末試験の成績を総合して行なう。

【教科書】特に指定しない。

【参考書】S. Russell, P. Norvig 著・古川康一監訳:エージェントアプローチ・人工知能, 共立出版

【連絡先】小野(D棟106, 656-7509, ono@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義で使用するスライドの原稿は Web 上で公開するので, 受講者は予めスライド原稿を印刷しておくこと。

数値解析

Numerical Analysis 非常勤講師・竹内 敏己 2 単位

【授業目的】様々な数値計算手法を身につけるとともに, 数値解析の基本的な考え方を習得することを目的とする。

【授業概要】丸め誤差などの数値計算における基礎的知識, 補間・非線形方程式などの基本的数値計算法について述べる。

【受講要件】「線形代数」, 「微積分 I」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには各自が普段から自主的な演習を行ない復習を重ねることが必要である。

【到達目標】

1. 数値誤差が理解できる。
2. 非線形方程式の数値解法が理解できる。

【授業計画】1. 丸め誤差, 桁落ち 2. 浮動小数の四則演算 3. 多項式の計算 4. 多項式補間 5. チェビシェフ補間 6. ニュートン補間 7. 数値積分の考え方 8. 補間型積分 9. 高精度近似積分 10. 非線形方程式の解法:2 分法 11. 非線形方程式の解法:ニュートン法 12. 連立非線形方程式に対するニュートン法 13. 微分方程式の解法:オイラー法 14. 微分方程式の解法:ルンゲ・クッタ法 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】期末試験を 70%, 講義への取り組み状況を 30%として評価し, 全体で 60%以上で合格とする。

【教科書】杉浦洋『数値計算の基礎と応用』サイエンス社

【参考書】篠原能材『数値解析の基礎』日新出版, 名取亮『線形計算』朝倉書店, 森正武『数値解析』共立出版, 名取亮『数値解析とその応用』コロナ社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】竹内(A206室, TEL:656-7544, e-mail:takeuchi@pm.tokushima-u.ac.jp)

数値計算法

Numerical Computation 助教授・上田 哲史 2 単位

【授業目的】数値計算において重要な数値誤差と計算の手間(計算時間, 作業領域)を意識した計算の仕組みの理解を目的とする。また, 代表的な数値計算のアルゴリズムの計算機実装とその技術, 性能評価についても学ぶ。

【授業概要】代表的な数値計算のアルゴリズムについて学び, C 言語や Scilab, Octave などを用いてプログラミングする。計算結果の視覚化, 誤差の評価などを適切な手法, ツールを用いて行なう。区間演算, 精度保証についても学ぶ。

【受講要件】必要なアルゴリズムの原理などは, 演習中に説明するが, 数値解析の単位を取得していることが望ましい。

【到達目標】数値モデルに基づくシステマティックな解析・設計の方法を学習し, 数値的に根拠のある解析にもとづく設計能力を育成する。

【授業計画】1. 計算機における数の表現 2. 非線形方程式の解法 I 二分法 3. 非線形方程式の解法 II Newton 法 4. 非線形方程式の解法 III 割線法 5. 数値積分 I 台形則 6. 数値積分 II Richardson 補外 7. 常微分方程式の解法 I Euler 法 8. 常微分方程式の解法 II 修正 Euler 法 9. 常微分方程式の解法 III Runge-Kutta 法 10. 連立一次方程式の解法 I LU 分解 11. 連立一次方程式の解法 II 3 重対角行列, 対称行列の LU 分解 12. 連立一次方程式の解法 III ピボットの部分選択 13. 最小 2 乗法 QR 分解, Householder 変換 14. 最小 2 乗法 QR 分解, システム同定への応用 15. 行列の固有値問題 Hessenberg 形, 原点移動, 減次 16. 予備日

【成績評価】毎回の実習ごとに提出されるレポート, および, 実習態度などにより評価する。実習に関する注意事項を別に配布するので, それに基づいてレポートを作成する。すべてのレポートを提出し, かつ, 合格点に達したものに限り単位が与えられる。定期試験は行わない。

【教科書】特に指定しない。

知能情報工学科 (昼間コース)

【参考書】篠原能材「数値解析の基礎」日新出版、伊理正夫・藤野和建「数値計算の常識」共立出版、森正武「数値計算プログラミング」岩波書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】上田(Ait502, 656-7501, tetsushi@ait.tokushima-u.ac.jp)

数理計画法

Mathematical Programming

助教授・池田 建司 2 単位

【授業目的】本講義は2つの部分からなる。前半は線形計画法であり、その理論と計算法について解説する。後半では、ネットワーク上の最適化を論じる。基礎理論を厳密に展開し、理解させることを目的としているが、同時に、理解をより容易にするため、理論の意味を幾何学的に把握できるように配慮している。また、例題を取り上げ、演習を実施している。

【授業概要】線形計画法とネットワーク最適化について講義している。線形計画法では、その定式化の方法、シンプレックス法を中心とした計算法、シンプレックス法の有効性を保証する基本定理、理論的背景であり、かつ線形計画法の幾何学的解釈を示している。双対定理とファークスの補題などについて述べる。ネットワーク最適化では、代表的な問題として、最短経路問題、最小木問題、最大流問題を扱う。

【受講要件】必要な予備的知識は講義の中で一応述べるが、線形代数の知識(ベクトルの一次独立性、行列の階数)をもっていることが望ましい。

【到達目標】数理モデルにもとづくシステムティックな解析・設計能力を養い、最適化理論やシステム工学といった学問体系の基礎となす。

【授業計画】1. 線形計画法の導入 2. 図的解法から代数的解法へ 3. 線形代数の復習 4. 線形計画法の基本定理 5. シンプレックス法 6. 2段階法 7. 行列表現と改訂シンプレックス法 8. 双対問題、双対定理、ファークスの補題 9. グラフ理論の復習 10. 最短経路問題(Dijkstra法) 11. 最小木問題(Kruskal法) 12. 最小木問題(Prim法) 13. 最大流・最小カット問題 14. 最大マッチング・最小カバー定理 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】毎回行う小テストの結果と定期試験の結果を総合して評価する。

【教科書】特に指定しない。配布資料とスライドによって講義を進める。

【参考書】馬場則夫・坂和正敬著「数理計画法入門」共立出版、今野浩「線形計画法」日科技連

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】池田(C403, 656-7504, ikeda@is.tokushima-u.ac.jp)

数理論理学

Mathematical Logic

教授・北 研二 2 単位

【授業目的】近年、計算機科学の色々な分野で数理論理学が用いられるようになってきている。本講義では、計算機科学を専攻する上で知っておくべき数理論理学の基礎について講述する。

【授業概要】まず数理論理学を学ぶ上で最も基礎になる命題論理について説明し、論理式の真偽、トートロジー、証明可能性等について論じる。その後、命題論理を述語論理へ拡張し、述語論理の論理式、形式的体系等について論じる。

【受講要件】特になし。

【到達目標】コンピュータで各種問題を扱う際に重要となる問題の形式化、数学的モデル化などの基礎的な能力を修得する。

【授業計画】1. 命題と論理式 2. 論理式と真偽 3. 命題論理式の性質 4. 命題論理式の解釈 5. 命題論理式の標準形 6. 命題論理と公理系 7. 命題論理と推論 8. 中間試験 9. 述語論理の論理式 10. 述語論理の論理式 11. 述語論理の解釈 12. 述語論理式の標準形 13. 述語論理と導出原理 14. 述語論理と導出原理 2 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】受講姿勢、レポートの提出状況と内容、小テスト及び中間試験、定期試験の成績を総合して行う。

【教科書】小倉久和・高濱徹行著「情報の論理数学入門」近代科学社

【参考書】特になし

【連絡先】北(D203, 656-7496, kita@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】毎回の予習・復習を欠かさず行うこと。随時、レポート及び小テストを実施する。成績評価に対する平常点と試験の比率は4:6とする。平常点には受講姿勢、レポートの提出状況と内容を含み、試験には小テスト及び中間試験・定期試験の成績を含む。

生産管理

Production Control

非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為に生産現場で何をしているかを理解する。

【授業概要】企業経営は経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で生産技術のキーとなる事項について講義する。講義計画に従い生産管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 生産管理 2. 生産計画 3. 原価管理 4. 経営システム(ISO) 5. IE(Industrial Engineering) 6. 品質管理とTQC 7. トヨタ生産方式 8. 中間及び最終レポート(生産管理のまとめ)

【成績評価】講義への取り組み状況、レポートの内容

【教科書】その都度提供する。

【参考書】市販の生産管理に関する書籍、「生産管理便覧」丸善

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】出席率80%(12回)、レポート(中間と最終)の内容20%

生体情報工学

Biological and Medical Engineering

教授・赤松 則男

助教授・福見 稔 2 単位

【授業目的】生体と情報工学との関連と類似性および医用工学への応用を概説する。

【授業概要】最初に生体工学の概念を説明し、ニューロンの動作とモデルおよび最近、集積回路化されて実用性が重視されているニューロン回路も解説する。神経系と筋肉系の関係および心電位と筋電位さらに生体の情報処理に関する講義も行う。脳波計測とその意義を説明し、ニューラルネットワークに関する講義を行う。

【受講要件】コンピュータのハードウェアおよびソフトウェアの知識を十分に備え、数理論理的な思考ができて、将来の情報工学の展望を志向することが受講に際しての必要条件です。

【到達目標】エレクトロニクスおよびコンピュータのハードウェアとソフトウェアのバランスの良い思考ができるための基礎的な知識を習得し、これを数理的に展開し、現状のコンピュータのハードウェアとソフトウェアの実態と問題点を分析し、将来のコンピュータ・システムの構築に寄与する思考能力の獲得を到達目標とする。

【授業計画】1. 生体情報工学序説 2. ニューロンの機能と動作 3. ニューロンの人工的モデル・レポート 4. 網膜における視覚の情報処理 5. 網膜のモデリング 6. 大脳における視覚情報処理 7. 運動制御系の生理システム・小試験 8. 心電図と筋電位の発生と計測 9. 脳とその生理学的考察 10. 脳波計測・レポート 11. 脳波とその心理状態 12. 脳記憶と思考 13. ニューラルネットワーク・小試験 14. 学習アルゴリズム 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義中に行う中間試験および小試験と試験期間中に行う定期試験とレポートの結果を考慮し、受講姿勢にも配慮して成績を総合的に評価する。再試験は行う。

【教科書】なし。

【参考書】福島邦彦「神経回路と情報処理」、樋渡涓二「生体情報工学」

【備考】種々の参考書およびノートを用いて講義するので、全講義に出席する必要がある。成績評価に対する平常点と試験の比率は4:6とする。平常点には講義への参加状況、演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み、試験には小試験及び最終試験の成績を含む。

線形システム解析

Linear System Analysis

助教授・池田 建司 2 単位

【授業目的】物理システムの解析及び構築技術に不可欠な線形システム解析技術の基本的な考え方を理解させる。

【授業概要】本講義の前半では、線形システムの基礎的な自動制御を例にとり、制御理論を展開する上で重要な役割をはたすラプラス変換、ラプラス逆変換、微分方程式のラプラス変換による解法、伝達関数、ブロック線図などの基本概念を述べる。後半では制御系のステップ応答や周波数応答に関する解析手法、制御系の安定性の概念、安定性判別法、および制御系の設計手法の基礎についても触れる。なお、講義を聴講するだけでは理解の難しいと思われる項目については、教科書の例題を中心に演習を行う。

【受講要件】微分方程式1、微分方程式2、力学系の通論、電気回路及び演習を履修することが望ましい。

【到達目標】物理システムの解析及び構築に不可欠な技術である線形システム解析の基本的な手法を理解し、応用力をつける。

【授業計画】1. 制御の目的と定義、フィードバック制御の概念 2. ラプラス変換、微分方程式の解法 3. 演習、小試験 4. 伝達関数の定義、おく

知能情報工学科 (昼間コース)

れ要素次数と過渡応答 5. ブロック線図の構成単位と結合、等価変換
6. 演習、小試験 7. 周波数応答の定義、表現形式 8. 閉ループ系の周波
数応答の求め方 9. 演習、小試験 10. 安定性の定義とその必要十分条
件 11. 安定性の代数的判別法 12. 安定余裕 13. 制御系設計の基礎 14.
演習、小試験 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】期間中に4回小試験を行い、さらに定期試験も行って、総
合的に評価する。

【教科書】添田喬・中溝高好著「自動制御の講義と演習」日新出版

【参考書】示村悦二郎著「自動制御とは何か」コロナ社

【連絡先】池田(C403, 656-7504, ikeda@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】本講義は「離散型システム解析」の履修の前提となるものであ
り、十分に修得しておくことが望ましい。平常点を小試験で評価し、そ
の点と定期試験の比率は、4対6にする。

先端企業基盤通論

Introduction to Engineering Process in Technology-Based Company

星加 修志, 非常勤講師・大田 明美, 船橋 敏博, 山本 貞夫
高橋 一徳, 非常勤講師・中井 正, 秋田 次雄, 後藤 芳和
非常勤講師・松本 充富, 葛谷 秀樹, 新見 昌弘
非常勤講師・尾川 正美 2単位

【授業目的】本講義は企業において第一線で活躍している多くの専門
家の方々、それぞれの専門分野の講義をしていただき、情報機器の
将来の動向、最先端技術、企業倫理、企業での厳しさ、求められる技術
者像等を学び、社会での厳しさを自覚するを目的とする。

【授業概要】知能情報工学科学生が将来進む情報機器分野での先端企業
の第一線で活躍している企業人から、情報機器の世界的動向、グロー
バルマーケティング論、各種最先端技術、知的戦略、工業デザイン、企
業法務、信頼性技術、および求められる技術者像を学ぶ。

【受講要件】講義中に多くの多方面にわたる専門用語が出てくるので、可
能な限り、多くの科目を履修しておくことが望ましい。

【到達目標】企業における技術者の資質、企業の目標、新製品開発の手
順、技術開発の厳しさ、企業倫理、技術の社会と自然に及ぼす影響・
効果に関する理解力や責任など、社会での厳しさと技術者として社会
に対する心構えを自覚する。

【授業計画】1. 求められる技術者像 2. 研究開発技術者のマーケティング
論 3. 情報機器の世界トレンド 4. 映像機器の世界トレンド 5. 企業に
おける要素技術 6. ディスプレイデバイスの技術トレンド 7. 知財戦略
8. 工業デザインの現状と将来 9. 企業法務 10. 車両開発におけるシ
ステム制御の役割 11. 情報処理システムの現状と将来 12. ソフトウェア
技術の現状と将来

【成績評価】毎回講義終了後にレポート問題を出し、次週に提出された
レポートの評価点、受講姿勢、および定期試験により評価する。

【教科書】毎回資料を配付する。

【参考書】特になし

【連絡先】大恵(C204, 656-7500, oe@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】受講姿勢とレポートを重視する。

専門外国語

Foreign Language for Information Science

非常勤講師・ニムチャック アーレン 2単位

【授業目的】本講義では、英語によるコミュニケーションの能力を修得
させること、特に low-Intermediate レベルの学生の能力を intermediate
レベルに向上させることを目指す。

【授業概要】本講義では、英語によるコミュニケーションの能力を修得さ
せること、特に low-Intermediate レベルの学生の能力を intermediate レ
ベルに向上させることを目指す。

【受講要件】特になし

【到達目標】国際的に通用するコミュニケーション能力の基礎を育成する。

【授業計画】1. introductions 2. airport check-in 3. classroom english 4.
travel requests 5. past tense verbs 6. exchanging money 7. comparative
forms 8. describing people 9. time 10. hotel check-in 11. prepositions
of place 12. hotel requests 13. likes/dislikes 14. stolen goods 15. gifts-
suggestions 16. bus/train 17. future plans 18. theatre tickets 19. frequency
adverbs 20. polite questions 21. tag questions 22. directions 23. fast food
24. ailments 25. jobs 26. help 27. food-countables 28. restaurant english
29. instructions 30. gestures

【成績評価】受講姿勢および期末試験を総合して評価する。

【教科書】'Practical English' by Arlen Nimchuk

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】受講姿勢および期末試験をそれぞれ 50:50 で評価し総合成績と
する。

卒業研究

Bachelor's Thesis

知能情報工学科全教官 3単位

【授業目的】教室で学んだ知識と勉強の仕方を用いし、課題を解決する
経験を与えることにより、社会に出てから自分の力で問題解決を行える
能力を養う。また自分の考えを正しく伝えるための文章の書き方、多
数の人々に正しく理解して貰うための発表能力を体得する。

【授業概要】多くの場合、指導教官が取り組んでいる研究課題に関連した
課題が与えられ、研究グループに参加して分担する研究を行う。研究
指導はそれぞれの研究室独自の方法が採られるが、一般には最初に研
究に関連する基礎知識を勉強するための専門書や、研究論文をグル
ープで輪講し、実験設備の使用法を修得した後、文献調査や実験を行う。
定期的に研究室のゼミが開かれ、調査や実験の経過を報告しディスカ
ッションを行う。何らかの研究成果が得られた場合には学会に出席して
自分で発表することがある。

【到達目標】

1. 研究課題に関する専門知識を修得する。
2. 実践的な情報収集・活用能力、問題設定能力、問題解決能力、コ
ミュニケーション能力およびグループ活動能力を養う。

【授業計画】1. 卒業研究着手資格:卒業研究に着手するためには、卒業研
究着手要件により指定される単位をすべて修得していなければならない。
2. 卒業研究着手資格者の選考:3月中旬に、次年度の卒業研究着
手資格者を選考し、該当する者の名前を知能情報工学科玄関の掲示板
に掲示する。ただし、3月末までに卒業研究着手要件を満たした学生
については4月に入ってから卒業研究着手資格者となる可能性もある。
疑義のある学生は直ちに学科長に申し出ること。3. 卒業研究テーマの
説明:3月中旬に、次年度の卒業研究テーマを提示し説明会を行う。説
明会では研究室単位で全教官から研究テーマについて説明し、質問に
応じる。4. 研究室配属:学生は希望する研究テーマを自由に選ぶこと
ができるが、各研究室ごとに最大の定員が決まっているので、学生
同士が話し合いて調整し、配属される研究室を決める。(話し合いがつか
ない場合に限り学科長が決定する。)5. 輪講・研究:研究室では指導
教官、大学院生の指導で論文の輪講と研究を行う。6. 卒業論文と研究
発表:研究結果をまとめた卒業論文を2月下旬までに作成し提出する。
また2月末に行われる卒業研究発表会において各自の研究成果を発表
する。

【成績評価】2月末の研究発表会での研究発表と、卒業論文の内容を審
査して学士の学位の授与に値するかどうかを判定する。

【備考】研究は教官に言われてやるものではない。自分で主体的に研究に
取り組むことが大切である。

ソフトウェア設計及び実験

Software design and experiment

助教授・獅々堀 正幹, 緒方 広明

講師・毛利 公美, 泓田 正雄, 助手・柘植 寛, 伊藤 拓也

助手・森田 和宏, 光原 弘幸 6単位

【授業目的】大規模ソフトウェアの作成を通じ、総合的能力(問題設定、
問題分析、問題解決、能動的学習、グループワーク、コミュニケーション
技術)および専門的能力(ツール運用、分析/設計、コーディング、デ
バッグ手法)を短期間のうちに習得することを目的としている。

【授業概要】前期は、レポート作成技術を学んだ後、Makefileの作成法、
ライブラリ化、デバックツールの使用法等、プログラミング手法の
基礎的課題に個人単位で取り組む。その後、グループ課題として、ロボ
カップ・サッカーシミュレーターの作成を行う。グループ開発を行う前
に、エージェントの基本動作を個人単位で習得した後、戦略性を持った
エージェントをグループ単位で開発し、最終的に試合コンテストを
行う。後期は、ユーザー・インターフェイス、ネットワーク・プログラ
ミング、統合・モジュール化手法を個人単位で取り組む。その後、企画
立案ならびにプレゼンテーション技術を学んだ後、メタな課題(例え
ば、GUIを用いたネットワークプログラミングによる対戦型ゲームの
作成)に対して、グループ単位で企画、立案、ソフトウェア開発を行
い、最終的にコンテストを行う。

【受講要件】コンピューター入門1,2, データ構造とアルゴリズム1,2の
履修を前提にして実験を行う。

【到達目標】

1. 抽象的な問題を具体的な問題に分析し、方針を決め、適切な手法
をとり、粘り強く問題を解決する能力を育成する。
2. チームで協力しあって企画、スケジューリング、設計、製作、評
価、保守などの各プロセスを期限内で遂行する能力を育成する。

知能情報工学科 (昼間コース)

3. 成果を口頭または文書により明確かつ論理的に表現でき、プレゼンテーションによって双方向コミュニケーションを行える能力を育成する。

【授業計画】1. ソフトウェアガイダンス 2. プログラミング手法 1(プログラム作法) 3. プログラミング手法 2(ライブラリ化) 4. プログラミング手法 3(デバックツール) 5. ネットワーク・プログラミング 1 6. サッカーシミュレーターの全体説明 7. エージェントの基本動作 1 8. エージェントの基本動作 2 9. エージェントの基本動作 3 10. エージェントの基本動作 4 11. エージェント・プログラムの開発 12. エージェント・プログラムの開発 13. エージェント・プログラムの開発 14. 試合コンテスト 15. 戦術プレゼンテーション 16. ユーザー・インターフェイス 1 17. ユーザー・インターフェイス 2 18. ネットワークプログラミング 2 19. 統合・モジュール化 20. 企画の仕方、最終課題説明 21. 企画プレゼンテーション 22. 最終課題のソフト開発 23. 最終課題のソフト開発 24. 最終課題のソフト開発 25. 最終課題のソフト開発 26. 最終課題のソフト開発 27. 最終課題のソフト開発 28. 最終課題のソフト開発 29. 最終プレゼンテーション 30. コンテスト 31. 予備日

【成績評価】基礎課題レポート、プレゼンテーション(発表)、総合課題レポートを総合して評価する。

【教科書】各実験毎に指定される。

【参考書】各実験毎に指定される。

【連絡先】緒方(C507, 656-7498, ogata@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】無断欠席および遅刻、期限後の報告提出は一切認められていない。全ての実験と発表をおこない、全てのレポートを提出することが義務づけられている。その上で、基礎課題レポート、プレゼンテーション(発表)、総合課題レポートを、5対2対3の比率で評価する。但し、この比率は変更されることがある。

知的所有権概論

Intellectual Property

非常勤講師・酒井 徹 1 単位

【授業目的】知的所有権制度を理解し、知的所有権の保護と制度の活用的重要性を各種の事例を基に修得する。

【授業概要】科学技術創造立国を目指す我が国において、知的所有権の保護と制度の活用が、行政・産業界・大学・研究所にとって不可欠であるとの共通認識を持つ必要性を説くとともに、知的所有権制度の概要と、その活用方法を、企業の特許戦略、特許侵害事件などの事例を紹介しつつ講義し、学生が将来、企業・大学・研究所などへ進んだ場合に知っておくべき知的所有権に関する基礎知識の修得をはかる。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】2日間の集中講義であるために全時間の出席を要する。

【到達目標】

1. 知的所有権の概念についての理解を深める。
2. 特許法、商標法、意匠法、著作権法について理解する。

【授業計画】1. 知的所有権とは 2. 知的所有権制度の概要(特許・商標等) 3. 知的所有権制度の概要(意匠・著作権制度等) 4. 特許発明と特許権侵害(含む事例研究) 5. 知的所有権の管理とその活用(企業・大学・研究所) 6. 今後の研究開発と知的所有権のあり方 7. 試験(到達目標1および2の評価)

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを試験70%、講義への取り組み状況30%で評価し、平均で60%あれば合格とする。

【教科書】特製テキストを用いる。

【参考書】中山信弘著「知的所有権」日刊工業新聞社、通産省特許庁編「これからは日本も知的創造時代」通商産業調査会

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】酒井(Tel:03-5600-2631, Fax:03-5600-2649)

知能情報工学セミナー

Seminar to Information Science and Systems Engineering

教授・任 福雄, 北 研二, 赤松 則男, 小野 典彦, 森井 昌克
教授・大恵 俊一郎, 下村 隆夫, 青江 順一, 矢野 米雄 1 単位

【授業目的】知能情報工学科における教育・研究に関する導入教育を行う。また、計算機に親しむための簡単な実習を課して、知能情報工学科の学生としての自覚を芽生えさせると共に、簡単な研究課題を課して、自発的な情報収集能力やコミュニケーション能力の重要性を認識させる。さらに学生生活の送り方、講義の受講および研究のための心構え、社会人としての常識等のガイダンスを行う。

【授業概要】受講生を知能情報工学科教授全員にほぼ等分に配属する。授業の内容は教授によって若干異なるが、知能情報工学科の教育・研究内容、学生生活の送り方と心構え、社会人としての常識等についての

導入教育が施された後に、計算機を用いた簡単な実習や研究課題が課される。研究課題に関しては、報告書の提出やプレゼンテーションが求められる。

【到達目標】

1. 導入教育を通して知能情報工学科における学生生活に適應する。
2. 研究課題の解決を通して自発的な情報収集能力を育成する。
3. 報告書の作成やプレゼンテーションを通して基礎的なコミュニケーション能力を育成する。

【授業計画】1. 授業計画は教授によって異なり、その詳細については配属された教授より指示がある。

【成績評価】実習の成果および研究課題に関する報告書およびプレゼンテーションに基づき成績評価を行う。

【教科書】配属された教授より指示がある。

【参考書】配属された教授より指示がある。

【連絡先】任(C棟204室, 656-9684, ren@is.tokushima-u.ac.jp), 北(D203, 656-7496, kita@is.tokushima-u.ac.jp), 赤松(D棟209, 656-7493, akamatsu@is.tokushima-u.ac.jp), 小野(D棟106, 656-7509, ono@is.tokushimaha-u.ac.jp), 森井(C302, 656-9446, morii@is.tokushima-u.ac.jp), 大恵(C204, 656-7500, oe@is.tokushima-u.ac.jp), 下村(C402, 656-7503, simomura@is.tokushima-u.ac.jp), 青江(D棟604, 656-7486, aoe@is.tokushima-u.ac.jp), 矢野(C棟511, 656-7495, yano@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】配属された教授によって講義計画が異なるので、指示に従うこと。欠席の場合は、単位を認めない。

データ構造とアルゴリズム 1

Data Structures and Algorithms 1

教授・青江 順一 2 単位

【授業目的】ソフトウェア作法の基礎として、基本的データ構造と実装方法を講義し、基本的アルゴリズムの演習・レポート、小テストを通じて、アルゴリズムの基本手法を修得させる。

【授業概要】基本データ構造(配列、リスト、スタックとキュー、木)の実装方法を修得させ、基本的アルゴリズムである探索法、ソート法に関する基礎力の養成を図る。

【受講要件】「コンピュータ入門1,2」の履修を前提にして講義を行う。

【到達目標】種々のプログラミング言語に共通の構造化などの概念を習得させ、ソフトウェア開発を行う能力を育成する。

【授業計画】1. アルゴリズムと評価 2. 関数と手続き・レポート 3. 配列構造・レポート 4. リスト構造探索・レポート 5. リスト構造更新・レポート 6. スタックとキュー・レポート 7. スタックと算術式・小テスト 8. 中間試験 9. 木の辿り方・レポート 10. 2分探索・レポート 11. 2分探索木・レポート 12. ハッシュ法の探索・レポート 13. ハッシュ法の更新・レポート 14. ソート法・レポート 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、口頭試問、質問、演習の回答、レポートの内容を平常点とし、それに中間と最終試験の成績を総合して行う。また、講義中には随所に質問や口頭試問による生きた対話時間を設け、講義内容が口頭試問で答えられない場合は減点されるので、常に緊張した授業となる。

【教科書】配布するプリント、近藤嘉雪著「Cプログラマのためのアルゴリズムとデータ構造」ソフトバンク

【参考書】河西朝雄著「C言語によるはじめてのアルゴリズム入門」技術評論社

【連絡先】青江(D棟604, 656-7486, aoe@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「データ構造とアルゴリズム1」と「データ構造とアルゴリズム2」は、1年前期で学習した「コンピュータ入門1,2」のC言語を利用して、各自でアルゴリズムを設計し、プログラムを作成する演習問題を十分に与える。成績評価に対する平常点と試験の比率は4:6とする。

データ構造とアルゴリズム 2

Data Structures and Algorithms 2

教授・青江 順一
助手・森田 和宏 2 単位

【授業目的】ソフトウェア作法の基礎として、基本的データ構造と実装方法を実際に演習で作成・稼働させることで、アルゴリズムの基本手法の理解を深める。

【授業概要】基本データ構造(配列、リスト、スタックとキュー、木)の演習課題とその模範解答により、探索、ソートアルゴリズムへ拡張できる基礎力の養成を図る。

【受講要件】「コンピュータ入門1,2」、「データ構造とアルゴリズム1」の履修を前提にして講義を行う。

知能情報工学科 (昼間コース)

【到達目標】種々のプログラミング言語に共通の構造化などの概念を習得させ、ソフトウェア開発を行う能力を育成する。

【授業計画】1. C 言語の基礎 1. 演習 2. C 言語の基礎 2. 演習 3. C 言語の基礎 3. 演習 4. リスト構造探索 演習 5. リスト構造更新 演習 6. スタックとキュー 演習 7. スタックと算術式 演習 8. 中間試験 9. 木の辿り方 演習 10. 2 分探索 演習 11. 2 分探索木 演習 12. ハッシュ法の探索 演習 13. ハッシュ法の更新 演習 14. ソート法 演習 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、演習の回答、レポートの内容を平常点とし、それに中間と最終試験の成績を総合して行う。また、演習では制限時間内でプログラムを作成する課題が突然与えられるので、常に緊張した授業となる。

【教科書】配布するプリント、近藤嘉雪著「C プログラマのためのアルゴリズムとデータ構造」ソフトバンク

【参考書】河西朝雄著「C 言語によるはじめてのアルゴリズム入門」技術評論社

【連絡先】青江(Dr.棟604, 656-7486, aoe@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「データ構造とアルゴリズム 2」では、1 年前期で学習した「コンピュータ入門 1, 2」の C 言語を利用して、「データ構造とアルゴリズム 1」の内容が各自で設計・作成できる演習問題を十分に与える。成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。

【受講要件】線形代数学 I, II, 微分積分学 I, II (全学共通, 基礎数学) コンピュータ入門 1, 2 の修了および、電磁気学、電磁気学演習の履修を前提とする。

【到達目標】

1. システムティックな解析・設計を行うための知識を身に付け、現実世界を鑑みた統合・評価ができる能力を育成する。
2. ハードウェアとソフトウェアの統合的なシステムに対し、その実態・問題点を分析し、問題解決法の立案、実行ができる能力を育成する。

【授業計画】1. 電気回路学概論および回路計算に使う数学 演習・小テスト 2. 電気の基礎 演習・レポート 3. 直流と交流 小テスト 演習・レポート 4. 抵抗回路 演習・レポート 5. LCR の基本特性 演習・レポート 6. LCR の一般回路 小テスト 演習・レポート 7. 回路の諸定理 演習・レポート 8. 回路の諸定理 演習・レポート 9. 中間試験 10. フーリエ級数展開 演習・レポート 11. フィルタ 演習・レポート 12. ブリッジ 小テスト 演習・レポート 13. 共振回路 演習・レポート 14. 減衰器とトランス 小テスト 演習・レポート 15. 有効電力・無効電力 演習 16. 定期試験

【成績評価】定期試験、レポートおよび部分テストの結果にもとづいて成績を評価する。

【教科書】藤村安志著「電気・電子回路計算演習」誠文堂新光社

【参考書】小澤孝夫著「電気回路を理解する」昭晃堂、大塚明著「サウンドクリエイターのための電気実用講座」洋泉社

【備考】高校物理および要件としてあげた科目の習得を前提として講義を進めるので、各自がこれらの科目を十分復習することが重要。また、レポート課題は計算機を用いる場合があるので C 言語やグラフ作成ソフトが使いこなせるようにしておくこと。

データベース

Database 助教授・獅々堀 正幹 2 単位

【授業目的】データベース構築技術及び情報検索技術に関して、基礎的な内容からホットな話題まで幅広いデータベース技術について講述する。

【授業概要】講義の前半では、情報検索技術に話題を絞り、文字列照合法及び全文検索法に関するアルゴリズムを説明すると共に、それらの特徴(長所短所)を理解させる。後半では、データベース構築技術に話題を絞り、データベースの設計法及びデータ操作言語 SQL の機能について講述する。また、実際にプログラミング演習を行い小規模な Web データベースシステムを開発させる。

【受講要件】コンピューター入門 1, 2, データ構造とアルゴリズム 1, 2, プログラミングシステムの科目を履修していることが望ましい。

【到達目標】

1. 基礎的な情報検索アルゴリズムを習得し、情報検索システムのモデリングを行える力を育成する。
2. データベース設計法及びデータベース言語を習得し、データベースシステムのモデリングを行える力を育成する。

【授業計画】1. 情報検索とは? 2. KMP 法による文字列照合 3. BM 法による文字列照合 4. AC 法による文字列照合 5. 特徴ベクトル法による全文検索 6. 転置ファイル法による全文検索 7. 中間試験 8. データベースとは? 9. データモデリング I (ER 図の作成) 10. データモデリング II (データの正規化) 11. データベース言語 I (SQL の基礎) 12. データベース言語 II (表の結合) 13. データベース言語 III (データの操作) 14. Web データベースシステム 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】成績の評価は中間試験と定期試験の得点だけでなく、平常点も加味する。平常点は演習レポートの内容、講義内での発表回数、及び受講姿勢などを含む。

【教科書】北研二、津田和彦、獅々堀正幹著「情報検索アルゴリズム」共立出版、木村博文、高橋麻奈著「入門 SQL」ソフトバンク

【参考書】高橋栄司、飯室美紀著「基礎からのデータベース設計」ソフトバンク

【連絡先】獅々堀(D棟214, 656-7508, bori@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義内での発表は自発的に举手した学生を優先するので、積極的に講義に参加すること。

電気回路及び演習

Lecture and Exercise in Electric Circuits

助教授・黒岩 眞吾 3 単位

【授業目的】コンピューターや通信ネットワークなどの情報システムを扱う情報技術者や研究者に必要な電気回路の基礎を、講義、演習・レポート、部分テストを通して修得させる。

【授業概要】まず、電圧、電流、インピーダンス、電力等の明確な概念を与えることから始め、交流回路の複素計算法、回路の諸定理、フィルタおよび共振回路設計、電力など電気回路の基礎を講義する。なお、実際の回路解析がコンピューターを利用して行われる工業界の現状に則し、波形や周波数特性の可視化技術も習得させる。

電子回路

Electronic Circuits 教授・赤松 則男 2 単位

【授業目的】電子回路を構成するデバイスに関して物理的に解説し、電子回路の基本を習得する。

【授業概要】半導体デバイスとしてバイポーラトランジスタおよび電界効果トランジスタ (FET) を説明する。特に、使用頻度の高い MOS-FET、J-FET およびガリウム・ヒ素の MESFET の特性を詳細に解説する。これらの半導体デバイスを用いた電子回路を詳細に説明する。電子回路として増幅回路、発振回路、演算回路、論理回路などが含まれる。

【受講要件】電気回路および演習、物理学 (物性、電気磁気学、力学、熱力学、光学、量子力学)、数学 (微分方程式、関数論、ベクトル、マトリックス、統計学、論理学) などの基礎学力を十分に備えていることが受講に際しての必要条件です。

【到達目標】エレクトロニクスおよびコンピューターのハードウェアとソフトウェアのバランスの良い思考ができるための基礎的な知識を習得し、これを数理的に展開し、構造的なシステムの設計ができ、これを表現することができる能力の獲得を到達目標とする。

【授業計画】1. 電子回路の基礎 1. レポート 2. 半導体デバイスの基礎 I (基本回路、固有抵抗、真性半導体、不純物半導体) レポート 3. 半導体デバイスの基礎 II (キャリア、電気伝導機構) 4. 半導体デバイスの基礎 III (格子欠陥、PN 接合) 5. 半導体デバイスの基礎 IV (ダイオード) 小試験 6. バイポーラトランジスタ I (増幅作用、動作原理) 7. バイポーラトランジスタ II (等価回路) 8. バイポーラトランジスタ III (接地方法、周波数特性) レポート 9. バイポーラトランジスタ IV (電流特性、命名法) 10. 中間試験 11. 差動増幅回路 I (特性、飽和特性) 12. 差動増幅回路 II (特性の改善、定電流源) レポート 13. 電界効果トランジスタ I (分類、構造、動作原理) 小試験 14. 電界効果トランジスタ II (特徴、電気的特性) 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義中に行う中間試験および小試験と試験期間中に行う定期試験とレポートの結果を考慮し、受講姿勢にも配慮して成績を総合的に評価する。再試験は行う。

【教科書】赤松則男「エレクトロニクス回路」

【参考書】安藤和昭「ハルス・デジタル回路」、斎藤忠夫「電子回路入門」

【備考】3 年生で学ぶ「集積回路工学」の基礎的な知識を「電子回路」で習得する。従って後程に学ぶ科目を理解するためには習得する必要がある。成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点には講義への参加状況、演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み、試験には小試験及び最終試験の成績を含む。

電磁気学

Electricity and Magnetism 講師・岸本 豊 2 単位

知能情報工学科 (昼間コース)

【授業目的】力学と並ぶ古典力学の柱である電磁気学を平易に講義し、身のまわりの電氣的・磁氣的現象や材料物性を理解する上での基礎を解説する。

【授業概要】静電場・静磁場より始めて、マクスウェル方程式に到る過程を解説し、電磁波の簡単な例を述べる。

【到達目標】

1. 電場・磁場の記述法の理解
2. 静電場・静磁場の理解
3. 電磁誘導の法則の理解
4. さまざまな系への適用

【授業計画】1. クーロンの法則と静電場 2. ガウスの法則 3. 静電位 4. 導体系と静電エネルギー 5. 誘電体 6. まとめ(1) 7. 定常電流 8. 静磁場 9. アンペールの法則 10. 磁性体 11. 電磁誘導 12. 交流回路 13. マクスウェルの方程式と電磁波 14. 予備日 15. まとめ(2) 16. 定期試験

【成績評価】定期試験 70%、平常点(出席状況等)30%として評価し、総合で60%以上を合格とする。

【教科書】神田貞之助 著「電磁気学」共立出版

【参考書】砂川重信 著「電磁気学-初めて学ぶ人のために」培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岸本(A棟215, 656-9851, yutaka@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】基本関数の微分・積分およびベクトル解析の基礎事項を修得していることが望ましい。本講義と併せて「電磁気学演習」を履修することを要望する。[平常点]と[期末試験の成績]の割合は3:7とする。

電磁気学演習

Exercise in Electricity and Magnetism

講師・岸本 豊 1 単位

【授業目的】電磁気学の講義内容に即した問題演習を行い、講義の理解を深める。また、講義内容と密接に関連する補足事項の解説を行なう。

【授業概要】「電磁気学」講義中に指示する方法により、講義内容の理解を深める為の演習問題を受講者に解答・発表してもらい、その講評を行なう。

【到達目標】

1. 電場・磁場の記述法の理解
2. 静電場・静磁場の理解
3. 電磁誘導の法則の理解
4. さまざまな系への適用

【授業計画】1. クーロンの法則と静電場 2. ガウスの法則 3. 静電位 4. 導体系と静電エネルギー 5. 誘電体 6. まとめ(1) 7. 定常電流 8. 静磁場 9. アンペールの法則 10. 磁性体 11. 電磁誘導 12. 交流回路 13. マクスウェルの方程式と電磁波 14. 予備日 15. まとめ(2) 16. まとめ(3)

【成績評価】講義「電磁気学」の履修を前提として、演習問題解答者に解答内容等70%、平常点(出席状況等)30%として評価し、総合で60%以上を合格とする。

【教科書】神田貞之助 著「電磁気学」共立出版

【参考書】砂川重信 著「電磁気学-初めて学ぶ人のために」培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岸本(A棟215, 656-9851, yutaka@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義「電磁気学」と併せての履修を要請する。[平常点]と[演習発表の成績]の割合は3:7とする。

ニュービジネス概論

Introduction to New Business

非常勤講師・出口 竜也

第一線の実務経験者 2 単位

【授業目的】ベンチャー企業は、新しいアイデアや専門的な知識・技術を事業化し、新しい創造的な事業を展開するバイオニア的企業である。この授業の目的は、アイデアや専門的な知識・技術を事業化する、つまりベンチャー企業を起業するためのスピリットとノウハウを提供することにある。

【授業概要】政府は活力ある日本社会を創るために、大学発ベンチャー企業の育成や人材の育成を目指している。政府目標は、3年間で1,000社の大学発ベンチャー企業の創出である。本講義は、それを実現できるように徳島県が支援して開設された「学生起業家創業支援講座」である。学生諸君がベンチャー企業の設立に挑戦し、事業を展開していく手助けとなるような授業内容となっている。第一線で活躍されている実務家やアドバイザーを講師として招き、実際に役立つ知識を講義していただく。授業は、大きく分けて4つの部分から構成されている。第一は、導入としてのベンチャーとは何かの説明である。第二は、設立の方法と資金の手当てについてである。第三は、経営のノウハウで

ある。最後に、ベンチャーを起業するにあたって不可欠のビジネスプラン(事業計画)の作成実習を行う。

【受講要件】工学部以外の受講希望者も教室収容能力の許すかぎり受講可能である。単位修得については所属部局の規則に従うこと。

【履修上の注意】遅刻や授業中の私語は厳禁である。

【到達目標】

1. ベンチャービジネスを起業するために必要な知識を修得すること
2. ビジネスプランが作成できるようになること

【授業計画】1. ガイダンス 2. 基調講演「ゼロからのスタート」 3. 独立型ベンチャー成功のための理論 4. 会社設立の方法(法律や会社設立手続き) 5. 資金調達と資本政策 6. 銀行の役割と利用方法(間接金融) 7. 株式発行による資金調達(直接金融) 8. 会社経営の基礎(計画・資金繰り・組織) 9. 企業会計の基礎知識 10. 経営戦略とマーケティング 11. 製品開発と知的所有権 12. ビジネスプラン作成のポイント 13. ビジネスプラン作成実習 14. 筆記試験(4~11の内容に関する試験) 15. ビジネスプランの発表会 16. 予備日

【成績評価】到達目標の達成度で評価し、到達目標を達成しているものを合格とする。授業計画4~11は筆記試験(60%)で、12,13,15はビジネスプランの提出分(40%)で評価する。

【教科書】各授業でレジメを配布する。

【参考書】各授業で紹介する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】出口(2216, 656-7183, deguchi@ias.tokushima-u.ac.jp)

【備考】ビジネスプランはグループで作成する。

パターン認識

Pattern Recognition

助教授・寺田 賢治 2 単位

【授業目的】現在、コンピュータの発展に伴い、機械と人間が共生する社会になっている。本講義では、機械が獲得した情報を人間の理解しやすいような情報に変換する技術、すなわちパターン認識について、文字認識、音声認識、画像認識を中心に、応用例をあげながら平易に解説する。

【授業概要】人間同士が情報の交換や記録に用いているメディア、すなわちパターン情報には、文字、音声、画像などがある。人間のこれらのパターン情報を認識する能力は、本能や幼児からの長年の学習によって高度に発達しているが、これらを機械にやらせることは決して容易ではない。本講義では、多くの研究者の研究成果により、徐々に発展してきたパターン認識について、その基本的な概念から応用例まで、文字認識、音声認識、画像認識を中心に解説していく。

【到達目標】

1. パターン認識の基礎知識を、講義と演習を通じて身に付ける。
2. 基礎的な学力と、それを各問題に応用できる能力を身に付ける。

【授業計画】1. パターン認識の概要 2. 線形識別関数, 統計的決定理論 3. クラスタ解析, 識別オートマトン理論 4. 文字パターンとその特徴及び文字認識の基礎 5. 英数字カナ文字認識 6. 漢字認識 7. オンライン手書き文字認識, 文字認識応用システム 8. 中間試験 9. 音声パターンとその特徴及び音声認識の基礎 10. 特定話者単語音声認識, 不特定話者単語音声認識 11. 連続音声認識, 話者認識, 音声認識応用システム 12. 画像パターンとその特徴及び画像認識の基礎 13. 濃淡画像の認識, 2値画像の認識 14. 3次元画像の認識, 画像の記述 15. 画像認識の応用システム, パターン認識の未来 16. 定期試験

【成績評価】授業態度、小テスト、中間テストと、期末テストにより決定される。

【教科書】森 健一監修:「パターン認識」電子情報通信学会

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】寺田(C203, 656-7499, terada@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】再試は一切やらない。

微分方程式 1

Differential Equations (I)

教授・今井 仁司 2 単位

【授業目的】微分方程式の解法を修得し、さらに工学の諸分野に現われる微分方程式の解法に応用できるようにする。

【授業概要】微分方程式の理論は数理的工学的な現象の解析に有力な手段を与え、現代工学の基礎として重要な役割を果たしている。その広範な理論の入門段階として、この講義では微分方程式の具体的な解法を中心に講義する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

知能情報工学科 (昼間コース)

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートを中心に、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 2 階の定数係数線形常微分方程式が解ける。
2. 簡単な求積法が理解できる。

【授業計画】1. 変数分離形 2. 同次形 3. 一階線形微分方程式 4. 完全微分形 5. 正規形常微分方程式と特異解 6. 高階常微分方程式 7. ロンスキー行列式 8. 2 階線形同次微分方程式 9. 2 階定数係数同次方程式 10. 記号解法 11. 記号解法 12. 級数解法 13. 通常点における級数解法 14. 確定特異点まわりの級数解法 15. 期末試験

【成績評価】期末試験の点数 (100 点を超えたときは 100 点にしたもの) が 60 点以上であれば、その点数を成績として合格とする。期末試験の点数が 60 点に満たない場合には、100 点満点に換算した試験の点数を 80%にしたものと平常点 (講義と演習の取り組み具合を評価したもので 20 点満点) を合計し、その点数が 60 点以上であれば 60 点を成績として合格とする。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】今井(建設棟2-7室, Tel:656-7541, E-mailでの問い合わせは受け付けない)

1. 機能の低下や障害によらず、全ての人々が利用できる技術や機器、環境があることを理解させる。
2. 特別なサポートを必要とする人々のための技術や機器、環境があることを理解させる。
3. 人に優しい工学技術について考える機会を持たせる。

【授業計画】1. ガイダンス:講義の進め方, 受講の心構え 2. 支援科学技術:個人への対応と万人への対応 (Universal Design) 3. 移動・移乗 4. 排泄 5. 身障者スポーツ 6. 高齢者の生活環境 7. 就労 8. 生活自立と支援技術 (米国の場合) 9. 技術による支援, 人による支援 10. 技術:障害への適合, 環境への適合, 人間への適合 11. 知的障害者と運動機能障害者の支援 12. 視覚障害者と聴覚障害者の支援 13. 最新の技術:???? 14. まとめ:心のバリアー, エンジニアとして 15. 予備日

【成績評価】講義への取り組み状況と、毎回提出させるレポートにより評価する。

【参考書】「明日を創る」、E&C プロジェクト「バリアフリーの商品開発 2」、山田尚勇他「コンピュータと人間の共生」、後藤芳一編「バリアフリーのための福祉技術入門」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】末田(総合研究実験棟705, 656-2167, o.sueda@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】出席点とレポート評価との割合は 4:6 とするが、欠席者のレポートは成績評価しない。

微分方程式 2

Differential Equations (II)

教授・今井 仁司 2 単位

【授業目的】連立常微分方程式の安定性と簡単な偏微分方程式の解法を修得し、より実際の工学的な問題の解法に応用できるようにする。

【授業概要】「微分方程式 1」に続いて現代工学すべての基礎として重要な役割を果たしている連立常微分方程式系の基本的な解法を講義する。さらに、簡単な偏微分方程式の解法についても講義する。

【受講要件】「微分方程式 1」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートを中心に、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 簡単な定数係数連立線形常微分方程式が解ける。
2. ラプラス変換とその応用ができる。

【授業計画】1. 定数係数連立線形常微分方程式 2. 高階微分方程式と連立微分方程式 3. 自励系と強制系 4. 線形近似 5. 2 次元自励系の危点 6. 2 次元自励系の安定性 7. ラプラス変換の性質 8. ラプラス変換の性質 9. 逆ラプラス変換 10. ラプラス変換の応用例 11. 1 階偏微分方程式 12. ラグランジュの偏微分方程式 13. 2 階線形偏微分方程式 14. 定数係数 2 階線形偏微分方程式 15. 期末試験

【成績評価】期末試験の点数 (100 点を超えたときは 100 点にしたもの) が 60 点以上であれば、その点数を成績として合格とする。期末試験の点数が 60 点に満たない場合には、100 点満点に換算した試験の点数を 80%にしたものと平常点 (講義と演習の取り組み具合を評価したもので 20 点満点) を合計し、その点数が 60 点以上であれば 60 点を成績として合格とする。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】今井(建設棟2-7室, Tel:656-7541, E-mailでの問い合わせは受け付けない)

複素関数論

Complex Analysis

助教授・深貝 暢良 2 単位

【授業目的】複素関数論への入門講義として、複素変数関数の微分積分学を修得させる。

【授業概要】微積分で扱う対象を複素変数の関数にまで広げ、正則関数および有理型関数の理論を展開することにより、実数の世界では困難であったある種の積分計算が複素数の立場からみると簡潔に処理されることを述べる。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】時間数の制約から、複素関数の計算を修得するための必要最小限な議論を行なうので、講義内容のすべてを吸収することが理解への早道である。日頃から予習・復習の計画を立てて勉学に勤しんでもらいたい。

【到達目標】

1. 複素微分、正則関数の概要が理解できる。
2. 留数概念の理解とその応用ができる。

【授業計画】1. 複素数, 複素平面 2. 複素数列 3. 複素変数の関数 4. 複素微分, 正則関数 5. 複素変数の指数関数, 三角関数, 対数関数 6. 複素積分 7. コーシーの積分定理 8. コーシーの積分公式 9. 整級数 10. テイラー展開 11. ローラン展開 12. 特異点, 留数 (りゅうずう) 13. 定積分の計算 (1) 14. 定積分の計算 (2) 15. 期末試験

【成績評価】期末試験に基づいて行う。

【教科書】藤本淳夫『複素解析学概説』培風館

【参考書】辻正次・小松勇作『大学演習・函数論』裳華房, 田村二郎『解析関数 (新版)』裳華房, 吉田洋一『函数論』岩波書店, 神保道夫『複素関数入門』岩波書店, 志賀啓成『複素解析学 I-II』培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】工学部数学教室

プログラミングシステム

Programming Systems

講師・泓田 正雄 2 単位

【授業目的】高機能言語によるプログラミングを学ぶことにより、より高度なソフトウェア開発技法を修得させる。

【授業概要】Perl 言語を通してスクリプト系言語によるシステムプログラミング用のプログラミング技術を習得する。単にプログラミング言語の講義だけでなく、毎回講義の後に演習問題またはレポート課題を出題する。

【受講要件】「コンピュータ入門 1, 2」「データ構造とアルゴリズム 1, 2」「プログラミング方法論 1, 2」の履修を前提にして講義を行う。

【到達目標】構造化や抽象化などの種々のプログラミング言語に共通の概念や機能を習得することと、ソフトウェアの開発を行う能力の獲得を目標とする。

【授業計画】1. Perl とは 2. スカラー変数 3. リストとハッシュ 4. ファイル操作 5. 正規表現によるパターンマッチング 6. サブルーチンとライブラリ 7. 中間試験 8. CGI とは 9. CGI の作成方法 10. アクセスカ

福祉工学概論

Introduction to Well-being Technology for All

教授・末田 統

助教授・藤澤 正一郎 2 単位

【授業目的】我々の身近な生活を支える様々な機器や環境の中に含まれる工学技術のうち、いろいろなハンディキャップを伴う条件下でも使いやすく安全を確保する技術を、人に優しい技術として紹介し、その万人に対する延長線上に福祉工学技術の一端があることを理解させる。また、各障害者個人に合わせた機器を紹介し、福祉工学技術のもう一端には、特化された技術があることも理解させる。

【授業概要】本講義では、人間の生活全体を支える工学技術を、高齢化による機能の低下や障害によるハンディキャップを軽減させる様々な技術 (ハイテクならびにローテク) やアプローチを例にとり、広い視点から概観する。

【到達目標】

知能情報工学科 (昼間コース)

ウインタの作成 11. アンケートページの作成 12. 掲示板の作成 13. クッキーとは 14. チャットの作成 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】成績の評価は、中間試験と定期試験の得点だけでなく、平常点も加味する。平常点には、講義内での発表回数、演習レポートの提出回数、及び受講姿勢などを含む。

【教科書】三島俊司 著「CGI のための実線入門 Perl」技術評論社

【連絡先】泓田(Dr.棟603, 656-7564, fuketa@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「コンピュータ入門 1, 2」, 「アルゴリズムとデータ構造 1, 2」, 「プログラミング方法論 1, 2」の履修を前提にして講義を行う。復習を兼ねた演習課題またはレポートが毎週与えられる。中間試験(割合 30%)と定期試験(30%)に加えて、実践的なプログラム作成に関する演習レポートの結果と受講姿勢、発表回数を合わせた平常点(40%)で成績を総合評価する。

プログラミング方法論 1

Programming Methodology 1 教授・下村 隆夫 2 単位

【授業目的】品質の高いソフトウェアを効率よく開発するためのプログラミング方法論について講義し、例題、課題を与えて演習を行い、プログラミングに必要な技術を修得させる。

【授業概要】オブジェクト指向、UML、例外、スレッド、イベント、GUI、ソケット通信等、インターネットプログラミングに必要な知識、技術について体系的に解説する。

【受講要件】「コンピュータ入門 1, 2」, 「データ構造とアルゴリズム 1, 2」を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】「プログラミング方法論 2」と連携して講義および演習を進める。

【到達目標】プログラミング言語に共通の概念や機能を習得させることにより、ソフトウェア開発能力を育成する。

【授業計画】1. Java プログラムの構造 2. オブジェクト指向プログラミング 3. 入出力処理 4. 例外処理 5. スレッド 6. 排他制御 7. イベント処理 8. ネイティブ言語の呼び出し 9. GUI コンポーネント 10. レイアウト 11. ペイン 12. ダイアログ 13. グラフィックス 14. アニメーション 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への参加姿勢、毎回課すレポート、および、定期試験の成績を総合して行う。平常点と定期試験の比率は 3:7 とする。

【教科書】開講前に、掲示により教科書を指定する。

【参考書】下村隆夫著「Java によるインターネットプログラミング」近代科学社、下村隆夫著「上級プログラマへの道」コロナ社

【連絡先】下村(C402, 656-7503, simomura@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】Web ブラウザで必要な情報を参照しながらプログラムを作成し、レポートとしてまとめ、電子メールで提出してもらう。

プログラミング方法論 2

Programming Methodology 2 教授・下村 隆夫 2 単位

【授業目的】品質の高いソフトウェアを効率よく開発するためのプログラミング方法論について講義し、例題、課題を与えて演習を行い、プログラミングに必要な技術を修得させる。

【授業概要】XHTML、HTTP、アプレット、サーブレット、JSP、JDBC、SQL 等、Web プログラミングに必要な知識、技術について体系的に解説するとともに、ソフトウェア品質、デザイン・パターンについて講義する。

【受講要件】「コンピュータ入門 1, 2」, 「データ構造とアルゴリズム 1, 2」を履修していることが望ましい。

【履修上の注意】「プログラミング方法論 1」と連携して講義および演習を進める。

【到達目標】チームを組んでソフトウェアを創作しスライドを用いて発表することにより、ソフトウェア開発能力、および、プレゼンテーション能力を育成する。

【授業計画】1. ネットワークプログラミング 2. JavaBeans 3. シリアライズとリフレクション 4. XHTML 5. スタイルシート 6. アプレット 7. サーブレット 8. JavaServer Pages 9. セッション管理 10. オンラインショップの作成 11. Web チャットの作成 12. データベース操作とトランザクション処理 13. ソフトウェア品質とデザイン・パターン 14. 会議室予約システムの作成 15. 予備日 16. 創作プログラムのプレゼンテーションおよび実演

【成績評価】授業への参加姿勢、毎回課すレポート、および、創作ソフトウェア、プレゼンテーションの成績を総合して行う。平常点と創作プログラムのプレゼンテーション・実演の成績の比率は 3:7 とする。

【教科書】開講前に、掲示により教科書を指定する。

【参考書】下村隆夫著「Java によるインターネットプログラミング」近代科学社、下村隆夫著「上級プログラマへの道」コロナ社

【連絡先】下村(C402, 656-7503, simomura@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】Web ブラウザで必要な情報を参照しながらプログラムを作成し、レポートとしてまとめ、電子メールで提出してもらう。

ベクトル解析

Vector Analysis 助教授・深見 暢良 2 単位

【授業目的】工学の解析で必要不可欠なベクトルの概念と基礎的な性質を学ぶとともに、ベクトル場の解析学を通して古典力学、流体力学や電磁気学に現れる基本的な物理法則の数学的な理解・運用を目標とする。

【授業概要】三次元空間のベクトルで表される物理量の局所的変化(微分)と大局的効果(積分)を記述する手法としてベクトル場の微分積分学を展開し、微分積分学の基本定理のベクトル場に対する一般化を確立する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】予習と復習が必要です。常日頃より問題演習に取り組みましょう。

【到達目標】

1. ベクトルの場の微分が理解できる。
2. ベクトルの場の積分が理解できる。

【授業計画】1. はじめに 2. ベクトル 3. 内積、外積 4. ベクトル関数、曲線 5. 曲面 6. スカラー場、ベクトル場、勾配 7. 回転、発散 8. 線積分 9. 重積分 10. 面積分 11. ストークスの定理 12. グリーンの定理 13. ガウスの発散定理 14. 積分定理の応用 15. 期末試験

【成績評価】期末試験に基づいて行う。

【教科書】鶴丸孝司・久野昇司・渡辺敏・志賀野洋『ベクトル解析』内田老鶴園

【参考書】安達忠次『ベクトル解析』培風館、H.P. スウ『ベクトル解析』森北出版、鶴丸孝司・久野昇司・渡辺敏・志賀野洋『ベクトル解析演習』内田老鶴園、寺田文行・福田隆『演習と応用ベクトル解析』サイエンス社、青木利夫・川口俊一・高野清治『演習・ベクトル解析』培風館、山内正敏『詳説演習ベクトル解析』培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】工学部数学教室

マイクロプロセッサ

Microprocessors 助教授・福見 稔 2 単位

【授業目的】マイクロプロセッサの基本的な動作原理とそのプログラミングについて習熟し、マイクロプロセッサを活用するために必要な知識を獲得することを目的とする。

【授業概要】4 ビットに始まり、現在に至るマイクロプロセッサの開発の歴史を概観し、プロセッサ内部の情報表現と2進数での演算方法を理解した後、人類最初のマイクロプロセッサ i4004 のアーキテクチャを学ぶ。次いで、i8080 と Z80 のアーキテクチャを調べ、i8080 と Z80 の主要マシン命令を用いたアセンブラプログラミングの演習を行う。次に、16 ビットと 32 ビット、さらにはシステム設計及び実験用プロセッサのアーキテクチャを学ぶ。また、DSP の特徴や最近の高速化実装技術について学ぶ。

【受講要件】コンピュータ入門 1 及び 2 を受講しておくことが望ましい。

【到達目標】マイクロプロセッサの動作原理とそのプログラミングについて修得し、ソフトウェアとハードウェアのバランスのよい学習を行うことを目標とする。

【授業計画】1. マイクロプロセッサ開発の歴史 2. マイクロプロセッサの構成と動作・レポート 3. プロセッサ内の情報表現、2進数、10進数、16進数 4. 2進数の加減乗除算・レポート 5. 4ビットマイクロプロセッサ i4004 小テスト 6. 8ビットマイクロプロセッサ i8080 とアセンブラ 7. 8ビットマイクロプロセッサ Z80 8. i8080, Z80 のプログラミング実習 1 中間テスト 9. i8080, Z80 プログラミング実習 2 演習 1 提出 10. i8080, Z80 プログラミング実習 3 演習 2 提出 11. DSP とその応用事例・レポート 12. 16, 32ビットマイクロプロセッサ 13. H8-3069F のアーキテクチャ 14. 高速化実装技術 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容、小テスト、及び中間テストと最終試験の成績を総合して行う。平常点と定期試験の比率は 50:50。

【教科書】田丸啓吉・安浦寛人 共著「マイクロコンピュータ」共立出版

【参考書】Donald L.Krutz 著・奥川峻史 訳「マイクロプロセッサと論理設計」実教出版, 大川善邦 著「マイクロコンピュータプログラムの作り方」産報出版

【備考】講義の単元が終わるごとに演習問題やレポートを課し, 数回の小テストを実施するので, 毎回の予習・復習は欠かさず行うこと. 成績評価に対する平常点と試験の比率は 5:5 とする. 平常点には講義への参加状況, 演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み, 試験には小テスト及び中間テストと最終試験の成績を含む.

力学系通論

Mechanics

助教授・道廣 嘉隆 2 単位

【授業目的】基礎物理学で学んだ「力学」をふまえながら, さらに発展させ, 工学上の問題を解くのに, 基礎的な法則をどのように適用し, 定式化すればよいかを習得する.

【授業概要】まず, 質点の力学の基本的な事柄を整理し, 剛体の静力学を解説する. ついで, 回転, 平面運動, 衝撃, 振動など剛体の動力学へ発展させる. 講義の進展に合わせながら, 実際の物体について, 振動, 機構部品の回転など具体的な例題を数多く示し, どのように法則を適用し, 系が従うべき式を見いだせばよいかを解説する.

【受講要件】基礎物理学の「力学」を履修しているものとする.

【到達目標】

1. 質点の運動について運動方程式を書き, 基本的な方程式を解くことができる.
2. 力学的エネルギー, 運動量の概念を理解し, 実際上の問題に応用できる.
3. 剛体のつり合い, 平面運動について解明できる.
4. 力学的振動の基礎を理解する.

【授業計画】1. 基本概念 2. 質点の静力学 3. 剛体のつりあい 1 4. 剛体のつりあい 2 5. 重心 6. 質点の運動学 (変位, 速度, 加速度) 7. 質点の動力学 1 (運動の方程式) 8. 質点の動力学 2 (エネルギー, 運動量, 力積) 9. 剛体の運動学 (慣性モーメント, 回転) 10. 剛体の動力学 1 (固定軸回りの回転, 平面運動) 11. 剛体の動力学 2 (角運動量, 衝撃) 12. 力学的振動 1 (自由振動, 単振り子) 13. 力学的振動 2 (減衰振動, 強制振動) 14. 演習 15. 予備日 16. 定期テスト

【成績評価】期末試験の成績と授業への取り組み状況を総合して行う.

【教科書】ノート講義

【参考書】ペアー/ジョンストン (長谷川節訳) 工学のための力学 (上, 下) ブレイン図書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】道廣(A203)

【備考】微分および積分の初歩の知識が必要.[平常点]と[期末試験の成績]の割合は 3:7 とする.

離散システム解析

Discrete-Time Systems Analysis

助教授・福見 稔 2 単位

【授業目的】マイクロプロセッサの発達に伴い, デジタル型の制御装置が広く用いられている. 本講義では, デジタルデータの表現, デジタルシステムの表現と解析, 望ましい制御を達成するための設計理論の基礎を修得させることを目的とする. また, 理論的・社会的背景と, それらからの技術を教えることによって, 技術的・社会的変化に対応できることを目指す.

【授業概要】デジタルデータ表現の中心は z 変換であり, ラプラス変換を基礎とした表現方法である. 従って前提となる数学的知識としては, ラプラス変換, フーリエ変換, 微分方程式, マトリクス理論などである. 本講義では, デジタル型システムを表現するために必要となる状態方程式とパルス伝達関数の概念, 及びそれらを用いたシステム解析手法について演習と例題を中心にデジタルシステムの表現と解析法を修得させる. さらに, 望ましいシステムを構成するための制御系の設計及び, マイクロプロセッサを基本としたデジタル制御系設計の基礎について述べる.

【受講要件】線形システム解析と信号処理を受講していることが望ましい.

【到達目標】本講義では, デジタル型システムを表現するために必要となる状態方程式とパルス伝達関数の概念, 及びそれらを用いたシステム解析手法について修得させる. さらに, 望ましいシステムを構成するための制御系の設計及び, マイクロプロセッサを基本としたデジタル制御系設計の基礎を修得することを目的とする.

【授業計画】1. 離散時間システムの表現 2. 連続時間系の基礎・レポート 3. デジタル制御系の構成 4. 連続時間系の離散化・小テスト 5. z 変換と逆 z 変換 6. z 変換の性質と公式・レポート 7. 適応デジタル

フィルタと学習 8. システム同定と PID 制御・中間テスト 9. 離散時間系の安定性 10. 離散時間系の極と定常特性・レポート 11. 可制御性と可観測性 12. 正準形式と実現・小テスト 13. 状態フィードバックとオブザーバ 14. 有限整定制御 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況, 演習の回答, レポートの提出状況と内容, 各小テストと最終試験の成績を総合して行う. 平常点と試験の比率は 50:50 である.

【教科書】美多勉・原辰次・近藤良共著「基礎デジタル制御」コロナ社

【参考書】小郷寛・美多勉共著「システム制御理論入門」実教出版, 荒木光彦著「デジタル制御理論入門」朝倉書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】福見(D棟210, 656-7510, fukumi@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義の単元が終わるごとに演習問題とレポートを課し, 数回の小テストを実施するので, 毎回の予習・復習は欠かさず行うこと.

離散数学とグラフ理論 1

Discrete Mathematics and Graph Theory 1

教授・矢野 米雄

助教授・緒方 広明 2 単位

【授業目的】計算機科学の基礎である離散数学とグラフ理論を工学的立場から講義し, 演習・レポートを通して理論と情報処理手法を修得させ, 離散的手法の理解と応用力を育成する.

【授業概要】離散数学は, 微分・積分の数学と違い, 離散系を扱う数学であり, 素朴集合論より導入する. 前提とする数学知識は, 中学・高校で修得したもので充分である. しかし, 従来と違った手法・方法論を学ぶためには, 演習及び例題の解法が重要である.

【受講要件】特になし

【到達目標】計算機の基礎として離散数学とグラフの用語, 概念, 手法と応用力の習得を目標とする.

【授業計画】1. 集合 1(集合と要素, 普遍集合, 空集合, 部分集合) 2. 集合 2(ベン図, 集合演算) 3. 集合 3(集合の類, ベキ集合, 直積集合集合のまとめ) 4. 関係, 関係の幾何学的表現 5. 逆関係, 関係の合成, 関係の性質 6. 分割, 同値関係, 同値関係と分割 7. 半順序関係, n 項関係, 関係のまとめ 8. 1~7. の演習問題と解法の説明 9. 関数, 関数のグラフ 10. 1 対 1 の関係, 上への関数 11. 逆関数, 添数付きの集合族 12. 基数と解法の説明, 関数のまとめ 13. 9~12. の演習問題 14. 演習問題の解法の説明, 講義全体のまとめ 15. 予備 16. 定期試験

【成績評価】レポートの提出状況と内容, 講義中の質問の回答も評点の対象となる. 試験では以下の「持ち込み用紙」一枚を認める. 1) 自筆で, コピーは不可 2) B5 サイズ, 表裏記入可 3) 表裏に学年・出席番号・氏名を明記すること. 「持ち込み用紙」は講義及び教科書の内容を自分でまとめたものである. 作成に際しては何色を使ってもよい.

【教科書】リブシュッツ 著・成嶋 弘 監訳「離散数学-コンピュータサイエンスの基礎数学-」オーム社

【参考書】C.L. リコー 著・成嶋 弘 他訳「-コンピュータサイエンスのための-離散数学入門」マグロウヒル社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】緒方(C507, 656-7498, ogata@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】毎週レポート提出の課題が出るので, その週の内に復習しておくこと. 「データ構造とアルゴリズム」「プログラミングシステム」の基礎となる内容であり, 単位を落とし未消化に終わると後で苦労するので注意を要する. 平常点と試験の点 = 30:70

離散数学とグラフ理論 2

Discrete Mathematics and Graph Theory 2

教授・矢野 米雄

助教授・緒方 広明, 助手・光原 弘幸 2 単位

【授業目的】計算機科学の基礎である離散数学とグラフ理論を工学的立場から講義し, 演習・レポートを通して理論と情報処理手法を修得させ, 離散的手法の理解と応用力を育成する.

【授業概要】離散数学は, 微分・積分の数学と違い, 離散系を扱う数学であり, 素朴集合論より導入する. 前提とする数学知識は, 中学・高校で修得したもので充分である. しかし, 従来と違った手法・方法論を学ぶためには, 演習及び例題の解法が重要である.

【受講要件】特になし

【到達目標】計算機の基礎として離散数学とグラフの用語, 概念, 手法と応用力の習得を目標とする.

【授業計画】1. グラフと多重グラフ 2. 次数, 連結度 3. ケーニヒスベルグの橋, 周遊可能多重グラフ 4. 行列とグラフ 5. ラベル付グラフ 6. グラフの同形性 7. 地図, 領域, オイラーの公式 8. 1~7. の演習問題

知能情報工学科 (昼間コース)

と解法の説明 9. 非平面的グラフ, クラトフスキーの定理 10. 彩色グラフ, 四色定理 11. 木 12. 順序根付き木 13. 9~12. の演習問題 14. 演習問題の解法の説明, 講義全体のまとめ 15. 予備 16. 定期試験

【成績評価】レポートの提出状況と内容, 講義中の質問の回答も評点の対象となる. 試験では以下の「持ち込み用紙」一枚を認める. 1) 自筆で, コピーは不可 2) B5 サイズ, 表裏記入可 3) 表裏に学年・出席番号・氏名を明記すること. 「持ち込み用紙」は, 講義及び教科書の内容を自分でまとめたものである. 作成に際しては何色を使ってもよい.

【教科書】リブシュツ著・成嶋弘監訳「離散数学-コンピュータサイエンスの基礎数学-」オーム社

【参考書】C.L. リコー著・成嶋弘他訳「-コンピュータサイエンスのための離散数学入門」マグロウヒル社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】緒方(C507, 656-7498, ogata@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】平常点と試験の点 = 30:70

【参考書】並木秀明・前田智美・宮尾正大著「実用入門 デジタル回路と Verilog-HDL」技術評論社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】任(C棟204室, 656-9684, ren@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】今年度は集中講義で行われる.

労務管理

Personnel Management 非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為にヒトをどのように動かしているかを理解する.

【授業概要】企業経営は, 経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく, かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する. 世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で人的資源をいかに活用しているかについて講義する. 講義計画に従い労務管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める.

【授業計画】1. 組織と職務分掌 2. 人事管理(異動, 人事考課) 3. 労働基準法 4. 労使関係 5. 能力開発, 教育訓練 6. 安全衛生 7. 中間及び最終レポート(労務管理のまとめ)

【成績評価】講義への取り組み状況, レポートの内容

【教科書】その都度, 提供する.

【参考書】島田信義「新労働基準法」学習の友社, 荻原勝[人事・労務実務全書]日本実業出版社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】出席率 80%(12回), レポート(中間と最終)の内容 20%

論理回路設計

Logic Circuit Design 教授・任 福継 2 単位

【授業目的】コンピュータの構成要素である論理演算回路の動作原理であるブール代数の基礎概念を理解し, 与えられた論理式から論理回路を設計する手法を習得する. 応用力が身につくように, 各手法の背後にあるアイデアを理解することが目標である.

【授業概要】数表現, 論理式とその変換法などの基礎事項を教え, 論理式が論理回路を経てデジタル回路として実現できることを理解させる. これらの基礎をもとに, コンパクトな回路を設計するために, 組合せ論理関数の簡単化手法(カルノー図, 2分岐決定グラフ, クワイン・マクラスキー法の原理, 手順)を講義する. 次に, 順序回路の設計手法について学ぶ. まず, 順序回路を構成する際によく用いられる各種フリップフロップ(SR-FF, D-FF, SR-FF, T-FF)の動作原理について述べる. 自動販売機, カウンタ, 系列検出器などを例にとり, これら FF の励起関数を利用し, 順序回路を設計する方法を学ぶ.

【受講要件】集積回路工学, オートマトン: 言語理論を履修していることが望ましい.

【到達目標】論理回路をモデル化し, システムティックに設計する能力を育成する. また, 単なるノウハウとしての技術ではなく, 応用力が身につくように各手法の背後にあるアイデアを理解することが目標である.

【授業計画】1. デジタル回路と論理回路 2. 数表現代数, 論理式 3. 論理関数(積和標準形と和積標準形) 4. 不完全定義論理関数 5. 論理関数の簡単化:カルノー図, 2分岐決定グラフ 6. 論理関数の簡単化:クワイン・マクラスキー法 7. 組合せ論理回路の構成法 8. 基本的組合せ論理回路(加算器, 比較器, セレクタ) 9. 中間試験 10. 順序機械と順序回路 11. 状態割当, 状態遷移図, 状態遷移表 12. フリップフロップ(FF)の構成 13. SR-FF, D-FF, JK-FF, T-FF 14. 順序回路の設計(カウンタ, 系列検出器) 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義内容の理解度を確認するために, 随時小テストを行なう. 受講姿勢も若干配慮する. 小テストと受講姿勢を4割, 期末テストを6割の比率で総合的に評価する.

【教科書】高木直史著「論理回路」昭晃堂

知能情報工学科（夜間主コース）における教育理念およびそれを実現するカリキュラム編成

情報通信および知能工学における技術者として求められている標準的水準の能力を維持すると共に、その社会的責任と倫理観を幅広い視野から絶えず意識しながら自律的に行動する能力を持ち、国内外の社会に貢献できる人材を育成することを目的とする。

【教育目的】

知能情報工学科の卒業生が具備すべき能力として、次の5つの能力を備えた人材を育成する。

1. 専門的能力：工学における幅広い教養と知能情報工学における専門的な知識およびスキルを備え、それらを実社会で応用する能力。
2. 総合的能力：問題を発見し、設定し、分析し、解決する総合的能力。
3. コミュニケーション能力：問題とその解決方法および解決結果を明確かつ論理的に表現する能力。
4. 自己学習能力：未知の分野に対する興味を持ち、不足している知識があれば、これを自発的に修得する能力。
5. グループワーク能力：コミュニケーションおよび役割分担を確立して、グループによる共同プロジェクトを管理運営する能力。

【教育目標】

本学科の教育目的を実現するため、つぎの10項目の教育目標を定める。

1. 環境問題や高齢化社会に代表される福祉の問題などの観点からも知能情報工学を考える能力を育成する。
2. 情報処理技術に関し、知的所有権を認知し、プライバシー保護を遵守して、公共の福祉に配慮できるような倫理観を養う。また、コンピュータに関わる業務・管理情報について注意義務を負うことを自覚し、専門家としての能力の維持、向上に務め、情報処理技術が社会に与えるリスクや影響を深く考慮できる人材の輩出を目指す。
3. 自分の意見・考えを明確かつ論理的に記述でき、プレゼンテーションによる伝達、双方向コミュニケーションを行える能力を育成する。また、専門外国語を修得し、英語によるコミュニケーションの基礎能力を育成する。
4. ソフトウェアとハードウェアのバランスのよい学習や、対象の数理的なモデル化、抽象化などの訓練によって、システマティックな解析・設計を行い、現実世界を鑑みた統合・評価ができる能力を育成する。
5. 単なるノウハウとしての技術ではなく、理論的・社会的背景と、それらからの論理的な結果としての技術を教えることによって、将来の技術的・社会的変化に対応できるようにする。そのために、将来にわたって有効な基礎学力を中心とした体系的な学問と、それらを応用する力を身につけた人材を育てる。
6. 現状の情報処理システムにおけるハードウェア及びソフトウェアの実態・問題点を分析し、問題解決法の立案、実行ができる能力を育成する。
7. 様々な制限がある環境下において、自分の成すべきことを考え、それを達成する手段を見出せる能動的な人材を育成する。具体的に目標が与えられたとき、企画、スケジューリング、設計、製作、評価、保守などの各プロセスを自律的に管理し、期限内で遂行する能力を修得させる。
8. 構造化や抽象化などの種々のプログラミング言語に共通の概念や機能を修得させ、いかなる言語においてもソフトウェアの開発を行う能力を育成する。ソフトウェア機能、ハードウェア機構の各原理を修得し、情報処理システムの設計、構築、運用を行える人材を育成する。
9. 早期より常に目的意識を持って自主的に学習できるような環境を整えることによって、自律的な人材を育成する。
10. 情報処理技術関連分野のみならず、システム管理設計の能力を活かせる各分野で幅広く活躍できる人材を育成する。

【カリキュラムの編成】

知能情報工学科夜間主コースのカリキュラムは、教育分野別カリキュラム編成図に示すような編成となっている。以下では、夜間主コースのカリキュラムの特色を説明しておく。

知能情報工学科（夜間主コース）

- 専門基礎科目と専門応用科目のバランス：本カリキュラムは、専門色の強い専門応用科目の割合をあえて低く押さえ、専門基礎科目を中心に編成している。さらに、ほとんどの専門教育科目において、学生には課題を頻繁に与えると共に教官によるオフィスアワーを充実させるなどの措置を通して、専門基礎教育の充実をはかっている。
- 必修科目と選択科目のバランス：本カリキュラムでは、学生が自分自身の能力や興味に応じて、履修計画をたてるのが前提となっている。このカリキュラムでは、少数の科目（導入教育科目、専門基礎科目の一部、創成型科目および卒業研究）を除き、ほとんどの専門教育科目を選択科目としている。
- 創造性育成科目の開講：本カリキュラムにおいては、3年生を対象として、創造性の育成を目指したチームによる本格的なプロジェクト達成型の創成型科目（「ソフトウェア設計及び実習1」および「ソフトウェア設計及び実習2」）を開講している。これらの科目は、単に創造性のみならず、チームによるプロジェクト達成にとって不可欠となるコミュニケーションならびに自己学習などの能力を育成することも目指した本格的な創成型科目である。
- 工学倫理教育：本学科と関連の深い情報通信や知能工学の分野の研究開発に携わる人材にはさまざま倫理教育を行っていく必要がある。これらについては、一部の専門教育科目の中で時間を割いて倫理教育を行っている。

知能情報工学科（夜間主コース）履修登録、進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定

1. 履修登録

履修科目数の上限は規定しない。

2. 進級要件

(a) 1年次から2年次への進級規定

1年次から2年次に進級するためには、1年次で全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて20単位以上を修得していなければならない。

(b) 2年次から3年次への進級規定

全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて40単位以上を取得していなければならない。

(c) 3年次から4年次への進級規定

特別研究受講要件を満足していなければならない。

3. 特別研究受講要件

特別研究を受講するためには、次に指定する単位をすべて修得していなければならない。

(a) 全学共通教育科目

i. 教養科目：人文科学，社会科学，自然科学の各分野の2科目4単位必修選択，計12単位。

ii. 外国語科目：英語必修6単位。

iii. 健康スポーツ科目：健康科学理論，スポーツ実技の各科目1単位必修，計2単位。

iv. 基礎教育科目：線形代数学1，線形代数学2，微分積分学1，微分積分学2の各2単位必修，計8単位。

v. 工学系教養科目（総合分野・学部開設分野）とイ，口の科目から選択科目として8単位以上。

(b) 専門教育科目

i. 必修科目（ソフトウェア設計及び実習1） 3単位

ii. 必修科目（ソフトウェア設計及び実習2） 3単位

iii. 必修科目（コンピュータ入門1） 2単位

iv. 必修科目（微分方程式1，確率統計学，電磁気学） 4単位以上

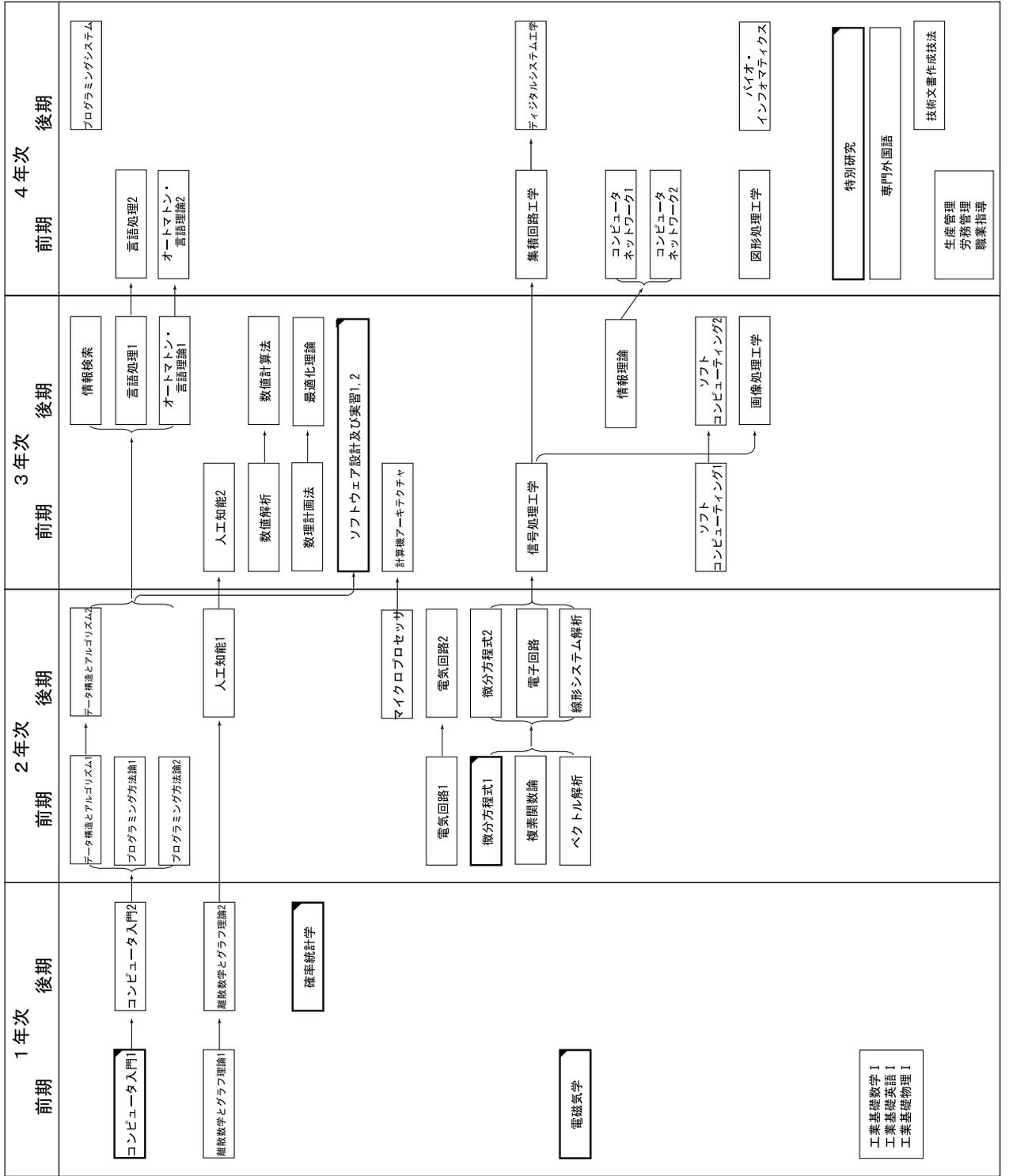
v. 選択科目（職業指導を除く） 48単位以上

附則 この規定は、平成13年4月1日から施行し、平成13年度入学者から適用する。

知能情報工学科（夜間主コース）カリキュラム表

知能情報工学科 授業科目系統図（夜間主コース）

必修 科目
選択 科目



知能情報工学科（夜間主コース）

知能情報工学科（夜間主コース）教育課程表

全学共通教育科目

授業科目（分野）	単位数		
	必修	選択必修	選択
人文科学分野			8
社会科学分野		4	
自然科学分野		4	
総合分野・学部開放分野			
外国語科目	(6)		
健康スポーツ科目	(2)		
基礎教育科目	8		
全学共通教育科目小計	8(8)	12	8

履修にあたっての注意事項

*左の単位数は、全学共通科目において卒業に必要な単位数を示す。

1. 教養科目は、人文科学・社会科学・自然科学のそれぞれの分野から4単位以上、総合科目及び学部開放科目を含む全教養科目から8単位以上を修得すること（別表参照）。外国語・健康スポーツ・基礎教育科目の括弧つきの数字は、演習または実験の単位を示す。
2. 所要単位数を超える外国語科目を修得した場合の超過単位は、教養科目の単位に含めることができる。
3. 開講時期・授業時間数・担当者等の詳細については各年度に於ける全学共通教育運営委員会発行の「全学共通教育履修の手引き」及び「全学共通教育時間割表」を参照のこと。

専門教育科目

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）										担当者	備考	頁
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年		計				
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
電磁気学	2			2								2	大野		271	
確率統計学	2				2							2	今井		262	
微分方程式 1	2					2						2	長町・坂口		272	
微分方程式 2			2				2					2	今井・坂口		272	
ベクトル解析			2			2						2	深貝		273	
複素関数論			2			2						2	香田		272	
数値解析			2						2			2	長町・坂口		267	
コンピュータ入門 1	2			2								2	上田		264	
コンピュータ入門 2			2		2							2	上田		264	
離散数学とグラフ理論 1			2	2								2	矢野		274	
離散数学とグラフ理論 2			2		2							2	矢野		274	
電気回路 1			2			2						2	黒岩		270	
データ構造とアルゴリズム 1			2			2						2	泓田		270	
プログラミング方法論 1			2			2						2	下村		273	
プログラミング方法論 2			2			2						2	下村		273	
電気回路 2			2				2					2	黒岩		271	
データ構造とアルゴリズム 2			2				2					2	青江		270	
電子回路			2				2					2	赤松		271	
線形システム工学			2				2					2	大恵		268	
人工知能 1			2				2					2	小野（典）		267	
マイクロプロセッサ			2				2					2	福見		273	
計算機アーキテクチャ			2						2			2	佐野		263	
数理計画法			2						2			2	池田		267	
人工知能 2			2						2			2	小野（典）		267	
信号処理工学			2						2			2	寺田		266	
ソフトコンピューティング 1			2						2			2	小野（功）		269	
ソフトコンピューティング 2			2							2		2	福見		269	
画像処理工学			2							2		2	大恵		263	
オートマトン・言語理論 1			2							2		2	北		262	
情報理論			2							2		2	得重		266	
最適化理論			2							2		2	最上		265	
数値計算法			2							2		2	池田		267	

知能情報工学科（夜間主コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数(1週当たり)								担当者	備考	頁	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
言語処理 1			2						2			2	任		263
情報検索			2						2			2	獅々堀		266
コンピュータネットワーク 1			2							2		2	森井		265
コンピュータネットワーク 2			2							2		2	森井		265
図形処理工学			2							2		2	最上		268
集積回路工学			2							2		2	赤松		265
言語処理 2			2							2		2	任		264
オートマトン・言語理論 2			2							2		2	任		262
デジタルシステム工学			2								2	2	寺田		270
バイオ・インフォマティクス			2								2	2	小野(功)		272
プログラミングシステム			2								2	2	緒方		272
技術文書作成技法			2								2	2	青江		263
専門外国語			(2)							(2)	(2)	(4)	ニムチャック		268
ソフトウェア設計及び実習 1	2(1)							2(2)				2(2)	獅々堀・緒方・毛利 泓田・柘植・伊藤 森田・光原		268
ソフトウェア設計及び実習 2	2(1)							2(2)				2(2)	獅々堀・緒方・毛利 泓田・柘植・伊藤 森田・光原		269
特別研究	6									2	4	6	知能情報工学科全教官		271
労務管理			1							1		1	井原		274
生産管理			1							1		1	井原		268
工業基礎数学 I			(1)	(2)								(2)	吉川		264
工業基礎英語 I			(1)	(2)								(2)	広田		264
工業基礎物理 I			(1)	(2)								(2)	佐近		264
職業指導			4							4		4	坂野		266
専門教育科目小計	18 (2) 20		86 (5) 91	6 (6) 12	6 6	14 14	14 14	14 (2) 16	18 (2) 20	20 (2) 22	12 (2) 14	104 (14) 118	講義 演習・実習 計		

	卒業に必要な単位数	全学共通教育科目	専門教育科目
必修単位	36 単位	16 単位	20 単位
選択必修単位	12 単位	12 単位	開講科目なし
選択単位	76 単位以上	8 単位以上	68 単位以上
計	124 単位以上	36 単位以上	88 単位以上

備考 1. () 内は、演習・実習等の単位数および授業時間を示す。

2. 印を付した授業科目は、卒業資格の単位に含まれない。

3. 全学共通教育科目中の教養科目（人文科目，社会科学，自然科学，工学系教養の全科目）に毎週 4 時間の授業時間が割り当てられ，この時間内に複数の授業科目が同時並列に開講される。

4. 所要単位（6 単位）を超えて習得した外国語の単位は，卒業に必要な教養科目の選択の単位に含めることができる。

5. 本学科昼間コースの専門教育科目のうち，許可を得たものは履修することができる。これにより修得した単位は内容的に重複しない限り 30 単位以内で卒業に必要な専門選択科目の単位に含めることができる。

6. 専門外国語は，通年で 2 単位取得とする。

知能情報工学科 (夜間主コース) 講義概要

目次

オートマトン・言語理論 1 262
 オートマトン・言語理論 2 262
 確率統計学 262
 画像処理工学 263
 技術文書作成技法 263
 計算機アーキテクチャ 263
 言語処理 1 263
 言語処理 2 264
 工業基礎英語 I 264
 工業基礎数学 I 264
 工業基礎物理 I 264
 コンピュータ入門 1 264
 コンピュータ入門 2 264
 コンピュータネットワーク 1 265
 コンピュータネットワーク 2 265
 最適化理論 265
 集積回路工学 265
 情報検索 266
 情報理論 266
 職業指導 266
 信号処理工学 266
 人工知能 1 267
 人工知能 2 267
 数値解析 267
 数値計算法 267
 数理計画法 267
 図形処理工学 268
 生産管理 268
 線形システム工学 268
 専門外国語 268
 ソフトウェア設計及び実習 1 268
 ソフトウェア設計及び実習 2 269
 ソフトコンピューティング 1 269
 ソフトコンピューティング 2 269
 デジタルシステム工学 270
 データ構造とアルゴリズム 1 270
 データ構造とアルゴリズム 2 270
 電気回路 1 270
 電気回路 2 271
 電子回路 271
 電磁気学 271
 特別研究 271
 パイオ・インフォマティクス 272
 微分方程式 1 272
 微分方程式 2 272
 複素関数論 272
 プログラミングシステム 272
 プログラミング方法論 1 273
 プログラミング方法論 2 273
 ベクトル解析 273
 マイクロプロセッサ 273
 離散数学とグラフ理論 1 274
 離散数学とグラフ理論 2 274
 労務管理 274

【授業目的】情報工学，計算機科学一般において最も中心的な概念であるオートマトンと言語理論について講義し，レポート，小テストを実施して，理論と考え方を習得させる。

【授業概要】言語の有限的記述の概念から始め，言語の基本的な記述機構としてオートマトン及び形式文法を導入する。また，文法とオートマトンの関係についても説明する。講義では，特に基本的で重要な有限オートマトンと正則文法および文脈自由文法について詳しく述べる。

【受講要件】集合に関する基本的な知識 (たとえば「離散数学とグラフ理論 1」) を前提とする。

【到達目標】

1. 形式言語理論の考え方，特に有限オートマトンや正則表現を用いた言語の記述について理解する。
2. 有限オートマトンの等価性，非決定性オートマトンから決定性オートマトンへの変換，オートマトンと正則表現の間の変換などの計算ができる。

【授業計画】1. 基礎的な数学的準備，言語とその表現 2. 順序機械 3. 有限オートマトンと正則言語 4. 有限オートマトンの等価性 5. 有限オートマトンの最簡形 6. 非決定性有限オートマトン 7. 部分集合構成法 8. ϵ 動作を持つ有限オートマトン 9. 言語演算 10. 正則表現 1 11. 正則表現 2 12. 言語族の閉包性 13. 形式文法 1 14. 形式文法 2 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】受講姿勢，レポートの提出状況と内容，小テスト及び最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】富田悦次・横森 貴 著「オートマトン・言語理論」森北出版

【参考書】ホップクロフト・ウルマン 著「オートマトン・言語理論・計算論 I」サイエンス社

【連絡先】北(D203, 656-7496, kita@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】毎回の予習・復習を欠かさず行うこと。随時，レポート及び小テストを実施する。成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点には受講姿勢，レポートの提出状況と内容を含み，試験には小テスト及び最終試験の成績を含む。

オートマトン・言語理論 2

Automata and Formal Languages 2 教授・任 福継 2 単位

【授業目的】文脈自由文法と言語処理に関する理論と考え方を体系的に習得させる。

【授業概要】形式言語の理論を統一的に述べ，かつそのオートマトンとの関係を明らかにする。特に，文脈自由言語について論じ，計算機言語として重要なバックスノーマルフォームは即文脈自由文法であることを理解させる。さらに，文脈自由文法の簡単化と標準形，構文解析法についても勉強させる。

【到達目標】単なるノウハウとしての技術ではなく，理論的・社会的背景と，それらからの論理的な結果としての技術を教えることによって，将来の技術的・社会的変化に対応できるようにする。計算機科学において将来にわたって有効な基礎学力を中心とした体系的な学問と，それらを応用する力を身につける。

【授業計画】1. 文脈自由文法 2. 導出木と曖昧性 3. 文脈自由文法の簡単化 4. ϵ -生成規則 5. 文脈自由文法の標準形 6. 自己埋め込み 7. 所属問題 8. 構文解析 (1) 9. 構文解析 (2) 10. 単純決定性プッシュダウンオートマトン 11. 決定性プッシュダウンオートマトン (1) 12. 決定性プッシュダウンオートマトン (2) 13. 非決定性プッシュダウンオートマトン 14. 自然言語処理 (1) 15. 自然言語処理 (2) 16. 試験

【成績評価】受講姿勢，レポートの提出状況と内容，小テスト及び最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】使用しない。プリントを配布する。

【参考書】特になし

【備考】「オートマトン・言語理論 1」の履修を前提にして講義を行う。毎回の予習・復習を欠かさず行うこと。随時，レポート及び小テストを実施する。成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点には受講姿勢，レポートの提出状況と内容を含み，試験には小テスト及び最終試験の成績を含む。

確率統計学

Probability and Statistics 教授・今井 仁司 2 単位

【授業目的】確率的な現象の捉え方，考え方を学ぶとともにデータを処理する際に使われる統計手法を習得することを目標とする。

【授業概要】初めて数理統計を学ぶ初学者のために統計資料の整理から始めて，その資料の特徴の解析，さらに確率論の基礎と小標本論の初歩を解説する。

オートマトン・言語理論 1

Automata and Formal Languages 1 教授・北 研二 2 単位

【受講要件】「微積分学」の履修を前提とする。
 【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをかきとるとり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。
 【到達目標】
 1. 基本的な分布関数についての理解
 2. 相関関係についての理解
 【授業計画】1. 変量と平均 2. 分散, 標準偏差 3. 相関関係, 回帰直線 4. 相関係数 5. 数学的確率 6. 加法定理 7. 乗法定理 8. 基本的分布関数 9. 平均の性質 10. 二項分布 11. ボワソン分布 12. 正規分布 I 13. 正規分布 II 14. 中心極限定理 15. 期末試験
 【成績評価】期末試験の点数(100点を超えたときは100点にしたもの)が60点以上であれば、その点数を成績として合格とする。期末試験の点数が60点に満たない場合には、100点満点に換算した試験の点数を80%にしたものと平常点(講義と演習の取り組み具合を評価したもので20点満点)を合計し、その点数が60点以上であれば60点を成績として合格とする。
 【教科書】田河生長他『確率統計』大日本図書
 【参考書】青木利夫, 吉原健一『統計学要論』培風館, 越昭三『数理統計概論』学術図書出版社
 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
 【連絡先】今井(建設棟2-7室, Tel:656-7541, E-mailでの問い合わせは受け付けない)

画像処理工学

Image Processing 教授・大恵 俊一郎 2単位

【授業目的】視覚認識技術に不可欠な画像処理の基本的な手法を理解させる。
 【授業概要】画像処理工学は、医療画像処理、工業用画像処理、視覚パターン処理等の基礎になるデジタル画像処理手法の基本的事項を修得するための講義であり、画像処理の基本概念、2値画像処理、画像の変換と強調、画像の復元、画像の特徴抽出、パターンマッチング、パターン分類、画像処理システム、および工業用画像処理への応用について講述する。なお、工業用画像処理については、その分野の専門家に集中講義を依頼することにより、広い最新情報を修得できるようにしている。
 【受講要件】線形システム解析, 信号処理工学及び演習, マイクロプロセッサを履修しておくことが望ましい。
 【履修上の注意】確率統計学, 信号処理工学, 線形システム工学および計算機アーキテクチャを履修しておくこと。また、工業用画像処理については、専門家の非常勤講師が集中講義を行うので、必ず出席のこと。欠席の場合は、単位を認めない。
 【到達目標】視覚情報処理技術に不可欠な画像処理技術の基本的な手法を理解し、応用力をつける。
 【授業計画】1. デジタル画像処理の特徴, 画像データの取り扱い 2. ヒストグラム, 画像処理アルゴリズムの形態, 画像の表現, データ構造 3. 画像の2値化, 2値画像の連結性と距離 4. 連結成分の変形操作, 図形の形状特徴 5. 画像の変換と強調 6. 平滑化と雑音除去 7. 画像の復元, 画像の再構成, 幾何学的変換 8. エッジ検出, 線の検出 9. 領域分割, テクスチャ解析 10. マルチスペクトル画像処理, 3次元画像処理, 動画画像解析 11. パターンマッチング, 教師付き分類, 教師なし分類 12. 画像処理システム 13. 工業用画像処理 I(工業用画像処理の要点, 位置, 形状の認識) 14. 工業用画像処理 2(欠陥の認識, 表面情報の認識) 15. 予備日 16. 定期試験
 【成績評価】毎回講義終了前に、その時間帯に習った内容から10分間の小試験を行い、さらに定期試験も行って、総合的に評価する。
 【教科書】田村秀行監修:「コンピュータ画像処理入門」総研出版
 【参考書】高木幹雄, 下田陽久監修:「画像解析ハンドブック」東京大学出版会
 【連絡先】大恵俊一郎, 知能情報工学科204号室, 088-656-7500, oe@is.tokushima-u.ac.jp

技術文書作成技法

Technical Document Writing Scheme 教授・青江 順一 2単位

【授業目的】技術文書の種類と作成技術に対する簡潔な文書表現内容を講義して、簡潔に情報伝達を行う方法論を修得させる。
 【授業概要】技術文書の種類と作成技術を講義し、簡潔に情報伝達を行う方法論を修得させる。技術報告書と特許文書に関しては、具体的な課題を設定した作成演習で基本手法を修得させる。

【受講要件】「ソフトウェア設計及び実習1,2」の履修が望ましい。
 【到達目標】自分の意見・考えを明確かつ論理的に記述できる能力を育成する。
 【授業計画】1. 技術文書の種類 2. 文書の構造 3. 文書構造の設計 4. トップダウン式書法 5. 文書表現手法 6. 技術報告書の書き方 I 7. 技術報告書の書き方 2 8. 技術報告書の作成演習 9. 中間試験 10. 特許文書作成 I 11. 特許文書作成 2 12. 特許文書の作成演習 13. 発表資料の作成方法 14. 発表方法 15. 予備日 16. 定期試験
 【成績評価】講義に対する理解力の評価は、口頭試問, 質問, 演習の回答, レポートの内容を平常点とし、それに中間と最終試験の成績を総合して行う。また、講義中には随所に質問や口頭試問による生きた対話時間を設け、講義内容が口頭試問で答えられない場合は減点されるので、常に緊張した授業となる。
 【教科書】資料配付
 【参考書】安田賀計 著「報告書・レポート:基本文例 80」ISBN-569-52670-5
 【連絡先】青江(Dr.棟604, 656-7486, aoe@is.tokushima-u.ac.jp)
 【備考】成績評価に対する平常点と試験の比率は4:6とする。

計算機アーキテクチャ

Computer Architecture 講師・佐野 雅彦 2単位

【授業目的】1940年代にフォン・ノイマンにより開発された現在のコンピュータは急速な進歩を遂げている。この講義ではコンピュータアーキテクチャの基本を理解し、高性能化に不可欠なアーキテクチャを修得する。
 【授業概要】ノイマン型のコンピュータの基本概念と、各種の方式の歴史を踏まえ、計算機本体を構成する基本アーキテクチャを講義する。また、高性能化のための各種方式について講義し、計算機の将来について議論する。
 【到達目標】情報処理システムにおける既存のハードウェア及びソフトウェア技術の特徴と問題点を理解し、今後必要とされる情報処理システム設計・構築のための基本的概念と応用できる能力を修得する。
 【授業計画】1. 計算機の歴史および性能評価法 2. 数値表現形式と演算 3. 演算回路の構成方式 4. 命令実行方式・小テスト 5. メモリ構成 6. 入出力制御 7. 仮想記憶 8. キャッシュメモリ・レポート 9. パイプライン 10. 高速化 11. 投機実行・レポート 12. 並列処理・処理モデル 13. 並列処理・通信方式 14. 将来の計算機・レポート 15. 予備日 16. 期末試験
 【成績評価】講義への参加状況, 小テストの実施またはレポートの提出を求めると共に期末試験を実施する。成績はこれらの結果を総合して評価する。
 【教科書】各講義時に資料等を配付
 【参考書】高橋義造「計算機方式」コロナ社(1985), 中澤喜三郎「算機アーキテクチャと構成方式」朝倉書店(1995), 柴山潔「コンピュータアーキテクチャの基礎」近代科学社(1993), ohn P. Hayes「Computer Architecture and Organization」2nd ed. McGraw-Hill(1988)
 【備考】各種の雑誌や書籍に掲載される計算機アーキテクチャを調べることが望ましい。成績評価に対する平常点と試験の比率は4:6とする。平常点は講義への参加状況, 演習の回答およびレポートの提出状況と内容を含み、試験には小テスト及び最終試験の結果を含む。

言語処理 I

Language Processing I 教授・任 福継 2単位

【授業目的】自然言語のコンピュータによる処理で必須な文法, そして、言語理解における基礎的な形態素解析と構文解析技術を修得させる。
 【授業概要】言語の基本性質とモデルから始め、自然言語処理のための形態素解析や構文解析の基礎を、実例を与えながら技術的な観点から講義する。
 【到達目標】
 1. 自然言語のコンピュータによる処理で必須な文法, そして、言語理解における基礎的な形態素解析と構文解析技術を修得させる。
 2. 言語の基本性質とモデルから始め、自然言語処理のための形態素解析や構文解析の基礎を勉強し、知能情報工学を考える能力を育成する。
 【授業計画】1. 言語処理概観 2. 形態素解析 I(形態素, 形態素情報) 3. 形態素解析 II(接続規則, コストの導入) 4. 形態素解析 III(アルゴリズム, かな漢字変換) 5. 言語の統計 6. 形式文法 I(文脈自由文法, 標準形) 7. 形式文法 II(プッシュダウンオートマトン, 文脈自由言語) 8. 構文解析 I(アルゴリズム I) 9. 構文解析 II(アルゴリズム II) 10. 構文解析 III(アルゴリズム III) 11. 文脈自由文法の拡張 12. 意味解析の初歩 13. 電子

知能情報工学科(夜間主コース)

辞書の構成と検索 14. 言語の曖昧性 15. 自然言語理解の初歩 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容及び最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】特に指定しない。随時講義メモ、資料を配布する。

【参考書】長尾真 編「自然言語処理」岩波書店、岡田直之 著「自然言語処理入門」共立出版、東条敏 著「自然言語処理入門」近代科学社、石崎俊 著「自然言語処理」昭晃堂

【備考】オートマトンと言語理論を受講しておくことが望ましい。成績評価に対する平常点と試験の比率は 5:5 とする。平常点には講義への参加状況、演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含む。

言語処理 2

Language Processing 2

教授・任 福継 2 単位

【授業目的】コンピュータによる自然言語理解における意味解析、文脈解析、そしてこれらを総合した応用である機械翻訳システムの構築技術を修得させる。

【授業概要】格文法、意味素、シソーラスなど基礎概念を始め、文の生成や機械翻訳の方法論と構築技術を、プロジェクトもしながら講義する。

【到達目標】

1. コンピュータによる自然言語理解における意味解析、文脈解析、そしてこれらを総合した応用である機械翻訳システムの構築技術を修得させる。
2. 文の生成や機械翻訳の方法論と構築技術を、プロジェクトもしながら講義することによって、システムティックな解析・設計を行い、現実世界を鑑みながら統合・評価ができる能力を育成する。

【授業計画】1. 意味解析と格文法 2. 意味素による意味解析 3. 用例とシソーラスによる意味解析 4. コーパス 5. 文脈解析 6. 照応現象の分類と照応関係の解析 7. 文の生成 8. 機械翻訳 9. 構文トランスファー方式による機械翻訳 10. スーパー関数に基づく機械翻訳 (SFMT) 11. プロジェクト I(SFMT 開発技術) 12. プロジェクト II(SFMT 辞書構築) 13. プロジェクト III(SFMT エンジン) 14. プロジェクト IV(SFMT 関数の獲得) 15. 21 世紀の言語処理 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容及び最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】特に指定しない。随時講義メモ、資料を配布する。

【参考書】長尾真 編「自然言語処理」岩波書店、岡田直之 著「自然言語処理入門」共立出版、東条敏 著「自然言語処理入門」近代科学社、石崎俊 著「自然言語処理」昭晃堂

【備考】オートマトンと言語理論を受講しておくことが望ましい。成績評価に対する平常点と試験の比率は 5:5 とする。平常点には講義への参加状況、演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含む。

工業基礎英語 I

Industrial Basic English (I)

非常勤講師・広田 知子 1 単位

【授業目的】現代社会の国際言語である英語を用いて、科学技術分野での基礎的な語彙力、読解力、リスニング力を養うことを目的とする。

【授業概要】科学技術分野で頻出の語彙や表現を増やす。イラスト、写真などを参考にしながら、内容理解のための練習問題を通して、英文を理解する力や、必要な情報を効率的に掴む力を養成する。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. HEAT 3. SOUND 4. COMPUTERS 5. (教科書の各章にしたがって進めていくが、途中で適宜リスニング教材やビデオ教材なども使用する。)

【成績評価】コース最終日に試験を行う。

【教科書】ENJOY SCIENCE:データバンク (1) 『やさしい科学』 David Crystal/John Foster Asahi Press

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】授業の前に予習しておくことが望ましい。

工業基礎数学 I

Industrial Basic Mathematics (I)

非常勤講師・吉川 隆吾 1 単位

【授業目的】工学を学ぶために必要不可欠となる微分・積分の基礎的な内容について理解を図り、さらに基本的な手法や計算技術を確実に習得することを目的とする。

【授業概要】1 変数関数および多変数関数の微分・積分について、基礎的な内容から解説する。また、本講義の内容について、より理解を深めるために適宜演習を行う。

【授業計画】1. 微分 1:極限と連続 2. 微分 2:微分 3. 微分 3:導関数の応用 4. 積分 1:不定積分 5. 積分 2:定積分 6. 積分 3:定積分の応用 7. 偏導関数 1:多変数の関数 8. 偏導関数 2:偏導関数 9. 偏導関数 3:全微分 10. 偏導関数 4:Taylor の定理 11. 偏導関数 5:偏導関数の応用 12. 重複積分 1:重複積分 13. 重複積分 2:多重積分の応用

【成績評価】出席状況、レポート、期末考査等により総合的に評価する。

【教科書】特に指定しない。適宜、資料を配布する。

【参考書】矢野健太郎、石原繁 編「微分積分(改訂版)」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義内容を確実に理解するためにも、毎回の復習は欠かさずに行い、次の講義に望んでもらいたい。成績評価に対する [講義の出席状況、レポートの提出状況] と [小テストの成績] の割合は 4:6 とする。

工業基礎物理 I

Industrial Basic Physics (I)

非常勤講師・佐近 隆義 1 単位

【授業目的】

【授業概要】力学・波動・電磁気学について、ごく初歩的分野を解説する。

【授業計画】1. 運動と力:質点及び剛体の力学、ニュートンの運動の法則、運動量と力積・保存則 2. エネルギーと運動:仕事、力学的エネルギー・保存則 3. 波動:等速円運動、単振動、波 4. 電気と磁気:クローン力、電場と電圧、オームの法則・キルヒホッフの法則、磁場・ローレンツ力 5. 試験

【成績評価】講義への参加状況と試験の成績を総合して行う。

【参考書】高等学校で使用する物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義の最終日に試験を実施するので、毎回の復習を欠かさず行うこと。

コンピュータ入門 1

Introduction to Computer 1

助教授・上田 哲史 2 単位

【授業目的】UNIX を中心とした基礎的なコンピュータリテラシーを、十分な実習時間をかけて修得させる。

【授業概要】UNIX はマルチユーザ・マルチタスクのオペレーティングシステム(OS)であり、C 言語とのインターフェースが良く、各種コンパイラ、テキスト処理ツールも豊富に用意されている。また、インターネットへの親和性にも優れ、電子メール、ネットニュースなど、多くのネットワークサービスのサーバおよびクライアントが動作している。UNIX の伝統や哲学を理解し、各自が各ツールを使いこなして、各種情報処理やプログラミングを効率よく行えるようになることを目指す。実習を中心とした講義展開を行なう。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】「コンピュータ入門 2」と連動し、一貫した授業展開を行う

【到達目標】

1. 基本的なコンピュータによる読み書き手法の修得
2. プログラムの作成と実行まで、コンピュータシステム内での振る舞いを意識しながらの理解

【授業計画】1. コンピュータ、インターネットの利用と情報倫理 2. UNIX の概説、コンピュータの取り扱い基礎 3. エディタと電子メール基礎 4. エディタと電子メール応用 5. ファイルとディレクトリの操作 6. 標準入出力と各種 UNIX コマンド 7. LaTeX によるレポート作成技術 8. データ処理技術 9. C 言語の概要とプログラミング環境 10. データ型と演算 11. 制御構造 (1) 12. 制御構造 (2) 13. オンライン模擬試験 14. 総括と補足 15. オンライン単位認定試験 16. 予備日

【成績評価】課題を毎回出題する。試験と課題の達成状況を総合的に判断して評価する。平常点と試験の比率は 7:3 とする。

【教科書】利用の手引き(無償配布)、柴田望洋、定本明解 C 言語入門編、ソフトバンク出版

【参考書】坂本文「たのしい UNIX」アスキー出版

【連絡先】上田(Ait502, 656-7501, tetsushi@ait.tokushima-u.ac.jp)

【備考】1 年生後期の「コンピュータ入門 2」と連続して講義および演習を進める。

コンピュータ入門 2

Introduction to Computer 2

助教授・上田 哲史 2 単位

- 【授業目的】UNIX オペレーティングシステムを念頭においた C 言語の基礎を理解し、プログラムを「書く」習慣を身につける。
- 【授業概要】UNIX 自身もその内部はほとんど C 言語で記述されていることはよく知られている。C 言語の初歩的な事柄について、実習による裏付けを取りながら理解を深めてゆく。「コンピュータ入門1」で培った技術を活用できるのは勿論、プログラミング環境を効率良く行なえる各種ツールについても講述する。
- 【受講要件】「コンピュータ入門1」を受講していることが望ましい
- 【到達目標】
1. 基本的な C プログラムの作成ができるようになる
 2. 既存プログラムの「模倣」ではなく、アルゴリズムを自立的に思考する能力を身につける
- 【授業計画】1. 反復構造 (1) 2. 反復構造 (2) 3. 配列 4. 関数 5. 入出力と文字 6. 文字列の扱い 7. 関数や変数のスコープ 8. ポインタ (1) 9. ポインタ (2) と文字列の処理 10. ポインタ応用 11. 構造体 12. 構造体へのポインタと動的メモリ取得 13. 総括と補足 14. 模擬試験 (筆記) 15. 単位認定試験 (筆記) 16. 予備日
- 【成績評価】課題を毎回出題する。試験と課題の提出状況、受講姿勢を総合して評価する。平常点と試験の比率は 7:3 とする。
- 【教科書】柴田望洋, 定本明解 C 言語入門編, ソフトバンク出版
- 【参考書】B. W. カーニハン・D. M. リッチー 著・石田晴久 訳「プログラミング言語 C 第 2 版」共立出版
- 【連絡先】上田(Ait502, 656-7501, tetsushi@ait.tokushima-u.ac.jp)

コンピュータネットワーク 1

Computer Networks 1 教授・森井 昌克 2 単位

- 【授業目的】本講義では、ネットワーク技術の進歩と関連付けて、コンピュータネットワークを支える基礎技術やその性能評価手法を修得することを目的としている。
- 【授業概要】コンピュータネットワークに必要な要素技術として、LAN、広帯域網、ネットワーク相互接続技術、ネットワーク管理技術、ネットワーク評価手法について解説する。
- 【受講要件】コンピュータ入門 1, 2 ならびに離散数学とグラフ理論 1, 2 を履修しておくことが望ましい。
- 【履修上の注意】教科書は変更することがある。
- 【到達目標】1. 基礎となる階層モデルにおける各階層の目的ならびに機能を理解させ、将来の技術的变化に対応できるようにする。また、ネットワークシステムの設計、構築、運用がおこなえる人材を育成する。
- 【授業計画】1. コンピュータ網とインターネット 2. アプリケーション層 (HTTP, FTP, SMTP, DNS) 3. アプリケーション層 (TCP/UDP Socket Programming) 4. トラnsポート層 (UDP, TCP) 5. トラnsポート層 (輻輳制御) 6. ネットワーク層 (インターネットプロトコル) 7. ネットワーク層 (ルーティング) 8. データリンク層 (LAN) 9. データリンク層 (WAN) 10. マルチメディアネットワーク (アプリケーション) 11. マルチメディアネットワーク (統合サービス) 12. コンピュータ網におけるセキュリティ 13. ネットワーク管理 (MIB, SNMP) 14. ネットワークシミュレーション 15. ネットワーク解析 16. 期末試験
- 【成績評価】平常点は小テスト、受講姿勢の総合評価とする。小テストは講義内容の理解を確認する程度の簡単な問題とする。成績は、平常点を 4 割、期末テストを 6 割の比率で総合的に評価する。
- 【教科書】James F. Kurose and Keith W. Ross, "Computer Networking - A Top-Down Approach Featuring the Internet," Pearson Education
- 【参考書】Behrouz Forouzan, "Introduction to Data Communications and Networking," McGraw-Hill
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

コンピュータネットワーク 2

Computer Networks 2 教授・森井 昌克 2 単位

- 【授業目的】本講義では、ネットワーク技術の進歩と関連付けて、情報通信網を支える種々の基礎技術やその評価手法を修得することを目的としている。
- 【授業概要】前半は、広域網技術、ローカルエリアネットワーク技術、ネットワーク相互接続技術について最近の動向も織り混ぜながら解説する。後半は、ネットワークシステム設計・評価のための種々の解析手法について解説する。
- 【授業計画】1. ネットワーク基礎: OSI 参照モデル 2. WAN(Wide Area Network): X25, Frame relay, SDH, ATM 3. LAN(Local Area Network): Ethernet, Token Ring 4. LAN(Local Area Network): FDDI, DQDB 5.

- LAN(Local Area Network): Gigabit-Ethernet, ATM-LAN 6. ネットワーク層技術: IP, ARP, RARP, IPv6 7. トラnsポート層技術: TCP, UDP 8. ルーティング技術: RIP, OSPF 9. 中間試験 10. トラヒック解析: GOS, QOS, トラヒックモデル 11. トラヒック解析: 待ち行列理論の基礎 12. トラヒック解析: 待ち行列理論の応用 13. トラヒック解析: フロー解析の基礎 14. トラヒック解析: フロー解析の応用 15. 予備日 16. 定期試験
- 【成績評価】講義内容の理解度を確認するために、随時小テストを行なう。これらの結果と中間試験、期末試験の結果を総合して評価を行う。受講姿勢も若干配慮する。
- 【教科書】特に指定しない。ただし、該当年度毎に参考書およびテキストを指定する場合がある。
- 【参考書】Behrouz Forouzan 「Introduction to DATA Communications and Networking」 McGraw-Hill International Editions, A. S. Tanenbaum 「Computer Networks (3rd. Ed.)」 Prentice Hall, 酒井善則・植松友彦「情報通信ネットワーク」昭晃堂
- 【備考】毎回の復習は欠かさず行うこと。平常点を 2 割、中間試験を 4 割、期末試験を 4 割の比率で評価する。

最適化理論

Optimization Theory 講師・最上 義夫 2 単位

- 【授業目的】最適化の概念、数値処理による最適化、学習に基づく最適化について講義し、さらに演習と試験によって、最適化の基礎知識を修得させる。
- 【授業概要】最適化は工学諸分野における一般的かつ基礎的な概念であるが、本講義では非線形計画法 (数値処理による最適化) と学習ユニットによる最適化 (学習に基づく最適化) とを中心とした講義を行う。非線形計画法においては最急降下法、ニュートン法、準ニュートン法、直接探索法について講義し、学習ユニットによる最適化においては学習オートマトンによる最適化 (移動ロボットの迷路通過ルートの探索) について講述する。あわせて演習を行わせることによって、数値処理による最適化と学習に基づく最適化についての基礎知識を修得させる。
- 【受講要件】「コンピュータ入門 1, 2」の履修を前提として講義を行う。さらに「数値計画法」、「数値解析」、「数値計算法」を履修していることが望ましい。
- 【履修上の注意】適宜演習を課すので、すべての演習を必ず行うこと。
- 【到達目標】数値モデルに基づく数値処理による最適化手法と数値モデル化が困難な場合に有効である学習に基づく最適化手法とを修得させることによって、工学諸分野において広く存在する最適化問題をシステムティックに解決する能力を育成する。
- 【授業計画】1. 工学における最適性と最適化の概念 2. 最適化問題の定式化 3. 制約なし最適化問題と降下法 4. 直線探索 5. 最急降下法 6. ニュートン法 7. 準ニュートン法 8. 直接探索法 9. 学習オートマトンによる最適化 (移動ロボットの迷路探索) 10. 学習オートマトンの基本モデル 11. 定常環境における学習アルゴリズム 12. 学習アルゴリズムの特性 13. 種々の学習アルゴリズムの比較 14. 非定常環境における学習アルゴリズム 15. 予備日 16. 定期試験
- 【成績評価】講義への参加状況、演習のレポートの提出状況と内容、試験の成績を総合して行う。
- 【教科書】特に指定しない。適宜資料を配布する。
- 【参考書】馬場則夫・坂和正敏「数値計画法入門」共立出版、今野 浩・山下 浩「非線形計画法入門」日科技連、K.S.Narendra and M.A.L.Thathachar 「Learning Automata - An Introduction」 Prentice Hall
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】最上(C404, 656-7505, moga@is.tokushima-u.ac.jp)

集積回路工学

Integrated Circuits 教授・赤松 則男 2 単位

- 【授業目的】集積回路に関する基本的知識とその設計法を習得する。レポート、小試験を実施して集積回路の設計に必要な基礎知識を習得する。
- 【授業概要】パルスとその基本動作、パルス増幅回路の特性を説明し、MOS-FET を用いた論理回路を解説する。コンピュータのメモリとしてバイポーラ トランジスタおよび MOS-FET の S-RAM, D-RAM, ROM の回路と使用方法を解説する。ASIC に代表される集積回路の設計は重要であるので詳細に説明し、学生自身で集積回路を設計する。
- 【受講要件】電気回路および演習、物理学 (物性、電気磁気学、力学、熱力学、光学、量子力学)、数学 (微分方程式、関数論、ベクトル、マトリックス、統計学、論理学) などの基礎学力を十分に備えていることが受講に際しての必要条件です。

知能情報工学科(夜間主コース)

【到達目標】エレクトロニクスおよびコンピュータのハードウェアとソフトウェアのバランスの良い思考ができるための基礎的な知識を習得し、これを数理的に展開し、構造的なシステムの設計ができ、これを表現することができる能力の獲得を到達目標とする。

【授業計画】1. MOS 型の電界効果トランジスタ I(構造, 動作原理, 種類) 2. MOS 型の電界効果トランジスタ II(電圧・電流特性)・レポート 3. MOS-FET を用いるインバータ回路 I(種類, N-MOS) 4. MOS-FET を用いるインバータ回路 II(C-MOS)・レポート 5. NAND 論理回路 6. NOR 論理回路・レポート 7.3 状態論理回路 8. 中間試験 9. 半導体メモリ I(MOS-FET を用いるメモリ, RAM) 10. 半導体メモリ II(P-RAM, バイポーラメモリ)・レポート 11. 集積回路の設計法・レポート 12. プログラマブルロジックアレイ(PLA) 13. PLA を用いる設計例・小試験 14. 集積回路システムの開発法 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義中に行う中間試験および小試験と試験期間中に行う定期試験とレポートの結果を考慮し、受講姿勢にも配慮して成績を総合的に評価する。再試験は行う。

【教科書】赤松則男「エレクトロニクス回路」

【参考書】安藤和昭「パルス・デジタル回路」, 斉藤忠夫「電子回路入門」

【備考】大学院でさらに高度な集積回路設計技術を学ぶための基礎的科目であるので、特に進学希望者は必ず習得する必要がある。成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点には講義への参加状況、演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み、試験には小試験及び最終試験の成績を含む。

情報検索

Information Retrieval 助教授・獅々堀 正幹 2 単位

【授業目的】文書検索技術・データベース構築技術に関して、基礎的な内容を最近注目されているホットな話題まで幅の広い検索技術について講述する。

【授業概要】講義の前半では、全文検索手法に話題を絞り、索引の構成方法を中心に種々のデータ構造・圧縮手法を説明する。後半では、検索質問に類似した文書を検索する類似検索の各種技術について講述する。本講義では、単に各種アルゴリズムの内容を説明するだけでなく、実際にプログラミング演習課題を行い小規模なデータに対するシュミレーションを通して、それらの特徴(長所短所)を理解させる。

【受講要件】コンピューター入門 1,2, データ構造とアルゴリズム 1,2, 情報数学, プログラミングシステムの科目を履修していることが望ましい。

【到達目標】

1. 各種情報検索システムを抽象化し、モデリングを行える力を育成する。
2. 各種情報検索システムの問題点を分析し、問題を解決できるアルゴリズムの考案が出来る力を育成する。

【授業計画】1. 情報検索とは? 2. 文字列照合に基づく全文検索 1(BM 法, KMP 法) 3. 文字列照合に基づく全文検索 2(AC 法) 4. 索引を用いた全文検索 1(特徴ベクトル法) 5. 索引を用いた全文検索 2(転置ファイル法) 6. 索引を用いた全文検索 3(パトリシアトライ法) 7. 索引の圧縮法(PAT アレイ, PaCB 木) 8. 中間試験 9. 類似文書検索システムの概要 10. 情報検索の適用と評価 11. 索引語の抽出と重み付け 12. ベクトル空間モデルに基づく情報検索 13. 潜在的意味インデキシング 14. 高次元スパース行列の圧縮 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】成績の評価は、中間試験と定期試験の得点だけでなく、平常点も加味する。平常点は主に演習レポートの提出回数で判断し、その他には講義内での発表回数、及び受講姿勢などを含む。

【教科書】北研二, 津田和彦, 獅々堀正幹 著「情報検索アルゴリズム」共立出版

【参考書】徳永健伸 著「情報検索と言語処理」東京大学出版会

【連絡先】獅々堀(D棟214, 656-7508, bori@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】口頭質問に答えられないと、累積減点数が多くなるので注意すること。

情報理論

Information Theory 講師・得重 仁 2 単位

【授業目的】高度情報化社会の基盤技術であるマルチメディア、およびそれを支える通信技術、デジタル符号化技術を理解するための基礎理論、技術を習得する。また秒進分歩に進んでいる最先端技術の概要に触れる。この講義により、現在そして将来の通信技術およびコンピュータでのデータ処理を理解し、新しい理論および技術を築く上での礎となることを期待する。

【授業概要】情報理論は情報の数量的な取扱いに関する基礎理論であり、現在のマルチメディアおよび高速データ通信技術の礎となっている。特に情報を如何に数的に扱い、表現するか、さらにその情報の伝達、蓄積を如何に効率よく、そして信頼性を高く行うかを議論する。本講義では、情報理論の基礎を習得するとともに、そのマルチメディアおよび高度情報ネットワークへの応用技術について学ぶ。

【授業計画】1. 情報理論概説, 情報通信工学との関係 2. 情報源のモデル化 3. 情報源符号化の基礎概念 4. 情報源符号化定理 5. ハフマン符号 6. 最新のデータ圧縮アルゴリズム 7. 画像データ圧縮と離散コサイン変換 8. 標本化定理 9. 情報量, エントロピー, 相互情報量 10. 通信路容量 11. 通信路符号化定理 12. 通信路符号化基礎 13. 符号理論の予備知識 14. 符号理論の基礎 15. 暗号と情報セキュリティ 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容、小テスト及び最終試験の成績を総合して行う。

【教科書】特に指定しない。

【参考書】宮川 洋 著「情報理論入門」好学社, 今井秀樹 著「情報理論」昭晃堂

【備考】原則として、毎回のレポート提出を義務づけ、不定期に小テストを行う。成績評価に対する平常点と試験の比率は 5:5 とする。平常点には講義への参加状況、演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み、試験には小テスト及び最終試験の成績を含む。

職業指導

Vocational Guidance 非常勤講師・坂野 信義 4 単位

【授業目的】

【授業概要】生涯発達・Career Developing としての人間観・職業観を確立すべく、学際的見地から職業指導の課題と方法を論述し、併せて能力開発を実践指導する。

【授業計画】1. I. 職業指導の課題と方法 2. 職業指導発展の略史 3. 職業指導の課題 4. 個性と職業 5. 1) 個人理解の方法-性格, 興味など 6. 2) 適応と適性 7. 3) Career Planning としてのライフワーク 8. 4) マネジメントスキル: リーダシップ論など 9. 職業相談(キャリア・カウンセリング) 10. 1) 職業相談の意義 11. 2) カウンセリング理論と技術 12. 職業指導の評価 13. II. 職業指導に役立つ能力開発: 理論と実践 14. 人生 60 年計画表の作成 15. IC 法, NM 法を活用してソフト作成能力を育成 16. KJ 法を活用しての課題解決とプレゼンテーション

【成績評価】論文、能力開発のプレゼンテーションにより成績評価。

【教科書】講師よりプリント資料配布。参考書、必読書については、講義中紹介。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】「面白くてためになり、そして思い出に残る」講義が目標。

信号処理工学

Signal Processing 助教授・寺田 賢治 2 単位

【授業目的】知能情報工学の分野をはじめ、電気電子工学及び他の工学諸分野において極めて重要な技術であるアナログおよびデジタル信号処理について講義し、演習及び小テストを実施して、工学部出身者として最低限身につけてはおかなければならない信号処理の基礎知識を修得させる。

【授業概要】信号と信号処理全般、アナログ信号及びデジタル信号の解析、さらにサンプリング、フィルタリング、信号の変換など信号処理に関する基礎力を身に付けさせる。

【到達目標】

1. 信号処理の基礎知識を、講義と実習を通じて身に付ける。
2. 基礎的な学力と、それを各問題に応用できる能力を身に付ける。

【授業計画】1. 信号と信号処理 2. 信号の分類と変換 3. 信号とシステム 4. フーリエ級数展開 5. フーリエ変換 6. ラプラス変換 7. 連続時間システムのインパルス応答、周波数特性 8. 離散時間フーリエ変換 9. 離散フーリエ変換 10. 高速フーリエ変換 11. Z 変換 12. 離散時間システムのインパルス応答、周波数特性 13. サンプリング定理とナイキスト周波数 14. フィルタリング 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義への参加状況、演習・小テストの回答、及び最終試験の成績を総合して行なう。

【教科書】浜田 望 著「よくわかる信号処理」オーム社

【参考書】貴家仁志 著「デジタル信号処理」昭晃堂, 森下 徹 著「わかりやすいデジタル信号処理」昭晃堂

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】寺田(C203, 656-7499, terada@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】再試は一切やらない

人工知能 1

Artificial Intelligence 1 教授・小野 典彦 2 単位

【授業目的】 知能システムを構築するために不可欠となる人工知能の基礎技術を中心に解説すると共に、課題を通して、それらの応用方法を実践的に理解させることを目指す。

【授業概要】 人工知能研究の流れをその起源から現在までにわたって概説すると共に、知能システムの構築のための要素技術を修得させる。本講義の内容は初等的ではあるが、毎回、人工知能の先端技術との関係についても触れる。

【受講要件】 離散数学とグラフ理論 1, 2 を受講していることが望ましい。

【到達目標】

1. 探索に基づく問題解決の原理, 応用方法および限界を理解する。
2. 知識に基づく問題解決の原理, 応用方法および限界を理解する。

【授業計画】 1. 人工知能概論 2. 問題とその解決過程の定式化 3. 探索による問題解決 4. 探索による問題解決 5. 探索による問題解決 6. 知識の表現と利用 7. 論理に基づく知識表現: 述語論理 8. 論理に基づく問題解決: 導出原理 9. 論理に基づく問題解決: 導出原理の応用 10. プロダクションシステムによる知識表現 11. 意味ネットとフレームによる知識表現 12. 知識の獲得と学習 13. 知識の獲得と学習 14. 人工知能の最新の話から 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】 受講姿勢, 課題に対する取り組み状況, 小テストの成績等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】 太原育夫著「人工知能の基礎知識」近代科学社

【参考書】 S. Russell, P. Norvig 著・古川康一監訳「エージェントアプローチ・人工知能」共立出版

【連絡先】 小野(D棟106, 656-7509, ono@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】 講義で使用するスライドの原稿は Web 上で公開するので, 受講者は予めスライド原稿を印刷しておくこと。平常点と期末試験の成績の割合は 4:6 とする。

人工知能 2

Artificial Intelligence 2 教授・小野 典彦 2 単位

【授業目的】 知能システムの実現は容易ではなく, 人間を凌駕するような知能を実現できた人工知能の応用領域はかぎられている。本講義では, 知能を計算機上に実現することがいかに困難な作業であるのかを種々の視点から浮き彫りにすると共に, それを克服することを目指して展開されている最近の人工知能技術を理解させることを目指す。

【授業概要】 現実的な知能システムを構築する上で有望な枠組みと考えられる種々の要素技術に焦点を合わせ, それらの基礎, 応用および限界について解説する。

【受講要件】 人工知能 1 を受講していることが望ましい。

【到達目標】

1. 知能システムのトップダウン的な構築の限界を理解する。
2. 知能システムのボトムアップ的な構築のための種々の要素技術について, その原理, 応用方法および限界を理解する。

【授業計画】 1. 知能システムの実現はなぜ難しいか? 2. 知能システムの創発的設計 3. ニューラルネットワークの基礎 I 4. ニューラルネットワークの基礎 II 5. ニューラルネットワークの応用とその課題 6. 強化学習の基礎 I 7. 強化学習の基礎 II 8. 強化学習の応用とその課題 9. 進化的学習の基礎 I 10. 進化的学習の基礎 II 11. 進化的学習の応用とその課題 12. 自律エージェントの創発的設計 13. マルチエージェントシステムの創発的設計 14. 時系列予測システムの創発的設計 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】 受講姿勢, 課題に対する取り組み状況, 小テストの成績等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】 特に指定しない。

【参考書】 S. Russell, P. Norvig 著・古川康一監訳: エージェントアプローチ・人工知能, 共立出版

【連絡先】 小野(D棟106, 656-7509, ono@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】 講義で使用するスライドの原稿は Web 上で公開するので, 受講者は予めスライド原稿を印刷しておくこと。

数値解析

Numerical Analysis 教授・長町 重昭, 助手・坂口 秀雄 2 単位

【授業目的】 様々な数値計算手法を身につけるとともに, 数値解析の基本的な考え方を習得することを目的とする。

【授業概要】 現代の科学技術計算に幅広く用いられているコンピュータの基本的な演算方式である浮動小数点数についてまず講義し, つぎに

方程式系の数値解法および得られた数値解の誤差評価法や安定性について述べる。

【受講要件】 「線形代数学」「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】 理論の習得だけでなく, 実際に計算機を用いた数値計算演習を行うことが望ましい。

【到達目標】

1. 数値誤差が理解できる。
2. 非線形方程式の数値解法について理解できる。

【授業計画】 1. 丸め誤差, 桁落ち 2. 浮動小数点数の四則演算 3. 連立一次方程式の解法: 直接法 (i) 4. 連立一次方程式の解法: 直接法 (ii) 5. 連立一次方程式の解法: 反復法 6. 連立一次方程式の解法: 勾配法 7. 非線形方程式の解法: 二分法 8. 非線形方程式の解法: ニュートン法 9. 数値積分の考え方 10. 補間型積分則 11. 微分方程式の解法: オイラー法 12. 微分方程式の解法: ルンゲ・クッタ法 13. 微分方程式の解法: 差分法 (i) 14. 微分方程式の解法: 差分法 (ii) 15. 期末試験

【成績評価】 講義への取り組み状況, レポートの提出状況・内容等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】 篠原能材『数値解析の基礎』日新出版

【参考書】 名取亮『線形計算』朝倉書店, 森正武『数値解析』共立出版, 名取亮『数値解析とその応用』コロナ社

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 坂口(建設棟2階221)

数値計算法

Numerical Programming 助教授・池田 建司 2 単位

【授業目的】 数値計算において重要な数値誤差と計算の手間(計算時間, 作業領域)を意識したプログラミングを修得することを目的とする。また, 代表的な数値計算のアルゴリズムをプログラミングしその結果を解析することによって, 数値計算の常識を修得する。

【授業概要】 代表的な数値計算のアルゴリズムを C 言語でプログラミングし, 計算機上で実行する。計算結果とそれに対する考察を報告書として提出する。

【受講要件】 必要なアルゴリズムの原理などは, 講義中に説明するが, 数値解析の単位を取得していることが望ましい。

【到達目標】 数値モデルに基づくシステムティックな解析・設計の方法を学習し, 数値的に根拠のある解析にもとづく設計能力を育成する。

【授業計画】 1. 計算機における数の表現 2. 非線形方程式の解法 I 二分法 3. 非線形方程式の解法 II Newton 法 4. 非線形方程式の解法 III 割線法 5. 数値積分 I 台形則 6. 数値積分 II Richardson 補外 7. 常微分方程式の解法 I Euler 法 8. 常微分方程式の解法 II 修正 Euler 法 9. 常微分方程式の解法 III Runge-Kutta 法 10. 連立一次方程式の解法 I LU 分解 11. 連立一次方程式の解法 II 3 重対角行列, 対称行列の LU 分解 12. 連立一次方程式の解法 III ピボットの部分選択 13. 最小 2 乗法 QR 分解, Householder 変換 14. 最小 2 乗法 QR 分解, システム同定への応用 15. 行列の固有値問題 Hessenberg 形, 原点移動, 減次 16. 予備日

【成績評価】 毎回の講義ごとに提出されるレポート, および, 受講態度などにより評価する。レポート課題に関する注意事項を別に配布するので, それに基づいてレポートを作成する。すべてのレポートを提出し, かつ, 合格点に達したものに限り単位が与えられる。定期試験は行わない。

【教科書】 特に指定しない。

【参考書】 篠原能材「数値解析の基礎」日新出版, 伊理正夫・藤野和建「数値計算の常識」共立出版, 森正武「数値計算プログラミング」岩波書店

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 池田(C403, 656-7504, ikeda@is.tokushima-u.ac.jp)

数値計画法

Mathematical Programming 助教授・池田 建司 2 単位

【授業目的】 本講義は 2 つの部分からなる。前半は線形計画法であり, その理論と計算法について解説する。後半では, ネットワーク上の最適化を論じる。基礎理論を厳密に展開し, 理解させることを目的としているが, 同時に, 理解をより容易にするため, 理論の意味を幾何学的に把握できるように配慮している。また, 例題を取り上げ, 演習を実施している。

【授業概要】 線形計画法とネットワーク最適化について講義している。線形計画法では, その定式化の方法, シンプレックス解法を中心とした計算法, シンプレックス法の有効性を保証する基本定理, 理論的背景で

知能情報工学科(夜間主コース)

あり、かつ線形計画法の幾何学的解釈を示している。双対定理とファークスの補題などについて述べる。ネットワーク最適化では、代表的な問題として、最短経路問題、最小木問題、最大流問題を扱う。

【受講要件】必要な予備的知識は講義の中で一応述べるが、線形代数の知識(ベクトルの一次独立性、行列の階数)をもっていることが望ましい。

【到達目標】数値モデルにもとづくシステマティックな解析・設計能力を養い、最適化理論やシステム工学といった学問体系の基礎となす。

【授業計画】1. 線形計画法の導入 2. 図的解法から代数的解法へ 3. 線形代数の復習 4. 線形計画法の基本定理 5. シンプレックス法 6. 2段階法 7. 行列表現と改訂シンプレックス法 8. 双対問題、双対定理、ファークスの補題 9. グラフ理論の復習 10. 最短経路問題(Dijkstra法) 11. 最小木問題(Kruskal法) 12. 最小木問題(Prim法) 13. 最大流・最小カット問題 14. 最大マッチング・最小カパー定理 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】毎回行う小テストの結果と定期試験の結果を総合して評価する。

【教科書】特に指定しない。配布資料とスライドによって講義を進める。

【参考書】馬場則夫・坂和正敬著「数値計画法入門」共立出版、今野浩「線形計画法」日科技連

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】池田(C403, 656-7504, ikeda@is.tokushima-u.ac.jp)

図形処理工学

Computer Graphics and Computer Aided Drawing

講師・最上 義夫 2単位

【授業目的】コンピュータでの図形処理のための基礎技術について講義し、各自に図形処理プログラムを作成させることによって、コンピュータによる図形処理の基礎を習得させる。

【授業概要】コンピュータへの図形の入力法、内部処理法、および表示法について講述するとともに、講義と並行的に演習問題を与える。この演習問題を順に完成させることによって、多面体の透視およびその隠線処理プログラムを各自が完成させることが出来る。以上によって、コンピュータによる2次元および3次元図形処理の基礎を習得させる。

【受講要件】「コンピュータ入門1,2」の履修を前提として講義を行う。

【履修上の注意】講義の単元が終了することに演習を課すが、それらを組み合わせることによって所定の処理プログラムが完成されるので、すべての演習を必ず行うこと。

【到達目標】図形処理の基礎理論とそれに基づく図形処理技術を習得させることによって、図形処理関連のソフトウェア開発を行う能力を育成する。

【授業計画】1. 図形処理とは。サンプルプログラム。2. X-Window 3. 形状表現のモデル 4. 多面体の生成 5. アフィン変換(拡大、縮小、平行移動、剪断) 6. アフィン変換(回転) 7. 透視投影 8. 透視変換 9. 法線ベクトル 10. 面の可視性(2次元) 11. 面の可視性(3次元) 12. 稜線の種別と輪郭線 13. 多面体の凹凸判定 14. 多面体の隠線処理 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】各自が提出した演習問題のレポートの提出状況と内容、最終的な処理プログラムとその処理結果の提出状況と内容、講義への参加状況、および、定期試験の成績を総合して行う。

【教科書】特に指定しない。適宜資料を配布する。

【参考書】木下凌一・林秀幸著「X-Window Ver. 11 プログラミング 第2版」日刊工業新聞社(この参考書は必須である)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】最上(C404, 656-7505, moga@is.tokushima-u.ac.jp)

生産管理

Production Control

非常勤講師・井原 康雄 1単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為の人をどのように動かしているかを理解する。

【授業概要】講義計画に従い労務管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 企業経営は経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で生産技術のキーとなる事項について講義する。2. 生産管理の目的(CS, 品質, 納期, 原価) 3. 生産計画 4. 購買(調達) 5. 生産システム 6. レポート 7. 在庫管理 8. 進捗管理 9. 改善活動 10. その他トピックス 11. レポート

【成績評価】出席率、レポートの内容

【教科書】その都度提供する。

【参考書】市販の生産管理に関する書籍

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】井原(0884-22-0502)

線形システム工学

Linear System Engineering

教授・大恵 俊一郎 2単位

【授業目的】物理システムの解析及び構築技術に不可欠な線形システム解析技術の基本的な考え方を理解させる。

【授業概要】本講義の前半では、線形システムの基礎的な自動制御を例にとり、制御理論を展開する上で重要な役割をはたすラプラス変換、ラプラス逆変換、微分方程式のラプラス変換による解法、伝達関数、ブロック線図などの基本概念を述べる。後半では制御系のステップ応答や周波数応答に関する解析手法、制御系の安定性の概念、安定性判別法、および制御系の設計手法の基礎についても触れる。なお、講義を聴講するだけでは理解の難しいと思われる項目については、教科書の例題を中心に演習を行う。

【受講要件】微分方程式1, 微分方程式2, 力学系の通論, 電気回路及び演習を履修することが望ましい。

【履修上の注意】本講義は「デジタルシステム工学」の履修の前提となるものであり、十分に修得しておくことが望ましい。

【到達目標】物理システムの解析及び構築に不可欠な技術である線形システム解析の基本的な手法を理解し、応用力をつける。

【授業計画】1. 制御の目的と定義、フィードバック制御の概念 2. ラプラス変換の必要性、定義とその性質 微分方程式の解法 3. 演習、小試験 4. 伝達関数の定義、各次おくれ要素の例とその過渡応答 5. 演習、小試験 6. ブロック線図の構成単位と結合、等価変換、ブロック線図の作成 7. 演習、小試験 8. 周波数応答の定義、表現形式 9. 閉ループ系の周波数応答の求め方 10. 演習、小試験 11. 安定性の定義とその必要十分条件 12. 安定性の代数的判別法 13. 安定余裕 14. 演習、小試験 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】期間中に4回小試験を行い、さらに定期試験も行って、総合的に評価する。

【教科書】添田喬・中溝高好著「自動制御の講義と演習」日新出版

【参考書】示村悦二郎著「自動制御とは何か」コロナ社

【連絡先】大恵俊一郎, 知能情報工学科204号室, 088-656-7500, oe@is.tokushima-u.ac.jp

【備考】平常点を小試験で評価し、その点と定期試験の比率は、4対6にする。

専門外国語

Foreign Language for Information Science

非常勤講師・ニムチャック アーレン 2単位

【授業目的】本講義では、英語によるコミュニケーションの能力を修得させること、特に low-Intermediate レベルの学生の能力を intermediate レベルに向上させることを目指す。

【授業概要】本講義では、英語によるコミュニケーションの能力を修得させること、特に low-Intermediate レベルの学生の能力を intermediate レベルに向上させることを目指す。

【受講要件】特になし

【到達目標】国際的に通用するコミュニケーション能力の基礎を育成する。

【授業計画】1. introductions 2. airport check-in 3. classroom english 4. travel requests 5. past tense verbs 6. exchanging money 7. comparative forms 8. describing people 9. time 10. hotel check-in 11. prepositions of place 12. hotel requests 13. likes/dislikes 14. stolen goods 15. gifts-suggestions 16. bus/train 17. future plans 18. theatre tickets 19. frequency adverbs 20. polite questions 21. tag questions 22. directions 23. fast food 24. ailments 25. jobs 26. help 27. food-countables 28. restaurant english 29. instructions 30. gestures

【成績評価】受講姿勢および期末試験を総合して評価する。

【教科書】'Practical English' by Arlen Nimchuk

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】受講姿勢および期末試験をそれぞれ 50:50 で評価し総合成績とする。

ソフトウェア設計及び実習1

Software design and practice 1

助教授・獅々堀 正幹, 緒方 広明

講師・毛利 公美, 泓田 正雄, 助手・柘植 覚, 伊藤 拓也

助手・森田 和宏, 光原 弘幸 3単位

【授業目的】大規模ソフトウェアの作成を通じ、総合的能力(問題設定、問題分析、問題解決、能動的学習、グループワーク、コミュニケーション技術)および専門的能力(ツール運用、分析/設計、コーディング、デバッグ手法)を短期間のうちに習得することを目的としている。

【授業概要】最初にレポート作成技術を学んだ後、Makefileの作成法、ライブラリ化、デバックツールの使用法等、プログラミング手法の基礎的課題に個人単位で取り組む。その後、グループ課題として、ロボカップ・サッカーシミュレーターの作成を行う。グループ開発を行う前に、エージェントの基本動作を個人単位で習得した後、戦略性を持ったエージェントをグループ単位で開発し、最終的に試合コンテストを行う。

【受講要件】コンピューター入門 1,2, データ構造とアルゴリズム 1,2 の履修を前提にして実験を行う。

【到達目標】

1. 抽象的な問題を具体的な問題に分析し、方針を決め、適切な手法をとり、粘り強く問題を解決する能力を育成する。
2. チームで協力しあって企画、スケジューリング、設計、製作、評価、保守などの各プロセスを期限内で遂行する能力を育成する。
3. 成果を口頭または文書により明確かつ論理的に表現でき、プレゼンテーションによって双方向コミュニケーションを行える能力を育成する。

【授業計画】1. ソフトウェアガイダンス 2. テクニカルライティング 3. プログラミング手法 1(プログラム作法) 4. プログラミング手法 2(ライブラリ化) 5. プログラミング手法 3(デバックツール) 6. ネットワーク・プログラミング 7. サッカーシミュレーターの全体説明 8. エージェントの基本動作 1 9. エージェントの基本動作 2 10. エージェントの基本動作 3 11. エージェントの基本動作 4 12. エージェント・プログラムの開発 13. エージェント・プログラムの開発 14. 試合コンテスト 15. 戦術プレゼンテーション 16. 予備日

【成績評価】基礎課題レポート、プレゼンテーション(発表)、総合課題レポートを総合して評価する。

【教科書】各実習毎に指定される。

【参考書】各実習毎に指定される。

【連絡先】緒方(C507, 656-7498, ogata@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】無断欠席および遅刻、期限後の報告提出は一切認められていない。また、ソフトウェア設計及び実習 1 未習得者は、ソフトウェア設計及び実習 2 を受講することはできず、通年科目として扱う。全ての実習と発表をおこない、全てのレポートを提出することが義務づけられている。その上で、基礎課題レポート、プレゼンテーション(発表)、総合課題レポートを、5 対 2 対 3 の比率で評価する。但し、この比率は変更されることがある。

ソフトウェア設計及び実習 2

Software design and practice 2 助教授・獅々堀 正幹, 緒方 広明
講師・毛利 公美, 泓田 正雄, 助手・柘植 覚, 伊藤 拓也
助手・森田 和宏, 光原 弘幸 3 単位

【授業目的】大規模ソフトウェアの作成を通じ、総合的能力(問題設定、問題分析、問題解決、能動的学習、グループワーク、コミュニケーション技術)および専門的能力(ツール運用、分析/設計、コーディング、デバッグ手法)を短期間のうちに習得することを目的としている。

【授業概要】最初に基礎課題として、ユーザー・インターフェイス、ネットワーク・プログラミング、統合・モジュール化手法を個人単位で取り組む。その後、企画立案ならびにプレゼンテーション技術を学んだ後、メタな課題(例えば、GUI を用いたネットワークプログラミングによる対戦型ゲームの作成)に対して、グループ単位で企画、立案、ソフトウェア開発を行い、最終的にコンテストを行う。個人課題に対しては、レポート提出が毎週義務づけられる。

【受講要件】コンピューター入門 1,2, データ構造とアルゴリズム 1,2 の履修を前提にして実験を行う。

【到達目標】

1. 抽象的な問題を具体的な問題に分析し、方針を決め、適切な手法をとり、粘り強く問題を解決する能力を育成する。
2. チームで協力しあって企画、スケジューリング、設計、製作、評価、保守などの各プロセスを期限内で遂行する能力を育成する。
3. 成果を口頭または文書により明確かつ論理的に表現でき、プレゼンテーションによって双方向コミュニケーションを行える能力を育成する。

【授業計画】1. ユーザー インターフェイス 1 2. ユーザー インターフェイス 2 3. ネットワーク プログラミング 2 4. 統合 モジュール化 5. プレゼン指導、企画の仕方、最終課題説明 6. 企画プレゼンテーション 7. 最終課題のソフト開発 8. 最終課題のソフト開発 9. 最終課題のソフト

開発 10. 最終課題のソフト開発 11. 最終課題のソフト開発 12. 最終課題のソフト開発 13. 最終課題のソフト開発 14. 最終プレゼンテーション 15. コンテスト 16. 予備日

【成績評価】基礎課題レポート、プレゼンテーション(発表)、総合課題レポートを総合して評価する。

【教科書】各実習毎に指定される。

【参考書】各実習毎に指定される。

【連絡先】緒方(C507, 656-7498, ogata@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】無断欠席および遅刻、期限後の報告提出は一切認められていない。また、ソフトウェア設計及び実習 1 未習得者は、ソフトウェア設計及び実習 2 を受講することはできず、通年科目として扱う。全ての実習と発表をおこない、全てのレポートを提出することが義務づけられている。その上で、基礎課題レポート、プレゼンテーション(発表)、総合課題レポートを、5 対 2 対 3 の比率で評価する。但し、この比率は変更されることがある。

ソフトコンピューティング 1

Soft Computing 1 助教授・小野 功 2 単位

【授業目的】ソフトコンピューティングの概要とその限界を理解するとともに、主要なソフトコンピューティング技術を幅広く習得することを目的とする。

【授業概要】ソフトコンピューティング技術を幅広く取り上げ、トピック形式で解説する。講義で取り上げる全ての要素技術は、情報処理技術者として精通しておくことが望ましいと考えられるものである。

【受講要件】「人工知能 1」および「人工知能 2」を受講していることが望ましい

【到達目標】

1. ソフトコンピューティングの要素技術であるファジィシステム、概念学習、ニューラルネット、強化学習、近似最適化手法、進化計算の枠組みと特徴を理解する
2. 要素技術を応用して問題解決の方法を考えることができる

【授業計画】1. ソフトコンピューティング 1 概論 2. ファジィシステム (I):ファジィ基礎 3. ファジィシステム (II):ファジィ応用 4. 概念学習 (I):例による学習 5. 概念学習 (II):観察による学習 6. ニューラルネット:階層型ネットの学習 7. 強化学習 (I):環境同定型強化学習 8. 強化学習 (II):経験強化型強化学習 9. 最適化 (I):山登り法、シミュレートッド・アニーリング 10. 最適化 (II):タブーサーチ 11. 進化計算 (I):基礎、組合せ最適化 12. 進化計算 (II):関数最適化、多目的最適化 13. 進化計算 (III):応用事例 14. 要素技術の融合 (I):基本的考え方 15. 要素技術の融合 (II):応用事例 16. 予備日

【成績評価】講義に対する理解の評価は、講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況および内容を総合して行う。本講義では、期末試験を行う代わりに期末レポートを課す。成績評価に対する平常点および期末レポートの比率は 3:7 とする。

【教科書】使用する資料は、講義中に配布する。

【参考書】廣田 薫「知識工学概論」昭晃堂

【備考】人工知能に関する基礎的な知識を持っていることが望ましい。

ソフトコンピューティング 2

Soft Computing 2 助教授・福見 稔 2 単位

【授業目的】ソフトコンピューティングはニューロ、ファジィ、進化手法を含む計算論の総称であり、扱い易さ、頑健性、低コストを達成する方法論である。これらは従来のいわゆるハードコンピューティングには無かった不精密性と不確実性に対する許容範囲を利用したものである。本講義ではこれらの基礎的事項の修得と生物型情報処理の特徴、および実問題への応用方法を修得することを目的とする。特に、ニューロ情報処理と従来型情報処理との違いを理解することが重要である。

【授業概要】1980 年代の大規模集積回路技術の発展に支えられて、ソフトコンピューティング技術が飛躍的に発展してきた。また、これらの技術(ファジィ、ニューロ、進化的アルゴリズムなど)は実社会の様々な分野で幅広く利用されつつある。講義では、ソフトコンピューティング技術の背景と基礎、これらの技術の基礎から実問題への応用に至る幅広い事柄について学ぶ。また、演習課題を通して基礎と応用の能力を養う。

【受講要件】ソフトコンピューティング I を受講しておくことが望ましい。

【履修上の注意】講義の単元が終わるごとに演習問題やレポートを課し、数回の小テストを実施するので、毎回の予習・復習は欠かさず行うこと。

【到達目標】ニューロ情報処理と従来型情報処理との違いを理解することが重要である。また、対象の数理的なモデル化、抽象化などの訓練によって、システムティックな解析・設計ができる能力を育成する。

【授業計画】1. ソフトコンピューティングの方法論, 生物型情報処理の基礎, 何故脳研究か? 2. 脳研究の歴史と背景, 脳の構造と機能, ニューロン 3. 視覚システム, 人工的ニューラルネットワーク, 人工的モデル 4. ニューラルネットワークの分類, 動作・レポート 5. 多層構造モデル, 学習 6. 適応フィルタ, 適応アルゴリズム・小テスト 7. 信号処理への応用, デジタルフィルタ 8. 誤差逆伝播法, 改良型アルゴリズム・レポート 9. ART, 競合学習モデル・レポート 10. ADALINE モデル, 信号処理: パターン認識への応用 11. Hopfield モデルと応用, 他のモデルと応用・小テスト 12. ソフトコンピューティングの他の方法論 13. ソフトコンピューティングの他の方法論 2: レポート 14. ソフトコンピューティングの最近の発展 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況, 演習の回答, レポートの提出状況と内容, 小テストと最終試験の成績を総合して行う. 平常点と試験の比率は 50:50 とする.

【教科書】特に無し. 必要な資料は配付する.

【参考書】講義中に指定する.

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】福見(D棟210, 656-7510, fukumi@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】ソフトコンピューティング 1 を受講しておくことが望ましい.

デジタルシステム工学

Digital Signal System

助教授・寺田 賢治 2 単位

【授業目的】最近のコンピュータの性能の躍進にみられるように, デジタル技術の発達が目覚ましい. 本講義では, デジタル技術を支えるデジタル信号処理と, その処理を行なうデジタル信号処理システムに関する知識を修得する.

【授業概要】デジタル信号の概念, AD 変換やサンプリング定理などのアナログとデジタルの関係, 高速フーリエ変換のようなデジタル信号処理, Z 変換やフィルタ処理などのデジタル信号システム, などに關して, 演習やレポートを取り混ぜながら講義をすすめていく.

【到達目標】

1. システム工学の基礎知識を, 講義と実習を通じて身に付ける.
2. 基礎的な学力と, それを各問題に応用できる能力を身に付ける.

【授業計画】1. デジタル信号処理の概念 2. AD/DA 変換 3. サンプリング定理 4. フーリエ級数展開 5. 離散フーリエ変換 6. 高速フーリエ変換 7. 中間試験 8. デジタル信号処理システムの概念 9. たたみ込み積分によるシステム解析 10. z 変換によるシステム解析 11. フィルタ 12. デジタルデータの解析 13. 離散コサイン変換 14. 静止画像圧縮技術 15. 動画画像圧縮技術 16. 定期試験

【成績評価】授業態度, 小テスト, 中間テストと, 期末テストにより決定される.

【教科書】貴家 仁志 著「デジタル信号処理」昭晃堂

【参考書】浜田望 著「よくわかる信号処理」オーム社, 森下 巖 著「わかりやすいデジタル信号処理」昭晃堂, 兼田 譲 著「デジタル信号処理の基礎」森北出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】寺田(C203, 656-7499, terada@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】再試は一切やらない.

データ構造とアルゴリズム 1

Data Structures and Algorithms 1

講師・泓田 正雄 2 単位

【授業目的】ソフトウェア作法の基礎として, 基本的データ構造と実装方法を講義し, 基本的アルゴリズムの演習を通じて, アルゴリズムの基本手法を修得させる.

【授業概要】本講義では, 基本的なデータ構造 (配列, リスト, 木) の実装方法を修得させる. その後, 中間試験を挟み, 基本的なデータ構造を用いた各種探索手法, ソート法について講述する. 本講義では, 各種アルゴリズムの内容を説明するだけでなく, それらの特徴 (長所短所) を理解させ, 適用分野に応じたアルゴリズムを選択・設計できる力を養成する.

【受講要件】「コンピュータ入門 1, 2」の履修を前提にして講義を行う.

【到達目標】種々のプログラミング言語に共通の構造化などの概念を習得させ, ソフトウェア開発を行う能力を育成する.

【授業計画】1. アルゴリズムとは? 2. 配列構造と片方向リスト構造 (検索) 3. 片方向リスト構造 (追加・削除) 4. 双方向リスト構造 (検索・追加・削除) 5. スタックとキュー 6. スタックと算術式 7. 木構造 (木の種類・走査・実現方法) 8. 中間試験 9. 2 分探索法 (検索アルゴリズム) 10. 2 分木探索法 (データ構造・検索アルゴリズム) 11. 多分木探索法

(データ構造・検索アルゴリズム) 12. ハッシュ法 (検索アルゴリズム・衝突回避法) 13. ソート法 (バブルソート・選択法) 14. ソート法 (マージソート・クイックソート) 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】成績の評価は, 中間試験と定期試験の得点だけでなく, 平常点も加味する. 平常点には, 講義内での発表回数, 演習レポートの提出回数, 及び受講姿勢などを含む.

【教科書】近藤嘉雪 著「C プログラマのためのアルゴリズムとデータ構造」ソフトバンク

【参考書】河西朝雄 著「C 言語によるはじめてのアルゴリズム入門」技術評論社

【連絡先】泓田(Dr.棟603, 656-7564, fuketa@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】口頭質問に答えられないと, 減点を行うので, 予習・復習を欠かさずに行うこと.

データ構造とアルゴリズム 2

Data Structures and Algorithms 2

教授・青江 順一 2 単位

【授業目的】ソフトウェア作法の基礎として, 基本的データ構造と実装方法を 実際に演習で作成・移動させることで, アルゴリズムの基本手法の理解を深める.

【授業概要】基本データ構造 (配列, リスト, スタックとキュー, 木) の演習課題とその模範解答により, 探索, ソートアルゴリズムへ拡張できる基礎力の養成を図る.

【受講要件】「コンピュータ入門 1, 2」「データ構造とアルゴリズム 1」の履修を前提にして講義を行う.

【到達目標】種々のプログラミング言語に共通の構造化などの概念を習得させ, ソフトウェア開発を行う能力を育成する.

【授業計画】1. C 言語の基礎 1: 演習 2. C 言語の基礎 2: 演習 3. C 言語の基礎 3: 演習 4. リスト構造探索・演習 5. リスト構造更新・演習 6. スタックとキュー・演習 7. スタックと算術式・演習 8. 中間試験 9. 木の辿り方・演習 10. 2 分探索・演習 11. 2 分探索木・演習 12. ハッシュ法の探索・演習 13. ハッシュ法の更新・演習 14. ソート法・演習 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は, 演習の回答, レポートの内容を平常点とし, それに中間と最終試験の成績を総合して行う. また, 演習では制限時間内でプログラムを作成する課題が突然与えられるので, 常に緊張した授業となる.

【教科書】配布するプリント, 近藤嘉雪 著「C プログラマのためのアルゴリズムとデータ構造」ソフトバンク

【参考書】河西朝雄 著「C 言語によるはじめてのアルゴリズム入門」技術評論社

【連絡先】青江(Dr.棟604, 656-7486, aoe@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】「データ構造とアルゴリズム 2」では, 1 年前期で学習した「コンピュータ入門 1, 2」の C 言語を利用して「データ構造とアルゴリズム 1」の内容が各自で設計・作成できる演習問題を十分に与える. 成績評価に対する成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする.

電気回路 1

Lecture in Electric Circuits 1

助教授・黒岩 眞吾 2 単位

【授業目的】コンピュータ, 通信ネットワーク, ロボットなどの情報システムを扱う情報技術者や研究者に必要な電気回路の基礎を, 講義, レポート, 部分テストを通して修得させる.

【授業概要】まず, 電圧, 電流の明確な概念を与えることから始め, 各素子の特性, 回路の諸定理, フィルタおよび共振回路設計など電気回路の基礎を講義する. なお, 実際の回路解析がコンピュータを利用して行われる工業界の現状に則し, 波形や周波数特性の可視化技術も習得させる.

【受講要件】線形代数学 I, II, 微分積分学 I, II (全学共通, 基礎数学) コンピュータ入門 1, 2 の修了および電磁気学の履修を前提とする.

【到達目標】

1. システムティックな解析・設計を行うための知識を身に付け, 現実世界を鑑みた統合・評価ができる能力を育成する
2. ハードウェアとソフトウェアの統合的なシステムに対し, その実態・問題点を分析し, 問題解決法の立案, 実行ができる能力を育成する.

【授業計画】1. 電気回路学概論および回路計算に使う数学 2. 電気の基礎・テスト 3. 直流と交流・レポート・テスト 4. 抵抗 (R) の回路・レポート・テスト 5. キャパシタンス (C) とインダクタンス (L)・テスト 6. LCR の一般回路・レポート 7. 回路の諸定理・レポート 8. 回路の諸定理・テスト 9. 電気波形と周波数成分・レポート 10. 電気波形と周波

数成分・テスト 11. CR 回路・レポート 12. CR 回路・テスト 13. 共振回路・レポート 14. 共振回路・テスト 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】定期試験、レポートおよび部分テストの結果にもとづいて成績を評価する。

【教科書】藤村安志 著「電気・電子回路計算演習」誠文堂新光社

【参考書】藤村安志 著「電気・電子回路入門」誠文堂新光社、小澤孝夫 著「電気回路を理解する」昭晃堂、その他

【備考】高校物理および要件としてあげた科目の習得を前提として講義を進めるので、各自がこれらの科目を十分復習することが重要。また、レポート課題は計算機を用いる場合があるので C 言語やグラフ作成ソフトが使いこなせるようにしておくこと。

電気回路 2

Lecture in Electric Circuits 2 助教授・黒岩 眞吾 2 単位

【授業目的】オーディオ・ビデオ・デジタル信号を扱う情報技術者や研究者に必要な電気回路の基礎を、講義、レポート、部分テストを通して修得させる。また、ロボットやオーディオ機器等、応用システムを扱うために必要な電気回路の応用技術に関する知識の習得を目標とする。

【授業概要】電気回路をデジタル信号処理システムの入力および出力機器としてとらえ、アナログ信号処理という観点から講義を進める。また、実際の回路解析がコンピュータを利用して行われる工業界の現状に則し、波形や周波数特性の可視化技術も習得させる。

【受講要件】線形代数 I, II, 微積分学 I, II (全学共通, 基礎数学) コンピュータ入門 1, 2, 電磁気学, 電気回路 1 の修了を前提とする。

【到達目標】

1. システマティックな解析・設計を行うための知識を身に付け、現実世界を鑑みた統合・評価ができる能力を育成する
2. ハードウェアとソフトウェアの統合的なシステムに対し、その実態・問題点を分析し、問題解決法の立案、実行ができる能力を育成する。

【授業計画】1. 電気回路の基礎と応用・小テスト 2. 電圧とデシベル・レポート 3. 音と電気信号・レポート 4. 電気部品 (抵抗)・レポート 5. 電気部品 (コンデンサ)・レポート 6. インピーダンス・レポート 7. インピーダンス・小テスト 8. 電源回路と電力・レポート 9. インピーダンスの実技応用・レポート 10. インピーダンスの実技応用・小テスト 11. フーリエ級数展開・レポート 12. フィルタ・レポート 13. フィルタ・小テスト 14. アンブ・レポート 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】定期試験、レポートおよび部分テストの結果にもとづいて成績を評価する。

【教科書】大塚明 著「サウンドクリエイターのための電気実用講座」洋泉社

【参考書】藤村安志 著「電気・電子回路計算演習」誠文堂新光社

【備考】電気回路 1 の履修を前提として講義を行う。各自がこれらの科目を復習することが大切。毎回の予習と復習も重要である。レポートと部分テストの成績の合計を平常点とし、定期試験の成績との比率を 5:5 とする。

電子回路

Electronic Circuits 教授・赤松 則男 2 単位

【授業目的】電子回路を構成するデバイスに関して物理的に解説し、電子回路の基本を習得する。

【授業概要】半導体デバイスとしてバイポーラトランジスタおよび電界効果トランジスタ (FET) を説明する。特に、使用頻度の高い MOS-FET, J-FET およびガリウム・ヒ素の MESFET の特性を詳細に解説する。これらの半導体デバイスを用いた電子回路を詳細に説明する。電子回路として増幅回路、発振回路、演算回路、論理回路などが含まれる。

【受講要件】電気回路および演習、物理学 (物性, 電磁気学, 力学, 熱力学, 光学, 量子力学), 数学 (微分方程式, 関数論, ベクトル, マトリックス, 統計学, 論理学) などの基礎学力を十分に備えていることが受講に際しての必要条件です。

【到達目標】エレクトロニクスおよびコンピュータのハードウェアとソフトウェアのバランスの良い思考ができるための基礎的な知識を習得し、これを数理的に展開し、構造的なシステムの設計ができ、これを表現することができる能力の獲得を到達目標とする。

【授業計画】1. 電子回路の基礎・レポート 2. 半導体デバイスの基礎 I (基本回路, 固有抵抗, 真性半導体, 不純物半導体) 3. 半導体デバイスの基礎 (キャリア, 電気伝導機構) 4. 半導体デバイスの基礎 (格子欠陥, PN 接合) 5. 半導体デバイスの基礎 (ダイオード) 小試験 6. バイポーラトランジスタ I (増幅作用, 動作原理) 7. バイポーラトランジスタ II (等

価回路) 8. バイポーラトランジスタ接地方法, 周波数特性) レポート 9. バイポーラトランジスタ (電流特性, 命名法) 10. 中間試験 11. 差動増幅回路 I (特性, 飽和特性) 12. 差動増幅回路 (特性の改善, 定電流源) レポート 13. 電界効果トランジスタ I (分類, 構造, 動作原理) 小試験 14. 電界効果トランジスタ II (特徴, 電気的特性) 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義中に行う中間試験および小試験と試験期間中に行う定期試験とレポートの結果を考慮し、受講姿勢にも配慮して成績を総合的に評価する。再試験は行う。

【教科書】赤松則男「エレクトロニクス回路」

【参考書】安藤和昭「パルス・デジタル回路」、斎藤忠夫「電子回路入門」

【備考】3 年生で学ぶ「集積回路工学」の基礎的知識を「電子回路」で習得する。従って後程に学ぶ科目を理解するためには習得する必要がある。成績評価に対する平常点と試験の比率は 4:6 とする。平常点には講義への参加状況、演習の回答及びレポートの提出状況と内容を含み、試験には小試験及び最終試験の成績を含む。

電磁気学

Electricity and Magnetism 教授・大野 隆 2 単位

【授業目的】現代のあらゆる科学技術の基礎である電磁気学を、その基礎的内容を重視して講述する。電気学に主きを置く。

【授業概要】下記講義計画に従い、電磁気学で必須のベクトル解析の基礎を解説し、クーロンの法則、ガウスの法則、静電誘導、微分形による法則の表示、静電エネルギー、オームの法則を講義する。

【到達目標】

1. 電気・磁気概念を復習し、より深く理解する
2. ベクトル解析を理解する
3. 数式で電磁気現象を正確に記述する

【授業計画】1. ベクトル解析 2. クーロンの法則 3. ガウスの法則 4. 導体と電位 5. 誘電体, 中間テスト 6. コンデンサー 7. 電界の発散 8. ラプラスの方程式 9. 電界のエネルギー 10. オームの法則 11. 電気回路 1 12. ジュール熱 13. 電気回路 2 14. 磁界と磁気モーメント 15. 予備日 16. 定期テスト

【成績評価】講義への出席状況、演習の回答、レポート評価、試験の成績を総合して評価する。

【教科書】近角聡信 著「基礎電磁気学」倍風館

【参考書】適時紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大野 (A棟201, 656-7549, ohno@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】意欲的に勉強すること。成績評価に対する [平常点] と [期末試験の成績] の割合は 3:7 とする。

特別研究

Study on Information Science and Intelligent Systems 知能情報工学科全教官 6 単位

【授業目的】新しい問題について自分で資料を収集し、読解してその事柄を理解し、社会に出てから自分の力で問題を把握する能力を養う。また自分の考えを正しく伝えるための文章の書き方を身に付ける。

【授業概要】定期的に課題の調査事項を指導教官に報告し、指導を受ける。

【到達目標】

1. 研究課題に関する専門知識を修得する。
2. 実践的な情報収集・活用能力, 問題設定能力, 問題解決能力およびコミュニケーション能力を養う。

【授業計画】1. 特別研究受講資格者の選考:3 月中旬に次年度の特別研究受講資格者を選考し、該当するものの名前を知能情報工学科玄関の掲示板に掲示する。ただし、3 月末までに特別研究受講要件を満たした学生については 4 月に入ってから特別研究受講資格者となる可能性もある。疑義のある学生は直ちに学科長に申し出ること。2. 課題の決定:3 月中旬に研究課題を掲示し説明を行う。学生は希望する課題を選んで申し出るが、一つの課題に集中しないように学科長が調整することがある。3. 研究の実施:指導教官, 大学院生の指導で関連する専門書や論文を読み、課題に関する調査を行う。

【成績評価】2 月末に調査結果をまとめた報告書を提出し、審査を受けると共にその内容について諮問を行い、その結果を総合して評価する。

【教科書】課題によっては指導教官より指定される場合がある。

【参考書】一部は指導教官より提示されるが、大部分は自分で探す必要がある。これも特別研究の課題の一部である。

【備考】特別研究を受講するためには、知能情報工学科夜間主コース特別研究受講要件に指定する単位をすべて修得していなければならない。指導教官の研究室に始終出入りし、大学院生などと交流して知識を集めるように努めることを勧める。期末試験は行わない。

バイオ・インフォマティクス

Bioinformatics

助教授・小野 功 2 単位

【授業目的】バイオインフォマティクスとは何かについて理解するとともに、主なバイオインフォマティクス技術について幅広く習得することを目的とする。

【授業概要】遺伝子の生命の設計図としての位置付け、およびゲノム解析プロジェクトの概況について紹介した後、バイオインフォマティクスの分野で精力的に研究されている遺伝子発見、遺伝子の機能予測、タンパク質の立体構造予測、遺伝子ネットワークを中心に紹介する。

【受講要件】「人工知能 1, 2」および「ソフトウェア工学 1, 2」を受講していることが望ましい

【到達目標】

1. バイオインフォマティクスの理解に必要な分子生物学の基礎を理解する
2. 遺伝子発見手法、遺伝子機能予測、蛋白質立体構造予測、遺伝子ネットワークなどのバイオインフォマティクスにおける代表的なトピックについて理解する

【授業計画】1. バイオインフォマティクス概論 2. 生命の設計図 (I) 3. 生命の設計図 (II) 4. ゲノム解析プロジェクト (I) 5. ゲノム解析プロジェクト (II) 6. 遺伝子発見 (I) 7. 遺伝子発見 (II) 8. 遺伝子の機能予測 (I) 9. 遺伝子の機能予測 (II) 10. 遺伝子の機能予測 (III) 11. タンパク質の立体構造予測 (I) 12. タンパク質の立体構造予測 (II) 13. タンパク質の立体構造予測 (III) 14. 遺伝子ネットワーク (I) 15. 遺伝子ネットワーク (II) 16. 予備日

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況および内容を総合して行う。講義に対する理解力の評価は、講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況および内容を総合して行う。

【教科書】使用する資料は、講義中に配布する。

【参考書】小長谷昭彦・遺伝子とコンピュータ - 生命の設計図をひもとく -, 共立出版株式会社, T.A Brown (松村正賢 監訳) ゲノム, メディカル・サイエンス・インターナショナル

【備考】本講義では、期末試験を行う代わりに期末レポートを課す。成績評価に対する平常点と期末レポートの比率は 3:7 とする。平常点は、講義への参加状況、演習の回答および小レポートの提出状況と内容を含む。

微分方程式 1

Differential Equations (I)

教授・長町 重昭, 助手・坂口 秀雄 2 単位

【授業目的】微分方程式の解法を修得し、さらに工学の諸分野に現われる微分方程式の解法に応用できるようにする。

【授業概要】微分方程式の理論は数理工学的な現象の解析に有力な手段を与え、現代工学の基礎として重要な役割を果たしている。その広範な理論の入門段階として、この講義では微分方程式の具体的な解法を中心に講義する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをきちんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 簡単な求積法が理解できる。
2. 2 階の定数係数線形常微分方程式が解ける。

【授業計画】1. 変数分離形 2. 同次形 3. 一階線形微分方程式 4. 完全微分形 5. クレーローの微分方程式とラグランジュの微分方程式 6. 高階常微分方程式 7. 2 階線形同次微分方程式 (i) 8. 2 階線形同次微分方程式 (ii) 9. 非同次微分方程式 10. 記号解法 11. 簡便法 12. 級数解法 13. 通常点における級数解法 14. 確定特異点まわりの級数解法 15. 期末試験

【成績評価】講義への取組み状況、レポートの提出状況・内容等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】坂口(建設棟2階221)

微分方程式 2

Differential Equations (II)

教授・今井 仁司, 助手・坂口 秀雄 2 単位

【授業目的】連立常微分方程式の安定性と簡単な偏微分方程式の解法を修得し、より実際の工学的な問題の解法に応用できるようにする。

【授業概要】「微分方程式 1」に続いて現代工学すべての基礎として重要な役割を果たしている連立常微分方程式系の基本的な解法を講義する。さらに、簡単な偏微分方程式の解法についても講義する。

【受講要件】「微分方程式 1」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをきちんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 簡単な定数係数連立線形常微分方程式が解ける。
2. ラプラス変換とその応用ができる。

【授業計画】1. 定数係数連立線形常微分方程式 2. 高階微分方程式と連立微分方程式 3. 連立線形微分方程式 4. 自励系と強制系 5. 2 次元自励系の危点 6. 2 次元自励系の安定性 7. ラプラス変換の性質 8. 逆ラプラス変換 9. ラプラス変換の応用例 10. 1 階偏微分方程式 11. ラグランジュの偏微分方程式 12. 2 階線形偏微分方程式 13. 定数係数 2 階線形偏微分方程式 (i) 14. 定数係数 2 階線形偏微分方程式 (ii) 15. 期末試験

【成績評価】講義への取組み状況、レポートの提出状況・内容等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】坂口(建設棟2階221)

複素関数論

Complex Analysis

助教授・香田 温人 2 単位

【授業目的】複素関数論への入門講義として、複素変数関数の微分積分学を修得させる。

【授業概要】微積分で扱う対象を複素変数関数の関数にまで広げ、正則関数および有理型関数の理論を展開することにより、実数の世界では困難であったある種の積分計算が複素数の立場からみると簡潔に処理されることを述べる。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】時間数の制約から、複素関数の計算を修得するための必要最小限の議論を行なうので、講義内容のすべてを吸収することが理解への早道である。日頃から予習・復習の計画を立てて勉学に勤しんでもらいたい。

【到達目標】

1. 複素微分、正則関数の概要が理解できる。
2. 留数概念の理解とその応用ができる。

【授業計画】1. 複素数 2. 複素平面、オイラーの式 3. 複素数列、複素級数 4. 複素変数の関数 5. 複素微分、コーシー・リーマンの関係式 6. 正則関数 7. 複素積分 8. コーシーの積分定理 9. コーシーの積分公式 10. テイラー展開 11. ローラン展開 12. 留数とその応用 13. 定積分の計算 14. 定積分の計算 2 15. 期末試験

【成績評価】試験 80% (期末試験) 平常点 20% (出席状況、演習の回答等) とし、全体で 60% 以上で合格とする。

【教科書】阪井章『複素解析入門』新曜社

【参考書】辻正次・小松勇作『大学演習・関数論』裳華房、田村二郎『解析関数 (新版)』裳華房、吉田洋一『函数論』岩波書店、神保道夫『複素関数入門』岩波書店、志賀啓成『複素解析学 I-II』培風館

【連絡先】香田(A211)

プログラミングシステム

Programming Systems

助教授・緒方 広明 2 単位

【授業目的】XML を用いた文章の表現手法やオブジェクト指向言語、高機能言語によるプログラミングを学ぶことにより、より高度なソフトウェア開発技術を修得させる。

【授業概要】本講義では XML を用いた文章表現のデザイン手法と、Java 言語を通してオブジェクト指向言語によるシステム開発技術を習得する。単に講義だけでなく、毎回講義の後に演習問題またはレポート課題を出題する。

- 【受講要件】「コンピュータ入門 1, 2」「データ構造とアルゴリズム 1, 2」「プログラミング方法論 1, 2」の履修を前提にして講義を行う。
- 【到達目標】構造化や抽象化などの種々のプログラミング言語に共通の概念や機能を習得することと、ソフトウェアの開発を行う能力の獲得を目標とする。
- 【授業計画】1. XML の位置付け 2. XML の基本構成 3. 基本的な XML インスタンスの作成 4. DTD を用いた文書の構造化 5. XML スキーマ 6. 中間試験 7. XLink と XPointer 8. XSL による文書表示 9. Java, DOM/SAX を用いたプログラミングの基本 10. Java, DOM/SAX を用いたプログラミング演習 11. XML の応用 (Web 教材, 電子カルテなど) 12. 半構造化文書のデザイン演習 13. 期末試験
- 【成績評価】成績の評価は、中間試験と定期試験の得点だけでなく、平常点も加味する。平常点には、講義内での発表回数、演習レポートの提出回数、及び受講姿勢などを含む。
- 【教科書】特に指定しない。ノートを中心に、適時資料を配付する。
- 【参考書】標準 XML 完全解説 (上)(下):中山 幹敏 (著), 奥井 康弘 (著) (2001 年) 技術評論社
- 【連絡先】緒方(C507, 656-7498, ogata@is.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】特になし。

プログラミング方法論 1

Programming Methodology 1 教授・下村 隆夫 2 単位

- 【授業目的】品質の高いソフトウェアを効率よく開発するためのプログラミング方法論について講義し、例題、課題を与えて演習を行い、プログラミングに必要な技術を修得させる。
- 【授業概要】オブジェクト指向、UML、例外、スレッド、イベント、GUI、ソケット通信等、インターネットプログラミングに必要な知識、技術について体系的に解説する。
- 【受講要件】「コンピュータ入門 1, 2」「データ構造とアルゴリズム 1, 2」を履修していることが望ましい。
- 【履修上の注意】「プログラミング方法論 2」と連携して講義および演習を進める。
- 【到達目標】プログラミング言語に共通の概念や機能を習得させることにより、ソフトウェア開発能力を育成する。
- 【授業計画】1. Java プログラムの構造 2. オブジェクト指向プログラミング 3. 入出力処理 4. 例外処理 5. スレッド 6. 排他制御 7. イベント処理 8. ネイティブ言語の呼び出し 9. GUI コンポーネント 10. レイアウト 11. ペイン 12. ダイアログ 13. グラフィックス 14. アニメーション 15. 予備日 16. 定期試験
- 【成績評価】授業への参加姿勢、毎回課すレポート、および、定期試験の成績を総合して行う。平常点と定期試験の比率は 3:7 とする。
- 【教科書】開講前に、掲示により教科書を指定する。
- 【参考書】下村隆夫著「Java によるインターネットプログラミング」近代科学社、下村隆夫著「上級プログラマへの道」コロナ社
- 【連絡先】下村(C402, 656-7503, simomura@is.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】Web ブラウザで必要な情報を参照しながらプログラムを作成し、レポートとしてまとめ、電子メールで提出してもらう。

プログラミング方法論 2

Programming Methodology 2 教授・下村 隆夫 2 単位

- 【授業目的】品質の高いソフトウェアを効率よく開発するためのプログラミング方法論について講義し、例題、課題を与えて演習を行い、プログラミングに必要な技術を修得させる。
- 【授業概要】XHTML、HTTP、アプレット、サーブレット、JSP、JDBC、SQL 等、Web プログラミングに必要な知識、技術について体系的に解説するとともに、ソフトウェア品質、デザイン・パターンについて講義する。
- 【受講要件】「コンピュータ入門 1, 2」「データ構造とアルゴリズム 1, 2」を履修していることが望ましい。
- 【履修上の注意】「プログラミング方法論 1」と連携して講義および演習を進める。
- 【到達目標】チームを組んでソフトウェアを創作しスライドを用いて発表することにより、ソフトウェア開発能力、および、プレゼンテーション能力を育成する。
- 【授業計画】1. ネットワークプログラミング 2. JavaBeans 3. シリアライズとリフレクション 4. XHTML 5. スタイルシート 6. アプレット 7. サーブレット 8. JavaServer Pages 9. セッション管理 10. オンラインショップの作成 11. Web チャットの作成 12. データベース操作とトラ

ンザクション処理 13. ソフトウェア品質とデザイン・パターン 14. 会議室予約システムの作成 15. 創作プログラムのプレゼンテーションおよび実演

- 【成績評価】授業への参加姿勢、毎回課すレポート、および、創作ソフトウェア、プレゼンテーションの成績を総合して行う。平常点と創作プログラムのプレゼンテーション・実演の成績の比率は 3:7 とする。
- 【教科書】開講前に、掲示により教科書を指定する。
- 【参考書】下村隆夫著「Java によるインターネットプログラミング」近代科学社、下村隆夫著「上級プログラマへの道」コロナ社
- 【連絡先】下村(C402, 656-7503, simomura@is.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】Web ブラウザで必要な情報を参照しながらプログラムを作成し、レポートとしてまとめ、電子メールで提出してもらう。

ベクトル解析

Vector Analysis 助教授・深貝 暢良 2 単位

- 【授業目的】工学の解析で必要不可欠なベクトルの概念と基礎的な性質を学ぶとともに、ベクトル場の解析学を通して古典力学、流体力学や電磁気学に現れる基本的な物理法則の数学的な理解・運用を目標とする。
- 【授業概要】三次元空間のベクトルで表される物理量の局所的変化(微分)と大局的效果(積分)を記述する手法としてベクトル場の微分積分学を展開し、微分積分学の基本定理のベクトル場に対する一般化を確立する。
- 【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。
- 【履修上の注意】予習と復習が必要です。平日頃より問題演習に取り組みましょう。
- 【到達目標】
1. ベクトル場の微分が理解できる。
 2. ベクトル場の積分が理解できる。
- 【授業計画】1. はじめに 2. ベクトル 3. 内積、外積 4. ベクトル関数、曲線 5. 曲面 6. スカラー場、ベクトル場、勾配 7. 回転、発散 8. 線積分 9. 重積分 10. 面積分 11. ストークスの定理 12. グリーンの定理 13. ガウスの発散定理 14. 積分定理の応用 15. 期末試験
- 【成績評価】講義への参加状況、期末試験の結果等を総合して行う。
- 【教科書】鶴丸孝司・久野昇司・渡辺敏・志賀野洋『ベクトル解析』内田老鶴園
- 【参考書】安達忠次『ベクトル解析』培風館、H.P. スウ『ベクトル解析』森北出版、鶴丸孝司・久野昇司・渡辺敏・志賀野洋『ベクトル解析演習』内田老鶴園、寺田文行・福田隆『演習と応用ベクトル解析』サイエンス社、青木利夫・川口俊一・高野清治『演習・ベクトル解析』培風館、山内正敏『詳説演習ベクトル解析』培風館
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】工学部数学教室

マイクロプロセッサ

Microprocessors 助教授・福見 稔 2 単位

- 【授業目的】マイクロプロセッサの基本的な動作原理とそのプログラミングについて習熟し、マイクロプロセッサを活用するために必要な知識を獲得することを目的とする。
- 【授業概要】4 ビットに始まり、現在までのマイクロプロセッサの開発の歴史を概観し、プロセッサ内部の情報表現と 2 進数での演算方法を理解した後、人類最初のマイクロプロセッサ i4004 のアーキテクチャを学ぶ。次いで、i8080 と Z80 のアーキテクチャを調べ、i8080 と Z80 の主要マシン命令を用いたアセンブラプログラミングの演習を行う。次に、16 ビットと 32 ビットのアーキテクチャを学ぶ。また、DSP の特徴や最近の高速化実装技術について学ぶ。
- 【受講要件】コンピュータ入門 1 及び 2 を受講しておくことが望ましい。
- 【到達目標】マイクロプロセッサの動作原理とアセンブラプログラミングについて修得し、ソフトウェアとハードウェアのバランスのよい学習を行うことを目標とする。
- 【授業計画】1. マイクロプロセッサ開発の歴史 2. マイクロプロセッサの構成と動作・レポート 3. プロセッサ内の情報表現、2 進数と 10 進数 4. 2 進数の加減乗除算・レポート 5. 4 ビットマイクロプロセッサ i4004 小テスト 6. 8 ビットマイクロプロセッサ i8080 7. 8 ビットマイクロプロセッサ Z80 8. i8080, Z80 のプログラミング実習 1・中間テスト 9. i8080, Z80 プログラミング実習 2・演習 1 提出 10. i8080, Z80 プログラミング実習 3・演習 2, 3 提出 11. DSP とその応用例・レポート 12. 16 ビットマイクロプロセッサ 13. 32 ビットマイクロプロセッサ 14. 高速化実装技術 15. 予備日 16. 定期試験

知能情報工学科(夜間主コース)

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容、各小テストと最終試験の成績を総合して行う。平常点と試験の比率は 50:50 である。

【教科書】田丸啓吉・安浦寛人 共著「マイクロコンピュータ」共立出版

【参考書】Donald L.Krutz 著・奥川峻史 訳「マイクロプロセッサと論理設計」実教出版、大川善邦 著「マイクロコンピュータプログラムの作り方」産報出版、楠菊信 著「マイクロプロセッサ」丸善

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】福見(D棟210, 656-7510, fukumi@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義の単元が終わるごとに演習問題やレポートを課し、数回の小テストを実施するので、毎回の予習・復習は欠かせず行うこと。

【成績評価】レポートの提出状況と内容、講義中の質問の回答も評点の対象となる。試験では以下の「持ち込み用紙」一枚を認める。1) 自筆で、コピーは不可 2) B5 サイズ、表裏記入可 3) 表裏に学年・出席番号・氏名を明記すること。「持ち込み用紙」は、講義及び教科書の内容を自分でまとめたものである。作成に際しては何色を使ってもよい。

【教科書】リブシュツツ 著・成嶋 弘 監訳「離散数学-コンピュータサイエンスの基礎数学-」オーム社

【参考書】C.L. リコー 著・成嶋 弘 他訳「-コンピュータサイエンスのための-離散数学入門」マグロウヒル社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】矢野(C棟511, 656-7495, yano@is.tokushima-u.ac.jp), 金西(marukin@cue.tokushima-u.ac.jp)

【備考】平常点と試験の点 = 30:70

離散数学とグラフ理論 1

Discrete Mathematics and Graph Theory 1 教授・矢野 米雄

助手・光原 弘幸 2 単位

【授業目的】計算機科学の基礎である離散数学とグラフ理論を工学的立場から講義し、演習・レポートを通して理論と情報処理手法を修得させ、離散的手法の理解と応用力を育成する。

【授業概要】離散数学は、微分・積分の数学と違い、離散系を扱う数学であり、素朴集合論より導入する。前提とする数学知識は、中学・高校で修得したもので充分である。しかし、従来と違った手法・方法論を学ぶためには、演習及び例題の解法が重要である。

【受講要件】特になし

【到達目標】計算機の基礎として離散数学とグラフの用語、概念、手法と応用力の習得を目標とする。

【授業計画】1. 集合 1(集合と要素, 普遍集合, 空集合, 部分集合) 2. 集合 2(ベン図, 集合演算) 3. 集合 3(集合の類, ベキ集合, 直積集合集合のまとめ) 4. 関係, 関係の幾何学的表現 5. 逆関係, 関係の合成, 関係の性質 6. 分割, 同値関係, 同値関係と分割 7. 半順序関係, n 項関係, 関係のまとめ 8. 1.~7. の演習問題と解法の説明 9. 関数, 関数のグラフ 10. 1 対 1 の関係, 上への関数 11. 逆関数, 添数付きの集合族 12. 基数と解法の説明, 関数のまとめ 13. 9.~12. の演習問題 14. 演習問題の解法の説明, 講義全体のまとめ 15. 予備 16. 定期試験

【成績評価】レポートの提出状況と内容、講義中の質問の回答も評点の対象となる。試験では以下の「持ち込み用紙」一枚を認める。1) 自筆で、コピーは不可 2) B5 サイズ、表裏記入可 3) 表裏に学年・出席番号・氏名を明記すること。「持ち込み用紙」は講義及び教科書の内容を自分でまとめたものである。作成に際しては何色を使ってもよい。

【教科書】リブシュツツ 著・成嶋 弘 監訳「離散数学-コンピュータサイエンスの基礎数学-」オーム社

【参考書】C.L. リコー 著・成嶋 弘 他訳「-コンピュータサイエンスのための-離散数学入門」マグロウヒル社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】矢野(C棟511, 656-7495, yano@is.tokushima-u.ac.jp), 光原(C棟502, 656-7497, mituhara@is.tokushima-u.ac.jp)

【備考】毎週レポート提出の課題が出るので、その週の内に復習しておくこと。「データ構造とアルゴリズム」「プログラミングシステム」の基礎となる内容であり、単位を落とし未消化に終わると後で苦労するので注意を要する。平常点と試験の点 = 30:70

労務管理

Personal Management 非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為にヒトをどのように動かしているかを理解する。

【授業概要】講義計画に従い労務管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 企業経営は、経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で人的資源をいかに活用しているかについて講義する。2. 組織と職務分掌 3. 配置と移動 4. 人事考課 5. レポート 6. 賃金 7. 能力開発 8. 安全衛生 9. 労使関係 10. その他 11. レポート

【成績評価】出席率、レポートの内容

【教科書】その都度、提供する。

【参考書】市販の労務管理に関する書籍

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

離散数学とグラフ理論 2

Discrete Mathematics and Graph Theory 2 教授・矢野 米雄

助教授・金西 計英 2 単位

【授業目的】計算機科学の基礎である離散数学とグラフ理論を工学的立場から講義し、演習・レポートを通して理論と情報処理手法を修得させ、離散的手法の理解と応用力を育成する。

【授業概要】離散数学は、微分・積分の数学と違い、離散系を扱う数学であり、素朴集合論より導入する。前提とする数学知識は、中学・高校で修得したもので充分である。しかし、従来と違った手法・方法論を学ぶためには、演習及び例題の解法が重要である。

【受講要件】特になし

【到達目標】計算機の基礎として離散数学とグラフの用語、概念、手法と応用力の習得を目標とする。

【授業計画】1. グラフと多重グラフ 2. 次数, 連結度 3. ケーニヒスベルグの橋, 周遊可能多重グラフ 4. 行列とグラフ 5. ラベル付グラフ 6. グラフの同形性 7. 地図, 領域, オイラーの公式 8. 1.~7. の演習問題と解法の説明 9. 非平面的グラフ, クラフトスキーの定理 10. 彩色グラフ, 四色定理 11. 木 12. 順序根付き木 13. 9.~12. の演習問題 14. 演習問題の解法の説明, 講義全体のまとめ 15. 予備 16. 定期試験

生物工学科

生物工学科（昼間コース）における教育理念およびそれを実現するカリキュラム編成	277
生物工学科（昼間コース）履修登録，進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定	279
生物工学科（昼間コース）カリキュラム表	281
生物工学科（昼間コース）教育課程表	282
生物工学科（昼間コース）教育分野別カリキュラム編成	285
生物工学科（昼間コース）講義概要	286
生物工学科（夜間主コース）における教育理念	312
生物工学科（夜間主コース）履修登録，進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定	312
生物工学科（夜間主コース）カリキュラム表	313
生物工学科（夜間主コース）教育課程表	314
生物工学科（夜間主コース）教育分野別カリキュラム編成	317
生物工学科（夜間主コース）講義概要	318

生物工学科（昼間コース）における教育理念およびそれを実現するカリキュラム編成

1. 教育理念・目的・目標

地球上には微生物から哺乳類に至る多種多様な生物が生活しているが、顕微鏡でないと見えないような細胞において高度に制御されたエネルギー産生、情報伝達、増殖を行うことができる。生物工学は、このような生物の優れた機能を解明し、その結果を科学的根拠に基づいて応用するための総合的技術体系であり、21世紀におけるエネルギー、食糧、環境、医療問題の解決に不可欠のテクノロジーである。本学科では、物理化学、有機化学、生化学、微生物学、分子生物学等の基礎知識を基盤として、最新のバイオテクノロジーの教育を行い、医薬品工業、食品工業、化学工業などバイオ産業において活躍できる、以下に示すような人材を輩出することを目的としている。

(A) 豊かな人格と教養、倫理観を持った生物工学技術者の育成

遺伝子治療、生殖工学、再生工学、遺伝子組換え農作物などを可能とする21世紀のバイオテクノロジーは、人文科学、社会科学、自然科学に関連した幅広い教養と高い生命倫理、工業倫理を基盤として開拓されることが必要である。特に今まで自然界に存在しなかった遺伝子導入生物や新規化学物質の生産には、技術者の倫理観と強い責任感が要求される。共通教育および導入教育、学内インターンシップによって、自発的に興味を持ち積極的に学習できる能力と社会に対する責任感を持った人材を育成する。

(B) 国際コミュニケーション能力を持った生物工学技術者の育成

現代社会において最新情報は英語で収集することが普通であり、進歩の著しい生物工学の領域では英語能力（聞く、話す、書く）は技術者にとって不可欠である。グローバル化の進んだ社会において、英語での情報収集、活用、発信ができない技術者は生き残れない。英語学習の動機付けを生物工学導入科目で指導するとともに、英語力判定試験（TOEIC等）の受験を強く勧める。また生物工学専門基礎科目、生物工学専門科目、演習、学内インターンシップにおいても英語能力、プレゼンテーション能力を強化し、外国文化を理解し、国際感覚を持った技術者を育成する。

(C) 課題解決力を持った技術者の育成

生物工学と生命科学の基礎知識を修得し、最新の専門知識を応用して、与えられた課題を科学的に解析し、その結果を明確に表現できる技術者を、生物工学専門教育、演習、実験を通して育成する。演習、実験では、問題解決力養成に重点を置き、学生の積極的参加によって、問題の発見、解決法の計画と実践、結果の解析、発表を行い、課題解決の面白さを体験できるよう指導する。

(D) 研究開発力を持った生物工学技術者の育成

自ら課題を発見し、独創的研究開発を行う能力を持った生物工学技術者の養成は、新しいバイオテクノロジー産業の創成にとって必須である。後に続く大学院教育との連続性を考慮し、卒業研究においては国際的レベルの研究に参加することにより、最先端の高度な専門知識、技術を応用した研究開発、論理的思考法を学び、創造的開発に喜びを感じ、好奇心旺盛で明快な問題意識を持った技術者を育成する。

2. 生物工学科専門教育の特徴について

生物工学科では、基礎科学である物理化学、有機化学、生化学、分子生物学、微生物学などの導入教育科目、専門基礎科目を通して、最初に化学的また医学的に生物を考える視点を育成した上で、より応用的な専門科目の学習を行うようにプログラムが組まれている。また工学専門教養教育によって工学倫理、ニュービジネス概論等バイオテクノロジーと社会との接点を学ぶ。工学倫理と生命倫理については、専門科目においても組み込まれており、社会に対して強い責任感を持った生物工学技術者の育成に重点が置かれている。さらにコミュニケーション能力と創成能力を強化するため、専門外国語以外に専門科目、学内インターンシップ、雑誌講読、演習、実験、卒業研究においても英語能力とプレゼンテーション能力の向上を計るためのカリキュラムが作られている。

(1) 生物工学導入科目

基礎生物工学1・2、化学英語基礎

(2) 生物工学専門基礎科目

物理化学1・2、有機化学1・2、生化学1・2・3、分子生物学、微生物学1・2、生体高分子学、分析化学、生体組織

生物工学科（昼間コース）

工学，放射化学及び放射線化学

（３）生物工学専門科目

微生物工学，生物物理化学 1・2，生物無機化学，生物有機化学，発生工学，タンパク質工学，酵素工学，細胞生物学，細胞工学，遺伝子工学，生物環境工学，生物機能設計学，医用工学，食品工学，植物工学，薬物分子工学，バイオインフォマティクス，生物・生命関連法規，材料科学，食品化学，専門外国語，バイオリアクター工学 1・2，生物資源工学，生体コロイド学，雑誌講読

（４）生物工学特別講義

生物工学特別講義 1・2・3・4

（５）工学専門数学・物理学科目

微分方程式 1・2，ベクトル解析，複素関数論，確率統計学，量子力学，統計力学

（６）工学教養，専門教養

コミュニケーション，工学倫理，電子計算機概論及び演習，環境化学，安全工学，労務管理，生産管理，福祉工学概論，エコシステム工学，知的所有権概論，ニュービジネス概論，学外インターンシップ，職業指導

（７）創成型専門科目

学内インターンシップ，生物工学演習 1・2・3・4・5・6，生物工学創成演習，基礎化学実験，生物工学実験 1・2・3・4・5・6，生物工学創成実験，卒業研究

３．日本技術者教育認定機構（JABEE）認定教育プログラム対応について

日本技術者教育認定制度とは，大学等高等教育機関で実施されている技術者教育プログラムが，社会の要求基準を満たしているかどうかを外部機関が公平に評価し，要求基準を満たしている教育プログラムを認定する制度である．日本技術者教育認定機構（Japan Accreditation Board for Engineering Education, JABEE）は，技術系学協会と密接に連携しながら技術者プログラムの審査認定を行う非政府団体で，次の２点を目的として設立された．

（１）統一の基準に基づいて理工農学系大学における技術者教育プログラムの認定を行い，教育の質を高めることを通じて，わが国の技術者教育の国際的な同質性を確保する．

（２）技術者の標準的な基礎教育として位置付け，国際的に通用する技術者育成の基盤を担うことを通じて社会と産業の発展に寄与する．

わかりやすく言えば，社会に対する強い責任感と工学倫理観，および社会の要求する専門知識とコミュニケーション能力（日本語と英語）を持つことが，JABEE が求める教育レベルということになる．生物工学科も JABEE より教育プログラムが認定されるように教育改革を進めている．JABEE が求める各授業の合格基準は，シラバスに記されている単位合格の基準より高いが，学生諸君も JABEE が求める合格水準以上の成績を収めれば，国際レベルの生物工学科卒業生として認定されることになる．

４．卒業後取得可能な免許，資格

（１）高等学校教諭一種免許状（工業）

詳しくは履修の手引き「教育職員免許状取得について」を参照のこと．

（２）技術士

本学科が日本技術者教育認定機構（JABEE）の認定を受けた場合は，その課程修了者は技術士になるための第一次試験が免除される．

[生物工学科の JABEE 認定と技術士受験上のメリットについて]

生物工学科の学生が，在学中の学習内容を活かし，取得を試みる公的資格の一つとして技術士（生物工学部門）がある．技術士とは，技術士法に定める国家資格の一つで「法に定める登録を受け，技術士の名称を用いて科学技術に関する高度の専門的応用能力を必要とする事項についての計画，研究，設計，分析，試験，評価，またはこれらに関する指導の業務を行うもの」である．業務内容としては，従来技術の技術移転に関すること，あるいは新技術の開発・育成を行うこと，公の鑑定・評価などで中立の技術者として働くとともに新技術の Public acceptance を助

生物工学科（昼間コース）

けることなどがある。技術士には地域活性化アドバイザーなど 19 の公的資格が無試験で与えられ、また公害防止管理者など 19 の公的資格受験に一部試験免除などの特典が与えられている。

技術士には現在 20 の部門があるが、生物工学に関する分野をカバーする部門としては、生物工学部門がある。業務に関して技術士の名称を用いるときは、その登録を受けた技術部門を明示する義務があるので、生物工学科の学生が目指す資格は、技術士（生物工学部門）ということになる。

技術士になるためには、基本的に第一次試験、第二次試験の 2 つの試験をクリアしなければならない。第一次試験ではほぼ四年制大学の学部卒業程度の実力が問われるが、第一次試験に合格し、技術士補として技術士を補助するか、優れた指導者（技術士である必要はない）のもとで実務経験を積んだ場合、4 年の実務経験で、第二次試験が受験可能となるメリットがある。第一次試験を受験せずに第二次試験を直接受験することも可能であるが、その場合、7 年の実務経験が必要となる。本学のカリキュラムが日本技術者教育認定機構（JABEE）の認定を受けた場合、その課程修了者は、この第一次試験を免除されることから、技術士になるためには大変有利となる。

（3）毒物劇物取扱責任者資格

毒物または劇物の製造業、輸入業または販売業には専任の「毒物劇物取扱責任者」を置き、毒物劇物による保健衛生上の危害の防止を行う必要がある。卒業生で下記の化学に関する科目から 28 単位以上取得し、かつ上に述べたような毒物劇物取扱に関する業務についた場合、毒物劇物取扱責任者資格を申請することができる。

[化学に関する科目]

生物無機化学、有機化学 1・2、生物有機化学、分析化学、物理化学 1・2、生物物理化学 1・2、生化学 1・2・3、微生物学 1・2、微生物工学、生物環境工学、生体高分子学、基礎化学実験、生物工学実験（1・2・4・5）、生物工学演習（2・3・4・5）

申請資格、申請手続きは都道府県の薬務課、または薬事課へ問い合わせのこと。

生物工学科（昼間コース）履修登録、進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定

1. 履修登録に関する規定

履修登録した科目を十分に学習するために、1 年間に履修登録可能な単位数の上限を 54 単位とする。ただし、各学年末において進級規定で定める単位数を修得し、さらに 1 年間の GPA が 3.0 以上（全科目の平均点 80 点以上）の学生については、次年度の修得可能単位数の上限はなしとする。

留年学生の上級学年の科目の履修については、各学年の履修登録上限単位数の範囲内で、かつ当該学年の科目履修を優先した上で、担当教官の承諾を得たものについてのみ認める。

2. 進級要件に関する規定

（1）1 年次から 2 年次への進級規定

1 年次から 2 年次へ進級するためには、専門教育科目の選択 A 科目を 8 単位以上修得していなければならない。

（2）2 年次から 3 年次への進級規定

2 年次から 3 年次へ進級するためには、専門教育科目の選択 A 科目を 28 単位以上修得していなければならない。

（3）3 年次から 4 年次への進級規定

3 年次から 4 年次へ進級するためには、次に指定する条件をすべて満たしていなければならない。

（a）全学共通教育科目において、卒業に必要な 44 単位以上を修得していること。

（b）専門教育科目において、必修科目を 16 単位、選択 A 科目を 44 単位以上、選択 B 科目を 20 単位以上修得していること。

3．卒業研究着手要件に関する規定

生物工学科の昼間コースにおいて、次に指定する諸条件をすべて満たした者は卒業研究に着手することができる。ただし、3年次へ編入学した者については別途考慮する。

- (1) 全学共通教育科目において、卒業に必要な44単位以上を修得していること。
- (2) 専門教育科目において、必修科目を16単位、選択A科目を44単位以上、選択B科目を20単位以上修得していること。
- (3) 修得単位についての条件を満たし、卒業研究着手について生物工学科会議の承認を得ていること。

	卒研着手に必要な単位数	全学共通教育科目	専門教育科目
必修科目	40 単位	24 単位	16 単位
選択 A 科目	58 単位以上	14 単位以上	44 単位以上
選択 B 科目	26 単位以上	6 単位以上	20 単位以上
計	124 単位以上	44 単位以上	80 単位以上

4．早期卒業要件（学則第35条の2の規定による卒業）に関する規定

3年次後期末において以下の条件を満たし、早期卒業を希望する者については、生物工学科会議で審議の上、卒業研究を行わずに3年次末での卒業を認める。ただし、卒業に必要な専門教育科目80単位に加えて、専門選択科目を24単位以上超過取得している場合、卒業研究単位に置き換えることができるものとする。

- (1) 3年次末現在におけるGPAが4.0以上であること。
- (2) 全学共通教育科目において、卒業に必要な44単位以上を修得していること。
- (3) 専門教育科目において、卒研着手に必要な80単位以上を修得し、さらに専門選択科目より24単位以上を超過して修得していること。

	早期卒業に必要な単位数		全学共通教育科目	専門教育科目	
必修科目	40 単位		24 単位	16 単位	
選択 A 科目	58	24 単位以上	14 単位以上	44	24 単位以上
選択 B 科目	26		6 単位以上	20	
計	148 単位以上		44 単位以上	104 単位以上	

生物工学科（昼間コース）

生物工学科（昼間コース）カリキュラム表

		1 年	2 年	3 年	4 年
全学共通教育	人文科学 社会科学 自然科学 工学系教養	(36)	(14)	(16)	
	外国語	(20)	(8)	(4)	
	健康スポーツ	(2)			
	基礎教育	(16)			
生 物 工 学 専 門 教 育	導入科目	○基礎生物学1・2	○化学英語基礎		
	専門基礎科目	○物理化学1 ○有機化学1・2 ○生化学1・2	○物理化学2 ○生化学3 ○分子生物学 ○微生物学1・2 ○生体高分子学 ○分析化学 ○生体組織工学 ●放射化学及放射線化学		
	専門科目		○微生物工学 ○生物物理化学1 ○生物無機化学 ○生物有機化学 ○発生工学 ●バイオインフォマティクス	○生物物理化学2 ○タンパク質工学 ○酵素工学 ○細胞生物学 ○細胞工学 ○遺伝子工学 ○生物環境工学 ○生物機能設計学 ●医用工学 ●食品工学 ●植物工学 ●薬物分子工学 ●生物・生命関連法規 ●材料科学 ●食品化学 ●専門外国語 ●バイオリアクター工学1・2 ●生物資源工学 ●生体コロイド学	●雑誌講読
	特別講義			●生物学特別講義1～4	
	工学専門 数学・物理		●微分方程式1・2 ●量子力学 ●統計力学	●ベクトル解析 ●複素関数論	●確率統計学
	工学教養 専門教養		●電子計算機概論及び演習 ●福祉工学概論	●工学倫理 ●学外インターンシップ	●コミュニケーション ●環境化学 ●安全工学 ●労務管理 ●生産管理 ●エコシステム工学 ●知的所有権概論 ●著作権概論 △職業指導
	創成型 専門科目		◎学内インターンシップ ◎生物学演習1～3	◎生物学演習4～6 ◎生物学創成演習 ◎基礎化学実験 ◎生物学実験1～6 ◎生物学創成実験	◎卒業研究

全学共通教育科目の（ ）内数字は、開講単位数を表す。

◎印を付した科目は、専門必修科目を表す。

○印を付した科目は、専門選択科目Aを表す。

●印を付した科目は、専門選択科目Bを表す。

△印を付した科目は、卒業資格単位には含まれない。

生物工学科（昼間コース）

生物工学科（昼間コース）教育課程表

全学共通教育科目

授業科目（分野）	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								備考	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年			計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
人文科学分野		6											
社会科学分野		6											
自然科学分野			6	18	18	4	10	8	8			66	
総合分野・学部開放分野													
外国語科目	(6)	(2)		(10)	(10)	(4)	(4)	(2)	(2)			(32)	
健康スポーツ科目	(2)			(2)	(2)							(4)	
基礎教育科目	16			10	6							16	
全学共通教育科目小計	16 (8) 24	12 (2) 14	6 6	28 (12) 40	24 (12) 36	4 (4) 8	10 (4) 14	8 (2) 10	8 (2) 10			82 (36) 118	講義 演習・実習 計

専門教育科目

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								担当者	備考	頁	
	必修	選択A	選択B	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
微分方程式 1			2			2						2	今井		307
微分方程式 2			2				2					2	今井		307
複素関数論			2						2			2	宮本		308
ベクトル解析			2					2				2	今井		309
確率統計学			2							2		2	長町		288
量子力学			2			2						2	大野		311
統計力学			2			2						2	道廣		304
電子計算機概論及び演習			1(1)			1(2)						1(2)	村井		304
物理化学 1		2			2							2	金品		308
物理化学 2		2				2						2	松木		308
有機化学 1		2		2								2	永澤		310
有機化学 2		2			2							2	高麗		310
化学英語基礎		2				2						2	松木・長宗・大内		287
基礎生物工学 1		2		2								2	野地		289
基礎生物工学 2		2			2							2	高麗		289
生化学 1		2			2							2	松田		293
生化学 2		2			2							2	辻		293
生化学 3		2				2						2	大島		294
分子生物学		2				2						2	大内		308
微生物学 1		2				2						2	櫻庭		306
微生物学 2		2				2						2	長宗		306
微生物工学		2					2					2	櫻庭		306
生体高分子学		2				2						2	辻・櫻庭		294
生物物理化学 1		2					2					2	松木		301
生物物理化学 2		2						2				2	金品		302
生物無機化学		2					2					2	永澤		302
生物有機化学		2					2					2	堀		302
分析化学		2				2						2	田中		309
発生工学		2					2					2	大内		305
タンパク質工学		2						2				2	辻		303
酵素工学		2							2			2	大島		290
細胞生物学		2						2				2	松田		291
細胞工学		2							2			2	長宗		291
遺伝子工学		2							2			2	野地		286
生物環境工学		2						2				2	高麗		295

生物工学科（昼間コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数(1週当たり)									担当者	備考	頁	
	必修	選択A	選択B	1年		2年		3年		4年		計				
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
生体組織工学		2				2						2	石村・樋田		295	
生物機能設計学		2						2				2	堀		295	
医用工学			2						2			2	伊坂・木内・末田・高木・安澤・伊藤・福見・山下		287	
食品工学			2					2				2	武岡・渡辺		292	
植物工学			2					2				2	新名・福井		293	
薬物分子工学			2						2			2	非常勤講師		310	
バイオインフォマティクス			2			2						2	小野(功)		305	
放射化学及び放射線化学			2			2						2	日野		309	
生物・生命関連法規			2					2				2	杣		301	
材料科学			2					2				2	淺岡		291	
食品化学			2						2			2	寺尾		292	
専門外国語			2					2				2	金品・堀・松田・野地・大島		303	
環境化学			1								1	1	本仲		288	
安全工学			1								1	1	坂		286	
バイオリアクター工学1			2								2	2	川城		305	
バイオリアクター工学2			2						2			2	葉久		305	
生物資源工学			2					2				2	楠見・中野・塩谷		301	
生体コロイド学			2					2				2	荒殿・竹田		294	
コミュニケーション			1								1	1	林(徳)		290	
工学倫理			2					2				2	井村・三崎		289	
生物学特別講義1			2						2			2	非常勤講師		300	
生物学特別講義2			2						2			2	非常勤講師		300	
生物学特別講義3			2						2			2	非常勤講師		300	
生物学特別講義4			2						2			2	非常勤講師		300	
雑誌講読			(1)								(1)	(1)	(2)	生物工学科全教官		292
学内インターンシップ	(1)					(2)						(2)	金品・堀・高麗・松田・野地・大島		288	
生物学演習1	(1)					(2)						(2)	野地・大内・三戸		296	
生物学演習2	(1)					(2)						(2)	松田・辻・湯浅		296	
生物学演習3	(1)					(2)						(2)	金品・松木・玉井		296	
生物学演習4	(1)							(2)				(2)	堀・永澤・宇都		296	
生物学演習5	(1)							(2)				(2)	大島・櫻庭・郷田		297	
生物学演習6	(1)							(2)				(2)	高麗・長宗・前田		297	
生物学創成演習	(1)							(2)				(2)	生物工学科教官		299	
基礎化学実験	(1)							(3)				(3)	生物工学科教官		288	
生物学実験1	(1)							(3)				(3)	金品・松木・玉井		297	
生物学実験2	(1)							(3)				(3)	堀・永澤・宇都		298	
生物学実験3	(1)							(3)				(3)	高麗・長宗・前田		298	
生物学実験4	(1)								(3)			(3)	野地・大内・三戸		298	
生物学実験5	(1)								(3)			(3)	大島・櫻庭・郷田		298	
生物学実験6	(1)								(3)			(3)	松田・辻・湯浅		298	
生物学創成実験	(1)								(3)			(3)	生物工学科教官		299	
学外インターンシップ			(1)					(3)				(3)	学外非常勤講師		288	
卒業研究	(6)										(10)	(8)	(18)	生物工学科全教官		303
労務管理			1								1		1	井原		311
生産管理			1								1		1	井原		294
職業指導			4								4		4	坂野		292
福祉工学概論			2			2							2	末田・藤澤		307
エコシステム工学			2								2		2	三澤・三輪・近藤・村上・末田・松尾・井手・廣瀬・魚崎・田村・村田・木戸口		287

生物工学科（昼間コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数 (1 週当たり)								担当者	備考	頁	
	必修	選択 A	選択 B	1 年		2 年		3 年		4 年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
知的所有権概論			1							1		1	酒井		304
ニュービジネス概論			2							2		2	山崎・伊藤		304
工業基礎英語 I			1	1								1	広田		290
工業基礎数学 I			1	1								1	吉川		290
工業基礎物理 I			1	1								1	佐近		290
専門教育科目小計	(22)	58	72	7	10	28	15	28	24	16	2	130	講義 演習・実習 計		
	22	58	75	7	10	32	21	51	36	27	11	195			

備考

1. () 内は、演習・実習の単位数または授業時間数を示す。
2. 印の科目は卒業資格の単位に含まれない。
3. 印の科目は履修登録の上限単位数には含まない。ただし、GPA の算出には含まれる。
4. 全学共通教育科目の開講単位数は開講されている科目の合計単位数を示す。
5. 全学共通教育科目の開講科目および単位数は「徳島大学全学共通教育科目の履修の手引き」を参照のこと。
6. 他学科・他学部の科目履修について、卒業要件としては認めない。

	卒業に必要な単位数	全学共通教育科目	専門教育科目
必修単位	46 単位	24 単位	22 単位
選択必修(選択 A) 単位	58 単位以上	14 単位以上	44 単位以上
選択(選択 B) 単位	26 単位以上	6 単位以上*	20 単位以上**
計	130 単位以上	44 単位以上	86 単位以上

* 全学共通教育科目で必修・選択必修で修得した科目以外から選択する。

** 専門教育科目の選択 B 科目から選択する。ただし、専門選択 A の単位で卒業単位に必要な単位数を超過して取得した分については、選択 B の単位にまわすことができるものとする。

生物工学科（昼間コース）

生物工学科（昼間コース）教育分野別カリキュラム編成

学 年									
1 年		2 年		3 年		4 年			
前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期
教養科目（人文科学・社会科学・自然科学・総合・学部開放）						確率統計学		卒業研究	
英語(1)	英語(1)	英語(2)	英語(2)	ベクトル解析	複素関数論				
ドイツ語(1)	ドイツ語(1)	ドイツ語(2)	ドイツ語(2)			コミュニケーション			
フランス語(1)	フランス語(1)	G1				労務管理			
中国語(1)	中国語(1)	微分方程式1	微分方程式2	R1		生産管理			
健康スポーツ	健康スポーツ	量子力学	統計力学			安全工学			
微分積分学	微分積分学2					環境化学			
線形代数学1	線形代数学2	福祉工学概論		工学倫理		職業指導			
基礎物理学f	基礎物理学g			専門外国語		エコシステム工学			
基礎化学I		G2				知的所有権概論			
基礎生物学T						ニュービジネス概論			
有機化学1	物理化学1	物理化学2	微生物工学	生物物理化学2	酵素工学	卒業研究			
基礎生物工学1	有機化学2	化学英語基礎	生物物理化学1	細胞生物学	細胞工学				
	基礎生物工学2	生化学3	生物無機化学	生物環境工学	遺伝子工学				
	生化学1	微生物学1	生物有機化学	生物機能設計学	薬物分子工学				
	生化学2	微生物学2	発生工学	タンパク質工学	食品化学				
		生体高分子学		食品工学	工学1	B3			
		分析化学		材料科学	バイオリアクター工学2				
		分子生物学		生物・生命関連法規	生物学特別講義1				
		生体組織工学		生体コロイド学	生物学特別講義2				
		放射化学及び放射線化学		医用工学	生物学特別講義3				
		バイオインフォマティク		植物工学	生物学特別講義4				
				生物資源工学	R3				
				シップ	生物工学実験4				
				基礎化学実験	生物工学実験5				
				生物工学実験1	生物工学実験6				
				生物工学実験2	生物工学創成実験				
				生物工学実験3	B1				
		ンシップ	生物工学演習2	生物工学演習4		雑誌講読	雑誌講読		
		生物工学演習1	生物工学演習3	生物工学演習5					
				生物工学演習6		B2			
				生物工学創成演習					

G (教養教育) G1 : 全学共通 G2 : 工学教養・専門教養
R (専門教育) R1 : 工学基礎 R2 : 専門基礎 R3 : 専門応用
B (創造性の育成教育) B1 : 工学実験 B2 : 創成型科目 B3 : 卒業研究

* () 内の数字は開講単位数を示す

生物工学科 (昼間コース)

生物工学科 (昼間コース) 講義概要

目次

安全工学 286
 遺伝子工学 286
 医用工学 287
 エコシステム工学 287
 化学英語基礎 287
 学外インターンシップ 288
 学内インターンシップ 288
 確率統計学 288
 環境化学 288
 基礎化学実験 288
 基礎生物学 1 289
 基礎生物学 2 289
 工学倫理 289
 工業基礎英語 I 290
 工業基礎数学 I 290
 工業基礎物理 I 290
 酵素工学 290
 コミュニケーション 290
 細胞工学 291
 細胞生物学 291
 材料科学 291
 雑誌講読 292
 職業指導 292
 食品化学 292
 食品工学 292
 植物工学 293
 生化学 1 293
 生化学 2 293
 生化学 3 294
 生産管理 294
 生体高分子学 294
 生体コロイド学 294
 生体組織工学 295
 生物環境工学 295
 生物機能設計学 295
 生物学演習 1 296
 生物学演習 2 296
 生物学演習 3 296
 生物学演習 4 296
 生物学演習 5 297
 生物学演習 6 297
 生物学実験 1 297
 生物学実験 2 298
 生物学実験 3 298
 生物学実験 4 298
 生物学実験 5 298
 生物学実験 6 299
 生物学創成演習 299
 生物学創成実験 299
 生物学特別講義 1 300
 生物学特別講義 2 300
 生物学特別講義 3 300
 生物学特別講義 4 300
 生物資源工学 301
 生物・生命関連法規 301
 生物物理化学 1 301
 生物物理化学 2 302
 生物無機化学 302
 生物有機化学 302
 専門外国語 303

卒業研究 303
 タンパク質工学 303
 知的所有権概論 304
 電子計算機概論及び演習 304
 統計力学 304
 ニュービジネス概論 304
 バイオインフォマティクス 305
 バイオリクター工学 1 305
 バイオリクター工学 2 305
 発生工学 305
 微生物学 1 306
 微生物学 2 306
 微生物工学 306
 微分方程式 1 307
 微分方程式 2 307
 福祉工学概論 307
 複素関数論 308
 物理化学 1 308
 物理化学 2 308
 分子生物学 308
 分析化学 309
 ベクトル解析 309
 放射化学及び放射線化学 309
 薬物分子工学 310
 有機化学 1 310
 有機化学 2 310
 量子力学 311
 労務管理 311

安全工学

Safety Engineering 非常勤講師・坂 清次 1 単位

【授業目的】化学物質は人間の生活に欠かせないものであるが、取り扱いを誤ると人体や環境を脅かす有害な物質として作用する。安全・健康問題に対して、化学物質の安全からプロセスや機器の安全、化学企業や業界が行う対策まで具体的な事例を通じて理解させる。

【授業概要】化学物質の安全管理の基本を理解し、世界および日本の化学工業で起きた事故のケーススタディーを中心に安全の原理、原則の理解を進める。また地球環境問題と世界標準について学び、グローバルな視点から安全の背景を概観する。

【受講要件】特になし。

【到達目標】

1. 化学物質の安全管理の基本を理解する。
2. 化学工業で起きた事故を通して安全の原理・原則を理解する。
3. 地球環境と世界基準について理解を深める。

【授業計画】1. 化学物質の安全管理：化学物質の爆発・火災危険性、危険物とその種類、化学物質の爆発・火災危険性の事前評価 2. 化学業界のレスポンスブル・ケア活動：PRTR, MSDS など 3. 地球環境問題 4. 世界標準：国際標準規格 ISO9000, 14000 を中心に 5. 重大事故に学ぶ：世界と日本の重大事故 6. レポート作成 (最終試験)

【成績評価】講義への参加状況 (質疑応答:3 割) およびレポート (最終試験:7 割) の内容を総合して行う。

【教科書】特に使用しない。各種の資料、教材を適宜配布し講義に使用する。特に使用しない。

【参考書】化学工場の安全管理総覧 (中央労働災害防止協会), 化学安全ガイド (丸善), 第 4 版, 石油化学工業の現状 (石油化学工業協会) など

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】加藤(M304, 656-7429, kato@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】一方的な講義ではなく、質問を歓迎し、講師から学生への問いかけ応答を評価する。

遺伝子工学

Genetic Engineering 教授・野地 澄晴 2 単位

生物工学科(昼間コース)

【授業目的】各分野の研究、産業の発展に用いられている遺伝子工学について理解する。

【授業概要】前半は、基本的な方法、ベクターとその利用法について、後半は、遺伝子工学がどのような分野に利用されているかについて講義する。

【受講要件】分子生物学を受講しておくこと。

【履修上の注意】予習、復習を行い積極的に学習し、ノートを作成すること。

【到達目標】

1. 英語のプロトコールが読める。
2. 遺伝子クローニングの方法を理解する。
3. PCR, RNAi 法の基礎と応用を理解し、実験プロトコールが作成できる。
4. 組換えタンパク質の合成と精製法を理解する。
5. 動植物への遺伝子導入法を理解する。
6. 遺伝子工学の倫理的問題の理解。

【授業計画】1. 実験プロトコールについて 2. ベクターを用いたクローニング, レポートの宿題(到達目標1の一部評価) 3. 発現ベクター 4. ライブラリー 5. スクリーニング法 6. PCR 法 7. RNAi 法, レポートの宿題(到達目標3の一部評価) 8. 中間試験(到達目標1, 2, 3の一部評価) 9. 発現ベクターを用いたタンパク質の合成序論 10. バクテリアを用いた方法 11. 哺乳動物細胞を用いた方法, レポートの宿題(到達目標4の一部評価) 12. トランスジェニック動物について 13. トランスジェニック植物について 14. 動物のクローンについておよび遺伝子工学の倫理について 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率80%以上で、到達目標6項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%), レポート(30%), 期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率80%以上で、到達目標6項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%), レポート(30%), 期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】野島博著「ゲノム工学の基礎」東京化学同人

【参考書】Sambrook-Russell「Molecular cloning」Cold Spring Harbor Laboratory Press

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】野地(化生棟803, Tel:656-7528, E-mail:nojji@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日18:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない。

医用工学

Medical Technology 教授・伊坂 勝生, 木内 陽介, 末田 統
助教授・伊藤 照明, 高木 均, 福見 稔, 安澤 幹人
非常勤講師・山下 菊治 2 単位

【授業目的】医用工学の最近の動向を知り、ナノテクノロジーやインフォメーションテクノロジーにおける生物工学の応用と社会への貢献について理解する。

【授業概要】生物工学と電気工学, 機械工学, 福祉工学, 情報工学, 化学工学, 材料化学との融合領域における最近の進歩, 将来へ向けての問題点について解説する。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 最近の医用工学の進歩と生物工学の役割について理解する。
2. 医療, 福祉における生物工学の問題点について理解する。

【授業計画】1. 身の周りの電磁界とその生体影響(伊坂) 2. パーチャルマニファクチュアリングに関する基礎技術(伊藤) 3. パーチャルマニファクチュアリングによる医用インプラントの設計と製造(伊藤) 4. 生体電気特性とその医学診断応用(木内) 5. 生体生理逆問題解析とその臨床応用(木内) 6. 身体に障害のある方々の人権と支援(末田) 7. 環境に優しいグリーンコンポジットの生物応用(高木) 8. エコマテリアルの医学的応用(高木) 9. 生物型情報処理方式による生体情報処理(福見) 10. 進化・適応システムの医用画像処理(福見) 11. パイオセンサの医学的応用:血糖値センサ(インビトロ測定, インビボ測定), 検査薬(妊娠検査, 排卵日検査等)(安澤) 12. 再生医学のための培養装置(山下) 13. 細胞外マトリックスの医用工学的応用(山下) 14. レポート(到達目標1, 2の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率80%以上で、到達目標2項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(50%), 期末試験(50%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率80%以上で、到達目標2項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(50%), 期末試験(50%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】受講者に講義資料を配布する。

【参考書】特に指定しない。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

エコシステム工学

Ecosystem Engineering 教授・三輪 恵, 近藤 光男, 村上 仁士
教授・末田 統, 助教授・松尾 繁樹, 上月 康則, 藤澤 正一郎
助教授・廣瀬 義伸, 魚崎 泰弘, 教授・田村 勝弘, 村田 明広
助教授・木戸口 善行 2 単位

【授業目的】自然環境と社会環境の共存の重要性、ならびに、それらを目指す学生に必要な考え方や有効な技術について概説する。

【授業概要】地球温暖化など地球環境問題は、今や人類をはじめとする地球上全ての生命体の存在をも危うくする重大な問題となっている。これは人類の産業活動が拡大を続けた結果、大気成分の変化や廃棄物の総量の増大など、地球の「大きさ」の壁に突き当たり、あらゆることに地球の有限性があらわれてきている現象に他ならない。人類が地球環境を保全しつつ将来世代にまで渡って持続的発展を遂げるためには、この地球の有限性の認識を基本とした自然環境に低負荷な技術体系を発展させる必要がある。本講義では自然環境と社会環境の共存を目指す学生に必要な考え方や有効な技術について多角的に論じる。

【到達目標】自然環境・社会環境を取り巻く諸問題について科学的・工学的に考察し、理解する。

【授業計画】1. ガイダンス 2. エコシステム工学とは・レポート 3. うるおいある地域づくりと交通システム・レポート 4. 自動車を取り巻くエネルギー環境・レポート 5. エネルギーの高効率利用と大気環境の保全・レポート 6. ひとにやさしいまちづくり・レポート 7. 生態系工学による自然環境修復の取組み・レポート 8. エコシステムな物理・レポート 9. 化学と生物学の環境問題へのかかり・レポート 10. 環境に優しい超臨界流体の利用・レポート 11. 活断層と地震・レポート 12. 環境負荷計測のための空間情報の活用・レポート 13. 障害者の社会参加を支える工学技術・レポート 14. 予備日 15. 予備日

【成績評価】各テーマごとに出題されるレポート(100%)により評価を行い、その平均点が60%以上あれば合格とする。定期試験は行わない。

【教科書】教科書は特に指定せず、毎回講義用資料が配布される。

【参考書】E. P. オダム著/三島次郎訳「オダム基礎生態学」培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

化学英語基礎

Chemical English 助教授・松木 均, 長宗 秀明, 大内 淑代 2 単位

【授業目的】化学英語の基本的表現(単位, 数式, 器具, 化合物, 化学式, 図表)について理解, 習得する。

【授業概要】数式, 化学組成式, 実験器具, 単位の英語表現および科学的データの英語による説明など理系学生に必要な基礎的英語を, テキストに従って講義する。実際にCDによるヒアリングを行う。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】毎回宿題を出すので, 復習(ライティング, ヒアリング)を充分に行うこと。

【到達目標】

1. 化学, 生命科学に関する基本的化学英語を理解できる。
2. 簡単な実験結果, 図表について英語で説明できる。

【授業計画】1. 整数, 寸法, レポート1(到達目標1の一部評価) 2. 分数少数, 数式, レポート2(到達目標1の一部評価) 3. 日常的な数, レポート3(到達目標1の一部評価) 4. 数詞, 序数, レポート4(到達目標1の一部評価) 5. 数, 単位, レポート5(到達目標1の一部評価) 6. 複雑な数式(1), レポート6(到達目標1の一部評価) 7. 複雑な数式(2), レポート7(到達目標1の一部評価) 8. 実験器具(1), レポート8(到達目標1の一部評価) 9. 実験器具(2), レポート9(到達目標1の一部評価) 10. 色, 形, レポート10(到達目標1の一部評価) 11. 図表の説明(1), レポート11(到達目標2の一部評価) 12. 図表の説明(2), レポート12(到達目標2の一部評価) 13. 図表の説明(3), レポート13(到達目標2の一部評価) 14. 図表の説明(4), レポート14(到達目標2の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

生物工学科 (昼間コース)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (50%)、期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (50%)、期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】「耳から学ぶ科学英語」講談社サイエンティフィック、「化学英語演習」共立出版

【参考書】特に指定しない。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

学外インターンシップ

Internship

学外非常勤講師 1 単位

【授業目的】学生が企業等において就業体験を行うことにより、組織の仕組み、業務の流れ、目標達成のための戦略と実践、職場内の人間関係やマナー等に関する理解を深めるとともに、学習意欲の喚起および高い就業意識の育成を図ることを目的とする。

【授業概要】派遣先の企業等において、予め目標を設定し、その達成に向けて実習を行う。

【受講要件】生物工学科科会議において承認を得た者のみ受講できる。

【履修上の注意】明確な目的意識を持って企業実習に臨むこと。派遣先企業についての事前勉強を十分行っておくこと。実習期間中にかかる費用 (交通費、県外の場合は宿泊費等) はすべて学生の自己負担とする。

【到達目標】

1. 社会人としてのマナーや規範を身に付ける。
2. 明確な職業意識を育成する。

【授業計画】1. 事前研修 2. 実習先の企業が用意したカリキュラムに従って実習を行う 3. 実習終了後、実習レポートを提出し、事後報告を行う

【成績評価】企業からの実習レポート等の評価をもとに 100 点満点で評価し、60 点以上を合格とする。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】徳島大学インターンシップ実施要領に基づいて実習するものとする。希望者多数の場合は、生物工学科科会議において調整を行う。また、学科会議において実習不相当と判断した場合は、受講できないこともある。

学内インターンシップ

Understanding Biological Science and Technology

教授・金品 昌志, 堀 均, 高麗 寛紀, 松田 佳子, 野地 澄晴

教授・大島 敏久 1 単位

【授業目的】各研究室を見学することにより、研究の最前線に触れ、生物工学全般にわたる専門分野の知識の拡充をはかり、専門家としての意識を明確にさせる。

【授業概要】学生は 8~9 名のグループに分かれ、生物工学科内の各研究室で early exposure を受ける。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 生物工学分野の総合的理解
2. 生物工学分野におけるコミュニケーション能力
3. 外国語による生物工学の理解

【授業計画】1. 生物工学科各研究室の研究を学ぶ 2. 各研究室で少人数で研究の動向や内容に関する討論を行う 3. 小さいテーマについて自分の考えを発表して批判をあおぐ 4. 英文論文等の読解の指導を受ける 5. 研究発表、報告書作成 6. 期末試験

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は授業態度 (20%)、研究発表 (40%)、研究報告書 (40%) で評価する。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は授業態度 (20%)、研究発表 (40%)、研究報告書 (40%) で評価する。

【教科書】受講者に講義資料を配布する。

【参考書】各担当教官から与えられた論文等。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

確率統計学

Probability and Statistics

教授・長町 重昭 2 単位

【授業目的】確率的な現象の捉え方、考え方を学ぶとともにデータを処理する際に使われる統計手法を習得することを目標とする。

【授業概要】初めて数理統計を学ぶ初学者のために、確率論と統計学の基礎的な部分を解説し、統計学は具体的な例を中心に解説する。

【受講要件】「微積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】時間数の制約から、数理統計学を履修するための必要最小限の議論を行うので、講義内容のすべてを吸収することが理解への早道である。日頃から予習・復習の計画を立てて勉学に努めてほしい。

【到達目標】

1. 基本的な確率分布に従う確率変数の性質の理解
2. 各種の検定や推定の方法の理解

【授業計画】1. 事象と確率 2. 確率変数 3. 確率分布と密度関数 4. 平均と分散 5. 基本的な確率分布 6. 確率変数の性質 7. 中心極限定理 8. データの整理と記述 9. 統計学の考え方 10. 正規母集団の母平均の検定 (I) 11. 正規母集団の母平均の検定 (II) 12. 正規母集団の母分散の検定 13. 出現率の検定 14. 区間推定 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】試験 80%平常点 20%(レポート、授業への取り組み状況等)として評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【教科書】坂光一、水原昂廣『確率・統計入門』学術図書出版社

【参考書】小森尚志、山下護、水野正一『統計学の基礎と演習』東海大学出版

【連絡先】A205室, TEL:656-7554, e-mail:shigeaki@pm.tokushima-u.ac.jp

環境化学

Environmental Chemistry

教授・本仲 純子 1 単位

【授業目的】現在、人類活動によって、地球が有している物質循環作用と自然浄化作用をはるかに越える化学物質が排出されている。環境問題と化学との関わりの深さを考える時、環境問題に対する意識を高めることは、化学の教育責任の1つである。人類が、直面している地球環境問題を解説し、環境アセスメント、環境マネジメントシステム規格についても修得させる。

【授業概要】水、大気、土壌に関わる環境問題を化学の立場を中心に講述する。地球規模での環境問題と廃棄物、また、日常生活で人間の健康に直接かかわる身の回りの有害物質、発がん物質などについて解説し、さらに、環境アセスメント、環境マネジメントシステム規格についても講義を行う。

【到達目標】

1. 地球をとりまく環境問題についての理解を深める。
2. 土壌汚染と廃棄物についての理解を深める。
3. 有害物質、発がん物質についての理解を深める

【授業計画】1. 総論 2. 水資源 3. 水と健康 4. 水質汚濁 5. 大気汚染 6. 大気汚染 7. 地球環境問題 8. 土壌汚染と廃棄物 9. 環境汚染性有機物及び金属 10. 環境発ガン物質、食品中発ガン物質 11. 食品添加物、自然毒 12. 環境アセスメント 13. ISO14001 環境マネジメントシステム規格 14. まとめ 15. 試験

【成績評価】到達目標の 4 項目が各々達成されているかを試験 60%、平常点 (レポートと授業への取り組み状況)40%で評価し、4 項目平均で 60%以上あれば合格とする。

【教科書】保田茂次郎著「生活環境概説」三共出版

【参考書】崎川範行/鈴木敬輔著「環境科学」三共出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】本仲(化611, 656-7409, motonaka@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義に出席すること。講義への取り組み状況、小テスト、レポートと最終試験の割合は 4:6 とする。

基礎化学実験

Experiments for Basic Chemistry

生物工学科教官 1 単位

【授業目的】定性分析、容量分析などの基礎分析化学実験を行い、実験の基本操作を修得する。講義で履修した内容の一部を実験により再度確認し、理解の助けとする。

【授業概要】将来、生物工学分野での技術者・研究者を目指す者が必ず経験しておくべき実験の基本操作である定性分析、容量分析の実験を行う。

【受講要件】生物工学に必要な基礎化学実験を行うが、高校で化学を履修していない学生は、特に十分な予習を行うこと。

【履修上の注意】実験を安全に行うため「安全マニュアル」徳島大学工学部編「実験を安全に行うために」、「続実験を安全に行うために」化学同人を一読しておくこと。

【到達目標】

1. 基本的な化学実験操作の習得
2. 読み易く明瞭なレポートの作成

【授業計画】1. 無機定性分析 1(陽イオンと陰イオンの性質), レポート 1(到達目標 1, 2 の 10%を評価) 2. 無機定性分析 2(陽イオンの系統分析), レポート 2(到達目標 1, 2 の 10%を評価) 3. 容量分析 1(中和滴定), レポート 3(到達目標 1, 2 の 10%を評価) 4. 容量分析 2(キレート滴定), レポート 4(到達目標 1, 2 の 10%を評価) 5. 容量分析 3(電位差滴定), レポート 5(到達目標 1, 2 の 10%を評価) 6. 吸光度分析, レポート 6(到達目標 1, 2 の 10%を評価) 7. クロマトグラフィー, レポート 7(到達目標 1, 2 の 10%を評価) 8. 期末試験 (到達目標の 30%を評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 1, 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。実験内容に対する理解力の評価は、レポートの評価(70%)と期末試験(30%)の結果を総合して判定する。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 1, 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。実験内容に対する理解力の評価は、レポートの評価(70%)と期末試験(30%)の結果を総合して判定する。

【教科書】小冊子「基礎化学実験」

【参考書】徳島大学工学部編「安全マニュアル」、化学同人編集部編「実験を安全に行うために」、化学同人編集部編「続実験を安全に行うために」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

基礎生物学 1

Basic Bioengineering 1

教授・野地 澄晴 2 単位

【授業目的】生物工学とはどのような学問であり、その基礎となる生物学とはどのような学問かについて理解し、4 年間の勉強のオリエンテーションをつける。

【授業概要】前半は、生物の基本である遺伝子とタンパク質に着目し、その構造と機能について、後半は生物の全体像に着目し、生物の構造とその機能について講義する。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】予習・講義・復習のノートを作成すること。ノートを利用して試験を行なう。

【到達目標】

1. 遺伝子について理解する。
2. タンパク質について理解する。
3. 生物の構造と機能について理解する。
4. 生物工学の考え方を理解する。

【授業計画】1. 生物工学とは 2. 遺伝子について、レポートの宿題(到達目標 1 の一部評価) 3. 蛋白質について 4. 遺伝子の役割 5. 遺伝病について、レポートの宿題(到達目標 2 の一部評価) 6. 遺伝子操作の方法 7. RNAi 入門 8. 中間試験(到達目標 1, 2 の一部評価) 9. 身体構造について 10. 身体のできかたについて、レポートの宿題(到達目標 3 の一部評価) 11. 身体の調節について 12. 進化について 13. モデル動物について、レポートの宿題(到達目標 4 の一部評価) 14. 21 世紀の生物工学について 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 4 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%)、レポート(30%)、期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 4 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%)、レポート(30%)、期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】美宅成樹著「分子生物学入門」岩波新書

【参考書】中村桂子・松原謙一監修「細胞の分子生物学」KYOIKUSHA

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】野地(化生棟803, Tel:656-7528, E-mail:noj@bio.tokushima-u.ac.jp), オフィスアワー:月曜日18:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない。

基礎生物学 2

Basic Bioengineering 2

教授・高麗 寛紀 2 単位

【授業目的】生物は単細胞あるいは多細胞で構成され、有機化学物質の分子で構成され、さらに元素から構成されている。生物工学を志す諸君は、生体構成化学物質と生体反応の有機化学的な理解なくして生物工学を理解し得ない。生物工学の導入教育として、有機化学結合論、有機化学反応、有機電子論、生物有機化学の視点から生物工学に必要な基礎知識と生物倫理の理解を深める。

【授業概要】化学結合論、有機化学物質、有機化学反応、有機電子論、生物有機化学、生化学反応及び生物工学倫理について講述し、生物工学に必要な基礎学力を養成する。

【受講要件】平易に講述するが、高校で化学及び物理を履修していない学生は、予習と復習に努力すること。

【履修上の注意】講義の単元(1~2, 4~6, 8~10, 12~13)が終わる毎に4回のレポート及び中間試験を実施するので、毎回の予習・復習は欠かせずに行うこと。

【到達目標】

1. 生体構成有機化学物質を理解する。
2. 有機化学結合論を理解する。
3. 有機化学反応、有機電子論について理解する。
4. 生物有機化学を理解する。

【授業計画】1. 生体構成有機化学物質概要(アミノ酸, タンパク質) 2. 生体構成有機化学物質概要(核酸, 脂質, 糖質) 3. 中間試験 1(到達目標 1 の 30%を評価)・レポート 1(到達目標 1 の 20%を評価) 4. 有機化学結合論(共有結合) 5. 有機化学結合論(配位結合) 6. 有機化学結合論(金属結合) 7. 中間試験 2(到達目標 2 の 30%を評価)・レポート 2(到達目標 2 の 20%を評価) 8. 有機化学反応(脂肪族化合物) 9. 有機化学反応(芳香族化合物) 10. 有機電子論及び生物工学倫理 11. 中間試験 3(到達目標 3 の 30%を評価)・レポート 3(到達目標 3 の 20%を評価) 12. 天然物有機化学(イソプレノイド) 13. 天然物有機化学 14. 中間試験 4(到達目標 4 の 30%を評価)・レポート 4(到達目標 4 の 20%を評価) 15. 期末試験(到達目標全ての 30%を評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 4 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度の評価方法は試験(中間試験 4 回:30%, 期末試験:30%), (レポート 4 回:20%)及び平常点(講義中の口頭試問各自 3 回:20%)で行う。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 4 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度の評価方法は試験(中間試験 4 回:30%, 期末試験:30%), (レポート 4 回:20%)及び平常点(講義中の口頭試問各自 3 回:20%)で行う。

【教科書】中崎昌雄著「基礎有機化学」朝倉書店

【参考書】扇元敬司「バイオのための基礎微生物学」講談社サイエンティフィク

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】高麗(M棟813, Tel:656-7408, E-mail:kourai@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:前期:木曜日19:40~21:10, 後期:火曜日19:40~21:10)

【備考】原則として再試験は実施しない。

工学倫理

Engineering Ethics

非常勤講師・井村 隆信, 三崎 幸二 2 単位

【授業目的】技術者としての意識と誇りを身につけ、工学倫理を守るために必要な知識と知恵を学ぶ。

【授業概要】技術者に要求される倫理とは何か?比較研究と事例研究を中心に学ぶ。その上で、安全、環境、法規、知的財産権などに関連して、具体的にどのようなことが問題になるのか?実践的にどのように対処すればよいか?講師たちの技術者としての実体験をもとに、出来るだけ双方向的な授業をこころみる。工学倫理というむずかしそうなテーマにやさしく迫る。

【履修上の注意】各クラス 2 人の講師が、それぞれ 2 日ずつ計 15 時間の授業を行う。全時間の出席を要する。

【到達目標】

1. 工学倫理についての理解
2. 技術者としての誇りと責任感
3. 関連問題についての理解
4. 実践的対応力

【授業計画】1. はじめに 2. 比較論のこころみ 3. 事例研究 1(グループ討議と発表) 4. 事例研究 2(レポートと小テスト) 5. 技術者倫理と技術倫理 6. 安全と工学倫理 7. 環境・資源問題と工学倫理 8. リスク評価と

生物工学科 (昼間コース)

技術者 9. 実例研究 3(レポートと発表・討議) 10. 技術者と法規 11. 製造物責任 12. 知的財産権と工学倫理 13. 事例研究 4(レポートと発表・討議) 14. 国際工学倫理 15. 実践的技術者倫理

【成績評価】プレゼンテーション評価 50%, レポート・小テスト 50%

【JABEE 合格】到達目標が各々達成されているかを、レポートやグループ討議、最終テストで評価し、60%以上あれば合格とする。

【教科書】中村収三著「実践的工学倫理 みじかく、やさしく、役にたつ」、2003年、化学同人、全員が教科書をもっていることを前提に授業(レポート、宿題、小テストを含む)を行う。

【参考書】適宜紹介する。

【連絡先】英(M317, 656-7377, hanabusa@me.tokushima-u.ac.jp)

【授業目的】酵素を工業、農業、医療、環境保全などの産業と日常生活へ有効利用するための原理、手法、問題点、課題について講義する。レポートの提出や中間試験の実施により酵素の工学的利用についての基本的知識の修得を図る。

【授業概要】酵素を産業に利用する場合について、酵素の特徴、微生物による生産、精製について基本的な知見と特徴を説明する。その知見を踏まえた酵素の日常生活への利用の具体例と特徴、固定化酵素のバイオリアクターやバイオセンサーへの利用の具体例と特徴、酵素の機能改良と利用などについて、基本的な知見を中心に講義する。また、酵素工学に関する倫理面について討議する。

【受講要件】生化学 1, 2, 3 を受講しておくこと。

【履修上の注意】下記の参考書を一冊以上購読して、講義に関連する知識を幅広く学習すること。復習を特にするように努めること。講義で理解しにくい点は、教科書や参考書等で学習するとともに直接質問すること。

【到達目標】

1. 産業への応用面において有用な酵素の生産法と効率的な精製法の基本原理を理解する。
2. 酵素の産業への応用の基本原理と課題解決法(工業倫理、及び生命倫理に関する問題)を理解する。

【授業計画】1. 工学的応用における酵素の特徴 2. 酵素源としての微生物の特長 3. 酵素の生産法の改良 4. 遺伝子クローニングによる酵素の生産の改良 5. 酵素の精製法:塩析法, イオン交換クロマトグラフィ, アフィニティクロマトグラフィ 6. 酵素の精製法:吸着クロマトグラフィ, 疎水クロマトグラフィ等, レポート 1(到達目標 1 の一部評価) 7. 中間試験(到達目標 1 の一部評価) 8. 酵素の産業上の応用 1:洗剤酵素の開発(洗剤酵素の開発の歴史と利用条件) 9. 酵素の産業上の応用 2:洗剤酵素(プロテアーゼ, アミラーゼ, リパーゼ, セルラーゼの開発) 10. 固定化酵素の特徴とその利用法 11. 酵素の産業上の応用 3:グルコースイソメラーゼによる異性化糖の生産法 12. 酵素の産業上の応用 4:膜型酵素リアクターによる光学活性アミノ酸の生産法 13. 酵素の産業上の応用 5:極限酵素の機能開発 14. 酵素工学における工学倫理, レポート 2(到達目標 2 の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%), レポート(20%), 期末試験(50%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%), レポート(20%), 期末試験(50%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】上島孝之著「酵素テクノロジー」幸書房

【参考書】大島敏久・左右田健次著「酵素のおはなし, 第三刷」日本規格協会, 太田隆久著「暮らしの中の酵素」東京化学同人, 野本正雄著「酵素工学」学会出版センター, 小巻利章著「酵素応用の知識, 第四版」幸書房

【対象学生】他学科学学生も履修可能

【連絡先】大島(M棟720, Tel:656-7518, E-mail:ohshima@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

工業基礎英語 I

Industrial Basic English (I) 非常勤講師・広田 知子 1 単位

【授業目的】現代社会の国際言語である英語を用いて、科学技術分野での基礎的な語彙力、読解力、リスニング力を養うことを目的とする。

【授業概要】科学技術分野で頻出の語彙や表現を増やす。イラスト、写真などを参考にしながら、内容理解のための練習問題を通して、英文を理解する力や、必要な情報を効率的に掴む力を養成する。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. HEAT 3. SOUND 4. COMPUTERS 5. (教科書の各章にしたがって進めていくが、途中で適宜リスニング教材やビデオ教材なども使用する。)

【成績評価】コース最終日に試験を行う。

【教科書】ENJOY SCIENCE:データバンク (1) 『やさしい科学』 David Crystal/John Foster Asahi Press

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】授業の前に予習しておくことが望ましい。

工業基礎数学 I

Industrial Basic Mathematics (I) 非常勤講師・吉川 隆吾 1 単位

【授業目的】工学を学ぶために必要不可欠となる微分・積分の基礎的な内容について理解を図り、さらに基本的な手法や計算技術を確実に習得することを目的とする。

【授業概要】1 変数関数および多変数関数の微分・積分について、基礎的な内容から解説する。また、本講義の内容について、より理解を深めるために適宜演習を行う。

【授業計画】1. 微分 1:極限と連続 2. 微分 2:微分 3. 微分 3:導関数の応用 4. 積分 1:不定積分 5. 積分 2:定積分 6. 積分 3:定積分の応用 7. 偏導関数 1:多変数の関数 8. 偏導関数 2:偏導関数 9. 偏導関数 3:全微分 10. 偏導関数 4:Taylor の定理 11. 偏導関数 5:偏導関数の応用 12. 重複積分 1:重複積分 13. 重複積分 2:多重積分の応用

【成績評価】出席状況、レポート、期末考査等により総合的に評価する。

【教科書】特に指定しない。適宜、資料を配布する。

【参考書】矢野健太郎, 石原繁 編「微分積分(改訂版)」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義内容を確実に理解するためにも、毎回の復習は欠かさずに行い、次回の講義に望んでもらいたい。成績評価に対する[講義の出席状況、レポートの提出状況]と[小テストの成績]の割合は 4:6 とする。

工業基礎物理 I

Industrial Basic Physics (I) 非常勤講師・佐近 隆義 1 単位

【授業目的】

【授業概要】力学・波動・電磁気学について、ごく初歩的分野を解説する。

【授業計画】1. 運動と力:質点及び剛体の力学, ニュートンの運動の法則, 運動量と力積・保存則 2. エネルギーと運動:仕事, 力学的エネルギー・保存則 3. 波動:等速円運動, 単振動, 波 4. 電気と磁気:クローン力, 電場と電圧, オームの法則・キルヒホッフの法則, 磁場・ローレンツ力 5. 試験

【成績評価】講義への参加状況と試験の成績を総合して行う。

【参考書】高等学校で使用される物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義の最終日に試験を実施するので、毎回の復習を欠かさず行うこと。

酵素工学

Enzyme Technology 教授・大島 敏久 2 単位

コミュニケーション

Communication 非常勤講師・林 徳治 1 単位

【授業目的】現代社会人のコミュニケーション活動において求められる情報活用能力のうち、とりわけ自己表現・伝達能力であるプレゼンテーションスキルについて取り上げ集中講義を行うことによって、コミュニケーションの重要性と個人の能力の向上を図る。

【授業概要】情報社会におけるコミュニケーション活動について取り上げ、意義および形態について考える。とくに各種メディアを利用したコミュニケーション活動について、メディアの特徴について集中講義する。とりわけ自己表現・伝達能力の向上をめざしたプレゼンテーションスキルズについて、各自が計画・実践・評価を通して修得する。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 各種情報メディアの利用のための実践評価法の修得を図る。
2. 情報活用能力としての自己表現能力の向上を図る。

【授業計画】1. 情報社会のコミュニケーション:私たちのコミュニケーション活動を見つめ直す 2. コミュニケーションの意義および形態 3. コミュニケーション活動におけるプレゼンテーション 4. レポート(到達目標 1 の一部評価) 5. プレゼンテーションスキルズの向上をめざした計画 6. プレゼンテーションスキルズの向上をめざした実践, 評価 7.

生物工学科(昼間コース)

プレゼンテーション(到達目標2の一部評価) 8. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率80%以上で、到達目標2項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(20%)、プレゼンテーション(50%)、期末試験(30%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE合格】出席率80%以上で、到達目標2項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(20%)、プレゼンテーション(50%)、期末試験(30%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】受講者に講義資料を配布する。

【参考書】情報教養研究会編「新・情報社会人のすすめ」(株)ぎょうせい

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

細胞工学

Cell Technology

助教授・長宗 秀明 2単位

【授業目的】様々な有用生体物質の生産や医療に応用される動物細胞の取り扱いや応用技術についての講義を行い、細胞工学の基礎的知識を修得する。

【授業概要】生理活性蛋白質や抗体などの有用物質の大量生産、また遺伝子治療や細胞医薬品として用いられる細胞の性質について講述し、細胞を活用するための細胞培養法、細胞融合法、遺伝子導入法などの様々な技術についての理解も図る。また細胞を応用するに際しての生命倫理的な側面についても討議する。

【受講要件】本科目受講は生化学1, 2, 及び3の単位取得を前提とし、分子生物学, タンパク質工学, 及び細胞生物学の受講も必須とする。

【履修上の注意】講義資料として配布するプリント類には英文記述も多く含まれる。従って講義内容を理解するに必要上、専門的な英語単語の修得に努めること。

【到達目標】

1. 動物細胞の一般的な性質と細胞増殖に必要な要件を理解する。
2. 細胞の培養技術や設備について理解を深める。
3. 細胞の物質生産への応用技術について理解を深める。
4. 細胞の医療への応用技術についての理解とその倫理的問題点の理解を深める。

【授業計画】1. 動物細胞の基礎知識と培養細胞の一般的な性質 1(細胞の構造と増殖) 2. 動物細胞の基礎知識と培養細胞の一般的な性質 2(細胞周期) 3. 細胞培養技術の基礎 1(培地, 血清, 細胞増殖因子) 4. 細胞培養技術の基礎 2(バッチ培養法と連続培養法) レポート課題提示 5. 中間試験: レポート提出(到達目標1及び2の一部評価), 細胞株(系)の樹立・維持・改変 6. 遺伝子導入法, 細胞融合法, 選択培養法 7. 抗体産生工学 1: 免疫学の基礎知識 8. 抗体産生工学 2: モノクローナル抗体及び組換え抗体の作製法と応用 9. 抗体産生工学 3: ヒト型抗体医薬品 10. 遺伝子マッピング法, 遺伝子診断法 11. 細胞医薬品や遺伝子治療への応用, 人工組織やクローン技術の概論 12. 培養細胞系を用いた化学物質の安全性試験法・グループ討論課題設定 13. 中間試験(到達目標3及び4の一部評価) 14. 細胞工学の展望と倫理的側面についてのグループ討論: レポート課題提示 15. 期末試験(到達目標1, 2, 3, 4の一部評価)・レポート提出

【成績評価】到達目標4項目の到達度は試験(中間30%, 期末50%)とレポート(20%)で評価する。試験は各項目毎に中間試験1回と期末試験1回を行う。4項目とも到達度60%以上かつ出席率80%以上を合格とする。

【JABEE合格】到達目標4項目の到達度は試験(中間30%, 期末50%)とレポート(20%)で評価する。試験は各項目毎に中間試験1回と期末試験1回を行う。4項目とも到達度60%以上かつ出席率80%以上を合格とする。

【教科書】Lodishら著「Molecular Cell Biology (4th ed.)」W. H. Freeman and Company 社と別途配布するプリントを教材として使用する。

【参考書】長宗秀明・寺田弘著「化学と生物実験ライン」単クローン抗体」廣川書店, 笹月健彦監訳「免疫生物学」南江堂, 村上浩紀・菅原卓也「細胞工学概論」コロナ社, その他必要に応じて講義中に紹介する。

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】長宗(M棟814, Tel:656-7525, E-mail:nagamune@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない。

細胞生物学

Cell Biology

教授・松田 佳子 2単位

【授業目的】生化学1, 2, 3で学んだ生命科学の基礎の上に立って生体の高次の制御機構を細胞を単位として理解させることを目的とする。

【授業概要】生命の基本単位である細胞についての知識とその細胞により構築される組織, 器官, 身体全体との関わりを理解させる。

【受講要件】生化学1, 2, 3と分子生物学を履修していること。

【履修上の注意】原則的に学習内容を理解させるためにレポートを課するが, 提出期日を厳守すること。レポートに関する講評を授業中に行うので注意すること。

【到達目標】

1. 細胞の構造と基本的性質を理解する。
2. 細胞の増殖と分化を理解する。
3. 細胞の情報伝達系を理解すると共に生命倫理, 工業倫理の問題を理解する。

【授業計画】1. 細胞を構成する成分(タンパク質, リン脂質, 糖脂質, コレステロール, 糖タンパク質, その他), レポート1(到達目標1の一部評価) 2. 細胞の構造, 細胞の種類 3. 中間試験1(到達目標1の一部評価) 4. 細胞内小器官 5. タンパク質の生合成と分泌 6. 細胞の機能(1) 7. 細胞の機能(2), 中間試験2(到達目標2の一部評価) 8. 細胞の分化, 増殖(1) 9. 細胞の分化, 増殖(2), レポート2(到達目標2の一部評価) 10. 組織, 臓器, 再生医療, 脳死と臓器移植(生命倫理の面からも講述) 11. 細胞外マトリックスと細胞 12. 細胞の情報伝達系(1), レポート3(到達目標3の一部評価) 13. 細胞の情報伝達系(2), 中間試験3(到達目標3の一部評価) 14. 細胞の運動 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率80%以上で、到達目標3項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%)、レポート(20%)、期末試験(50%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE合格】出席率80%以上で、到達目標3項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%)、レポート(20%)、期末試験(50%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】Lodishら著「Molecular Cell Biology (4th ed.)」W. H. Freeman and Company 社。

【参考書】特に指定しない。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】松田(化生棟710, Tel:656-7523, E-mail:matsuda@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:火曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

材料科学

Engineering Materials

非常勤講師・浅岡 憲三 2単位

【授業目的】材料のナノ構造, 材料の加工・成形法, 材料の機能と劣化, 生体内での材料と生体の相互作用に関する知識を修得する。

【授業概要】材料の機械的性質, 物理的性質, 化学的性質は, そのナノ構造に深く関わって決まっている。すなわち, 材料のミクロ構造とその欠陥を理解することがマクロ挙動を理解する基礎となる。金属物性学, 腐食や材料劣化の機構, 表面科学の概要を学習し, そうした知識をもとに生体融和材料設計の考え方と現用材料の問題点について講述する。

【受講要件】「基礎物理学」「基礎化学」の知識が不可欠である。

【履修上の注意】「物理化学」の履修を前提として講義を行う。

【到達目標】

1. 金属材料, 無機材料, 有機材料の物性の特徴とそのナノ構造との関係で理解する。
2. 材料の成形, 加工方法についての理解を深める。
3. 材料の機能, 物性の評価方法について理解する。
4. 生体内環境での材料の劣化, 生体反応について理解を深める。

【授業計画】1. 原子間, 分子間結合と材料のナノ構造 2. 応力とひずみ 3. 微視, ナノ構造の欠陥と材料の物理, 機械的性質の関係(1) 4. 微視, ナノ構造の欠陥と材料の物理, 機械的性質の関係(2) 5. 相平衡理論と材料の組成設計 6. 熱処理による材料の物理, 機械的性質の変化 7. 化学反応, 相変態, 塑性変形を利用した材料の加工法: レポート1(到達目標1, 2の一部評価) 8. 材料の腐食, 防食, 劣化の機構 9. 生体内環境での材料の機能と劣化 10. 金属系バイオマテリアル 11. セラミックス系バイオマテリアル 12. 高分子系バイオマテリアル 13. 生体と材料の融和 14. 現代医療とバイオマテリアル: レポート2(到達目標3, 4の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率80%以上で、到達目標の4項目がそれぞれ60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(30%)、期末試験(70%)で評価する。

生物工学科 (昼間コース)

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標の 4 項目がそれぞれ 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (30%)、期末試験 (70%) で評価する。

【教科書】堀内良・金子純一・大塚正久共訳「材料工学入門-正しい材料選択のために-」内田老鶴園

【参考書】宮入裕夫著「生体材料の構造と機能-生物から学ぶ材料の知能化と開発-」養賢堂

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

雑誌講読

Seminar on Biological Science and Technology

生物工学科全教官 1 単位

【授業目的】各研究室において、専門分野の研究論文ならびに参考文献について講読し、その内容について討論することにより、卒業研究に役立てるようその分野の知識を修得させることを目的とする。

【授業概要】各研究室において、専門分野の研究論文ならびに参考文献について講読し、その内容について討論する。

【受講要件】各研究室に配属された卒業研究に着手している学生のみ履修できる

【履修上の注意】2/3 以上の回数の出席が必須である。

【到達目標】

1. 専門分野の文献の検索ができる。
2. 英語で書かれた論文を理解できる。
3. 専門分野の研究の状況を理解できる。
4. 専門分野の研究の状況を理解できる。

【授業計画】1. 文献検索法 (図書館, インターネット利用) 2. 各種データベースの利用法 3. 専門分野の論文を読みこなす 4. 専門分野のレポートを英文で書く

【成績評価】各研究室で行っている定例の専門雑誌抄読会等に出席し、論文を読み、発表したものを指導教官が評価する。

【教科書】特に指定しない。

【参考書】適宜紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

職業指導

Vocational Guidance

非常勤講師・坂野 信義 4 単位

【授業目的】

【授業概要】生涯発達・Career Developing としての人間観・職業観を確立すべく、学際の見地から職業指導の課題と方法を論述し、併せて能力開発を実践指導する。

【授業計画】1. 職業指導の課題と方法 (1) 職業指導発展の略史 2. 職業指導の課題と方法 (2) 職業指導の課題 3. 職業指導の課題と方法 (3) 個性と職業:個人理解の方法-性格, 興味など 4. 職業指導の課題と方法 (4) 個性と職業:適応と適性 5. 職業指導の課題と方法 (5) 個性と職業:Career Planning としてのライフワーク 6. 職業指導の課題と方法 (6) 個性と職業:マネジメントスキル:リーダーシップ論など 7. 職業指導の課題と方法 (7) 職業相談 (キャリア・カウンセリング):職業相談の意義 8. 職業指導の課題と方法 (8) 職業相談 (キャリア・カウンセリング):カウンセリング理論と技術 9. 職業指導の課題と方法 (9) 職業指導の評価 10. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (1) 人生 60 年計画表の作成 11. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (2)IC 法, NM 法を活用してソフト作成能力を育成 12. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (3)KJ 法を活用しての課題解決とプレゼンテーション 13. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (4) シュルツの自律神経訓練法の理解

【成績評価】論文, 能力開発のプレゼンテーションにより成績評価。

【JABEE 合格】単位合格と同一

【教科書】講師よりプリント資料配布。

【参考書】参考書, 必読書については, 講義中紹介。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】「面白くてためになり, そして思い出に残る」講義が目標。

食品化学

Food Chemistry

非常勤講師・寺尾 純二 2 単位

【授業目的】食品成分の化学的・物理化学的性質や成分間の相互作用, さらに生体への機能について講義し, レポート等を実施して食品製造や食品品質管理に必要な食品化学の基礎知識を修得させる。

【授業概要】多種多様な成分から成る食品の構造と機能を化学の立場から理解させるために, 個々の食品成分の化学的および物理化学的性質や成分間反応について説明するとともに, それら成分が食品の栄養機能, 嗜好機能および生理機能に果たす役割を解説する。

【受講要件】「基礎化学」の履修を前提として講義を行う。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 食品中の主要成分の構造と機能の関係を理解する。
2. 食品成分間の反応と食品品質との関係の理解を深める。
3. 食品が備えるべき条件を理解し, 食品開発のための基礎知識を得る。

【授業計画】1. 食品成分の化学 1:水分, タンパク質 2. 食品成分の化学 2:炭水化物, 脂質 3. 食品成分の化学 3:ビタミン, ミネラル 4. 食品成分の化学 4:嗜好性成分・色・味・香 5. 食品成分の化学 5:有毒成分 6. 食品の嗜好性と物性 7. レポート 1(到達目標 1 の一部評価), 中間試験 1(到達目標 1 の一部評価) 8. 食品成分間の反応 1:酸化反応 9. 食品成分間の反応 2:褐変反応 10. レポート 2(到達目標 2 の一部評価), 中間試験 2(到達目標 2 の一部評価) 11. 食品学各論 1:植物性食品 12. 食品学各論 2:動物性食品 13. 食品の生理機能 14. レポート 3(到達目標 3 の一部評価), 中間試験 3(到達目標 3 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標 3 まで) の一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目がそれぞれ 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (20%), 中間試験 (40%), 期末試験 (40%) で評価する。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目がそれぞれ 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (20%), 中間試験 (40%), 期末試験 (40%) で評価する。

【教科書】「食品学総論」南江堂

【参考書】並木満夫・松下雪郎編「食品の品質と成分間反応」講談社サイエンティク

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

食品工学

Food Engineering

非常勤講師・武岡 彰一, 渡辺 忠美 2 単位

【授業目的】(武岡) 食品工場における実態を経験の中から体系的に説明し短期間で理解させる。(渡辺) 食品の貯蔵と加工技術について講読し, 食品加工の基礎事項と食品加工産業の最近の動向について理解する。

【授業概要】(武岡) 原料から製品が加工され客先まで, 品質を維持して到着するまでのプロセスおよび各工程における生産技術の実態を広範囲に説明する。(渡辺) 加工食品は日常の食生活において重要な地位を占め, 食品工業はわが国の製造業のなかで大きな比率をしめる巨大産業に成長している。講義では食品の加工技術, 貯蔵技術について講読し, さらに代表的な食品の製造・貯蔵の事例を説明する。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 食品製造業の実態について理解する。
2. 食品工場とはどこなところか? 原料を製品にかえるための変換プロセスの理解する。
3. 食品加工の目的について理解する。
4. 食品の加工法および保蔵法について理解する。

【授業計画】1. 食品製造業の現状について (特に大豆蛋白食品) 2. 大豆蛋白食品 (主に豆腐) の歴史と現状 3. 食品工場の微生物管理 4. 食品工場の環境対策の実態 5. 食品工場で発生するクレームの実態と対策 6. 食品機械の将来 7. 食品の味覚 (おいしさ) について, レポート 1(到達目標 1, 2 の一部評価) 8. 食品の変質要因と変質防止法 9. 食品加工の方法 (物理的手法, 化学的作用, 生物学的作用) 10. 食品加工機械・装置 11. 食品工場の設計・建設 12. 品質管理 13. 穀類の加工事例 14. 水産物の加工事例 15. 果実類の加工事例, レポート 2(到達目標 3, 4 の一部評価) 16. 期末試験 (到達目標 3 まで) の一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標 4 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (50%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で, 到達目標 4 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (50%), 期末試験 (50%) で評価する。

生物工学科(昼間コース)

【教科書】受講者に講義資料を配布する。
【参考書】小川正・的場輝佳編集「食品加工学」南江堂
【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
【連絡先】生物事務室(M棟703)
【備考】原則として再試験は実施しない。

植物工学

Plant Biotechnology 非常勤講師・福井 宏至, 新名 惇彦 2 単位

【授業目的】(福井) 生物としての植物の特徴・機能を概説し, 人間生活に深く関わる植物についてその機能と成分の観点から植物工学分野の基礎事項と最近の動向について理解する。(新名)21世紀の持続可能な社会構築への植物バイオテクノロジーの可能性を解説する。

【授業概要】(福井) 植物は地球上に有機化合物を供給する独立栄養生物であって, 特有の機能と生活環を持っている。人類をはじめとする従属栄養生物(動物や微生物など)はその生産物に依存して生活している。植物は, 目を楽ませる様々な花(生殖器官)を形成するだけでなく, 他の生物の生存を可能にする多種多様な有機化合物を生成・蓄積し, それらが医薬品原料や香料だけでなく工業原料としても幅広く利用されている。また, 地球環境の保全・修復にも欠かせない機能を有している。植物の特徴や機能を理解することは, 植物工学の基本であり, その応用をさらに広げるのに必須である。ここでは, 植物工学の観点から, 植物成分の特徴とともにその生産・蓄積能や植物細胞の分化全能性を講述し, 最近の動向についても説明する。(新名) 現在の人類・地球の抱える難問:食糧問題・水資源問題・環境問題, 植物の機能, 植物の遺伝子組換え技術, 耐塩性植物の分子育種, 植物による工業原料の生産。

【受講要件】生物学, 生化学の基礎を理解していること。

【履修上の注意】100年先の地球に問題意識をもっていれば, 受講効果は大きい。

【到達目標】

1. 植物の特性・機能を他の生物と比較しながら理解する。
2. 植物成分の特徴と共にその有用性を理解する。
3. 植物工学の可能性を理解する。
4. 現在の諸問題の状況を総合的に理解する。
5. 植物バイオテクノロジーの役割を理解する。

【授業計画】1. 植物機能 2. 分化全能性 3. 環境依存性(環境の人為制御) 4. 有用成分 5. 医薬品原料(リード化合物) 6. 有用成分のバイオ生産 7. 環境保全・修復 8. 花色の制御, レポート1(到達目標1, 2, 3の一部評価) 9. 地球と人類の歴史, 人口問題と地球の定員 10. 食糧増産の戦略, 水争いが国際紛争の火種 11. 禁断の実を口にした20世紀, 地球上の生命はすべて草である 12. 人類の救世主・遺伝子組換え技術, 遺伝子組換え技術による植物の改良 13. 海水を灌漑用水に:耐塩性植物の分子育種, 再生可能な植物バイオマスは化石資源の10倍 14. 植物による工業原料と燃料の生産, 持続可能な社会の実現に向けて, レポート2(到達目標4, 5の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率80%以上で, 到達目標5項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(50%), 期末試験(50%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE合格】出席率80%以上で, 到達目標5項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(50%), 期末試験(50%)で評価する。

【教科書】受講者に講義資料を配布する。

【参考書】鎌田博・原田宏著「植物のバイオテクノロジー」(中公新書787)中央公論社, 原田宏著「植物バイオテクノロジー, その展開と可能性」(NHKブックス581)日本放送協会刊, 田中秀夫ら共著「植物細胞工学」オーム社, 横田明穂編「植物分子生理学入門」学会出版センター, 山田康之・佐野浩編著「遺伝子組換え植物の光と影」学会出版センター

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生化学1

Biochemistry 1 教授・松田 佳子 2 単位

【授業目的】バイオテクノロジーの根幹は生命現象の研究である。生化学は生命を構成する物質の化学であり, 高度に制御された生物情報システムの理解に必要な生物を構成する生体分子とくにタンパク質, アミノ酸についての総合的理解を目的とする。

【授業概要】生命現象の理解のために必要な生化学の基礎について講述した後, 生体を構成する成分であるアミノ酸, タンパク質について講述する。

【受講要件】前期で有機化学1, 基礎生物学1を履修していること。後期で物理化学1, 有機化学2, 生化学2を履修すること。遺伝子工学, 細胞生物学, 生化学2, 生化学3を履修するためには生化学1の履修が必要である。

【履修上の注意】バイオテクノロジーの最も基礎となる科目であるため宿題を課すので, 期日までに提出すること。

【到達目標】

1. アミノ酸の構造と性質を理解する。
2. タンパク質を構成するアミノ酸の構造と一文字表記を修得する。
3. タンパク質の構造と機能を理解する。

【授業計画】1. 生化学序論(1) 2. 生化学序論(2) 3. アミノ酸の一般的性質 4. アミノ酸の構造とその性質(1) 5. アミノ酸の構造とその性質(2) 6. 特殊なアミノ酸, 中間試験1(到達目標1の一部評価) 7. アミノ酸代謝(1) 8. タンパク質・アミノ酸代謝(2) 9. タンパク質の構造(1)一次, 二次, 三次, 四次構造 10. タンパク質の構造(2), 中間試験2(到達目標2の一部評価) 11. タンパク質機能(1)血清タンパク質 12. タンパク質機能(2)酵素, 中間試験3(到達目標3の一部評価) 13. タンパク質機能(3)受容体 14. タンパク質機能(4)その他 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率80%以上で, 到達目標3項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%), レポート(20%), 期末試験(50%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE合格】出席率80%以上で, 到達目標3項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%), レポート(20%), 期末試験(50%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】「マッキー生化学」化学同人

【参考書】「ヴォート生化学(上, 下)」東京化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】松田(化生棟710, Tel:656-7523, E-mail:matsuda@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:火曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生化学2

Biochemistry 2 教授・辻 明彦 2 単位

【授業目的】糖質, 脂質の構造と機能およびエネルギー代謝に関する基礎事項について講述し, 生体内での代謝調節機構の基本原則と現代人の食生活の問題点を理解させる。

【授業概要】糖質(単糖, 二糖, 多糖, 複合糖質), 脂質(脂肪, 複合脂質, 誘導脂質の化学構造とその多様な生理機能(エネルギー源, 生体構成成分, 生理活性物質)について理解させる。次に糖質, 脂質から解糖系, TCA回路, β -酸化, 酸化的リン酸化によるエネルギー産生機構と制御について解説し, さらに受講者全員で栄養学的見地から食生活の問題点について討論する。

【受講要件】基礎生物学1, 2および生化学1を受講すること。

【履修上の注意】食生活に関するレポートを課すので, 平素から自分が飲食している食品の種類, 成分について関心を払うこと。資料を配布するので, 英語の基本的専門用語の習得に努力すること。

【到達目標】

1. 糖質, 脂質の構造と機能について理解する。
2. エネルギー代謝と代謝調節の基本原則について理解する。
3. 健康的な生活をおくるための栄養学知識について理解を深める。

【授業計画】1. 糖質, 脂質の構造, 機能, 代謝概説 2. 単糖類, 二糖類の分類と構造 3. 多糖類の構造と機能(1)デンプン, グリコーゲン, セルロース 4. 多糖類の構造と機能(2)ムコ多糖, ポリウロン酸 5. 複合糖質の構造と機能, レポート1(到達目標1の一部評価) 6. 脂質, 脂肪酸の分類と構造 7. リン脂質の分類と構造, 生体膜の構造, レポート2(到達目標1の一部評価) 8. 中間試験1(到達目標1の一部評価), 嫌気的解糖によるエネルギー産生 9. トリカルボン酸回路と酸化的リン酸化反応によるエネルギー産生 10. 脂肪酸の酸化とエネルギー産生 11. 代謝調節の基本原則, レポート3(到達目標2の一部評価) 12. エネルギー代謝の調節, 中間試験2(到達目標2の一部評価) 13. 食生活の栄養学的問題点について討議, 発表(1) 14. 食生活の栄養学的問題点について討議, 発表(2), レポート4(到達目標3の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率80%以上で, 到達目標1, 2の達成度は試験70%(中間30%, 期末40%), レポート30%とする。到達目標3は, グループ発表30%, レポート30%, 期末試験40%で評価する。3項目とも60%以上あれば合格とする(出席点は加えない)。

【JABEE合格】出席率80%以上で, 到達目標1, 2の達成度は試験70%(中間30%, 期末40%), レポート30%とする。到達目標3は, グループ発

生物工学科 (昼間コース)

表 30%, レポート 30%, 期末試験 40% で評価する。3 項目とも 60% 以上あれば合格とする (出席点は加えない)。

【教科書】「マッキー生化学」化学同人

【参考書】ヴォート生化学 (上, 下巻) 東京化学同人

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】辻(化生棟712, Tel:656-7526, E-mail:tsuji@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生化学 3

Biochemistry 3

教授・大島 敏久 2 単位

【授業目的】生命現象を演出する中心的な役割をもつ酵素について、生理的機能、触媒機能、調節機能の理解を図るために酵素の化学的特徴、構造と機能の相関について講義する。

【授業概要】酵素の発見とその後の研究の歴史、酵素の種類と分類、酵素化学的特徴、補酵素の役割、調節機構、反応機構などについて化学的な面を中心に基本的な知見を講義する。

【受講要件】生化学 1, 2 を履修しておくこと。

【履修上の注意】予習、復習をするように努めること。講義で理解しにくい点は、教科書や参考書等で学習するとともに、直接質問すること。

【到達目標】

1. 酵素研究の歴史的事象、酵素の命名法、活性測定法の原理を理解する。
2. ビタミン、補酵素、酵素の構造と機能の相関、特徴を理解する。

【授業計画】1. 酵素研究の歴史: 酵素の発見 2. 酵素研究の歴史: 酵素化学の研究と応用の発展 3. 酵素の種類と分類 4. 酵素の命名法 5. 酵素活性の定義と測定法 6. ビタミン、補酵素の構造と機能 7. 酵素の酵素科学的性質、レポート 1 (到達目標 1 の一部評価) 8. 中間試験 (到達目標 1 の一部評価) 9. 酵素反応速度論: Michaelis-Menten の式と Km, V 10. 酵素の阻害剤 11. 酵素阻害様式 12. 酵素の反応機構: 構造と機能相関 13. 酵素の調節機構: アロステリック調節とフィードバック阻害 14. 酵素の調節機構: アロステリック調節とフィードバック阻害 レポート 2 (到達目標 2 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80% 以上で、到達目標 2 項目が各々 60% 以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%), レポート (20%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80% 以上で、到達目標 2 項目が各々 60% 以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%), レポート (20%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】「マッキー生化学」化学同人

【参考書】大島敏久・左右田健次著「酵素のおはなし、第三刷」日本規格協会、西沢一俊・志村憲助著「新・酵素化学入門」南江堂、相坂和夫著「酵素サイエンス」幸書房、遠藤克己・三輪一智著「生化学ガイドブック」南江堂

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大島(M棟720, Tel:656-7518, E-mail:ohshima@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生産管理

Production Control

非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為に生産現場で何をしているかを理解する。

【授業概要】企業経営は経営資源 (ヒト・モノ・カネ・情報) を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果 (利益と持続性) を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で生産技術のキーとなる事項について講義する。講義計画に従い生産管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 生産管理 2. 生産計画 3. 原価管理 4. 経営システム (ISO) 5. IE (Industrial Engineering) 6. 品質管理と TQC 7. トヨタ生産方式 8. 中間及び最終レポート (生産管理のまとめ)

【成績評価】講義への取り組み状況、レポートの内容

【JABEE 合格】単位合格と同一

【教科書】その都度提供する。

【参考書】市販の生産管理に関する書籍、「生産管理便覧」丸善

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】出席率 80% (12 回)、レポート (中間と最終) の内容 20%

生体高分子学

Biological Macromolecule

教授・辻 明彦, 助教授・櫻庭 春彦 2 単位

【授業目的】我々の身体を形づくっている生体高分子 (主としてタンパク質) の組成、生合成、構造および性質について基礎的な知識を修得させる。

【授業概要】生体高分子の中でも特に中心的な役割を果たしているタンパク質 (酵素は除く) の構造と性質に重点を置いて講義を行う。生体高分子を扱うための研究方法に関しても実際の解説を加える。

【受講要件】生化学 1 および有機化学 1 を受講しておくこと。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. タンパク質の基本構造を理解する。
2. タンパク質の構造形成過程を理解する。
3. タンパク質研究の為に基礎的方法論を修得する。
4. 生体高分子としての細胞外マトリックスの性質と役割を理解する。

【授業計画】1. タンパク質の組成と分類 2. タンパク質の構造を規定する相互作用 3. タンパク質の二次、三次構造 4. タンパク質の構造形成 (1) 自由エネルギーの観点から 5. タンパク質の構造形成 (2) 構造形成の過程 6. 分子シャペロン、レポート (到達目標 1, 2 の一部評価) 7. 中間試験 (到達目標 1, 2 の一部評価) 8. タンパク質構造の研究手法 (1) 顕微鏡を用いた方法 9. タンパク質構造の研究手法 (2) 結晶構造解析および核磁気共鳴 10. タンパク質の化学合成とその応用 (1) 原理 11. タンパク質の化学合成とその応用 (2) 最近の応用例 12. 細胞外マトリックスタンパク質 (1) タンパク質成分 13. 細胞外マトリックスタンパク質 (2) 多糖類 14. 中間試験 (到達目標 3, 4 の一部評価)、総括 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80% 以上で、到達目標の 4 項目が各々 60% 以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (40%), レポート (20%), 期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80% 以上で、到達目標の 4 項目が各々 60% 以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (40%), レポート (20%), 期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】C.Branden・J.Toose 著、勝部・松原・松原監修「タンパク質の構造入門」

【参考書】J. McMurry 著「マクマリー有機化学 (下)」東京化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】辻(化生棟712, Tel:656-7526, E-mail:tsuji@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生体コロイド学

Biocolloid Science

非常勤講師・荒殿 誠, 竹田 邦雄 2 単位

【授業目的】第一線で活躍中の学外の研究者を講師に招き、生体コロイド分野の幾つかのトピックスについて集中講義を行うことで講師の人間性に触れ、学問とその応用分野の多様性を認識させる。

【授業概要】(荒殿) 界面と溶液における組織体形成について集中講義する。(竹田) 界面活性剤がタンパク質におよぼす効果について集中講義する。

【受講要件】物理化学 1, 2 および生物物理化学 1 の履修を前提とする。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 生体分子の自己組織化に関する分子間相互作用を理解する。
2. 界面活性剤とタンパク質の構造と機能を理解する。

【授業計画】1. 界面 (表面) が関与する現象の科学 2. 超分子と分子組織体 3. 溶液の性質と相平衡 4. 分子配向と組織化 5. 界面吸着膜の状態と状態変化 6. 溶液中における分子集合体・組織体形成 7. レポート (到達目標 1 の一部評価) 8. コロイドと界面活性剤: 序論 9. 界面活性剤水溶液の物理化学的性質 10. 界面活性剤の分類と工業的利用 11. 界面活性剤のタンパク質への結合 12. 界面活性剤によるタンパク質の構造変化 13. 崩壊したタンパク質の界面活性剤による再構築 14. レポート (到達目標 2 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80% 以上で、到達目標 2 項目が各々 60% 以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (50%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80% 以上で、到達目標 2 項目が各々 60% 以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (50%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

生物工学科(昼間コース)

【教科書】受講者に講義資料を配布する。
【参考書】日本化学会編「コロイド科学 I-IV」東京化学同人
【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能
【連絡先】生物事務室(M棟703)
【備考】原則として再試験は実施しない。

生体組織工学

Tissue Engineering 非常勤講師・石村 和敬, 樋田 一徳 2単位

【授業目的】人体を構成する細胞と組織、器官と器官系の構造と機能を理解させる。
【授業概要】細胞の基本的構造、組織の成り立ちと種類、器官を構成する組織の組み合わせについて解説し、人体の基本的構築を理解させる。
【受講要件】特になし。
【履修上の注意】予習、復習が必要である。
【到達目標】

1. 細胞の基本的構造とその機能を説明できる。
2. 組織の成り立ちと種類を説明できる。
3. 人体の器官の構造と働きを説明できる。

【授業計画】1. 人体の成り立ち、細胞と組織 2. 運動器系 3. 脈管系 4. 免疫系 5. 内分泌系 6. レポート1(到達目標1, 2の一部評価)、中間試験1(到達目標1, 2の一部評価) 7. 呼吸器系 8. 消化器系(1) 9. 消化器系(2) 10. 泌尿器系 11. 生殖器系 12. 神経系(1) 13. 神経系(2) 14. 感覚器系、レポート2(到達目標3の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率80%以上の者に対し、到達目標の3項目がそれぞれ60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(20%)、中間試験(30%)、期末試験(50%)で評価する。

【JABEE合格】出席率80%以上の者に対し、到達目標の3項目がそれぞれ60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(20%)、中間試験(30%)、期末試験(50%)で評価する。

【教科書】三木・井上監訳「からだの構造と機能」西村書店

【参考書】堺章著「目で見るからだのメカニズム」医学書院

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物環境工学

Environmental Bioengineering 教授・高麗 寛紀 2単位

【授業目的】地球生態環境を保全および修復するための生物環境工学について講述する。生態系の根幹をなすものは環境微生物であることより、生態環境制御のための環境生態学、環境微生物学、微生物制御工学および化学物質のリスクアセスメントについて最新の基礎知識、環境倫理及び環境経済を修得させる。

【授業概要】環境生態学、環境微生物学、環境微生物制御学、環境汚染、化学物質のリスクアセスメント、化学物質の環境中での動態解析、環境保全、環境修復、環境調和型微生物制御剤、環境経済及び環境倫理について講述し、生物環境工学の基礎学力の養成を図る。

【受講要件】有機化学1, 2および微生物学の履修を前提にして講義を行う。

【履修上の注意】講義の単元(1~4, 6~8, 10~12)が終わる毎に3回のレポート及び中間試験を実施するので、毎回の予習・復習は欠かせずに行うこと。

【到達目標】

1. 環境生態学を理解する。
2. 環境微生物学を理解する。
3. 環境微生物制御工学の原理と方法について理解する。
4. 環境保全工学、環境倫理及び環境経済を理解する。

【授業計画】1. 環境生態学(動物・植物) 2. 環境微生物の分類と役割 3. 環境微生物学(真菌) 4. 環境微生物学(細菌) 5. 中間試験1(到達目標1, 2の30%を評価)、レポート1(到達目標1, 2の20%を評価) 6. 環境微生物制御工学(物理的方法) 7. 環境微生物制御工学(化学的方法) 8. 環境微生物制御工学(生物的方法) 9. 中間試験2(到達目標3の30%を評価)、レポート2(到達目標3の20%を評価) 10. 環境制御汚染化学物質と制御方法 11. 環境調和型微生物制御剤の分子設計 12. 環境ホルモンと環境汚染化学物質をテーマとした環境保全工学と環境倫理 13. 環境制御方法に関する最新のトピックスと生物環境工学と環境経済との関連 14. 中間試験3(到達目標4の30%を評価)、レポート3(到達目標4の20%を評価) 15. 期末試験(到達目標全ての30%を評価)

【成績評価】出席率80%以上で、到達目標4項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度の評価方法は試験(中間試験3回:30%、期末試験:30%)、レポート3回:20%)及び平常点(講義中の口頭試問各自3回:20%)で行う。

【JABEE合格】出席率80%以上で、到達目標4項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度の評価方法は試験(中間試験3回:30%、期末試験:30%)、レポート3回:20%)及び平常点(講義中の口頭試問各自3回:20%)で行う。

【教科書】高麗寛紀他著「微生物制御工学」講談社サイエンティフィック

【参考書】E. P. オダム著/三島次郎訳「オダム基礎生態学」培風館

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】高麗(M棟813, Tel:656-7408, E-mail:kourai@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:前期:木曜日19:40~21:10後期:火曜日19:40~21:10)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物機能設計学

Medicinal Chemistry 教授・堀 均 2単位

【授業目的】生物機能設計学をメディシナルケミストリーと捉え、「生物機能を有機化学的手法で探索し創製する」を目的とし、生理活性・生物活性機能発現設計された薬物分子の分子構造と活性を分子レベルで考え、メディシナルケミストリーの基礎を学ぶ。

【授業概要】生物機能設計学としてのメディシナルケミストリーの基礎的問題を、分子標的法や定量的構造活性相関(QSAR)法を学びながら修得させ、ゲノム創薬化学を考える。

【受講要件】有機化学および演習、生物有機化学、生化学、分子生物学を履修。有機化学、生物有機化学、生化学の教科書を参考書として用いる。また分子模型の用意。

【履修上の注意】有機化学および演習、生物有機化学、生化学、分子生物学を受講していること。

【到達目標】

1. 生物機能設計としてのメディシナルケミストリーを理解する。
2. 生物機能を有機化学原理で探索できる(ドラッグディスカバリー/医薬品開発)。
3. 生物機能を有機化学原理で創製できる(ドラッグデザイン/薬剤分子設計)。
4. 生物機能分子の構造と活性を分子レベルで考えられる(メディシナルケミストリー的思考)。
5. 臨床試験、遺伝子治療の倫理的問題を理解する。

【授業計画】1. 生物機能設計学としてのメディシナルケミストリー 2. ドラッグデザイン入門:パイオアッセイ、リード 3. ドラッグデザイン入門:天然物, SAR, レポート1(到達目標1の一部評価) 4. ドラッグデザイン入門:ドラッグデリバリーシステム(DDS)、薬物代謝、臨床試験 5. ドラッグデザイン(1)分子修飾法、イソステリズム(等価性)、中間試験1(講義「ドラッグデザイン入門」に関する到達目標2~4の一部評価) 6. ドラッグデザイン(2)X線解析、分子標的的、レポート2(到達目標2~4の一部評価) 7. ドラッグデザインのケーススタディ(1) 8. 定量的構造活性相関QSAR(1)Hansch-Fujita式 9. QSAR(2)パイオイソステラ、レポート3(到達目標2~4の一部評価) 10. ドラッグデザインのケーススタディ(2)、中間試験2(QSARに関する到達目標2~4の一部評価) 11. コンピナトリアル・ケミストリー 12. レセプター(1):アゴニストとアンタゴニスト、薬剤耐性、レポート4(到達目標2~4の一部評価) 13. レセプター(2):Gタンパク質共役レセプター 14. 生命倫理:医薬品の臨床試験、遺伝子治療 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率80%以上で、到達目標5項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%)、レポート(30%)、期末試験(40%)で評価する。

【JABEE合格】出席率80%以上で、到達目標5項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%)、レポート(30%)、期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】Graham L. Patrick「An Introduction to Medicinal Chemistry 最新版」Oxford Univ. Pressの訳本『メディシナルケミストリー』(北川勲, 柴崎正勝, 富岡清 監訳, 丸善株式会社)

【参考書】David A. Williams & Thomas L. Lemke「Foye's Principles of Medicinal Chemistry」Lippincott Williams & Wilkins, C. G. Wermuth(Ed)「The Practice of Medicinal Chemistry」Academic Pr., Richard B. Silverman「The Organic Chemistry of Drug Design and Drug Action」Elsevier

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】堀(M棟821, Tel:656-7514, E-mail:hori@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日18:00~19:30)

生物工学科 (昼間コース)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物学演習 1

Exercise of Biological Science and Technology 1

教授・野地 澄晴, 助教授・大内 淑代, 助手・三戸 太郎 1 単位

【授業目的】インターネットを通じた遺伝子情報の収集, データ解析に習熟するとともに, 生物の発生に関わる遺伝子について理解を深める。

【授業概要】遺伝子情報データベースの利用法について演習する。特定の遺伝子について実際にリサーチを行いその結果についてプレゼンテーションを行う。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】リサーチ, プレゼンテーションは班単位で行うが, 班の成果を十分に理解し, 各自でレポートにまとめること。

【到達目標】

1. 遺伝子情報データベースを活用し, 必要な情報の収集とデータ解析を行うことが出来る。
2. 遺伝子の構造や発現に関する基礎を理解し, 適切なプレゼンテーションを行うことが出来る。

【授業計画】1. 遺伝子情報検索法の演習 2. ホモロジーサーチ法の演習 3. ゲノムデータベース利用法の演習, 中間試験 1(到達目標 1 の一部評価) 4. 遺伝子の構造に関するリサーチ 5. 遺伝子発現パターンに関するリサーチ 6. 転写調節に関するリサーチ, 中間試験 2(到達目標 2 の一部評価) 7. 遺伝子産物の構造と機能に関するリサーチ, レポート(到達目標全ての一部評価) 8. 期末試験(プレゼンテーション)(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(20%), レポート(40%), 期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で, 到達目標 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(20%), レポート(40%), 期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】特に使用しない

【参考書】Gilbert 著「Developmental Biology」Sinauer Associates, Inc. 等

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】三戸(化生棟804, Tel:656-7530, E-mail:mito@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:火曜日18:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物学演習 2

Exercise of Biological Science and Technology 2

教授・松田 佳子, 辻 明彦, 助手・湯浅 恵造 1 単位

【授業目的】基本的な有機化学反応を電子の動きを通して理解することによって, 有機分子の基本的な振る舞いについて学ぶ。

【授業概要】有機化合物の構造, 反応機構に関する演習を行う。基本的な有機化学反応のメカニズムと有機化合物の合成に関する例題を解き詳細に解説を行うことによって理解を深める。さらに理解度を確認する目的で演習問題を解く。

【受講要件】有機化学 1, 2 を受講していること。

【履修上の注意】有機化学を学び, 理解するためには, できるだけ多くの問題を解くこと, すなわち紙に実際に書いてみることで, 分子模型を使って考えることが不可欠である。また復習を行い, 理解を完全なものにすること。

【到達目標】

1. 基本的な有機化学反応における電子の動きを理解し正しく記述できる。
2. 有機化合物の立体化学を理解し立体構造を正しく記述できる。
3. 様々な有機化学反応を組み合わせることで, 望む化合物の合成ルートを導き出すことができる。

【授業計画】1. カルボニルの化学 2. 酸化と還元, カルボン酸誘導体, レポート 1(到達目標 1 の一部評価) 3. エノレートの化学, 中間試験 1(到達目標 1 の一部評価) 4. 付加反応と立体化学, レポート 2(到達目標 2 の一部評価) 5. 置換, 脱離, 転位反応, 中間試験 2(到達目標 2 の一部評価) 6. 芳香族化合物の化学, レポート 3(到達目標 3 の一部評価) 7. アミンとアミノ酸, 中間試験 3(到達目標 3 の一部評価) 8. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間テスト(30%), レポート(30%), 期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間テスト(30%), レポート(30%), 期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】毎回受講者に講義資料を配布する。

【参考書】「マクマリー有機化学(上)(中)(下)」東京化学同人, 「Jones Organic Chemistry」Norton

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】湯浅(化生棟714, Tel:656-7527, E-mail:yuasa@bio.tokushima-u.ac.jp), オフィスアワー:火曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。本演習は有機化学 1, 2 を取得した者が有機化学の総合的な理解を目的に行われている。よって予習, 復習をしっかりと行うことが望ましい。

生物学演習 3

Exercise of Biological Science and Technology 3

教授・金品 昌志, 助教授・松木 均, 助手・玉井 伸岳 1 単位

【授業目的】生命現象に関する研究を行う上で物理化学は常にその基礎となる。物理化学および生物物理化学の演習問題を通して, 生命科学における様々な巨視的現象を物理化学観点から理解し, 重要な物理法則を使いこなす能力を培うことを目標とする。

【授業概要】物理化学関連の講義に相応する問題を演習し, 内容を解説する。物質の巨視的な性質を記述する厳密な理論体系である化学熱力学に關係する種々の問題を数学的手段をもって解き, 基本的事項・法則の理解を深める。さらに講義の進行に併せて, 反応速度論, 電気化学の演習も行う。

【受講要件】物理化学 1, 2 を受講していることが望ましい。

【履修上の注意】教科書, 物理化学関連の講義ノート, 対数, 指数計算の可能な関数キー付き電卓を準備しておくこと。化学熱力学の理解をさらに深めるために, 統計力学の講義を受講しておくことを勧める。

【到達目標】

1. 化学熱力学関係式の意味を理解し, 正しく記述する。
2. 相平衡で成立する関係式を導出し, 物理化学現象に適用できるようにする。
3. 反応速度論, 電気化学の物理化学関係式を習熟する。

【授業計画】1. a) イントロダクション: 化学熱力学を学ぶにあたって, b) 気体分子運動論: 微視的性質と巨視的性質, 速度分布, レポート 1(到達目標 1 の一部評価) 2. 化学熱力学関係式 1: 熱力学第一法則(内部エネルギーとエンタルピー), レポート 1(到達目標 1 の一部評価) 3. 化学熱力学関係式 2: 熱力学第二法則(エントロピー), レポート 2(到達目標 1 の一部評価) 4. 化学熱力学関係式 3: 自由エネルギー(Helmholtz 関数と Gibbs 関数), レポート 3(到達目標 1 の一部評価) 5. 相平衡 1: 化学ポテンシャルと状態変化(相図), 混合の熱力学, レポート 5(到達目標 1, 2 の一部評価) 6. 相平衡 2: 溶液の性質(相図および束一的性質), レポート 6(到達目標 1, 2 の一部評価) 7. 化学平衡(反応), 反応速度論, 電気化学, レポート 7(到達目標 1, 3 の一部評価) 8. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(60%), 期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で, 到達目標 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(60%), 期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】W. J. ムーア著(藤代亮一訳)「物理化学(上)1-9章」東京化学同人

【参考書】R. A. アルバーティ著/妹尾 学・黒田晴雄訳「物理化学第 7 版(上), (下)」東京化学同人, D. エベレット著(玉虫伶太・佐藤弦訳)「入門化学熱力学第 2 版」東京化学同人, I. Levine「Physical Chemistry」4th Ed., Mac Grow Hill など

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】玉井(化生棟601, Tel:656-7515, E-mail:tamai@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:水曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物学演習 4

Exercise of Biological Science and Technology 4

教授・堀 均

助教授・永澤 秀子, 助手・宇都 義浩 1 単位

【授業目的】基本的な機器分析手法の原理・装置・スペクトルの解析法について修得することを目的とする。また, 簡単な有機化合物の構造決定を行うことで理解度を深めることを目的とする。

生物工学科 (昼間コース)

【授業概要】機器分析は分析化学のみならず有機化学・生化学の分野で非常に重要な役割を果たしている。よって、本演習では基本的分析法についての詳細な解説と演習問題を行うことにより構造解析法を修得する。

【受講要件】有機化学 1, 2 の履修を要する。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 各機器分析法の基本的な原理, 装置, 測定法を理解する。
2. 各スペクトルデータを用いた有機化合物の構造解析法を修得する。
3. 未知物質の構造解析法を修得する。

【授業計画】1. 核磁気共鳴分光法:原理, 装置, レポート 1(到達目標 1 の一部評価) 2. 核磁気共鳴分光法:測定法及び解析法, 中間テスト 1(到達目標 2 の一部評価) 3. 赤外分光法:原理, 装置, 測定法及び解析法, レポート 2(到達目標 1 の一部評価) 4. 質量分析法:原理, 装置, 測定法及び解析法, 中間テスト 2(到達目標 2 の一部評価) 5. 紫外可視分光法:原理, 装置, 測定法及び解析法, レポート 3(到達目標 1 の一部評価) 6. 蛍光分析法:原理, 装置, 測定法及び解析法, 中間テスト 3(到達目標 2 の一部評価) 7. クロマトグラフ法:原理, 装置, 測定法及び解析法, 中間テスト 4(到達目標 3 の一部評価) 8. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (20%), レポート (20%), 期末試験 (60%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (20%), レポート (20%), 期末試験 (60%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】毎回受講者に講義資料を配布する。

【参考書】Silverstein, Bassler, Morrill 著「有機化合物のスペクトルによる同定法」東京化学同人, 唐津 孝 (その他 5 名) 著「構造解析学」朝倉書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】宇都(M棟808, Tel:656-7517, E-mail:uto@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日10:25~11:55)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物工学演習 5

Exercise of Biological Science and Technology 5

教授・大島 敏久, 助教授・櫻庭 春彦, 助手・郷田 秀一郎 1 単位

【授業目的】英語で書かれた科学論文や実験プロトコルを読み, 科学英語の表現に慣れる。また, 実際に研究論文を読むことにより, 講義で得た知識や実験技術の理解を深める。

【授業概要】与えられた英文課題 (科学論文, 実験プロトコルなど) を読み, 設問に答える。また, 課題の内容について発表する。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】英和辞典を毎回必ず持ってくる。

【到達目標】

1. 英語の科学論文やプロトコルの読解により, 科学英語特有の表現等を身につける。
2. 細胞生物学及び生化学の基礎的知識を深める。
3. 実験技術の応用やデータ解析の実例に触れ, 理解を深める。

【授業計画】1. 英文読解 (1) 細胞生物学の基礎 (到達目標 2 の一部評価) 2. 英文読解 (2) 分子生物学の基礎 (到達目標 2 の一部評価) 3. 英文読解 (3) 実験プロトコル:タンパク質関連 (到達目標 1 の一部評価) 4. 英文読解 (4) 実験プロトコル:遺伝子関連 (到達目標 1 の一部評価) 5. 英文読解 (5) 学術論文:プロテアーゼの生理作用 (到達目標 3 の一部評価) 6. 英文読解 (6) 学術論文:プロテアーゼの活性化機構 (到達目標 3 の一部評価) 7. 課題発表会 8. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は演習への取り組み 30%, 課題 40%, 期末試験及び課題発表 30%で評価する。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は演習への取り組み 30%, 課題 40%, 期末試験及び課題発表 30%で評価する。

【教科書】受講者に課題を配布する。

【参考書】渡辺治夫・鈴木喜隆・小沢昭弥・長 哲郎編「英語論文と学会発表の手引 改訂日本語版」ITE/JEC Press Inc (U.S.A.)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】郷田(M棟718, Tel:656-7532, E-mail:goda@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:20-17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物工学演習 6

Exercise of Biological Science and Technology 6

教授・高麗 寛紀, 助教授・長宗 秀明, 助手・前田 拓也 1 単位

【授業目的】講義で得た微生物学および関連分野の基礎知識と関連する専門英語について演習を行うことにより, これらに習熟し, 微生物学的研究に取り組むために必要な基礎学力を充実させる。

【授業概要】微生物学および関連分野の基礎知識と関連する専門英語についての演習問題を解き, 詳細に解説を加えることにより理解を深める。またレポートおよび期末試験により習熟度の評価を行う。

【受講要件】微生物学 1, 2, 微生物工学を受講しておくこと。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 微生物学および関連分野の基礎知識に習熟する。
2. 微生物学に関連する専門英語に習熟する。

【授業計画】1. Introduction, レポート 1(到達目標 1, 2 の一部評価) 2. Structure and Function, レポート 2(到達目標 1, 2 の一部評価) 3. Metabolism, レポート 3(到達目標 1, 2 の一部評価) 4. Growth and Reproduction, レポート 4(到達目標 1, 2 の一部評価) 5. Genetics, レポート 5(到達目標 1, 2 の一部評価) 6. Ecology, レポート 6(到達目標 1, 2 の一部評価) 7. Application, レポート 7(到達目標 1, 2 の一部評価) 8. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (60%), 期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で, 到達目標 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (60%), 期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】講義資料を配布する。

【参考書】J. Nicklin 著/高木正道ら訳「微生物学キーノート」シュプリンガー・フェアラーク東京

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】前田(M棟817, Tel:656-7519, E-mail:maeda@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日10:25~11:55)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物工学実験 1

Experiments of Biological Science and Technology 1

教授・金品 昌志, 助教授・松木 均, 助手・玉井 伸岳 1 単位

【授業目的】物質の様々な物理定数を実験により求めることにより, 実験操作の技術と計画法およびデータ処理を会得する。また, 得られた実験結果を考察することにより, 講義における履修内容を再確認し, 物理化学的現象に対する理解を深める。

【授業概要】化学熱力学, 反応速度, 電気化学等の分野から選ばれた基本的な物理化学実験を行う。物理化学実験の操作習得のため, 実験には物理化学計測の基本となる科学実験操作 (秤量, 滴定, 温度測定等) を含む。レポート作成を通して, 物理化学の重要法則を学習し, 研究に対する姿勢を身につける。

【受講要件】物理化学 1, 2, 生物物理化学 1 および生物工学演習を受講していることが望ましい。

【履修上の注意】実験を始める前にあらかじめテキストを熟読しておくこと。実験を安全に行うため白衣の着用を義務付ける。さらに下記参考書を一読しておくこと。

【到達目標】

1. 物理化学, 生物物理化学の講義で学習した概念・法則を実験を通じて理解する。
2. 物理化学的測定を行う上での基本的実験操作および技術を習得する。
3. 実験結果について適切なデータ解析・処理と考察を行い, 明解な報告書にまとめる能力を養う。

【授業計画】1. ガイダンス 2. 無機塩水溶液の密度, レポート 1(到達目標 1, 3 の一部評価) 3. 界面活性剤水溶液の表面張力, レポート 2(到達目標 1, 3 の一部評価) 4. 共融混合物の状態図と凝固点降下, レポート 3(到達目標 1, 3 の一部評価) 5. 有機酸の水/油分配係数, レポート 4(到達目標 1, 3 の一部評価) 6. 電池の起電力, レポート 5(到達目標 1, 3 の一部評価) 7. エステル加水分解の反応速度, レポート 6(到達目標 1, 3 の一部評価) 8. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (60%), 期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

生物工学科 (昼間コース)

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (60%)、期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】小冊子「生物学実験 1」

【参考書】千原秀昭編「物理化学実験法」東京化学同人、鮫島実三郎著「物理化学実験法」裳華房、徳島大学工学部編「安全マニュアル」、化学同人編集部編「実験を安全に行うために」、化学同人編集部編「続実験を安全に行うために」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】玉井(化生棟601, Tel:656-7515, E-mail:tamai@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:水曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物学実験 2

Experiments of Biological Science and Technology 2

教授・堀 均, 助教授・永澤 秀子, 助手・宇都 義浩 1 単位

【授業目的】生体活性物質の構造と反応を理解し生物機能分子の設計を行うための基礎として、有機合成反応に関する実習を行う。

【授業概要】生体活性物質の合成として低分子医薬品及びペプチド甘味料の有機合成実験を行い、有機合成実験の基本操作と手法を修得する。

【受講要件】有機化学 1, 2 を受講していること。

【履修上の注意】事前に配布する実習書をよく読み実験の流れ及び反応を理解しておくこと。有機合成実験は 4 から 5 人の班単位で行うが、中間および期末試験に関しては一人ずつ行うので必ず全員が実験に参加すること。また、各自実験ノートを用意し実験記録をきちんとつけること。

【到達目標】

1. 有機合成実験における基本操作及び手法を習得する。
2. 有機合成実験における反応機構及び構造解析を習得する。
3. 有機合成実験におけるプレゼンテーション能力を習得する。

【授業計画】1. 実習講義:実験の目的・手順・注意事項などに関する説明 2. アセチルサリチル酸 (アスピリン) の合成:酸又は塩基触媒を用いたサリチル酸のアセチル化反応 3. アスパルテームの合成:アスパラギン酸の N 末端の Z 化 4. アスパルテームの合成:フェニルアラニンの C 末端のエステル化 5. アスパルテームの合成:プロテアーゼを用いたペプチド合成 (1) 6. アスパルテームの合成:プロテアーゼを用いたペプチド合成 (2) 7. アスパルテームの合成:Z 基の脱保護 8. アスパルテームの合成:アスパルテーム精製・定量と甘味度試験 9. 中間試験 1(到達目標 1 の一部評価) 10. 中間試験 2(到達目標 2 の一部評価) 11. 中間試験 3(到達目標 3 の一部評価) 12. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%)、レポート (30%)、期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%)、レポート (30%)、期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】小冊子「生物学実験 2」

【参考書】徳島大学工学部編「安全マニュアル」、化学同人編集部編「実験を安全に行うために」、化学同人編集部編「続実験を安全に行うために」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】宇都(M棟808, Tel:656-7517, E-mail:uto@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日10:25~11:55)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物学実験 3

Experiments of Biological Science and Technology 3

教授・高麗 寛紀, 助教授・長宗 秀明, 助手・前田 拓也 1 単位

【授業目的】微生物の簡易同定、増殖実験およびスクリーニング実験を通じて、微生物学実験に必要な基本操作に習熟するとともに、微生物学的研究をすすめる上で必要な考え方を修得する。

【授業概要】微生物の働きや性質、多様性について理解を深め、バイオセーフティの問題について考える。菌種同定、細菌芽胞実験、増殖実験を通じて微生物実験の基本操作を学ぶ。さらに、所期の試料、微生物についてスクリーニング実験を計画、実施、考察し、その実践方法について理解する。最後に、実験成果発表と討論を行うとともに、定期試験により修得事項の確認を行う。

【受講要件】微生物学 1, 2, 微生物工学を受講しておくこと。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 微生物を取り扱うための正しい基本操作を修得する。
2. 種々の同定操作を行い、菌種同定について理解を深める。
3. 細菌芽胞の取扱いを学び、微生物制御について理解する。
4. 微生物の増殖過程を定量的にモニターする方法について理解する。
5. 微生物のスクリーニング実験を計画、実施、考察し、その実践方法について理解する。

【授業計画】1. 微生物学の基礎 2. バイオセーフティ、レポート 1(到達目標 1 の一部評価) 3. 微生物の簡易同定 4. 細菌芽胞の取扱いと制御 5. 細菌の増殖と世代時間、レポート 2(到達目標 2, 3, 4 の一部評価) 6. スクリーニング実験の計画立案、実施 7. スクリーニング実験の成果報告、レポート 3(到達目標 5 の一部評価) 8. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 5 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (60%)、期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 5 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (60%)、期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】小冊子「生物学実験 3」

【参考書】徳島大学工学部編「安全マニュアル」、化学同人編集部編「実験を安全に行うために」、化学同人編集部編「続実験を安全に行うために」、日本生物学会編「生物学実験書」培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】前田(M棟817, Tel:656-7519, E-mail:maeda@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日10:25~11:55)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物学実験 4

Experiments of Biological Science and Technology 4

教授・野地 澄晴, 助教授・大内 淑代, 助手・三戸 太郎 1 単位

【授業目的】遺伝子工学の基礎となる分子生物学的実験技術を習得する。

【授業概要】核酸の精製、定量、制限酵素処理、大腸菌の形質転換、PCR 法等の基礎的な分子生物学実験を行う。

【受講要件】分子生物学を受講しておくこと。

【履修上の注意】予習を行い実験操作の原理を理解しておくこと。

【到達目標】

1. 分子生物学実験の原理を理解し、DNA、RNA を扱う際の基本操作に習熟する。
2. 組換え DNA 実験のための基本技術を習得する。
3. レポート作成を通じて、分子生物学実験の結果の解析、考察の仕方を習得する。

【授業計画】1. 分子生物学実験の基礎 2. DNA の定量と熱変性 3. プラスミドの分離精製 4. 制限酵素処理、アガロースゲル電気泳動法 5. 大腸菌の形質転換、レポート 1(到達目標全ての一部評価) 6. RNA の精製と定量 7. PCR 法、レポート 2(到達目標全ての一部評価) 8. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (60%)、期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (60%)、期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】小冊子「生物学実験 4」

【参考書】徳島大学工学部編「安全マニュアル」、化学同人編集部編「実験を安全に行うために」、化学同人編集部編「続実験を安全に行うために」、野地澄晴著「バイオ研究 はじめの一步」羊土社、Sambrook-Russell 著「Molecular Cloning」Cold Spring Harbor Laboratory Press

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】三戸(化生棟804, Tel:656-7530, E-mail:mito@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:火曜日18:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物学実験 5

Experiments of Biological Science and Technology 5

教授・大島 敏久, 助教授・櫻庭 春彦, 助手・郷田 秀一郎 1 単位

【授業目的】タンパク質や酵素活性の解析に関する生化学的方法の基礎を実習する。

【授業概要】タンパク質の精製、定量、解析、および酵素活性の測定、速度論的解析の基礎を実習する。

生物工学科(昼間コース)

【受講要件】生化学 1, 2, 3 を受講しておくこと。

【履修上の注意】あらかじめテキストをよく読み予習をしっかりと行って、実験を開始すること。実験を安全に行うため「安全マニュアル」徳島大学工学部編「実験を安全に行うために」、「統実験を安全に行うために」化学同人を一読しておくこと。

【到達目標】

1. 実験技術の仕組みを理解し、生化学的実験の基礎技術を身につける。
2. 実験結果の解析方法及び、結果から理論的に結論を導き出す考え方を学ぶ。
3. レポート作成や課題の発表を通して、プレゼンテーション技術を高める。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. カラムクロマトグラフィーによるタンパク質の精製 3. Lowry 法によるタンパク質の定量 4. SDS-PAGE によるタンパク質の分離 5. 分子量計算、レポート 1(到達目標 1, 2 の一部評価) 6. アルカリホスファターゼの活性測定 7. アルカリホスファターゼの至適 pH 測定 8. アルカリホスファターゼの Km 値測定、無機リン酸による阻害形式の解析 9. アルカリホスファターゼ活性に対する金属キレート剤(EDTA)及び各種金属イオンの影響、レポート 2(到達目標 1, 2 の一部評価) 10. 実験結果に関する発表(到達目標 3 の一部評価) 11. 実験結果の考察に関する発表(到達目標 3 の一部評価) 12. 実験結果に対する課題の発表(到達目標 3 の一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、レポートを提出しなければ成績評価の対象外となる。実験中における積極性、理解度、実験結果・考察及び課題の発表、レポートの提出状況と内容を総合して評価する。レポートの内容は採点基準に満たない場合、再提出を求められることがある。定期試験は実施しない。到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は平常点(実習態度)30%、レポート40%、課題発表 30%として評価する。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、レポートを提出しなければ成績評価の対象外となる。実験中における積極性、理解度、実験結果・考察及び課題の発表、レポートの提出状況と内容を総合して評価する。レポートの内容は採点基準に満たない場合、再提出を求められることがある。定期試験は実施しない。到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は平常点(実習態度)30%、レポート40%、課題発表 30%として評価する。

【教科書】小冊子「生物工学実験 5」

【参考書】徳島大学工学部編「安全マニュアル」、化学同人編集部編「実験を安全に行うために」、化学同人編集部編「統実験を安全に行うために」、D. Voet & J. G. Voet 著「ヴォート生化学」東京化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】郷田(M棟718, Tel:656-7532, E-mail:goda@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物工学実験 6

Experiments of Biological Science and Technology 6

教授・松田 佳子, 辻 明彦, 助手・湯浅 恵造 1 単位

【授業目的】低分子有機化合物の構造、機能、合成法を学ぶために欠くことのできない有機化学実験の基本操作の習得ならびに機器分析手法を用いた構造解析を行う。

【授業概要】ジペプチド誘導体に対して、様々な反応剤を用いながら構造決定を行う。この実験を通じて基本的な分離、分析法である薄層クロマトグラフィーの原理と使用法を習得する。さらに簡単な有機化合物の混合試料より、各々を化学的方法で分離し、精製し、各化合物及び、その誘導体の融点、スペクトルデータなどから、試料化合物の同定を行う。この実験を通じて基本操作(抽出、濃縮、濾過、再結晶等)を習得する。

【受講要件】有機化学 1, 2 および生物工学演習を受講していることが望ましい。

【履修上の注意】有機化学実験は危険な試薬を扱うことが多く、危険な実験が多く存在する。そのため保護眼鏡、白衣の着用を義務付ける。事故の防止が第一である。さらに参考書を実験前に熟読しておくこと。

【到達目標】

1. 基本的な分離、分析法である薄層クロマトグラフィーの原理と使用法を習得する。自由自在に使いこなせるようにする。
2. 有機化学実験の基本操作(抽出、濃縮、濾過、再結晶等)を習得し、その原理を理解する。
3. 機器分析より得られるスペクトルデータの解析法を理解し、構造解析が行えるようにする。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. ジペプチド誘導体の構造決定:薄層クロマトグラフィーによる純度検定 3. ジペプチド誘導体の構造決定:脱保護反応に基づく N-, C-末端保護基の決定 4. ジペプチド誘導体の構造決定:加水分解による構成アミノ酸の認定 5. ジペプチド誘導体の構造決定:ジニトロフェニル化による構成アミノ酸の配列決定、レポート 1(到達目標 1 の一部評価) 6. 中間試験 1(到達目標 1 の一部評価) 7. 2 種の有機化合物の分離と同定:pH の差による化合物の分離 8. 2 種の有機化合物の分離と同定:誘導体化による結晶化と再結晶 9. 2 種の有機化合物の分離と同定:融点測定 10. 2 種の有機化合物の分離と同定:スペクトル解析による化合物の同定、レポート 2(到達目標 2, 3 の一部評価) 11. 中間試験 2(到達目標 2, 3 の一部評価) 12. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標の 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%)、レポート(30%)、期末試験(40%)で評価する(出席点はない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標の 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%)、レポート(30%)、期末試験(40%)で評価する(出席点はない)。

【教科書】小冊子「生物工学実験 6」

【参考書】徳島大学工学部編「安全マニュアル」、化学同人編集部編「実験を安全に行うために」、化学同人編集部編「統実験を安全に行うために」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】湯浅(化生棟714, Tel:656-7527, E-mail:yuasa@bio.tokushima-u.ac.jp), オフィスアワー:火曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。予習がなければ、限られた時間内で実験の内容を理解し、結果を導き出すことは困難である。「有機化学 1, 2」、「生物有機化学」を復習し、さらに実験書、参考書を熟読していることが望ましい。

生物工学創成演習

Exercise to Creative Bioengineering

生物工学科教員 1 単位

【授業目的】学生の自発的創造性を引きだすことを目的とする。

【授業概要】学内インターンシップ及び生物工学演習を終えた学生は自主的にテーマを選び、調査、研究、発表を行う。

【受講要件】学内インターンシップ、生物工学演習 1, 2, 3, 4, 5, 6 を受講していること。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 各人がテーマを選択できる能力を修得する。
2. 選んだテーマについて調査、研究を行う能力を修得する。
3. 行った研究を発表する能力を修得する。

【授業計画】1. 調査・研究テーマ選びのための指導、討論 2. 調査・研究 1(実験のバックグラウンドと目的の理解) 3. 調査・研究 2(実験方法の理解) 4. 調査・研究 3(実験結果の理解) 5. 研究発表資料作成 6. 研究発表 7. 報告書作成 8. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は発表能力(30%)、報告書(30%)、期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は発表能力(30%)、報告書(30%)、期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】受講者に講義資料を配布する。

【参考書】プリントを配付する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物工学創成実験

Practice of Creative Bioengineering

生物工学科教員 1 単位

【授業目的】実験目的を各人が作成し、実験計画、及び方法を作る。

【授業概要】基礎化学実験及び生物工学実験を終えた学生は自主的にテーマを選び、研究を行う。

【受講要件】基礎化学実験、生物工学実験 1, 2, 3, 4, 5, 6 を受講していること。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

生物工学科 (昼間コース)

1. 研究テーマを考える能力を修得する .
2. 目的に合致した実験計画立案能力を修得する .
3. 実験結果について発表する能力を修得する .

【授業計画】 1. 実験テーマ・目的創成のための指導, 討論 2. 実験計画の立案 3. 実験方法のデザインと計画 4. 実験 5. 実験 6. 実験結果発表 7. 報告書作成 8. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】 出席率 80%以上で, 到達目標の 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする . 達成度は討論 (25%), 発表能力 (25%), 報告書 (30%), 学生の相互評価 (20%) で評価する (出席点は加えない) .

【JABEE 合格】 出席率 80%以上で, 到達目標の 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする . 達成度は討論 (25%), 発表能力 (25%), 報告書 (30%), 学生の相互評価 (20%) で評価する (出席点は加えない) .

【参考書】 各担当教官から与えられた論文等.

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 辻(化生棟712, Tel:656-7526, E-mail:tsuji@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:20~17:50)

【備考】 原則として再試験は実施しない .

【授業計画】 1. 植物と動物の違い概論 2. 植物細胞の構造 3. 植物細胞の機能, 代謝 4. 植物細胞におけるタンパク分解 5. レポート (到達目標 1 の一部評価) 6. 糖蛋白構造概論 7. 糖鎖の生合成機構 8. 糖鎖レクチンタンパクの生理機能 9. 糖鎖を介した情報伝達機構の制御 10. レポート (到達目標 2 の一部評価) 11. アラキドン酸カスケード概論 12. アラキドン酸カスケードの制御機構 13. プロスタグランジンの生理機能 14. プロスタグランジンの医学的応用, レポート (到達目標 3 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】 出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする . 達成度はレポート (50%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない) .

【JABEE 合格】 出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする . 達成度はレポート (50%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない) .

【教科書】 受講者に講義資料を配布する.

【参考書】 適宜紹介する.

【対象学生】 開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】 生物事務室(M棟703)

【備考】 原則として再試験は実施しない .

生物学特別講義 1

Special Lectures on Biological Science and Technology 1

非常勤講師 2 単位

【授業目的】 第一線で活躍中の学外の研究者を講師に招き, 生物学に関する幾つかのトピックスについて集中講義を行うことで講師の人間性に触れ, 学問とその応用分野の多様性を認識させる.

【授業概要】 形づくりの分子メカニズム, 神経細胞におけるカルシウム応答遺伝子群の発現制御機構, 記憶のメカニズムについて集中講義する.

【受講要件】 分子生物学を受講しておくこと .

【到達目標】

1. 発生工学の基礎を理解する .
2. 神経細胞生物学の基礎を理解する .
3. 脳の高次機能の基礎を理解する .

【授業計画】 1. 生物の初期発生メカニズム 2. 発生における細胞成長因子の役割 3. トランスジェニック動物の作製 4. ゲノムプロジェクトとモデル動物 5. レポート (到達目標 1 の一部評価) 6. 神経細胞の分化 7. 神経ネットワークの形成 8. 神経細胞のシグナル伝達 9. 神経の可塑性について 10. レポート (到達目標 2 の一部評価) 11. 昆虫の中樞神経系 12. 記憶のメカニズム 13. 記憶と神経の構造 14. 記憶と行動, レポート (到達目標 3 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】 出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする . 達成度はレポート (50%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない) .

【JABEE 合格】 出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする . 達成度はレポート (50%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない) .

【教科書】 受講者に講義資料を配布する.

【参考書】 適宜紹介する.

【対象学生】 開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】 生物事務室(M棟703)

【備考】 原則として再試験は実施しない .

生物学特別講義 3

Special Lectures on Biological Science and Technology 3

非常勤講師 2 単位

【授業目的】 第一線で活躍中の学外の研究者を講師に招き, 生物学に関する幾つかのトピックスについて集中講義を行うことで講師の人間性に触れ, 学問とその応用分野の多様性を認識させる.

【授業概要】 プロテアーゼの基礎と応用, 生体高分子, 特に蛋白質の立体構造と機能の関係, 補酵素の種類, 化学構造と機能との相関について集中講義する .

【受講要件】 特になし .

【到達目標】

1. プロテアーゼを理解する .
2. タンパク質の立体構造と活性の関係を理解する .
3. 補酵素の関与する酵素反応を理解する .

【授業計画】 1. プロテアーゼの分離と構造 2. セリンプロテアーゼの機能 3. システインプロテアーゼの機能 4. メタロプロテアーゼ, アスパラギン酸プロテアーゼの機能 5. レポート (到達目標 1 の一部評価) 6. 蛋白質の構造解析法概説 7. 蛋白質の立体構造 8. 蛋白質複合体の構造 9. 蛋白質の構造機能相関 10. レポート (到達目標 2 の一部評価) 11. 補酵素の構造 12. 補酵素の機能 13. アポ酵素の構造と機能 14. 補酵素の応用, レポート (到達目標 3 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】 出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする . 達成度はレポート (50%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない) .

【JABEE 合格】 出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする . 達成度はレポート (50%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない) .

【教科書】 受講者に講義資料を配布する.

【参考書】 適宜紹介する.

【対象学生】 開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】 生物事務室(M棟703)

【備考】 原則として再試験は実施しない .

生物学特別講義 2

Special Lectures on Biological Science and Technology 2

非常勤講師 2 単位

【授業目的】 第一線で活躍中の学外の研究者を講師に招き, 生物学に関する幾つかのトピックスについて集中講義を行うことで講師の人間性に触れ, 学問とその応用分野の多様性を認識させる.

【授業概要】 高等植物の液胞の機能分化, 細胞内転送に関わる糖鎖認識蛋白質の役割, アラキドン酸カスケードの生化学について集中講義する.

【受講要件】 特になし .

【到達目標】

1. 植物の生体制御を理解する .
2. 糖鎖の生体での役割を理解する .
3. 生体膜とアラキドン酸カスケードを介して, 脂質の役割を理解する .

生物学特別講義 4

Special Lectures on Biological Science and Technology 4

非常勤講師 2 単位

【授業目的】 第一線で活躍中の学外の研究者を講師に招き, 生物学に関する幾つかのトピックスについて集中講義を行うことで講師の人間性に触れ, 学問とその応用分野の多様性を認識させる.

【授業概要】 微生物系統分類学と分類学的検査法, 連鎖球菌性毒素性ショック症候群 (STSS) などの連鎖球菌感染症の分子病理学, 核医学と放射線がん治療について集中講義する .

【受講要件】 特になし .

【到達目標】

1. 生物学領域で扱う微生物の種類を理解し, 系統分類学的な検査方法の知識を得る .
2. 病原細菌による感染症の分子機構について理解を深める .
3. 放射化学の基礎を理解するとともに, 放射線の応用例についての知識を得る .

生物工学科(昼間コース)

【授業計画】1. 微生物系統分類学 2. 微生物同定法:生化学,免疫学的手法 3. 微生物同定法:遺伝学的手法 4. 微生物感染症診断法 5. レポート(到達目標1の一部評価) 6. 微生物感染症:細菌感染症 7. 微生物感染症:ウイルス感染症 8. 微生物感染症:真菌感染症等 9. 微生物病原因子論 10. レポート(到達目標2の一部評価) 11. 放射線生物学概論 12. 放射線腫瘍学総論 13. 放射線腫瘍学各論 14. 放射線安全管理学概論, レポート(到達目標3の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率80%以上で,到達目標3項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする.達成度はレポート(50%),期末試験(50%)で評価する(出席点は加えない).

【JABEE合格】出席率80%以上で,到達目標3項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする.達成度はレポート(50%),期末試験(50%)で評価する(出席点は加えない).

【教科書】受講者に講義資料を配布する.

【参考書】適宜紹介する.

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない.

生物資源工学

Bioresources

非常勤講師・梶見 武徳, 中野 長久, 吉田 敏臣 2単位

【授業目的】第一線で活躍中の学外の研究者を講師に招き,バイオマスの開発と利用に関する幾つかのトピックスについて集中講義を行うことで講師の人間性に触れ,学問とその応用分野の多様性を認識させる.

【授業概要】(梶見)海洋生物と医薬資源について集中講義する.(中野)未利用食資源の食資源への変換および高付加価値化による環境負荷低減とヒトの健康維持の関連について集中講義する.(吉田)発酵工学について集中講義する.

【受講要件】特になし.

【到達目標】

1. 陸上生物と比較して余り知られていない様々な海洋生物が貴重な医薬資源となることを理解する.
2. 食糧生産と地球環境とヒトの健康が互いにどのように関わっているかを,生態から分子生物学にいたる広範囲な論証の中から理解する.
3. 発酵工業について理解する.

【授業計画】1. 海洋生物の多様性と生態 2. 海藻から得られる医薬品 3. 海洋動物が生産する薬理活性物質 4. 海洋生物と化学物質 5. レポート(到達目標1の一部評価) 6. 世界の食糧生産とその加工技術の現状 7. 食糧生産と地球環境 8. 人口増加とも関わり,食糧と地球環境がヒトの健康にどう影響しているかを分子生物学のレベルで解説する 9. 地球環境と倫理 10. レポート(到達目標2の一部評価) 11. アルコール発酵 12. アミノ酸発酵 13. ビタミン発酵 14. 核酸発酵, レポート(到達目標3の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率80%以上で,到達目標3項目が60%以上達成されている場合をもって合格とする.達成度はレポート(50%),期末試験(50%)で評価する(出席点は加えない).

【JABEE合格】出席率80%以上で,到達目標3項目が60%以上達成されている場合をもって合格とする.達成度はレポート(50%),期末試験(50%)で評価する(出席点は加えない).

【教科書】受講者に講義資料を配布する.

【参考書】特に指定しない.

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない.

生物・生命関連法規

Ethical and Legal Regulation of Biologic Treatments and Materials

非常勤講師・杉源一郎 2単位

【授業目的】病原体, 遺伝子を対象として, 生物・生命科学が直面している危機管理の必要性と具体的対策を熟知すること, 及び21世紀における生物・生命研究の規範とも言うべき, risk/benefit 複眼思考を養成する.

【授業概要】爆発的な進展をみせる生物・生命科学は人類に大きな恩恵をもたらす一方で, バイオテロ, エイズ, 狂牛病に代表される感染性病原体の悪用や無辜感染が大きな問題となりつつある. さらに, 再生医療, 遺伝子診断などについても革命的技術としての遺伝子操作法に伴う新たな倫理問題が出現している. そこで本講義では, 感染性病原

体及び遺伝子操作法, 発生工学等を取りあげ, 恩恵と危機管理という両方の側面から生物・生命関連分野が直面する問題点を具体的に理解させる. さらにこの理解に基づいて, 特に危機管理の立場から生物・生命科学研究に課せられている倫理的あるいは法的規制を習得させる. 以上を通じ, 生物・生命を対象とする科学技術の更なる進歩を目指すにあたり, 認識基盤のひとつとなるべき, risk/benefit という相反する視点からの思考方法の習熟をめざす.

【受講要件】特になし.

【履修上の注意】特になし.

【到達目標】

1. 感染病原体の risk と管理のあり方を理解する
2. 遺伝子操作法の risk と benefit と管理のあり方を理解する
3. 発生工学の risk と benefit と管理のあり方を理解する

【授業計画】1. 感染病原体(細菌を中心として) 2. 感染病原体(ウイルスを中心として) 3. 感染病原体(プリオンを中心として) 4. 感染病原体対策(予防) 5. 感染病原体対策(対応) 6. レポート1(到達目標1の一部評価), 中間試験1(到達目標1の一部評価) 7. 遺伝子操作法の risk と benefit 8. 遺伝子診断の risk と benefit 9. 遺伝子操作の倫理問題とその管理 10. レポート2(到達目標2の一部評価), 中間試験2(到達目標2の一部評価) 11. 発生工学の risk と benefit 12. 発生工学の倫理問題とその管理 13. レポート3(到達目標3の一部評価), 中間試験3(到達目標3の一部評価) 14. 総合討論 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率80%以上で,到達目標3項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする.達成度はレポート(20%),中間試験(40%),期末試験(40%)で評価する.

【JABEE合格】出席率80%以上で,到達目標3項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする.達成度はレポート(20%),中間試験(40%),期末試験(40%)で評価する.

【教科書】受講者に講義資料を配布する.

【参考書】特に指定しない.

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない.

生物物理化学1

Biophysical Chemistry 1

助教授・松木 均 2単位

【授業目的】化学平衡の取り扱いおよび化学反応の動力学的側面に関する講義を行い, それらの物理化学的な概念について修得させる.

【授業概要】化学反応を物理化学的に理解するためには, 平衡状態で成り立つ静的条件と, 平衡状態までの反応速度や反応機構に関する動的条件の両方を検討する必要がある. 本講義の前半部分では, 化学平衡が成立するための条件を熱力学的に導出し, 平衡定数の意味や平衡定数への熱力学変数の効果を解説する. 後半部分では, 化学反応が平衡状態に至るまでの過程を取り扱い, 様々な化学反応に対する反応速度をそれら反応に対する微分方程式を解き, 導出する. さらに特殊な反応の反応速度についても説明する.

【受講要件】物理化学1, 2の履修を前提として講義する.

【履修上の注意】講義中に理解度確認のため2回の中間試験を行うので, 予習と復習をしっかりと行うこと.

【到達目標】

1. 化学平衡の条件と平衡定数の意味について熱力学的に理解する.
2. 反応速度の取り扱いを理解し, 基本的速度式の導出ができる.
3. 幾つかの重要な反応速度式を導出し, かつその速度式が導出できる.
4. 生物物理化学が関与する生命倫理的問題を理解する.

【授業計画】1. 化学親和力(1) 化学平衡の条件, 理想気体反応の平衡 2. 化学親和力(2) 濃度単位と平衡定数, Le Chatelier-Braun の原理 3. 化学親和力(3) 平衡定数の圧変化及び温度変化, 平衡定数の計算 4. 化学親和力(4) 非理想系の平衡(フガシチーと規約), レポート1(到達目標1の一部評価) 5. 化学反応速度論(1) 化学変化の速度, 反応の次数と分子数, 中間試験1(到達目標1の一部評価) 6. 化学反応速度論(2) 一次反応速度式, 二次反応速度式 7. 化学反応速度論(3) 反応次数の決定, 正逆両方向反応 8. 化学反応速度論(4) 詳細釣り合いの原理, 速度定数と平衡定数 9. 化学反応速度論(5) 連続反応, 平行反応, 化学緩和, レポート2(到達目標2, 3の一部評価) 10. 化学反応速度論(6) 反応速度に及ぼす温度の影響, 中間試験2(到達目標2, 3の一部評価) 11. 化学反応速度論(7) 活性複合理論とその熱力学 12. 化学反応速度論(8) 単分子気体反応, 連鎖反応 13. 化学反応速度論(9) 爆発反応, 酵素反応, 酵素反応の速度 14. 化学反応速度論(10) 酵素阻害, 生物物理化学の生命倫理的問題, レポート3(到達目標4の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

生物工学科 (昼間コース)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 4 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%)、レポート (20%)、期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 4 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%)、レポート (20%)、期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】W. J. ムーア著 (藤代亮一訳)「物理化学 (上)8, 9 章」東京化学同人

【参考書】R. A. アルバーティ著/妹尾学・黒田晴雄訳「物理化学 (上) および (下)」東京化学同人、慶井富長著「反応速度論 第 2 版」東京化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】松木(化生棟609, Tel:656-7520, E-mail:matsuki@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:金曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物物理化学 2

Biophysical Chemistry 2

教授・金品 昌志 2 単位

【授業目的】細胞膜の構造や生体内反応を理解するための基礎となる界面現象・電解質溶液論の初歩を履修し、生命現象が分子やイオンのレベルで理解できるよう基礎知識を修得させる。

【授業概要】電解質溶液の基本的概念と電極反応の取り扱い方について講述する。さらに界面現象とコロイド溶液の性質についても述べる。本講義の前半部分では、電解質溶液の性質とその熱力学的取り扱いを述べ、電池の概念について説明する。後半部分では、電極電位に基づき、幾つかの電気化学的現象を解説する。次に界面において成立する熱力学関係式を導出し、吸着や会合形成などの界面が関与する物理化学的現象について事例を挙げて説明する。

【受講要件】物理化学 1, 2 の履修を前提として講義する。

【履修上の注意】講義中に理解度確認のため 2 回の中間試験を行うので、予習と復習をしっかりと行うこと。

【到達目標】

1. 電解質溶液の基本的概念とその取り扱い方を理解する。
2. 電極反応の熱力学的取り扱いができる。
3. 界面現象とコロイド溶液の性質について理解を深める。

【授業計画】1. 電気化学:イオン論 (1)Faraday の法則、電量計、電気伝導率の測定 2. 電気化学:イオン論 (2) モル電導率、平方根則、イオン独立移動の法則 3. 電気化学:イオン論 (3)Arrhenius の電離説、輸率と移動度、イオン活量 4. 電気化学:イオン論 (4) イオン強度、Debye-Huckel の理論、レポート 1(到達目標 1 の一部評価) 5. 電気化学:イオン論 (5) 酸と塩基、電離平衡、中間試験 1(到達目標 1 の一部評価) 6. 電気化学:電極論 (1) ポテンシャルの定義、電池の起電力 7. 電気化学:電極論 (2) 自由エネルギーと可逆起電力、電池の標準起電力 8. 電気化学:電極論 (3) 標準電極電位、電池の起電力の計算、濃度電池、レポート 2(到達目標 2 の一部評価) 9. 電気化学:電極論 (4) 浸透膜平衡、神経伝導、中間試験 2(到達目標 2 の一部評価) 10. 界面 (1) コロイド状態、表面張力、曲面の表面張力 11. 界面 (2) 溶液の表面張力、界面の熱力学 12. 界面 (3) 単分子膜、二分子膜、細胞膜 13. 界面 (4) 会合性コロイド、Langmuir の吸着等温式 14. 界面 (5) 界面電気現象、レポート 3(到達目標 3 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%)、レポート (20%)、期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%)、レポート (20%)、期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】W. J. ムーア著 (藤代亮一訳)「物理化学 (上)10 章」「物理化学 (下)11, 12 章」東京化学同人

【参考書】A. R. デロナ著/本多健一訳「基礎電気化学」東京化学同人、玉虫伶太著「電気化学第 2 版」東京化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】金品(化生棟607, Tel:656-7513, E-mail:kanehina@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:水曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物無機化学

Bioinorganic Chemistry

助教授・永澤 秀子 2 単位

【授業目的】無機化学、化学結合論の基礎をふまえて、生体反応における多様な金属原子の役割を分子レベルで理解し、生命現象を化学的にとらえる視点を身に付ける。

【授業概要】まず、化学結合論、無機化学、錯体化学の基礎から、生物無機化学を理解するために必要な要点を学ぶ。次に、生体機能分子による様々な生物反応のうち、特に金属錯体を含む分子による重要な反応を例にとり、金属分子の担う役割を中心に解説する。

【受講要件】基礎化学、有機化学 1, 2 を受講すること。

【履修上の注意】講義ノートの整理と復習を毎回行っておくことが必要である。

【到達目標】

1. 結晶場 (配位子場) 理論について説明できる。
2. 錯体中の遷移金属イオンの電子配置を説明できる。
3. 金属錯体を含む生体分子の構造と反応機構を説明できる。

【授業計画】1. 生物無機化学とは 2. 原子・分子の構造と化学結合 3. 遷移元素入門 (1) 量子数 4. 遷移元素入門 (2) 電子の配置、レポート及び中間試験 (到達目標 1 の一部評価) 5. 錯体化学 (結晶場理論)(1) 結晶場分裂 6. 錯体化学 (結晶場理論)(2) 錯体の安定性 7. レポート及び中間試験 (到達目標 2 の一部評価) 8. 酵素分子の輸送に関わるタンパク質 (ヘモグロビン、ミオグロビン) 9. 酵素分子の活性化に関わるタンパク質 (シトクロム P450) 10. 情報伝達に関わるタンパク質 (1) チャンネルとポンプ 11. 情報伝達に関わるタンパク質 (2) リガンド依存性イオンチャンネル 12. 金属イオンによる生体分子の折りたたみと架橋 (ジンクフィンガー) 13. 金属イオンによる生体分子の折りたたみと架橋 (EF ハンド)、中間試験 (到達目標 3 の一部評価) 14. 生命倫理と金属錯体を含む生体機能分子の分子設計、レポート (到達目標 3 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。到達度は中間試験 (60%)、期末試験 (20%)、レポート (20%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。到達度は中間試験 (60%)、期末試験 (20%)、レポート (20%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】リパード・パーク「生物無機化学」東京化学同人

【参考書】J. McMurry 著「マクマリー有機化学 (上)」東京化学同人、G. I. ブラウン「初等化学結合論」培風館、J. A. Cowan「Inorganic Biochemistry -An Introduction-」VHC

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】永澤(M棟820, Tel:656-7522, E-mail:nagasawa@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:木曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない

生物有機化学

Bioorganic Chemistry

教授・堀 均 2 単位

【授業目的】『動物と植物は共生しなければお互い生きられない』ということから植物化学的視点から捉え、本「生物有機化学」を学修する。そのためには、その生体成分の構造と機能の化学的理解が必須である。本講義では天然物有機化学およびその理論を基礎として、天然由来の有機化合物の分離、構造および生合成、さらにそれらの生物活性について分子レベルで学ぶ。

【授業概要】植物や動物の体内には様々な構造をもつ有機化合物が存在する。それら有機化合物の生命現象に関連する反応や機能を「有機化学のこぼれ」で論じるための基礎として、それらの分離、構造および生合成、さらに生物活性に関する基本的な問題を説明する。

【受講要件】有機化学や生化学の基礎を履修していること。

【履修上の注意】有機化学の教科書の一冊および分子模型は持参すること。生化学の教科書も参考にしてほしい。

【到達目標】

1. 天然有機化合物の分子構造について化学的に説明できる。
2. 天然有機化合物の生合成を理解する。
3. 天然有機化合物の生物活性を説明できる。
4. ライフサイエンスとしての天然物化学の重要性を理解する。
5. 遺伝子資源としての天然物に関する倫理的問題の理解。

【授業計画】1. 生物有機化学とは。天然有機化合物の抽出・分離・精製、化学構造の決定 2. 生合成概要と遺伝子、遺伝子資源の倫理的問題 3. 脂肪酸関連化合物、脂質、糖質、レポート 1(到達目標 2 の一部評価) 4. モノテルペン、セスキテルペン 5. ジテルペン、レポート 2(到達目標 1~4 の一部評価) 6. セスタテルペン、トリテルペン 7. カロテノイドとステロイド、レポート 2(到達目標 1~4 の一部評価) 8. フェニルプロパノイド、中間試験 1(テルペノイドに関する到達目標 1~4 の一

生物工学科(昼間コース)

部評価) 9. キノン, γ -ピロン, フラボノイド 10. タンニン, α -ピロン 11. その他の芳香族化合物, アミノ酸, レポート 3(到達目標 1~4 の一部評価) 12. 脂肪酸アミノ酸由来アルカロイド, 中間試験 2(フラボノイド等に関する到達目標 1~4 の一部評価) 13. 芳香族アミノ酸由来アルカロイド (1) 14. 芳香族アミノ酸由来アルカロイド (2), レポート 4(到達目標 1~4 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標 5 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%), レポート (30%), 期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で, 到達目標 5 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%), レポート (30%), 期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】田中 治ら編著「天然物化学 最新版」(南江堂)

【参考書】林 七雄ら著「天然物化学への招待-資源天然物の有効利用を目指して-」三共出版, Paul M. Dewick「Medicinal Natural Products A Biosynthetic Approach」Wiley

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】堀(M棟821, Tel:656-7514, E-mail:horii@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日18:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない。

専門外国語

Foreign Language for Engineers 教授・金品 昌志, 堀 均
教授・松田 佳子, 野地 澄晴, 大島 敏久 2 単位

【授業目的】専門外国語の例として, 科学英語特に生化学関連の英語については, 生物工学科にとり重要なものと考えられるため, 英語で書かれた教科書や外国の文献になじませ, 科学英語の基礎力を養う。

【授業概要】生化学関連の英語教科書や外国論文の例を示し, 学生に音読, 和訳及び内容の説明などを行わせることにより, 発音と読解力を養成する (主として演習形式で行い, 質問を与え, 説明を加える)。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】主として演習形式で行うので, 音読, 和訳, 内容の理解など毎回の予習は欠かさず行っておくこと。

【到達目標】

1. 科学英語論文の読み方を習得する。
2. 科学英語表現とその使い方を習得する。

【授業計画】1. 科学英語教科書などの読み方 (1) 生化学 2. " (2) 医学 3. " (3) 生化学的手法 4. " (4) 遺伝子工学的手法 5. " (5) 酵素に関するもの数列 6. " (6) 物質代謝に関するもの数列 7. " (7) 遺伝子発現に関するもの数列 8. " (8) 細胞情報伝達に関するもの数列 9. レポート 1(到達目標 1 の一部評価), 中間試験 1(到達目標 1 の一部評価) 10. 科学英語表現とその使い方 11. 科学英語論文 (生化学領域) 12. 科学英語論文 (遺伝子工学領域) 13. 科学英語論文 (細胞工学領域) 14. レポート 2(到達目標 1 の一部評価), 中間試験 2(到達目標 1 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標の 2 項目がそれぞれ 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (20%), 中間試験 (40%), 期末試験 (40%) で評価する。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で, 到達目標の 2 項目がそれぞれ 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (20%), 中間試験 (40%), 期末試験 (40%) で評価する。

【教科書】受講者に講義資料を配付する。

【参考書】千原秀昭ら著「化学英語の活用辞典」化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

卒業研究

Undergraduate Work 生物工学科全教官 6 単位

【授業目的】与えられたテーマについての計画・実験 (または調査) 結果の考察に至るまでの作業を通して, 自ら考え行動できる自主性, 創造性を養うことを目的とする。また, 論文執筆や発表会を通して, 文章の書き方, 表現力, プレゼンテーション能力を身に付けることを目的とする。

【授業概要】研究グループごとに異なるが, 一般的には, 各研究テーマに関連する専門書や論文をグループ内で輪講し, 文献調査を行い, 指導者と相談しながら実験 (または調査) を遂行する。定期的なゼミが開かれ, 実験の経過報告などを行いディスカッションする。

【受講要件】生物工学科が定める「卒業研究着手規定」に記載されている要件をすべて満たし, 生物工学科科学会において承認を得た者のみ卒業研究に着手できる。

【履修上の注意】履修に当たり, 当初に実験研究または調査研究のいずれかを選択すること。

【到達目標】独創的研究を教官の指導を受けて遂行することができる。(または調査研究を行い, 報告書を作成, 口演することができる。)

【授業計画】1. 卒業研究テーマ説明:特別な時間を設けての各グループの研究テーマ説明は行わない。インターンシップやオフィスアワーを利用して, 各自で研究室の研究内容を把握すること。また, 2 月下旬に行われる卒論・修論発表会を必ず聴講すること。2. 配属先決定:3 月初旬に, 単位取得状況を掲示により公表する。卒研着手資格を満たした学生を対象に配属先希望アンケートを実施する。アンケートをもとに学科会議において配属先を決定し, 掲示により通知する。3. 卒業研究実施:各研究室ごとに, 教官の指導のもとで卒業研究を行う。4. 卒業論文提出・発表会:研究結果をまとめた論文を 2 月中旬までに提出し, 2 月下旬に行われる卒業論文発表会で研究成果を発表する。

【成績評価】卒業研究への取り組み姿勢 (日頃の実験態度など), 提出された卒業論文の内容, 発表会における発表態度とプレゼンテーションの内容などを総合判断して 100 点満点で評価し, 60 点以上を合格とする。

【JABEE 合格】卒業研究への取り組み姿勢 (日頃の実験態度など), 提出された卒業論文の内容, 発表会における発表態度とプレゼンテーションの内容などを総合判断して 100 点満点で評価し, 60 点以上を合格とする。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

タンパク質工学

Protein Engineering 教授・辻 明彦 2 単位

【授業目的】タンパク質の構造と機能の相関およびタンパク質の機能変化技術について講述し, タンパク工学の基礎事項と最近の動向について理解する。

【授業概要】生体には酵素 (反応触媒), 構造タンパク (細胞組織の支持体), 運動タンパク (筋肉, 鞭毛), 分化増殖因子 (情報伝達分子), 受容体 (情報アンテナ), 貯蔵タンパク, 輸送タンパク, 遺伝子発現調節因子等多様なタンパク質が存在する。これらタンパク質の持つ機能の工学や医療への応用は, 21 世紀のバイオテクノロジーの中心課題である。講義では基本的なタンパク質の諸性質と構造について講述し, 代表的なタンパク質について機能構造相関, 機能変化技術と応用例について説明する。また受講者全員で改変タンパク質作製に伴う工学, 生命倫理について討論する。

【受講要件】生化学 1, 2, 分子生物学を受講しておくこと。

【履修上の注意】最近のタンパク工学の動向とトピックスについてレポートを課すので, 関連した新聞記事, テレビ番組, 学術雑誌など見ておくこと。英語プリントを配付するので, 英語の専門用語の習得に努力すること。

【到達目標】

1. タンパク質の構造と機能相関の解析方法について理解する。
2. タンパク質の機能変化方法 (化学修飾, 遺伝子組換え) について理解する。
3. タンパク質の発現系の構築と精製法について理解する。
4. タンパク工学における工学および生命倫理問題の理解。

【授業計画】1. タンパク質工学概論 (医薬応用と工学応用) 2. タンパク質の構造, 安定性, 活性とその役割, レポート 1(到達目標 1 の一部評価) 3. 中間試験 1(到達目標 1 の一部評価), 構造比較によるタンパク質の機能部位の解析 4. 変異タンパク設計 5. 化学修飾によるタンパク質の機能変化と応用例, レポート 2(到達目標 2 の一部評価) 6. 中間試験 2(到達目標 2 の一部評価), 遺伝子組換え (欠失, 融合) によるタンパク質の機能変化 7. 遺伝子組換え (アミノ酸変異) によるタンパク質の機能変化 8. タンパク質の発現系の構築 (原核細胞, 真核細胞, 無細胞タンパク質合成システム) 9. タンパク質の翻訳後修飾反応 10. 発現タンパク質の精製 (1) 11. 発現タンパク質の精製 (2) レポート 3, 中間試験 3(到達目標 3 の一部評価) 12. 最近のトピックスについてグループ発表 (1)(到達目標 1, 2, 3 の一部評価) 13. 最近のトピックスについてグループ発表 (2)(到達目標 1, 2, 3 の一部評価) 14. 改変タンパク質作製に伴う工学, 生命倫理についてグループ討論, 発表, レポート 4(到達目標 4 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標の 1~3 項目が各々達成されているかを試験 60%(中間 30%, 期末 30%), レポート 20%, グループ発表 20%で評価し, 到達目標 4 は, グループ発表 30%, レポート 30%,

生物工学科 (昼間コース)

期末試験 40%で評価する。4項目とも60%以上あれば合格とする(出席率は含まない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標の1~3項目が各々達成されているかを試験 60%(中間 30%, 期末 30%), レポート 20%, グループ発表 20%で評価し、到達目標 4 は、グループ発表 30%, レポート 30%, 期末試験 40%で評価する。4項目とも60%以上あれば合格とする(出席率は含まない)。

【教科書】「タンパク質 科学と工学」講談社

【参考書】「できるバイオインフォマティクス」中山書店

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】辻(化生棟712, Tel:656-7526, E-mail:tsuji@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 3項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%), レポート(30%), 期末試験(40%)で評価する。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 3項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(30%), レポート(30%), 期末試験(40%)で評価する。

【教科書】藤田泰徳「基礎からはじめる JavaScript/Java Applet & HTML」セレンディップ

【参考書】プロジェクト A「標準 HTML, CSS, JavaScript 辞典」インプレス

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】追試験・再試験は行わない。

知的所有権概論

Intellectual Property

非常勤講師・酒井 徹 1 単位

【授業目的】知的所有権制度を理解し、知的所有権の保護と制度の活用的重要性を各種の事例を基に修得する。

【授業概要】科学技術創国立国を目指す我が国において、知的所有権の保護と制度の活用が、行政・産業界・大学・研究所にとって不可欠であるとの共通認識を持つ必要性を説くとともに、知的所有権制度の概要と、その活用法を、企業の特許戦略、特許侵害事件などの事例を紹介しつつ講義し、学生が将来、企業・大学・研究所などへ進んだ場合について知っておくべき知的所有権に関する基礎知識の修得をはかる。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】2日間の集中講義であるために全時間の出席を要する。

【到達目標】

1. 知的所有権の概念についての理解を深める。
2. 特許法、商標法、意匠法、著作権法について理解する。

【授業計画】1. 知的所有権とは 2. 知的所有権制度の概要(特許・商標等) 3. 知的所有権制度の概要(意匠・著作権制度等) 4. 特許発明と特許権侵害(含む事例研究) 5. 知的所有権の管理とその活用(企業・大学・研究所) 6. 今後の研究開発と知的所有権のあり方 7. 試験(到達目標1および2の評価)

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを試験 70%, 講義への取り組み状況 30%で評価し、平均で 60%あれば合格とする。

【JABEE 合格】到達目標が各々達成されているかを試験 100%で評価し、各々60%以上あれば合格とする。

【教科書】特製テキストを用いる。

【参考書】中山信弘著「知的所有権」日刊工業新聞社、通産省特許庁編「これからは日本も知的創造時代」通産産業調査会

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】酒井(Tel:03-5600-2631, Fax:03-5600-2649)

統計力学

Statistical Mechanics

助教授・道廣 嘉隆 2 単位

【授業目的】ミクロな世界とマクロな世界を結びつける、統計力学を修得させる。

【授業概要】統計力学は物質を扱う学問分野の基礎の一つである。統計力学は原子・分子等のミクロな世界と我々の身の回りのマクロな世界を結びつける橋であり、物質の性質を原子的な構造から導くものである。

【受講要件】量子力学を履修しているものとする。微分積分の基礎的知識を要求する。

【到達目標】

1. 統計集団を理解する。
2. 統計集団とマクロな物理量の関係を理解する。
3. 量子統計の特徴を理解する。
4. 簡単な系に応用することができる。

【授業計画】1. はじめに(1)統計力学的な見方 2. はじめに(2)微視的状態 3. 巨視的状態量(1)エントロピー、温度 4. 巨視的状態量(2)圧力、化学ポテンシャル 5. 集団、分布(1)ミクロカノニカル分布 6. 集団、分布(2)カノニカル分布 7. 集団、分布(3)グランドカノニカル分布 8. 熱力学の基本法則(1)熱力学第一法則 9. 熱力学の基本法則(2)熱力学第二法則 10. 古典統計、ボルツマン統計 11. 量子統計(1)フェルミ統計 12. 量子統計(2)ボース統計 13. 統計力学の応用例(1) 14. 統計力学の応用例(2) 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】期末試験の成績と授業への取り組み状況を総合して行う。

【JABEE 合格】期末試験の成績と授業への取り組み状況を総合して行う。

【教科書】久保 亮五著、統計力学、共立出版

【参考書】朝永 振一郎著 量子力学 I, II みすず書房, 碓井 恒丸著 統計力学 丸善, キッテル著 熱物理学 丸善

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】道廣(A203)

【備考】到達目標 4 は発展的内容である。

電子計算機概論及び演習

Introduction to Digital Computers and Programming Practice

非常勤講師・村井 礼 2 単位

【授業目的】プログラミングを通して、論理的な思考能力の修得を目指す。

【授業概要】インターネットやコンピュータを初めとする情報技術(IT)は既にインフラ技術として認知されており、これからの社会にはITの活用が必須となる。JavaScriptによるWebプログラミングを通して、インターネットの概要や役割、Webアプリケーションの実際を学ぶと共に、実務に役立つデータ処理手法を修得する。

【受講要件】パソコン操作の基礎を学んでいること。

【履修上の注意】最新の技術に関する演習であるため、平日頃から新聞や雑誌などに目を通してIT関連ニュースに注目すること。

【到達目標】

1. インターネットの役割を理解する。
2. Webアプリケーションのプログラミングを理解する。
3. 実務に役立つデータ処理手法を理解する。

【授業計画】1. インターネットの仕組みと役割 2. Webアプリケーションの実際 3. HTMLによるホームページの作成 4. スタイルシートを用いたレイアウトの作成 5. 中間試験1(到達目標1, 2の一部評価) 6. JavaScriptプログラミングの基礎 7. 文字列の表示 8. 算術演算 9. Windowの操作 10. 制御構造 11. 中間試験2(到達目標1, 2の一部評価) 12. フォームによるデータ入出力 13. Javaアプレット 14. レポート(到達目標2, 3の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

ニュービジネス概論

Introduction to New Business

非常勤講師・出口 竜也

第一線の実務経験者 2 単位

【授業目的】ベンチャー企業は、新しいアイデアや専門的な知識・技術を事業化し、新しい創造的な事業を展開するバイオニカの企業である。この授業の目的は、アイデアや専門的知識・技術を事業化する、つまりベンチャー企業を起業するためのスピリットとノウハウを提供することにある。

【授業概要】政府は活力ある日本社会を創るために、大学発ベンチャー企業の育成や人材の育成を目指している。政府目標は、3年間で1,000社の大学発ベンチャー企業の創出である。本講義は、それを実現できるように徳島県が支援して開設された「学生起業家創業支援講座」である。学生諸君がベンチャー企業の設立に挑戦し、事業を展開していく手助けとなるような授業内容となっている。第一線で活躍されている実務家やアドバイザーを講師として招き、実際に役立つ知識を講義していただく。授業は、大きく分けて4つの部分から構成されている。第一は、導入としてのベンチャーとは何かの説明である。第二は、設立の方法と資金の手当てについてである。第三は、経営のノウハウである。最後に、ベンチャーを起業するにあたって不可欠のビジネスプラン(事業計画)の作成実習を行う。

【受講要件】工学部以外の受講希望者も教室収容能力の許すかぎり受講可能である。単位修得については所属部局の規則に従うこと。

【履修上の注意】遅刻や授業中の私語は厳禁である。

【到達目標】

生物工学科 (昼間コース)

- ベンチャービジネスを起業するために必要な知識を修得すること
 - ビジネスプランが作成できるようにすること
- 【授業計画】1. ガイダンス 2. 基調講演「ゼロからのスタート」 3. 独立型ベンチャー成功のための理論 4. 会社設立の方法 (法律や会社設立手続き) 5. 資金調達と資本政策 6. 銀行の役割と利用方法 (間接金融) 7. 株式発行による資金調達 (直接金融) 8. 会社経営の基礎 (計画・資金繰り・組織) 9. 企業会計の基礎知識 10. 経営戦略とマーケティング 11. 製品開発と知的所有権 12. ビジネスプラン作成のポイント 13. ビジネスプラン作成実習 14. 筆記試験 (4~11の内容に関する試験) 15. ビジネスプランの発表会 16. 予備日
- 【成績評価】到達目標の達成度で評価し、到達目標を達成しているものを合格とする。授業計画 4~11 は筆記試験 (60%) で、12,13,15 はビジネスプランの提出分 (40%) で評価する。
- 【JABEE 合格】。【成績評価】に同じである。
- 【教科書】各授業でレジメを配布する。
- 【参考書】各授業で紹介する。
- 【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能
- 【連絡先】出口(2216, 656-7183, deguchi@ias.tokushima-u.ac.jp)
- 【備考】ビジネスプランはグループで作成する。

バイオインフォマティクス

Bioinformatics 助教授・小野 功 2 単位

- 【授業目的】バイオインフォマティクスとは何かについて理解するとともに、主なバイオインフォマティクス技術について幅広く習得することを目的とする。
- 【授業概要】遺伝子の生命の設計図としての位置付け、およびゲノム解析プロジェクトの概況について紹介した後、バイオインフォマティクスの分野で精力的に研究されている遺伝子発見、タンパク質の立体構造予測、タンパク質の立体構造予測、遺伝子ネットワークを中心に紹介する。
- 【受講要件】生化学 1, 2, 分子生物学を受講しておくこと。
- 【履修上の注意】特になし。
- 【到達目標】
- バイオインフォマティクスによるゲノム機能解析方法の基礎について理解する。
 - バイオインフォマティクスによるタンパク質構造、機能解析の基礎について理解する。
- 【授業計画】1. バイオインフォマティクス概論 2. ゲノム解析プロジェクト (1) ゲノム解析技術 3. ゲノム解析プロジェクト (2) ゲノムデータベースとその利用法 4. 遺伝子発見 (1) 隠れマルコフモデル 5. 遺伝子発見 (2) 隠れマルコフモデルを用いた遺伝子発見 6. 遺伝子の機能予測 (1) 動的計画法 7. 遺伝子の機能予測 (2) ホモロジー検索 8. 遺伝子の機能予測 (3) モチーフ検索, レポート 1 (到達目標 1 の一部評価) 9. タンパク質の立体構造予測 (1) 立体構造解析技術 10. タンパク質の立体構造予測 (2) 二次構造予測 11. タンパク質の立体構造予測 (3) 三次構造予測 12. 遺伝子ネットワーク推定 (1) プーリアンネットワークを用いた推定 13. 遺伝子ネットワーク推定 (2) 微分方程式を用いた推定 14. 遺伝子ネットワーク推定 (3) 細胞シミュレーション, レポート 2 (到達目標 2 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)
- 【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (40%), 期末試験 (60%) で評価する (出席点は加えない)。
- 【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (40%), 期末試験 (60%) で評価する (出席点は加えない)。
- 【教科書】「遺伝子とコンピュータ-生命の設計図をひもとく-」共立出版株式会社
- 【参考書】「できるバイオインフォマティクス」中山書店, 「バイオインフォマティクス-確率モデルによる遺伝子配列解析-」医学出版, 「実践バイオインフォマティクス」オライリー・ジャパン
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】生物事務室(M棟703)
- 【備考】原則として再試験は実施しない。

バイオリクター工学 1

Bioreactor Engineering 1 教授・川城 克博 2 単位

- 【授業目的】酵素反応速度論, リクター内の物理現象, 酵素の固定化法及び固定化酵素の性能変化等を理解させ、バイオリクターの設計に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】均相系及び固定化酵素の反応速度論を解説し、酵素反応用バイオリクター設計の基礎について講述する。

【受講要件】反応速度論関係の講義を履修しておくことが望ましい。

【到達目標】

- 生体触媒 (酵素) の特性を理解する。
- 酵素反応速度論を修得する。
- 酵素の固定化法と固定化酵素の性質を理解する。

【授業計画】1. 酵素反応プロセスとバイオリクター工学 2. 酵素反応の特異性 3. Michaelis-Menten 式と動力学定数の算出法 4. 阻害剤が存在する場合の速度式 5. 多基質反応のメカニズムと速度式 6. 阻害剤が存在する場合の酵素反応の経時変化 7. 中間試験 8. バイオリクター内の物理現象 9. バイオリクターの分類と特徴 10. 酵素の固定化法 11. 固定化酵素の性能に及ぼす諸因子 12. 活性・反応特異性に及ぼす因子 13. リクターの性能に及ぼす因子 14. バイオリクターの設計 15. 予備日 16. 定期試

【成績評価】授業への取り組み・レポートの提出状況と内容 (平常点), 中間および期末試験を総合して評価する。平常点と試験の評価の割合は 4:6 とする。

【教科書】海野 肇・中西一弘・白神直弘著「生物化学工学」講談社サイエンティフィック

【参考書】堀越弘毅・虎谷哲夫・北爪智哉・青野力三著「酵素 科学と工学」講談社サイエンティフィック, 山根恒男著「生物反応工学」産業図書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】川城(化308, 656-7431, kawasiro@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】適宜レポートを課すとともに中間試験を実施する。レポートは次回の講義日の前日までに提出すること。

バイオリクター工学 2

Bioreactor Engineering 2 非常勤講師・葉久 英生 2 単位

【授業目的】抗生物質, アミノ酸, 糖, ビタミン等の生産及び環境浄化・廃水処理を目的としたバイオリクターの基礎知識を修得させる。

【授業概要】微生物や酵素を利用したバイオリクターは様々な分野で利用されている。バイオリクター工学 1 で履修した基礎理論をもとに、抗生物質, アミノ酸, 糖, ビタミン等の生産及び環境浄化・廃水処理を目的としたバイオリクターの基礎について論述する。

【受講要件】有機化学 1, 2, 生物無機化学, 微生物学 1, 2 および微生物工学を必ず受講していること。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

- 微生物を利用したバイオリクターについて理解する。
- 酵素を利用したバイオリクターについて理解する。

【授業計画】1. バイオリクター概論 2. 微生物反応の速度論 3. 抗生物質生産のバイオリクター 4. アミノ酸生産のバイオリクター 5. 糖・ビタミン生産のバイオリクター 6. 合成有機化合物の微生物分解 7. 生分解に関する試験法, 難分解生物, 化学構造と生分解性 8. 微生物による廃水処理概論 9. 好気性消化, 活性汚泥, 生物膜, 酸化池 10. 嫌気性消化, コンポスト化, 微小動物による処理概論 11. 物質生産のバイオリクター設計 12. 活性汚泥処理のバイオリクター設計 13. 生物膜処理のバイオリクター設計 14. 嫌気性消化のバイオリクター設計, レポート (到達目標 1, 2 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (50%), 期末試験 (50%) で評価する。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 2 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート (50%), 期末試験 (50%) で評価する。

【教科書】受講者に講義資料を配布する。

【参考書】千種薫著「図説・微生物による水質管理」産業用水調査会, 須藤隆一「環境浄化のための微生物」講談社, 五訂「公害防止の技術と法規」(水質編)

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

発生工学

Developmental Bioengineering 助教授・大内 淑代 2 単位

生物工学科 (昼間コース)

【授業目的】生物の多様な形はどのようにしてできるのか。形態形成の基本となる時間軸にそった遺伝子発現調節の仕組みを知り、その工学的応用と最近の動向を理解する。

【授業概要】動物の形態形成における遺伝子発現調節機構、関連する遺伝子産物の役割、動物における遺伝子操作技術について講義する。授業前半では、最近の発生工学に関する倫理問題について受講者自ら問題を提起し、レポートとして各自考えをまとめて提出する。

【受講要件】分子生物学を受講しておくこと。

【履修上の注意】予習、復習を行い積極的に学習し、ノートを作成すること。教科書については講義初日に再確認する。

【到達目標】

1. 動物の形態形成における基本的遺伝子発現調節機構について理解する。
2. 動物の発生過程に遺伝子産物がどのように関与しているか理解を深める。
3. 発生工学的技術の基礎を学ぶ。
4. 発生工学における工学および生命倫理問題について認識し考える。

【授業計画】1. 発生生物学-研究の背景と基本概念 1-:体軸、発生の基本過程 2. 研究の背景と基本概念 2:誘導、モルフォゲン 3. 研究の背景と基本概念 3:モデル動物、ツールキット遺伝子 4. 発生工学と倫理:レポート提出 (到達目標の4の一部評価) 5. 核移植と体細胞クローン 1:研究の背景 6. 核移植と体細胞クローン 2:問題点と応用 7. ショウジョウバエの初期発生の分子機構 1 8. ショウジョウバエの初期発生の分子機構 2 9. 中間試験 (到達目標の1~3の一部評価)、四肢初期形成の分子メカニズム 10. 神経発生の基礎 11. 眼の発生と進化 12. 幹細胞、器官形成、再生 13. 発生と形態進化 14. 発生工学に関する最近のトピックス 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 4 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%)、期末試験 (50%)、レポート (20%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 4 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%)、期末試験 (50%)、レポート (20%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】上野直人・野地澄晴編著「発生生物学がわかる」羊土社および講義中に配付するプリント

【参考書】木下圭・浅島誠著「あたらしい発生生物学」講談社

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】大内(化生棟801, Tel:656-7529, E-mail:hohuchi@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:金曜日18:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない。

微生物学 1

Microbiology 1

助教授・櫻庭 春彦 2 単位

【授業目的】遺伝子組換えや発酵工学に応用される微生物の種類と構造、エネルギー獲得系と生体内酸化還元反応との関係、生合成経路など、微生物学一般の基礎的知識を修得する。

【授業概要】生物学領域では多種多様な微生物を取り扱う。従ってこれらの微生物の特徴を正しく理解することが必要となる。本講義では栄養要求性など微生物を取り扱うために必要な基本事項を講述する。また、これらの微生物の多様なエネルギー代謝等について講義し生命圏における微生物の占める位置についての理解を図る。

【受講要件】生化学 1, 2 を受講しておくこと。

【履修上の注意】本講義においては中間試験及び期末試験を行い総合評価の対象とするため、毎回の予習と復習を欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. 微生物の栄養要求性の多様性を理解する。
2. 酸化還元反応とエネルギー代謝の関連を理解する。
3. 地球環境と微生物の関わりについて理解を深める。

【授業計画】1. 微生物の種類と構造 2. エネルギー獲得様式の概要 3. 微生物の栄養要求性・レポート 1(到達目標 1 の一部評価) 4. 中間試験 1(到達目標 1 の一部評価) 5. 有機物酸化型エネルギー代謝と発酵 6. 無機物酸化型エネルギー代謝 7. 生体内酸化還元反応とエネルギー代謝・レポート 2(到達目標 2 の一部評価) 8. 中間試験 2(到達目標 2 の一部評価) 9. 光エネルギーと微生物 10. エネルギー代謝系の進化 11. 地球環境と微生物 12. 微生物による生合成・レポート 3(到達目標 3 の一部評価) 13. 中間試験 3(到達目標 3 の一部評価) 14. 中間試験解説 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%)、レポート (30%)、期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%)、レポート (30%)、期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】山中健生著「微生物のエネルギー代謝」学会出版センター ISBN 4-7622-9496-9

【参考書】Brock Biology of Microorganisms ISBN 0-13-081922-0

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】櫻庭(M棟719, Tel:656-7531, E-mail:sakuraba@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:金曜日16:20~17:20)

【備考】原則として再試験は実施しない。

微生物学 2

Microbiology 2

助教授・長宗 秀明 2 単位

【授業目的】遺伝子組換えや発酵工学などに応用される微生物に関する知識と、それを取り扱い制御するための技術についての知識を得る。また感染症を起こす病原微生物に関しても理解を深め、感染免疫学の知識も習得する。

【授業概要】生物学領域ではウイルス、細菌、菌類など多くの微生物を取り扱う。従ってこれらの微生物の構造や特徴を正しく理解し、微生物を取り扱うために必要な基礎知識の理解を図る。また微生物と宿主の相互作用についても述べ、感染免疫学の知識の習得を図る。

【受講要件】生化学 1 及び 2 を受講しておくこと。また微生物学 1 の履修を必須とする。

【履修上の注意】講義資料として配布するプリント類には英文記述も多く含まれる。従って講義内容を理解する必要上、専門的な英語単語の修得に努めること。

【到達目標】

1. 微生物の分類・種類の概要とその構造及び特徴を理解する。
2. 微生物の増殖の特性や遺伝学的特性を理解する。
3. 抗生物質などの薬剤による微生物の制御について理解する。
4. 微生物感染に対する宿主免疫応答を理解する。

【授業計画】1. 微生物の構造と特徴 1:細菌 1(細菌の一般構造とグラム陽性菌) 2. 微生物の構造と特徴 2:細菌 2(グラム陰性菌) 3. 微生物の構造と特徴 3:ウイルス 4. 微生物の構造と特徴 4:菌類や原生動物 5. 中間試験・レポート (到達目標 1 の一部評価)、微生物の増殖 6. 微生物の遺伝学的特徴 7. 微生物制御 1(消毒薬) 8. 微生物制御 2(抗生物質) 9. 中間試験・レポート (到達目標 2, 3 の一部評価)、微生物制御 3(抗ウイルス/抗真菌抗生物質) 10. 微生物の病原性 1:微生物の産生する毒性物質 11. 微生物の病原性 2:感染症と免疫 1(炎症) 12. 微生物の病原性 3:感染症と免疫 2(細菌感染) 13. 微生物の病原性 4:感染症と免疫 3(ウイルス感染) 14. 中間試験・レポート (到達目標 4 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】到達目標 4 項目の到達度は試験 (中間 30%, 期末 50%) とレポート (20%) で評価する。試験は各項目毎に中間試験 1 回と期末試験 1 回を行う。4 項目とも到達度 60%以上かつ出席率 80%以上を合格とする。

【JABEE 合格】到達目標 4 項目の到達度は試験 (中間 30%, 期末 50%) とレポート (20%) で評価する。試験は各項目毎に中間試験 1 回と期末試験 1 回を行う。4 項目とも到達度 60%以上かつ出席率 80%以上を合格とする。

【教科書】Madigan ら「Brock Biology of Microorganisms」Prentice Hall International Ltd. を指定し、不足する部分は別途プリントを配布して補う。

【参考書】スタニエラ「微生物学上・下」培風館、笹月健彦監訳「免疫生物学」南江堂、その他必要に応じて講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】長宗(M棟814, Tel:656-7525, E-mail:nagamune@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない。

微生物工学

Applied Microbiology

助教授・櫻庭 春彦 2 単位

【授業目的】食品工業や化学工業に応用される微生物の特徴やその応用技術例を講義し、微生物工業の基礎的知識を修得させる。またその際に問題となる微生物汚染の制御技術に関する知識の修得も目的とする。

【授業概要】有用物質や食品の生産、また環境浄化などに応用される微生物とその応用技術の現状について講述するとともに、微生物による様々な弊害の理解と微生物を制御する技術についての理解も図る。

【受講要件】本科目受講に際しては微生物学 1 の受講を前提とする。

生物工学科(昼間コース)

【履修上の注意】本講義においては演習及び定期試験を行い総合評価の対象とするため、毎回の予習と復習を欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. 微生物と発酵、醸造の関係に対する理解を深める。
2. 微生物の工業的応用の多面性を理解する。
3. 微生物を応用する際の倫理的問題点を理解する。

【授業計画】1. 工業応用される微生物 2. 食品工業への応用 1: アルコール飲料 3. 食品工業への応用 2: 発酵食品 4. 食品工業への応用 3: 醸造食品食、飼料用微生物・レポート(到達目標1の一部評価) 5. 中間試験(到達目標1の一部評価) 6. 応用微生物工業 1: アルコール及び有機酸発酵 7. 応用微生物工業 2: アミノ酸発酵、核酸関連物質の生産 8. 応用微生物工業 3: 核酸関連物質の生産、様々な生理活性物質の生産・レポート(到達目標2の一部評価) 9. 中間試験(到達目標2の一部評価) 10. 環境浄化と微生物 11. 微生物災害とその防除 12. 微生物の工業的応用に伴う工学、生命倫理・レポート(到達目標3の一部評価) 13. 中間試験(到達目標3の一部評価) 14. 中間試験解説 15. 期末試験(到達目標全体的の一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標3項目が各々60%以上達成されている場合を持って合格とする。達成度は中間試験(30%)、レポート(30%)、期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標3項目が各々60%以上達成されている場合を持って合格とする。達成度は中間試験(30%)、レポート(30%)、期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】村尾澤夫・荒井基夫編「応用微生物学 改訂版」培風館 ISBN 4-563-07707-0

【参考書】堀越弘毅ら著「極限環境微生物とその利用」講談社サイエンスフィク ISBN 4-06-139792-3

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】櫻庭(M棟719, Tel:656-7531, E-mail:sakuraba@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:金曜日16:20~17:20)

【備考】原則として再試験は実施しない。

【授業目的】連立常微分方程式の安定性と簡単な偏微分方程式の解法を修得し、より実際の工学的な問題の解法に応用できるようにする。

【授業概要】「微分方程式1」に続いて現代工学すべての基礎として重要な役割を果たしている連立常微分方程式系の基本的な解法を講義する。さらに、簡単な偏微分方程式の解法についても講義する。

【受講要件】「微分方程式1」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをかきんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 簡単な定数係数連立線形常微分方程式が解ける。
2. ラプラス変換とその応用ができる。

【授業計画】1. 定数係数連立線形常微分方程式 2. 高階微分方程式と連立微分方程式 3. 自励系と強制系 4. 線形近似 5. 2次元自励系の危点 6. 2次元自励系の安定性 7. ラプラス変換の性質 8. ラプラス変換の性質 9. 逆ラプラス変換 10. ラプラス変換の応用例 11. 1階偏微分方程式 12. ラグランジュの偏微分方程式 13. 2階線形偏微分方程式 14. 定数係数2階線形偏微分方程式 15. 期末試験

【成績評価】期末試験の点数(100点を超えたときは100点にしたもの)が60点以上であれば、その点数を成績として合格とする。期末試験の点数が60点に満たない場合には、100点満点に換算した試験の点数を80%にしたものと平常点(講義と演習の取り組み具合を評価したもので20点満点)を合計し、その点数が60点以上であれば60点を成績として合格とする。

【JABEE 合格】61点以上の成績がついた場合でかつ、期末試験問題のなかで「JABEE 対応」と明記された設問がおのおの60%以上解けていれば合格とする。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】今井(建設棟2-7室, Tel:656-7541, E-mailでの問い合わせは受け付けない)

微分方程式 1

Differential Equations (I)

教授・今井 仁司 2 単位

【授業目的】微分方程式の解法を修得し、さらに工学の諸分野に現われる微分方程式の解法に応用できるようにする。

【授業概要】微分方程式の理論は数理的工学的な現象の解析に有力な手段を与え、現代工学の基礎として重要な役割を果たしている。その広範な理論の入門段階として、この講義では微分方程式の具体的な解法を中心に講義する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをかきんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 2階の定数係数線形常微分方程式が解ける。
2. 簡単な求積法が理解できる。

【授業計画】1. 変数分離形 2. 同次形 3. 一階線形微分方程式 4. 完全微分形 5. 正規形常微分方程式と特異解 6. 高階常微分方程式 7. ロンスキー行列式 8. 2階線形同次微分方程式 9. 2階定数係数同次方程式 10. 記号解法 11. 記号解法 12. 級数解法 13. 通常点における級数解法 14. 確定特異点まわりの級数解法 15. 期末試験

【成績評価】期末試験の点数(100点を超えたときは100点にしたもの)が60点以上であれば、その点数を成績として合格とする。期末試験の点数が60点に満たない場合には、100点満点に換算した試験の点数を80%にしたものと平常点(講義と演習の取り組み具合を評価したもので20点満点)を合計し、その点数が60点以上であれば60点を成績として合格とする。

【JABEE 合格】61点以上の成績がついた場合でかつ、期末試験問題のなかで「JABEE 対応」と明記された設問がおのおの60%以上解けていれば合格とする。

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】特に指定しない

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】今井(建設棟2-7室, Tel:656-7541, E-mailでの問い合わせは受け付けない)

微分方程式 2

Differential Equations (II)

教授・今井 仁司 2 単位

福祉工学概論

Introduction to Well-being Technology for All

教授・末田 統

助教授・藤澤 正一郎 2 単位

【授業目的】我々の身近な生活を支える様々な機器や環境の中に含まれる工学技術のうち、いろいろなハンディキャップを伴う条件下でも使いやすく安全を確保する技術を、人に優しい技術として紹介し、その万人に対する延長線上に福祉工学技術の一端があることを理解させる。また、各障害者個人に合わせた機器を紹介し、福祉工学技術のもう一端は、特化された技術があることも理解させる。

【授業概要】本講義では、人間の生活全体を支える工学技術を、高齢化による機能の低下や障害によるハンディキャップを軽減させる様々な技術(ハイテクならびにローテク)やアプローチを例にとり、広い視点から概観する。

【到達目標】

1. 機能の低下や障害によらず、全ての人々が利用できる技術や機器、環境があることを理解させる。
2. 特別なサポートを必要とする人々のための技術や機器、環境があることを理解させる。
3. 人に優しい工学技術について考える機会を持たせる。

【授業計画】1. ガイダンス:講義の進め方、受講の心構え 2. 支援科学技術:個人への対応と万人への対応(Universal Design) 3. 移動・移乗 4. 排泄 5. 身障者スポーツ 6. 高齢者の生活環境 7. 就労 8. 生活自立と支援技術(米国の場合) 9. 技術による支援、人による支援 10. 技術:障害への適合、環境への適合、人間への適合 11. 知的障害者と運動機能障害者の支援 12. 視覚障害者と聴覚障害者の支援 13. 最新の技術:???? 14. まとめ:心のバリアー、エンジニアとして 15. 予備日

【成績評価】講義への取り組み状況と、毎回提出させるレポートにより評価する。

【JABEE 合格】レポート内容を100%で評価し、その平均点が60%以上であれば合格とする。

【参考書】「明日を創る」、E&C プロジェクト「バリアフリーの商品開発2」、山田尚勇他「コンピュータと人間の共生」、後藤芳一編「バリアフリーのための福祉技術入門」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】末田(総合研究実験棟705, 656-2167, o.sueda@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】出席点とレポート評価との割合は4:6とするが、欠席者のレポートは成績評価しない。

複素関数論

Complex Analysis 講師・岡本 邦也 2 単位

【授業目的】複素関数論への入門講義として、複素変数関数の微積分分学を修得させる。

【授業概要】微積分で扱う対象を複素変数関数の関数にまで広げ、正則関数および有理型関数の理論を展開することにより、実数の世界では困難であったある種の積分計算が複素数の立場からみると簡潔に処理されることを述べる。

【受講要件】「微積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】時間数の制約から、複素関数の計算を修得するための必要最小限な議論を行なうので、講義内容のすべてを吸収することが理解への早道である。日頃から予習・復習の計画を立てて勉学に動んでもらいたい。

【到達目標】

1. 複素微分, 正則関数の概要が理解できる。
2. 留数概念の理解とその応用ができる。

【授業計画】1. 複素数 2. 複素平面, オイラーの式 3. 複素数列, 複素級数 4. 複素変数の関数 5. 複素微分, コーシー・リーマンの関係式 6. 正則関数 7. 複素積分 8. コーシーの積分定理 9. コーシーの積分公式 10. テイラー展開 11. ローラン展開 12. 特異点, 留数 13. 定積分の計算 (1) 14. 定積分の計算 (2) 15. 期末試験

【成績評価】講義への出席状況, レポート等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【JABEE 合格】【成績評価】と同一である。

【教科書】阪井章「複素解析入門」新曜社

【参考書】マイベルク/ファヘンアウア 著「工科系の数学 6 関数論」サイエンス社, 辻正次・小松勇作 著「大学演習・関数論」裳華房, 田村二郎 著「解析関数 (新版)」裳華房

【連絡先】岡本(A2-4室, TEL/FAX:656-9441, E-mail:okamoto@pm.tokushima-u.ac.jp)

物理化学 1

Physical Chemistry 1 教授・金品 昌志 2 単位

【授業目的】エネルギー論の基礎となる熱力学第一法則および第二法則を理解し, 状態変化や化学反応に伴う熱力学状態関数の変化量が計算できる能力を修得させる。

【授業概要】化学熱力学は, 物理的变化や化学的变化を対象とした普遍的なエネルギー論である。自然界の現象を理解し記述する化学熱力学入門について講述する。本講義の前半部分では, 理想および実在気体について論じた後, 熱力学第一法則および第二法則について解説する。後半部分では, 熱力学状態関数について説明し, 閉鎖系の熱力学関係式を導出する。さらに熱力学第三法則, 気体分子運動論についても説明する。

【受講要件】簡単な微積分, 積分学を必要とする。対数, 指数計算の可能な関数キー付き電卓を使用する。

【履修上の注意】講義中に理解度確認のため 2 回の中間試験を行うので, 予習と復習をしっかりと行うこと。

【到達目標】

1. 熱力学第一法則の概念を理解し, 熱力学変化量を計算できる。
2. 熱力学第二法則の概念を理解し, 熱力学変化量を計算できる。
3. 気体の性質と分子運動論の取り扱いを理解する。
4. 物理化学の関与する工業倫理的問題を理解する。

【授業計画】1. 気体の性質 (1) 理想気体の状態方程式, 実在気体の PVT 関係式 2. 気体の性質 (2) 相応状態の法則, 臨界現象, van der Waals 状態方程式 3. 熱力学第一法則 (1) 仕事と熱, 熱力学第一法則, 内部エネルギー 4. 熱力学第一法則 (2) エンタルピー, 熱容量, 第一法則の理想気体への適用, レポート 1(到達目標 1, 3 の一部評価) 5. 熱力学第一法則 (3) 反応熱, 生成エンタルピー, 反応熱の温度変化, 中間試験 1(到達目標 1, 3 の一部評価) 6. 熱力学第二法則 (1) 等温過程と断熱過程, Carnot サイクル, 熱力学第二法則 7. 熱力学第二法則 (2) エントロピー, Clausius の不等式 8. 自由エネルギー (1) 閉じた系の平衡条件, Helmholtz 自由エネルギーと Gibbs 自由エネルギー 9. 自由エネルギー (2) Maxwell の関係式, Gibbs 関数の圧変化と温度変化, レポート 2(到達目標 2 の一部評価) 10. 自由エネルギー (3) 開いた系の熱力学, 化学ポテンシャル, 中間試験 2(到達目標 2 の一部評価) 11. 熱力学第三法則 (1) 熱力学第三法則, 標準エントロピー 12. 分子運動論 (1) 気体の分子運動論, 分子運動速度 13. 分子運動論 (2) エネルギーの均分, 並進運動, 回転と振動運動 14. 科学史と工業倫理, 事例の紹介と討論,

レポート 3(到達目標 4 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標 4 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%), レポート (20%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で, 到達目標 4 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%), レポート (20%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】W. J. ムーア著 (藤代亮一訳)「物理化学 (上)1-4 章」東京化学同人

【参考書】D. エベレット著 (玉虫伶太・佐藤 弦訳)「入門化学熱力学 第 2 版」東京化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】金品(化生棟607, Tel:656-7513, E-mail:kanesina@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:水曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

物理化学 2

Physical Chemistry 2 助教授・松木 均 2 単位

【授業目的】物質の状態に関する重要な物理化学の基礎的事項, 相平衡と溶液について化学熱力学を中心にして講義を行い, それらの基本的な概念を学習する。

【授業概要】閉鎖系の熱力学関係式を開放系に拡張し, 重要な熱力学量である化学ポテンシャルについて講述する。さらに化学ポテンシャルの平衡式を溶液系に適用し, 物理化学諸量を導出する。本講義の前半部分では, 一成分 (純物質) 系の状態図並びに相平衡を説明し, 相平衡の条件や相平衡で成立する熱力学関係式を導出する。後半部分では, 多成分混合物の定義やその取り扱い方を論じ, 具体例として二成分混合溶液を取り上げる。二成分溶液の相平衡 (気体-液体, 固体-液体, 液体-液体) を熱力学的観点から講述する。

【受講要件】物理化学 1 の履修を前提として講義する。

【履修上の注意】講義中に理解度確認のため 2 回の中間試験を行うので, 予習と復習をしっかりと行うこと。

【到達目標】

1. 化学ポテンシャルの概念と一成分 (純物質) 系の相平衡を理解する。
2. 溶液を中心とした多成分系の熱力学的取り扱いを理解する。
3. 二成分溶液の相平衡と溶液の束一的性質についての熱力学式が導出できる。

【授業計画】1. 状態の変化 (1) 化学熱力学の復習, 相, 成分, 自由度 2. 状態の変化 (2) 平衡の一般理論と化学ポテンシャル 3. 状態の変化 (3) 相平衡の条件, 相律 4. 状態の変化 (4) 一成分状態図, Clapeyron-Clausius の式, レポート 1(到達目標 1 の一部評価) 5. 溶液 (1) 組成, 部分モル量, 中間試験 1(到達目標 1 の一部評価) 6. 溶液 (2) Gibbs-Duhem の式, 部分モル量の計算 7. 溶液 (3) 理想溶液の熱力学, 二成分系 8. 溶液 (4) Raoult の法則, Henry の法則 9. 溶液 (5) 二成分系の溶液-蒸気平衡, レポート 2(到達目標 2, 3 の一部評価) 10. 溶液 (6) 二成分系の溶液-固体平衡, 中間試験 2(到達目標 2, 3 の一部評価) 11. 溶液 (7) 凝固点降下, 浸透圧と蒸気圧 12. 溶液 (8) 理想溶液からのずれ, 共沸溶液 13. 溶液 (9) 液-液平衡, 非理想溶液の熱力学 14. 溶液 (10) 調和と非調和融点化合物, 固溶体, レポート 3(到達目標 3 の一部評価) 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%), レポート (20%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で, 到達目標 3 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%), レポート (20%), 期末試験 (50%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】W. J. ムーア著 (藤代亮一訳)「物理化学 (上)6, 7 章」東京化学同人

【参考書】R. A. アルバーティ著/妹尾 学・黒田晴雄訳「物理化学 (上)」東京化学同人, D. エベレット著/玉虫伶太・佐藤 弦訳「入門化学熱力学 第 2 版」東京化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】松木(化生棟609, Tel:656-7520, E-mail:matsuki@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:金曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

分子生物学

Molecular Biology 助教授・大内 淑代 2 単位

生物工学科(昼間コース)

【授業目的】生物は遺伝情報に基づき生命を維持している。その基本は遺伝子の発現調節にある。そこで、遺伝子の構造と発現調節のメカニズムを理解し、バイオテクノロジー創成に向けての基盤的素養を身に付けることを目的とする。

【授業概要】遺伝子の本体である核酸の構造と遺伝子発現(転写、翻訳)の基本的プロセスと、様々な生命現象を司る転写調節機構について、特に真核生物について重点的に講義する。

【受講要件】生化学Ⅰを受講しておくこと。

【履修上の注意】予習、復習を行い積極的に学習し、ノートを作成すること。試験以外に講義内容の理解を深めるため、関連する課題に対するレポートを提出する。

【到達目標】

1. 遺伝子の構造と化学的性質を理解する。
2. 遺伝子発現のプロセスと調節機構を理解する。
3. 組換え DNA 技術などの遺伝子工学的手法の基礎を学ぶ。

【授業計画】1. 遺伝子と DNA(教科書第 1~4 章) 2. RNA と転写(1)(第 5~7 章) 3. 転写(2)(第 5 章) 4. 遺伝子発現の調節(1)(第 10 章) 5. 遺伝子発現の調節(2)(第 10 章) 6. 遺伝子発現の調節(3)(RNAi と microRNA) 7. 中間試験(到達目標 1,2 の一部評価) 8. 遺伝暗号と翻訳(1)(第 8, 9 章) 9. 翻訳(2)(第 9 章)(第 9 章) 10. DNA 複製と遺伝物質の変化(第 11, 12 章) 11. 真核生物のゲノム(1)(第 15 章) 12. 真核生物のゲノム(2)(レポート提出(到達目標の 1, 3 の一部評価)(第 16,22 章) 13. 遺伝子クローニング(第 20 章) 14. クローン化した遺伝子の解析(第 21 章) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(20%)、期末試験(60%)、レポート(20%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標 3 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(20%)、期末試験(60%)、レポート(20%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】ブラウ著「分子遺伝学」東京化学同人および講義中に配付するプリント

【参考書】マッキー著「生化学-分子から解き明かす生命-」化学同人

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】大内(化生棟801, Tel:656-7529, E-mail:hohuchi@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:金曜日18:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない。

分析化学

Analytical Chemistry

非常勤講師・田中 秀治 2 単位

【授業目的】分析化学とは、試料中のある目的成分について、その化学的あるいは物理的性質をもとに、他成分と区別して認識したり(定性分析)、存在量を決定したり(定量分析)する方法を探究し、体系化した学問である。本科目ではその中でも物質の定量に関わる分析法を中心に、その基本的原理と方法論を修得させることを目的とする。

【授業概要】前半では、分析化学において最も基礎となる分析データの取り扱い方、溶液内の化学反応および化学平衡、各種容量分析法の原理と応用を講義する。後半では、機器分析法のうち、クロマトグラフィーなどの分離分析、分光分析(定量を主目的とするもの)について講義する。

【受講要件】高校理系の化学を十分修得していることを前提とする。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 分析を行う上で基礎となる、単位、誤差の概念、誤差の伝播と有効数字、電解質溶液の物理化学的性質、化学平衡の基本的概念を理解する。
2. 酸塩基反応、錯体生成反応、酸化還元反応、沈殿生成反応の基本的事項とこれらに基づく容量分析法(滴定)を理解する。
3. 各種の分子分光分析および原子分光分析を理解する。
4. 溶媒抽出など物質の分離・濃縮法、各種クロマトグラフィーやキャピラリー電気泳動法の基礎を理解する。

【授業計画】1. 分析化学とは:分析法の分類、現在の潮流、分析操作の流れ(単位操作) 2. 分析データの取り扱い:誤差、真度と精度、有効数字、誤差の伝播、棄却検定 3. 水溶液と化学平衡:SI 単位、濃度の単位、質量と活量係数、自由エネルギーと化学平衡 4. 容量分析法総論/酸塩基平衡:容量分析法とは、標定、酸塩基の概念、酸塩基反応、pH と pH 緩衝液 5. 酸塩基滴定:滴定曲線、当量点の判定法、応用例、レポート1(到達目標 1 および 2 の一部評価) 6. 錯体生成平衡とキレート滴定:錯体と錯体の安定性、キレート滴定とその応用 7. 酸化還元平衡と酸化還元滴定:酸化還元反応、電極電位、酸化還元滴定とその応用 8. 沈殿生

成平衡と沈殿滴定:沈殿の生成と溶解、沈殿生成に影響を及ぼす因子、沈殿滴定とその応用 9. 分光分析法(1):物質と電磁波との相互作用、光吸収、光学部品、分子分光分析の基礎 10. 分光分析法(2):、紫外可視吸光度法、蛍光分析、化学発光分析 11. 分光分析法(3):原子スペクトル分析(原子吸光分析、原子発光分析)、レポート2(到達目標 2 および 3 の一部評価) 12. 分離分析(1):分離分析の基礎:溶媒抽出、クロマトグラフィーの分類と基本用語 13. 分離分析(2):高速液体クロマトグラフィー 14. 分離分析(3):ガスクロマトグラフィー、キャピラリー電気泳動 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上の者に対し、到達目標の 4 項目がそれぞれ 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(30%)、期末試験(70%)で評価する。

【JABEE 合格】出席率 80%以上の者に対し、到達目標の 4 項目がそれぞれ 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(30%)、期末試験(70%)で評価する。

【教科書】奥谷、河島、保母、本水著「基礎教育 分析化学」東京教学社

【参考書】Skoog, West, Holler 「Fundamentals of Analytical Chemistry」 Saunders College Publishing, J.C. Miller, J.N. Miller (宗森 訳)「データのとり方とまとめ方」共立出版、日本分析化学会九州支部編「機器分析入門」南江堂、中澤(監)「最新機器分析学」南山堂

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。講義内容に関する質問は電子メール(htanaka@ph.tokushima-u.ac.jp)でも受け付ける。ただし、差出人不明のメールには返答しない。

ベクトル解析

Vector Analysis

教授・今井 仁司 2 単位

【授業目的】工学の解析が必要不可欠なベクトルの概念と基礎的な性質を学ぶとともに、ベクトル場の解析学を通して古典力学、流体力学や電磁気学に現れる基本的な物理法則の数学的な理解・運用を目標とする。

【授業概要】三次元空間のベクトルで表される物理量の局所的変化(微分)と大域的効果(積分)を記述する手法としてベクトル場の微積分学を展開し、微積分学の基本定理のベクトル場に対する一般化を確立する。

【受講要件】「微積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをきちんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. ベクトルの場の微分が理解できる。
2. ベクトルの場の積分が理解できる。

【授業計画】1. ベクトルの演算、ベクトルとスカラー 2. 内積 3. 外積 4. ベクトル値関数の微分・積分 5. 空間曲線、フレネ・セレの公式 6. 力学への応用 7. 勾配、発散、回転 8. 方向微分 9. 線積分 10. 面積分、立体積分 11. 積分による定義 12. ガウスの定理、ストークスの定理 13. グリーンの定理 14. 直交曲線座標 15. 期末試験

【成績評価】期末試験の点数(100 点を超えたときは 100 点にしたもの)が 60 点以上であれば、その点数を成績として合格とする。期末試験の点数が 60 点に満たない場合には、100 点満点に換算した試験の点数を 80%にしたものと平常点(講義と演習の取り組み具合を評価したもので 20 点満点)を合計し、その点数が 60 点以上であれば 60 点を成績として合格とする。

【JABEE 合格】61 点以上の成績がついた場合かつ、期末試験問題のなかで「JABEE 対応」と明記された設問がおのおの 60%以上解けていれば合格とする。

【教科書】小川 枝郎『ベクトル解析概論』培風館

【参考書】加藤 祐輔『多変数関数の微積分とベクトル解析』講談社、渡辺 正『ベクトル解析の基礎と応用』新数理ライブラリ M5 サイエンス社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】今井(建設棟2-7室, Tel:656-7541, E-mailでの問い合わせは受け付けない)

放射化学及び放射線化学

Radiochemistry and Radiation Chemistry

非常勤講師・日野 知証 2 単位

【授業目的】ラジオアイソトープの物理的・化学的性質とその利用にともなう放射能測定、トレーサ技術など放射化学の諸問題および放射線

生物工学科 (昼間コース)

の作用による物質の化学的变化について講述し、放射線の生体への影響についても理解させる。

【授業概要】ラジオアイソトープの物理的・化学的性質とその利用にとりもなう放射能測定、トレーサ技術など放射化学的諸問題および放射線の作用による物質の化学的变化について講述する。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】特になし。

【到達目標】

1. 放射線に関する物理的事項を理解する。
2. 放射線に関する化学的事項を理解する。
3. 放射線に関する生物的事項を理解する。
4. 放射線の測定及び管理について理解する。

【授業計画】1. 原子核の構造 2. 放射性核種 3. 核反応, 核分裂, 核融合反応 4. γ 線, X 線と物質の相互作用 5. β 線, α 線と物質の相互作用 6. 中性子, 放射線の量と単位 7. レポート 1(到達目標 1 の一部評価), 中間試験 1(到達目標 1 の一部評価) 8. 放射平衡 9. RI の分離法, ホットアトム 10. トレーサー 11. 放射線化学 12. 放射線と生体との相互作用 13. 放射線の測定 14. レポート 2(到達目標 2, 3, 4 の一部評価), 中間試験 2(到達目標 2, 3, 4 の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上の者に対し, 到達目標の 4 項目がそれぞれ 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(20%), 中間試験(40%), 期末試験(40%)で評価する。

【JABEE 合格】出席率 80%以上の者に対し, 到達目標の 4 項目がそれぞれ 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(20%), 中間試験(40%), 期末試験(40%)で評価する。

【教科書】受講者に講義資料を配付する。

【参考書】特に指定しない。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

【JABEE 合格】出席率 80%以上の者に対し, 到達目標の 3 項目がそれぞれ 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度はレポート(20%), 中間試験(40%), 期末試験(40%)で評価する。

【教科書】受講者に講義資料を配布する。

【参考書】新しい薬物が次々と開発・発売されているので, 最新の版を読むようにして欲しい。「Goodman & Gilman's The Pharmacological basis of Therapeutics Ninth Edition」McGraw-Hill, 「NEW 薬理学」南江堂, 「薬理学入門」南山堂

【対象学生】開講コースと同学科の夜間主コース学生も履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

有機化学 1

Organic Chemistry 1

助教授・永澤 秀子 2 単位

【授業目的】全ての生命現象は有機化学反応の組み合わせによるものであることから, 生物機能を理解するためには, まず化学反応の原理の修得が必須である。このために有機化学の基礎学力をつけることをめざす。

【授業概要】有機電子論と軌道の概念及び化学反応の基本原則を修得させる。これに基づいて, 脂肪族化合物の分子構造とその反応性を理解させる。

【受講要件】なし

【履修上の注意】有機化学を学ぶためには, できるだけ多くの問題を解くこと, すなわち紙に書くことと分子模型を使って考えることが不可欠である。このため, 必ず分子模型も毎回用意してくる。また授業で課した演習問題は必ず復習して, 完成させておくこと。

【到達目標】

1. 原子の構造, 軌道の概念を理解し, 化合物の分子構造を記述できる。
2. 炭素-炭素結合に基づいた立体化学を説明できる。
3. 分子の対称性, 反応の立体化学を説明できる。
4. 極性反応における電子の流れを正しく記述できる。

【授業計画】1. 構造と結合 2. 極性結合とその重要性 (1) 電気陰性度, 双極子モーメント 3. 極性結合とその重要性 (2) 形式電荷, 共鳴, レポート及び中間試験(到達目標 1 の一部評価) 4. アルカンとシクロアルカン 5. アルカンとシクロアルカンの立体化学 6. 有機反応の概観 (1) 有機反応の種類, レポート及び中間試験(到達目標 2 の一部評価) 7. 有機反応の概観 (2) 極性反応の例 8. アルケンの構造と反応性 9. アルケンの反応と合成 10. 立体化学, レポート及び中間試験(到達目標 3 の一部評価) 11. ハロゲン化アルキル 12. 求核置換反応 13. 求核置換反応と脱離反応 14. レポート及び中間試験(到達目標 4 の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で, 到達目標 4 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。到達度は中間試験(60%), 期末試験(20%), レポート(20%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で, 到達目標 4 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。到達度は中間試験(60%), 期末試験(20%), レポート(20%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】J. McMurry 著「マクマリー有機化学(上, 中, 下)」東京化学同人, 分子模型「HGS Biochemistry Molecular Model, Student Kit」丸善

【参考書】井本 稔著「有機電子論解説 有機化学の基礎-第 4 版」東京化学同人

【対象学生】他学科学学生も履修可能

【連絡先】永澤(M棟820, Tel:656-7522, E-mail:nagasawa@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:木曜日16:20-17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

有機化学 2

Organic Chemistry 2

教授・高麗 寛紀 2 単位

【授業目的】全ての生命現象は有機化学反応の組み合わせによるものである。生物機能を理解するためには, まず化学反応の原理と化合物を見るセンスの修得が必須である。本講義は有機化学 1 に引き続き, 有機化学の基礎学力をつけることを目的とする。

【授業概要】芳香族およびカルボニル, アルコールの化学を中心として, 基礎的な化学反応の原理について講述する。

【受講要件】有機化学 1 を履修していること。

【履修上の注意】有機化学を学ぶためには, できるだけ多くの問題を解くこと, すなわち紙に書くことと分子模型を使って考えることが不可欠である。このため, 必ず分子模型も用意してくる。

【到達目標】

生物工学科(昼間コース)

1. 共役および芳香族性について理解する。
2. アルコール、エーテル、エポキシドが関わる反応を理解する。
3. カルボニル基、およびアミノ基が関わる反応を理解する。

【授業計画】1. 有機化学と生命化学との関わり及び現代化学工業が抱える倫理的問題の理解 2. ベンゼンと芳香族性 3. ベンゼンの化学:芳香族求電子置換 4. アルコールとフェノール 5. エーテルとエポキシド 6. 中間試験(到達目標 1, 2 の一部評価) 7. アルデヒドとケトン(1) 8. アルデヒドとケトン(2) 9. カルボン酸 10. 求核アシル置換反応 11. カルボニルの α 置換反応 12. カルボニル縮合反応, アミン 13. 中間試験(到達目標 3 の一部評価) 14. 総括, レポート(到達目標 2, 3 の一部評価) 15. 期末試験(到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標の 3 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(40%), レポート(20%), 期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【JABEE 合格】出席率 80%以上で、到達目標の 3 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験(40%), レポート(20%), 期末試験(40%)で評価する(出席点は加えない)。

【教科書】J. McMurry 著「マクマリー有機化学(中)」東京化学同人, 教材:分子模型「HGS Biochemistry Molecular Model, Student Kit」丸善

【参考書】J. McMurry 著「マクマリー有機化学(上)(下)」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】高麗(M棟813, Tel:656-7408, E-mail:kourai@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:前期:木曜日19:40~21:10, 後期:火曜日19:40~21:10)

【備考】原則として再試験は実施しない。

【授業計画】1. 組織と職務分掌 2. 人事管理(異動, 人事考課) 3. 労働基準法 4. 労使関係 5. 能力開発, 教育訓練 6. 安全衛生 7. 中間及び最終レポート(労務管理のまとめ)

【成績評価】講義への取り組み状況, レポートの内容

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【教科書】その都度, 提供する。

【参考書】島田信義「新 労働基準法」学習の友社, 荻原勝「人事・労務実務全書」日本実業出版社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】出席率 80%(12 回), レポート(中間と最終)の内容 20%

量子力学

Quantum Mechanics

教授・大野 隆 2 単位

【授業目的】量子力学は現代物理学, 化学, 生物学, 科学技術の基礎である。その入門から始めて解説し, 生物工学においても量子力学に基づく見方が如何に大切であるかを理解させる。

【授業概要】下記講義計画に示した項目に従い, 前期量子論より読き起こし, シュレディンガーの波動方程式を導く。その後簡単な例として井戸型ポテンシャル, 調和振動子を解説し量子力学でただ一つ厳密解が求めることができる水素原子についてシュレディンガーの波動方程式を導き, 変数分離を行い角度および動径方向の解を求め, その解の意味を解説する。

【授業計画】1. はじめに 古典物理学と量子論の発展の歴史 2. 比熱, 黒体輻射 3. 光電効果 4. コンプトン効果 5. ボーアの原子模型 6. ドブロイ波 7. シュレディンガーの波動方程式 8. 簡単な例(1) 井戸型ポテンシャル 9. 簡単な例(2) 井戸型ポテンシャル 10. 簡単な例(3) 調和振動子 11. 水素原子(1) 波動方程式 12. 水素原子(2) 波動関数の角度方向の解 13. 水素原子(3) 波動関数の動径方向の解 14. 水素原子(4) 波動関数の持つ意味の解説 15. 予備日 16. 定期テスト

【成績評価】期末試験の成績が 70 点以上を合格とする。試験の成績に, 講義への取り組み(具体的には講義中の質問に積極的に正解した場合)に与える点数を加えて評点とする。

【JABEE 合格】期末試験の成績が 70 点以上を合格とする。試験の成績に, 講義への取り組み(具体的には講義中の質問に積極的に正解した場合)に与える点数を加えて評点とする。

【教科書】量子力学 I(裳華房, 小出昭一郎著)

【参考書】朝永振一郎著 量子力学 I, II みすず書房, P.M.A.Dirac, The Principles of Quantum Mechanics, Oxford シッフ 量子力学 上下 吉岡書店

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大野(A棟201, 656-7549, ohno@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】微分および積分と微分方程式の基礎的知識を要求する。

労務管理

Personnel Management

非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為にヒトをどのように動かしているかを理解する。

【授業概要】企業経営は, 経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく, かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で人的資源をいかに活用しているかについて講義する。講義計画に従い労務管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

生物工学科（夜間主コース）における教育理念

1．教育目的・目標

- (A) 豊かな人格と教養，及び自発的意欲の育成
様々な学問の価値観を学ぶことで，豊かな人格と教養を身に付けるとともに，自らの体験から学ぶことに対する興味と意欲を自発的に発揮できる人材を育成する．
- (B) 自然科学と生物工学の基礎知識による分析力と探求力の育成
自発的な学習意欲により自然科学と生物工学の基礎知識を修得し，事象や課題を化学的に解析できる分析力と探求力を持つ人材を育成する．
- (C) 生物工学と生命科学の基礎知識による優れた課題解決力と表現力の育成
自発的な探求力により生物工学と生命科学の基礎知識を効果的に身に付け，卒業研究を通して問題を解決し，その方法・過程・結果を表現できる人材を育成する．
- (D) 生物工学と生命科学の知識や技術の応用力と創造力の育成
グローバルな社会環境を認知した上で新しい課題を発見し，専門の知識と技術による課題の解決法を創造でき，さらに実践的な行動力を持って地域社会や国際社会に貢献できる人材を育成する．

生物工学科（夜間主コース）履修登録，進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定

1．履修登録に関する規定

履修登録できる単位数に上限は設けない．

2．進級要件に関する規定

- (1) 1年次から2年次への進級規定
1年次から2年次へ進級するためには，全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて20単位以上修得していなければならない．
- (2) 2年次から3年次への進級規定
2年次から3年次へ進級するためには，全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて40単位以上修得していなければならない．
- (3) 3年次から4年次への進級規定
3年次から4年次へ進級するためには，全学共通教育科目と専門教育科目を合わせて94単位以上修得していなければならない．

3．卒業研究着手要件に関する規定

生物工学科の夜間主コースにおいて，次に指定する諸条件をすべて満たした者は卒業研究に着手することができる．ただし，卒業研究は4年前期・後期における他の授業との合併である．

- (1) 全学共通教育科目において，卒業に必要な36単位以上を修得していること．
- (2) 専門教育科目において，必修科目を32単位，選択B科目を26単位以上修得していること．
- (3) 修得単位についての条件を満たし，卒業研究着手について生物工学科会議の承認を得ていること．

生物工学科（夜間主コース）

生物工学科（夜間主コース）カリキュラム表

		1 年	2 年	3 年	4 年
全学共通教育	人文科学 社会科学 自然科学 工学系教養	(8)	(8)	(4)	(6)
	外国語	(8)	(8)	(6)	(8)
	健康スポーツ	(4)			
	基礎教育	(6)			
生物工学専門教育	工学系 共通科目	△工業基礎英語I △工業基礎数学I △工業基礎物理I	●微分方程式1 ●統計力学		△職業指導
	生物工学 専門科目	◎無機化学1 ◎無機化学2 ◎生物有機化学1 ◎生物有機化学2 ●分析化学	◎物理化学1 ◎物理化学2 ◎生化学1 ●生物有機化学3 ●化学工学 ●合成高分子 ●生物化学工学	◎生化学2 ◎生体高分子 ◎酵素化学 ◎生物物理化学 ◎微生物学 ●物理化学3 ●生物機能工学 ●機器分析化学 ●計算機化学	◎分子生物学 ◎遺伝子工学 ◎細胞生物学 ◎生物機能設計学 ●無機材料科学 ●有機材料科学 ●微生物応用光学 ●無機工業化学 ●錯体化学 ●応用電気化学 ●電子計算機 ●生物反応工学 ●有機工業化学 ●構造解析学 ●環境化学 ●放射化学及放射線化学 ●プログラミング演習
	生物工学 実験演習			◎生物工学実験1 ◎生物工学実験2	●雑誌講読 ●卒業研究

全学共通教育科目の（ ）内数字は、開講単位数を表す。

◎印を付した科目は、専門必修科目を表す。

○印を付した科目は、専門選択科目Aを表す。

●印を付した科目は、専門選択科目Bを表す。

△印を付した科目は、卒業資格単位には含まれない。

生物工学科（夜間主コース）

生物工学科（夜間主コース）教育課程表

全学共通教育科目

授業科目（分野）	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								備考	
	必修	選択必修	選択	1年		2年		3年		4年			計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期		
人文科学分野		2											
社会科学分野		2											
自然科学分野		4	16	4	4	4	4	2	2	4	2	26	
総合分野・学部開放分野													
外国語科目		(6)		(4)	(4)	(4)	(4)	(2)	(4)	(4)	(4)	(30)	
健康スポーツ科目	(2)			(2)	(2)							(4)	
基礎教育科目		4		4	2							6	
全学共通教育科目小計	(2) 2	(6) 18	16 16	8 14	6 12	4 8	4 8	2 4	2 6	4 8	2 6	82 118	講義 演習・実習 計

専門教育科目

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数（1週当たり）								担当者	備考	頁	
	必修	選択A	選択B	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
ベクトル解析			2			2						2	深貝		327
微分方程式 1			2				2					2	長町・坂口		326
量子力学			2			2						2	中村		329
統計力学			2				2					2	岸本		325
無機化学 1	2			2								2	森賀		328
無機化学 2	2				2							2	本仲		328
生物有機化学 1	2			2								2	津嘉山		324
生物有機化学 2	2				2							2	永澤		324
生物有機化学 3			2			2						2	大島(松)		324
物理化学 1	2						2					2	田村		326
物理化学 2	2						2					2	郡		326
物理化学 3			2					2				2	松木		326
生化学 1	2					2						2	松田		321
生化学 2	2							2				2	辻		321
合成高分子			2			2						2	妹尾		320
生体高分子	2							2				2	津下・辻他		322
生物物理化学	2								2			2	金品		323
生物機能工学			2						2			2	生物工学科教官		322
生物反応工学			2								2	2	永澤		323
微生物学	2							2				2	長宗		325
細胞生物学	2										2	2	櫻庭		320
分子生物学	2										2	2	野地		327
遺伝子工学	2										2	2	大内		318
酵素化学	2								2			2	大島(敏)		321
生物機能設計学	2										2	2	堀		322
化学工学			2			2						2	富田		318
生物化学工学			2				2					2	高麗		322
分析化学			2		2							2	佐竹		327
機器分析化学			2						2			2	南川・森		319
計算機化学			2						2			2	加藤		319
無機材料科学			2							2		2	中林		328
有機材料科学			2							2		2	杉山		329
微生物応用工学			2							2		2	岩田		325
無機工業化学			2							2		2	外輪		328
有機工業化学			2								2	2	河村・西内		329
構造解析化学			2								2	2	南川		320

生物工学科（夜間主コース）

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数 (1 週あたり)									担当者	備考	頁	
	必修	選択 A	選択 B	1 年		2 年		3 年		4 年		計				
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
錯体化学			2								2		2	平野		321
環境化学			2									2	2	本仲・藪谷		319
応用電気化学			2								2		2	松井		318
放射化学及び放射線化学			2									2	2	森賀・村井		328
電子計算機			2								2		2	篠原		325
プログラミング演習			(1)									(2)	(2)	田村・鈴木		327
生物工学実験 1	(4)							(8)					(8)	生物工学科教官		323
生物工学実験 2	(4)								(8)				(8)	生物工学科教官		323
雑誌講読			(1)								(1)	(1)	(2)	生物工学科全教官		321
卒業研究			(4)								(6)	(6)	(12)	生物工学科全教官		324
職業指導			4								4		4	坂野		321
工業基礎英語 I			1	1									1	広田		319
工業基礎数学 I			1	1									1	吉川		319
工業基礎物理 I			1	1									1	佐近		320
専門教育科目小計	32 (8) 40		57 (6) 63	7 7	6 6	8 8	14 14	8 16	10 18	22 (8) 29	14 (8) 23	89 (32) 121		講義 演習・実習 計		

備考

1. () 内は、演習・実習の単位数または授業時間数を示す。
2. 印の科目は卒業資格の単位に含まれない。
3. 全学共通教育科目の開講単位数は開講されている科目の合計単位数を示す。
4. 全学共通教育科目の開講科目および単位数は「徳島大学全学共通教育科目の履修の手引き」を参照のこと。
5. 昼間コースの授業科目の履修について
 - a. 履修できる昼間コースの科目は、30 単位以内とする。
 - b. 昼間コースの教育課程表中 印を付した科目（昼間コースのみに開講されている科目）は、原則として履修を認める。ただし、学期初めに昼間コース履修届（担当教官ならびに学年担任の許可を得た届け出用紙）を提出すること。
 - c. 昼間コースのその他の科目（他学科、他学部の科目）は、所定の手続き（担当教官の許可、場合によっては大学教育委員会、他学科の教室会議、他学部長の許可）を経ることとする。
 - d. 試験で合格点を獲得した場合は、担当教官が単位を工学部学務係に届けることで事務処理を終了する。
6. 夜間主コースの他の学科に属する授業科目から、工学部規則第 3 条の 4 第 3 項の規定に基づいて修得した単位は、4 単位までの範囲において選択科目の単位数に含めることができる（履修の手引きを参照のこと）

生物工学科（夜間主コース）

	卒業に必要な単位数	全学共通教育科目	専門教育科目
必修単位	42 単位	2 単位*	40 単位
選択必修（選択A）単位	18 単位以上	18 単位以上**	0 単位以上
選択（選択B）単位	64 単位以上	16 単位以上***	48 単位以上
計	124 単位以上	36 単位以上	88 単位以上

* 健康スポーツ 2 単位

** 人文科学 2 単位，社会科学 2 単位，自然科学 4 単位，英語またはドイツ語 6 単位，基礎数学（微分積分 I および II）と基礎物理から 4 単位

*** 全教養科目（人文・社会・自然・工学系教養）のうちで選択必修で修得した科目（題目）以外から選択する．また，全教養科目以外に所定の単位数を超える外国語科目を含めることができる．16 単位以上を超えて修得した場合は，10 単位まで専門教育科目の選択科目の単位に含めることができる．

生物工学科（夜間主コース）

生物工学科（夜間主コース）教育分野別カリキュラム編成

学 年							
1 年		2 年		3 年		4 年	
前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期
教養科目（人文科学分野・社会科学分野・自然科学分野・総合分野・学部開放分野）							
英語(1)		英語(1)		英語(2)		英語(2)	
ドイツ語(1)		ドイツ語(1)		ドイツ語(2)		ドイツ語(2)	
健康スポーツ		健康スポーツ		G1			
						職業指導	G2
		ベクトル解析 微分方程式		R1		電子計算機	プログラミング演習1
基礎数学	基礎数学	量子力学	統計力学	物理化学3	生物物理化学	分子生物学	生物反応工学
基礎物理学		物理化学1	物理化学2	生化学2	生物機能工学	遺伝子工学	細胞生物学
工業基礎英語I		生物有機化学3	生化学1	生体高分子	微生物学	無機材料科学	放射化学及び放射線化学
工業基礎数学I	無機化学2	化学工学	合成高分子	酵素化学	機器分析化学	有機材料科学	構造解析学
工業基礎物理I	生物有機化学2		生物化学工学		計算機化学	錯体化学	有機工業化学
	分析化学					無機工業化学	環境化学
						微生物応用工学	生物機能設計学
						応用電気化学	R3
		R2		生物工学実験1	生物工学実験2	卒業研究	卒業研究
				B1		B3	
無機化学1						雑誌講読	雑誌講読
生物有機化学1						B2	

G1	(10)*	G1	(10)*	G1	(8)*	G1	(8)*	G1	(4)*	G1	(4)*	G1	(8)*	G1	(6)*
G2	0	G2	0	G2	0	G2	0	G2	0	G2	0	G2	1	G2	0
R1	5	R1	1	R1	2	R1	2	R1	0	R1	0	R1	1	R1	1
R2	2	R2	3	R2	3	R2	4	R2	4	R2	5	R2	4	R2	4
R3	0	R3	0	R3	0	R3	0	R3	0	R3	0	R3	4	R3	3
B1	0	B1	0	B1	0	B1	0	B1	1	B1	1	B1	0	B1	0
B2	0	B2	0	B2	0	B2	0	B2	0	B2	0	B2	1	B2	1
B3	0	B3	0	B3	0	B3	0	B3	0	B3	0	B3	1	B3	1

G（教養教育）

G1：全学共通

G2：工学教養・専門教養

R（専門教育）

R1：工学基礎

R2：専門基礎

R3：専門応用

B（創造性の育成教育）

B1：工学実験

B2：創成型科目

B3：卒業研究

*（ ）内の数字は開講単位数を示す

生物工学科 (夜間主コース) 講義概要

目次

遺伝子工学 318
 応用電気化学 318
 化学工学 318
 環境化学 319
 機器分析化学 319
 計算機化学 319
 工業基礎英語 I 319
 工業基礎数学 I 319
 工業基礎物理 I 320
 合成高分子 320
 構造解析学 320
 酵素化学 320
 細胞生物学 320
 錯体化学 321
 雑誌講読 321
 職業指導 321
 生化学 1 321
 生化学 2 321
 生体高分子 322
 生物化学工学 322
 生物機能工学 322
 生物機能設計学 322
 生物学実験 1 323
 生物学実験 2 323
 生物反応工学 323
 生物物理化学 323
 生物有機化学 1 324
 生物有機化学 2 324
 生物有機化学 3 324
 卒業研究 324
 電子計算機 325
 統計力学 325
 微生物応用工学 325
 微生物学 325
 微分方程式 1 326
 物理化学 1 326
 物理化学 2 326
 物理化学 3 326
 プログラミング演習 327
 分子生物学 327
 分析化学 327
 ベクトル解析 327
 放射化学及び放射線化学 328
 無機化学 1 328
 無機化学 2 328
 無機工業化学 328
 無機材料科学 328
 有機工業化学 329
 有機材料科学 329
 量子力学 329

遺伝子工学

Genetic Engineering 助教授・大内 淑代 2 単位

【授業目的】生物は遺伝情報に基づき、生命を維持している。その基本は遺伝子の発現調節にある。そこで、遺伝子の構造と発現調節のメカニズム、およびその工学的応用について理解する。

【授業概要】遺伝子の本体である核酸の構造と遺伝子発現 (転写、翻訳) の基本的プロセス、様々な生命現象を司る転写調節機構、遺伝子操作技術の基礎について講義する。

【受講要件】分子生物学を受講すること。

【履修上の注意】予習、復習を行い積極的に学習し、ノートを作成すること。

【到達目標】

1. 実験のプロトコールが読める。
2. 遺伝子クローニングの方法を理解する。
3. PCR, RNAi 法の基礎と応用を理解し、実験プロトコールが作成できる。
4. 組換えタンパク質の合成と精製法を理解する。
5. 動植物への遺伝子導入法を理解する。
6. 遺伝子工学の倫理的問題の理解。

【授業計画】1. 実験プロトコールについて 2. ベクターを用いたクローニング、レポートの宿題 (到達目標 1 の一部評価) 3. 発現ベクター 4. ライブラリー 5. スクリーニング法 6. PCR 法 7. RNAi 法、レポートの宿題 (到達目標 3 の一部評価) 8. 中間試験 (到達目標 1, 2, 3 の一部評価) 9. 発現ベクターを用いたタンパク質の合成序論 10. バクテリアを用いた方法 11. 哺乳動物細胞を用いた方法、レポートの宿題 (到達目標 4 の一部評価) 12. トランスジェニック動物について 13. トランスジェニック植物について 14. 動物のクローンについておよび遺伝子工学の倫理について 15. 期末試験 (到達目標全ての一部評価)

【成績評価】出席率 80%以上で、到達目標 6 項目が各々 60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度は中間試験 (30%), レポート (30%), 期末試験 (40%) で評価する (出席点は加えない)。

【教科書】野島博著「ゲノム工学の基礎」東京化学同人

【参考書】ブラウン著「分子遺伝学」東京化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大内(化生棟801, Tel:656-7529, E-mail:hohuchi@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:金曜日18:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない

応用電気化学

Applied Electrochemistry 助教授・松井 弘 2 単位

【授業目的】電気化学の基礎である、溶液論、平衡論、速度論の基礎を修得させ、典型的応用例を理解させる。

【授業概要】溶液の電導度、平衡電位、電気化学反応速度について講義し、pH 測定法、ポーラログラフィー、実用電池、半導体電極など応用面を理解させる。

【受講要件】特になし

【履修上の注意】物理化学の修得が望ましい。

【到達目標】

1. イオン電導の概要把握と応用能力の修得
2. 電極反応速度論の基礎を修得
3. 実用蓄電池の基礎を修得

【授業計画】1. 電気分解とガルバニ電池、ファラデーの法則 2. 電解質溶液の電導度 3. 解離度の測定と電導度滴定 4. 活量と輸率 5. 電池の表示法、平衡電位、電位差滴定 6. 平衡定数と熱力学量の決定法 7. pH の測定、イオン選択性電極 8. レポートと小テスト 9. 電極界面での電子移動速度 10. 過電圧と物質移動速度 11. ポーラログラフィーとポルタメトリー 12. 乾電池、鉛蓄電池 13. リチウム電池、燃料電池 14. 半導体の電気化学 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】レポート、小テスト、定期試験の結果を総合判定する。

【教科書】田村英雄、松田好晴 著「現代電気化学」

【参考書】藤嶋昭 他著「電気化学測定法」技報堂出版

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】松井弘(化507, 656-7420, matsui@chem.tokushima.ac.jp)

【備考】期末試験とその他の割合は、7:3 とする。

化学工学

Chemical Engineering Principles 教授・富田 太平 2 単位

【授業目的】化学工学の学問領域は従来の化学プロセス設計や化学工業の製品生産のみならず環境やバイオテクノロジーの分野にも拡大している。本講義では、広範な化学工学を理解するために必要な化学工学の基礎学力と実際的な問題を解く応用力を養う。

【授業概要】化学工学とは何か、方法論としての化学工学の役割・領域等を概説し、化学工学の基礎として、物質の状態、物質やエネルギーの出入、流動、伝熱、拡散、物質移動などの事項について講述する。

【履修上の注意】4 年次において単位操作を受講する者は本講義を履修しておくこと。

【到達目標】

1. 物質の状態について、相平衡を理解し、気体の状態方程式による計算ができる。
2. 化学量論を含む物質収支および熱収支を理解する。

生物工学科(夜間主コース)

3. 流動および伝熱に関して基礎法則を理解し、問題解決に応用できる。

4. 気液平衡と蒸留および精留について理解する。

【授業計画】1. 化学工学概説 2. 気体法則と相平衡 3. 物質収支 4. エネルギー収支 5. レポート・小テスト 6. 流動の基礎事項 7. 管内の流動 8. レポート・小テスト 9. 伝熱の基礎事項 10. 対流伝熱と伝熱係数 11. 輻射伝熱、熱交換器 12. レポート・小テスト 13. 拡散と物質移動 14. ガス吸収:ガス吸収機構 15. 吸収塔の設計、演習 16. 最終試験

【成績評価】到達目標の4項目がそれぞれ達成されているかを試験60%、平常点(演習レポートと出席状況)40%の割合で総合評価し、60%以上を合格とする。

【教科書】「基礎化学工学」化学学会編、倍風館

【参考書】「化学工学概論」水科篤郎、桐栄良三編、産業図書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】富田(化312, 656-7425, tomida@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】4年次において単位操作を受講する者は本講義を履修しておくこと。講義への出席状況、演習やレポート、小テストによる平常点と最終試験の割合は5:5とする。

環境化学

Environmental Chemistry

教授・本仲 純子、助手・藪谷 智規 2単位

【授業目的】われわれの存在する地球で生じる諸事象を正確に把握するために、化学の知識と経験をもとに取り組む学問が環境化学である。本講義では、環境内の事象への理解を深めるための方法論を論じる。また、地球環境は時々刻々変化している。そこで、現在の「地球」を知りうるために、最新の環境化学に関するトピックスについて確認する。

【授業概要】地球環境を正確に把握するための方法(データ採取および解析)について講義する。また、最新の環境化学に関するトピックスについて講演する。

【受講要件】分析化学および有機化学の受講を前提とする

【到達目標】

1. 地球環境に対する理解を深める。
2. 環境を把握するためのデータの採取、解析法について理解する。
3. 最新の地球環境に関して把握する

【授業計画】1. 総論 2. 測定データの処理法 3. 分析化学の復習 4. 環境内の物質移動 5. 環境内の物質移動 6. 大気圏、水圏、生物圏 7. 大気圏、水圏、生物圏 8. 化学物質による汚染 9. 化学物質による汚染 10. 化学物質による汚染 11. 最新のトピックス 12. 最新のトピックス 13. 予備日 14. 予備日 15. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、レポートの提出状況と内容、小テストの成績を総合評価する。成績評価に対する「講義への参加状況」と「レポートの提出状況と内容及びテストの成績」の割合は5:5とする。

【教科書】西村雅吉、環境化学(改訂版)、裳華房

【参考書】適宜、プリントを配布する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】藪谷(化605, 656-7413, yabutani@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし。

機器分析化学

Analytical Instrumentation Chemistry

助教授・南川 慶二

助手・森 健 2単位

【授業目的】最近の種々の機器分析法について、それらの基本的原理の習得を目的とする。

【授業概要】代表的な機器分析法を電磁波分析法、電気分析法および分離分析法に分類し、説明する。小テストを行って理解を深める。

【到達目標】

1. 電磁波分析法について理解する。
2. 電気分析法について理解する。
3. 分離分析法について理解する。

【授業計画】1. 序論 2. 原子吸光分析 3. 発光分析 4. 分光光度分析 5. 蛍光分析 6. 赤外吸収分析 7. X線分析 8. 電気化学分析(1) 9. 電気化学分析(2) 10. ガスクロマトグラフィー 11. 液体クロマトグラフィー 12. 質量分析 13. 熱分析 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への取り組み状況、小テスト、定期試験の成績を総合して評価する。

【教科書】「分析化学」赤岩 英夫 著 丸善

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】森(化615, 656-9704, mori@chem.tokushima-u.ac.jp)

計算機化学

Computer in Chemistry

講師・加藤 雅裕 2単位

【授業目的】化学の分野での計算機利用の現状を講述すると共に、Basic言語(True Basic)を用いたプログラム演習を通じて、化学実験で得られるデータの基本的な解析手法を修得させる。

【授業概要】「計算機化学」では、前半、現在使用されている計算機および化学における利用状況を講述することにより、計算機利用の必要性を十分に理解させる。後半は、プログラム演習を中心に各自が計算機と接し、化学実験で得られるデータの解析手段としての計算機の利用をテーマに、初心者でも比較的修得しやすいプログラム言語であるBasic言語(True Basic)を用いて、データ解析に必要な最小自乗法等のプログラムを作成し、さらに、条件文等のプログラム言語の理解を進める。最終的に、各自が計算機をデータ解析に使える能力をつける。

【到達目標】

1. 簡単な True Basic のプログラミングが行えるようになる。
2. 簡単な True Basic のプログラムが読める。

【授業計画】1. 計算機の歴史 2. 計算機の仕組み(大型計算機、パーソナルコンピュータ、周辺装置) 3. 計算機と化学 1(理論計算、シミュレーション) 4. 計算機と化学 2(実験データと計算機、プレゼンテーション) 5. データの処理 1(平均値、標準偏差、誤差) 6. データの処理 2(最小自乗法) 7. Basic 言語 1(プログラミングの基礎) 8. Basic 言語 2(関数、入出力文) 9. Basic 言語 3(条件文) 10. Basic 言語 4(繰り返し文) 11. Basic 言語 5(グラフィック文) 12. Basic 言語 6(サブルーティン) 13. 課題レポート 14. 予備日 15. 予備日

【成績評価】プレゼンテーションの評価および講義中の演習レポートにより評価する。

【教科書】講義時にプリントを配布し、教科書は指定しない

【参考書】章ごとに適宜なものを紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】加藤(M304, 656-7429, katoh@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】プログラム言語の理解を目的として、プログラム演習を毎時実施するので、予習・復習を欠かさず行うこと。講義中の演習および課題レポートの成績により評価し、その比率を6:4とする。なお、定期試験は行わない。

工業基礎英語 I

Industrial Basic English (I)

非常勤講師・広田 知子 1単位

【授業目的】現代社会の国際言語である英語を用いて、科学技術分野での基礎的な語彙力、読解力、リスニング力を養うことを目的とする。

【授業概要】科学技術分野で頻出の語彙や表現を増やす。イラスト、写真などを参考にしながら、内容理解のための練習問題を通して、英文を理解する力や、必要な情報を効率的に掴む力を養成する。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. HEAT 3. SOUND 4. COMPUTERS 5. (教科書の各章にしたがって進めていくが、途中で適宜リスニング教材やビデオ教材なども使用する。)

【成績評価】コース最終日に試験を行う。

【教科書】ENJOY SCIENCE:データバンク(1)『やさしい科学』David Crystal/John Foster Asahi Press

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】授業の前に予習しておくことが望ましい。

工業基礎数学 I

Industrial Basic Mathematics (I)

非常勤講師・吉川 隆吾 1単位

【授業目的】工学を学ぶために必要不可欠となる微分・積分の基礎的な内容について理解を図り、さらに基本的な手法や計算技術を確実に習得することを目的とする。

【授業概要】1変数関数および多変数関数の微分・積分について、基礎的な内容から解説する。また、本講義の内容について、より理解を深めるために適宜演習を行う。

【授業計画】1. 微分 1:極限と連続 2. 微分 2:微分 3. 微分 3:導関数の応用 4. 積分 1:不定積分 5. 積分 2:定積分 6. 積分 3:定積分の応用 7. 偏導関数 1:多変数の関数 8. 偏導関数 2:偏導関数 9. 偏導関数 3:全微分 10. 偏導関数 4:Taylorの定理 11. 偏導関数 5:偏導関数の応用 12. 重複積分 1:重複積分 13. 重複積分 2:多重積分の応用

【成績評価】出席状況、レポート、期末考査等により総合的に評価する。

【教科書】特に指定しない。適宜、資料を配布する。

生物工学科(夜間主コース)

【参考書】矢野健太郎, 石原繁 編「微積分(改訂版)」裳華房
【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
【備考】講義内容を確実に理解するためにも, 毎回の復習は欠かさずに行い, 次回の講義に望んでもらいたい。成績評価に対する[講義の出席状況, レポートの提出状況]と[小テストの成績]の割合は4:6とする。

工業基礎物理 I

Industrial Basic Physics (I)

非常勤講師・佐近 隆義 1 単位

【授業目的】

【授業概要】力学・波動・電磁気学について, ごく初歩的分野を解説する。

【授業計画】1. 運動と力: 質点及び剛体の力学, ニュートンの運動の法則, 運動量と力積・保存則 2. エネルギーと運動: 仕事, 力学的エネルギー・保存則 3. 波動: 等速円運動, 単振動, 波 4. 電気と磁気: クロウン力, 電場と電圧, オームの法則・キルヒホッフの法則, 磁場・ローレンツ力 5. 試験

【成績評価】講義への参加状況と試験の成績を総合して行う。

【参考書】高等学校で使用する物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義の最終日に試験を実施するので, 毎回の復習を欠かさず行うこと。

合成高分子

Synthetic Polymer

助教授・妹尾 真紀子 2 単位

【授業目的】身の回りには高分子化合物で作られた製品が満ちあふれている。高分子化合物の基本的な合成法および性質について修得させる。

【授業概要】高分子の合成反応および反応機構について講義する。さらに高分子化合物の構造や機能性についても若干触れる。

【到達目標】

1. 高分子の特性について理解する。
2. 基本的な高分子合成反応について理解する。

【授業計画】1. 高分子の定義 2. 高分子の特性 3. 重縮合の特徴 4. 重縮合における分子量 5. 重縮合の速度論 6. 重付加 7. 付加縮合 8. ラジカル重合の特徴 9. ラジカル重合の素反応 10. ラジカル重合の速度式 11. ラジカル共重合 12. アニオン重合 13. カチオン重合 14. 遷移金属触媒重合 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義への取組状況(40%)および最終試験の結果(60%)を総合して評価する。平均で60%以上あれば合格とする。

【教科書】適宜, プリントを配布する。

【参考書】高分子化学 佐藤恒之他著(朝倉書店), 新・基礎高分子化学 垣内弘編著(昭晃堂), 高分子化学 I 合成 中條善樹著(丸善)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】妹尾(化408, 656-7404, seno@chem.tokushima-u.ac.jp)

構造解析学

Organic Structure Determination

助教授・南川 慶二 2 単位

【授業目的】有機化合物を対象に頻りに利用されている分析機器の原理や測定法およびデータ解析の方法を講義・演習し, 有機化合物の構造決定法を修得させる。

【授業概要】各種分析機器の基本的な原理と特徴について機器別に説明を行う。そして, 各機器別スペクトルデータの解析方法について講義する。その後, 上記分析より得られる各種スペクトルデータの組合せにより, 未知化合物の構造決定を演習形式で行う。この講義では, 核磁気共鳴(^1H NMR) スペクトルの解説と未知化合物の構造決定演習を重点を置き行う。

【受講要件】有機化学の受講を前提とする。

【到達目標】

1. 各種分析法の基本的な原理と特徴を理解する。
2. NMR スペクトルデータの解析法を理解する。
3. 各種データに基づいて未知化合物の構造を決定することができる。

【授業計画】1. 汎用分析機器の概要 2. プロトン核磁気共鳴スペクトルの基本原理 3. ケミカルシフト 4. シグナルの分裂 5. 演習 6. 演習 7. 小テスト 8. 炭素-13 核磁気共鳴スペクトル 9. 赤外線吸収スペクトル 10. 質量分析 11. 演習 12. 演習 13. 小テスト 14. 演習(口頭発表, レポート) 15. 演習(口頭発表, レポート) 16. 予備日

【成績評価】小テスト, レポートの提出状況と内容, 演習の回答(口頭発表)等の成績を総合して評価する。

【教科書】唐津孝他著「構造解析学」(基本化学シリーズ 2)(朝倉書店)

【参考書】Silverstein ら著(東京化学同人)「有機化合物のスペクトルによる同定法」, E. プレシュラ著(講談社)「有機化合物スペクトルデータ集」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】南川(化612, 656-9153, minagawa@chem.tokushima-u.ac.jp)

酵素化学

Enzyme Chemistry

教授・大島 敏久 2 単位

【授業目的】生命現象を演出する中心的な役割をもつ酵素について, 生理的機能, 触媒機能, 調節機能の理解を図るために酵素の化学的特徴, 構造と機能の相関について講義する。

【授業概要】酵素の発見とその後の研究の歴史, 酵素の種類と分類, 酵素化学的特徴, 補酵素の役割, 調節機構, 反応機構などについて化学的な面を中心に基本的な知見を講義する。

【受講要件】生化学 1, 2 を履修しておくこと。

【履修上の注意】予習, 復習をするように努めること。講義で理解しにくい点は, 教科書や参考書等で学習するとともに直接質問すること。

【到達目標】

1. 酵素研究の歴史的事象, 酵素の命名法, 活性測定の原理と方法を理解する。
2. ビタミン, 補酵素, 酵素の構造と機能の相関, 特徴を理解する。

【授業計画】1. 酵素研究の歴史: 酵素の発見 2. 酵素研究の歴史: 酵素化学の研究と応用の発展 3. 酵素の種類と分類 4. 酵素の命名法 5. 酵素活性の定義と測定法 6. ビタミン, 補酵素の構造と機能 7. 酵素の性質: 分子量とサブユニット構造, 酵素の特異性, 酵素反応の pH, 温度依存性, 基質濃度依存性 8. 中間試験 9. 酵素反応速度論: Michaelis-Menten の式と K_m , V 10. 酵素の阻害剤 11. 酵素阻害様式 12. 酵素の反応機構: 構造と機能相関 13. 酵素の調節機構: アロステリック調節とフィードバック阻害 14. 酵素の調節機構: 遺伝子レベルでの調節とカスケード系による調節 15. 期末試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は, 講義への出席状況, レポートの提出状況と内容, 中間試験, 定期試験の成績を総合して行う。その評価は到達目標の 2 項目が各々 60% 以上達成されているかを試験 80%, 及び平常点(受講態度とレポート 20%)で評価する。到達率 60% 以上, 及び出席率 70% 以上あれば合格とする。

【教科書】相坂和夫著「酵素サイエンス」幸書房

【参考書】大島敏久・左右田健次著「酵素のおはなし, 第三刷」日本規格協会, 西沢一俊・志村憲助著「新・酵素化学入門」南江堂, 相坂和夫著「酵素サイエンス」幸書房, 遠藤克己・三輪一智著「生化学ガイドブック」南江堂

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】大島(M棟720, Tel:656-7518, E-mail:ohshima@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

細胞生物学

Cell Biology

助教授・櫻庭 春彦 2 単位

【授業目的】生命活動の基本単位である細胞器官についての知識を深め, その構造と機能の相関を理解する。生物が進化する過程でこれらの細胞器官がどのように発達したかを修得する。

【授業概要】真核生物, 細菌, アーキアの各種細胞器官の構造, 生成, 機能について講述し, その成り立ちを進化との関わりを通して講述する。特に植物の光エネルギー獲得系, 炭酸ガス固定系, 光呼吸系における細胞内小器官の機能と構造の関わりについて解説する。

【履修上の注意】本講義においては演習及び定期試験を行い総合評価の対象とするため, 毎回の予習と復習を欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. 真核生物・細菌・アーキアの細胞器官の成り立ちを理解する。
2. エネルギー代謝と細胞器官の関わりについて理解を深める。
3. 炭酸ガス固定と細胞器官の関わりについて理解を深める。

【授業計画】1. 真核生物・細菌・アーキア細胞の種類と特徴 2. 光エネルギー獲得系: 光合成の位置付け 3. 光エネルギー獲得系: エネルギー変換 4. 光合成細菌の光合成 5. 高等植物の光合成 6. 演習(到達目標 1, 2 の一部の評価) 7. 細胞質ソル, ミトコンドリアでのエネルギー代謝 8. 光合成における二酸化炭素の代謝(1)カルビンベンソン回路 9. 光合成における二酸化炭素の代謝(2)光呼吸 10. 光合成における二酸化炭素の代謝(3)濃縮メカニズム 11. 二酸化炭素固定回路の遺伝子工学による

生物工学科(夜間主コース)

改良 12. 植物を用いた遺伝子工学に伴う生命倫理 13. 演習(到達目標 2 の一部, 3 の評価) 14. 演習解説 15. 期末試験(到達目標 1, 2, 3 の評価)

【成績評価】到達目標の 3 項目がそれぞれ達成されているかを定期試験の成績 60%, 平常点(講義への出席状況, 演習の回答)40%で評価し, 3 項目平均で 60%以上で有れば合格とする。

【教科書】Darnell-Lodish-Baltimore「分子細胞生物学(下)」東京化学同人

【参考書】資料用プリントを配布する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】櫻庭(M棟719, Tel:656-7531, E-mail:sakuraba@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:金曜日16:20~17:20)

【備考】原則として再試験は実施しない。「講義への参加状況, 演習の回答」と「定期試験」の成績評価の割合は 4:6 とする。

錯体化学

Coordination Chemistry

講師・平野 朋広 2 単位

【授業目的】遷移金属を含む金属錯体の化学を, 主に高分子合成の立場から述べる。特に, 配位子の分子設計と高分子構造との関係を理解することを目的とする。

【授業概要】金属錯体が反応場となる配位重合やメタセシス重合の他に, 金属錯体が反応制御に用いられるアニオン重合やラジカル重合についても紹介する。

【受講要件】特に指定はしない

【到達目標】高分子合成に用いられる錯体の役割を理解すること。

【授業計画】1. 錯体化学とは何か 2. チーグラー・ナツタ触媒によるオレフィンの重合 3. チーグラー・ナツタ触媒によるオレフィンの重合 4. カミンスキー触媒によるオレフィンの重合 5. カミンスキー触媒によるオレフィンの重合 6. メタセシス重合 7. メタセシス重合 8. アニオン重合 9. アニオン重合 10. ラジカル重合 11. 開環重合 12. その他の重合 13. 予備日 14. 予備日 15. 定期試験

【成績評価】定期試験と授業への取り組み姿勢から総合的に判断する。また, 必要に応じてレポートの提出を求める。

【教科書】特になし

【参考書】高分子化学 佐藤恒之他著(朝倉書店), 高分子科学の基礎 高分子学会編(東京化学同人)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】平野(化405, 656-7403, hirano@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし

雑誌講読

Seminar on Biological Science and Technology

生物工学科全教官 1 単位

【授業目的】各研究室において, 専門分野の研究論文ならびに参考文献について講読し, その内容について討論することにより, 卒業研究に役立てようその分野の知識を修得させることを目的とする。

【授業概要】各研究室において, 専門分野の研究論文ならびに参考文献について講読し, その内容について討論する。

【受講要件】各研究室に配属された卒業研究に着手している学生のみ履修できる

【履修上の注意】2/3 以上の回数の出席が必須である。

【到達目標】

1. 専門分野の文献の検索ができる。
2. 英語で書かれた論文を理解できる。
3. 専門分野の研究の状況を理解できる。
4. 専門分野の研究の状況を理解できる。

【授業計画】1. 文献検索法(図書館, インターネット利用) 2. 各種データベースの利用法 3. 専門分野の論文を読みこなす 4. 専門分野のレポートを英文で書く

【成績評価】各研究室で行っている定例の専門雑誌抄読会等に出席し, 論文を読み, 発表したものを指導教官が評価する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

職業指導

Vocational Guidance

非常勤講師・坂野 信義 4 単位

【授業目的】

【授業概要】生涯発達・Career Developing としての人間観・職業観を確立すべく, 学際的見地から職業指導の課題と方法を論述し, 併せて能力開発を実践指導する。

【授業計画】1. I. 職業指導の課題と方法 2. 職業指導発展の略史 3. 職業指導の課題 4. 個性と職業 5. 1) 個人理解の方法・性格, 興味など 6. 2) 適応と適性 7. 3) Career Planning としてのライフワーク 8. 4) マネジメントスキル: リーダシップ論など 9. 職業相談(キャリア・カウンセリング) 10. 1) 職業相談の意義 11. 2) カウンセリング理論と技術 12. 職業指導の評価 13. II. 職業指導に役立つ能力開発: 理論と実践 14. 人生 60 年計画表の作成 15. IC 法, NM 法を活用してソフト作成能力を育成 16. KJ 法を活用しての課題解決とプレゼンテーション

【成績評価】論文, 能力開発のプレゼンテーションにより成績評価。

【教科書】講師よりプリント資料配布。参考書, 必読書については, 講義中紹介。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】「面白くてためになり, そして思い出に残る」講義が目標。

生化学 1

Biochemistry 1

教授・松田 佳子 2 単位

【授業目的】バイオテクノロジーの根幹は生命現象の研究である。生化学は生命を構成する物質の化学であり, 高度に制御された生物情報システムの理解に必要な生物を構成する生体分子とくにタンパク質, アミノ酸についての総合的理解を目的とする。

【授業概要】生命現象の理解のために必要な生化学の基礎について講述した後に, 生体を構成する成分であるアミノ酸, タンパク質について講述する。

【到達目標】

1. アミノ酸・タンパク質の構造と性質を理解する。
2. アミノ酸・タンパク質の機能を理解する。
3. 糖質の性質と役割を理解する。

【授業計画】1. 生化学とは 2. アミノ酸の構造と種類 3. アミノ酸の性質 4. タンパク質とアミノ酸の代謝 5. タンパク質の構造 6. タンパク質の機能 (1) 7. タンパク質の機能 (2) 8. 単糖の構造 (1) 9. 単糖の構造 (2) 10. 単糖の性質 11. 二糖類, 多糖類 (1) 12. 二糖類, 多糖類 (2) 13. 糖タンパク質 14. プロテオグリカン 15. 期末試験

【成績評価】到達目標の 3 項目が達成されているかどうかを試験 70%, 平常点(小テスト, 口答試問, レポート)30%ととして評価し, 3 項目平均で 60%以上あれば合格とする。

【教科書】「マッキー生化学」化学同人

【参考書】特に指定しない。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】松田(化生棟710, Tel:656-7523, E-mail:matsuda@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:火曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない

生化学 2

Biochemistry 2

教授・辻 明彦 2 単位

【授業目的】エネルギー代謝に関する基礎事項と代謝調節機構の基本原則について講義し, 三大栄養素, ビタミンの役割について理解させる。

【授業概要】食物に含まれる糖質, 脂質成分とそれらの構造について解説し, 次に糖質, 脂質からのエネルギー産生機構と制御について説明し, さらに受講者全員で栄養学的見地から食生活の問題点について討論する。

【受講要件】生化学 1 を受講すること。

【履修上の注意】食生活に関するレポートを課すので, 平素から自分が飲食している食品の種類, 成分について関心を払うこと。資料を配付するので, 英語の基本的専門用語の習得に努力すること。

【到達目標】

1. 糖質, 脂質, アミノ酸の栄養学について理解する。
2. エネルギー代謝と代謝調節の基本概念について理解する。
3. 健康的な生活をおくるための栄養学知識について理解を深める。

【授業計画】1. 糖質, 脂質, アミノ酸の構造, 機能, 代謝概説 2. 食品に含まれる糖質, 蛋白質 3. 食品に含まれる脂質 4. 糖質, 脂質の栄養学, 基礎代謝 5. アミノ酸の栄養学, 窒素バランス 6. 糖質, 脂質, 蛋白質の消化と吸収 7. 中間試験(到達目標 1 の評価) 8. 嫌気的解糖によるエネルギー産生 9. 好氣的解糖によるエネルギー産生 10. 脂肪酸の酸化とエネルギー産生 11. 糖質, 脂質, アミノ酸代謝の関連 12. 代謝

生物工学科(夜間主コース)

調節の基本概念 13. エネルギー代謝の制御機構 14. 食生活の栄養学的問題点について討議, 発表, レポート(到達目標3の一部評価) 15. 期末試験(到達目標2の評価と到達目標3の一部評価)

【成績評価】到達目標の3項目が各々達成されているかを試験(60%(中間30%, 期末30%), 平常点40%(出席状況20%, レポート20%)で評価し, 3項目とも60%以上あれば合格とする。

【教科書】「マッキー生化学」化学同人

【参考書】ヴォート生化学(上, 下巻) 東京化学同人

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】辻(化生棟712, Tel:656-7526, E-mail:tsuji@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない

4(目標4の30%を評価)・レポート4(目標4の20%を評価) 15. 期末試験(到達目標1, 2, 3, 4の30%を評価)

【成績評価】出席率80%以上で, 到達目標4項目が各々60%以上達成されている場合をもって合格とする。達成度の評価方法は試験(中間テスト4回:30%, 期末試験:30%), (レポート4回:20%)及び平常点(講義中の口頭試問各自3回:20%)で行う。

【教科書】中原俊輔他著「有機・生物化学工業」三共出版

【参考書】山根恒男著「生物反応工学」産業図書, 福井三郎監修・編「バイオリアクター」講談社サイエンティフィック

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】高麗(M棟813, Tel:656-7408, E-mail:kourai@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:前期:木曜日19:40~21:10後期:火曜日19:40~21:10)

【備考】原則として再試験は実施しない

生体高分子

Biological Macromolecule

非常勤講師・津下 英明
教授・辻 明彦 2単位

【授業目的】生体高分子, 特に機能性生体高分子の構造, 機能, 特性を生物物理化学的に理解する。

【授業概要】前半は生体高分子の基本的特性を講述し, 後半はX線結晶構造解析によるタンパク質の立体構造の研究方法について, その概略を講義する。

【履修上の注意】講義に出席し, 講義内容を演習やレポートを通して理解すること。

【到達目標】

1. 生体高分子(タンパク質, 核酸, 多糖類)の基本的特性を理解する。
2. タンパク質構造解析法の基礎を理解する。

【授業計画】1. 生体高分子概論 2. タンパク質の構造 3. タンパク質の分光学的性質 4. タンパク質の相互作用 5. 遺伝子, 核酸の構造と性質 6. 多糖類の構造と性質 7. 多糖類とタンパク質の相互作用 8. タンパク質の結晶化 9. X線回折の原理 10. 回折X線の位相決定 11. 回折強度データの収集 12. 蛋白質の分子モデルの精密化 13. データ解析の実際(1) 14. データ解析の実際(2) 15. 期末試験

【成績評価】毎回の講義に基づいた演習またはレポート提出の状況と定期試験または最終レポートとの総合評価方式を取る。

【教科書】佐藤衛著「タンパク質のX線解析」共立出版, その他資料を配付する。

【参考書】生物物理, 生物化学関連の教科書一般

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】辻(化生棟712, Tel:656-7526, E-mail:tsuji@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物機能工学

Biological Science

生物工学科教官 2単位

【授業目的】生体分子の生合成, 有機合成から, 生物学までの技術を駆使することによって機能性分子, 機能性高分子を人工的に合成する基礎知識と最先端の知識を修得させる。

【授業概要】基礎的な生体分子, 生体高分子の生合成から, 有機化学による合成, さらに生物学による合成を述べた後, それらの工学的応用を目指した分子設計について, 具体例を含めながら講義する。

【到達目標】

1. 生体分子の特性を理解する。
2. 生体分子の化学合成法を理解する。
3. 生体分子の応用ができる。

【授業計画】1. 生体高分子概論 2. 生体高分子の生合成 3. 生体高分子の有機合成 4. 分子認識化学(1) 5. 分子認識化学(2) 6. バイオミメティック化学 7. 抗体工学 8. 核酸工学 9. コンビナトリアル化学 10. 進化分子工学 11. エコ材料 12. 生分解材料 13. 組織工学(1) 14. 組織工学(2) 15. 期末試験

【成績評価】出席状況, 演習の回答, レポートの提出状況と内容, 小テスト及び定期試験の成績を総合して行う。

【教科書】資料用プリント配布。

【参考書】大野惇吉著「酵素反応の有機化学」丸善, コンビナトリアル・ケミストリー研究会編「コンビナトリアル・ケミストリー」化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない

生物化学工学

Biochemical Engineering

教授・高麗 寛紀 2単位

【授業目的】従来の化学反応では達成し得なかった省エネルギー反応である高機能バイオリアクターによるプロセス設計の基礎知識を修得させることを目的として, 酵素反応, 微生物反応, 固定化酵素反応プロセス, 固定化微生物反応プロセス等の基礎知識を修得させる。

【授業概要】酵素反応工学, 微生物反応工学, 固定化酵素生産プロセス, 固定化微生物プロセス, バイオリアクター設計工学等を講述する。

【受講要件】「生物有機化学1」の履修を前提にして講義を行う。

【履修上の注意】講義の2単元が終わる毎に演習, レポート4回および中間テスト4回を実施するので, 毎回の予習・復習は欠かさずに行うこと。

【到達目標】

1. 酵素反応工学を理解する。
2. 微生物反応工学を理解する。
3. 固定化酵素生産プロセスを理解する。
4. 固定化微生物生産プロセスを理解する。
5. バイオリアクター設計工学を理解する。

【授業計画】1. 酵素・酵素反応工学概要 2. 酵素反応速度論 3. 中間テスト1(目標1の30%を評価)・レポート1(目標1の20%を評価) 4. 微生物反応プロセス 5. 微生物生産プロセス 6. 中間テスト2(目標2の30%を評価)・レポート2(目標2の20%を評価) 7. 固定化酵素概論 8. 固定化酵素生産プロセス 9. 中間テスト3(目標3の30%を評価)・レポート3(目標3の20%を評価) 10. 固定化微生物概論 11. 固定化微生物生産プロセス 12. バイオリアクター設計1(アミノ酸発酵・核酸発酵) 13. バイオリアクター設計2(ビタミン発酵・アルコール発酵) 14. 中間テスト

生物機能設計学

Medicinal Chemistry

教授・堀 均 2単位

【授業目的】生物機能設計学をメディシナルケミストリーと捉え「生物機能を有機化学的手法で探索し創製する」を目的とし, 生理活性・生物活性機能発現設計された薬物分子の分子構造と活性を分子レベルで考え, メディシナルケミストリーの基礎を学ぶ。

【授業概要】生物機能設計学としてのメディシナルケミストリーの基礎的問題を, 分子標的や定量的構造活性相関(QSAR)法を修得し, ゲノム創薬化学を考える。

【受講要件】有機化学および演習, 生物有機化学, 生化学, 分子生物学を受講していること。

【履修上の注意】有機化学および演習, 生物有機化学, 生化学, 分子生物学を履修。有機化学, 生物有機化学, 生化学の教科書を参考書として用いる。また分子模型の用意。

【到達目標】

1. 生物機能を有機化学原理で探索できる(ドラッグディスカバリー/医薬品開発)。
2. 生物機能を有機化学原理で創製できる(ドラッグデザイン/薬剤分子設計)。
3. 生物機能分子の構造と活性を分子レベルで考えられる(メディシナルケミストリーの思考)。
4. 生物機能設計としてのメディシナルケミストリーを理解する。
5. 臨床試験, 遺伝子治療の倫理的問題を理解する。

【授業計画】1. 生物機能設計学としてのメディシナルケミストリー 2. ドラッグディスカバリー(1):病気, ターゲット, バイオアッセイ, リード 3. ドラッグディスカバリー(2):天然リガンド, コンビナトリアル・ケミストリー, SAR, レポート1(到達目標1の一部評価) 4. ドラッグ

生物工学科(夜間主コース)

ディスカバリー(3):ターゲット指向性,薬物代謝,毒性,臨床試験 5. ドラッグデザイン(1):分子修飾法,イソステリズム(等価性) 6. ドラッグデザイン(2):X線解析,分子標的法,ケーススタディ演習およびレポート2(到達目標2~4の一部評価) 7. 中間試験(到達目標1,4の一部評価) 8. ドラッグデザイン(3):QSAR(1):logP,σ, Es, Hansch-Fujita 式 9. ドラッグデザイン(4):QSAR(2):Graigプロット, Toplissスキーム, パイオステラ, QSAR研究計画, ケーススタディ演習およびレポート3(到達目標2~4の一部), 10. コンビナトリアル・ケミストリー:原理・方法・活性成分の単離・同定 11. ドラッグデザインとレセプター(1):アゴニストとアンタゴニストのデザイン, 薬剤耐性 12. ドラッグデザインとレセプター(2):Gタンパク質共役レセプター 13. ドラッグデザインとドラッグディスカバリーのまとめ:ケーススタディ 14. ドラッグデザイン, ドラッグディスカバリー, 生命倫理:臨床試験, 遺伝子治療, レポート4(到達目標5) 15. 期末試験(到達目標1-5)

【成績評価】到達目標の4項目が達成されているかどうかを期末試験60%, 平常点(出席状況, クイズ, 宿題, 中間試験)40%として評価し, 4項目平均で60%以上あれば合格とする。

【教科書】Graham L. Patrick 「An Introduction to Medicinal Chemistry」Oxford Univ. Press の訳本『メディシナルケミストリー』(北川勲, 柴崎正勝, 富岡清 監訳, 丸善株式会社)。

【参考書】David A. Williams & Thomas L. Lemke 「Foye's Principles of Medicinal Chemistry」Lippincott Williams & Wilkins., Lippincott Williams & Wilkins, 「The Practice of Medicinal Chemistry」(Edited by Wermuth, C.G.) Academic Pr., Richard B. Silverman 「The Organic Chemistry of Drug Design and Drug Action」Elsevier

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】堀(M棟821, Tel:656-7514, E-mail:horio@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日18:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない。

生物工学実験1

Experiments of Biological Science and Technology 1

生物工学科教官 4単位

【授業目的】実験の基本操作を修得させ, 定性分析, 容量分析などの基礎分析化学実験と物理化学の基礎実験を行う。また, 生理活性物質の構造, 機能を明らかにして, その反応を分子レベルで理解するための基礎として, ペプチドの有機合成及び構造化学に関する実習を行う。講義で履修した内容の一部を実験により再度確認し, 理解の助けとする。報告書の作成方法についても指導する。

【授業概要】将来, 生物工学分野での技術者・研究者を目指す者が必ず経験しておくべき実験の基本操作を定性分析, 容量分析の実験に組み込み, 基本的な物理化学および有機化学実験を行う。また有機化学実験として, 生理活性ペプチドの合成及びタンパク質の一次構造決定法の基本操作を実習する。

【履修上の注意】実験を安全に行うため「安全マニュアル」徳島大学工学部編「実験を安全に行うために」「続実験を安全に行うために」化学同人を一読しておくこと。また, あらかじめテキスト「生物工学実験1」をよく読み予習をしっかりと行って, 実験に着手すること。

【到達目標】

1. 定性分析を実験により体得する。
2. 容量分析を実験により体得する。

【授業計画】1. 分析化学実験 1:無機定性分析(陽イオンと陰イオンの性質, 陽イオンの系統分析) 2. 分析化学実験 2:容量分析(中和滴定, キレート滴定, 電位差滴定) 3. 分析化学実験 3:吸光度分析, クロマトグラフィー 4. 物理化学実験 1:密度, 表面張力 5. 物理化学実験 2:溶解熱, 起電力 6. 有機化学実験 1:H-Asp-Phe-OMe(アスパルテーム)の合成と生理活性 7. 有機化学実験 2:ペプチド誘導体の構造決定 8. 期末試験

【成績評価】実験内容に対する理解力の評価は, 実験への出席状況, レポートの提出とその内容および簡単な口頭試問の結果を総合して判定する。

【教科書】小冊子「生物工学実験1」

【参考書】「実験を安全に行うために」化学同人, 「続実験を安全に行うために」化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない

生物工学実験2

Experiments for Biological Science and Technology 2

生物工学科教官 4単位

【授業目的】講義で得た知識を実験を行うことにより, さらに高度に習熟し, 講義では得られない情報及び卒業研究を進める上での必要な研究の手法と研究に対する態度および考え方を修得する。

【授業概要】生化学, 遺伝子工学, 微生物学, 免疫学, 細胞工学及び酵素工学に関する基礎的技術から高度な技術までを修得させるため, 生化学基礎, 微生物学基礎, 酵素工学基礎, 免疫学基礎, 細胞工学基礎等を実習し, 生命科学に必要な基礎研究能力の養成を図る。

【履修上の注意】実験を安全に行うため「安全マニュアル」徳島大学工学部編「実験を安全に行うために」「続実験を安全に行うために」化学同人を一読しておくこと。また, あらかじめテキスト「生物工学実験2」をよく読み予習をしっかりと行って, 実験に着手すること。白衣, 安全眼鏡, 「安全マニュアル」を持参すること。

【到達目標】生体分子の取り扱いを実験を通じて理解する。

【授業計画】1. 実験概論, 実験機器の説明 2. 血清アルブミンの精製 3. 血清蛋白, アルブミンの SDS-PAGE 解析 4. アルカリフォスファターゼの反応速度的解析 5. DNA の定量と熱変性 6. プラスミド DNA の分離精製 7. アガロース電気泳動 8. 大腸菌の形質転換 9. 好熱菌の分離および培養 10. 酵素の耐熱性・特異性 11. ディスクゲル電気泳動 12. 微生物の簡易同定 13. 微生物の増殖測定 14. 抗体産生細胞の観察とヒト細胞染色体の観察 15. 期末試験

【成績評価】実験内容に対する理解力の評価は, 実験への出席状況, レポートの提出とその内容および簡単な口頭試問の結果を総合して判定する。

【教科書】小冊子「生物工学実験2」

【参考書】中村桂子・松原謙一監修「細胞の分子生物学」KYOIKUSHA

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない

生物反応工学

Biological Technology

助教授・永澤 秀子 2単位

【授業目的】バイオテクノロジーの基礎技術とその概念を概説し, 最近のバイオテクノロジーの応用例について調査, 理解させる。

【授業概要】基礎概念として, 遺伝子工学およびタンパク質工学技術, タンパク質の構造活性相関, 酵素化学について概説する。最近のタンパク質工学, 医療, 医薬品開発におけるバイオテクノロジーの応用研究の例をひきながら解説し, これに基づいて各自で一つテーマを決めて調査報告させる。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】分子模型「HGS Biochemistry Molecular Model, Student Kit」丸善を使用することがあるので, 持参すること。

【到達目標】

1. タンパク質の立体構造について理解し, 機能との相関について説明できる。
2. バイオテクノロジーの応用として, 環境, 医療分野での最近の進歩について調査報告する。

【授業計画】1. 遺伝子工学技術の基礎概念 2. タンパク質工学技術の基礎概念 3. タンパク質の立体化学と機能(1) 4. タンパク質の立体化学と機能(2) 5. 酵素触媒の原理 6. 中間試験 7. コンビナトリアル化学と high throughput screening 8. 機能性分子の設計-人工酵素- 9. 機能性分子の設計-触媒抗体- 10. クロウン技術 11. ゲノム創薬 12. 遺伝子治療 13. 調査報告(1) 14. 調査報告(2) 15. 期末試験

【成績評価】講義への出席状況および調査報告レポート発表, 期末試験の成績を総合して評価する。

【教科書】講義中に資料プリントを配布する。

【参考書】指定しない。

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】永澤(機械棟820, Tel:656-7522, E-mail:nagasawa@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:木曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない

生物物理化学

Biophysical Chemistry

教授・金品 昌志 2単位

【授業目的】細胞膜の構造や生体内反応を理解するための基礎となる界面現象・電気化学・反応速度論の初歩を履修し, 生命現象が分子やイオンのレベルで理解できるよう基礎知識を修得させる。

【授業概要】物理化学1, 2, 3で学習した知識を基礎とし, 化学反応の動力学的側面, 電気化学における電極の取り扱い, 界面とコロイド状

生物工学科(夜間主コース)

態の基礎について講義する。特に、生命現象と関連する酵素反応速度、細胞膜の膜電位、生体膜の構造と機能については詳細な議論を加える。

【受講要件】物理化学1, 2, 3の履修を前提として講義する。

【履修上の注意】講義中に2回の小テストを行うので、予習、復習をしっかり行うこと。

【到達目標】

1. 反応速度の取り扱いを理解し、基本的速度式の導出ができる。
2. 電極反応の熱力学的取り扱いができる。
3. 界面現象とコロイド溶液の性質について理解を深める。

【授業計画】1. 化学反応速度論(1) 化学変化の速度、反応の次数と分子数、一次反応速度式 2. 化学反応速度論(2) 二次反応速度式、速度定数と平衡定数 3. 化学反応速度論(3) 反応速度に及ぼす温度の影響、圧力の影響 4. 化学反応速度論(4) 活性複合体理論(絶対反応速度論) 5. 化学反応速度論(5) 酵素反応、酵素阻害、小テスト 6. 電気化学:電極論(1) ボテンシャルの定義、電池の起電力 7. 電気化学:電極論(2) 自由エネルギーと可逆起電力、半電池の型、電池の標準起電力 8. 電気化学:電極論(3) 標準電極電位、電池の起電力の計算、溶解度積、濃淡電池 9. 電気化学:電極論(4) 浸透膜平衡、神経伝導、小テスト 10. 界面とコロイド(1) コロイド状態、表面張力、曲面の表面張力 11. 界面とコロイド(2) 溶液の表面張力、界面の熱力学 12. 界面とコロイド(3) 単分子膜、二分子膜、細胞膜 13. 界面とコロイド(4) 会合性コロイド、Langmuirの吸着等温式 14. 界面とコロイド(5) 界面電気現象 15. 期末試験

【成績評価】講義内容に対する理解力の評価は、講義への出席状況40%、レポートと小テスト30%、および定期試験の成績30%を総合して行う。到達目標への到達度60%以上並びに出席率80%以上を合格とする。

【教科書】W.J. ムーア著(藤代亮一訳)「物理化学(上)9章」、「物理化学(下)11, 12章」東京化学同人

【参考書】A.R. デナロ著(本多健一訳)「基礎電気化学」東京化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】金品(化生棟607, Tel:656-7513, E-mail:kanesina@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:水曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない

生物有機化学1

Bioorganic Chemistry 1 教授・津嘉山 正夫 2単位

【授業目的】有機化学の基礎を学ぶために有機化学の基本原則と基礎概念を修得させる。

【授業概要】基本的な有機化合物、特に脂肪族化合物の構造、性質、求電子付加反応、求核置換反応、簡単な立体化学について有機化学の基礎を講述する。

【到達目標】化学結合と電子の動きを理解し、有機化学の論理性が分かり、脂肪族化合物の合成・反応を理解する。

【授業計画】1. 構造と結合 2. 極性結合と重要性 3. アルカンとシクロアルカン 4. アルカンとシクロアルカンの立体化学 5. 有機反応の概観 6. アルケンの構造と反応性 7. アルケンの反応と合成 8. アルキンの有機合成 9. 基礎立体化学 10. ハロゲン化アルキル 11. ハロゲン化アルキルの反応 12. 求核置換反応 13. 脱離反応 14. 予備日 15. 定期試験

【成績評価】出席状況+小テスト:定期試験の成績(4:6)を総合して評価する。

【教科書】マクマリー有機化学(上中)伊東・他訳(東京化学同人)

【参考書】マクマリー有機化学(中下)伊東・他訳(東京化学同人)、ポルハルト・ショアー現代有機化学(化学同人)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】津嘉山(化生棟407, Tel:656-7405)

【備考】理解状況を知るため授業の進行によって小テストをする。

生物有機化学2

Bioorganic Chemistry 2 助教授・永澤 秀子 2単位

【授業目的】全ての生命現象は有機化学反応の組み合わせによるものである。生物機能を理解するためには、まず化学反応の原理と化合物を見るセンスの修得が必須である。本講義は生物有機化学1に引き続き、有機化学の基礎学力をつけることを目的とする。

【授業概要】カルボニルの化学を中心として、基礎的な化学反応の原理について講述する。

【受講要件】生物有機化学1または有機化学1を履修していること。

【到達目標】

1. 反応を電子の動きとして理解し、基礎的な有機反応の答えを自ら導けるようにする。
2. カルボニルの性質と反応性を理解する。

【授業計画】1. アルコールとフェノール 2. エーテルとエポキシド:チオールとスルフィド 3. アルデヒドとケトン(1) 4. アルデヒドとケトン(2) 5. カルボン酸 6. 復習テスト 7. 求核アシル置換反応(1) 8. 求核アシル置換反応(2) 9. カルボニルの α 置換反応(1) 10. カルボニルの α 置換反応(2) 11. カルボニル縮合反応 12. アミン(1) 13. アミン(2) 14. 予備日 15. 期末試験

【成績評価】講義参加状況、問題演習と復習テストの成績等により平常点をつける。さらに期末テストを実施し総合評価とする。

【教科書】J. McMurry 著「マクマリー有機化学(中)」東京化学同人、教材:分子模型「HGS Biochemistry Molecular Model, Student Kit」丸善

【参考書】特に指定しない。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】永澤(機械棟820, Tel:656-7522, E-mail:nagasawa@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:木曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない

生物有機化学3

Bioorganic Chemistry 3 非常勤講師・大島 松美 2単位

【授業目的】生物有機化学1, 2を基礎とし、さらに生物および化学のインターフェイスとしての反応、合成、構造、活性に重点をおいた有機化学の根幹を理解する。生命体は基本的に有機化合物から成り立っていることより、本講義は生命科学を理解するための基礎的学問である。

【授業概要】生物有機化学1, 2を基礎とし、芳香族化合物、複素環式化合物および天然有機化合物の構造、性質、反応、合成を中心として、有機化学の基礎を講述し、演習問題を加える。

【受講要件】生物有機化学1および2を必ず履修していること。

【履修上の注意】小テストを実施するので毎回の復習は欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. 芳香族化合物の命名法と性質、反応性、構造などについての基礎的特徴の理解を図る。
2. 天然有機化合物の性質、反応性、機能について基本的特徴の理解を図る。
3. 有機化合物のスペクトル解析の原理、手法、特徴、利用法の基本について理解を図る。

【授業計画】1. ベンゼンとその同族体(命名法、芳香族性、共鳴構造) 2. ベンゼン環の置換反応(求核置換、置換基の配向性) 3. 芳香族(アミン、ハロゲン、ニトロ、スルフォン、フェノール、キノン)の性質と反応 4. 芳香族(カルボン酸、アルデヒド、ケトン)の性質と反応 5. 芳香族多環化合物(ビフェニル、トリフェニルメタン)の性質と反応 6. 縮合環化合物(ナフタレン、アントラセン、フェナントレン)の性質と反応 7. 複素環式化合物(フラン、ピリジン、キノリン、インドール、フラボン) 8. 天然有機化合物(アミノ酸、核酸、タンパク質、イソプレノイド、ステロイド、ホルモン、ビタミン) 9. 有機化合物の可視・紫外スペクトル解析 10. 有機化合物のNMRスペクトル解析 11. 有機化合物のIRスペクトル解析 12. 有機化合物のESRスペクトル解析 13. 有機化合物のMSスペクトル解析 14. 予備日 15. 定期試験

【成績評価】平常点の評価は、講義への出席状況、演習の回答、レポート、小テスト等を重視する。

【教科書】「ソロモンの新有機化学(上・下)最新版」廣川書店

【参考書】Voet & Voet「Biochemistry」Wiley, B. Alberts et al.「Molecular Biology of the Cell」Garland

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない

卒業研究

Undergraduate Work 生物工学科全教官 4単位

【授業目的】与えられたテーマについての計画・実験・結果の考察に至るまでの作業を通して、自ら考え行動できる自主性、創造性を養うことを目的とする。また、論文執筆や発表会を通して、文章の書き方、表現力、プレゼンテーション能力を身に付けることを目的とする。

【授業概要】研究グループごとに異なるが、一般的には、各研究テーマに関連する専門書や論文をグループ内で輪講し、文献調査を行い、指導者と相談しながら実験を遂行する。定期的にゼミが開かれ、実験の経過報告などを行いディスカッションする。

生物工学科(夜間主コース)

【受講要件】生物工学科が定める「卒業研究着手規定」に記されている要件をすべて満たし、生物工学科学科会議において承認を得た者のみ卒業研究に着手できる。

【到達目標】

1. 調査研究を行い、報告書を作成、口演することができる。
2. 独創的研究を教官の指導を受けて遂行することができる。

【授業計画】1. 卒業研究テーマ説明:特別な時間を設けての各グループの研究テーマ説明は行わない。インターンシップやオフィスアワーを利用して、各自で研究室の研究内容を把握すること。また、2月下旬に行われる卒論・修論発表会を必ず聴講すること。2. 配属先決定:3月初旬に、単位取得状況を掲示により公表する。卒研着手資格を満たした学生を対象に配属先希望アンケートを実施する。アンケートをもとに学科会議において配属先を決定し、掲示により通知する。3. 卒業研究実施:各研究室ごとに、教官の指導のもとで卒業研究を行う。4. 卒業論文提出・発表会:研究結果をまとめた論文を2月中旬までに提出し、2月下旬に行われる卒業論文発表会で研究成果を発表する。

【成績評価】卒業研究への取り組み姿勢(日頃の実験態度など)、提出された卒業論文の内容、発表会における発表態度とプレゼンテーションの内容などを総合判断して評価する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

電子計算機

Digital Computers

非常勤講師・篠原 靖典 2単位

【授業目的】現代社会は、コンピュータ抜きでは語れない状況となっている。このような情報化社会において、コンピュータリテラシーを身に付けることは不可欠なものとなってきた。このような背景のもと本講義では、コンピュータについての基礎知識と活用能力を涵養する。

【授業概要】コンピュータの基礎知識について講義する。さらに表計算ソフトを用い、情報の加工、蓄積の方法を学習する。

【受講要件】全学共通教育科目である情報科学を受講している方が望ましい。

【到達目標】

1. コンピューターの基礎知識を理解する。
2. 基礎的なコンピュータの活用能力を習得する。

【授業計画】1. コンピューターの基本的な機能 2. コンピューターの起動とCPUの動作原理 3. プログラミング言語の種類 4. アルゴリズムとフローチャート 5. アプリケーションソフトの利用 6. パソコンによるデータ処理と分析 7. 表計算ソフト Excel の基礎 8. データ入力の方法 9. 数式の使い方 10. 書式設定の方法 11. グラフの作成 12. データベースとしての使い方(1)(データの抽出) 13. データベースとしての使い方(2)(データの集計) 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は講義への取り組み状況(3割)、及び最終試験の成績(7割)を総合して行なう。

【教科書】自作テキストを使用する。

【参考書】参考書、必読書については、講義中、章別に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】加藤(M304, 656-7429, katoh@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし。成績評価は平常点(講義への参加)と定期試験の割合を3:7として評価する。

統計力学

Statistical Mechanics

講師・岸本 豊 2単位

【授業目的】統計力学は原子・分子等の微視的性質を用いて、物質の巨視的性質を説明する際に必要な、いわば微視的世界と巨視的世界を結ぶ橋である。本講義では、熱平衡状態における物理量の熱平均値を求める際に用いられる統計力学の基本事項について平易に解説したい。

【授業概要】統計力学で用いられる基本的な集団-ミクロカノニカル集団、カノニカル集団およびグランドカノニカル集団-の概念を述べ、熱平衡について講義し、巨視的物理量が原子・分子の性質から導かれる事について解説する。また、古典統計と量子統計の相違点についても講義する。

【受講要件】量子力学を履修しているのが望ましい。微分・積分の基礎知識を持っているのが望ましい。

【到達目標】

1. 熱平衡および統計集団について理解する。
2. 温度、エントロピー、自由エネルギー等を理解する。
3. 量子統計の特徴を理解する。
4. 基本的な系に適用する。

【授業計画】1. はじめに-統計力学の考え方- 2. ミクロカノニカル集団と熱平衡 3. 温度とエントロピー 4. 熱力学の法則 5. まとめ1 6. カノニカル集団とボルツマン分布 7. ヘルムホルツの自由エネルギー 8. マクスウェル-ボルツマンの速度分布関数 9. グランドカノニカル集団 10. まとめ2 11. 量子統計(1) フェルミ統計 12. 量子統計(2) ボーズ統計 13. 統計力学の応用(1) 14. 統計力学の応用(2) 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】定期試験70%、平常点(出席状況等)30%として評価し、総合で60%以上を合格とする。

【教科書】使用しない(ノート講義)。

【参考書】久保亮五著「統計力学」共立出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岸本(A棟215, 656-9851, yutaka@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】意欲的に勉強すること。

微生物応用工学

Applied Microbiology

非常勤講師・岩田 深也 2単位

【授業目的】微生物工業の歴史、現状および将来について応用微生物学見地から解説するとともに、微生物の生理代謝が工業的発酵生産技術としてどのように利用されているかについて理解することを目的とする。

【授業概要】微生物工業の歴史、現状および将来について応用微生物学見地から解説するとともに、微生物の生理代謝が工業的発酵生産技術としてどのように利用されているかについて生化学的に講述する。

【履修上の注意】予習、復習を行い、積極的に学習すること。

【到達目標】

1. 微生物工業関連の技術史についての理解を深める。
2. 人類と微生物及び自然環境についての理解を深める。
3. 化学合成法と微生物による合成法の差違について理解を深める。

【授業計画】1. 工業用微生物の歴史 2. 工業用微生物の種類とその培養技術 スクリーニング、原料、培養のスケールアップ、バイオリアクター 3. 工業用微生物の育種 突然変異及び人工変異、交配・交雑、細胞融合、遺伝子組換え 4. 発酵食品工業 種々の発酵食品における微生物利用 5. 微生物工業(1)有機酸発酵、抗生物質製造工業、アミノ酸及び核酸関連物質発酵 6. 微生物工業(2)生理活性物質及び酵素の生産、微生物・酵素の利用 7. 微生物工業(3)微生物活性の有機合成化学への応用、有用生理活性物質の生産 8. 糖鎖工学研究における微生物の役割 9. 微生物と環境 環境浄化と廃液処理、有機化学合成高分子物質の微生物分解 10. 予備日 11. 期末試験

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを試験60%、平常点(レポート及び出席状況、受講態度等)40%で評価し、平均で60%以上有れば合格とする。

【教科書】特に指定しない

【参考書】参考書、必読書は講義中、章別に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない

微生物学

Microbiology

助教授・長宗 秀明 2単位

【授業目的】遺伝子組換えや発酵工学などに応用される微生物に関する基礎知識とそれを取り扱うための技術についての知識を得る。また病原微生物による感染症等も含めて微生物学一般の基礎的知識を修得する。

【授業概要】生物学領域ではウイルス、細菌、菌類など多種多様な微生物を取り扱う。従ってこれらの微生物の構造や特徴を講述するとともに、微生物の取り扱いや制御のための基本的な知識の理解を図る。また微生物と宿主や環境との相互作用についても述べ、生命圏における微生物の占める位置についての理解も図る。

【受講要件】生化学1及び2の受講を必須とする。

【履修上の注意】本講義においては中間試験及び期末試験の2回の試験を行い評価の対象とするため、毎回の予習と復習を欠かさず行うこと。

【到達目標】

1. 生物の種類・種類の概要、またその構造と特徴を理解する。
2. 微生物の遺伝学的特性を理解する。
3. 抗生物質などの薬剤による微生物制御について理解する。
4. 病原微生物と宿主、また環境微生物と環境との相互作用について理解する。

【授業計画】1. 微生物学の歴史と方法 2. 微生物の構造と特徴 1:細菌の構造 3. 微生物の構造と特徴 2:細菌の増殖 4. 微生物の構造と特徴 3:ウイルスの構造と増殖 5. 微生物の構造と特徴 4:菌類や原生生物 6. 微

生物工学科 (夜間主コース)

生物の代謝 1(微生物の増殖・培養) 7. 微生物の代謝 2(微生物の代謝反応) 8. 中間試験・レポート(到達目標 1 評価) 9. 微生物の遺伝学的特徴 10. 化学療法剤や消毒剤による微生物制御 11. 微生物の病原性 1: 微生物の産生する毒性物質 12. 微生物の病原性 2: 感染症と免疫 1(細菌感染) 13. 微生物の病原性 3: 感染症と免疫 2(ウイルス感染) 14. 地球環境と微生物の関係, 微生物の利用 15. 期末試験・レポート(到達目標 2, 3, 4 評価)

【成績評価】到達目標 4 項目の到達度は試験 (70%) とレポート (30%) で評価する。試験は中間試験 1 回と期末試験 1 回を行う。4 項目とも到達度 60% 以上かつ出席率 80% 以上を合格とする。

【教科書】Madigan ら「Brock Biology of Microorganisms」Prentice Hall International Ltd. を指定し、講義内容に不足する部分は別途プリントを配付して補う

【参考書】スタニエラ「微生物学 上・下」培風館、笹月健彦監訳「免疫生物学」南江堂、その他必要に応じて講義中に紹介する。

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】長宗(M棟814, Tel:656-7525, E-mail:nagamune@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:月曜日16:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない

微分方程式 1

Differential Equations (I)

教授・長町 重昭, 助手・坂口 秀雄 2 単位

【授業目的】微分方程式の解法を修得し、さらに工学の諸分野に現われる微分方程式の解法に応用できるようにする。

【授業概要】微分方程式の理論は数理工学的な現象の解析に有力な手段を与え、現代工学の基礎として重要な役割を果たしている。その広範な理論の入門段階として、この講義では微分方程式の具体的な解法を中心に講義する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをかちんととり、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 基本的な一階常微分方程式が求積法により解ける。
2. 二階線形常微分方程式が解け、且つ記号解法が適用できる。

【授業計画】1. 変数分離形 2. 同次形 3. 一階線形常微分方程式 4. 完全微分形 5. 非正規形一階常微分方程式 6. 階数降下法 7. 二階線形同次常微分方程式 8. 二階線形非同次常微分方程式 9. 二階線形定数係数常微分方程式 10. 記号解法 11. 記号解法 2 12. 通常点における級数解法 13. 確定特異点のまわりの級数解法 14. ルジャンドル関数・ベッセル関数 15. 期末試験(到達目標 1 及び 2 の評価)

【成績評価】講義への取組み状況、レポートの提出状況・内容等の平常点と期末試験の成績を総合して行う。

【教科書】杉山昌平著「工科系のための微分方程式」、実教出版

【参考書】竹之内脩著「常微分方程式」、秀潤社、秀潤社マイベルク/ファエンアウア著「工科系の数学 5 常微分方程式」、サイエンス社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】坂口(建設棟2階221)

物理化学 1

Physical Chemistry 1

教授・田村 勝弘 2 単位

【授業目的】物質の状態の性質について講述し、化学熱力学の基礎を理解させる

【授業概要】物質に対して、物理化学的に具象化するためには多くの方法論が要求される。大切なことはものの見方の基本的な態度であることを講述し、物理化学的に物質をとらえるうえで基礎となる考え方や方法についての講義する。

【履修上の注意】物理化学の実力向上には、演習問題を解くことが大切である。講義の進行に応じて適宜演習を課す。

【到達目標】化学熱力学の基礎を理解する

【授業計画】1. 物質の状態: 国際単位系 (SI 単位), 2. 熱力学的性質, 状態方程式, 臨界現象, 対応状態の原理 3. 熱力学第一法則: 熱と仕事, 状態関数, 熱容量, 4. Joule-Thomson 効果, 理想気体への適用 5. 熱化学: 反応熱, Hess の法則, 標準状態, 6. 反応熱の温度変化, 結合エンタルピー 7. 中間試験 8. 熱力学第二法則: カルノーサイクル, 9. 熱力学温度目盛, エントロピー, Gibbs エネルギーと Helmholtz エネルギー 10. Maxwell の関係式, 熱力学的関係式 11. 化学ポテンシャル, 熱力

学第三法則 12. 状態の変化: 相, 13. 相律, 相図, Clapeyron-Clausius 式 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義への参加状況と中間試験および期末試験の結果を参考にする。

【教科書】ムーア物理化学 (上)

【参考書】化学便覧など

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】田村(化509, 088-656-7416, tamura@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】遅刻は認めない。講義開始までに入室すること。平常点と試験の比率は 3:7 とする。

物理化学 2

Physical Chemistry 2

非常勤講師・郡 寿也 2 単位

【授業目的】分子軌道や化学結合を理解するために、古典力学の破綻から量子力学 (化学) の導入について講義し、Schrodinger の波動方程式を解いてその意味を理解させ、量子化学の基礎知識を修得させる。

【授業概要】波動運動と Bohr の原子モデルを用いた水素の発光・吸収スペクトルについて説明する。一般波動運動に粒子性 (量子) を持ちこみ、逆に粒子運動に波動性を持ちこむことによって Schrodinger の波動方程式を導く。Schrodinger の波動方程式を解くことによって波動関数の空間分布に関する理解を図る。

【受講要件】三角関数, 指数関数の微分 (編微分) の理解を前提に講義を行う。

【到達目標】

1. 波動性と量子性の概念を理解し、Bohr モデルの計算ができる。
2. Schrodinger の波動方程式から、各原子起動の形を理解する。
3. 簡単な分子の形 (結合様式) を理解する。

【授業計画】1. 波動運動 2. 黒体放射・光電効果 3. 水素のスペクトルと Bohr の原子モデル 4. 干渉と回折 5. 粒子と波動 6. Schrodinger の波動方程式の導入 7. Schrodinger の波動方程式の解 8. 水素原子の波動方程式の動径分布 9. 水素原子 10. 多原子分子の結合様式 11. 期末試験

【成績評価】到達目標の 3 項目が各々達成されているかを試験 60%, 平常点 (演習レポート, 出席点) 40% で評価し、3 項目平均で 60% 以上あれば合格とする。

【教科書】W.J. Moore 著「物理化学 (下) 13-15 章」東京化学同人

【参考書】特になし。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない。

物理化学 3

Physical Chemistry 3

助教授・松木 均 2 単位

【授業目的】溶液, 化学親和力及び電解質溶液の 3 つの物理化学的事項について化学熱力学を用いて講義を行い、それらの基本的な概念について理解させる。

【授業概要】本講義では、まず多成分混合物の定義やその取り扱い方を論じ、具体例として二成分混合溶液を取り上げる。二成分溶液の相平衡を熱力学的観点から説明する。次に化学平衡の条件、平衡定数の意味や平衡定数への熱力学変数の効果を解説する。さらに、電解質溶液の示す特性やその熱力学的な取り扱い方について講述する。

【受講要件】物理化学 1, 2 の履修を前提として講義する。

【履修上の注意】講義中に中間試験を行うので、予習および復習をしっかり行うこと。

【到達目標】

1. 溶液を中心とした二成分系の相平衡についての熱力学式が導出できる。
2. 化学平衡の条件と平衡定数の意味について熱力学的に理解する。
3. 電解質溶液の基本的な概念とその取り扱い方を理解する。

【授業計画】1. 溶液 (1) 組成, 部分モル量, Gibbs-Duhem の式 2. 溶液 (2) 理想溶液の熱力学, Raoult の法則, Henry の法則 3. 溶液 (3) 二成分系の溶液-蒸気平衡, 相図 4. 溶液 (4) 二成分系の溶液-固体平衡, 凝固点降下 5. 溶液 (5) 浸透圧, 理想溶液からのずれ 6. 溶液 (6) 液-液平衡, 非理想溶液の熱力学 7. 中間試験 8. 化学親和力 (1) 化学平衡の条件, 理想気体反応の平衡 9. 化学親和力 (2) 濃度単位と平衡定数, Le Chatelier-Braun の原理 10. 化学親和力 (3) 平衡定数の圧変化及び温度変化, 平衡定数の計算 11. 化学親和力 (4) 非理想系の平衡 (フガシチーと規約) 12. 電解質溶液 (1) モル電導率, Arrhenius の電離説 13. 電解

生物工学科(夜間主コース)

質溶液(2)イオンの輸率と移動度,イオン活量 14.電解質溶液(3)イオン強度 Debye-Huckel の理論と極限法則 15. 期末試験

【成績評価】講義内容の理解力に対する評価は,講義への出席状況 40%,レポートと中間試験 30%および期末試験の成績 30%を総合して行う。到達目標への到達度 60%以上並びに出席率 80%以上を合格とする。

【教科書】W. J. ムーア著(藤代亮一訳)「物理化学(上)7, 8, 10 章」東京化学同人

【参考書】R. A. アルバーティ著(妹尾学・黒田晴雄訳)「物理化学(上)」東京化学同人, D. エベレット著(玉虫伶太・佐藤 弦訳)「入門化学熱力学 第2版」東京化学同人

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】松木(化生棟609, Tel:656-7520, E-mail:matsuki@bio.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:金曜日16:20~17:50)

【備考】原則として再試験は実施しない。

プログラミング演習

Programming Practice

教授・田村 勝弘, 助手・鈴木 良尚 1 単位

【授業目的】本講義において,プログラミングを学習していくための基本的な考え方と知識を修得する。さらに,コンピュータの持つ理論的な思考やアルゴリズムならびに情報処理技術を理解する。

【授業概要】Windows 上で動作するイベント駆動型のアプリケーションソフトを Visual Basic.NET を使って作成する。

【受講要件】「電子計算機」の履修を前提として講義する。

【到達目標】

1. プログラミングのための基本的な考え方と知識を習得する。
2. コンピュータの持つ思考とアルゴリズムを理解する。
3. 情報処理技術の理解を深める。

【授業計画】1. プログラミング言語の分類 2. Visual Basic.NET のプログラミング環境 3. コントロールの使用 4. メニューエディタの使用 5. ダイアログボックスの使用 6. 変数の利用 7. 演算子の使用 8. 分岐判断の構文 9. ループ処理(1)(For~Next 文) 10. ループ処理(2)(Do~Loop 文) 11. 演習問題(1)(基礎問題) 12. 演習問題(2)(中級問題) 13. 演習問題(3)(応用問題) 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は,毎回与える課題への理解度(5割),及び最終試験の成績(5割)を総合して行なう。

【教科書】特に定めなし。必要に応じてプリントの配布などを行う。

【参考書】参考書,必読書については,講義中,章別に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】鈴木(化514, 656-7415, suzuki@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】特になし。

分子生物学

Molecular Biology

教授・野地 澄晴 2 単位

【授業目的】生物は遺伝情報に基づき,生命を維持している。その基本は遺伝子の発現調節にある。そこで,遺伝子の発現調節のメカニズムを理解することを目的とする。

【授業概要】前半は,一般的な転写に関与する蛋白質や染色体の構造とそのメカニズムについて,後半は様々な生物現象と転写調節との関連について講義する。

【受講要件】生化学を受講しておくこと。

【履修上の注意】ノートを作成すること。

【到達目標】

1. 遺伝子について理解する。
2. ゲノムプロジェクトについて理解する。
3. 遺伝子発現調節機構について理解する。
4. 生物の機能と遺伝子発現の関連について理解する。

【授業計画】1. ゲノムの構造 2. ゲノムの高次構造 3. 複製の機構 4. 転写の機構 5. 転写調節因子 6. 翻訳の機構 7. タンパク質の構造 8. 中間試験(到達目標 1, 2 の評価) 9. 発生における遺伝子発現調節 10. 動物における遺伝子発現調節 11. 植物における遺伝子発現調節 12. ウイルスの遺伝子発現調節 13. ゲノムプロジェクトについて 14. 最近の話題 15. 期末試験(到達目標 3, 4 の評価)

【成績評価】到達目標の4項目について各々が達成されているかを100%で評価し,4項目とも60%以上あれば合格とする。

【教科書】美宅成樹著「分子生物学入門」岩波新書

【参考書】中村桂子・松原謙一監修「細胞の分子生物学」KYOIKUSHA

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】野地(化生棟803, Tel:656-7528, E-mail:noji@bio.tokushima-u.ac.jp), オフィスアワー:月曜日18:00~19:30)

【備考】原則として再試験は実施しない

分析化学

Analytical Chemistry

非常勤講師・佐竹 弘 2 単位

【授業目的】化学分析の基礎及び原理を簡単な平衡系を例にして溶液内イオン平衡を講義し,無機定性分析の原理及び定量分析特に滴定分析の原理を理解させる。

【授業概要】化学分析の最も基礎的反応である酸塩基反応,沈殿反応,酸化還元反応及び錯反応について,これら反応系における溶液内平衡を図解及び理論計算から明らかにし,化学反応の考え方や滴定におけるイオン濃度の変化などを理解させて化学分析に必要な基礎知識の向上を図る。

【履修上の注意】授業中に小レポートやテストを行い,成績を評価するので授業には必ず出席しなければならない

【到達目標】

1. 分析実験に必要な濃度計算ができること。
2. 分析化学における溶液内反応の考え方が理解できること。
3. 溶液内平衡イオン種が簡単な図解により求めることができること。
4. 滴定における被滴定液中のイオン種濃度及び理論滴定曲線の計算できること。

【授業計画】1. 化学分析の概要(その1) 2. 化学分析の概要(その2)と演習レポート 3. 定性分析(その1) 4. 定性分析(その2)と演習レポート 5. 定量分析の概要と演習レポート 6. 中和滴定(概要,酸塩基平衡の理論計算) 7. 図解法による酸塩基平衡(小テスト実施と演習レポート) 8. 酸化還元滴定(概要,酸化還元平衡の理論計算) 9. 図解法による酸化還元平衡(小テスト実施) 10. 沈殿滴定(概要,沈殿平衡の理論計算と演習レポート) 11. 図解法による沈殿平衡(小テスト実施) 12. キレート滴定(概要,錯平衡の理論計算) 13. 予備日 14. 期末試験

【成績評価】達成目標の4項目が理解し,利用できるかを試験(定期試験と小テストを含む)60%,平常点(演習レポートと出席状況)40%で評価する。両者の点数が60点以上あれば合格とする。

【教科書】分析化学演習:分析化学(佐竹)

【参考書】定性分析:高木誠二,定量分析など。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】生物事務室(M棟703)

【備考】原則として再試験は実施しない

ベクトル解析

Vector Analysis

助教授・深貝 暢良 2 単位

【授業目的】工学の解析で必要不可欠なベクトルの概念と基礎的な性質を学ぶとともに,ベクトル場の解析学を通して古典力学,流体力学や電磁気学に現れる基本的な物理法則の数学的な理解・運用を目標とする。

【授業概要】三次元空間のベクトルで表される物理量の局所的変化(微分)と大局的効果(積分)を記述する手法としてベクトル場の微分積分学を展開し,微分積分学の基本定理のベクトル場に対する一般化を確立する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】予習と復習が必要です。常日頃より問題演習に取り組みましょう。

【到達目標】

1. ベクトル場の微分が理解できる。
2. ベクトル場の積分が理解できる。

【授業計画】1. はじめに 2. ベクトル 3. 内積,外積 4. ベクトル関数,曲線 5. 曲面 6. スカラー場,ベクトル場,勾配 7. 回転,発散 8. 線積分 9. 重積分 10. 面積分 11. ストークスの定理 12. グリーンの定理 13. ガウスの発散定理 14. 積分定理の応用 15. 期末試験

【成績評価】講義への参加状況,期末試験の結果等を総合して行う。

【教科書】鶴丸孝司・久野昇司・渡辺敏・志賀野洋『ベクトル解析』内田老鶴園

【参考書】安達忠次『ベクトル解析』培風館, H.P. スウ『ベクトル解析』森北出版, 鶴丸孝司・久野昇司・渡辺敏・志賀野洋『ベクトル解析演習』内田老鶴園, 寺田文行・福田隆『演習と応用ベクトル解析』サイエンス社, 青木利夫・川口俊一・高野清治『演習・ベクトル解析』培風館, 山内正敏『詳説演習ベクトル解析』培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】工学部数学教室

放射化学及び放射線化学

Radiochemistry and Radiation Chemistry 助教授・森賀 俊広
助手・村井 啓一郎 2単位

【授業目的】放射線及び放射能について正確な知識が理解され、それらに関わる現象や利用について科学的に判断する能力を養う。

【授業概要】壊変放射性核種(放射性同位元素)や様々な原子核現象の化学、放射線の種類と性質、放射線と物質との相互作用などについて、その基礎を述べる。

【到達目標】

1. 放射線の種類と基本的な物理的性質が理解できる
2. 放射線と物質との相互作用が説明できる
3. 放射線や放射性同位元素の安全な取り扱いが説明できる

【授業計画】1. 放射線の利用と原理 2. 原子核と放射能 3. 原子核と化学状態 (1) 4. 原子核と化学状態 (2) 5. 放射線と物質との相互作用 (1) 6. 放射線と物質との相互作用 (2) 7. 放射線と物質との相互作用 (3) 8. 中間テスト 9. 放射線の検出と測定法 (1) 10. 放射線の検出と測定法 (2) 11. 原子核反応と放射性同位体 12. 放射能現象の応用 (1) 13. 放射能現象の応用 (2) 14. 予備日 15. 予備日 16. 期末テスト

【成績評価】授業への取り組み(20%)、中間テスト(40%)、期末テスト(40%)

【教科書】前田米蔵・大崎進著「放射化学・放射線化学」南山堂

【参考書】富永健・佐野博敏著「放射化学概論 第二版」東京大学出版会

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】村井(化315, 656-7424, murai@chem.tokushima-u.ac.jp)

無機化学 1

Inorganic Chemistry 1 助教授・森賀 俊広 2単位

【授業目的】無機化学の基礎知識を修得させる。

【授業概要】原子の電子配置、化学結合、無機化合物の構造、典型元素の各論をわかりやすく解説する。

【受講要件】必修科目であるので全員受講すること。

【到達目標】

1. 周期表に基づき原子構造を理解する。
2. 様々な結合様式を理解する。
3. 各族元素の化学的性質を理解する。

【授業計画】1. 近代化学への歩み 2. 水素の原子スペクトルとボーアの原子モデル 3. 原子軌道・パウリの排他原理とフントの規則 4. イオン化エネルギー・電子親和力・電気陰性度 5. 原子の電子配置と周期表 6. 第1回中間試験 7. イオン結合と共有結合 8. 原子軌道と分子軌道 9. 混成軌道 10. 金属結合とファンデルワールス結合 11. 空間格子 12. イオン結晶 13. 共有結晶・金属結晶 14. 予備日 15. 最終試験

【成績評価】授業への取り組み姿勢(20%)、レポート(20%)、中間試験(30%)、最終試験(30%)を総合して評価する。100点満点に換算し、60点以上を合格とする。

【教科書】塩川二朗著 化学教科書シリーズ「基礎無機化学」丸善

【参考書】合原眞ら著「無機化学演習」三共出版

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】森賀(M305, 656-7423, moriga@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】ほとんどすべての専門科目の基本となる講義なので、予習・復習を行い習得に努めること。原則として再試験は実施しない。

無機化学 2

Inorganic Chemistry 2 教授・本仲 純子 2単位

【授業目的】重要な基礎科目である無機化学の基礎原理を修得させる。

【授業概要】無機物質の構造、結合生成および性質を理解させるのに、原子および分子の構造、周期性、反応性およびその他の原理を講述する。

【受講要件】無機化学 1 の履修を前提とする。

【到達目標】

1. 無機化合物の構造を習得する。
2. 酸化還元反応を理解する。
3. 酸塩基を理解する。

【授業計画】1. 結論 2. 周期表と電子配置 3. 多原子分子と混成 4. 無機分子、イオンの形、電子不足分子 5. 単体構造(単体の構造、結晶状態における結合、構造による単体の分類) 6. 無機化合物の構造(イオン構造の存在を決める要素、不定比化合物、侵入型化合物、ケイ酸塩化合物) 7. 水素(水素同位体の性質と反応性、水素化物) 8. 水溶液にお

ける酸化・還元反応 1(電極電位の意義) 9. 水溶液における酸化・還元反応 2(平衡定数の計算) 10. 水溶液における酸化・還元反応 3(酸化状態の不均化と安定化) 11. 水溶液における酸と塩基 1(酸・塩基の概念、酸・塩基の相対的強さ) 12. 水溶液における酸と塩基 2(水素化物の酸・塩基の性質) 13. 非水溶液における反応 1(金属-液体アンモニア溶液、溶媒和電子) 14. 非水溶液における反応 2(フッ化水素、融解電解) 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】授業への取り組み状況と最終試験等を総合的に評価する。

【教科書】ベル、ロット著「無機化学」奥野久輝ほか訳、東京化学同人

【参考書】講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】本仲(化611, 656-7409, motonaka@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】少なくとも毎週復習を行う事。積極的講義参加と定期試験の割合は 2:8 とする。

無機工業化学

Industrial Inorganic Chemistry 講師・外輪 健一郎 2単位

【授業目的】セラミックスを中心とした無機工業材料のプロセッシング、ならびに機械的、電磁的性質と評価方法を述べ、新素材の現況、および今後の開発方向を理解させる。

【授業概要】鉄、プラスチックと共に第3の材料としてセラミックスの利用範囲が広がっている。ともすれば新素材は、長所のみ強調されて捉えられることが多い。しかし、適切な材料設計として、長短所を含めた物理・化学的性質を学ぶことが重要である。セラミックスなど新素材の実社会への応用例を示しながら、基本的な性質、作動原理について解説を行う。

【受講要件】「無機化学 1-2-3」を受講していることが望ましい。

【到達目標】

1. セラミックスの長所短所の理解を深める。
2. 新素材の応用例の理解を深める。
3. 無機材料の評価法を習得する。

【授業計画】1. セラミックスの技術史とその特質 2. セラミックスの製造技術 3. 微構造と機械的性質 4. 接合と複合化 5. セラミックスの作製(実習) 6. 誘電性と導電性 7. 圧電体 8. 焦電体 9. 磁性体 10. センサー 11. 生体材料 12. 建築材料 13. リサイクル 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】理解度を把握するためのレポート、小テスト(以上4割)と最終試験(6割)を総合して行う

【教科書】セラミックスの基礎科学(内田老鶴園)

【参考書】講義中に紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】外輪(化310, 656-9204, sotowa@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】復習は必ず行うことレポート、小テストと最終試験の比率は 4:6 とする。

無機材料科学

Inorganic Materials Science 教授・中林 一朗 2単位

【授業目的】無機材料の性質を理解するために、結晶構造を主とする原子配列や結晶中の欠陥、形状等について講義し、実技を実施して結晶構造の基礎知識を習得させる。

【授業概要】無機材料の結晶構造を説明する。結晶構造を理解するためにX線回折の原理と応用について説明を行い、更に実技を通して理解を深める。また、材料の挙動を理解するために相平衡について説明し、一成分系及び二成分系の状態図の理解を図る。

【受講要件】「無機化学 1-2-3」を受講していることが望ましい。

【到達目標】

1. X線構造解析を理解する。
2. 相律を習得する。

【授業計画】1. 固体の構造 2. 結晶構造と対称性 3. 無機材料の基本構造 4. X線 5. X線回折装置 6. X線回折の実技 7. X線回折の実技 8. 結晶の不完全性 9. 相律 10. 一成分型状態図 11. 二成分型状態図 12. 二成分型状態図 13. 非平衡 14. 予備日 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、講義の受講状況(2割)と試験の成績(8割)を総合して行う。

【教科書】W. J. MOORE 著「物理化学(下)」東京化学同人

【参考書】特に無し。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

生物工学科(夜間主コース)

【連絡先】 中林(M603, 656-7422, ichiro@chem.tokushima-u.ac.jp)
【備考】 徳島県立工業技術センターにおいて「無機材料の X 線回折測定と定性分析」の実技を行う。「受講状況」と「試験」の割合は 2:8 とする。

有機工業化学

Industrial Organic Chemistry

教授・河村 保彦, 助手・西内 優騎 2 単位

【授業目的】 化学技術の進歩に伴う有機工業化学の変遷と最近の技術開発について学び、環境と資源の両面から有機化学工業の社会性を理解する。

【授業概要】 有機化学を基盤とする多様な化学工業について、その成り立ち、展開、相互関係、最新技術などに関して講述する。

【受講要件】 「有機化学 1・2・3」を受講していることが望ましい。

【到達目標】

1. 有機化合物工業製品の生産について理解を深める。
2. 有機化学を基盤とする各種化学工業を理解する。
3. 環境・資源の両面から有機工業化学の社会性を理解する。

【授業計画】 1. 化学工業 2. 石油工業 3. 石炭工業 4. 芳香族系化学工業 5. 脂肪族系化学工業 6. 天然高分子を原料とする工業 7. 医・農薬の生産 1 8. 医・農薬の生産 2 9. 医・農薬の生産 3 10. 繊維工業 11. プラスチック工業 12. 有機機能性材料 13. 有機機能性材料 14. 予備日 15. 予備日 16. 最終試験

【成績評価】 講義に対する理解力の評価は講義への参加状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容、小テスト及び定期試験の成績を総合して行う。

【教科書】 宮本武明, 本宮達也著「新繊維材料入門」日刊工業新聞社

【参考書】 宮本武明, 本宮達也著「新繊維材料入門」日刊工業新聞社

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 河村(化410, 656-7401, kawamura@chem.tokushima-u.ac.jp), 西内(化409, 656-7400, nishiuch@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】 特になし。

有機材料科学

Organic Material Science

助教授・杉山 茂 2 単位

【授業目的】 この時点までに、多くの基礎および専門科目で習得した、それぞれ独立の概念が、触媒を通じた場合、どのように体系的に利用できるかという点を理解することを目的とする。さらに、卒業間近な 4 年生を対象としているので、実社会での触媒の利用を学ぶことを目的とする。

【授業概要】 実際に触媒を合成し反応に供するための、触媒担体選定、合成法、物性評価、活性試験、最適装置の選定などについて講述する。さらに、実社会での触媒の利用についての現況を詳細に講述する。

【受講要件】 「化学工学 3」、「化学反応工学」を履修した上での受講が望ましい。

【到達目標】

1. 固体触媒を用いた反応方式と活性発現機構を理解する。
2. 触媒の先端分析技術によるキャラクタリゼーションを理解する。
3. 企業における触媒の位置付けを理解する。

【授業計画】 1. 触媒工学の歴史的概略 2. 反応方式 液相均一、液相懸濁、固定床触媒反応器、流動床触媒反応器 3. 触媒各論 (1) 酸・塩基に基づく触媒各論 4. 触媒各論 (2) 触媒の複合化: 複合酸化物 5. 触媒各論 (3) 分子次元触媒設計 6. 担体各論 担体の役割、担体 触媒の相互作用および担体各論 7. 触媒調製法 担持触媒、水熱合成法、気相合成法、固相合成法等 8. キャラクタリゼーション (1) 表面積、分散度、酸性度、塩基性度の測定法 9. キャラクタリゼーション (2) 電子顕微鏡、赤外吸収スペクトル、X 線回折法、ケイ光 X 線 10. キャラクタリゼーション (3) X 線光電子分光法、X 線吸収領域連続微細構造、固体 NMR 11. 最近のトピックス 12. 実用固体触媒 (1) 触媒の用途と出荷状況 13. 実用固体触媒 (2) 製造過程 14. 予備日 15. 予備日

【成績評価】 定期試験、再試験は行わない。平常点およびレポートによって評価する。出席および授業中の質問に対する回答を平常点とし、レポートと平常点を 1:1 の割合で評価する。

【教科書】 授業中に配布するプリントを用いて進める。

【参考書】 触媒学会編「触媒講座」(講談社)。

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 杉山(化309, 656-7432, sugiyama@chem.tokushima-u.ac.jp)

【備考】 触媒を通じて、無機化学、有機化学、分析化学、化学工学を融合させて利用することに重きを置いて講義を進める。

量子力学

Quantum Mechanics

講師・中村 浩一 2 単位

【授業目的】 原子分子のミクロな世界の基本法則である量子力学の基礎を修得させる。

【授業概要】 講義計画に示した項目に従い、まず電子や光の粒子性と波動性を述べ、前期量子論の起こりを説明する。ついで、シュレディンガーの波動方程式を導き、これがミクロの世界の基礎の方程式であることを説明する。簡単な例として箱の中の自由粒子、調和振動子を取り上げ、波動関数とエネルギー固有値の意味を解説する。

【到達目標】

1. 電子や光がもつ粒子性と波動性を理解する。
2. シュレディンガー方程式と波動関数の意味を理解する。
3. 簡単な系のシュレディンガー方程式を解き、波動関数とエネルギー固有値を求めることができる。

【授業計画】 1. 電子の電荷と質量 2. X 線の性質 3. プランクの量子説 4. 光電効果 5. コンプトン効果 6. 物質波 7. ボーアの量子論 8. 不確定性原理 9. シュレディンガー方程式 10. 定常状態の波動関数とエネルギー固有値 11. 物理量と演算子 12. 箱の中の自由粒子 13. 調和振動子 (1) 14. 調和振動子 (2) 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】 単位の取得: 試験 70%(期末試験)、平常点 30%(出席状況、レポートの提出状況・内容等)として評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【教科書】 小出昭一郎「量子論」(基礎物理学選書 2) 裳華房

【参考書】 中嶋貞雄「量子力学 I」(物理入門コース) 岩波書店、中嶋貞雄「量子力学 II」(物理入門コース) 岩波書店

【対象学生】 開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】 中村(A216, 656-7577, koichi@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】 微分および積分の基礎的知識を前提とする。

光応用工学科

光応用工学科における教育理念およびそれを実現するカリキュラム編成	333
光応用工学科履修登録，進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定	340
光応用工学科教育分野別カリキュラム編成	343
光応用工学科教育課程表	344
光応用工学科講義概要	346

光応用工学科における教育理念およびそれを実現するカリキュラム編成

徳島大学では、「科学技術とその進歩が人類と社会に及ぼす影響について強い責任を持てる自律的技術者を育成する」を目的として以下の教育目標をたてている。

1. 豊かな人格と教養および自発的意欲の育成
2. 工学の基礎知識による分析力と探究力の育成
3. 専門の基礎知識による問題解決能力と表現力の育成
4. 社会の変化に柔軟に対応できる自律的応用力と創造力の育成

以上を前提として、本学科では、下記のような教育目的・目標を掲げて教育プログラムを構成し、教職員はこれらの教育目的・目標達成のために各種の取組みを実施している。しかし、ここに掲げた教育目的・目標を実質的に達成するためには、学生諸君も本学科の教育目的・目標を十分に理解し、教職員・学生の双方が努力することが不可欠である。それゆえ学生諸君は、下記に記載された内容を十分理解するように努め、不明な点はクラス担任、教務委員、学科長をはじめとする教職員に尋ねてほしい。

教育目的と教育目標

< 光応用工学科の教育目的 >

人間・自然を愛し、国際的に通用する素養・視野を持ち、健康に生活でき、目的意識が高く、活力ある自律的光技術者を育成する。

< 光応用工学科の教育目標 >

- A. 光応用工学を学んでいく上で、その土台となる数学・物理・化学の知識を身につける。
- B. 系統的な専門教育課程のもとで光技術に関わる課題を創造的に見出し、与えられた制約の下で解決できる能力の育成。
- C. 工学を「人類及び地球上に生きるすべての動植物に技術面から貢献する使命を担として位置付け、広い視野と個々の使命感を持って生きる光技術者の育成。
- D. 心身共に健康で活力ある光技術者の育成。
- E. 技術者倫理を身につけ、さらに文学・芸術に対する感性や人の心に対する感性の豊かな光技術者の育成。
- F. 英語の読み書き能力、プレゼンテーション能力の育成と国際的文化への理解。

日本技術者教育認定機構（JABEE）認定教育プログラム対応について

本学科では、平成15年度に、教育プログラムが社会の要求水準を満たしているか、教育プログラムを継続的に改善する仕組みがあるか等について、日本技術者教育認定機構（JABEE、WEB サイトは <http://www.jabee.org/>）により本審査を受け、認定される方向で審議が進められている（平成16年3月現在）。JABEEとは、技術系学協会と密接に連携しながら、大学等の高等教育機関における技術者教育プログラムの審査・認定を行う非政府団体である。JABEEでは、認定を受けた教育プログラムを卒業した者が、国際的に通用する能力を持っていることを資格で示すことができるよう、諸外国と調整作業に入っている。

光応用工学科

< 学習・教育目標達成のために必要な授業科目の流れ >

光応用工学科の学習・教育目標 A ~ F を達成するために必要な授業科目の流れを下の表 1 で示す。学生諸君はこの表を参照しながら受講科目を選択し、授業科目が、学習・教育目標のどの部分に対応しているかを常に把握するよう努めてほしい。

表 1 . 学習・教育目標を達成するために必要な授業科目の流れ (* : 共通教育の授業科目)

学習・教育目標	分類	授業科目名							
		1年		2年		3年		4年	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
(A) 光応用工学を学んでいく上で、その土台となる数学・物理・化学の知識を身につける。(* は共通教育科目、それ以外は専門教育科目)	数学の基礎学力	* 基礎数学(線形代数学I) (◎)	* 基礎数学(線形代数学II) (◎)	微分方程式1 (◎)	微分方程式2 (◎)	微分方程式特論 (◎)			
		* 基礎数学(微積分学I) (◎)	* 基礎数学(微積分学II) (◎)	ベクトル解析 (◎)	複素関数論 (◎)	確率統計学 (◎)			
						数値解析 (◎)			
	物理の基礎学力	* 基礎物理学(F力学概論) (◎)	工業物理学実験 (◎)	量子力学 (◎)	熱・統計物理学 (◎)				
		基礎波動学 (○)							
	化学の基礎学力	電気磁気学1 (◎)	電気磁気学2 (◎)						
	情報技術の基礎学力	* 基礎化学(i・化学結合論) (◎)							
			* 情報科学 ¹⁾ (◎)						
(B) 系統的な専門教育課程のもとで光技術に関わる課題を創造的に見出し、与えられた制約のもとで解決できる能力の育成。	光・デバイス関連の知識と応用力	* 光の基礎 (◎)		光・電子物性工学1 (◎)	光・電子物性工学2 (◎)	レーザー工学基礎論 (◎)			光機能材料・光デバイス特別講義1
				電子回路 (◎)		光デバイス 1 (◎)	光デバイス 2 (◎)		
				幾何光学 (◎)		光デバイスプロセス工学 (◎)			
				波動光学 (◎)					
	光材料関連の知識と応用力		分子工学 (○)	材料統計熱力学1 (◎)	材料統計熱力学2 (◎)	結晶成長学1 (◎)	結晶成長学2 (◎)	光機能材料・光デバイス特別講義2	フォトニクス材料 (◎)
				化学反応論1 (◎)	化学反応論2 (◎)		高分子化学 (◎)	光機能材料・光デバイス特別講義3	
				光化学 (◎)	結晶工学 (◎)		分光分析学 (◎)		
	光システム関連の知識と応用力	電気回路 (◎)			システム解析 (◎)		光通信方式 (○)	光情報システム特別講義2 (◎)	
		電気回路演習 (◎)			通信基礎論 (◎)				
	計算機・画像情報関連の知識と応用力		計算機システム (◎)	光情報機器 (○)		信号処理 (◎)	光導波工学 (○)	パターン認識 (◎)	光画像計測 (◎)
基礎的実験技術の習熟と創造性			プログラミング言語及び演習 (◎)			光演算処理 (○)	画像処理 (◎)		
					光応用工学実験1 (◎)	光応用工学実験2 (◎)	光電機器設計及び演習 (◎)	光応用工学計算機実習 (◎)	
							設計製図製作実習 (◎)		
創造性・問題解決能力	光応用工学セミナー1 (◎)	光応用工学セミナー2 (◎)						卒業研究 (◎)	卒業研究 (◎)
(C) 工学を「人類及び地球上に生きる全ての動植物に技術面から貢献する使命を担うもの」として位置付け、広い視野と個々の使命感を持って生きる光技術者の育成	視野・使命感	* 人文科学 (◎)	* 人文科学 (◎)	* 人文科学 (◎)	* 人文科学 (◎)			エコシステム工学 (◎)	
		* 社会科学 (◎)	* 社会科学 (◎)	* 社会科学 (◎)	* 社会科学 (◎)			卒業研究 (◎)	卒業研究 (◎)
				福祉工学概論 (◎)					
	工業技術者の経済感覚					学外実習 (◎)		職業指導 (◎)	労務管理 (◎)
					企業経営システム特別講義 (◎)		知的所有権概論 (◎)	生産管理 (◎)	
							ニュービジネス概論 (◎)		
(D) 心身共に健康で活力ある光技術者の育成	健康・活力	* 健康スポーツ (◎)	* 健康スポーツ (◎)	* 健康スポーツ (◎)	* 健康スポーツ (◎)				
			健康教育特別講義 (◎)			学外実習 (○)			
(E) 工学倫理に鋭敏で、文学・芸術に対する感性や人の心に対する感性豊かな光技術者の育成	感性	* 人文科学 (◎)	* 人文科学 (◎)	* 人文科学 (◎)	* 人文科学 (◎)		感性教育特別講義 (◎)	創造教育特別講義 (◎)	
		* 社会科学 (◎)	* 社会科学 (◎)	* 社会科学 (◎)	* 社会科学 (◎)				
	工学倫理					工学倫理 (◎)		エコシステム工学 (○)	
					学外実習 (○)				
(F) 英語の読み書き能力、プレゼンテーション能力の育成と国際的文化への深い造詣	発表能力	光応用工学セミナー1 (○)	光応用工学セミナー2 (○)			光応用工学実験1 (○)	光応用工学実験2 (○)	卒業研究 (○)	卒業研究 (○)
		電気回路演習 (○)							
英語力	* 英語 (◎)	* 英語 (◎)	* 英語 (◎)	* 英語 (◎)					
		専門外国語1 (◎)				専門外国語2 (◎)	専門外国語3 (◎)		

注) 1) 「情報科学」は専門教育の「計算機システム」と「プログラム言語及び演習」をとることでこれに換えることができる。

<具体的な教育プログラム>

専門教育

光応用工学科における専門教育の特徴は、以下の4点に集約される。1) 光応用工学における個々の授業科目の位置付けと授業科目間の関連を明確化することにより、学習の意義付けをする。2) 実験・実習を重視した教育から「光応用工学」を感じる。3) 講義方法・講義内容の工夫により、物質の創製、製品の設計、システムの構築に取り組みたいという意欲を引き出す。4) 成績評価方法の検討・工夫により学習への意欲を引き出す。

以下に、専門教育の内容を具体的に説明する。

A. 光機能材料講座担当授業科目

表2は、光機能材料講座が担当する主な授業科目である。ここでは、高分子や結晶を中心とした光機能性材料を創製する能力、およびそれらの材料をデバイスに組み上げ、その特性を評価する能力を身につけることを目的としている。このために、まず材料を原子・分子の視点から見ることを学び、高分子に代表されるさまざまな光機能性材料を原子・分子のオーダーで設計・創製するために必要な化学反応の知識を身に付ける。さらに種々の分光学的手法を駆使して分子構造を決定する手法を学ぶ。

光機能性材料のもう一つの柱である結晶については、その構造や光学的性質について学び、さらに高品質の結晶を育成するために不可欠な結晶の成長機構や育成技術を身につける。これと平行して、材料の生成を支配する統計熱力学や速度論をマスターする。

これらの材料を用いたデバイスの構築や特性評価については、まず固体中の電子や原子の集団運動を理解し、電子と格子振動の関与する諸現象や光と電子の相互作用について学習する。さらに、現在使われている光・電子デバイスの特性や動作原理、将来の光デバイスとして注目されている非線型光学現象に基づくデバイスについて系統的に学習する。

表2. 光機能材料講座担当授業科目

授業科目	講義内容
電気回路/ 電気回路演習	1. 直流回路 2. 交流回路 3. スイッチを含む回路・過渡現象・ラプラス変換 4. 2端子対回路 5. 高周波の取り扱い・分布定数回路
光・電子 物性工学 1	1. 電子の運動と量子力学 2. 結晶中の電子のエネルギー状態 3. 格子振動 4. 結晶中の電子の運動方程式 5. 電子集団を扱う統計力学
光・電子 物性工学 2	1. 超伝導現象 2. 半導体の諸性質 3. 電子デバイスの特性 4. 光と電子、格子振動との関わり 5. 非線型光学現象
光デバイス 1	1. 光と半導体の関わりあい 2. 発光ダイオードの構造と動作原理 3. レーザダイオードの構造・機能・動作原理
光デバイス 2	1. 光検出デバイス 2. 撮像・表示デバイス 3. 各種光デバイスの特性 4. 非線型光学現象の応用 5. 光ディスク 6. 光デバイスの応用
レーザ工学 基礎論	1. レーザの歴史と応用例 2. レーザの基本構造と各構成要素 3. レーザの動作原理と動作条件 4. 非線型光学
波動光学	1. 反射・屈折 2. 干渉・回折 3. 偏光 4. マクスウェルの電磁場の方程式と電磁波
材料統計 熱力学 1	1. 熱力学の基礎 2. エンタルピーとエントロピー 3. 自由エネルギー 4. 溶液と相平衡
材料統計 熱力学 2	1. 統計力学の基礎 2. 格子欠陥の統計熱力学 3. 溶液・固溶体の統計熱力学 4. 確率過程
結晶工学	1. 結晶形態(結晶の対称性) 2. 結晶構造(構造の分類) 3. X線結晶学 4. 結晶の光学的性質 5. 格子欠陥
結晶成長学 1	1. 結晶成長の駆動力 2. 核生成 3. 成長機構 4. 平衡形・成長形 5. エピタキシャル成長
結晶成長学 2	1. 状態図 2. 物質や熱の輸送 3. 結晶成長技術 4. 結晶の評価
光化学	1. 光化学過程 2. 分子のエネルギー状態 3. 有機光化学反応 4. 無機光化学反応 5. 生物光化学反応 6. 実験的手法 7. 工業的応用
分子工学	1. 原子の電子配置 2. 分子の構造と化学結合 3. 分子の極性と分極 4. 化学反応 5. 無機化合物 6. 有機化合物 7. 有機金属化合物
化学反応論 1	1. 物質の挙動の分子論的解釈 2. 化学反応の方法 3. 反応中間体の構造 4. 生成物の同定 5. 分子軌道法 6. 脂肪族化合物の反応
化学反応論 2	1. ベンゼンの構造と芳香族性 2. 芳香族化合物の反応(求電子置換反応, 求核置換反応) 3. 遊離基の本質 4. 遊離基の反応
高分子化学	1. 高分子の特性 2. ラジカル重合 3. イオン重合 4. 逐次重合 5. 重合反応の規制と高分子の設計 6. 高分子反応 7. 高分子材料
分光分析学	1. 分光学の基礎 2. 紫外可視吸収スペクトル 3. IR 4. NMR 5. ESR 6. 蛍光・燐光スペクトル 7. X線分光法 8. 時間分解分光

B. 光情報システム講座担当授業科目

表3は、光情報システム講座担当の授業科目である。ここでは、光コンピューティング、光通信、画像処理といったシステム分野において、それぞれの用途に適合した光システムが構築できる能力を養成することを目的としている。

このため、プリズム、レンズなどの基本的な光学素子の性能から、これらの光学素子で構成されているカメラや顕微鏡などの光学機器、また光情報機器のキーエレメントである光機能素子および各種の光情報機器について系統的に学習する。さらに光コンピューターや光導波路など現在の光通信技術や将来の光計算技術に必要な基礎的知識や数学的技術をマスターする。

また、情報化の発展に伴ってますます重要になっている音声信号や画像信号などを高精度に処理するための信号処理システムの実現法について学び、さらに21世紀のマルチメディア時代に必須の技術である画像処理技術について、画像認識や計測画像の実用的なデータ処理法を含めて総合的に学習する。

表3. 光情報システム講座担当授業科目

授業科目	講義内容
幾何光学	1. 平面とプリズム 2. 球面 3. 薄肉レンズ 4. 厚肉レンズ 5. 球面鏡 6. 光学系の設計 7. レンズの収差
電子回路	1. 基本的な半導体素子 2. 基本回路（小信号基本増幅回路、高周波回路など） 3. 応用回路（負帰還増幅回路、発振回路など）
光導波工学	1. 光の基礎 2. 光導波の基礎（波動方程式、波面係数） 3. 光導波路（平面導波路、多相構造平板導波路、分布屈折率導波路、光ファイバ）
光演算処理	1. 光計算機に使われる基本的な光学知識 2. 光演算素子（光論理素子、光安定素子、光記憶素子など） 3. アナログ光計算技術
光情報機器	1. 光学機器（カメラ、顕微鏡等） 2. 光機能素子（ホログラフィ、光変調素子等） 3. 光情報機器（レーザプリンタ、バーコードリーダ等）
システム解析	1. 入力と応答 2. 伝達関数 3. 状態変数の変換 4. 安定性 5. 可制御性と可観測性
計算機システム	1. コンピュータ入門 2. 数の表現 3. コンピュータの原理 4. 論理代数 5. 論理回路 6. VLSI 技術
プログラミング言語および演習	1. UNIX 操作法 2. インターネット操作法（ファイル転送、電子メール） 3. C プログラミング（制御構造と演算子、ポインタ等）
信号処理	1. 線形時不変システム 2. z変換とその応用 3. 離散フーリエ変換 4. デジタルフィルタ 5. IIR フィルタ 6. FIR フィルタ
画像処理	1. 画像の表示 2. 画像の変換 3. 画像の伝送 4. 画像の解析 5. 画像の認識 6. 画像情報機器
パターン認識	1. ベイズの識別規則 2. パーセプトロンの学習 3. KL 展開 4. DP マッチング 5. ヒドンマルコフモデル 6. ニューラルネット
通信基礎論	1. 通信とそのシステム 2. 情報信号の変換 3. 伝送 4. 交換 5. 通信の擾乱要因 6. 新しい通信システム
光通信方式	1. 光通信の概要 2. 光通信用光源 3. 光変調・復調 4. 光回路・部品 5. 光通信システム
光画像計測	1. 光画像計測の光学システム 2. 画像センシング 3. 計測画像のフィルタリング 4. 信号回復論と逆問題 5. カラー画像と分光データ処理

C. 実験・実習科目関連授業科目

表4は、実験・実習関連の授業科目である。1年次に行われる「光応用工学セミナー」では、簡単な光の実験や電子回路、結晶、光学材料、光デバイスに関する実験を行う。大学入学直後から実験を通じた「ものづくり」の感覚を身につけることによって、技術者・研究者として不可欠な創造力を養うことを目的としている。3年次に行われる「光応用工学実験」では、1年次から3年次までの講義の内容に関連した実験を行う。これにより、講義内容をより深く理解し、また、実験データの取り扱いや実験マナーなど、技術者・研究者として最も大切な実験に対する基本的な姿勢を身につける。光技術にはいわゆる職人芸的な要素も多く、その修得には小人数教育が絶対的な条件である。本学科では、学生は10名ずつのグループに別れて実験を行い、それぞれを2人または3人の教官およびTA（Teaching Assistant）が指導するマンツーマンに近い実験教育が行われている。

また本学科では計算機教育を専門教育の一つの柱と位置づけ、ワークステーションを使いこなせることを目標に、オペレーティングシステム、C言語プログラミングの実習を行っている。「光応用工学計算機実習」においては、光応用工学に関連した種々の課題に計算機を用いて取り組む。これにより、将来の研究開発においても計算機を有効に活用できる能力を高める。本学科では光応用工学棟内の教育用計算機室に22台のワークステーション（端末は30台）を設置しており、学生は長時間、一人一台のワークステーションを占有して各自の課題に取り組むことができる。

光応用工学科

表4. 実験・実習科目関連授業科目

授業科目	講義内容
光応用工学 セミナー1	1) ピンホールカメラの作製 2) 偏光を用いたステンドグラスの作製 3) プレパラートを用いた偏光子の作製 4) 回折格子を用いた分光器の作製 5) プリズムの製作 6) プレパラートを用いた偏光子の製作 7) レンズの焦点距離測定測地の作製 8) 多数のレンズを用いた結像 実験 8) グループ製作と発表会
光応用工学 セミナー2	1) 発光ダイオードを光らせる回路 2) 光と電子デバイスの組合せ 3) 簡単な化学実験 4) 構造模型の作成
光応用工学 実験1	1) 反射, 屈折, 偏光 2) 回折, 干渉 3) 半導体デバイスの特性 4) 有機光学物質の生成と評価 5) 光学材料の合成と性質
光応用工学 実験2	1) アナログ回路実験 2) デジタル回路実験 3) マイクロプロセッサ実験 4) 光通信実験 5) ホログラフィ実験
光応用工学 計算機実習	1) 半導体レーザの基礎特性と設計 2) 光導波素子と薄膜光学素子の設計 3) モンテカルロ法と分子動力学法 4) コンピュータによる化学計算 5) 光学素子設計 6) 光アナログ演算 7) コンピュータグラフィックス 8) ニューラルネットワーク 9) CT 画像再構成

D. 卒業研究

本学科では、4年生全員が研究室に配属され、一年間の卒業研究を行なう。研究室の配属は、光機能材料講座3グループ、光情報システム講座2グループの合計5つの研究グループである。

E. 専門共通科目

光応用工学を学んで行く上で、その土台となる数学及び物理の知識を身に付ける。工学全般に渡り通用する知識であるので、軽視しないこと。

最後に、光応用工学科の主要授業科目の関連・配置を図2に示す。各授業科目の関係をよく認識して、履修計画の参考にしてほしい。

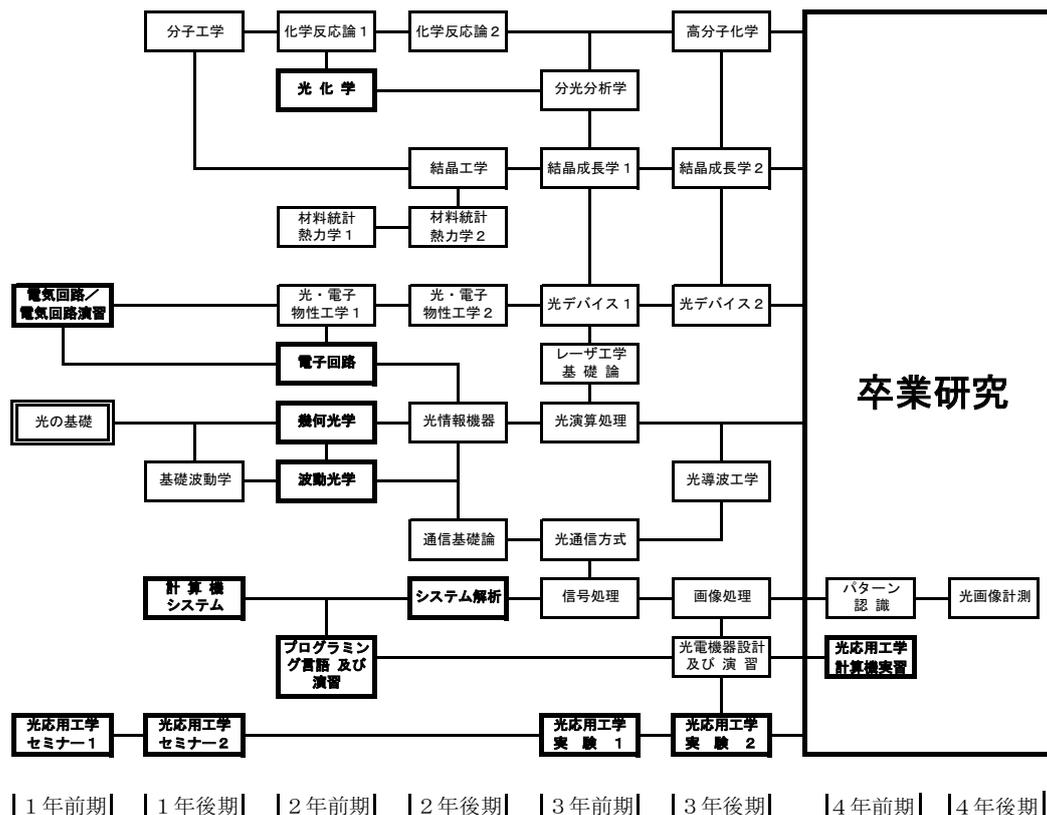


図1. 光応用工学科主要授業科目の関連・配置 (太枠は必修科目、二重枠は選択指定科目)

パッケージ教育

光応用工学科の教育目的・目標を達成し、目指す専門教育をさらに充実したものとするため、以下の11のパッケージ教育を行なう。各パッケージ教育もまた相互に深く関連し合っており、同一の授業科目が複数のパッケージ教育の役割を兼ねる場合もある。

①導入教育

光の面白さを実感させ、光応用工学を学ぶ意欲を喚起するための教育

- ・光応用工学セミナー1（1年）
- ・光応用工学セミナー2（1年）
- ・光の基礎（1年）

②活力教育

技術者として人類社会に寄与するという前向きな使命感を育て、勉学への意欲を喚起するための教育

- ・教職員との合宿研修（1年）
- ・少人数グループ科目（1～3年）
- ・工場見学（3年）
- ・オフィスアワー（1～4年）
- ・卒業研究（4年）

③感性教育

技術者として人類社会に技術面から寄与するという広い視野と使命感の育成、工学と人間の関わり、国際的視野、技術と地球環境に関する教育、および文学・芸術への感性を磨く教育

- ・全学共通教育科目（1・2年）
- ・感性教育特別講義（3年）
- ・福祉工学概論（2年）
- ・エコシステム工学（4年）
- ・工学倫理（3年）

④健康教育

生涯を通じて健康保持の指針となる医学・歯学・薬学・栄養学・運動生理学の基礎知識を身に付けるための教育

- ・健康教育特別講義（1年）
- ・健康スポーツ（1・2年）

⑤英語教育

英語の読み書き能力の向上、技術的な内容を英語で伝達・コミュニケーションするための能力養成、国際的な文化への感性を磨く教育

- ・全学共通教育科目の英語（1・2年）
- ・専門外国語1（1年）
- ・専門外国語2（3年）
- ・専門外国語3（3年）
- ・卒業研究（4年）

⑥創造力教育

創造力を高め、自律的光技術者として成長することの喜びと意識を高めるための教育

- ・光応用工学セミナー1・2（1年）
- ・感性教育特別講義（3年）
- ・創造教育特別講義（4年）
- ・光機能材料・光デバイス特別講義（4年）
- ・光情報システム特別講義（4年）
- ・卒業研究（4年）

⑦表現力教育

自分の考え・意見を明確に述べ、かつ質問に的確に応ずることのできる能力を修得し、自律的
光技術者として成長するための教育

- ・セミナー予稿作成・発表（４年）
- ・卒業論文作成・卒業研究発表（４年）
- ・講義中の討論・発表（１～４年）
- ・講義・実験・演習のレポート作成（１～４年）

⑧計算機教育

ワークステーションを使いこなすことを目標
に、光技術に関連した計算機の使用・応用が円
滑に行なえる能力を修得するための教育

- ・計算機システム（１年）
- ・プログラミング言語及び演習（２年）
- ・光応用工学計算機実習（４年）
- ・卒業研究における計算機の利用（４年）

⑨ものづくり教育

光技術に慣れ親しみ、光技術の面白さを感覚的
に認識し、創意工夫や自律的な思考の大切さを
学ぶ教育

- ・光応用工学セミナー１・２（１年）
- ・設計製図製作実習（３年）

⑩企業経済教育

経済感覚を養い、活力ある光技術者として活躍
する意識を高め、工学倫理の重要性を学ぶ教育

- ・企業経営システム特別講義（３年）
- ・労務管理・生産管理（４年）
- ・知的所有権概論（４年）
- ・ニュービジネス概論（４年）

⑪教養的教育・工学倫理教育

専門教育の充実・強化の側面も持ち、環境の重
要性、技術者の社会的責任、工学倫理の重要性、
光技術者にとっての人文・社会科学の重要性を
認識し、国際的素養・視野を養うための教育

- ・全学共通教育科目（１・２年）
- ・感性教育特別講義（３年）
- ・企業経営システム特別講義（３年）
- ・福祉工学概論（２年）
- ・エコシステム工学（４年）
- ・創造教育特別講義（４年）
- ・卒業研究（４年）
- ・工学倫理（３年）

光応用工学科履修登録，進級要件及び卒業研究着手要件に関する規定

光応用工学科卒業に必要な単位数

授業科目は全学共通教育科目と専門教育科目に大別され，合計 130 単位以上の修得が必要である。

1. 全学共通教育科目は，合計 42 単位以上の修得が必要である（全学共通教育科目は 1・2 年次の早い段階で修得を完了することが望ましい）

- 1) 教養科目は，人文科学，社会科学，自然科学の各分野からそれぞれ 4 単位を修得する。
- 2) 外国語科目は，英語 6 単位を修得する。
- 3) 上記 1) 2) 以外に，教養科目全分野および外国語科目の中から合計 8 単位以上を修得する。
（このうち，学部開放分野の授業題目「光の基礎」の選択を指定する）
- 4) 健康スポーツ科目は，2 年次までに 4 単位を修得する。
- 5) 基礎教育科目は，下の表に示す 6 科目 12 単位を修得する。

2. 専門教育科目は，合計 88 単位以上の修得が必要である。

- 1) 必修科目は，全 51 単位を修得する。
- 2) 選択科目は，合計 37 単位以上を修得する。ただし，選択科目 A を 32 単位以上含まなければならない。
 - 工学部規則第 3 条 4 第 3 項の規定に基づき修得した他学科・他学部の授業科目は，すべて選択科目 B の単位として数えることができる。
 - 教員免許取得に必要な「職業指導」4 単位および「工業基礎英語 I」「工業基礎数学 I」「工業基礎物理 I」は，卒業に必要な単位数の算定には含まない。

卒業に必要な単位数

区分	科目区分	分野・授業科目・授業題目	単位数		
全学共通教育科目	教養科目	人文科学分野	4	8	
		社会科学分野	4		
		自然科学分野	4		
		総合分野	—		
		学部開放分野 ¹⁾	—		
	外国語科目	英語	6		
		ドイツ語・フランス語・中国語	—		
	健康スポーツ科目	健康スポーツ	4		
	基礎教育科目	基礎数学	線形代数学 I	2	
			線形代数学 II	2	
			微分積分学 I	2	
微分積分学 II			2		
基礎物理学		f・力学概論	2		
基礎化学	i・化学結合論	2			
全学共通教育科目単位合計			42		
専門教育科目	必修科目		51		
	選択科目	選択科目 A	32	5	
		選択科目 B ^{2,3,4,5)}	—		
専門教育科目単位合計			88		
修得単位合計			130		

- 1) 「光の基礎」の選択を指定する。
- 2) 「企業経営システム特別講義」「生産管理」「ニュービジネス概論」「労務管理」の中から 1 科目以上の履修を指定する。
- 3) 「学外実習」の履修を指定する。
- 4) 工学部規則第 3 条 4 第 3 項の規定に基づき修得した他学科・他学部の授業科目はすべて選択科目 B の単位として数えることができる。
- 5) 「職業指導」4 単位および「工業基礎英語 I」「工業基礎数学 I」「工業基礎物理 I」は，卒業に必要な単位数の算定には含まない。

光応用工学科卒業研究着手規定

卒業研究に着手するためには、4年次の年度初めまでに、以下に指定する単位をすべて修得していなければならない。

1. 全学共通教育科目は、合計 42 単位以上

1) 教養科目：人文科学分野 4 単位

社会科学分野 4 単位

自然科学分野 4 単位

2) 外国語科目：英語 6 単位

3) 上記 1), 2) 以外に、教養科目全分野および外国語科目の中から合計 8 単位以上

(このうち、学部開放分野の授業題目「光の基礎」の選択を指定する)

4) 健康スポーツ科目：4 単位

5) 基礎教育科目：下の表に示す 6 科目 12 単位

2. 専門教育科目は、合計 73 単位以上

1) 必修科目：34 単位(ただし、必修の実験・実習・演習科目 8 単位を含むこと)

2) 選択科目：選択科目 A を 32 単位以上

- 工学部規則第 3 条 4 第 3 項の規定に基づき修得した他学科・他学部の授業科目は、すべて選択科目 B の単位として数えることができる。
- 「職業指導」4 単位および「工業基礎英語 I」「工業基礎数学 I」「工業基礎物理 I」は、卒業研究に着手するために必要な単位数の算定には含まない。

<付則>

1. 単位数の算定は、3 月 31 日現在における修得単位を基準とする。
2. 卒業研究着手資格の認定は学科会議において行う。

卒業研究に着手するために必要な単位数

区分	科目区分	分野・授業科目・授業題目	単位数	
全学共通教育科目	教養科目	人文科学分野	4	
		社会科学分野	4	
		自然科学分野	4	
		総合分野	—	
		学部開放分野 ¹⁾	—	
	外国語科目	英語	6	
		ドイツ語・フランス語・中国語	—	
	健康スポーツ科目	健康スポーツ	4	
	基礎教育科目	基礎数学	線形代数学 I	2
			線形代数学 II	2
			微分積分学 I	2
微分積分学 II			2	
基礎物理学		f・力学概論	2	
基礎化学	i・化学結合論	2		
全学共通教育科目単位合計			42	
専門教育科目	必修科目		34 ²⁾	
	選択科目	選択科目 A	32	
		選択科目 B ^{3,4,5)}	—	
専門教育科目単位合計			73	
修得単位合計			115	

- 1) 「光の基礎」の選択を指定する。
- 2) 必修の実験・実習・演習科目 8 単位を含むこと。
- 3) 「学外実習」の履修を指定する。
- 4) 工学部規則第 3 条 4 第 3 項の規定に基づき修得した他学科・他学部の授業科目はすべて選択科目 B の単位として数えることができる。
- 5) 「職業指導」4 単位および「工業基礎英語 I」「工業基礎数学 I」「工業基礎物理 I」は、卒業研究に着手するために必要な単位数の算定には含まない。

光応用工学科履修登録及び進級要件に関する規定

1. 履修登録に関する事項

各学年において一年間に履修登録することができる単位数の上限を以下の通り定める。

履修登録することができる単位数の上限

学年	単位数の上限	備考
1年	60	1)
2年	45	1), 2)
3年	45	1)
4年	45	

- 1) 上級学年の授業科目を履修する場合は、学科長及び教務委員の承認を得なければならない。
 2) 全学共通教育科目の単位数は含まない。

(放送大学の授業科目の履修について)

放送大学の授業科目を光応用工学科会議の承認を得て履修することができる。修得した単位は、下記4項目でそれぞれ2単位ずつ、合計8単位を限度として、卒業および卒業研究着手に必要な全学共通教育科目の単位に含めることができる。

1. 全学共通教育科目の教養科目(人文科学分野)に放送大学共通科目の一般科目(人文系)
2. 全学共通教育科目の教養科目(社会科学分野)に放送大学共通科目の一般科目(社会系)
3. 全学共通教育科目の教養科目(自然科学分野)に放送大学共通科目の一般科目(自然系)
4. 全学共通教育科目の外国語科目に放送大学共通科目の外国語科目専門教育科目については、放送大学との単位互換は行なわない。

2. 進級要件に関する事項

次学年に進級するためには、当該学年終了時に、以下に示された単位数以上の単位を修得していなければならない。

次学年への進級に必要な単位数

学年	進級に必要な単位数	備考
1年	30	1)
2年	60	
3年	105	

- 1) 1年原級生(前年度単位数不足のため2年次に進級できなかったもの)に対しては、学年終了時に60単位以上修得した場合には、3年次への進級を認めることがある。

(早期卒業の要件)

3学年前期終了時におけるGPAが4.0以上で、本人が3学年後期終了時または4学年前期終了時での卒業を希望した場合には、3学年後期からの「卒業研究」の着手を認める。当該学生が卒業に必要な単位をすべて修得し、かつGPAが4.0以上である場合には、3学年後期終了時または4学年前期終了時での卒業を認める。

光応用工学科教育分野別カリキュラム編成

		学年 →							
		1年		2年		3年		4年	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
科目	教養科目 (人文科学分野)	福祉工学概論		工学倫理		エコシステム工学		労務管理	
	教養科目 (社会科学分野)			企業経営システム特別講義		知的所有権概論		生産管理	
	教養科目 (自然科学分野)					G2		ニュービジネス概論	
	教養科目 (総合分野)	G1				学外実習			
	教養科目 (学部開放分野)					確率統計学		マルチメディア工学	
	外国語科目					数値解析		フォトニクス材料パターン認識	
	健康スポーツ科目					微分方程式特論		光画像計測	
	基礎数学			量子力学		熱・統計物理学		光機能材料・光デバイス特別講義1	
	基礎物理学	R1		ベクトル解析		複素関数論		光機能材料・光デバイス特別講義2	
	基礎化学			微分方程式1		微分方程式2		光機能材料・光デバイス特別講義3	
	健康教育特別講義 (G2)	専門外国語1		プログラミング言語及び演習		幾何光学		光情報システム特別講義1	
		基礎波動学		波動光学		通信基礎論		光情報システム特別講義2	
	電気磁気学1	電気磁気学2		光・電子物性工学1		光・電子物性工学2		光応用工学特別講義2	
				電子回路		光情報機器		光応用工学特別講義1	
		計算機システム		材料統計熱力学1		材料統計熱力学2		卒業研究	
	電気回路	分子工学		光化学		結晶工学		結晶成長学1	
	電気回路演習			化学反応論1		化学反応論2		結晶成長学2	
	光の基礎	工業物理学実験		B1		光応用工学実験1		光応用工学実験2	
		光応用工学セミナー1		光応用工学セミナー2		B2		感性教育特別講義	
							設計製図製作実習		
							創造教育特別講義		
							B3		

科目数	1年		2年		3年		4年	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
G1	10	8	7	6	0	0	0	0
G2	1	0	1	0	3	0	3	2
R1	1	3	3	3	3	0	0	0
R2	3	2	8	7	9	8	2	1
R3	0	0	0	0	0	0	6	1
B1	0	1	0	0	1	1	1	0
B2	1	1	0	0	0	2	1	0
B3	0	0	0	0	0	0	1	1

G (教養教育) G1: 全学共通 G2: 工学教養・専門教養
 R (専門教育) R1: 工学基礎 R2: 専門基礎 R3: 専門応用
 B (創造性の育成教育) B1: 工学実験 B2: 創成型科目 B3: 卒業研究

光応用工学科

光応用工学科教育課程表

専門教育科目

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数(1週当たり)								担当者	備考	頁		
	必修	選択A	選択B	1年		2年		3年		4年					計	
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期					
エコシステム工学			2								2	2	三輪・近藤・村上・末田 松尾・上月・藤澤・廣瀬 魚崎・田村・村田 木戸口		346	
化学反応論 1		2				2						2	田中		346	
化学反応論 2		2					2					2	田中		347	
学外実習			(1)					(2)				(2)			347	
確率統計学		2						2				2	長町		347	
画像処理		2							2			2	仁木		347	
感性教育特別講義			1						1			1	非常勤講師		348	
幾何光学	2					2						2	西田		348	
企業経営システム特別講義			2					2				2	非常勤講師		348	
基礎波動学		2			2							2	浦西		348	
計算機システム	2				2							2	仁木		349	
結晶工学		2					2					2	井上		349	
結晶成長学 1		2						2				2	井上		349	
結晶成長学 2		2							2			2	井上		349	
健康教育特別講義	2			2								2	森口・的場・荒木 小原		350	
工学倫理	2							2				2	岡村・伊藤		350	
工業物理学実験	(1)				(3)							(3)	中村・川崎		351	
光電機器設計及び演習		1(1)							1(2)			1(2)	仁木・久保		351	
高分子化学		2							2			2	田中		351	
材料統計熱力学 1		2				2						2	森		352	
材料統計熱力学 2		2					2					2	森		352	
システム解析	2					2						2	仁木		352	
職業指導			4								4	4	坂野		353	
信号処理		2							2			2	仁木		353	
数値解析		2							2			2	山本		353	
生産管理			1								1	1	井原		353	
設計製図製作実習		(1)							(3)			(3)	西田		353	
専門外国語 1	(1)				(2)							(2)	原口・岡本		354	
専門外国語 2			(1)						(2)			(2)	非常勤講師		354	
専門外国語 3			(1)						(2)			(2)	非常勤講師		354	
創造教育特別講義			1							1		1	非常勤講師		354	
卒業研究	(10)										(12)	(18)	(30)	光応用工学科教官		355
知的所有権概論			1							1		1	酒井		355	
通信基礎論		2					2					2	非常勤講師		355	
電気回路	3			3								3	福井		355	
電気回路演習	(1)			(2)								(2)	原口・岡本		356	
電気磁気学 1	2			2								2	大野		356	
電気磁気学 2	2				2							2	大野		356	
電子回路	2					2						2	早崎		356	
ニュービジネス概論			2							2		2	出口		357	
熱・統計物理学		2					2					2	道廣・川崎		357	
パターン認識		2								2		2	仁木		357	
波動光学	2					2						2	森		358	
光・電子物性工学 1		2				2						2	福井		358	
光・電子物性工学 2		2					2					2	福井		358	
光演算処理		2						2				2	西田		358	

光応用工学科

授業科目	単位数			開講時期及び授業時間数(1週当たり)								担当者	備考	頁	
	必修	選択 A	選択 B	1年		2年		3年		4年					計
				前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期				
光応用工学計算機実習	(1)									(3)		(3)	原口・森・手塚・早崎 河田・岡本・柳谷・岡 山本・久保		359
光応用工学実験 1	(1)							(3)				(3)	原口・森・手塚・岡本 柳谷・岡		360
光応用工学実験 2	(1)								(3)			(3)	早崎・河田・山本・久保		360
光応用工学セミナー 1	(1)			(2)								(2)	西田・岡本・柳谷・山本		361
光応用工学セミナー 2	(1)				(2)							(2)	井上・原口・岡		361
光応用工学特別講義 1			1								1	1	非常勤講師		361
光応用工学特別講義 2			1								1	1	非常勤講師		361
光化学	2					2						2	田中		361
光画像計測		2									2	2	河田		362
光機能材料・光デバイス特別講義 1			1								1	1	非常勤講師		362
光機能材料・光デバイス特別講義 2			1								1	1	非常勤講師		362
光機能材料・光デバイス特別講義 3			1								1	1	非常勤講師		362
光情報機器		2				2						2	西田		363
光情報システム特別講義 1			1								1	1	非常勤講師		363
光情報システム特別講義 2			1								1	1	非常勤講師		363
光通信方式		2						2				2	非常勤講師		363
光デバイス 1		2						2				2	原口		363
光デバイス 2		2							2			2	福井		364
光デバイスプロセス工学		1						1				1	非常勤講師		364
光導波工学		2							2			2	早崎		364
微分方程式 1	2					2						2	岡本		364
微分方程式 2	2						2					2	岡本		364
微分方程式特論		2						2				2	香田		365
フォトンクス材料		1								1		1	非常勤講師		365
福祉工学概論			2			2						2	末田・藤澤		365
複素関数論	2						2					2	岡本		365
プログラミング言語及び演習	1(1)					1(2)						1(2)	河田		366
分光分析学		2						2				2	手塚		366
分子工学		2			2							2	手塚		366
ベクトル解析	2					2						2	今井		366
マルチメディア工学		2							2			2	非常勤講師		367
量子力学		2				2						2	道廣		367
レーザ工学基礎論		2						2				2	原口		367
労務管理			1								1	1	井原		367
工業基礎英語 I			1	1								1	広田		350
工業基礎数学 I			1	1								1	吉川		350
工業基礎物理 I			1	1								1	佐近		351
専門教育科目小計	32 (19) 51	65 (2) 67	27 (3) 30	10 (4) 14	8 (7) 15	23 (2) 25	20 (2) 20	25 (7) 32	14 (10) 24	19 (15) 34	5 (18) 23	124 (63) 187	講義 演習・実習 計		

備考

印の科目は卒業資格の単位数には含まない。

光応用工学科講義概要

目次

エコシステム工学	346
化学反応論 1	346
化学反応論 2	347
学外実習	347
確率統計学	347
画像処理	347
感性教育特別講義	348
幾何光学	348
企業経営システム特別講義	348
基礎波動学	348
計算機システム	349
結晶工学	349
結晶成長学 1	349
結晶成長学 2	349
健康教育特別講義	350
工学倫理	350
工業基礎英語 I	350
工業基礎数学 I	350
工業基礎物理 I	351
工業物理学実験	351
光電機器設計及び演習	351
高分子化学	351
材料統計熱力学 1	352
材料統計熱力学 2	352
システム解析	352
職業指導	353
信号処理	353
数値解析	353
生産管理	353
設計製図製作実習	353
専門外国語 1	354
専門外国語 2	354
専門外国語 3	354
創造教育特別講義	354
卒業研究	355
知的所有権概論	355
通信基礎論	355
電気回路	355
電気回路演習	356
電気磁気学 1	356
電気磁気学 2	356
電子回路	356
ニュービジネス概論	357
熱・統計物理学	357
パターン認識	357
波動光学	358
光・電子物性工学 1	358
光・電子物性工学 2	358
光演算処理	358
光応用工学計算機実習	359
光応用工学実験 1	360
光応用工学実験 2	360
光応用工学セミナー 1	361
光応用工学セミナー 2	361
光応用工学特別講義 1	361
光応用工学特別講義 2	361
光化学	361
光画像計測	362
光機能材料・光デバイス特別講義 1	362
光機能材料・光デバイス特別講義 2	362

光機能材料・光デバイス特別講義 3	362
光情報機器	363
光情報システム特別講義 1	363
光情報システム特別講義 2	363
光通信方式	363
光デバイス 1	363
光デバイス 2	364
光デバイスプロセス工学	364
光導波工学	364
微分方程式 1	364
微分方程式 2	364
微分方程式特論	365
フォトニクス材料	365
福祉工学概論	365
複素関数論	365
プログラミング言語及び演習	366
分光分析学	366
分子工学	366
ベクトル解析	366
マルチメディア工学	367
量子力学	367
レーザ工学基礎論	367
労務管理	367

エコシステム工学

Ecosystem Engineering 教授・三輪 恵, 近藤 光男, 村上 仁士
 教授・末田 統, 助教授・松尾 繁樹, 上月 康則, 藤澤 正一郎
 助教授・廣瀬 義伸, 魚崎 泰弘, 教授・田村 勝弘, 村田 明広
 助教授・木戸 善行 2 単位

【授業目的】自然環境と社会環境の共存の重要性、ならびに、それらを目指す工学者に必要な考え方や有効な技術について概説する。

【授業概要】地球温暖化など地球環境問題は、今や人類をはじめとする地球上全ての生命体の存在をも危うくする重大な問題となっている。これは人類の産業活動が拡大を続けた結果、大気成分の変化や廃棄物の総量の増大など、地球の「大きさ」の壁に突き当たり、あらゆることに地球の有限性があらわれてきている現象に他ならない。人類が地球環境を保全しつつ将来世代にまで渡って持続的発展を遂げるためには、この地球の有限性の認識を基本とした自然環境に低負荷な技術体系を構築させる必要がある。本講義では自然環境と社会環境の共存を目指す工学者に必要な考え方や有効な技術について多角的に論じる。

【到達目標】自然環境・社会環境を取り巻く諸問題について科学的・工学的に考察し、理解する。

【授業計画】1. ガイダンス 2. エコシステム工学とは・レポート 3. うるおいある地域づくりと交通システム・レポート 4. 自動車を取り巻くエネルギー環境・レポート 5. エネルギーの高効率利用と大気環境の保全・レポート 6. ひとにやさしいまちづくり・レポート 7. 生態系工学による自然環境修復の取り組み・レポート 8. エコシステムな物理・レポート 9. 化学と生物学の環境問題へのかかわり・レポート 10. 環境に優しい超臨界流体の利用・レポート 11. 活断層と地震・レポート 12. 環境負荷計測のための空間情報の活用・レポート 13. 障害者の社会参加を支える工学技術・レポート 14. 予備日 15. 予備日

【成績評価】各テーマごとに出題されるレポート(100%)により評価を行い、その平均点が60%以上あれば合格とする。定期試験は行わない。

【JABEE 合格】単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】C, E

【教科書】教科書は特に指定せず、毎回講義用資料が配布される。

【参考書】E. P. オダム著/三島次郎訳「オダム基礎生態学」培風館

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

化学反応論 1

Chemical Reactions 1 教授・田中 均 2 単位

【授業目的】化合物の構造、性質、生成、反応を分子論的に理解するための基礎知識を修得し、物質およびその特性を原子、分子のオーダーで理解する能力を養う。

【授業概要】既存物質の特性を理解することはもとより、新しい機能をもつ物質を創製していくためには、物質の本質を化学的に理解するこ

とが重要である。本講義では、化学反応は何故起こるのか、反応は何によって支配されているのか、このような素朴な疑問について具体的な例を挙げながら物質の構造、性質、反応、機能について易しく講述する。

【受講要件】「分子工学」を履修していることが望ましい。

【到達目標】

1. 無機化合物、脂肪族炭化水素、芳香族化合物の生成、反応、機能を理解する。
2. 有機ハロゲン化合物、水酸化物の生成、反応を理解し、分子軌道の概念を反応に応用する。

【授業計画】1. 身の回りの化学・予備知識調べ 2. 電子、結合 3. 無機錯体 4. 無機錯体と化学反応 5. 溶液中の無機化学反応 (1) 6. 溶液中の無機化学反応 (2) 7. アルカンとアルケン化合物 8. アルケンとアルキン化合物 9. 芳香族化合物・小テスト 2(到達目標 1 の試験) 10. 分子軌道と協奏反応 (1) 11. 分子軌道と協奏反応 (2) 12. 有機ハロゲン化合物 (1) 13. 有機ハロゲン化合物 (2) 14. アルコールとフェノール 15. 予備日 16. 期末試験 (到達目標 2 の試験)

【成績評価】単位の取得は、期末試験 40%、小テスト 40%(20% X 2 回=40%)、講義への取り組み状況 20%として評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単合格と同一

【学習教育目標との関連】光応用工学科の教育目標 B に該当

【教科書】「ベーシック有機化学」山口良平他著 (化学同人); 準教科書: 「基礎無機化学」一國雅己著 (掌華房)

【参考書】「Organic Chemistry」K.P.C. Vollhardt, N.E. Schore 著 (W.H. Freeman & Comp.), 補助器具: 「HGS 分子模型」丸善

【連絡先】田中均 TEL&FAX:088-656-9420, E-mail:tanaka@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】オフィスアワー: 随時

化学反応論 2

Chemical Reactions 2

教授・田中均 2 単位

【授業目的】より広範な化合物、生体物質について、それら化合物の構造、性質、生成、反応を分子論的に理解するための基礎知識を修得し、物質およびその特性を原子、分子のオーダーで理解する能力を養う。

【授業概要】氾濫する多くの物質が示す多様な一見複雑そうにみえる挙動も、実はミクロなレベルから眺めると、案外、規則的に、整然と、単純な分子の挙動に集約されることがある。本講義では、「化学反応論 1」をさらに発展させ、より広範な様々な化合物の構造、性質、生成、および反応を分子論的に講述する。

【受講要件】「分子工学」「化学反応論 1」を履修していることが望ましい。また、予習と復習を充分に行うこと。

【到達目標】

1. エーテル及びカルボニル化合物の生成、反応、構造を理解する。
2. アミン類及び生体物質の生成、反応、機能を理解する。

【授業計画】1. エーテルとエポキシド (1) 2. エーテルとエポキシド (2) 3. アルデヒドとケトン (1) 4. アルデヒドとケトン (2) 5. アルデヒドとケトン (3) 6. カルボン酸 7. カルボン酸誘導体 (1) 8. カルボン酸誘導体 (2) 9. 縮合反応と共役付加反応 (1) 10. 縮合反応と共役付加反応 (2) 11. アミンとその誘導体 (1) 12. アミンとその誘導体 (2) 13. 生体物質 (1) 14. 生体物質 (2) 15. 予備日 16. 期末試験 (到達目標 2 の試験)

【成績評価】単位の取得は、期末試験 40%、小テスト 40%(20% X 2 回=40%)、講義への取り組み状況 20%として評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単合格と同一

【学習教育目標との関連】光応用工学科の教育目標 B に該当

【教科書】「ベーシック有機化学」山口良平他著 (化学同人)

【参考書】「Organic Chemistry」K.P.C. Vollhardt, N.E. Schore 著 (W.H. Freeman & Comp.), 「Organic Chemistry」J. McMurry 著 (Brooks/Cole), 補助器具: 「HGS 分子模型」丸善

【連絡先】田中均 TEL&FAX:088-656-9420, E-mail:tanaka@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】オフィスアワー: 随時

学外実習

Internship

1 単位

【授業目的】実社会における工学全般や光応用工学の位置付けを理解する。実社会で就業者は何を求められているか実体験として理解する。社会に出るまでに行っておくべきことを理解する。

【授業概要】3 年次または 4 年次の夏季、インターンシップ希望者に対し、インターンシップ受け入れ先企業・団体等にて 1 から 2 週間程度の就業研修を行う。

【受講要件】学内で開催される事前研修を受講していること。

【履修上の注意】服装、言葉遣いなどに十分注意すること。

【到達目標】

1. 社会人として要求される事項をリストアップできる。
2. 自分が社会に出るまでに行うべき事をリストアップできる。
3. 大学での教育と実社会との関係について自分の意見を述べる事ができる。

【授業計画】1. 就業先事業内容、研修の概要等について 2. 研修実施 3. 研修内容についてまとめ

【成績評価】研修先企業担当者による評価票および研修終了後に別途提出するレポート (必須) により評価する。前者と後者の比率は約 7:3 とし、総合評価の 60%を合格とする

【JABEE 合格】単合格をもって JABEE 合格とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の学習目標 C,D,E に該当する。

【教科書】指定なし

【参考書】研修先企業にて配付される場合がある。

【連絡先】光応用工学科事務室 TEL:088-656-9436 E-mail:tamura@opt.tokushima-u.ac.jp

確率統計学

Probability and Statistics

教授・長町重昭 2 単位

【授業目的】確率的な現象の捉え方、考え方を学ぶとともにデータを処理する際に使われる統計手法を習得することを目標とする。

【授業概要】初めて数理統計を学ぶ初学者のために、確率論と統計学の基礎的な部分を解説し、統計学は具体的な例を中心に解説する。

【受講要件】「微積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】時間数の制約から、数理統計学を履修するための必要最小限の議論を行うので、講義内容のすべてを吸収することが理解への早道である。日頃から予習・復習の計画を立てて勉学に努めてほしい。

【到達目標】

1. 基本的な確率分布に従う確率変数の性質の理解
2. 各種の検定や推定の方法の理解

【授業計画】1. 事象と確率 2. 確率変数 3. 確率分布と密度関数 4. 平均と分散 5. 基本的な確率分布 6. 確率変数の性質 7. 中心極限定理 8. データの整理と記述 9. 統計学の考え方 10. 正規母集団の母平均の検定 (I) 11. 正規母集団の母平均の検定 (II) 12. 正規母集団の母分散の検定 13. 出現率の検定 14. 区間推定 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】試験 80%講義への取り組み状況 20%として評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】到達目標が各々達成されているかを試験 100%で評価し 60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】A

【教科書】坂光一、水原昂廣『確率・統計入門』学術図書出版社

【参考書】小森尚志、山下護、水野正一『統計学の基礎と演習』東海大学出版

【連絡先】A205室、TEL:656-7554, e-mail:shigeaki@pm.tokushima-u.ac.jp

画像処理

Image Processing

教授・仁木登 2 単位

【授業目的】画像処理の基礎知識を習得する。

【授業概要】画像処理は、計測、表示、伝送などの技術進歩により新しいデジタル映像環境において重要な役割を果たしている。たとえば、リモートセンシング、医療用 X 線 CT、コンピュータグラフィックス (CG)、パチャルリアリティ (VR) などのデジタル画像処理システムである。ここでは、デジタル画像の基礎、画像の変換、画像強調、画像復元、画像圧縮、画像セグメンテーション、画像の表現と記述、画像システムについて述べる。

【到達目標】

1. デジタル画像処理の手法を理解する。
2. デジタル画像処理システム設計法を理解する。

【授業計画】1. 視覚モデル, 標本化と量子化 2. 画素間の基本的関係, 座標変換, フィルム 3. 2次元フーリエ変換, 2次元フーリエ変換の性質 4. 他の直交変換 5. ボイント処理, 空間フィルタリング 6. フーリエ領域処理, カラー画像処理 7. 退化モデル, 逆フィルタリング 8. LMS フィルタ, 制約付最小二乗法 9. 画像圧縮モデル, 情報理論基礎 10. コーディング, 標準化 11. 不連続の検出, 境界の検出 12. 閾値処理, 領域指向セグメンテーション 13. 表現の概念, 境界記述 14. 領域記述, モルホロジー 15. 定期試験 16. 予備日

【成績評価】定期試験 (80%), レポート及び講義への取り組み状況 (20%) として評価し, 全体で 60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一

【学習教育目標との関連】B

【教科書】イメージプロセッシング, 画像情報教育振興協会

【参考書】画像工学の基礎, 安居院猛・中嶋正之共著, 昭晃堂, Digital image processing, R.C.Gonzalez and R.E.Woods, Addison Wesley, Digital pictures processing 1, 2, A.Rosenfeld and A.C.Kak, Academic Press Inc., Computer Graphics, J.D.Foley, A.Dam, S.K.Feiner and J.F.Hughes, Addison Wesley, デジタル画像処理 (I),(II), 鳥脇純一郎著, 昭晃堂

【備考】試験の採点は厳密に行うために単位を落とすことが十分にある。特に, 広範囲にまたがっているののでしっかり勉強する必要がある。講義を復習することは重要である。また, システム解析, 信号処理を履修しておく必要がある。

感性教育特別講義

Special Lectures on Technology and Society 非常勤講師 1 単位

【授業目的】工学に関わる者に対して, 以前よりまして広い視野と鋭い感性が求められるようになった。そこで, (1) 技術と地球環境との関わり, 人類社会における工学の役割など, 広い視野をもって工学の使命について考える能力を育成すること, (2) 工学に関わる者に求められる感性について考えさせることを通じて, 豊かな感性を育成すること, が本講義の目的である。現代の工学には広い視野と豊かな感性が欠かせないことを理解し, 広い視野と感性を育む努力をつねに行うようになることが目標である。

【授業概要】通常の工学教育の枠に捕われず, 技術と地球環境との関わり, 人類社会における工学の役割などについて考えるため, 学内外から様々な分野における専門家の講師 (複数名) により集中講義形式にて講義を行う。

【到達目標】現代の工学に広い視野と豊かな感性が欠かせない理由を説明できる。受講者が今後, 広い視野と豊かな感性を育むために何をすべきかを複数上げ, 説明ができる。

【授業計画】1. 医学と感性 2. 美術と感性 3. 音楽と感性

【成績評価】講義への取り組み状況, レポートにより評価を行う。複数の非常勤講師が担当する場合は, 各々の講師について, 概ね 6 割以上の出席かつレポート提出が必要である。評価のウエイトの目安は, 授業への取り組み状況 30%, レポート 70%である。全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単位合格をもって JABEE 合格とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の学習目標 E に該当する。

【教科書】配付プリント等の資料による。配付物がない場合もありうる。

【連絡先】学科事務 TEL:088-656-9436 E-mail:tamura@opt.tokushima-u.ac.jp

幾何光学

Geometrical Optics 教授・西田 信夫 2 単位

【授業目的】光産業の基盤技術をなす光応用工学にとって欠かすことのできない幾何光学について講義し, 演習・レポート, 小テストを実施して光応用工学に必要な基礎知識を修得させる。

【授業概要】平面鏡, プリズム, レンズなどの光学素子の機能と構造, これらの光学素子を用いた簡単な光学系の設計法およびレンズの収差論を論述して光学システムの設計に関する基礎力の養成を図る。

【到達目標】

1. 幾何光学の基本をなす反射, 屈折に関する法則を十分理解できること。
2. レンズの基本的事項を理解し, 簡単な光学系の設計ができること。
3. レンズの収差についての知識を習得し, 用途に応じたレンズの選択ができること。

【授業計画】1. 平面による反射・屈折, 臨界角と全反射 2. プリズムの最小偏角, 種類, 応用 3. 単球面の焦点と焦点距離, 像の形成 4. 単球面におけるガウスの式, 倍率 5. 薄肉レンズにおけるレンズの公式 6. 物

空間と像空間, レンズの屈折力 7. 厚肉レンズの焦点と主点, レンズの公式 8. 厚肉レンズの節点と光学中心 9. 球面鏡の焦点と焦点距離, 結像の公式 10. 複合レンズの像点の導出 11. 簡単な光学系の設計, 光線追跡 12. レンズの収差, 3 次の収差論 13. 球面収差, コマ, 非点収差 14. 像面湾曲, 歪曲収差, 色収差 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は, 講義への取り組み状況, 小テストおよび最終試験の成績を総合して行う。配点の比率 講義への取り組み状況 10%, 小テスト得点 10%, 最終試験得点 80% 合格基準単位の取得:総合点の 60%以上

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の教育目標 (B) と関連する。

【教科書】選定中 (適当なものがないければ, 教科書を使わずに講義を行う。)

【参考書】左貝潤一著「光学の基礎」コロナ社

【連絡先】西田信夫 TEL:088-656-9425, E-mail:nishida@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】随時に小テストを実施するので, 毎回の復習を欠かさずに行うこと。

企業経営システム特別講義

Business System 非常勤講師・西村 捷敏 2 単位

【授業目的】企業活動の仕組みと機能が理解できる

【授業概要】企業経営とは, 企業が継続的に維持・発展していくために, ヒト・カネ・モノ・技術・情報などの経営資源を使って製品・サービスを生産し, それを市場へ提供することによって売上・利益を追求していくはたらきをいう。本講義ではその企業活動の仕組みと機能をシステム論的視点から明らかにするとともに, 企業をとりまく大きな環境変化の中で日本の企業は今日のようなシステムの改変を進めつつあるかについて述べる。

【到達目標】企業活動の仕組みと機能を理解し説明することができる

【授業計画】1. システムとは 2. 経営システムの目的と機能 3. ヒトのマネジメント・システム (1) 4. ヒトのマネジメント・システム (2) 5. カネのマネジメント・システム (1) 6. カネのマネジメント・システム (2) 7. モノのマネジメント・システム (1) 8. モノのマネジメント・システム (2) 9. 技術のマネジメント・システム (1) 10. 技術のマネジメント・システム (2) 11. 情報のマネジメント・システム (1) 12. 情報のマネジメント・システム (2) 13. 現在進行の企業環境の変化 14. 経営システム改革の方向 15. 試験

【成績評価】講義への取り組み状況 (20%)・コメント並びにレポート (20%)・期末試験 (論述式) (60%) で評価し, 全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一

【学習教育目標との関連】C

【教科書】教科書は用いず, 毎回配布のレジメに則して講義を進める

【参考書】適宜紹介する

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】井上(光棟310, 656-9416, inoue@opt.tokushima-u.ac.jp)

【備考】毎日きちんと新聞を読むこと (とくに経済, 産業, 企業経営関連記事)。

基礎波動学

Fundamentals of Wave Motion 非常勤講師・浦西 佐々也 2 単位

【授業目的】波の現象の基礎的内容を修得させる。

【授業概要】振動現象を説明し, 波動については波動方程式に基づいて, 弾性波などの波の性質を講義する。また, 電磁波の簡単な議論を行い, 光の性質を調べる。さらに, 波の干渉, 回折を説明する。

【受講要件】電磁気学ならびに微分積分の基礎知識を要する。

【到達目標】

1. 振動現象の基礎を理解する。
2. 電磁波を含む波動の基本的な性質を理解する。
3. 干渉, 回折などの現象を理解する。

【授業計画】1. 単振動, 単振動の運動方程式 2. 減衰振動 3. 強制振動 4. 連成振動, 基準振動, 基準座標 5. 波, 波動方程式 6. 弾性波 7. 電磁波 8. 波のエネルギーとインピーダンス 9. 波の反射と透過 10. うなりと群速度 11. 電磁波の放射 12. 物質中の電磁波, 反射と屈折 13. 波の干渉 14. 波の回折 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】試験 80%(期末試験), 講義への取り組み状況 20%として評価し, 全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】試験 80%(期末試験), 講義への取り組み状況 20%として評価し, 全体で 60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】A

【教科書】振動と波 長岡洋介著, 裳華房

【参考書】パークレー物理学コース 3 波動(上, 下) 丸善

【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能

【備考】目標 3 は発展的内容である。

計算機システム

Computer Fundamentals

教授・仁木 登 2 単位

【授業目的】計算機の基礎知識を習得する。

【授業概要】いまや計算機は不可欠なものとなっている。光技術の開発にも大きく関わっている。そこで, 計算機の基本構成と動作原理, 数の表現, 論理回路, 順序回路, 演算回路について述べ, これをもとに構成要素である演算処理装置, 記憶装置, 入出力装置の構成方式と動作原理についても述べる。

【到達目標】

1. 計算機の基本構成について理解する。
2. 計算機の構成要素の動作原理を理解する。

【授業計画】1. 計算機の概要 2. 数の表現 3. ブル代数 1 4. ブル代数 2 5. ゲートネットワーク 6. ロジックデザイン 1 7. ロジックデザイン 2 8. ALU 9. メモリ, RAM, ROM 10. 周辺装置(磁気ディスクなど) 11. VLSI 技術 12. オペレーティングシステム 1 13. オペレーティングシステム 2 14. プログラミング言語 15. 定期試験 16. 予備日

【成績評価】定期試験(80%), レポート及び講義への取り組み状況(20%)として評価し, 全体で 60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一

【学習教育目標との関連】B

【教科書】コンピュータ基礎工学, 曾和将容編著, 昭晃堂

【参考書】Computer Architecture and Logic Design, T.C.Bartee, McGraw-Hill International Edition, デジタル回路, 田丸啓吉著, 昭晃堂, 計算機方式, 高橋義造著, コロナ社, 並列計算機構成論, 富田眞治著, 昭晃堂

【備考】試験の採点は厳密に行うために単位を落とすことが十分にある。特に, レポートを提出してしっかり勉強することが重要である。計算機に関連する実験・実習はプログラミング言語および演習, 光電機器設計と演習, 光応用工学実験, 光応用計算機実習で行う。

結晶工学

Crystal Engineering

教授・井上 哲夫 2 単位

【授業目的】(1) 結晶の対称性, 構造について, (2) X 線による結晶の研究法, (3) 結晶の中で光はどのように進むのか, また (4) 格子欠陥についての基礎知識を修得する。

【授業概要】結晶についての基礎知識(対称性, 構造)を講義し, また結晶の持つ対称性との関連で光学的性質を講義する。また結晶中の格子欠陥について講義する。結晶の対称性の理解には線形代数の知識が必要であり, また X 線や結晶の光学的性質の理解には物理学, 格子欠陥の理解には物理や化学の基礎知識が必要である。その結果, この授業科目は学科の学習教育目標 A と B に大きく関連している。

【受講要件】関連科目: 結晶成長学(3 年の授業)の基礎となる。

【到達目標】(1) 結晶の対称性や構造について理解する。(2) X 線による結晶構造解析の原理を理解する。(3) 結晶の光学的性質について理解する。(4) 格子欠陥について理解する。

【授業計画】1. 結晶形態学(対称の要素) 2. 結晶形態学(32 点群) 3. 結晶形態学(立体投影) 4. 結晶構造学(空間群) 5. 結晶構造学(代表的構造) 6. X 線結晶学(原理) 7. X 線結晶学(結晶の構造や方位の決定法) 8. 中間試験: 到達目標(1, 2)の試験 9. 結晶の光学的性質(偏光の基礎) 10. 結晶の光学的性質(偏光の干渉) 11. 結晶の光学的性質(1 軸性結晶, 2 軸性結晶) 12. 結晶の光学的性質(吸収, 多色性) 13. 光学結晶の特色(対称性との関連) 14. 格子欠陥 15. 格子欠陥 16. 期末試験: 到達目標(3, 4)の試験

【成績評価】単位の取得: 試験 80%(中間試験 40%, 期末試験 40%), 講義への取り組み状況 20%として評価し, 全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一

【学習教育目標との関連】B

【教科書】「結晶としての固体」(パーズ固体物理学)(Gerald Burns, 著, 寺内 暉・中村輝太郎 訳, 東海大出版)

【参考書】「光学結晶」(アドバンスエレクトロニクスシリーズ I-14)(宮沢信太郎 著, 培風館), 「結晶工学の基礎」(小川智哉 著, 裳華房)

【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能

【連絡先】井上哲夫, 光応用棟3F(310), TEL:088-656-9416, E-mail:inoue@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】オフィスアワー: 随時

結晶成長学 1

Science and Technology of Crystal Growth

教授・井上 哲夫 2 単位

【授業目的】光技術に利用できる結晶は光学結晶と呼ばれている。こうした結晶がきちんと機能を発揮するためには, 品質(組成や構造)が一定のレベル以上でなければならない。高品質な結晶を育成するためには, 結晶成長の素過程を知らねばならない。本授業では結晶成長機構についての基礎知識を修得する。

【授業概要】高品質の結晶を育成するには, 結晶の成長機構を知ってその上で育成方法を工夫せねばならない。本講義では各種環境相(溶液, 融液や気体)からの成長機構について述べる。これは専門教育の光材料の結晶成長に関連があるので, 学習・教育目標 B に関連した授業である。

【受講要件】「結晶工学」の受講を前提にして講義を行う。

【到達目標】1. 結晶成長の駆動力, 2. 核生成, 3. 2 次元核及びスパイラル成長, 4. 融液からの成長機構, 5. 平衡形・成長形, 6. エピタキシャル成長, について理解する。

【授業計画】1. 光学結晶とはなにか 2. 結晶はなぜ成長するか 3. 核生成 1(ギブストムソンの式) 4. 核生成 2(均一核生成の自由エネルギー) 5. 核生成 3(均一核生成頻度) 6. 核生成 4(不均一核生成) 7. 成長速度と駆動力の関係 8. 中間試験(目標 1, 2 の達成度をテストする) 9. 成長機構 1(成長界面の構造との関係) 2 次元核成長 10. 成長機構 2(成長界面の構造との関係) スパイラル成長 11. 成長機構 3(成長界面の構造との関係) 融液からの成長 12. 結晶の平衡形 13. 結晶の成長形 14. 成長界面の形態安定性 15. エピタキシャル成長 16. 期末試験(目標 3~6 の達成度をテストする)

【成績評価】単位の取得: 試験 80%(中間試験 40%, 期末試験 40%), 講義への取り組み状況 20%として評価し, 全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一

【学習教育目標との関連】B

【教科書】「結晶は生きている」(黒田登志雄 著, サイエンス社)

【参考書】裳華房フィジックスライブラリー結晶成長: 斎藤幸夫著, 裳華房(2400 円+税)

【対象学生】他学科, 他学部学生も履修可能

【連絡先】井上哲夫, 光応用棟3F310室, TEL:088-656-9416, E-mail:inoue@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】オフィスアワー: 随時

結晶成長学 2

Science and Technology of Crystal Growth (2)

教授・井上 哲夫 2 単位

【授業目的】結晶成長学(1)では, 結晶成長の基礎概念や成長機構についての講義であったが, (2)では実際に結晶を作成するときのための基礎的な知識を修得する。

【授業概要】実際に結晶作成を行なうときのために, 結晶育成の基礎概念や, 各種キーマテリアルの育成技術について講義し, また育成後の結晶の評価方法についての知識を修得させる。学習・教育目標としては, 光技術の専門教育に最も大きく関わっている(B:58%)

【受講要件】結晶成長学(1)を受講を前提としている。

【到達目標】(1) 状態図をよむことができる。(2) 物質や熱の輸送について基礎概念を修得する。(3) 各種の結晶育成技術の知識を修得する。(4) 結晶の評価法についての知識を修得する。

【授業計画】1. 状態図について(1) 2. 状態図について(2) 3. 物質と熱の輸送 1(拡散) 4. 物質と熱の輸送 2(熱) 5. 物質と熱の輸送 3(流れ, 粘性, 境界層) 6. 結晶育成技術 1(溶液成長, フラックス成長) 7. 結晶育成技術 2(メルト成長, 気相成長, エピタキシャル成長) 8. 中間試験(目標 1, 2 と目標 3 の結晶育成技術(1-2)の達成度をテストする) 9. キーマテリアルの結晶育成技術(金属結晶, イオン結晶) 10. キーマテリアルの結晶育成技術(有機結晶, 酸化物結晶) 11. キーマテリアルの結晶育成技術(半導体結晶, 光学結晶, その 1) 12. キーマテリアルの結晶育成技術(半導体結晶, 光学結晶, その 2) 13. 結晶育成と欠陥導入

機構について 14. 結晶評価 (組成, 完全性) 15. 結晶評価 (構造, 光学の性質) 16. 期末試験 (目標 3, 4 の達成度をテストする)

【成績評価】単位の取得: 試験 80% (中間試験 40%, 期末試験 40%), 講義への取り組み状況 20% として評価し, 全体で 60% 以上で合格とする。

【JABEE 合格】単合格と同一

【学習教育目標との関連】B

【教科書】プリント配布

【参考書】伊藤糾次, 犬塚直夫 著, 「結晶成長」, コロナ社

【連絡先】井上哲夫, 光応用棟3F310室, TEL:088-656-9416, E-mail:inoue@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】オフィスアワー: 随時

健康教育特別講義

Special Lectures on Technology and Health 非常勤講師・森口 寛
非常勤講師・的場 秀樹, 荒木 秀夫, 小原 繁 2 単位

【授業目的】エンジニアとして必要な身体に関する知識を習得し, また自身の健康保持, 疾病予防の方法に関することを学び, 生涯において健康維持増進を实践できるようにする。

【授業概要】生活習慣病について学び, それに関連の深い呼吸循環系や代謝系機能の運動による改善を中心に健康増進に関する知識と実践的な方法を学ぶ (小原担当) 骨格筋の運動あるいは運動不足に対する適応について学ぶ (的場担当)。薬物の脳への影響や脳とからだやこころの関係について学ぶ (荒木担当)。栄養学を基礎としての健康づくりと栄養および運動と免疫との関係について学ぶ (森口担当)。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】配付資料と講義ノートとの関係を整理して, 復習をしっかりおこなうこと。

【到達目標】

1. 生活習慣病とは何か, その原因を理解し, 予防について理解する。
2. 運動による身体の反応を理解し, 疾病予防のための運動の方法を理解する。
3. 筋肉の働きと健康の保持・増進との関連を理解する。
4. 麻薬・薬という化学物質が身体にどのような影響を及ぼすのかを理解する。
5. 脳の働きを理解し, 心身の相互関係を理解する。
6. 各栄養素の体内における役割と疾病予防に対する正しい食生活の在り方について理解する。

【授業計画】1. 生活習慣病の中で, 心臓血管系の病気である虚血性心疾患と高血圧症について生活習慣がどのように関連しているかを学び, その予防法を実施できるようにする。2. 生活習慣病の中で, 代謝関連の病気である糖尿病について生活習慣がどのように関連しているかを学び, その予防法を実施できるようにする。3. 食事や身体活動時のホルモンの働きとして, 血糖値の維持機構や脂肪代謝促進機構にどのように関係しているかを学び, そこから代謝関連の疾病の予防に役立てる方法を理解する。4. 生活習慣病の予防のための運動について, 運動の「強さ」「時間」「頻度」の意義について学び, 競技スポーツとの違いを認識した上で, 健康につながる運動のあり方を理解する。5. 生活習慣病の予防方法の具体例として, 心臓血管系の病気の予防のための運動のあり方 (運動種目の特性, 強度, 時間) を理解する。6. 生活習慣病の予防方法の具体例として, 代謝系の病気の予防のための運動のあり方 (運動種目の特性, 強度, 時間) を理解する。7. 身体の機能を測定する装置についての身体の基本的事項 (血液成分, 生体電気現象, 血液循環, 体温など) をどのように測定しているかを学び, 測定結果の理解と機器開発の応用への導入として役立てる。以上 7 回 (1-7) 小原担当 8. 筋肉の構造を中心にからだの成り立ちをまなび, 自分からからだの構造を理解する。9. 不活動 (無重力状態) による筋肉の萎縮と身体機能低下 (筋肉を使用しないことが身体にどのような影響を及ぼすかを理解し, 健康に必要な筋肉量・筋力の維持に努力する姿勢を養う。以上 2 回 (8-9) 的場担当 10. 薬物の神経系への作用を学び, 薬物の乱用の弊害を避け健康な生活が営める方法を理解する。11. 脳・からだ・こころの関連を学び, こころの問題がどのように身体に影響しているかを理解する。以上 2 回 (10 - 11) 荒木担当 12. 3 大栄養素 (炭水化物, 脂肪, タンパク質) が食事から摂取後, どのように消化吸収されて, 身体でどのような役割をしているかを学ぶことにより, 健康づくりのうえで日常の食生活に役立てられるようにする。13. ビタミンとミネラルの体内における働きや欠乏時の疾患などについて学ぶことにより, 微量栄養素の重要性を理解し, 正しい食生活の実施に役立てられるようにする。14. 免疫の仕組みや栄養と免疫との関係について学ぶことにより, 日常生活を通じて健康づくりを図る。15. 第 14 回の講義の続きとして, 運動と免疫との関係について学ぶことにより健康保持・増進を図るうえでの運動の重要性を理解する。以上 4 回 (12-15) 森口担当

【成績評価】4 名の教官が分担して行うので, それぞれの担当を終了する毎に単元まとめ試験を行う。計 4 回の試験を行うが, 1 つでも 50% 以下の成績が合った場合には不合格とし, 全体としては 60% 以上を合格とする。

【JABEE 合格】単合格をもって JABEE 合格とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の教育目標 D に該当する。

【教科書】教科書は使用しないが, 授業時に資料を配付する。

【参考書】入門運動生理学 (勝田 茂 編著, 杏林書院), 栄養免疫学—病態・疾患と治療 (渡辺明治編, 医歯薬出版)

【連絡先】授業全体に関することは, 小原繁 (obara@ias.tokushima-u.ac.jp:総合科学部) まで。的場秀樹 (matoba@ias.tokushima-u.ac.jp:総合科学部) 荒木秀夫 (araki@ias.tokushima-u.ac.jp:総合科学部) 森口寛 (moriguti@ws1.yamaguchi-pu.ac.jp:山口県立大学生活科学部)

【備考】特になし。

工学倫理

Engineering Ethics 非常勤講師・岡村 昭, 伊藤 良一 2 単位

【授業目的】技術者としての意識と誇りを身につけ, 工学倫理を守るために必要な知識と知恵を学ぶ。

【授業概要】技術者に要求される倫理とは何か? 比較研究と事例研究を中心に学ぶ。その上で, 安全, 環境, 法規, 知的財産権などに関連して, 具体的にどのようなことが問題になるのか? 実践的にどのように対処すればよいか? 講師たちの技術者としての実体験をもとに, 出来るだけ双方向的な授業をこころみる。工学倫理というむずかしそうなテーマにやさしく迫る。

【履修上の注意】各クラス 2 人の講師が, それぞれ 2 日ずつ計 15 時間の授業を行う。全時間の出席を要する。

【到達目標】

1. 工学倫理についての理解
2. 技術者としての誇りと責任感
3. 関連問題についての理解
4. 実践的対応力

【授業計画】1. はじめに 2. 比較論のこころみ 3. 実例研究 1 (グループ討議と発表) 4. 実例研究 2 (レポートと小テスト) 5. 技術者倫理と技術倫理 6. 安全と工学倫理 7. 環境・資源問題と工学倫理 8. リスク評価と技術者 9. 実例研究 3 (レポートと発表・討議) 10. 技術者と法規 11. 製造物責任 12. 知的財産権と工学倫理 13. 事例研究 4 (レポートと発表・討議) 14. 国際工学倫理 15. 実践的技術者倫理

【成績評価】プレゼンテーション評価 50%, レポート・小テスト 50%, 全体で 60% 以上を合格とする。

【JABEE 合格】単合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】E

【教科書】中村収三著 “実践的工学倫理 みじかく, やさしく, 役にたつ”, 2003 年, 化学同人., 全員が教科書をもっていることを前提に授業 (レポート, 宿題, 小テストを含む) を行う。

【参考書】適宜紹介する。

【連絡先】英 (M317, 656-7377, hanabusa@me.tokushima-u.ac.jp)

工業基礎英語 I

Industrial Basic English (I) 非常勤講師・広田 知子 1 単位

【授業目的】現代社会の国際言語である英語を用いて, 科学技術分野での基礎的な語彙力, 読解力, リスニング力を養うことを目的とする。

【授業概要】科学技術分野で頻出の語彙や表現を増やす。イラスト, 写真などを参考にしながら, 内容理解のための練習問題を通して, 英文を理解する力や, 必要な情報を効率的に掴む力を養成する。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. HEAT 3. SOUND 4. COMPUTERS 5. (教科書の各章にしたがって進めていくが, 途中で適宜リスニング教材やビデオ教材なども使用する。)

【成績評価】コース最終日に試験を行う。

【教科書】ENJOY SCIENCE: データバンク (I) 『やさしい科学』 David Crystal/John Foster Asahi Press

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】授業の前に予習しておくことが望ましい。

工業基礎数学 I

Industrial Basic Mathematics (I) 非常勤講師・吉川 隆吾 1 単位

【授業目的】工学を学ぶために必要不可欠となる微分・積分の基礎的な内容について理解を図り、さらに基本的な手法や計算技術を確実に習得することを目的とする。

【授業概要】1 変数関数および多変数関数の微分・積分について、基礎的な内容から解説する。また、本講義の内容について、より理解を深めるために適宜演習を行う。

【授業計画】1. 微分 1:極限と連続 2. 微分 2:微分 3. 微分 3:導関数の応用 4. 積分 1:不定積分 5. 積分 2:定積分 6. 積分 3:定積分の応用 7. 偏導関数 1:多変数の関数 8. 偏導関数 2:偏導関数 9. 偏導関数 3:全微分 10. 偏導関数 4:Taylor の定理 11. 偏導関数 5:偏導関数の応用 12. 重複積分 1:重複積分 13. 重複積分 2:多重積分の応用

【成績評価】出席状況、レポート、期末考査等により総合的に評価する。

【教科書】特に指定しない。適宜、資料を配布する。

【参考書】矢野健太郎, 石原繁 編「微分積分(改訂版)」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義内容を確実に理解するためにも、毎回の復習は欠かさずに行い、次回の講義に望んでもらいたい。成績評価に対する「講義の出席状況、レポートの提出状況」と「小テストの成績」の割合は4:6とする。

工業基礎物理 I

Industrial Basic Physics (I) 非常勤講師・佐近 隆義 1 単位

【授業目的】

【授業概要】力学・波動・電磁気学について、ごく初歩的分野を解説する。

【授業計画】1. 運動と力:質点及び剛体の力学, ニュートンの運動の法則, 運動量と力積・保存則 2. エネルギーと運動:仕事, 力学的エネルギー・保存則 3. 波動:等速円運動, 単振動, 波 4. 電気と磁気:クローン力, 電場と電圧, オームの法則・キルヒホッフの法則, 磁場・ローレンツ力 5. 試験

【成績評価】講義への参加状況と試験の成績を総合して行う。

【参考書】高等学校で使用する物理の教科書

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【備考】講義の最終日に試験を実施するので、毎回の復習を欠かさず行うこと。

工業物理学実験

Laboratory in General Physics 講師・中村 浩一, 助手・川崎 祐 1 単位

【授業目的】物理学の基本概念をよりよく理解すること、および実験を行なう際の基本事項を習得することを目的として基礎的な物理学実験を行なう。

【授業概要】統計処理(最小自乗法), 力学(ボルダの振り子, 角運動量), 物性(ヤング率, 単剛性率, 粘性係数, 抵抗の温度変化), 電磁気学(等電位線, 磁気モーメント, コンデンサ, 電磁誘導, トランジスタ特性, ホール効果), 熱(比熱, 温度伝導率), 波動(フレネルの複プリズム, 分光器と回折格子), 原子物理学(スペクトル, 光電効果, フランク・ヘルツの実験)の20テーマから適宜選択した実験を毎回3~4名ずつの班ごとに行ない、毎回レポートを提出する。また、全ての実験終了後、各班毎に実験内容・結果の報告会を行う。

【受講要件】本講義の受講は、予習により実験内容が理解されている事を前提とする。

【履修上の注意】毎実験の1週間後にレポートを提出すること。レポートチェック後再提出を求められることがある。その際には提出締切までに提出すること。なお、実験時の安全について受講者各人は十分に注意すること。

【到達目標】

1. 実験を行う際の基本事項や注意事項を理解する。
2. 実験で明らかになる物理現象を理解し、得られた実験データを整理・解析出来るようになる。
3. 実験結果を発表するための基本的な発表技法(パワーポイント, OHPの利用など)を理解する。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. 実験 1 3. 実験 2 4. 実験 3 5. 実験 4 6. 実験 5 7. 実験 6 8. 実験 7 9. 実験 8 10. 実験 9 11. レポート提出(実験 9 および再提出分) 12. 最終レポート提出締切 13. 実験結果報告準備 14. 実験結果報告準備 15. 実験結果報告

【成績評価】レポート提出(40%), 実験結果報告(30%), 講義への取組状況(30%)として評価し、全体で60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】レポート提出(40%), 実験結果報告(30%), 講義への取組状況(30%)として評価し、全体で60%以上で合格とする。

【学習教育目標との関連】A

【教科書】当実験の為の教科書「物理学実験」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】中村(A509室, TEL:656-7577, E-mail:koichi@pm.tokushima-u.ac.jp)

光電機器設計及び演習

Optoelectronic Instruments Design and Exercise 教授・仁木 登 助手・久保 満 2 単位

【授業目的】光デバイス, 電子機器の利用方法を含めた実験技術や, マイクロプロセッサを用いたプログラミングの原理に対して理解を深め, ハードウェアとソフトウェアの基礎技術の修得を目的とする。

【授業概要】マイクロプロセッサ, IC, インターフェイス回路などに関する講義及びマイクロプロセッサを用いた演習により, ハードウェアとソフトウェア間の構成や動作原理を修得することを目的とする。授業では Z80 を用いた光素子の発振制御, 16 進スイッチ入力, リレー制御, 割り込み制御, 音声入力・再生処理を実習する。また, 創造性や問題解決能力を養うために設計及び演習を兼ねた小テストを5回と発表会1回を行う。

【受講要件】特になし

【到達目標】マイクロプロセッサを用いて, ハードウェアとソフトウェア間の動作原理を理解し, 計算機を有効に活用できる能力を高め, 光技術者として計算機システムの設計能力及び問題解決能力を養うことを目標とする。

【授業計画】1. Z-80 を用いた機械語・アセンブラ言語・BASIC 言語の基本操作 2. 論理演算とアドレスについて 3. 小テスト-1 4. LED 点灯プログラムと WAIT サブルーチン 5. フラグレジスタについて 6. 小テスト-2 7. Z-80PIO の制御について 8. Z-80PIO を用いたスイッチ入力 LED 点灯プログラム 9. 小テスト-3 10. Z-80PIO の割り込み制御プログラム-1 11. Z-80PIO の割り込み制御プログラム-2 12. 小テスト-4 13. Z-80ACD0809 を用いた音声入力プログラム 14. 小テスト-5 15. 発表会 16. 予備日

【成績評価】講義への取り組み状況, 小テスト, 発表点で評価する。配点の比率は, 講義への取り組み状況 40%, 小テスト 40%, 発表点 20%である。単位修得のための合格基準は, 総合評価の 60%である。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の学習・教育目標「(B) 基礎的な実験技術の習熟と創造性」に関連する。

【教科書】実習の原理, 方法を示したプリントを配布する。

【参考書】横井与次郎:「デジタル IC 実用回路マニュアル」, 上野大平:「確実に動作する電子回路設計」

【連絡先】仁木登088-656-9430, niki@opt.tokushima-u.ac.jp, 久保満088-656-9432, mkubo@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】実習機器は故障しやすいので丁寧にあつうこと。限られた時間内で実習内容を理解して課題をこなすことは困難であるので予習すること。

高分子化学

Polymer Chemistry 教授・田中 均 2 単位

【授業目的】高分子の生成と反応, 構造, 機能発現を分子論的に理解するための基礎知識を修得し, 高分子材料を原子, 分子のオーダーから設計する能力を養う。

【授業概要】身の回りには古くから様々な天然および合成高分子があるが, 最近, 特に光機能材料の一つとして高分子は不可欠なものとなっている。本講義では, 実際にサンプルを見せながら高分子の生成と反応, 構造, およびその機能性, とりわけ高分子物質と光との関わりを電子, 原子, 分子のレベルから分かり易く解説し, 高分子物質をミクロなレベルから理解する能力を養う。

【受講要件】「化学反応論1」「化学反応論2」を履修していることが望ましい。また, 予習と復習を充分に行うこと

【到達目標】

1. 重合反応及び高分子のキャラクタリゼーションの基本を理解する。
2. 高分子の機能化とその材料特性を理解する。

【授業計画】1. 高分子とは何か?予備知識調べ 2. ラジカル重合(1) 3. ラジカル重合(2) 4. ラジカル重合(3) 5. ラジカル重合(4)・小テスト1(到達目標1の試験) 6. キャラクタリゼーション(1) 7. キャラクタリゼーション(2) 8. イオン重合 9. イオン重合・遷移金属触媒重合 10. 逐次重合・小テスト2(到達目標1の試験) 11. 高分子反応 12. 高分子材料・新素材(1) 13. 高分子材料・新素材(2) 14. 高分子材料・新素材(3) 15. 予備日 16. 期末試験(到達目標2の試験)

【成績評価】単位の取得は、期末試験 40%、小テスト 40%(20% X 2 回 = 40%)、講義への取り組み状況 20%として評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単合格と同一

【学習教育目標との関連】光応用工学科の教育目標 B に該当

【教科書】「高分子合成化学」山下雄也他著(東京電機大学出版局)

【参考書】「オプトエレクトロニクスと高分子材料」井手文雄著(共立出版)、「光機能分子の科学」堀江一之他著(講談社)、「Principles of Polymer Chemistry」P.J.Flory 著(Cornell Univ. Press)

【連絡先】田中均TEL&FAX:088-656-9420, E-mail:tanaka@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】オフィスアワー:随時

材料統計熱力学 1

Statistical Thermodynamics of Materials 1

講師・森 篤史 2 単位

【授業目的】材料の平衡状態での性質を理解するために必須である熱力学について、基礎的な概念と知識および応用力を習得させることを目標とする。

【授業概要】熱力学の材料工学等への応用を目的とした場合、エントロピーをはじめとする抽象概念を正しく理解しておく必要がある。また、熱力学の現実の問題への応用を考えることは、基礎的事項の理解の助けにもなる。

【受講要件】中学や高校で学んだ「熱」に関する基本的な事項が関連している。2 年生後期の「材料統計熱力学 2」(この講義は「熱・統計物理学」の少なくとも前半の履修を前提にして行う)を十分に理解するためには、「材料熱力学 1」で学んだ概念が不可欠である。熱力学は、物理や化学(科目名は列挙しません)の基礎であるばかりでなく、エネルギー・資源・環境などの問題との関連においても重要性を持っている。

【到達目標】

1. 熱・温度などの概念を理解する。
2. エントロピーの意義と熱力学第 2 法則の本質を理解する。
3. 自由エネルギーの計算とそれに基づいた考察ができるようにする。
4. 化学ポテンシャルの定義と相平衡の概念を理解する。

【授業計画】1. はじめに 2. 気体の性質 3. 気体の性質 4. 熱力学第 1 法則 5. 熱化学 6. 熱力学第 2 法則 7. 熱力学第 2 法則 8. 中間試験 9. 純物質の相平衡 10. 混合物の性質 11. 混合物の性質 12. 化学平衡の原理 13. 化学平衡の原理 14. 化学平衡の応用 15. 化学平衡の応用 16. 期末試験

【成績評価】定期試験によって評価する。中間試験は、到達目標 1 と 2 をそれぞれ 25 点満点で評価する。期末試験は、到達目標 3 と 4 をそれぞれ 25 点満点で評価する。試験問題は、自筆のノートの持込を前提として作製する。ノートが取れていないために及第点に達しなかった者を出席点で合格させることはしない。十分な論述のなされていない答えは、減点の対象になる。毎週復習の内容を A4 一枚のレポートの形式(重要な点をまとめたもの、質問等)で提出させるので、明らかなケアレスミスについては、減点をしない。4 つ到達目標のいずれもが 15 点以上で合格とする。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】学習・教育目標 B

【教科書】千原秀昭・稲葉章訳「アトキンス物理化学要論」(東京化学同人)

【参考書】原島鮮著「熱学・統計力学」(培風館)、「材料統計熱力学 2」についても言えることであるが、良書から悪書まで多数のものがある。

【連絡先】森(光棟410, 656-9417, mori@opt.tokushima-u.ac.jp)

【備考】試験は、自筆のノートの持込を可として行う。これが平常点に相当する。国語辞典と数学公式集の持込は、許可する。毎週復習の内容を A4 一枚のレポートの形式(重要な点をまとめたもの、質問等)で提出させる。締切は、金曜日の 5 時までとし、質問にはその次の講義の最初に時間を割いて答える。出席は、出席表を回覧するので、それに自筆で署名すること。上の「レポート」は、それと同一の署名がしてあること。「レポート」提出と併せて出席した認定する。欠席者は、代わりに、欠席理由と共に自習の結果をまとめて提出し、それが十分であれば出席したと認定する。規定により、出席率 60%以上が試験の受験資格となる。認定された出席をもって出席率を算定する。

材料統計熱力学 2

Statistical Thermodynamics of Materials 2

講師・森 篤史 2 単位

【授業目的】材料の性質や挙動を微視的な観点から理解あるいは予測する統計力学的手法について、基礎的な概念と知識および応用力を習得させることを目標とする。

【授業概要】熱力学は材料の微視的な構造の詳細に立ち入らずその性質や挙動を調べる体系であった。統計力学は、これとは対照的に、微視的な情報をもとに巨視的な性質を予測するものである。光学的な機能の発現は、青色発光ダイオードの例に見られるように、材料の微視的構造に密接に関わっている。原理から始め、具体的な例を取り混ぜながら、種々の手法を紹介する。目標欄に挙げた事項について、古典統計力学を中心に講義する。

【受講要件】「材料統計熱力学 1」を履修済みで「熱・統計物理学」の少なくとも前半を受講済みであるとして講義する。物質について微視的な運動のイメージを持つためには「力学」の概念が必要であるが、「統計力学の処方箋」を身に付けるためだけに、必須ではない。微視的な観点から材料を扱う(科目名は列記しない)ために有用であるほか、材料に限らず、多体系の振舞を論ずるのが統計力学である。

【到達目標】

1. 統計力学の処方箋の理解。
2. 弱相関係・希薄系についての分配関数の計算と系の振舞いの予測。
3. 平均場近似の考え方の理解、強相関係への適用と系の振舞いの予測。
4. 多体系についての動的な視点。

【授業計画】1. 熱力学の復習; エルゴード性と等重率の原理 2. 小正準集団, ボルツマンの原理, 統計力学エントロピー, 3. 正準集団, 大正準集団, NPT 集団; 理想気体 4. 調和振動子, 黒体放射, 格子比熱 5. 未定乗数法, 情報エントロピー 6. 中間試験 7. 磁性体, イジング模型, 相転移 8. 平均場近似, 合金, 正則溶液・正則固溶体 9. ランダウ理論, 臨界現象 10. 相分離, スピノーダル分解, 核生成 11. 不完全気体・液体の統計力学, クラスター展開法 12. ピリアル定理, 揺らぎと応答 13. ランジュバン方程式, 時間依存ギンツブルグ・ランダウ方程式 14. マルコフ鎖, モンテカルロ法 15. 期末試験

【成績評価】定期試験によって評価する。中間試験では、到達目標 1 と 2 を、1 を 20 点満点 2 を 30 点満点で評価する。期末試験では、到達目標 3 を 30 点満点 4 を 20 点満点で評価する。試験問題は、自筆のノートの持込を前提として作製する。ノートが取れていないために及第点に達しなかった者を出席点で合格させることはしない。十分な論述のなされていない答えは、減点の対象になる。毎週復習の内容を A4 一枚のレポートの形式(重要な点をまとめたもの、質問等)で提出させるので、明らかなケアレスミスについては、減点をしない。4 つ到達目標のうち 1 と 4 が 12 点以上であり、かつ、2 と 3 が 18 点満点以上で合格とする。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】学習・教育目標 B

【教科書】到達目標のすべてを一冊でカバーしている教科書は、今のところ見つけていないので、教科書は用いない(選定中である)。

【参考書】久保亮五編「大学演習 熱学・統計力学」(裳華房)、宮下精二著「熱・統計力学」(培風館)、「材料統計熱力学 1」「熱・統計物理学」の教科書・参考書

【連絡先】森(光棟410, 656-9417, mori@opt.tokushima-u.ac.jp)

【備考】材料統計熱力学 1」を履修済みで「熱・統計物理学」の少なくとも前半を受講済みであるとして講義する。試験は、自筆のノートの持込を可として行う。これが平常点に相当する。国語辞典と数学公式集の持込は、許可する。毎週復習の内容を A4 一枚のレポートの形式(重要な点をまとめたもの、質問等)で提出させる。締切は、次の講義の前日の 7 時までとし、質問にはその講義の最初に時間を割いて答える。出席は、出席表を回覧するので、それに自筆で署名すること。上の「レポート」は、それと同一の署名がしてあること。「レポート」の提出と併せて出席したと認定する。欠席者は、代わりに、欠席理由と共に自習の結果をまとめて提出し、それが十分であれば出席したと認定する。規定により、出席率 60%以上が試験の受験資格となる。出席率は、認定された出席をもって算出する。

システム解析

System Analysis

教授・仁木 登 2 単位

【授業目的】線形システムの概念と解析法について習得する。

【授業概要】システム工学は計算機工学と並んで当学科では基礎科目の一つである。これはシステムの設計に基礎的な知識を提供する。ここでは、基礎的な考え方、基礎的な理論、具体例を示しながら平易に解説する。これらは状態、入力と応答、伝達関数、状態変数の変換、モード、高次系における入力と応答、安定性、可制御性と可観測性について述べる。

【到達目標】

- 線形システムについて理解する。
 - 線形システムの解析法について理解する。
- 【授業計画】1. 状態と状態方程式, 状態空間, 平衡状態 2. 入力, 状態および出力, 線形系の応答 3. 線形性と時不変性, インパルス応答 4. ナルフロ-グラフ, 伝達関数 5. 周波数応答, 周波数特性 6. 状態ベクトルと一次変換 7. 可制御標準形と可観測標準形 8. 状態遷移行列 9. モ-ド, モ-ド変数, 行列関数 10. 高次系の応答, 応答の計算法 11. 高次系の伝達関数 12. 平衡状態の安定性, 安定性の条件, 安定性の判定法 13. 可制御性, 可観測性 14. 正準分解 15. 定期試験 16. 予備日
- 【成績評価】定期試験 (80%), レポート及び講義への取り組み状況 (20%) として評価し, 全体で 60%以上を合格とする。
- 【JABEE 合格】単位合格と同一
- 【学習教育目標との関連】B
- 【教科書】線形システム解析入門, 示村悦二郎著, コロナ社
- 【参考書】フィードバック制御の基礎, 片山 徹著, 朝倉書店, 制御工学, 正田 英介著, 培風館, Digital Control of Dynamic Systems, G.F.Franklin et al., Addison-Wesley
- 【備考】試験の採点は厳密に行うために単位を落とすことが十分にある。システム設計の基礎科目となるのでしっかり学習することが必要である。また, 信号処理, 画像処理の基礎科目にもなる。

職業指導

Vocational Guidance 非常勤講師・坂野 信義 4 単位

- 【授業目的】
- 【授業概要】生涯発達・Career Developing としての人間観・職業観を確立すべく, 学際の見地から職業指導の課題と方法を論述し, 併せて能力開発を実践指導する。
- 【授業計画】1. 職業指導の課題と方法 (1) 職業指導発展の略史 2. 職業指導の課題と方法 (2) 職業指導の課題 3. 職業指導の課題と方法 (3) 個性と職業:個人理解の方法・性格, 興味など 4. 職業指導の課題と方法 (4) 個性と職業:適応と適性 5. 職業指導の課題と方法 (5) 個性と職業:Career Planning としてのライフワーク 6. 職業指導の課題と方法 (6) 個性と職業:マネジメントスキル:リーダーシップ論など 7. 職業指導の課題と方法 (7) 職業相談 (キャリア・カウンセリング):職業相談の意義 8. 職業指導の課題と方法 (8) 職業相談 (キャリア・カウンセリング):カウンセリング理論と技術 9. 職業指導の課題と方法 (9) 職業指導の評価 10. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (1) 人生 60 年計画表の作成 11. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (2)IC 法, NM 法を活用してソフト作成能力を育成 12. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (3)KJ 法を活用しての課題解決とプレゼンテーション 13. 職業指導に役立つ能力開発:理論と実践 (4) シュルツの自律神経訓練法の理解
- 【成績評価】論文, 能力開発のプレゼンテーション (100%) で成績評価する。60%以上で合格とする。
- 【JABEE 合格】単位合格と同一
- 【学習教育目標との関連】C
- 【教科書】講師よりプリント資料配布。
- 【参考書】参考書, 必読書については, 講義中紹介。
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【備考】「面白くてためになり, そして思い出に残る」講義が目標。

信号処理

Signal Processing 教授・仁木 登 2 単位

- 【授業目的】デジタル信号処理の基礎知識を習得する。
- 【授業概要】情報化社会に伴って音声, 画像のデジタル処理技術は求められている。これらは計算機やネットワークの著しい技術進歩とともに利用分野が飛躍的に拡大している。ここでは, 高精度, 高信頼性, 処理の柔軟さの利点を有するデジタル信号処理システムの実現法について述べる。
- 【到達目標】
- デジタル信号処理の基礎技術を理解する。
 - デジタル信号処理システムの実現法を理解する。
- 【授業計画】1. 離散時間信号, 離散時間システム 2. 線形時不変システム 3. フーリエ変換 4. 連続時間信号のサンプリング, 標準化定理 5. z 変換 6. 逆 z 変換 7. 線形時不変システムの変換・解析 8. 離散時間システムの構造 9. フィルタ設計技術, IIR 10. フィルタ設計技術, FIR 11. 離散フーリエ変換, 離散フーリエ変換の計算 12. 離散ヒルベルト変換 13. 離散信号解析 14. フーリエ解析, ケプストラム分析 15. 定期試験 16. 予備日

【成績評価】定期試験 (80%), レポート及び講義への取り組み状況 (20%) として評価し, 全体で 60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一

【学習教育目標との関連】B

【教科書】デジタル信号処理の基礎, 樋口龍雄著, 昭晃堂

【参考書】Discrete-Time Signal Processing, A.V.Oppenheim and R.W. Schaffer, Prentice-Hall, Inc., Fundamentals of Digital Signal Processing, L.C.Ludeman, John Wiley & Sons, Inc., デジタル信号処理, 辻井重男・鎌田一雄共著, 昭晃堂

【備考】試験の採点は厳密に行うために単位を落とすことが十分にある。特に, レポートを提出してしっかり勉学する必要がある。また, システム解析を履修しておく必要がある。

数値解析

Numerical Analysis 非常勤講師・山本 由和 2 単位

【授業目的】様々な数値計算手法を身につけるとともに, 数値解析の基本的な考え方を習得することを目的とする。

【授業概要】丸め誤差などの数値計算における基礎的知識, 補間・非線形方程式などの基本的数値計算法について述べる。

【受講要件】「線形代数学」「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには各自が普段から自主的な演習を行ない復習を重ねることが必要である。

【到達目標】

- 数値誤差が理解できる。
- 非線形方程式の数値解法が理解できる。

【授業計画】1. 丸め誤差, 桁落ち 2. 浮動小数の四則演算 3. 多項式の計算 4. 多項式補間 5. チェビシェフ補間 6. ニュートン補間 7. 数値積分の考え方 8. 補間型積分 9. 高精度近似積分 10. 非線形方程式の解法:2 分法 11. 非線形方程式の解法:ニュートン法 12. 連立非線形方程式に対するニュートン法 13. 微分方程式の解法:オイラー法 14. 微分方程式の解法:ルンゲ・クッタ法 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】期末試験を 70%, 講義への取り組み状況を 30%として評価し, 全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】A

【教科書】杉浦洋『数値計算の基礎と応用』サイエンス社

【参考書】篠原能材『数値解析の基礎』日新出版, 森正武『数値解析』共立出版, 名取亮『数値解析とその応用』コロナ社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】山本()

【備考】授業で電卓を使用する場合があるので用意しておくこと。

生産管理

Production Control 非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為に生産現場で何をしているかを理解する。

【授業概要】企業経営は経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく, かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で生産技術のキーとなる事項について講義する。講義計画に従い生産管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 生産管理 2. 生産計画 3. 原価管理 4. 経営システム (ISO) 5. IE(Industrial Engineering) 6. 品質管理と TQC 7. トヨタ生産方式 8. 中間及び最終レポート (生産管理のまとめ)

【成績評価】講義への取り組み状況 (80%), レポートの内容 (20%) で評価し, 全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一

【学習教育目標との関連】C

【教科書】その都度提供する。

【参考書】市販の生産管理に関する書籍, 「生産管理便覧」丸善

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

設計製図製作実習

Design, Drawing and Machining Exercise 教授・西田 信夫 1 単位

【授業目的】光応用装置やその機構部品を設計するために必要な設計製図の基本事項を修得する。

【授業概要】設計製図の基礎知識および旋盤、ボール盤などの工作機械の概要を学び、機構部品を設計し、製図して、自分で製作することにより、設計製図能力の向上を図る。

【到達目標】

1. 旋盤、ボール盤などの工作機械の機能・能力を理解できる。
2. 工作担当者が製作しやすい設計製図とはどのようなものであるかをある程度理解できる。

【授業計画】1. 設計製図の概要 2. 工作機械の概要 3. 工作機械の概要 4. 図面の書き方 5. 図面の書き方 6. 工作機械による加工実習 7. 工作機械による加工実習 8. 設計製図実習 9. 設計製図実習 10. 製作実習 11. 製作実習 12. 機構部品の設計製図実習 13. 機構部品の設計製図実習 14. 機構部品の製作実習 15. 機構部品の製作実習 16. 予備日

【成績評価】講義への取り組み状況 (50%)、製図と実習作品の提出 (50%) で評価し、全体で 60 点以上を合格とする。

【JABEE 合格】単位合格をもって JABEE 合格とする。

【学習教育目標との関連】B

【教科書】未定

【参考書】未定

【連絡先】西田(光棟409, 656-9425, nishida@opt.tokushima-u.ac.jp)、桑原(光棟301-1, 656-9793, kuwahara@opt.tokushima-u.ac.jp)

【備考】少なくとも実習は全時間出席すること。

専門外国語 1

Foreign Language for Optical Science and Technology 1

助教 原口 雅宣, 助手 岡本 敏弘 1 単位

【授業目的】光応用工学に関する英語の専門書や論文を読むための基礎的な能力と英会話コミュニケーションの基礎能力を習得する。

【授業概要】簡単な科学・技術英語文情報を演習形式で読解する。また、英語によるコミュニケーション能力を高めるためのヒアリングのトレーニング。

【到達目標】

1. 英語で書かれた科学・技術情報の概要を理解することができる。
2. TOEIC 400 点相当の英語コミュニケーション能力を身につける。

【授業計画】1. ガイダンスとヒアリングテスト 2. プレゼンテーショントレーニング 3. 科学単語・用語 I 4. LED や LD の科学雑誌記事 5. プレゼンテーションとヒアリングテスト 6. 科学単語・用語 II 7. 光に関する WEB 上の情報 8. プレゼンテーションとヒアリングテスト 9. 科学単語・用語 III 10. 光に関する教科書 11. プレゼンテーションとヒアリングテスト 12. 科学単語・用語 IV 13. 光に関する学術論文 14. プレゼンテーションとヒアリングテスト 15. 期末テスト, ヒアリングテスト

【成績評価】プレゼンテーション (20%)、レポート (20%)、第 1 回目を除くヒアリングテスト (20%)、小テスト (20%)、期末テスト (20%) により評価する。単位取得は総合評価の 60%以上とする。

【JABEE 合格】単位合格をもって JABEE 合格とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の学習目標 F に該当する。

【教科書】プリントを配布する。

【参考書】Peter Donovan, "Basics English for Science," Oxford University Press., 初心者向け TOEIC テキスト (400 点程度の得点を目的としたもの)

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】原口雅宣, 光棟2F, TEL:088-656-9411, e-mail:haraguti@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】特別な場合を除き、欠席は認めない。履修期間中に公開 TOEIC またはカレッジ TOEIC にて 400 点以上を得点した場合、ヒアリングテストを免除する。

専門外国語 2

Technical English 2

非常勤講師 1 単位

【授業目的】基礎的な科学技術関連用語の正確な発音、内容の正確な表現などを学ぶとともに、日常的な事項も含めて英語を聞き取る能力を高める、英語によるコミュニケーションの能力を育成することを目的とする。目標は、(1) 一般向け科学雑誌に現れるレベルの技術英語の正確な理解が行える、(2) 技術的及び日常的な問題について簡単なコミュニケーションができる、(3) 技術英語は文法的には難しくないと理解し、技術英語から逃げる意識をなくすことを目標とする。

【授業概要】ネイティブスピーカー (英語を母国語とする人) の非常勤講師のもとで、英会話を中心として、一般向け科学雑誌に現れるレベルの技術用語の正確な発音、内容の正確な表現法などを学ぶ。受講者のより速い英語修得を助けるために、レポートを始めとするホームワーク課題を出す。期末試験も行う。

【到達目標】一般向け科学雑誌に現れるレベルの技術英語から、必要な情報を拾い上げることができる。テクニカルな表現を含む簡単な英会話、日常的な簡単な英会話の受け答えができる。

【授業計画】1. ガイダンス 2. 英会話を中心とした科学記事など 3. 中間試験 4. 期末試験

【成績評価】中間試験 (50%)、期末試験 (50%) により評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単位合格をもって JABEE 合格とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の教育目標 F に該当する。

【教科書】Longman Preparation Series for TOEIC Test: Introductory Course, Third Edition With CD, Lin Lougheed, Longman, 別途、講義資料を配付する。

【連絡先】学科事務 TEL:088-656-9436E-mail:tamura@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】本科目は、参加する姿勢と前向きな努力が大切です。

専門外国語 3

Technical English 3

非常勤講師 1 単位

【授業目的】基礎的な科学技術関連用語の正確な発音、内容の正確な表現法などを学ぶとともに、日常的な事項も含めて英語を聞き取る能力を高める、英語によるコミュニケーションの能力を育成することを目的とする。目標は、(1) 一般向け科学雑誌に現れるレベルの技術英語の正確な理解が行える、(2) 技術的及び日常的な問題について簡単なコミュニケーションができる、(3) 技術英語は文法的には難しくないと理解し、技術英語から逃げる意識をなくすことを目標とする。

【授業概要】ネイティブスピーカー (英語を母国語とする人) の非常勤講師のもとで、ディスカッションを含め英会話を中心として、一般向け科学雑誌に現れるレベルの技術用語の正確な発音、内容の正確な表現法などを学ぶ。受講者のより速い英語修得を助けるために、レポートを始めとするホームワーク課題を出す。期末試験も行う。

【到達目標】一般向け科学雑誌に現れるレベルの技術英語から、必要な情報を拾い上げることができる。テクニカルな表現を含む簡単な英会話、日常的な簡単な英会話の受け答えができる。

【授業計画】1. ガイダンス 2. 英会話を中心とした科学記事など 3. 中間試験 4. 期末試験

【成績評価】中間試験 (50%)、期末試験 (50%) により評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単位合格をもって JABEE 合格とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の教育目標 F に該当する。

【教科書】Longman Preparation Series for TOEIC Test: Introductory Course, Third Edition With CD, Lin Lougheed, Longman, 別途、講義資料を配付する。

【連絡先】学科事務 TEL:088-656-9436E-mail:tamura@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】本科目は、参加する姿勢と前向きな努力が大切です。

創造教育特別講義

Special Lectures on Creativity in Technology and Science

非常勤講師・松枝 秀明、服部 正平 1 単位

【授業目的】現在、社会的に求められている創造力がある人材とは、飛び抜けて大きなブレイクスルーや、数多くのブレイクスルーを行える人材にほかならない。ブレイクスルーを行うのに求められる、能力、発想、環境などの様々な条件を学ぶことを目的とする。最終的な目標は、受講者が将来ブレイクスルーを行える人材となることである。

【授業概要】科学技術が発展する上で、非常に困難な局面の打開 (ブレイクスルー) が過去何度となく行われてきた。また、新しい製品の開発や研究の継続には、小さなブレイクスルーの積み重ねも必要である。この講義では、学内外より 2~3 名の講師を招き、実際に講師の方々がかかわった事例のブレイクスルーについて失敗例を含め集中講義形式にて講義する。

【到達目標】ブレイクスルーを行う人に必要な条件を複数上げ、その理由を説明できる。ブレイクスルーを行うために自分に欠けている点とその改善方法を説明できる。

【授業計画】1. 量子演算と量子計算機 (担当:松枝秀明先生) 2. 量子演算と量子計算機 (担当:松枝秀明先生) 3. 量子演算と量子計算機 (担当:松枝秀明先生) 4. 量子演算と量子計算機 (担当:松枝秀明先生) 5. 量子演算と量子計算機 (担当:松枝秀明先生) 6. 光と生命 (担当:服部正平先生) 7. 光と生命 (担当:服部正平先生) 8. 光と生命 (担当:服部正平先生) 9. 情報生物学 (担当:服部正平先生) 10. 情報生物学 (担当:服部正平先生) 11. 情報生物学 (担当:服部正平先生) 12. 情報生物学 (担当:服部正平先生) 13. 情報生物学 (担当:服部正平先生) 14. 情報生物学 (担当:服部正平先生) 15. 情報生物学 (担当:服部正平先生) 16. 予備日

【成績評価】講義への取り組み状況, レポートにより評価を行う。複数の非常勤講師が担当する場合は, 各々の講師について, 6割以上の出席かつレポート提出が必要である。評価のウエイトの目安は, 出席および授業への参加状況 30%, レポート 70%である。

【JABEE 合格】単位合格をもって JABEE 合格とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の教育目標 E に該当する。

【教科書】配付プリント等の資料による。配付物がない場合もありうる。

【連絡先】学科事務 TEL:088-656-9436 E-mail:tamura@opt.tokushima-u.ac.jp

卒業研究

Graduation Study 光応用工学科全教官 10 単位

【授業目的】

【授業概要】光応用工学科各教官の指導の下, 具体的なテーマで卒業研究を行う。但し, 光応用工学科卒業研究着手資格規定で指定された科目の単位をすべて修得していないと, 卒業研究に着手できない。

【到達目標】

1. これまでに履修した科目の内容を課題に取り組み中で総合的に生かすことができるか
2. 解決の方針をたてることができるか
3. 必要な情報を集め, その内容を課題に取り組み中で生かすことができているか
4. 課題の内容・結果について, 社会的な位置づけや重要性等が理解できているか
5. 課題の内容・結果について, 科学的・技術的位置づけや重要性が理解できているか
6. 自分のテーマに積極的にとりくんでいるか
7. 工学倫理への配慮があるか
8. 研究を遂行する上で教員等とコミュニケーションをとることができているか
9. 課題の内容を相手に理解させるプレゼンテーションができているか

【成績評価】(あ) 研究グループ内で行われる輪講・セミナー等への参加状況, (い) 卒業研究に関する教員との打ち合わせ等の内容と状況, (う) 提出された卒業研究論文要旨と卒業研究論文, (え) 卒業研究発表会におけるプレゼンテーションにより評価を行う。

【JABEE 合格】評価のウエイトの目安は, (あ)25%(い)25%(う)25%(え)25%である。

【学習教育目標との関連】B,C,F

知的所有権概論

Intellectual Property 非常勤講師・酒井 徹 1 単位

【授業目的】知的所有権制度を理解し, 知的所有権の保護と制度の活用の重要性を各種の事例を基に修得する。

【授業概要】科学技術創造立国を目指す我が国において, 知的所有権の保護と制度の活用が, 行政・産業界・大学・研究所にとって不可欠であるとの共通認識を持つ必要性を説くとともに, 知的所有権制度の概要と, その活用法を, 企業の特許戦略, 特許侵害事件などの事例を紹介しつつ講義し, 学生が将来, 企業・大学・研究所などへ進んだ場合に知っておくべき知的所有権に関する基礎知識の修得をはかる。

【受講要件】特になし。

【履修上の注意】2 日間の集中講義であるために全時間の出席を要する。

【到達目標】

1. 知的所有権の概念についての理解を深める。
2. 特許法, 商標法, 意匠法, 著作権法について理解する。

【授業計画】1. 知的所有権とは 2. 知的所有権制度の概要 (特許・商標等) 3. 知的所有権制度の概要 (意匠・著作権制度等) 4. 特許発明と特許権侵害 (含む事例研究) 5. 知的所有権の管理とその活用 (企業・大学・研究所) 6. 今後の研究開発と知的所有権のあり方 7. 試験 (到達目標 1 および 2 の評価)

【成績評価】到達目標が各々達成されているかを試験 70%, 講義への取り組み状況 30%で評価し, 平均で 60%あれば合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】C

【教科書】特製テキストを用いる。

【参考書】中山信弘著「知的所有権」日刊工業新聞社, 通産省特許庁編「これからは日本も知的創造時代」通商産業調査会

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】酒井(Tel:03-5600-2631, Fax:03-5600-2649)

通信基礎論

Fundamentals of Communication 非常勤講師 2 単位

【授業目的】通信技術は情報通信システムの基本的である。本講義では, 有線・無線伝送路, 変復調理論, アナログ・デジタル変換などの通信システムの理解に最低限必要な基礎知識を得ることを目的とする。

【授業概要】本講義では, 通信の基本として, まず有線通信伝送系や無線通信伝送系の基本的な構成とその差異を述べる。次に通信や放送において, 信号を電波に乗せる技術として重要な振幅変調 (AM), 周波数変調 (FM), パルス変調方式などについて述べる。また音声, 画像などのアナログ信号のデジタル化 (A/D 変換) とその利点を述べる。また, 通信システムの具体例として, 移動通信, 衛星通信, 衛星放送などについて学習する。

【到達目標】

1. (1) 有線伝送路と無線伝送路の基本的性質を理解している。
2. (2) アナログ変調方式の基本原則を理解し, それらを比較することができる。
3. (3) アナログ・デジタル変調の基本原則を理解し, パラメータの選択ができる。
4. (4) 情報量の表現と符号化の基本原則を理解している。
5. (5) 通信システムの構成について理解している。

【授業計画】1. 1. 通信の歴史 2. 2. ~ 4. 有線伝送媒体ならびに無線伝送媒体の性質と特徴 3. 5. ~ 7. 変復調方式の原理と比較 (振幅変調, 周波数変調, 位相変調), S/N 4. 8. 中間試験:到達目標 (1~2) の試験 5. 9. ~ 10. アナログ・デジタル変換 (標本化, 量子化, 符号化) 6. 11. ~ 13. デジタル変復調方式 (ASK, FSK, PSK), 多重化と誤り訂正 7. 14. ~ 15. 通信システムの具体例 8. 16. 期末試験:到達目標 (3~5) の試験

【成績評価】試験 (中間試験 40%, 期末試験 60%) により評価し, 到達目標の 60%以上が達成されている場合に合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一

【学習教育目標との関連】B

【教科書】木村磐根編著:通信工学概論, オーム社

【参考書】寺田浩詔, 木村磐根, 吉田進, 岡田博美, 佐藤亨:情報通信工学, オーム社, 宮内一洋:通信方式入門, コロナ社

電気回路

Electrical Circuit Theory 教授・福井 萬壽夫 3 単位

【授業目的】直流と正弦波交流の違い, 正弦波交流と過渡現象の違い, 高周波独特の現象の理解が明確にできることを目的・目標とする。

【授業概要】電気回路は, 抵抗, キャパシタ, インダクタ, トランス, 電源の種々の組み合わせから成り, 驚くほど多彩な性質を示す回路である。本講義では, このような電気回路の基本的な性質を直流, 正弦波交流, 過渡現象, 高周波回路に対して詳しく述べる。

【到達目標】

1. 直流においては, 抵抗, 電源の役割が理解でき, 電圧・電流の求め方がわかる。
2. 正弦波交流においては, 周波数, 位相, 周期, 振幅, インピーダンス, 共振, 複素電力の概念が理解できる。多相交流の取り扱いが理解でき, ひずみ波交流と正弦波交流の関係がわかる。
3. 過渡現象の取り扱い方法がわかる。
4. 高周波回路である分布定数回路の取り扱い方法が理解でき, 集中定数回路との区別ができる。

【授業計画】1. 電源とオーム則 2. キルヒホッフ則と回路のグラフ 3. 節点解析法と網目解析法 4. 重ね合わせの理, 鳳一テブナン定理, ノートン定理と補償定理 5. 相反定理, デルター-Y変換と正弦波交流の重要パラメータ 6. インダクタンス, キャパシタンス, 相互インダクタンス, インピーダンスとアドミタンス 7. 共振, 変圧器, 力率と実効値 8. 有効電力, 無効電力, 複素電力と対称三相回路 9. 非対称多相交流回路, ひずみ波交流 10. 中間試験 11. 直流回路の過渡現象解析 (RC 回

路, RL 回路, RLC 回路) 12. 交流回路の過渡現象解析 (RC 回路, RL 回路, RLC 回路) とラプラス変換 13. ラプラス変換による過渡現象解析と 4 端子網 14. 4 端子網の応用と分布定数回路の基本式 15. 分布定数回路に特有な現象 16. 期末試験

【成績評価】講義毎に毎回実施するミニテスト, 講義への取り組み状況, 中間試験, 期末試験によって評価する。ミニテスト:36%, 講義への取り組み状況:14%, 中間試験:25%, 期末試験:25%とする。全体で 60%以上を合格とする。なお, ミニテストは, 講義の始めに前回の講義内容の重要ポイントを 5 分-10 分で実施する。さらに, 講義終了時に, 講義で重要と思われた点, わかりにくかった点を提出させ, 次回の講義にフィードバックさせる。

【JABEE 合格】単位合格と同一。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の学習目標 B

【教科書】教科書:電気回路の基礎(曾根悟, 檀良 共著, 昭晃堂)

【参考書】参考書:電気回路を理解する(小澤孝夫 単著, 昭晃堂), 電気回路 I および II(2 冊, 小澤孝夫 単著, 昭晃堂)

【連絡先】TEL:088-656-9410, E-mail:fukui@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】電気回路を理解するには, 日々の努力が必要で, それを疎かにすると「回路嫌い」になってしまう。そこで, 講義の内容を理解しては演習に取り組み, 電気回路を解析する力, 応用する力を確実に自分のものになるよう努力してほしい。

電気回路演習

Exercise in Electrical Circuit Theory

助教授・原口 雅宣

助手・岡本 敏弘 1 単位

【授業目的】単純な電気回路の各部の電圧や電流をどのように求めるかという視点から, 電気回路を理解することを目的とする。将来の専門分野の諸問題を電気回路の概念を利用して取り扱うことができるように, 電気回路の基本的事項の理解や, 諸問題・解法の概念的な理解を目標とする。

【授業概要】小グループにわけ, 講義の「電気回路」の理解を補うものとして, 電気回路に関する様々な問題について演習を行う。演習の時間では, 電気回路の様々な問題を学生諸君自身に解き方を解説してもらった事が主となる。もちろん, 必要があれば教官も解説を行う。十分な予習だけで演習の内容を理解することは, まず不可能なので, 十分な予習や復習を行うこと。レポートは演習の各回ごとに提出を求める。

【受講要件】原則として電気回路を履修したか, 履修中であること。

【履修上の注意】受講者は, 全ての演習に出席し, かつ全てのレポートを提出していることが評価の前提条件である。欠席および遅刻は認めない。

【到達目標】1) キーワードの説明ができる。2) 電源, キャパシタ, インダクタ, 抵抗およびスイッチをそれぞれ 1 個まで含む簡単な回路について, 各部の電圧または電流に関する方程式を立て, その解を求める事ができる。3) 回路網の任意の電圧または電流を求める方法の概要を説明できる。4) 2 端子対回路や分布定数回路の考え方を説明できる。

【授業計画】1. 電気回路演習のガイダンス 2. 直流回路(キルヒホッフの法則) 3. 直流回路(鳳テブナンの法則とノートンの定理) 4. 交流回路(コンデンサとコイル) 5. 交流回路(共振現象) 6. 交流回路(変圧器, 電力) 7. 交流回路(三相回路, フェーズ, 歪み波) 8. スイッチを含む回路(微分方程式とその解法) 9. スイッチを含む回路(直流電源) 10. スイッチを含む回路(交流電源) 11. スイッチを含む回路(交流電源) 12. スイッチを含む回路(ラプラス変換とその利用) 13. フーリエ級数展開 14. 2 端子対回路 15. 分布定数回路 16. 予備日

【成績評価】レポート 50%, 口頭発表および口頭試験 40%, 授業に対する積極性 10%により評価を行う。総合点の 60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一である。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の学習・教育目標 (B),(F) と関連する。

【教科書】電気回路の講義の教科書と同一

【参考書】電気回路には数多く演習書があるので, これらを各人の好みに合わせ選び, 参考書として用いるとよい。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】原口雅宣TEL:088-656-9411, E-mail:haraguti@opt.tokushima-u.ac.jpまたは, 岡本敏弘TEL:088-656-9412, E-mail:okamoto@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】電気回路では, 行列を用いた線形連立方程式や微分方程式を解くことが要求されるので, それらについての学習が不十分と感じられる場合は自分で勉強しておくこと。ただ, 座っているだけでは演習の単位は取得できない。

電気磁気学 1

Electricity and Magnetism 1

教授・大野 隆 2 単位

【授業目的】力学とならば古典物理学の柱である電磁気学を平易に講義し, 身のまわりの電氣的・磁氣的現象や材料物性を理解する上での基礎を解説する

【授業概要】下記講義計画に従い, 電気磁気学で必須のベクトル解析の基礎を解説し, クーロンの法則, ガウスの法則, 静電誘導, 微分形による法則の表示, 静電エネルギー, オームの法則を講義する。

【到達目標】

1. ベクトル解析を理解する
2. 電界の概念とクーロンの法則を理解する
3. ガウスの法則を理解する
4. 電場とエネルギーの概念を理解する

【授業計画】1. ベクトル解析 2. 電荷と電界 3. クーロンの法則 4. ガウスの法則 5. 導体と電位 6. 誘電体 7. コンデンサー 8. コンデンサー 9. 電界の発散 10. ラプラスの方程式 11. 電界のエネルギー 12. オームの法則 13. 電気回路 1 14. 電気回路 2 15. ジュール熱 16. 定期テスト

【成績評価】試験の成績が 70 点以上を合格とする。試験の成績に, 講義への取り組み(具体的には講義中の質問に積極的に正解した場合)に与える点数を加えて評点とする。「講義への取り組み状況」と「期末試験の成績」の割合は 3:7 とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】A

【教科書】基礎電磁気学(培風館, 近角聡信著)

【参考書】適時紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大野(A棟201, 656-7549, ohno@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】意欲的に勉強すること。

電気磁気学 2

Electricity and Magnetism 2

教授・大野 隆 2 単位

【授業目的】力学とならば古典物理学の柱である電磁気学を平易に講義し, 身のまわりの電氣的・磁氣的現象や材料物性を理解する上での基礎を解説する

【授業概要】下記講義計画に従い, 磁気モーメントと磁位, ビオ・サバールの法則, アンペールの定理, 電磁誘導の法則, インダクタンスと磁気エネルギー, ローレンツカ, マクスウエルの方程式, 電磁波を講義する。

【到達目標】

1. 磁界と磁気モーメントの理解
2. ビオ・サバールの法則とアンペールの定理の理解
3. 電磁誘導の法則の理解
4. マクスウエルの方程式と電磁波の理解

【授業計画】1. 磁界と磁位 2. 磁気モーメント 3. 静磁エネルギー 4. ビオ・サバールの法則 5. アンペールの定理 6. 磁界の回転 7. 電磁誘導の法則 8. インダクタンス 9. 磁気エネルギー 10. 磁界による力 11. マクスウエルの方程式 12. 電磁波 (1) 13. 電磁波 (2) 14. ボインティング・ベクトル 15. 予備日 16. 定期テスト

【成績評価】試験の成績が 70 点以上を合格とする。試験の成績に, 講義への取り組み(具体的には講義中の質問に積極的に正解した場合)に与える点数を加えて評点とする。「講義への取り組み状況」と「期末試験の成績」の割合は 3:7 とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】A

【教科書】近角 聡信書, 基礎電磁気学, 培風館

【参考書】適時紹介する。

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】大野(A棟201, 656-7549, ohno@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】意欲的に勉強すること。

電子回路

Electronic Circuits

助教授・早崎 芳夫 2 単位

【授業目的】増幅回路をはじめ, いくつかの基礎的な電子回路について講義を行うが, それらを覚えることが目的ではない。本講義を通じて, 電子回路の計算法・設計法の「つぼ」が理解できれば良い。

【授業概要】ダイオードやトランジスタ、オペアンプなどの半導体素子により構成されるアナログ電子回路を中心に講義を行う。アナログ回路は、信号の増幅回路や電源回路など、各種電子装置において不可欠な要素である。また、現在のコンピュータの動作を理解する上で重要なロジック回路についても講義する。

【到達目標】

1. ダイオードやトランジスタ、オペアンプなどの半導体素子の動作原理を理解すること
2. 増幅回路におけるバイアスの設計、小信号等価回路の記述と各諸量の計算をできること
3. TTL や CMOS をはじめとするロジック回路の構成、動作、特徴を理解すること

【授業計画】1. 電子回路の講義で何を学ぶか 2. 電子回路の部品 1(ダイオード) 3. 電子回路の部品 2(バイポーラトランジスタ) 4. 電子回路の部品 3(電界効果トランジスタ) 5. トランジスタの小信号等価回路 6. トランジスタ増幅回路 1 7. トランジスタ増幅回路 2 8. 演算増幅回路 1 9. 演算増幅回路 2 10. アナログ集積回路 1(電源回路) 11. アナログ集積回路 2(差動増幅器) 12. デジタル集積回路 1(DTL と TTL) 13. デジタル集積回路 2(MOS 論理回路) 14. 集積回路その他(メモリー回路等) 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】レポートやノートの講義への取り組み状況と、最終試験の成績とを 2:8 の比率で評価する。全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単位認定と同一とする。

【学習教育目標との関連】B

【教科書】アナログ電子回路-集積回路化時代の-藤井信生 昭晃堂

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】早崎(光棟412, 656-9426, hayasaki@opt.tokushima-u.ac.jp)

ニュービジネス概論

Introduction to New Business

非常勤講師・出口 竜也
第一線の実務経験者 2 単位

【授業目的】ベンチャー企業は、新しいアイデアや専門的な知識、技術を事業化し、新しい創造的な事業を展開するバイオニア的企業である。この授業の目的は、アイデアや専門的知識・技術を事業化する、つまりベンチャー企業を起業するためのスピリットとノウハウを提供することにある。

【授業概要】政府は活力ある日本社会を創るために、大学発ベンチャー企業の育成や人材の育成を目指している。政府目標は、3 年間で 1,000 社の大学発ベンチャー企業の創出である。本講義は、それを実現できるように徳島県が支援して開設された「学生起業家創業支援講座」である。学生諸君がベンチャー企業の設立に挑戦し、事業を展開していく手助けとなるような授業内容となっている。第一線で活躍されている実務家やアドバイザーを講師として招き、実際に役立つ知識を講義していただく。授業は、大きく分けて 4 つの部分から構成されている。第一は、導入としてのベンチャーとは何かの説明である。第二は、設立の方法と資金の手当てについてである。第三は、経営のノウハウである。最後に、ベンチャーを起業するにあたって不可欠のビジネスプラン(事業計画)の作成実習を行う。

【受講要件】工学部以外の受講希望者も教室収容能力の許すかぎり受講可能である。単位修得については所属部局の規則に従うこと。

【履修上の注意】遅刻や授業中の私語は厳禁である。

【到達目標】

1. ベンチャービジネスを起業するために必要な知識を修得すること
2. ビジネスプランが作成できるようになること

【授業計画】1. ガイダンス 2. 基調講演「ゼロからのスタート」 3. 独立型ベンチャー成功のための理論 4. 会社設立の方法(法律や会社設立手続き) 5. 資金調達と資本政策 6. 銀行の役割と利用方法(間接金融) 7. 株式発行による資金調達(直接金融) 8. 会社経営の基礎(計画・資金繰り・組織) 9. 企業会計の基礎知識 10. 経営戦略とマーケティング 11. 製品開発と知的所有権 12. ビジネスプラン作成のポイント 13. ビジネスプラン作成実習 14. 筆記試験(4~ 11 の内容に関する試験) 15. ビジネスプランの発表会 16. 予備日

【成績評価】到達目標の達成度で評価し、到達目標を達成しているものを合格とする。授業計画 4~ 11 は筆記試験(60%)で、12,13,15 はビジネスプランの提出分(40%)で評価する。

【JABEE 合格】。【成績評価】に同じである。

【学習教育目標との関連】C

【教科書】各授業でレジュメを配布する。

【参考書】各授業で紹介する。

【対象学生】他学科、他学部学生も履修可能

【連絡先】出口(2216, 656-7183, deguchi@ias.tokushima-u.ac.jp)

【備考】ビジネスプランはグループで作成する。

熱・統計物理学

Thermal Physics

助教授・道廣 嘉隆, 助手・川崎 祐 2 単位

【授業目的】巨視的物理量についてエネルギーの観点から考察を行なう熱力学の初歩と、原子・分子等の微視的性質から物質の巨視的性質を説明する統計力学の初歩を講義し、両者の関係を解説する

【授業概要】まず、熱力学で用いられる基礎概念を解説する。その後、統計力学で用いられる基本的な集団の概念を用いて、熱平衡状態について講義し、巨視的物理量の性質が原子・分子の性質から導かれることについて解説する。また古典統計と量子統計の相違点についても講義する。

【受講要件】量子力学の基礎、基本関数の微分及び積分は修得していることが望ましい。

【到達目標】

1. 熱力学の基礎概念を理解する。
2. 統計力学の基礎概念を理解する。
3. 量子統計の特徴を理解する。
4. 簡単な系への応用を行なう。

【授業計画】1. はじめに熱力学と統計力学 2. 熱力学の法則 3. エントロピー 4. 熱力学特性関数と熱力学関係式 5. 統計力学の考え方と小正準集団 6. ボルツマンの原理 7. 最大確率の分布とボルツマンの方法 8. 正準集団(1) 9. 正準集団(2) 10. 大正準集団(1) 11. 大正準集団(2) 12. 量子統計(1) フェルミ統計 13. 量子統計(2) ボーズ統計 14. 統計力学の応用(1) 15. 統計力学の応用(2) 16. 期末試験

【成績評価】定期試験 60%, 講義への取り組み状況(出席状況, レポート等)40%として評価し、総合で 60%以上を合格とする

【JABEE 合格】定期試験 60%, 講義への取り組み状況(出席状況, レポート等)40%として評価し、総合で 60%以上を合格とする

【学習教育目標との関連】A

【教科書】阿部龍蔵著「熱統計力学」裳華房

【参考書】久保亮五著「統計力学(改訂版)」共立出版、久保亮五著「大学演習 熱学・統計力学」裳華房

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】川崎(A棟217, 656-9878, yu@pm.tokushima-u.ac.jp)

【備考】到達目標 4 は発展的内容である。

パターン認識

Pattern Recognition

教授・仁木 登 2 単位

【授業目的】パターン認識の手法および実用例を示しながらシステム設計を習得する。

【授業概要】マシンに認識機構を付けてインテリジェント化することが求められている。このためにパターンを処理・認識する基本的な処理技術を対象としている。また、インテリジェントなマシンの設計にはセンサ系も大きく依存する。そこで、システム全体を見渡してシステム設計をする必要がある。本講義では、計測技術、特徴抽出、分類などに関する基礎的な理論、学問的にまた実用的に評価の高い画像認識システムを紹介しながら体系的な考え方についてのべる。

【到達目標】

1. パターン認識の手法を理解する。
2. 画像認識システム設計法を理解する。

【授業計画】1. 画像認識の概要 2. 画像の変換, フィルタリング 3. 2 値画像の技法 4. 濃淡画像解析の技法 5. 特徴抽出 6. 特徴量の正規化・選択, KL 展開 7. 最小距離分類 8. ベイズの識別規則 9. クラスタリング 10. DP マッチング 11. ヒドンマルコフモデル 12. 構文解析的パターン認識 13. パターン記述, 文法生成, 応用例 14. ニュラルネットワーク, バックプロパゲーション 15. 定期試験 16. 予備日

【成績評価】定期試験(80%), レポート及び講義への取り組み状況(20%)として評価し、全体で 60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】B

【教科書】認識工学, 島脇純一郎著, コロナ社

【参考書】パターン認識と学習のアルゴリズム, 上坂吉則・尾関和彦著, 文一総合出版, 画像認識論, 長尾真著, コロナ社, Learning Mchines, N.J.Nilsson, Morgan Kaufmann Publishers Inc., Statistical Pattern Recognition, K.Fukunaga, Academic Press, Inc.

【備考】試験は知識の確認だけでなくパターン認識システムの設計問題を出し、興味ある答案を期待している。また、信号処理, 画像処理, 計算機システム, 計算機の実験・実習を履修しておく必要がある。

波動光学

Wave Optics

講師・森 篤史 2 単位

【授業目的】幾何光学と波動光学は、光学を理解・応用する上で、車の両輪になぞらえることもできる。そのうちの波動光学の基礎的事項を修得させることを目標とする。

【授業概要】まず、波動現象の基礎概念について復習する。その後、マクスウェルの方程式から電磁波の伝搬を記述する波動方程式が導出できることを復習する。更に、それに基づいて反射・屈折の現象と偏光について論ずる。次に、干渉とそれについて回折、つまり、波動光学によらなければ理解できない現象について講義を行う。教科書の章末問題(予定)のレポートを課す。

【受講要件】「光の基礎」「電気磁気学 2」「基礎波動学」を履修していることが望ましい。波動光学は、幾何光学とともに、光学を理解・応用する上で、両輪になぞらえることができるものであるから、「幾何光学」と相補的であることを踏まえ学習することが望ましい。3年生の「光応用光学実験」で“光学”などで学んだ基礎的な現象の実験を行う。「光演算処理」「光情報機器」「光導波工学」などには直接関係する。科目名は列挙しないが、材料に関する計測にも光の波動性が応用されている。

【到達目標】

1. 電磁波光学
2. 偏光
3. 干渉
4. 回折

【授業計画】1. 目と色、光と波 2. 光と波 3. 電磁波動と光 4. 電磁波動と光 5. 電磁波動と光、偏光 6. 偏光 7. 偏光 8. 中間試験 9. 干渉とコヒーレンス 10. 干渉とコヒーレンス 11. 干渉とコヒーレンス 12. 光の回折 13. 光の回折 14. 光の回折 15. 光の回折 16. 期末試験

【成績評価】試験とレポートによる。到達目標 1 についてのレポート(10 点満点)を一回と、到達目標 4 についてのレポート(10 点満点)を課す。試験は、各到達目標について 1 題(各 20 点)づつ出題する。従って、1 と 4 は 30 点満点、2 と 3 は 20 点満点となる。到達目標 1 と 4 が 18 点以上であり、かつ、到達目標 2 と 3 が 12 点以上で合格とする。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】B

【教科書】大坪順次著「光入門」(コロナ社)

【参考書】左貝潤一著「光学の基礎」(コロナ社)、E. Hecht "Optics" (Addison-Wesley)

【備考】試験は、自筆のノートの持込を可として行う。これが平常点に相当する。国語辞典と数学公式集の持込は、許可する。毎週復習の内容を A4 一枚のレポートの形式(重要な点をまとめたもの、質問等)で提出させる。締切は、金曜日の 5 時までとし、質問にはその次の講義の最初に時間を割いて答える。出席は、出席表を回覧するので、それに自筆で署名すること。上の“レポート”は、それと同一の署名がしてあること。“レポート”提出と併せて出席した認定する。欠席者は、代わりに、欠席理由と共に自習の結果をまとめて提出し、それが十分であれば出席したと認定する。規定により、出席率 60%以上が試験の受験資格となる。認定された出席をもって出席率を算定する。

光・電子物性工学 1

Optical and Electronic Properties of Materials 1

教授・福井 萬壽夫 2 単位

【授業目的】電子エネルギー帯の起源、電子エネルギー帯中の電子・正孔の性質、格子振動の性質、格子振動と電子の関わり合いが理解できることを目的・目標とする。

【授業概要】電子のエネルギー帯、電子と格子振動が関与する諸現象について述べる。さらに、光機能材料の諸性質、光デバイスの特性、反射・屈折などの光現象と電子・格子振動の関わり合いについても述べる。

【到達目標】

1. シュレーディンガー方程式の意味と簡単な応用ができ、不確定性原理が理解できる。
2. 電子エネルギー帯の起源が理解できる。
3. 格子振動がどのようなものかを理解できる。
4. 電子エネルギー帯中の電子・正孔の性質を理解でき、電子と格子振動の散乱について理解できる。
5. フェルミ分布関数、ボース分布関数および化学ポテンシャルの意味が理解できる。

【授業計画】1. ボーアの模型 2. シュレーディンガー方程式と不確定性原理 3. シュレーディンガー方程式の適用方法と電子状態密度 4. 結晶表

現とブロッホ定理 5. 逆格子ベクトルと無格子電子エネルギー帯構造 6. クロロニッチ・ペニー模型 7. 中間試験 8. 音響型および光学型格子振動 9. 格子振動の量子化 10. 格子比熱と電子の有効質量 11. ボルツマン方程式と電子移動度 12. 正孔の運動とイオン化不純物散乱 13. 格子振動による電子散乱 14. フェルミ分布、ボース分布とミクロカノニカル集合 15. カノニカル集合、グランドカノニカル集合と統計力学の応用 16. 期末試験

【成績評価】講義毎に毎回実施するミニテスト、講義への取り組み状況、中間試験、期末試験によって評価する。ミニテスト:36%、講義への取り組み状況:14%、中間試験:25%、期末試験:25%とする。全体で 60%以上を合格とする。なお、ミニテストは、講義の始めに前回の講義内容の重要ポイントを 5 分-10 分で実施する。さらに、講義終了時に、講義で重要と思われた点、わかりにくかった点を提出させ、次回の講義にフィードバックさせる。

【JABEE 合格】単位合格と同一。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の学習目標 B

【教科書】教科書:電子物性工学の基礎(西永頌, 単著, 昭晃堂)

【参考書】参考書:固体物理学入門上, 下(2 冊, キッテル著, 宇野良清ら訳, 丸善), 固体物理学上, 下(2 冊, 浜口智尋著, 単著, 丸善), 半導体の物理(御子柴直夫, 単著, 培風館)

【連絡先】TEL:088-656-9410, E-mail:fukui@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】馴染みのない言葉, 概念が数多く出てくるので, 戸惑うことが多いかもしれない。かならず復習をして言葉, 概念に馴染めるよう努力することが必要である。

光・電子物性工学 2

Optical and Electronic Properties of Materials 2

教授・福井 萬壽夫 2 単位

【授業目的】光吸収・光放出の機構, 光共振現象とレーザ作用の関係, 電子デバイス(トランジスタ, ダイオード)特性, 超伝導現象とその応用デバイス, が理解できることを目的・目標とする。

【授業概要】光・電子物性工学 1 の内容に基づき, 光吸収・光放出・光共振現象・レーザ作用について述べる。さらに, 超伝導現象, 半導体工学(少数キャリアの役割, 電子デバイスなど)についても述べる。

【到達目標】

1. 超伝導現象の起源を理解でき, ジョセフソン接合(SQUID を含む)特性が分かる。
2. 各種半導体のフェルミエネルギー, 少数キャリアの役割を理解できる。
3. 各種ダイオード, トランジスタ動作原理を理解できる。
4. 複素誘電率の意味, 光吸収, 光放出の原理について理解できる。
5. 光共振現象, 半導体レーザの動作原理が理解できる。

【授業計画】1. 超伝導の種類とマイスナー効果 2. 超伝導現象の起源とロンドン方程式 3. ジョセフソン接合と高温超伝導体 4. 混晶半導体と真性半導体 5. 不純物半導体 6. 少数キャリア 7. 中間試験 8. キャリアの連続方程式と pn 接合ダイオード 9. pn 接合容量と金属-半導体接触 10. ヘテロ接合とバイポーラトランジスタの直流解析 11. バイポーラトランジスタの接地方式と電界効果トランジスタ 12. 光の媒質中伝搬と複素誘電率 13. クラマース・クロロニッチ関係式と光の共振現象 14. 光吸収と光放出 15. 半導体レーザと発光ダイオード 16. 期末試験

【成績評価】講義毎に毎回実施するミニテスト、講義への取り組み状況、中間試験、期末試験によって評価する。ミニテスト:36%、講義への取り組み状況:14%、中間試験:25%、期末試験:25%とする。全体で 60%以上を合格とする。なお、ミニテストは、講義の始めに前回の講義内容の重要ポイントを 5 分-10 分で実施する。さらに、講義終了時に、講義で重要と思われた点、わかりにくかった点を提出させ、次回の講義にフィードバックさせる。

【JABEE 合格】単位合格と同一。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の学習目標 B

【教科書】教科書:電子物性工学の基礎(西永頌, 単著, 昭晃堂)

【参考書】参考書:固体物理学入門上, 下(2 冊, キッテル著, 宇野良清ら訳, 丸善), 固体物理学上, 下(2 冊, 浜口智尋著, 単著, 丸善), 半導体の物理(御子柴直夫, 単著, 培風館)

【連絡先】TEL:088-656-9410, E-mail:fukui@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】馴染みのない言葉, 概念が数多く出てくるので, 戸惑うことが多いかもしれない。かならず復習をして言葉, 概念に馴染めるよう努力することが必要である。

光演算処理

Analog Optical Computing

教授・西田 信夫 2 単位

【授業目的】光を用いた演算技術である光コンピューティングのうちアナログ型光コンピューティングの基本技術について講義し、演習・レポート、小テストを実施して光コンピューティングについての基礎知識を修得させる。

【授業概要】アナログ型光コンピューティングの基本技術、アナログ型光コンピューティングに関連するデバイスおよびアナログ型光演算装置の例について論述して光情報処理に関する基礎力の養成を図る。

【到達目標】

1. 光学的フーリエ変換技術の基本的な事項を理解できること。
2. 光演算処理用光デバイスについての知識を習得できていること。
3. 基本的なアナログ光演算処理を理解できること。

【授業計画】1. 光の回折とフーリエ光学 2. フーリエ光学 3. フーリエ光学 4. 空間周波数フィルタリング 5. 空間周波数フィルタリング 6. 光学的マッチフィルタリング 7. 光学的マッチフィルタリング 8. 空間光変調素子の基礎 9. 電気アドレス型空間光変調素子 10. 光アドレス型空間光変調素子 11. 光位相共役素子 12. アナログ型光演算装置 13. アナログ型光演算装置 14. アナログ型光演算装置 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、講義への取り組み状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容、小テストおよび最終試験の成績を総合して行う。配点の比率 講義への取り組み状況 10%、演習・レポート評価点・小テスト得点 10%、最終試験得点 80% 合格基準 単位の取得:総合点の 60%以上

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学の教育目標 (B) と関連する。

【教科書】選定中 (適当なものがなければ、教科書を使わずに講義を行う。)

【参考書】D. G. ファイテルソン原著、光演算研究会訳「光コンピューティング」森北出版

【連絡先】西田信夫 TEL:088-656-9425, E-mail:nishida@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】毎回の復習を欠かさずに行うこと。

光応用工学計算機実習

Optical Science and Technology Computation Exercise

助教授・原口 雅宣, 講師・森 篤史, 手塚 美彦, 助教授・早崎 芳夫
助教授・河田 佳樹, 助手・岡本 敏弘, 柳谷 伸一郎, 岡 博之
助手・山本 裕紹, 久保 満 1 単位

【授業目的】計算機はあらゆる分野で不可欠であり、光技術者として計算機を用いた問題解決能力を養うことは重要である。ここでは、光学材料、光デバイスから光情報システムまでの光技術に関する基本的な課題に取り組み、計算機を有効に活用できる能力を高めることを目的とする。

【授業概要】以下の課題 1 及び課題 2 から各 1 題選択して計 2 題行う。各課題は 7 週間で実施し、4 年前期の前半 7 週間に課題 1、後半 7 週間に課題 2 の実習を行う。課題 1 (a) 半導体レーザーの基礎特性と設計光関連の技術に欠くことのできないレーザーの基本特性について、計算機を用いて理解することを目的とする。そのために、適当な半導体レーザー素子を設定し、光出力特性等を計算する。〈関連の深い講義:光デバイス 1, レーザ工学基礎論〉(b) 光導波素子の基礎と薄膜光学素子の設計 光を伝搬させる光ファイバ等の光導波素子も、反射防止膜のような厚さ数ミクロン程度以下の構造をもつ薄膜光学素子も、光の波としての性質を利用することで機能を実現している。素子を設計したり、素子の特性を明らかにすることで、光の波としての性質とその利用方法の基本的概念を理解する。〈関連の深い講義:光デバイス 1, 光導波工学〉(c) 分子シミュレーション入門 材料設計や物性予測に不可欠な手段となっているモンテカルロ (MC) 法と分子動力学 (MD) 法のうち、磁性体や合金、結晶表面のモデルとして知られている二次元イジングモデルの MC シミュレーションの実習を行う。〈関連の深い講義:材料統計熱力学 2〉(d) スペクトルシミュレーション ささまざまな波長の光を用いて分子の電子状態や構造を明らかにする分子分光学において計算機が重要なツールとなることを理解することを目的とする。計算機の発達により、量子化学的計算から分子に特有のスペクトルを理論的に求めることが可能となった。ここでは、スペクトルシミュレーションが実際のスペクトルの解釈に必須である電子スピン共鳴 (ESR) 分光法において、与えられたパラメータからスペクトルを計算により求めるプログラムを作成する。〈関連の深い講義:分光分析学〉課題 2 (a) 光アナログ演算の基礎 光情報機器や光計測の技術に欠くことのできない光で情報を伝えることで実現できる演算について、計算機を用いて理解することを目的とする。レンズを用いた情報処理の基本となるフーリエ変換を計算することで、光アナログ演算により、変換され

る信号の関係を理解する。画像の入力、フーリエ変換、処理結果の表示を行う一連のプログラムの開発、ならびに、プログラムの説明、動作結果、各自の役割を報告する web ページの制作をグループ別に行う。〈関連の深い講義:光演算処理, 信号処理〉(b) コンピュータグラフィックスの基礎 ワークステーションのグラフィックス機能を利用してコンピュータグラフィックスの基本的な技術を習得することを目的とする。特に、現実感のあるグラフィックス表現を可能にするレイトレーシングアルゴリズムを習得する。〈関連の深い講義:画像処理, 幾何光学〉(c) デジタル信号処理の基礎 計算機技術の発展に伴い、デジタル信号処理技術は 音声や映像などのあらゆる分野で必要とされる基礎技術となっている。ここでは、デジタル信号処理の基本となる離散フーリエ変換とその高速演算アルゴリズムである 高速フーリエ変換を習得することを目的とする。〈関連の深い講義:画像処理, 信号処理, パターン認識, 光画像計測〉

【到達目標】光学材料、光デバイスから光情報システムまでの光技術に関する基本的な課題に取り組み、計算機を有効に活用できる能力を高め、光技術者として計算機を用いた問題解決能力を養うことを目標とする。以下に、各課題に対する到達目標を示す。課題 1(a),(b)(担当: 原口 雅宣, 岡本 敏弘) A. 与えられた比較的単純な数式の計算結果を求めるプログラミングを作成し、妥当な計算結果を得られる。B. 物理量を計算する場合「単位」の概念が重要であることを理解する。C. レーザダイオード構造での共振器の特性、導波モードや光閉じ込め係数がレーザダイオードの特性にどのような影響を与えるのかを計算結果を通じて理解する。D. レーザのパルス発振動作 (あるいは変調動作) で、レーザの光出力が時間的にどのように変化するかを計算結果で乱数を発生させ、その性質を把握した上でそれを使用するようにする。イジング模型を例に、次のシミュレーションを実行させる。(1) エネルギーが減少する方向への系の発展。(2) メトロポリス法に基づいての、ボルツマン重み付きのサンプリング。また、(3) それらの一般的な物理的意味を理解する。課題 1(d)(担当: 手塚 美彦, 岡 博之) 与えられた規則に従ってスペクトルを計算し、それをディスプレイ上に再現できる。課題 2(a) (担当: 早崎 芳夫, 山本 裕紹) 計算機を活用するような問題設定を行なうこと。・設定した問題を解決するアルゴリズムを構築すること。・プログラムの目的、内容、工夫点を発表できること。課題 2(b) (担当: 久保満) ワークステーションのグラフィックス機能を利用してコンピュータグラフィックスの基本技術を修得する。課題 2(c) (担当: 河田 佳樹) 設定した課題に対するアルゴリズムを構築し、ソフトウェア仕様書を作成できること。ソフトウェア仕様書に従ってプログラミングでき、作成したプログラムの動作がソフトウェア仕様を満たしていることを検査できること。・作成したプログラムの動作方法などのマニュアルを作成できること。

【授業計画】1. オリエンテーション 2. 課題 1 3. 課題 1 4. 課題 1 5. 課題 1 6. 課題 1 7. 課題 1 8. 口頭試問・レポート 9. 課題 2 10. 課題 2 11. 課題 2 12. 課題 2 13. 課題 2 14. 課題 2 15. 口頭試問・レポート 16. 予備日

【成績評価】実習は課題 1 及び課題 2 から各 1 題選択して計 2 題行う。1 課題 50 点満点とし、総合評価 60 点以上を合格とする。一度でも欠席したり、レポートを提出しなければ成績評価の対象外となる。実習中における積極性、理解度及び、口頭試問の解答、レポートの提出状況と内容を総合して評価する。レポートの内容が採点基準に満たない場合、再提出を求めることがある。定期試験は実施しない。平常点は、実習中における積極性、理解度及び、口頭試問の解答、実習レポートの提出状況と内容を総合して評価する。以下に、各課題に対する評価方法を示す。課題 1(a),(b) (担当: 原口 雅宣, 岡本 敏弘) 平常点 (30%) およびレポート (60%)、演習に対する積極性 (10%) を評価する。レポートは、課題の重要性や解法の特徴とオリジナリティを説明しているか、適切な図表を使用しているか、読者に理解してもらう工夫があるか、考察を行っているかを重視して採点する。課題に対して「確からしい計算結果」を求めているわけではない。課題 1(c)(担当: 森篤史, 柳谷伸一郎) 出席 (フェイス・トゥー・フェイスの指導の結果) とレポートの割合を 6 対 4 として評価する。乱数の扱いは自習の初期段階でフェイス・トゥー・フェイスの指導を行なう。他についても同様に、実際にパターン発展を見ながら達成度を評価するが、時間内に課題をこなせなかった場合はプリントアウトされたもので評価する。課題 1(d)(担当: 手塚 美彦, 岡 博之) 平常点 30%, 実習中における理解度 20% 提出されたレポートの内容 50% 課題 2(a)(担当: 早崎 芳夫, 山本 裕紹) 成績評価: 授業への取り組み (40%), web ページを利用したレポート発表による報告 (60%) で評価する。課題 2(b) (担当: 久保満) 実習中の演題の解答、レポートの提出状況と内容を総合して評価する。平常点 40%、演題 40%。レポート点 20%。課題 2(c) (担当: 河田 佳樹) 実習中における理解度 20%、提出されたレポート内容 80%。提出レポートには以下の内容が含まれ、その詳細について口頭で説明できることが必要である。・構築したアルゴリズムについての説明及び、ソフトウェア仕

様書・ソフトウェア仕様書に基づいたプログラム及び、実行例．・作成プログラムのマニュアル

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする．

【学習教育目標との関連】光応用工学科の学習・教育目標「(B) 基礎的な実験技術の習熟と創造性」に関連する．

【教科書】課題 1(a),(b) (担当: 原口 雅宣, 岡本 敏弘) 配付プリントならびに光デバイス 1 で用いたテキスト．数値計算に関する参考書が必要となるので, 各人図書館等を利用すること．, 課題 1(c)(担当: 森篤史, 柳谷 伸一郎) プログラミング言語および演習の教科書,, 課題 1(d)(担当: 手塚 美彦, 岡 博之) 機器分析のてびき (2)(化学同人) ,, 課題 2(a),(b) (担当: 早崎 芳夫, 山本 裕紹) 三田典玄: 実習 C 言語 (アスキー出版局) 森口繁一, 伊理正夫, 武市正人編: C による算法通論 (東京大学出版会), 課題 2(c),(d) (担当: 久保満, 河田 佳樹) 中前栄八郎, 西田友是: 3 次元コンピュータグラフィックス (昭晃堂) E.O. Brigham 著, 宮川洋, 今井秀樹訳: 高速フーリエ変換 (科学技術出版社)

【参考書】教科書・配布プリント, 光デバイス 1&2 のテキスト, 光導波工学のテキスト, プログラミング言語及び演習のテキスト.

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】原口(光棟209, 656-9411, haraguti@opt.tokushima-u.ac.jp), 岡本(光棟207号室, 656-9412, okamoto@opt.tokushima-u.ac.jp), 森(光棟410, 656-9417, mori@opt.tokushima-u.ac.jp), 柳谷(光棟408, 656-9415, giya@opt.tokushima-u.ac.jp), 手塚(光棟307, 5027, ytezuka@opt.tokushima-u.ac.jp), 岡(光棟311, 5022, okah@opt.tokushima-u.ac.jp), 早崎(光棟412, 656-9426, hayasaki@opt.tokushima-u.ac.jp), 山本(光棟411, 656-9427, yamamoto@opt.tokushima-u.ac.jp), 河田(光棟508, 656-9431, kawata@opt.tokushima-u.ac.jp), 久保(光棟509, 656-9432, mkubo@opt.tokushima-u.ac.jp)

【備考】実習はすべて出席すること．レポートを提出しなければ成績評価の対象外となるので注意すること．限られた時間内で実習内容を理解して課題をこなすことは困難であるので, 予習をすること．受講者は上記の関連授業科目を履修していることが望ましい．成績評価に対する平常点と試験の比率: 定期試験は実施しない．平常点は, 実習中における積極性, 理解度及び, 口頭試問の解答, 実習レポートの提出状況と内容を総合して評価する．

光応用工学実験 1

Optical Science and Technology Laboratory 1

助教授・原口 雅宣, 講師・森 篤史, 手塚 美彦, 助手・岡本 敏弘
助手・柳谷 伸一郎, 岡 博之 1 単位

【授業目的】光応用工学実験 1 では, 1 年生から 3 年生の間にある様々な講義への理解を深め, 工学的・物理的な発想・考え方を修得することを目的とする．そのため, 各講義で取り扱った内容の確認を行う実験を主として行う．また実験データの取り扱いや実験をする上でのマナーをも修得する．

【授業概要】光の基本的性質と各種光学材料の化学合成, 光計測と光物性に関する基礎的な実験を行う．【実験内容】1. 反射, 屈折, 偏光: 反射と屈折の法則を確かめる．直線偏光素子と検光子を組み立てて偏光の法則(マラス, ブリュースター)を確かめる．2. 回折, 干渉: 円形開口の回折, 複スリットによる干渉を習得, 測定する．マイケルソンの干渉計を組み立て, 干渉パターンを観察する．3. 光半導体デバイスの特性: 代表的な受光素子であるフォトダイオードと発光素子である発光ダイオードとレーザダイオードの光電変換特性の測定．アナログ回路実験: ダイオード, トランジスタの基本的な電気特性の測定, オペンプを用いた帰還増幅回路等の動作実験．5. 有機光学物質の合成と評価: 光学レンズ材料の合成, 液晶分子の合成と偏光顕微鏡観察．6. 有機光学物質の分光分析: 吸収スペクトルと蛍光スペクトル, 光学活性分子の旋光度測定．

【到達目標】2 年次で学んだ幾何光学, 波動光学の基礎的な事柄(反射・屈折, 回折, 二光束干渉, 偏光)について, 物理実験を通してさらに理解を深める．光電変換素子の基本特性を理解する．半導体電子素子を用いたアナログ回路の基本特性を理解する．物質合成の技術を学ぶとともに素反応から化学反応を理解する．分子の光学特性を評価する分光分析の基本的な手法を修得する．

【授業計画】1. オリエンテーション 2. 【実験内容】1 . 2 . 3. 【実験内容】1 . 2 . 4. 【実験内容】1 . 2 . 5. 【実験内容】1 . 2 . 6. 【実験内容】3 . 4 . 7. 【実験内容】3 . 4 . 8. 【実験内容】3 . 4 . 9. 【実験内容】3 . 4 . 10. 【実験内容】5 . 6 . 11. 【実験内容】5 . 6 . 12. 【実験内容】5 . 6 . 13. 【実験内容】5 . 6 . 14. 【実験内容】5 . 6 . 15. 予備日

【成績評価】各テーマすべてに出席すること．実験中における積極性, 理解度および, 口頭試問, 1 週間後に提出する実験報告書によって評価する．なお, 実験報告書の内容が採点基準に満たない場合, 再提出を求めることがある．平常点 60%, レポート点 40% . 全体で 60% 以上を合格とする．

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする．

【学習教育目標との関連】BF

【教科書】「光実験講座」(オプトエレクトロニクス社), その他の教科書(指導書)としてプリントを用いる．

【参考書】大坪順次著「光入門」, 光デバイス 1-2 の教科書と参考書, 分光分析学の教科書と参考書

【連絡先】原口雅宣(haraguti@opt.tokushima-u.ac.jp), 森篤史(mori@opt.tokushima-u.ac.jp), 手塚美彦(ytezuka@opt.tokushima-u.ac.jp), 岡本敏弘(okamoto@opt.tokushima-u.ac.jp), 柳谷伸一郎(giya@opt.tokushima-u.ac.jp), 岡博之(okah@opt.tokushima-u.ac.jp)

【備考】予習がなければ, 限られた時間内で実験の内容を理解することは困難である．関連の強い講義科目は「光の基礎」「幾何光学」「波動光学」「光デバイス 1.2」「電気回路」「電子回路 1.2」「光化学」「化学反応論 1」「化学反応論 2」「高分子化学」「分子工学」「分光分析学」などである．関連授業科目を履修していることが望ましい．全テーマに出席し, かつすべての実験報告書を提出しなければ, 成績評価対象外となるので注意すること．

光応用工学実験 2

Optical Science and Technology Laboratory 2

助教授・早崎 芳夫, 河田 佳樹, 助手・山本 裕紹, 久保 満 1 単位

【授業目的】光応用工学実験 2 では, 1 年生から 3 年生の間にある光情報システムに関連する講義への理解を深め, 工学的・物理的な発想・考え方を修得することを目的とする．また実験ノートの書き方, データの整理手法及び実験技術等, 各学生のスキルアップを目的とする．

【授業概要】ディジタル回路, マイクロプロセッサ等の電子回路や光通信, ホログラフィ, 光学系のコンピュータ制御の基礎的な実験を通して, 電子システム, 光システム, 及び, 光電システムの設計の基本概念と基礎技術を修得する．【実験内容】(1) デジタル回路実験: AND, OR, NOT, NAND, flip-flop などの IC を用いて論理回路, 順序回路, 演算回路などを実現する．(2) マイクロプロセッサ実験: マイクロプロセッサの基本構成や動作原理を理解する．このために機械語やアセンブリ言語でプログラムを作成する．(3) 光通信実験: 光デジタル信号を光ファイバを通して伝送し, 光検出器で受信する基礎的な実験を行う．(4) ホログラフィ実験: ホログラムの記録再生を行う．(5) 光アナログ情報処理: 光フーリエ変換と空間周波数フィルタリングを行う．

【到達目標】光情報システムの基本要素となる計算機と光学原理を学び, 活用するための基礎技術を習得することを目標とする．各実験ごとの到達目標は以下の通りである．・ディジタル回路の基礎知識を学ぶ．・マイクロプロセッサの動作原理を学び, プログラミング法を修得する．・光通信の原理や光ファイバや半導体レーザの特性を学ぶ．・光の干渉と回折を学び, 光コンピューティングの基礎技術を修得する．・光アナログ情報処理の基本技術を修得する．

【授業計画】1. オリエンテーション 2. 【実験内容】(1) (2) 3. 【実験内容】(1) (2) 4. 【実験内容】(1) (2) 5. 【実験内容】(1) (2) 6. 【実験内容】(1) (2) 7. 【実験内容】(3) 8. 【実験内容】(3) 9. 【実験内容】(3) 10. 【実験内容】(3) 11. 【実験内容】(4) (5) 12. 【実験内容】(4) (5) 13. 【実験内容】(4) (5) 14. 【実験内容】(4) (5) 15. 予備日

【成績評価】実験は全て出席し, レポートを提出しなければ成績評価の対象外となる．実験中における積極性, 理解度及び, 口頭試問の解答, レポートの提出状況と内容を総合して評価する．レポートの内容が採点基準に満たない場合, 再提出を求めることがある．定期試験は実施しない．平常点は, 実験中における積極性, 理解度及び, 口頭試問の解答, 実験レポートの提出状況と内容を総合して評価する．平常点 60%, レポート点 40% . 全体で 60% 以上を合格とする．

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする．

【学習教育目標との関連】BF

【教科書】実験の原理, 方法を示したプリントを配布する．

【参考書】上記に示した関連する講義で使用した教科書

【連絡先】河田佳樹TEL:088-656-9431, E-mail:kawata@opt.tokushima-u.ac.jp早崎芳夫TEL:088-656-9426, E-mail:hayasaki@opt.tokushima-u.ac.jp山本裕紹TEL:088-656-9427, E-mail:yamamoto@opt.tokushima-u.ac.jp久保満TEL:088-656-9432, E-mail:mkubo@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】予習がなければ, 限られた時間内で実験の内容を理解することは困難である．関連する講義科目は「光の基礎」「幾何光学」「波動光学」「電気回路」「電子回路」「光導波工学」「光通信方式」「光情報機器」「光電機器設計及び演習」「計算機システム」などである．関連授業科目を履修していることが望ましい．全日程に出席し, かつすべての実験報告書を提出しなければ, 成績評価対象外となるので注意すること．

光応用工学セミナー 1

Optical Science and Technology Seminar 1 教授・西田 信夫
助手・岡本 敏弘, 柳谷 伸一郎, 山本 裕紹 1 単位

【授業目的】「習うより慣れよ」という諺があるように、光応用工学を学ぶには、「光」を肌で感じる事が大切である。しかし、現在の高等学校教育では簡単な光の実験をする余裕もないのが実状である。そこで、本セミナーでは、レンズ、回折格子、偏光板などを使って、簡単な光の実験を行い、光というものを楽しく理解することを主眼としている。

【授業概要】凸レンズ、凹レンズ、回折格子、偏光板の光学素子などを使って、ピンホールカメラ、分光器、偏光器などの実験器具を各自製作する。そしてそれを使った簡単な実験を行う。また、グループでの創作、発表会を行う。各テーマの内容を以下に示す。・製図:立体的に理解し易く図示するためのテクニカルイラストレーションとして、投影法を学ぶ。・ピンホールカメラ:ピンホールカメラを製作する。光線と像の対応を理解する。・偏光:(1) 偏光について、波の基礎的な概念を身近にある偏光現象の観察を交えて学習する。偏光を利用したステンドグラスを製作する。(2) ガラス板を利用した偏光器を製作し、偏光と反射・屈折の関係を理解する。・プリズム:アクリル製のプリズムを製作し、光学部品製作工程や評価方法について理解する。プリズムで生じる全反射現象を理解する。・レンズ:(1) パターンをスクリーンに結像することで焦点距離を調べる装置を製作し、結像の式を理解する。(2) レンズを組み合わせた光学系を使った、画像転送実験をする。・グループ製作・発表会:セミナー 1 で学んだ光学知識・技術に応用した作品をグループ単位で製作する。グループで製作した作品について発表し、それについて審査・討論を行う。・研究室見学会:セミナー担当助手の実験室を見学する。光応用工学セミナーで会得する光学知識・スキル・センスが研究につながることを学ぶ。・回折格子:スリットと回折格子を組み合わせた簡易スペクトル観察器を製作し、分光について理解する。・分光器:波長読み取り可能な分光器を製作する。製作を通じて、分光器の構造の理解と、工作技術の向上をはかる。・結晶光学:結晶と偏光板を使った観察により、結晶の持つ光学的性質を理解する。

【到達目標】

1. 光学の基礎である反射、屈折、偏光、回折、結像を理解できること。
2. 反射、屈折、偏光、回折、結像を用いた簡単な器具を自分で製作できること。
3. 創意、工夫された器具をグループで製作し、その創意、工夫点を主張できること。

【授業計画】1. ガイダンス 2. 製図 3. ピンホールカメラ 4. 偏光 1 5. 偏光 2 6. プリズム 7. レンズ 1 8. レンズ 2, グループ製作説明 9. グループ製作, 研究室見学 10. グループ製作, 研究室見学 11. 発表会 12. 回折格子 13. 分光器 14. 結晶光学 15. 予備日 16. 予備日

【成績評価】授業への取り組み(積極性、質疑、記録ノート)30%, レポート評価 30%, 作製器具の評価 20%, グループ製作・発表 20%。全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の教育目標 (B),(F) と関連する。

【参考書】「光の基礎」の参考書 (Paul G. Hewitt 他著, 小出昭一郎監修, 本田健著「電気・磁気と光」共立出版) など

【連絡先】西田(光棟409, 656-9425, nishida@opt.tokushima-u.ac.jp), 岡本(光棟207号室, 656-9412, okamoto@opt.tokushima-u.ac.jp), 柳谷(光棟408, 656-9415, giya@opt.tokushima-u.ac.jp), 山本(光棟411, 656-9427, yamamoto@opt.tokushima-u.ac.jp)

【備考】光学素子(凸レンズ, 凹レンズ, 回折格子, 偏光板 etc.)を一括購入し、教材とする。実際に手を動かして、演習、実験を行うことが重要である。欠席しないこと。教材を光応用工学セミナー 2 でも使用することがある。

光応用工学セミナー 2

Optical Science and Technology Seminar 2 教授・井上 哲夫
助教授・原口 雅宣, 助手・岡 博之 1 単位

【授業目的】セミナー (1) では光学実験が主でしたが、セミナー (2) では、電子回路・結晶・光材料に関する実験を行い、光工学への関心を高めることを目的としている。

【授業概要】結晶の模型を手作りすることにより、結晶の対称要素や立体投影法を理解させる。発光回路、通信路、受光回路を用いた光通信の実験を行う。また身近な化学実験を通じて光化学への導入教育を行う。光工学(専門教育)への導入教育であり、学科の学習・教育目標 B に大きく関係する。

【受講要件】結晶工学 (2 年), 電気回路 (1 年), 電子回路 (2 年), 光デバイス 1 (3 年), 光デバイス 2 (3 年), 光導波工学 (3 年), 光通信方式 (4 年), 分子工学 (1 年) と関連する。

【到達目標】(1) 結晶の模型を手作りすることにより、結晶の対称要素や立体投影法を理解する。(2) 光通信技術を実験をとおして体験する。(3) 身近な化学実験をとおして、光化学を体感する。

【授業計画】1. 結晶形態セミナーのガイダンス (対称の要素と 32 晶族について) 2. 32 種の結晶模型の作成 3. 32 種の結晶模型の作成 4. 模型を用いて実習 5. 模型を用いてステレオ投影の説明 6. 発光ダイオードを使った光通信の概要 (講義) 7. 発光回路の作製 8. 受光回路の作製 9. 光通信路の作製 10. 発光回路, 通信路, 受光回路を用いた光通信の実験 11. 光化学セミナーのガイダンス 12. ペーパークロマトグラフィーによる物質の分離 13. 葉っぱからの蛍光物質の抽出と蛍光観察 14. フォトクロミック反応と光記憶 15. 光学異性体の模型の作成

【成績評価】出席状況 (20%) や作品・レポートの提出 (80%) により評価し、全体で 60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一

【学習教育目標との関連】B,F

【教科書】教材・プリントは適宜配布する

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】井上(光棟310, 656-9416, inoue@opt.tokushima-u.ac.jp), 原口(光棟209, 656-9411, haraguti@opt.tokushima-u.ac.jp), 岡(光棟311, 656-9424, okah@opt.tokushima-u.ac.jp)

【備考】オフィスアワー:随時

光応用工学特別講義 1

Special Lectures on Optical Science and Technology 1
非常勤講師 1 単位

【授業目的】光応用工学に関連する先端技術に関する知識を深める。

【授業概要】広い意味で光応用工学に関連した最近のトピックスについて、最先端で活躍しておられる科学者、技術者を学外からお招きして、講義していただく。

【到達目標】光応用工学に関連する先端技術を理解する。

【成績評価】レポート (100%) で評価し、60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】BC

光応用工学特別講義 2

Special Lectures on Optical Science and Technology 2
非常勤講師 1 単位

【授業目的】

【授業概要】広い意味で光応用工学に関連した最近のトピックスについて、最先端で活躍しておられる科学者、技術者を学外からお招きして、講義していただく。

【成績評価】レポート (100%) で評価し、60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】BC

光化学

Photochemistry 教授・田中 均 2 単位

【授業目的】光による物質の変化、物質が引き起こす光の変化を分子論的に理解する目的とする。

【授業概要】有史以来我々の生活を支えてきた光合成、生物発光はもとより、近年進展の著しい機能性光学材料などを分子論的に理解することは、エネルギー・環境問題、光機能素子の開発等に関連して重要である。本講義では、光と物質との関わりについて、特に光化学過程、光物理過程、光生物学などの基本概念を分子論的に基礎から応用までを易しく講述する。

【受講要件】高校の化学の教科書の復習、ならびに「基礎化学」「分子工学」を履修していることが望ましい。また、予習と復習を充分に行うこと。

【到達目標】

1. 光と物質との相互作用を分子論的に説明できる。
2. 光化学反応の実際を知り、その過程を解析できる。

- 【授業計画】1.身の回りの光化学現象・予備知識調べ 2.光とは何か? 3.分子の電子状態 4.電子励起状態・小テスト1(到達目標1の試験) 5.分子と光との相互作用(1) 6.分子と光との相互作用(2) 7.光化学における時間スケール・小テスト2(到達目標1の試験) 8.光化学反応機構(1) 9.光化学反応機構(2) 10.光化学反応機構(3) 11.光照射,光化学の観測と解析,素過程(1) 12.光照射,光化学の観測と解析,素過程(2) 13.光化学反応の例(1) 14.光化学反応の例(2) 15.予備日 16.期末試験(到達目標2の試験)
- 【成績評価】単位の取得は,期末試験40%,小テスト(20% X 2回 = 40%),講義への取り組み状況20%として評価し,全体で60%以上で合格とする.
- 【JABEE 合格】単位合格と同一
- 【学習教育目標との関連】光応用工学科の教育目標 B に該当
- 【教科書】井上晴夫他著「光化学 I」丸善
- 【参考書】N.J.Turro 著「Modern Molecular Photochemistry」Uni.Sci.Books, 雀部博之編著「有機フォトリソ」アグネ承風社
- 【連絡先】田中均TEL&FAX:088-656-9420, E-mail:tanaka@opt.tokushima-u.ac.jp
- 【備考】オフィスアワー:随時

光画像計測

Measurement Systems for Optical Image Acquisition

助教授・河田 佳樹 2 単位

- 【授業目的】科学計測において光の果たす役割は大きい。ここでは,光画像計測の基本的技術を習得することを目的とする。
- 【授業概要】光画像計測の要素技術を光学系,センサ系,デジタル・サンプリング系に分けて講述し,計測画像の実用的な画像データ処理法について解説する。また,光画像計測システムの生体画像計測や工業計測への応用例を紹介する。
- 【到達目標】
1. 科学計測における光画像計測の役割について理解する。
 2. 光画像計測システムに関する基礎知識を習得する。
 3. 計測される画像データ処理に関する基礎知識を習得する。
- 【授業計画】1.光画像計測の基礎 2.光画像計測システム 3.画像センシングとイメージ・センサ 4.サンプリングとデジタル化 画像センシングとイメージ・センサ 5.計測画像の変換1(強度軸の変換) 6.計測画像の変換2(空間座標軸の変換) 7.計測画像のフィルタリング1(雑音除去と平滑化) 8.計測画像のフィルタリング2(画像の鮮鋭化) 9.信号回復論と逆問題 10.パターン認識とマッチド・フィルタリング 11.CTの原理と3次元CT手法 12.動画処理 13.光画像計測システムの応用例(1) 14.光画像計測システムの応用例(2) 15.定期試験 16.予備日
- 【成績評価】成績はレポート・口頭発表40%,定期試験60%で評価し,全体で60%以上で合格とする。各講義内容に関する手法や最近の動向について調査した結果をレポートにまとめて提出し,その内容を口頭発表する必要がある。
- 【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。
- 【学習教育目標との関連】光応用工学科の教育目標(B)「計算機・画像情報関連の知識と応用力」と関連する。
- 【教科書】科学計測のための画像データ処理,河田 聡,南 茂夫 編著,CQ 出版
- 【参考書】生体情報の可視化技術,生体情報の可視化技術編集委員会 編,コロナ社,画像解析ハンドブック,高木幹雄監修,東京大学出版会
- 【連絡先】河田佳樹TEL:088-656-9431, E-mail:kawata@opt.tokushima-u.ac.jp, オフィスアワー:16:00から17:00
- 【備考】・

光機能材料・光デバイス特別講義 1

Special Lectures on Optical Materials and Devices 1

非常勤講師・大津 元一 1 単位

- 【授業目的】現在,何が光物性・光デバイスについて話題になっているのか,そしてなぜ話題になっているかを第一線の研究者の方々に講義をしていただき,(1)物性的な理解をするともに,(2)光物性や光デバイスのおもしろさを感じる,(3)研究・開発に対するモチベーションを高める,ところに本講義の目的がある。
- 【授業概要】1~3名の非常勤講師が集中講義形式で講義する。講師は,国際的に活躍されている研究者である。講師の先生方が実際に研究・開発を行っている最新の光物性・光デバイスに関するトピックスおよびその将来展望を講義する。複数の講師が担当した場合は,それぞれトピックスについて,レポートの提出を求める。平成16年度は,光

技術の姿を全く変えてしまう可能性があるナノフォトリソ研究の世界的リーダーである東京大学教授の大津元一先生に講師をお願いしてある。

- 【受講要件】波動光学と量子力学について初歩的な理解があること。
- 【履修上の注意】波動光学と量子力学について初歩的な理解があること。
- 【到達目標】本講義にて取り上げた現在話題になっている光物性や光デバイスについて,それらの物理現象の本質は何か,そしてなぜ話題になっているかを簡単に説明できる。また,それらの将来展望について自分なりの意見を述べる事ができる。
- 【授業計画】1.ナノフォトリソとはなにか 2.ナノフォトリソの理論的取り扱い 3.ナノフォトリソの実験と応用 4.まとめ
- 【成績評価】講義への取り組み状況,レポートにより評価を行う。複数の非常勤講師が担当する場合は,各々の講師について,6割以上の出席かつレポート提出が必要である。評価のウエイトの目安は,講義への取り組み状況30%,レポート70%である。総合評価の60%以上が合格である。
- 【JABEE 合格】単位合格をもって JABEE 合格とする。
- 【学習教育目標との関連】光応用工学科の学習目標 B に該当する。
- 【教科書】配付プリント等の資料による。配付物がない場合もありうる。
- 【連絡先】福井萬壽夫TEL:088-656-9410, E-mail:fukui@opt.tokushima-u.ac.jp

光機能材料・光デバイス特別講義 2

Special Lectures on Optical Materials and Devices 2

非常勤講師 1 単位

- 【授業目的】結晶成長及び光デバイス作製の基礎として,結晶学の知識を深めることは重要である。この特別講義では,結晶学及び結晶光学の高水準の講義を行う。また結晶の成長機構について,成長界面のミクロ構造にもとづく最新の研究成果を理解させる。一方コロイド粒子を用いたフォトリソ結晶の作成法について理解させる。
- 【授業概要】1.結晶の対称性と光学的性質,2.成長機構の最新モデルの紹介,3.結晶成長に関する最近のトピックス,4.コロイド結晶の作製
- 【到達目標】1.結晶の対称性と物理的性質の関係が説明できる。2.結晶成長において界面におけるステップやキンクの役割を説明できる。3.結晶成長の最近の動向を知る。4.コロイド結晶の作成法について説明できる。
- 【授業計画】1.集中講義(2日間)で上記内容の授業を行う。
- 【成績評価】講義への取り組み状況(50%),レポート(50%)で評価し,全体で60%以上で合格とする。
- 【JABEE 合格】単位合格と同一
- 【学習教育目標との関連】B
- 【教科書】プリント(冊子)を配布
- 【対象学生】開講コース学生のみ履修可能
- 【連絡先】井上(光棟310, 656-9416, inoue@opt.tokushima-u.ac.jp)

光機能材料・光デバイス特別講義 3

Special Lectures on Optical Materials and Devices 3

非常勤講師 1 単位

- 【授業目的】機能材料に関連した最近のトピックスを分子レベルから理解し,またそれを応用するための能力を養う。
- 【授業概要】天然および合成物質と光とがおりなす新しい現象が最近次々と見出され,それを分子オーダーで分析する研究が大きく進展している。本講義では,最先端で活躍しておられる科学者,技術者をお招きして,分子設計化学の観点からこれら最近のトピックスについて講義していただく。
- 【到達目標】本講義で取り上げた最近のトピックスに興味をもち,そのトピックスの基本的な特徴を理解し,その本質は何かを分子論的に理解する。また,その応用,将来展望等について科学的に説明できる。
- 【授業計画】1.概論 2.歴史的背景 3.現在の動向 4.材料の分子論(1) 5.材料の分子論(2) 6.材料の分子論(3) 7.応用例と将来の展望
- 【成績評価】材料を分子オーダーでとらえられているかどうかを中心に評価する。成績評価は,レポートと講義への取り組み状況を総合して行う。評価のウエイトの目安は,講義への取り組み状況30%,レポート70%である。全体で60%以上で合格とする。
- 【JABEE 合格】単位合格と同一
- 【学習教育目標との関連】光応用工学科の教育目標 B に該当
- 【教科書】プリントの配布,またはそれに替わる資料による。
- 【連絡先】田中(光棟211, 656-9420, tanaka@opt.tokushima-u.ac.jp)

光情報機器

Optoelectronic Instruments for Information System

教授・西田 信夫 2 単位

【授業目的】レーザービームプリンター、光ディスクなど光産業の中核をなしている光情報機器およびそれに使われている光機能素子について講義し、演習・レポート、小テストを実施して光情報機器に関する基礎知識を修得させる。

【授業概要】最初に古典的な光学素子で構成されているカメラや顕微鏡などの光学機械について述べ、その後、光機能素子および各種の光情報機器について講述して光情報機器の設計に関する基礎力の養成を図る。

【到達目標】

1. 光情報機器の開発に必要な光学の知識をある程度習得できていること。
2. 古典的な光学系とコヒーレント光学系の差異を理解できること。
3. コヒーレント光学系を設計するうえでの基本事項を修得できていること。

【授業計画】1. 光学機械と光情報機器 2. 眼、眼鏡、カメラ 3. 顕微鏡、望遠鏡 4. 光の回折と干渉、コヒーレント光 5. レーザーの基礎 6. レーザーの種類と特徴 7. ホログラムの原理 8. ホログラムの種類と特徴 9. ホログラム光学素子 10. 光偏向素子、光変調素子 11. レーザービームプリンター 12. バーコードリーダー 13. 光ディスク 14. 電子プロジェクター 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】講義に対する理解力の評価は、講義への取り組み状況、演習の回答、レポートの提出状況と内容、小テストおよび最終試験の成績を総合して行う。配点の比率 講義への取り組み状況 10%、演習・レポート評価点 小テスト得点 10%、最終試験得点 80% 合格基準 単位の取得:総合点の 60%以上

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学の教育目標 (B) と関連する。

【教科書】選定中 (適当なものがないければ、教科書を使わずに講義を行う。)

【参考書】米津宏雄著「光情報産業と先端技術」工学図書

【連絡先】西田信夫 TEL:088-656-9425, E-mail:nishida@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】随時に小テストを実施するので、毎回の復習を欠かさずに行うこと。

光情報システム特別講義 1

Special Lectures on Optical Information Processing 1

非常勤講師 1 単位

【授業目的】

【授業概要】光情報処理に関連した最近のトピックスについて、最先端で活躍しておられる研究者、技術者を学外からお招きして、講義していただく。

【成績評価】レポート (100%) で評価し、60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】単位合格をもって JABEE 合格とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学の学習目標 B に該当する。

光情報システム特別講義 2

Special Lectures on Optical Information Processing 2

非常勤講師 1 単位

【授業目的】画像処理に関連する先端技術に関する知識を深める。

【授業概要】画像処理に関連した最近のトピックスについて、最先端で活躍しておられる研究者、技術者を学外からお招きして、講義していただく。

【到達目標】画像処理に関連する先端技術を理解する。

【成績評価】レポート (100%) で評価し、60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】単位合格をもって JABEE 合格とする。

【学習教育目標との関連】B

光通信方式

Optical Communications Technology

非常勤講師 2 単位

【授業目的】高速・広帯域ネットワークの基盤を形成する光ファイバ通信システムについて、システム構成要素、ならびにシステム化技術を体系的に理解するとともに、具体的なシステム構成に関する知識を深める。

【授業概要】伝送媒体となる光ファイバの原理と特性、半導体光源や受光素子の構造と特徴を光通信システム設計の観点から講義する。また、光通信システムの設計に必須となる、光信号の変復調、分岐挿入や合分波などのシステム機能要素についてその概要を説明する。その後、これらの知識をベースとして、バックボーン系やアクセス系における具体的なシステム構成とそのシステム化技術について理解を深める。

【到達目標】

1. (1) システム設計の観点から、光ファイバの基本原則を理解している。
2. (2) システム設計の観点から、光源や受光素子、ならびに主な光回路を理解している。
3. (3) 光通信における変復調方式を理解している。
4. (4) 中継伝送ならびに多重化の基本原則を理解している。
5. (5) アクセス系における種々の方式を比較し、その違いを説明できる。

【授業計画】1.1. 光通信の歴史 2.2. ~ 4. 光ファイバの構造と光の伝搬原理、光ファイバの特性 (損失、分散) 3.5. ~ 7. 光源と受光素子、光の増幅、光回路 (分岐、合分波、スイッチ、接続) 4.8. 中間試験:到達目標 (1~2) の試験 5.9. ~ 10. 光通信システムにおける変復調 (S/N, コヒーレント通信) 6.11. ~ 12. バックボーン系とそのシステム化技術 (多重化、中継伝送) 7.13. ~ 15. アクセス系とそのシステム化技術 (HFC, FTTC, FTTH) 8.16. 期末試験:到達目標 (3~5) の試験

【成績評価】試験 (中間試験 40%, 期末試験 60%) により評価し、到達目標の 60%以上が達成されている場合に合格とする。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】B

【教科書】石尾秀樹:光通信、丸善

【参考書】(1) 末田 正:光エレクトロニクス入門、丸善、(2) 末松安晴、伊賀健一:光ファイバ通信入門、オーム社、(3) 大越孝敬:光ファイバ通信、岩波書店

【備考】通信基礎論を受講しておくことが望ましい。

光デバイス 1

Optoelectronic Devices I

助教授・原口 雅宣 2 単位

【授業目的】半導体の光物性を理解し、LED と LD について、動作原理、構造、機能について理解することを目的とする。

【授業概要】半導体を特性を駆使して実現されている発光ダイオード (LED) とレーザーダイオード (LD) の機能、構造、動作原理について講義を行う。これらの素子を理解するためには、半導体の光物性 (光に対する物理的ふるまい) についても講義を行う。特に、現在の光産業の発展を支えているレーザーダイオードについて時間をかける。

【受講要件】材料物性、幾何光学、波動光学に関する基本的概念を理解していること。

【到達目標】

1. 発光素子に使用される半導体の特徴が説明できること。
2. LED と LD について、その機能、構造、動作原理の説明ができること。
3. LD の強度変調特性の簡単な説明ができること。

【授業計画】1. 光デバイスと光エレクトロニクスデバイス 2. 物質の光学的性質とその利用 3. 半導体の特性 4. 吸収と発光 5. 発光と吸収 6. 混晶半導体と材料設計 7. 中間試験、ヘテロ接合と超格子 8. 半導体を利用した発光デバイスと他の光源との比較 9. エレクトロルミネッセンスデバイス 10. 発光ダイオードの構造と作製 11. 発光ダイオードの特性と用途 12. レーザの原理と特徴 13. 半導体レーザーの構造と動作原理 14. 半導体レーザーの特性と用途 15. 青色発光ダイオード、ブルーレーザー、発光素子の将来 16. 期末試験

【成績評価】積極性を含む講義への取り組み状況 (15%)、2~3 回のレポート (20%)、中間試験 (30%)、定期試験 (35%) により評価する。総合評価の 60%を合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一

【学習教育目標との関連】学科の学習目標 B

【教科書】針生尚著、「光エレクトロニクスデバイス改訂版」、培風館、1999。

【参考書】末松安晴、上林利生共著「光デバイス演習」、コロナ社、1986、レーザ技術総合研究所編、「レーザーの科学」、丸善、1997

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】原口雅宣 TEL:088-656-9411, E-mail:haraguti@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】講義内容は、量子力学、材料の電子物性、レーザに関する講義との関連が強い。光応用工学にて該当する講義は「量子力学」「光・電子物性工学 1」「光・電子物性工学 2」「レーザ工学基礎論」など。

光デバイス 2

Optoelectronic Devices 2 教授・福井 萬壽夫 2 単位

【授業目的】各種光デバイスの動作原理を理解でき、その応用力を身に付けることを目的・目標とする。

【授業概要】光検出デバイス、太陽電池、撮像デバイス、表示デバイスについての動作原理、互いの関連性、応用分野について述べる。

【到達目標】

1. 各種光検出デバイスの動作原理が理解できる。
2. 太陽電池の動作原理が理解できる。
3. 各種撮像デバイスの動作原理が理解できる。
4. 各種表示デバイスの動作原理が理解できる。

【授業計画】1. 光検出デバイスの性能指数 2. 光導電素子 3. ホトダイオード 4. アバランシェホトダイオードと光電子増倍管 5. 太陽電池の原理 6. 太陽電池の原理 7. 実際の太陽電池 1 8. 実際の太陽電池 2 9. 中間試験 10. 撮像デバイスの原理と撮像管 11. 固体撮像デバイス 1 12. 固体撮像デバイス 2 13. ブラウン管 14. 液晶ディスプレイ 15. プラズマディスプレイとエレクトロクロミックディスプレイ 16. 期末試験

【成績評価】講義毎に毎回実施するミニテスト、講義への取り組み状況、中間試験、期末試験によって評価する。ミニテスト:36%、講義への取り組み状況:14%、中間試験:25%、期末試験:25%とする。全体で60%以上を合格とする。なお、ミニテストは、講義の始めに前回の講義内容の重要ポイントを5分-10分で実施する。さらに、講義終了時に、講義で重要と思われる点、わかりにくかった点を提出させ、次の講義にフィードバックさせる。

【JABEE 合格】単位合格と同一。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の学習目標 B

【教科書】光エレクトロニクスデバイス(針生尚, 単著, 倍風館)

【参考書】参考書:光デバイス(末松安晴, 単著, コロナ社), 光デバイス演習(末松安晴, 上林利生, 共著, コロナ社)

【連絡先】TEL:088-656-9410, E-mail:fukui@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】馴染みのない言葉, 概念が数多く出てくるので, 戸惑うことが多いかもしれない。かならず復習をして言葉, 概念に馴染めるよう努力することが必要である。

光デバイスプロセス工学

Fabrication Technology of Optical Semiconductor Devices

非常勤講師 1 単位

【授業目的】近年, 光産業の進展にはめざましいものがある。その一翼を担っているのが半導体レーザー, フォトダイオードなどの光半導体デバイスである。本授業では, これらの光デバイスの原理から応用および製造プロセスについて理解させる。

【授業概要】1. 光情報通信ネットワークと光情報処理。2. 光デバイス: 原理と応用, 3. プロセス:3.1. エピタキシー; 液相・気相エピタキシー法や分子線エピタキシー法。3.2. ウェハ- プロセス; ウェハ-の製造プロセス, 3.3. 組立プロセス; 発光素子や LSI の製造プロセス。

【到達目標】1. 光デバイスの原理と応用例について説明できる。2. 光デバイスの製造プロセスについて説明できる。

【授業計画】1. 集中講義(2日間)で上記内容の授業を行う。

【成績評価】講義への取り組み状況(50%), レポート(50%)で評価し, 全体で60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一

【学習教育目標との関連】B

【教科書】プリント(冊子)を配布

【参考書】米津宏雄著「光通信素子工学-発光・受光素子」(工学図書, 1984), 米津宏雄著「光情報産業と先端技術」(工学図書(1997)), 米津宏雄著「半導体産業と先端技術」(工学図書(1992))

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】井上(光棟310, 656-9416, inoue@opt.tokushima-u.ac.jp)

光導波工学

Guided-wave optics

助教授・早崎 芳夫 2 単位

【授業目的】光通信において用いられている光ファイバ中を光の通過する領域のサイズは, 数ミクロン(1ミクロンは1000分の1ミリ)である。このような狭い空間を伝わる光は, 空気中のような境界のない空間を伝わる光とは異なる特徴的な振る舞いをする。本講義では, そのような狭い空間に閉じこめられた光の性質を理解し, 現在の光通信技術や将来の光計算技術のための基礎的な知識, 数学的技術を身につける。

【授業概要】光導波路中の光の振る舞いについて中心に講義を行う。

【到達目標】光導波路中での光の振る舞いの定性的な理解と数学的な理解

【授業計画】1. 光導波光学の講義で何を学ぶか 2. 光通信の基礎, 光導波路とは 3. 階段屈折率導波路(モードとは何か) 4. 階段屈折率導波路 2(群速度と位相速度) 5. 階段屈折率導波路 3(Maxwell 方程式による解析) 6. 分布屈折率導波路 1(導波モード) 7. 分布屈折率導波路 2(群速度) 8. 種々の光導波路 9. 階段屈折率光ファイバの導波モード 1 10. 階段屈折率光ファイバの導波モード 2 11. 光変調の基礎 12. 光検出の基礎 13. 光通信の現状 1 14. 光通信の現状 2 15. 予備日 16. 定期試験

【成績評価】レポートとノートの講義への取り組み状況と, 最終試験の成績と試験後のレポートとを比率 3:7 で評価する。全体で60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】単位認定と同一。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の学習目標 B

【教科書】光ファイバ通信入門 末松安晴, 伊賀健一 オーム社

【参考書】光ファイバ通信の基礎 菊池和朗, 昭晃堂, 光導波路の基礎, 岡本勝就, コロナ社

【連絡先】早崎(光棟412, 656-9426, hayasaki@opt.tokushima-u.ac.jp)

微分方程式 1

Differential Equations (I)

講師・岡本 邦也 2 単位

【授業目的】微分方程式の解法を修得し, さらに工学の諸分野に現われる微分方程式の解法に応用できるようにする。

【授業概要】微分方程式の理論は数理的工学的な現象の解析に有力な手段を与え, 現代工学の基礎として重要な役割を果たしている。その広範な理論の入門段階として, この講義では微分方程式の具体的な解法を中心に講義する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには, 予習を行い, 講義ノートをきちんととり, 講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に, 各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 基本的な一階常微分方程式が求積法により解ける。
2. 二階線形常微分方程式が解け, 且つ記号解法が適用できる。

【授業計画】1. 変数分離形 2. 同次形 3. 一階線形常微分方程式 4. 全微分方程式 5. 非正規形 6. 階数降下法 7. 二階線形同次常微分方程式 8. 二階線形非同次常微分方程式 9. 定数係数線形常微分方程式 10. 記号解法 1 11. 記号解法 2 12. 通常点における級数解法 13. 確定特異点のまわりの級数解法 14. ルジャンドル関数・ベッセル関数 15. 期末試験(到達目標 1 及び 2 の評価)

【成績評価】講義への取り組み状況, 演習の回答, レポート等の平常点(30%)と期末試験の成績(70%)を総合して行う。全体で60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】A

【教科書】杉山昌平 著「工科系のための微分方程式」実教出版

【参考書】竹之内脩 著「常微分方程式」秀潤社, マイベルク/ファヘンアウア 著「工科系の数学 5 常微分方程式」サイエンス社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岡本(A2-4室, TEL/FAX:656-9441, E-mail:okamoto@pm.tokushima-u.ac.jp)

微分方程式 2

Differential Equations (II)

講師・岡本 邦也 2 単位

【授業目的】連立常微分方程式の安定性と簡単な偏微分方程式の解法を修得し, より実際の工学的な問題の解法に応用できるようにする。

【授業概要】「微分方程式 1」に続いて現代工学すべての基礎として重要な役割を果たしている連立常微分方程式の基本的な解法を講義する。さらに, 簡単な偏微分方程式の解法についても講義する。

【受講要件】「微分方程式 1」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには, 予習を行い, 講義ノートをきちんととり, 講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に, 各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. 簡単な連立線形常微分方程式が解ける。
2. ラプラス変換の理論を定数係数常微分方程式へ応用できる。

【授業計画】1. 連立常微分方程式 2. 高階常微分方程式と定数係数連立常微分方程式 3. 自励系と危点 4. 解の漸近的挙動 5. 解の漸近的挙動 2 6. 線形化 7. 保存系と安定性 8. ラプラス変換の性質 9. 逆ラプラス変換 10. ラプラス変換の応用 11. 一階偏微分方程式 12. ラグランジュの偏微分方程式 13. 二階線形偏微分方程式 14. 定数係数二階線形偏微分方程式 15. 期末試験 (到達目標 1 及び 2 の評価)

【成績評価】講義への取り組み状況, 演習の回答, レポート等の平常点 (30%) と期末試験の成績 (70%) を総合して行う. 全体で 60% 以上で合格とする.

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする.

【学習教育目標との関連】A

【教科書】杉山昌平 著「工科系のための微分方程式」実教出版

【参考書】竹之内脩 著「常微分方程式」秀潤社, マイベルク/ファヘンアウア 著「工科系の数学 5 常微分方程式」サイエンス社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】岡本(A2-4室, TEL/FAX:656-9441, E-mail:okamoto@pm.tokushima-u.ac.jp)

微分方程式特論

Differential Equations(III) 助教授・香田 温人 2 単位

【授業目的】数理解析学の強力な道具立てとして, フーリエの方法を修得させる.

【授業概要】フーリエが導入した三角級数展開およびフーリエ積分変換の理論を講義し, 物理・工学に現れる偏微分方程式を初等的に扱うための基礎的な知識を提供する.

【受講要件】「微分方程式 1」「微分方程式 2」の履修を前提とする.

【履修上の注意】高度な内容につながる盛り沢山の講義である. 使い方を理解するには, 実用的な道具と割り切って, 多数の計算練習を行なうとよい.

【到達目標】

1. フーリエ級数, フーリエ変換の概要が理解できる.
2. フーリエの方法による偏微分方程式の解法が理解できる.

【授業計画】1. フーリエ係数, フーリエ級数 2. 三角級数の和, ディリクレ核 3. リーマン・ルベグの定理, ベッセルの不等式 4. 展開定理 5. パーセバルの等式, 簡単な応用例 6. フーリエ積分 7. ディリクレ積分公式, フーリエ積分公式 8. フーリエ反転公式 9. フーリエ変換, 合成積 10. 変換の計算例 11. 偏微分方程式への応用 12. 波動方程式 13. 熱伝導方程式 14. ラプラス方程式 15. 期末試験

【成績評価】試験 80% (期末試験) 平常点 20% (講義への取り組み状況, 演習の回答等) とし, 全体で 60% 以上で合格とする.

【JABEE 合格】単位合格と同一とする.

【学習教育目標との関連】A

【教科書】杉山昌平『工科系のための微分方程式』実教出版

【参考書】入江昭二・垣田高夫『フーリエの方法』内田老鶴園, 洲之内源一郎『フーリエ解析とその応用』サイエンス社, 竹之内脩『フーリエ展開』秀潤社, T.W. ケルナー『フーリエ解析大全上・下』朝倉書店

【連絡先】香田(A211)

フォトニクス材料

Photonic Engineering Materials 非常勤講師・名西 やすし 非常勤講師・藤枝 一郎, 沼居 貴陽 1 単位

【授業目的】混晶半導体を含む化合物半導体の物性およびそれらの製法について理解し, フォトニクス分野の材料として化合物半導体がよく使用されている理由を把握する. また, フォトニクス分野の材料として利用されている他の材料のうち少なくとも 1 種類について, その物性と利用される理由について理解する.

【授業概要】フォトニクス分野の材料について専門家である非常勤講師が, フォトニクス分野で広範囲に使われている材料, 特に半導体的なものを絞って, その性質等をフォトニクスでの応用を念頭に置いて述べる. さらに今後のフォトニクス材料の発展の展望にも触れる. なお, 本講義は集中講義形式にて行う.

【受講要件】半導体に関する初歩的な知識があること.

【到達目標】主な化合物半導体の性質や作製法について説明できる. 混晶半導体の特徴について説明できる. 化合物半導体を用いた代表的な光デバイスについて機能, 構造, 特徴を説明できる.

【成績評価】講義への取り組み状況 30%, レポート 70% により評価を行う. 全体で 60% 以上で合格とする.

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする.

【学習教育目標との関連】学科の学習目標 B

【教科書】配付プリント等の資料による. 配付物がない場合もありうる.

【連絡先】原口雅宣 TEL:088-656-9411 E-mail:haraguti@opt.tokushima-u.ac.jp, 学科事務 TEL:088-656-9436 E-mail:tamura@opt.tokushima-u.ac.jp

福祉工学概論

Introduction to Well-being Technology for All 教授・末田 統 助教・藤澤 正一郎 2 単位

【授業目的】我々の身近な生活を支える様々な機器や環境の中にも含まれる工学技術のうち, いろいろなハンディキャップを伴う条件下でも使いやすく安全を確保する技術を, 人に優しい技術として紹介し, その万人に対する延長線上に福祉工学技術の一端があることを理解させる. また, 各障害者個人に合わせた機器を紹介し, 福祉工学技術のもう一端には, 特化された技術があることも理解させる.

【授業概要】本講義では, 人間の生活全体を支える工学技術を, 高齢化による機能の低下や障害によるハンディキャップを軽減させる様々な技術 (ハイテクならびにローテク) やアプローチを例にとり, 広い視点から概観する.

【到達目標】

1. 機能の低下や障害によらず, 全ての人々が利用できる技術や機器, 環境があることを理解させる.
2. 特別なサポートを必要とする人々のための技術や機器, 環境があることを理解させる.
3. 人に優しい工学技術について考える機会を持たせる.

【授業計画】1. ガイダンス:講義の進め方, 受講の心構え 2. 支援科学技術:個人への対応と万人への対応 (Universal Design) 3. 移動・移乗 4. 排泄 5. 身障者スポーツ 6. 高齢者の生活環境 7. 就労 8. 生活自立と支援技術 (米国の場合) 9. 技術による支援, 人による支援 10. 技術:障害への適合, 環境への適合, 人間への適合 11. 知的障害者と運動機能障害者の支援 12. 視覚障害者と聴覚障害者の支援 13. 最新の技術:???? 14. まとめ:心のバリアー, エンジニアとして 15. 予備日

【成績評価】講義への取り組み状況 (40%) と, 毎回提出させるレポート内容 (60%) で評価し, その平均点が 60% 以上であれば合格とする.

【JABEE 合格】単位合格と同一とする.

【学習教育目標との関連】C

【参考書】「明日を創る」, E&C プロジェクト「バリアフリーの商品開発 2」, 山田尚勇他「コンピュータと人間の共生」, 後藤芳一編「バリアフリーのための福祉技術入門」

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】末田(総合研究実験棟705, 656-2167, o.sueda@eco.tokushima-u.ac.jp)

【備考】講義への取り組み状況とレポート評価との割合は 4:6 とするが, 欠席者のレポートは成績評価しない.

複素関数論

Complex Analysis 講師・岡本 邦也 2 単位

【授業目的】複素関数論への入門講義として, 複素変数関数の微分積分学を修得させる.

【授業概要】微積分で扱う対象を複素変数関数の関数にまで広げ, 正則関数および有型関数の理論を展開することにより, 実数の世界では困難であったある種の積分計算が複素数の立場からみると簡潔に処理されることを述べる.

【受講要件】「微積分学」の履修を前提とする.

【履修上の注意】時間数の制約から, 複素関数の計算を修得するための必要最小限な議論を行なうので, 講義内容のすべてを吸収することが理解への早道である. 日頃から予習・復習の計画を立てて勉学に勤しんでもらいたい.

【到達目標】

1. 複素微分, 正則関数の概要が理解できる.
2. 留数概念の理解とその応用ができる.

【授業計画】1. 複素数 2. 複素平面, オイラーの式 3. 複素数列, 複素級数 4. 複素変数の関数 5. 複素微分, コーシー・リーマンの関係式 6. 正則関数 7. 複素積分 8. コーシーの積分定理 9. コーシーの積分公式 10. テイラー展開 11. ローラン展開 12. 特異点, 留数 13. 定積分の計算 (1) 14. 定積分の計算 (2) 15. 期末試験

【成績評価】講義への取り組み状況, レポート等の平常点 (30%) と期末試験の成績 (70%) を総合して行う. 全体で 60% 以上を合格とする.

【JABEE 合格】単位合格と同一である.

【学習教育目標との関連】A

【教科書】阪井章著「複素解析入門」新曜社

【参考書】マイベルク/ファヘンアウア著「工科系の数学 6 関数論」サイエンス社、辻正次・小松勇作著「大学演習・関数論」裳華房、田村二郎著「解析関数(新版)」裳華房

【連絡先】岡本(A2-4室, TEL/FAX:656-9441, E-mail:okamoto@pm.tokushima-u.ac.jp)

プログラミング言語及び演習

Programming Languages and Exercises

助教授・河田 佳樹 2 単位

【授業目的】計算機はあらゆる分野で不可欠である。プログラミング言語及び演習では、計算機の利用に必要な基礎知識を習得することを目的とする。

【授業概要】UNIX、インターネットの操作方法と C 言語について講義し、実際に計算機を使用して UNIX、インターネットの操作と C プログラムの演習を行う。

【到達目標】

1. 光技術に関連した計算機の使用・応用が円滑に行える基礎知識を習得する。
2. C 言語の基本的な文法を理解し、与えられた課題に対するプログラミングができる力を養う。

【授業計画】1. インターネット操作法について・演習 2. UNIX 操作法について・演習 3. 変数・演算子について・演習 4. 制御構造について(1)・演習 5. 制御構造について(2)・演習 6. 関数と記憶のクラスについて・演習 7. 総合演習(1) 8. 小テスト 9. 配列について・演習 10. 構造体について・演習 11. ファイル処理と分割コンパイルについて・演習 12. データ構造・演習 13. 総合演習(2) 14. 定期試験 15. 演習問題・試験問題の解答例について

【成績評価】演習は全て出席し、レポートを提出しなければ成績評価の対象外となる。演習レポートの提出状況と内容、定期試験の結果を総合して評価する。演習レポートの内容が採点基準に満たない場合、再提出を求めることがある。成績は演習レポート 40%、試験 60%で評価し、全体で 60%以上で合格とする。演習の評価は以下の通りである。各講義のテーマについての説明後、演習課題を与える。演習課題は A 課題、B 課題からなり、各々の提出期限は次の通りである。A 課題:演習時間内 B 課題:1 週間後 これらの課題は「プログラミング言語及び演習」用ホームページにアクセスしてプログラムを含むレポートを電子ファイル形式で提出し、基準レベルに達している必要がある。基準レベルは、以下の通りである。各課題について補足事項は講義中に説明する。・コンパイルエラーのない実行可能プログラムであること。・出力結果が要求仕様を満たしていること。・適切なコメント文を記載していること。・プログラムが読みやすい書式になっていること。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】光応用工学科の教育目標(B)「計算機・画像情報関連の知識と応用力」と関連する。

【教科書】入門 ANSI-C(石田晴久監修, 実教出版), UNIX ハンドブック(舟木奨, ナツメ社)

【参考書】講義中に紹介する。

【連絡先】河田佳樹 TEL:088-656-9431, E-mail:kawata@opt.tokushima-u.ac.jp オフィスアワー:16:00から17:00

【備考】演習は全て出席すること。限られた時間内で講義・演習の内容を理解し、課題をこなすことは困難であるので、予習をすること。

分光分析学

Spectroscopic Analysis

講師・手塚 美彦 2 単位

【授業目的】物質の構造や性質を調べる手段として、分光学はなくてはならないものとなっている。この講義では、種々の波長の光と物質との相互作用からそれらの波長を用いた分光法の原理を理解し、装置の構成や測定法について学ぶ。さらに演習を通じて、スペクトルから分子の構造決定ができる能力を養う。

【授業概要】種々の分光法の原理・装置構成・測定法について各波長領域別に解説する。後半には、それらのスペクトルを実際に用いた分子の構造決定について解説し、同時に演習を行う。

【受講要件】「分子工学」、「化学反応論 1」、「化学反応論 2」、「光化学」の単位を修得していることが望ましい。

【到達目標】各種 X 線分光法の原理を理解し、分析対象に対して適切な方法を選択することができる。紫外・可視領域の光を用いた分光法の原理を理解し、分子構造の解析や試料の濃度決定に利用することができる。

きる。磁場を用いた分光法の原理を量子化学の立場から説明することができる。分光分析に使用されるレーザーの種類を知り、レーザーの基本的な発振原理が説明できる。赤外吸収スペクトル及び核磁気共鳴スペクトルを用いて、単純な有機化合物の構造解析ができる。

【授業計画】1. 分光学の基礎(光と物質の相互作用) 2. 蛍光 X 線分析 3. X 線光電子分光法 4. X 線回折・X 線結晶構造解析 5. 紫外・可視吸収スペクトル 6. 蛍光スペクトル 7. レーザーとレーザーを用いた分光法 8. 光学活性物質の旋光度と円二色性スペクトル 9. 中間試験 10. 赤外吸収スペクトル 11. 電子スピン共鳴(ESR)スペクトル 12. 核磁気共鳴(NMR)スペクトル 13. スペクトルによる有機化合物の構造解析 1 14. スペクトルによる有機化合物の構造解析 2 15. スペクトルによる有機化合物の構造解析 3 16. 期末試験

【成績評価】授業の到達目標が達成され、特に各種分光法の原理が理解できているかどうかを評価する。配点は、中間試験 40%、期末試験 40%、講義への取り組み状況 20%とし、全体で 60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】B

【教科書】入門機器分析化学(三共出版)

【参考書】1) J.R.Dyer 著, 柿沢 寛 訳「吸収スペクトルの応用」東京化学同人, 2) 「機器分析の手引き(1), (2), (3)」化学同人, 3) 大矢博昭・山内淳著「電子スピン共鳴」講談社サイエンスフィク, 4) 高分子学会編「入門レーザー応用技術」共立出版

【連絡先】307号室 TEL:088-656-9423, E-mail:ytzuka@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】「分子工学」及び「化学反応論 1・2」の履修を前提として講義する。

分子工学

Molecular Engineering

講師・手塚 美彦 2 単位

【授業目的】物質を構成する最小単位である原子及び分子の構造について学び、材料をミクロの視点から見る目を養う。光と分子とのかわりやスペクトルに関する知識を養う。材料の合成や分解に関与する化学反応の速度について学ぶ。身の回りにある有機化合物に対する基礎的な知識を身につける。

【授業概要】前半は、原子及び分子の構造と電子のエネルギー準位について解説する。後半は、化学反応の機構と速度について、また一般的な有機化合物の構造と性質について解説する。

【受講要件】なし

【到達目標】物質の存在状態をそれを構成する分子の構造から予測できる。各原子の性質の違いを電子状態を用いて説明できる。化学結合の種類を挙げ、それぞれの特徴が説明できる。分子の電子状態から分子構造が予測できる。原子や分子と光との相互作用をエネルギー準位を用いて説明できる。分子の極性と分子間の相互作用を説明できる。反応速度、速度定数、反応次数、活性化エネルギーの意味を理解し、実際の単純な反応に応用できる。簡単な構造の有機化合物が命名できる。有機分子の立体構造と光学活性との関係について説明できる。

【授業計画】1. 原子や分子の存在状態 2. 原子の構造 3. イオン化エネルギーと電子親和力 4. 化学結合の種類 5. 混成軌道 6. 原子や分子のエネルギー 7. 光と分子との相互作用 8. 中間試験 9. 化学反応と化学平衡 10. 反応速度と反応次数 11. アレウスの式と活性化エネルギー 12. 有機化合物の構造と種類 13. 有機化合物の分類と命名 14. 有機化合物の立体構造 15. 光学活性 16. 期末試験

【成績評価】授業の到達目標が達成され、原子・分子の世界の概念が理解できているかを評価する。配点は中間試験 40%、期末試験 40%、講義への取り組み状況 20%とし、全体で 60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】B

【教科書】1) 斎藤 晃 著「はじめて学ぶ大学の物理化学」化学同人 2) 山口良平・山本行男・田村 類 共著「ベーシック 有機化学」化学同人

【参考書】1) アトキンス「物理化学(上・下)」東京化学同人

【連絡先】307号室 TEL:088-656-9423, E-mail:ytzuka@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】毎回、講義の要点を記したプリントを配布するので、板書を書き写す際の手助けにして欲しい。板書だけにとらわれず、内容の説明について来るよう心がけること。

ベクトル解析

Vector Analysis

教授・今井 仁司 2 単位

【授業目的】工学の解析で必要不可欠なベクトルの概念と基礎的な性質を学ぶとともに、ベクトル場の解析学を通して古典力学、流体力学や電磁気学に現れる基本的な物理法則の数学的な理解・運用を目標とする。

【授業概要】三次元空間のベクトルで表される物理量の局所的変化(微分)と大局的效果(積分)を記述する手法としてベクトル場の微分積分学を展開し、微分積分学の基本定理のベクトル場に対する一般化を確立する。

【受講要件】「微分積分学」の履修を前提とする。

【履修上の注意】講義内容を確実に理解するには、予習を行い、講義ノートをかきこんど、講義時間内に設けられた演習に積極的に取り組むこと。それ以上に、各自が普段から自主的に演習に取り組むこと。

【到達目標】

1. ベクトルの場の微分が理解できる。

2. ベクトルの場の積分が理解できる。

【授業計画】1. ベクトルの演算、ベクトルとスカラー 2. 内積 3. 外積 4.

ベクトル値関数の微分・積分 5. 空間曲線、フレネ・セレの公式 6. 力学への応用 7. 勾配、発散、回転 8. 方向微分 9. 線積分 10. 面積分、立体積分 11. 積分による定義 12. ガウスの定理、ストークスの定理 13. グリーンの定理 14. 直交曲線座標 15. 期末試験

【成績評価】期末試験の点数(100点を超えたときは100点にしたもの)が60点以上であれば、その点数を成績として合格とする。期末試験の点数が60点に満たない場合には、100点満点に換算した試験の点数を80%にしたものと平常点(講義と演習の取り組み具合を評価したもので20点満点)を合計し、その点数が60点以上であれば60点を成績として合格とする。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】A

【教科書】小川 枝郎『ベクトル解析概論』培風館

【参考書】加藤 祐輔『多変数関数の微積分とベクトル解析』講談社、渡辺 正『ベクトル解析の基礎と応用』新数理ライブラリ M5 サイエンス社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】今井(建設棟2-7室, Tel:656-7541, E-mailでの問い合わせは受け付けない)

マルチメディア工学

Multimedia Engineering

非常勤講師 2 単位

【授業目的】マルチメディアの概要とそれを構成する要素技術についての理解を深める。

【授業概要】マルチメディアの概要とそれを構成する要素技術について、各分野で活躍している学外の研究者、技術者に講義していただく。

【到達目標】マルチメディアの概要とそれを構成する要素技術を理解する。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】BC

量子力学

Quantum Mechanics

助教授・道廣 嘉隆 2 単位

【授業目的】ミクロな世界の基礎法則である、量子力学を修得させる。

【授業概要】量子力学は原子分子などのミクロな世界の基本法則であり、われわれの身の回りのマクロな世界とは異なる法則に基づいている。量子力学の法則ならびにいくつかの例を講義し、量子力学の基礎的内容を提供する。

【受講要件】基礎物理学を履修しているものとする。微分積分の基礎的知識を要求する。

【到達目標】

1. シュレディンガー方程式と波動関数の意味を理解する。

2. 波動関数や期待値等を計算することができる。

3. 簡単な系に適用することができる。

【授業計画】1. はじめに (1) 2. はじめに (2) 3. 量子力学の基礎 (1) 物理量と演算子 4. 量子力学の基礎 (2) 状態と波動関数 5. 量子力学の基礎 (3) 期待値 6. 量子力学の基礎 (4) シュレディンガー方程式 7. まとめ 8. 例題 (1) 自由粒子 9. 例題 (2) 調和振動子 10. 3次元のシュレディンガー方程式 11. 角運動量 12. 例題 (3) 水素原子 (1) 13. 例題 (3) 水素原子 (2) 14. まとめ 15. 予備日 16. 期末試験

【成績評価】期末試験の成績(80%)と授業への取り組み状況(20%)を総合して行う。全体で60%以上で合格とする。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】A

【教科書】小出 昭一郎著「量子力学 I」裳華房

【参考書】バイザー著「現代物理学の基礎」好学社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

【連絡先】道廣(A203)

【備考】目標 3 は発展的内容である。

レーザ工学基礎論

Introduction to Laser physics and applications

助教授・原口 雅宣 2 単位

【授業目的】将来のレーザ技術・装置にも対応できるように、レーザ光の特徴を説明するキーワードであるコヒーレンスと、レーザを実現するのに不可欠な誘導放出・共振器および、レーザの基本構造と動作原理の基本的理解を目的とする。また、今後のレーザ光の応用上重要な非線形光学についてその初歩的な内容の理解も目的とする。

【授業概要】現在の光産業の中核をなすレーザは、情報機器、通信回線、精密加工や医療での応用など、様々な分野で使われている。現在、レーザ技術は急激な発展過程にあるため、現行の応用例には重点をおかず、レーザに関係する基本的な概念や原理の理解を助けるよう講義を組み立てる。また、将来のレーザ応用上重要であると考えられる、非線形光学についても時間をかける。

【受講要件】波動光学および量子力学における基本的な概念を理解していること。

【到達目標】光のコヒーレンス、誘導放出、共振器等のキーワードを駆使して、レーザの特徴や基本構造およびその動作原理の説明ができるようになることが第一の目標である。さらに、第2次高調波発生原理と応用例について、技術的な表現で簡単な説明ができることが第2の目標である。

【授業計画】1. レーザ概論、レーザの歴史 2. コヒーレンス 3. 光吸収と光放射 4. 誘導放出 5. 光共振器、小テスト 6. レーザ発振の条件 7. レーザ動作解析 8. レーザ装置、小テスト 9. 電気光学効果、磁気光学効果 10. 光子響効果、小テスト 11. 非線形光学の基礎 12. 非線形光学現象 13. 非線形光学現象 14. 非線形光学デバイス、小テスト 15. レーザ機器に関する安全 16. 期末試験

【成績評価】講義への取り組み状況(15%)、レポート(10%)、小テスト(25%)、期末試験(50%)により評価する。総合評価の60%を合格とする。

【JABEE 合格】単位合格と同一である

【学習教育目標との関連】学科の学習目標 B

【教科書】前田三男著「量子エレクトロニクス」、昭晃堂、1987

【参考書】末松安晴、上林利生共著「光デバイス演習」、コロナ社、1986、レーザ技術総合研究所編「レーザーの科学」、丸善、1997

【対象学生】他学科学生も履修可能

【連絡先】原口雅宣TEL:088-656-9411, E-mail:haraguti@opt.tokushima-u.ac.jp

【備考】波動光学と量子力学を履修していることを前提として講義する。それらの基礎知識なしではレーザの動作原理を理解できない可能性が高い。

労務管理

Personnel Management

非常勤講師・井原 康雄 1 単位

【授業目的】世界の市場で生き残る為にヒトをどのように動かしているかを理解する。

【授業概要】企業経営は、経営資源(ヒト・モノ・カネ・情報)を効率よく、かつタイムリーに配置し最大の効果(利益と持続性)を求めて活動する。世界のトップを走り続ける日本のモノ作りの中で人的資源をいかに活用しているかについて講義する。講義計画に従い労務管理の重要項目について最新のトピックスを織り込みながら進める。

【授業計画】1. 組織と職務分掌 2. 人事管理(異動、人事考課) 3. 労働基準法 4. 労使関係 5. 能力開発、教育訓練 6. 安全衛生 7. 中間及び最終レポート(労務管理のまとめ)

【成績評価】講義への取り組み状況(80%)、レポートの内容(20%)で評価し、全体で60%以上を合格とする。

【JABEE 合格】JABEE 合格は単位合格と同一とする。

【学習教育目標との関連】C

【教科書】その都度、提供する。

【参考書】島田信義「新 労働基準法」学習の友社、荻原勝「人事・労務実務全書」日本実業出版社

【対象学生】開講コース学生のみ履修可能

5) アウトカムズ評価について

アウトカムズ (outcomes) ということばを、諸君はまだ聞き慣れないと思う。アメリカから導入された概念であり、正直なところまだ日本では定着していない。アウトプット (output) に対して用いられることばである。アウトプットとは、たとえば 60 点以上の得点を取ってその教科の単位を獲得し、所定の単位数をそろえて卒業するということであるが、アウトカムズは単に単位をそろえるというのではなく、その中身をいう。大学で学習したことがどれだけ実際に身について、それがいかに有効に利用できるかということであり、諸君の学習の質とその成果を指す。工業技術者として活躍するのに必要な基礎学力、応用力や指導力、また、工業技術者としての見識、判断力、コミュニケーション力、倫理観など総合的にもものを見る力を指す。あるいは、新しい課題を探求する能力、その課題を解決するための対応策を企画・立案し実行する能力、また、グループを指導する能力ということもできる。

工学部の教育は各学科の教育理念にしたがってさまざまな目標がある。その目標に向かって教育プログラムが生まれ、4 年間の教育を経過することにより、それぞれの分野で活躍できる技術者に育て上げられる。また、諸君も大学に入学してそれぞれの目標を持っていることだろう。4 年間の学習によって、そのように設定された目標にどれだけ近づいたかという達成度をもってアウトカムズということもできる。ただ、その目標が大学を卒業して社会に貢献できる技術者としての高い目標でなければならないことは言うまでもない。いずれにしても、アウトカムズそのものがかなり抽象的な意味合いをもち、目で見えないような尺度であることは間違いない。単に多くのことを知っているということではなく、知識を基礎にして新しい問題に挑戦しそれを解決していく知恵といえよだろう。知恵を育むことが大学教育のもっとも大切にしているところである。

工学部では新しい工学教育に向けての改革の中で、社会の動向や入学してきた学生の質を考慮した上で、諸君のアウトカムズをいかに高めるかという教育方法を模索している。これまではアウトプットを中心に学生の学習能力を評価してきたのに対して、これからはアウトカムズを中心とした評価を行う。これをアウトカムズ評価という。一夜漬けで勉強して解答を覚え、あるいは友達の解答のコピーを丸暗記して試験に向かっても、試験が終わればすぐに忘れ去ってしまうといった経験があるだろう。合格点をもらっても実力としては何もついていないのである。日頃の定常的な学習の積み上げが着実に自分の基礎を築き、少しずつ応用力を高めていく。工学部ではそのような日常の学習態度とその中身を評価して諸君の 4 年間の向上の度合いを観察していく。

6) 成績評価システムについて (点数評価および GPA 評価)

諸君の成績を評価するのに二つの方法がある。点数評価と GPA 評価である。点数評価は 100 点満点に対して何点獲得したかということであり、徳島大学では 60 点以上で合格、それ未満では不合格ということになる。また、60 点以上とったものについて、80 点以上を優、79 点から 70 点までを良、69 点から 60 点までを可に区分する。60 点というのは最低基準であり、合格したからといってその教科で学んだことを自由に使いこなせるというわけではない。やはり、優を目指して日頃の学習を怠らないようにすべきである。つぎに、GP(Grade point) という概念を紹介しよう。GP とは 100 点満点で評価したときの得点を P_t として

$$GP = \frac{P_t - 50}{10}$$

で定義し、小数点以下一桁まで表示する。ただし、 $P_t < 60$ の場合は不合格であるので $GP = 0$ と決めておく。すなわち、合格最低点の 60 点が $GP = 1.0$ であり、100 点満点が $GP = 5.0$ に相当する。こうして諸君の受講したそれぞれの科目に対して GP の値が計算される。さらに、GPA(Grade Point Average) をつぎの平均式で定義する。科目 i の GP を GP_i 、その科目の単位数を n_i 、履修登録した単位数の合計を $N = \sum_i n_i$ とすると、

$$GPA = \frac{\sum_i GP_i \times n_i}{N}$$

である。ただし、平均をとるために「履修登録した単位数の合計」で割っていることを特に注意してほしい。履修登録はしたけれど途中でその科目を放棄してしまうとすれば、その科目の GP を 0 と数えて平均をとるから GPA は思った以上に低くなる。履修登録数が多すぎて日頃の学習に耐えられなくなり、授業は適当に出席して試験を受けたものの思った得点が得られなかったりした場合も GPA は低くなる。GPA は諸君が履修登録した全科目の GP 得点を平均したものであり、GPA が 5.0 に近ければ学習の成果がよく、1.0 に近ければ合格はしたもののその中身が薄いと評価される。もちろん、GP 得点に 0 が多いと GPA が 1.0 以下になることもあり得る。GPA が 1.0 以下になれば大学生としての資質を失いかねない。自分の目標をしっかりと定めて、学期のはじめに十分な学習計画のもとにどの科目を選択するかを決めるべきである。

このように、日常の学習と最終試験結果を総合して、各科目の GP に基づき GPA を明らかにして学習成果を評価し、諸君のアウトカムズを高めるように学習指導をする仕組みを GPA 評価システムと呼んでいる。アウトカムズは日常の学習努力によって積み上げられていく。したがって、GPA 評価の基礎になっている P_t の値は単に期末試験の得点のみで評価されるのではない。日常の授業の中で、レポートや小テスト、また教室内での発表や討論など、さまざまな記録によって総合的に評価がなされる。予習と復習を通じて 1 単位分に 45 時間の学習がしっかりとされているかどうかはその評価の鍵になる。教室で学習したことを忘れないうちに自分でもう一度整理し、理解できなかったことがらを自己学習により確実に明らかにし補足していくことが大切である。そのために図書館があり、オフィスアワーがもうけられており、また、君のとなりに友人がいる。これらを活用して常に自分で学習する能力を付けるべきである。

7) 教育職員免許状取得について

昼間コース・夜間主コース

高等学校教諭一種免許状（工業）を取得しようとする者は、徳島大学工学部規則に定める卒業単位のほか、職業指導 4 単位を取得しなければなりません。

なお、教育職員免許状取得に当たっては、「日本国憲法」を取得する必要があるため、日本国憲法を講義する教養科目の「法律学」（昼間コース学生は、憲法と人権Ⅰ、憲法と人権Ⅱのうちいずれか 2 単位・夜間主コース学生は、「法律学」の別途掲示する授業科目 2 単位）を履修し、さらに、体育 2 単位（健康スポーツ演習 1 単位・健康スポーツ実習 1 単位）、外国語コミュニケーション 2 単位（英語（2）2 単位）および情報機器の操作 2 単位（次の表のとおり）を履修しなければなりません。

表 情報機器の操作に関する科目

学 科	授 業 科 目	単 位	備 考
建設工学科（昼間コース）	情報処理（必修）	2 単位	
機械工学科（昼間コース）	CAD 演習（必修）	1 単位	
	C 言語演習（選択）	1 単位	
化学応用工学科（昼間コース）	電子計算機概論及び演習（選択）	2 単位	
電気電子工学科（昼間コース）	プログラミング演習 1（選択必修）	1 単位	
	プログラミング演習 2（選択必修）	1 単位	
知能情報工学科（昼間コース）	コンピュータ入門 1（必修）	2 単位	
	コンピュータ入門 2（選択）	2 単位	
生物工学科（昼間コース）	電子計算機概論及び演習（選択）	2 単位	
光応用工学科（昼間コース）	プログラミング言語及び演習（必修）	2 単位	
建設工学科（夜間主コース）	情報処理（選択）	2 単位	
機械工学科（夜間主コース）	C 言語演習（必修）	1 単位	
	CAD 演習（選択）	1 単位	
化学応用工学科（夜間主コース）	電子計算機（選択）	2 単位	
電気電子工学科（夜間主コース）	プログラミング言語 1（選択）	2 単位	いずれか 1 科目 取得すること。
	プログラミング言語 2（選択）	2 単位	
知能情報工学科（夜間主コース）	コンピュータ入門 1（必修）	2 単位	
	コンピュータ入門 2（選択）	2 単位	
生物工学科（夜間主コース）	電子計算機（選択）	2 単位	

（注）

1. 職業指導 4 単位は、卒業資格単位に含みません。
2. 教育職員免許状取得に当たっての工学部における専門教育科目の必要単位数は、教育職員免許法は 59 単位以上（職業指導 4 単位を含む。）となっている。
3. その他の詳細については、学務係に照会してください。

教育職員免許状取得に関係のない専門教育科目

教育職員免許法の 59 単位に含まれない専門教育科目は次のとおりです。

- 各学科共通科目
卒業研究，課題研究，特別研究，雑誌講読，輪講，特別講義，セミナー，工業基礎数学Ⅰ，工業基礎英語Ⅰ，工業基礎物理Ⅰ
- 建設工学科（昼間コース）
公共計画学，生態系工学

- 建設工学科（夜間主コース）
公共計画学
- 化学応用工学科（昼間コース）
化学序論 1，化学序論 2，基礎物理化学，基礎無機化学，基礎有機化学，物理化学，無機化学，有機化学，生化学，生物物理化学
- 化学応用工学科（夜間主コース）
無機化学 1，無機化学 2，無機化学 3，有機化学 1，有機化学 2，有機化学 3，物理化学 1，物理化学 2，物理化学 3，生化学 1，生化学 2
- 知能情報工学科（昼間コース）
国際経営論
- 生物工学科（昼間コース）
物理化学 1，物理化学 2，有機化学 1，有機化学 2，化学英語基礎，生化学 1，生化学 2，生化学 3，発生工学，微生物学 1，微生物学 2，生物物理化学 1，生物物理化学 2，生物無機化学，生物有機化学，分子生物学，タンパク質工学，細胞生物学，生物・生命関連法規，食品化学，専門外国語コミュニケーション
- 生物工学科（夜間主コース）
無機化学 1，無機化学 2，物理化学 1，物理化学 2，物理化学 3，生物有機化学 1，生物有機化学 2，生物有機化学 3，生物物理化学，生化学 1，生化学 2，微生物学，細胞生物学，分子生物学

8) 学生の基礎学力向上のための特別講義時間割

主に1年次に在籍する学生を対象にして基礎学力向上のための特別講義を次のような日程で開講します。これは工学の基礎となる数学、英語および物理の学力を向上させ、専門教育科目の理解を助けるもので、専門教育をスムーズに受けることができるようにした導入的な講義です。昼間コースおよび夜間主コースの学生に関わらず受講するようにしてください。

曜日等		学 期			1 年次前期	講義室
土 曜 日	4月17日(土)	18:00～19:30	11～12 講時	2 時間	工業基礎英語 I	K205
	8月6日(土)	19:40～21:10	13～14 講時	2 時間	工業基礎数学 I	K205

実施日 4月17日(土)・24日(土)・5月8日(土)・15日(土)・22日(土)・29(土)
 6月5日(土)・12日(土)・19日(土)・26日(土)
 7月3日(土)・10日(土)・17日(土)・24日(土) 8月6日(金)

曜日等		学 期			1 年次前期	講義室
夏 季 休 業	8月16日(月)	18:00～19:30	11～12 講時	2 時間	工業基礎物理 I	K205
	9月3日(金) 土・日曜日 を除く					

第2章

学生への連絡及び諸手続き

学生への連絡及び諸手続き

事務室の窓口業務時間は、平日（日・土・祝日を除く。）の 8:30～17:00(12:00～13:00 を除く)（昼間）と 17:00～21:30（夜間）です。夜間の窓口業務は授業期間のみとなっていますので注意してください。

事務分掌は次のとおりとなっていますので、必要とする所要事項についてそれぞれ各担当係の窓口へ相談及び申込み等をしてください。

なお、工学部事務室の〔学務係〕は、諸証明発行申請などの事務のほか、諸君の相談窓口として遠慮せずにご利用してください。

学務係

以下の事項については、学務係（共通講義棟 1 階）に申込み等を行ってください。

1. 各種証明書類
 - (a) 成績証明書
 - (b) 卒業見込証明書
 - (c) 修了見込証明書
 - (d) 単位修得証明書
 - (e) 他大学受験許可書
2. 学生の入学・卒業及び修了に関すること。
3. 成績管理に関すること。
4. 授業関係及び期末試験等に関すること。
5. 研究生及び科目等履修生等に関すること。
6. 教員免許に関すること。
7. 学位に関すること。
8. 講義室の管理に関すること。
9. 学生の休学・復学及び退学等に関すること。
10. 転学部及び転学科に関すること。

学務部

以下の事項については、学務部（共通教育 B 館 1 階・学生会館）に申込み等を行ってください。

1. 各種証明書類
 - (a) 学校学生生徒旅客運賃割引証
 - (b) 通学証明書
 - (c) 学生証
 - (d) 健康診断書
 - (e) 在学証明書
 - (f) 卒業証明書
 - (g) 修了証明書
2. 各種奨学金に関すること。
3. 入学料及び授業料免除に関すること。
4. 学生の健康管理に関すること。
5. 合宿研修及び課外活動に関すること。
6. 学生の就職に関すること。

学生への通知・連絡方法

大学が学生に対して行う一切の告示・通知・連絡等は、原則としてすべて掲示により伝えることとなっています。

したがって、掲示板は諸君の学生生活と密接なつながりがあり、新しい掲示が次々に出されるので1日1回は、工学部掲示板（K棟1階の西側玄関ホール）及び各学科の掲示板を必ず見るように習慣付け、自己に不利益な結果を招かないようにしてください。

なお、掲示期間は1週間です。

1) 学生証 担当 学務部学生課

学生の身分を証明するものですので、常時携帯してください。

試験の受験時、成績の受領時、附属図書館への入館、図書の閲覧・借出、学生割引乗車券及び定期券の購入時等のすべてにわたり、身分の確認に必要です。また、本学の教職員より提示請求があった場合はいつでも提示すること。

万一、汚損又は紛失した場合は直ちに所定の手続きを取り再交付を受けること。

2) 各種証明書の発行

各種証明書の発行申請については、所定の『証明書交付願』により必要とする日の3日前（申請日、日、土曜日及び祝日は除く。）までに、手続きをしてください。

“証明書交付願”等の必要関係書類は担当係で交付を受けてください。

1. 学生旅客運賃割引証（学割証） 担当 学務部教務課

学割証は、修学上の経済的負担の軽減と学校教育の振興に寄与することを目的として設けられた制度です。教務課にある証明書自動発行機により入手できます。この制度を十分に理解し、他人に譲渡したり不正使用等を絶対しないようにすること。

(a) 1回の申請時の発行枚数は、原則として5枚以内です。

(b) 学割証の発行は、原則として次の目的により旅行する場合です。

- 休暇等による帰省
- 正課の教育活動（実習を含む。）
- 課外活動
- 就職又は進学のための受験等
- 見学又は行事等への参加
- その他大学が修学上適当と認めた教育活動

2. 通学証明書 担当 学務部教務課

- 通学定期券購入のみに発行します。
- 通学以外のアルバイト等には使用しないこと。

3. 在学証明書 担当 学務部教務課

教務課にある証明書自動発行機により入手できます。

4. 成績証明書等 担当 工学部学務係

成績証明書、卒業見込証明書、単位修得証明書等

必要とする理由及び提出先は、具体的に記入してください。

（ただし、2年前期までは、学務部共通教育係で発行申請してください。）

5. その他必要とする証明書

その都度、担当係へ相談してください。

3) 休学，復学，退学等の手続き

休学，復学，退学等を希望する学生は，就学上いろいろな問題が生じるので事前に，必ず各自の所属する学科のクラス担任又は学生委員とよく相談して，生じると考えられる問題について助言指導を受けてください。

学生 → 所属学科のクラス担任又は学生委員に相談 → 学務係で所定用紙の交付を受ける
→ 願出用紙に所属学科の認印 → 学務係へ提出

1. 休 学

- (a) 疾病その他一身上の都合により2か月以上就学できないときは，医師の診断書（疾病）又は詳細な理由書（一身上の都合）を添えて学長に願い出て，その許可を受けて休学することができます。
- (b) 休学は，1年を超えることができない。ただし，特別な理由がある者には更に引き続き1年以内の休学を許可することがあります。
- (c) 休学期間は，通算して4年を超えることはできません。
- (d) 休学期間は，在学期間に算入しません。

注) 休学者の授業料

休学を許可された者は，授業料が次のように免除されます。

ア 休学願の受理された日が3月，4月，9月又は10月の場合は受理日の翌月から休学期間に応じた月割計算による授業料が免除されます。

イ 休学願の受理された日がア以外の月の場合は，受理日の属する期の授業料は徴収されます。

ウ 納付済の授業料は返還されません。

2. 復 学

休学期間中にその理由が消滅した時は，学長の許可を得て復学することができます。ただし，その理由が疾病による場合は医師の診断書を必要とします。

3. 退 学

退学しようとする時は，退学願に詳細な理由書を添えて提出し，学長の許可を得なければなりません。退学願を提出するその学期の授業料未納者は，退学願は提出できません。

注) 退学者の授業料

退学しようとする者は，退学を許可された日の属する期の授業料は徴収されます。

4. 他大学受験について

本学部に在籍して他大学の受験を希望する者は，事前に『他大学受験許可願』を提出して，受験許可を受けなければなりません（許可書の発行までには2週間を必要とします）

- 受験の結果は，速やかに所属学科のクラス担任又は学生委員に報告すること。
- 合格した大学へ入学する場合は，直ちに退学の手続きをすること。

5. 転学部・転学科

希望者は転学部願又は転学科願を提出し，当該学部の教授会の議を経て学長が許可することがあります。

転学部 → 事前に希望する学部の担当係へ相談すること。

転学科 → 毎年12月下旬に掲示する。

6. 改姓（名）届

変更があれば，直ちに所定の届出用紙により報告してください。

4) 除 籍

次の各項目の一に該当した場合は，教授会の議を経て学長が除籍します。

1. 入学料の免除を不許可とされた者又は半額免除を許可された者であって、納付すべき入学料を学長が指定する期日までに納付しない者。
2. 正当な理由がなく授業料の納付を怠り、催告しても、納付しない者
3. 学則に定める在学期間を超えた者（工学部は通算で8年間）
4. 学則に定める休学期間を超えた者（工学部は通算で4年間）
5. 疾病その他の理由により成業の見込みがないと認められる者

5) 試験における不正行為に対する措置要項

試験における不正行為は学生の本分に反する行為であり、絶対しないでください。

不正行為を行った者に対しては次の措置を講じます。

1. 授業科目修了の認定に関する試験（追試験・再試験を含む。）で不正行為（ほう助を含む。）をした者に対しては、学則第52条の規定により懲戒処分を行います。
2. 試験において不正行為をした者に対しては、その学期中に履修した全授業科目の成績を取り消し、改めて所定の授業科目を履修させます。

6) 授業料納付、免除制度及び奨学金制度

1. 授業料納付

授業料は、前期分（4月～9月）と後期分（10月～3月）に区分し、次の期間に納付してください（入学手続きの際に納付した者は除く。）

前期分 → 4月1日から4月30日まで（新入生にあっては、入学許可日から4月30日まで）

後期分 → 10月1日から10月31日まで

納付方法 → 授業料代行納付（預金口座からの引落としによる納付）

2. 授業料免除制度

奨学援助の方法として、授業料免除の制度があります。これは経済的な理由によって授業料の納付が困難であり、かつ、学業優秀と認められる者、また、各期ごとの納期前6ヶ月（新入生は1年）以内での学資負担者の死亡もしくは風水害等の災害を受け、授業料の納付が困難であると認められた場合には、前期・後期ごとに選考のうえ、授業料の全額または半額が免除されます。

なお、この制度の適用を受けるためには授業料免除申請手続きが必要です。

手続き方法については、各学部・学務部及び全学共通教育の掲示板に、前期分は2月上旬、後期分は7月上旬に掲示するので注意してください。

3. 奨学資金制度

《日本学生支援機構》

日本学生支援機構は、人物、学業ともに優秀かつ健康であって、学資の支弁が困難と認められる者に対して、貸与し、人材の養成と教育の機会均等の実現を図ろうとするものです。

奨学金の種類には『第一種奨学金（無利子）』及び『きぼう21プラン奨学金（有利子）』があります。

奨学生の募集については、その都度学生用掲示板に掲示しますが、春の定期募集は4月にあります。

- 注
1. 奨学生は、「奨学生のしおり」を熟読し、奨学生としての責務を果たし、異動等が生じた時は速やかに所定の手続きをとること。
 2. 奨学金継続願の提出
奨学生は、毎年所定の月（10月頃）に継続願を提出し、審査を受ける必要がある（変更される場合があるので、掲示を注意して見ること。）これを怠ると、奨学生の資格を失うので注意すること。

《日本学生支援機構以外の奨学金》

地方公共団体及びその他の奨学金の募集が毎年3月～5月頃あるので、学生用掲示板を見てください。

7) 学生教育研究災害傷害保険

大学の教育研究活動中及び通学中等に、不慮の災害事故により身体に傷害を被った場合、事故の日時、場所、状況、傷害の程度を、事故通知はがき（学生課学生会館にあります）により保険会社へ届け出てください。事故の日から30日以内に届け出のない場合は、保険金が支払われない場合がありますので注意してください。

8) 学生金庫

学生で、学資金の窮迫している者又は緊急の出費を必要とする者に対して一時援助をするために行う貸付金の制度です。詳細に関しては学務部学生課へ相談してください。

1. 貸し付け限度額は5口（1口 10,000円）までとします。
2. 貸し付け期間は、貸し付け日より60日以内とします。
3. 貸付金は無利子・無担保とします。

9) 住所変更届

学生への連絡は、原則として掲示によるが、緊急を要する場合の連絡等に必要とするので変更があれば直ちに届け出てください。

保証人が住所変更した時も同様に『保証人住所変更届』により届け出てください。

10) 講義室の使用について

授業及び大学の行事等に差し支えないときに限り、使用許可を受けたのちに課外活動等に使用することができます。使用許可申請は、使用日の3日前までとします。

11) 健康管理

定期健康診断は、保健管理センターの実施計画に基づき、附属病院医師の協力を得て実施しています。

毎年4月下旬から5月下旬にかけて学部学年ごとに日を決めて行っています。これは、学校保健法で定められているものであるから必ず受診してください。

12) 交通事故の防止

最近、学生の交通事故が多発しています。

本学学生の中にも交通事故の当事者となり、身体的及び精神的な打撃を受けて就学に支障を来している者がいるので、交通法規を守り交通事故防止に細心の注意を払うよう努めてください。

また、工学部では交通事故防止、良好な教育・研究環境を保持するため、以下のような自動車通学、構内におけるオートバイの走行、オートバイ及び自転車の駐輪等の規制を行っているため、厳守してください。

駐輪場及び駐車場は別添配置図を参照のこと。

下記の項目を守ってください。

1. オートバイは、通学登録をし所定の『ステッカー』を貼った車輛のみ入構を許可し、専用出入口から入構し、専用駐輪場に整然と駐輪してください。また、構内の走行は禁止します。
駐輪及び走行違反を繰返す車輛は、許可を取り消します。
オートバイの登録については、所属学科の交通安全対策委員へ申請してください。
2. 自転車は、必ず所定の専用駐輪場へ整然と駐輪してください。

建物玄関付近及び通路等への不法な駐輪を繰返した場合には乗入れを禁止します。

3. 自動車通学は、原則として禁止します。

正当な理由により登録して許可された車は、専用駐車場へ駐車してください。

万一、交通事故が発生した場合は、当事者は加害者・被害者を問わずその所属学科のクラス担任及び学生委員に事故の内容を報告するとともに、交通事故報告書を学務部学生課へ届け出てください。

13) そ の 他

1. 学生の電話口への呼び出しは一切行わないので、家族、知人等にも周知しておいてください。

2. 学生個人宛の郵便物等は、原則として取り扱いません。

3. すべての建物内での喫煙は禁止します。喫煙は、屋外の指定場所でしてください。

4. 盗難には十分注意し、貴重品等の所持品は、自己管理してください。

5. 学内における交通事故、盗難被害、遺失物及び拾得物は、速やかに学務係まで届け出てください。

6. 火気には十分に注意してください。

第3章

学生の人権・教育相談等のための体制

1) セクシュアル・ハラスメントの発生防止のために

教育の現場において、セクシュアル・ハラスメントは決してあってはならないことですが、教員と学生との間、職員と学生との間、上級生（院生）と下級生との間等には教える側と教えられる側 といういわば上下関係または力関係があることにより、セクシュアル・ハラスメント問題が発生する恐れがあります。

学生は、自らがセクシャル・ハラスメントの被害にあわない、引き起こさないという問題意識を常に持ち続けることが、社会人となって仕事をする上でも、また、21世紀の我が国の男女共同参画社会の実現のためにも重要です。

工学部では、セクシュアル・ハラスメント問題が発生しない教育環境の中で学生が教育を受けることができるよう人権・教育相談体制を整備し、次のようなセクシュアル・ハラスメントに対するガイドラインを設けました。

工学部では、学生のためのセクシュアル・ハラスメントに対する相談室を設けております。セクシュアル・ハラスメントは巧妙に行われ、罪がないように見える場合もあります。相談室では、プライバシーは厳重に守られておりますので、もしあなたがセクシュアル・ハラスメントの被害にあったら迷わずに相談室に相談してください。相談員はいつでも相談に応じますので、下記の電話番号に電話をするか、直接相談員に面会してください。

セクシャルハラスメント・相談室

相談員： 松田佳子 (Tel: 656-7523), 任 福継 (Tel: 656-9684),
村上理一 (Tel: 656-7392), 本仲純子 (Tel: 656-7409)

セクシュアル・ハラスメントとされる行為には、次のようなものがあります。

1. 言葉によるセクシュアル・ハラスメント

例) 講義の最中、A教授はいつも卑猥な冗談を言う。女子学生の一人が笑わないでいると、「君には冗談が通じないね。」と一言。彼女は抗議したいが成績評価が悪くなるのを恐れて我慢している。

言葉によるセクシュアル・ハラスメントとしては、「いかがわしい冗談」の他にも「固定的な性別役割意識に基づく言葉」や「肉体的な外観、性行動、性的好みに関する不適切な言葉」などがあります。性的なからかい、冷やかし、中傷などもこれに相当します。

2. 視線・動作によるセクシュアル・ハラスメント

例) 実験室のB助手は、個別指導の最中にある女子学生の手を握った。学生はショックで動くことができなかった。それからというもの、実験の最中に彼はじっと彼女を見つめるようになった。彼女が気付くと目配せをする。彼女は悩み続け、ストレスから勉学意欲もなくなってしまった。

この種のハラスメントは軽く判断されがちです。しかし、それを受ける被害者自身にとっては大きな苦痛であり、精神的なストレスになる場合があります。

3. 行動によるセクシュアル・ハラスメント

例) 卒業指導の最中に、ゼミのC教授はある女子学生をデートに誘った。彼女が誘いを断ると「指導する気がなくなった。あなたは本当に卒業したいのですか。」と含みのある言葉を返した。彼女は卒業ができなくなるかもしれないという予期せぬ事態に狼狽した。

例) D教授は、コンパの席ではいつも女子学生を自分の隣に座らせ、酒の酌をさせている。女子学生は、D教授の機嫌を損ねないように笑顔で受け答えをしているが、心の中では激しい嫌悪感を感じている。

例) EとFは同じ研究室の大学院生である。EはFに交際を申し込んだが断られた。しかしEは諦めない。Fに毎晩電話をし性的な言葉を投げかける。留守電に性的な意味を含んだメッセージを入れる。最近ではFの後をつけ回し始め、Fはすっかりおびえてしまっている。

ここに挙げた例以外にもいろいろなセクシュアル・ハラスメントが考えられます。

2) アカデミック・ハラスメントの発生防止のために

アカデミック・ハラスメントも重大な人権侵害です。それは就学場で「指導」、「教育」または「研究」の名を借りて、嫌がらせや差別をしたり、人格を傷つけることです。例えば、

- * 相手によって差別したり、必要以上に厳しく指導したりする。
- * 「おまえはやっぱりダメだ」と全てを否定する言い方を繰り返す。
- * 指導の際に「大学をやめろ」とか、「卒業させない」と言う。
- * 女性に対して差別的言動や処遇をしたり、指導を放棄したりする。

セクシュアル・ハラスメントもアカデミック・ハラスメントも、教員と学生の間だけではなく、サークルやゼミの先輩と後輩、同級生同士であっても許されません。

その他に「一気飲みの強要」や「ストーカー行為」も人権侵害となります。

3) 工学部における相談体制

学生は、将来の工学技術者に備えて工学部において専門科目を学ぶわけですが、さらに数多くの友人、先輩、あるいは後輩との課外活動、合宿研修あるいは学外行事を通じてグループとしての共同活動並びに社会勉強を経験しながら人間的に成長し自律した社会人となる準備をすることになります。しかし、いつも満たされた学生生活を送るわけではなく、学生は学業や進路の悩み事、人間関係の悩み事など多くの悩みを抱えることが少なからずあります。工学部では、このような学生生活における問題の解決に当たるために、各学科に教務委員、学生委員及びクラス担任を置き、学生の相談に応じております。それぞれの担当教員の氏名は、年度始めに掲示されることになっています。学生は、悩みを抱えた時には、学科の担当教員に相談してください。

また、工学部では、工学部全体として学生生活に対する学生支援のための「学びの相談室」があります。これは、学生が抱える学習上の悩みや相談に応じ、学生生活をより豊かなものとし、自立した技術者の育成を目的に工学部で設立されたものです。「学びの相談室」では、専門職員と各学科からのT Aを配置し、相談内容によっては、下記の徳島大学の「学生相談室」や「保健管理センター」などとも連携をとりながらよりきめ細かな相談体制に応じております。各学科からのT Aも対応していますので学科単位での学習履修上の問題に対する相談から、修学・進路・就職に対する助言や、精神、身体的な悩みなどに関しては専門のカウンセラーが対応できるようにしています。相談の秘密は厳守されます。

このような相談体制で対応していますので、悩みを抱えた時には、一人で悩まないで、学科の担当教官や「学びの相談室」に遠慮なく気軽に相談に来るようにしてください。

学びの相談室：工学部共通講義棟 5 F（電話：656-9829）
(e-mail: manabi1@kg.tokushima-u.ac.jp)

4) 学生相談室における相談体制

徳島大学には、学生相談室が設けられており、学業や進路の悩み事、経済的な悩み事、人間関係上の悩み事など、学生のさまざまな相談に各学部の複数の教員（学生相談員、人権問題相談員、学内カウンセラー、法律アドバイザー）また、学外カウンセラーが対応しています。工学部からは8名の教員がその相談に当たっています。相談の秘密は厳守されますので、悩み事が生じた場合にひとりで悩むことなく、気軽に相談室を利用してください。学生相談室には受付担当者が常駐しています。相談のある学生は、まず学生相談室で相談内容を簡単に説明すると相談員の中からその内容に応じた最適の相談員を紹介してもらえます。

学生相談室：共通教育棟 B 館 1 F（電話：656-7637）
(e-mail: gkseisod@jim.tokushima-u.ac.jp)

第4章

工学部構内における交通規制実施要項

徳島大学工学部構内における交通規制実施要項

(目的)

第1条 この要項は、徳島大学工学部構内(以下「構内」という。)における交通安全と無秩序駐車防止のために必要な事項を定め、もって教育・研究のための環境の維持、保全を図ることを目的とする。

(入構規制)

第2条 自動車(オートバイ(自動2輪及び原動機付自転車をいう。以下同じ。))を除く。以下同じ。)により入構できる者は、次の各号の一に該当する者とする。

- (1) 工学部、附属図書館及び構内の学内共同利用施設に勤務する教職員で構内駐車場の駐車許可証(以下「駐車許可証」という。)の交付を受けた者
- (2) 工学部、大学院工学研究科の学生及び研究生等で駐車許可証の交付を受けた者
- (3) 構内の福利厚生施設等に勤務する者で駐車許可証の交付を受けた者
- (4) 共同研究、研修等のため一定期間構内を訪れる者で駐車許可証の交付を受けた者
- (5) 非常勤講師として構内を訪れる者で駐車許可証の交付を受けた者
- (6) 商用のため定期的に構内を訪れる者で駐車許可証の交付を受けた者
- (7) 用務のため構内を訪れる者

(駐車許可申請の基準)

第3条 駐車許可申請の基準は、次の各号に掲げるところによる。

- (1) 公共の交通機関を利用することが著しく困難である等の理由により自動車による通勤又は通学を必要とする者
- (2) 身体的理由により、自動車による通勤又は通学を必要とする者
- (3) その他、特別な事情により自動車による通勤又は通学を必要とする者

(駐車許可証の交付申請手続き)

第4条 前条各号の一に掲げる者で駐車許可証の交付を希望する者は、駐車許可証交付申請書(以下「交付申請書」という。)(様式1号)を徳島大学工学部構内交通安全対策委員会(以下「委員会」という。)へ提出するものとする。

(駐車許可証の交付決定等)

第5条 委員会は前条の交付申請書を審査し、構内駐車場の収容能力等を勘案して駐車許可証(様式2号)の交付を決定するものとする。

2 駐車許可証の交付が決定された者には、交付を受ける者の負担により、駐車許可証及びステッカーを発行する。

3 駐車許可証の交付を受けた者が申請内容に変更を生じたときは、速やかに届け出るものとする。

(許可証等の有効期限)

第6条 駐車許可証の有効期限は、交付を受けた当該年度内とする。

(駐車許可の失効)

第7条 転退職、卒業及び退学等により許可の理由が消滅したとき並びに許可の期限が過ぎたときは、速やかに駐車許可証及びステッカーを返却するものとする。ただし、駐車許可証及びステッカーの発行費用は返却しない。

(入構整理券の交付)

第8条 第2条第7号に掲げる者は、入構時に駐車整理員から入構整理券(様式3号)の交付を受け、出構時にこれを返却するものとする。ただし、タクシー、宅配車で短時間のものは入構整理券の交付を受けず、駐車することを認めるものとする。

(特別整理券による出入構)

第9条 工学部、大学院工学研究科の教職員、学生及び研究生等で臨時に入構しようとする場合には、あらかじめ特別整理券交付申請書(様式4号)を委員会へ提出するものとする。

(特別整理券の交付)

第10条 委員会は前条の交付申請書を審査し、特別整理券を交付するものとする。

(交通規制)

第11条 構内の交通規制の円滑な実施を図るため、自動車の構内への出入りは、正門のみとし遮断機（以下「ゲート」という。）により規制するものとする。

2 ゲートの作動時間は、終日とする。

（遵守事項）

第12条 自動車により入構し、構内を通行する者は、次の各号に掲げる事項を遵守しなければならない。

- (1) 歩行者の安全を確認し、交通標識及び標示に従うこと。
- (2) 構内は徐行運転とし、騒音の防止に努めること。
- (3) 指定された駐車場以外には駐車しないこと。
- (4) 駐車整理員の指示に従うこと。
- (5) 駐車許可証を他人に貸与若しくは譲渡し、又は記載事項の書き換えをしないこと。
- (6) ステッカーは、ルームミラー裏面に貼付すること。
- (7) 緊急事態、その他特別な事由で臨時的規制を実施する場合は、これに従うこと。

（オートバイによる入構）

第13条 通学及び通勤のためオートバイにより入構する者は、オートバイ通学・通勤許可申請書（以下「許可申請書」という。）（様式5号、様式6号）を委員会へ提出し、入構許可を得るものとする。

（オートバイによる入構許可）

第14条 委員会は、許可申請書を審査し入構を許可するものとする。

2 入構を許可された者にはステッカーを交付する。

3 入構許可の有効期限は、交付を受けた当該年度内とする。

（オートバイによる構内への入構）

第15条 オートバイによる構内への出入りは所定の通用門のみとし、他の通用門からの出入りは禁止する。

（遵守事項）

第16条 オートバイで入構する者は、次の各号に掲げる事項を遵守しなければならない。

- (1) 駐輪場とこれに至る道路として指定された範囲以外の構内への乗入れは禁止する。
- (2) 指定された駐輪場以外には駐輪しないこと。
- (3) 通用門から所定の駐輪場までは徐行運転とし、騒音の防止に努めること。
- (4) 駐車整理員の指示に従うこと。
- (5) 緊急事態、その他特別な事由で臨時的規制を実施する場合は、これに従うこと。

（違反者に対する措置）

第17条 この要項に違反したときは、駐車許可又は入構許可の取消し等の措置をすることができる。

（損害賠償の責任）

第18条 工学部及び附属図書館は、構内で発生した自動車等の盗難、損傷及びその他一切の事故について、その責を負わない。

附 則

1 この要項は、平成14年4月1日から実施する。

2 徳島大学工学部構内交通規制実施要項（平成元年12月7日工学部長制定）及び徳島大学工学部構内交通規制実施細目（平成元年12月7日工学部長制定）は廃止する。

徳島大学工学部構内における交通規制実施要項の実施に関する申合せ

（駐車許可申請の基準）

1 駐車許可申請をすることができる基準は次のとおりとする。

(1) 教職員

通勤距離が片道4kmを超える者で、かつ、自動車による通勤手当を受給している者

(2) 学 生

ア 昼間において授業を受ける工学部及び大学院工学研究科の学生（研究生を含む。）については原則として禁止とするが、身体的理由、その他特別な理由がある者はこの限りでない。

イ 主として夜間において授業を受ける工学部及び大学院工学研究科の学生については、有職者で、かつ、住居及び職場からの通学距離が片道4kmを超える者

(3) 構内の福利厚生施設等に勤務する者

通勤距離が片道 4km を超える者で、自動車による通勤を必要とする者

(4) その他

身体的理由、その他特別な理由がある者

(駐車許可証の交付申請)

2 要項第 2 条第 1 号、第 3 号及び第 6 号に掲げる者については総務係へ、同条第 2 号に掲げる者については学務係へ交付申請書をそれぞれ提出する。

なお、各学科長（共通講座及びエコシステム工学専攻を含む。）は、当該学科における同条第 4 号及び第 5 号に掲げる者について、年度当初に総務係へ届け出る。

(許可証等の交付)

3 駐車許可証及びステッカーは、前項の交付申請書を受理した担当係が駐車許可証及びステッカーの発行費用と引き替えに交付申請者に交付する。

(発行費用)

4 駐車許可証及びステッカーの発行費用は、年度によって異なるので学務係に問い合わせること。

(入構整理券による入構)

5 入構整理券による入構は、駐車場に余裕があると駐車整理員が判断した場合に限る。

なお、用務先で入構整理券に証明を受け、出構時に警備員に返却して、警備員の機械操作により出構する。

(特別整理券の交付)

6 特別整理券交付申請書は、所属教官等の許可を得たのち総務係へ提出する。

7 オートバイ通学に係る許可申請書は、所属する学科の構内交通安全対策委員の認印をもらった上で学務係へ、通勤に係る許可申請書については総務係へ提出する。

8 要項第 5 条第 2 号及び第 1 4 条第 2 号のステッカーの様式は、年度当初に委員会で定める。

附 則

この申合せは、平成 14 年 4 月 1 日から実施する。

様式 1 号

駐車許可証交付申請書

認 印		
<input type="checkbox"/> 工学部	<input type="checkbox"/> 教職員	<input type="checkbox"/> 新 規
<input type="checkbox"/> 大学院工学研究科	<input type="checkbox"/> 学生 (昼間)	
<input type="checkbox"/> 附属図書館	<input type="checkbox"/> 学生 (夜間)	<input type="checkbox"/> 更 新
<input type="checkbox"/> その他 ()		
所属学科(係)名等 (学生は学科名・学年)		
氏 名	(TEL)	
現 住 所		
工学部までの距離 (片道)	km	交通機関利用の際 の所要時間 時間 分
自動車の車種	車 両 番 号	
自動車の所有者名 (本人の場合は本人 と記入)	申請者との続柄	
備 考		
登 録 番 号 ※	発 行 年 月 日 ※	

注 1 該当する□にレを記入すること。
2 主に夜間において授業を受ける工学部及び大学院工学研究科の学生で、昼間に勤務している者については、備考欄に勤務先、勤務先所在地及び勤務先から工学部までの距離を記入すること。
3 工学部及び大学院工学研究科の学生は、構内交通安全対策委員会委員の認印をもらったうえで申請すること。
4 ※印は記入しないこと。

様式 2 号

駐 車 許 可 証

徳島大学工学部

(裏面)

注意事項

- 1 本証は登録車及び本人以外は利用できません。
- 2 本証は磁気使用のため、磁石のそばに置かないで下さい。
- 3 本証は直射日光が当たるような場所への放置はさけて下さい。
- 4 構内での盗難、損傷及びその他一切の事故について、その責を負いません。

様式 3 号

NO
入 構 整 理 券
月 日
(本券の有効期間は当日限りとする。)
徳島大学工学部 用務先での確認印

(裏面)

遵守事項

- 1 歩行者の安全を確認し、交通標識及び標示に従うこと。
- 2 構内は徐行運転とし、騒音の防止に努めること。
- 3 指定された駐車場以外には駐車しないこと。
- 4 駐車整理員の指示に従うこと。
- 5 緊急事態、その他特別な事由で臨時の規制を実施する場合は、これに従うこと。

様式 4 号

平成 年 月 日

特別整理券交付申請書

専攻・学科 (所属・係)		学 年	
氏 名			
車両番号			
申請理由			
使 用 日	平成 年 月 日	枚 数	枚
所属教官等 氏 名		認 印	

様式 5 号

構内交通安全対策委員 認 印

平成 年 月 日

オートバイ通学許可申請書

徳島大学工学部長 殿

専攻・学科		学 年	
氏 名			
学生証番号			
現 住 所	(電話番号)		
工学部までの距離	片道		k m
オートバイの機種		排気量	c c
ナンバープレート番号			

- ①通学時の交通事故防止には十分注意いたします。
- ②工学部構内での騒音防止及び交通事故防止に協力することを誓約いたします。
- ③所定の駐輪場に整然と駐輪いたします。

以上の項目を厳守いたしますので、許可くださるようお願いします。

ステッカー番号

--

(後輪泥よけ部分に貼付)

第5章

工学部規則

徳島大学工学部規則

第1章 総則

(通則)

- 第1条 徳島大学工学部(以下「本学部」という。に関する事項は、徳島大学学則(以下「学則」という。)に定めるもののほか、この規則の定めるところによる。
- 2 学則及びこの規則に特別の定めのある場合を除いて本学部に関する事項は、本学部教授会が定める。

第2章 入学者選考

(入学者選考)

- 第2条 本学部の入学者は、学則の定めるところによって選考を行うものとする。

第3章 教育課程及び履修方法

(教育課程)

- 第3条 本学部の教育課程は、全学共通教育の授業科目(以下「共通教育科目」という。)及び専門教育の授業科目(以下「専門教育科目」という。)により編成する。

(昼夜開講)

- 第3条の2 本学部の各学科(光応用工学科を除く。)にそれぞれ昼間コース及び夜間主コースを置き、光応用工学科に昼間コースを置く。
- 2 昼間コースの学生は、原則として昼間に開設する授業科目を履修するものとし、夜間主コースの学生は、夜間に開設する授業科目のほか、別に定めるところにより昼間に開設する授業科目を履修することができる。

(共通教育科目の履修等)

- 第3条の3 共通教育科目の履修等に関することは、徳島大学全学共通教育履修規則(以下「共通教育履修規則」という。)の定めるところによる。
- 2 共通教育履修規則第5条に定める履修要件は、別表第1(略)のとおりとする。

(専門教育科目)

- 第3条の4 専門教育科目の区分は、必修科目及び選択科目とする。
- 2 専門教育科目及びその単位数は、別表第2(略)のとおりとする。
- 3 他の学部又は他の学科に属する専門教育科目は自由科目とし、これを履修することができる。

(履修手続)

- 第4条 専門教育科目を履修するには、学期の始めに前条に規定する授業科目から履修しようとする授業科目を選択して、担任教官の承認を得た後、履修科目登録届を提出しなければならない。
- 2 履修科目登録届の提出に当たっては、履修科目として登録することができる単位数の上限(以下「履修登録単位数の上限」という。)を超えて登録することはできない。
- ただし、所定の単位を優れた成績をもって修得した学生については、履修登録単位数の上限を超えて登録することができる。
- 3 履修登録単位数の上限及び履修登録単位数の上限を超えて登録することができる場合の認定の基準については、本学部長が別に定める。

- 第5条 第3条の4第3項の規定により履修するためには、本学部長を経て関係学部長の許可を得た後、当該専門教育担当教官に受講申請するものとする。

(単位の計算方法)

- 第5条の2 専門教育科目の単位の計算方法は、学則第30条第2項の規定に基づき、次のとおりとする。
- (1) 講義については、15時間の授業をもって1単位とする。
- (2) 演習については、30時間の授業をもって1単位とする。
- (3) 実験及び実習については、45時間の授業をもって1単位とする。

(進級要件)

- 第6条 上級学年に進級するためには、原則として各学科において必要と認められた授業科目について、その単位を修得していなければならない。

(卒業研究)

第7条 卒業研究を行うには、各学科において必要と認められた授業科目について、その単位を修得していなければならない。

(留学及び他の大学又は短期大学における授業科目の履修)

第7条の2 学則第27条の2の規定に基づき外国の大学又は短期大学に留学しようとする学生及び第34条の2の規定に基づき他の大学又は短期大学の授業科目を履修しようとする学生は、所定の願書を本学部長を経て学長に提出し、許可を受けなければならない。

(単位の認定)

第7条の3 前条の規定により許可を受けた学生(以下「派遣学生」という。)が修得した単位の認定は、当該大学又は短期大学が発行する成績証明書により行う。

(履修報告書)

第7条の4 派遣学生は、派遣期間が終了したときは、所定の履修報告書を速やかに本学部長を経て学長に提出しなければならない。

(実施細目)

第7条の5 前3条に定めるもののほか、派遣学生に関し必要な事項は、本学部長が別に定める。

第4章 試験及び卒業

(成績の考査)

第8条 成績の考査は、試験の成績並びに授業への出席状況、宿題及びレポート等による授業への取組及びその成果を考慮して行う。ただし、演習、実習及び実験については、試験を行わないことがある。

2 出席時数が著しく少ないときは、その授業科目の受験資格を与えないことがある。

(成績)

第9条 成績は、100点をもって満点とし、60点以上をもって合格とする。成績は、優(80点以上)良(70点以上)及び可(60点以上)に区別する。

2 前項の規定にかかわらず、卒業論文の成績は、合格及び不合格とする。

(再試験及び追試験)

第10条 再試験を行う場合には、原則として当該学期内に行う。

2 追試験は原則として行わない。ただし、定められた期日に理由があつて受験できなかった者は、前項の再試験を受けることができる。

(卒業)

第11条 本学部を卒業するためには、次の単位を修得しなければならない。

建設工学科		昼間コース
共通教育科目		42 単位以上
専門教育科目	必修科目	60 単位
	選択科目	28 単位以上
	計	88 単位以上
合計		130 単位以上

建設工学科		夜間主コース
共通教育科目		36 単位以上
専門教育科目	必修科目	48 単位
	選択科目	40 単位以上
	計	88 単位以上
合計		124 単位以上

機械工学科		昼間コース
共通教育科目		40 単位以上
専門教育科目	必修科目	45 単位
	選択科目	45 単位以上
	計	90 単位以上
合計		130 単位以上

機械工学科		夜間主コース
共通教育科目		36 単位以上
専門教育科目	必修科目	35 単位
	選択科目	53 単位以上
	計	88 単位以上
合計		124 単位以上

化学応用工学科		昼間コース
共通教育科目		40 単位以上
専門教育科目	必修科目	31 単位
	選択科目 (A)	10 単位以上
	選択科目 (B)	49 単位以上
	計	90 単位以上
合 計		130 単位以上

化学応用工学科		夜間主コース
共通教育科目		36 単位以上
専門教育科目	必修科目	18 単位
	選択科目	70 単位以上
	計	88 単位以上
合 計		124 単位以上

電気電子工学科		昼間コース
共通教育科目		46 単位以上
専門教育科目	必修科目	30 単位
	選択必修科目	34 単位以上
	選択科目	20 単位以上
	計	84 単位以上
合 計		130 単位以上

電気電子工学科		夜間主コース
共通教育科目		42 単位以上
専門教育科目	必修科目	16 単位
	選択科目	66 単位以上
	計	82 単位以上
合 計		124 単位以上

知能情報工学科		昼間コース
共通教育科目		42 単位以上
専門教育科目	必修科目	22 単位
	選択科目	66 単位以上
	計	88 単位以上
合 計		130 単位以上

知能情報工学科		夜間主コース
共通教育科目		36 単位以上
専門教育科目	必修科目	20 単位
	選択科目	68 単位以上
	計	88 単位以上
合 計		124 単位以上

生物工学科		昼間コース
共通教育科目		44 単位以上
専門教育科目	必修科目	22 単位
	選択科目 (A)	44 単位以上
	選択科目 (B)	20 単位以上
	計	86 単位以上
合 計		130 単位以上

生物工学科		夜間主コース
共通教育科目		36 単位以上
専門教育科目	必修科目	40 単位
	選択科目	48 単位以上
	計	88 単位以上
合 計		124 単位以上

光応用工学科		昼間コース
共通教育科目		42 単位以上
専門教育科目	必修科目	51 単位
	選択科目	37 単位以上
	計	88 単位以上
合 計		130 単位以上

- 2 学則第35条の2第2項に規定する卒業の認定の基準については、本学部長が別に定める。
- 3 卒業論文の審査は、本学部教授会において行う。

第5章 転学部、転学科、編入学及び補欠入学

(転学部)

第12条 学則第22条の2の規定により本学部に転学部を願い出た者がいるときは、教育上支障がない場合限り選考の上、許可することがある。

- 2 転学部を許可する時期は、入学後1年以上を経過した学年の初めとする。
- 3 転学部を許可した学生を在籍させる年次は、本学部教授会の議を経て定める。

4 転学部を許可した学生の既修得単位の認定は、本学部教授会の議を経て定める。

(転学科)

第13条 学則第22条の3の規定により転学科を願い出た者があるときは、教育上支障がない場合に限り選考の上、許可することがある。

2 前条第2項から第4項までの規定は、前項の転学科を許可する場合に準用する。

(編入学)

第13条の2 学則第21条の4の規定により入学した者の在学期間は、4年とする。

2 既修得単位の認定は、本学部教授会の議を経て定める。

(補欠入学)

第14条 学則第22条の規定により入学した者の在学期間及び既修得単位の認定については、次のとおりとする。

(1) 在学期間は、第2年次に入学した者は6年、第3年次に入学した者は4年とする。

(2) 既修得単位の認定は、本学部教授会の議を経て定める。

第5章の2 特別聴講学生

(入学時期)

第14条の2 特別聴講学生の入学の時期は原則として毎学期の初めとする。

(入学の出願)

第14条の3 特別聴講学生として入学を志願する者は、所定の願書に別に定める書類を添えて志願者の所属する大学又は短期大学の長を経て願い出なければならない。

(入学の許可)

第14条の4 特別聴講学生の入学の許可は、本学部教授会の選考を経て学長が行う。

(単位の認定)

第14条の5 特別聴講学生の単位の認定方法は、本学部学生の例による。

(実施細目)

第14条の6 この章に定めるもののほか、特別聴講学生に関し必要な事項は、本学部長が別に定める。

第6章 科目等履修生

(入学時期)

第15条 科目等履修生の入学の時期は、原則として毎学期の初めとする。

(入学の出願)

第16条 科目等履修生として入学を志願する者は、所定の願書に履歴書、健康診断書、卒業証明書及び所定の検定料を添えて本学部長に提出しなければならない。

(入学の許可)

第17条 科目等履修生の入学許可は、就学の目的を達することができる学力を有すると認められる者について、本学部教授会の選考を経て学長が行う。

(入学科及び授業料)

第18条 科目等履修生の入学選考に合格した者は、指定の期間内に所定の入学料を納付しなければならない。

2 科目等履修生は、指定の期間内に所定の授業料を納付しなければならない。

(在学期間)

第19条 科目等履修生の在学期間は、履修科目について授業の行われる期間とする。

(その他)

第20条 科目等履修生で、単位を希望する者については、第8条から第10条までの規定を準用する。

第7章 研究生

(入学時期)

第21条 研究生の入学の時期は、原則として毎学期の初めとする。

(入学の出願)

第22条 研究生として入学を志願する者は、所定の願書に履歴書、健康診断書、卒業証明書及び所定の検定料を添えて本学部長に提出しなければならない。

(入学の許可)

第23条 研究生の入学の許可は、大学を卒業した者又はこれと同等以上の学力を有する者について、本学部教授会の選考を経て学長が行う。

(入学料及び授業料)

第24条 研究生の入学選考に合格した者は、指定の期間内に所定の入学料を納付しなければならない。

2 研究生は、指定の期間内に所定の授業料を納付しなければならない。

(在学期間)

第25条 研究生の在学期間は、1年以内とする。ただし、特別の理由により引続き研究を願い出た者については、学長は、本学部教授会の議を経て1年を限り在学期間の延長を許可することがある。

(修了証書)

第26条 研究生にして、研究事項を報告した者に対しては、学長は、本学部教授会の議を経て修了証書を交付することがある。

徳島大学工学部学生及び工学研究科学生の他学部等の授業科目履修に関する実施細則

(趣旨)

第1条 この細則は、徳島大学工学部規則(昭和34年規則第29号)第3条の4第3項及び徳島大学大学院工学研究科規則(平成3年規則第1005号)第5条第3項の規則に基づき、工学部学生が本学の他学部又は工学部の他学科の授業科目を自由科目として履修し、又は本学学部の授業科目を自由科目として履修する際に必要な事項を定めるものとする。

(許可の範囲)

第2条 他学部等の授業科目の履修を許可する範囲は、次のとおりとする。

(1) 工学部学生は、各学科の許可する単位を超えない範囲で他学部又は工学部の他学科に属する専門教育科目を履修することができる。

(2) 工学研究科学生は、各専攻の許可する単位を超えない範囲で本学大学院の他研究科若しくは工学研究科の他専攻又は本学の学部の授業科目を履修することができる。

(3) 上記2項に関わらず、所属する学科若しくは専攻で開講されている科目は履修できない。

(履修科目)

第3条 工学部及び工学研究科における他学科及び他専攻で履修可能な授業科目及び受け入れ可能人数は、各学科の「履修の手引き」及び大学院の「講義概要」に掲載すると共に、各学期が始まる前にそれらの情報を周知するものとする。

なお、「履修の手引き」及び「講義概要」に履修可能として掲載されていない授業科目でも事情によっては履修可能な場合がある。

(受講の願出)

第4条 他学部等の授業科目を履修しようとする者は、別紙様式第1号の「他学部・他研究科授業科目履修願」又は別紙様式第2号の「工学部他学科・工学研究科他専攻授業科目履修願」を前・後期とも、それぞれ学年暦の授業開始日から1週間後までに、工学部学生及び博士前期課程の学生にあっては所属する学科又は専攻の教務委員の承認を経て、博士後期課程の学生にあっては所属する専攻の博士後期課程運営委員の承認を経て、工学部学務係に提出しなければならない。

(授業担当教官との事前交渉)

第5条 他学部等の授業科目の履修を希望する学生は、事前に授業担当教官の許可を得なければならない。

(受講の承認及び許可)

第6条 第4条の規定により願出のあった授業科目については、工学部学生及び博士前期課程の学生にあっては工学部教務委員会において、博士後期課程の学生にあっては博士後期課程運営委員会において、それぞれの必要性を考慮の上、受講を承認するものとする。

2 前項の委員会において受講許可と承認された者については、工学部長又は工学研究科長が当該授業科目を開設している学部長等と協議の上、受講を許可するものとする。

(受講の中断)

第7条 前条の許可を得た授業科目については、正当な理由がなければ受講を中断することはできない。

(履修報告)

第8条 他学部又は他研究科の授業科目を履修した者は、別紙様式第3号の「他学部・他研究科授業科目履修報告書」に単位修得証明書を添付して、速やかに工学部学務係に提出しなければならない。

(単位の認定)

第9条 本実施細則により履修した他学科等の科目は自由科目とし、選択科目の単位として認める。取得した単位を卒業又は修了単位として認めるか否かは所属する学科又は専攻において決めるものとする。

(編入生の特例)

第10条 編入生に対しては、教務委員会で別途審議する。

工学部及び工学研究科における他学科及び他専攻で履修可能な授業科目及び受け入れ可能人数

注:()は受け入れ可能人数(開講時期は別途配布する時間割を参照のこと。)昼間は昼間コース,夜間は夜間主コースを表す。

● 建設工学科

下記を除く専門教育科目(いずれもそれぞれ若干名)

- 昼間:建設基礎セミナー・測量学実習・情報処理・建設基礎解析及び演習・構造力学1・土質力学2及び演習・建設工学実験実習・橋梁設計製図・建設設計演習・プロジェクト演習・工学系共通科目
- 夜間:測量学実習・情報処理・建設設計製図・建設工学実験・工学系共通科目

● 機械工学科

- 昼間,夜間とも実験・実習・製図・工学系共通科目を除く専門教育科目(いずれもそれぞれ若干名)

● 化学応用工学科

- 昼間:材料物性(6人)・材料科学(6人)・基礎物理化学(5人)・生物物理化学(6人)・生物化学工学(5人)
- 夜間:光化学(5人)

● 電気電子工学科

- 昼間:マイクロ波工学(教室の許す限り)・エネルギー工学基礎論(10人、他学部学生も可)・電気電子材料工学(教室の許す限り)・電子デバイス(教室の許す限り)・半導体工学(教室の許す限り)・高電圧工学(10人)
- 夜間:電子デバイス工学(教室の許す限り)・センサ工学(教室の許す限り)・半導体工学(教室の許す限り)

● 知能情報工学科

- 昼間:生体情報工学(10人)・集積回路工学(10人)・電子回路(10人)・人工知能(10人)・コンピュータネットワーク(10人)・知識知能システム(10人)
- 夜間:画像処理工学(10人)・プログラミング方法論1(10人)・プログラミング方法論2(10人)

● 生物工学科

- 昼間:基礎生物工学1(5人)・基礎生物工学2(5人)・生化学2(5人)・発酵工学(5人)・微生物学1(5人)・生物無機化学(3~5人)・生物有機化学(2人)・分子生物学(5人)・タンパク質工学(5人)・酵素工学(5人)・遺伝子工学(5人)・生物環境工学(10人)・生物機能設計学(2人)・有機化学1(3~5人)・細胞工学(5人)・微生物工学(5人)
- 夜間:酵素化学(5人)・生化学2(3人)・生物反応工学(3~5人)・微生物学(2人)・分子生物学(10人)

● 光応用工学科

- 昼間:光・電子物性工学1(10人)・光・電子物性工学2(10人)・光デバイス1(5人)・レーザ工学基礎論(5人)・結晶成長学(5人)・結晶工学(5人)・画像処理(10人)・光導波工学(10人)・高分子化学(10人)

● 共通講座

- 昼間,夜間とも実験科目以外で、受講希望者の所属する学部学科で開講されていない科目で講義担当者が許可する科目、詳細は講義担当者に問い合わせること。

徳島大学工学部における授業回数及び補講方法について

1. 徳島大学工学部における授業回数（試験は含まない。）は、徳島大学学則第 30 条及び徳島大学工学部規則第 5 条の 2 の規則に基づき、15 回を確保するものとする。
2. 毎年度の始めにおいてあらかじめ 15 回の授業が確保できない授業科目があるとき及び気象警報発令により授業休講となった授業科目があるときは、次の方法により不足の授業回数を補うものとする。
 - (1) 当該授業科目の時間割に割り当てられている学期中に、時間割の空いているコマに不足の回数分を割り振るものとする。
 - (2) 前号の方法でも授業回数を確保できない場合は、当該学期中の指定した土曜日若しくは夏季休業又は冬季休業に特別の時間割を作成して行うものとする。
3. 非常勤講師の授業で、当初予定の時間に満たないことが判明したときは、前項の方法により補うものとする。
4. 前 2 項の時間割の計画は、各学科の教務委員会委員が授業担当教官及び学務係と調整の上、作成するものとする。
5. 第 2 項第 1 号の方法により不足の授業を補う場合は、教務委員会の議を経て実施するものとし、第 2 項第 2 号による場合は、教務委員会及び教授会の議を経て実施するものとする。
6. 授業担当教官のやむを得ない事情により授業回数に不足が生じる場合は、授業担当教官の判断により適宜補講を行うものとする。

附則

この申合せは、平成 10 年 4 月 1 日から実施する。

気象警報が発令された場合の授業休講措置について

台風等による気象警報のうち「暴風警報と大雨警報」若しくは「暴風警報と洪水警報」又は「大雪警報」が発令された場合の徳島大学工学部及び徳島大学大学院工学研究科の授業休講については、次のとおり取り扱う。

1. 午前 7 時現在において警報発令中の場合は、午前中の授業を休講とする。午前 11 時現在においても引き続き警報発令中の場合は、午後からの授業をすべて休講とする。
夜間主コースの授業については、午後 4 時現在において警報発令中の場合は、すべての授業を休講とする。
2. 授業開始後に警報が発令された場合は、次の時限からの授業を休講とする。
3. 前 2 項により判断し難い場合は、工学部長（工学部長不在の場合は評議員）及び教務委員会委員長の判断により措置する。
4. 第 3 項の措置によって休講となった授業は、「徳島大学工学部における授業回数及び補講方法について（平成 9 年 10 月 9 日徳島大学工学部長及び徳島大学大学院工学研究科長制定）」に基づき補講する。
5. この取扱いには、全学共通教育の授業は含まない。
6. この取扱いの改廃は、教務委員会及び教授会の議を経なければならない。

附則

この取扱いは、平成 10 年 4 月 1 日から実施する。

第6章

工学部学友会会則および表彰要項

徳島大学工学部学友会会則

(名称)

第1条 本会は、徳島大学工学部学友会と称し、事務所を徳島大学工学部に置く。

(目的)

第2条 本会は、学生の自治活動を通じて、健全な学風の樹立、学生生活の向上及び将来における社会参加への準備を図るとともに、会員相互の親睦に資することを目的とする。

(会員)

第3条 本会は、正会員(工学部学部生)及び特別会員(工学部教職員)で組織する。

(事業)

第4条 本会は、第2条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- 一 学生が自治的に行う行事の企画及び実行
- 二 学生のサークルに対する援助
- 三 その他本会が必要と認めた事業

(役員)

第5条 本会に次の会員を置く。

- 一 会長 1名
- 二 副会長 1名
- 三 会計幹事 1名
- 四 学生委員長 1名
- 五 学生副委員長 2名
- 六 監事 1名
- 七 幹事 若干名

(役員を選出)

第6条 役員は、次の方法によって選出する。

- 一 会長は、学部長をもって充てる。
- 二 副会長は、工学部学生委員会委員長をもって充てる。
- 三 会計幹事は、学務係長をもって充てる。
- 四 学生委員長、学生副委員長及び監事は、各学科から選出された学友会代議員(以下「代議員」という。)の中から代議員の互選により選出する。
- 五 幹事は、代議員の中から学生委員長が委嘱する。

2 各学科から選出される代議員の人数等については、別に定める。

(役員の仕事)

第7条 役員の仕事は、次のとおりとする。

- 一 会長は、本会を代表し、会務を総括する。
- 二 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代行する。
- 三 会計幹事は、会費の徴収・管理その他会計に関する事務を行う。
- 四 学生委員長は、正会員の代表として本会の事業を総括する。
- 五 学生副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、副委員長のうち1名がその職務を代行する。
- 六 監事は、会計を監査する。
- 七 幹事は、会務を処理する。

(役員の仕事)

第8条 第5条第四号から七号の役員の仕事は、当該年度末日までとし、再任を妨げない。ただし、次期役員が選出されるまでの間は、引き続きその任にあたるものとする。

2 前項の役員に欠員が生じた場合は、これを補充し、その仕事は前任者の残任期間とする。

(会議)

第9条 本会に代議員で組織する代議員会を置く。

2 学生委員長は、代議員会を召集し、その議長となる。

- 3 代議員会の議事は、構成員の過半数の賛成によって議決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- 4 議決にあたっては、あらかじめ作成された原案に対する委任状を認める。
- 5 学生委員長は、代議員会を開催した場合は、議決した事項等について会長に報告し、その承認を受けなければならない。

(審議事項)

第 10 条 代議員会の審議事項は、次の通りにする。

- 一 第 4 条に規定する事業の実施計画及び予算決算に関すること。
- 二 第 5 条第四号から七号の役員の選出に関すること。
- 三 その他本会の事業等に関する重要事項に関すること。

(会計)

第 11 条 会計年度は、毎年 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。

- 2 本会の経費は、正会員の会費 6 0 0 0 円 (編入学生については、3 0 0 0 円)、寄付金及びその他の収入をもって充てる。
- 3 会費は入学時に 4 年分一括して納入する。
- 4 既納の会費は返還しない。

附則

- 1 この会則は、平成 12 年 4 月 1 日から施行する。
- 2 徳島大学工学部学友会規約 (昭和 39 年 4 月 1 日施行) は、廃止する。
- 3 本会則の改廃は、代議員会の審議に基づき会長が決定する。
- 4 第 5 条第四号から七号の役員が選出されるまでの間、代議員会の開催等に係わる事務は、学務係が行う。

徳島大学工学部学友会表彰要項

(目的)

第1条 この要項は、徳島大学工学部優秀賞表彰について必要な事項を定めるものとする。

(表彰の対象者)

第2条 表彰は、申請時に第3年次以下で次の各号の一に該当し、かつ、人物が優秀な学生について行うものとする。

- (1) 学業成績が優秀な者
- (2) 英語によるコミュニケーション能力が高い者
- (3) その他工学部優秀賞に値すると認められる者

(表彰者の決定)

第3条 表彰者の決定は、学生の所属学科の学科長の推薦に基づき、工学部学生委員会の議を経て、学友会会長(工学部長)が行う。

(表彰の基準)

第4条 表彰は、次の各号の基準に基づいて行う。

- (1) 第2条第1号に規定する者の基準は、各学年における1年間通算のGPA(Grade Point Average)による成績評価が、上位概ね3%以内の者で別表に定める。
- (2) 第2条第2号に規定する者の基準は、当該年度TOEIC(財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会が行う国際コミュニケーション英語能力テスト)における得点が700点以上の者(在学中に1回に限る)。

(表彰の時期)

第5条 表彰は、学友会会長(工学部長)が毎学年の初めに行う。ただし、この時点で工学部及び工学研究科に在学しないものは、対象者から除外する。

(その他)

第6条 この要項に定めるもののほか、表彰について必要な事項は、別に定める。

この要項の改廃は、工学部学生委員会及び学友会の議を経て、定める。

附 則

この要項は、平成13年11月21日から実施し、平成13年4月1日から適用する。

別表

表彰者数			
建設工学科		1年生	3人
"		2年生	3人
"		3年生	3人
"	夜間主コース	1年生	1人
"	"	2年生	1人
"	"	3年生	1人
機械工学科		1年生	4人
"		2年生	4人
"		3年生	4人
"	夜間主コース	1年生	1人
"		2年生	1人
"		3年生	1人
化学応用工学科		1年生	3人
"		2年生	3人
"		3年生	3人
"	夜間主コース	1年生	1人
"	"	2年生	1人
"	"	3年生	1人
電気電子工学科		1年生	4人
"		2年生	4人
"		3年生	4人
"	夜間主コース	1年生	1人
"	"	2年生	1人
"	"	3年生	1人
知能情報工学科		1年生	3人
"		2年生	3人
"		3年生	3人
"	夜間主コース	1年生	1人
"	"	2年生	1人
"	"	3年生	1人
生物工学科		1年生	2人
"		2年生	2人
"		3年生	2人
"	夜間主コース	1年生	1人
"	"	2年生	1人
"	"	3年生	1人
光応用工学科		1年生	2人
"		2年生	2人
"		3年生	2人

付 録

1) 工学部教員の一覧

1 建設工学科

建設構造工学講座

教授	宇都宮 英彦	A棟5階	A513	Tel: 088-656-7322	内線: 4281
教授	平尾 彦潔	A棟5階	A511	Tel: 088-656-7324	内線: 4211
教授	橋本 親典	A棟5階	A505	Tel: 088-656-7321	内線: 4241
助教授	成行 義文	A棟5階	A510	Tel: 088-656-7325	内線: 4213
助教授	長尾 文明	A棟5階	A515	Tel: 088-656-9443	内線: 4282
助手	野田 稔	A棟5階	A514	Tel: 088-656-7323	内線: 4283
助手	渡邊 健	A棟5階	A506	Tel: 088-656-7320	内線: 4242

環境整備工学講座

教授	端野 道夫	A棟4階	A415	Tel: 088-656-7332	内線: 4261
教授	岡部 健士	A棟3階	A309	Tel: 088-656-7329	内線: 4221
助教授	中野 晋	A棟3階	A310	Tel: 088-656-7330	内線: 4222
助教授	鎌田 磨人	A棟3階	A306	Tel: 088-656-9134	内線: 5083
助教授	竹林 洋史	A棟3階	A311	Tel: 088-656-7331	内線: 4223
助手	田村 隆雄	A棟4階	A414	Tel: 088-656-9407	内線: 4262

社会基盤工学講座

教授	山上 拓男	A棟4階	A401	Tel: 088-656-7345	内線: 4251
教授	澤田 勉	A棟3階	A307	Tel: 088-656-9132	内線: 5081
教授	望月 秋利	A棟4階	A405	Tel: 088-656-9721	内線: 4231
助教授	鈴木 壽	A棟4階	A403	Tel: 088-656-7347	内線: 4253
講師	上野 勝利	A棟4階	A406	Tel: 088-656-7342	内線: 4232
助手	蒋 景彩	A棟4階	A402	Tel: 088-656-7346	内線: 4252
助手	三神 厚	A棟3階	A308	Tel: 088-656-9193	内線: 5082

社会システム工学講座

教授	水口 裕之	A棟5階	A501	Tel: 088-656-7349	内線: 5721
教授	山中 英生	A棟4階	A410	Tel: 088-656-7350	内線: 5713
助教授	上田 隆雄	A棟5階	A502	Tel: 088-656-2153	内線: 5722
講師	滑川 達	A棟4階	A412	Tel: 088-656-9877	内線: 4272
助手	三宅 正弘	A棟4階	A411	Tel: 088-656-7578	内線: 5107

2 機械工学科

機械科学講座

教授	山田 勝稔	M棟6階	621	Tel: 088-656-7364	内線: 5313
教授	吉田 憲一	M棟6階	619	Tel: 088-656-7358	内線: 4312
助教授	岡田 達也	M棟6階	616	Tel: 088-656-7362	内線: 4382
助教授	西野 秀郎	M棟6階	618	Tel: 088-656-7357	内線: 4311
講師	大石 篤哉	M棟6階	622	Tel: 088-656-7365	内線: 5312

機械システム講座

教授	石原 国彦	M棟5階	518	Tel: 088-656-7366	内線: 4321
教授	森岡 斎	M棟5階	521	Tel: 088-656-7373	内線: 4331
教授	逢坂 昭治	M棟5階	523	Tel: 088-656-7375	内線: 5214
教授	福富 純一郎	M棟5階	519	Tel: 088-656-7367	内線: 4323
助教授	清田 正徳	M棟5階	522	Tel: 088-656-7374	内線: 4332
講師	一宮 昌司	M棟5階	520	Tel: 088-656-7368	内線: 4322
助手	草野 剛嗣	M棟5階	528	Tel: 088-656-2151	内線: 5216

知能機械学講座

教授	芳村 敏夫	M棟4階	421	Tel: 088-656-7382	内線: 4351
教授	今枝 正夫	M棟4階	419	Tel: 088-656-7386	内線: 4391
教授	小西 克信	M棟4階	423	Tel: 088-656-7383	内線: 4352
教授	岩田 哲郎	M棟4階	427	Tel: 088-656-9743	内線: 5220
助教授	橋本 強二	M棟4階	420	Tel: 088-656-7387	内線: 4392
助教授	日野 順市	M棟4階	422	Tel: 088-656-7384	内線: 4353
助教授	高木 均	M棟6階	620	Tel: 088-656-7359	内線: 4313
講師	長町 拓夫	M棟5階	526	Tel: 088-656-9187	内線: 5237
講師	浮田 浩行	M棟5階	526	Tel: 088-656-9448	内線: 4355

生産システム講座

教授	海江田 義也	M棟3階	321	Tel: 088-656-7379	内線: 4361
教授	英 崇夫	M棟3階	317	Tel: 088-656-7377	内線: 4401
教授	村上 雅一	M棟3階	318	Tel: 088-656-7392	内線: 4383
助教授	升田 博	M棟3階	320	Tel: 088-656-7380	内線: 4362
助教授	多田 吉宏	M棟3階	319	Tel: 088-656-7381	内線: 5314
助教授	岡田 健一	M棟1階	123	Tel: 088-656-7395	内線: 5213
助教授	伊藤 照明	M棟3階	316	Tel: 088-656-2150	内線: 4406
助手	日下 一也	M棟3階	322	Tel: 088-656-9442	内線: 4405
助手	米倉 大介	M棟3階	326	Tel: 088-656-9186	内線: 4386
助手	大山 啓	M棟3階	325	Tel: 088-656-9741	内線: 5218

3 化学応用工学科

物質合成化学講座

教授	佐藤 恒之	化学・生物棟	4階 406	Tel: 088-656-7402	内線: 4543
教授	津嘉山 正夫	化学・生物棟	4階 407	Tel: 088-656-7405	内線: 4541
教授	河村 保彦	化学・生物棟	4階 410	Tel: 088-656-7401	内線: 4532
助教授	南川 慶二	化学・生物棟	6階 612	Tel: 088-656-9153	内線: 5614
助教授	妹尾 真紀子	化学・生物棟	4階 408	Tel: 088-656-7404	内線: 4592
講師	平野 朋広	化学・生物棟	4階 405	Tel: 088-656-7403	内線: 4542
助手	西内 優騎	化学・生物棟	4階 409	Tel: 088-656-7400	内線: 4531
助手	森 健	化学・生物棟	6階 615	Tel: 088-656-9704	内線: 5616

物質機能化学講座

教授	本仲 純子	化学・生物棟	6階 611	Tel: 088-656-7409	内線: 5612
教授	田村 勝弘	化学・生物棟	5階 509	Tel: 088-656-7416	内線: 4552
助教授	松井 弘	化学・生物棟	5階 507	Tel: 088-656-7420	内線: 4512
助教授	魚崎 泰弘	化学・生物棟	5階 510	Tel: 088-656-7417	内線: 4553
助教授	金崎 英二	化学・生物棟	5階 511	Tel: 088-656-9444	内線: 4521
助教授	安澤 幹人	化学・生物棟	5階 512	Tel: 088-656-7421	内線: 4513
助手	薮谷 智規	化学・生物棟	6階 605	Tel: 088-656-7413	内線: 5613
助手	鈴木 良尚	化学・生物棟	5階 514	Tel: 088-656-7415	内線: 4551

化学プロセス工学講座

教授	林 弘	化学・生物棟	3階 307	Tel: 088-656-7430	内線: 4561
教授	中林 一朗	機械棟	6階 603	Tel: 088-656-7422	内線: 4581
教授	富田 太平	化学・生物棟	3階 312	Tel: 088-656-7425	内線: 4571
教授	川城 克博	化学・生物棟	3階 308	Tel: 088-656-7431	内線: 4562
助教授	杉山 茂	化学・生物棟	3階 309	Tel: 088-656-7432	内線: 4563
助教授	森賀 俊広	機械棟	3階 305	Tel: 088-656-7423	内線: 4583
講師	加藤 雅裕	機械棟	3階 304	Tel: 088-656-7429	内線: 4575
講師	外輪 健一郎	化学・生物棟	3階 310	Tel: 088-656-9204	内線: 4569
助手	村井 啓一郎	化学・生物棟	3階 315	Tel: 088-656-7424	内線: 4584
助手	堀河 俊英	化学・生物棟	3階 311	Tel: 088-656-7426	内線: 4572

4 電気電子工学科

物性デバイス講座

教授	大野 泰夫	E棟2階南	A-7	Tel: 088-656-7438	内線: 5411
教授	大宅 薫	E棟2階南	A-9	Tel: 088-656-7444	内線: 4661
教授	田島 一人	E棟2階南	A-2	Tel: 088-656-9716	内線: 5516
教授	酒井 士郎	E棟2階南	A-3	Tel: 088-656-7446	内線: 4671
助教授	富永 喜久雄	E棟2階南	A-6	Tel: 088-656-7439	内線: 4673
助教授	直井 美貴	E棟2階南	A-4	Tel: 088-656-7447	内線: 4674
講師	西野 克志	E棟2階南	A-5	Tel: 088-656-7464	内線: 4677
助手	敖 金平	E棟2階南	A-8	Tel: 088-656-7442	内線: 4664
助手	川上 烈生	E棟2階南	A-10	Tel: 088-656-7441	内線: 5511

電気エネルギー講座

教授	伊坂 勝生	E棟2階北	B-9	Tel: 088-656-7459	内線: 4632
教授	井上 廉生	E棟2階北	B-7	Tel: 088-656-7462	内線: 5412
教授	大西 徳生	E棟2階北	B-1	Tel: 088-656-7456	内線: 5414

教授	鎌野琢也	E棟2階北	B-4	Tel: 088-656-7455	内線: 4652
助教授	森田郁朗	E棟2階北	B-3	Tel: 088-656-7451	内線: 4622
助教授	下村直行	E棟2階北	B-8	Tel: 088-656-7463	内線: 4621
助教授	安野卓	E棟2階北	B-5	Tel: 088-656-7458	内線: 4653
助教授	川田昌武	E棟2階北	B-10	Tel: 088-656-7460	内線: 4633
助手	北條昌秀	E棟2階北	B-2	Tel: 088-656-7452	内線: 4623
電気電子システム講座					
教授	入谷忠光	E棟3階北	C-2	Tel: 088-656-7478	内線: 5413
教授	木内陽介	E棟3階北	C-4	Tel: 088-656-7475	内線: 4641
助教授	久保智裕	E棟3階北	C-6	Tel: 088-656-7466	内線: 4692
講師	大冢隆弘	E棟3階北	C-1	Tel: 088-656-7479	内線: 4642
講師	芥川正武	E棟3階北	C-5	Tel: 088-656-7477	内線: 4644
助手	服部敦美	E棟3階北	C-8	Tel: 088-656-7467	内線: 4693
助手	馬躍	E棟3階北	C-3	Tel: 088-656-7476	内線: 4643
知能電子回路講座					
教授	為建臣	E棟3階南	D-1	Tel: 088-656-7472	内線: 4681
教授	來山征士	E棟3階南	D-6	Tel: 088-656-7482	内線: 4612
教授	小中信典	E棟3階南	D-8	Tel: 088-656-7469	内線: 4611
助教授	橋爪正樹	E棟3階南	D-2	Tel: 088-656-7473	内線: 4682
助教授	島本隆	E棟3階南	D-5	Tel: 088-656-7483	内線: 4613
助教授	西尾芳文	E棟3階南	D-7	Tel: 088-656-7470	内線: 4615
講師	四柳浩之	E棟3階南	D-3	Tel: 088-656-9183	内線: 4683
助手	宋天	E棟3階南	D-4	Tel: 088-656-7484	内線: 5105
助手	佐藤弘明	E棟2階南	A-1	Tel: 088-656-7445	内線: 5512

5 知能情報工学科

基礎情報工学講座

教授	任福継	C棟2階	204	Tel: 088-656-9684	内線: 4790
教授	北研二	D棟2階	203	Tel: 088-656-7496	内線: 4713
教授	赤松則男	D棟2階	209	Tel: 088-656-7493	内線: 4742
教授	小野典彦	D棟1階	106	Tel: 088-656-7509	内線: 4732
教授	森井昌克	C棟3階	302	Tel: 088-656-9446	内線: 4717
助教授	黒岩眞吾	C棟2階	203	Tel: 088-656-9689	内線: 4791
助教授	獅々堀正幹	D棟2階	214	Tel: 088-656-7508	内線: 4731
助教授	福見稔	D棟2階	210	Tel: 088-656-7510	内線: 4733
助教授	小野功	D棟1階	107	Tel: 088-656-9139	内線: 5084
講師	毛利公美	C棟3階	301	Tel: 088-656-7487	内線: 4756
講師	得重仁	C棟3階	303	Tel: 088-656-9447	内線: 4718
助手	柘植覚	D棟2階	204	Tel: 088-656-7512	内線: 4719
助手	伊藤拓也	D棟1階	105	Tel: 088-656-9165	内線: 5085
助手	ステファン・カルンガル	D棟2階	211	Tel: 088-656-7488	内線: 4755

知能工学講座

教授	大恵俊一郎	大学院共同研究棟	5階 507	Tel: 088-656-7500	内線: 4751
教授	下村隆夫	C棟4階	402	Tel: 088-656-7503	内線: 4722
教授	青江順一	大学院共同研究棟	6階 604	Tel: 088-656-7486	内線: 4752
教授	矢野米雄	C棟5階	511	Tel: 088-656-7495	内線: 4712
助教授	寺田賢治	大学院共同研究棟	8階 802	Tel: 088-656-7499	内線: 4721
助教授	池田建司	C棟4階	403	Tel: 088-656-7504	内線: 4726
助教授	緒方広明	C棟5階	507	Tel: 088-656-7498	内線: 4716
助教授	上田哲史	大学院共同研究棟	5階 502	Tel: 088-656-7501	内線: 4753
講師	最上義夫	C棟4階	404	Tel: 088-656-7505	内線: 4723
講師	佐野雅彦	高度情報化基盤センター	4階 403	Tel: 088-656-7559	内線: 4821
講師	泓田正雄	大学院共同研究棟	6階 603	Tel: 088-656-7564	内線: 4747
助手	森田和宏	大学院共同研究棟	6階 603	Tel: 088-656-7490	内線: 4711
助手	光原弘幸	C棟5階	502	Tel: 088-656-7490	内線: 4711

6 生物工学科

生物機能工学講座

教授	金品昌志	化学・生物棟 6 階 607	Tel: 088-656-7513	内線: 4900
教授	堀均	機械棟 8 階 821	Tel: 088-656-7514	内線: 4906
教授	高麗寛紀	機械棟 8 階 813	Tel: 088-656-7408	内線: 4913
助教授	松木均	化学・生物棟 6 階 609	Tel: 088-656-7520	内線: 4901
助教授	永澤秀子	機械棟 8 階 820	Tel: 088-656-7522	内線: 4907
助教授	長宗秀明	機械棟 8 階 814	Tel: 088-656-7525	内線: 4914
助手	玉井伸岳	化学・生物棟 6 階 601	Tel: 088-656-7515	内線: 4902
助手	宇都義浩	機械棟 8 階 808	Tel: 088-656-7517	内線: 4908
助手	前田拓也	機械棟 8 階 817	Tel: 088-656-7519	内線: 4915
助手	今野博行	化学・生物棟 7 階 702	Tel: 088-656-9213	内線: 4923

生物反応工学講座

教授	松田佳子	化学・生物棟 7 階 710	Tel: 088-656-7523	内線: 4926
教授	野地澄晴	化学・生物棟 8 階 803	Tel: 088-656-7528	内線: 4932
教授	大島敏久	機械棟 7 階 720	Tel: 088-656-7518	内線: 4938
教授	辻明彦	化学・生物棟 7 階 712	Tel: 088-656-7526	内線: 4927
助教授	大内淑代	化学・生物棟 8 階 801	Tel: 088-656-7529	内線: 4933
助教授	櫻庭春彦	機械棟 7 階 719	Tel: 088-656-7531	内線: 4939
助手	三戸太郎	化学・生物棟 8 階 804	Tel: 088-656-7530	内線: 4980
助手	郷田秀一郎	機械棟 7 階 718	Tel: 088-656-7532	内線: 4940
助手	湯浅恵造	化学・生物棟 7 階 714	Tel: 088-656-7527	内線: 4930

7 光応用工学科

光機能材料講座

教授	福井萬壽夫	光応用棟 2 階 208	Tel: 088-656-9410	内線: 5001
助教授	原口雅宣	光応用棟 2 階 209	Tel: 088-656-9411	内線: 5002
助手	岡本敏弘	光応用棟 2 階 207	Tel: 088-656-9412	内線: 5003
教授	井上哲夫	光応用棟 3 階 310	Tel: 088-656-9416	内線: 5011
講師	森篤史	光応用棟 4 階 410	Tel: 088-656-9417	内線: 5012
助手	柳谷伸一郎	光応用棟 4 階 408	Tel: 088-656-9415	内線: 5010
教授	田中均	光応用棟 2 階 211	Tel: 088-656-9420	内線: 5020
講師	手塚美彦	光応用棟 3 階 307	Tel: 088-656-9423	内線: 5027
助手	岡博之	光応用棟 3 階 311	Tel: 088-656-9424	内線: 5022

光情報システム講座

教授	西田信夫	光応用棟 4 階 409	Tel: 088-656-9425	内線: 5029
助教授	早崎芳夫	光応用棟 4 階 412	Tel: 088-656-9426	内線: 5030
助手	山本裕紹	光応用棟 4 階 411	Tel: 088-656-9427	内線: 5031
教授	仁木登	光応用棟 5 階 507	Tel: 088-656-9430	内線: 5037
助教授	河田佳樹	光応用棟 5 階 508	Tel: 088-656-9431	内線: 5038
助手	久保満	光応用棟 5 階 509	Tel: 088-656-9432	内線: 5039

8 共通講座

工学基礎

教授	金城辰夫	A 棟 2 階 A202	Tel: 088-656-7548	内線: 4761
教授	長町重昭	A 棟 2 階 A205	Tel: 088-656-7554	内線: 5812
教授	今井仁司	A 棟 2 階 A220	Tel: 088-656-7541	内線: 4781
教授	大野隆	A 棟 2 階 A201	Tel: 088-656-7549	内線: 4762
教授	竹内敏己	A 棟 2 階 A206	Tel: 088-656-7544	内線: 4771
助教授	澤下教親	A 棟 2 階 A204	Tel: 088-656-7542	内線: 4782
助教授	香田温人	A 棟 2 階 A211	Tel: 088-656-7546	内線: 4774

助教授	深 貝 暢 良	A 棟 2 階 A219	Tel: 088-656-7545	内線: 4772
助教授	道 廣 嘉 隆	A 棟 2 階 A203	Tel: 088-656-7550	内線: 4763
講 師	岸 本 邦 豊	A 棟 2 階 A215	Tel: 088-656-9851	内線: 9851
講 師	岡 本 浩 也	A 棟 2 階 A212	Tel: 088-656-9441	内線: 4777
講 師	中 村 浩 一	A 棟 2 階 A216	Tel: 088-656-7577	内線: 5106
助 手	坂 口 秀 雄	A 棟 2 階 A221	Tel: 088-656-7547	内線: 4773
助 手	川 崎 祐 祐	A 棟 2 階 A217	Tel: 088-656-9878	内線: 4767

9 大学院エコシステム工学専攻

基幹講座

資源循環工学講座

教 授	三 輪 惠	総合研究実験棟 5 階 503	Tel: 088-656-7370	内線: 4451
助教授	松 尾 繁 樹	総合研究実験棟 4 階 404	Tel: 088-656-7538	内線: 4442
助教授	木戸 善 行	総合研究実験棟 5 階 502	Tel: 088-656-9633	内線: 4450
助 手	富 田 卓 朗	総合研究実験棟 4 階 403	Tel: 088-656-9846	内線: 4441

社会環境システム工学講座

教 授	村 上 仁 士	総合研究実験棟 5 階 504	Tel: 088-656-7334	内線: 4452
教 授	末 田 統	総合研究実験棟 7 階 705	Tel: 088-656-2167	内線: 4473
教 授	近 藤 光 男	総合研究実験棟 6 階 602	Tel: 088-656-7339	内線: 4460
助教授	廣 瀬 義 伸	総合研究実験棟 6 階 603	Tel: 088-656-7340	内線: 4461
助教授	上 月 康 則	総合研究実験棟 5 階 505	Tel: 088-656-7335	内線: 4470
助 手	渡 辺 公次郎	総合研究実験棟 7 階 702	Tel: 088-656-7612	内線: 7612

協力講座

高压化学工学講座

教 授	田 村 勝 弘	化学・生物棟 5 階 509	Tel: 088-656-7416	内線: 4552
助教授	魚 崎 泰 弘	化学・生物棟 5 階 510	Tel: 088-656-7417	内線: 4553

計測科学講座

教 授	村 田 明 広	総科 3 号館 2S03	Tel: 088-656-7242	内線: 3651
-----	---------	--------------	-------------------	----------

連携研究所

海洋環境工学

教 授	上 嶋 英 機	産業技術総合研究所	Tel: 0823-72-1901	内線: 4468
教 授	廣 津 孝 弘	産業技術総合研究所	Tel: 087-869-3562	内線: 4468

2) 工学部講義室配置図

